対オジサマ攻略法！＜闇の王と黄金の魔女＞

関根麻希子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
対オジサマ攻略法！＜闇の王と黄金の魔女＞

【Ｎコード】
Ｎ７００６Ｆ

【作者名】
関根麻希子

【あらすじ】
「責任とっていただきます！」８才の猛攻幼女ベルと、生きる意味を持たない冷静沈着美青年レメクの物語。
貧困・陰謀・死別など、時に重い悲劇を織り交ぜた、童話めいた異世界ファンタジーを楽しんでいただければ幸いです。
美形はいろんな種類がてんこ盛り。『萌え』は蚊の目玉ほどだけ存在します。

主要登場人物紹介

【ベル】メリディス族・女性・八歳
本編主人公。
五歳の時に母親を亡くし孤児院に身を寄せていた。冬の雨の中、空腹と寒さで死にかけていたところをレメクに助けられる。
メリディス族の掟に従い、彼の押しかけ女房となる決意をする。
外見年齢は五歳未満。

【レメク・（いつも中略）・クラウドール】??族・男性・三十二歳
倒れていたベルを助けたために、彼女の未来の旦那に確定してしまった。
外見年齢は二十歳後半。大きな屋敷を所有しているが、ただ一人で住んでいる。
余人を寄せ付けない怜悧な美貌の主。

【アウグスタ】???族・女性・??歳
いろんな所が謎な巨乳美女。外見年齢は二十歳前半。
輝くような黄金の髪と、女神の如く美しく顔をもつ。

【ケニード・アロック】???族・男性・二十七歳
クラウドール邸に押しかけてきた青年。どうやらメリディス族に固執しているらしいが……

※イラスト付き人物紹介や、改稿前の文章は　ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｔａｉｏｊｉ／　で載せていますｖ

プロローグ　（改稿版）

雨が降っていた。
王都、南区、大通り。
厚い雲に覆われて、辺りは夕暮れ時のように薄暗い。
固い石畳は水はけが悪く、道全体が川のようになっていた。
横倒しに倒れたあたしの、右の目尻が浸かっている。

（……お腹……空いたな……）

あたしは倒れたまま、寂しい通りを見ていた。
例年になく寒い冬。土砂降りの中を歩く者はおらず、あたしがここにいることを知る人もいない。
運がなかった。
これがよく晴れた日なら、大通りは人で溢れている。慈悲深い誰かに助けられたり、仲間が駆けつけてくれることもあっただろう。
けれど今は誰もいない。
だから助けの手は期待できない。
孤児になって以来、空腹で倒れる事は珍しくなかった。
けれど孤児院にも帰れず、こんな場所でのたれ死ぬとは思わなかった。

（……もう、ダメかな……）

体の感覚はほとんどない。
目の前は変わらず汚れきった灰色で、どんよりと暗い色に沈んでいた。
――ふと、その色の中に黒いものが現れた。
靴。足。その近くまで垂れる外套の端。

人だ。
水に濡れて重そうなズボンと、頑丈そうな靴。
薄墨のような世界の中で、そこだけがハッキリと黒い。
いつそこに現れたのかはわからなかった。
だから幻覚かと思った。
最期に見る、都合の良い幻覚なのかも、と。
……それともついに、お迎えが来たのだろうか？
死の間際にやって来るという、終わりを司る闇の王が。

けれど、その人は呟くようにこう言った。

「……死ぬのですか？」

あたしは咄嗟に、何かを返事した。
どんな返事だったのか、あたしにも分からない。
口は動かず、声も出ず。
だから、彼自身もその『答え』を聞けなかっただろう。
けれどその人は、ため息をこぼすようにこう言った。

「……そうですか」

心を零すような、思いを噛みしめるような……どこかせつなく悲しい声だった。

プロローグ　（改稿版）（後書き）

改稿前の小説は、ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｔａｉｏｊｉ／に保存しております。

1　いきなり結婚宣言！

目が覚めると、何故か視界全てが湯煙だった。
「ぷぉっ？！」
びっくりして上げた声が変なのは、口が湯につかっていたから。
危ない危ない。鼻まで浸かってたら、そのまま窒息するとこだった！
あたしは大きく息をつき、ついでパチパチと瞬きをした。
暖かい乳白色の霧の中。ぼんやりと見えるのは、ほのかに光る複数の灯り。
それらに照らし出された周囲の壁は、岩を掘り抜いたような形をしていた。
岩窟だろうか？
生まれて初めて見るその偉容に、あたしは言葉もなく魅入ってしまった。
王都に生まれて八年。少なくとも、あたしが住む貧民街にこんな岩窟は無かった。
まして湯の湧く岩窟など、聞いたこともない。
全身を浸すお湯は、噴水の水のような透明ではなかった。
濁っているのだろうか？
やや灰色に見えるそれが、波紋と一緒に右から左へと流れていく。
目で追えば、流れていく先に水辺の縁があった。
段差があるらしく、湯はそこから下へと流れていっている。
湯が動くのは、あとからあとから新しい湯が注がれているからだ。
いったい、どれほどの薪を投入しているのだろうか。
まるで温水の泉のようだ。
（暖かい……）
あたしはうっとりとその温もりに微睡んだ。
凍りついていた手足にも熱が宿り、ほわほわと頭の中にも湯煙が

漂ってくる。
　このまま眠ったらさぞかし気持ちいいことだろう。春の花畑にでもいるようだ。
　そう思った途端、カクンと頭がのけぞった。
……あれ？　なんか今、いろんな意味でやばかったような？
　のけぞった頭の後ろに不思議な感触がする。硬いような暖かいような。
……てゆか、ここどこ？
「気がつかれましたか」
　ふと、すぐ後ろで声がした。ものすごく近い。あたしはほぼ真後ろを振り返り、
「なんで服着たまま浸かってんの！？」
　絶叫した。
　場所は分からない――岩窟の中の湯の泉？――その中で、なぜか服着たまま浸かってる男が一人。おそらく二十代後半。そしてそれに抱えられてるあたし。
「……ずいぶんと元気に……。おや、一瞬だけでしたか」
　絶叫後にフーッと意識が遠のいたあたしを、慌てもせずに男が抱え直す。クラクラするあたしの視界は真っ暗で、側頭部がしっかり湯に浸かっていた。危ない。危うく沈む所だった！
「先程まで死にかけてたのですから、急に動いたりしないほうがいいでしょう」
「し……死にかけ……？　あ、ああ！　そういえば、あたし死にかけてたんっ……」
……フーぅ……
　またもや半失神。
　さすがに嘆息をついて、男があたしを再度抱え直す。
「せっかく持ち直したのですから、今から死に直すのはやめてください。体が万全では無いんですよ。大声をあげるのも禁止です。……風呂場で幼児の遺体があがったりしたら、私の常識が疑われます」

風呂場。

その言葉に、あたしは驚いた。

噂には聞いたことがある。金持ちの家には、「お風呂場」と呼ばれる場所があるのだと。

そこでは大盥（おおだらい）よりも大きな入れ物に、たっぷりの湯が入れられているらしい。その中で体を温めたり、洗ったりするのだという。

人が中に入ってしまえる入れ物だなんて、いったいどんな大きさなのか。

大きな木箱ぐらいなら想像がつくが、中にたっぷり湯を入れるとなると、どんな物なのか想像もつかなかった。

木箱なら水が漏れるだろうし、鉄は錆びるし何より高い。

だいたいにして、そんなにたっぷりの湯を使うこと自体がもったいない。

湯を湧かすには沢山の薪がいるし、入れの物にお湯を入れるための人足もいる。

しかも人が入った後の湯は捨てるのだとか。

あまりにも非常識な金の使い方に、さすがにそんな噂は嘘だろうと思っていた。

なのに、この場所はその「風呂場」なのだという。

言われてみれば、たしかに人が入れるほど広くて大きな場所に、たっぷりの湯が入れられている。

暖かくて気持ちよくて天国にいるような気分だが……いやいや、かかる費用を考えればとんでもない。血の気も下がるというものだ。

こんなものを常識とばかりに毎日利用している貴族とやらは、きっと頭の構造からして違うのだろう。

だが、しかし。そんなオカシイ貴族でも、服を着たまま入る人はいないと思う。

あたし達だって、水浴びのときは真っ裸になるもんだ。

「……『服着用インお風呂』なあたりで、もうとっくに常識は疑われてると思うけど……」

視界がぐらぐら揺れる中で、あたしはそう反論した。
返答の前に、暖かい手がべしゃりとあたしの頭を撫でる。
「好きで服のまま入っているわけではありません。脱いでる暇が無かっただけです。二人そろって凍死するわけにもいかないでしょう？」
呆れ含みに言われて、（それもそうね）とあたしは頷いた。
生まれて八年。もうすぐ九歳。
ちょっと死ぬには早すぎる。
「あなたを暖めるのが先とはいえ、私もずぶ濡れで非常に寒かったものですから、さっさと一緒に入ることにした次第です。……まぁ、外套や上着類はそこらに放置してますが」
見れば抜け殻のようなものがここに至る過程に転々と置かれている。湯に入る前に景気よく脱ぎ落としていったらしい。
「この服は諦めました」
男は着ている服をつまんで嘆息をついた。
あたしは妙に揺れる視界をなんとか正常に戻そうと頭を押さえる。
そうして、水を吸って肌にへばりついている、男の服の光沢に目を細めた。
……絹っぽい。
改めて放置されてる上着を見ると、実に立派なものだった。
「……豪華な脱皮物だわね……」
一目でそれとわかる仕立ての良い服は、黒を基調とした典雅な物。
一着いくらするのだろうか？
……ん？
あれ？　黒？？
「……って……あんた……もしかして」
首を傾げたそいつの目の前で、あたしは大きく瞬きをした。
……そうだ。転がってるあたしの目の前にあった、あの足！
「あのとき、あたしに変なこと聞いてきた人？　えぇと、あの雨の中で……」

「あぁ、生きる意志を確認した時のことですね？　あの問いは私ですよ。あなたはゴミ袋のように転がってました」

……ごみ……

「ちょ、もうちょっと別な言い方ないわけ？！」

うら若き乙女をつかまえて、この男、ゴミ袋とぬかしやがった！

あたしの当然の抗議に、しかし男はあっさりと言い放つ。

「率直に申し上げて、あの有様では昨今のゴミ袋のほうがよほど綺麗です。……ところで私は先程から再三、注意していたはずですが？」

三度目のフィールドアウトをしたあたしに、冷静に男がつっこむ。

あたしはというと、ぐわんぐわん揺れる暗転した視界の中で、こっそり（その通りかも）とショックをうけていた。

最近の王都のゴミ袋のほうが、たぶんあたしの着ていた服より小綺麗だ。

そこまで考えて、あたしはハタと今更なことに気づいた。

ここ、風呂場だ。あたしは湯に浸かってる。この男も（服着たままだが）湯に浸かってる。

……で、あたしの格好は？

「……」

あたしは自分を見下ろした。

男にちゃっかり抱えられてるあたし。その姿。

すっぱだか。

「ぎゃあああああああああッ！！」

突然のあたしの絶叫に、男は思わずといった感じにあたしを離した。

途端、音をたててあたしは沈む。

ちぬーッ！！

「ごぶごばげほっ」

慌てた男の手があたしを拾い上げた。

「あぁ、失礼。驚いたもので」

「げぶふごげはっ！」
「……人間の言葉でお願いします」
むせかえって抗議もままならないあたしの背を、男の手が宥めるように撫でる。
あたしは小さな掌で、その男の横っ面をひっぱたいた。
「嫁入り前の乙女に何してんのーッ！」
その時の男の顔こそ見事だった。
それはもう、素晴らしいぐらいぽかんとあたしを見たのだ。
「……嫁入り前……ですか」
「当然でしょう？」
「当然……すぎるぐらい当然ですが」
男はもう呆然としきった顔であたしを見る。
「だから、見るなっつーのーッ！」
べちこーん！　ともう片方の頬を盛大にひっぱたく。
男の両頬に小さな紅葉マークがくっきりついた。
「信じられない！　どんな理由があるにせよ、未婚の乙女を素っ裸にした挙げ句一緒にお風呂入る!?　自分は服着たままで!?　あり得ないわ！　けどやっちゃったもんは仕方がない!!」
言って、あたしはまだ呆然としている男に指を突きつけた。
「覚悟はできてるんでしょうね!?」
「覚悟、ですか」
めらめらと怒りの炎を燃やすあたしの目を見返したまま、男は鸚鵡返しに言葉を返す。
あたしは言った。
女の最終宣言を！
「責任とっていただきます！」
男の目がまん丸になっていた。

※　※　※

世界にはいくつかの国がある。
そして、それらの国にはいくつもの民族が住んでいる。
ここ、ナスティア王国には約三十ほどの民族が住み、貧富の差はあるものの、それなりに上手くやっていた。
ちょっとした諍いや、民族間の掟の違いで民事訴訟があったりするものの、他国に比べればそれらは『争い』と呼べるレベルではないらしい。
が、しかし。
やってる当人にとっては、けっこう深刻な問題だったりする。
「……つまり、あなたの一族では、未婚の女性の裸を見た挙げ句触れた場合、結婚、ということになってしまうわけですか」
朝である。
あの最終宣告後に、あたしは今度こそきっちり気絶してしまった。
あの後どうやって引き上げられ、ベットに放り込まれたのかはわからない。
一応、服がわりに男物のシャツを着せられているところを見ると、着せ替えまでされてしまったようだ。
昨日とは比べものにならないぐらい元気に目をさました後、あたしはとりあえず、男のほっぺたに一発紅葉をお見舞いした。
もっとも、元気とはいっても、昨日よりはマシという程度の体調だ。
怠い体はやや高めの熱をもっていて、紅葉を貼りつけた男に問答無用で「ベット外への出歩き禁止令」をくらってしまった。
そんなあたしの横、どこからともなく引っ張り出してきた椅子に座り、あたしに質問しているのが昨日の男。名をレメクというらしい。
本当はもっと長ったらしい名前で名乗られたのだが、長すぎてもう忘れてしまった。
だいたい、他族の正式名称なぞ言われても、無知なあたしにはさっぱり解らない。

「ふぐぐもごむむんむむんっ」
「……返事は食べ終わってからでけっこうです」
必死にパンの固まりを咀嚼するあたしに、銀色のコップを差し出しながらレメクが言う。
ご飯をくれる人の命令には、できるだけ逆らわないようにすること。
孤児院の鉄則を守って、あたしはひたすら美味しいご飯を貪った。
もちろん、禁止令もちゃんと守っている。
受け取った銀コップには、白っぽい液体が入っていた。
……なんだろう？
見たこともない飲み物に、あたしはまず匂いを嗅ぐ。
フンフンフン……はじめて嗅ぐ不思議な匂いだ。
（あ、でも、なんかちょっと、懐かしいような匂い……）
「……飲み物ですよ」
ふんふん鼻をならしているあたしに、微妙な表情でレメクが言う。
チラとそれを見てから、あたしは意を決してコップに口をつけた。
やや温（ぬく）めに入れられている液体を口に含み、
「！」
あたしは一瞬、硬直した。
横で見ていたレメクが何事かと目を瞠ったぐらい見事に硬直していた。
そして、
ごっごっごっごっ！
ものすごい音をたててあたしはコップの中身を飲み干す。
最後の一滴まで逃さず飲み干そうと仰向き、じーっと静止しているあたしに、レメクがちょっと躊躇いがちに声をかけた。
「……山羊の乳なら、まだありますが……？」
レメクを振り返ったあたしの顔は、比喩でなく輝いていたと思う。
三杯ほど連続でおかわりして、あたしは大満足のため息をついた。
「……はーっ……し……幸せ……ッ！」

いまだかつて、こんな美味しい飲み物を飲んだことがあっただろうか？　いや、ない！

感動にうちふるえているあたしに、レメクがなんとも言えない表情になる。

「……喜んでいただけて何よりですが、昨日の今日で体調が芳しくないのですから、もう少し落ち着いて食事をするべきでしょう」

言ってから「もっとも……」と微妙な表情で嘆息をつく。

「これだけ食欲があれば、回復も早そうですが……」

彼の目線の先には、空になった小さな鍋が二つ、転がっていた。

数十分前にはパンくずがいっぱい入った粥と、野菜と肉を細切れにしたスープが入っていた鍋だ。

ちなみに美味しくいただきました。

「さて、先程の掟ですが……私が記憶しているところでは、シャーリーヴィの森にいると言われる『メリディス族』のみがこれに該当していたはずですが……？」

視線で問われて、あたしは頷いた。

レメクはどこか疲れた嘆息をつく。

「……うっかりしていましたね。メリディス族はほとんど幻の一族でしたから……」

「あたしがメリディス族じゃないなら、何の問題も無かったような口ぶりね？」

「えぇ。死にかけていた子供を助けただけのことですから。あとは体調の回復を待って孤児院に帰して終わりです。少なくとも、こんな大事（おおごと）にはなってませんよ」

レメクが言う『大事』とは、うちの一族の『掟』のことだ。

一族の掟は、時に国の法律すらも凌駕する。

「……髪の汚れがとれたとき、もしかしてとは思ったのですが」

ちなみにメリディスというのは、うちの母親の血族の名称である。

この国の場合、辺境の森の中ぐらいにしかいないらしい。けっこうな世捨て族である。

特徴は紫がかった銀の髪。
「そりゃ、うちの一族は辺境あたりにしかいない（らしい）もの。って言っても、あたしも母さんぐらいしか同族の人知らないし、生まれたのもこの近所だから、一族がいるっていう森の場所も知らないんだけどね。昔は妖精か精霊みたいな扱いだったんだって！　……本当？」
最後は問いの形になったあたしに、レメクは淡々と頷く。
「森で迷うといつのまにか傍にいるという、摩訶不思議な怪談話はよく聞きましたね」
「……あたしの一族は幽霊か……」
「森の案内人とも森の民とも言われてましたが、その稀有な髪と微妙な噂のせいで乱獲にあったとか。今は天然記念……いえ、保護指定一族になっているらしいですが、私も管轄外ですので詳しくは存じません」
「……あたしの一族は絶滅危惧種か……」
なんだか微妙にガックリだ。
……というか、微妙な噂って何だ？
「まぁ、それもずいぶん昔の話ですし、今では染め粉のせいで実に様々な色の髪が溢れていますから、あなたのこの髪もさほど珍しくは……」
言いかけて、レメクはなぜか沈黙した。
「……いえ。少々気をつけないといけないかもしれませんね」
どうやら珍しい色なのは確かなようだ。前言撤回するほどに。
「あれだけ汚れていれば、元の色などさっぱりわかりませんでしたが……洗ってしまったのは、失敗だったのかもしれません。どれぐらい時間をかければ、あのドブネズミが汚泥に飛び込んだ後のような色に戻るんです？」
「……あんた、もしかして喧嘩売ってる？」
あんまりと言えばあんまりな表現に、あたしは胡乱な目でレメクを見上げた。

レメクは心外そうな顔であたしを見返す。
「極めて正確に表現したつもりですが……？」
極めて天然に失礼な男だった。しかもこれを大まじめに言うのだから倍腹が立つ。
さぁどう言い返してやろうかと睨むと、レメクはすっと目を細めた。
元々が怜悧な顔立ちのため、そうすると妙に酷薄に見える。
ちょっと怯んでいると、トントンと指で自分のこめかみを軽く叩いて、レメクがあたしに問うた。
「どうやら、ある程度質問に答えれる程度には体調もいいようですね？」
問うというより、確認だ。
まぁ、これぐらいの熱や体のダルさなら、孤児院生活ならいつものことだし……
「うん。まぁ……平気」
「では、いくつか質問させていただきます。衣類の形状から、私はあなたを都内の孤児院に住む者と判断しましたが、間違っていますか？」
「……合ってるけど……」
「衣類の洗濯はおろか、清潔さを心がける余裕もない生活であったと推測されますが、これについては？」
「もちろん、合ってる」
「栄養状態も良いとは言えませんね？」
「うん」
「教会の神官から学問の手ほどきを受けたことは？」
「……なにそれ？」
あたしの問いに、レメクは軽く息をつく。
気になっていたことを簡単に確認していただけであることは、彼の口調や目の色からなんとなくわかった。
だが、確認できてもちっとも嬉しくなさそうだ。

「神官なんて一度も来たことないけど、それがどうかしたの？」
レメクはさらに嘆息をつく。
一瞬だけ迷うような目をしたが、結局は答えてくれた。
「……陛下はここ数年、貧困層の救済に力を入れられています。孤児院ももちろん対象内です。神官の訪問はその一環で、字を教えるのがその目的です。……王の方策が端々まで行き渡るよう、手はずを整え実行するのが臣下の役目。辺境であるのなら、真に遺憾ではありますが、行き渡らない事例もそれなりにあるでしょう。……ですがここは王都。陛下のお膝元にあって、庇護下であるはずの孤児院の子供があの様子とは、どういうことでしょうね？」
じっとこちらを見つめてくる目には、何の感情も浮かんでいない。問いの形ではあるものの、あたしの答えを期待しているわけでも無いだろう。自分の思考に沈んでいるのは明白だった。
「普通に考えれば、王様の部下が従ってないってことでしょ？」
あたしの声に、レメクが瞬きをした。まるであたしがいることに初めて気づいたような顔だ。
ちょっとムッとした。
「あたしがいた孤児院の生活だって、何も向上してやしなかったし。王様が言うだけ言って何もしてないか、命令された部下が何もしてないか、命令された部下の下の人が何もしてないかのどれかじゃないの？」
レメクはなぜかまじまじとあたしを見た。
……なんだろう？
お返しにマジマジと見返すと、口元に微苦笑めいたものを浮かべて質問してくる。
「あの衣服の支給があったのはいつです？」
「えーと、半年ちょい前……かな」
「何枚支給されました？」
「一枚だけど？」
「……食事の配給は？」

「そんなの、ほとんど無いわ。一日一杯のスープか、パンの欠片が手に入ったら大もうけよ。みんな小銭仕事探して右往左往してるんだから」

なるほど、とレメクは顎を撫でる。

その口元には、やはり微苦笑めいたものがあった。

「それを誰かに訴えたりはしなかったのですか？」

「誰に言うの？」

あたしの問いに、レメクは一瞬押し黙り、ハッキリと驚きを顔に出した。

そんな切り返しがくるとは思ってもみなかった顔だ。

「……そう……ですね。誰に言えばいいのか、誰もあなた方に説明しないのなら、あなた方がそれを知る機会は無い……」

軽く額に手をあてて、かすかにそれとわかる声でそう呟く。

頭の中では思考とかいろんなものが高速で回転しているのだろうが、傍にいるあたしにはさっぱりわからなかった。

「それって大問題？」

「……えぇ。この関連の事業にかなりの額の費用があてられていますから。それが正常に動いていないとなると……」

「誰かがネコババしてるんだよね、普通に考えると。うちの院長もよく太っていいもの着てるから、ネコババしてる一人かな」

あたしでもわかる簡単な図式を口にすると、何故かレメクは驚いた顔であたしを見ていた。

な……何事？

「……あたし、変なこと言った……？」

「……いいえ」

レメクは首を横に振る。その口元に、またゆるゆるとあの微苦笑が浮かんだ。

「……ふむ。面白いですね」

「……なにが？」

あたしの問いに、レメクは口元を軽く歪める。

それは苦みの勝った冷笑に見えた。
「他の官吏達にこの手の話をしても、まず大抵否定の言葉が先に出るんですよ」
「？？？　どういう意味？」
あたしは素直に首を傾げる。
レメクは笑みを消し、嘆息をついて椅子に深く背をもたれかけさせた。
「例えば、ここに不正を行っている者がいたとします。それはもう、白い紙に黒い墨を落としたぐらいハッキリとわかる不正です。私はその不正について『こうこういう不正があるのでは無いか』と官吏に言います。すると……」
「否定されるの？」
「ええ。まず最初にもらうのがこの言葉です。『まさか』『そんな馬鹿な』『何かの間違いでは？』……調査の一番最初で疑うこと自体を疑ったり否定したりするのが、私としては不思議でならないのですが」
「不思議っつーより馬鹿って言わない……？　それ」
あたしの声に、レメクは「くっ」と喉を鳴らしてちょっと前屈みになった。
口元に拳がいってるので、もしかして笑ったんだろうか？
何がツボに入ったのか不明だけど。
「先入観のない意見というのは、なかなか新鮮で良いものですね」
声が少し楽しそうだった。これは本音なんだろう。あたしは首を傾げた。
「他人の意見っていうのは、たいてい新鮮でおもしろいもんだと思うけど」
「……ふむ」
あ、口元がちょっと笑った。
「そういう意見もありますか」
「あんた……じゃない、えーと……」

あたしが言葉を探すと、レメクは呆れを含んだ目を向ける。
「もう一度名乗りましょうか？」
「いや、いい。長い名前はきちんと覚えられないから。んーと……んーと」
「レメクだけでいいと思いますが」
「よくないわよ。同い年ならともかく、年上の、しかも旦那様になる人を軽々しく呼び捨てにはできないわ」
旦那様、の所でレメクがなんともいえない顔になる。
「その問題がまだ解決してませんでしたね……」
「解決もなにも、決定事項だもの」
「解決してませんし、決定もしてません。あれは非常事態であり、一族の掟の適用外である可能性があります」
「ないです」
「あるんです！」
ちょっと必死だ。
「私の方も仕事があるので今すぐには無理ですが、機会を作ってシャーリーヴィの森へ行きましょう。あなたの一族の長に話しをつければ、会議にかけてもらえるかもしれません。掟に関しては、一族会議の決定があれば反故も可能なはずですから」
「乙女の裸を見ておいて、その逃げ根性はどうかと思うわよ旦那様」
「乙女と言う年では無いでしょう、まだ。そして旦那様はやめてください。あなたは私の使用人ではありません」
「旦那に様つけて旦那様」
「却下です」
……ちっ……
舌打ちしたあたしに、レメクは頭痛でも覚えたのかこめかみを揉む。
「一族の掟はどんなものであれ、一族内では国の法律を超える強制力があります。ですが、それに縛られる必要もないはずです。まして昨日のことを知るのは私とあなただけです。双方が無かったこと

にすれば問題は解決できます」
「却下です」
「なぜ却下ですか」
「私がそれを良しとしないからでず……っつー……舌噛んだぁー」
やはり慣れない口調を真似るのは危険だ。
口を半開きにしたまま涙目になってるあたしに、レメクは呆れ顔でため息をついた。
「まだ小さいのに、どうしてそんなに掟に従おうとするんです？だいたい、それをあなたに教えたのは誰です」
「母さん」
これにはちょっとレメクも沈黙した。
他に一族の者がいなくても、血と魂で繋がっている家族から掟を教えられた者は、たいていそれを遵守する。それはどの一族でも同じはずだ。
果たして、レメクは盛大なため息をついたのだった。
「やはり、一族会議ですね」
「往生際悪いわよ、主人様」
「変な呼称を作らないでください」
「じゃあ、ご主人様」
「なお悪いです。あなたは使用人ではありませんし、私は主でも主人でもありません」
先手打たれた。
旦那もダメ、主人もダメ。残るのはー……
「えーと、お兄様」
「兄と呼ばれるような年ではありませんし、貴方との年齢差を考えても非常におかしな呼び方と思いますが」
そこまで言ってから、レメクはちょっとあたしを見た。
「いくつです？」
「八つ」
「……私の四分の一しか生きてないんですか」

なにか一気に歳を感じたような声だ。
……というか、三十超えてる！？
「三十二！？」
「えぇ……。おや、計算はできるんですね」
「ちっちゃい頃に母さんから教わったわ。……てゆか、意外と上だったんだ。あたし二十後半ぐらいかと思ったのに」
「年の差がよくわかっていいですね。私はあなたぐらいの子供がいてもおかしくないわけです」
「いるの？」
「……いませんが」
「奥さんは？」
「おりませんよ」
その答えにあたしはにっこりと笑った。
「じゃー問題ないじゃない」
「……」
レメクはいっそう盛大なため息をついた。問題点が違うと言いたそうな顔だが、あたしとしては、この件に関してはそれぐらいしか問題と呼べる問題など無い。
「んーと、おじ様」
お兄様より上で、年齢差を考慮してそう言ってみた。なかなかしっくりくるような気がする。レメクもこれには反論のしようがないのか、ダメ出しはしてこなかった。
ただ、何か諦めたような深いため息をついた。
「それで結構です……」
「じゃあ、話が決まった所で、結婚の日取りなんだけどね」
「そっちはまだ未解決です！　だいたい、八つで結婚も無いでしょう。十年早いですよ」
「じゃあ、十年後ね」
言葉をとって言い返したあたしに、レメクは額に手をあてて嘆息をつく。

あたしは魂の予定帳にしっかりとスケジュールを書き込んだ。なかなか楽しい未来予定がたてそうだ。

「でも十年後って、考えると遅すぎるのよね……パルム族の結婚なんて十三からだし、クラヴィス族は十六からでしょ？」

レメクはもう答えすら返さない。頭が痛いのかこめかみを揉んでいるが、考えを放棄しているわけではなさそうだ。あの目を見る限り、必死で打開策を考えている。

あたしはレメクの大きな手を小さな手で握った。

両手で。

レメクが胡乱な目であたしを見返す。

まだ何か言う気か？　と言いたげな視線に、あたしはにっこりと笑って言った。

「不束者ですが、末永くよろしくお願いいたします」

レメクはただ、ひたすら深いため息をついたのだった。

そして、あたしの対「おじ様」攻略が始まった。

2　招かれざる客と魔女の訪問

王都エイレンタールの春は早い。それは何も気候だけを指して言うのではない。

王都は国の南にあり、その形は空から見ると東北西の辺りは真円に近く、南の部分だけ逆さのハート形をしている。なぜ南側だけ形が歪なのかと言うと、ここが巨大な港街となっているからだった。

港を有するということは、外から運び込まれる様々な品が満ちているということだ。春の風物詩も、国のどこよりも早くこの港へと運ばれる。

実際、肌をさす風はまだ冬のそれであり、街路樹も気の早いもの以外は枯れ木のような姿を晒している。街のそこここにある花壇も、まだ彩りを宿してはいない。

そんな中にあって、あたしのいる場所は妙に季節感を無視していた。

やや古めかしい屋敷の周りは、いっそ見事なぐらい緑に充ち満ちている。

やや肌寒い風に幹を揺らしているのは、屋敷よりも背の高い巨木達だ。地面を覆う苔も青々としていて、どこにも枯れた風情が無い。

唯一館の前の花壇だけがぽっかりと土壌を晒しているが、これは花が咲いてないという以前に何も植えられていないからだ。せっかく立派な花壇があるのに、もったいないことこの上ない。

……ついでだから、野菜でも植えてやろうかしら。

あたしはそんな誘惑にかられながら、部屋の中から外の様子を観察していた。

あたしの名前は『ベル』。長ったらしい名前は無い。

血の繋がった家族のうち、母親は何年も前に他界し、父親のほうはちょっと事情あって疎遠になっている。そっちの方にその他の家族もいるだろうが、向こうはあたしを家族とは思っていないだろう。

でなければ、母親の死去後に孤児院になんて入ってない。

とはいえ、今あたしがいるのも孤児院ではなかった。

金持ち連中がこぞって住まう北側の地区のうち、比較的端っこのほうにある瀟洒な屋敷。主の名をとって呼ぶのならば、クラウドール邸と言うべきだろうか。

王都の北側に土地を持つのは裕福な証拠だが、この屋敷に関してはどうも微妙だ。というのも、屋敷の大きさに反して使用人が一人もいない。また、ごく限られた一部分の部屋や廊下は綺麗なもんだが、他の場所は全部放置されてて埃がうずたかく積もっていた。

自分が暮らす必要最低限さえ整っていればいい、というところだろうか？

いずれにしても、大きなお屋敷の主らしからぬ主義である。

主の名前はレメク・（長いので中略）・クラウドール。あたしの命の恩人であり、目下十年後の旦那様である。

元孤児院の孤児であるあたしがこんな場所にいるのも、レメクが旦那（↑本人は未だに頑なに固辞している）なのにも理由がある。

あと二ヶ月ほどで九つになるあたしは、ごく五日前に街の片隅でひっそりと死にかけた。

そこをレメクに拾われたのだが、そのときにレメクがとった行動が、うちの一族の掟に触ってしまったのだ。

ナスティア王国には三十ほどの民族がいて、それぞれに独自の掟を持っている。

国で定められた法律も守るが、血で繋がる一族の掟も大切だ。

で、その大切な一族の掟をあたしが守ろうとすると、あたしはレメクと結婚しないといけないのである。望むところだった。

が、レメクはこれを良しとしない。

それはもう、ものすごく良しとしない。

ひたすら言い訳を並べ立てた上に、掟の例外を認めてもらうために、うちの一族の本拠地に行って長老に会おうとまで提案するほどだ。

（まぁ、レメクからすれば当然だろうけど……）

あたしは窓の外を眺めながら嘆息をつく。

（……せめてあと十年、早く生まれたかったなぁ……）

※　※　※

智者は王宮に集いて会議を開き、王はこれを聞きて国を開く――という言葉がある。

王宮がある時点で国は開いてるんじゃないか？　と、あたしなどは思うのだが、その言葉が出来た当時の時代では、王と呼ばれる者はいても国自体はまだできていなかったのだそうだ。

なにせ三十もの民族が集まってできた国だから、当時はいろいろあったのだろう。

そんな昔のイロイロはともかく、今ではこの言葉は御前会議が開かれるときによく使われる。

御前会議は、文字通り王の前で開かれる会議であり、諸官諸候が集う習わしになっていた。

本来なら何か問題が起こった時などに開かれる会議なのだが、今の王様になった時に「年に一度、春の大祭の時分にも定期的に開こう」ということになったらしい。

集わされる官吏や地方の領主はたまったもんじゃないだろうが、王宮の中枢と繋ぎを作る場として有効なため、反対者はほとんどでなかったらしい。

ちなみに王都の住人としても大歓迎だ。

なにせ、人が集まるということは物が売れるということだ。物が売れるということは人手がいるということであり、そうすると下々の者の仕事も増える。

春のこの時期は誰にとっても稼ぎ時なのである。

貧乏暇無しとは言ったもので、この時期にのんびり家の中に籠もる者などいない。

一つでも多くの仕事、少しでも多くの稼ぎを求めて街中を走り回り、ちょっとでも実りを大きくしようとあくせくする。

祭りまでまだ二ヶ月近くあるが、祭りの準備はもう始まっているのだ。じっとしていられるはずがなかった。

……そんなわけで、あたしは今、絶賛脱走計画中だったりする。

あたしがいる部屋は、ちょうど玄関の真上。南側に面した二階の、そのど真ん中にあった。

実を言うとレメクの部屋なのだが、運び込まれた日から瀕死状態だったのと、他にマトモに使用できる部屋が無いため、延々部屋を占領し続けている形だ。

今でこそ元気に動いているが、つい昨日まではベットの上でうんうん唸っていたほどである。その間、つきっきりで看病してくれたレメクにはこれ以上ないほど感謝しているが……

「……またですか」

屋敷の前庭で、ロープもどきのカーテンを掴んだまま、二階の窓から宙ぶらりんになっているあたしを見上げる彼には、理不尽な怒りを覚えずにいられない。

……てか、いつ帰ってきたんだ？　この男……

「……仕事……行ってたんじゃなかったっけ……？」

宙ぶらりんの格好のまま、あたしはぼそっと尋ねた。

レメクはあたしの格好になぞ関心なさそうな顔と声で答える。

「一段落つきましたので、帰宅した次第です。そろそろあなたが暴れ出す頃合いかとも思いましたしね」

暴れ出すとは失敬な。

ムッとしてあたしが抗議する前、レメクが何気ない口調で先手を打つ。

「ところで、そのカーテンはリメオン金貨三十枚分の価値があるのですが」

「げっ」

その効果は絶大だった。なにせあたしは、とっさにロープがわり

にしてたそれから手を離してしまったのである。
リメオン金貨三十枚。軽くあたしの人生を十回は買えるぐらいの大金だ。
が、
「きゃぁあああッ」
もちろん、宙ぶらりん体勢から命綱を離せば後は落ちるだけになり、
「！！！」
さすがに驚いたらしいレメクに抱き留められる瞬間まで、軽く空中遊泳を楽しんでしまった。
否。楽しくない。
「……し……死ぬかと思った」
「……」
レメクは呆れかえって声もない様。
ただただ盛大なため息をついて、捕獲したあたしを抱え直した。
……ちぇー……お姫様抱っこのままのほうがよかったなー……
「まったく……ようやく元気になったと思ったら、すぐに外に出ようとして。どうしてあなたはじっとしていられないんですか」
レメクはため息混じりにそう言って、とっさに放り出してしまったらしい荷物と書類の束を拾った。
あたしはそれを見て首を傾げる。
「仕事終わったんじゃなかったの？」
「一段落ついただけです」
終わってないようだ。どんな仕事か知らないけど。
「お偉いさんは大変ね」
「ただの一官吏ですが」
こんな立派な服着た一官吏がいるもんか。
上等な上着に指でへのへのもへじを書きながらそう思ったが、実際の所、あたしはレメクの仕事についてはほとんど何も知らなかった。もちろん、彼がどれぐらいの階級にいるのかも知らない。

なんといっても、あたしとレメクは五日前に会ったばかりなのだ。
「ところで」
邸宅の扉を開けながら、レメクはあたしに声をかける。
「これから来客が来ます。面倒な客ですので、あなたは部屋で大人しくしていてください。万が一見つかると、大変な事態になりますから」
これをいつもと変わらない顔で言いながら、扉を厳重に閉めるのが妙に気になった。しかも閉め終わった後も、何か考える顔でじっと鍵を見ている。
「……来て欲しくないんだ……」
どうやって入らさないようにしてやろうか、という顔だったので、あたしは鍵とレメクを見比べながらそう言った。レメクはため息をつく。
「非常に面倒な人でしてね。できればここに来てほしくないんですが……」
「居留守使えばいいんじゃない？」
「家に戻ると言ってしまったので、その手は使えません」
「ありゃ。じゃあ、仕事場で会ったの？」
「……えぇ」
「そのときにできない話しだったんだ？」
「いえ。単に早く帰らないと、あなたがどんな奇抜な脱走術をあみだすかわかりませんでしたから」
失敬な。
だが、そうして急いで帰ってきた結果、招かれざる客が来ることになった、と。
「……ご愁傷様です……と言うべき？」
「……そう思うのなら、大人しくしていてくれませんかね。何度も言いますが、あなたはまだ体調が万全ではないんですよ。病み上がりなんですから」
死にかけてたんだから、たしかにそうだ。

「でもねぇ……せっかくの稼ぎ時なのよ？」
「私の保護下にある以上、必要最低限の衣食住は保証します。シャーリーヴィの森に行く時にはあなたも連れていきますから、望めば向こうで同族の方に保護してもらうことも可能でしょう。あなたが今、体に無理をさせてまで働く必要はありません」
「それが嫌なんだけど……。あたしは森になんて行きたくないし、ちゃんと働きたいもの。その……ほら、お礼だってしなきゃいけないんだし！」
あたしの声に、レメクはちょっと目を瞠った。
「……お礼？」
「そ……そう、よ。命助けてもらって、御飯いっぱい食べさせてもらって……えぇと、なんていうんだっけ？　一食一晩の借り？」
「……微妙に違います」
「微妙な部分は気づかなかったことにして。で、ゴホンッ、その恩を返さないといけない！　じゃない？」
「……何度も言っている気がしますが、あなたが恩に着る必要など無いんです。私はただ、自分のしたいことをしただけですから」
「それでも命の恩人には違いないわ」
しつこいあたしに、レメクは嘆息。
「……どうしても、というのでしたら、滞在中ずっと大人しくしていてくれると大変、大変、助かるのですが？」
二度言ったぞこの男。
「……お人形さんになれ、って言うのなら、そうするわよ？」
レメクは盛大なため息をついた。そういう風には言ってないつもりらしい。
……いや、まぁ、わかってはいるんだけど。
「……ごめんなさい」
素直に謝ると、レメクは「いえ」とちょっとバツが悪そうな顔になる。
チャンスだ！

甘えたい盛りのあたしは、エイッとばかりにその首根っこにしがみつく。

ぐぇ、という声がした。

「おじ様だって迷惑よね。胸もお尻もおっきい女の人ならいろいろウハウハでも、あたしみたいにちっちゃい子供じゃ、孤児院の院長やってるみたいなもんだし」

「……非常に人聞きの悪いことを言わないでいただけませんか。私は別に、他意あってあなたを助けたわけでも、何かを期待して面倒をみているわけでもありません。行きがかり上やむなくであり、その中にあなたが言うような理由は何一つ含まれていません」

「でも普通、助けた美女がお礼にウッフンとかってありきたりじゃない？」

「……すみませんが……あなたの年齢をもう一度問い直してもいいですか？」

「八つ」

レメクは沈黙した。そして非常に重いため息をつく。

「……一度、あなたのいた孤児院の面々とじっくり話をすることにいたしましょう」

「やぁねぇ。この程度の話、そこらで日銭仕事してればいろいろ仕入れてこれるわよ？」

「そんなものを仕入れてくる必要はありません！　あなたは、まだ八つにしかならない女の子です。そんな話をして、自分の品位を貶めるのはやめなさい」

あたしは学んだ。レメクは微妙に潔癖だということを。

ちなみになぜ微妙かと言うと、この男、非常事態ならあたしをまっぱだかに剥いて風呂場に放り込むぐらいは平気でするからだ。しかも自分も寒いからと、服着たままで一緒に湯船にドボンしやがった経歴もある。

……まぁ、本当に非常事態だったから、だが……

あたしはレメクの首根っこに顔を埋めた。きゅっとすがりつく力

を強くする。
　えーと……えーと……
「でも、あたしもいちゃいちゃしたいもん」
　レメクが逃げたそうな気配を見せた。
「大人の女の人だったら、いちゃいちゃできたんだもん」
「……あなたが大人だったら、もっと早く別の人が駆けつけてましたよ」
　……この男。
　あたしは自分の目が鉛のようになるのを感じた。
　……鈍いとかいう、次元じゃない……
（……えぇい！）
　あたしはギラリと目を光らせた！
　こうしてくれるッ！
　気合いを込めてぐりぐり頭をこすりつけると、両手が塞がってるせいで抵抗できなかったレメクが顎で押し返してくる。手が塞がってるからこその反撃だろう。
　ちょっとビックリ。
「……少なくとも、あなたが私に対し恩を感じていること、何か礼をしたいと思っていることは『嘘ではない』と理解しています。また、労働をもって金銭を稼ごうとすることは、本来なら当然の行為であり禁止するようなことではありません。ですが、あなたは今、自分で思っている以上に体を損なっています。そんな状態で働きになど出せるはずがないでしょう。諦めて大人しくしていてください」
　……ぅぅ……
　懇々と諭されてしまった。正論だから文句も言いにくい。
　……てゆか、あれ？　今さっき、なんか妙な言い方したような？
「今元気なように見えても、何かの拍子にいきなり高熱を出したりするかもしれませんからね。この前のように」
「……うっ」
　レメクの声に、あたしは声を詰まらせた。実際に一回やった身と

しては、その攻撃は痛い。
「や、で、でも。未だにどうしてあんなにいきなり体調が悪くなったか、あたしにもわかんないのよ。だってほら、初日はまぁ、しょうがないとして……次の日、朝ちゃんと目を覚ましたじゃない。熱出てたけど、しっかりしてたでしょ？　御飯だっていっぱい食べれたし……」
「そして正午前に高熱を出して、昨日まで起きあがることもできなかったんですよね」
「……だからそれは、原因不明で……」
「……不明だと思っているうちは、絶対安静です」
レメクはぴしゃりと言いきる。
あたしはしょんぼりとため息をついた。この件に関しては、完全にあたしの方が分が悪い。
「また同じことを繰り返すとも限りませんから、しばらくは部屋で大人しく寝ていることです」
あたしのつむじのあたりにレメクの息がかかる。あたしは口を尖らせた。
「……むぅ」
「ちゃんと大人しくしていたら、これを差し上げましょう」
そう言って、レメクは書類の束と一緒に掴んでいた『荷物』をあたしに向けた。
顔を上げ、近くまで来たそれに手で触れると、それなりに柔らかい。
なんだろう？
「暴れず、騒がず、脱走もせず、部屋の中で大人しくしてくれるのなら、差し上げます。いかがです？」
レメクが荷物を下に下げる。
あたしは困った顔でレメクと荷物を見比べ、ややあって頷いた。
レメクがちょっとだけ安堵した顔になったのが、妙に印象に残った。

※　※　※

あたしは思うのだが、レメクはものすごい『お人好し』なんじゃなかろうか？

行き倒れて死にかけてた孤児を拾ってくれたのだから、人が良いのは確かだろう。おまけに、一族の掟をたてにずうずうしくも嫁宣言する子供を未だに放り出さずに世話している。

今時いないと思う。あんな人。

「……でもねぇ、だからといってただ飯食いなのはいけないと思うのよね」

働かざる者喰うべからず。これは世の鉄則だ。

老人はいい。若い時に働いて、そのとき働くことのできなかった赤ん坊や幼児を養ってくれたのだから。

同じ理由で赤ん坊も良い。大きくなったときに働けない人を養う役目があるのだから。

あたしは子供だが、立派な手足がついている。持病もない。目も耳も並以上に良い。となれば、もう立派に働き手だ。じっとしているわけにはいかない。

無論、今動くことはできないけど。

あたしはレメクからもらった包みと睨めっこしながら、ベットの上でプラプラと足を揺らせていた。

この報酬と引き替えに、あたしはレメクと約束した。なら、それは果たさないといけない。

もちろん、『部屋で大人しく』は今日だけのことだが。

レメクもあたしの考えはお見通しなのだろう。ちゃんと大人しくしていると約束したのに、ヤツはしっかりと部屋の扉に鍵をしていった。

五つも。

「……むぅ……」

さすがにあの鍵はあたしでも開けられない。
元気になった時、速攻で鍵開けの腕前を披露したのがいけなかったらしい。今では屋敷中の鍵が新しい精巧なものに取り替えられていた。しかも紋様付き。
「……むむぅ……」
扉の前に行き、そこにがっつり食いついてる五つの鍵を点検する。鍵には鍵穴が三つついていた。これは、三つの鍵を同時に使う必要がある。細工師と呼ばれる職人が作る物で、たいてい立派な家の金庫とかはこれがついている。
そして鍵の表面にある綺麗な柄は、『紋様（もんよう）』と呼ばれるものだった。
きらきらと輝きながら、ソレは複雑な模様をその表面に写す。驚くべきことに、その模様はずっと動いているのだ。一秒として同じ模様のままではいない。
その美しさに見惚れつつ、あたしはため息をついた。……これは『本物』だ。
あたしも、未だかつて『本物』と呼べるようなものは一度しか見たことが無かった。
『紋様術』と呼ばれる技術は、あたし達からすればお伽話の魔法みたいなものだ。触れると爆発するものとか、水を防いでくれるものとか、とかく色々あるらしい。
あたしが見た『本物』は、押し寄せてきた大津波を空中で押しとどめていた。
三年前の大嵐の時のことだ。
あの日、夕方から突然降り出した雨は、夜の帳が降りるより早く街の全てを包み込んだ。
雨はまるで滝のように空から降り注ぎ、街はさながら滝壺のようだった。想像を超えた水量に街中の水路からも水が溢れ、街の半分が床の近くまで水に浸かった。
最も立地条件の悪い貧民街は、特にそれがひどい。

水はけは悪く、溜まりは早く。日銭仕事に出ていた子供の半分は、職場にいたために助かったが、もう半分は帰宅途中に災害にあい、翌日冷たい体で発見された。彼等は今も共同墓地の片隅で、訪れる人もないままにひっそりと眠っている。

彼等の命を直接奪ったのは、大嵐による風と水だ。だが、それだけが原因では無い。

あの時、視界もろくに効かない夜の暴風雨の中で、地面が突然動いたのだ。

帰ってこない孤児仲間を捜していたあたしも、その動きに足をとられて水に沈んだ。

すぐに起きあがって近くの柵にしがみつき、それで事なきを得た。もしあの時、近くにすがりつくものが無かったら、あたしも今頃は土の中で眠っていただろう。

地の揺れがおさまってしばらくすると、地震だ、津波だ、という二つの声があちこちから聞こえてきた。兵士達が小舟で街を走り抜け、そのうちの一つにあたしは保護されたが、その時は言葉の意味が理解できなかった。

津波が来る。悲鳴のようなその声をあたしは聞き、そして見た。闇の向こうから迫り来る、巨大な水の壁を。それが、初めて見る『津波』だった。

大気が震え、おぞましい音が街中に響き渡る。海の底から響いてくるような轟音。迫り来る水の壁。一般市民はおろか兵士までもが悲鳴を上げたが、その声も水音でほとんどかき消されてしまった。それほどの轟音。まさに全てを飲み込む天災だった。

けれど、その壁が街に襲いかかることはなかった。

突然空が明るくなったかと思ったら、海側の一面に巨大な光の帯が生まれていたのだ。

それは恐ろしいほど美しい模様だった。

模様に照らし出された水の壁の巨大さも恐ろしかったが、むしろそれは輝く模様の神秘をいっそう引き立たせ、あたしの目にはひど

く神秘的な光景に見えた。
その紋様術がどういったものなのか、無学なあたしにはサッパリわからない。
わかったのは、あの模様が津波を押しとどめている、ということ。
そして、そのおかげであたし達は助かった、ということだけだ。
模様は水の壁を押しとどめ、のみならず、その水を一瞬で消滅させた。
誰がどんな風にどうやってそんなことをしてのけたのか、誰もが後でさんざん論議していたが、結局のところ結論はでなかった。
『王様か、王宮の誰かが何かをしたのだろう』
下町に住むあたし達ができる結論なんて、その程度のものだ。そして、そのうち誰も話題にしなくなった。まるで、誰もがそのことを忘れてしまったかのように。
けれど、あたしは忘れられない。今も思い出す度、震えがくる。
大津波を押しとどめる巨大な輝く模様。まるで生きているように輝き、蠢くその模様が、未だに脳裏に焼きついている。あのとき、神の奇跡を見た気がした。
とはいえ、普通に過ごしている分には、そんなとんでもない紋様術なんて見やしない。
街中で見るのは、インチキな偽物ばかりだ。
虹粉と呼ばれるきらきらした粉で模様を描いた板とか、祭りの時分には土産物としてよく売られている。
……いつか教会に取り締まられるんじゃないだろうか……？
まぁ、本物の『紋様板』が土産物屋で売られたりするわけないんだから、客だって偽物だとわかって買ってるんだろうけど……
もちろん、衛士や見回りの騎士が来るたびに荷物抱えてトンズラしてたので、取り締まり対象なのは間違いない。大々的に取り締まられてない、ってだけで。
そしてこの目の前にある鍵。
これはどう見ても本物だ。

紋様術は、きちんとしたものならリメオン金貨数十枚分の価値がある。使い手が少なく、希少価値が高いからだ。

使い手はたいてい、王宮で厚く遇される。王宮魔術師とかと同様の地位に就いているのが、そのほとんどだ。

といっても、実際に噂を確かめたわけじゃないから、本当のところは知らないけどね。

「むむ～」

あたしは、つんつん鍵をつついてみた。

一応、こんなことぐらいでは爆発したりしないらしい。

しかし、悲しいかな、あたしのような一般市民では、この紋様がどういう内容のものなのかさっぱりわからなかった。わからない限り、いじくるわけにもいかない。

……いや、まぁ、今日はちゃんと大人しくしてるけどさ。約束だから。

あたしはしぶしぶため息をつくと、後ろ髪を引かれる思いで扉の前を後にした。

ベットサイドテーブルに置かれたままの荷物を一瞥《一別》して、さっき脱出につかった窓へと移動する。

あたしが無体を働いたカーテンは、さすが金貨三十枚分の価値、といった感じに堂々と今もそこにあった。

簡単に点検したが、どうやらカーテン自体は無傷なようだった。だが、カーテンレールがちょっと壊れている。

……あれは金貨何枚分の価値なんだろうか……

あたしは血の気の引く思いでそれを見上げつつ、脳内の借金帳に予想金額を書き込んだ。……一生かかっても払えない気がする。

（い……いいのよ。これから稼いで返していくんだから！）

もちろん、自分の食い扶持も稼がなくてはいけない。

改めて決意して、あたしは残された唯一の脱出口である窓をしっかりと点検した。

そして硬直する。

「……むぅ……！」

窓にも、しっかり鍵がかけられていた。

※　※　※

レメクという人は、もしかしてものすごく保護意識が高いのかもしれない。

ベットの上で寝転がったまま、あたしはそんなことを考えていた。

部屋に閉じこめられてから約一時間。いいかげん暇で仕方がない。

部屋の探検は昨日のうちに済ましているし、暇つぶしにできるような内職もここには無い。

何かゲーム版のような物も部屋にはあるのだが、そんな高尚そうなモノをあたしが知るはずもない。

することが何もないので、今までの事やこれからの事を考える。

死んでしまった母さんのこと、それ以降世話になった孤児院のこと、一緒に過ごした孤児仲間のこと……

けれどそれら考えると、目の前が暗く塞がれていくような気分になった。救いがない……敢えて言うならそんな気分だ。

あたしはゆるゆると首を振る。心が押しつぶされる前に、助けを求めるように別のことを考えた。

即座に浮かぶのは、目下あたしの攻略対象である未来の旦那様だ。

レメク・（しつこいが長いので省略）・クラウドール。三十二才。独身。顔は良い。背も高い。見た目ちょっと痩せて見えるけど、けっこうガッシリと引き締まっている。

北区に庭（というか林に近い）付き邸宅を構え、立派な服を着て仕事に行く人。本人曰く「一官吏」。内装も立派だから、かなりの金持ち。でも使用人はいない。未使用の部屋は荒れたまま放置。

ここからあたしは推測する。

レメクはお金持ち。でも、人付き合いはあまり好きじゃない。料理も自分で作っちゃう所からして、貴族では無さそうだ。

北区に家を構えるのは、たいてい貴族か大富豪だ。
富豪だとすると、大商会の長か、その子息か……いや、でもそれだと「一官吏」という単語が出てくるはずがない。……となれば、行き着く先は一つ。
城に勤める官吏だ。
城勤めといえば、どんなものであれ誰もが憧れる職業だ。
例え「下働き」であっても、城の、という単語がくっつくだけで、誰もが「おお」と唸る。それぐらい歴然とした差があるのだ。お金とか、身分とかに。
レメクの服はとても良いものだった。
今、あたしが借りて着ているこのシャツだって、まるで貴族のようにパリッと糊がきいている。もちろん生地は絹だ。
そんな物を着て仕事をしているのだから、それなりの地位に就いているはずだ。例えば、部下を何人ももつ長的な立場とか。
（……その場合、あの発言が気になるのよね……）
問題は、レメクが言う「一官吏」の意味だ。
あたしはさらに推測する。なにせ暇ですることがないので、レメクをネタにあれこれと推測するぐらいしか時間潰しができない。
レメクの言う「一官吏」を、額面そのままでとらえれば、レメクは長では無い。部下がいるような立場では無く、逆に長を持つ立場になる。
けれど、あの言葉がただの謙遜なら話は逆転する。あたしの「お偉いさん」の単語がそのままあてはまるのだ。
レメクは確かこうも言った。
王の方策が端々まで行き渡るよう、手はずを整え実行するのが臣下の役目、と。
人にこき使われる立場の人間なら、あんな風に言うだろうか？
臣下の部分を「我々」と表したのならそうともとれたが、あえて臣下と言った。彼は「実行する臣下」とは別の立場にいる、という風にとれる。

しかも、あれは人を使う立場を理解した上での発言だ。
例えば、効率よく仕事をするために、あたし達が子分を使うような感じで……
「……でも……あれ？　なんか忘れてるような……」
あたしは目を瞑る。深く物事を考える時にあたしの癖だった。
暗くなった視界の奥で、言葉がチラチラと瞬いて消える。
（……レメクは、不正がどうこうって言ってた……）
そうだ。あたしのいた孤児院。あたしの状態を見て、陛下の命令がちゃんと実施されてないことを気にしてた。
ということは、だ。「実行する立場」ではなく、それがちゃんと実行しているかどうかを「調べる立場」の可能性が高い。あたしなんかにいろいろ聞くぐらいだから、レメクはそれらの情報を集めてたり、有効に利用したりする立場にいるはずだ。
ということは？
「……裁判官……？」
だが、裁判官は教会の人間でないといけない。人を人が裁いてはいけない、ということになっているからだ。
けれど、孤児院に神官が字を教えに行ってない件の話をした時、彼が教会の神官を語る口調は、まるっきり赤の他人を語る口調だった。
それに、教会の人間なら「一官吏」という表現はしないはず。
「……うーん……」
あたしはそこで思考を放棄した。
あたしの乏しい知識では、これ以上の推測ができない。ピースの揃ってないパズルをするようなものだ。
レメクのことについて、アレコレと想像したり考えたりするのは楽しいのだが。
（……レメクにお仕事の事聞いてみようかな……）
あたしがレメクの仕事について知らないのは、それを話題にしたことがないからだ。聞いてみれば、意外と簡単に教えてくれる気が

する。
（……ついでに、いろいろ教えてくれないかな）
あたしが見る限り、レメクは博識な人っぽい。メリディスなんていうレアな他民族の掟にも精通していたし……
「……ん？」
ふと、何か思い出しかけて、あたしは首を傾げる。何か気になる単語があったような……
……あぁ、そうだ。
（……管轄外）
メリディス族が保護指定族になってる的なことを話した時、自分は管轄外だからあまり知らないと言っていた。
（うーん……じゃあ、レメクが保護官じゃないのは確定よね）
国に保護指定されているものを保護するのが保護官だ。
あたしはそこまで考えて、ちょっとしょんぼりした。あたしがここにいる理由が、ハッキリ見えてしまったからだ。
メリディス族は、国から保護指定を受けている一族。
なら、メリディス族のあたしは、立派に保護の対象だ。国の一官吏である（らしい）レメクが、あたしを保護するのは当たり前だった。
あたしが嫁発言してるのは、あたし側の都合なわけで……
……しょんぼり。
「……いいもん」
ベットの上で膝を抱えて、あたしは膝頭に額を乗せた。
胸の奥に、コトリと重いものが落ちる。
「……一緒にいられるんなら、機会はいっぱいあるんだから」
その瞬間、なぜかすぐ横でニンマリと誰かが笑った気配がした。
「ふふ～ん？」
「！？」
誰、という誰何をする余裕もない。
とっさに飛び上がって、ベットから飛び降りた。

そして声の方向を凝視して、
「……」
絶句。
（……なに）
この
（ハデな人）
ものすンごい美人だった。そして、とんでもなくハデだった。
豪華な金の巻き毛を長々と伸ばし、大きく胸の開いた派手でセクシーなドレスを着ている。
開いた胸元からのぞく胸が実に立派で、谷間など『くっきり』どころか『ずんもり』という表現で表せそうなほどだ。
対照的に腰は細く、見事と言うしかないプロポーション。
とても羨ましい。
あたしはマジマジと相手を見た。
相手もマジマジとあたしを見る。
ただしニヤニヤ笑いを口にはいたままだが。
「……女王様？」
あたしは首を傾げながら言った。
女の雰囲気を現すなら、それ以外にありえない。いや、あるいは……
「……派手な魔女？」
あたしの声に、それまでニヤニヤ笑っていた女がちょっと目を丸くした。
次いで盛大に吹き出す。
「あはははははは！」
豪快な笑い声だった。
あたしはびっくりして思わず扉のほうを見る。
レメクが驚いて飛んでくるんじゃないかと思ったのだが、ドアは沈黙したままだった。
「はっ！　私が魔女か。魔女に見えるか、小娘」

小娘と言われた。……いや、確かにあたしは小娘だが。
「見えるわよ。あたしが小さな娘のように」
言い返すと、面白そうに目が笑った。
口角もニュッと上がって、それでいっそう獰猛な笑みに見える。
肉食獣だ。そう思った。獲物を見つけたオオカミのようだ。
「こんな派手な魔女も世には珍しかろう？」
「魔女はたいてい珍しいものよ。それとも貴方の近くには、そんなに魔女がいっぱいいるの？」
あたしの反論に、黄金の魔女は手を打って喜ぶ。
だが、その目は油断無くあたしを見つめたままだ。
「魔女は少ないが、まぁ、いないことはない。魔王みたいなのもいたりするな。ここにも一人いる……が、まぁ、それはいい」
最後はぼやくように言いながら、魔女はにやりと笑み崩れた。思わず目が離せなくなるぐらいに魅惑的な笑みだ。男ならイチコロかもしれない。
レメクがいなくてよかった。
「愉快だ。あぁ、実に愉快だ。ここには別件で来たのだが、思いがけず良い獲物に会うた。……娘、おまえ、名は何という？」
「人に名前を尋ねるときは、まず自分から名乗るべきだわ。それと、あなたが悪魔でない証拠がなければ、あたしは名を名乗れない」
「はっは！　小賢しいが、生きの良い獲物というのは大抵こういうもんだな。私は……そうさな、アウグスタと呼ばれている。まぁ、一応自分では人間のつもりだが、さて、人によっては悪魔と呼ぶ者もいるな」
「それは悪魔じゃない証明にはならないわね」
「ならんなぁ……さてさて、困ったな？」
にやにやと笑み崩れて、アウグスタは腕を組んだ。
そうすると胸の谷間がいっそう強調される。いや、谷間というより盛り上がりだ。
すごいボリューム。

「だがな、娘よ。おまえ自身についてもよく考えるがよい。おまえは自分で、自分が悪魔でない証明ができるか？　誰それの子だから悪魔ではない、とか、そういう程度の証明なら口だけでどうとでも言える。なぁ、娘よ。おまえは何をもって『悪魔では無い』という証明にする？」

あたしは呆れた。

今時、孤児院の子供でも知っていることを、この魔女は知らないのだろうか？

「物では証明できないわ。だって形が無いんだもの。言葉でしか説明ができないから、やっぱり口だけでどうとでも言えることかもしれないわね」

「おや。証明できるのか」

「できるわよ。簡単じゃない。自分は悪魔ではない、と心から言えることがその証よ」

アウグスタは一瞬、きょとんとした顔になった。

おかしな話だが、その一瞬に見せた顔は、驚くほど清らかで美しかった。

「なるほど……あぁ、なるほどなぁ……ふふふ」

妙に迫力のある「ふふふ」笑いをして、アウグスタはキラリと目を光らせる。面白いオモチャを見つけた猫の目に似ていた。

「『自分は悪魔では無い』。なるほど、真に悪魔と呼ばれる生き物であれば、そんな自殺まがいな発言はできんな」

そう。言い伝えが確かならば、それは確かに絶対的な証明になる。

自分は悪魔では無い、と悪魔が言うと、それは『自分は自分では無い』ということになるのだ。

それはすなわち、自分で自分の存在を否定することになる。

これを心からやってのけたりすると、血肉を持ってこちら側に存在しているわけではない悪魔は消滅してしまうのである。

「なら言おうか。私は悪魔では無い。時によっては悪魔以上に悪魔的な女であろうが、人として生まれ、人として生きている者よ」

「あたしはベルよ、アウグスタ。あたしも悪魔じゃないわ。場合によっては悪魔になりたいと思うけど」
「おや。悪魔にならんとする者が私以外にもいたとはな。どういう時に悪魔になる？」
「男の人を誑かしたいって思ったら、女は悪魔になるんじゃないの？」
この台詞は、宿のおねーちゃんが笑いながら言っていた台詞だったのだが、なぜかアウグスタには大ウケだった。
「誑かすか！　はは！　誰を誑かす！？　だがその前に、娘、おまえはその身にあと一重か二重ぐらいは肉をつけなければならんだろう。それに……そうだな、髪を綺麗にしておくことだ。この髪はとても珍しい。いい武器になるだろう」
「でもおじ様は、この髪を汚れた状態にしたほうがいいって言ってたわ。そうしないと、あたしが珍しい種族だってバレちゃうから」
「ふふん」
アウグスタはニンマリと笑った。
「……ふふふん。いいぞ、本題に近づいてきた。私が知りたかった内容だ。なぁ、娘。せっかく私達はこうして知り合ったんだ。仲良くしようじゃないか」
つり上がった口角から、小さな牙のような綺麗な歯が見える。その笑みは、まさに悪魔のように美しかった。

3　魔女の贈り物

「……なにか知りたいことがあるのね？　情報交換？」
「いい感じに頭が回る。なるほど、あいつがそのまま手元に置いておくはずだな」
ニヤニヤ笑いを深めて、アウグスタがどこか別の場所へと視線を向けた。
それは部屋の外で、なぜかあたしはそこにレメクがいるような気がした。
「おじ様の知り合い？」
アウグスタは、あたしの問いにニュッと口の端をつり上げる。
「おじ様と呼ばせているのか。なかなかいい趣味だな」
「あたしの趣味よ」
なぜか笑われた。
「あの石頭の堅物が、おまえとどういう会話をしたのか……想像するだけで楽しいな！　あぁ、ぜひともその場にいて傍聴したかった……！　神々もひどいことをする……あぁあぁ、次はぜひ呼んでくれ。礼はするぞ」
「お礼ねぇ……そうね、あなたが魔女なら惚れ薬が欲しいわ。誰でも一撃で倒せるようなやつ」
「くっく……ぜひ手に入れてやらねばならんな。当代一の魔女と交渉してみよう。誰に使うのかは……いや、これは聞いてはいかんな。ふふふ……さて、娘、おまえがここの屋敷の主を指して言うのならば、私はおまえの問いに頷きを返そう。私達は知り合いだ。……で、私が答えたからには」
「何が知りたいの？」
「……くく……。そうだな」
喉の奥で笑って、そうしてアウグスタはふいに表情を消した。

あたしは思わず後退る。
表情を消したアウグスタは、恐ろしいほど威厳に満ちていた。
形の良い唇が言葉を紡ぐ。
まるで神託を告げる巫女のように。
「……娘、おまえの幸せは、どこだ？」

あたしは数瞬、きょとんとアウグスタを見返していた。
言われたことがあまりにも唐突すぎて、頭の回転が追いつかない。
「あたしの幸せ？」
アウグスタは答えない。
ただその笑みが、そうだ、と言っていた。
……あたしの幸せ。
あたしは答える。考えるまでもなかった。
「ここにあるわ」
その言葉に、
「……。……そうか」
数秒の間を置いてから、短く、言葉以外の何かを零すようにアウグスタはそう呟いた。
目を瞑り、軽く口の端を笑ませた姿は、どこか慈愛めいたものを感じさせる。
あたしはアウグスタを見上げた。
言葉を待ったのは、彼女が何か大切なことに決着をつけている気がしたからだ。あたしにはそれが何なのかわからない。わからないからこそ、それを邪魔してはいけない気がした。
「……ならば、よかろう」
穏やかとさえ言える声でそう呟いて、アウグスタはすっと伏せていた瞼を上げた。鮮やかな夜明け色の瞳が、何かを懐かしむようにあたしを映す。
「一つ、言おう。私はお前の素性に興味は無い。おまえがどこで生

まれ、どこで暮らし、誰の血をひいていようと、どうでもいい。おまえは大層珍しい一族の特徴を備えているが、それについても、まぁさほど興味は無いな。だが、興味は無くとも保護はせねばならん。おまえの一族は、存在が稀なせいで色々と狙われているのだ」

「おじ様もそう言ってたわ……。珍しい色の髪と、なんか微妙な噂のせいだって」

「微妙な噂、か……」

聞いたアウグスタのほうが微妙な顔になった。気持ちはわかる。

「ねぇ、『微妙な』噂って何？」

「あぁ……まぁ、微妙と言えば微妙か……。体臭だからな」

体臭。

臭い！？

「え、えーッ！？　臭いなのッ？！　あたし臭いの！？　いや、そりゃ孤児院にいた時は臭かったと思うけど！」

「あ～……」

アウグスタはなにやら面倒臭そうな顔になって、あたしの前でひらひらと手を振った。

「誤解するな。悪いことではない。体臭、というのは言い方が悪かったかな。まぁ、一緒なんだが。……言い直すなら、芳香、と呼ぶべきだろうな。非常に良い匂いがするらしい」

「……でも体臭なんでしょ？」

「ンン、まぁな」

なるほど。レメクが『微妙な噂』と言うはずだ。

「えー……やだなぁ……そんなのでご先祖様は乱獲されてたの？」

「乱獲……あやつは、また……いや、言い得てるのだが、子供に言う言葉では無いだろうに」

まぁ私が言うときも同じように言ったろうが、とブツブツ呟いて、アウグスタは豪奢な金髪を乱暴に掻いた。

「部族が違えば、同じ人間として扱うこともせん時代が長かったから、まぁそういうことなんだろう。ちょっとでも珍しく、またそれ

が連中の『良いモノ』的な条件を満たしていれば、奴らは狩人のごとく対象を狩るからな。……相手が人間であろうが獣であろうが、奴らにとってどうでもよいことだろう。躊躇はせんだろうし、相手の人権なぞはなから考えておらん」

困った連中だからな、と言う言葉はどこか吐き捨てるような感じだった。

「だいたい、おまえの一族もな、ちょっと受け身すぎだ。なんだあの掟は。裸見られて触られたらアウトだと？　そんなもの、悲鳴でも上げて牽制してから一撃喰らわせて無かったことにしてしまえばよかろうが」

「うっ……！」

我が身を顧みてあたしは呻いた。

というか、なんでこの人はあたしに怒るのか……まさかレメク、チクった？！

レメクから報告を受けた上司、という簡単な図式が思い浮かんで、あたしは即座に臨戦態勢に入った。

もしそうならば、ここで負けるわけにはいかない！

「確かに微妙だなとは思うし、正直、うちの母さんのこと考えても『おいおい待てよ』と思ったりもする掟だけど、いい点もあることはあるのよ！」

「良い点だと！？　あのビッミョウな掟にか！？」

「あるわよ！　とりあえず、後継者は作れるわ！」

アウグスタ、唖然。

マジマジと見返されて、あたしは胸を張った。

「たとえ血の一滴分であろうとも、メリディスの血が流れているのなら、それはメリディスの一族だ、ってそう母さんは言ってたもの！　なら、押しかけ女房だろうが何だろうが、とりあえず血を残せるっていうのは大事なんじゃないかしら！？」

「……うぅ～む」

アウグスタが唸り声にも似たうめき声をあげる。

あたしは握り拳を固めてそれを見守った。
二秒。三秒。
アウグスタがあたしをジロッと見た。
「うぅむ……全てにあてはまるわけではないが、確かに、良い点と言えなくもない。だが、感情が伴わなければ生き地獄だろう」
「うん」
あたしは即座に頷いた。
「そういう時は、そこはそれ、闇に葬ればいいのよ」
アウグスタはそれこそ目をまん丸に見開いてあたしを見たが、次の瞬間には子供のような笑顔になった。
「そう言いきるか！」
なんでそんなイイ笑顔なのかが謎。
「はは！　そうだな、いつの時代でも、あのままであるはずがない……そうか、そう言いきる娘もいるか……」
あたしはアウグスタを見て、ふいに（あぁそうか）と気づいた。
アウグスタは、あたしを通して別の誰かを見ているのだ。
たぶん、その人はメリディス族で、掟のせいで好きでもない人と結婚するハメになったのだろう。
その人の生涯は、たぶん、幸せじゃなかったのだ。
……この傲然とした魔女に、こうまで感慨を与えるほどに。
「……おじ様は、掟でも必ず従わなければならない義務は無い、って言ってたわ。一族会議っていうのにかければ、どうにかなることもあるって」
「ふむ……」
アウグスタは顎に手をやり、そしてハタとあたしを見た。
「ん？　ふぅん？……ほほ～ぅ？」
……な、なんだろう。
先程よりもずっとマジマジと見られてる。
「一族会議……シャーリーヴィの森……長期休暇……はっはぁ……なるほど」

にやあ、とその口元が邪悪にひん曲がる。
あたしはハッキリと、悪魔の笑みだと思った。
「あああああなぁるほどなぁ……そういうことだったか。ふはははは」
すごい悪役丸出しの声だ。
どうやったらこんな底意地悪そうに楽しそうな声を上げられるんだろうか。
「うん。娘よ」
あたしを見てニッコリと。先の悪魔ぶりなど無かったかのように微笑む。
あたしは一歩後退った。
「な、なに？」
「うん。まぁ、なんだ。私はおまえの味方だ」
「……は？」
あたしの目が点になった。
アウグスタはニヤニヤと笑み崩れる。
「困ったことがあったらいつでも私を頼るがよい。なに、おまえは私の家族だ。私が今、そう決めた」
「は？！　えぇ！？」
「ふふふふふ、喜ぶがいい、娘よ。私は強いぞ。なにせ最強だ。いつでもおまえの力になってやる。かわりに結婚式には呼べ」
あたしが返事をするより早く、しなやかな腕がサッと伸びてあたしをぎゅーと抱きしめた。
く……苦しッ！　胸！　胸で息がッ！！
あたしは悟った！
巨乳は凶器だと！！
「我が妹に祝福を授けよう。――汝が苦境に立ちし時は、我が力を持って其を打破することをここに誓う。汝は我を呼び出す力を得る者なり」
巨乳に顔面を圧迫されてもふもふしていたあたしの顔を、ぐいっとアウグスタの手が仰向かせる。額に、柔らかくて暖かいものが触

れた。
　でこちゅ？
「汝に『門』の加護を授ける。使いどころさえ間違わなければ、大いなる力を与えてくれるだろう。おまえの幸運を祈る」
　ニヤリ、としか言いようがない笑みを浮かべて、アウグスタはあたしを手放した。
　ようやく呼吸困難から逃れたあたしは、まだ顔中に残る巨乳の感覚に、パシパシと両頬を叩く。……まだフニフニしてる気がした。
「ではな」
　そんなあたしに惚れ惚れするような悪魔の微笑を投げかけて、アウグスタはベットの横の壁を抜けた。
「！？」
　文字通り、抜けた！
「うそ！？」
　あたしは思わず後を追い、アウグスタが消えた壁に手をあてた。
　ペタン、と音がして硬い感触が返る。あたしは自分の掌を凝視した。
「……ま……魔女……」
　驚いた。本当に魔女がいるなんて！
　あたしは性懲りもなく壁をペチペチと叩く。
　そこにある確かな感触。硬く冷たい壁。あたしの脳裏に口の端をニュッと上げたアウグスタの笑みがちらついた。
　というか、彼女はいったい何者なのか？
（てゆか、一番の問題はレメクとの関係じゃない！）
　ペチペチと壁を叩く手に力がこもる。
　迂闊だった！　一番最初に尋ねるべき事項を失念していた！！
　ここはレメクの部屋だ。彼の寝室だ。なのに、なぜあの魔女はここにピンポイントで侵入しやがったのか！
（いかん！　あの女は敵だ！！）
　魔女曰く「味方だ」とのことだが、どこまでそれを信じていいも

のか……ッ！

あたしは渾身の力を込めて壁を叩いた。

「迂闊だったわ……！」

「……なんの迂闊ですか」

背後で呆れた声がする。

ぎょっとなって振り返った先に、呆れかえった顔であたしを見るレメクがいた。

4　レメクにとってのあたし

「●△×□○◎ーッ！！！」

その時のあたしの絶叫は、彼の度肝を抜くものだったらしい。

ギョッとしたまま二歩は下がったレメクに、あたしは文字通り飛びかかった。

「◎×△△ーッ！！」

「ま、待ちなさい！　そして人の言葉を喋りなさい！！　まずは落ち着くことです！」

むしろレメクのほうが落ち着きを忘れている。体に張り付いたあたしをどうにかして剥がそうと、変な踊りをしていた。

「だいたい、あなたはさっきから何を壁を叩いて……ヒビ！？」

うわ、珍しい！

レメクの声が悲鳴レベルに跳ね上がった！！

……てゆか、ヒビ？

あたしは壁を見た。壁に亀裂が入ってる！！

「手は無事ですか！？」

どんだけ力入れて叩いたんだ、と普通ならつっこむだろう。

しかし、レメクが最初にするのはあたしの体の心配だ。

その瞬間、あたしの感情パラメーターが一気に振り切れた！

……なんていい人！！

（あの魔女には渡さんッ！！！）

感激してさらに力一杯張り付いたあたしに、レメクは奇妙にくぐもったうめき声を上げて抵抗した。

しかし、両手両足を使って張り付いているあたしを引きはがすのは、なかなか至難の業であるらしい。

しばらくエッチラオッチラと変な踊りにしか見えない抵抗をしていたが、とうとう諦めたのか、あたしをそのままに近くの椅子にどっかと腰を下ろした。

微妙にぐったり。
「……ベル……」
「……」
「落ち着いたら、とりあえず手を診せてください」
……その瞬間に逃げられそうな気がする。
あたしは（ぎゅー）と心持ち力を強くした。
レメクが深い嘆息をつく。
「……私はここにいますから」
心読まれた!?
思わずビクッとなったあたしの背を、レメクの大きな手がぽんと叩く。
声帯の震えが伝わりそうなほど近くから、低く穏やかな声が聞こえた。
「そんなにしなくても、どこにも行きはしませんよ。……それにしても、あなたは本当に不思議な人ですね」
ふと苦笑めいた気配がして、あたしは小さく身じろぎした。
すると当然、すがりつく力も緩む。けれどレメクは先の言葉通り、あたしから逃げたりはしなかった。
それに安心して、あたしはレメクのほうを恐る恐る見る。
（……ぁ）
そして一瞬、息を止めた。
わずかに苦笑を浮かべたその顔は、決して優しい表情とはいえない。
けれど、その目だけが違っていた。
顔立ちも雰囲気も、人を寄せ付けない怜悧なものであるのに、その目だけは暖かく優しい色をしている。どこか懐かしく、胸の奥がポカポカするような色。
あたしはその色の名前を知っていた。そう……まだ覚えている。
もうずっと昔、母から向けられた暖かな温もり。
……愛情という名の色だ。

（……お、かあ、さん……）

暖かい眼差しに昔を思い出しかけて、あたしはとっさに俯いた。

ギュッとレメクの服を握る手に力を込める。頭を彼の胸に預けると、上等な布越しに落ち着いた鼓動が伝わってきた。

何よりも確かな、生きている命の音。

（……暖かい……）

ぴったりと張り付いたあたしに、レメクが小さく笑った。どこか気が抜けたような、そんな笑いだ。

「あなたは……本当に……」

その後の言葉は、声にならなかった。ただ苦笑が深まった気配がする。

「どこかへ行こうと必死に出口を探して……逃げたいのかと思えば、見つけた途端こうして私にしがみついてくる。この矛盾はどういうことなんでしょう」

大きな手があたしの頭の上に乗って、小動物を撫でるように頭を撫でる。不器用な手つきだったが、それがとても気持ちよかった。

あたしは鼓動の音に耳をすませる。

レメクの胸板は思ったよりもずっと厚くて広かった。こうしているとなんとも言えない安心感があって、それこそ親鳥に守られる雛の気持ちになる。

温もりに微睡みそうになりながら、あたしはスンと匂いをかいだ。

香の匂いだろうか？

レメクからは、穏やかで優しい良い匂いがする。

ふんふんと鼻をならすあたしに、レメクが苦笑を深めた。

「……まるで子猫のようですね」

実際にそういう経験でもあるのか、その声はどことなく懐かしそうだ。

（……意外だわ）

その様子に、あたしは思わず失礼なことを思う。

（絶対、小動物とか飼わなさそうなのに）

けれど思い返せば、あたしへの態度もどこか子猫を扱うような…
…感じで……
……え……
いや、ちょっと待て！
（……てゆか、あたし、猫！？　猫と同レベル！？）
とっさに思いついたその事に、あたしは絶句した。あまりのこと
に体も硬直する。あたしが本物の猫なら、たぶん全身の毛が逆立っ
ていただろう。
というか、「保護物（メリディス族）確保」以上にショックだ！！
「……ね……猫じゃないもん！」
抗議したあたしに、レメクが微妙な表情で答える。
「……えぇ」
……その声と顔と間はいったい何なのか！
「猫では無いんですけどね」
どこか苦笑めいた声での呟き。
一応は否定しているレメクなのだが、そんな態度すらどこか気む
ずかしい猫を相手にしている様だ。
あたしの眦がつり上がる。
（あ……あんまりだわ……！！）
あたしは断固抗議すべく息を吸い込んだ！
しかし、
「……猫は壁にヒビ入れませんしね……」
ううっ！
痛いところをつかれて、とっさに言うべき言葉を放り投げた。
反射的に視線を壁と正反対の方へと逃がしたのは、後ろめたさの
ためだ。
壁に入った亀裂は、もう『ヒビ』とかいうレベルを超えている。
あれは紛う事なき「亀裂」だ。
……というか、あたし、いったいどういう力の入れ方を……？
子供のわりに力は強いほうだったが、怪力というほどではなかっ

たはずだ。
壁に亀裂を入れるほどの力というのは、どれぐらいのものなのか。
（お……おかしいわね）
突然パワーアップするような何かが、あたしにあっただろうか？
……いや、まぁ、死にかけはしたが。
それとも、問題は壁にあったり……とか？
（ま、まさかこの家、実はものすごくボロいとか！？）
「ベル」
名前を呼ばれて、あたしは身じろぎした。
……わかってる。言わなくてはいけない言葉は、わかっている。
自分がやった不始末ぐらいは、ちゃんと認めて償わないといけない。それはわかっているのだが、さっきの猫疑惑が胸中に渦巻いていて、あたしはとっさにその言葉を言えなかった。
かわりに、もそもそと動いて体勢を微調整する。
椅子に座ってるレメクに横抱きにされてる感じに動いて……居心地の良い場所を探す。いい感じに落ち着いく所に収まって、ぎゅっと抱きついた。
（……）
レメクは何も言わない。
あたしも何も言えない。
微妙な沈黙が流れる。あたしは鼻を小さく動かした。
胸の奥が暖かくなるような、懐かしくて優しい良い匂い。規則正しい呼吸と、鼓動の音。一、二、三、四……六を数える前に、あたしは口を開いた。
「……ごめんなさい……」
レメクの手が、「よくできました」と言うようにあたしの頭を撫でる。
優しいその手に自分から頭をこすりつけて、あたしはもう一度彼の胸に頭を預けた。
猫扱いはショックだが、自身の行動を振り返るとレメクに対して

強く出られなかった。
悪戯して粗相する子猫と、あたし。いったいどう違うというのだろう？
被害が小さい分、レメクにとっては猫のほうがマシな気がする。
（……あの壁……直すとなったらいくらぐらいするんだろう？）
動けば動くほど、借金が嵩（かさ）んでいる。その全額を考えるだけで気が遠くなりそうだ。
けれど、レメクはそれについては一切何も言わなかった。
かわりに、静かな声が呟くように言う。
「後で手を診せてください」
あたしはただ、レメクに強くしがみついた。

※　※　※

昔、人が他人に優しいのには、二通りあるのだと言われた。
一つは、自分のために相手へ優しくするタイプ。
もう一つは、相手自身のために相手へ優しくするタイプ。
前者は自分本位や自己満足、後者は自己犠牲や偽善的奉仕と呼ばれていた。
けれどあたしは、そんな簡単に言い分けられるもんじゃないと思った。
だってそうだろう？　人の優しさは、そんなものじゃないはずだ。
誰かが故意にその優しさに別の名前をつけて評価しても、優しい人自身の本質が変わるわけじゃない。
孤児院で誰かが寄付に来るたびに、コソコソと交わされる矮小（わいしょう）な陰口。
院長はお金を貰うときだけニコニコ笑って、相手が帰ると金額によっては相手をこき下ろしていた。
孤児院にいる大人はたいていそんな人達で、彼らを見て育ったあたし達も、きっと、そんな大人になっていくのだろう。

だって、そんな大人しか傍にいなかった。
そんな大人しか、見本がいなかったのだ。
だからこうして、暖かい手で頭を撫でられていても、ろくでもない考えが浮かんだりする。レメクの優しさは、どういった種類のものなんだろうか、とか。
（……そんなの、あたしが勝手に解釈するべきものじゃないのに……）
ここは日だまりのように暖かくて心地よいのに、どうしてあたしの頭の中は真っ黒なんだろうか？
（……あぁ、違うわ……誰かのせいじゃないわ）
孤児院の大人のせいとか、そんなのただの言い訳だ。
きっと、あたし自身がこういう人間なんだ。
だから、あんな大人達の考え方がしっくりと馴染んでしまう。
（……レメクの傍は、こんなに暖かくて気持ちいいのに……）
自分とはまるで違っているのに。
ここにいてすら、自分はやっぱり、こんな人間のままで……
「……ベル」
ふと名前を呼ばれて、あたしはハッと顔を上げた。いつのまにか俯き加減になっていたらしい。
思考に没頭しすぎていたのか、しっかりしがみついていたはずなのに、今はほとんど体に力が入っていなかった。レメクが立ち上がれば、そのままずり落ちてしまっていただろう。
変なところでつきあいが良いのか、レメクも力の抜けたあたしを抱えたままだった。
あれほど必死にあたしを引きはがそうとしていたのに、チャンス到来とは思わなかったらしい。
レメクは飽きることなくあたしの頭を撫でていたが、たぶん頃合いを計っていたのだろう。
あたしが顔を上げたのを見て、躊躇（ためら）いがちにあたしの手をとった。
「……痛みますか？」

あたしは首を横に振った。
壁にあんな亀裂を入れておきながら、あたしの手は腫れもしていない。……我ながらこの頑丈さが不気味だ。
というか、あんな亀裂を入れたこと自体、未だに信じられないのだが。
（……あんな大きな亀裂が入ってるのに、音にも気づかなかったし……）
そう、叩いてる最中のあたしは、全く気づかなかったのだ。
あの魔女が通り抜けた時には無かったのだから、あたしが亀裂を入れたのは間違いないというのに。
（……ぅう……）
なんとも言えない気持ちで俯くと、あたしの手を触診していたレメクが嘆息をついた。
「丈夫な手ですね。多少は赤くなってますが、腫れてませんし、骨にも異常は無いようです。……本当に痛むところは無いんですよね？」
フニフニと指やら掌やらを触られて、痛いというより、どちらかと言えばくすぐったい。
あたしは頷きながら、この手をどうやって取り戻そうかと思案した。
「鬱血も無いようですが、一応、後で軟膏を塗っておきましょう。……ところで、ベル」
口調が変わったのを感じて、あたしは手をそのままにレメクを見た。
レメクの目が真っ直ぐにあたしを見ている。
「大事なことなので、きちんと聞いていただけますか？」
よほど大事なことらしい。
あたしは姿勢を正した。……人様の膝の上に乗って『姿勢を正す』も何もないのだが。
心持ち背を伸ばしたあたしに、レメクは満足したように頷く。膝

の上に乗ってるのは、別にいいようだ。
「あなたが外に出たがっていることは、その理由を含め、充分に理解しています。私も悪意あってあなたを閉じこめているわけではありませんから、あなたの体調が良くなったら、ちゃんと外に出してあげます。今は駄目だというだけで、ずっと閉じこめる気は無いんです」
そう言って、レメクの手があたしの手を離した。
とっさに、あたしは離れたレメクの手を掴んでしまう。
理由はわからない。
けれど、手放されるのは嫌だと思った。
……どうやって取り返そうか、思案したばかりだったのに。
レメクはチラとあたしの手を見てから、微苦笑を浮かべて問うた。
「だから、今しばらくで結構です。このままで大人しくしていてくれませんか？」
あたしは一瞬、答えを返せなかった。
不器用な手が、そんなあたしの頭を撫でる。
「不自由をかけていることはわかっています。ですが、今はこれがあなたの身を守る最善なんです」
ちょっと恐いぐらい怜悧な顔の中で、暖かいその瞳だけがレメクの本質を表していた。
あたしは頷く。
……本当は、あたしにもわかっている。レメクの言うことのほうが正しいのだと。
あたしはまだ小さな子供で、体調だって万全じゃない。見た目だけでもそれは判断できるだろう。今までの生活が悪かったせいで、陰干しにされた乾物（ひもの）みたいな姿をしているのだから。
この数日間寝たきりだったという事実もある。
レメクの手厚い看護がなかったら、あたしはとっくにこの世からいなくなっていただろう。部屋で大人しくしてないといけないのは、至極当たり前のことだ。

ただあたしが……あたしの気持ちが、今までの生活と違いすぎる『今』に慣れなくて、変な風に暴走しているだけで。
（でも……）
でも、ちょっとだけ、
ほんのちょっとだけ、ずるいと思う。
こんな風に真っ直ぐに見つめられたら、あたしはもう諸手をあげて降参するしかない。
どうやらあたしは、レメクの真っ直ぐな眼差しが弱点であるらしい。
もごもごとまごついていたら、レメクがそんなあたしを見てちょっとだけ微笑った。綺麗な夜明け色の目が、穏やかに細まる。
（……あれ？）
あたしは引っかかりを覚えてその目を見返した。
ごく最近、どこかで似た色を見たような気がする。
（……どこで見たっけ……？）
ぼんやりとした記憶をかき集める。
けれどそれが明確な形になる前に、立ち上がろうとレメクが動いた。途端に記憶が霧散する。
「あ、あ、あ」
「何です？　まだ抱っこがいるんですか？」
抱っこ。
いや、違うとも言い難いけど、よりによって『抱っこ』……
「……なんでそこで拗ねるんです」
口を尖らせてしぶしぶ降りたあたしに、レメクが呆れ顔で言う。
……これだから乙女心のわからない男は……！！
ジロリと睨みあげたが、鈍感な男がその理由に気づくはずがない。
だが、その服が微妙に皺になっているを見て、とりあえず言おうと思っていた文句を引っ込めた。
あたしにも『罪悪感』というものはあるのだ。
……たぶん、人並みよりちょっと小さめぐらいには。

「あぁ、そうです。ベル、一つ提案をよろしいですか？」
ふと何かを思い出した顔で、レメクがあたしを見ながらそう言った。
あたしは一瞬、きょとんとする。
「あなたの働き口のことです」
思わず目を瞠った。
「前々からあなたが気にしているようでしたので、考えていたんです。あなたの体調が良くなってから、が前提ですが……これからしばらく、あなたを一族の森に連れて行くまでの間、私があなたを雇いましょう」
まん丸になった目が落っこちるんじゃないかと思うぐらい、あたしは力一杯目を瞠った。
そのあたしの前で、レメクは真面目な表情のままで言う。
「あなたは非常に活発で、なおかつ真面目な性格であるようです。奇抜な行動さえとらなければ、幼いながらも十分な働き手になると判断しました。細かな内容についてはおいおい調整をつけていきますが、それなりの報酬もお約束できます。いかがです？」
いかがも何もなかった。
あたしは返事の前にレメクに飛びついた。
これで声が輝かなかったら嘘だろう。
「やるわよ！　もちろん！！」

5　招かれざる客の変な趣味

「だから、どうしてあなたは私に張り付くんです！？」
本日三度目の飛びつきをしたあたしに、さすがのレメクも叫んだ。
いやまぁ、飛びついたというより、飛びかかったと言うべき勢いではあったが。
「だっておじ様！　だってねぇ！！」
あたしは満面笑顔のままレメクに張り付く。両手両足を使ってガッツリ。
ちょうどあたしの頭の位置に彼の腹筋があり、そこにスリスリと頬ずりまですると、くすぐったいのかレメクが妙に逃げ腰になった。
甘えたい盛りなのだ。察してくれ。
……やりたい放題とも言うが。
「だっても何もありません！　自分が女性であることを強調するのなら、もっとそれらしい態度をとりなさい！　異性に飛びつくなど、はしたない！！」
レメクの叱責はいかにも正論なのだが、一つだけ抜けている。
特別な相手なら、女はいつだって積極的だ。
飛びつきもするし、場合によっては押し倒す。破廉恥な人は常識を失いがちだが、だからといって慎み深ければ情熱を得られるわけでもない。
ハッキリ言おう。恋愛は戦争だと！
相手がいっさい手出しをしないこの現状。こちらが先制攻撃をかけなければ、まず何も始まらない！！
恥など捨てろ！　捨て身でいけ！！
ということで、現在の状態だったりする。
まぁ、とある知り合いの宿のおねーちゃんの受け売りなんだけどね。
「だいたい、あなたは、もう少し心身が成長してから恋愛を……い

や、それよりも子供らしいつきあい方の勉強を……」
あたしを張り付かせたまま、何故かレメクが廊下に出る。
「それ以前に、もう少し体調が戻るまで大人しく……」
「……っておじ様、いったいどこへ？」
「厨房です」
あたしをペッタリ張り付かせた格好で？
「さっきの客のせいで、私はまだ昼食を食べていません。一日三食、定時に食事をするのは大事なことです。ところでベル、あなたは？」
「あたし？」
「昼食を食べましたか？　一応、サンドイッチを作っておいたはずですが」
あたしはツィーッと視線を斜め向こうに逃がした。
「……朝ご飯に……」
「あの量を全部食べたわけですか」
呆れまじりの口調だが、そこに驚きは無い。これまでの食べっぷりで、あたしの胃袋を理解しつつあるらしい。
てゆかね！
食べられる時に食べないと、死んじゃうんです！！　あたし達は！いつでも御飯を食べられる人じゃないんだから！！
「……」
ぽん、と。
なぜかレメクがあたしの頭を撫でた。
あたしは「？」の顔でレメクを見上げる。
レメクは何も言わずにそのままスタスタと階段を下りはじめた。
あたしを貼り付けたまま。
……あたしが言うのもなんだけど、よく動けるなぁ……この状態で。
と、頭上から静かな声がかかる。
「私が傍にいる以上、あなたを飢えさせたりはしません。だから、落ち着いて体にあった食事をしてください」

彼の動きに合わせてちょこちょこ体勢を変えていたため、あたしは彼の顔を見上げれなかった。
だから、そこにどんな表情があったのか知らない。
ただ、その声はとても暖かかった。
ついでに言えば……そう、これは……！
「おじ様！　それはプロポーズね！！」
「違います！」
即座に否定。
「何故そうなるんです！？」
「だって、私が傍にいる以上飢えさせないって言ったじゃない！」
「だから！　私の保護下にある今の現状を言ってるのであって」
レメクは勢いよく反論しようとした。
そう、しようとしたのである。
おそらく理路整然と、立て板に水的に正論を。
通常時ならば、それでこの話は終わりになっただろう。ただのじゃれつき程度の一幕だったはずだ。
突然、おかしな闖入者が現れなければ。

バァン！

そんな音をたてて玄関の扉が盛大に開かれ、
「なんと！　あぁ！！　なにやらあり得ない幻聴に慌てて引き返してみれば！」
変な男がやって来た。
「あのクラウドール卿が……」
そこでその男は沈黙した。
突然前触れ無く扉を開け放ち、演劇のごとく過剰なジェスチャーで嘆いてみせていたのに。あたし達の姿を見た途端、ぽかんと呆けた顔になって言葉を失ったのだ。かなりの美形だというのに、色々台無しな表情だ。

まぁ、予想外すぎて思考も空の彼方にすっ飛んだんだろうけど。
なにせレメクにはあたしが張り付いている。
……って、あれ？　この人、あたしの方見てる？
あたし単品？？
すると、一瞬硬直していたレメクが慌ててあたしの頭をぐいと背後に回した。
痛い！
てゆか、頭がもげる！！
「痛ーッ！　おじ様ひどい！」
とっさにレメクから離れて抗議したあたしに、
「ベル！　いいから隠れ」
「あああああーッ！！　メリディス族ぅーッ！！」
変な男が絶叫した。
あ。
ああ！
あたし、幻の種族だった！！
目を剥いてあたしを指さす男に、あたしはレメクが何故あたしを隠そうとしたのかを察した。
しかし、もちろん遅かった！
「へ？　きゃあああああああッ！！」
突然視界がブレたかと思うと、なんとあたしは見知らぬこの変な男に抱きしめられていたのである！
「ぎゃあ！　なにこれなにこの人いやぁあああッ！」
ごす！　どか！　べきっ！
とっさにあたしの繰り出した唸る三連撃をことごとくくらいながら、しかし男はあたしをなおも抱きしめ続ける！
「メリディスだぁ！　めりでぃすだよ！　ああ！　探してた甲斐あったぁあッ！」
「離しぇーッ！！」
いかん！　こっちもパニックで言葉おかしい！

というかもうあたしは全身鳥肌！　ぜったい髪も逆立ってる！！
あまりの嫌悪と恐怖に涙まで出てきたあたしだったが、そのとき、横から助けが入った！
「離しなさい、アロック卿」
べりっ
そんな音すら聞こえそうなほど、勢いよく男があたしから離される。
……うわ、相手の顔面掴んで引き剥がしてるよ。この人。
あたしのほうはやんわり小脇に抱きかかえてるのに。
意外なところでレメクの扱いの差を見てしまった。
……てゆか、遅いよ！！
「く、くらうどーる卿ぉ」
顔面を押さえつけられて遠ざけられてる男。
えぇと、名前がアロック？　その男が呻くようにレメクに言った。
「メリディスですよメリディスぞくぅ」
「見ればわかります。それが何か」
「保護対象ですよ！」
ぱっとレメクの手から逃れて、アロック卿は輝く目であたしを見た。
あたしはとっさにレメクの背後に回る。
いまにも飛びかからんばかりのアロック卿に、レメクはあたしを背後に庇いながら言った。
「私が保護していますが、何か」
その、冷ややかですらない、感情の欠落した声。
途端、アロック卿は硬直した。
ぎぎぎぃ、と錆びついた仕掛け人形のような動きでレメクを見る。
「今、何と……？」
「私が保護しています。彼女は今、様々な問題を抱えているため、私の監視下におかれることになりました」
「何故です！！」

アロック卿、絶叫。
「あなたは保護官では無い！」
「えぇ。ですから、この子は『例外』という形になりますね」
「保護対象を保護するのが、私の使命です！」
「あなたが個人の趣味を出さないのであれば、私も彼女を預けることを検討したでしょう」
パァッと顔を輝かせたアロック卿に、レメクは淡々とした目を向ける。
ぎょぐ、とアロック卿が喉のあたりで変な音を出した。
すごい……。目だけで威圧したよ、レメク。
「今のあなたは、彼女を預けるのに適任ではありません」
「そ、そんな……」
「あなたのメリディス族にかける情熱はウザ……いえ、熱いほど語られましたから、存じています」
今、ウザイって言いかけたよこの人……
「ですが、それが並々ならぬものである以上、幼いこの子をあなたに渡すことはできません。ご自身の身から出た錆と思って諦めていただきます」
決定事項の通達。あえて表現するならこれだろう。
アロック卿は悲痛な表情でレメクを見て、そしてあたしの方をもう一度見た。未練がましく。
あたしはヒシとレメクの足にしがみついてその視線から逃れた。
「何故です……何故あなたばかりがメリディスの血に触れるんですッ！」
突然、アロック卿がそんなことを叫びだした。
あたしには意味はわからない。
ただ、叫びの裏側から「信じられない！」という、どこか悲痛な声が聞こえた気がした。
「あのお方の肖像画も……なぜあなただけが下賜されたんです！？
私も欲しかった！！　幻の、メリディス族……！　ねぇ、見るも

できず、ただ保護対象として文面だけで見るしかない、私の気持ちがわかりますか!?」

「さっぱりわかりません」

……ちょっとは酌んでやろうよ……

あたしはレメクの背中に（というか、背筋のあたりに）飛びつき、ピタッと頭をくっつけた。

……ぐりぐりぐり……

「なのになぜあなたばかりに縁があるんです！」

「それは陛下にお尋ねください」

さらりと出された敬称に、あたしはびっくりして顔を上げた。

「陛下が『話しても良い』と思われたのなら、その時は話してくださるでしょう。『あの方』の存在とは、そういうものです。それはあなたもお分かりでは？」

「で、ですが、それならあなただって……」

「陛下より口止めされておりますので、詳しいことを語ることはできません」

ただ、と呟くように前置きして、レメクは嘆息をついた。

「昔、あの方が生きていらっしゃった頃に……お会いしたことがあります」

アロック卿の顔がいよいよ泣きださんばかりに歪んだ。なんであんただけ、と言いたいんだろう。

「何故あなただけ……！」

……本当に言っちゃったよ。

あたしはいい加減イライラしはじめて、レメクの背筋に頭を押しつけた。

わかってると言いたげに、レメクの右手がぺしっとあたしの手を軽く叩く。

前に「変な人」、後ろに「しがみつくあたし」。

前後を挟まれて、レメクもたまったもんじゃないだろう。

「別に私だけではありません。ただ、あなたとこうして言葉を交わ

している私も、そのうちの一人だったというだけのことです。それに、あれは報酬として下賜されたものです。ちょうどいいからこれをやろう、と。誰かにそれを非難される覚えはありませんよ」

「でもあなたは保護官でもないのに！」

……ぷちっ……

あたしの頭のどこかで、そんな音がした。

「あんたねぇ！」

「ベル！」

レメクの腰から飛び降り、背後から顔だけ覗かせて（だってまた抱きつかれたら嫌だ！）、あたしは怒鳴った。

「いいかげん鬱陶しいわよ！　保護官じゃなかったらメリディス族と接点もっちゃいけない法律でもあるの！？　誰が決めたのそんなこと！」

「な、わ、私は」

「自分の特権振りかざしてんじゃないわよ！　おじ様がメリディス族と関わりもつことの、何がいけないって言うのよ！　人徳でしょ？！」

「……それは少し違う気がしますが」

ぼそっとレメクが呟く。

無視！

「他人を嫉む暇があるなら、その分仕事をしっかりやればいいでしょ！　そしたらいつか、あんたに保護される人もいるかもしれないじゃない！　それを何！？　保護官じゃない保護官じゃないってそればっかり繰り返して！　いい大人が情けない！！」

「ベル」

レメクがあたしの頭に手を置いた。

そうして、ちょっとだけ困ったような目であたしを見る。

「もう充分です。……堪えたみたいですよ」

目線で示されれば……あれれ、なにやらショックを受けた顔でしょんぼりしている男発見。

……え、あたし悪いの？　これ。

いや、その……レメクの後ろから言うあたり、なんか虎の威を借る狐みたいで、確かにだいぶ悪いと思うけど……

「……一応……正論をしてみたつもり……だったんだけど」

「憧れの対象から言われれば、さすがに堪えるのでしょう。理解はできませんが、あの様子を見るに、そういうことだと思います」

……理解はできないんだ。

いやまぁ、レメクの憧れって確かに想像もつかないんだけど。

「……あたしは……理解できちゃうかも。いつもおじ様にされてるから……」

あたしの呟きに、レメクが目を見開く。

ナニそのビックリした顔！

「……まぁ、これに懲りて、彼も自身の趣味を改めるといいんですがね」

どよよんと暗雲を背負っている男に視線を向けて、レメクが話題を変えてくる。

……逃げたよ。この人。

「ねぇ……あの人の趣味って……？」

ある程度の予想をつけながら問うたあたしに、レメクは嘆息をついて言った。

「メリディス族です」

あたしはげんなりとため息をついた。

「……迷惑だわ」

6　保護する者とその理由

突然家に押しかけてきた珍客の名前は、ケニード・アロックといった。

年は二十七歳。王都でも著名なアロック宝飾店の店主であり、資産家で有名な男爵家の跡取り息子なのだそうだ。

また、本人は王宮勤めの保護官であり、国指定保護機関において民族部門の長をしているらしい。

……いいのか、あんなのに『長』なんてさせておいて……

あたしは胡乱な目で目の前の美味しそうなパンを見た。

ざくざくと大きなナイフでそれを切ると、小麦パン特有のいい匂いがする。小麦パンなんて贅沢品だが、レメクの家ではこれが普通だった。

（やっぱりお金持ちは違うわ）

ちなみにアロック卿は、あの後トボトボと屋敷を後にした。……あの後ろ姿は、ちょっと同情に値するかもしれない。

が、断りもなく乙女の柔肌に抱きついたことは許されないコトなのだ。

「アロック卿は、ああ見えて非常に優秀な人です。こと民俗学においては、他の追随を許しませんよ。権威、と言ってもいいでしょう。あの奇特な思考さえなければ、部門ではなく機関そのものの長となれるのですが」

……やっぱりあの思考は、王宮においてもダメ出しくらってるんだ……

「……お偉いさんなんだ……アレで」

あたしはいっそう目が胡乱になるのを感じた。

小さな嵐のようだったアロック卿。家柄や財産など、いっぱいくっついてる付録はスゴイ。

だが、それよりも素の本人のほうがイロイロ凄かった。

目鼻立ちの整った貴族的な美形なのに、本人のマニア全開ぶりが全てを台無しにしてしまってる。

ハッキリ言おう。変態だと。

「個人の並々ならぬ情熱と知識欲を集結させた結果、ですがね」

ため息をつきながらレメクが言った。どうやら苦手であるらしい。あたしも苦手だけど。

「悪い人じゃ無いんだよね……？」

「まぁ、悪人ではありませんね」

微妙な言い回しをされた。

「悪人と悪い人の違いってナニ？」

「さて。万人が認めるほどの悪人か、知人が知っている程度の『悪さ』であるか……違い的には、その程度でしょうか。彼にも悪い面がありますし。が、万人が悪人と認めるほどの悪行をする人ではありません」

「……何かされた？」

なんとなく引っかかりを覚えて問うと、レメクは淡々と言った。

「ルドによると『嫌がらせ』らしいですね。児戯に等しいので、気にしてないのですが」

嫌がらせ。

「ちなみに、どんなこと？」

「まぁ、小物類が無くなる程度の窃盗とか」

「犯罪じゃない！」

「いえ、それが、なぜか同じ内容の品が代わりに置かれてるんですよ。物々交換みたいなものですかね？　むしろ私が持っていた品のほうが粗悪品なので、余計に意味が分からないんです。かなり痛みのきた古い品もあったんですが……あんなものを持って行って、新品を置いておく理由は何だと思います？」

問われてあたしはちょっと遠い目になった。

アロック卿。実はいい人？

「変な細工があったりして？」

「いえ。当代一の彫物師による逸品でした」
ますます意味がわからない。
「不思議な人なのねぇ……」
「まぁ、理解はし難いですが、害は無いので放っておいてます」
……あの男も可哀想に。
「やられてる方が堪えてないと、意味ないのにね……嫌がらせって」
なんだっけ？　東の国の言葉で……
「のれんに腕押し？　かえるの面にしょんべん？」
「……あなた、一応女の子なんですから……」
どうにも微妙な表情で窘めるレメクに、あたしは首を傾げた。
何かまずかったんだろうか？
「てゆか、ルドって誰？」
あたしの問いに、レメクはため息をつく。
ちぎったレタスを綺麗に洗って布で拭いて……というか、この人、本当にテキパキ調理するな……
ちなみに隣の鉄板ではいい匂いのする肉が焼けていた。
美味しそう……！！
「ルドというのは、大聖堂に勤めている大神官です。ご存じではありませんか？　ルドゥイン・バルバロッサ」
あたしは小さな脳みその、かなり乏しい記録回路を辿った。
自慢じゃないが、物覚えはすこぶる悪い。
「えーと……なんか酒場で話のネタに上がってたような……」
「……その年で何故酒場などにいたのか、少々気になるところですが」
「ん？　給仕とか、床の掃除とかなんだけどね。客の残飯とかくれたりするから、あたし達にはいい仕事だったの」
レメクが沈黙した。
ちょっとバツが悪そうな顔で目線を逸らす。
「豪腕の神官という、ちょっと変わった異名で有名な大神官です。本来なら大聖堂の奥で下級神官に命令したり、猊下の傍にいるべき

なんですが……あの人は常に大聖堂の外にいましてね。そのせいか様々な所で出会います」
「……はぁ……街とか？　まさか王宮じゃないよね」
「いえ、そのまさかです」
おいおいおい……
「どうも王宮を面白い伏魔殿と思ってるみたいですね。街は単に気に入ってるだけでしょう」
どこか苦笑含みに言うあたり、ルドという人への心証が知れた。
「おじ様は、えぇと、バルバロッサ卿とは親しいの？」
「そうですね……。親しい、と言うほどの間柄かどうかはわかりませんが……仕事の関連で顔をあわせる機会が多いですから、互いに面識もありますし……古い知己、と言うのが一番正しいでしょうか」
「お仕事？」
「えぇ。ルドは裁判官でもありますから」
レメクの声に、あたしは目を丸くした。
頭の中にある推測のパズル。空白のそこに、新しいピースがカチリとはまった。
「じゃあ、おじ様が不正を調べてたのって、バルバロッサ卿に裁いてもらうため？」
レメクは苦笑めいたものを口元に浮かべる。
「できうる限り穏便に事を成すのであれば、それが一番いいでしょうね。ルドは裁判官である上に、大聖堂の大神官、その上バルバロッサ侯爵の第三子ですから」
侯爵！？
「侯爵様って、すっごい上の人よね！？」
「えぇ。見た目で判断できませんがね」
いや、それ以前にあたしはその人の顔知らないし。
「……貴族っぽくないんだ？」
「あえて言うのなら、そうですね……」
言葉を探して、レメクがちょっと眉を寄せた。

「熊、でしょうか」
……人間ですらないのか……
「いやあの、おじ様。せめてムッサイとか毛深いとか大男とか、そういう表現を……」
「毛深かったですかね？」
真顔で首を傾げられても困る。だから、あたしは知らないんだってば！
「や、だって熊って言うから」
「一応、人類ですよ。そうですね……実際に毛深いかどうかはともかく、そういう雰囲気ではあります」
何気にヒドイこと言ってる。
「バルバロッサ侯爵家は、軍関係の高官を多く排出している家系です。それを考えると、ルドの外見はいかにも将軍家らしい立派なものなのですが……」
最後の部分をぼやかすのが、妙にひっかかった。
あたしは首を傾げる。
「なんでそんな立派な熊男さんが、教会の大神官になってるの……？」
レメクは軽く苦笑する。
あたしは首を傾げたまま問うた。
「教会の権力が欲しいとか？」
第三子という、直接家を継ぎそうにない順位は、いかにも別の権力を得るにちょうどいい気がする。
けれど、レメクは苦笑を深めて首を横に振った。
「バルバロッサ家には、そういう権力志向はありませんね。暑苦しい家訓はあるようですが、ある意味貴族らしからぬ貴族ですから」
「はぁ……」
あたしはちょっと首をひねった。
貴族らしからぬ貴族。
まぁ、神官の異名なのに『豪腕』のだったりするんだから、その

人の実家も普通とちょっと違うのかもしれない。
「かわりに、こと身体的なことに対しては厳しいらしいですね。……ルドが何故神官の位にいるのかは、ルド自身に聞くと良いでしょう」
「あたし、面識ないんだけど……」
「今度会わせます。あなたのいた孤児院の話しもしてきましたから。それについてルドからも質問があることでしょう。……これからしばらく、周囲が賑やかになりますよ」
なんとなく、不穏な感じがした。
あたしは変な所で勘がいい。今、ちょっと背筋が寒かった。
「……危険なこと？」
恐る恐る尋ねたあたしに、トマトをスライスしていたレメクが頷く。
「ええ」
あっさり頷きやがったよ……
もうちょっと、こう……安心させるように、とか、そういうのは無いのだろうか？
「不正を暴くというのは、大なり小なり危険を伴いますから。……だからこそ、ルドの協力が必要なんですよ」
そう言って小鍋を取り出す。水を入れて、鉄板の上へ。会話をしながらでもスムーズな流れ作業。
たぶん、レメクはお仕事のデキル男なのだろう。このテキパキさ加減。実に羨ましい。
……というか、この鉄板。さっきから不思議なんだけど、どうして熱を持ってるんだろうか？　火なんて無いのに。
あたしが鉄板をじっと見ていると、レメクが鉄板の右端を指で示した。
「炎の紋様です」
紋様術が使われていた！
思わず目が丸くなる。

「……こ……こういう使い方するものなの？」
「料理には役立ちますよ」
あっさりと言うレメクに、あたしは開いた口が塞がらなくなった。
紋様術の無駄遣いじゃなかろうか？
発火現象を起こさないタイプの火の紋様術は、とてもとても高価だ。この鉄板の値段や如何に。
それにしてもこの屋敷、思い返せばこういうのを惜しげもなくあちこちに常備している。レメクの紋様術に対する認識は『ちょっと便利な術』程度なのかもしれない。
……ん？　もしかして？
「おじ様、もしかして紋様術師だったりする？」
あたしの名推理に、レメクは首を横に振った。
「いいえ。紋様術師の知り合いはいますが、私は違いますよ」
名推理ならず。
あたしはちょっとしょんぼりして俯いた。
いいもん。次の推理用にメモしておくもん。
「じゃあ、バルバロッサ卿？」
「ルドは確かに紋様術の札を使いますが、本人が紋様を書くことはほとんどありませんね。本人も紋様術師の位を得ていません」
むむぅ……
ということは、あたしの知らない第三者ということになる。あたしはちょっと遠い目になった。
「おじ様、意外と交友関係広いのね……」
「いえ。狭(せま)いです」
……いや、そう言いきられても困るんだけど。
「半隠棲生活をしていましたからね。もともとこの家に住んでいた人も、あまり人付き合いをする方では無かったですし。知人も限られています」
さらりと言われて、あたしは「うーん」と唸った。
と。

（……ん？　もともとこの家に住んでいた人？）
あたしは思わずレメクを見上げた。
「あの、今、この家に住んでいた人って……」
もももも、もしかして一緒に？　半隠棲生活？
「あぁ」
あたしの問いに、初めて自分が口を滑らせていたことに気づいたのだろう。ちょっと驚いた顔になって、レメクがあたしを見た。苦笑がその口元に浮かぶ。
「この家は、元々別の人のものだったんですよ。彼の死後、私が受け継ぎましたが」
「え、あ、か、彼？」
よ、よかった……女の人じゃないんだ。
あたしは思わずほっとした。
が、思ったことがバレバレだったらしい。レメクが呆れた顔になった。
「何を想像してたんですか」
「え、いやその、ほら、おじ様だって年頃なんだから」
うわ！　変な顔された。
「……どういう年頃なのかは敢えて訊きませんが、あなたはもう少し健全な考え方をするように」
窘（たしな）められました。
でもね、普通、そういう勘ぐりをするハズだと思うの。
だってほら、レメクは三十二でしょ？　大人の女の人と一緒に住んだ時期があったって、おかしくはないはずで……
（……むぅ）
いかん。どうにも気分が悪くなってきた。
思わず視線が下に下がる。
と、首のあたりをちょいと摘まれた。
「ひょわっ！？」
「相手の名前はステファン・ベラトリーテ・フォン・クラウドール。

私が彼と会ったのは二十年以上前のことですが、当時ですでに七十を超えた御老人でした」

「え。ぅ、うん」

「一緒に暮らしたのは十年と少しですかね……。老いてなお矍鑠（かくしゃく）とした人で、よく庭を走り回ってましたよ」

元気なおじいちゃんだ。

「病が元で亡くなりましたが、あの人に取り付ける病魔がいたのが今でも不思議でなりません。真冬に池に飛び込んで泳ぐような人でしたからね」

「さ、寒ッ！」

「えぇ、見てる方が寒かったです。おまけに人まで引きずり込もうとするし……」

意外とお茶目なお爺さんだったらしい。

レメクにとってはたまったもんじゃなかろうが。

「亡くなったのは、寒い冬の日でした。ちょうど、あなたを拾ったのと同じような日でしたよ。……あの日も雨が降ってました」

その声がしんみりしていたのは、きっと気のせいでは無いだろう。

あたしはレメクを見た。

すると、レメクがあたしをジロッと見る。

……え!?　ナニゴト？

「あの人を亡くして以降、この家で他の人間と暮らしたことはありませんよ」

あら。

あらららら。

もしかしなくても、考えたこと全部バレてマシタ？

「えぇと、えと、あの……ご、ご愁傷様でした」

しどろもどろになりながら、あたしは思い浮かんだ言葉をレメクに言った。

レメクがちょっと目を瞠る。

そうして、口元に淡い微苦笑を浮かべた。

「痛み入ります」
笑った目元が暖かかった。
レメクはきっと、そのお爺さんが大好きだったのだろう。
なんとなく、あたしはレメクの脇腹に頬ずりをした。
何故かレメクが手の甲であたしの頬を擦る。
……なんで手の甲で……？
（あ。料理中か）
ハタとそのことに気づいて、あたしは納得した。
そういえば、さっきも頭を撫でるんじゃなく、首を摘まれた。調理中は、髪を触っちゃいけないと言われたのだ。レメクもちゃんと実践しているらしい。
……それにしても、何故首だったのか。
この男、やっぱりあたしを猫扱いしてないか……？
「まだ何か不穏な気配がしますね」
むぅ、と唸ったあたしに、レメクが首を傾げる。妙に勘の良い男である。
「……なんでもないもん」
「そうですか」
そして妙にアッサリとした男でもある。
もうちっと、こう、重ねて問うとか……！！
気にしてくれるとか……！！　無いのか！　あんたには！！
勝手なことを考えながら、あたしはお湯が沸いた鍋に細切れにした茸を放り込んだ。くつくつと鍋が笑う。その沸き立つ音を聞きながら、ふとあることに気づいて口を開いた。
「あれ？　一緒に住んでたお爺さんが、クラウドールさん……？」
ステファン・（覚えられなかったので略）・クラウドール。
一緒に住んでた人。最初に会ったのは二十年以上前。
血の繋がった家族なら、たぶんそんな言い方はしないだろう。
あたしの「？」顔に、レメクは頷く。
「私は養子ですよ」

養子。
では、レメクも……？
「孤児ではありませんが……似たようなものですね。ステファン老との間に直接的な血の繋がりはありません。実際に血の繋がっている人はけっこういるんですが、関わりが深い人は一人しかいませんね。両親ともほとんど会いませんでしたし、今はもう二人とも他界していますから、これ以降その回数が増えることもありません。……私は血族とは別の所で育ちましてね。正直、血の繋がった家族というものがどういうものなのか、わからないんですよ」
とはいえ、別にそれをどうとも思ってもいなさそうな声だった。
あたしもちゃんと家族の揃った家庭で育ってはいないから、その気持ちはよくわかる。
「家族の団欒、って、どんなものなのか、想像もつかないよね」
「全くです」
深々と頷かれた。
あたしはレメクを見上げ、ちょっと汚れを落としてから右手でキュッとレメクの服を握った。
「とりあえず、未来には団欒家族を予定してるわよ」
「……」
何故沈黙か。
じーっと見上げるあたしに、どういうわけか視線を逸らすレメク。あ、ナニ。その一生懸命目を合わせないようにしてる態度！
「し、知らなくったって、これから学んでいけるんだからね！　その団欒とかそういうの！」
「……いえ、そういう勉強はまだしなくて結構ですから」
「なにを言うの。大事なことよ？　ほら、夫婦仲が円満な秘訣って、家族が仲良いことだって言うし」
「……それはもしや『子は鎹』に因んでますか？」
「かすがい、ってナニ？」
首を傾げたあたしに、レメクは苦笑する。

「木材を使った建物があるのをご存じですか？」
「あ、うん。北の方の建物は皆そうだって、旅芸人の人が言ってた」
「そう。その材木と材木を繋ぎ止めるために、打ち込む大釘のことです。両端がちょっと曲がってましてね。その『木同士を繋ぎ止める』様を人にも当て嵌めて、人と人を繋ぎ止めるものとして表現に使うわけです」
「つまり、子はかすがい、って言うのは、子供がその釘のように両親の間を繋ぎ止めるってこと？」
「えぇ」
ふむふむ。
「なるほどー」
「……あなたはまだ子供ですから、そんなに納得してこの言葉を覚えなくてもいいんです」
「……なんで妙に逃げ腰なの……？」
「いえ……」
微妙な表情でレメクが鍋に白い粉を入れる。
ミルクっぽいイイ匂い！
「な、なにその粉。なに？　ミルクの粉？」
「ミルクというか、チーズです。クリームチーズの固まりを粉末にしてましてね」
「おおおお」
思わずよだれが……
そして手が。
「まだ調理中です。手を伸ばさない」
ピシャッと手を叩かれた。
「むぅ！」
ケチ！
じろっと睨むと、同じような目で見下ろされる。
「味見なら後でさせてあげます。調理中のものをその都度食べていては、いつまでたっても食卓は空ですよ」

それはわかる。わかるけど、これは拷問に近い。
恨めしげに見上げると、また手の甲で頬を擦られた。我慢しろということらしい。
（……こ、こんなことで騙されないんだからね！）
頬ずりしかえして、あたしは調理に戻る。
視界の端で、レメクがちょっと微笑ってた。
「それにしても侯爵様のご子息が大神官かぁ……」
コトコト呟きだした鍋をチラ見しつつ、洗っておいた皿を並べる。
水をきったレタスをその上に乗せながら、レメクが会話を引き取った。
「珍しいことではありません。頭の痛いことではありますが、高位の神官のほとんどは有力貴族の血を引いていますから」
うーむ。どこまでいっても貴族が幅をきかせているらしい。
「いや、まぁ、確かに街の教会とかならともかく、大聖堂とかになるとそうなんだろうなーとは思ってたけど……」
「大聖堂だから、というよりも、教会の内部的にそうなるんです。猊下は前国王の叔父ですし、大神官も十二名中八名が侯爵家や伯爵家ゆかりの方。市井から出て高位の神官となっているのは、全体の二割ぐらいでしょうか。しかも、そのほとんどが地方にまわされてますし」
「……うぅ……」
やっぱり中央の高い地位につくのは貴族のようだ。
「貴族っていうか、クラヴィス族よね。そういう特権独占してるのって」
「……クラヴィス族が貴族の大半であることは否定しませんが、全部が全部そうだというわけではありませんよ」
心持ち眉をひそめて、レメクがあたしを窘めた。
あたしの切ったパンに、小さなツボの中の何かを塗る。そうしてから、焼けた肉とレタスを挟んだ。
カリカリベーコンサンド。

店で食べたらテネメス銅貨五枚はとられそう。
「スラムにもクラヴィス族がいますし、貴族にもパルム族やアザゼル族の方が多くいます。近年、民族間での貧富差が問題になっていますが、全体を通してみるとそれほどひどく差があるわけでもありません。そもそも……」
言いかけて、レメクはあたしを見た。
カリカリベーコンサンドに目が釘付けのあたしを。
苦笑を浮かべて、レメクがひょいと皿を取り上げる。
「昼食を先にしましょうか。ミルクに入れるのは蜂蜜と砂糖、どちらがいいですか？」

※　※　※

食事はまず、サラダ類から始まる。
そのほうが体にいいからと、レメクは必ず野菜を先に食べる。それをシャクシャク咀嚼していると、次にスープ類が出てくる。
レメクの食事は、屋敷や服の上等さに比べれば質素だが、素朴で手が込んでいるものが多かった。
「ゆっくり噛んで食べなさい」
そのあまりの美味しさについ急いで食べていると、その都度レメクに窘められる。
あたしの口についたパンくずを取ったりしている辺り、お父さんというよりもお母さんだ。
「だって、すごく美味しいんだもの」
あたしの抗議に、それは言い訳になりません、とハンカチ片手にレメクが言う。
ちなみにハンカチは、あたしの口を拭うためのものだ。バターとマヨネーズで黄色くなっている。
「美味しいと言うのなら、ゆっくりと味わって食べなさい」
正論を言われて、ちょっとしょんぼり。もそもそ食べると、目の

前に甘いホットミルクを出された。
山羊の乳ーッ！！
あたしはすかさずそれに飛びついた。それを見て、レメクがちょっと微笑う。
健啖家なあたしと違い、レメクはあまり御飯を食べない。今も紅茶を片手にちょっとパンを摘んだ程度で、テーブルの上の料理はほとんどあたし用だった。
「おじ様は、あんまり食べないせいでそんなに痩せてるの？」
山羊乳を飲み干し、満足の吐息をもらすあたし。ついでにそう問いかけると、レメクは軽く首を傾げた。
「そんなに痩せて見えるわけですか」
「いや……そうじゃないけど……」
あたしはいろんなことを思い出す。抱きついた時の感触とか。
「筋肉ついてるし、意外とガッシリしてるから、痩せてるとは言えないわよね。さっき確かめたけど、腹筋も背筋も申し分なかったし」
何故かレメクがあたしから距離をとる。
「あれかしら、ほら、脱いだらスゴイとかいう……って、なんで壁まで下がってるの！？」
いつのまにかテーブルから離れ、反対側の壁にいるレメクに、あたしは思わず椅子の上に立ち上がった。
レメク、逃げ腰。
「申し訳ありませんが。そういう危険思考の方と同席したいと思いませんので。いかがわしいことを言うようであれば、今度から別室での食事を希望します」
「ひどッ！！」
な、なんであたしが、スケベ親父みたいな言われようをしなきゃいけないわけ！？
あたしは自分の言動を振り返った。
ほら！　特別やましい台詞は……
……あれ？　天こ盛り？

いかん！　レメクがますます遠ざかろうとしている！！

「あああ変な意味は無いのよ！　宿のおねーちゃんにいろいろ聞かされてたから、どうしてもそういう目線がね！　ほら、抜けないっていうか、女として当然というか……！」

「そんないかがわしい視線が女性として当然なんですか？　あなたは、自分が八歳の子供だということを、もう少し大事にしなさい」

「いや、でも、子供であることを大事にしろって言われても……」

子供だと良い職にも就けないし、文句言っても頭ごなしに追いはらわれて終わりだし、いろいろ不便なんだけど。

レメクは嘆息をつく。椅子まで戻ってきて、やや距離をとりながらも座った。

……だから、その微妙な遠さはナニ！？

「子供である時間というのは、少ないんです。確かに、子供であるというだけで理不尽な目にあうこともあるでしょう。ですが、人は必ず、大人になります」

ごく当たり前のことを大切なものであるかのように言って、レメクはあたしを真っ直ぐに見た。

「時は待ちません。必ず進みます。どれほどゆっくりであってくれと願っても、時にそれを止めたいと思っても、決して止まりません。何をしていても、眠っていてすら、時は進んでいくんです。そうであれば、あなたは必ず、子供から大人になります。否応なくです」

「う……うん」

なにか反論してはいけない気がして、あたしは気圧されたように頷いた。

レメクが言っているのは、本当に当たり前のことだ。誰だって知っていることだ。

なのに何故、これほど大事に言うのだろう？

「子供である時間は、驚くほど少ない。あなたは今、その時間の中にいるんです。決して未来には無い、今だけの時間です。……大人になるのを急がなくていい。あなたは、子供である今の自分を大事

にしてください。……今しか無いんですから」
あたしはどう答えていいかわからなくて、それで代わりに問いかけた。
「おじ様は、その……昔、ずっと子供のままでいたかった、とか……？」
レメクは首を横に振る。
苦笑めいたものが、その口元に浮かんでいた。
「私には、子供である時間などありませんでしたよ」

※　※　※

子供だった時間が無い、というのはどういう意味なのだろう？
もくもくとパンを咀嚼しながら、あたしはチラッとレメクを見上げた。
レメクは相変わらず紅茶を飲み、時折思い出したようにパンをちぎる。
とても上品だ。礼儀にうるさいことを考えても、レメクはどちらかといえば貴族っぽい。
（……でも、そのわりには妙に庶民的な所があるのよね）
普通、貴族は自分で食事を作らない。身支度も自分ではしない。
けれど、レメクは「自分は養子だ」と言った。家族と暮らしたことは無いと。
あたしは頭の中の推理メモを引っ張り出した。
クラウドール家は、元々レメクの家では無い。養父は高齢のお爺さんで、初めて出会ったのは二十年以上前。どんな縁なのかはまだ不明。家族とは離れて育ったのだから、家の事情は複雑そう。
（……もしかして、レメクも本妻以外の人の子供だったのかな）
あたしは視線を下に落とす。
この国は、重婚タブーでは無い。だが、三十ある民族のうち、重婚可能なのはクラヴィス族、アザゼル族、ケルティ族の三つだけだ

った。
一族の掟で、そうなっているのだ。
国で一番数の多いパルム族の場合、愛人を認めることすら稀である。
と、いうことは、だ。
レメクの片親はパルム族なのかもしれない。んでもって、絶対に貴族か富豪だ。
で、クラウドールのお爺さんは、その人の知り合いか何かで、愛人の子であるレメクを引き取って育ててくれた。
もちろんこれは推測だ。けれど、なかなかしっくりくるような気がする。
ただ、何かこう……決定打に足りないような……
（……うーん……まだ情報が足りないなぁ……）
訊いてしまえば早いのだが、なんとなく、それはまだしてはいけない気がした。
訊けば教えてくれるだろう。けれど、そんな風にズカズカと相手の中に踏み込めば、大切にしなければいけないものを失いそうな気がする。
だって、自分の生まれた家のことだ。本当の両親のこと。……あの雰囲気からして、あまり良い記憶では無いだろう。
本当に今すぐいろいろ訊きたい。訊きたくてウズウズしてたまらない。けれど！
あたしはそれらの質問を、ぐっと我慢して飲み込んだ。
あたしとレメクは会ってまだ数日しか経ってない。まだその程度でしかお互いを知り合っていない。
こみいった質問は、もう少し信頼関係が結ばれてからのほうがいいだろう。
空になったコップに注いでくれた山羊乳を飲み干して、あたしはいろんなウズウズを引っ込めた。
視界の片隅で、レメクがちょっとだけ微笑う。

……なんだろう？
あたしが視線を向けると、何も言わずにミルクを注いでくれた。
よくわからない。けれど、あの笑みは優しくて素敵だった。
「……あたしの顔がどうかしたの？」
ちょっとドキドキして尋ねてみる。
レメクはいつもの淡々とした表情に戻って言った。
「あなたの美味しそうに食べる姿は、観賞に値しますね」
お……おおおお！　まさかの賛辞。好感触！？
「忙しなく食べる姿は、非常に見苦しいですが」
ざくっ……！！
い……今の一言はすごい刺さったわよ……
思わず恨みを込めてレメクを見る。もしかするとちょっと涙目になってしまったかもしれない。
レメクは「事実です」と言わんばかりの顔で紅茶を飲んだ。
えぇい、ばかちんッ！！
あたしはむすっと唇を尖らす。
確かに、レメクの食事は上品だ。えぇ、それはもう流れ作業のように食べて終わる。味わってるのかそうでないのかもサッパリなぐらいだ。下品にスープを啜ることも無ければ、パンを大急ぎで口につっこんだりもしない。
確かに上品ですとも！！
……その片手に書類さえ持ってなければ！
「ねぇ、おじ様。食事中に書類を見るのは行儀のいいことなの？」
ちょっとした意趣返しにそう言ってやると、レメクは「悪いことですね」と答えた。
しかし、そう言いながらも書類に目を通す。
「できれば食事時は食事に専念したいのですが、そうも言ってられない状況になりましたから。できるだけ早くこの件を片づけたいんです」
「この件、って？」

あたしの声に、レメクは書類からあたしに視線を移す。
ピンときた。
「あ、あたしのこと？」
「えぇ」
ハッキリ頷かれた！
「い、いやだ、あたし、まだ森になんて」
「いえ、そちらではありません」
あまりのことに慌てて立ち上がったあたしを、やや驚いた顔でレメクが制す。
しかし、とっさに手を上げてしまっているのは、一体どういう意味だろうか？
……動物じゃないんだから、どうどう、は無いと思うんだけど……
「孤児院の関連のことです。……アロック卿にあなたの存在を知られてしまいましたからね」
嘆息をついて、レメクは書類に視線を戻す。
「彼はメリディス族が関わるとしつこいですから。今日顔を会わせたのも、私がここ数日、メリディス族に関する書類を頻繁に閲覧していたからです。必要事項を確認したかっただけなのですが、なにせ一族関連の責任者は彼ですから、調べているのが即座にバレまして……。おかげで、書類を見ている間中、いろんな話をされましたよ。……まぁ、それらの知識も役には立つんですが」
嘆息。
「今日、あなたを発見して、おそらく彼は私の行動の意味に気づいたことでしょう。何をしてくるかわかりませんので、とにかくあなたに関わる全てのことを最速で仕上げないといけません。まずは、あなたのいた孤児院の監査。内部調査もありますし、過去のことも徹底的に洗わないといけません」
さらに嘆息。
「孤児院は教会も一枚噛んでますからね。ルドにも急ぐよう連絡をしなければ」

あたしはなんともいえない気持ちでそれらを聞いていた。
それは結局、あたしを森に連れて行く算段だ。
孤児院の不正に関してあたしがいろいろ情報を持っているから、とにかくそれを早く処理する。
そしたら……
そうしたら……？
「……」
あとは、あたしを森に連れて……
「……ベル？」
ふと、レメクがあたしを呼んだ。
けれど、あたしは顔を上げれなかった。
ただ、俯いたまま席を立つ。
「……ごちそうさま。部屋に戻ってるね」
レメクは何かを言いかけたようだった。気配でわかる。
けれど結局何も言わず、ただ、えぇ、と呟くように頷いた。
どんな表情をしていたのかは、わからなかった。

7　保護された者とその理由

レメクの部屋に帰り、あたしはソファの上によじ登った。
上等のソファは驚くほど柔らかく、気持ちと一緒に体まで深く沈んでいく。
何故か、体がひどく重かった。
意識せず背中が丸くなる。まるで重さに引きずられるように、あたしの頭は下へと垂れ下がっていた。
呼吸は深いため息になり、深すぎるそれの音であたしは我に返る。
けれど頭の中は、なにか不思議な靄（もや）がかかったように鈍かった。
（……体、だるい……）
虚ろな頭の中で言葉を紡ぐ。
ふと誰かの顔を思い出した。途端、胸がツキンと痛くなる。
思い出した顔はどこか影を帯びていて、だからいっそう、あたしの胸は痛かった。

――あなたはまだ体調が万全ではないんですよ。

諭すような、窘めるような……少しだけ心配が透けて見える低い声。
あたしはその声に向かって、ぼんやりと心の中で声を送った。
（……体、重いの……）
まるで、体の中身が鉛に変わったかのようだ。
重く、重く。息をするのも苦しいほどに重く、押しつぶされそうなほどに重く、それは心をすりつぶしていく。
静まりかえった部屋はどこか威圧めいていて、ちっぽけなあたしの存在を排除しようとしていた。
あたしは天井を見上げる。
今まで気づかなかったが、高い天井には綺麗な模様が入っていた。

その模様はあまりにも細かすぎて、あたしの位置からでは細部がわからない。
ただ、ここから見えるそれはとても美しかった。
見たこともないほど、綺麗だった。
かつてあたしがいた世界には――決してない美しさだ。
（目……痛い）
瞬きもせずに見つめていたせいか、模様がぼやけてキラキラと輝いて見えた。白く白濁した視界の中で、それは胸に迫るほどに美しい。
何かが目から零れて、頬を伝って落ちた。
白濁した闇が、一瞬だけ黒くなる。

（……結局の所）

頭の中で、暗い声がする。

（レメクにとって）

昏く冷たく凍えた声が。

（……あたしは、厄介事でしか無いんだよね……）

ドク、と胸の奥が大きく軋んだ。
息が止まって、気がつけば体も丸くなっている。
「……痛……」
意識せず、声が零れた。
胸の奥にナイフでも刺したように、ジクジクと熱を持った痛みが広がる。臓腑に毒を流し込んだような不快感。灼熱の痛みを伴う鼓動と、同じリズムの死の誘い。
なのに、何故だろう？

体はどこまでも冷たくて、その熱すらも冷たく感じる。
あたしはただ丸くなって、その痛みが治まるのを待った。
（……当然……よね）
パチンと、心の中で泡のように言葉が浮かんでは弾けた。
（だって、あたし……何の価値も無いんだもの……）
彼にとっては、ただひたすら面倒な相手だったことだろう。
金も無く身分も無く、美しくも愛らしくもない。そんな痩せた子供につきまとわれて、けれど国の保護指定と他族の掟のせいで放り出すこともできない。
どうにかして追い払いたいと、そう思って当たり前なのだ。
細かく面倒をみてもらえるだけ、あたしはとても恵まれているのだ。
（でも……でも、レメク……）
あたしは、初めてだった。
初めて、他人に優しくしてもらった。
覚えてる。
助けた相手にいきなりぶたれても、怒りもせず突き放しもせず、ちゃんと面倒をみてくれた彼。
覚えてる。
何故か高熱を出したその日から、つきっきりで看病してくれたこと。
夜中に起きて喉が痛かった時、飲ませてくれた水はとても美味しかった。
頭が痛くて体が熱くて、意味もなく不安で喘いでいたら、痛くない程度にギュッと抱きしめてくれた。
ねぇ、レメク。覚えてるの。もう、覚えてしまったの。
夜に不安になった時に、手を握ってくれた大きな掌の感触を。
（……でも）
でも、レメクにとっては、
（……あたしは……）

思った途端、視界が歪んだ気がした。
慌ててあたしは目を瞑る。
膝頭に目頭を押しつけ、五秒数えて顔を上げると、強く押しつけすぎたのか目の前がほとんど見えなかった。
（……レメク）
レメクは孤児院の不正とやらを暴くだろう。
あたしの証言をとって、きっといろいろな人からも話を聞いて、証拠とかそういうのも集めて、それで裁判官である大神官に裁いてもらって……
（レメク）
そうして、その後は、あたしを森に連れて行くのだ。
一族の長と会って、掟の例外を認めてもらって、
（レメク）
……それで終わり。
それで、全てが終わるのだ。
掟が無ければ、あたしがレメクの傍にいる理由が無くなる。
助けてくれてありがとう、と。そう言って終わってしまうのだ。
（レメクは……）
レメクはそれを望んでいる。
さっさとあたしを森に連れて行って、元の生活に戻ることを望んでる。
（……当然……だけど……）
徐々に晴れてくる視界。
けれどぼやけてくる視界。
品良く整えられた部屋。
あふれた水で屈折して、歪んで見えるその部屋。
（……レメクの……）
この数日間だけ過ごした、暖かい人の部屋。
きちんと整頓された広いその寝室は、あたしのいた範囲だけちょっとゴチャゴチャしていた。

置きっぱなしの水差し。整えられてないベット。サイドテーブルにも包みが一つ、置かれたままだ。

「……」

あたしは導かれるように、そのテーブルの傍まで歩いた。

足音を包み込んで隠す絨毯。精緻な作りのテーブル。

その上に乗った包みだけが、そっけないほどに簡素だった。

(……もらっていいって、言われた)

素朴な布に包まれた『何か』。

それはまるでプレゼントか何かのように、小さな青いリボンをつけていた。

あたしはその包みを手に取る。

それなりに重く、けれど大きさに対してはそれほど重くない『何か』。

どこか柔らかく、握った手の形にあわせてクタリと形を変える『何か』。

大人しくしていれば、これを貰ってもいいということだった。

あたしが大人しかったのかどうかは、あたし自身ではわからない。

けれど客が帰るまでは外に出なかったから、これは貰ってもいいのだろう。

客が引き返して大騒ぎするなんていうのは、たぶん、レメクにとっても予想外のことだったろうから。

「……」

あたしは包みを見下ろす。

包みは麻縄で軽く縛ってあった。リボンを外し、麻縄をほどく。

すると、中から服が出てきた。

服が。

「……ぁ」

あたしは息を零した。途端、何かがまた目からこぼれ落ちた。

服だ。

服だった。

レメクの物にしては小さすぎる。
レメクの物にしては色が明るすぎる。
それにこれは、あぁ、スカートだ。
あたしは顔がくしゃくしゃに歪むのがわかった。
あたしの着ている物は、レメクのシャツだった。下着以外にはそれ一枚だ。
レメクは子供服や女性の服なんて持ってない。だから、レメクが自分のシャツを貸してくれていたのだ。
服を返せと言われるのならまだわかる。
元々着ていた服を着ろと言われるのなら、まだわかる。
けど……ねぇ、これはどうして？
どうしてこんなものを買ってくれるの？
（……レメク……レメク！）
暖かい。胸が痛い。目が熱い。頬が熱い。
どういう顔でこれを買ったのだろう。どういう顔で選んだのだろう。
店の人に尋ねられなかったのだろうか？　尋ねられたら、どう答えたのだろうか。
こんなに可愛らしい服……女の子用の服だって、すぐにわかる品を。
どうして？
（どうして）
どうして！？
あたしは服を抱きしめたまま、崩れるように床に蹲（うずくま）った。
暖かい温もり。今まで得られなかった優しさ。ずっと昔に忘れた、切なく懐かしい心の欠片。
（どうして！！）
ああ何故与えるのだろうかいなくなればいいと思うのなら、いっそいっそ何も与えずにそのまま放り出せばそれですべてが終わるのに！

子供の戯言など聞かなければいい。
子供の妄言など無視してしまえばいい。
保護なんかしなければいい。何もなかったと嘘をつけばいい。助けなければいい。知らない顔をすればいい。
だって誰も知らなかった。あたしの存在なんて、そんなちっぽけなものだった。
父には見捨てられ、母には先に旅立たれ、薄汚れた暗い孤児院で昏い目で蹲っていた。
あの日あの夜あの雨の中で、ひっそりと終わる命だった。
放っておけばいいのだ。拾ってくれと言われる前に。捨てないでくれと言われる前に。一緒にいたいと言われる前に！
（ねぇ、レメク）
子供なら、心が無いと思っているわけじゃないでしょう？
子供なら、恋をしないと思っているわけじゃないでしょう？
いくつだって、どんな場面でだって、どんなに隔たりのある相手にだって、心が震えればその時に、人は恋に落ちるのだ。
（ねぇ、レメク）
時をかければかけるだけ、
手をかければかけるだけ、
心が増えていくのを、あなたはまさか、知らないの？
（……苦しい）
苦しい、苦しい、苦しい、苦しい。息ができない。目の前が熱い。声が零れそう。言葉ではない意味のない嗚咽（こえ）が。
（レメク、レメク）
手放すのなら、はじめから与えないで。
手放すのなら、何一つ与えないで。
だって苦しい。だって悲しい。だって切ない！　だってもうこんなに離れたくなくなっている！！
何と言われてもいい。裕福な相手への依存？　子供らしい小狡（こずる）さ？　子供らしくない計算高さ？

そんなものどうでもいい。たとえそう言われてもかまわない。
一緒にいられるのなら、それでいい。

（……絶対に）
それを望まれてないとわかってても。

（手放されると）
……わかって、いても。

いつか必ず、さようならと言われると知ってても。
だから、
だから、
だからだからだからだから

だから、何も、与えないで。

捨てるのなら。どうか。
もう何一つ与えないで。
全か、ゼロか。
それしかいらない。
そうでなければ耐えられない。
これだけ貰ったからもういいだなんて、そんな風には思えない。
そんな風に思えるほどには、あたしはまだ『大人』じゃない。
なにもかも全部が欲しい、欲張りな子供だから。

（レメク……！）
あたしは唇を噛んだ。
自分の体が熱いのか寒いのかは、もうわからない。
ただ口の中には熱い血の味がして、頬を流れるものもまた熱かった。
はじめて貰った服を腕の中に、まるで宝物のように抱きしめて、

あたしは小さく小さく蹲った。
視界の全てが闇色に染まる。
涙が止まらなかった。

※　※　※

いつ眠ったのかわからないまま、あたしは唐突に目を覚ました。
体を起こすと、あたしの上から布団が落ちる。
日はまだ落ちていない。
あかね色に変わりつつある空の中で、太陽が微睡むように色を沈ませていく。
（……？）
あたしは首を傾げた。
頭の中がぼんやりとしている。
あたしはレメクのベットで丸くなっていたらしい。もそもそと体を起こすと、ひやりと冷気が押し寄せてきた。春はまだ遠く、大気はまだ冬の衣をまとっている。
けれど、どうしてか寒いとは思わなかった。
（……なんだろう……何か、変な夢でも見てたのかな）
頭が重い。体も重い。どうしたんだろう？
軽く混乱して身を起こすと、手の辺りに違和感があった。見ると服が握れている。
（……服）
淡い桃色のワンピース。
上着とセットになっていて、袖口に可愛らしい花の縫い取りがあった。
刺繍の糸は白と黄色。黄色の糸は、とても高価だ。普通の糸よりも何倍も高い。これに匹敵する色は深い紫。どちらも貴族か富豪ぐらいしか使わない色だった。
（刺繍入りの……）

刺繍だなんて、そんな手の込んだ品はそれだけでも高値がつく。
生地もかなり良いものだ。
そして、この黄色の糸。
いったい、どれほどの値のするものなのだろうか。この服は。
「……」
ぼんやりとそれを見て、あたしはその服を手放した。
頭が重い。何かを考えようと思うのに、ぼんやりとぼやけて上手く思考がまとまらない。
霧がかった頭の中で、こちらに背を向けた誰かの背中が朧気に浮かんだ。
あたしはベットから抜け出す。
ふかふかの絨毯の上に降りても、何の感触もしなかった。ふらふらと歩き、なぜともなく窓際に寄る。
あたしは窓の外を見た。
未だ青々と茂る木々のある庭を。
そして瞬きした。
庭の一角に、アロック卿が立っていた。

8　それは愛

「えぇと、ベル？　ねぇ君、本当に家にいなくても大丈夫なのかい？」

そう問われて、返せる答えをあたしは持っていなかった。

夕闇と黄昏の色が鬩ぎ合う時刻。

人通りの絶えた道は閑散としていて、広すぎる道はどこか寒々しかった。

西の彼方へと沈む太陽が、小径も含めた道という道、家々を囲む高い壁と、その奥にある屋敷の屋根までもを朱く赤く染めている。

空は西の果てから赤く始まり、東に向かって青へと変化する。

雲はまろむような紅がかった橙色。冬の空は抜けるような透明度で、天の高さを突きつけていた。

その様は染みいるほどに美しかったが、あたしにはただ、せつなかった。

彼方の星までも透けて見える空は、どこか黎明の時の空に似ている。

それはレメクの瞳にもよく似ていて、だからいっそう胸に迫った。

そんな切ない空の下、とぼりとぼりとあたし達は歩く。

その歩みは気持ちに比例して重く、遅い。

「そりゃ、私は嬉しいよ？　家に来てくれるの。でもクラウドール卿に黙っての外出は、後が恐いからねぇ……一応、手紙は置いてきたけど」

どこかオロオロとぼやくのは、隣を歩くアロック卿だ。喜び半分、心配半分。そんな顔をしている。

その気持ちも……少し、わかる。

あたしはレメクに何も言わず、勝手に出てきたのだ。

アロック卿には言ってないが、あれだけしつこく「大人しく休め」と言われていたのにである。バレたらものすごく怒られるだろう。

それとも……今度こそ……あきれ果てられて、捨てられるだろうか？

（……今度、こそ……）

そう思うだけで、気持ちだけでなく体までもが重くなった。

馬鹿なことをしていると思う。

言いつけを守らないことも。怒られると分かって出歩くことも。

けど、あのままあそこでじっとしてはいられなかった。

どこにも行きたくないのに、どこかに行ってしまいたいような感覚。得体の知れない脅迫感を感じて、いてもたってもいられなかった。

巻き込まれたアロック卿は迷惑だろう。

「……」

俯いたあたしを見て、アロック卿がおずおずと頭を撫でてくれた。

気遣ってくれているらしい。

子供っぽいところもあるが、彼は基本的にいい人だった。

「けど、君がいきなり外に出てきた時には驚いたなぁ……」

ちょっとだけ顔を上げたあたしに、アロック卿はホッとした顔になってそう言い出した。

あたしがぼんやりとその顔を見返すと、照れたような顔でニコッと笑う。

「ほら、えぇと、クラウドール卿にも怒られたんだけどね、いきなり抱きつくような真似しただろ？　あれとか……あと、みっともないところも見せちゃったし。これは嫌われたなーって思ってたから。もう絶対顔も見せてくれないんじゃないかって思ってたんだ」

テレテレとそんなことを言われて、あたしは首を傾げた。

確かに、アロック卿との出会いは衝撃的かつ非友好的な感じだった。だが、失礼なことをしたのはあたしも同じだ。

「あたしも……感じ悪い態度とったもの。ごめんなさい……」

「え？　いや、いいよ！　もうさっき謝ってもらっちゃったし！　お互いに謝りあいしたばっかりじゃないか！　だ、だいたい、私の

ほうが先に礼を欠いていたんだし……あぁ、ほら、えぇと、ね？
だから、私のことは気にしなくていいから！」
一生懸命に言うアロック卿に、あたしはジーンときた。
本当に、子供っぽい一面はあるけど、いい人だ。
「アロック卿は、偉い人なのに、全然偉そうにしないのね」
貴族で高官。そんな立場で、最下層のあたしに普通に接してくれている。
もちろん彼の特別である『メリディス族』であるあたしは、、その恩恵にもあやかっているんだろう。
けれど基本的に偉そうな人は、例えそうであっても、ずっと高飛車にものを言う。平民のものは貴族のもの。そう平気で言う『お偉いさん』をいったい何人見てきただろうか。
そう思ってアロック卿を見上げたのだが、なぜかものすごいきょとんとした顔をされた。
「私が？」
「うん」
「私は偉い人なんかじゃないよ？」
「でも、おじ様が言ってたもの。アロック卿は男爵様のお子様で、仕事もできる人だって。メリディス族にこだわらなければ、民族部門じゃなくて全体の長になれるのにって」
その瞬間、アロック卿の顔が喜色に輝いた。
「え？　本当に？　あのクラウドール卿が？　本当に？」
二回も念を押す、この心底意外そうな問い。よほど日頃レメクにつれなくされているのだろう。
……てゆか、この反応は、ナニ？
「うわ、どうしよう！　すごい嬉しいなぁ！！　……あのさ、あのさ、クラウドール卿ってね、もう全然他人のことになんか興味ないって人なんだよね！」
あーうん。そんな感じ。
あたしは思わずへらっと笑ってしまった。

「わかるだろ？　だからさ、ちょっとでも反応してくれるともう嬉しくて嬉しくて！　そのクラウドール卿がだよ？　僕をそういう風に評価してくれてたなんて……！！　どうしよう！　今日はもう眠れそうにないよ！」

うん。どうしよう。

あたしはちょっと遠い目になりながら思った。

なにかヤバイスイッチを押してしまったようだ。

ごめん。レメク。あたしよりレメクのほうがなんか危険な気がする。この人。

彼の全身からレメクスキスキオーラが出ているように見えるのは、きっと気のせいではないだろう。

そしていつのまにか「私」から「僕」になってる。たぶん、こっちが地なんだろうけど。

……にしても、この人、お貴族様なのに、妙に人なつっこいというか……

「あ……アロック卿は、おじ様のこと好きなんだ？」

「ケニードでいいよ！」

フレンドリー。

「えぇと、け、ケニードさん？」

「呼び捨てでいいよ！　僕もベルって呼ばせてもらってるし！」

「えぇと、あぁ、うん。はい」

勢いに押されて頷きながら、あたしはちょっと顔が引きつるのを感じた。

な、なんだろう？　この勢い。

いろんなものが吹き飛ばされそうだ。

気づけば体の重みも忘れてる。

「クラウドール卿のこと？　そりゃあもう、ものすごい好きだよ！　だって彼は、宮廷で一・二を争うほど僕のマニア心を刺激してくれる人なんだからね！」

わー、おじ様、かなりヤバイよこの人。

てゆか、レメクの身がとても危険。
あたしはぐっと握り拳を固めた。
「陛下も捨てがたいんだけどね！　あの人はもう、違う意味で別格だから！！　あ、でもクラウドール卿も別格だよ！　なにせ陛下同様、国で唯一人の存在だからね！」
ど、どういう意味で？
なにか尋ねるのが恐くてちょっと尻込み。
というか……な、なんだろう、この人の、この情報満載っぷり。
むしろアレか？　これはもう、あたしにレメクマニアになれということか？
「えっと、ケニードは、おじ様と親しいの？」
「うーん、親しくしたいのは山々なんだけど、クラウドール卿は完全無敵の鉄壁防御だからねぇ……。むしろそういう意味では君の方が遙かに親しそうだったよ？　いや、だってさ！　彼があんな風に人の間に割って入ったり庇ったりなんて、今まで無かったことだから！　すごい大事にされてるね～」
なんですって！？
彼の嬉々とした話しぶりから喜びが伝播（でんぱ）したのかもしれない。暗い気分もすっ飛んで、あたしは彼の言葉にかじりついた。
「だ、大事になんてされてる？　いや、されてるよね？　てゆか、おじ様、何気に保護意識満載な人よ？」
「え？　それ本当？　うわ、初耳だよ大ニュースだ！　あ、でもでも確かに彼、ちっこいものとか弱いものとかに妙にこだわるよね、猫とか」
猫！
カウンターパンチをくらった感じで、あたしの心がべしゃっと折れた。
……猫……猫か。やはりあたしは、レメクにとって猫なのか……
「いやー、あれはなかなかシュールで愉快で癒される光景だったよ～。無表情なクラウドール卿に周りにたかる子猫の山。頭の上にま

で乗られてなんていうか、こう、爆笑一歩手前？　バルバロッサ卿と陛下がこっそり隣で爆死しててねぇ。もう声を抑えるので必死だったよ。あ、そのときの記念映像！　紋様術の粋を駆使してバッチリ保管してるんだよね！　見て見て～！！」

そしてなぜか懐から取り出す一冊の小冊子。

ぱらっとめくられたそこには、薄い紙に映像が印刷されている。

「複写（トレース）の紋様術だよ。そのときの映像をそのまま紙や布に複写できる優れものでね！　あ、これ、猫にたかられてる三百六十八枚中の一枚」

多ッ！！

てゆか、なぜにいつも持ち歩いてるのだこの人？

そしてあたしはその衝撃映像を見た。

「ぶはっ！？」

レメク、猫まみれに！！

「王宮にねぇ、捨て猫達を匿（かくま）ってたらしいんだよねぇ、彼。そしたらそこで大繁殖しちゃってね～。陛下に怒られてこっそり家に持ち帰ったらしいんだけど、今頃敷地内でさらに大繁殖してるんじゃないかなぁ？」

「も、もしかして、まだ探索できてないあの林の奥にいるのかなぁ」

めくってもめくっても猫とレメクしか写ってない謎の小冊子「レメク図鑑（ずかん）（勝手に命名）」をめくりつつ、あたしは震える声でそう推測した。

あぁ～そうかも～、とケニードが頷く。

「確かあの屋敷の敷地は、北区随一の広大さだったからねぇ。川あり丘あり泉ありな上にぷち森林まで有する優れものだから。屋敷自体は古風で小さいんだけどねぇ」

「え、あの大きさで小さいの？」

「うん。北区の屋敷ってさ、結局は金持ちや貴族が見栄と顕示欲で建ててるのが多いから、やたらと豪華で大きいのが普通なんだよ。敷地の半分を占めてるぐらいだからねぇ。そこへいくと、クラウド

ール卿の屋敷は敷地の十分の一以下、いや、あれはもう二十分の一ですらないね！」

……さすがレメクマニア。屋敷面積まで把握してるようだ。

「でもねぇ、そんな愉快な一面を見れたのは、ここ数年ぐらいなんだよね。僕がクラウドール卿と会ったのは十五年ぐらい前なんだけどね、なんていうか……今よりずっと恐い感じだったなぁ」

「恐い感じ？」

「うん、そう」

大事に大事にページをめくるあたしに、ケニードはにっこり笑って頷く。

「なんていうか、本当に人形みたいな感じでねぇ……あ、ちなみにすごい美少年でした」

これがその衝撃映像、とやはりどこからともなく小冊子を出してくる。

見せられた写真。

（……確かに！！）

確かにこれは美少年だ！

「うっわー……こここれがおじ様、うわうわわ」

「今も男前だけどねぇ。これはもう、なんていうか反則だよね？」

「反則だわね」

「まったく反則だよ」

レメクに聞かれれば「何がですか」と即座につっこまれそうなことを二人で深々と頷きあう。

いやだって、これは本当に素晴らしい。思わず顔に赤みもさす。

「す……素晴らしいわ、ケニード。あたし、あなたのことを誤解してたわ！」

よってキラキラと輝く眼差しで見上げたあたしに、ケニードは同じく輝く笑顔で照れてみせた。

「いや、僕もここまでクラウドール卿のことを語れるなんて……！

ベル！　君はなんて素敵なレディなんだろう！」

あたし達はしっかりと握手をかわす。
ここにレメクマニア同盟が結成された。

※　※　※

ケニードの屋敷は、なるほど、確かに『北区の貴族的』な豪華なものだった。
煌びやかな玄関ホール。煌々しい廊下。そして最後にトドメのごとくキラッキラな部屋。
「……なんか、目、痛いわ……」
そのあまりのキラキラオンパレードに、目をしょぼしょぼさせるあたし。ケニードが困ったような半笑いで頬を掻いた。
「うん。僕もあんまりこういう家好きじゃないんだけどね。お父様にもらった屋敷だから、文句も言えないし」
男爵様はキラキラが好きとみた。
……というか、そうか、お貴族様は、やはりお父様達からお屋敷をもらったりするのか。
プレゼントの桁が違うなぁ……
「あぁでも、理想といえば、クラウドール卿の屋敷は理想だよね！　あの、こう、なんともこじんまりとまとまった建物といい、無駄な装飾は無いのに品のある風情といい、中の人を如実に表しているよね！」
彼のレメク賛美は留まるところを知らない。負けそうでちょっと悔しい。
「でもあの屋敷、おじ様の部屋とお風呂と台所とトイレ以外は埃まみれよ？」
「なんだって!?　勿体ない！　いつでも僕が掃除に行くのに！」
いや、普通、その発想はどうよ？
「てゆか一応、元気になったらあたしが掃除当番！　あたしの就職先！」

「え、そうなの？　それじゃあ、仕方ないね。週末手伝いに行くぐらいで諦めるよ」
それは諦めているのか、諦めていないのか。
いやまぁ、いいけど。
「あ、そこ座って座って。今、お茶いれるね。メリディス族ゆかりの健康茶。かなり効くらしいよ、これ。おすすめ。ベルの顔色、前より良くなってるけど、やっぱり体調悪そうだから」
椅子を引いてあたしを座らせたあと、パタパタとケニードが走る。貴族様なのに、フットワークがとても軽い。
それにしても、メリディス族ゆかりの健康茶？
首を傾げて待つこと数分。ケニードが笑顔で何かデロンとしたものをあたしの前に出してきた。
「はいこれ。元気茶～」
呪いのお茶が出た！
華麗なティーカップに注がれた、真緑色の不気味な液体！
透明感はまるで無く、言ってしまえば、そう、ヘドロ！
匂いは未だかつて嗅いだこともないような匂い。
「え、こ、これ、飲み物？」
「そうだよ。薬湯みたいなものだね。意外と美味しいよ？」
これを美味しいと評せれるケニードが眩しい。
あたしはじっくりとそれを観察し、意を決して手にとった。
人様が淹れてくれたお茶。無駄にしては女が廃る！
「ぐぅ……む？　むむ？」
あ、意外と美味しい。
いや、むしろ美味しい！
「ぷは、これ、美味しいよ！？」
「だよね？　美味しいよね？　しかもこれ、すっごい疲労回復に効くんだよ。メリディス族に一番効用があるらしいから、元気になってくれるといいなぁ」
にこにこと笑われて、あたしはちょっと感動した。

あんな暴言吐いたあたしに、ここまで気をつかってくれるなんて……！

最初に出会った時の暴言の数々は、すでに謝っているけど……こ、これはどこかでぜひお返しをしなくては！

思わず姿勢を正すと、ケニードが近くのワゴンから何かを引っ張り出す。

「あと、これが肌荒れ回復薬。こっちが髪の艶を取り戻す薬。どれもメリディス族ゆかりの秘薬だよ！」

「す、すごいのね。でもこれ、秘薬っていうぐらいだから、めったに作れないんじゃ……」

「いやいや～。調合が難しい上、今まで知られてなかったからそう言われてるだけで、実際の材料はすごい安上がりなんだよ。僕はもう調合法マスターしてるから、好きなだけ飲んで。あ、でも薬の方は一日一粒だけだよ。こっちのお茶はお代わり自由。飲んで早く元気になってね」

ううっ……いい人だ！

あたしは大いに感謝してデロリン健康茶をお代わりした。

確かに効いてる感じがする。

あれだけどん底だった気分もスッキリだし、重かった体も軽くなったし、なにより頭が痛いのも解消された。

……いや、なんか効力の半分ぐらいは、ケニードのキャラクターな気がするけど。

「けどねぇ、これ、まともに飲んでくれたの、陛下とバルバロッサ卿とクラウドール卿だけなんだよね～」

……国王様にも出したのか、このお茶。

あたしはお茶を見下ろして唸った。

このどう見ても呪いのお茶にしか見えないシロモノ。こんなものを飲んでくれたという国王陛下とは、いったいどんなお人なのか……

偉そうなオッサンを想像してたんだけど、この様子じゃ意外と気さくな人なのかもしれない。

……いや、ケニードが変わり者すぎてて、勢いで飲んじゃったのかもしれないけど。

「ちなみに、このレシピを持ってきてくれたのは陛下なんだけどね」

「ぶぽっ！」

「うわ、ベル！　だだだ大丈夫？」

「だ、だいじょぶ……って、今、レシピ持ってきたのが国王様って……」

「あー、うん。ベルは陛下とはお会いしてことある？　なんていうか、インパクトあるよね、あの方」

会ったことあるわけないって！

こっちは一般市民どころか、のたれ死に一歩手前の孤児で、相手は王様よ！？

あたしはとっさに抗議しようとして……止めた。

いくらケニードが貴族らしからぬイイ人だといっても、視界の限度だけはどうしようもないだろう。あたしが貴族の生活がわからないように、ケニードにだって、あたし達の生活がどんなものなのか、全部を理解できるはずがない。

（いや、もしかしたら……レメクと一緒にいたから、面識あるかもって思われたのかもしれないし……）

あたしはともかく、レメクはどう見ても地位が高そうな人だ。

……うん。そう考えたら、そう思われても仕方がない気がしてきた。

……それにしても、ケニードよりもインパクトあるのか……王様……

唖然としたあたしの前で、ケニードは夢見る少年のような顔で語る。

「なんでも前国王陛下の第二妃、レティシア様が晩年よく飲んでらっしゃったらしいんだよ！　あ、レティシア様っていうのは、メリディス族のお方でね。ほら、クラウドール卿がもらったっていう肖像画。そこに描かれているのが、レティシア様なんだよ」

「メリディス族の……王妃様？」
「うん。体の弱い方だったらしくて、もうだいぶ前に亡くなられてね……すごい立派な葬儀だったなぁ……。あぁ、でも、君が生まれるよりも前の話だね」
そう言って、ケニードはちょっと目を伏せた。
「……そうか。もう、そんなに昔の話なんだなぁ……」
あたしは、その時のケニードを見て、なんとなく誰かに似ていると思った。
何か、心の中の大切なものに、そっと決着をつけた人。
アウグスタ。
レメクの寝室に現れた、あの黄金の巨乳魔女。
彼女もまた、今のケニードと同じ表情をしていた。
「王妃様は、あんまりお幸せじゃなかったの……？」
あたしの問いに、ケニードはちょっと夢から覚めたような顔になり、それから面はゆそうに笑って首を横に振った。
「さぁ……僕はしょせん、しがない男爵家の子供だからね。そこまではわからないよ。でも……一度だけ、遠目に拝見した王妃様は、確かにすごく儚くて……今にも消えてしまいそうだったね」
「……そっか」
「メリディス族はね、いろんな迫害の歴史があるんだ。もともと、少数民族な上に、男女とも非常に美しい外見をしているし」
……非常に美しい外見？
あたしは思わず胡乱な表情になる。
……未だかつて、そんなふうに言われたことは無いけど、あたし。
いや、母さんは確かにすごい美人だったけど……
「紫がかった銀の髪も、すごく珍しいしね。あと、すごくいい匂いがするって言われてる」
「あぁ、あの微妙な噂ね……」
「うん。文献にはいろいろ載ってるんだけどね。確か……どこだったかな、王宮の図書館にあった文献……えぇと、なんだっけ。民族

百選？　違うな……他族おもしろ大百科？」

……なんだろう。その妙に気になるタイトルは。

それ以前に、王宮の図書館ってもっとこう、高尚なもんじゃないんだろうか？

「あぁ、思い出した。『珍民族まるごと丸わかり辞典』だ！」

うわ！　正解が一番タイトルおかしい！！

てゆか、珍民族ってナニ！？　珍民族って！！

「確かこう書いてあったな。えぇと、『その肌は匂い立つような芳香を放ち、筆者の心を捕らえて離さない。あれはもはや魔性の域であろう。その薫り（かお）の元となるのは皮膚なのか、その下に流れる血液なのか。いやいや、そこを考えるのは無粋というものだ。なにしろ、かの者の馨（かぐわ）しきは薫りだけでなく、その例えようもなく美しい微笑みなのだから』なんだって」

記憶の中から、そうスラスラと文章を取り出してきた彼に、あたしはあんぐりと口を開けた。

彼の頭の中はいったいどうなっているんだろうか？　もしかして、王宮の図書館の図書がそのまま入ってたりするんだろうか？

例のおもしろ百科とかイロイロ。

そ、それにしても……

「なんか、タイトルとまるで違う文章なのね……？」

「そう？　そうかな。でも、なかなか面白いよ、あれ。今度借りてきてあげようか？」

「……いい。文字読めないから」

「教えてあげるよ？　文字は読めたほうがいいから。……でも、僕より先に、クラウドール卿が教えてくれるんじゃないかな。この前、なんかせっせと写本用の教材探してたから」

「写本用の教材？」

「そう。文字の練習をするときにね、けっこう重宝するんだ。クラウドール卿の写本っていったら、かなり高額で取引されるよ。彼、紋章術や紋様術に詳しいし。文字綺麗だし。あんまり写本書いてく

れないから、レアだし」
なんだか最後の部分に力が入ってる気がした。
てゆか、そうか。ケニードはレアモノマニアなのか。
「その彼がね、なんか初心者用の写本リストみたいなの集めてたから、今度は何をするのかなーってちょっとチェックしてたんだよ。ほら、教会が慈善事業の一環で、孤児院に文字を教えに行ってるだろ？　あれの本も集めてたから」
その言葉に、あたしはドキッとした。
それは、もしかして……
「ねぇ、それ以外に、おじ様が最近してたことって、何かある？」
「最近？　そうだね……ここ数日の間なら……」
そう呟いて、ケニードは頭の中の引き出しから記憶を取り出してきた。
「保護機関の訪問、メリディス族の資料の閲覧。王立図書館で地図を閲覧。宰相と会談。教皇に謁見した後、大神官のバルバロッサ卿と会談。バルバロッサ卿とはそれ以降も五回ほど会談してるね。いずれも街中だったなぁ……」
……もしかして、尾行でもしたんだろうか、この人……
あたしの頭の中に、とある文字が浮かんだ。
ストーカー。
「あと、今まであんまり接触してなかった貴族とも話ししてたなぁ。相手の人、すごい怯えてたけど」
「……おじ様、外でどういった風に人と接してるんだろう……」
だいたいにして、貴族を怯えさすなど、いったいどういう人なのか。
「うーん。彼の場合、持ってる力が違うからなぁ。本来なら、僕なんか片手でポイしちゃえるだろうしね」
「え。お、おじ様、もしかしてすごい偉い人なの？」
「偉いというか……まぁ、基本的に国で一番恐い人かな」
「き、基本的って……」

「暗黙の了解というか、まぁ、宮仕えになった時に先輩に徹底的に教えられるものがあるんだけどね。所謂『王宮怒らせてはいけない人リスト』と『王宮逆らっちゃいけない人リスト』なんだけど」
「うんうん」
「そこのリストで、いつも陛下と首位争いしてる」
王様と同レベル！？
「どどどどういう人なのおじ様って！？」
「え。知らないで保護されてるの？」
「や、だってほら、あたし出会ってまだ数日しか経ってないし！」
「えぇ！？　数日であのベッタリ具合なのかい！？　な、なんて羨ましい！」
マテ。あんた。その「羨ましい」はどっちに対してだ？
なぜか両方に対して嫉妬メラメラハンカチ噛んでキーッ！　な雰囲気が。
「どこでどうやってどういう風に知り合ってあんなベタベタに！？
いや、むしろその攻略法を是非！」
「いやちょっとマテあんたどっちの攻略っていうかあたしはまだおじ様攻略できてないーッ！」
「あの密着具合でまだ未攻略！？　まままままさかクラウドール卿のほうから攻略が！？」
「いや、無かったと思うし！　最初からあたし全開でオッケーだし！！」
「むむ！　ということは、やはり猫属性！？」
「猫言うなーッ！！」
い、いや、興奮するなあたし。
そう、興奮すると体に悪い。
ついでに話が逸れている。
「そ、それよりもまずおじ様の話よ！　おじ様のこと！」
「あ、あぁそうだったね！　で、でもベル、僕もクラウドール卿の攻略法知りたい！」

「だから、それはまだあたしも未攻略だってば！」
「じゃあ、僕が情報教えたら、君も知ってること全部話して！　ね？　いいだろ！？」
「交換条件ね！　おっけいよ！　あたしの知ってることなんて、レメクの寝相とか最近の料理メニューとか、張り付いたときの変な踊りぐらいだけど！」
「をををを！　なんてレアな情報を！　くっ！！　ベル！　君はやっぱりなんて素敵なレディなんだ！」
「あなたも素敵よケニード！　ってことでさぁおじ様の丸秘情報を！」
あたし達は手を取り合い、熱く熱く握りあう。
その瞬間、

「……何をやってるんですか……あなた達は……」

どこかげっそりとした声が後ろからした。
あたし達は同時に振り返る。
そして二人同時に叫んだ。
「「ぎゃあああああああッ！！」」
疲れ切った表情のレメクがそこにいた。

9　心の選ぶ人

「おおおおじ様なぜここにーッ！」
「と言いながら何故飛びかかってくるんですかあなたは！！」
もはや条件反射的にレメクに飛びかかったあたしに、逃げることもできなかったレメクが叫ぶ。
エッチラオッチラ。
「おおお！　それが変な踊り！！　はい、チーズ！」
パシャ、と音がして振り返ると、ケニードが何かを羊皮紙に貼り付けていた。
たぶん、例の複写紋様術（トレース）を使ったのだろう。……ということは、貼り付けているのは今の映像だ。
（後で私の分もください！）
あたしはギラリとアイコンタクトを送った。
ギラーンッとケニードが見事なアイキャッチ。
互いに素晴らしい至福の表情。
「うふふふふなんてレアな画像なんだろう！　クラウドール卿の必死の表情なんて、もうすごい貴重だよ！」
わぁ、ケニード。よだれ！　よだれ！！
レメクの顔が微妙に引きつった。
全身で張りついているあたしを剥がすのが先か、異様なテンションの変態を倒すのが先か。
たぶん、レメクにとっては究極の選択だったのだろう。
しかし、彼が行動に移るより早く、別の所から声がかかった。
「あ……あの、クラウドール様……？」
恐る恐る、といった表現が相応しいその声に、レメクの動きがピタリと止まる。どうやら我に返ったらしく、スッと無表情になった。
あー……そういえば、この無表情もなんか久しぶりだわ。あたし的には。

ちなみに声をかけてきたのは、立派な鎧を着た壮年の男だった。
なかなか愛嬌のある顔をしているが、ヒゲがあまり似合っていない。
「失礼。見苦しいところをお見せ致しました」
レメクがピシッと背を伸ばして答える。長身も相まって実に格好イイ。
あたしを貼り付けたままでさえなければ。
「は……はぁ……」
ヒゲ男さんのほうはあたしをチラチラ見ながら、顔に冷や汗をかいていた。無視するに無視できず、尋ねるに尋ねられない。そんな風情だ。
その顔が青ざめている理由をとても知りたい。
（……それにしても）
この人は一体どういう人なんだろうか？
ヒゲ男さんの隣には立派な白ヒゲのお爺さんがいて、この人はケニードの家の執事さんだった。あたしもお屋敷に入るときに挨拶したので、顔はちゃんと覚えてる。
……名前はお願い、聞かないで……
ちなみにこちらも、ものすごいショックを受けた顔をしていた。
その目がとらえているのは、他ならぬレメクとあたし。
（え、えーと……）
あれかな？　やっぱり原因はあたしだよね？
上流階級の方々には、全力ハグとか飛びつきハグとかは、とってもはしたないことなのかもしれません。
その彼らの後ろには、鎧をつけた人々がズラリと並んでいる。
下の服も鎧も灰色なので、見た目的にはものすごく地味だ。お城の兵隊さんだろうか？　遠目に見たことのある、城の門番にちょっと格好が似ていた。
とすれば、ヒゲ男さんは隊長さんなのかもしれない。
（……それにしても、なんでみんな、変な顔をしてるんだろう？）
あたしは周りを見渡した。

揃いも揃って、世にも奇妙なモノを見たかのようだ。なかには口を半開きのまま、固まっている人もいる。

何故だろう？

……あ、なんか隅っこで丸まってぶるぶる震えている人を発見。

何故かその人だけ青い服。

見えるのは尻と背中だけなんだけど……でかい尻だなぁ。

そんな風に周囲を観察していると、白ヒゲ執事さんが意を決して声をかけてきた。

「ケニード様……これは一体……どういうことでしょう？」

その声に、複写紋様術（トレース）を行使しまくっていたケニードは、一瞬だけキリッと顔を引き締める。

「問題ない。お茶の用意をしたまえ」

そしてデレッとした顔で紋様術を再開する。

……本当に一瞬しかもたなかったな……

だいたい、何に対しての答えなんだ、あれは。答えになってないよ、ケニード。

あたしを張り付かせたまま、レメクが重いため息をつく。

「……問題ありすぎです」

全員の心を代弁して、彼はケニードを一瞥（いちべつ）した。

「アロック卿。いい加減にしないと怒りますよ」

「はい。すみません」

即座にやめるケニード。うわ、どんな従順さだ。

……でもその撮った映像は保管するのね。こっそりと。

神業に等しい速度でいずこかへと消えた映像群。あとで複写依頼しなくては。

……そんな方法があるのかどうかは謎だけど。

「さて。……アロック卿、私がここに来た理由はもうおわかりですね？」

「うん。ベルのことだね？」

「ええ」

ぽすん、とレメクの手があたしの頭の上に乗る。正確には、あたしの頭を覆っている布の上に。
ちなみに無意識なのだろうが、半ば自動的にもすもすと撫でていた。おっおーう♪
「それを踏まえた上で、お二人には聞きたいことがあります。……ベル、あなたも離れなさい」
頭を撫でてくれているというのに、いきなり離れろと言われた！
あたしは反射的にレメクを振り仰ぐ。
「……！！」
見捨てられた子猫のような絶望的表情。
それを浮かべたあたしに、冷ややかな顔をしていたレメクが大いに怯んだ。
見つめたままで、あたしはぎゅーっと強くしがみつく。
一。二。三。
レメクの強ばった視線が、微妙にあたしから逸れた。
……勝った。
「ま、まず最初に、どういった経緯でここにいるのか話していただきましょうか」
あたしを剥がすのを諦めて、レメクがケニードに向き直った。
その様子に、執事さん以下兵隊群が勢いよく顎を落とす。
ちなみに青い尻は向こうでいっそうブルブル震えてた。
……あれって、もしかして笑いを堪えてるんじゃあ……？
「経緯というか……僕が庭先でうろうろしてたら、ベルが家から出てきたんだよね」
けろりとした顔で、ケニードが一言。
途端に、ジロリ、とレメクがあたしを睨めつけた。
うっ……
「あなたは……部屋で大人しくしてなさいと、あれほど言ったのに……」
あああああ。

怒ってる。すごく怒ってる。
思わず縮こまったあたしに、レメクは心底怒っている目で言った。
「何故外に出たんです？」
「え……あの」
「何故、外に出たんですか？」
に、二度も聞かなくても……
「い……居づらくて」
「どこに居づらいんです？」
「い……家の中……」
「……」
レメクが口を閉ざす。
目から険が消え、同時に感情らしきものがフッと消えた。
あたしはそれを見て、何故か、早く何か言わなくちゃいけない、と思った。
何か……何でもいい。彼が口を開くよりも早く！　早く！！
「だ、だって……だって、あたし」
レメクの目があたしを映す。
「あたし、どうせ邪魔なんだもの！」
「……邪魔？」
レメクが瞬きをした。不思議そうな色が目に宿り、軽く首が傾ぐ。
「何が邪魔なんです？」
「……」
あたしは言葉につまって、口をぎゅっと引き結んだ。
とっさに言ってしまったとはいえ、どう続けて言えばいいのだろうか。
思ったことをそのまま伝えればいいとは思う。けど、自分の思いすら、上手く伝えれる自信がなかった。
だいたい、どうしてあそこに居るのが辛かったのか……その理由すら、あたし自身よくわからないのだ。
ただ、寂しかった。

ただ、悲しかった。
辛くて苦しくて胸の中がぽっかりと空いたような気持ちになって、居ても立ってもいられなかった。
そこに居たいのに、逃げ出したい。
どこにも行きたくないのに、どこかに行かなきゃいけない。
どうしてそんな気持ちになったのかなんて、きっと問われても答えられないけれど。
ただ、どうしようもなく、じっとしていられなかったのだ。
（……どう……言えばいいの……？）
絶対に傍に置いてくれないとわかってる相手に。
（何を……言えばいいの？）
思いが届かない相手に。
一緒にいたくてたまらないから、どうかずっと傍に置いてくれと……それが迷惑でしかないのがわかっているのに、どうして……どうやって……
「ベル？」
そのときのあたしは、ひどく情けない顔をしていたのだろう。レメクがみるみるうちに心配そうな顔になる。それを見て、なんだか涙が出てきた。
ボワボワとぼやけていく視界で、レメクが焦った顔になるのがわかった。わかったけど、止まらない。
「クラウドール卿……」
どこか非難めいたケニードの声。
「レーメーク」
同じく非難めいた野太いオッサンの……
え？　誰の声？
思わず声のしたほうを見ると、青い服を着た熊がいた。
熊！？
「ちっこいレディを泣かすとは、紳士の風上にもおけねぇなぁ」
ふんぞりかえった大熊が言う。

独特の形をした青い服は、教会のお偉いさんが着てる服によく似てる。どう見ても特注としか思えない大きさに、びっくりしすぎて涙も引っ込んだ。

ひゃくっ、と喉を鳴らしたあたしに、レメクが慰めるように背中を撫でてくれる。

「……ルド」

そしてドーンと立ってる大熊へ、疲れたように一言。

熊がフンッと鼻をならした。

「なんでぇ、色男。熱烈に抱きつかれてオロオロしてるかと思ったら、デカイ図体生かして威圧しやがって。いったいどういうツンデレだ？」

……どういう解釈で『ツンデレ』だ？

あたしは唖然と熊を見た。

「……陛下と似た異次元思考で私を判断するのは止めてもらいたいですね。だいたい、どこをどう見ればそういう風に見えるんですか」

「んなもん誰が見たってそう見えらぁ。なぁ？　ケニード」

「うん。見えるよねぇ。すごく羨ましい。いいなぁ……」

心の底から羨ましそうなケニードの声。……どっちに対してのウラヤマシさなのかが謎だ。

（……って、）

ん？

（てゆか、ルド？）

ルドゥなんとかバルバロッサ卿？

「大……」

神官、と言うべきか、熊と言うべきか。いや、むにゃむにゃ。

大熊もとい大男を見上げて、あたしは口をもぐもぐさせた。

レメクが彼を説明するとき、敢えて熊と評したのもわかる。

なにしろデカイのだ。平均を超えた長身であるレメクよりも、さらに上に頭三つ分ほど背が高く、幅はレメクの約三倍。たぶん、こういう人を「巨漢」と言うのだろう。

本当に後ろ足で立ち上がった熊がそこにいるような感じだ。
「だいたいなぁ、おまえ、本当にちゃんと説明したのか？　このちっこいレディに。下手に動くと命に関わるぐらいの重病人なんだ、とか。外に出ると犯罪者に拉致られてどこかに売り飛ばされる恐れがあるから動くな、とか」
ぽかんと見上げるあたしの顔を覗き込んでから、熊は一人で勝手に納得顔になった。
「ほら見ろ、この呆けた顔。全然何も聞いてないって顔じゃねーか」
「……どう見ても、あなたの存在に唖然としてる顔ですが」
「馬鹿言うんじゃネェ。俺みたいな善良な一般神官にナニを唖然とするっつーんだよ。なぁお嬢ちゃん」
ごめんなさい。
心底、唖然といたしました。
引きつった笑みを浮かべるあたしに、レメクの倍はあるデカイ手がグワッと迫った。
ひぃぃッ！！　もげる！　頭がもげるッ！！
たぶん頭を撫でてくれてるつもりなんだろう。しかし、なにせ力と手のデカさが半端じゃない。
体ごとわっさわっさ動くあたしに、慌ててレメクが保護にまわった。
「壊すつもりですか！　あなたは！！　……ベル、大丈夫ですか？　頭はついてますか？」
「もげ……もげるかと思ったわ……」
変にスナップの効いた目眩を感じながら、あたしはようようそう答えた。
レメクに張り付いてる体勢じゃなかったら、もっと激しく揺さぶられていたことだろう。そう考えると恐ろしい。早くレメクに張り付き直そうと、あたしは両腕に力を込め直した。
目眩するせいで方向感覚はあやふやだが、とりあえず匂いでレメクの位置はわかる。エーイとジャンプすると、なかなかに素晴らし

い腹筋が。……フンフン……この匂いはレメクに間違いない！
暖かい手が、微妙にふらつくあたしの頭を押さえた。
正確には、頭に巻いてあった布を、なのだが。
「せっかく綺麗に巻いてあったのに、台無しですね。……これはアロック卿のものですか？」
「え？　あぁ、はい。そうです。ベルの髪を隠さなくちゃいけないと思って。僕のマフラーを貸したんです」
そう、外出にあたって、ケニードはあたしの髪を隠すのに自分のマフラーを貸してくれたのだ。柔らかくて暖かくておまけにフワフワのマフラーは、最高のターバンに変身してくれました。
……いや、用途が違うのはわかってます。
でも、道中、あたしがメリディス族だというのがバレなかったのは、これをターバンがわりにしていたからなのだ。
「……まったく。一緒にいたのがアロック卿だったからよかったものの……あなたの危機感の無さには、ほとほとあきれ果てました」
そう言って、レメクはあたしの頭を覆っていたマフラーを外す。
途端に、周囲が息を呑んだのがわかった。
ぅお！？　という声は真横から。バルバロッサ卿だ。
「髪ボロボロじゃねぇか！　もったいねぇ！」
……驚きのポイントが他と違うっぽい。
「あれ？　バルバロッサ卿は、ベルがメリディス族なのを知ってたんですか？」
そっちに驚いたらしいケニードの声に、バルバロッサ卿は「あー」と間延びした返事。
「いあ、こいつがな、まぁいろいろややっこしい状況になった上に、ややっこしい仕事もってきてな。そのときに問いつめまくって無理やり聞き出した」
意味不明。
とりあえず、こいつ呼ばわりされたレメクは、嘆息をついてマフラーを丁寧に畳んだ。

「私はごく率直に、普通に、徹底的に説明したはずですが。どこをどうすればそんな風になるんですか」
ものすごい強調したよ、この人。
「おめぇの『普通の説明』はわかりにくいんだよ。簡潔に言えって、簡潔に」
「あなたに簡潔に言うと、千パーセントの確率で正解の斜め上空に結論が飛ぶでしょうが」
……斜めな上に上空なのか。
どこまで正解と違う答えに行き着くのだろう。むしろその行き着く先がとても気になる。
まぁ、二人の意見の食い違いはともかくとして、だ。
「ず、ずるいですよバルバロッサ卿！　いつのまにクラウドール卿とそんなにラブラブに！」
そう！　そこが一番問題……てゆか問題なにか違ーッ！！
あたしが抗議するよりも早く、あたしを張り付かせたままのレメクがズカズカとケニードに詰め寄った。
「どこをどうとればそういう誤解が生まれるんですか、アロック卿」
「あああクラウドール卿、近い！　近い！　ぜひそのアップを脳内記憶回路に焼き付けぃたただだだだッ！」
即座におじ様のアイアンクローが炸裂。
……脳みそ出ちゃうんじゃないかなぁ、アレ。
しかし、レメクには悪いが、この攻撃は逆効果だ。
「……ケニード……嬉しそうな顔ね……」
彼は輝くほど至福の表情をしていた。何か別の世界の扉を開きそうな勢いだ。
……攻撃しているレメクのほうが顔色悪い。
メキメキメキ……
「ぉあああああだんだん痛みも違う感覚にぃーッ」
ケニードが異世界の扉を開けた瞬間、
あ。逃げた。

あたしをくっつけたままレメクが勇気ある撤退(てったい)。むしろ逃走。しかも速い。一瞬で最初にいた場所まで戻っている。

瞬間移動!?

張り付いていたあたしの両足がブゥンと大きく横に振れた。ををを剥がれる!　剥がれる!!

そのあたしを確保、定位置装着を済ませてから、レメクは白ヒゲ執事さんに真顔で向き直った。

「リット殿。ご主人の教育はいったいどうなっているのかと、問わせていただいてもかまいませんか?」

「も、ももも申し訳ございませんクラウドール様。若君の教育は一切合切私が担っておりましたがこればかりはもうどうしようもないというか手遅れとお伝え申し上げるしかない次第でございます」

心底恐怖の表情の老執事。この怯えぶりはいったい何なのか。

あたしがレメクを見上げると、レメクは無言で天を仰いでいた。

たぶん、胸中でこう呟いているのだろう。

(嗚呼(ああ))

……嘆く気持ちはよくわかる。

しかし、ここはフォローするべきところだ。盟友を救ってこそレメクマニア同盟。

「大丈夫よ、おじ様。ケニードはおじ様が大好きなだけで、別に犯罪者じゃないんだから!」

「……それはもしやフォローのつもりなんですか?　ベル……」

どろんとした目でレメクがあたしを見る。

向こうでケニードが悲壮な目。

……あれ?

何か言い方おかしかった……?

じゃあ、言い直そう。

「大丈夫よ、おじ様。ケニードはマニアなだけで、フェチじゃないから」

「……」

あれ？
また言い方おかしかった？
心なしかヘコんだレメクとケニードに、あたしは首を傾げる。横で青熊が腹を抱えてブルブル震えていた。
……えーと……
「あ、ね、ねぇ、おじ様？　それより、ほら、後ろの人達はなに？　それに、どうしていきなりここに？」
「……あなたがそれを私に聞きますか」
できるだけ自然に話題を変えてみせたあたしに、心の奥底から嘆息をつくレメク。
あれ？　何かよけいにブルー入ったような？
横でブルブル震えていたバルバロッサ卿が、「報われねぇー」と笑い死にしそうな顔でぼやいた。
「嬢ちゃん、そいつぁ必死で行方を捜してた男に言う言葉じゃねぇなぁ」
「行方を……？」
あたしは目を瞠った。
「……必死で……？」
レメクを見上げると、ふいと視線が逸らされる。
どこか不機嫌そうな、その顔。
「家に戻ったら、あなたがいませんでしたから」
「……」
「服もそのまま放置されてましたし、あんな格好でどこへ行ったのかと……」
あんな格好、というのは、レメクのシャツ一枚の姿のことだろう。
あたしは自分の格好を見下ろす。……何か変だろうか？
もともと、孤児院で着ていた服だって、今とたいしてかわらない状態だったのだ。今の方が生地はいいし清潔だしで、そうおかしいことは無いと思うんだけど。
……そういや、ケニードもあたしの格好見て、必死に上着を押し

つけてきたな……
寒かったから、道中だけ貸してもらったけど。
「……」
あたしは無言で、きゅっとレメクの服を引っ張った。
レメクがやや乱暴に、あたしの頭を撫でる。
「後ろの方々は、あなたの捜索にと陛下がお貸しくださった兵です」
……げ。
兵……てゆか、ちょ、ちょちょちょちょっと待って!?　王様が貸してくれた兵!?
あたしは慌てて周囲を見渡した。比喩でなく顔が青くなる。
バルバロッサ卿が何故かニヤニヤ笑ってた。
「すげぇ勢いで王宮に飛び込んできたよなぁ、レメクの旦那よぉ」
「……急いでいたことは否定しませんが、誇張は感心しませんね」
「へーぇ、取り次ぎすら無視して陛下に謁見しに行ったのに?」
「は!?　へ!?　え、謁見!?　……って、いや、それよりも、何でいきなり、お、おおお王様ッ?　そんな雲の上の人、関係ないんじゃ……!」
「いーやいやいや、お嬢ちゃん。そりゃあ間違いだ」
バルバロッサ卿がズズイッとあたしを覗き込む。あたしはちょっとのけぞった。
「確かに国王陛下つったら、雲上人だ。そりゃあ頭が高ぇわな。んでもな、ツテがあれば会えないってわけじゃない。んでもって、陛下は人捜しにもってこいのお宝を持ってらっしゃる」
……ま、まままままさか!
「身寄りもなく、行く先もなく、お金も持って無く、体は弱り切ってさらに人さらいにあいそうな女の子。……大急ぎ探そうにも、まぁ手がかりが無さ過ぎるわな?」
「……ま、まさか、そんな理由で……」
事の次第を理解して、あたしはスーッと意識が遠のくのを感じた。
だって、相手は王様だ。なのに、その王様に、よりにもよってあ

たしなんかを探すために謁見を……？
「そんな理由と言いますがね。手がかりのない状態で人を探す場合、陛下の探索球（サーチャー）が最も速く確実なんです」
そのまま倒れていきそうなあたしを、レメクが捕獲して引き戻す。
「で、でも王様まで巻き込んじゃうなんて……それに、ケニードが玄関に手紙置いてたはずよ？　ね、ねぇ、ケニード」
「うん。ちゃんと書いておいたよ。時間なかったから、『ベルの様子が変。家で事情聞く。落ち着いたら送る』っていう殴り書きだったんだけどね……。いや、まぁ、確かに手紙だけだったから、後で怒られるなぁとは思ったけど」
そう言って、ケニードはずらりと並んだ、所在（しょざい）なさ気な兵士一同を見渡した。
彼にしても、まさかこんな大事になるとは思わなかったのだろう。
「なに勝手に連れ出してるんですか！」ぐらいの叱責は当然あるとしても、まさか王様巻き込んで兵隊ひきつれて捜索されるとは……
「あー……なんだ、その手紙なんだがなー……」
バルバロッサ卿が笑いを堪える顔で声をあげる。
あれ？　レメクがなんかすごい変な顔でそっぽ向いた。小さい子が悪さをして見つかった後みたいな、そんな表情だ。
「やっこさん、それにぜんっぜん気づかなかったらしくてなー。なー、レメク？」
「「……は？」」
あたしとケニードの目が丸くなる。
そのあたし達と、全力で視線を合わせないようにしているレメク。
あたし達は再度一緒に声をあげた。
「「気づかなかった？」」
イヒヒヒ、と熊が変な笑い声をあげる。笑み崩れた変な顔で、レメクを肘で小突きまくった。
「いやもう、ぜんっぜん気づいてないでやんの。うひひひ、ありゃあちょっとぶったまげたぜ。いやいや、俺等があの屋敷に行ったの

はな、レメクが王宮に乗り込んだ後っつーか、ぶっちゃけ陛下に『おまえもう一回家をちゃんと調べろバカタレ』って追い返された後なんだがな」

「……王様に追い返されちゃったんだ……」

「……一応、陛下はちゃんと探索球（サーチャー）を使ってくださいましたよ」

レメクが慌てて事情を補足する。

「ちなみに、探索球（サーチャー）というのは、真実の紋章から作られたものです。陛下はその大本である真実の紋章を宿しておいでですので……」

「あー、紋章なんていうめんどくせぇモンの説明なんざ後だ、後！　で、まぁ、陛下がな、そう言ってこいつを家に帰して、だ。まぁ、一応観客……じゃねぇや、捜索隊としてこいつらと、途中で合流した俺様とレメクの集団で家に帰ったら、だ」

「……あなたは王宮で私を見つけるなり大喜びで見物にひっついてきたんでしょうが」

「うわ、ひでー。それが心配して着いてきてやった友達に言う言葉か？　なぁ、嬢ちゃん、どう思うよ？　ひでぇよな。ひでぇということで、まぁ、そのレメクの屋敷を見たら、だ」

熊は周りの返事をまたずにガンガン話を進めていく。

……あたしはどういう態度をとればいいのだ、一体……

「なんと！　そこには泥棒でも入ったのかと思うような、恐るべき惨状の屋敷が！」

レメク、沈黙。

……あ。そっぽ向いた！

「あっちの部屋もこっちの部屋も埃まみれなのは、まぁ、いいけどよ。なんで本棚からタンスから全開で服も散乱して風呂場も開けっ放しなんだ？」

「ぇえ？　おじ様の寝室とトイレとお風呂と台所だけは綺麗なはずよ？　もう整理整頓しまくってて、あたしの行動範囲内だけ多少散らかってるぐらいで」

その散らかりも、レメクに見つかり次第直されてしまうので、い

つも部屋はピッシリスッキリなのだ。そんな強盗が入った跡みたいな状態、普通じゃあり得ない。

あたしの答えに、バルバロッサ卿は口をニヤァと笑いの形にひんまげた。

……なんか、どっかの巨乳魔女と似たような笑みだ。

「そりゃあ、誰かさんが誰かさんを探すために、家中捜索した跡、てぇこったよな？」

「あ」

あたしは口を開けたまま固まってしまった。

そんな、まさか、レメクが？

あたしはレメクを見た。ものすごく一生懸命こっちを見ないようにしているレメクを。

「玄関に、ちゃーんと手紙が置かれていたのに、それすら気づかないぐらい焦って探してたんだよなぁ？」

バルバロッサ卿の声に、レメクが顔がちょっと歪んだ。嫌そうな顔がこちらを見る。

いや、厳密にはバルバロッサ卿を。

「保護していた子供が突然いなくなったのです。おまけにいつ倒れるかもわからない状況だったのですから、探して当然でしょう」

「血相変えてな」

「……」

熊の指摘に、レメクが沈黙。

あたしは驚きすぎて、声も出なかった。

（……レメクが）

探してくれた。

家中荒らすぐらい慌てて。手紙にも気づかないぐらい焦って。王様にまで助けを借りにいくぐらい、一生懸命に……

（……どうして）

ぎゅっと強く唇を噛んだ。

（ねぇ、どうして？　レメク）

そうしないと、何か意味のない言葉が零れそうだった。
（レメクは、あたしが迷惑なんじゃないの……？）
いなくなったほうがいい子供じゃないの？
早く手放したい邪魔者じゃないの？
（少しは……心配……）
してくれたのかと、思った瞬間に、ぼろっと何かが目からこぼれ落ちた。
熱くて冷たくて、流れていく滴のようなもの。
目頭がジワッと一気に熱を持って、目の前の全てが水の中に沈んだ。何度瞬きしても、いっこうに治らない。
「……ベル？」
息を呑む気配と一緒に、レメクがあたしを覗き込んだのがわかった。ぼやけた視界の向こうで、黒い人があたしの頬を撫でる。
いつも暖かくていい匂いがして優しいレメク。厳しいことを言うのは、あたしのためだってわかってる。
だから、どんな時のどんな言葉も、本当の意味ではいつも優しい、大好きな人。
「あ、あたし、邪魔な子じゃ、な、ない、の、かな？」
「……何を……」
「だ、って、おじ、様」
ひぐっ、と喉が変な音をたてた。必死で息継ぎをしているのに、おぼれてる最中のように息がしにくい。
「あたし、森、連れて」
目が熱い。
「は、早くいなく、なっちゃ、えって、お、思」
……ダメ。
声が出ない。
体ごとひしゃげたみたいに。
いつのまにか鼻も出てて、もうぐしゃぐしゃになってる。頭も熱くて、ちゃんと言いたいのに、上手く言えない。

たぶん、あたしは今、ものすごい最悪な顔しているのだろう。レメクがいい匂いのするハンカチであたしの顔を押さえたのも、きっと見るに見かねてに違いない。

「落ち着きなさい、ベル。あなたは一体、何を言ってるんですか」

ぐいぐいと顔を拭われて、あたしは「ぷはっ」と大きく息を吸った。

けど声が出る前に、ぼろぼろと零れる涙で塞がれる。

「お、おい、嬢ちゃん……」

「ベル……」

バルバロッサ卿とケニードが、驚いたようにあたしの近くにしゃがむ。

……言って……いいだろうか？

いや、言ってはいけないだろう。

けれど、ああ、けれど、ねぇ……

ここで言わなければ、今度いつ、ちゃんと言うことができるだろうか？

どうしたって受け入れられない言葉であっても、あたしはまだ、彼に何も伝えていない。

ダメだと拒絶されるのがわかっていても、それでも、あたしだって言いたいことがあるのだ。

それがどれほど身勝手で、我が儘なことだとわかっていても。

「あ、あたし、も、森、行きたく、な、い」

ぎゅっとレメクの服を握って、あたしはそれだけを必死で言った。

「どこにも、い、行きたく、ない！」

困られることはわかっている。

嫌がられることも。

もしかしたら、あきれ果てられるかもしれないことだって。

だけど、だけどもうダメだ。我慢できない。我が儘でいい。良い子じゃなくていい。嫌なヤツだと嫌われても、せめて、せめて……

せめて、この気持ちだけは伝えたい。

「おじ、様、の、そ、傍がいい……！」
あたしがもっと大人だったらよかった。
もっともっとちゃんとしたレディだったらよかった。
だったら、ねぇ、少しは考えてくれた？
お嫁にしてもいいって、思ってくれた？
まだそこまでいかなくても、少しはちゃんと、まともに一人の女として、向き合ってくれたかな……？
「ベル……」
レメクが呟くようにあたしの名を呼んだ。
どこか、呆然とした声だった。
……呆れられたのかも知れない。なにを言っているんだ、と。これ以上世話をかけさせる気かと。そう思われたに違いない。
けれど、レメクの手はあたしを突き放すことはなかった。
その手があたしから離れることも。
「……あなたにとって、掟は、不幸では無いのですか？」
暖かいあの手が、あたしの頬をぐいと撫でる。零れ続ける涙を拭うように。
「あなたにとって、辛いことでは……無いんですか？」
「辛い、なんて、無い！」
あたしは言った。自分の思いのままに。
「ぐ、偶然とか、ウンメイとか、そ、そんなんで、最初があったと、し、しても！」
あの日に出会ったことや、助けてもらえたこと。
掟に触れてしまったこと。
それらが偶然であっても、または運命であっても、それはもうどうでもいい。
大事なのはそれではない。
大切なのは、それではなくて、
「あた、しが！　あた、しがそれ、がいいって……！」
他の誰でもなく、

「それがいいんだって、あたしが決め、たんだもの！」
あたしが、それを望んだこと。
レメクがいい。
レメクじゃなくちゃ嫌だ。
わかるだろうか？　その気持ちが。
レメクだからこそ、掟にこだわるあたしの気持ちが。
ねぇ、それを、好き、って言うんじゃないの？　レメク。
「ほ、他のとこ、い、行きたく、な、い」
あとはもう、言葉にならなかった。
ただ、我慢していた声が全部出た。
言葉として意味をなさない声も。全部が全部。体の奥底から喉を通り、口からこぼれて、ずっとずっと出続けた。
「ベル……」
「い、行きたくないい！　やああ！」
「ベル、落ち着きなさい。すぐに行くわけじゃありませんから」
「やあああ！」
「……ベル」
ほとほと困り果てたようなレメクの声が、耳のすぐ近くで聞こえる。
それがどうしてなのか、あたしには全くわからなかった。
いつ抱きついたのか自体わからなかったし、いつ抱きかかえられたのかもわからなかった。
ただいつのまにか抱っこされた状態で、延々わんわん泣き続けていた。
暖かくて寂しくて居心地が良くて悲しくて。レメクの腕の中はそれがいっぱいつまっていて、涙がいっこうに止まらない。
「そこはなー、普通なー、あっついベーゼとかで無理やり黙らせるのがセオリーなんだけどなー」
「しっ！　バルバロッサ卿！　今やったら犯罪でしょう、それ。だいたい、あの途方にくれまくった超貴重なクラウドール卿の表情が

台無しになっちゃうじゃないですか！」
「まーそうなんだけどなぁ……あああもうあと十年ぐらい年くってたらめちゃめちゃエエカンジの雰囲気になるっつーのに」
「今でも充分エエカンジですよ。あの、乙女心がさっぱりわかってなくてどう答えていいかわからない状態のクラウドール卿なんて、もう永久保存版映像ですよ」
「……外野。うるさいですよ」
小さく聞こえてくる声に、レメクが超絶どす黒い声で威嚇する。
そうしておいてから、やんわりとあたしを抱きしめてくれた。
「ベル。とにかく、今は落ち着いてください。あなたの体は、本当に弱り切っているんです。今の精神状態は、体にかなりの負担を強いているはずです」
「……おーいそこの朴念仁。その前にちゃんと問題解決しとけー……」
ちょっと遠めの声で、熊が黒い魔神に忠告する。
……睨まれでもしたのか、一秒とたたずに沈黙した。
「森に行くことについては、後でちゃんと話しあいましょう。森に行くこと自体をやめるわけにはいきませんが、その……私は別に、あなたをそのまま森に置いていくつもりではありませんから」
ピタッと。
あたしの時間が止まった。
声も涙も呼吸も止まった。
「……ベル？」
ヒュッと止まっていた呼吸が戻る。
あたしは、大きく瞠った目でレメクを見た。
いつのまにかすぐ近くにある、その人の顔を。
「捨てて……行かない……？」
そのときのレメクの表情は、そう、最初に会ったあの日、ほっぺたに怒りの一撃を叩きつけたときと同じ顔だった。
「なぜ……捨てて行くなどと……」

「だって、あたし、おじ様の……邪魔にしか、なってないし。おじ様、森に行くために、問題を早く、一生懸命、解決しようとしてたし」

だから、てっきりあたしを早く森に連れて行って、置いて帰りたいのだと……

「……違う、の？」

唖然としたレメクの顔に、ようやく理解の色が宿る。

「あなたは……」

どこか呆けたような声でレメクがそう呟いた途端、

いきなり、レメクの真後ろの景色が歪んだ。

そして、何か異様な形のモノが唐突に現れ、

「こんのバカタレがーッ！！」

スパターンッ！

怒声と、強烈なハリセンの音を響かせた。

１０　究極の魔法

その瞬間、いったい何が起こったのか。
たぶん、説明はこの一言ですむだろう。
人がいきなり沸いて出た、と。
突然の出現と、それと同時に行われた攻撃は、あたしにしてみれば全く予想外の出来事だった。そのあまりの唐突さに、声をあげることもできない。
しかし、攻撃をくらった当の本人は、別段驚いていない様子。
ハリセンをくらったせいで視線が下に下がっていたレメクは、ただ心底嫌そうな顔をしていた。
そして顔を上げて一言。
「……なにをするんですか、いきなり」
「いきなりとは何だ！　この馬鹿者が！」
どこかで聞いた声が、レメクの抗議を勢いよくはねのける。
あたしは平然としているレメクに驚き、そして相手の声に呆然とした。
（……な、なんか聞き覚えがあるんだけど……）
背中にちょっと冷や汗が浮かぶ。
なにしろ、この声には聞き覚えがある。ありすぎる。
そういえば、あの時もこんな風に、唐突に現れて魔法のように消えたんだった。
あたしは声のするほうを見て……

（……）

……思わず天を仰いだ。
そして思う。
（嗚呼）

これで何度目だろうか。
このパターンで、予想外の闖入者、もとい珍入者を見るのは。
「フッ！」
あたしが――というか、全員が凝視する中、その人物は何かの劇のようにポーズをつけた。
……いやもう、本当に何度目だろうか……
「乙女が涙を流す時！」
シャキーン！
「常に私が現れる！！」
バーンッ！
「正義の味方、美女仮面がな！」
バッフーンッ！
そんな効果音が聞こえそうな勢い。
格好良く決めポーズをつけた謎の美女仮面の動きにあわせて、少ない布でかろうじて全開を免れているデカチチがバインバインと景気よく揺れた。
何故かレメク以外の男性陣が、揃いも揃って前屈み。
……何か悪辣な魔法でもかかってたんだろうか？
涙でぐちゃぐちゃのあたしの顔を拭きながら、レメクだけが心底どうでもよさそうな目をしている。
「……美女仮面というより、爆乳仮面だと思うわ、アウグスタ……」
彼らの身に一体どんな作用がおこったのか。
気になりつつ、あたしは全然謎じゃない仮面つきの爆乳美女にそう告げる。
男性陣で唯一真っ直ぐ立ってるレメクは、あたしよりももっと容赦がない。
「むしろセクハラクィーンで十分です」
あたしは心から納得した。
なにしろ、唐突に現れたアウグスタの格好は、まさにそこに居るだけで超セクハラ。

一言で言うなら、そう、変態。
抜群の、という言葉すら色あせるバボーンッキュッズバーンッなプロポーション。
それを小さな小さな布がちんまりと覆っている。
たぶん全部の面積を足しても、あたしのパンツ一枚分程度。
……これを変態と呼ばずして何と呼ぼう。
前の格好もスゴかったが、今のこれはあのときとは次元が違う。
どう控えめに言ってもヘンタイだ。
「貴様等の目は節穴か？　この仮面が目に入らないとは！」
あたし達の当然の意見に、アウグスタが憤然と抗議した。
いやまぁ、確かにその顔には、深紅の仮面がついている。
旅芸人の劇で、身分を隠した主人公（たいてい王子様）とかがよくつけているアレだ。
しかし、彼女の場合、真に隠すべきは顔ではない。
乳だ。
「でもアウグスタ……その胸がある限り、全然正体が謎じゃないわよ？」
「何を言う。仮面をつけた相手は！　例え正体がわかっても！！『謎』で通すのが常識だろうがッ！！」
「え？　えぇえ！？　……そ、そういうもんなの！？」
あたしはレメクに視線を向ける。レメクは人形のような無表情でツイッと視線を逸らした。
「……私はそれ以前に、なぜあなたがあのイキモノと面識があるのかが気になりますが」
応でも否でもないらしい。
それにしてもイキモノって……
「レメク。貴様。あとで王宮へ来い」
「謎のイキモノに文句言われる筋合いはありません」
ぷいっとそっぽを向くレメク。
あんまり仲はよくないのか。

いや、むしろ遠慮無いほど仲が良さそうにも見えるのだが……
（……ん）
なぜだろう。
今、なにか、心がザワッとした。
「……」
あたしは何かを言いかけ、ややあって口を閉ざす。
かわりに、ぎゅっとレメクにしがみついた。
「ベル？」
レメクが気づいてあたしの背を撫でる。それはとても嬉しい。嬉しいのだが……
「あー、ベル。こら、小娘。おまえ、私はおまえの味方だっつったのに、全然信用しとらんな？」
胸の中のモヤモヤがとれないあたしに、変態仮面が呆れ声で言う。
あたしはチラッと彼女を見た。
視線の先で揺れる素晴らしい乳。なんて羨ましい。
「……あなたは一体、どういう誤解を与えてくれたんですか？」
しゅーん、と心の中のいろんなものが折れたあたしの頭を、レメクが慰めるように撫でた。
「レメク……貴様な……自分の朴念仁ぶりを棚に上げて……」
「朴念仁……？　あぁ、そういった関連につきましては、確かに不得意なものとして自覚しています。……ですが、それとこれとは話が別では？」
「どこが別だ！　むしろ本件だ！」
「本件？」
レメクはしみじみとアウグスタを見て首を傾げる。
「どういう風に解釈すれば、本件に？」
「……いや、我々が決して互いを異性と見ることはないという意味においては、確かに全く本件では無いんだが……。もういい、お前にその手合いのことを解れと思ったのが間違いだった……」
アウグスタがガックリと肩を落とす。

「それで、いったいどういう誤解を与えてくださったんです？」
「……だから、なんで私が悪者なんだ。くっ……！　貴様は後で絶対シメるからな！」
「僭越ながらお相手つかまつりましょう。全力で撃退させていただいてもかまわないんですよね？」
「……撃退前提な上に断定か。まぁいい。久々にガチンコ勝負といこうじゃないか」
二人の間で急速に得体の知れない気配が凝縮しはじめる。
あたしは思わず顔を上げ、おろおろと二人を見比べた。いきなりなんだ、この展開は。もしかしてこの二人、むちゃくちゃ仲が悪いのか？
恐ろしい気配を感じ取ってか、ケニードが慌てて二人の間に入る。
「ま、まぁまぁ、二人とも。そう熱くならずに。ね？　ほら、ベルだって怖がってるじゃないですか」
「そうそう。街が壊れるから、人外魔境の戦いは郊外でやってほしいなー、と一般市民の我々は思うわけです」
バルバロッサ卿も巨体を生かしてのっそりと立ちはだかる。
あたしは二人を見た。
「……で、どうして二人とも前屈みなの？」
未だ前屈みな二人を。
あたしの当然の問いの答えは、異様なほど緊迫感のある沈黙。
なぜか男一同があたしから視線を逸らした。
あたしは視線をアウグスタに固定する。
「どうして？」
「待て。なぜ私に問う？――　まぁ、いい。ベル。周囲をよぉうく見渡せ」
あたしは見渡した。前屈みの一同を。
全員、顔がお酒を飲んだ人のように赤い。
アウグスタに視線を戻すと、誇らしげに胸を張られた。
景気よく弾む巨物が二つ。

「これが男として正しい反応だ！」
どういう意味だろう？
あたしは正しい反応をしていないらしいレメクを見る。
レメクはスッと視線を避けた。
「おじ様？」
あえて覗き込むと、レメクは一度ツララのような視線をアウグスタに送った後、あたしを見て、
なんと！
にっこりと微笑んだ！！
「あなたはまだ、わからなくていいことですよ」
「はい！　おじ様！！」
理由なんかもうどうでもいい！
その笑顔で全てオッケイだ！！
「「……タラした……」」
アウグスタとバルバロッサ卿が呆然と呟く。
他一同はなぜか紅潮から一転、顔面蒼白になっていた。
（……あれ？　姿勢が前屈みから戻ってる）
ということは、レメクがアウグスタの謎魔法を打ち破ったということに！
「すごいおじ様！　みんなもとに戻ったわ！」
「それはなによりですね」
なぜか冷ややかに周囲を見渡すレメク。
あたしは輝く笑顔で我が同士を見た。
「ケニード！　今の永久保存画像は！？」
しかし、同士は愕然と陶然と絶望をないまぜにした表情で叫んだ。
「だ、ダメだベル！　あまりにも奇跡すぎて脳内保存が限度だったよ！」
……奇跡とまで！？
いや、ならば「だからこそ」だ！
「ばかっ！　マニア失格よッ！！　てゆか、今度あたしにその紋様

術を、どうか！　どうかご教授を！！」
「もちろん！」
「しなくていいです！　むしろしないでください！！」
レメクが焦る。
「ベルにそんなものを伝授したが最後、いったいどんなものを撮られるか……！」
それ以前に、あたしがそんな高尚なモノをマスターできるかどうか。
……自分が言うのもなんだが、すこぶる怪しいと思うのだが。
「そういうことならば、私も協力を惜しまんぞ」
なぜか『謎の乳仮面』がズイッとあたしに迫る。
即座にあたしを自分の体ごと撤退させるレメク。
「あなたはまず、人としての常識を身につけてください。――だいたい、いつこの子を毒牙にかけたんです？　迷惑な」
「たいがい失礼だな貴様は！　おまえの寝室で可哀想にしてたのを慰めてやっただけだ！」
その瞬間、
周囲から驚愕の視線がレメクに向けられた。
「私の寝室で……？　あの服を抱えて泣いていた時ですか？」
どよめく周囲。そしてツララのような視線がレメクに。
え……な、なんで？
「……お前……いや、人のことは言えないが、どうしてそう誤解を招きかねない言葉を自分で……。というか、服抱えて泣いてたってどういうことだ？」
頭を抱えたアウグスタに、レメクは首を傾げる。
「着替えを持ち合わせていませんでしたので、フェリシスの主人からベル用の服を購入したんです。失踪前、それを抱きしめて泣き寝入りしていましたので」
「……ほう」
アウグスタがレメクとあたしを見比べる。

あたしはなぜか焦って、あわあわと視線を彷徨わせた。
アウグスタがにゅっと口の端を持ち上げる。
「ふふん？　……まぁ、だいたい、理由はわかった」
「本当ですか？」
途端に驚くレメクに、アウグスタは呆れかえってため息を一つ。
「……お前は本当に朴念仁だな……」
そしてあたしに視線を向けた。
「……なぁ、ベル。この人の形をした異生物には、きちんと言語という手段を駆使して思いを伝えないと、全然、全く、これっぽっちも！　気持ちが伝わりはせんぞ」
……うん。そう思う。
「見てのとおり堅物も堅物で、煮ても焼いても柔らかくならない自然岩石みたいな男だ」
「……そうね……」
「納得なんですか」
しょんぼりと頷いたあたしに、ちょっとショックを受けた顔でレメクがぼやく。
「おまえは不得意分野を勉強しろ、バカタレが。だから泣かせるハメになるんだ」
「まるで見ていたかのように言いますね。というか、やはり『視て』いたわけですね？」
「もちろん見ていたとも。門の紋章と真実の紋章でバッチリだ！」
「……それを人は『覗き』と言うんですよ……」
レメクが疲れた声で呟いた。もちろん、アウグスタの輝く笑顔は薄れない。
「それで？　そして頃合いを見計らって現れた、ということですか？」
アウグスタ、こっくり。
全て謎が解けた、という顔のレメクに、あたしはきょとんと瞬きをした。

そういえば、アウグスタがどこからどうやって突然現れたのか、まだ全然説明してもらってない。
「ねぇ……で、結局、アウグスタはどこから現れたの？」
「アウグスタでは無い。美女仮面と呼べ」
「じゃあ美乳仮面、どうやっていきなりここに現れたの？　どこかでこっそり登場を待ってたにしても……その格好で？」
その異様に露出の多い……否、異様に隠れている部分の少ない格好で？
あたしの当然の疑問に、アウグスタならぬセクハラ仮面はオオカミの微笑で答えた。
「門の紋様をお前に刻んでおいたからな。忘れたか？　私の門の紋章の力を与えただろう？」
「門の……紋章？」
言われて、あたしは首を傾げる。
「紋章って、あの紋章？」
お伽噺とか、伝説とかで語られる、紋様術の最上級？
「そうだ。紋様の親玉だ」
「……身も蓋もない説明ですね」
ニヤリと笑ったアウグスタに、レメクが嘆息混じりに呟く。
「わかりやすくてよかろう」
「……敢えて即答は避けさせていただきます」
そのやりとりに、あたしは自分のおでこを手で押さえた。
そういえば、なんかデコチューされた時にそんなこと言われたような……？
あたしの動作を見て、アウグスタが笑う。
「そう、それだ。おまえの身に危険が迫ればいつでも現れられるよう、健気な私はいつでもスタンバイしていたわけだ」
その格好で。
あたしはちょっと遠い目になった。
「……アウグスタ、今、冬なんだけど……寒くない？」

「甘いな、小娘。この水着はな、炎の紋章術を駆使して作られたものなのだよ」
水着でしたか。
……てゆか冬に水着かい。
炎の紋章術に相応しく、テラリテラリと輝く水着。まさに炎のごとくその色をゆらゆら変える小さな布地達に、あたしは一層遠い目になった。
「この煌めく炎の揺らぎがその証拠。ふふふ、なかなかに美しい模様だろう！」
「模様というよりもモザイクですね」
「やかましい！　レメク。おまえは後で本当に王宮に来い！！」
速攻でレメクにつっこまれて、アウグスタがキレる。
レメクは無視して、なぜか可哀想な子を見る眼差しであたしを見た。
エ。その眼差しはナニ……？
「ベル……本当に、どうしてあんな危険なイキモノと関わってしまったんですか……？」
「え、いや、あの人いきなり現れたんだけど」
「そうでしょうね……わざわざ結界を強くしている所ばかり選んで侵入してきますから。……あなたを看病するのに、他に部屋が無いからと、無精した私の落ち度ですね」
深く嘆息をつくレメクに、何故かアウグスタが胸を張って大いばり。
「フッ！　結界が強い所を破って侵入するのが、一番楽しいからな！」
「どういう意味で一番楽しいというんですか」
「こう言うために決まっているだろう！――　やーいお前の術なんか簡単に破れちゃったぞバーカバーカ」
心底楽しそうに言うアウグスタ。
レメクが絶対零度の眼差しになった。

「そのわりに、風呂場にだけは絶対に入ってこれてないですよね」
「あそこの罠はえげつなさすぎるんだ！　なんだあの、触れれば五日間胸がぺったんこになる呪いは！」
「……試してはいるんですか……」
げっそりとした声のレメク。あたしはアウグスタをじっと見つめた。
「……アウグスタ。おじ様の裸を狙うなんて、あたしの味方って言うのは、やっぱり嘘だったのね！？」
「馬鹿者。それとこれとは話が別だ！」
「どう別なの！？」
「嫌がらせと欲情は違うということだ！」
「わかった！　それなら問題ないわ！」
力強く和解したあたし達に、ぎょっとなったのはレメクだ。
「どこが問題ないんです！？　――そして、ベル！　あなたはどこでそんな単語を覚えてきたんです！」
「宿のおねーちゃん達からイロイロな知識を」
「仕入れないでください！」
えー。でももう仕入れちゃってるものはどうしようもないと思うの。
あたしも不思議なんだけど、物覚えの悪いあたしにしては、実に素晴らしい情報量だと思うわよ？
「……あ、でも、前屈みの原理はまだ聞いてないわ」
男の動作イロイロなら、おねーちゃん達が大喜びで教えてくれていたのに。やはり、あれはアウグスタが魔女の魔法を使ったか何かなのだろうか？
そんなことを考えていると、レメクが恐いぐらいの真顔で言った。
「それは、まだ、知らなくていいことですから」
「あ、えぇと、はい」
な、なんでそんなに力一杯？
意味がわからずあたしは首を傾げる。すると、アウグスタがくね

くねと近寄ってきた。
「レメクよ。知識を得ることは悪いことではあるまい。まして人として知るべき知識であるのならなおのこと。無知であることが危険を招くこともあるのだ。さぁ、大人として教授してやるべきだろうむしろやるべきだ、さぁやりたまえ！」
歌うように、この上なく邪悪な笑みをたたえた爆乳魔女が言う。
その底意地の悪そうな美しい笑顔が素晴らしい。
「では、大人の女として、あなたがお教えください」
反撃とばかりに、レメクがあたしをアウグスタへと向き直らせた。
そしてあたしの両脇に両手をさしいれ、猫でも抱えるようにして、アウグスタに差し出す。
あたしは両手両足をプランプランさせながらアウグスタを見上げた。
なぜかアウグスタが怯む。
「……な、なにかな。この妙な罪悪感は……」
ぷらんぷらん。
「くっ……！　つぶらな眼差しで私を見るな！！」
……あたし、別に何もしてないんだけどな……
レメクを見ると、レメクまでもが怯む。
「……」
ぷらんぷらん。
「……ま、まぁ、この問題は、そう……おいおい、時間が解決するということで」
「そ、そうだな。それがよかろう。すまんな。詮無きことを言った」
「いえ。そういうこともありますから」
……だから、あたし、別に何もしてないんだけど？
彼らの心に、どういう変化があったというのだろうか。
持ち上げられていた体を降ろされて、あたしはレメクにペタンと張りつく。
二人だけで理解しあっているのが、ちょっとくやしかった。

「んんん。えぇと、なんだったかな。どこまで話したか……。この衣装が炎の紋章を使って作ったのは話したな……」

どうやら前屈み現象はよほど話題から外したいものであるらしい。会話を元に戻そうとするアウグスタに、あたしはちょっとしょんぼりしながら問うた。

「門の紋章とか、紋様の親玉とかいうのは？」

「あぁ、そこだったか。門の紋章というのはな、これだ」

アウグスタはそう言って、くるっと後ろを向く。

ほとんど丸出しな美尻の上、やや腰の下あたりに、広げられた両翼のような模様があった。

「これが門の紋章だ。おまえに与えたのは、この紋章の加護だ。本体を持つ私は、力を与えられた者のいる場所なら瞬時に、空間移動することができる」

あたしはなんとなく納得しながら、首を傾げた。

「えぇと、つまり、あのデコチューで、あたしは紋章の力ってのをもらって、アウグスタはあたしのいる所なら、どこにでも出現できるようになってたってこと？」

「そうだ。おまえは、私を呼び出す力を得たことになっているからな」

「？」

意味がわからず、あたしは首を傾げた。

「紋章と、『紋章の加護』を与えられた者は、いわば親子のような間柄なのですよ」

そんなあたしに、レメクがレクチャーをしてくれる。

「紋章は、任意の相手に『紋様』として力を与えることができます。炎の紋章ならば、相手には炎の紋様が刻まれ、炎の紋章と同等の強力な紋様術を使うことができるようになります。ゆえに、親子のような関係と説明できるわけですね。ただ、これらは紋章によって与えられる力の内容が変わります。例えば、水や炎なら、親の紋章と同じような内容の能力です。ですが、今回の門の紋章のように、特

殊な紋章の場合は、相手に与えることのできる内容が、親の紋章の力とは異なってくるのです」

どんなふうにだろうか？

「門の紋章は、任意の場所に所持者を瞬時に転移させる紋章。あらゆる場所への門を開くということで、その名をつけられた紋章です。ですが、この紋章の所持者から、力を『与え』られた者は、親である紋章と同じように自身を瞬間移動させることはできません。彼らができるのは、紋章を持つ者を『召還』することだけです」

「えーと……つまり、アウグスタを呼び出せる、ってこと？」

「そうです。……ただ逆に、門の紋章を持つ者は、力を与えた者を呼び出すことはできません。自分からは行けるのですがね。ただ、居場所などはどんなに離れた場所であっても察知することができます」

「へぇ……」

感心して頷いていると、レメクがアウグスタをジロリと睨んだ。

「……つまり、あなたは、私がお会いした時にはすでに、ベルがアロック卿の所にいると知っていたわけですよね」

「あぁ、知っていたぞ。だが、ケニードが手紙を置いていったのも、真実の紋章で『視て』知っていたからな。あの場合は、家に帰したほうがいいと思って追い返したのだ」

「……」

「何故睨む？　どうせ、あのタイミングでおまえがベルを連れ戻しに行ったとしても、失敗して終わっただけだろうさ。なにしろ、おまえは可哀想な朴念仁だからな。乙女心のわからん男に、不安を抱えた乙女が慰められるものか。まだケニードのほうが適任だったということだ」

フン、と鼻息を荒くするアウグスタに、レメクは反論せずに嘆息をついた。

アウグスタは頭を掻きながら口の端をひんまげる。

「確かに、ケニードはメリディス族のことになると目の色を変える。

ヨワヨワ状態の小娘を預けるのは適さないと思うだろう。なにしろ、そのマニアぶりをよく知っているのだからな。不安にも思うだろうさ。だが、一度頭を冷やせば、頼りになることも知っている。だから、ケニードからの手紙を発見して、ベルを確保してくれていることに安心したんだろうが。ケニードなら、メリディス族に効く秘薬も多数持ち合わせているしな」

「……」

「安心して、ちょっと余裕がでた。屋敷に行ってみると、なにやら異様な盛り上がりでベルも元気になっている。あぁよかった、様子が変だったのも治ったようだ……そんなところじゃないのか？　おまえの脳みそで出来る『理解』は」

アウグスタの真っ直ぐな目を、レメクは怯まず見返した。

あたしはアウグスタを見る。仮面の奥で、爛々と目を輝かせた魔女を。

衣装は変態だが、この時の彼女は、恐ろしいほど威厳があった。

「おまえは阿呆だぞ、レメク。女が不安に思う時はな、男の心がわからん時だ。だいたいな、あの状況下で、どうして小娘が安心して体を休められる？　自分は働かなくてもチヤホヤしてもらえると思っているような、馬鹿貴族の馬鹿娘ならそんなこと思うかもしれないがな、この小娘はどういう状況を生きてきた娘だ？　どういった場所で、どういう風に生きてきた娘だ？　自分で働いて、自分を守る。そうしないと生きていけない境遇の娘だろうが。身動きがとれないことは、即、死につながる環境下の人間だろうが。そんな人間が、期間限定の保護に、どっかりと乗っかってのんびり休んでいられると思うか？　保護を受けられている間に、少しでもマシな状況下の間に、ちょっとでもいい稼ぎをみつけて、これからの自分を養うために働こうとするのが『普通』だろうが。永久に保護してもらえるのならともかく、そんな確証も無いのに。どうしてじっとしていられるというのだ」

いいか、と鮮やかな黎明の瞳を輝かせて、アウグスタが胸を張っ

た。

「猫がひっくりかえって腹出して寝れるのはな、ここが自分の家だ、自分を守ってくれる人がいる家なんだ、と安心しきっているからだ。おまえは、この小娘を安心させてやれたか？　安心できるような言葉をかけてやれたか？　できんだろう、お前には。自分がいるからもう安心してもいいんだなどと、女に言葉をかけてやれるような男では無いからな」

情けない、と吐き捨てて、アウグスタは髪をかきあげた。

「いいか、レメク。この小娘はな……私達が知っている、あの人とは違うんだ。ちゃんと自分で考え、自分で選んで、自分の望む道を進もうとする娘だ。掟のいいなりになって、自分で自分を苦しめるような儚い精神なぞ、これっぽっちも持ち合わせておらん！」

……胸張って断言されちゃったよ……

いや、間違ってはいないけど。

「他でもない、自分の意志でおまえを選んだ娘だ。おまえがどういう結論を出すのかは、おまえの勝手だがな。他人と混合して、この娘の意志を無視するな。……とりあえずお前は、自分が心から愛されているのだということをちゃんと理解しろ」

レメクが目を丸くしたのが見えた。

そのままあたしを見る。

……どこまでも理解してくれてなかったことに、あたしはなんとも言えない気持ちになった。

「阿呆」

アウグスタがにべもなく冷たく言い放つ。

「冷静さを失うぐらい大事にしてる娘なら、ちゃんとそれなりの言動で愛情を示しておけ。バカタレが。だから不安がって泣かせるんだ」

長くて綺麗な手が伸びてきて、ひょいとあたしを抱きしめる。

「ぎゅむんっ」

「可哀想になぁ、小娘。こんなに一生懸命懐いてるというのに、こ

の変態は精神不安を取り除かずに育成計画を進める気なんだぞ」
「あなたに変態呼ばわりされる覚えはありません。だいたい何ですか、その育成計画というのは」
「幼い娘を自分好みの女に育てる、男の一大ロマン計画を私が知らないと思っているのか！」
「そんな計画を私に押しつけないでいただきたい！」
「なにを言う！　美しく育つことが確約された幼女だぞ！？　命の恩人におさまり、うまくいけばこのままウハウハ生活に突入！　一つずつ丁寧にいろんなことを教えていけば、末は理想の女性！　これをフイにするというのか！？　貴様にはナニがついておらんのか！」
「あなたこそそれでも女性ですか！！」
「この胸が男に見えるとでも！？」
「胸があるからといって……！」
言いかけて、レメクがあたしに気づいた。
爆乳に窒息死一歩手前なあたしに。
「ベル！！　生きてますか！？」
慌ててガッポリはまっていた頭を引き抜かれる。死線からの脱出。
そして気道確保。
……てゆか遅いよ！！
「……お花畑が見えたわ……」
「す、すまんな、ベル。おまえはちっさいから圧迫も早いんだな……」
「どんな凶器ですか、それは」
レメクが実に冷ややかに巨乳を見下す。
そうしておいて、ダランとしたあたしの体をひょいと抱き上げた。
「ただでさえ死にかけの体だというのに……」
お。
おおお。
おおおおお！

お姫様抱っこ！　お姫様抱っこ！！
「……何か、元気になりましたね」
体はぐんにゃりだらりのままだが、意識は花が飛ぶほど急上昇。
それを素早く感知して、レメクは嘆息をついた。
「後で健康茶を送っておきますよ、クラウドール卿。それなりに効いてたみたいだし」
どうやらレメクとアウグスタの騒動を傍観していたらしいケニードが、苦笑含みにそう言った。
その手には、なにやら恐ろしい量の羊皮紙がある。
……いや、予想はつくんだけど。絶対、アウグスタとのやりとり中のレメクの映像だ。
……ねぇ、ケニード。あたし思うんだけど。レメクがケニードに冷たいっていうか、一歩引いてるのって、そのストーカー行為のせいじゃないかなぁ……？
嫌がらせされてるって思われてるみたいだし。
「ありがとうございます。アロック卿。……その手の写真は、後で必ず破棄してくださるんですよね？」
「え。断定？　いや、これはその、非公式記録ということで保管を予定して……」
「必ず破棄してくださるんですよね？」
強調された。
……それにしても、そうか、複写紋様術（トレース）でとった映像って、シャシンっていうのか……
「捨てるなら、あたしが欲しいなぁ……」
「猥褻物陳列罪の写真が欲しいんですか？」
「え。いや、アウグスタじゃなくておじ様が写ってる部分のほうなんだけど」
「……マテ。貴様等。なんで猥褻物陳列罪で私を示す」
……自覚ないんだろうか。
「強制猥褻罪でも、強制セクハラ罪でも何でもいいですが、とにか

く、そろそろあなたは撤退してください。閣下に強制召還されたとき、その格好では示しがつかないでしょう」
「ばかもん。そのためにこの仮面があるんだろうが！」
「……謎なのはあなたの精神構造だけで結構です」
ため息をついて、レメクはケニードに向き直った。
「あの格好の姿を、いくら非公式といえども映像で残しておくことはできません。おわかりですね？　アロック卿」
「……うーん。もったいないけど……そうだね。下手すると国際問題だもんね」
……国際問題とまで。
あたしは、全裸一歩手前モザイク水着のアウグスタを見た。
……まぁ、確かにすごい格好だが……国際的な問題にされるぐらいイカンのか、あの姿は。
正直、宿のおねーちゃんは似たような姿をしてたりするんだけどなぁ。
「くっ！　この芸術がわからんとは……！」
アウグスタの嘆きに、レメクがいっそう深く嘆息をつく。
「そういう問題ではありません。国の恥という言葉をそろそろその異界脳にも覚え込ませてください。言っておきますが、あなたが痴態をさらすたびに、私が宰相閣下に泣きつかれるんですよ。迷惑です」
「知らぬ存ぜぬで通せばよかろう！」
「もちろんやってますとも。絶望的な目で見られるのがそろそろ億劫なんです」
……やってるのか。
てゆか、宰相閣下が可哀想だ……
「……そのせいで、僕が閣下を慰めるハメになるんだよね……」
向こうでぽつりとケニードが呟く。
俺もだ、と呟くのはバルバロッサ卿。
……あっちこっちにいるなぁ……被害者が。

「そういうわけですから、ベルも写真は諦めてください。我が国の女王陛下が、こんな姿でブラブラしていると他国に知られれば、大変なことになりますから」

あー……確かに、国王様がこんな格好じゃ示しがつかないどころか……

……ん？

……んんん！？

あたしはレメクを見た。

「……なんて？」

「？　なにがですか？」

「我が国の……なんて？」

お願い。

お願い聞き間違いであって……！

「女王陛下ですが」

女　王　陛　下。

あたしは吹っ飛んだ脳みそを、一生懸命かき集めた。

女王、って言った？　今。

あたしはケニードを見た。

マニアがコックリ頷いた。

あたしはバルバロッサ卿も見た。

熊は半笑いの顔でコックリ頷いた。

……ということは。

「えーッ！？　いやーッ！！　アウグスタが王様ぁッ！？」

「ちょっと待てこらぁッ！　小娘！　私が王で何が不満だ！」

「いやぁーッ！！」

「二度もイヤつったかこの小娘！　おまえも最初に言っただろうが！　女王様と！！」

「意味が違うーッ！！」

あたしの絶叫に、あぁ、となぜか男一同が深く納得する。
「ベル。落ち着きなさい。体に悪いですから」
ぽんぽんと背中を叩いてから、レメクは乳を揺らせて怒るジョオウサマに嘆息混じりの一瞥を送った。
「……あなたも、そんな格好だから、こんな反応をされるんですよ。まともな姿に戻ってくださいますね？」
こんな反応、という所で、アウグスタが「むぅ！」と唸る。さすがにちょっと思うところがあったらしい。
変態な仮面女王は、仕方ない、とふんぞりかえった。
……あ。また男の人が前屈みに。
「今の私は謎の仮面だからな。だが……次に会ったときは覚えていろよ！」
「……実に悪役らしい台詞ですね。正義の仮面はどこへいきましたか」
げっそりとしたレメクの声に「フン！」と悪役ばりばりの鼻息をはいて、
忽然と、アウグスタはその姿を消した。
「……え？」
そのあまりの唐突さに、あたしは目を瞠る。辺りを見渡しても、もちろん、黄金色の髪も強烈なモザイク水着も見えない。
「あれが、門の紋章の力です」
呆然としたあたしに、レメクがそう教えてくれた。
あれが、あたしたち下層級の人間には、お伽話でしかない『紋章』の力。
あたしは、その恩恵の一部を与えられたという自分のおでこを無意識に触り、ハタと気づいて顔を上げた。
「あ、あ！　あたし、アウグスタにまだ何も言えてない……！」
違うことはいろいろ言ったが。肝心なことが言えてない！
「伝言なら、聞きますが」
「ち、違……お礼……お礼が全然言えてないのよ！」

王様うんぬんはともかく。
アウグスタは、あたしのことを考えてくれた人だ。
泣いたあたしのために（あの姿はどうかと思うが）飛んできてくれた人だ。
なのにあたしは、まだ一度もそのことにお礼が言えていない！
「……あぁ、それは……」
レメクが、ふと口元を緩める。
夜明け色の瞳が、柔らかく和んだ。
「自分で言わなくてはいけませんね」
「う、ん。で、でも、どうしよう！　王様なら、会えないし」
「その理由については、少々疑問ですが。……ああ、そうです。王様だからどうこうというのであれば、ただの変態仮面として呼び出せばいいでしょう。せっかく、門の紋章の加護をもらってることですし」
「いや、普通、そっちのほうが悪いと思うんだけど……」
「喜ぶと思いますよ。わざわざアウグスタなどという呼称で名乗るぐらいですから」
レメクの声に、あたしはきょとんとした。
レメクはただ苦笑する。
「アウグスタというのは、あの方の名前ではありません。女王という名におさまらない、型破りなあの方を揶揄して、一部の貴族がそう呼んでいたんです。女帝（アウグスタ）と。……それを耳にして、面白いから全員そう呼べと言い出されましてね。実際にそう呼べた人間はそういないのですが。今のところ、あの方をそう呼べるのは、ごく親しい一部の人間だけです」
「あたしは、知らないからそう呼んでただけで……」
「親しい人が呼ぶものと同じ呼び方をしてくれと頼まれたのですよ、あなたは。本名を名乗らなかったのは、その名を敬称なしで呼ぶことは、いかなる場合であっても許されないからです。下手をして、あなたに危害がおよんではいけないと、そう思ったのでしょう。…

…まぁ、それでも、自分の呼称に昔のあだ名をもってくるのは、どうかと思いますが」

「……い……いろいろと型破りなのね……」

「ええ。ですが、まぁ……だからこそ、今の時代に相応しいとも言えますが」

あたしは、苦笑したレメクを見てちょっと首を傾げた。

レメクの声には、どことなく親しみがある。なんだかんだ言いながら、やっぱりどちらかといえば仲がよいのだろう。

ただ、気になることがある。

いくら型破りな王様だとはいえ、レメクのアウグスタに対する態度は、ちょっと臣下のソレとしては異様すぎる。二人のやりとりにしても、王様と臣下という感じではなかった。

あれは、むしろ気心の知れた喧嘩友達のソレだ。

女王陛下と対等に渡り合っている、レメクはいったい何者なのだろうか。

「あの……ね。おじ様」

「なんです？」

あたしはレメクを見た。

今なら聞けるかもしれない。

ついでのように、さり気なく尋ねられるかもしれない。

「あの……」

あなたは、何者なの？　と。

あたしは口を開いた。言葉がするっと出た。

「あたし、あの家に帰っても、いいんだよね？」

……あれ？

……なんか違うこと聞いたよ？

「ええ。もちろんです」

レメクが事も無げに頷く。

ふわっと体が浮き上がるような安心感が襲ってきたが、あたしは慌ててそれを押さえ込んだ。

違う違う。尋ねたいことを尋ねないと！

「あの……あたし、邪魔になってたりしない！？」

……いや、だからそれも確かに訊きたいけど……！！

「邪魔だと思ったことはありませんよ。むしろ、いろいろ情報をもらって助かっています。あとでルドとも話してもらうことになりますが……ひとまずは、体調を取り戻すことが先決ですね」

そう言ってお姫様抱っこから、片手で抱え上げるような形に。

……ちぇー……お姫様抱っこのほうがいいなぁ……

……って、マテマテまた意識が別のほうに飛んでいく！

あたしは慌てて居住まいを正した。レメクの腕に乗ってる形なので、身長差が逆になる。ちょっと新鮮でドキドキ。

……でなくて！

「……それに、ベル」

あたしが意を決して口を開くより早く、レメクが言葉を紡いだ。

黎明を宿す赤紫色の瞳に、あの暖かい色を灯して。

「あなたと話すのは、楽しいと……そう思っていますから」

その言葉に、あたしは持っていた全ての疑問を空高く放り投げた。

いつか、宿のおねーちゃんがすまし顔で言っていた言葉を思い出す。

恋愛は、あらゆる常識を覆すものなのよ。

ああそうだろうとも。

あたしは嘆息をつく。

たった一人の何気ない言葉で、知りたいこともいろんな疑問も、まぁいいか、で終わらせてしまえるのだから。恋愛は全てを超越してしまう、たぶん究極の魔法なのだ。

あたしはレメクに抱きついて、心の中でそっと呟いた。

まぁいいか、と。

エピローグ

クラウドール邸の惨状は、聞きしに勝るものだった。

玄関は開けっ放し。靴は散乱。玄関の絨毯は斜めに吹っ飛び、壺は逆さに転がっている。額も本もあちこちに散らばり、本棚はすっからかん、戸は全開、埃まみれの未使用部屋ですら、あちこちかきまわされて床に右往左往した足跡がくっきりと残っていた。

あたしはそれを見て、バルバロッサ卿のあの笑みをしみじみと理解した。

（……ポジティブに考えよう。これは、そう、愛だと！）

花瓶、本棚、壺、部屋の隅。果物籠に洗濯籠。

何をどう考えればこんな所にあたしがいると思うのか。

そう疑問に思わずにいられないようなモノまでもがひっくり返され、あっちこっちに物が散乱している。

カーペットの裏とか、机の引き出しとか。いったい捜し物を何だと思っているのだろう？

あぁ、しかし。

愛だと思えば、なにかしら、この天にも昇るような幸福感。涙が出るほど悲しくて嬉しい。

……あ～本当に愛ならどれほどいいか！

でもね、レメク。一言言いたい。

あたし、一応、猫じゃないから！

猫じゃないから壺になんて入らないし、籠で丸まったりしないから！！

レメクは非常にバツが悪そうにそれらの惨状を眺めていたが、夜も遅いということで整理整頓は翌日に持ち越された。レメクも疲れているのだろう。

あの後、アロック邸はいろんな意味で大忙しだったのだ。

行方不明人は無事保護されたから、ということで、捜索部隊とし

て陛下（というか、アウグスタ）から借りていた兵は城に戻った。
律儀に頭を下げて礼を言ったレメクに、なんだか彼らのほうが恐縮して倍以上頭を下げていた。レメクはどうやら、あたしが思っている以上に特別な地位にいる人のようだ。
とりあえず、王宮恐い人リストの首位争いをしてるぐらいだから、と納得したのだが、帰り間際にあたし達を見る彼らの視線が、ほんのり暖かかったのが謎だ。畏怖→驚愕→ツララ→敬意、と変わったあの眼差し変動の理由を知りたい。
変わったといえば、アロック邸の老執事さん。なぜか最後にレメクに握手を求めていた。
どういう意味でかは不明だが、男の浪漫ですものな、という謎の力強い激励までしつつ、ついでにサインを求める始末。その後で妙にレメクがヘコんでいたのもとても気になる。
神殿の熊さんは、良いモノ見せてくれたぜ的にサムズアップし、のっしのっしと森ならぬ街へと帰っていった。彼の帰宅先が神殿では無く繁華街なのは、きっと深く考えてはいけないことなのだろう。
我が同士ケニードは、明日にでもメリディス健康デロリン茶を持参して遊びにくることになっている。あたしと意気投合しているため、レメクも強く出られずにちょっと引き気味に承諾していた。
ちなみに、最初に会ったとき、妙にレメクに絡んでいた理由を詳しく聞くと、彼はしょんぼりとこう言った。
「……憧れの人が、憧れの人と、二人で楽しそうにしてるのを見てごらん……ものすごく疎外感感じて寂しいもんなんだよ……」
どうやら彼は、自分も混ぜてほしくてたまらなかったらしい。
とてもいい人なのだが、やはり、どこか強烈に子供っぽい人である。
そういえば、彼が執着していた肖像画の某王妃様。彼女は、ケニードの初恋の人なのだとか。
それはまぁ……絵だって欲しいだろうなぁ……
（レメクも、ちょっとは見せてあげればいいのに……）

クラウドール邸に、それらしい肖像画は飾られていない。
ということは、あの埃まみれの部屋のどこかで埋もれている可能性がある。……いっそあげちゃえばいいんじゃなかろうか？
そんなことを考えながら、あたしは一番散乱がひどい寝室でせっせと寝支度をした。
布団も吹っ飛ばされていたベットを直して、そこに小さく丸くなる。布団がふわふわで気持ちが良い。
すると、初めて見る寝間着姿のレメクがやってきた。そして、同じベットに入ってくる。
そう！　ここで嬉しいお知らせが！！
なんと、レメクが一緒に寝てくれるのである！　しかも数日間！
理由はあたしの体調不良のせい！
「ベル。丸まらずに伸びなさい」
……なんか、猫のような扱い。
仕方なく縦に伸びると、横に入ってきたレメクがひょいと胸に抱き込んでくれた。
ビバ！
ビバ体調不良！！
グッジョブあたし！！
「……体調が悪いのに、なぜあなたの意識は絶好調なのでしょうね……」
速攻であたしの心を読み取るレメク。
腕の中にあたしという小さな命を閉じこめながら、妙に遠い眼差しでぼやく。
あたしはそれを無視して、レメクの胸に頬ずりをした。
すりすりすりすりくんくんくんくんすりすりすりふんふんふんふんふん……
「……マーキングはほどほどにお願いします」
だからなんで猫扱いなの！？
それこそ毛を逆立てたあたしに、レメクの手が宥めるように頭を

撫でてくる。
一度、彼とはきっちり話をつけないといけないけど気持ちいい頭もっと撫でて撫でてぐるぐるぐるぐる……
すぴー、とそのまま寝入りそうになって、あたしは慌てて意識を取り戻した。この天国をじっくり味わわずに寝入るなど、恋愛の神様への冒涜に他ならない。
根性で起きようと目をカッぴらいたあたしに、レメクがぎょっとしたような顔になる。次いで、そろっ伸びてきた手が、ソーッとあたしの目を塞いだ。
……どういう意味！？
「……ちゃんと寝なさい。紋章を経由して力を渡していても、あなたの体力が戻らない限り、死は常にあなたの傍らにあるんですよ」
レメクの言葉に、あたしはもぞもぞと動くのを止めた。
アロック邸からの帰り道。
レメクはあたしに、今まで話していない『詳しい説明』を少しだけしてくれた。
あたしの体は、本当に死にかけの状態なのだという話を。
あたし自身は、それほどひどい状態のような気はしていない。
動きも普通だし、御飯を食べる力もあるし、口だってよく動く。
レメクに張り付くのにも不自由しないぐらい、力もある。
……けれど、これは、レメクの起こした人為的な『奇跡』なのだという。
レメクは言った。
もしこれを口外すれば、あたしを殺さなくてはいけなくなると。
それぐらい大事なことを、言葉ではない『声』で語ってくれた。
どういう『声』かというと、なんというか、ダイレクトに頭の中に声が飛び込んでくる感じだった。
紋章で繋がっているからこそできる直接通話で、体が触れあってさえいれば、心の中で語りかけるだけで言葉を相手に伝えることができるらしい。

まぁ、ぶっちゃけた話し。
あたしとレメクは、触れてさえいれば、相手の心を読み取ることができるのだそうだ。
……そのわりに、あたしは全然、レメクの心を読み取れないのだが。
これはレメクが『親』である紋章をもっていて、あたしがその加護を与えられた『子』の立場であるからかもしれないが。
レメクのもつその『紋章』も、アウグスタの門の紋章と同じく特殊なものなので、普通のお伽話で聞くような、わかりやすい力の在り方はしていないのだそうだ。
そのあたりの詳しい説明もしてくれたのだが、はっきり言ってチンプンカンプンである。
そしてもう忘れてしまった。ごめんなさい。
まぁ、とりあえず。
あたしはレメクのその紋章の力で、かろうじて『死んでいない』状態である、ということらしい。
この状態は、あたしの体が『生きている』に相応しい体力とか生命力とかを獲得するまで続く。
だがこの『死んでいない』状態は、あまり長く続かせることはできないのだそうだ。もちろん、無理をすると、唐突にぽてっと死んでしまう。限界値、というのがあるのだそうだ。
だから、絶対に無理をしてはいけない。大人しくしないといけない。体力を回復させないといけない。
そして、より強くレメクの力を貰してもらうために、こうして一緒にひっついているほうが体にはいいのだそうだ。
回復も早まるし、力もアップする。意味はよくわからないが、簡単に言うとそういうことらしい。
あたしは思った。
いろんな意味で、ありがとう、と。
そしてこの一件で、あたしの推理メモに新しい項目が加わった。

レメクが、紋章術師だという項目である。
王宮でも優遇される紋様術師。
それよりも遙かに高位な紋章術師。
国中でも十数人しかいないその紋章術師の一人が、レメクなのだ。
その地位は、貴族の階級で言うなれば最低でも準伯爵位。
王宮内の地位は人にもよるが、トップランクになると宰相と対等に話すほどになるらしい。
どうりで、ケニードがレメクの最近の行動リストを挙げた時、宰相だの教皇だの、高位の人がごろごろしてたわけである。
……もっとも、そのレメクがどうして不正なんかを調べているのか、そのあたりはまだよくわからないのだが。
（……まぁ……いいけど）
暖かい温もりにくるまって、あたしはふわふわする頭をレメクに預けた。
とくんとくんと、暖かい命の音が聞こえる。レメクの音だ。死にかけたあたしを助けて、今もずっと守ってくれている音。
あたしの左胸には、レメクの紋章と同じ模様がついている。それが、あたしとレメクを繋ぎ、あたしの命を守っている。
（……なんにも言わないで、ずっと守ってくれてたんだ……）
あたしは知らなかった。本当に、何一つ知らなかった。
あたしがどれほど、そしてどんな風に、レメクに守られているのかということを。
レメクは言った。これは、本当はしてはいけないことなのだと。
知られれば、周囲一体を巻き込んで死を与えなくてはいけない。
それぐらい、大事な大事な秘密なのだと。
だって、それはそうだろう。
これは禁忌だ。人の世にあってはいけないものだ。
この世でただ一つ、死すらも退ける『闇の紋章』。
自然の摂理を曲げる魔法。
死から逃れたいと思う人がこれを知れば、いったいどんな事態に

なるのか……

（……レメク）

そんな危険をおかしてでも、レメクは見ず知らずの行き倒れを助けてくれたのだ。

無茶ばかりして、放っておけば自分から死んでしまうあたしを、一生懸命助けようとしてくれていたのだ。

それがどれほど大変なことだったのか。説明された今ならよくわかる。

……この数日間。あらゆる意味で、生きた心地がしなかったことだろう。

ごめんなさいと、何度言っても足りない。

ありがとうと、何度言っても足りない。

そしてありったけの思いをこめて思うのだ。

大好き、大好き、大好き、大好き！

あたしに、今と、未来をくれた人。

命の恩人で、掟で決まったあたしの旦那様。

近い将来で、掟が無かったことにされても……きっとあたしはずっとずっと、レメクの奥さんになることを目指して生きるだろう。

掟から始まったことだとしても、掟と同時に終わるものではない。

だってあたしの『恋』は、まだ、始まったばかりなのだから。

END

エピローグ（後書き）

ここまで読んでくださる、あなたがとても好きです。

こんにちは、関根麻希子です。

本にすれば、ここで第一巻終了、という形となります。ベルとレメクの物語はまだ続きますが、それはまた別の形。

孤児院編『断罪の章』でお会いできれば幸いです。

主要登場人物紹介（前書き）

似姿付きの人物紹介はｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｔａｉｏｊｉ／に設置しています。

主要登場人物紹介

【ベル】メリディス族・女性・八歳
本編主人公。母親を亡くし、孤児院に身を寄せていた。
死にかかっていた所をレメクに助けられれ、一族の掟に従い、彼の押しかけ女房となる。
幼いわりに変な知識が豊富。やや暴走癖がある。
レメクに恋心を抱いているが、ちっとも相手にされずに隅っこでひっそりと涙する日々。
猫扱いされることを気にしている。

【レメク・（いつも中略）・クラウドール】??族・男性・三十二歳
倒れていたベルを助けたために、彼女の未来の旦那に確定してしまった。端正な顔立ちの男前。周囲からは畏怖をもって接せられる人物だが、ベルを拾ってからはなま暖かい激励を受ける日々。
十数人しか使い手がいないとされる紋章術を使う。秘術中の秘術、闇の紋章を持ち、女王に比肩する実力を有するなど、未だ謎は多い。

【アウグスタ】??族・女性・???歳
いろんな所が謎な巨乳美女。
何故かレメクの寝室に（突然）現れたため、ベルからは恋敵として認識されていたが、その後ただの嫌がらせ魔女と知って和解。
本人曰く「ベルの味方」。レメクをからかうことを至上目的としているらしく、唯一動揺させれるベルを猫可愛がりする。
ナスティア王国を統べる黄金の女王。

【ケニード・アロック】??族・男性・???歳
幼い頃より「芳しき生ける秘宝」メリディス族の虜。その盲愛に

より保護官となる。
稀少なものが大好きで、国……というよりも世界的に超レアなアウグスタとレメクが大好き。その好きっぷりでレメクにはドン引きされているが、ベルとは唯一無二の盟友となる。
最近はクラウドール邸の掃除に訪れるのが日課。

【ルドゥイン・バルバロッサ】??族・男性・??歳
王都の大聖堂で大神官を務めるデカイ熊男。拳の一撃での喧嘩両成敗は夜の繁華街の名物に。レメクとは二十年来の付き合いであり、それなりに気心が知れている。
アウグスタに似た謎思考の持ち主。
大神殿のほうの神官位を頑なに拒んでいる。

【エットーレ・ブリル】新規
ベルが身を寄せていた孤児院の院長。過度に肥え太った男。

【カッフェ】新規
ベルの孤児仲間。

【ナナリー】新規
西区にある孤児院の子供。姉御肌。

【ニアとミリア】新規
西区にある孤児院の子供。双子。

※　※　※

一族【メリディス族】
王国の辺境にあるシャーリーヴィの森に住む。
レアポップモンスター並に出現が稀なため、「幻の一族」とも呼ばれるが、実は意外と近くにいたりする。
非常に美しい外見をしており、紫がかった銀髪や芳香など稀有な

特徴を備えている。
そのため、今も尚特殊な好事家から狙われている。
未婚の女性は裸を見られて触れられると、その相手と結婚しなければならない掟を持つ。

一族【クラヴィス族】
王都近隣に多く住む一族。王族を含め高官のほとんどがクラヴィス族であり、その裕福さを他族から妬まれている。
結婚年齢は十六歳。重婚可能なのは、王家に習ってのこと。

一族【パルム族】
王国全般に広く住む一族。
農民がそのほとんどであり、結婚年齢も十三歳と早い。
重婚は認められていない。

官吏【保護管】
国が指定する保護物（施設・動物・一族など対象は多岐にわたる）を保護する官吏。上官は高級官吏として王宮に勤めている。所属名は長の趣味を反映して「国指定保護機関」となっている。変な趣味の人が多い。

官吏【紋様術師】
特殊技能「紋様術」の使い手。
紋章術から生まれた魔術の一つ。複雑な紋様を札や物に書いて術を発動させる。
一度紋様を刻まれた札などは、知識と魔力を持つ者なら誰でも発動可能。そのため、紋様術の悪用を防ぐために高官として召し抱えられることが多い。

官吏【紋章術師】

特殊技能「紋章術」の使い手。
その身に紋章を宿し、その力を行使する。
他者に力を貸し与えることが可能であり、それらは紋様となって他者に宿る。紋章は特殊な継承を経て人体に宿るため、習得はかなり難しい。
最も有名なものとして、精神を司る「光の紋章」、肉体を司る「闇の紋章」があり、どちらも不死を可能にする秘術と囁かれている。
現在、最も魔法に近い魔術として他国からも注目されている。

神職【裁判官】
人が人を裁いてはならない、という掟のため、裁判官は全て特別な神官が勤める。神官以外に裁く権限を持っているのは、国王と断罪官のみとなっている。

国【ナスティア王国】
大陸の南西部にある他民族国家。
降魔大戦のおり、三十ある部族が協力して勝利を治め、それがきっかけで国として建つ。
当時は名前が無く、後世、大戦のおりに部族をまとめて戦った女傑ナスティアの名を国名とすることになった。
一部において貧富の差が激しく、貧困層の救済など問題を抱えている。

プロローグ

静寂が夜空の星々を叩き、耳に痛いほどの音ならぬ音が、深い闇の中に響き渡る。

風は無く、夜は深く。石畳に転がった小石すら、恐怖に身を縮めたかのように小揺るぎ一つしない。

いつもの夜、と言うには、いささか得体の知れない気配が強かった。

そんな異様な静寂が破られたのは、月がゆっくりと西に傾きはじめた頃だった。

嵐のような馬蹄が轟き、頑丈な蹄（ひづめ）が石畳に弾ける。勢いよく回る車輪にあわせて大気がビリビリと震え、路地裏の野良犬が驚いて身を潜めた。疲れた目に警戒の色を宿し、大通りを用心深く伺う。

夜のベールを破って現れたのは、夜そのもののような黒塗りの馬車だった。

御者も黒服に黒帽子、黒い手袋と黒ずくめ。馬も闇に溶ける夜の色。馬具は言うに及ばず、馬車の窓にかけられた布すらも、人目を避けるように黒い色をしている。

ひっそりと息を殺す野良犬の近くには、同じく疲れた目に警戒を宿したいくつも影がいた。彼らと野良犬は決して争わない。互いに、日々を死にものぐるいで生きる者同士だからだ。

いくつもの目は、夜を引き裂きながら走る闇色の馬車を追う。

憎むように。蔑むように。

あるいは、狂おしく渇望するように。

馬車はそんな視線を振り切るように、石畳を荒々しく叩きながら走り去る。

遠くなる音と同時に、のろのろと通りに出て行く複数の影。

彼らはただ見ていた。

自分達とは違う場所に生きる、傍若無人なイキモノの乗り物の行

く先を。
その先にあるのは、首都の北。貴族達の住む区域。
彼らは知らない。馬車には一カ所だけ金色に光る場所があり、そこに家名を記す紋章があるのだということを。
彼らは知らない。その馬車の紋章が、自分達の住む孤児院のそれと同じものであることを。
彼らは知らない。
夜の闇の中で、彼らを見る瞳のあることを。
ゆるやかに包囲を縮めるように、ゆっくりと目に見えないものが、闇の中で進められていることを。
そして誰も知らない。
さらにそれを見る、人ならざる不可視の視線があることを。
音が絶え、静寂が戻り、月が傾ぎ、星が瞬き、そして、街の片隅で、人の姿が消えていく。
――あたしは、ただ、それを見ていた。

1　最初の布石

すえた臭いのする床板の上に、ボロ切れと大差ない布が一枚。
あたし達が寝床にしていたのは、そんな場所だった。
硬く、どこかじめじめとした床の感触。冷えきったそれの上に横たわって、少しでも疲れた体を休める。そうして翌朝、朝早くから叩き起こされるまでのわずかなだけ、夢の中で微睡むのだ。
夢の中では何でも叶った。
暖かい寝床。美味しい御飯。優しい家族。
甘いお菓子も、綺麗な服も、思いのままだった。
あたし達はこっそり泣きながらそれらの夢を見て、辛い現実から一時的に逃避する。未来に絶望しかなくても、それでも夢ぐらいは見たいのだ。
そこがどんなに、この世で一番希望から遠い場所だったとしても。
……あたしが一番多く見たのは、ふかふかの寝床で寝る夢だった。
雲のようなふわふわの寝床があったら、きっと夢のような寝心地がするに違いない。そうしたら、目を瞑らなくても夢を見れそうな気がする。
あぁ、でも、美味しい御飯も食べてみたい。どんな味なのか想像もつかないが、頬が落ちそうなほど美味しいという料理が食べたい。きっと素晴らしい味に違いない。……やっぱり想像もつかないが。
あとは……あとは、母さんに会いたい。
路地裏で冷たくなってしまった母さん。
もっともっといろんな話がしたかった。
頭を撫でて欲しかった。
頬にキスをして欲しかった。笑ってほしかった。名前を呼んでほしかった。

■■と、呼んで欲しかった。

優しい、あの声で。

「ベル」

そう、そんな風に……

※　※　※

夢を見ていた。

あたしはパッチリと目を開ける。

夢を見ていたのだと、理解した。

あたしの名前はベル。あと一月半ほどで九つになる女の子だ。

あたしがいるのは、つい数日前まで世話になっていた孤児院ではない。あの陰鬱な北部屋でも無ければ、路地裏の日陰でもない。

王都でも貴族や富豪がこぞって住まう北区の外れ。敷地面積だけは北区随一の邸宅、クラウドール邸である。

北区の豪邸群の中では、クラウドール邸の家屋敷はかなり小さい部類に入る。

内装・外観ともに華美なところはまるで無く、他の家屋敷と比べれば、質素を通り越して貧相と言われそうなほど慎ましい。だが、華やぎのかわりに重厚さを、煌びやかさのかわりに気高さを置き換えたような、どこか品格のある佇まいをしていた。

そんな屋敷に住むのが、あたしの命の恩人にして未来の旦那様。

レメク・（とにかく中略）・クラウドール、三十二歳。

気っ風の良い、強くて賢い超絶男前である。

強いだけでなくすこぶる優しい彼は、ずぶ濡れのドブネズミのようだったあたし（死にかけ）を助けてくれた上、美味しいご飯や綺麗な服を買ってくれたりと、実に様々な面倒をみてくれる。

感謝は募る一方なのに、あたしにはお金も無ければ頼ることので

きる身内もいない。おかげで満足にお礼もできない状態だった。
しかも、あたしはカーテンレールを壊した上に壁にヒビを入れるなど、屋敷のあちこちに傷をつけている。その修繕費を考えると、ちょっと気が遠くなりそうだ。
せめてと思い、知り合いの宿のおねーちゃんが言っていたように「体で払うわ！」と言ったのだが、レメクには光の速さで断固拒否された。
何故だろう？
あたしがクラウドール邸にやっかいになって、今日で十三日目。
この間にそこそこ親睦を深め、それなりに意思疎通ができるようになったと思っていたのだが、あたし達の間には相変わらず広くて深い溝があるらしい。
……しょんぼり。
あたしは布団の中で目をしょぼつかせ、もぞもぞと落ち着く場所に移動する。
あたしがいる部屋は、ぽかぽかと陽気が差し込む南側の二階、その中央部にある。
部屋は広く、壁には大きくて立派な暖炉があり、黒光りする床にはこれまた立派な絨毯が敷かれていた。
あたしが寝ているこのふかふかのベットは、なんと綿と羽毛をふんだんに使った豪華なものだった。
カバーは刺繍の入った木綿で、その上から上等の絹が掛けられている。上に乗る掛け布団は、完全羽毛のふわっふわだ。防寒対策に豪華な毛皮まで敷き込まれ、どこの王侯貴族かと言いたくなる豪華さだった。
孤児院の院長だって、こんな立派なベットはもっていないだろう。
天蓋付きでこそ無いものの、その内容は物語で聞く王様のベットのよう。もちろん寝心地は最上級。まさに雲の上。思わず二度寝しそうになるほど魅力的だ。
「ベル」

そう、そんな風に呼び出されさえしなければ……

（……ん？）

あれ？　この声、ケニード？

あたしはもそもそと布団の中から顔を出した。

誰もいない部屋の向こう、廊下側に人の気配がある。

「起きてるかい？　御飯できたけど、どうする？」

ドアの向こうから聞こえてくる声は、数日前に知り合った次期男爵様にして、我が同士。レメクスキスキ仲間のケニード・アロックだ。

レアモノマニアの彼は、レアな種族であるあたしの一族のことにものすごく詳しい。一族秘伝の健康茶をマスターしちゃうほどのお人である。

ちなみに、とある巨乳魔女と別の意味で変態だ。

「食べるーっ！」

元気よくドアに向かって声をあげたあたしに、向こう側で笑った気配がした。

「じゃあ、台所においでよ！　先に行ってるからね！」

「わかったー！」

あたしはもそもそと動き、ふと動きを止めてベットの中に舞い戻った。

……ふんふんふん……フンフンフンフンフン！

何をしているのかは聞かないでいただきたい。

……匂いをかいでるだけだから。

あたしが寝ていた場所の左隣。その広範囲に「あるべき匂い」を探して幸福補充。

しかし、匂いの元が去ってからかなり時間が経っているらしく、あんまり匂いが残ってなかった。

清潔好きのレメクは、ベッドカバーすら数日毎に洗濯してしまう。その結果、布団の中だというのに元々匂いが乏しいのだ。

もう少し、ベッドに自分の匂いをつけておいてくれてもいいだろ

うにと思うのだが。
……しょんぼり。
わずかに残っていた匂いすら根こそぎ嗅ぎとってしまったあたしは、もそもそと寝台から降りた。
毛の長い絨毯足の裏を包む。
「うひゃぅ」
こそばゆいほどの柔らかさに、思わず変な声がでる。ツルツルのスベスベなのに、もふっとした分厚さを感じる絨毯。ものすごい贅沢な感触だ。
思わずその気持ち良さに負けて、意味もなく足踏みをしてしまう。大きく足を撫でつけると、たまらないほど滑らかな感触がした。
（気持ちいい……！！）
あたしはうっとりとその感触に浸る。
そのまま絨毯の海に飛び込み、思う様泳ぎまくればどれほど気持ちいいだろうか！　体を擦りつけたり、手で撫でくりまわしたり…
…想像するだけでうっとりだ！！
しかし、そんな風にゴロゴロしてる所をレメクにだけは見つかってはいけない。
なぜならば、そんな所を見られたが最後、レメクにおかしな行動をとられてしまうからだ。
あれは七日ほど前のこと。
絨毯の上でその感触を存分に味わっていたあたしは、ちょうど部屋に入ってきたレメクに踏んづけられかけた。
互いにびっくりした顔で見つめ合ったのだが、レメクは足下に転がるあたしをけっこう長いこと見つめた後、なにやら不思議な微笑を浮かべて「気をつけなさい」と言った。
レメクの微笑はとても貴重なのだが、あの笑みだけはちょっといただけない。
何故だろう。
何故かとてもいただけない。

なんというか、こう、とってもなま暖かい感じで。
そしてその後、彼の手によってなぜか大きな籠に毛布を敷き詰めたものが窓際に設置された。
どういう意味だろうか、あれは。
ちょうどあたしがすっぽり入る特大サイズなのがとても気になる。
……わざわざ特注したんだろうか、あれ。
……いや、確かに、そこで丸くなって寝たらものすごく気持ちよかったけど……
しかし、あれ以来、あたしは彼の目がある時には絨毯にじゃれつかなくなった。
もし万が一、次に見つかって「弾む球体」だの「毛糸の束」だのをそっと設置されたら、しばらくヘコんで立ち直れないからだ。
籠はまぁ……日当たりのいい時はちょっと利用したりするが。
さてさて。
その豪華な絨毯の上だが、その上にはいろんな家具が乗っている。
そのうちの一つ、典雅な意匠のソファには、可愛らしい服がきちんと畳んで置かれていた。
ピンクを基調としたそれは、色柄でわかる通り、あたしの服である。
あたしの服。
なんていい響きの言葉。
かつてあたしが着ていたのは、ボロ布を紐でくくっただけの『服』とも呼べないような代物だった。
孤児院で配られるその手合いの服は、もともと生地が悪く、また替えの服も無いことから、すぐにすり切れて薄くなってしまう。
そのため、前々から持っている服と良いところを交換しながら、かろうじて人として最低限の体裁を整るのだ。
ツギハギだらけのそれは、最低の生活をしていた証のようなもので、今見ても気分のいいものではない。
しかし、その服は、今はどこに捨てられたのか、影も形もなかっ

た。
かわりに与えられたのは、可愛らしいピンクのジャケットとスカートだ。
刺繍なんていう高価なものまで施されていて、ボロしか着たことのないあたしは、この服を着るだけで貴族のお嬢様にでもなった気分がする。
シャツ、スカート、上着。もちろんパンツも新しいものだ。靴下と呼ばれる、足にはく布まである。
これらが全部、あたしのもの。
あぁ、本当になんて素敵な響きなんだろう。涙が出そうだ。
いそいそと袖を通し、四苦八苦しながら全部を装着して、あたしは部屋の扉に手を伸ばした。
もはやドアというよりも鍵の見本市のようになっているドアの前に立ち、計十個の鍵一つ一つ解錠していく。
ぱちんと最後の一つを外して、さぁお外に出発だ。
美味しい御飯の待つ一階を目指して足を進めながら、あたしは（それにしても）と、ちょっと遠い眼差しで思った。
……なんで前より鍵の量が増えてるんだろうか？

※　※　※

クラウドール邸には、本邸以外にも建物がある。
北区随一の敷地に、北区の屋敷にしてはこぢんまりとした瀟洒な建物が一つ。これが本邸で、レメクやあたしがここに住んでいる。
そして庭と言うよりも林と呼んだほうがいいような木々が屋敷の周囲を囲い、南側に門、北側に丘あり泉ありの牧場もどきがある。
この牧場もどきには、未だあたしも足を踏み入れたことがない。
そのため、詳しい内容はよくわからない。
屋敷からそこまでかなりの距離があるので、未だ探索許可が下りないのだ。

聞くところによると、レメクが所有している敷地は北区のほぼ十分の一を占めるらしい。

他のエリアに数十人からなる貴族達の所有地があることを考えれば、レメクがどれほど広大な土地を持っているのかがわかるだろう。

ハッキリ言って、破格である。

そんな広大な土地だが、もちろんその管理をレメク一人でするのは無理だ。

普通ならばそれらは使用人がするのだが、レメクの住む屋敷には使用人はいない。

ではどこにいるのか。答えは、その広大な土地にあった。

クラウドール邸の使用人は、牧場もどきがある北側の土地にいるのだ。

まだ会ったことは無いが、その大半がお年寄りで、丘の上に建てた一軒家に集団で住んでいるらしい。

彼らに庭の管理をしてもらうなら、いっそ本邸の管理も任せればいいのにと思うのだが、レメクはなぜかそうしなかった。

その理由は話してもらってないのでわからないが、きっとあたしにはわからないイロイロな理由があるのだろう。

しかし、せっかく同じ土地にいるのだから、いつか丘の上のおじいちゃん達に会いに行きたいものである。

とはいえ、今のあたしはレメクに保護してもらっている身の上。彼の許可なしには外出もできない。

体が万全では無いあたしは、レメクの温情でかろうじて生きている状態だった。

とはいえ、パッと見では元気そうに見えるだろう。

良いモノをたっぷりと食べさせてもらったうえ、休息もバッチリとらせてもらっているので、最近は骨の周りにお肉がついてきたほどだ。

だが、その実中身はもうボロボロで、レメクがいなければあっというまに墓場に直行してしまう。

そのカラクリを説明された今では、前のように家から脱走して路銀を稼ぎにレッツラゴーも恐くてできなかった。

今はただ、ひたすら元気になるために、気合いを入れて養生するだけである。

そんなあたしの楽しみといえば、恩人であるレメクとの他愛のない会話と、匂いと、感触と、彼の作ってくれる美味しい御飯。そして、数日前に知り合ったケニードの訪問だった。

彼の持ってきてくれる様々な品物は、あたしにとって無上の喜びである。なにしろ、それらは総じてレメクの関連物なのだから。

今日は何を持ってきてくれたんだろうとウキウキしながら台所に行くと、テーブルの上に所狭しと料理が並べられていた。

いい匂い！！

この世でレメクの匂いの次に魅力的な匂いを嗅ぎ取り、あたしはいそいそとテーブルに近寄った。

ちょうど鍋をかきまぜていたらしいケニードが、あたしの足音に振り返る。

「あぁ、やっと来たね！　……って、ベル、またボタンが段違いになってるよ」

ケニードの指摘に、あたしは自分の着ている服を見下ろした。

……ありゃ。本当だ。

（……てゆか、このボタンってやつ、すごいやりにくいんだけど……）

もそもそと直していると、笑い含みにケニードがやってきた。あたしの前でしゃがんで、お母さんのように手早く直してくれる。

「ほら、ここをこうやって持ち上げて、この穴にひっかけて、はい、これで終わり。簡単だろう？」

ニコッと笑う笑顔が眩しい。

レメクのぷちストーカーという変態さんではあるが、彼はとてもよい人だった。

「ありがとう！」

苦手なボタンつけをやってくれた彼に、あたしも惜しみない笑顔で礼を言う。

テレテレと笑って、彼はまた調理に戻るべくあたしに背を向けた。上品な仕立ての服にかかる、フリフリエプロンがとても似合っている。

「ねね、今作ってるの、何？」

「うん。じっくりことこと煮込んだ野菜のコーンスープだよ」

おおお。なんて美味しそうな。

「もう暖まったからいいかな。ほら、ベル、席につかないと御飯食べられないよ」

ちょろちょろと周りをうろつくあたしに、ケニードが笑いながら言う。

あたしは慌てて椅子によじ登った。

最近忙しくて昼間に帰って来れないレメクのかわりに、ケニードはあたしのお母さんのごとく世話をやいてくれる。

最初の頃は、彼の手際の良さに驚いた。

なにしろ、ケニードは貴族様なのだ。しかも男爵家の後継者である。

そんな彼が、何故にこんな技能を身につけているのか。あれだけ沢山の使用人に囲まれているのに、何故、と、とてもとても気になるのです。

しかし、あたしはそれを敢えて詳しは追求しなかった。

以前、うっかり訊いてしまったことがあるのだ。どうしてこんなことできるの？　と。

彼の答えは簡素だった。

「必要にかられて、かな？」

そのときの笑顔が、それ以上の問いを拒んでいた。

だからあたしはそれ以上問わない。彼がもし語ってくれる時が来たら、静かにそれを聞けばいいのだ。

「じゃあ、暖かいうちにいただこうね」

スープを皿によそい、ケニードも同じテーブルの席につく。
あたし達は笑い、両手を合わせて合唱した。
「「いただきます！」」

※　※　※

元気な体は、よい食事とよい睡眠と、そして適度な運動から。
あたしを元気にするために、レメクはできるだけそれらの環境を整えてくれた。
美味しい料理はたっぷりと食べられるし、ゆっくりと体を休めれるよう、寝心地抜群の寝台も貸してくれる。
労働を強いられることは無く、むしろちゃんと体が元気になるまで動くなと釘をさされるほど。
そんな過保護な母親のように世話をやいてくれていた彼は、今、ものすごく忙しいらしく、朝早くから夜遅くまで家を留守にしていた。
ケニードとあたしが仲良しになって、彼がかわりに世話をやいてくれるから、安心して出かけれれるようになったのだろう。
あたしが脱走をしなくなったのも、大きな理由であるらしい。
彼は今、本当にとても忙しいのだ。
「昨日、教会の内部に動きがあったよ。たぶん、例の孤児院関連だろうね」
毎日来てくれるケニードは、御飯を食べながらそんな風に最新レメク情報をあたしに教えてくれる。
「悪い噂の絶えなかった神官が二人、処罰された。神官が裁かれるなんて、よっぽどのことがない限り無いからね。もともと悪評がたっていた二人だったから、それほど反発もなく比較的スムーズに裁判も済んだみたいだけど、余波はすごいだろうね」
「余波？」
野菜スープを飲み干し、次の野菜炒めを攻略しながら、あたしは

首を傾げた。

「悪い神官が裁判を受けて、それで終わりじゃ……ないのね？」

「うん。彼らと関わりのあった人達にも、大なり小なり罪があるからね。それらもちゃんと処罰しないといけない。洗い出しはもう終わってるんだろうけど、逃げようとする人を捕まえたりしないといけないから、いろいろ大変だろうなぁ……」

保護官であるケニードは、そういった裁判の仕事にはほとんど関わることがない。

例外として、保護指定物が関わったときだけ資料を整えたり、助言したり、相手の罪を追求したりと動くらしいが、孤児院に関わる不正問題については完璧に門外漢だった。

「彼らと懇意にしていた貴族も暗躍するだろうね。それにしても、慈善事業費をくすねる連中がいるなんてなぁ……」

呆れとも嘆息ともつかない息を吐いて、ケニードはビネガーのたっぷりかかったサラダを器用にフォークで食べた。

あたしは未だフォークに慣れなくて、手についたビネガーを嘗めながら、同じサラダを手づかみで食べていた。

……むぅ。今度、ちゃんとフォークの練習をしよう。

レメクにも注意されたが、綺麗に上品に食べる人を見ていると、自分の食べ方の汚さがよくわかる。

レメクもとても上品に食べるが、なにしろ食が細い。あたしが御飯に夢中になっている間にいつの間にか食べ終わっていて、あたしが見たことがあるのはパンをちぎっている姿と、紅茶を飲んでいる姿だけだった。

ケニードは細いわりになかなかの健啖家で、あたしと同じぐらいよく食べる。なので、その上品な食べ方をしっかりと見ることができた。

……がんばって真似しよう。

「おじ様は、その費用は莫大なものだって言ってたけど、どれぐらいすごい金額なの？」

「うーん……」
ケニードは軽く考える顔になり、さらりと金額を口にした。
あたしにしてみれば、天文学的な金額を。
ボタッと、あたしの手からパンが落っこちたのも無理はないだろう。それは、それほどの金額だったのだ。
「ちょ、ちょっと……待って、ねぇ、本当に……？」
「うん」
あたしの動揺を余所に、ケニードはあっさりと頷く。
「国家予算の三分の一を投入したからね。まぁ、全額くすねられたわけじゃないだろうけど、ベルの話を聞く分には、半分以上くすねられたと見ていいだろうね。……陛下が怒るはずだよ」
国家予算の三分の一。
あたしは気が遠くなった。
それほどの金額をあたし達のために使ってくれたのだ。この国の女王陛下は。
なのに、それが半分以上ちゃんと使われずに貴族や神官達の懐に消えた。
あの苛烈で破廉恥な女王陛下の怒りの程や如何に。
「……正義の仮面が炸裂するかも……」
「いやぁ、その前にクラウドール卿の制裁が炸裂するだろうね」
レメクの制裁？
あたしは首を傾げた。
「まさか、鉄拳制裁とか？」
「いやいやいや、てゆか、それだとバルバロッサ卿じゃないか」
……あの巨熊神官は、鉄拳制裁をするのか。
あたしはつい数日前に会った巨漢を思い出した。
……しそうだなぁ……
神官だというのに、むしろ歴戦の武将のような厳つい大男。彼には神官服よりも甲冑のほうが遙かに似合うに違いない。そのバルバロッサ卿が大神官なんてやってるのだから、世の中不思議だ。しか

も裁判官でもあるらしい。
　てことは、レメクの制裁っていうのは、バルバロッサ卿に裁いてもらうことをいうのだろうか？
　なんかそれだと、レメクの制裁っていうよりは、バルバロッサ卿の制裁って感じなんだが……
　あたしの疑問をよそに、ケニードはしみじみとした口調で語る。
「クラウドール卿の制裁は恐いよ。誰も逃れられないから。まぁ、一番いいのは、裁判官に裁いてもらうことだからね。だから、クラウドール卿もみっちりと調査して、言い逃れできない証拠を揃えてから動いてる。きちんとした裁判をしてもらうためにね。『罪には罰を』だったかな？　彼のポリシーは」
　ほうほう。
　あたしは素早く脳内メモを広げた。
　罪には罰を。
　レメクのポリシーだと言うのなら、きっちり覚えておかねば。
「彼の前にあっては誰も言い逃れできない、って言われるぐらいだから、それこそ魔法みたいに不正を調べては証拠を揃えてくるよ。ターゲットにされた方は恐いだろうなぁ……。ただ、今回の神官の処罰がどういう目に出るのかは、博打だね」
「？」
　脳味噌に書き込みをしながらハンバーグを頬張っていたあたしは、またしても意味がわからずにケニードを見上げた。
　ケニードは首をすくめて苦笑する。
「ちょっとね、時期が早いなと思うんだ。いつもなら、裁判は最終段階だ。なのに、意外と早く裁判が行われた。……僕が思うに、昨日の裁判は見せしめなんじゃないかな。牽制なのか、抑制なのか、それとも布石なのか……その辺りの判別が、僕にはまだできないんだけどね。まぁ、ベルのいた孤児院に関わる人には違いないけど、孤児院そのものには手を出してない……ということは、布石と見ていいかな。牽制になって孤児院の体勢そのものが改善されればいい

だろうけど、その場合は闇に消えたお金は戻ってこない……さぁて、どうするつもりなのかなぁ」

どこか楽しそうに言うケニードに、あたしはちょっと口を尖らせた。

「楽しそうね、ケニード」

「うん？　あぁ、ごめんよ、ベル。君にとっては他人事じゃないし、今も孤児院にいる子達のことを思えば、僕はとても不謹慎だね。……でも、うん、正直に言うと、僕は楽しみにしているんだ。クラウドール卿がどう動くのか、何を考えているのか、それを想像するのがとても楽しいんだ。彼がどうやってこの事件を解決していくのか、とか、それを考えるだけでワクワクしてたまらないんだよ」

本当に正直にそう言ったケニードに、あたしは苦笑した。彼はとても子供っぽい人だが、同時にそんな自分自身にとても正直な人だった。言い逃れや苦しい言い訳は一切しない。

「ケニードはおじ様が大好きだもの。それは仕方ないことだわ」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。でも、不謹慎なことには変わりないね」

ケニードは苦笑し、やや顔つきを改めてあたしを見た。

あたしは肉の固まりを飲み込む。そうして、真面目な顔のケニードと向き直った。

「お詫びにもならないけど、一つだけ、君に言っておきたいことがある」

「……なに？」

「君を保護して以降、クラウドール卿はできる限りのことをしてきた。君が休んでいる間も、君が知らないあらゆる分野で、あの人は最大限の努力をしている」

「……うん」

「だから、覚えておいて。彼がそれだけのことをしても、どうしても、どうにもならないことはあるんだ、って」

ケニードの声に、あたしはじっと視線を彼に注いだ。

ケニードは軽く笑う。どこか、寂しいような悲しいような顔で。
「人は、過去を取り戻すことはできない。すでに終わってしまったことを最初からやり直すことはできないんだ。だから、彼にもどうしようもないことが沢山ある」
あたしはその言葉を、一言ももらさずに頭の中にたたき込んだ。
これは、とても大切なことだ。そう直感した。彼は、今、大事なことを語っているのだと。
「だから、全部が終わった後に、救えなかった人がいたとしても…あの人に対して、絶対に『どうしてもっと』とは、言わないでほしいんだ。だって、あの人は、本当にいつだって最大限力を尽くしているんだから。……まぁ、もっとも、こんなこと言わなくても、君は絶対に彼を守ってくれると思うんだけどね」
ケニードの微笑に、あたしはちょっと戸惑った。
「おじ様は神様じゃないもの。全部を全部なんとかしてくれなんて、とても言えないわ。……でも、ねぇ、おじ様を守るって？　あたし、守ってもらってばかりだけど」
命を救ってくれた。いや、今もずっと救ってくれている。あたしはそのことをよく知っている。
けれど、あたしがレメクに対してできたことなど、何もないのだ。迷惑ばかりかけるだけで、彼のためになることなど唯の一つもできていない。
だからケニードの言葉が意味不明で、あたしは思わずそう問うた。
ケニードは笑う。
それはそれは眩しい笑顔で。
「いつだって君は守ってるよ。今はまだ、ピンとこないかもしれないけどね」
……やっぱり意味は不明だった。

2　特別な孤児院

クラウドール邸には、立派な応接室がある。
いや、あった、と言うべきなのかもしれない。
発見されたのは今から三日前。
屋敷内での自由行動を許された日の朝、埃まみれのそこをあたしが見つけたのだ。
応接室というだけあって、そこは玄関に近く、広さもレメクの寝室よりずっと広かった。
寝室の物より二回りは大きい暖炉に、立派な飾り棚。豪華なカウチと重厚なテーブル。埃で真っ白だった床からは、ちょっとカビくさいが立派な絨毯まで発掘された。
かつてはそれなりの威容を誇った応接室だったのだろう。だが、今ではそんな悲しい有様だ。
（……てゆか、いったいいつから放置されてたんだろうか、あの部屋は）
いつものごとく遊びに来ていたケニードと顔を見合わせ、あたし達は第一回大掃除大会を開催することにした。参加者は主催者二人きり。
ちなみにレメクは颯爽と逃亡しやがった。
それはともかく。まずは上から順にお掃除です。
頭に布を巻き、鼻と口も布で覆い、汚れてもいい服で藁の束を両手にそれぞれ持って大きくバンザイ。両手で藁束をヤッサモッサと動かすと、それこそ視界が埃で真っ白になった。汚い！　汚い！！
窓からもうもうと立ちこめる白く輝く埃に、近くまで様子見がてら徘徊、もとい散歩に来ていた熊も興味を惹かれたらしい。なにやってんだー？　とのっそりやってきた労働源を、あたし達は大喜びで捕獲した。
参加者一頭追加。

巨熊もびっくりの大男・バルバロッサ卿は、あたし達の奮闘ぶりに呵々大笑し、腕まくりも勇ましく手伝ってくれた。

その活躍はめざましく、部屋に長年放置され続けていたカウチやテーブルはあっさりと野外に移動。そこで豪快に水を浴びせられ、あの巨大な手が操る掃除用の布で綺麗に拭きあげられた。

その間にあたし達は天井と壁の埃を落とし、床を掃きあげ、もこもこの埃の山を麻袋に詰め込んで屋敷裏に放った。これは火を熾す際のよい着火剤になるので、暖炉用にとっておく。

この時点で夕方になったので、第一回掃除大会は終了。熊は「明後日に来訪する」と約束して去っていった。

ちなみに数日間は雨は降らないということで、カウチ達は野外放置のままである。

そして今日、昨日のうちに天井と壁を拭きあげたあたしとケニードは、バルバロッサ卿の到着を待ちながら最後の床拭き作業をしていた。

家具を全部外に放り出しているので、床磨きも楽である。

それぞれモップを片手に「とててててー」「つとととととー」と足音も軽く上辺を拭いた後、雄叫びも勇ましく力強いモップ掛け第二弾。次に乾拭きをしてから、再度モップ掛け。

床がみるみる綺麗になってゆく。

「なんていうか、ケニードの家事スキルはたいしたものだわ。いいお嫁さんになるわよ、本当」

キラリと光る労働の汗を拭って、あたしは同志を振り仰いだ。

汗まで爽やかなケニードは、汗を拭いながら白い歯をキラリ。

「そうかい？　それほど手際は良くないんだけどね」

いやいや、力の入れ方も端から端まできちっと拭きあげる様も、実に堂に入ったものである。

しかし、ケニード。何故君は「いい嫁さん」でそんなにウレシソウな顔をするのだ？

「ベルこそ、手慣れたもんだね」

「え？　そりゃあ、あたしは一応、これでお金もらってましたから！」

えへんぷぃ。

胸を張ったあたしに、ケニードはほんわかと笑った。

「じゃあ、ベルは先輩だね」

「えへへへー。でも、上等の品を洗ったり拭いたりとかいう経験無いから、お皿洗うのとかちょっと恐いの。おじ様の家にあるのって、ほとんど銀食器なんだもん……」

照れ笑いをしつつ、しょんぼりと肩を落とすと、ケニードに軽く頭を撫でられた。

「銀食器の扱いは、本当なら執事がやる仕事だからねぇ……僕もあんまり上手くないから、今度クラウドール卿に習おうか！」

「うん！」

レメクスキスキ同士のあたし達は、満面笑顔でモップ片手に走り回った。

そこへのっそりと出現する大きな影。

「なーんか、旦那のいぬ間にウフフアハハな世界になってねぇか？」

「あー！　いらっしゃーいバルバロッサ卿～！」

「いらっしゃーい！」

パァッと顔を輝かせて駆け寄るあたし達に、バルバロッサ卿がちょっと遠い目になった。

「……あー、いや、猫が二匹だからそれでいいのか……」

どういう意味！？

「バルバロッサ卿、お茶飲みませんか？　あと、乾拭きが終わったら家具を入れていただきたいんですが、かまいませんか？」

あたしが熊に対し第一次戦闘態勢『飛びかかり三秒前』をとるより早く、ケニードが庭をチラ見しながら声をかけた。その手には、休憩用に置いてあったポットが握られている。

熊は破願した後、あたしを見てちょっと眉を下げた。

「おぉ、そりゃいいけどよ。お、ありがとさん。……それより、こ

ら、嬢ちゃん。おまえさんはそんなに走り回ってよかったっけか？」
お茶をすすりながら言う熊の指摘に、あたしはギクッと後退った。
「そ、それなりにいいわよ？」
「……それなりに、かよ……まぁ、後でレメクに叱られる範囲内ならいいけどよ。あんまり無茶すると、ここにいられなくなるんだから、気をつけろよ？」
その言葉に、あたしはちょっと瞬きした。
……あれ？　なんか、気になる言い方をしたような？
じーっと見上げるあたしに、バルバロッサ卿は男臭いウィンク。
「ヤツのアレには、俺も大昔に世話になったことがあるからな」
なんですって！？
あたしは驚いた。
この熊男も昔、あの恩恵にあずかったと！
驚くあたしと、ニヒルな笑みを浮かべる熊男に、ケニードだけが理解できずに小首を傾げていた。
いや、普通、『あの事』を知っている人なんていないはずだから、ケニードの反応のほうが当然なのだが。
そ、それにしても……
（おじ様……ものすごい極秘事項だってわりに、なんかポンポン使ってる？）
まぁ、目の前で人が死にかけていて、放っておけるような人にはみえないから。やっぱりバルバロッサ卿のときも、やむにやまれぬ感じで使ったのだろう。
あの闇の紋章を。
そ、それにしても、なによりも、そう、アレだ！
あたしにとって重大なのは、なにも極秘事項うんぬんだからではなく、
「バルバロッサ卿もおじ様に添い寝してもらったの！？」
ぼぷっ！
あたしの渾身の詰問に、バルバロッサ卿が盛大に吹いた。

ぎゃあ！　汚いッ！
「んじゃそりゃあ!?　てゆか、おまえさん添い寝されてんのか！？　あの男に!?」
とっさに飛び退いたあたしをデカイ手が捕獲。そのままものすごい形相で問いつめられて、あたしは目を丸くした。
エ。なんでそんなにビックリ？
「されたことないの……？」
「しねぇよ普通！　ねぇって！　つーか、ぇえぇ？　やってんのかよマジで！　うわ、すげぇびっくりだ！　……はっはぁ。なァんだ、なんだかんだ言って、あの野郎もファンシーなことやってんじゃねェかー」
「いいなぁ……」
にやぁ、と某色気魔女にそっくりな笑みを浮かべるバルバロッサ卿と、心底羨ましそうなケニードの声。
……いや、ケニード。ちょっとその反応はどうかと思うわよ。スキスキ同盟としてはともかく。
「だってほら、そのほうが、えーと……効率いいし？」
言葉をぼかしたあたしに、バルバロッサ卿が苦笑する。
「まぁ、そうなんだろうが……いや、俺の場合は、俺自身じゃなかったし。っつっても、添い寝は無かったぞ」
「え、あ、そ、そうなんだ？」
「おうよ。無かったはずだ。……いや、無からにゃあならねぇ。あったら問題だ。あぁ、全く。……ちと、今度腹ぁ割って話さにゃなねェな……」
……なにか、よけいなネタをふってしまったようだ。
「まぁ、そのことはいい。……んで、嬢ちゃんよ。レメクの野郎から説明は受けてるだろうけどな。まだ体が万全じゃねぇんだから、んなに力一杯掃除なんかすんじゃねぇぞ。おまえさんが倒れたら、レメクのほうにしわ寄せがいくんだからよ」
レメクにしわ寄せが。

痛恨の一撃をくらって、あたしはよろよろぽたん、と床に撃沈した。
「うぅ……動けば動くほどおじ様に迷惑が……」
「い、いや、マテマテ。迷惑だとは思ってねーだろうし、ほら、そりゃあ掃除してくれるってのは、あの男にとっちゃ嬉しことだと思うけど心配っつーか、なぁ、ほら？」
「そ、そうだよ、ベル。クラウドール卿はベルのこと大事にしてるから、元気でいてくれれば嬉しいし、疲れて倒れちゃったら悲しいなーっていう話しだよ、ね？　ね？」
「そうだぜ、お嬢ちゃん。ンな疲れて寝転がった子猫みたいになっちゃあ、レメクが帰ってきたときにびっくりするだろー？」
「猫じゃないーッ！」
すかさず飛び上がって抗議したあたしに、猫じゃん、と熊がぼやく。
ぅあああッ熊のくせにーッッ！！
シャギーッとあたしが飛びかかる。が、その体が熊に到達することは無かった。
「……養生させようと思うのなら、患者を興奮させないでいただけませんかね」
飛びかかるあたしを空中捕獲し、片腕で軽々と抱え込んでみせたのは、
ああ！
あああああッ！！
「おじ様ぁあああッ！」
生レメク！
生レメク！！
あたしは狂喜乱舞ですばやくレメクの体に張りついた。
ふんふんふんふんふんふんふん！
「……なぁ、レメク」
「……なんです」

ふんふんふんッ！
「……おまえが一番、患者を興奮させてねぇか？」
「……」
レメクが視線を逸らしたのがわかった。
しかし、あたしは張り付いたまま離れない。ひたすら彼の顔の周りや首のあたりで、死にものぐるいに幸福を補充する。
ふんふふんふんくんかくんか！
実に三日ぶりの残り香ではない生の匂いは、あいかわらずとっても素晴らしかった。ああぁ～幸せぇ～んっふ～ん。
あたしはギューと爪までたててしがみついた。
掃除が始まった頃あたりから、忙しいからと夜中に帰宅・早朝に外出を繰り返していたレメク。だから、生の彼に貼り付けるのは本当に久しぶりなのだ！
ふんふんふんふんふんッッ！！
「……長ぇなぁ」
「……」
どこか遠いものを見る口調のバルバロッサ卿。
無言で伸びてきたレメクの手が、掴んだあたしを引っ張った。
しかし、それで剥がれるあたしではない。
ぐいっぐいっ……
ふんふんふんっ！
ぐいぐいっ……
くんかくんかっ！
ぐいっ……
ふんふんふんふんっすぅーっ！！
「……」
「……」
……あ。諦めた。
「……ところで、バルバロッサ卿。頼んでいた件はどうなりましたか？」

背中を向けてブルブル震えていた巨熊に、レメクが冷ややかな声でそう問う。

あたしは至福の表情で、匂い吸引に頬ずりをプラスしながら、チラッと別の所に視線を向けた。

あ。ケニード。

ものすごく羨ましそう。

「ひひひっ、あー、うん。いけるいけるっ」

バルバロッサ卿は口元に笑いの余韻を残しながら、レメクの問いに頷きを返す。

「そうですか。では、後のことはよろしくお願いいたします」

熊の返事に、レメクは綺麗なお辞儀をした。

熊は「任せとけ」と言わんばかりのサムズアップ。

それを見てから、あたしはレメクの首に顔を埋もれさす形に固定する。

そして問うた。

「おじ様、お仕事終わったの？」

それは、獲物、いや、捕獲対象の確保を狙っての問いだったのだが、

「いいえ。まだ終わってはいませんよ」

……あえなく目論見は潰えました。

あたしとケニードは互いに目だけで落胆を語る。

……しょんぼり。

「あと数日もすれば、周りも落ち着きますよ」

それは慰め言葉であるらしい。ぽん、と軽く背中を叩かれて、あたしはこっくりと頷いた。レメクの息があたしの側頭部にかかる。

……耳がくすぐったいにゃ。

ぐりぐりと頭をこすりつけると、ぽんぽんとまた背を叩かれた。

「手はもう打ってるんだろう？　ちょっとぐらい家にいたっていいんじゃねぇか？」

どんよりと曇っているあたしとケニードを見て、熊がレメクにそ

う進言する。だが、それでうんと頷くようなレメクでは無いのだ。
「手は打っています。ですが、まだ足りないでしょう。一人を逃すと次に繋がる可能性がありますからね。今回の場合、事が事ですから、徹底的にしないといけません」
「まぁ、動いた金が金だしなぁ……」
その声にあたしも遠い目になった。
リメオン金貨数千万枚にものぼる、あたしにはちょっと想像もつかないような巨額の金。途方も無さ過ぎて理解もおいつかないが、あたしがもたらした情報で明るみになった今回の事件は、そんなとんでもないお金の動いた事件だったらしい。
「誰かのポケットマネーがくすねられた程度ならまだしも、横領されたのは『国費』ですからね。……金額もさることながら、国の運営費が誰かの懐に消えるようなことを許していては、いずれ国は滅びます」
く、国が滅ぶとまで言われた。
あたしはギョッとなって顔を上げる。
ケニードを見ると、うん、と頷かれた。
（そ、そうなんだ……）
事はものすごく大事だったのですね。一介の一貧民にはさっぱりわからないですが。
「まして、福利厚生費、か……」
「……頭の痛いことに、衛生課の資金もかなり闇に消えてましたよ」
レメク、嘆息。
調べれば調べるほど、いろいろトンデモナイ事実が明るみになっているらしい。
あたしはお疲れモードのレメクを見て、元気づけようとその首に顔を押しつけた。
がぷ。
「！？」
なぜかレメクがギョッとなった。

「何事です！？」
こちらが何事だと訊きたくなるようなビックリ声。
「もぅごーぉ」
「わ、私は食べ物ではありませんが？」
「もごもご。もごーぉ」
「……人間の言葉でお願いします」
がぽ。
あたしはガップリかぶりついていた口を離して、大真面目な顔で不審気なレメクに向き直った。
「元気注入」
「いりません」
素早く拒否された。
ガーン！　とショックを受けたあたしに、レメクがちょっと怯む。
「だいたい、なんですか、あの方法は。私はついに、あなたに食料扱いされたのかと思いましたよ」
し、失礼な！
だいたい、ついに、って何だ！？
「べ、別に、美味しそうだなぁーとは常々思ってるけど、食いちぎろうとかは思ってないもの！」
レメク、逃げ腰。
「嬢ちゃん……それはちょっとフォローになってねぇなぁ……」
「ベル……言い訳はいけないよ」
ああ二人にまで遠巻き視線になられた！
「だ、だっておじさまいい匂いがして美味しそう……い、いや、それはともかく！　だってほら、元気のない生き物に、はぁーって息吐きかけない！？」
「……いや、普通に、そんなことしても生き物は元気にならねぇから。とある下のイキモノならともかぎゅむ」
「そうだよ。局地的一部部分に対してならともかぎゅむっ」
「あなた方は、あとでちょっとお話があります。覚悟しておくよう

に」
あれ？　レメク、なんで二人の口を塞いでるの？
支えをなくして宙ぶらりんになったあたしは、二人の口をそれぞれ片手で塞いでいるレメクの絶対零度の表情に首を傾げた。
なんかおかしな発言でもあったんだろうか？
……あ。ケニード。ちょっとウレシソウ。
「……ベル、理由はわかりましたが、先程の方法は今後決してしないように」
えー。
「しないように」
……はい。
ぷらーんとぶら下がったまま、あたしは頷いた。
それに満足したらしいレメクが、改めてあたしを抱え直す。
「だいたい、なんでいきなり『元気注入』なんですか」
「だっておじ様、疲れてる顔してたから」
レメクがちょっと驚いたような顔であたしを見た。
あたしは首を傾げる。
「だから、あたしの元気をおじ様にハァーッと挿入を」
「入りませんし、そもそも元気にならないといけないのは私ではなくあなたです」
む。そういえば、そうでした。
口を閉ざしたあたしに、レメクはちょっと苦笑った。
「疲れていないと言えば嘘になりますが、あなたがそう心配するようなことではありませんよ。解決のメドはたってますし、あとは最後の詰めだけですから。それが終われればゆっくり休めます。気を抜くことはできませんから、しばらくはこの状態ですが……」
こつんと額を顎にぶつけると、レメクがぽんとあたしの背中を叩いた。
「急いで事をなさなくてはならない理由が、沢山ありますから」
やさしい手が、背を撫でてくれる。

宥(なだ)めるように。
慰(なぐさ)めるように。
「……気づいていますか？　ベル。あなた自身のことに」
あたし？
首を傾げると、レメクは目を細めてあたしの頭を撫でた。
「夜眠る前、寝ている時、朝目が覚めた時。あなたの脳裏を占めるものです」
あたしは口元をきゅっと引き締めた。
レメクがこういう目になったときは、それはとても大切な話の時だ。
だから、ここで言う『脳裏を占めるもの』は、レメクの匂いとかレメクの体温とかレメクの胸筋とかでは無い。
それ以外にあたしの頭の中を占めていることなら、答えは一つだ。
「あなたの寝言は全部、孤児院のことばかりですよ、ベル。リシャ、メム、ナッツ、アンナ、リト、プリム、メアリー、サン、エマ、カッフェ、マルク……あなたが呼ぶ名前は日によってまちまちですが、ずっと心配していることを私は知っています」
レメクの口から出たよく知ってる人達の名前に、ギュッと心臓が締めつけられた。
一人一人の顔が浮かぶ。
あの孤児院にいまもいるだろう仲間達。
あたしの血の繋がらない兄弟。
「自分だけ先に助かってすまないと、ずっと夢の中で謝ってましたね。……頼みますから、せめて寝ている時ぐらいは、ゆっくりと心身共に休んでください。少し時間はかかりますが、できるだけ全員助けますから」
その言葉に、あたしは瞬きし、次いでぎゅっと唇を引き結んだ。
レメクはいつも精一杯のことをしてくれる。
ケニードにも言われた。……うん。わかってる。言われるまでもないことだ。

だってこの人は、いつだって一生懸命な、優しい人だから。
「うん」
感謝の印にぐりぐり頭をこすりつけていると、それまでこの種類の会話では傍聴者となっていたケニードが、ちょっと考える顔になった。
「ベルのいた孤児院って、確か王都の南区の……？」
その声に、あたしは顔を上げる。
真剣な顔のケニードに、こっくりと頷いた。
「うん。港の……ちょっと中に入った場所にある孤児院なの。場所的には南区だったと思う。建物自体はけっこう大きいのよ。でもすごく古いの」
ケニードはやはり真剣な表情のまま考え込む。頭の中の地図を広げていたのか、すぐに渋い顔になった。
「王都の孤児院は、たいてい建国初期に建てられたものだからねぇ……。一番古いのが大聖堂の内部に建てられたやつと、南区の三番街に建てられたやつだったかな。この二つは同じ王の時代に建てられて、その後、孤児の数が増えるにしたがって、その時代時代で建造されていったはずだよ」
……そうなんだ。
「孤児院って、国が建てるのよね？」
あたしの問いに、レメク以下三名が「いいえ」と即座に首を横に振った。
「どちらかといえば、国ではなく貴族が建てますね。富める者は富めざる者に奉仕を行う、が原則ですから」
「それに、孤児院にどれだけ寄付をしたかによって、富裕ランキングみたいなのが決められるんだよ。まぁ、公式なものじゃなくて、夜会で噂される程度だけど。これがけっこう馬鹿にならないから、気位の高い人達ほど寄付をするんだよねぇ」
「孤児院の建設にゃあ、べらぼうに高い金がかかるからな。ボロ屋を建てれば貴族の沽券にかかわるから、やっぱり最初は頑丈で立派

なのを建てる。しかも孤児院の名前ってのは、その貴族の名前をとるのがほとんどだからな。後世まで残る『巨額の寄付をした証』になるから、めちゃ金持ってる貴族は孤児院を建設する。国が関わるのは、その運営が悪化した時と、戦後だな」

そ、そうなんだ……

あたしはびっくりして三人を見た。

自分が世話になっている場所ではあるが、そんな事情は知らなかった。

「中にいる者には、誰が造ったかよりも、どう生きていくかのほうが問題ですからね。知らなくても当然です。せめて文字を教える者がいれば、門に書かれた名前を読み取ることもできたでしょうが……」

「それを言われると、神官の端くれとしては耳が痛いな。うちの連中にきちっと話が通ってたら、最低でも二年前からは文字の教育ができたはずなんだからよ」

「……いっそ、あなたを通して通達したほうがよかったのかもしれませんね」

「よせやい。俺ぁ大聖堂のほうの神官だ。大神殿のほうにまで足を伸ばしたくねぇよ」

二人の会話に、あたしは首を傾げた。

大神殿とか、大聖堂とか、何か関係あるんだろうか？

理解不能で首を傾げているあたしに、ケニードがレクチャーしてくれる。

「王都には宗教の拠点となる場所が二つあるんだよ。それがクレマリス大神殿と、ファルマリス大聖堂。どちらも同じ教会の建造物なんだけど、内部がちょっとややこしくてね。大神殿にいるのは国のことや教会内部に関連が深い神官、大聖堂にいるのは市井に関連が深い神官、って感じに覚えておくと早いかな。大神殿は民間に解放されてないけど、大聖堂は開放されてるだろう？」

「うん。大聖堂のほうには、時々、どうしようもないぐらいお腹す

いた時とかに御飯もらいに行ったわ」
「……うん。そんな風にね、民に施しをしたり、お祈りや行事の拠点になるのが大聖堂で、そこにいる神官も、そっち方面に特化した人が多いんだ。で、大神殿の方は、国の行事や、教会内部の人事とか、そういうことに特化した人が多い。国の方針で何かするときに、まず連絡が行くのも大神殿。そこで仕事内容が振り分けられて、各地にいる神官に通達がいく。……バルバロッサ卿は大聖堂のほうの大神官だからね。大神殿の神官に情報がつぶされたりすると、今回の場合のように何も知らないままでいたりするんだ」
「教会もいろいろあるのね……」
「もともと、きっちりとした人が体系を作ったわけじゃないからねぇ。いつのまにかそうなってた、しかも長く続いたものだから変更が難しい、っていう状況だから。陛下や猊下も困ってたよ。もっとシンプルでわかりやすい内部構造にできないのか、って」
う、うーん……国の上のほうのお話はよくわかんない……
軽く混乱しているあたしの頭を撫でてから、レメクが嘆息をついた。
「陛下が猊下に話をされ、猊下が承諾された。その時点で、教会は孤児院に赴いて文字を教える義務を負いました。一番上にいらっしゃる方がそう決めたのですからね。これに逆らうことはできません。……ですが、猊下もお忙しい身。全部を確認するわけにはいきませんから、きちんと実施されているかどうかは部下からの報告を信じるしかありません」
「てことは、教皇様、嘘つかれちゃってたんだ？」
「まぁ、身も蓋もない言い方ですが、その通りです。いくつかはきちんとした内容でしたが、大半が偽りの報告でした。川は上流から下流に流れますが、命令やお金も同じように上から下へと流れます。どこで堰き止められていたかは調査でわかりますが、流れた金の行き先はあまりにも支流にまで行きすぎて、把握が難しい」
「だから、おまえさんが忙しくなる、と」

バルバロッサ卿の声に、レメクはさらに嘆息をついた。
「陛下の『真実の紋章』がある分、私もだいぶ楽をしている方でしょうが……」
「件数が半端じゃねぇからなぁ……。悪いな。うちの神官どもに、もちっと使えるヤツがいれば、おまえさんの手助けができるんだが……」
「現状を鑑みるに、今はかえって邪魔ですね。あなたが信用した神官なら大丈夫でしょうが、あれだけ腐敗しきった場所もなかなかありませんからね……」
レメクがさらに深々と嘆息。
あたしはその様子を見て、その首に視線を固定した。
ここはもう一回、がぷっと……
「……ベル。元気注入はいりませんから」
……先手打たれた。
「国が長く平和だと、あちこちが腐るからなぁ……。戦争はごめんだが、内部腐食も嫌なもんだ」
「余裕が出てくると、悪い考えをおこす余裕もでてくるってことなのかなぁ……。どうせなら、もうちょっと建設的なことを考える余裕を増やせばいいのに」
「困ったものですね」
三人の大人の会話に、あたしは「うーん」と唸った。
あたしがもし、忙しくもなく御飯もちゃんと食べれるようになったとき、どう動くか。
まぁ、今のような状況の場合よね。あたしにとっては。
健康にならないといけない、っていう特殊条件は置いておいて、それ以外の場合はどう動くか。
まず、お金をためる。これは沢山あっても問題ないし、あるほうがいいから貯めまくる。
次に、使うべき所にだけ使う。無駄遣いはしない。
使うべき所っていうのは、御飯だったり服だったり……つまり衣

食住だ。
　あたしの「余裕があるならどう動くか」はそんな程度なのだが、お金持ちの人や教会の上の人はちょっと違うんだろうか？
「いかにそのお金を稼ぐか、そしていかに使うか。そこが違うのですよ」
　レメクの声に、あたしは首を傾げた。
「そうなの？　どんな風に？」
「簡単に言えば、あなたの場合、お金を稼ぐというのは労働をして稼ぐ、という意味ですね？　彼らの場合も基本的には同じですが、中には楽をして大金を得ようとする者もいます。どういう風にするかは、まぁ場合によって多少変わりますが……ある所から本来得る権利もないお金をとってくる、という方法が多いですね。今回のように、国が用意した費用を横領するケースです」
　む。正統な労働報酬以外のお金を、そうやって得ようとするなんて。
「それって、泥棒よね？」
「ええ。もちろん泥棒です。許されざる犯罪ですよ。そしてその使い道ですが、衣食住に基本を置くとして、まず食事。これを王侯のごとく豪華なものにするとどうでしょう？　普通では考えもつかないような金額が動きますね。次に衣類ですが、これも豪華なものに変えればいくらでも金額が上がります。最後に住居」
「……豪華な家を持ったり、立派な家具は以下同文、ってことなんだ」
「そうです。必要な時に、必要な分だけ使うあなたのような賢い人なら、こんな馬鹿なことはしないでしょう。ですが、彼らはそんな愚かなことを平気でするのですよ。自分のお金でも無いというのに、ね」
　あたしは呆れた。それはなんて愚かで情けなくてずうずうしい振る舞いなのだろうか。
「そりゃ、あたし達だって孤児院にお世話になってたり、自分のお

金じゃないものに寄りかかってるけど……それで贅沢しようとは思わないわよ？　い、いや、そりゃあ、もうちょっと御飯の回数が増えればなぁ、とか。服の配給ないかなぁ、とかは思ってたし、それは贅沢なのかもしれないけど……」

あたしの発言に、なぜかレメクはちょっと眉を下げた後、よしよしと頭を撫でてくれた。

「あなたのそれは、贅沢ではありませんよ」

目が温かい。

あたしは嬉しくなって頭をこすりつけた。

ごろごろごろ。

「まぁ、昔の嬢ちゃんの状況は、聞きしに勝るものがあるからなぁ……」

「ぼくらの寄付金も、きちんと運営にはあてられなかったってことだよね」

嘆息をつくバルバロッサ卿とケニード。上流階級である彼らは、あたし達のような孤児のためにいくらかの寄付をしてくれていたのだろう。

それなのに、あたしが『陰干しの乾物』のような状態だったのに、少なからずショックを受けていたらしい。

「孤児院の子供で、栄養失調をおこしていない子はほとんどいませんでしたよ。大聖堂と、西区の一部の孤児院だけが、例外でしたが……」

「大聖堂のは、あれだろ？　やんごとなき方々の御落胤が集まってる上、教会関係者になる連中が多いから、おのずと金が正常に動くってやつ。孤児院の経営自体が教会に関係してくるから」

「そうなの？」

孤児院にもいろいろあるらしい。

あたしの問いに、バルバロッサ卿はちょぴり視線を逸らしながら曖昧に頷いた。

「あー、まぁ、嬢ちゃんはまだちっさいから、そのあたりの詳しい

事情は知らなくていいんだが……。大聖堂の所にある孤児院は、国が建てた特別な孤児院の一つだ。ここには、貴族の……えーと、貴族と関わりの深い連中が多く集まる」

……ナゼ言い直す？

「というか、集められる。なので、寄付金も莫大な金額になる。……ちなみに、基本的に貴族が造った孤児院でない孤児院は、国営になるわけだ。で、その場合、国と教会が共同で経営にあたる」

ほぅほぅ。

「この国では二つあるな。どちらも国ができてほんの初期の頃に建った最古の孤児院だ。歴史はあるし、特別な名前で呼ばれるしで、ちょっと普通の孤児院とは違う扱いを受ける」

そんな特別な孤児院があったのか。

感心したあたしに、なぜかレメク以下三名が視線を固定する。

その視線の先にいるのは、あたしだ。

エ。何事？

きょとんとしたあたしに、レメクは真面目な口調で言った。

「わかりませんか？　同じ理由で建てられた二つの孤児院。一つは大聖堂の近くに、もう一つは南区に配置された、国営であり、教会も関連する特別な場所」

わからない。

目をぱちくりさせたあたしに、レメクは軽く目を伏せる。

「その孤児院の名前は、どちらも同じです。かつて降魔大戦の折、興国の祖でもある指導者ナスティアを助け、強大な魔を滅ぼしたとされる偉人の名前を冠しています」

そうして瞼を上げた時、その黎明色の瞳には強い色が浮かんでいた。

「聖ラグナール孤児院。……ベル、あなたがいた孤児院ですよ」

3　賢者と愚者

聖ラグナール。

それは建国史に幾度となく書かれる、偉大なる魔女と騎士の名前である。

二人がともにラグナールと呼ばれることから、名ではなく姓であり、また彼らが夫婦であるとする説が一般的だが、それを裏付ける文書は未だ発見されていない。

伝説とされるほどに有名な彼らではあるが、時代が詳しい記録を奪っていた。

彼らが活躍するのは、大陸歴六百七十年頃。群雄割拠の時代である。

常であればたとえ戦乱の最中といえども、史実を残す者が多くいただろう。だが、この時代には常の『戦乱時』にはない異物が存在した。

生き物としての異常性、生態系としての異常性、そしてその恐ろしさから人類の敵として認識された異物。

『魔族』の来襲である。

どこから現れ、どのようにして増え、なにゆえに生きとし生けるものに襲いかかるのか。

なにもわからないままに、人々は戦った。

これが後に「降魔大戦」と呼ばれる戦争である。

出現地は、現ナスティア王国の北西。シャーリーヴィの森よりもさらに西に進んだ場所。そこにある巨大な大森林だ。

今をもって尚「魔の森」と称されるその場所から、魔族は突然現れ、周囲の生き物を襲いはじめた。

「魔族がどこから生まれてきたのか。また、どのような生き物であるのか。それらすらほとんどわからない状況下で、戦争が始まったのだとされています」

あたしを膝の上にテンツクと座らせて、レメクが低い美声でそう語る。

書物など読んだこともなく、物語とかいうものもほとんど聞かせてもらったことのないあたしは、目をキラキラさせてその話に聞き入った。

降魔大戦当時というと、今から軽く四百年は前のことになる。

その頃、このあたりには国というものがまだ無かったらしい。かわりに大小さまざまな部族が点在しており、それなりに豊かに暮らしていたのだとか。

その部族の人達というのが、剛胆というかなんというか、とにかく超猛者ばっかりだったらしい。

で、単発の来襲は軽く撃退できたが、時折、弱い者……とりわけ、心身が健常では無い者が犠牲になった。まだ力の弱い子供や、お年寄りも同じく、ふと目を離したすきに犠牲になったらしい。

これはいけないと危機を覚えた首領達は、周辺の他部族と連絡をとりあい、この突然の災厄に連携をとりあおうと持ちかけた。

だが、何十もにもなる部族の頭が話し合っても、なかなか意見がまとまらない。

それもそのはずで、狩猟関係では狩り場でももめたりした者同士なのだ。いきなり一致団結するはずもない。

今の時代なら『同盟』と呼ぶだろうその首領達の結束も、あっという間にもろく崩れ去るだろうと当時の誰もが思っていたのだそうだ。

だが、その偉業を成した者がいた。

それがナスティア。クラヴィス族の美しき女傑である。

金の髪に、煌めく瞳。輝く美貌に、明晰な頭脳。そして卓越した剣技をもっていたという超人的な彼女は、ウゴウゴ言って動かない男首領衆の尻を蹴飛ばして連合軍を作り、凄まじい勢いで魔物の群れを蹴散らしていった。

とはいえ、ウゴウゴ男衆がまともに動かない時期もあったのだろ

う。快進撃に次ぐ快進撃、とはいかなかったらしい。
そんな時、ナスティアの助けとなったのが、どこからともなくやって来た伝説の人物。古の魔法を使う魔女と、その騎士の二人組だった。
彼らの活躍はめざましく、襲いかかる数多の群れを幾度も撃退し、その群生地では鮮やかに殲滅していったという。
いかにナスティアが卓越した剣士であり、強力な紋章術を行使する術者であっても、一人では全てを成すことはできない。
また、いくら自軍に人が沢山いても、上手く連携をとりあって動ける『仲間』が少なければ、やっぱり物事は上手く動かない。
二人の偉人は、ナスティアがそれを整える時間を稼いでくれた。
日になり影になり彼女を支えた二人のおかげで、ナスティアは三十もの部族をまとめることに成功し、徐々に苛烈になっていく魔族との戦いでも常に優位にたてるようになった。戦えば戦うほど指導力を増していくナスティアに、他部族も次第に心酔していったようだ。
その状況を作るのに、かの二人がどれほどの役割を担っていたか。彼らがいなければ、今日のナスティア王国は無かっただろうと言われる所以である。
戦いの後、魔物が出現していたというポイント（魔穴と呼ばれるらしい）を封印したナスティアは、救国の英雄である二人を厚く遇した。
だが、二人はこの国に留まることも、またいかなる金銭による報酬も受け取らなかった。
かわりに、ナスティアにこう言ったのだという。
「孤児となった者を保護してやってほしい」
と。
ナスティアはこれを承諾した。
そして、王として最初にやった行事が、戦争で親を亡くした子供を保護し、孤児院を建設することだった。

それが、聖ラグナール孤児院。
偉大なる英雄の名を冠された、王国最古の孤児院である。

※　※　※

「最初に建設されたのは、現在の南区にある孤児院です。つまり、元祖と呼べる聖ラグナール孤児院は、あなたがいた孤児院のほうなのですよ」
そう締めくくったレメクに、あたしは驚くやら感心するやら呆れるやら。なんとも複雑な気持ちで頷いた。
そんなにすごい由来があの孤児院にあったとは。にわかには信じられない。
だいたい、それにしてはずいぶんひどい所だった気がするのだが……？
「……あの孤児院が？」
不審をにじませて問うたあたしに、レメクは真面目な顔でコックリ。
「ええ。あの孤児院が」
そんなに風に頷かれれば、納得するしかない。レメクの言うことは正しいのだから。
「ん～。じゃあね、どうして南区にわざわざ建てたの？　位置的に中途半端じゃない？　それに、二つ目を作った理由って何？」
あたしが首を傾げると、レメクは視線を前にいるバルバロッサ卿へと流した。
紅茶をポットから豪快に飲んでいたバルバロッサ卿は、ん？　という目であたし達を見る。
ちなみに、あたし達がいるのはクラウドール邸の前庭である。
春にはまだ早いとはいえ、昼の日差しはそれなりに暖かい。庭には搬入前の家具達が座っているということで、それを利用しての早めのティータイムである。

カウチに座っているのはレメクとケニード。
レメクの膝の上に、あたし。
バルバロッサ卿は、おっきいので一人で別の椅子にデンと座っている。
テーブルの上の紅茶はめいめい好きな銘柄だが、あたしとレメクのお茶はメリディス健康茶だったりする。
レメクは相変わらずお疲れモードのようだ。
「まぁ、なんつーか……昔はなぁ、今の南区三番街あたりが王都の中心だったんだよな。当時は王都もこんなにデカくなかったからなー」
「へぇ……」
てことは、今の王都は当初よりもずっと大きいわけだ。
「ん～と、確か人が急激に増えたのが、建国十周年の頃だっけか？人が増えれば街もデカくなる。当時の王宮ってのは、今の貴族の屋敷に毛が生えた程度のもんだったらしいから、その頃に王宮を新たに建設したらしい。で、それにあわせて教会の大神殿も建築。んでもって、ついでにそこに聖ラグナール孤児院も新築」
あらら。
バルバロッサ卿のレクチャーに、あたしは呆れた。
「じゃあ、当時の孤児院の人もそこに移動したの？　てゆか、それだと移転っていう形になるんじゃないかしら？」
「いや、残念ながら『移転』じゃなく、『新たに孤児院を作った』んだよ。まぁ、なんつーか、孤児の数が年々すごい勢いで増えてたみたいでなぁ……孤児院が一つじゃ全然足りなかったらしいんだよな。だから新しく作った、と。作ったのは国で、これまた戦災孤児をひきとる為のものだったので、同じ聖ラグナールの名を戴いた、ってわけだ」
「？」
バルバロッサ卿の言葉に、あたしは首を傾げる。
戦争はとっくに終わったのに、終わってからもまだ孤児が増える

んだ？
「戦時中の怪我が元で亡くなる人、というのも珍しくはありませんからね」
　目をパチクリさせていたあたしに、レメクがどこか静かな眼差しで言う。
「戦争というのは、終わればそれで全てが『おしまい』になるものではありません。後々まで、深刻な傷跡を残すのですよ」
「傷跡……？」
　あたしの疑問にピンポイントで答えてくれながら、レメクはどこか憂鬱そうな顔になる。
「当時の詳しい記録がほとんどありませんから、少ない資料を寄り合わせての推測になりますが……おそらく、降魔大戦での死者数および大戦が原因で心身に異常をきたし、通常よりも早くお亡くなりになった方というのは、当時の全民族の半数以上にのぼるでしょう」
「そ、そんなに……？」
「ええ。少なく見積もっても、半数は堅いとみられています。文献が残っていれば、もっと詳しいこともわかったのでしょうが……」
　なんだかとても残念そうだ。
　ふぅん、と相づちを打ったあたしの横で、ケニードがちょっと遠い目になる。
「戦いに赴くのは、成人した男女だからね。彼等ないし彼女等が亡くなれば、当然残された子供は路頭に迷う。国が保護しなかったら、今頃どうなっていたか……」
「そういう意味で英雄様は名前の前に「聖」の字を入れられるんだよな。教会が正式に聖人と認めた最初の一組だ」
「その聖人様のお名前を戴いたのに、うちの孤児院はあんなんだったわけだ」
　あたしの声に、大人三人はそろって苦笑顔になる。
「賢者はなかなか生まれませんが、愚者はいつの時代にもいるものですからね」

「なんなら、全部終わってから好きなだけ真相を聞かせてやるぜ。聞いてて楽しいもんじゃないだろうがな」
「むしろいつの時代から腐敗していったのか、記録書をチェックしたいですよね。クラウドール卿。なんとか入手できませんか？」
「院の記録書ですか……拠点に乗り込めばなんとかできますが、今の段階では、燃やされないように祈るしかできませんね」
「ということは、まだ院の中に保管されてるんですね？」
「ええ。院長の部屋からのみ通じている隠し部屋の隠し金庫、三つあるうちの一番左側の黒い金庫に保管されています。鍵は暗号タイプで、最初が１１９１１９。次が１１０１１０です」
「……どうやって調べたんです、それ」
スラスラと言われた情報に、ケニードが呆気にとられた顔で呟く。
レメクは苦笑して「秘密です」と答えた。
「ちなみに、院長の部屋と、その隠し部屋への通路はわかってるんですか？」
「もちろんです」
……もちろんなんだ。
だが、今度もその情報を教えてはくれなかった。
ただ苦笑して、期待に目をキラキラさせているケニードを見る。
「文書は、彼らを捕まえてから押収しないといけません。盗んでしまっては、後々面倒になりますから」
途端、ケニードががっかりした顔になった。
どうやらこっそり盗んでしまおうと思っていたらしい。
……それも犯罪じゃないのかなぁ？
「盗まれた文書は、公式の情報として扱うことはできません。『盗まれた』『改竄された』『これは陰謀だ』などの言い訳を相手に用意させることになりますから、下手なことはしないように」
「……はい」
しょんぼりと肩を落とすケニード。しょげた我が同士殿に、あたしはテーブルの上の林檎を差し出した。

ケニードがちょっと笑って受け取る。
「一応、知り合いに見張りを頼んでいます。異常があれば彼らから連絡がくるでしょう。今のところ全て順調に進んでいますから、数日後にはあなたに複写を頼むことになると思います」
「任せてください！」
即座に復活し、ドンと胸を叩くケニード。
あたしは目をパチクリさせる。
「あれ？　ケニードは保護管なのに、手伝えるんだ？」
「ええ。この一件は私が指揮をとっていますから。私の権限が及ぶ範囲内でしたら、どんな無茶でも通せますよ」
……なんか今、さらっとすごいこと言ったよ、この人。
あっけにとられたあたしの視線を受けて、レメクが苦笑する。
「正直な話、今回の件に関しては上層部はほとんど信用できません。あまりにも利害関係が複雑で、いちいち詳しく安全を確保していては時間がかかりすぎるからです。閣下や陛下や猊下は信用できますが、あの方々はあの方々で大変な状況ですからね」
「？」の顔のあたしに、バルバロッサ卿が肩をすくめてみせた。
「王宮の官吏に関しては、宰相の仕事。教会の神官に関しては、教皇の仕事。それらに対し一括して責任をもつのは王の仕事。今から先のことを見越して細かい計画や人事等を練っておかないと、始まってからじゃ遅いからな」
「一斉捜査、一斉検挙、一斉粛正。一気に進めるから途中で『待った！　今考え中！！』なんて言ってられないんだよね。だから、始まったら終わりまで一息に推し進められるよう、あらゆる事態を想定して計画を詰めていかないといけないんだよ」
二人の説明に、あたしは「はぇ～」と情けない声をあげた。
なんとなく言ってることはわかるのだが、細かい事情とかは、悲しいかな、さっぱりわからない。
「犯罪というのは、その犯人を裁いて終わり、では無いのですよ」
あたしの頭を撫でてから、レメクは軽く嘆息をつくように言葉を

こぼす。
「裁く前に調査をし、証拠を集め、身柄を確保するのはもちろんですが、その犯罪がどうして起きたのか、どのようにして始まったのか、そしてどうすれば次に同じことが起こらないようになるのか、考えなくてはいけません」
「犯人を裁くのはその後？」
「ええ。一番最後です。犯人というのは、その犯罪に対する実行者であり、そして、次の『誰か』に対する見せしめでもありますから」
見せしめ。
その言葉に、あたしは背筋が寒くなる思いがした。
あたしはレメクを見る。
この優しい人が、それをするのだろうか？
「こんなことをすれば、こういう末路を辿る。それはある意味、次の犯罪への抑止力になります。……ただ、これは諸刃の剣です」
体を小さくしているあたしの背を撫でながら、低い美声が語る。
「罪に対しては、どのような些細なものであれ、相応の罰というものが無くてはなりません。人は容易に犯罪に走ります。なぜなら、今の世界には未だ道徳というものが浸透していないからです。そんな中、『罪を犯しても罰せられない』という状況ができてしまうと、恐ろしいほどの陰惨な悲劇が繰り返されます。それを未然に止めるためにも、罰は必要なのです」
けれど、それは多すぎてはいけない。
そして、少なすぎてもいけない。
厳しすぎてもいけない。
かといって、甘すぎてもいけない。
「多すぎれば表だっての犯罪は減っても、水面下での陰惨な犯罪が増えます。少なすぎれば、ぎりぎりの範囲を狙っての犯罪が増えます。また、厳しすぎれば反発を招き、甘すぎれば増長を招きます。罪に対しての罰は、常に適度に、そして必ず相応のものでなければなりません」

そ、それって、ものすごく調整が大変なんじゃ……？
あたしは唖然としてレメクを見上げた。
下街に暮らす人間にも、地区によって掟のようなものがある。一族に掟があるように、限られた範囲の生活区域に掟があるように、国にとっても掟がある。
それが法律。
けどその法律が、そんなに細かい考えをもって作られていただなんて、今まで思ったこともなかったわ！
「裁判って、すっごい大変なものなのね」
「ええ。裁かれる罪によって、人が相応の罰を受けるのです。適当にするわけにはいきませんよ」
いやまぁ、そうなんだけど……
あたしはややも遠い目になってしょんぼりする。
正直、お話が高い位置にありすぎて、ついていけないのです、はい。
しゅんとしたあたしに、レメクが労るように背を撫でてくれた。
「そのあたりの詳しいことは、これから徐々に教えていきますよ。この国で生きる以上、知っておいたほうがいいですから。知識は力です。あなたはか弱い女性ですから、知っておいたほうがいいでしょう。自分自身を守るために」
暖かい声に、あたしは丸まっていた背をシャキッと伸ばす。
がんばれあたし！
がんばれあたし！！
せっかくの好意！　受け取らずして何が恋する乙女であるか！！
気合いを入れ直したあたしに、ちょっと満足そうにレメクが頷く。
そしてレクチャーが再開された。

「裁判にとってなによりも重要なこととして、決して『間違わない』こと、という大前提があります」

「間違わないこと？」

必死に小さな脳みそに言葉をたたき込み、あたしは首を傾げる。

レメクはしっかりと頷き、少しだけ時間をおいてから語った。

「ええ。犯罪の中にある真実と事実。周りの状況、心理状態、そして犯人そのもの。どれ一つとって間違うことの許されないものです。そして、罪に対し罰を与える者は、必ずあることを念頭におかなくてはなりません」

えーと、えーと。

「あること？」

「裁くのは人では無く、あくまでも犯された罪である、ということです」

……どう違うのだろう？

「簡単に言えば意識の違いです。罪人だから悪、だから裁く。という考えをしてはいけないのです。この罪に対し裁きを行う。故にこの人は裁かれる。そういう形を念頭に置いておかないと、自分自身に対し『自分は人を裁く権限のある者だ』という間違った認識がうまれます。ほんの些細なことですが、その些細な意識の違いで、別の犯罪が起こるのを防げたりするから不思議ですね」

うーん、うーん。

あたしは無い頭を絞りに絞って考えた。そろそろ脳内回路が灼けそうだが、根性でふんばった。

「えっと、自分は人を裁ける、っていう思いこみができちゃうと、それに関する犯罪が生まれるのね？」

「ええ。いくつかあります。たいていは、そうですね……罪のない者が罪を犯した者と間違われ、裁かれる。あるいは罪をねつ造され、裁かれる。といったケースでしょうか。いずれも裁かれた相手は無実です。また、罪を犯した者の罰を、より厳しいものに勝手に引き上げられる、といったケースもあります。これらの犯罪は、上流階級や王宮の上層部などと利害関係があるのが常です。ただの怨恨のときもありますがね。所謂、裁判官の独断、もしくは他者による買

収によって引き起こされる事件です」
「ちなみに、冤罪やでっち上げは、上層部がよく使う手だ。真犯人の『身代わり』に別の誰かをもってきて、利益を得たり損を免れたりする。そういった連中を取り締まるのが、これまた大変でなぁ……」
「昨日裁かれた二人の神官がそれでしたよね。あの二人、公爵家の縁でしょう？　大丈夫ですか？」
「あー、いろいろ問題はあるが……まぁ、今のところ大丈夫かな。だろ？　レメク」
バルバロッサ卿の声に、レメクは「ええ」と頷いた。
「なんとかします」
なんかさらっと言ってる。
けれどケニードの陶然とした顔を見るに、ものすごくすごいことのようだ。
てゆか、ケニード。
君はマニアという前にファンなのですね。
「連中の暗躍はともかく。裁判官不正問題の再発防止策として、裁判官任命制度そのものを見直す必要があるでしょう。連帯責任制度を導入することも検討しましたが、そうするときちんとした裁判官が巻き添えになる可能性が高い……悩みどころですね」
なんか一層小難しそうな話になってきた。
すでに半分以上異世界会話になってるオトナノハナシアイを横目に、あたしは涙目でレメクの上着にへのへのもへじを描く。寂しくないもん。
あ。けっこう上手に描けた。
ふんふんふーん♪
「……まぁ、明日の会議の様子を見てから、最終案をまとめましょう」
ぽむ、と頭に暖かい手が乗って、上向くとレメクが苦笑含みの眼差しであたしを見下ろしていた。

あれ？　難しいお話終わった？
にこっと笑うと、何故か怯みやがった。
どういう意味ですか？
「明日の会議かぁ……もめそうだねぇ」
む。終わってなかったのか。
会話を引き継いだケニードに、あたしはしょんぼりと俯く。
すぐに暖かい手が頭を撫でてくれた。おっおーぅ♪
「揉めるでしょうね」
「揉めなかったら、お前さんが爆弾投下させて揉めさすんだろ？」
「ええ。この機会に裁判官の顔ぶれも一新したいですから。自己満足のための裁判や、強制自白のための拷問など、目に余る所行が多すぎます」
「奴らの体にゃ痛みを感じる機能がついてねぇからなぁ。いっそ自分が体感すれば、悔い改めるかもしれねぇが……」
「無駄でしょう。与えられた痛みを他者への憎しみに変換するだけです。それでも、多少の効果がありそうでしたら、精神に直接痛みのイメージを送る案を採用しますが……」
「……何気にイタイからやめてやってくれねぇかな、アレ。見てるほうが恐ろしい……」
頭の上で飛び交うオトナノカイワ。なんとか自分の興味のあるところだけでも拾って、もはや容量オーバーを起こしている記憶回路に無理やり詰め込む。
未だに裁判がどーたらと長々話している三人の会話を余所に、あたしはヒート気味の脳内情報を整理した。
レメクは紋章術師としての仕事より、裁判関係のお仕事のほうが多いようだ。
あたしが発見されたのが原因なのかもしれないが、この件に関してはボスっぽい発言といい、まるで裁判官であるかのような仕事ぶり。
神官じゃないのに、どうしてだろう？

だいたい、紋章術という特殊技能の持ち主なのに、それっぽい仕事を見たことがない。もしかして、闇の紋章とかいうあの特殊すぎる紋章しか持ってないんだろうか？

とはいえ、紋章術師の仕事というのがどういうものなのか、実のところはよくわからない。

けれど、そういう魔術師系の人なら、例えば地下に籠もってせっせと新術編み出すとか、得体の知れない儀式をするとか、いろんな紋様やら紋章やらを書きためてみるとか、そんな摩訶不思議な異常行動があって然るべきじゃないだろうか？

そう、衣装も専用の特殊な服とかあってですね……

地下に籠もるレメクの図を鮮明に想像したところで、頭を撫でてくれていた手がワシッと掴みに変化した。

イタイ。

「……ベル。私は黒マントだけを着用するというおぞましい趣味はありませんから」

ぎゃーッ！　想像図がリアルにレメクに流れてた！！

ぼそりと呟かれた声に、あたしは思わず飛び上がる。

そう！！　忘れていたが、闇の紋章とやらのせいで、あたしの考えは筒抜けだったのです！

それはつまり、あんなことやこんなことやそんなことやムッハーンなことも全部筒抜けということで！！

「……」

「……」

……あれ？　なんかレメクが額押さえてぐったりしたよ？

どういう理由でかほどよく青白くなってしまったレメクは、俯いたまま視線を地面に固定している。なんだろう。何が彼をそこまで追いつめたんだろう？

やっぱり裸エプロンはいけなかったですか、旦那様。

『……ベル』

その瞬間、唐突に脳みそのあたりで声が弾けた。

慣れ親しんでいないその新感覚にビクッとなると、状況がわからない他二人がきょとんと首を傾げた。……裏事情を知ってる熊はすぐに納得顔になったが。

『とりあえず、妄想の類は打ち止めにしていただけますか』

妄想と言われた。失礼な。

ちょっとお茶目で可愛い想像なのに。

『男の裸エプロンや裸マントのどこが可愛い想像なのですか即座に想像しないでくださいおぞましいッ』

レメクの顔がますます青い。

未だお風呂を覗けてないので細部まで綺麗に想像できなくてすみませんってどうして掴む力が強くなるのですかイタイイタイ！

「に……にぎゃー……ッ」

ギューと鷲づかみにされた頭の痛みに顔をしかめて両手をつっぱねる。

即座に痛みが緩和されました。

『猫ではないと怒るのに、どうしてあなたはそう猫のような仕草を……』

あ。

『声』が途切れた。

なんでだろう？　さらなるダメージを受けたようだ。

とっさに想像した猫レメクがそれほどダメだったんでしょうか、ってどうしてあたしを掴んでバルバロッサ卿に差し出すのーッ！？

「すみません。しばらく捕獲していてくださいますか。今、精神衛生上、かなり厳しい状況ですので」

「……おまえさんをそこまで追い込むたぁ……いったい……」

巨熊にぷち悪魔でも見るような目で見られてしまった。

ぷらーんぷらーんと両手両足をぶらつかせながら、まるで小動物のごとく巨熊に押しつけられるあたし。

いやーっ！　ご主人様のところに返してーッ！！

じたばたじたばた。

「はーはっはっはっは、そーら恐くない恐くなーい。おじさんはとっても恐くないぞー？　ちっこい子猫みてぇだなぁ、おい。はっは、飼い主さんよ、これぁどうやって懐かせたらいいんだ？」
「御飯です」
「……エサかよ」
ガーン！
乙女心を餌付け成功と勘違いされている！？
あたしは初めて知った驚愕の『レメク的事実』に、打ちのめされた。
「おお。大人しくなった」
「……というか、クラウドール卿。何気に今の台詞はひどいですよ……」
我が心の友だけが、この悲しみをわかってくれているようだ。
ケニードいい人……複写紋章術会得後には、ぜひ入浴中レメク写真をあなたに進呈させていただきます。
できれば全身図で。
「……何故でしょう。今、壮絶に鳥肌が立ったんですが」
「おかしな邪念でも受信したんじゃねぇのか？　どっかから」
レメク。そこであたしを見るのは何故ですか？
しゅーんとした顔のあたしをじっと見つめていたレメクは、はぁ、とため息をついてから手を差し出した。
「ベル。いらっしゃい」
喜んでーッ！！
即座に復活。素早く脱出。そしてその胸に華麗なダイビング！
「げふ」
レメクが変な呼吸をした！
「い、今、まともに胸部に全身攻撃（ボディアタック）がいきませんでしたか！？」
「あれほどの攻撃は俺様でもできねぇ……」
ラブアタックを物理攻撃のごとく扱う失礼男二人。
彼らを尻目に、あたしは数十秒ぶりに帰還することのできたマイ

ベストポジション（胸）に『ただいま攻撃』を開始した。
すりすりすりすりくんくんくんくん（以下略）。
「ああ、なんだな。嬢ちゃんのそれは、もう、反射的行動なんだろうなぁきっと。……レメク、黄昏れるか、諦めるか、喜ぶか、どれかにしろや反応は。……あぁ、悪ぃ、全部か」
なんか気になる単語があった気がするけど、匂い嗅ぐのに忙しくて耳に残らなかった。
なぜだろう。とても残念なことをした気がする。
「まぁ、こんな長閑な昼下がりに花咲かせるなら、血なまぐさい裁判系よりも、可愛い未来のレディのマーキングの話の方がいいわな」
「さて、その裁判の話ですが」
光の速さで話を戻すレメク。
「……どうしてそう不得意分野から逃げるんだ、おまえさん」
「裁判は大事な話ですし、時間もそうありませんから」
「目がちょっと必死なのはなんでだろうなぁ、レメっち。……いえ、はい、真面目な話をしますごめんなさい」
スーッと体感温度が三度は下がった不思議な気配に、即座にバルバロッサ卿が謝る。どういう理由でか、真向かいにいたわけでもないのにケニードも青い顔になっていた。
そんな顔面蒼白二人組を見て、あたしはしぶしぶ匂い吸引を終了する。この変な気配を消すのは、第三者であるあたしの役目だろう。
「おじ様」
「どうしましたか？　ベル」
あたしの真面目っぽい声に、レメクもすぐに反応する。
視界の端で、男二人がそれぞれ胸をなで下ろしているのが妙に印象的だ。
「あたし、ずっと不思議に思ってることがあるんだけどね。孤児院のことは、すっごく大変な事件で、裁判官に裁いてもらわないといけないのよね？　なのに裁判官だっていうバルバロッサ卿より、おじ様のほうが立場が上っぽいのは、どうして？」

あたしの問いに、男三人が思わずといった形に顔を見合わせた。
「ベル……本当に、クラウドール卿のお仕事のこと、何も知らないんだね」
ケニードの唖然とした声に、バルバロッサ卿も顎を撫でながら「あー」と声をあげる。
「俺様より上っていうか、まぁ、なんだ。どう説明するべきかな…裁判が始まったら俺様達裁判官のほぼ独壇場なんだが、それまでは担当官吏の独壇場なわけだ。……てか、この説明でわかるか？」
微妙。
情けなく眉を下げたあたしに、熊さんも一緒に眉を下げる。
脳みそが小さくてごめんなさい。
「ベル。あなたのいた区域には、もめ事があったときに出てくる顔役達がいますね？」
「え？　うん。いたわ」
しゅんとしたあたしに、レメクが唐突に話を変えてきた。
「その中には、事情を詳しく調べてもめ事を調停する者がいるはずです。裁き云々の前に」
「えーと……うん」
話が変わりすぎて理解がおいつかないが、確かに、もめ事が起きた時には、それをちゃんと調べて仲直りをさせようという人がいた。
「簡単に言えば、それが、今回の件に関しての私です」
話、変わってませんでした。
……例えだったのですね。あぁ、でも、ちょっとだけわかりやすい。
「もっとも、今回はあなたという証人を私が保護したので、私が陣頭指揮をとることになってしまっただけですが……。本来なら、これもきちんとした専門の官吏が行うべきなんですよ。孤児院に関しては、衛生課と福祉課と管理課と教会が権限をもってますし、そこに保護機関が微妙にからんできているはずですから」
「「お手数をおかけしてすみません」」

教会の熊と保護官のマニアがそろって頭を下げた。
それにしても孤児院て……あちこちに権限持ってる部署があるんだなぁ……。どこがメインで受け持っているのだろうか？
「街や人を衛生的な状態にする、という意味でしたら衛生課。恵まれない者に手を差し伸べる、という意味でしたら教会と福祉課。建造物とその住人という意味でしたら管理課。特定の保護指定を受けた『誰か』が関わったときは保護機関。といった具合に、それぞれ分野分けをしているようですね。結局の所、自分の所の管轄では無い、と言い訳して押しつけあってるのですが」
「「……返す言葉もございません」」
大小の大人がそろってしょんぼり。別に彼らが悪いわけではないのだが。
「ただでさえそんな風に複雑な様相を呈してる『孤児院関連』の事件である上に、上層部と教会の腐敗を示す『不正』が加わり、公金横領という『大罪』が加わっている状態です。裁くのも、そのための資料を整えるのも、けっこうな手間なんですよ。……私が話をもっていったときの、陛下と閣下の表情が未だに頭から離れません」
「獲物が自ら飛び込んできたって感じ？」
宰相閣下は会ったことがないので、表情なんて想像もつかない。が、アウグスタだけはリアルに思い浮かべれる。
きっと口の端をにゅっと引き上げて、目をキラキラさせたに違いない。
面倒事を押しつけれる絶好の人材が、自ら面倒事を見つけてきたのだから。
（……大喜びで押しつけたんだろうなぁ……きっと）
あたしは労いをこめて、レメクの胸に頬ずりした。
「調査するのはかまいませんし、不正者を摘発するのもけっこうです。ですが、裁判に関しては一歩引かせていただきたい」
そう言ったあと、憂鬱そうなため息をつく。なんだか一層疲れたような顔だ。

それを見やって、バルバロッサ卿がなんとも申し訳なさげな笑みを浮かべた。
「できるだけ、善処する」
「頼みます」
短くそう言って、レメクはカウチの背もたれに深く背を預ける。
本当に疲れてるんだ。そして、本気で裁判そのものには関わりたくないんだ。
確かに、レメク達が言っていた小難しそうな話を（あんまり覚えてないが）まとめると、ものすごく面倒で大変そうだ。だいいち、喧嘩とかと違ってプレッシャーが違う。
「人を裁くのって、とっても大変なのね」
孤児院の仲間で喧嘩したら、仲裁したりするのは年長者の役割だ。居丈高に怒鳴るだけの人もいたが、一生懸命話を聞いてじっくり話し合ってくれる人もいた。後者の人は、いつも大変そうだった。
孤児院の喧嘩でさえそんな感じなのに、国規模の、しかも大の大人が憂鬱そうにするほど大変な事件の裁判なら、いったいどれほどのプレッシャーなのだろうか。
「ん～まぁ、だからこそ、人を裁くのは神の代行者の仕事ってぇことになってるんだよな。裁判官が全員神官なのも、そのためだ。人を人が裁く時には、相手や、相手に関わったあらゆる全ての物事に対して、一定の責任を負わなくちゃならねぇ。責任がもてないなら、裁く権限は無い。だがな、神官には後ろにどえれぇお方がついている」
「誰？」
あたしの問いに、バルバロッサ卿は自分の後ろをくぃっと指し示して笑った。
「神様さ」
熊の後ろにカミサマの姿は見えなかったが、その近くの木の枝に赤茶色のネコは見えた。
あ。爪といでる。

「神様は人間のことは全てお見通しだ。その神様の代行者として、裁判官は罪を、そしてそれを行った人を裁く。まぁ、もっとも独断じゃあ裁けねぇがな。常に三位一体で、原則は全員一致であること。ただし、判決がバラバラで、あんまりにも長引くようなら多数決だ。そうやって裁判を行う。そして、できるだけ判決は厳しいものでなければならない」

「……見せしめだから？」

「そうだ。だが、厳しいからといって、残酷であっちゃならねぇ。それなら、犯罪者とやってることは変わらないからだ。裁判で最も厳しいのは……」

そこまで言って、バルバロッサ卿はふいに口を閉ざした。あたしをじっと見て、次の言葉を迷う。

あたしは理由がわからずに首を傾げた。

「最も厳しいのは、死刑。つまり、ギロチンの刑ですよ」

そのあたしの後ろで声がした。レメクだ。

バルバロッサ卿がちょっと渋い顔になり、それであたしは彼が言おうか否か迷った理由を知った。

死刑という言葉をあたしに聞かせたくなかったのだ。

「ベルは、本人自身が死の傍まで行った子供です。死という現実から目を背ける子ではありません。……罪に対する罰として、死が存在するのはどこの国でも同じです。ただし、死罪というのはよほどの場合のことと、覚えておく必要はあります」

ぽん、とレメクの大きい手があたしの頭の上に乗った。

あたしは撫でてほしくて自分から頭を擦りつける。

レメクがちょっと苦笑（わら）ったのが見えた。

「人は人を恨みます。心の底から憎み、時にはその存在を消し去りたいと思うこともあるでしょう。ですが、安易に人の死を願ってはいけないのです。それがどんなに、憎い相手であっても……」

どんなに憎くても。

どんなにひどいことをされても。

あたしはじっとレメクを見た。
今のあたしにとって、一番『ひどいこと』は、目の前のこの人を失うことだ。それを思うと、目の前がいきなり赤黒い闇に塞がれたような気持ちになる。
「おじ様……」
あたしは声を零した。情けないことに、ちょっと肩が震えた。
「ものすごく、大事で大好きな人がひどい目にあっても、ひどいことをした人を『死んじゃえ！』って、思っちゃいけないの？」
レメクはあたしをじっと見つめたあと、ほんのわずかに目元を和ませてから、首を横に振った。
「……思うこと自体は、止められません。それはごく自然なことですから。大事だと思うその気持ちが、そのまま裏返るのです。思いが深ければ深いだけ、それは恐ろしいほどの憎悪になるでしょう。相手の死を願うほどに」
けれど、安易に相手に死を与えようとしてはいけない。
その手に刃を持ってはいけない。
なぜなら、誰であっても命はたった一つしかなく、それは必ずいつか尽きるものだからだ。
「人は、決して一人では生きられません。誰かにとっては死を願うほどの悪人でも、別の誰かにとっては尊敬する恩人、というのはよくあることです。誰もが死を願うほどの絶対悪というのは、そうそう存在しませんから。……例えて言いますと、そうですね……私などは、多方面から死を願われるほどに憎まれています」
「えっ！？」
あたしは仰天してレメクにしがみついた。
「おじ様が！？」
「ええ。大変恨まれています。それこそ、年をとって体が不自由になったら、これ幸いと刃物片手に押し寄せてきそうな方々が……軽く数百名ほど」
軽く数百名！？

あたしはギュッとしがみつく力を強くした。
「私の近くにいると、そのとばっちりを受ける可能性もありますからね」
なんと！
「だから、できるだけあなたも」
「大丈夫よ！」
何かを言いかけたレメクの声を遮って、あたしは力一杯宣言した。
「あたしが守るから！！」
ぶぽっ！
あたしの横とか後ろとかで、いい年した大人二人が口を押さえてブルブル震える。
吹き出しやがったな！？
「ケニードもバルバロッサ卿も、何その反応！？」
失敬な！！
「ご、ごめ、ごめんょ、ベル～ッ」
「ぷ、ぷぷぷぷぅぶはッ、うわははははは！」
それでもなんとか謝るケニードと、もう謝罪すら思い浮かばないぐらい腹かかえて笑っている熊。
あたしはブルブル震えながら、違う意味でプルプル震えている二人を睨みつけた。
「わ、笑うなぁーッ！　おじ様とあたしの年齢差考えたら、おじ様がヨボヨボのおじいちゃんになっても、あたしはまだそこそこ若いはずなんだから！　足腰弱ったおじ様の代わりに、悪漢を撃退しちゃえるんだからねッ！」
渾身の叫びは、しかし、かえって爆笑を誘ってしまった。
二人ともそれぞれのカウチをバンバン手で叩くほどのはしゃぎぶり。
ますますもって失敬な！！
「おじ様！　おじ様からも何とか言って！」
あたしは最終兵器、もとい最愛のおじ様を振り返り、

絶句した。
なんと、レメクは目をまん丸にしたまま、ぽかんと口を半開きにしていたのだ！
その呆けきった顔は、半開きの口に干し杏を放り込んでも気づかないんじゃないかと思うほどだ。久々に見る、両頬紅葉事件なみの顔である。
「おじ様？」
あたしの呼び声に、レメクはハッと我に返った。そして異様に狼狽する。
「い、いえ。それには及びません。いえ、断じていけません。できるだけ巻き込まれないよう、あなたは無関係を装うべきです。今からでも遅くはありません。そうです、手遅れにならないうちに、早く」
なにか不思議な台詞を自分自身に言い聞かせるようにまくしたてるレメクに、あたしは渾身の力で抱きついた。
ぎくっとしたレメクに、輝く瞳で宣言。
「手遅れだから」
ニッコリ。
「……」
「手遅れ、だから」
二度言ってやった。
レメクはなぜか汗っぽいものを顔中に浮かべて、
あっ！
目線逸らしやがったッ！！
「おじ様男らしくないーッ！」
「お、男らしいか否かという問題ではありません！　あなたはまた、何故いつもそうやって命を投げ出すような方向にばかり飛びかかるんですか？！　少しは危機を回避しようと動くとか、危ないものには近寄らないとか、しなさい！」
「そんな無理なこと言われても！」

「何が無理ですか！　賢く立ち回りなさいと言っているんです！！　だいたいですね、あなたは危機管理能力が無いというか、感知能力が無いというか、むしろ全力でそっちに走っていく暴走傾向があるというか……！」

途端にわぁわぁ叫びあうあたし達の前と横で、熊さんとマニアさんが揃って微笑ましそうな目になった。

熊がぽつりと呟く。

「まぁ、なんだな。賢者の理も、愚者にならんとする恋する乙女には敵わんってところだな」

そしてマニアは相変わらず、羨ましそうに「いいなぁ」と呟いた。

4　分岐点の前で

世間のお貴族様が午後のティータイムを楽しむ頃、あたしは盟友ケニード&護衛番長のバルバロッサ卿と一緒に街へと繰り出していた。

あの後、なぜかレメクは「時間ですから」という謎発言をして素早く逃走。捕獲できなかったあたしは、熊とマニアに慰められながら家具搬入を開始した。

熊、大活躍。

ほとんどバルバロッサ卿の独壇場だった家具搬入後、部屋を見渡してあたしは大満足の息を吐いた。だが、一緒に見渡していた男二人は妙な顔をして首を傾げたのである。

「華やぎが無ぇな」

「殺風景だねぇ……」

言葉は違うが、意味は一緒だ。

クラウドール邸の応接室は、三日前と比べれば遙かに美しくなっている。

磨きあげられた床。拭きあげられた家具。煤けていた暖炉もピカピカで、煤と埃まみれだったその中には、大きな林檎の薪が積まれている。壁も天井も綺麗に拭かれて、細かい模様を鮮やかに見せつけていた。

だが、お貴族様出身の二人からすれば、なんともそっけない風景に見えたらしい。

確かに床はむき出しで絨毯が無く、テーブルの上には花どころかクロスさえかかっていない。壁際の飾り棚も何一つ飾られておらず、ある意味気持ちいいぐらいのすっからかん。

素朴と言えば聞こえはいいがこれはちょっと殺風景すぎる、というのが二人の言だった。

もともと、かつてここで発掘された家具のうち、絨毯は洗ってい

る最中に表面がぼろぼろと剥げてしまい、設置不可能物件として処理されることになっていた。

その替わりとなる絨毯を見つけるため、買い物ツアーに出ることになったのである。……レメクがちょっと渋い顔をしていましたが。だったらそのついでに、他のものもいろいろ見てこようというのが二人の意見なのだが……

（あの絨毯……ちょっとボロになったけど、まだ充分使えるのに……）

どん底の生活をしていたあたしからすれば、もったいないを通り越して罰当たりな気すらする。

絨毯が無くったって、ここの床は直接座ってもそれほど冷たくならないし、美しい木目も充分観賞に値すると思うのだ。わざわざ上から上等の絨毯や毛皮を敷かなくったって、いいと思うのだが……

「……ベル。まだ拗ねてるのかい？」

歩きながらそんなことを考えていると、ケニードがそっと声をかけてきた。

ずっと俯いて黙っていたため、そういう風に見えたらしい。

大きな二人に手をそれぞれ握ってもらい、連行される小動物のごとく半分飛びながら歩いていたあたしは、左隣にいるケニードの声に顔を上げた。髪を隠すために帽子を被っているので、ほとんど真上を向かないと相手の顔が見えない。

「す、拗ねてないもん。ちょっといろいろ考えていただけだもん」

なんとなく目線をちょろちょろさせながら言うと、右隣のバルバロッサ卿が口の端をニュッと笑ませた。

「俺らよりレメクと一緒のほうがいいってのぁ、女としちゃあ当然の反応だ。が、まぁ、今回は諦めてくれや。あとちょいの辛抱だからよ」

誤解が誤解を生んでいる。わっしわっしと頭を撫でられて、あたしは眉をきゅっと寄せた。

「だから別に、拗ねてなんかいないもん」

ズレた帽子の中に髪をせっせと戻し、唇をとがらせて一応反論。
別にレメクがいないのが寂しいだなんて、そんなこと、いっぱい思ってる最中だけど今はちょっと別件というか、何というか、ごにょごにょおじ様寂しいよぉ……
レメクのことを考えると涙が出ちゃう。女の子だから。
「それ以前に、よく時間とれましたよねクラウドール卿。毎晩家に帰る時間とるのでさえ、大変な状態でしょう？　今」
「あっは～。そぉりゃあ、嬢ちゃんが気がかりだからに決まってんじゃねぇか。最近の挨拶は『おはようございますバルバロッサ卿。ベルは元気そうにしてましたか』だぞ。あれぁ、絶対、俺への挨拶のほうがついでだって」
「あ、その場合僕のほうが言葉長いですね。『おはようございますアロック卿。昨日はうちのベルがお世話になりました』から始まっていろいろ聴かれますから！」
嬉しそう。
「……あいつ、最近嬢ちゃんの寝てる所しか見てないから禁断症状でてんじゃねぇか？」
「かもしれませんねぇ。ご飯はどれぐらい食べれてたかどうかとか、着替えは一人でできてたかどうかとか、歯磨きはちゃんとしてたかどうかとか、心配してましたしねぇ」
「「どこのお母さんだ……」」
あたしと熊さんのセリフがハモった。
「てゆか、それは禁断症状っつーより監督状況把握義務みたいなもんなのか……？」
「いやぁ、どうでしょう……あの目の真剣さはちょっとすごいものがありましたが」
どんな表情で聞いくるんだろう。あたしも一度でいいから見てみたい。
だいたいにして、あたしはレメクのことを知らなすぎる。家の外でのレメクなど、始めに会った時の足（限定）ぐらいしか見たこと

がないのだ。一度じっくり見たいものである。……てゆか一緒にお散歩したいですしょんぼり。

「まぁなんだ、それでもあと数日でカタがつくって。ほーら、嬢ちゃん。晩ご飯はでっかい魚焼いてやっから元気だせ？」

なんで魚限定！？

「あたし猫じゃないから！　魚しか食べないわけじゃないもん！できれば頭のついてるおっきいのが食べたい！」

「どっちだよ、と突っ込みたいが、まぁいいか。今のシーズンなら、デカくてウマイ魚っつったら、モラモラの鍋かなぁ……ありゃあ脂がのってて美味いぞぉ。もちろん頭付きだ」

すみません。聞いたこともない名前です。

微妙な表情になっていたらしく、ケニードが横から注釈を入れてくれた。

「モラモラっていうのは大きな海水魚だよ。ちょうどバルバロッサ卿の胴体ぐらいの大きさでね、色は綺麗なエメラルドグリーンとコバルトブルーのグラデーションだったかな」

あたしは即座に熊の胴体のエメラルドグリーン↓コバルトブルーのグラデーションを想像した。

すごい不味そう。

……いや、ちゃんとした魚なんだろうけど。

「栄養価も高いから、素材としてはいいかもね。ただ、どうやって調理したらいいんだろうねぇ、あれ。僕も未だに料理したことのない素材なんだよ」

……どうなんだろう、そんな謎素材な晩ご飯。

あたしは即座に想像を放棄した。考えるだけ無駄だ。

まぁ、なるようになるだろう、うん。

「それより……ねぇ、絨毯って、本当に新しいのを買うの？」

くいくいっとケニードの袖を引っ張って問うと、ケニードは「うん」とあっさりとした返事。

「あんな状態のものを、あの人の屋敷の応接室になんて使えないよ。

断じて駄目だね」
　ハッキリと断言。
　ファン心理は恐ろしい。目が怖いぐらい真剣だ。
「でも、あれ、あちこち剥がれちゃってるけど、まだ使えるのに……」
　ちょっとシュンとして言うと、ケニードは困り顔になった。
　バルバロッサ卿も困った感じに眉を下げている。上流階級の二人からすれば、あたしの発言は意味不明なことなんだろう。使えない、と判断するレベルがあまりにも違いすぎるから。
　そんなことは百も承知だけど、でも、どうしてもあたしはこだわってしまう。見栄えを気にしてお金を使うなんて、あたしからすればもったいないだけだ。
「あたし、床の上に直に寝るのだって普通のことだったし、石畳や納屋の隅っこで蹲って寝ることもいつものことだったから。絨毯なんて高価なもの、おじ様に拾ってもらうまで触れたこともなかったし。……あのボロくなったっていう絨毯だって、全部がボロボロじゃないし、今だって充分厚みもあるし暖かそうだから……あれがあったら、冬の間暖かいだろうな、とか思っちゃうの」
　彼らから見たらボロのようなものであっても、あたし達から見ればすごいお宝だ。きっと大事に大事にずっと使うだろう。十年二十年、ううん、もしかしたらそれよりもずっと長く使うかもしれない。そうして、すり切れすぎてもうペラペラの布みたいになっても、それでもやっぱり何かの足しにならないかといろいろ工夫して使おうとするのだ。
　あたし達は、そういう風に暮らしてきたのだ。お金を使うのではなく、お金を使わないために常に工夫をする暮らしを。
「……いや、あれ、たぶんクラウドール卿が再利用してくれると思うし」
　しゅんと俯いたあたしに、ケニードがおろおろとした声で言う。
「いきなり捨てたりするわけじゃないから」

ぬお？
思ってもみなかった発言に、あたしは即座にケニードを見上げた。
我が同士殿はほんわかした笑顔をしている。
「僕だったら捨てちゃうんだけどね。クラウドール卿はそういうところ、細かいから」
「……そうなんだ？」
あたしの声に、ケニードはしっかりと頷いた。あたしは目を丸くする。
……意外だ。すごい意外だ。どっちかっていうと、あっさり「使えないでしょう。捨てなさい」とか切り捨てそうなのに。
ぽかんとしているあたしを見て、バルバロッサ卿も苦笑を浮かべた。
「まぁ、あれぐらいの痛み具合なら、まず離れの住人に渡すだろうし。んで、そっちの使い古しが余ってきたら、今度はそれを古物屋に持っていく。で、格安で売って、売ったお金で古着を買って、その古着を離れの住人に渡す。離れの住人のもっとボロい古着は、掃除用の雑巾に早変わり……って所だろうな」
「離れの住人……？」
というと、未だ会ったことのない、あのお屋敷の敷地にいる管理者のミナサマですね？
「ああ。嬢ちゃんは会ったことねぇか。レメクの屋敷の敷地にな、じいちゃんばあちゃんばっかり集めた小屋があるんだよ。庭とか畑とかの管理をしてくれてるんだけどな」
「うん。話には聞いたことある」
「お、そりゃ話が早い。で、そのじっちゃん達っていうのが……まぁ、早い話、嬢ちゃんみたく身よりも無くてお金も無くて、さらに年とって仕事も無いっていう人等なんだわ。で、レメクはそういう人を見つけてはあっちこっちに仕事斡旋したり、どうしても満足に他では働けない連中は、賃金は無いが衣食住だけは保証するっていうことで、庭の管理を託すっつー名目であああやって自分の所で面倒

みてる」
あたしは目を瞠った。
レメク。あぁ、レメクが！
あたしの、言ってしまえば先輩のような人達を、ずっとそうやって助けてくれてた。あたしを助けてくれるずっと前から、あたし達みたいな人間に手を貸してくれてたんだ。
それはなんて、あの人らしいんだろうか。
「丁寧な仕事をしてくれる人達だよ、あそこのおじいちゃん達は。僕もね、たまに家の物持っていくんだけど、直して使えるようなものは、魔法みたいに綺麗に直してくれるんだ。元職人さんっていう人もけっこういてね。年だったり片目だったり、片足だったり……そういう、ハンデを負っちゃって普通の所では働かせてくれなくなってるけど、今だって現役で通じるぐらいの職人さん達だから。丁寧に丁寧に仕事をしてくれるよ。時間はすごくかかるけどね」
言って、ケニードはくすりと笑みをこぼした。
「そういえば……あの頃は、僕、こうやってクラウドール卿の家に足繁く通えるようになるなんて、思ってもみなかったなぁ」
なにやらしみじみとした口調である。
そういえばケニードと会った時、最初ドン引きいたしました、あたくしも。
でもそれは、ケニードのことをよく知らなかったからだ。
「俺もなぁ。あのレメクがこんな風に変わるとは思わなかったなぁ……まだたった数日……いや、十数日か？　その程度だっつーのになぁ」
「人は変わるもんなんですねぇ……」
二人とも、ものすごく感慨深げだ。
どうやらおじ様は、ごく最近とても変化したようです。いつニューバージョンになったのかは不明ですが。
「……あたし、ここ十数日一緒にいるのに、変化なんてちっとも気づけなかったわ……」

しゅーん、と落ち込んで呟くと、なぜか熊とマニアが目を丸くして顔を見合わせた。

どういう意味でしょう？

「……えーと、いや……そりゃ気づけないっつーか、違う意味で気づけヨっつーか」

「あぁ、うん、たぶん、こういうところは似た者夫婦なんだろうなぁ……」

遠いまなざしの二人。

てゆか、いつのまにどこかのご夫婦の話に飛んだんだろうか？

不思議なまなざしの先にいるのはあたしなのに、彼等の会話は意味不明だ。

しょんぼりと「？」を飛ばしているあたしに、二人は苦笑してぽんぽんとそれぞれ肩を叩いてくれる。

慰められてしまいました。

「まぁ、いつかわかるから」

「大きくなったら、すぐにわかるぜ」

不思議な慰め言葉をありがとう。意味は不明ですが。

「うん。がんばる」

しっかりと頷くと、バルバロッサ卿が男臭い笑みを浮かべる。

「ま、男を変えるっつーのはイイ女な証拠だ。将来有望だぜ、おまえさん」

これまた意味は不明だった。

※　※　※

王都南区大通り。そこは王都最大の商業区である。

港から上がってきた様々な輸入品は、この界隈にある大小様々な商店で売りさばかれる。中央区に近い北側に行くほど質と値段は跳ね上がり、港に近い南側に行くほどそれらは下がる。

例外は港近辺で、この界隈は特別に「港区」と称される。ここに

一番多いのは飲食店、次に宿屋。そして商会の本店だ。値段は実に混沌としていて、店構えと客層を遠目にチェックしてから入らないと、場違いさにそそくさと帰るハメになる。

そんな遠目からでもそれとわかる一級店の一つ。お城のような白亜の壁に、大理石をあしらった豪華な店構えが目指す場所。看板の文字は読めないが、店名はあたしでも知っている。

王室御用達高級店『ウィナ・レファ』だ。

「ね、ねぇ、本当にあの店に入るの？」

そこに向かってズンズカ進んでいく二人に、あたしはちょっと尻込みしながら声をかけた。

両手をそれぞれ持たれているので、ますます連行される小動物のようになる。

「うん。あれぐらいの店じゃないと、あの屋敷に入れれるような家具は無いしね」

「本来、オーダーメイドだからなぁ……既製品でイイのがあればいいんだが」

……住む世界が本当に違うんだなーと実感する一言をありがとう。

一人寂しく遠い目になったあたしに、ケニードがにっこり微笑む。

「ああ、お金なら大丈夫だよ。クラウドール卿からお財布預かってるから」

なにやら誤解されたらしい。

しかもそう言って見せてくれたのは、どう見ても『財布』というより『荷物入れ』。

……どんだけ大きいんだ、お財布。

「……ねぇ、それ。全部金貨……？」

ジャラジャラを通り越して、ジャリンという重量級の音をたてるブツに、あたしはいっそう遠い目になって言った。いくらレメクがお金持ちだからって、ははははは、まさかね？

「うん。一応、全部リメオン金貨だよ。さすがクラウドール卿だよね。普通、こんなに大量のリメオン金貨、商会の金庫ぐらいにしか

無いよ」
　ははははは世界の違いをありがとう。ちくしょう。なんでだろう、涙が出そうだ。
　ぐすっ、と鼻をならしたあたしに、貴族様二人が首を傾げる。
　いいもん。貧乏だって生きていけるもん。負けないもん。
「どうしたんだい？　ベル」
「腹でも減ったのか？　それとも腹でも痛いのか？」
　……腹しか無いのか、あたしが涙目になる理由は。
「えーと、ほら。何でかは分かんないけど、機嫌直して？　ね？　ベルが気に入った物があったら好きなように買ってください、ってクラウドール卿も言ってくれてるから、好きなモノうんと買うといいよ。ね？」
　複雑怪奇な表情でいたあたしは、一言もの申そうと口を開きかけ、
「……え？　あたしの好みで買っていいの？」
「うん。そう言ってたよ」
　目を剥いて棒立ちになった。
　な、ななな、なんと！
　途端、頭の中でパァッとエンジェルサービスが始まる。羽ばたく翼に、天使の輪っか。空から降り注ぐスポットライトへいカモン！
（あぁマジですかおじ様！！　さすがですおじ様！！　なんて素敵にカッコイイ気前っぷりなの愛してるぅーッ！！）
　もう口からハートが飛び出そうな勢いだ。
　あたしの好きに買っていい。そんな男前な一言を今まで誰かに言われたことがあっただろうか。あるはずがない。
　しかもお初の相手がレメク。レメク。ああ素晴らしい。さすがは運命の旦那様！！
　違う意味で涙が出そうになりながら、あたしはぐっと握り拳を固めた。空の上で太陽が煌めいている。
　この空の下にいるおじ様よ、あたしの声が届くでしょうか！？
（おじ様！　夢にまで見た総フリル総レースのお姫様みたいなお部

屋にしてもいいのですね！？　一緒にウフフアハハな世界を作ってくれちゃったりするんですかおじ様ーッ！！）

「……嬢ちゃん。言ってとくが、あんまりファンシーな部屋にしちまうと、レメクが出入りしなくなるからな。ほどほどにな」

ガーンッ！

陶酔してる所に横合いからミラクルパンチが飛んできた。

あたしはよろよろぽたん、と地面に倒れ込む。

頭の中の素敵空間がバレたこととよりも、『レメク出入り無し』の一言のほうがショックだった。

ぅぅ……ウフアハな世界は遠いのね……

「ま、まぁ、ほら、えーと、屋敷に合うようなのを探したらいいよ、うん。それにほら、クラウドール卿に似合いそうな内容にしてみてごらん、いろいろ楽しいから」

楽しい……？

涙目でケニードを見上げると、同士殿は輝く笑顔でサムズアップ。

「考えてごらん？　そこでくつろぐクラウドール卿。それを想像すれば……！」

あら不思議！

なぜか気分が急上昇！

「黒ね！　黒で決まりだわ！」

「だよね！　そしてゴシック調で！」

「金とか銀とか、ものすっごく高いんだけど、カッコイイの揃えてもいいのかしら！？」

「いいと思うよ！　あ、あと剣とか盾とかの飾り物とか！」

「あああ！　いい！　タペストリーとかも欲しい！」

「それであの礼服着てくれたら……もう！」

「おーい、おまえら、モトの世界に帰ってこーい。俺様がちょっと寂しいだろーがよー」

心の対岸で熊が寂しげに遠吠え。

手に手をとって目をキラキラさせていたあたし達は、輝く視線を

熊へと向けた。
熊がなぜか半歩退いた。
「「バルバロッサ卿」」
ハモるあたし達。今、あたし達の心は一つだ。
「……いや、だいたい何言いたいかはわかるんだが……。なぁおまえさん達。ちょっと考えような？　好きなもの買っていいっていうのは、おまえさん達のモラルを信用してくれての発言なわけだ。それでそんな趣味丸出しの部屋なんぞコーディネイトしてみろ。二度と信用してくれなくなるぞ」
ぐさっ！
クリティカルヒットをくらって、あたし達はパタンと路面に倒れた。石畳が冷たい。
「ぅぅ……でもでも、好きなの買っていいってー……」
ぐすぐす。
「素敵で無敵な永久保存写真が撮れると思ったのにー……」
えぐえぐ。
地面に転がるあたしとケニードを見下ろして、熊さんは大変困った顔で肩を落とす。
「ええから、早よ立ち上がれや、おまえさん達。俺ぁ、一緒にいてここまで恥ずかしいのは初めてだぜ」
人垣ができる前にと注意されて、あたし達はしょんぼりと立ち上がる。あたしは我が同士を振り仰ぎ、
ぎぇえええ!?
「ケ、ケニ、ケニード！　うん付いてる！」
「うん？」
倒れた場所に先客もとい『落とし物』があったらしいケニードに、あたしは仰天して飛び上がった。大慌てで布きれを探し、周囲をぐるぐる回りはじめる。
「おーい、嬢ちゃん。迷子の子猫みたいな動きすんなって。帽子がどっか飛んでっちまうだろ？　……てゆか、ウンってなんだウンっ

て……ウンついてる！！」
熊、遅れてブツを発見したもよう。
慌てて未だきょとんとしているウン付き貴族を引っ張った。
「ちっと店の洗面所借りるぞ！　ケニード、おまえさん、なんでよりによって先客のある場所に倒れるんだぁ？」
「先客？」
まだ気づいていないらしい。
あああ、いっそ気づかないまま事が終わったほうがいいんじゃなかろうか。いくらなんでも、お貴族様の頭にワンコのウンチっていうのはどうかと思うのですよ、はい。
あたし達は目指していた店に全力で飛び込み、出迎えの店員に詰め寄る。有無をいわさぬ迫力で了承をとり、紳士ご用足しの場へとレッツラゴー！
「嬢ちゃんは入ったらあかんだろ！」
即座につまみ出されました。
えー。未知の領域に潜入できるとちょっと心トキメかせてたのに。あの、壁一面に水が流れてる場所はどういう場所なのか、とかとかとっても気になるのー。
とはいえ、レメクが中に入ってるわけでもないので、ドアに張り付いてまで知りたいというわけでもない。
あたしは仕方なく、トイレの近くでちょろちょろすることにした。
それにしても、さすがは一流の高級店。客用の便所なんて普通の店には無いのに、ここにはちゃんと専用の場所がある。これは驚嘆に値する事実だった。
なにせ排泄場所、いわゆるトイレ関係は、お金持ちの北区以外ではかなり大変な問題になっているのだ。
トイレというのは、個人で設置するとものすごくお金がかかる。なぜなら汚水を排水溝に流すための工事からはじめないといけないからだ。なので、普通は作らない。壺とかに入れてポイか、街の共同物（別名、公衆便所）を利用する。

だが、王都という巨大都市ともなると、ほんの数カ所あるだけの公衆便所では人の多さに対応しきれない。下手するといろんなものが溢れてる。

また、「トイレいきたくなったなー」と思うや否や、そこらの陰でこそっとする連中もいるもんだから、路地裏などまさに地獄絵図だった。もちろん、臭い消しなんて高級なものは無いから、その悪臭も凄まじい。

あまりにもそれがひどくなると、住民もそこに住んでいられない。そこで、孤児院のあたし達が狩り出されて、汚いソコをゴシゴシと掃除することになる。

ただこの仕事、井戸から水を汲んできて路面に流し、ブラシで擦ってはまた水を流し、という重労働を繰り返さないといけないので、範囲によってはあたし達子供には手に負えなかったりする。

ぶっちゃけ、ちょっぴりの報酬では釣り合わない。

あたし達がもっと大きくなったら、ずっと楽にできる仕事なんだろうけど……

だいたい、掃除のための用具だってボロボロなのだ。ほとんどブラシの部分がすり切れたデッキブラシなど、木の板で擦ってるのと変わらない。そんなので、せっせと汚れを落としていたあたし達も、掃除してる間にものすごい悪臭を体に纏うハメになって……

い、いかん……だんだん気分が滅入ってきた。

あたしは落ち込みはじめた気分を上向かせるため、レメクのことを考えた。

レメク、レメク。あぁ不思議だ……なんだかほんわかした気分になってくる。

レメクの家のトイレは素敵だった。

そう、何気にトイレまで完備なのです、あの屋敷。

素晴らしい。王宮よりすごいんじゃなかろうか？　……王宮なんて行ったことないけれど。

案内された時には驚いた。屋敷の中では一番小さな部屋がトイレ。

壁も床も大理石で、石畳の一角がぽっこりと開いている。その遙か下はなんと常に水が流れてる場所で、つまり、そこにむかって用を足すのです。素晴らすぃ。ウンちゃんもなんもかんも全部流れていってしまうわけですよ。

おまけに底がよほど深いのか、排泄後に『お返し』を返されることもない。誰が造ったのかは不明だが、よほど考えて造ってあるようだ。

……たまに落っこちそうで怖いですが……

街の公衆用トイレも似たような作りだが、あれは排水溝が詰まると逆流してくるというビックリ箱のようなモノで、おまけに綺麗に使用されてないので汚い汚い。

……いや、路地裏よりはまだマシだけど。

あああ、いかんいかん。また暗い記憶が蘇ってきた。

だいたいトイレのことを考えるからいけないんだ。別のことを考えよう。レメクの匂いとかレメクの腹筋とかレメクの胸筋とかレメクの太股とか。

（……ん？　太股？）

あたしは首を傾げた。そこはまだ未体験だ。

知り合いの宿のねーちゃんは「女の魅力は胸尻太股よ！」と宣言していた。ならばきっと殿方の魅力も同じ場所だろう。

いや、個人的にそこにレメクの腹筋を追加したいが、それはともかく、だ。

今のところ、黄金の三カ所のうち、頬ずりできてるのは胸筋だけだ。満足しちゃって他二カ所は未だに未クリアなのである。これはいけない。早速今度頬ずりしなくては！　あぁ、早く夜にならないかな！！

うっとりと気分が上昇したところで、コホン、という咳払いの音が聞こえた。音のほうを振り仰ぐと、一人の紳士が困った顔で立ち往生している。

あああ大変大変ごめんなさいっ。

あたしは慌ててその場を離れた。ついでに、ぎゅっと帽子を深くかぶる。

ケニード達がいない間は、いつもよりも注意して髪を隠さないといけないのだ。この髪は見つかっちゃダメだと、レメクに再三どころか再十ぐらい注意されたのだから。

こそこそとトイレ前から店内へ移動すると、待ってましたとばかりに店員さんに捕獲された。

にゃにごとッ!?

「お嬢様、よろしければこちらの品などいかがでしょう?」

輝く作り笑いで綺麗なブローチを差し出された。

あたしは思わず棒立ちになる。

真ん中に大きな宝石があしらわれたソレは、思わず唾を飲み込むほど凄い品だ。

ど、どうしよう、たぶん、あたし、これ、一生働いても手に入れれないようなシロモノなんですが!?

「それとも、こちらの品のほうがよろしいでしょうか? お嬢様の金色の瞳には、大変お似合いかと存じますが」

今度は綺麗なピアスを持ってこられた。これまた、あたしの人生が何回も買えそうな逸品である。

あたしは「あうあう」と意味不明な言葉を呟きながら、あたふたと周囲を見渡す。ケニード、バルバロッサ卿。早く出てきて。てゆか、助けてレメク。あたしここでどうすればいいの?

だいたい、こんな高級な店の立派な店員から、ここまで低姿勢に物を言われたことがない。いつもなら絶対摘み出されている。なのに、貴族のお嬢様のように膝を折って接せられるのだ。ある意味恐ろしい。なんの拷問だろう、これは。

「ああ、申し訳ありません、お嬢様。不躾なわたくしをお許しください。ただ、せっかく美しいお洋服を召されておいででしたから、お嬢様のお美しさが引き立つよう、これらの品もご利用いただければと思った次第でございます」

殷懃に礼をとりながらのスラスラとした口上。レメクのくれた服は確かに素晴らしいが、宝石とかはついてない。だから薦められた、ということなんだろう。

（……というか、そうか、この人達は、服であたし達を『見る』んだ）

この人は、あたしの顔をじっくり見たわけではないのだ。見ていたらきっと、あたしが下層の人間だってわかるだろう。

おじ様に保護されてからだいぶマシになってるとはいえ、未だにあたしの体はガリガリのボロボロなのだから。

「お嬢様？」

反応をかえさないあたしを訝しく思ったのか、店員さんが顔を覗き込んでくる。

逃げるように慌てて視線を転じると、ガラスを使ったドアが視界に飛び込んできた。

すごい。透明度の高いガラスはものすごく高く、また割れやすいこともあって、ドアにまでそれを使う店はほとんど無いのに。

さすが王宮御用達、と思わず眺めていると、そのガラスの向こう側に、ふと、見知った顔が現れた。

あたしは目を瞠る。自然に呼吸も止まっていた。

（カッフェ）

懐かしい。そう思ってしまうほど、どこか遠い記憶の中にあるその人の姿。あたしの家族。孤児院の仲間。その彼が、

（怪我、して、た）

左腕に巻いた布には、明らかに血が滲んでいた。足取りもおかしい。どうして。だいたい、なんであんな所に。

あたしはよろめくように歩く。

こちら側と、あちら側を隔てるドアの前へ。

「お嬢様？　どうかされましたか？」

店員が不思議そうに声をかけてきた。あたしは振り向かない。けれど走り出そうとして、一瞬だけ店の奥を振り返った。

ケニード。バルバロッサ卿。
レメクの頼みで一緒にいてくれる、今のあたしを支えてくれる人達。
けれど。
ああ、けれど……！
あたしは息を吸い込んだ。足が動いた。行くべき場所へ。
「お嬢様！？」
驚いた風の店員の声。
派手に開いたせいで鳴るドアベルの音を最後に、あたしは街へと飛び出した。

5　分かたれた道

華やかな港区大通りは、あたし達孤児にとっては異境に等しい。けれど一歩奥に入り込めば、なじみ親しんだ薄暗い気配がたちこめる。どんな煌びやかな場所にも影はあり、路地裏はいわば街の影。例えそれが王都随一の繁華街と言えども同じだった。

建物と建物の狭い隙間をくぐり抜け、奥へと抜ければそこは裏の道。饐えた臭いのする路面に蹲るのは、どこか飢えた目をした野良犬と、死んだような目をした子供達。彼等はあたしを見ると一瞬だけ目を瞠ったが、あたしはそれを見ることなくその前を走り抜けた。

あたしは走っていた。馴染んでいたはずの路地裏の臭いが鼻につく。できるだけ息をしないように口元を左腕で覆って、その無意識の行為に驚いた。息を殺してどうやって早く長く走るつもりだったのか。無意識だからこそ情けなく、同時に悲しい。故郷のような慣れ親しんだこの場所を、臭いと思う日が来るなんて……！

あたしは意を決して覆いを外した。空気を大きく吸い込む。確かに臭い。とても臭い。こんなに臭くてたまらない場所だとは思わなかった。普通の人々からすれば、あたし達の暮らす世界は、こんなにも汚らしい場所なのだ。

だが、ああ、あたし達だって、そんなところに好きで暮らしていたわけじゃない！

もはや元の色すらわからない茶斑の路面を蹴りつけ、あたしは細い路地を右へと曲がった。

奥から怒鳴り声が聞こえる。

乱れた複数の足音。小さく軽い音は子供の足音だ。

あたしは素早く周囲を見渡し、武器になりそうなものを探す。

千切れた布、穴の開いた調理具、折れた竿……あたしは穴の開いたフライパンを走りながら拾い、柄の部分が腐敗してないことを確かめてから力強く握りしめた。

細い路地から開けた場所に飛び出したのは、ちょうどその時だ。
「捕まえたぜ……！」
男の背中が見えた。
空き地にいる人の数は、大人が二人、子供が四人。
カッフェと他三人はどこで合流したのか。ついでに追っ手の大人はどういう人なのか。考える間などなかった。男の手はやせ細ったカッフェの腕をしっかりと捕まえている。怪我をしている腕であるため、カッフェが苦痛の声をあげるのが聞こえた。
あたしは歯を食いしばる。
確認している時間は無い。
見知らぬ男があたしの仲間を拘束している。大事なのはそこだけだ！
「手間ぁかけさせやがって！」
男が拳を固めるのが見えた。
あと三歩！
上がる悲鳴。振り上げられる拳。あたしは全力で後ろからとびかかる！
とう！

ズバカァーンッ！！

なかなかすごい音がした。
あたしは振り下ろしたフライパンを見る。いや、正確にはそれが叩いた物体を。
あたしの前にあるのは、粉々に砕かれ陥没した路面だった。
……あれ？　目測誤った？
どうやら一歩分跳躍が足りなかったらしい。寸前で男にあたらなかった攻撃に、しかし、時が止まったように全員がこちらを見て硬直していた。
殴りかかっていた男も、拳を宙に浮かせたままで硬直中。

ん？　結果オーライ？
とりあえず、カッフェは殴られずにすんだようだ。
「今の内に逃げるのよ！」
思わず手が緩んだのだろう、解放されてぼてっと地面落ちている痩せた少年――カッフェにあたしは声をかける。
なぜかカッフェはこちらを見て顔を引きつらせていたが、即座に反応して走り出した。他の子供も一緒に走り出す。
「あ、て、てめぇ！」
運良く攻撃をまぬがれたあの男が、微妙に青ざめた顔でカッフェを追う。もう一人の男も、どういう理由でかあたしを注視したままで後退。あたしは再度武器を振りかぶった。
「とーっ」
「ぎゃあああああッ！」
ものすごい悲鳴をあげて男が逃げた。二人とも。
ズガバガンッ！
素晴らしい轟音をたてて、あたしの『破れフライパン』が路面を粉砕する。
おかしい。どうしてこう目標からズレるのか。
い、いや、今回は目標物が高速でトンズラしたからよ！　別に逃げなくても当たらなかっただろうぐらい外れてやしなかったんだから！　たぶん！！
仕方なく三度目の正直をするために武器を振りかぶる。が、そのときには大人二人は先を争うように別の路地裏へと飛び込んでいた。
逃げやがった！？
あたしは破れフライパン片手に追撃しようとし、ハタと目的を思いだす。
いかんいかん。裏路地のボス争いじゃないんだから、追撃する意味ないんだった。
「チッ。運が良いわね」
舌打ちして、あたしは仲間が逃げた方角へと視線を向ける。

どれほど勢いよく逃げたのか、もはや孤児仲間は影も形も無かった。

かわりに、壁の上にいた赤茶色のネコと目があう。

「……にゃあ」

挨拶をされてしまった。

あたしは片手を上げて挨拶し返し、武器を片手に仲間を求めて走り出す。

そんなあたしをネコはどこか怯え混じりの目で見送ってくれたのだった。

※　※　※

「やーっと見つけたわよ」

「ぎゃあああっ！」

あたしが逃げ延びた四名を捕獲したのは、あれから十分近くたった後だった。

いったいどれほど急いであの場から離れたのだろう？　死にものぐるいで逃げている四人に追いついた時には、軽く区域を越えるぐらいの距離を踏破してしまった。

どんな理由があって追われていたのかは知らないが、この逃走の必死さからして、よほどのことに違いない。

「た、助けてくれ！　俺らは別に、何も悪いことしちゃいねぇよ！」

必死に言う怪我人――カッフェに、あたしは呆れて嘆息をついた。

「だから助けてあげたじゃない。なによ、その、鬼でも見たかのような顔は」

何故かあたしを見てガクガク震えている四人。その様子に、あたしは首を傾げた。

せっかくこうして頼りがいのある助っ人が登場したというのに、この反応はどうだろう？　もしや、まだあの男二人のことを警戒し

ているんだろうか？
「さっきの二人なら、どっかに行っちゃったわよ？　にしても、あんた、逃げ足早くなったのねぇ。ちょっと追いつくのに苦労しちゃったわ」
笑って近づくと、ひぃっと悲鳴をあげらた。
「……」
……マテ。あんたら。
ひょっとして、あたしに怯えてるの！？
「ちょ、なにその反応！？　助けに来たっていうのに、なんで怯えられなきゃなんないのよ！」
「……ひ、ひぃっ」
彼らが見ているのは、もっぱらあたしの右手だ。
右手？
……フライパン？
「これが何よ」
「……な……殴らねぇか？」
「？　だから、なんであんた達を殴るのよ？　理由が無いじゃない」
意味がわからず首を傾げると、四人は一斉に盛大な安堵の息をついた。
どういう反応？！
「……こ、恐かった……」
なんかそれ、半分ぐらいあたしに対して言ってないだろうか？
ちょっとこめかみに青筋たてたあたしに、カッフェが怖々ながら笑みをうかべる。
「と、とりあえず、助かったぜ。とんでもないやり方だったけど……」
どのあたりが『とんでもない』やり方だったのかは不明だが、とりあえず落ち着いてくれたようだ。
「てゆか、あいつら何？」
嘆息をついて、あたしはカッフェを見る。

「あんた、一体なにやったの？」
ズイッと一歩迫ると、ヒィッと二歩分逃げられた。
……どうしてやろうかしら。
「だ、だから！　俺ぁ別に、なにも……！」
視線を右斜めに逃がしながら、カッフェが焦った声で訴える。あたしは深々と嘆息をついた。
「……あんた、嘘つくときの癖が直ってないわよ。……悪いことはしてないけど、追われるような理由には、心当たりがあるってことね」
「……っ！」
「で、あいつらは何？　何から逃げてるの？　ちゃっちゃと答えたほうが身の為よ？」
ぶん、と右手を軽く振ると、カッフェは大急ぎで首を縦に振った。
……あれ？　あたし、もしかして脅迫しちゃってる？
まぁ、いいけど。
「あいつら、孤児院の連中の仲間なんだ。オレ、孤児院から逃げて来たんだ！」
「……孤児院から逃げてきた……？　意味がよくわかんないんだけど、つまり、脱走ってこと？」
きょとんとしたあたしに、カッフェが頷く。
あたしはますますきょとんとなった。
「なんでそれだけで、あんなに追われるわけよ？」
孤児院は孤児をひきとって育てる場所だが、孤児のひきとりについて強制力は無い。
むしろ唯飯食いの孤児などいてもいなくてもどうでもいい、といった感じで、時折点呼で人数を確認する以外は、頭数があわなくても放置されている状態だった。
そんな場所から、わざわざ「逃げて」いるというのは、ハッキリ言っておかしい。だいたいにして、あの追っ手は何だというのだろう？

「……あんた、院長か誰かの大事な物、盗ったりしてないでしょうね？」

ビクッとカッフェの肩が揺れた。

……図星のようだ。

「……そりゃ、泥棒すりゃ追いかけられるわよね。気持ちはわかるけど、何盗ったのよ？　パン？　それとも干し肉？」

言いながら、それでもあたしは首を傾げていた。

正直、パンや小物程度なら、盗んでも罰は鞭打ちぐらいだ。

泥棒は悪いことだが、空腹で生きるか死ぬかという状況も多いため、ちょっとの食料程度なら誰もがよくやっている。良いことでは決してないが、生死がかかっている時にそんなことは言ってられないのだ。

早い話が、パン泥棒ぐらいなら日常茶飯事なのである。

だいたい、大の大人が追いかけ回さなくても、孤児は孤児院にぐらいしか居場所がない。嫌でもそこに戻るしか無いのだから、わざわざああやって追っ手がつくのはおかしすぎる。その理由がパン一つとかであるはずがない。何かもっと、特別なものだ。

それに、カッフェの腕には傷がある。

「ちょっと、その傷診せて」

あたしはズカズカと近寄ると、有無を言わさずにカッフェの腕をとった。その左腕に巻かれていたボロ布をほどくと、まだ血が流れている傷口が見えた。

「なにこれ！？　刃物傷じゃない！」

あたしはその切り傷に目を剥いた。

ナイフとか、そういうのだろうか？　少なくとも、棒や鞭といった物でつけられた傷では無い。切り口が違いすぎる。

ぴりぴりと、頬の辺りに小さな痛みが走った気がした。嫌な予感がする。刃物が出てくるなんて、普通じゃありえない。これはもう、体罰とかいう次元を超えている。

（なにやったのよ！　一体！！）

ぱっくりと開いた傷に眉をしかめ、あたしはおじ様からもらったハンカチを取り出した。開いている傷口をできるだけピッタリとあわせてから、ハンカチで腕をしばる。とりあえず、まずはこの傷をなんとかするべきだろう。

あたしは立ち上がって宣言した。

「教会に行きましょ。この怪我塞がなきゃいけないし、孤児院の誰かに傷を負わされたんなら、保護してもらわなきゃ」

「だ、ダメだ！」

即座に反対が飛んでくる。

なぜか顔を赤くしたカッフェが、あたしから視線を逸らして後退った。

「助けてくれたことは、感謝すっけどよ！　あんたにゃ関係ねぇし！」

……むかっ……！

「関係ないってことは無いでしょう！　関係無いってことは！！だいたい、教会行くのに関係がどーとか、それこそ関係ないでしょうが！」

「教会はダメなの！　あいつらの仲間がいるから！」

ガーッと言い返したところで、横合いから別の声があがった。カッフェと合流して捕まえられかけていた子供の一人、同じ年ぐらいの女の子だ。

……えーと……誰だろう？

うちの孤児院の連中の顔は知ってるけど、この子は知らないなぁ……？

「……あんたは？」

「……ナナリー」

少女がちょっと目線を逸らして答える。

……なんでさっきから、あたし、目線逸らされてるんだろう？

ちょっと気になってきたぞ。

「あたしはベル。……ねぇ、どうして教会がダメなの？　てゆか、

あいつら、孤児院の連中の仲間って言うけど、どういう仲間なわけ？　なんか妙にガラ悪かったけど」

あたしの声に、カッフェがぎょっとしたように顔を上げた。どの部分に反応してかは知らないが、驚いた顔であたしを見上げている。

……おや？

「……ベル……？」

？　どういう反応？　これ。

なんで幽霊でも見るような顔なわけ？

「そうよ？　なに？」

「い、いや……」

まさかな、いや、まさかな、とか小声でブチブチ言ってる。なんだろう？

首を傾げたあたしに、ナナリーが何故か苛立たしそうな声で言った。

「教会は、孤児院とグルなのよ。だから、行っちゃダメなの。絶対捕まるわ」

「……だから、なんで捕まえられる云々の事態になってるわけ？　何やったのよ？　盗んだ物って、そんなに大変なもんだったの？」

沈黙。

しん、とした四人に、あたしは嘆息をついた。

「……あのね、ちゃっちゃと話してくれないと、どうにも動きようが無いでしょ？　孤児院も教会もダメって言うんなら、別の所に行かなきゃ。その怪我、全然血が止まってないじゃない。手当てしなきゃ、大変なことになるでしょ？」

またも沈黙。だが、互いにせっぱ詰まった顔で目配せをしている所を見ると、怪我をなんとかしないといけないという認識はあるようだ。

ただ、安全地帯がどこにも無いだけで。

（どこか、いい所……って、あるじゃない！　絶対安全な所が！）

四人の様子に眉を寄せていたあたしは、ハタとそのことに思い至

って顔を輝かせた。
「いい所があるわ！　おじ様の所で手当しましょ！！　おじ様ならきっと、なんとかしてくれるから！」
　レメクに迷惑をかけるのは心苦しいが、この際四の五の言っていられない。あんな場面を見た以上、早く安全圏に行かないといけない気がするのだ。
　本来なら教会のほうがいいのだが、その教会がダメだと言うのなら、もう後はレメクを頼るしか無い。
　レメクならきっと誰が来ても大丈夫だと思う。なにせ女王様とタイマン勝負しちゃうような人なんだから。
「……おじ様、って……あんた、俺達を助けてくれるのか？」
　あたしの提案に、唖然とした顔でカッフェが呟いた。
　あたしは首を傾げる。なんでわざわざそんなことを訊くのか、その理由がわからなかった。
「さっきだって助けてるじゃない。だいたい、怪我してたら普通、手当するでしょ？　今までだったら、そんなツテなかったけど……今はおじ様がいるもの。なんとか頼んでみるわ！　いざとなったらあんたの怪我の治療代、あたしの借金に上乗せしてもらうから、お金のことも心配しないで！」
　この際一人分の治療費が上乗せされたところで、あたしの借金の総額からすれば微々たるものだろうし。
　そう思いながら言いきると、四人が非常におかしな顔になった。
「……ツテ……？」
「借金？」
　なんだか猫がいきなりしゃべりだしたのを見たかのような顔だ。
「そうよ。あたしも死にかかってた所を助けてもらったクチだから。その治療費とかがね……ふふふ……あれいったい、金額に換算したらどれぐらいなんだろう……壁も壊しちゃったし……絶対リメオン金貨百枚ぐらいいくわ……」
　思わず遠い目になる。

そんなあたしに、ナナリーが恐る恐る声をかけた。
「まさか、あんた、アタシ達の仲間？　養子縁組か何かで、貴族になったの？」
不思議な誤解をされている。あ、いや、そうか。あたし、今、レメクの買ってくれた服を着てたんだった。
ハタとそのことに思い至って、あたしは自分の服を見下ろした。
人というものは、本当に、着ている服でヒトを判断するものなのである。
「う～ん。えーと、孤児仲間かっていうなら、そうよ」
「うそ……え、どこの孤児院から？　本当に貴族の子になった人いるんだ！　アタシ初めて見たわ！」
え。ちょっと待って。こ、こここ子供ですって！？
「あ、あたし別におじ様の子供になったわけじゃないわよ！　養子縁組だなんて冗談じゃないわ！！」
レメクが『お父さん』！？
そんなの絶対に嫌だ！！
「あたしがなりたいのは、おじ様のお嫁さんなんだから！！」
堂々と宣言したあたしに、四人があんぐりと口を開ける。
ナナリーがまじまじとあたしを見てから、何とも言えない顔になった。
「えーと、その、も、目標は高いほうがいいわよね？　うん」
「そうよ！　てゆか、なんでそんな慰めるような目で言うの！？」
「えーいや、だってさぁ、普通ありえないじゃん。アタシ達みたいなのが、貴族のお嫁さん？　無理無理。せっかくそんな洋服着せてもらえるぐらいかわいいがってもらってんならさぁ、子供になって、そこからいい嫁入り先探しなよ」
「い、嫌よ！　おじ様のお嫁さんになれないなら、一生独身でいるわ！」
「……え。そんなに素敵な人なの？」
「もちろん！！」

全力で頷くあたしに、ナナリーの顔にほのかな赤みが差した。口元がゆるゆると笑む。

「ね、ちょっと、どんな感じ？　どんな感じなのよ！？　貴族って、嫌な感じじゃないの？」

「おじ様は全然そんなんじゃないわよ！　って言っても、正直どんな階級の人かさっぱりわかんないんだけどね！　あのね、ものすごく格好良くて、頭も良くって、強くって、優しくって、足長くって、胸板厚くって、いい匂いがして、ものすごくいい匂いがして、格別にいい匂いがして、さらに美味しい御飯作ってくれるの！」

あの匂いを思いだすだけでうっとり。思わずよだれが出そうなほど。

「……な、なんか、いろいろ予想と違うわね……」

「それでね！　それでね！！　……って、こんな素敵話してる場合じゃないじゃない！」

ハタと途中で我に返って、あたしは慌てて『素敵おじ様披露講演』を切り上げた。本当なら五時間ばかり滔々《とうとう》と語りたかったのだが……！！

「とりあえず、おじ様の所なら安全よ。あたしが保証するわ。だから、そこに行って手当てしましょ。で、行きながらでいいから、パパッと状況説明してね。なんで追われてるのか、とか……って」

そこまで言った時、あたしはとある『盗まれたら追っ手さしむけちゃうだろう孤児院の大事なブツ』に思い至った。

「まさかカッフェ！　あんた、院長が大事にしてるって言う悪趣味全開な裸金無垢像盗んだんじゃ……！？」

あたしの名推理に、カッフェが目を剥いて怒鳴る。

「誰があんなもん盗むかーッ！！　てゆか、なんであんた、俺の名前知ってんだよ！？」

「はぁ？！？　あんた何言ってんのよ！　知ってて当たり前でしょうが！　何年一緒にいたっつーのよ！」

「！？」

カッフェが驚愕の目であたしを見る。だからその反応は何よ！？
あたしは握り拳で文句を言おうとして……ふと、気づいた。
も、もしかして……？
「……まさか、あたしが誰か……わかってなかったとか……？」
「ま、ままま、まさか！？」
カッフェはまさに幽霊を見た哀れな通行人Ａのような顔になる。
ぎょっとしたようにのけぞり、それから素早くあたしの前に立って
真っ直ぐあたしを見た。あたしはクイッと目深く被っていた帽子の
先っちょを上げて見せる。……髪は隠したままだが。
思った通り、カッフェの顎がガクンと落ちた。
「べ、ベル！？　本当におまえか！？」
「やっぱり気づいてなかったわけ！？」
い、いや、そりゃ確かにこんな格好じゃ気付っつっても無理かも
だけど！
元孤児仲間とか、名前とか、そういうので気づかなかったんかい！
「お、おま、なんでそんな貴族みたいな……い、いや、それよりも、
生きてたのかよ！？」
ちょい待て！？　まず生死レベルなの！？
「生きてるに決まってるでしょ！？　勝手に殺さないでよ！！」
「いや、だってよ！　あの雨ん時からずっと、どこにもいなかった
し！　誰も知らなかったし……だ、だいたい、なんで今まで連絡一
つよこさねぇんだよ！　孤児院の連中だって、お前は死んだもんだ
と思ってるぞ！？　登録も消されたし！」
「なんですってーッ！？」
登録というのは、孤児院の名簿のことだ。孤児院に保護された時
に名簿に名前が登録され、死亡ないし誰かに引き取られた時に登録
が消される。
てゆか、いや、まぁ、おじ様に引き取られてるから、登録は消さ
れて当然なんだけど……。
って、いや待て待て！　今、死んだものと思われて登録消された

って言わなかった!?
「死亡登録されちゃったの!?　あたし。嘘でしょ!?」
「嘘なもんかよ!　お前、今、幽霊だぞ!」
「嘘ぉ!?」
冗談じゃない!
死亡による登録消去と、引き取りによる登録消去は全然別だ。
孤児は、孤児院に入っている間は『身元は孤児院にある』として戸籍が与えられる。だが、死亡登録でそれが消去されると、戸籍も末梢されることになり、今後の人生はまさに幽霊のごとく真っ暗闇になってしまうのだ!
なぜなら!　ちゃんとした職につくためには!　戸籍が必要だからである!!
例え『孤児院出身』という戸籍であっても、在ると無いのとでは雲泥の差が出る。あたしは真っ青になった。
「じゃ、じゃあ、あたし孤児院にも籍が無い状態で……や、やばいわ!　早くなんとかしなきゃ……!」
いかん。混乱してきた。と、とりあえずここは一度、孤児院の大人と話し合いを……
あわあわと孤児院に走ろうとしたあたしの両手を、カッフェとナナリーが慌てて掴んだ。
「ば、馬鹿!　どこ行く気よ!?」
「ちょい待て!　ベル!!　お前、孤児院に行くな!」
ものすごい勢いで止められた。
「なんで?!　って、カッフェ!　あんたその腕で掴んだらダメでしょうが!」
カッフェは右腕を押さえて悶絶中。
馬鹿者ーッ!　その怪我で腕を使うようなことするなーッ!!
「だ……ッッ……だから!　今!!　孤児院はヤバイんだって!
だいたいお前、その格好なんだよ!　どっかの姫様みたいな姿しやがって!」

「え。お姫様みたい？　マジ？　そう見える？」
「うわ！　てめぇなに幸せそうな顔してやが……ッ！　服がそう見えるってだけだよ！」
「わかってるわよ！　きっちり指摘されなくても！！　ちょっとぐらい夢見させてうれたっていいじゃない！　おじ様にもそう見えてるかなーとかイイ気分を一瞬だけ味わいたかったのにーッ！！」
乙女心のわからない仲間のせいで、夢見気分も一瞬で台無しだ。
わかってるもん。どうせお姫様みたいにはなれないもん。
キーッと怒ると、ナナリーが複雑そうな顔をした。他二人はぽかんとこちらを見ている。「けっこうそれっぽく見えるけど」というナナリーの呟きが謎だ。
「というか！　順番に話してよね！　なんで追われてたのか、とか、ナナリーやこの子達のこととか！　孤児院や教会がヤバイ理由も！」
あたしの声に、カッフェは一瞬押し黙り、
「……わかった。けどよ、とりあえず、場所変えねぇか？」
どこかおどおどした顔で周囲を見渡しながらそう言った。

※　※　※

カッフェは、言ってみれば孤児院での先輩のようなものだった。
先輩とは言っても、孤児院に入ったのが早かったというだけで、年は一緒だ。お互い気が強くて手が早かったこともあり、早い内から喧嘩仲間となって、今に至る。
カッフェは喧嘩っ早いが、実のところ喧嘩には弱い。かわりに足がすこぶる早く、おまけに器用で頭も良かった。
それに、喧嘩っ早いが男気はそれなりにあり、弱い者いじめはしなかった。そういう意味では気があって、あたし達はよく喧嘩に助太刀をしあったりと、なかなか良い協力関係を結べていたのである。
孤児院という所は、ある意味最悪の空間ではあるが、それでも気の合う仲間がいればそれなりに暮らしていける。仲間同士で連携を

とりあい、互いに支え合えば生きていけるのだ。
あたし達『年少組』は、そういう意味ではよくまとまっていたと思う。
年長組はまとまりのあるグループとそうでないグループがあったし、あんまり面識も無いからよくは知らない。だいたい、年少組と違って働きに出ることの多い年長組は、孤児院にいることが少ないのだ。
それに、年長組は入れ替わりが激しい。
だから、あたしも『孤児仲間』と呼べるのは年少組だけだった。
その年少組に異変が起きたのは、あの寒い雨の日からだったという。
「……あの日がはじまりだったんだ」
入り組んだ路地を縫うようにして走り、ちょと見にはそこに空間があるだなんて思えないような場所にある空き地。
路地裏に転々とあるその空白地帯の一つで、あたし達は情報交換をした。
といってもあたしの方は、死にかけたところをおじ様に拾ってもらって以下略、で終わったんだけど。
「あの日、院に帰って来れたのは、十五人だけだった」
「……十五人……？」
カッフェの声に、あたしは掠れた呟きをこぼす。
あたし達がいた院には、少なくとも五十人以上の孤児が収容されていた。
覚えている。
あの日、雨を理由に院に居残っている者もいたが、春の祭りをひかえた時期だったため、出稼ぎに行く者も多かった。たぶん半数以上は街に出たと思う。
それなのに、帰ってきたのが十五人。
「年長組も含めてだぜ？　俺はたまたま仕事が休みで、あの日は院の床磨きをさせられてた。居残ってたのは、年長組が……えーと、

七人、だったかな？　で、俺達の仲間が俺を入れて八人。あの日ってさ、朝からずっと雨だったろ？　おまけに寒かったしよ。で、昼前あたりからぽつぽつ出払ってた奴らも帰ってきた。商売にならないってんで、仕事先から院に帰されたんだよな。けど、それが、夜まで待って全部で十五人。……へっ……全員ずぶ濡れでさ、中には質の悪い風邪ひいてたヤツもいてよ……」

その声に血の気が下がるのを感じた。。

孤児院で質の悪い風邪を引くということがどういうことか。そんなこと、嫌になるぐらいよくわかっている。

あたしは強ばった顔でカッフェを見た。

まさか、という思いがあった。そして、それが外れてない予感も。

カッフェは暗い目をしたまま頷く。

「……『誰』が？」

あたしの問いに、カッフェは三人の名前を挙げた。

メアリー。メム。マルク。

あたしは目を瞑った。

なにか形容のし難い、嵐のようなものが胸中に渦巻く。

（……！）

とっさに歯を噛みしめなかったら、思わずその場で泣いてしまっていただろう。

だが、今は泣いている時では無い。まず、安全な場所に行かなくてはいけないのだ。泣くための体力なんて、今はこれっぽっちも無い。

（……！！）

あたしは渾身の力で荒れ狂う気持ちを抑えつけた。

落ち着け。まだ泣けない。ここじゃ泣けない。せめて……せめて、レメクに会ってからだ。

「……あの日帰って来なかったのは、おまえを含めて二十八人だ。……プリムは」

ぽつりと呟かれた名前に、あたしは顔を上げた。プリムは同じ年

の女の子だ。足が速くて、よく追いかけっこをした。
「……路地裏で見つかったけど、な」
（……路地裏……で……）
見つかった、と言った。まるで落ちていた物を言い表すが如くに。
その言葉の意味は、一つしか無い。
頭を殴られたようなショックというのは、きっとこういうのを言うのだろう。信じられなくて、あたしはよろめいた。
プリムの顔が脳裏に浮かぶ。ダメだ。涙が出る。
「おまえも戻って来なかったから……皆、てっきり……」
あたしは歯を食いしばった。零れそうなモノのを寸前で押しとどめた。
あたしも……同じ運命だった。
あの日あの時あの場所で、おじ様に出会わなければ、同じように路地で冷たくなっていただろう。
あたしとプリムに違いがあったのは、そこだけだ。そして、それが命運を分けた。
「……あたしが倒れたのは、大通りだった……」
そして、そこにおじ様が通りかかって……
「……へへ……運が良かったんだな」
「……そう、ね」
運が良かった。ただ、それだけで命が救われた。
本当に、それ以外の何物でも無い。
あたし達の命運を分けるのは、本当にそれだけしか無いのだ。たったそれだけで、これほどに違いがでてくる。
命すら左右するほどの違いが。
だけど、
あぁ、だけど！！
（プリム……！）
蜂蜜色の髪を覚えている。笑った顔、怒った顔、一緒に悪巧みをした時の顔。プリムだけじゃない。メアリーにメム、それに年下で

ちょっと気の弱いマルク。皆、あたしの大事な友達だった。同じ場所で、必死に生きた仲間だった。

「……ひでぇよな。他の連中が言う『運が良い』とか『悪い』とかってよ……命なんか、かかってねぇのに……」

けれど、あたし達のそれは直接命に関わってくる。それぐらいいつも綱渡りなのだ。

あたし達は視線を地面に落とした。互いの顔なんて見ていられなかった。涙は簡単に伝播する。泣き出したら止まらなくなる。だから皆が泣くのを堪えた。

けれど、それでもこぼれ落ちるものがある。

止められないものがある。

瞬き一つ分の沈黙の後で、鼻をすする音が聞こえた。

「……アタシん所の院でも、いっぱい人が死んだわ」

ぽつりと、涙と一緒にナナリーが呟く。彼女達は、別の孤児院の子供だった。

「嫌な雨だった……寒くて寒くてさぁ……。他に着る服も無いし、かぶるような布も無いし、皆で体寄せ合って眠って……そしたら、横にいた子がさ、あ、朝、冷たくなってて……」

後はもう言葉にならない。そっくりな顔立ちをした他の二人が、慰めるようにナナリーの背を撫でた。

「に、荷物みたい、に、裏に埋められて……！　で、でも、まだ、院の中にお墓あるだけ、マシかもしれない、わ。だって、消えた子達なんて、いったいどこに、行ったのか……！」

「消えた……子？」

ぐずぐずと鼻をすすって、あたしは問うた。涙は堪えきれたというのに、この馬鹿鼻！　なんでこんなに熱くなって水が出そうになってるのよ！！

あたしは一度大きく鼻を吸い込んで、改めて問い直した。

「人が、消えるの？」

四人は一斉に頷く。

答えをくれたのは、ナナリーと同じ孤児院の二人だった。
「あの日からずっと、人が何人も消えてるんだ」
「人が消えるのは前もよくあったけど、ここ十日ばかりそれがひどくて……！」
ニアとミリアという名の双子は、あたしと同じ年ぐらいの男女だった。汚れてはいるものの、柔らかそうな髪は触ると気持ちよさそうだった。
カッフェと合流したこの三人は、東区の孤児院の子供らしい。あちら側には行ったことが無いので、見覚えがなくて当然だった。
それにしても、いったい、この四人はどういう風に知り合ったのだろうか？
「ベル、覚えてるか？　黒い神官の噂ってやつ」
内心別のことで首を傾げていたあたしに、カッフェがそう話をふってきた。
あたしは目を丸くする。
「『黒い神官』！？……あの、人を消しちゃうっていう噂の？」
あたしの声に、四人はぎょっとなって「しぃーっ！」と口に指をあてた。
「でかい声出すなって！　大声で呼んだら、呼び寄せちまうって噂なんだぜ！？」
「嘘じゃないんだから！　マジで出るのよ！？」
「ここ十日ばかり、目撃情報が絶えなくって……！　おまけに、めちゃくちゃな人数が消えてるの！」
「あいつが浚って行ってるんだ！　絶対そうだよ！！」
口々に言う四人に、あたしは絶句して棒立ちになった。
黒い神官というのは、言うなればあたし達孤児の『天敵』だった。誰もハッキリと見たことのない『死神』で、孤児院に入ると年長組から『噂』として真っ先に教えられる。
曰く、悪いことをすると、黒い神官に攫（さら）われてしまうぞ、と。
浚われた子供が戻ってくることは無く、大人は一切真面目にとり

あってはくれない。
そいつが出たと聞くと、子供は無意識に体をすくめて恐怖に震える。そんな、絶対的な恐怖の対象。
「だって、あんなの……孤児院の連中が口減らしのために作った、ただの嘘じゃ……」
あたしはそう思っていた。実際のところ、それに間違いは無いだろう。
孤児院は決して安全な場所では無い。そして、孤児院の中で子供が消えることなど、ごく普通に『よくあること』なのだ。
例えば、顔立ちの綺麗な子。
例えば、髪の綺麗な子。
例えば、とても健康そうな子。
そんなちょっと目立つ子は、孤児院に来たと思ったら数日後には消えていた。子供を亡くした貴族に引き取られるとかならまだいい。だが、そういった幸福なケースでは無い『院内での行方不明者』は、たいてい悲惨な運命をたどるのだ。
あたし達は知っている。
孤児院の大人が、子供を売買していることを。
「その孤児院の連中が、大慌ててバタバタしてたんだよ！」
あたしの声に、カッフェが勢いづいて反論する。
子供を内緒で攫って売りとばしていた孤児院の連中が、子供がいなくなったことに慌てる。それは確かに、連中のせいじゃないという証拠になる。
「うちの孤児院じゃ、俺が最初に気づいたんだ。……メム達がさ、寝込んじまっただろ？　その看病してて……夜、寝る時まではちゃんと部屋にいたのに、朝起きたら、あいつら全員いなくなってたんだよ！　最初、オレ、あいつらが死んじまって、孤児院の連中が埋めちまったのかと思ったんだ。それで問いつめたら、あいつらのほうがビックリしやがってよ……。ふざけるな！　って殴られて……でも、部屋に戻っても、メム達はいないし。そしたら……」

「そしたら!?」
「アンナが、黒い神官が来たんだって騒ぎ出したんだ。なんか、外からこっち伺ってたって言い出して。オレは見てないから知らないけどよ、エマやサン達も『そういえば』って、どこで見たとかどうとか言い出しはじめたんだ。オレもな、最初は『そんな馬鹿な』って思ってたんだ。けど、アンナやエマ……てゆか、女達がワァワァ泣きながら騒いでる横で、いつもなら怒鳴り散らしてオレ等を黙らすあの院の連中がだ、真っ青になって震えてたんだよ。なんか、あいつらの方がずっと怖がってる感じでさ」
「あいつらが?」
「そうなんだよ。ありえねぇだろ? あの強突張りで地獄の鬼みたいな奴らがだぞ? もう顔なんか死人みたいになってさ、顔見合わせて『そんな馬鹿な』とか、『ありえない』とか呟いてんだぜ? むしろ、あいつらのほうが今にも攫われちまいそうな顔っつーか……」
カッフェの言に、あたしは信じられない気持ちで呟いた。
「……あいつらが……」
あの、人を人とも思っていないような連中が。
「なぁ、おかしいだろ? だいたい、病人を攫うってのが変じゃねぇか。だから……だから、本物の『黒い神官』が出たんじゃないかって噂になったんだよ。おまけに、それ以降もどんどん人が消えていくしよ……」
最後はかすれた声で呟いたカッフェを見て、ナナリーが後を引き継ぐ。
「アタシの所も同じだよ。もともとうちの院長も、あんたらの所と同じでさ。最低のクズ野郎なんだ。あんな雨の日だってのに街に働かせに行かせて、戻ってきたら鞭打ちなんだよ? ひどいなんてもんじゃなかったよ。布一枚よこしゃしないしさ。風邪ひいた連中は、あっという間に具合が悪くなって……。薬も食べ物もなくてさ、もうどうしようもないじゃないか……。食料庫に忍び込んで、連中の

美味いメシでも盗んで喰わせてやろうって……そう思って、こっそり忍び込んで……帰って来たら、病人が全員いなくなってた」

「あ、あたし、その時お留守番だったの」

ナナリーの声に、ミリアが声を上げる。

「ニアと一緒に、看病に残ってたの。だけど……なんでかいきなり眠くなって、帰って来たナナリーに起こされたときには、寝かせてた場所からみんな消えてて……」

「言っとくけど、僕もミリアも、眠るつもりなんてこれっぽっちもなかったんだ。僕達だけじゃない。他の同じ部屋にいた連中も。なのに、全員眠ってたんだ。あんなの、普通じゃないよ」

語られる言葉に、あたしはゾッとした。

普通じゃない状態で消えていく子供達。

そのことに子供以上に怯えている院の大人達。

……これはいったい、どういうことだろう？

「何が起きてるのか、わかんねぇんだよ。……院の連中はピリピリしてるし」

小さく吐き捨てて、カッフェは俯いた。

あたしは唇を引き結ぶ。

二の腕に寒気を感じた。ざわざわと得体の知れない何かが押し寄せてくる。

体を覆い尽くすような、

押しつぶすような、

体中の温もりを奪っていくような『何か』。

それはおそらく、罪悪感という名の恐怖。

（……レメク）

心に名前が浮かぶ。たった一つ、あたしが持つ宝物。

あたしだけが与えられた、罪深いほどの僥倖（ぎょうこう）。

（レメク）

体が軋むのを感じた。目の前が霞む。ちりちりと指先が痺れ、膝から力が抜けてゆく。

なにも知らないままに、なにも気づかないままに、あたしは今日まで生きてきた。

のうのうと暖かい庇護下に逃げ込んで。一人だけ幸福な夢を見て。

あの日、分かたれた道の片方で、苦しんでいる仲間を見殺しにして。

こんな状況に、気づくこともしないで！

（……　……）

視界が翳（かげ）る。

闇が降りてくる。

あたしは空を見上げた。頭上にあるはずの空を。

けれどその色が何色なのか、今のあたしにはわからない。奇妙に暗い視界の先にあるのは、白と黒の二色だけだ。

唇が動いて、何かを呟く。誰かの名を。けれどその名前をあたしは呼べなかった。

ただ、心が軋むのを感じる。

どれほどの罪だろう。他者を顧みず、安穏を貪ることは。

ゆっくりと降りる夜の帳と同じ速度で、深い闇が降りてくる。

今日初めて、あたしは無恥と怠惰の罪を知った。

6　罪と罰

「ちょ、ちょっとあんた！　大丈夫！？」
深い闇に落ちる寸前に、横合いから伸びた腕に助け起こされた。
暗い視界はそのままに、意識だけがかろうじて蘇る。じっとりとかいた汗が冷たく、体がひどく重かった。
「……ナナ……リー」
無意識に、目に映ったその人の名を呼ぶ。
黒い闇から暗灰色へと変わった視界の中で、綺麗な赤毛が揺れていた。
いや、揺れているのはあたしの視界だ。
「なんて顔色に……！？　って、ちょっと、あんた！　なんでこんなに冷たいわけ！？」
ナナリーの声に、あたしは鈍いまばたきをした。
汗が冷たいと感じているのに、あたしの体そのものも冷たいらしい。それとも、冷たい汗が出ているから体も冷たいのだろうか。
混濁する意識に呑まれそうになりながら、あたしは浅い呼吸を繰り返した。奇妙に明滅する視界の中から、ナナリーが心配そうにあたしを覗き込んでいる。
「ナナリー、こそ、ひどい、顔色、に……」
なってる、と言おうとしたが、それ以降が言葉にならない。
ぐらり、と大きく傾いた視界は、一瞬とたたずに闇に沈む。だが、直後にゴンッ！　と衝撃がはしって、あたしは後頭部を抱えて転がった。
「い、っ……～ッ！！」
「だ、大丈夫？」
視界は暗転中だが、意識は痛みのおかげでハッキリした。なんか変な汗かいてて体中冷たいが、とりあえず思考もハッキリしました。
イタイ。

（……た、たちけて。レメク）

脳裏にレメクの呆れきった顔が浮かんだ。嗚呼（ああ）、レメク。なぜ思い出の中ですらそんなにつれないお顔なの？

なんだか涙もちょちょぎれた。

「えぇと、本当に大丈夫かい？　あんた。さっきからいきなり、どうしたっていうのよ？」

ナナリーの声に、あたしはただ涙する。ごめん。今、痛すぎてちょっと声にならない。

横向きに転がってるあたしの肩には、ほのかに暖かい熱があった。おそらく彼女の掌だろう。それがとても暖かく、あたしは妙に体にこたえる呼吸を繰り返してから、ゆっくりと頷いた。

「……　……　……」

ごめん。もう、大丈夫。

そう言おうとしたのだが、きちんとした声にはならなかったようだ。

ナナリーが心配そうにあたしの腕を擦（さす）る。熱がじわじわと染みいるようで、それがとても心地よかった。それと同時に背中を擦る手がある。これは……ミリア？

「ごめ……」

ようやく呟けたあたしに、ナナリーの声が重なる。

「謝んなくていいから。とにかく、気分よくなるまでちょっと寝てな。……カッフェ、あんた、腕はいけるね？」

「あ、あぁ……」

どこか遠く聞こえる声が、周囲でかわされる。まるで扉一枚隔てた場所のように、その声はあたしからひどく遠かった。

「オレよりも……そいつ、いったいどうしたんだ？　な、なぁ、なんかオレ、変なこと言ったか？」

「違うと思うけど……」

心もと無さそうなナナリーの声に、「違うだろ」とニアの声が重なる。

「たぶん、ショックが大きかったんじゃないか？　おまえの言葉が正しいなら、ベル……だっけ？　そいつ、雨の日に行方不明になったっきりだったんだろ？　だったら、今の孤児院がどういう状況だったのかなんて、知らなかったんじゃないか？　いい奴に拾われて助かって、久しぶりに会ったら、仲間はいっぱい死んでて……なんて話聞いたら、普通、ショックだろ？」

あぁ、とも、うぅ、ともつかない呻きのような声が三方からあがった。あたしも呻く。

ショックだった。

確かにショックだった。

だって、あんまりだ。あんまりにもひどすぎる。誰か何か悪いことをしたのだろうか？　プリムが何かひどいことをした？　どうして死なないといけないの？

どん底で生まれて、どん底で生きて……ねぇ、それでも生きていれば、いつかいいことがあるかもしれないじゃないか。あたしがレメクに会えたように、彼女だってどこかで誰かと出会って、沢山沢山幸せになったかもしれないじゃないか！　なのに、なのにどうして！？

どうして死なないといけないの！？

どうしてあたしの仲間が！？　友達が！？

あたしが、あたしが……

アタシガ

バチリと、音をたてて脳みその裏側で闇が弾けた。

アタシダケガ

音の裏側で、何かに呑まれた。

サキニ　タスカッテ

体が沈む。
視界が消える。
言葉が浮かぶ。
あたしだけが先に助かって。
他の仲間は、まだずっと苦しんでいたのに。

■■デシマッタコモイルノニ

優しいレメクに甘えて。自分の気持ちだけ大事にして。お嫁さんにしてほしいだなんて勝手な希望を胸に抱いて。

■ンデシマッタコモイルノニ。

暖かな場所で微睡んで。その傍らで、大事だった人達が苦しんでいたのに戦っていたのに周りのありとあらゆる悪意と苦境と厳しい現実から……！！

死ンデ　シマッタ　コモ　イル　ノニ

「ぁ」
声が零れた。
そう、零れたのを感じた。
蓋が外れた。いつかどこかで、暗い目のままで、そっと落とした重苦しく辛い蓋が。何もできないのだからと、自分に言い聞かせた時にした蓋が！
「ぁあああああああああッ！！」
喉を通ったのが悲鳴だったのか絶叫だったのか絶望だったのか慟哭だったのか。そんなことはあたしにはわからない。ただ、意味も

持たない固まりのようなものが体の奥底で弾けて溢れて零れだした。
■■■。■■■。頭の中で誰かの名前が明滅する。だけどその形を思い出せない。溢れ出したものはどす黒く全てを覆い尽くし覆い隠し、あっという間にあたしの全てを飲み込んでいく。
何度夢に見ただろう。
何度朝に忘れただろう。
暗い目を。暗い部屋を。暗い顔を。暗い世界を。全て全て意識の奥底に沈めて。
忘れていたわけじゃない、なんてただの言い訳だ。最低だ。あぁ最低以外の何物でもない。何かできなかったのか、何もできなかったのか。自分が助かったあの日のうちに。その次の日でも、その次の日の次の日にでも！　ねぇ、たった一日で全てが変わったかもしれないのに、どうしてあたしはあの家にいたの？　どうしてあたしは動かなかったの？
わかってる。わかっている。■■■がいたからだ。あの人がいてくれたからだ。自分は助かったからだ。体が動かないことを理由にして。家の中にいるように言われたことを理由にして。自分が危ないことを理由にして。■■■の元にずっと留まり続けたからだ。そんな資格なんて無いのに。できることはもっといろいろあったかもしれないのに。全部人に任せて自分は安全園にいたままで。
顔を思い出す。誰かの顔を。
けれど思い出したそれすらも、暗い闇の中に沈んでいく。
誰かの声が聞こえた気がした。だが、あたしの脳には届かなかった。
手が触れていたものが滑り落ちる。何かが頭から落ちる。けれどそれが何であったのか、何をどんな理由で被っていたのか、それすらももう思い出せなかった。
頭の中で声がする。
誰かの声が。とても大切で、とても愛おしい声が。
けれどその声の主を思い出す前に、今度こそ、あたしの意識は暗

転した。

※　※　※

淡く霧がかった景色の中で、青みがかった暗い建物が見えた。
古びた壁に、汚れた床。
薄くなってしまった服の布地に継ぎ当てをしながら、あたし達は黙々と針を動かす。
糸は切れた布をほぐしたもの。だからまたすぐに切れてしまうのだけど、あたし達には糸を買うお金もない。
「ねぇ、■■。院の外って、どうなってるのかな？」
そうあたしに問いかけたのは、一歳年下のマルクだった。
ほっそりとした子で、女の子より女の子みたいな顔をしている。
色も白く、たぶん、女の子だったらとっくの昔に■■■■に攫われてしまっただろう。
あたしは疲れた目でマルクを見て、さぁ、とそっけなく答えた。
「■■は外から来たんだよね？　ボクは院の生まれだから、外ってどんなのかわからなくて」
マルクの声に、あたしは小さく呟く。
「……別に、いいこともたいして無いわ」
あたしが孤児院に来たのは、母が死んだせいだった。
若く美しかった母。その美しさに目がくらんで、手を差し伸べてきた人は沢山いた。けれど母は誰の手も取らなかった。
一族の掟が決めた夫は一人だけ。
その人が好きだったのかと問えば、悲しそうな顔をするだけだったのに。守る意味なんてあるのかどうかも不明だというのに、掟を頑なに遵守した。母はあまりにも潔かった。あまりにも純粋だった。
だから死んでしまったのだ。
あたしを抱えたまま、路地で冷たくなって……
あの時から、あたしの心は枯れたままだ。

「外にいい記憶なんて……無いもの」
生まれた時からそうだった。
生まれた場所が院の外だったか内だったかなんて、あんまり関係ない。どこにだって不幸は転がっている。
けれど、あたしの不幸は『母の子』だったからではない。
それは決してありえない。
理由なんて簡単だ。
あたしは母を愛している。だからあたしの不幸はそこでは無い。
強いて言うなれば、父の子だったからだろう。
あの父の。
あのパルム族の男の子供だったからだろう。
あの男が母に手をつけなければ、母はあんな所で死にはしなかった。きっと一族の森とやらで、好きな人と一緒に長く長く生きたことだろう。あんな風にやせ細って死んでしまうことなく。傷つき、悲しみの果てに死んでしまうことなく。暖かく優しい場所で、穏やかな最後を迎える日まで、のんびりと生きたはずなのだ。
なのに。なのに……！
「外はそんなに……嫌な所？」
暗くどす黒い思いの縁にいたあたしを、か細い声が呼び戻す。
マルクは悲しそうな顔であたしを見ていた。
院で生まれ、院で育った彼は、未だ外のことを知らない。体が弱いから、院から出ることもできない。
だから憧れているのだ。
外にはきっと、ここよりいい場所があると。そう希望を抱いているのだ。
あたしはため息をついた。目を閉じて、そうして次に開けた時には、できるかぎりとびっきりの笑顔を作ってみせた。
「冗談よ。そこそこイイ所もあるわ。……元気になったら、案内してあげるわね」
マルクはあたしを見て、ひどく純粋な笑顔になった。

あたしはそれから目を背ける。
その笑顔は、あたしにはあまりにも眩しすぎた。

外の世界にあるものに、どうして希望なんて抱けようか。
外にいる人々に、どうして憧れなんて抱けようか。
そこにいるのはただ血と肉と骨で出来たイキモノでしかなく、あたし達と同じであるはずなのに、あたし達を見下す者でしか無いというのに。
あぁ、でも、そうじゃない。■■■。あの人のような人もいる。けれど、その時のあたしの周りにはそんな人は一人もいなくて。だからマルクの笑顔から顔を背けることしかできなかった。嘘がばれるのがとても恐くて。

……プリムと出会ったのは、院に入った直後だった。
「あんたが■■？」
母を亡くして生きた死人のような顔で入ったあたしを見るなり、すっ飛んできてガンくれやがったのが彼女だ。
「辛気くさいのよあんた」
唐突な張り手。
とっさに叩き返し、あたし達はまるでそれが合図であったかのようにとっくみあいの喧嘩をした。彼女の目は強い意志でキラキラしていて、見ていてそれが腹立たしくて懐かしくて悲しくて嬉しくて。あたし達は互いに泣き出してもジッタンバッタンと戦った。
後で聞いた話、あの時、彼女も母を亡くした直後だったのだという。
彼女の母は下街の娼婦で、院に彼女を預けて仕事をしていた。
孤児院にはそういう子は沢山いた。育てられない子供。孤児院の子の大半は、そうやって親元から放された子供達だ。

親は自分の手元で餓死させるよりはと院に子供を託す。その院が、どういうものなのか、できるだけ見ないようにしながら。

そんな母親の一人が、プリムの母だった。

亡くなった時の詳しい事情は知らない。ただ、死んだとだけ聞いた。どういう風にかも知らない。ただ、目を背けなくては話せないような、そんな内容であるらしかった。

あたし達は派手に喧嘩して、その日から親友になった。

拳で何を語り合ったのかはあたし達自身にもわからない。ただ、あたしはその日から、彼女の姉妹になった。あたしは孤児院の仲間になり、彼女達の家族になった。

ああそうだ……あれが、もう一つのあたしのはじまりの日だった。

母から生まれ、母と生きる日々を基盤として過ごし、それを失った後のあたしが見つけた、もう一つの基盤。

あたしの家。あたしの故郷。あたしの仲間。あたしの家族。

大切だったはずだ。あたしの帰る場所はそこにしかなく、あたしの生きる場所もそこにしかなく。

けれど、唯一のものだから大切だったわけじゃない。

そうではなく、逆なのだ。

そこには確かに、大切なものが沢山あった。

あたしの生きた時間がそこにあった。彼女等と、彼等と共に。

■■■。

あたし、どこで間違えたのかな？

わからない。分岐点がどこにあったのか。

たぶん最初はあの雨の日で。けれど、それから後はわからない。

あたしなりに一生懸命生きた。けれどそれは、間違いも含んでいたんだよね？

あたし、どうしようもないぐらい馬鹿な子だったんだよね？

死にかけて、助けられて。その幸運に酔いしれて。夢で思い出しては朝に忘れて。夢のような日々で生きることに必死になっていた。

あたしの基盤はあの時に、孤児院から■■■に移ったのだ。

暖かく優しいもので満ちたあの場所に。
全てのものから目を逸らして。

ゴメンナサイだなんて、愚かすぎて言えない。
ユルシテクダサイだなんて、浅はかすぎて言えない。

助けて助けてたすけてタスケテ。
目から何かが零れる。意味もなく価値もないあたしの目から何かが。
許しなんて請えない。謝ることもできない。祈るしかできないけれど、それはいったい誰に祈っているのだろうか？
……神様なんていないのに。
そんなもの、本当には信じていないのに。
あたしの目から零れたものが、足下にたまって底へとあたしを引きずり込む。
祈る相手なんかわからない。だけど祈っている。助けて助けて誰か誰か誰か……
■■■。タスケテ。
あたしの命。あたしの全て。
名前一つにあたしの全部が詰まってる。
あたしに命をくれて、あたしに時間をくれて、あたしに幸せをくれて、あたしの全てになった人。
だけどねぇ、それは正しかったこと？
あたしは助かってよかったのかな？
こんな自分さえよければそれでいいおぞましい子供が、助かっても本当によかったのかな？
問うことで誰かに肯定してほしくて。頷いてほしくて。免罪符を願うような、そんな浅ましい子供だというのに。あぁ、でも■■■。
あたしも生きたかった。あたしも死にたくなかった。そう思うことは罪じゃないよね？　それだけは悪くないよね？　だってあたしも

生きたい。あたしも幸せになりたい。
あなたと、一緒に生きたい。
そう思ったことは罪じゃないよね？
例えあたしが、どんなに罪深い子供だとしても。
生きたいと願うこと自体は、間違いじゃないよね？
あたしは手を伸ばした。どこか遠い場所にあ在るその人に。
ふいに世界が淡くなる。混濁の黒から、覚醒の白へ。
涙で溶かしたようなそこに、誰かの輪郭が浮かぶ。
すっきりとした鼻梁。深い叡智を称えた怜悧な眼差し。闇を切り取ったかのような綺麗な黒髪。薄い唇。その、端正な顔立ち。
どこか冷たい印象のあるその人が、けれどとても温かく優しいことをあたしは知っている。
あたしは手を伸ばした。そんな価値はあたしには無いのに。
けれどその手はとってもらえなかった。
■■■はどこか寂しそうな目をしていた。辛そうな目をしていた。悲しそうな目をしていた。
どうしてそんな目をしているのだろう？
どうしてそんな顔をするのだろう？
泣きそうなような、叫びだしたいような、辛くて悲しくて切ない顔を。
■■■。
あたしは泣きたくなって、その人の名を呼んだ。
けれど声が言葉にならない。名前が紡げない。
泣いたあたしの視界で、ふと、何かが動いた。
■■■の後ろに、もう一人別のヒトの姿が見える。
少しだけ、■■■に似ている。けれど違う。異質だとわかる。一目でそうとわかるほど、これほど遠いのに、これほど存在がぼやけて見えるのに、恐ろしいほど鮮やかにわかる凄絶な美貌。
もう一人の男が手を上げた。指をこちらに向けた。違う。あたしの後ろを指さしている。

あたしは振り返る。
遠くに、■■■がいた。
いつの間に後ろ側にまわったのだろう？
いや、違う。最初からそこにいたのだ。あたしが見ていたのは違うもの。違う人？　いや、違う……違う違う違う。
アタシガ　見タノハ　死　ダ
それから遠ざけてくれた人だから。だから死の前に■■■を見た。
死の前に立ちはだかる、その人を見た。
本当の彼は後ろにいたのに。死に向かうあたしに手を伸ばしていたのに。
対岸からこちらへと手を伸ばしてくれていたのに！
あたしは後ろの彼に手を伸ばした。
■■■が動く。大きく手が伸ばされる。
唇が動いた。
■■と呼ばれた。
いつかどこかで、そう、夢の中で呼ばれた時と同じように。

ベル、と。

※　※　※

ぽかっと、何か穴に落ちるような感じで、あたしは目を覚ました。
薄暗い視界。目の前にある布。
布？
あたしはぼんやりする意識の中で、自分の居場所を把握しようと記憶を探る。
なんかいろんな夢を見たような気がする。どこからどこまでが夢で、どのあたりがそうでないのか、なんだかいろいろぐちゃぐちゃでよくわからない。
（というか、ここはどこ？）

でもって、あたしは今、どういう格好なわけ？
どうもあたしが思うに、あたしは何か大きな布みたいなのに包まれて、誰かに荷物のように抱えられているらしい。
抱えている相手は誰だろうか？
布越しに触れている向こうの体温がなかなかに心地よい。だが、あの無上の喜びに直結するイイ匂いはしない。
ということは、相手は■■■ではない。
あたしは息を吸う。どこかカビくさい匂いがした。
頭が少しだけハッキリする。最初に名前を思い出した。■■ク。あたしの命。■メク。あたしの全て。
レメク。
闇の中で見失った、あたしの大切な名前。
あたしは頭を緩く振った。少しだけ思い出す。暗い闇の中と、そこから浮上するような淡い光の中。その中で見た二人の姿。
一人はレメクだ。
だがもう一人は誰だろう？　見たこともない相手だった。あんな凄まじい男前は知らない。レメクも大変素晴らしいハンサムだが、もう一人はちょっと桁が違う。ああいうのを『絶世』とか何とか言うんだろう。完璧に男の人なのに、総毛立つほどの超美形だった。壮絶すぎてちょっと趣味じゃない。
（……てゆか、なんで記憶にないヒトの顔まで見ちゃったんだろ？）
よくわからない。
死の前に立ちふさがってくれたレメクと、その人。なんでそんな風に見えたのかは謎だけれど。
けど、なんとなくわかる。
なんとなく、確信してる。
レメク。また助けてくれた？　また、引き戻してくれた？
あたし、あのまま死にそうだったんだよね。レメクが耳にタコができるぐらい繰り返してくれた、あたしの限界点ってやつがさっき来てたんだよね？

それはあたしの勝手な想像で、もしかしてまた妄想の類なのかもしれないけれど。けど、あたしは直感してる。妄信なのかもしれないけれど。

レメクが助けてくれたのだと。

あの時、あたしを引き留めてくれたみたいに。またあたしを引き戻してくれたのだと。

（レメク……）

あたしはただため息を零す。

その瞬間、ばうんっとあたしの体がバウンドした。イタイ。

てゆか、いったい、どういう状況ですか！？

「モウーッ！？」

あたしは叫んだ。変な言葉になった。

あたしもぎょっとなったが、あたしを抱えていたらしい相手はもっとギョッとなった。ビクッとなったその動きで、あたしがまたバウンドしてしまったほどに。

「目、目ぇ覚ましたぞ！」

ものすごく怯えた声。

……あれ。てゆかこの声、どこか聞き覚えがあるようナ？

「びくびくすんな！　ちゃんとふんじばったんだろが！？」

叫びかえす誰か。ちょっと悲鳴チックなその声にも、なんとなく覚えがあるような無いような？

「武器も無い。そいつはただのガキだ！」

武器、の言葉で、あたしはついさっきまで持ってたはずの破れフライパンを思い出した。

って。

あああああ！

こいつら、さっきカッフェを追いかけまわしてたあの二人！？

「モモゴウ！？　モモモゴモゴゴゴゴーッ！！」

あんた達！？　カッフェ達はどこにやったのよーッ！！

渾身の叫びは、しかし猿ぐつわで言葉にならない。

あたしは暴れた。それはもう暴れまくった。
どうやら縄か何かで全身くまなくぐるぐる巻きにされているようだが（なんでそんなに念入りに？）、さらにその上に麻袋か何かに入れられているようだが、全く動けないほどじゃない。
そう、ビッタンビッタン跳ねるぐらいはできるわーッ！！
「モモンゴゴーウッ！！」
ビタビタビタターンッ！！
盛大に動くと、怯えたように体の下にあった温もりがどっかに飛んでいった。
ちょっとした浮遊感。即座に落下。
ビタンッ！
痛い！！
「ム……ムグゥ……」
グテ、と伸びたあたしから離れた場所で、ぼそぼそと声がする。
「う……動かなくなった……か？」
「た、たぶん」
じっとりと汗をかいてそうな気配が伝わってくる。なみなみならぬ緊張感。シン、と静まりかえって約三秒。男の一人が深呼吸をしてから、もう一人に言った。
「よし。じゃあ、お前、持て」
「ぇえええええッ！？」
壮絶に嫌そうな悲鳴を上げる男その一。仮に部下Ａと名付けよう。
「じょ、冗談じゃねぇよ！　あんな恐ろしいガキ、抱えられるかよ！！」
恐ろしいガキ、というのは、どうやらあたしのことらしい。
部下Ａの悲鳴に、もう一人の男（仮名「部下Ｂ」）が舌打ちする。
「オレだって冗談じゃねぇ！　あんなおっとろしいガキ……てゆか、なんであんなに元気なんだ！？　さっきまで半分死人みたいだったじゃねぇか！」
「おれが知るわけねぇだろ！　くそ……せっかくいい獲物だと思っ

たのに……！！」
「な、なぁ、こいつがメリディス族だなんて、やっぱ嘘じゃねぇのか？　本当に髪ムラサキだったか？　影でそう見えただけかも知れねぇぞ？」
「あの袋開けて確かめる気か？　あれをもう一度開いて？　もしその瞬間に、あいつが飛び出てきたらどうするつもりだ！？　地面粉砕するようなガキだぞ！？　てゆか、あの馬鹿力がメリディス族の証か何かじゃねぇのか！？」
「ンなコト知るかオレが！　メリディス族なんぞ、ドラゴン並にレアな生き物だぞ。ムラサキっぽい銀髪ってのと、高く売れるぐらいしか知らねぇよ！」
……なんかヒドイコト言われてる。
「じゃ、じゃあ、もしかすると、ドラゴン並に強いのかも知れネェんじゃ……」
「アホかぁああ！！　そんだけ強けりゃ人買いどもに狩られたりしねぇだろが！！」
「け、けど！　こいつ、おかしいぐらい強ぇじゃねぇか！　地面粉砕したり！」
「た、確かにそれは……ッ！！」
なんかあたしをそっちのけで、熱い会話が繰り広げられている。だが、彼等の悲鳴っぽい押し付け合いのやりとりで、だいたいの事情がわかった。
どうやら、彼等はあたしがメリディス族だと気づいたらしい。で、意識を失って半分死人みたいなあたしを縛って袋に放り込んで運送中だった、と。
どこでメリディス族だとバレたか。問題はそこだが、あたしはその疑問に対するアンサーを得ていた。
帽子が無い。
どこかで落としたか……いや、落とした感覚を覚えている。あの時だ。

感情を制御できなくて、真っ暗闇の意識の呑まれる直前。あたしの頭からすべり落ちた何かの感覚。たぶんアレ。あれが帽子だ。
帽子が外れれば、髪丸出しだもんね。そりゃ、バレるってもんよ。
……てゆか、そうすると、一緒にいたカッフェ達はどこへ？
あたしはモゾモゾと体勢を立て直し、男達がいる方向に検討をつけて動いた。
とう！
ビタンビタビタビタッ！！
「「ひぃいいいいッ！？」」
全身を使って必死で近づこうとするあたしに対し、なぜか絶叫っぽい悲鳴を上げて男二人が飛び退いて逃げる。
ちょっと待てぇーッ！
「モゴゴンゴゴ！　モモゴモモモモモモモモーッ！！」
逃げるんじゃないわよ！　カッフェ達はどうしたのよーッ！！
ビタンビタビタ……ビタ（ちょっと疲れた）……ビタビタビタビタッ！！
バタバタと荒れたドタ足と、跳ねるあたしの追いかけっこ。
もちろん、この状況では、あたしの体力が尽きる方が早い。
あたしは考えた。どうやれば、彼等を罠に……いや、あたしに近づけさせれるか、を。そして、どうやれば情報を引き出せるかを。
ピンと冴え渡る頭脳が答えをはじき出した。
動かなければいいんじゃん。
そうすれば、安全（？）と思って奴らは近寄ってくる。しかもあたしは体力を使わずにすむ。ふふふん。これはなかなか素晴らしい名推理ではありませんか？！
なんとなく褒めてほしくてキラリと目を光らせる。しかし、もちろんこんな所にレメクがいるはずもなく。よって、ご褒美のナデナデも無い。
……しょんぼり。
意気消沈したあたしに、じり、とにじり寄る獲物の気配。

「……動かなくなった……か？」
じわ、ともう一歩分にじり寄る気配。
「……だ、大丈夫……か？」
じりじり。じりじりじりじり。
……ええい！　とっとと来んかぁーッ！！
「……な、なんか、すっげぇ嫌な予感するんだが」
「触った瞬間跳ね飛んできたりしてな！」
ＨＡＨＡＨＡＨＡと不思議な高笑い。そして遠ざかる気配。ちょ、ちょっと待て！　逃げるんじゃない！　てゆか逃げるなら縄解けぇーッ！！
あたしは慌てた。ここで跳ねて追いかけるべきか！？　い、いやしかし、そんなことをしていつの間にか復活したあたしの謎体力がまた減ったら！？　そしたらまたデッドエンド真っ逆さま！？　闇の向こうでレメクと超美形のお二人とご対面！？
それもイイカモしれないけれど、できればあたしは生レメクの匂いを嗅ぎたい。
そうだ。夢の中では匂いが嗅げない。ダメだ。却下だ！　あたしはあの匂いがいい！
あたしは飛びかかるのを我慢した。いつか宿のおねーちゃんが船乗りのおにーちゃんに言っていた言葉を頭の中で繰り返す。
待てば海路の日和あり。棚からぼた餅。急がば回れ。えぇと……あと、なんだっけ？　それっぽい言葉。えぇと、猫に小判は違うしっていうか何でこんな時に猫なんて単語が出てくるわけあたし！
こんがらがってきたあたしに反して、事態はとてもシンプルに進行するらしい。
逃げ出しかけた男二人が、なぜかドタドタと戻ってきた。
その足音が、ちょっと怯えている。
……ハテ？
「こ、これがそうでさぁ！　旦那！！」
ドタドタバタ。

あたしの三歩手前で足音が止まる。
……何故離れているのだろうか。
あたしは胡乱な目になったが、もちろんそれで状況が変わるわけじゃない。
だが、状況はたいてい向こう側から勝手に変化してくるものだった。

「その中にメリディス族が？」

どこか耳にキンキンくるような、ひどい甲高い声がした。
あたしは目を見開く。
部下Ａ＆Ｂが連れてきたらしい男。その、声。
それはあたしのよく知っている声だった。
「へ、へぇ……。あのガキを追っていて偶然出くわしまして。どっかの貴族の所有かもしれませんが、まぁ、他国に売っちまえばバレないかと」
とんでもないことを言う部下Ａの言葉に、キンキン声の男は考え込む気配。
あたしは用心深く呼吸をしながら、相手の気配を探った。
さっきの男二人。後から来たキンキン声の男一人。だが、その後ろというか周りというか、わらわらと人の数が増えていく。五人六人……これは……十人以上いる。
「それで、カッフェを取り逃がしたのを赦せ、と？」
キンキン声が問う。どこか忙しない口調。きつい声、というよりも、声自体が高音すぎてキツイ声。
あたしはその声を本当によく知っていた。
「まぁ、あのガキは取り逃がした所で、後でどうとでもできるわな。それよりもメリディス族……確かに、本物なら、売り飛ばせばかなりの金になるねぇ。そいつと、貯めた金を持って逃亡するか……そうすれば、あの男も追って来れない……」

ぶつぶつと呟く声。
あたしは自分の奥底で熱いものがこみ上げてくるのを感じた。
それは、かつてレメクに対してあふれ出したものとは対局のもの。
どす黒く、どろどろと凝ったおぞましいもの。
一転の曇りもない純粋な感情。憎悪と言う名の思い。
「そうだね。カッフェのことは諦めましょう。えぇ……あなた達、よくやりました。その荷物を持って、明晩、船でここを起ちましょう。あの孤児院にも、もう用は無いしねぇ」
荷物と呼ばれた。そのことに対してはもう何も思わない。
ただ、荒れ狂う感情があたしの全身を活性化させていた。
それは危険な兆候かもしれない。だが、それでもかまわない。
憎むべき相手がそこにいる。あたし達の不幸を作っていた張本人の一人がそこにいる。
あたしは仄暗く燃える身の内の業火に全身を浸した。憎い。憎い。あぁ、レメク。かつてあなたは言った。憎しみを止めることはできないと。本当だ。止められない。大切な仲間への思い。それが全て裏返る。悔しい。憎い。殺してやりたい。あぁ、相手の死を願うことはこれほど容易い。この手が刃を探すことも、まるで当然の如くに!!
今ここに刃物があれば、過たずそこにいるだろう男を刺してやるのに!
あたしは口を覆う布を食いしばった。
荷物扱いされること。売られそうなこと。そんなことはどうでもいい。安穏と助かった自分に対する、罰ならばそれでいい。
だが、罪に対して罰があるのならば、あの男にも相応のものが無くてはならないはずだ。そうだ、罪は罰を。
罪には罰を。
あの男にも与えなければ。
あたしは息を整える。計算する。ちっぽけな頭で考える。あの男に一矢報いるための方法を。

近づいてきた足音があたしの前で止まる。
乱暴に引き立てられ、頭の上のあたりで紐のようなものがほどかれる音がした。
鼓動が早い。体が熱い。血がめぐっている。怒りと憎しみを糧にして。
布しか見えなかった視界に、光が投げかけられた。
しばらくぶりの外の光。
そうしてあたしは、そこに見たくなかった顔を……そして、睨み殺してやりたいと思った顔を見た。
聖ラグナール孤児院。偉大なる人の名を掲げられた、最悪の孤児院。
その院長が、目の前にいた。

7　断罪者

「ふむ。確かに本物……」
あたしを眺めてそこまで呟き、院長は口を閉ざした。
エットーレ・ブリル。
自分の身の内に贅肉と金を溜め込むだけ溜め込んだ、つぶれた蛙のような顔をした男。
むやみやたらに自分を飾り立てずにはいられないこの男は、いつも豪華な衣装と装身具を纏っていた。
両手の指には、今も悪趣味な指輪群がいくつも填っている。
掌と手首の境目がさっぱりわからない手首付近には、宝石をいっぱいつけた黄金の腕輪がギンギラギン。耳には耳たぶが伸びそうなほど大きな真珠がぶら下がり、最近とみに輝きが増している頭部には、それを隠すためか大きな宝石をつけた帽子が被せられていた。
でっぷりとした体を覆うのは、綿布団だろうかと思うような分厚くて豪華な服。
自分の贅肉布団の上にそんなものを羽織っているものだから、奴のシルエットは巨大なボールか東の国の調度品だとかいう『ダルマ』にしか見えなかった。坂道ではよく転がりそうだ。
肉を二重にも三重にも重ねたようなたるんだその顔をにらみ据えて、あたしは全身の力を一点に集中させる。我が身を縛る縄を破る必要は無い。この至近距離だ。攻撃は必ず当たる！！
（下れ天罰！！）
あたしは全身をバネに変えて突撃体勢に入った！
しかし、
「むぐ！？」
バッと突然視界が布で遮られ、飛びかかる間も無く袋の口が閉ざされる！！
（ぬぁあああッ！？）

あたしはタイミングを見失って袋の中でほぞを噛んだ。あああ飛びかかってやりたかったのにーッ！！

い、いや、ここで感情的になって頭突きをかましたところで、ボコボコにされるのがオチだ。だから、不発に終わったのはいいことなのかもしれないけれどぁあああムキィーッ！！

あたしは収まらない怒りその他モロモロを込めて歯ぎしりした。

ブチブチという音がどこかから聞こえたが、痛みは無いから血管が切れたわけじゃないんだろう。

てゆか頭の血管切れそうですよ！？

（おのれ！　誰が邪魔しやがったッ！？）

そう怒鳴って暴れてやりたかったのだが、何せ多勢に無勢である。おまけにあたしは全身縄で縛られて袋詰め。これでは戦うに戦えない。

悔しさを噛みしめ脳みそを沸騰させているあたしにかまわず、手早くあたしを袋詰めし直した誰かは、そのままあたしの入った袋を軽々と抱え上げた。

感触からして、肩に担ぎ上げたのだろう。

さっきまであたしを抱えていた部下Ａよりも、一回りぐらい筋肉がついている。感触の分厚さでそれを感じ取って、あたしはキリキリと歯ぎしりをした。

布越しに伝わる体温は暖かくていいのだが、敵だと思うと恨み百倍。

自由になったら千倍返しにしてやるんだから！　っていうかちょっと汗くさいわよ！？

（む……むむん、ムレムレ……）

あたしは袋の中で「ぎにゃー」と悲鳴をあげた。

あたしの鼻は元々とても良い。

なにせ一キロ離れた民家の晩ご飯すらかぎ分ける。

しかもここ数日、とても麗しく馨しいお方と一緒にいたので、嗅覚レベルも天井知らずに引き上げられていた。

故郷たるスラムを臭いと思ってしまうほど、常に良い匂いに囲まれていたのだ。

それに慣れてしまったため、この汗くさい男の体臭はとてつもなくキツかった。

（う……うう……レメク。たちけてレメク。匂い嗅がせておじ様ぁあああ）

ああこれほどレメクの体臭が恋しくなるとは。

あのすンばらしい薫りを是非今一嗅ぎさせていただきたい。

それだけでこの地獄から天国へとすっ飛んでいってしまうだろうにッ！

脳裏にレメクの姿が浮かぶ。

最愛のお人は、なぜか思い出の中ですら遠い眼差しで逃げ腰になっていた。

そのあまりのリアルっぷりに、あたしの涙がちょちょぎれる。

嗚呼レメク、なぜにあなたは、つれないの。一句できた。

「しかし、旦那。これ、どこに置いておきます？」

布越しの汗ムレ筋肉（仮名）が、誰かにそう問う。たぶん「旦那」とはエットーレのことだろう。

……てゆか相変わらず物扱いなわけね、あたし。

「すぐに船倉に放り込んでおきたいところだねェ……けど、万が一、弱って死なれても困るし。出発まで、港の倉庫に放り込んでおきましょうか。監視に見つからないように、慎重にね。あぁ、そうそう。水と食料は旅に耐えられる程度に与えてやって」

キンキンと、布越しでも耳をつんざく声が聞こえる。

あたしはいっそうギリギリと歯ぎしりをした。

この男がもっとマトモな人だったら……もっと常識的で人情的な人だったら！

そう思うとグラグラと脳みそが煮えたぎる。

孤児院の院長がレメクのような人だったら、きっとあたし達の生活は違っていた。

御飯だってちゃんと食べられただろう。着るものだってもっとマシなものを与えられただろう。餓死したり病死したりする子はいなかっただろう。

あの寒い雨の日だって、皆が無事で切り抜けられたかもしれなかったのに！

そんな『もしも』が浮かんでは消えて、あたしの目からはいつの間にか涙がこぼれ落ちていた。

キリキリと胸が痛む。

喉の奥が焼け付くような、呼吸一つが炎の吐息のような、得体の知れないザワザワとした熱が蘇る。悔しい。悔しい。自分に対する憎悪すら相手への憎しみに加算されていく。頭の中に蜘蛛の巣のような網がかかり、それは素早く脳の全てを支配して、思考の全てを絡みとっていった。

（どうやって一矢報いよう）

あたしの思考（こころ）がそう囁く。

毒の水が土に染みるように、それは悪意を増しながら体中に広がっていく。嗚呼どうやって敵を討とうか。ジリジリと脳裏を焦がす灼熱の刃。それを痛いと感じるのに、なぜあたしは嗤（わら）っているのだろうか。

悔しいのに。悔しくてたまらないのに、何故か口元には亀裂のような笑みがゆるゆると浮かんでくる。

（どうやって憎しみを叩きつけよう）

顔を裂くような笑みが浮かんでくる。

……これは暗い歓喜だ。

気持ちが悪いほどのどす黒い感情が、そのはけ口を見つけて驚喜している。

仲間への罪悪感。自分への嫌悪。それが憎しみの対象を見つけて、これほどに喜んでいる。

気づいている。この暗い気持ちの半分は、八つ当たりにも似た責任転嫁なのだということに。

だけど、あぁ、それがどうしたというのだろう。
あの男が……院長が、あたし達の悪環境の元凶だったことには違い無い。その事実だけは揺るぎない。なら、その罪を暴き責め立てることに、何の躊躇がいるだろうか。憎しみを募らせることに、何の遠慮があるだろうか！
（罪には罰を）
頭の中に、その言葉だけが泉のようにわき上がる。
（罪には罰を！）
裁く権利はあたしには無い。けれど、そんなことに構っていられない。
振り下ろしたい刃がある。
叩きつけたい憎しみがある。
止めることも出来ず溢れ出でるこの慟哭が、免罪符を請うように言葉を繰り返す。
罪には罰を！　あの男に罰を！！　あの男に裁きを！！
穏やかな昼下がりに語られた言葉の全てが、あたしの脳裏から零れ落ちていく。優しくて暖かいレメク。ごめんなさい。あたしはやっぱり、こんな子供です。
沢山のことを語ってくれたのに。それらを一切役に立てることのできない子供です。
きっとこの手が刃を握れば、レメクは悲しい顔をするだろう。それがわかっているのに、この愚かな思いを止めることができないんです。
零れる涙と一緒に、沢山の思いを胸の奥底から外へと零す。大切な人へ。謝罪に変えて。
（……ごめんね……レメク）
何一つ言いつけを守れなくて。大人しくなくて。いつだって愚かなままで。
だけど、今、あたしの思いを統べるのは、どうしようもないほど暗鬱な憎悪だから。今、こんな状態だっていうのに、頭の中にある

のは、貴方の所に帰ることよりも、あの男にどうやって刃を突き立てようかということばかりだから。

あたしは息を吸い込む。嗅覚はいつの間にか麻痺していた。カビくさい臭いも、汗くさい臭いももうしない。ただ、耳の奥で潮騒にも似た血潮の音が鳴っている。

あたしは祈った。誰に祈ったのかはわからない。もしかしたら神様かもしれない。けれど、神様はこんなことを叶えてはくれないだろう。なら、祈った相手は悪魔かもしれない。

言葉がただ脳裏を駆けめぐる。

――罪ニハ罰ヲ――

あの男に、突き立てる刃をください。

※　※　※

あたしが地面に降ろされたのは、担ぎ上げられてから小一時間ほどたってからのことだった。

袋の中に入れられたままだから、正確な時刻はわからない。ただ、布越しでもわかる黄昏の気配が、あたしにそれらしき時刻を伝えていた。

たぶん、外の世界は深い蒼とオレンジのグラデーション。黎明の黄金と似て非なる赤銅色の太陽が、空の雲をまろむような紅色に染める時刻。人々が帰路に尽き、夕闇のベールが静かに世界を覆う時間。

静寂と共に忍び寄る夜の気配を袋越しに感じながら、あたしは倉庫とやらに放り込まれた。

捕まった場所がどこで、エットーレと会った場所がどこなのか。それすら知らないあたしには、今いる場所とさっきまでいた場所との間の距離がわからない。

ただ、今いる場所を港の倉庫だとすれば、ずいぶんと遠い場所だったんだろう。あたし達子供の足ならともかく、大人の足で片道小一時間とすれば、なかなかの距離だ。

それとも、それほど時間をかけて大回りに路地を歩いてきたのか。

（……それにしても、近頃の大人って、だらしないのね）

袋の中でもぞもぞ体勢を立て直しながら、あたしは嘆息をつく。

ここに来るまでの間に、あたしを抱える男は六回、人を変えた。

最後の方では誰が担ぐかの押しつけあいになり、倉庫に着いた時には見張り云々の相談も無いままに中に放り込まれ、鍵をかけられる始末である。いったい、どういうことだろうか？

（……てゆか、失礼よね！　あたし全然太ってないのに！）

あの連中は、こともあろうに運ぶ最中、あたしを「重い」と評したのである！

しかも「だんだん重くなってくる」だの「体の力が奪われる」だの化け物のように言う始末。失敬な！！　こんなか弱くてちっちゃな女の子に対して！！

……いや、か弱いかどうかはこの際ともかく。とりあえず、一回どころでなく死にかけてるヨワヨワな子供だというのに、なにをどうやったら「重い」だの「力を奪われる」だの言いやがるのか！

まぁ、彼等が担いで運んでくれる間に、なぜかあたしはとっても元気になっちゃったんだけど。

……あれ？　あたし、本当に力を奪って……？

い、いや、あたしにそんな特殊な能力なんて無いから、きっと何かの間違いだ！

よし、と無理やりそう結論付けて、あたしはぐねぐねと体を動かした。どうにかして縄抜けできないかという、無駄な努力である。

……いや、なんか、ちょっと縄が緩んできたような気もするが……？

「……もご……？」

あたしは首をかしげる。

ぐねぐねぐね、と動くと、動ける幅が増えていくような気がするのだ。い、いや、気だけじゃない。実際に動ける幅が広がってる！

（縄が緩んでる！？）

あたしは思いきって全身に力を込めた。

ふんぬっ！！

ブチブチッと音がして、あたしの戒めがとけた！

おおお！

あたしは袋の中で体勢を立て直し、自由になった両手を伸ばす。

頭の上のほうにある袋の閉じ口に手をつっこみ、それを引っ張った。

うんしょ、うんしょ。

ブチッという音がして、入り口が大きく開いた。

おおおお！！

もしかしてあたし、逆境の時に馬鹿力が出る特殊体質だったり！？

そんなあり得ない妄想をしつつ、あたしはガバチョと袋の外に顔を突き出した。

「むぽっ」

……あ。猿ぐつわしたままだった。

もぞもぞと動いて猿ぐつわを外す。……はぁ……やっとまともに息が……

「……」

大きく深呼吸しかけて、慌てて息を止めた。

……カビくさい。

これはちょっと、口元を布で覆っていたほうがよさそうだ。

あたしは外した猿ぐつわを綺麗に伸ばし、掃除の時のように口元の覆いに変える。やれやれ、これでちょっとマシになった。

ほっとして自分の体を見下ろす。千切れた縄を幾重にも体にまきつけたまま、麻袋の中に座っているあたし。……なるほど、こういう状態だったわけだ。大量の縄を見ながら途方に暮れる。まるで蓑虫の脱皮のようだと思った。

あぁでも、あのブチブチいってたのは、縄が切れてた音だったの

ですね。
きっとこの縄は痛んでいたんだろう。だから子供のあたしの力でも千切れたんだ。きっとそうだ。うん。
ちゃっちゃとそう結論づけて、あたしは千切れた縄の束（大量）を体からどかす。袋の外に出ると、夜の気配が忍び寄ってきた。
（……さて、と）
おかしな感じに凝り固まっている体をほぐしながら、あたしは小さな脳みそをフル回転させる。戒めは解かれた。ここからがあたしの舞台だ。
あたしは復讐の手順を考える。
あたしの手には、今は何の武器もない。ざっと倉庫内を見るが、大きな木箱がいくつも並んでいる以外、これといって武器になりそうなものは無かった。
あえて挙げるとすれば、さっきあたしを戒めていた縄ぐらいだろうか。
だが、あのどの部分が首かわからない場所に、縄を投擲しても失敗しそうな気がする。
（……なにか……あたしでも使えるようなものを……）
倉庫の中をちょろちょろとうろつく。あの破れフライパンのような、打撲武器は無いものか。
あたしは誘拐される前に持っていた穴開きフライパンを思い出した。
どういう魔法がかかっていたのか、今考えると凄まじい威力を発揮した武器だった。なにせ路面を粉砕するような武器である。いったい、どんな呪いのかかっていたシロモノだったのだろう？
（……まさか、あれがあたしの力、なんてわけないし……）
前も似たようなことを思った気がするが、あたしは本来それほど強くないのだ。
体のわりにはそこそこ力もあるし、喧嘩だって強いが、それらは普通に子供レベルだ。でなければ、孤児院や路地裏での派手な喧嘩

でとっくの昔に流血沙汰になっている。なにせいつも全力で戦っているのだから。

だから、路面を粉砕したのは、あたしの力ではない……と思う。たぶん。

……いや、昔、レメクの家の壁に亀裂入れちゃったりもしてるんだけど……

え……えぇい！　わかんないことは後回しだ！！

あたしは大きく頭を振って余計な思考を振り落とした。一緒に大切な人の記憶にも蓋をした。意識の全てを一つのことに向ける。あのダルマ院長に怒りの鉄拳をたたき込む、ということに。

あたしはギュッと握り拳を作った。

武器が無いのなら仕方がない。この拳で恨みを叩きつけるだけだ。

そう決めれば、次は『どうやってあの院長の所まで行くか』が課題になる。

この倉庫の中には、あたし以外に人はいない。本来あたしを見張っていなくてはいけないはずの人員も、なにやら気味悪そうにブツブツ言いながらどこかに行ってしまっている。逃げるには願ったり叶ったりの状況だが、逃げてはあの院長に鉄拳をたたき込めない。

……いや、待てよ？

あたしは考える。瞑った瞼の裏側で、ちらちらと言葉が待っている。

エットーレは、「明晩」「船で」ここを発つと言った。

あの孤児院にはもう用が無い、と。

エットーレが院長の座を捨てるというのは、孤児院にとっては朗報だが、彼が何故院長の座を捨てようとしているのかが謎だ。

孤児院の院長というのは、いわば『慈善事業の象徴』的なポジションでもある。街で金をばらまかずとも、孤児院の院長である、というだけで、慈悲深い人格者のように周囲は見てくれる。

それに、孤児院には貴族達が多額の寄付をしてくれる。黙っていてもお金が無償で提供されるのだ。こんなウマイ商売は無いだろう。

エットーレは、それを利用して私腹を肥やしてきたはずだ。そんなウマウマな椅子を捨てるのは何故か。

あたしは閃いた。脳裏に、必死に蓋をした思い出の中の人の姿が浮かんだ。

レメク。

そう、レメクがいた。レメクが動いていた。だから院長は逃げ出すのだ。

孤児院で不当に貯めた金と、あたしという戦利品を持って逃げるのだ。

そのことに思い至った瞬間、あたしの中にパチパチと全てのピースのはまったパズルが出来上がった。

行く場所が決まる。孤児院だ。院長は、孤児院にいる。

そこで今頃、せっせと荷造りをしているはずだ。明日の晩に発つために。溜め込んだお金を集めているはずだ！

あたしは息を吸い込む。ぎゅっと握った拳が痛いほどだった。

（……プリム。メアリー。メム。マルク……）

顔が浮かぶ。涙が零れる。

あたしは拳を開いた。

カビくさい倉庫の中から、一歩を踏み出す。

さぁ、復讐に出かけよう。

※　※　※

港区は、王都の南区の最南端の一角であり、聖ラグナール孤児院のある南区三番地は、港から近い。

海のある港を背にし、王宮を真正面にして立った時、右手側から一番地二番地と番地が七番まで続く。三番地は中央よりやや右手側にあり、そこは古く倒壊しかけな建物の並ぶ貧民窟だった。

あたしは走る。
足音は軽く、夜の闇に溶けるようにして消えていく。
空にかかるのは半円の月。まるでギロチンのようなそれに、あたしの口元がうっすらと笑む。
それはなんて、今のあたしの心に相応しい形なのか。
半身を欠いた月は、星の輝きに導かれて中空を目指す。
あたしは冷たく密やかな暗がりを泳ぎながら、かつて住んでいた孤児院を目指していた。
徒手空拳で大人に立ち向かう愚かさはわかっている。だから、油断無く路面を見るあたしの目は、常に何か武器になりそうなものを探していた。だが、そううまい具合にそんなものが転がっているはずがない。
あたしは失望を目に宿しながら、それでも足を緩めずに駆けた。
倉庫から脱出して、どれぐらい経っただろうか。
行く手に懐かしい建物が見えた時には、あたしの心が大きく弾んだ。
だが、
（……え？）
あたしの目は、そこにありえない光景を見つけてしまった。
孤児院に続く貧民窟の路地。そこに、大きな篝火がいくつも掲げられている。
篝火は真っ直ぐに孤児院へと続いていた。松明と言うにはあまりにも大きなその炎に照らし出されて、古びた建物が浮かび上がっている。紛う事なきあたしのいた孤児院だ。古い壁には、煌々と照らし出す炎にあわせて、幾人もの兵士の影が揺らめいている。
（……どういう……こと？）
聖ラグナール孤児院が、兵隊に包囲されていた。
完全武装した兵士は、遠目で見てもざっと数十人。ひしめくような甲冑の群れが、聖人の名を冠されたとは思えないほど古びた建物の中に入り、いくつもの箱を外へと運び出していた。

（……孤児院の皆は……？）
あたしは呆然とその様を眺める。
（カッフェ……あの院長は？）
軽く混乱して、足が棒立ちになる。
何かを考えないといけないのに、あまりにも予想外な光景に思考が完全に停止していた。
孤児院まではまだ距離がある。孤児院の中は大層な騒ぎのようだが、ここまで遠いと彼等の声もただのざわめきにしか聞こえなかった。だが、武装した兵が動いているのだ。並大抵のことではない。
あたしは一歩孤児院側へと踏みだし、ハタと顔を上げた。
一斉捜査。
頭の中に、そんな言葉が浮かぶ。
暖かな日差しの中で聞いた声。それを思い出したその瞬間、一気に混乱の糸が解けた。
一斉検挙。一斉粛正。そう言ったケニードの声。レメクの指揮の下、女王様や教皇様達まで乗り出して行っている孤児院の不正捜査。
（レメク！）
あたしは焦った。何のことはない、レメクに先を越されたのだ。
（え、で、でも！　昼間は、こんな早く動くような感じじゃなかったのに！！）
違う意味でいっそう混乱して、あたしは踏み出した分の距離を足踏みで引き返した。喜んでいいはずなのに、喜べない。けど怒りが沸くわけでもない、この微妙な気持ちは何だろう？
（ど、どうしよう！？）
こんな展開は予定していなかった。思わずおろおろと足踏みをしていると、突然後ろから腕をつかまれた。
「ひゃあ！？」
とっさに悲鳴が上がる。だが、
「オレだよ！！」
反射的に怒濤の三連撃を繰り出す前、あたし以上に悲鳴っぽい声

があがる。
あたしは寸前で拳を止めた。
カッフェ！？
「あ……っぶねぇ……！！」
鼻先で止まったあたしの拳に、カッフェが顔をひきつらせる。
あたしは驚きのままに声をあげた。
「無事だったんだ！？」
「「それはこっちのセリフだーッ！！」」
途端に合唱された。一部は「だ」の部分が「よ」だったが。
見ればカッフェの後ろには、ナナリー以下他孤児院の三人がいる。
「よかった！　あいつらに何かされてたらどうしようかと……！」
「だからそれはこっちのセリフだっつーのッ！　おまえ、あいつらに捕まっただろうが！」
「あ、あぁ、うん。そうね」
あたしはあっさり頷く。確かに捕まりました。見事に蓑虫チックなぐるぐる巻きに、麻袋まで追加された完全誘拐バージョンで。
「そうね、って……あんた……よく無事で……てゆか、体は！？あんた、あの後いきなり倒れて……！」
呆れたような声をあげた後、ハタと気づいて顔色を変えたナナリーに、あたしはちょっと微笑った。
「なんか、運ばれてる最中で元気になっちゃった」
ナナリー以下四人、唖然。
いやでも、それ以外に言いようがないんだもん。しょうがないじゃないか。
まさか闇の紋章がどうこうとか言えないし。レメクとの関係も言えないし。実のところ、ここまで元気に復活した理由は謎のままだし。
「ま、まぁ、元気になったんならいいけど……」
かなり胡散臭そうな顔で言うナナリー。気持ちはわかるが、ここはスルーしていただこう。あたしにも説明できないんだから、どう

しようもない。
「でも、どうやってあいつらの所から逃げ出して来たんだい？　あ、あの兵隊達が助けてくれた……んじゃないよね。だったら、あそこで保護されてるはずだし」
あの兵隊達、で孤児院の方を見るナナリーに、あたしは慌てて手を伸ばした。わしっと細い腕を掴む。
「そうだわ、あの孤児院の様子よ！　あれなに？！　いつの間に孤児院があんなことに？！」
「え？！　い、いや、アタシ達が来たときもすでにあんな状況だったし……てゆか、なんか、大きい熊みたいな神官が、捕縛しろぃ！　とか怒鳴って、あんな感じに」
大きい熊みたいな以下略。
あたしは遠い目になる。誰のことか即座にわかった。豪腕の大神官様だ。
「アタシ達も、あんたがあそこに捕らえられてるもんだと思って……こっそりここまで来てたんだけど……」
あんな状態になっちゃってて、どうにも動けなかった、と。
で、眺めてたら、あたしがトッテケテーとやって来た、と。
「……なんか、そう考えると……あたし、すごい間抜けね……」
まるで飛んで火に入る何とやら。別に炎に引き寄せられたわけじゃないけど。
「それにしても、どうやって？　どこから？」
今度は逆にナナリーの手があたしの腕を握る。あたしは「話せば長くなるけど」と前置きして言った。
「港の倉庫に放り込まれててね。縄千切って逃げてきたのよ」
「……説明、六秒で終わったぞ」
どこが長いんだとニアがぼやく。うっちゃい！
「な、長くしようと思えば長くなるのよ！　えぇと、まずあの二人組に抱えられてる所から目覚めて……って、そういえば、あたしが気絶しちゃってる間、あんた達どうしたの？」

ハタと思い出し、記憶外の状況説明を希望したあたしに、四人が顔を見合わせる。どこかバツが悪そうな顔だ。

え。……なんで？

「……あの時、おまえがいきなり気絶して……その……」

そう言って、カッフェがあたしの腕を呼び止めた時とは別の手をあたしに差し出す。

そこに握られていたのは、ちょっと皺になったあたしの帽子だった。

「あぁ、カッフェが持っててくれたんだ。ありがと」

「いや……って、そうじゃなくて！　これが落ちて、その……おまえの髪が、だな」

なんか言いにくそう。

あたしは首を傾げて自分の髪に触れ、あぁ、と何が言いたいのかを悟った。

「あたしがメリディス族だって気づいた、と」

なんというか、物心つく前から汚れまみれの髪で、ぶっちゃけ自分自身、自分がメリディス族だってこと忘れちゃうんですが。

あたしの言葉に、四人が妙な顔をする。口を開いたのはナナリーだった。

「あんたの髪に驚いて……でも、それよりあんたの体調のほうが気がかりで、アタシ達、あんたをどこかのお医者さんに診せたほうがいいんじゃないかって話し合ったんだ。あんたは貴族に保護されてるみたいだし、それに、メリディス族って、確か国が保護してくれるんだろ？　だったら、その……お城に連れて行っても、大丈夫なんじゃないかと思ったんだ」

なぜいきなりお城に話が飛ぶのかが謎だ。だが、とりあえずあたしは相づちを打って話の続きを促した。

それでそれで？

「だけど、あんたを連れて行こうとした時に、あいつらが来て……」

あいつら、というのは、あの部下Ａ＆Ｂ（仮名）のことだろう。

「アタシら、あいつらに追われてて……カッフェも怪我したままだし……それで逃げちゃって……」

ナナリーの視線があたしから外れて地面に落ちる。そのどこか辛そうな顔に、あたしは首を傾げた。どうしたんだろうか？

「あいつらが追って来なかったのは、お前がいたからだろうな。カッフェや僕たちを捕まえるより、お前をつきだしたほうが金になる」

「ニア！」

言葉を濁したナナリーの替わりに、ニアがハッキリとそう言った。ナナリーが非難の声を上げる。だが、あたしはあっさりと頷いた。

「そんな感じのこと言ってたわ。あたし、高く売れるらしいわね。こんなガリガリなのに」

ニアがちょっと怯んだように目線を逸らせた。マテマテ。

「ちょっと、そんな顔しないでよ！　ただの事実なんだから。別にあんた達のせいじゃないじゃない！　あたしがこんな髪してる事に、あんた達がなんで責任感じてるっぽい顔になるわけ！？」

「で、でも、わたし達、あなた置いて逃げて……」

か細い声で言ったのはミリアだ。あたしは目を剥いた。

「逃げて当然でしょ！？　追われてたんだから！　そのまま留まって、全員捕まったらそれこそ最悪じゃない！　逃げていいのよ。当たり前じゃない！」

あたしの声に、四人はビックリしたような顔になった。女子二人の目には涙まである。

「それより教えて。あいつら、あたしをエットーレに差し出したわ。あの二人は、エットーレの雇った下男か何かってこと？　で、結局の所、なんであいつらに追われてたわけ？　ここまできたんだから、あたしにも説明してくれるでしょうね？」

あたしの声に、四人はちょっと気まずそうな顔を見合わせた。

結果的にあたしを置き去りにして助かった、という罪悪感があるのか、カッフェが辛そうな顔で口を開く。

……だから、頼むから気にしないでよ……

困り顔で嘆息をつくあたし。カッフェは、やっぱり辛そうな顔のままで言った。

「……オレ、あいつの部屋の掃除をさせられた時に、隠し部屋を見つけたんだ」

なんと！

あたしは目を見開く。

「あの、隠し金庫が三つあるっていう隠し部屋を！？」

「なんで知ってるんだよ！？」

あたしの言葉にぎょっとなるカッフェ。あー……うん。そうだよね。普通、驚くよね。

「えーと、その、あたしの手柄じゃなくてね、おじ様が調べ上げてたの。……って、もしかして、カッフェ……あんた、黒い金庫開けちゃったわけ？」

「違う。開けてない！　最初から開いてたんだ。けど、黒いやつじゃなかったぞ。オレが見たのは真ん中の鉄の金庫で、そこにこれが入ってたんだ」

そう言ってすり切れた服の中から取りだしたのは、薄い小冊子だった。

「……なに？　それ」

「……知らねぇ。オレ、文字読めないし。けど、なんか数字が並んでた」

あたしが手を伸ばすと、カッフェは冊子をあたしに渡してくれた。ぱらぱらとめくると、なるほど、数字が並んでいる。……てゆーか、なんですかこの数字！？

「……一、十、百、千、万……ちょ、ちょっとこれ……金貨の枚数じゃないよね？」

文字が読めないので項目はさっぱりだが、その横に並ぶ桁が凄まじい。最低でも万の桁の数字ばかりだ。多いものでは数百万にものぼる。

「銅貨だとしてもすごい金額だぞ。……で、これ何だろーって思っ

て眺めてたら、エットーレが奇声上げながらやって来て……」

あー……

あたしはこめかみを揉んだ。だいたいの所はわかった。

つまり、カッフェはエットーレの部屋の掃除中、偶然隠し部屋を発見してしまった、と。で、好奇心でそこに入ったら開いてる金庫があって、その中にこの冊子があった、と。エットーレは部屋に戻った時に、隠し部屋が暴かれてるのを見て、大あわてで部屋に入り……

そこで、冊子を手にしたカッフェを見つけた、と。

で、追いかけっこ。カッフェは足早いから、あのエットーレに捕まえられるハズがない。

おまけにカッフェはご丁寧に冊子を持って来ちゃってる。たぶんこれ、不正の証拠の一つなんだろう。もしそうじゃなくても、後ろ暗い関連の帳簿だろう。だから取り戻すためにゴロツキを雇い、今日に至る、と。

「……ナナリー達とは、追われてる最中に会ったんだ」

カッフェはナナリーを見る。視線を受けて、ナナリーが会話を引き継いだ。

「アタシ達の孤児院の事情は、ちょっと話したよね。……黒い神官の噂もあって、皆ピリピリしてたんだ。で、院の中にいるのは辛いし、仕事しないといけないしで街に出てたら、息も絶え絶えに逃げてるカッフェを見つけてね」

「い、息も絶え絶えじゃなかったぞ！」

「嘘をつきな！　死にそうな顔色でゼェゼェいってたじゃないか！

……まぁ、それはともかく。で、さ。放っておけないだろ？　あたし達は院は違えど仲間だ。で、匿ったら……」

「うちの院の連中も、裏で繋がってたみたいでな。うちの院長以下大人連中が騒いでるのを聞きつけて、僕とミリアが罠張ってカッフェとナナリーを逃がし、後で合流。で、そこにお前が突撃してきた、ってところだ」

ふむふむ。てことは、ごく最近なわけね。カッフェが帳簿見つけたのも、逃亡劇が始まったのも。

「オレが見つけたのは三日前。丸一日逃げまくって、二日目にナナリーに助けられて、今日ニア達の助力で危機を脱出。その後昼まで追いかけっこ、追いつかれた時に、お前のトンデモ特攻が来た、と」

失礼なセリフを交えながらさらに詳細を説明されて、あたしは冊子をカッフェに戻しながら唇を尖らせた。

「だいたいの事情はわかったけど、その突撃とかトンデモ特攻とかっていう表現は何よ。あたし、必死だったのに」

「……普通、必死でも、石畳は粉砕できないと思うぞ……」

ぼそっとニアがぼやく。一斉に頷く他三人に、あたしはちょっと遠い目になった。

確かに、あの力は謎なのだが。

「き、きっと火事場の馬鹿力ってやつよ！　そ、それより……ねぇ、孤児院があんな状況ってことは、エットーレも兵士に捕まっちゃったってこと？」

「さぁ……？」

あたしの問いに、カッフェとナナリーが顔を見合わせて首を傾げる。

「ここじゃ、詳しいことはわからないし……」

「だいたい、なんでいきなりあんな騒動になってるかサッパリだし」

「えーと……ぇーと」

心底不思議そうな顔の彼等に、あたしはちょっと迷った。

言うべきだろうか。

い、いや、隠す意味ないんだから、言ったっていいはずよね？

だが、あたしが打ち明けるより早く、ニアがあたしをじっと見ながら言った。

「……お前を保護してるっていうの、国の偉い奴か何かか？」

「おぅぇあ」

勢いをくじかれて変な声がでた。

あたしは慌てて口をもごもごさせてから、しっかりと頷く。
「詳しいことはわからないけど。でも、偉い人みたい」
「……じゃあ、お前が原因なんだな。アレは」
ニアが顎をしゃくって、孤児院を示す。
うん。そうだろう。あたしはレメクの顔を思い出す。
レメクが動いたのだ。何故か突撃時の陣頭指揮はバルバロッサ卿になってたみたい（ナナリー談）だけど。
「一斉捜査のはずだから、たぶん、今頃ニア達の孤児院も同じ騒ぎになってると思うけどね」
あたしは肩をすくめながらそう言う。ニアが驚いた顔であたしを見た。
「お前……いったい……　ッ！？」
その顔が、直後に驚愕に歪む。
「後ろ！」
だが、その警告は一秒分遅かった。
「きゃあ！？」
突然伸びてきた大きな手があたしの首をひっつかんだのだ！
い、痛……苦し……！！
「……そうなんだ、おまえが原因なの……」
何故か低くどす黒いものを滲ませた声が、あたしのすぐ近くでする。
あたしは見た。そこにいる男を。
「エットーレ！」
カッフェが叫び、冊子を背中に隠しながら、ボロボロのズボンをまさぐる。
「ベル！」
ナナリーがあたしを見て悲鳴を上げた。カッフェがズボンから小さな小刀を取り出す。
そういえば、カッフェはよく彫り物とかを作って小銭を稼いでいた。けど、あれをいったい、今この時に、何に使う気でいるんだろ

うか……

あたしは首を圧迫する太い指から逃れようと、豚の腸詰めのようなエットーレの指を掴む。

「ベル……？　あぁ、やっぱり！？　お前、あの小汚いガキ！　ああ、ハハハハ気づかなかった！　あのクソ生意気なガキがこんなお宝だったとはねェ！」

笑い声と同時に圧迫が増す。あたしは手に力を込めた。

ふんぬッ！

「ぎゃあッ！！」

悲鳴が上がった。あたしの体は一瞬だけ宙に浮き、そのまま地面に落下する。

「かはっ……！　は、はぁッ……！」

どっと流れ込んできた空気をあたしは必死で吸った。アウグスタの巨乳圧迫に匹敵する呼吸困難だったため、脳みそにも体にも酸素が足りない。

「ベル！！」

ミリアが悲鳴を上げた。衝撃が来た。倒れてるあたしを襲った衝撃はエットーレの足。蹴られたのだと理解するより早く、ガチリと意識が赤黒いものに変化する。

罪ニハ罰ヲ。

忘れていた言葉が蘇る。ああ、ああそうだ！　今日の前にいるこの男は、あたしが望んだ唯一人の相手！！

蹴り飛ばされ、無様に転がったあたしにニアとミリアが駆け寄る。

あたしを庇い、あたしの前に立ちはだかるナナリーとカッフェ。

カッフェの手には、小刀が握られている。

小刀。刃が。

あたしの目が大きく見開かれた。

刃が、そこに！

だけど……！！

「ダメ！　カッフェ！！」

あたしは叫んだ。カッフェが驚いたように振り返る。あたしは痛む体を無理やり立たせようとして転んだ。足がもつれる！

「それを、しちゃ、ダメ！」

突き立てたい。振り下ろしたい。切り裂きたい。叩きつけたい。憎悪はあたしの身の内にあり、むしろあたしこそがその刃を振るいたい。けれど！

けれどレメクは言った。それはしてはいけないのだと！！

「カッフェ！」

あたしはよろめきながら立ち上がり、目に飛び込んできた光景に、一瞬の躊躇もなくカッフェに飛びかかった！

「！？」

カッフェがぎょっとしたのがわかった。

だが、直後にあたしの背を襲った衝撃に、あたしは声を失う。

エットーレが振るった太い拳は、カッフェではなく彼を突き飛ばしたあたしに振り下ろされたのだ。腹と背。立て続けにくらった攻撃に、あたしの死にかけの体が声のない絶叫をあげる。けれど、ここで暢気に気絶するわけにはいかない！

あたしは一瞬飛びかけた意識を根性で引き戻し、必死に体勢を立て直した。

よろめきながら地面に片膝をつき、体を支えようと路面に手をついたときに、それがあたしの手に当たる。

カッフェの持っていた、あの小刀が。

頭の中が血の色に染まる。考える間もなく、あたしは素早くそれを握った。

寸前まで頭にあったあらゆる考えが吹き飛んだ。カッフェを止めようとした理由すら消し飛んだ。あたしは痛みも何もかもを忘れて一匹の獣になる。狂ったような目であたしを見つめ、奇妙な形に歪んでいる自分の手を抱えながらあたしにむかって突進してくる太った豚。その獲物を見据えて、あたしは駆けた。獲物の太い軸足が地面を蹴り、離れる寸前に力一杯の足払い。全体重をかけたその一撃

に、バランスを崩された獲物が横転する。
あたしはその体に飛びかかった！
「ぁあああああああッ！」
あがった声は悲鳴だったのか慟哭だったのか咆哮だったのか。迸る思いのままに横転した獣にまたがり、あたしは必殺の刃を振り上げた！

■■ばいい！！

頭の中に言葉が弾ける。おぞましい呪いを込めた言葉が。幾千万の怨嗟を込めた呪いが！
けれど……あぁ
なのに！！
「……」
「……」
下敷きになり、刃にさらされた獲物の目と、
上乗りになり、刃を振り上げた獣の目が合う。
ややも正気に戻った哀れで愚かな獲物の目には、紛う事なき恐怖があった。その色にあたしは躊躇しない。そんなものは死んでしまった仲間達に対する謝罪にもならない。失ってしまった人は帰らず、彼女等は永遠に喪われたままだ。だから、今目の前にいる獲物に同情なんかしない。■ねばいい。この男のせいで喪われた命のためにも、この男こそ、今死ねばいい！　この刃を振り下ろすのを躊躇う理由なんて、何も無い！
なのに……！！
どうして！？
「……ベル」
ナナリーが、小さな声であたしを呼んだ。
あたしは、動けなかった。
誰も、動けなかった。

刃を振り上げたまま、あたしはただ泣いていた。涙が零れて止まらなかった。理由はわからない。ただ、涙がこぼれた。泣きたいと思ったわけじゃないのに。そんな理由なんてないのに！

（なんで……なんで振り下ろせないの！？）

簡単だ。力一杯下に下ろせばいい。それだけで一撃をあたえられる。気の済むまで与えればいい。気が済むまでやればいい！

（……レメク）

なのに何故、それができないのか。

（レメク）

頭の中に、あの人の顔が浮かぶのか。

静かな眼差し。その中にある、暖かな色。優しい人。大好きな人。大切な人。

どうして、どうしてこんな時に顔が浮かぶの。どうしてこの手を振り下ろせないの。どうしてレメク。どうして……どうして！？

ぼろり、と、涙と一緒に何かが零れ落ちた。

あたしの体がぐらりと揺れる。間髪入れず、下敷きにした獲物が暴れた。もともと体格が違いすぎるため、あたしの体は簡単に吹き飛ばされる。

「ベル！」

悲鳴があがった。誰の声なのかはわからない。カッフェ達全員の声だったのかもしれない。だが、それを知覚するより早く、九死一生を得た元獲物が獰猛な笑みでこちらに向かう。脂肪をたっぷりと溜め込んだ足が勢いよく近づき、あたしを蹴りに来る。

だが、その足は唐突に動きを止めた。

あたしを蹴りつける、まさにその寸前で。

あたしは顔を上げる。いや、上げたつもりだった。だが、体が動かない。

けれど、ふいに夜風に混じった薫りが、あたしに時を止めた魔法の主を教えてくれた。

「……そこまでです。エットーレ・ブリル」

底冷えするほど冷ややかな低い声が、青ざめたエットーレに恐怖という名の刃を振り下ろした。

「そんな……そんな……」

まるで譫言（うわごと）のように、エットーレの分厚い唇から声が零れる。それは呻きのようでもあり、悲鳴のようでもあった。

あたしはただ細く息をつく。体の中にあったものが抜けていく。どす黒く、凝（こご）った血のように赤黒い何かが。

かわりに、暖かい腕が倒れたあたしの体を優しく抱き上げてくれた。その腕の中に、柔らかく抱きしめてくれた。

（……レメク）

おじ様、と。呼んだつもりだったが、声にはならなかった。ただ、あたしはその胸に頬ずりをする。すん、と鼻を動かすと、あの例えようのないいい匂いがした。

（レメク……）

なんでだろう。なぜか、涙が零れた。

「こ、これは……その、わ、わたしは……」

暖かいものに包まれたあたしとは裏腹に、レメクと対峙したエットーレは、驚くほど狼狽していた。

わずかに首を動かしてそちらを見ると、顔面蒼白になったエットーレがブルブルと震えている。歯の根も合わないほどの震えは、いったいどういう理由でだろうか。震えながら後ずさりしかけ、けれどレメクが一歩足を踏み出すだけで、その足がガクッと力を失う。

その目にあるのは、あたしの振り上げた刃を見たとき以上の恐怖。絶望をも宿す絶対的なそれは、どことなく畏怖に似ている。

「聖ラグナール孤児院院長、エットーレ・ブリル。第十二代国王アリステラ陛下と、第十七代教皇アルカンシェル猊下の命により、貴方を院長の座から解任、ブリル家のもつありとあらゆる権限を剥奪します」

震えるエットーレの歯の音だけが響く路地に、レメクの声が流れた。その声は、あたしが今まで聞いたことがないほど冷厳としていて、エットーレの恐怖をより一層引き上げる。

「貴方の犯した罪は、他の院長等とともに大聖堂にて読みあげられるでしょう。それまで、しばしの時を惜しみながら生きるがいい」

ゾッとするような冷ややかな声は、紛れもなく死刑宣告だった。あたしのみならず、恐怖に固まっていたエットーレやカッフェ達も驚いた。

「お、お待ちください！　わ、わたくしは、そこまでの罪は犯しておりませんッ！！」

死刑を宣告されたエットーレは蝋人形のように白くなった顔で叫ぶ。その様は、まさに死にものぐるいと呼ぶに相応しかった。

「な、なにかの間違いです！　なぜ私のような者が、死を賜らなくてはならないのですか！？」

レメクはただ氷のような目でエットーレを見下ろす。薄い唇が、冷ややかに告げた。

「一つ。陛下より賜った金品を着服したこと。一つ。猊下より賜った命を無視したこと。一つ。与えられた任務を全うしなかったこと。一つ。保護すべき子等を虐待したこと。一つ。罪なき子等を死に追いやったこと。一つ。己の欲得のために禁じられた人身売買に手を染めたこと。一つ……」

延々と続く罪状に、エットーレの顔はもはや土色になっていた。言い逃れできないと悟ったのだろう。

あたしはエットーレの犯した罪がどんなものだったのか、ほとんど知らない。レメクが挙げたものの半分も理解できなかったぐらいだが、レメクがそれらを綿密に調べ上げていることぐらいはわかった。

かつてケニードが言っていた。レメクの前にあっては、誰も言い逃れすることはできないと。まるで魔法のように調べ上げ、証拠を揃えて来るのだと。

「証拠など、掃いて捨てるほどあります。例えば……そこの子供が持っている冊子一つをとっても、貴方を裁くのに足りる証拠ですが？」

それでも、何か？　と暗に問う声に、エットーレがブルブルと首を振る。

「そ、それこそきっと誰かの陰謀で……あの子供に、嘘の証拠を私の孤児院に置かせたんです！」

「では、私が今さっき見た光景も嘘でしたか」

必死に打開策を考えるエットーレに、レメクが詰めの一手を放つ。

「あなたがしてきたことの証拠は一つに留まらない。証言もまた同じくです。私が何も知らないと思っていますか？　何も調べずに来たとでも？　そこの子供の冊子一つ欠けた所で、あなたの死罪は揺るぎない。陛下も猊下も閣下も、満場一致で貴方の罪を確定しました。そして」

そして、と。陰鬱な響きを滲ませて、レメクは言った。

「私が、裁きを命じられたのです」

その言葉はいったいどういう意味を持っていたのか。エットーレが絶望的な悲鳴を上げて泣き崩れた。

「なにとぞ、なにとぞお慈悲を！　後生でございます断罪官様！」

断罪官。初めて聞く言葉に、あたしはぼんやりとしはじめた頭で「？」を飛ばす。

「断罪官様、クラウドール様、どうか、どうかお慈悲を……！」

「貴方は、一度でも他人に慈悲をかけましたか」

冷ややかな声が、全ての希望を遮断する。

「貴方が、ただの一度でも、誰かを助けましたか。守りましたか。養いましたか。貴方はただ、搾取しただけだった。貶め、蔑ろにし、蔑み、見下すだけだった。貴方の手によって奪われた命は百では足りない」

「そ、そんな……！　私は、私は誰も殺したりは……！」

「お腹を空かせた子供を、病にかかった子供を、怪我をした子供を、

満足に動くことのできない子供達を、あなたはどうしましたか。鞭を振るい、その足で蹴り、その拳で殴り、路地裏に放置したのは、いったい、誰です。その後、その子供達はどうなりましたか。庇護されるべき場所で、庇護すべき者に、虐げられ助けられることのないままに、その子供達はどうなりましたか……！？」

激しい痛みのようなものが、あたしの全身を浸した。

これは怒りだ。恐ろしいほど純粋な、炎のような憤怒。

「この私の腕の中にいる、この子供に貴方は何をしましたか！」

大気を振るわす怒気に、エットーレは顔をひきつらせた。喘ぐように大きく口を開き、ぎょろぎょろと落ち着き無く目を動かす。

「そ、その子供は、わ、わたしの」

「貴方のではありません」

にべもなくレメクがはねのける。

「私のです」

ハッキリとそう言って、レメクは言葉を紡いだ。

【子供達、目を瞑り、耳を塞ぎなさい。あなた方は見る必要ありません】

その声になぜかあたしの体は勝手に目を瞑り、耳を塞いだ。

けれど、あたしはレメクと繋がっている。闇の紋章で。今なお、ギリギリのあたしを救っている神秘の力で。

だからこそ聞こえた。レメクの声が。

【王命により、我が身に宿りし罪と罰の紋章よ】

力在る、言葉が。

【かの者を断罪せよ】

8　生と死のほとり

圧倒的な力の波動が駆け抜けた。
瞑った目には何も映らず、塞いだ耳には何も聞こえない。
けれどあたしの脳裏に、凄まじい勢いで様々な光景が弾けた。
泣きながら助けを請う子供。物のように運ばれていく病気の子供。
積み上げられた子供達の死体。檻に入れられ、鎖に繋がれた子供。
そして、我が子を取り戻そうとする母親。
まるで誰かの走馬燈を覗き見るようだった。
あたしの視点よりも高い位置からの視界。それが誰のものなのか、考える必要も無かった。
エットーレ・ブリル。
この記憶の全てが、彼の罪だ。
（これ……が……）
記憶の濁流に吹き飛ばされそうなあたしの意識が、ギリギリの境界線で呟く。
（……罪と罰の……紋章……）
稀有なる『闇の紋章』を介して、あたしの中に情報が入り込んでくる。それは頭の中に浮かぶ映像のようでもあり、刻まれる記号のようであった。
（……レメク……）
他者の記憶が凄まじい速度であたしの小さな脳みそに送り込まれる。あたしは悲鳴を上げた。受け止められない。子供達の悲鳴が、子を奪われた親の慟哭が、あたしの心を引き裂いていく！
（レメク！！）
助けを求めたとき、心がはじき出す名前は一つだけだった。
その名前に縋（すが）りつき、あたしは『あたし』を押し流してしまいそうな記憶の激流に耐える。
『ベル！』

即座に救いの闇が降りてきた。
唐突に悲惨な映像がかき消える。深い静寂を伴った暖かな闇。真綿でやんわりとくるむように、暖かなそれが優しくあたしを包み込んでくれた。
穏やかに癒される感覚に、あたしはうっすらと目を開く。
「ベル！」
声が飛び込んできた。レメクの声だ。
「ベル！！」
あたしはレメクを見た。レメクは切羽詰まった顔であたしを覗き込んでいる。どうしたんだろう？　そんなに必死な顔をするなんて。
「ベル！　息をしなさい！！」
レメクの声は悲鳴のようだった。
痛みを堪えるようなその眼差しに、嗚呼、とあたしの唇からため息が零れる。
泣きそうな目だと思った。
（レメク）
大丈夫よと、そう言いたかった。だって、レメクが傍にいる。蹴られたり殴られたりしたけれど、もう痛みも全然感じない。だから大丈夫。
「ベル！！」
ただ、少し寒い。レメクがこんなに傍にいるのに。
レメクから優しくて暖かい命を感じるのに。それを惜しみなく流し与えてくれているのを感じているのに、どうして体がだんだん寒くなるんだろう？
（レメク）
指先の感覚が無い。足も、腕もわからない。体全部が自分のものじゃないみたい。どうしたんだろう？
ねぇ、レメク。あたしちょっと、おかしいみたい。
ごめんなさい。ちゃんと言いつけを守らなかったからだよね？
ねぇ、いっぱい叱ってね。いっぱいいっぱい怒ってね。あたしも

ちゃんと聞くから。姿勢正して声を聞くから。
あぁでも、どうしてそんなに泣きそうな顔をするの？
大丈夫よ。だってほら、こんなにあなたを近くに感じてる。
こんなにも暖かい命（あなた）を感じてる。
だから。
「ベル！！」
だからほら、ねぇ、泣かないで……？
何故だかぼやけた視界の向こう、淡く霞むその人に笑いかけて、
あたしの意識は暗転した。

※　※　※

闇が漂っていた。
天も地もなく、右も左もなく。
どこが上でどこが下なのか、そもそもそれは何を基準としているのか、そんなことすらわからない深い深い闇の中。
あたしはそこに立っていた。
そこがどこなのか、あたしにはわからない。
ただ闇だけが周囲に満ちていた。
あたしは視界を広げる。どこまでも続く果てのない闇。方角も何も無いのに、離れた場所に空恐ろしいほどの深みを見た気がした。
（……あれは……）
闇であることには違いない。けれど、何かが違う。言うなれば濃度か。ここよりも少し離れた場所にあるそこは、あまりにも深い色をしている。
まるで、全てがそこで消えてしまうような闇の色を。
（あれは……）
「あれが、死、です」
たゆたうように導かれるようにそちらに向かいかけたあたしをその声が寸前で引き留めた。

あたしは声を振り仰ぐ。
すぐ横に、一人の男が立っていた。
闇の中にあって、闇よりも尚暗きヒト。闇よりも尚深きヒト。ありとあらゆる全てが闇に沈んだ中で、ただ独り、確かたる『己』を持って『在る』ヒト。
あたしは呆然とそのヒトを見る。全身に冷水を浴びせられたような、壮絶な恐怖を覚えた。
「……また来てしまったのですね、貴女は」
呟くように囁くように、闇の化身のようなそのヒトが言う。
凄絶なほど整った貌には、何の表情も浮かんでいない。まるで感情が欠如してしまっているかのようだ。
神代のヒトの彫像が喋れば、こんな感じになるのだろうか。そこにたしかに居るはずなのに、居ないような不思議なヒト。
あたしは全身が震え出すのを感じた。
あの『死』と呼ばれた場所と同じ気配が彼からはした。空恐ろしいほどの『虚無』が。
「私が恐ろしいですか？　小さな導きの星の子。誰よりも死に近く、誰よりも死から遠い小さなレディ」
感情のない顔のままで、男はそうあたしに問いかけた。
あたしは素直に頷く。偽りは意味をもたない。そう直感した。
この男には、嘘など通じない。
「恐ろしいと、そう思うことは正しいでしょう。そしてそう思うのなら……貴女はまだ、貴女の在るべき場所で、成すべきことがあるということです」
そっと息を落とすように、男はそう言ってあたしの行く手に視線を投じた。
深い深い、死の闇に。
「あちら側に落ちれば、もはや蘇生は叶いません。……私がいる時でよかった。あの子が命を賭してでも引き戻そうとするのなら、私は貴女を帰さなくてはいけませんから」

あたしは怯えながら首を傾げた。彼の言葉の意味がさっぱりわからない。
「……あそこに行けば、人は死ぬの？」
男はこてっと首を傾げる。それはどこか人形の動きに似ていた。
「……さて。その問いは、とても微妙です。応（ええ）とも言えますし、否（いいえ）とも言えますから。人の子の持つ『死』の定義は、私のそれとは違いますので」
「……違うの？」
男は視線を深い闇へと向ける。その先にある、死という名の虚無に。
「あれこそが時の最果て。ありとあらゆる存在の中で、唯一『永遠』なるもの。忘却の淵とも、忘却の川とも呼ばれるもの。国家や思想によって言い表し方は千差万別なれど、その本質は唯一つ。……存在の消滅。死という名の無です」
では、人は死ねば、あそこへと至るのか。
死んでしまった人は。プリムは、母は、あそこに居るのか。
あたしの意識がそちらに向くよりも早く、男があたしの前に立った。
あたしはそれを仰ぎ見る。
（あの時のように）
何故か、そんな感想を覚えた。……あの時のように？
あたしは目を瞠る。死の前に立ちはだかった、そのヒトをまじまじと見上げた。
（このヒトは……）
「還りなさい」
静かな声が、死への道を塞ぐ。
「貴女を待つ人の元へ。貴女にはまだ、成すべきことがある」
そう言って、あの時と同じようにあたしの背後を指し示す。
あたしは男を見た。
ただ静かにあたしを見る男を。

「……あの時も、あたしを助けてくれた……？」
光と闇の狭間で。
問うあたしに、けれど男は何の返答も返さない。
あたしはただ男を見上げる。
あの時、今いる場所とよく似た所を夢で見た。それが本当に夢だったのか否かは、あたしにはわからない。
ただ、覚醒だと思った光の中に、絶対的な『死』があった。
その死の前で、あたしは立ちふさがる二人の姿を見たのだ。
一人はレメク。そして、もう一人は……
今、この目の前にいる、闇の全てを支配するヒトだ。
男はただ口角を上げる。それはまるで顔に浮かんだ亀裂のようであり、とても笑みと呼べるようなものでは無かった。
けれど、何故だろう？
あたしは男を見る。
微笑いかけてくれているのだと、何故かそうわかった。
決して目には見えない暖かな『何か』。
理由などわからないけれど、それはあたしのよく知る人に似ていた。
（……レメク）
顔立ちがそっくりだというわけではない。けれど、どこか似ている。彼と、このヒトは。
「……あまり、あの子を虐めないでやってください」
あたしを見つめたままで、男がそう言葉を紡ぐ。
どこか優しい、暖かいものを込めて。
「……あの子は、寂しがりだから」
あの子と、小さな子を呼ぶような呼称なのに、なぜかあたしはその声にレメクの姿を思い出していた。
レメク。あぁ、もしかして、もしかしてこのヒトは……！？
「あ……！」
あたしは声を上げる。

だが、それよりも早く、世界が大きく歪んだ。
背後から強い力で引っ張られるように、体が大きく後ろへと引き寄せられる。
何か大きな入り口に吸い込まれるように、うねるような力に引き寄せられる！
「還りなさい。貴女の在るべき時と空の下（もと）に」
夜の静寂にも似た静謐な声が、更にあたしの体を一層そこへと押し出そうとする。
あたしは思わず手を伸ばした。
急速に遠ざかる、死と同じ気配のするそのヒトに。
「待って……名前……！　待って！！　ねぇ、あなたは……」
あなたは、もしかして、
もしかしてレメクの、
「お父さん！？」
男が驚いたように顔を上げたのが見えた。もう遠い。あんなにも遠い。だから、例えあの顔が何らかの表情を浮かべていたとしても、決して見えなかっただろう。
けれどあたしは何故か、見えた気がした。
虚無を宿すその男の美貌が、どこか困ったように微笑（わら）って傾ぐのを。
「ええ」
けれどそれは、どこか楽しそうに、どこか嬉しそうに、密やかな声でこう続く。
「血は繋がっていませんが……」
あたしの脳裏に、レメクの育て親の名前が浮かんだ。違う。直感がそれを否定する。違う。ステファン老じゃない。でも実の親でもない。では、彼は一体誰なのか。
「いつかまた、お会いしましょう。もう一人の小さな黄金の魔女」
声が遠ざかる。
闇が遠ざかる。

生と死のほとりに立つそのヒトの姿も。
「……あの子と、私の主に、どうぞよろしく」
って言われても、あたしあなたの名前もあなたのご主人様も知らないし！！
あたしは届かないだろう声のかわりに全力でそう念じた。
世界が急速に色を変えていく。懐かしく暖かなそこに飛び込む寸前、闇の残り香のような声がそっとあたしに囁いた。

ポテト、と。

※　※　※

「……じゃがいも？」
ぽつりと呟いた自分の声で我に返った。
暖かく愛おしい匂いのまっただ中。幸せの極地にすっぽりとはまりこんだ状態で、あたしは目を覚ました。
目が覚めたはずなのに、違う意味で夢を見ているようだった。
目の前には、初めて見るレメクの寝顔がある。どこか苦悶の表情を浮かべているその顔は、しっかりと目を閉じて微動だにしない。
（……レメク……）
丁寧な作りの顔は、眠っていると一層その端正さが目立つ。伏せられた睫は長く、あたしはしげしげとそれを眺めてしまった。
（……レメクって、本当、綺麗な顔してるのね……）
改めてそう思う。けれど静かな寝顔はどこか頼りなげで、泣き疲れて眠った子供のような感じがした。
（レメク……）
あたしはその頭を撫でてあげようと手を伸ばす。
だが、
「むきゅ！？」
後ろからギュムッと押しつけられた巨大な柔肉に押しやられ、手

をどうこうする前に目の前のレメクとの間にサンドイッチされてしまった。

「ベル！　気づいたか！！」

この巨大なムッチリンには覚えがある。

そう思った瞬間にかけられた声に、あたしは胡乱な目になった。

身動きがとれないので目線だけ上げると、果たして、喜色満面の美貌がすぐそこに！

「……アウグスタ……」

輝く美貌の黄金の女王陛下は、喜びと安堵を全身から放出しつつあたしをぎゅっと抱きしめる。

レメクごと。

「コンの馬鹿娘が！！　貴様には生存本能がついておらんのか！愚か者めッ！！　何度死にかければ気がすむのだコンチキショーッ！！」

ジョオウサマ。お言葉が乱れてますヨ。

ぎゅむむーと豊かすぎる胸に圧迫されながら、あたしは複雑な気持ちを味わっていた。

正直、アウグスタは柔らかくて暖かくて気持ちいい。そしてレメクの体に力一杯押しつけられるのも問題ない。むしろバッチコイ。

だがしかし、『レメクサンド』をされるということは、結果的に、アウグスタがレメクをハグしているような状況であり……

い、いかん！　早く離さなくては！！

このすンばらしいボリュームに慣れてしまったら、きっとレメクはアウグスタにメロメロになってしまう！！

「にゃ……にゃなぁああッ！」

あたしは大慌てで暴れた。早く、早くここから脱出しなくては！

レメクがアウグスタの体を覚える前にッ！！

「こら小娘！　おまえ、死にかけたくせに何やっている！」

だって！

「大人しくしていろ！　レメクまで死にかけたんだぞ！！」

力ずくで押し戻され、レメクの胸にベタッと貼りつけられながら、あたしはアウグスタの声に愕然として目を見開いた。

な……なんて!?

「お、おじ、おじしゃまが……!?」

舌がもつれた。

「全く……! おまえときたら、本当に……!!」

そんなあたしを何故かレメクごとギュムッと抱きしめて、アウグスタがあたしの右頬に頬ずりした。なんとなく、母猫にハグされる子猫の気分。

「状況をよく見てみろ。おまえとレメクを助けるために、こんな状態なんだぞ」

そう言って体を退かせたアウグスタに、あたしはそろそろと上体を起こす。

そして見た。

違う意味で完成されたレメクサンドを。

「な、なにこれッ!?」

よくよく見れば、ここは大きな布で周囲を覆ったテントのような場所。

下に敷かれているのは豪華な毛皮。そこで横になるあたしと大人四名。

ちなみに図はこう。左からアウグスタ、あたし、レメク、ケニード、バルバロッサ卿。

そして全員ぴったりくっついている。

なんというか、例えるならば、積み上げた亀の一軍をそのまま綺麗に横に倒した感じ。ハム（ケニード）とレタス（レメク）とタマゴ（あたし）をパン（バルバロッサ卿とアウグスタ）で挟んだサンドイッチ。見れば苦悶のレメクの向こう側で、至福の表情をしたケニードがいる。

レメク、哀れ。

そして全員、綺麗に爆睡……でなく、気絶していた。

盛大に「？」を飛ばしたあたしに、アウグスタが嘆息をつく。
問答無用であたしの体をレメクに押しつけ直し、覆い被さるように再度サンドイッチを実行しながら小声で言った。
「手早く状況を説明するぞ。……ここは王宮でもレメクの家でも無い。おまえのいた孤児院の一角だ。……余裕が無かったからな、ここに結界を張り、テントを設置しておまえ達を保護したんだ」
おまえ達、で、なぜかアウグスタはあたしとレメクをセットで見た。
……あれ？　レメクもなの？
「おまえのお友達は無事だ。ちょっと眠ってもらったがな。……大変だったんだぞ、あの後」
押し殺したような嘆息をついて、アウグスタはぐしゃりと自分の前髪を掻き上げる。そうして、油断無く外の気配を探ってから言葉を紡いだ。
「……あの紋章は、万全ではない」
ぼそりと呟く声は、ほんのわずか、緊張をはらんでいる。
「人の体は光と闇の両方から成っている。闇は全てを内包し、混じり合わせ、結合させるもの。故に肉体の死、死という名の生命の解体は、闇の手にて救うことができる。……だが、これは禁忌だ」
小さな声が、辺りを警戒しながら囁く。
「その存在の禁忌さだけではない。これは、使用者にとっても諸刃なのだ。繰り返しになるがな、ベル。おまえの体は、闇の手で死から免れている。だが、それは永遠では無い。決められた期限までに、決められた値まで体が回復しなければ、お前は必ず死に至る。死とはそれほど回避が難しく、また絶対的なものだからだ。……おまえはただ、僥倖によって回避の機会を与えられただけにすぎない」
だから、あたしはしっかりと体を休めなくてはいけなかった。
自分を守らなくてはならなかった。
他の誰でもなく、あたしこそが、最も死に近い場所にいる子供だから。

「……人を『完全なる死』から蘇らせることはできない。それは、どんな者であれ不可能だ。神ですらも、それは叶えられない。だから、死の直前までしか、誰もその者を救えない」

優雅な手が、あたしの髪を撫でる。暖かいその手が小さく震えていた。

「おまえは、二度、死にかけた。……いや、レメクの言によれば、これで三度目か？　助かったのは奇跡だ。だが……そのどれもが……ただの奇跡では無い。わかっているな？」

あたしの命は、偶然や何かで救われたわけではない。

その奇跡には理由がある。

あたしはレメクを見た。血の気の失せた、その顔を。

「……レメクが、おまえを助けた」

二人を繋ぐ、闇の紋章の力を借りて。

「おまえのために、おまえの失った命を分を、おまえが必要とする膨大な生命の力を、レメクがおまえに渡した」

一度ならず二度も。

それどころか、三度失われた命の水を、枯れかけたあたしという器に注ぎ込んだ。

「自分の命を投げ出してな」

「！？」

囁かれた言葉の重みに、あたしは悲鳴を上げた。

声が音にならなかったのは、それがあまりにもショックだったからだ。目を瞠って息を止めたあたしをアウグスタは泣きそうな顔で抱きしめる。

「……ベル。きちんと知らされていないお前を……おまえだけを責めるのは酷だろう。だが、だがな、ベル。お前、なぜもっと自分を大切にしようとしなかった？　なぜ、自分の命が、すでに自分だけのものではないことに気づかなかった？　おまえがレメクを大切に思うように、レメクにとっても……私や、ケニードや、ルドにとっても、おまえはとても大切な存在なのだということに……なぜ、気

づいてくれなかった？　なぜそれをもっとしっかりと考えなかった！？」

アウグスタの震えが伝わってくる。熱く、狂おしく、愛おしい熱が。

「おまえの呼吸が止まっていた。心臓も止まっていた。息を送り込み、心臓を動かせても、おまえは戻ってこなかった。時間が無かった……他に方法も無かった。肉体が完全に死んでしまってからでは、蘇らせることはできない。だから、レメクは……おまえに自分の命を渡したんだ」

あたしは愕然とその言葉を聞いた。

目がレメクの姿をとらえる。喉が乾涸らびていくのを感じた。重い空気に塞がれるように、呼吸は喉の奥で止まっている。ぴくりとも動かないレメクの姿に、心の臓が冷えていくのを感じた。

レメク。レメク……レメク！！

「死んではいない。ベル。レメクは無事だ。……寸前で引き戻した。……生命力を失った体は、余所から同等の力を与えることで死から逃れられる。完全な死を迎える前の荒手段だがな。……あの紋章で死から免れた者は、言うなれば穴の空いた壺のようなものだ。壺の中には、生命力という名の水をたっぷり含んだ海綿が入っていると思え。そして、普通の者は壺がしっかりしているから、中の生命力が流れ出ていくことがない」

だが、あたしは違う。

ギリギリの縁でかろうじて生きているあたし。一度限界まで来たあたしの体は、生命力を溜めておく壺が『穴だらけの割れ目だらけ』の状態だった。

そこからは、絶えず身の内の『溜め込むべき命』がこぼれ落ち続けている。そのままでは、よほど安静にしていない限り早晩命が尽きて死に至るだろう。

だが、それでもレメクやケニードなど、健常で元気な者が傍にいれば話は別だった。

乾いた海綿が、水を沢山含んだ海綿から水を吸い取るように、あたしは何も知らないままに彼等から命をちょっぴりずつ分け与えてもらっていた。レメクがずっと添い寝をしてくれていたのも同じ理由だ。

ずっと一緒にいたのは、そのためだったのだ。

だが、逆に、もし自分と同等、もしくはそれ以上に生命力の乏しい人の傍にいたら？

乾いた海綿同士がそれぞれの水を奪い合うように、あたしの生命力はそちらへと流れていってしまう。他の者の場合、生命力を保持し続けるための器がしっかりしているから、例えあたしの命を奪っていっても、それ以上に自分自身の命を奪われることはない。

だが、あたしの器は壊れている。壊れた器だから、ただひたすらに、必死に溜めていた生命力を分け与え続けるのだ。死に至るその時まで。

（……だから、あの時、倒れたんだ……）

カッフェ達と逃げていた時、あたしの具合が急激に悪くなったのは、それが理由だったのだ。確かに精神的なショックもあっただろう。あたしはいわば、肉体と精神のダブルショックで倒れてしまったのだ。

紋章の遠隔操作か何かか……レメクと、あの不思議の世界のポテトさんに追い返され、なおかつ元気いっぱいのゴロツキ部下Ａ＆Ｂ（そういえば、未だに名前知らない）からこっそり生命力を貰って、かろうじて舞い戻って来たが、もしあのまま何事もない状態で仲間と一緒にいれば、誰も何もわからないままにあたしは死んでしまっていたのだろう。

「おまけにおまえは、あのド腐れと戦って負傷したしな」

ド腐れ、と言うのは、エットーレのことだろう。

あの時の衝動と行動を思い出し、あたしはしゅんと俯いた。こんな体だというのに、あんな無茶な大立ち回りをするなんて、どう考えても自殺行為だ。冷静になった今ならよくわかる。

どうしてあたしは、こう、裏目に出るような行動しかできないのだろうか。

「……子供というのは、無鉄砲で危なっかしいもんではあるがな……」

しゅんとしたあたしの頭を撫でて、アウグスタがやんわりとあたしを抱きしめた。極上の真綿に包まれるような、なんとも言えない柔らかい感触がする。

「私も、大人しい子供では無かった。だからな、お前のひたすら一直線な所に、時々共感もする。だが……なぁ、ベル。大人(わたしたち)はいつだって、子供(おまえ)の行動がとても恐いのだよ。こんなに小さくて、こんなに弱いのに、あんまりにも真っ直ぐに危ない方向へ突き進んで行ってしまうから」

暖かい優しさが、染みいるようにあたしを包み込む。

「ベル。おまえは子供だ。小さくて稚くて、ちょっとしたことで壊れてしまう弱き者だ。時に思いもよらぬほどの強さを見せたとしても……それでも、おまえは、とても小さい、愛すべき子供なんだ」

だから、と。アウグスタはあたしに囁いた。

どこかレメクにも似た、優しくて暖かな眼差しで。

「だからもっと、大人を頼れ。自分だけで解決できるだなんて、おまえだって思ってやしないだろう？　だから、私達を頼れ。私達も私達の事情があって、なかなか動けないこともあるだろう。すぐに動けなくて、イライラすることもあるだろう。けれど……頼むから、何も言わずに居なくなるな。私達の知らない所で、危険なことはするな。おまえ……レメクがどれだけ危ない状況だったか、全然知らないだろう？」

アウグスタの半笑いの声に、あたしは驚きながら頷いた。

あたしを助けるために、レメクが命を投げ出して……それで危険な状況だったというのはさっき説明されたが、それ以外にも、いったいどんな危機が彼の身の上に襲いかかっていたのか……！！

「人として、それはきっと良い兆候なんだろう。狼狽え、慌て、心

配し……誰かのために必死になるのは、きっと悪いことではない。けれどな、ベル。それも限度がある。……本当に愛しているのなら、愛している相手を、死ぬほど心配させたりするな」

まぁもっとも、と口を歪め、アウグスタは一転してあのオオカミの微笑を口元に閃かせた。

「時には、あえてそれをしたくなるのが、女心というものだがな」

その言葉に、あたしは大慌てで首を横に振る。

ダメだ。それはダメだ。わざとしちゃいけない。い、いや、わざとでなくてもしちゃいけないんだけど、今のあたしが言ってもなんか説得力ないような……！？

「ふふふ……」

アウグスタは微笑って、あたしをもう一度ぎゅっと抱きしめた。

「おまえが戻ってきてよかった……本当によかった……。はは、しかし、参ったぞ。あのまま、全員そろって黄泉の国へと旅立つかと思ったほどだったからな……」

しなやかな手があたしの頭をぐりぐりと撫でる。やや乱暴なその手つきには、強い安堵の色があった。

あたしに自分の生命力のほぼ全てを渡したレメク。そのレメクに、三人がかりで生命力を補給したアウグスタ達。欠けた器を満たすために、それだけの人が必要だったのだ。

「おまえにはまだ、語っていないことが沢山ある。……今はまだ、語れないことも沢山ある。だから詳しくは言えないが、レメクはちょっと特殊でな。こやつに匹敵する人間というのは、おそらく、この国には私以外にはおるまい。人以外の者ならばともかく、な。……それほどの男が命を投げ出すほどでなければ、おまえは救えなかった。そして、おまえを救ったレメクを助けるためには、私を含めて元気だけは人千倍のこやつらをもってしても、昏倒するぐらいの力を要したわけだ。その凄まじさが、ちょっとわかろうというものだろう？」

苦笑を溶かした微笑で言われて、あたしは小さく頷く。そのあた

しの頭をクリクリと指の腹で撫でて、アウグスタは淡く微笑った。
「これで、おまえもレメクも半死人だ。しばらくは大人しく家で引きこもるか、元気のありあまってる連中の間をうろうろしているといい。そうすれば自動的に、連中の余分な元気を横取りできるからな」
その綺麗な微笑に、あたしは一瞬、息を詰まらせる。
黎明の光が淡く空の青さと解け合うような、鮮やかなのに柔らかい微笑み。それは、あまりにも清らかで、奇跡のように美しかった。
あたしはもぞもぞと方向転換し、柔らかいその胸に頬ずりする。予想通り、アウグスタの胸は素晴らしく柔らかく、とても暖かかった。
「ごめんなさい……」
アウグスタは「フン」と不満そうに小さく鼻を鳴らす。
だが、その顔はどこか満足そうだった。
「おまえの『ごめんなさい』は信用できん。同じコトを繰り返しそうだからな。……だから、謝罪よりも感謝しろ。……そして忘れるな。おまえに何かあれば、こういうことになるんだと。……少なくともおまえの未来の旦那は、何の躊躇もなく自分の命を放り出すんだということを」
覚えておけ、と。
厳しくも優しい声があたしの耳朶を噛む。
あたしは柔らかなその人の胸に顔を埋めた。アウグスタの胸は、懐かしいお母さんの匂いがする。
あたしは言った。思いの丈を込めて。
「ありがとう……！」
声と一緒に、涙が零れた。
何度も何度も手を伸ばし、優しく抱き留めてくれる人。暖かく抱きしめてくれる人。
レメク。アウグスタ。ケニード。バルバロッサ卿。
あたしみたいなちっぽけな子供を、こんなにも大切にしてくれる

人がいる。あぁ、確かに、あたしはもう独りじゃない。あたしの命も、気持ちも、あたし一人のものじゃない。

（ありがとう）

あたしにとって、何よりも大切なレメクを助けてくれた三人。

きっと彼（レメク）を喪っていたら、あたしは助かったその命を、その場で絶っていただろう。

その場で後を追っただろう。

だから、

（ありがとう！）

彼等は、レメクを救うことで、もう一度あたしの命も救ってくれたのだ。

（……ありがとう！！）

レメク。あたしの全て。あたしの生きる意味。あたしの生きる理由。

あんなに沢山のものを与えてくれたのに。言いつけ一つ守れないあたしなんかのために、自分の命すらも与えてくれた人。

（レメク）

その理由を、その意味を、その気持ちを、言葉にして聞かせてと言えば、あなたはどんな顔をするだろうか？

怒るだろうか？　呆れるだろうか？　それとも困った顔をするだろうか？

ねぇ、レメク。あたし、本当に子供だけど、自分の感情すらちゃんとセーブできない子供だけど。いつかきっと、ちゃんとした大人になるわ。

あなたの隣に立つのに相応しいような、あなたが命を賭けてくれるほどの……そんな価値があるほどの女性になってみせるわ。

だって、そうでなければ、どうやって報いればいいの？

あなたはいつも沢山のものをくれるけど、あたしはまだ一度だって、あなたに貰ったものと同じものを返せていない。

（レメク……いつか、教えてね……）

あたしにもできること。
あなたの望むこと。
できればそれが、あたしにできることならいいのだけど……
暖かくて柔らかいアウグスタと、とってもいい匂いのする大好きなレメクに挟まれて、あたしは幸せな気持ちで微睡む。ゆるゆると全身を支配しはじめた睡魔が、抗いようのない力で意識を浚おうとしていた。
頭の片隅に、何か、ざわめくような『気になること』が沢山あるのに、今はそれを考えられない。瞼がとても重い。
「……なぁ、ベル」
暖かな手があたしの髪を撫でる。その感触がとても気持ちよかった。あたしは返事をしようと口を開く。けれど、なんだかぼんやりとしすぎて、ちゃんとした返事はできなかった。
意識が柔らかな温もりに沈む前に、どこか真摯な声がこう囁く。
「覚えておいてくれ。この先、どんな未来、どんな場面、どんな場所で誰に何を言われたとしても。今ここにある、この光景を。……おまえ達を心から愛している者のことを」
けれどあたしは、その言葉に返事を返せなかった。
まどろみが全ての思考を奪い去る。
そうして、何もかもが起きたその後で、あたしはその言葉の本当の意味を理解するのだ。
――その遙か未来で。

9　目覚めた朝に

ざわめきが夜空の星々を瞬かせ、深い地上の闇へと仄かな灯りを投じさせる。

常には静寂と闇が支配する路地に、今は煌々と灯りがともされていた。

石畳を足早に駆けるのは何人もの兵士達。その顔には緊張の色が濃く、同時に使命感に燃えているようであった。

風は無く、夜は深く。けれど動き続ける人々の熱で、路地の中は活気に満ちている。

路地裏の野良犬がふと顔を上げ、誰も気づかないあたしを真っ直ぐに見た。ややも警戒の色の強いその瞳が、ふと懐かしいものを見たかのように和らぐ。

（あら、ベン。そこにいたの？）

あたしは声をかけた。やせ細った野良犬はしっぽを振った。

彼はあたしの顔見知りの犬だった。孤児院の裏で、ともに暖を取り合って過ごしたり、同じ残飯を食べたこともある。

ベンはしっぽを振りながらあたしへと近づき、フンフンと鼻を動かせた。

（お腹空いてるの？）

問うと大きくしっぽを振られた。あぁ、どうしよう……

（ごめんね。あたしも、何も持ってないの）

あたしはしょんぼりと告げる。ベンは耳を垂れて首を傾げた。困ったような顔に見えた。

（でも、おじ様なら何か持ってるかもしれないわ。……あれ？　そういえば、あたし、どうしてこんな所にいるんだっけ？）

あたしはベンと同じように首を傾げる。

あたしは、あたしは……あぁそういえば、そもそもあたしはいったい、どこにいたんだっけ？

馴染みの路地をぐるりと見回しながら、あたしはさらに首を傾げた。

ものすごく乏しい記憶回路を辿る。（あたしは……）と頭を抱えたところで、巨大な美乳が浮かんだ。そうだ、アウグスタに抱きしめてもらって、レメクの匂いを嗅ぎながら幸せなスリーピングタイムに入ったんだ。あれは確か、えぇと、孤児院の一角じゃなかったっけ？

あたしは一層首を傾げる。

おかしい。

どうして、児院の一角にいたはずのあたしが、こんな所にいるのだろうか？

（あたし、いつの間にこんな所まで歩いてきたんだろう？　そ、それに、どうして誰もあたしに声をかけてくれないの？）

周りの兵士達は誰も彼も忙しそうで、あたしに全く気づいてくれない。唯一あたしに気づいてくれたのは、横でしっぽを振っているベンだけだ。

（よくわかんないけど、帰らなきゃ。またおじ様達に迷惑かけちゃうし。……孤児院は、あっちよね。ねぇ、ベン。一緒に行ってくれる？　あたしの御飯分けてあげるから）

あたしはベンを振り返った。けれどベンはあたしを見て首を傾げ、孤児院とは逆の方向へと歩き始めた。

（え。ちょ、ちょっと！　行っちゃうの？）

あたしはしょんぼりして叫ぶ。ベンはしっぽを一振りしてから、チラッとあたしを振り返った。

ついておいで、と。そう言われている気がした。

あたしは孤児院の方を振り返る。兵士でごった返している孤児院を。

もう一度ベンを見た。

ベンはあたしを振り返った姿のまま、鼻をくいっと動かす。

あたしはそろそろとベンの方に歩き、ゆっくりと歩み出したベン

の横にくっついた。
（ねぇ、ベン。どうしたの？　どこに行くの？）
あたしの声に、ベンはブルルッと体を軽く震わせる。
ベンは頭のいい犬だった。年経た者はそれだけ知恵に長けている。ベンはこの辺りの野良犬の中では最年長だった。あたしはまだ経験の浅い頃、このベンに何度か窮地を助けてもらったことがある。
人の言葉を喋るわけではないけれど、きっとベンはあたし達の言葉を理解しているんだろう。
あたし達は路地を歩く。その道を孤児院を振り返りつつ眺めて、あたしはハタと気づいた。
（もしかして、ベン。あたし達が戦ってた場所に行こうとしてるの？）
ベンはしっぽを大きく振った。
あたしとカッフェと、ナナリーとニアとミリア。あたし達が、孤児院にも入れなくて足踏みしていた場所。そしてエットーレと戦った場所。
そして……レメクに助けられた場所。
あたしはぎゅっと胸のあたりを掴んだ。
冷たい痛みがそこから全身を貫いて、一瞬足がもつれる。
ベンがあたしを振り返った。
おいで、と。その目が言っていた。おいで。会うべき人がいるから。
あたしはベンに導かれるようにして歩き、路地からちょっと中に入る小道へと足を踏み入れた。
路地裏の中でも、知る人ぞ知る小さな裏道。そこは少しだけ空き地のようにぽかっと広くなっている。
闇に半身を隠した月が、その路地を照らそうと光を投げかけていた。
瞬く星々もまた、そこへと煌めきを投じようとしている。
その中に、ひっそりと人が立っていた。

あたしは歩みを止める。
小さな空き地の中に、荒い筵を幾重にも重ねられたものが置かれていた。その下に何があるのか、あたしは知らない。それなりに大きいらしく、こんもりと盛り上がっている。
その筵の山の前に――レメクが立っていた。

（……おじ様？）
あたしは声をかける。
灯りを掲げるでもなく、ただそうやって突っ立っていたレメクは、あたしの声にどこかぼんやりと振り返る。なんだかいつもと様子が違う。不思議そうに首を傾げる仕草も、どことなくぼんやりしている。
（……ベル？）
あたしは頷いた。駆け寄りながら、入り口付近でちょこんと座ってしまったベンに手を振る。ありがとう、ベン。レメクのことを教えてくれて。
ベンは軽くしっぽを振った。あたしはそれに笑ってから、レメクに飛びつく。……飛びつけたと思う。けれど、暖かさやあの優しい匂いは感じられなかった。
（おじ様、これは何？　それに、どうしておじ様もこんな所に？）
あたしの声に、レメクは呆とした眼差しであたしを見た後、ゆっくりと視線を足下の筵の山に移した。
どこかため息をこぼすように、声を落とす。
（エットーレですよ）
あたしは瞬きした。エットーレ？
でも、どうして筵をかけられて……
（……え？）
ふと気づいたその事実に、あたしは目を瞠る。
レメクは、ぼんやりとエットーレを見下ろしたまま頷いた。
（ええ。……ここにあるのは、かつてエットーレであった者です。

……私が、裁きました）

レメクが、裁いた。

あたしはレメクを見る。

死罪を宣告された人を裁いた。ならば、それは――

レメクは眼差しを伏せる。深い悲しみがそこにあった。……後悔と共に。

（……罪と罰の紋章は、本来、死罪と決まった者の真実を選別するために使うべき紋章。冤罪による死を回避させるための、最後の手段であるはずだった……）

胸の奥が冷えていくような寒さを感じ取って、あたしはレメクにしがみついた。体温は感じられなかったが、それを疑問に思わなかった。ただ伏せられた眼差しが悲しげで、寂しげで、それを取り除いてあげたかった。

（使うべきでは無かった……。例え指示されていたとしても、いつか別の時、別の場所で使わなくてはならなかったとしても……今、ここで、裁く理由などなかったのです。……分かっていました。こうなることは……。けれど、私は止められなかった。悔しかった。腹立たしかった。この男が、憎かった……）

吐露された言葉はあまりにも重く、あまりにも悲しく、憎しみが持つどす黒い感情からはほど遠かった。

ただ悲しい。

ただ、辛い。

そんな深い後悔だけが滲んでいる。

あたしはレメクをぎゅっと抱きしめた。

優しいこの人に、温もりを伝えたくて。

（……子供らを死においやったこの男が、憎かった……）

悲しみを和らげてあげたくて。

（あなたを痛めつけたこの男が、憎かった……）

その痛みを分かち合いたくて。

（……憎しみで死を与えたのです。……私こそ、最も唾棄すべき殺人者でしょう……）

あたしは首を横に振った。

けれど、違う、とは言えなかった。

違うと、言ってはいけなかった。

レメクは分かっている。例えどんな理由があったとしても、命を奪うということがどれほど、罪深いことなのか。

あたしも分かっている。例えどんな言い訳を用意したとしても、それは本当に、ただの『言い訳』にしかならないということを。

例え誰かにとってそれが正義でも、

誰もにとってそれが『正しい』と言えることであっても、

感情で命を奪う行為を、決して認めてはいけないのだということを。

それこそが絶対の掟。生きとし生けるものが持つべき、絶対的な不文律。

この世に生まれ生きる者が持つべき、犯してはならない掟。

（ねぇ、おじ様）

あたしは声をかけた。この優しい人が、自分の罪にこれ以上自分自身を傷つけないように。

（正しいことでなくても、忌むべきことであっても……誰かがそれをしなければ、いけない時があるわ）

（えぇ……けれどそれを、認めてはいけないのです。認めることで、言い逃れてはいけないのですよ）

あたしは強情なその人の掌を軽くつねる。聞き分けのない子供を怒るように。

レメクはあたしを見下ろした。ちょっと眉が下がっていて、困った顔に見える。

（ベル。あなたは、刃を振り下ろさなかった）

優しい手が伸びてきて、あたしの頭をそっと撫でる。

（あなたは、罪を犯さなかった）

困った色を宿していたその顔が、ほころぶように笑む。
（……私には、それがとても眩しく、同時に、とても誇らしい）
その言葉に、あたしは何と応えていいのだろうか。
涙がこぼれそうだった。
自分の罪深さを胸に深く刻みながら、他者の美徳を誇らしく褒められる、このどこまでも潔い人が、ただ愛おしかった。
（おじ様の顔が浮かんだの）
あたしはレメクの掌に自分の頭を擦りつける。
思いが溢れた。苦しくてせつない思いが。
あたしがエットーレに刃を振り下ろさなかったのは、あたしが正しい者だったからじゃない。あたしがあたしを止めたわけじゃない。
（おじ様が止めてくれたの）
あなたが教えてくれた。あなたが語ってくれた。あなたが示してくれた。
沢山の事。沢山の言葉。沢山のあり方。それがあたしを正しくあるべき場所へと引き留めた。罪を犯すのを止めてくれた。してはいけないと、手を汚してはいけないと、血に染まってはいけないと。
あたしじゃない。あたしだけじゃない。あたしの手をとってくれたのは、この手の凶刃を止めてくれたのは、他ならない、この誠実な優しい愛する人だ。
（おじ様があたしを守ってくれたの）
罪から。あの狂気から。奈落のような身の内の憎悪から。
レメクは何も言わない。
ただ、視線だけがあたしへと注がれる。
あたしは微笑った。ありったけの思いをこめて。
（ねぇ、おじ様。例えあなたが罪を犯しても、あたしはその罪ごとあなたを受け入れるわ。例えあなたがあたしの罪を止めてくれても、あなたがいる場所だけがあたしの居場所だから……あなたと同じものをあたしは背負うわ）
例えそれをレメクが望まなくても。

例えどんなに拒まれても。
一人で綺麗な場所になんて立ちたくないから。どんな場所でも、どんな罪でも、一緒に背負って生きていきたいから。
（よく言うでしょ？　おじ様。死が二人を分かつとも、って）
レメクはちょっと目を瞠って、それからほろりと微苦笑を浮かべた（死が二人を分かつ『とも』ですか）
あたしは微笑った。微笑ってレメクの手を握りしめた。
（そうよ。死が二人を分かつとも、よ）
レメクが柔らかく握りかえす。強く暖かいその感触。暖かい。体温は感じないのに、けれど暖かいと思うその感覚。
たぶんそれを、人は愛と呼ぶのだろう。
（エットーレを殺したのは、あたしが半分。憎しみで刃を降ろしたのも、あたしが半分。悔しかったのも、憎かったのも、恨みを募らせたのも、怒りを覚えたのも、殺してやりたいとすら思ったのも…ねぇ、おじ様、あたしと半分こよ？）
あたしの気持ちはあたしだけのものだけれど。レメクの気持ちはレメクだけのものだけれど。足して割って二人で分かって。ねぇ、二人で分かち合いましょう。この時と空の下で。あたし達の在るべきこの世界で。
レメクは何も言わない。ただ、けぶるように目を細めて、あたしの体をやんわりと抱き上げた。
包み込むように。閉じこめるように。愛おしむように。
その腕に抱かれて、あたしはぎゅっとしがみつき返す。思いを伝えるように。思いをくみ取るように。
そうして、そっと言葉を零した。
（……エットーレは、死の旅に出たのかしら……）
冷たい路地の筵は放置されたままで、誰も見送ったり見守ったりした形式は無い。
あの欲深い魂は、ここに今も留まっているのだろうか。それとも、あの闇の中を旅しに飛び立ったのだろうか？

（……ここにはいませんよ。もう、誰も）
（……そう）
あたしは目を伏せる。
エットーレの死を悲しむ気は無いのに、なぜか胸が少し痛い。恨みも憎しみも未だ胸の奥にあるというのに、どうしてこんなに空虚な気持ちになるのだろう。
（……それが、死、というものです）
レメクがあたしを優しく撫でながら言う。
（この世で唯一の永遠。唯一公平に与えられるもの。人が必ず行き着く場所。……故にその前にあっては、我々はただ深く頭を垂れるしかない……）
たとえそれが、どんな悪人であっても。恨み憎んだ相手であっても。死が訪れたその後には、ただ深く頭を垂れるしかない。死を悼むことは、命ある者の絶対的な条件だから。それを冒涜することだけは、決してしてはいけないから。
（……ベル）
レメクが呟く。あたしを抱きしめる。
（あなたは、ここにいますか？）
小さな声で、そう問いかける。
（あなたは、ちゃんと、ここにいますか？）
この世界に。
旅立つことなくこの世界の中に。
同じ時同じ空の下の、この世界に。
狭間の向こう側の、死の眠りにつくことなく、この世界で――
（……うん。ちゃんと、いるわよ）
あたしはレメクを抱きしめる。小さな手で。せいいっぱいの力で。
（どこにも、逝ってないわ）
どこかへ、置いて逝ったりしてないわ。
（ちゃんと、おじ様が呼び戻してくれたから）
ねぇ、だから、レメク。そんな目をしないでね。

あたしちゃんとここにいるから。あなたの傍にいるから。
（目が覚めた時に、あなたがいないなんてことは、ありませんね？）
祈るように願うように、そんな風に確認をするレメク。
あたしは思い出した。
闇の中で、おかしな名前の『お父さん』が微笑って言っていた言葉を。

あの子は、寂しがりだから。

（ずっといるわ）
とても強くて、とても賢くて、とても立派で、こんなにカッコイイ大人なのに。
――あの子は、寂しがりだから。
（ずっとずっと一緒にいるわ。あなたが嫌がっても）
これほど胸を騒がせる、あなたはなんて、愛おしい人。
（おじ様……還ろう？）
暖かくて優しい、みんなの所へ。
アウグスタ達の所に。
（えぇ……）
レメクは小さく頷いた。
悲しい瞳に少しだけ笑みを見せて。切ない瞳に暖かなものを宿して。
（還りましょう）
あたし達の大切な人達の元に。

あの時と空の下に――――――

※　※　※

ふいに名前を呼ばれた気がして目が覚めた。
ぱちぱちと瞬きをする。
夢を見ていた。
あたしはぱっちりと目を開ける。
夢を見ていたのだと、理解した。
テントの中は淡く明るく、あたしはそれで夜が明けていることを知った。
時刻まではわからない。
外のざわめきは遠く、また人が多すぎて言葉を聞き取れない。ただ、クーッとせつない鳴き声をあげたお腹が、朝ご飯の時間はとっくに過ぎていることを訴えていた。
……そういえば、朝ご飯どころか昨日の晩ご飯も食べてません。
あたし。
いや、あの状況下で御飯も何もなかったわけですが。
あたしは切なさを込めて前を見る。
目の前のレメクはまだ目を瞑ったまま、静かに寝息をたてていた。
その姿を目にした途端、空腹も軽く吹っ飛んだ。
ちょっと耳を澄まさないと聞こえないぐらい、ひそやかな呼吸。
無防備に寝こけているその姿。なんだか野生動物が眠ってるのをチョイ見しちゃったような、なんともいえない喜びがわき上がる。
強い生き物の無防備な姿って、ちょっとドキがムネムネしませんか！？
あたしはゆるゆると笑みを浮かべた。暖かいものが全身に広がって、それだけで幸福な気持ちになる。
（レメクって……）
夢の中では、あんなに可愛らしい人なのか。素晴らしい。どうしてこう、あたしの心臓を何度も鷲づかみにしてくれるのか。どうしてくれよう。

ふっふっふ、と笑うと、眠っているレメクがビクッとなる。どういう意味だろう。

しばらくじーっと様子を見守ったが、起きる気配は無い。まだ眠ったままだ。このまま悪戯しちゃってもいいだろうか？　額に『お肉』の絵とか『サラダ』の絵とか描いちゃったりとか。

そんな素敵な誘惑にかられていると、サッと眩しい光の鉄槌があたしの目を灼いた。

眩しい！

「あ、ベル！　よかった。起きた……んだね？」

光の中で人の輪郭が喜びに叫び、ややあって声をひそめた。レメクが寝ているのに気づいたんだろう。

あたしは突然の光に灼かれた目をしょぼしょぼさせながら、光の中の輪郭（人型）を見上げる。

同時にバサリと音がしてめくられていたテントが元に戻り、中に密やかな静寂と薄暗い明るさが戻った。我が盟友ケニードが、そそくさとあたしの目の前にやってくる。

「気分はどう？　ふらふらしない？」

「ケニード……って、なにそのゲッソリ顔！？」

「しーっ！　声が大きいよベル。寝てるから！」

ケニードの声も充分大きい。

あたしは達は互いに「しーっ」と人差し指を唇にあて、チラッと寝ているレメクを見る。ぐっすりのようだ。

「……眼福ね」

「……眼福だね」

思わず数秒、視線を固定してしまいました。

なぜか寝てるレメクの表情が辛そうなものに変わった気がするが、きっと気のせいだろう。それか、何か悪い夢でも見てしまったのか。

あたしは視線をレメクからケニードへと移し、その痩けた頬に眉をひそめる。

「でも、その顔、本当にどうしたの？　いきなり絶食生活一週間し

たみたいよ？」
　いや、それでもそこまで頬が痩けるかどうか疑問だ。せっかくの美形がちょっと台無しなぐらいに窶れてしまっている。
　ケニードは軽く苦笑して肩をすくめた。
「うん。僕も朝起きてびっくりした。どうやらこれが、生命力を分け与えるってことみたいだね」
　なんと！
　あたしはぎょっと飛び起きる。
　その劇的ビフォー・アフターが！？
「僕もよくわからないんだけどね。バルバロッサ卿もすごかったよ。きっと山の熊の大将が窶れたらあんな感じなんだろうねぇ……今、繁華街で全店制覇を目指して驀進中だけど、本当に制覇しちゃいそうな勢いだった」
　熊は失った力を食料でカバーすることにしたようです。
　……てゆかケニード。君も意外と言いますね。むしろ『熊』は王宮の共通認識ですか？
　なんとなく眉が下がってしまう。もしかしたら神殿でも共通認識なのかも。
　ケニードはそんなあたしをしげしげと眺め、それからじんわりと笑った。
「……もう、大丈夫だね？」
「え？」
「大丈夫、だね？」
　確認するような問いに、あたしはハタと気づいた。ケニードを見つめる眼差しに、自然と感謝と謝罪が宿る。
　あたしは大きく頷いた。
「うん」
　ケニードは笑った。あったかいほんわかとした笑顔で。
「うん。……よかった」
　よかった、と。もう一度呟いて、ぎゅっと抱きしめられた。……

暖かい。
「……ごめんなさい」
「……うん」
「……ありがとう」
「うん……」
あたし達は戦友を称え合うように背をたたき合う。あたしの腕は短いので、ケニードの横っ腹をぺちぺち叩く形になったけど。
「黙っていなくなって、ごめんなさい」
「うん。……いや本当、あれはちょっとまいったよ」
苦笑とも自嘲とも爆笑の一歩手前ともつかない不思議な笑みで体を震わせて、ケニードが言う。
「いや、元凶の一端は僕なんだけどね。ウンにもまいったけど。洗面所借りて頭洗ってたら、店の支配人が『お嬢様がーっ』とか言って飛び込んで来たんだよ。もう頭泡だらけのまま飛び出しちゃった」
あわわわわ。
あたしは慌てる。ドッと押し寄せてきた後悔は、罪悪感と共にあった。
「……事情は聞いてるよ。だから、そんなに泣きそうな顔しないで。でもね、ベル。陛下からもたっぷり言われたと思うけど、僕らはとっても心配したから。本当に死ぬほど心配したから。心配しすぎて死にかけた人がそこに寝てるぐらいなんだから。これからは、一人で走り出したりしちゃダメだよ」
隣に転がっている人にあったかい目を送りながら、ケニードは柔らかく微笑んだ。その笑顔に、あたしの視界がぼわぼわとぼやけていく。
ケニード……いい人。レメクがいなかったら、もしかしたら惚れちゃったかもしれない。
目頭と一緒に鼻頭も熱くなって、鼻水が出そうなほどだ。
「うん。……約束、する」
ずぴ、と鼻をすすってあたしは頷いた。ケニードが微笑う。

「うん。でもよかった……無事でよかったよ」
優しい年の離れた盟友と全力ハグを再開して、あたしはピスピスと鼻を鳴らした。
レメクの超絶素晴らしい匂いには勝てないが、ケニードからも優しくて暖かい匂いがする。それはどこかアウグスタの匂いに似ていて、ついでにあたしのお母さんの匂いにも似ていた。
暖かい匂い。あたしはなんとなく理解した。
それの名前を愛情と言うのだと。
「よかった……。あぁ、でも、どこから、どうやって、どんな話をしようか。目を覚ましたら、怒ってやってくれって陛下に言われたんだけど、怒る前に鼻水でちゃいそうで」
ケニードも目から鼻水が出ちゃうお人らしい。あたし達はズピズピ鼻を鳴らしながら、ぎゅーと抱きしめあった。
「今はね、陛下は王宮に戻ってる。孤児院のことは、すごいニュースになってるよ。今日中に主だった関係者の処罰が下される。王宮の不正も同時に正されたけど……これは、今の君にはちょっと遠い話だから、省くね。お金を横領してた人達が捕まったんだって、それだけのことだから。彼等も処罰される。たぶん、しばらくはすごくゴタゴタするよ。暗躍しようとする人も増えるだろう。クラウドール卿もいっそう大変になるけど……大丈夫だね。君もこうして戻ってきたから。だから、もう大丈夫だ」
まるで自分に言い聞かせるように「大丈夫」を繰り返すケニードに、あたしは涙を擦りつけながら頷いた。……うん。大丈夫。
「孤児院のトップは違う人に変えられるよ。それらのことも、今日、決定するだろうね。実は昼過ぎから裁判なんだ。終わるのは日没後になると思う。だから、それまでにクラウドール卿の目が覚めないかどうか、様子を見に来たんだけど……」
ケニードはそう言ってレメクを見る。
未だ眠ったままのレメクを。
「……今は、何時？」

「十時ちょい……かな。店を出たのが十時前だったから、たぶんそれぐらい。……一時頃から始まるから、それまでにクラウドール卿が起きたら伝えて。大神殿のベラトリーテ講堂で裁判が始まるから、って。……一応、資料は全部彼が用意してくれてたから、いなくても大丈夫だけど……彼がいるといないとでは、場の空気が全く違うから。できればいてほしいらしいんだ。これは猊下や閣下からの要望なんだよ。……でも、僕としては、ちょっと休んでほしいな。ずっとクラウドール卿にばかり頼ってきたんだ。こんな時ぐらい、休ませてくれてもいいじゃないか」

ケニードはくしゃりと泣き笑いにも似た笑みを浮かべる。

「……僕は、本当に、クラウドール卿をすごいと思うよ。その能力も、人としての潔さも、尊敬してる。ねぇ、ベル。君はもう知ったかい？　彼が持つ紋章のことを。彼の地位を。その職業を」

あたしはケニードをじっと見た。

彼が言っているのは、どの紋章のことだろうか。闇だろうか、それとも罪と罰だろうか。

ケニードは今回、死にかけたレメクを助けるのに一役かった。そのときに、闇の紋章の話をしただろうか。あたしはそれを判断する材料をもたず、だから、ただ頷くだけにとどめた。

ケニードはほろ苦い笑みを浮かべる。どこか悲しむような笑顔を。

「罪と罰の紋章は、王家に伝わる秘宝の一つ。今まで、王家の誰の手にも宿らなかった強大な紋章なんだ。その紋章を下賜され、その力を振るえたのは、歴代でも二人だけ。ナスティア王朝が始まってから、たった二人しかいなかったんだ。……クラウドール卿は、史上二人目の所有者……この世で唯一人、王をも裁く権限を持つ、断罪官なんだ」

「断罪官……」

エットーレもそんな名を呼んでいた。

あたしはケニードを見る。どこか悲しげな目のその人を。

ケニードは、なぜかレメクを痛ましいような目で見つめていた。

「罪と罰の紋章には、いろんな曰くがあるんだ。身につけた人は、ほぼ確実に狂死するとさえ言われた呪われた紋章でもある。どうして陛下が、そんな紋章をクラウドール卿に与えたのかは知らない。僕はその当時、王宮にはいなかったから。けれど、すごい波紋を呼んだらしいことは聞いている。なにせ、その紋章を持つ者は、自分の権限だけで断罪を行えるから。証拠を揃えるとか、裁判をするとか、そんな手順を全部すっ飛ばして、ただ罪を裁くことができるんだ。……そしてその対象は、王国の全てに及ぶ。分かるかい？　ベル。王ですらも、裁く権限があるんだ。陛下はクラウドール卿に、その権利を与えたんだよ」

あたしは二人の顔を同時に思い出す。

臣下の礼をとりながらも、王と対等に話をしていたレメク。それはたぶん、レメクとアウグスタだけがもつ何かが理由なのだ。

あたしはその『何か』を知らない。

けれど、その『何か』によって、アウグスタはレメクに自ら裁く権限を渡したのだ。そこには、何か言葉では言い表せない絶対的な絆があるような気がする。信頼、友情、愛情、そういったものだけですらない確かな強い絆が。

「アウグスタは、おじ様を信じたのね？　おじ様の信念や、心のあり方を」

でなければ、下手をすれば大量殺人犯になるかもしれない巨大な紋章を与えたりしないだろう。絶対的な権限というのは、持つ者によって恐るべき凶器になってしまう。

レメクだからこそ、それが無かった。

あれほどに自らを律し、自らの行いの全てを正当化せず、世界にとっての正しいものを常に自らに問う人だからこそ、今の現状が成った。

それはある意味、奇跡にも似た生き方。

アウグスタはどこまでわかっていたのだろうか。どこまで確信していたのだろうか。その紋章を与えた時に、この者ならば大丈夫と、

そう思って渡したのだろうか？

あたしは俯く。きっとそうだ、と思う反面、何かあやふやな不安を覚えた。何かを間違っている気がする。何か間違っている……思い違いをしている気がする。

アウグスタは、信じたからこそ紋章を渡したんだろうか？

それとも、レメクになら裁く権利があると、そう思って渡したのだろうか……？

「……ねぇ、あの紋章って、罪そのものを裁くのよね……？　でも、どうやって、どういう風に裁くの？」

首を傾げたあたしに、ケニードは「簡単だよ」とほろ苦い笑みを浮かべた。

「使えばいいんだ。ただ、それだけで、紋章は罪に応じた罰を対象者に与える。……あの紋章は、無辜の者を裁くことは無いんだ。罪を犯していなければ、その身には何の怪我も負わず、罪を犯していれば、その罪そのものによって裁かれる……そういう力をもつ紋章だから」

それはまさに、神の如き裁き。

故に呼ばれるのだ。断罪の紋章と。

「だから、その紋章を宿した者だけが呼ばれるんだ。断罪官、と」

この国はおろか、世界で唯一人の存在。神の如き裁きを身に宿した人。

「でもね、そんな力を持ってるから、こんなに尊敬したわけじゃない。クラウドール卿は、自分の紋章を使うことを嫌ってるんだ。本当はね、王宮紋章術師の長にだってなれるような人なのに、裁判の手続きの手伝いとかばかりして……しかもだよ？　紋章をほとんど使わずに、自分の足で歩いて回って、証言や資料をきちんと揃えて……そんな手間なことをすごく真面目にやる人なんだ。ちっとも紋章を使おうとしなくて……偉そうにしなくて、誰よりも潔くて……」

憧れたのは、その人の姿。

誰にもない権限を与えられながら、それによりかからず、真っ直

ぐに一人の人間として立つ姿。
　驕ることなく偉ぶることなく、誰に対しても丁寧に礼をとり、手を差し伸べるその人の姿。その姿勢。
　あたしは深く頷いた。わかる。すごくわかる。
「でもね、そんなクラウドール卿を誰もが怖がってるんだ。だって、彼は強すぎる。あんまりにも強すぎる。優しい人だから、潔い人だから、決して自分から人を傷つけようとはしないけど……けど、強すぎる力は恐怖の的なんだ。だから、恐れられてる。元々、彼はとても取り付く島が無かったし。ベル……君がいるから、君がいてくれたから、僕もこうやってクラウドール卿の傍に行くことができた。けど、君がいなければ、きっと今も僕はどこか隅っこで、遠巻きに見るしかできなかっただろう」
　それぐらい、レメクは人にとって『近寄りがたい』人だったのだという。
　あたしは首を傾げる。
　その感覚は、あたしにはピンとこない。こんなに暖かくて、世話焼きのお母さんみたいな人なのに、どうして近寄りがたいのか。
　ケニードはあたしを見て微笑った。
「君が来てからだよ、ベル。きっとこれからもっと変わっていく。……人と人の出会いっていうのは、きっとそういうものなんだろうね。互いに影響しあって、互いに変わりあっていく。……素敵だね、ベル。君がいるから、今の皆がいるんだ。クラウドール卿も、僕も、バルバロッサ卿も、陛下も……。ねぇ、ベル。僕はね、断罪の紋章を持つことは不幸だと思う。とても辛いことだって思ってる。けど、君が傍にいてくれるなら、きっとクラウドール卿は大丈夫だね」
　あたしはそう言って微笑うケニードを見上げた。
　不思議だと思う。
　ねぇ、レメク。不思議だわ。あなたの周りにいる人は、こんなにも優しくて綺麗な人ばかりなの。
　ねぇ、レメク。アウグスタもケニードも、とても綺麗な顔をする

のよ。とてもとても綺麗な微笑みを。
ねぇ、レメク。素敵ね。きっとそれは、あなたが本当に素敵な人だからね。だからこんなに、綺麗で素敵な笑みを浮かべられる人が、集まってくれてるんだね。
あたしは胸がいっぱいになって、その思いのままに微笑った。
ありがとう、と告げたかった。何故かはわからない。けれど、ありがとうと言いたくなった。ケニードの全てに対して。彼が言ってくれた言葉全てに対して。彼がレメクに向けてくれた、ありとあらゆる優しいものに対して。
ありがとう、と。
ケニードは微笑う。そうして、ハタと我に返ったような顔で照れながら、ごそごそと背中に負っていたらしい雑嚢をあたしに渡してくれた。
「えぇと、それで、君のお友達達、というか、孤児院の子達全員なんだけどね、今は王宮と教会がそれぞれ保護してるから。クラウドール邸で」
なんで!?
さらりと言われた場所に、あたしは思わず目を剥く。ケニードは晴れやかに笑った。
「あそこが一番安全なんだよ。ほら、最強の人のお家だから、誰も手が出せないから。離れ小屋のおじいちゃん達や、おじいちゃんの仲間達が世話してくれてるよ。あの子達に同情してくれた貴婦人の方々からも、大量のお心付けが届いてる。だから食料とか物資の問題も、今のところいけそうだ。それに、下街の人もね、手伝ってくれてる。あと……そうだ、僕の屋敷に君が来た時、クラウドール卿が引き連れてた兵士達を覚えてる？　彼等が、王宮代表で屋敷の警護……というか、半分ぐらい子供の世話にまわってる。うちの爺や達もね。あぁ、そうそう。君にとても会いたがってたよ」
あたしはカッぴらいた目を元のサイズに戻しながら、あぁ、と不思議な笑いの衝動に包まれるのを感じた。

くすくす笑いはじめたあたしに、ケニードは首を傾げる。
「どうしたの？」
「ううん。あのね、ケニードってね、なんだかとっても不思議だなって思って」
「僕が？」
きょとんとしたケニードに、あたしは微笑う。
ケニードは不思議だ。だって、いつだって、心が温かくなるニュースをもってきてくれる。ほっとするような、そんな情報を与えてくれるのだ。
「君ほどじゃないと思うけどなぁ」
なぜか釈然としないような顔でケニードが言う。けれどその顔はどこか笑み含みで、あたし達はしばらく二人でくすくす笑った。
「さて。僕はそろそろ行くよ。ベルはどうする？　お腹空いてるだろう？」
腰を上げたケニードに、あたしはちょっと微笑って首を横に振った。
「お腹は空いてるけど、ここにいるわ。おじ様が目を覚ました時に、一番におはようって言いたいの」
ケニードは、何故かとびっきりの笑顔で頷いた。
「うん。そうだね。そう言うと思って、その雑嚢の中に食べ物いっぱい入れてきたんだ。ゆっくり食べて、付き添ってあげてね」
「うん！」
ありがとう、と。今度こそあたしはケニードに言った。ケニードは輝く笑顔で言う。
「僕こそ、ありがとう！　だよ、ベル」
テントの端が大きくめくられて、ケニードの笑顔を一層輝かせる。それは差し込んだ外の光のせいだったかもしれず、彼のもつ光そのものだったのかもしれない。
いずれにしろ、その言葉を残してケニードは立ち去り、テントの中にはあたしとレメクだけになった。

それにしても、どうしてケニードのほうからも「ありがとう」が返ってきたのだろうか？

あたしは首を傾げながら、もらった雑嚢をあさる。水筒に、美味しそうなパンがいくつか。

小麦パンには炙った肉や野菜が挟まれており、たいそういい匂いがする。

思わず半開きになったあたしの口から、よだれが零れ落ちかけた。危ない危ない。

ケニードに感謝の祈りを捧げ、あたしは勢いよくそれにかぶりついた。美味い。この、トマトをベースにしたソースがまたなんとも言えず香ばしくて……

そんな風にテント中に良い匂いを充満させながら食べていると、匂いに誘われたのか隣のレメクが身じろぎした。

「ももままっ！？」

あたしは思わずレメクの顔面前にスタンバイする。もぐもぐごっく、んがぐぐっ！

水！　水ッ！！

あたしは大あわてで水筒のコルクを外し、勢いよく水を飲み干す。

し……死ぬかと思った……

「……　……」

水を飲み干し、半泣きでレメクに視線を戻すと、嗚呼！　もうすでにうすぼんやりと目を開けてしまったレメクがそこに！！

目覚める瞬間を見逃してしまったあたしは、ショックでガーンッとそのまま硬直してしまった。

ぼんやりと目を開けたレメクは、そのぼやぼやのままであたしを目にとめる。

「……　……」

音のない声で何かを呟いて、レメクが緩慢な動きで手をあたしに向けた。

差し出されたその手に、あたしは一瞬、迷う。

水ですか？　食い物よこせ？　それともあたし？
迷いながらも期待を込めて顔を寄せる。レメクの手がのろのろとあたしの頬を撫でた。万歳。ペイッとやられなかったということは、これが正解だったのだろう。よっしゃあ！！
あたしは思った。時よ止まれ。世界よ、おまえは美しい、と。
レメクの手が確認するようにあたしの頬を撫でる。くすぐったい。そしてつねられた。イタイ。
何故デスおじひゃまっ！？
「ベル……？」
そうですとも。あなたのベルですとも。
ムニムニと頬をつねられながら、あたしはしっかりと頷いた。つねられていることに対して言いたいことがいっぱいあるが、ここは根性の見せ所だ。あたしは気合いを入れた。
決めていたのだ。目が覚めた時には、必ず傍にいようと。
傍にいて、一番に微笑って言おうと。
「おひゃひょう、おびひゃま」
……様にならなかった。
しょんぼりだ。
それでも根性で気合いの入った笑顔を浮かべていると、ぼんやりと瞬きをしたレメクがちょっとだけハッキリとした目であたしを見上げ、
「……ぷっ」
いきなり吹き出しやがった！
どういうこと！？
「おじひゃまっ！？」
レメクは声もない。あたしの頬から手を離し、転がってブルブル震えている所をみると、よほど可笑しかったのだろう。てゆか、笑いを堪えるレメクを見るのは二度目だが、どこでどんなツボにストライクしてしまったのかが未だに謎だ。
「なんで笑うのーッ！？」

あたしは悲痛な叫び声をあげる。
ここはほら、メロメロでキラキラなドラマチックを展開するはずではないだろうか!?　生死の境を彷徨った二人！　夢（？）の中でもご対面！　そして目覚めた朝に、こう、ムッチュ～とくるような展開があってもいいんじゃないの!?
あたしの半泣き抗議に、レメクは目尻に笑い涙のようなものまで浮かべながらこちらを振り返り、転がったままの体勢で手を伸ばした。
む。またつねるつもりですか？
そうはなるかと避ける前に、綺麗な指があたしの口の横を軽く擦った。その指先が赤くなっている。
……あれ？
「すごい顔ですよ、ベル」
ガーンッ!!
あたしはショックのあまり硬直した。なんということ！　せっかくのメロドラマをぶち壊しにしたのは、何のことはない、あたしの口の周りのトマトソースだったのだ!!
レメクの指がゴシゴシとあたしの口の周りを拭いてくれる。あたしは顔をくしゃくしゃにしながらレメクを見た。それがよほど情けない顔だったのだろう。レメクは笑いを堪えるような顔で身を起こした。そして軽く手を引かれる。
上半身を起こしたレメクに、あたしは突撃した。
おじしゃまーっ!!
「……ベル」
しっかりとあたしを抱き留めて、レメクがあたしの名を呼ぶ。
ぎゅっと、強い力で抱きしめながら。
「ベル」
あたしの名前だけを呼ぶ。
あたしはそれだけで胸がいっぱいになって、ぐりぐりと顔をレメクの胸に擦りつけた。もしかしてトマトソースもついちゃったかも

しれないけど、そのことはもう考えないことにした。
「よかった……」
心を零すような声が、あたしの頭に落ちる。レメクの顔が、すぐ近くにある。
腕の中にあたしを抱きしめて、しっかりと逃がさないように閉じこめて、レメクが囁く。
「……目が覚めた時に、あなたがいなかったら、どうしようかと……」
そう言って吐息を零す。
あたしはぎゅっとレメクにすがりついた。
この上ない極上の匂いがする。目眩がするほど幸せな匂いが。
あたしの心を攫ってしまう、魅力的な匂いが。
「ここにいるわ。おじ様」
思いの丈をこめて、その胸に顔を埋める。
「おじ様がダメだって言ったって……傍にいるんだから」
どんな時。どんな場合でも。
ずっと傍に。
あたしは大きく息を吸い込んだ。イッパイイッパイ腕を伸ばして、せいいっぱいの力でレメクを抱きしめる。
暖かいものを、レメクに伝えるために。
「おじ様、大好き」
そう伝えるために。
ギューッと抱きついたあたしを抱き留めて、レメクがあたしの髪に顔を埋める。優しい声が、すぐ近くでした。
「……私もですよ」

――なんですと!?

エピローグ

恋の女神が満面に笑みを浮かべ、よくやったわね、とサムズアップをしてくれているようだった。

青々と晴れ上がった空の下、あたしは溶け落ちそうなほど頬を緩める。

――大好き。私もですよ。

繰り返し繰り返し、その言葉が脳みその中で永遠のワルツを踊っている。くるりくるりくるくるりん。

眩しいほどに世界が輝き、その姿を変えてゆく。鮮やかに、美しく。薄いベールを一枚めくったかのように、世界が煌めきに包まれている。くるりくるくるくるくるりん。きっと頭の中で回る、この魔法の呪文のせいだ。

あたしはニコニコと笑み崩れる。

例えここが屋根の上で、風が出ててちょっと寒くても、そんなことは気にならない。

ようやく裁判から戻ってきたレメクが、全力笑顔で出迎えたあたしに逃げ腰になってたことだって気にしない。あれはきっと照れ隠しだ。そうに違いないのだから。

なにせあたし達はアイを確かめあったのだから！

あたしはニヘラッと笑み崩れた。

空は相変わらず美しく、雲がそよそよと遙か上空で動いている。

あぁ、世界はなんて美しいの。ちょっとだけ寒いけど。

「おじ様も、照れ隠しにあたしを屋根の上に放り出さなくてもいいのに……」

あたしはぼやく。風がソヨと吹いていった。寒い。

あの後、レメクはあたしの『ケニードからの伝言』を聞くや否や、めくるめくアイの応酬とやらを展開することなくあっさりと神殿へ直行しやがった。なんて人だろう。せっかく、宿のおねーちゃん達

が言っていた『めくるめくアイの押収（↑？）』とやらを教えてもらえると思ったのに。しょんぼりだ。

ただ、嬉しいことに、レメクは予想以上に早く戻ってきてくれた。あたしがとぼりとぼりとクラウドール邸に到着し（ちなみに護衛として騎士様が二名もついてきてくれました。でも顔も覚えてないです）、しょんぼりと玄関に座って一時間ぐらいで帰ってきたのだ。なんか全力で。

ちなみにその一時間もの間、あたしがなにをしていたかというと、その後現れた孤児仲間と合流してハグしあったり、その世話に来てたお城の兵士さんやケニードの屋敷の執事さんとハグしたりしてました。玄関で。

飛び込むようにして帰ってきたレメクは、そんなあたしを見て何故か絶句し、あたしは全力を出してレメクにハグしてもらいに飛びかかったのです。いつものごとく。ちょっと逃げられましたが。

……照れ屋さんなんだからッ！

そうそう、帰ってきたレメクは、別れた時より数倍元気になってました。きっと神殿には生命力のありあまってる人がゴロゴロいたのでしょう。そこから余分の元気をたっぷりもらってきたようデスね。歩く生命吸引機と名付けましょう！

……しかしその場合、あたしとレメク、どっちが一号でどっち二号なのだろうか……？

それはともかく。

元気になったレメクは、あたしの全力ハグを受けた後、なぜかぐったりしながら集められている孤児達を招集。その中で一定年齢以下の男の子だけを選出し、集合させた。

そして、何故かあたしを捕獲して屋上に放流。「しばらくここで大人しくしていてください」という言葉だけを残して家に戻ってしまいました。あんまりだ！

風邪ひいたらどうしよう？　元気にならないといけないのに、これはいったい、なんの試練ですか？

あぁでも、今のあたしには全てがアイの試練。何でもコイ。

あたしは「うふふふ」と笑み崩れた。どこからともなく「ぎゃーっ」だの「もういいよもういいよっ」だの、ワァワァと楽しげな歓声が響いてきているが、全然気にならない。気になんかならないんだからねッ！

あたしはぽつんと屋根に座った状態で、空を見上げた。あぁ、世界はなんて美しい。でもちょっと寒いのおじ様。人肌プリーズ。

へっくち。

「……なんていうか、あんたの『おじ様』って、独特ね……」

突然後ろから声をかけられて、あたしはビクッと飛び上がった。ぎょっとなって振り返ると、ああん！　ナナリーがそこに！！

人肌キターッ！！

「にゃなりーっ」

「危ないからっ！　飛びつかないでッ！！　なんで屋根の上でそんなに平気で動けるの!?」

屋根の上に上がってきたナナリーは、おっかなびっくり屋根にへばりつくようにしている。なんでそんなに及び腰なんだろう？　そんなにしなくても、大丈夫なのに。

「おじ様のお屋敷は丈夫だもの。そんな格好にならなくても大丈夫よ？」

孤児院のそれと違い、屋根を踏み抜く心配も無い。なにせすこぶる丈夫な作りなのだから！

えへん、と我が事のように胸を張ったあたしに、ナナリーはへっぴり腰のままで叫ぶ。

「恐いのよ！　落ちたら一発でお終いじゃない！　なんでそんなに平気で立っていられるわけ!?　猫じゃないんだから!!」

ナナリーの悲鳴じみた訴えは、違う意味であたしをザクッと刺した。

猫……猫なのか、なにをしてもその単語がついてまわるのか……。

よろけたあたしに、ナナリーが悲鳴を上げる。おっとっと。

「危なかった。……ってあれ？　ナナリー、どうしたの？」
「恐っ！　恐いわっ！　もう！　あんたも！　この場所も！　いろいろ恐いわっ！！」
絶叫するナナリーは涙目だ。そんな恐い場所に、どうしてナナリーは来たんだろう？　あたしは首を傾げ、すぐに答えに気づいた。
ナナリーは、毛布を持って来てくれたのだ。
「あんたのおじ様から、これ渡してやってって言われたのよ。でも、渡したら、すぐに鍵閉めるようにって言われたわ。どういうこと？　なんであんた、隔離されてるわけ？」
隔離。
むぅ。言われてみれば、確かにそんな感じ。
「あの人、優しいのか優しくないのか、わけわかんないわ。……てゆか、ねぇ、ハッキリ聞いていい？」
なにを？
首を傾げたあたしに、毛布を放り投げながらナナリーが声をひそめる。
彼女は屋根にへばりついたままなので、声を聞くためにあたしはナナリーの近くにいくことにした。
とことことこ。
「……なんで斜めの屋根で、そんなに普通に歩けるんだか……。まぁ、それはともかく、あのレメクって人……」
レメクが？
「……黒い神官、じゃない」
は？
あたしは目を丸くした。
「くろいしんかん～？」
「なにそのビックリした顔！　だって！　黒い服着てるし！　だ、だいたい、他の子達だってそう言ってるのよ！？　てゆか、あんたと一緒の孤児院の子達が見たって言う『黒い神官』って、あの人じゃない！」

「えぇえええ～！？」
あたしは絶叫した。そんな馬鹿な。
「だってさぁ！　あの人、ここしばらくずっと孤児院のあたりをうろついてたし！　子供攫ってたのだって、そうだったし！」
「えぁ！？　おじ様が攫ってたの！？」
あたしの声に、ナナリーは目をまん丸にした。
「ぇえ！？　あんた、何も知らないの？　……って、あー。そっか。あんた、倒れるか何かして、まだ説明受けてないんだっけ？　アタシらは、今朝方ムラックだかエロックだかいう名前の綺麗な人から聞かされたんだけど」
……アロックです。
あたしはこめかみを揉んだ。ケニード。君はなんか可哀想な名前になってるヨ。
「ぇーとぉ……あたしは、お昼前に起きて……同じ『アロック』卿にちょっぴり説明聞いたかな。孤児院の上の人が裁判をうけるってことと、孤児院の皆をうちの屋敷に集めて保護したってこと」
「うーん……微妙にはしょられちゃってる感じ？　まぁ、後で説明する気だったのか、忘れてるのかは知らないけど。……あのさ、姿が消えちゃった子達って、病気だったりして、そのままでいれば危ないって子達ばかりだったでしょ？」
「うん」
そう聞いた。
「それでね、聞いた話、その子等をそのまま放っておく訳にもいかなかったんで、先に攫って、お医者様に診せてくれてたらしいのよね。今も、そのメロック卿とかいう人の所に保護されてるわよ」
じゃ、じゃあ……！
あたしは希望に顔を輝かせた。
もしかしたら、助かってるのかもしれない。
メム、メアリー、マルク。
あたしの友達。あたしの仲間！

……けれど、ナナリーはどこか暗い顔をしていた。
（……どういう、こと？）
顔を曇らせたあたしに、ナナリーは呟くように言う。
「……全員、じゃないの。助からなかった子もいたんだよ。あんたの所の子も……メム、だっけ？　あと、同じような名前の子。メアリー？　だったかな。その子は、助からなかったって……」
「……」
あたしは大きく目を瞠り、ややあって俯いた。
ケニードの声が頭に響く。

全てが終わった後に、助からなかった命があったとしても

……うん。わかってる。助けられなかった子がいても、それはレメクのせいじゃない。
レメクは一生懸命してくれた。
だからそれはレメクのせいなんかじゃない。
けれど、ねぇ、ケニード。そのことを仕方ない、なんて風にも思えない。もちろんレメクのせいじゃないけど……けど、仕方がないことでも無いの。
だって、そうでしょう？　そこには確かに、かけがえのない命があったのだ。
それが失われたことを仕方がないの一言で片づけられないじゃない。
あたしは歯を食いしばった。
悲しい……ただ、悲しい。
助かってほしかった。生きていてほしかった。たぶん、レメクやケニードも同じ気持ちだったろう。彼等だけじゃない、ナナリー達も、皆、同じ気持ちだったろう。
けれど、助からなかった。助けられなかった。だから悲しい。やるせない。

「……あんたのおじ様に、さっき初めて会ったけど。……助けられなくてすみません、って……頭下げられたわ。あの人のせいじゃないのにね」

ナナリーの声に、あぁ、とあたしは吐息を零した。

レメクは、そういう人だ。せいいっぱい手を伸ばして、それでも助けられなかった命に、すまないと涙をこぼすような人だ。決してそれが顔に出ていなくても、心で泣いている人だ。

あの人は、とても優しい人だから……

「なんかさ、あの人もややこしいいろんなことがあって、自由に動けなかったんだってね。おおっぴらに助けられなくて、すまないって謝られちゃったわよ。……アハハ、なんでかしらね……アタシ達よりさ、あの人の方が泣いてそうな感じだったのよね。表情変わんないし、別にボロボロ泣いてるわけじゃないのによ？　みんながそんな風に感じちゃってさ、どうしてだろうね、って話してたんだけど……アハ、結局わかんないままだわ。ちょっとしか会ってないしさ」

ナナリーはそう言いながら、どこか泣きそうな目で笑った。

あたしも同じような目で彼女を見返す。

あたしにはわかった。レメクがその時、どんな風だったのか。

……あたしには見えた。たとえこの目で見ていなくても、あの人がどんな顔で、そんな風に、どんな気持ちで頭を下げていたのか。

（レメク……）

優しくて誠実で、けれどどこか不器用な人。

ねぇ、レメク。気づいてる？　あなたが起こした奇跡の数々に。

あなたがあたし達に与えてくれた、形のない暖かな尊いものに。

「……そうだねぇ……うん。あの人、優しい人には違いないんだ。どんなに変なやり方だとしてもさ、病気の連中を見るに見かねて攫って保護するだなんて、普通の人はやりゃしないんだから。……それにさ、あの人、いろんなものくれるのよ。嘘みたいだよね。モロックっていう人が言ってたわ。御飯くれて、新しい服くれて、暖か

いお風呂に入れてくれて……そういうの全部、あの人が手配したんだって。名前だけしか聞かされてなかったから、どんな人なのかサッパリだったけど。なんかねぇ……最初は『嘘っ』て思ったけど、声聞いたら納得しちゃったわ。だってさ、まんま噂の黒い神官ってナリなのに、もう大丈夫ですよ、だなんて言ってくれちゃうわけよ？　あたしらにさ。頭、撫でて……くれちゃったりしてさぁ！　あぁ、ホント、あんたがいなきゃ、アタシが狙ってたかもね！」

あたしはそれに対して何も言えず、くしゃりと笑った。

困るような、嬉しいような。ほんのちょっぴり泣きたいような。あったかくて切ない気持ち。ああ、涙が出そうだ。

どうして彼にはわかるのだろう？　あたし達が欲しいものが。

暖かい御飯、暖かい服。けれど何よりも欲しいのは、暖かい言葉と、暖かな手。優しく抱きしめてくれる腕と、「もう大丈夫だ」と言ってくれる人、そのもの。

遠い昔に、あたし達が失ったもの全て。

あたしは目を閉じた。胸がいっぱいで、大声で叫び出したいような気分だった。

悲しみはまだこの胸にある。苦しさはまだ癒えていない。けれど前へ進まないといけないあたし達には、新しい力が必要だった。前へと歩む強さ。過去を抱えながら進む強さ。後ろを決して振り向かないわけじゃない。時々は振り返ってきっと涙を零すだろう。けれど歩みを止めない。そんな強さが。

レメクがくれるのは、その強さだ。

「あの人さ、紋章術師なんだってね。すごいね、アタシ、本物初めて見たよ！　ニア達が眠ったのって、それが原因なんだって？　なんか、そういう紋章使ったって。そりゃ、寝るつもりもないのに寝るはずだわ」

苦笑したナナリーに、あたしも苦笑を浮かべる。けれどお互い、どうしても泣き笑いに似た笑みになってしまった。

「いろいろ、聞いたよ。いろいろ他の院の連中とも情報交換もした。

ネロックって人も、すっごいいろいろ話してくれたわ。一晩中」
……ちょいと待て。
ケニード。君はいったい、あの生命力吸引後のヨレヨレ状態で何をやってたのだ？　てゆか、その後会った君が頬ゲッソリだったのは、もしかして完徹演説のせいなんじゃ！？
「……ついでに、なぜにナナリーは『アロック』卿の名前を必ず言い間違えるのだろう……」
「え？　アタシ、言い間違えてる？」
ありゃ。口に出して言っちゃってたか！
ぎょっとなったあたしに、ナナリーは何故か照れ笑いをしながらパタパタと手を振った。
「いやぁ、なんでかねェ？　なんか、あの人の名前エロックって覚えちゃったのよ。でさ、それは違うって言われたんで、それ言わないようにって違う名前言ってるんだけど」
「……一度も当たりが無かったわね……」
しかも最初の方にバッチリエロックって言っちゃってたし。
……まぁ、いいか。
「それにしても、あんたのおじ様って、大した人みたいだね。周りの人が全員道開けて、まるで王様みたい！　……でもさぁ、普通、噂の黒い神官が、正義の味方だなんて誰も思いやしないよねぇ！」
そう言って、ナナリーは笑った。目尻に涙をためながらも、弾けるような明るい笑顔。
あたしはふと気づく。
そういえば、彼女の笑顔を見るのは、今日が初めてだ。
「もう、最初なんかパニックだったらしいよ！　アタシらは昨日の晩、他の院の連中と合流したわけじゃないか。けど、他の連中は、もっと早くにニロックって人の屋敷に集められてたわけよ。でさ、そのせいで最初の瞬間ってのは見てないんだけど。すごかったらしいよぉ。出たーっとかって悲鳴あげて逃げる子もいて！　もう屋敷中大騒動！　全部の事情聞いて落ち着けるのに、何時間もかかった

って！　もーすっごい大変だったんだってさ！」
可哀想だ……おじ様がすごく可哀想だ……
あたしはソッと涙を拭いた。今度から黒服止めてピンクの服にすることを薦めよう。そしたら黒い神官だなんて言われなくてすむし。
よし、と握り拳を作ったあたしを見ながら、ナナリーが顔を輝かせて言う。
「だいたいさ、なにこのオオゴト？　規模が違うって！　普通、王宮の兵士が動く！？　騎士団まで動いたんだよ！？　どんだけのことしちゃってるのよ、あんたのおじ様って！」
アハハハと明るい笑いが弾けた。
その笑顔。その声。
生き生きと輝くもの。
「……あー、もう。あんたと再会したら、ぜーったいイロイロ聞いてやるんだって思ったんだよね、アタシ。あの人とどういう風に話して、こんなすごいことやっちゃったのかって……ってぇえええ！？」
なぜか途中でナナリーの声が驚きのそれに変わった。
「な、ベル！？　なんで、泣いて！？」
「え？」
あたしはポカンとして瞬きをした。
あ。
あぁ、本当だ。あたし、泣いてる。
あたしは自分の頬に手をやる。濡れているのがわかった。
でも……なんで？
あたしは首を傾げた。なんで泣いてるんだろう？　あたし。
泣きそうだと思った瞬間も確かにあった。けど、断言してもいい。
あたしは泣くつもりなんてなかった。
だってもう、沢山泣いたもの。
いっぱいいっぱい泣いたのに……
あたしはやや乱暴に袖口で顔を拭った。けれどなぜか止まらない。

泣きながら首を傾げるあたしに、ナナリーは心底心配そうに言った。
「どしたの？　お腹空いたの？　それともお腹痛いの？」
……何故にお腹限定なのだろう、あたしの涙は。
「違うわよ！　で、でも、なんでかはよくわかんない。なんか、ナナリー見てたら……」
明るく笑う姿を見ていたら、
「なんか、よかったなぁ、って……そう思ったら」
涙が、零れた。
『よかった。』
嗚呼、そうか。理由なんてそれだけだ。
よかった。明るくなった。もう辛くない。悲しくない。苦しくない。よかった。よかった……！！
不意打ちのように襲いかかってきたものに、堪えきれずにあたしは泣き出した。熱いものが体中を巡って、目からボロボロとこぼれ落ちていく。つられたのだろう、ナナリーももらい泣きしはじめた。再会したあの時にも、いっぱいいっぱい流したけれど、あたし達の涙はそれでは足りなかったのだ。
嗚呼……誰に何をどう言えばいいだろう。今、世界の全てに叫びたい。
生きたかった。助かりたかった。けれど助かることもできず、死んでしまった命があるのだと。
嗚呼、けれど世界の全てに叫びたいのだ。
それでも差し伸べられる手があり、助けられる命があるのだと。
あたし達はずっと暗闇の中で生き、ずっとずっとあがき続けてきた。
それがやっと救われた。そう、救われるのだ。きっともう、あんな日は来ない。絶望しかないような日は来ない。あたし達は救われるのだ。これから先の未来で、どんなことがあるかはわからないけれど……それでもそれは、ただ暗闇に沈んだ絶望的な一本道ではなく、沢山の選択肢があり、沢山の場所、沢山の人へと続く道のはず

だ。

あとはただ、生き続けるあたし達の努力次第。

そう……努力次第で行ける場所が増える。そんな所にまで、あたし達は『救い』上げられたのだ。あのどん底から！

あたし達は屋根の上でしっかと抱き合って泣いた。嬉しかった。その喜びは、あたしもナナリーも一緒だった。

全員が救われる。そんな夢は儚く散ったけれど、全員に近い大多数の人は救われた。失われた命への慟哭は止められないけれど、それでも、助かった命への賛美も止められない。だって、普通なら皆助からなかった。いつもと同じままなら、絶対に助からなかった。それが助かったのだ。それはなんて、素晴らしい奇跡なのか。

例え掌からこぼれ落ちてしまった命があったとしても。せいいっぱい掌を広げて、あたし達を救おうとしてくれた人がいる。動いてくれた人達がいる。今なおあたし達を守ろうと動いてくれている人達がいるのだ。それはなんて、幸せなことなのか。

あたし達はぐすぐすと鼻を鳴らし、しゃくりあげながら空を見上げた。あぁ、本当に世界はなんて美しいのだろう。あの日々に見た空と、今の空は何一つ違っていないはずなのに、どうしてこんなにも今日の空は美しいのだろうか。涙が出るほどに。

「……ベル。ありがとうね」

一緒の毛布にくるまった姿で、ナナリーがそう鼻をすすりあげながら言った。

あたしもぐすぐすと鼻をすする。

「なにが？」

「なんていうか……結局のところ、あんたがいたから、アタシ達は助かったってことだからね」

あたしがレメクと出会ったから……ナナリーはそう言いたいのだろう。

けれどあたしは首を横に振った。それは、違う。違うのだ。

「違うわ。あたしなんかのおかげじゃない」

あたしは何もしていない。何もしてやしなかった。
「おじ様がおじ様だったから、あたし達は助かったの」
優しくて強い、あの人が手を差し伸べてくれたから。
「今、こうしていられるのも、全部おじ様のおかげだわ。だって、最初に助けられたのは、あたし自身なんだもの」
あの時が全ての始まり。あの時出会ったのがレメクでなければ、誰もこうしてここにいなかった。
「だから、『ありがとう』は、おじ様に言うべき言葉なのよ。あたし達、全員」
あたしの言葉に、ナナリーはパチパチと瞬きをし、それからなぜかニンマリとした笑みを浮かべた。
「そうだね」
ん？　その笑顔は何かとっても気になるような？
首を傾げたあたしに、ナナリーはニヤニヤと笑う。
「うん。まぁ、顔もいいし、格好いいわよね、あんたのおじ様。ちょっと恐いっていうか、無愛想って感じだけど、あんたといる時は妙に可愛いっていうかオモシロイし」
むむ!?　ライバル宣言!?
びくっとなったあたしに、ナナリーは笑う。
「ま。アタシの趣味じゃないけどね。他のどっかのお嬢様とかにお嫁に来られるよりは、あんたとくっついてくれたほうが嬉しいからさ。応援するわよ。未来の孤児院院長夫人！」
「そ、そう!?　……って、ええ？　なにその孤児院院長夫人、って」
唐突なその言葉に、あたしは目を丸くする。ナナリーはけらけら笑った。
「あっは！　そこも知らないんだ。あの人、孤児院をソウカツ？　しちゃったらしいわよ？　いや、何がどうなのかはよく知らないけどさ、なんか大人達が難しそうな顔でそんなこと話してたから」
な、なななんですとーッ!?

ということは、孤児院でレメクは『院長先生』！？　院長先生といえば、言ってしまえば孤児院のパパ。てことは、レメクはパパに！？

「てことは、あたしは孤児院のママに！」

ぽわわわん。ちょっと光景が浮かぶ。「ごはんですよ」そう子供達を呼ぶレメクに、一番に飛びつくあたし。

何故か即座に「あなたは保護者でしょう！？」とペイッとされるところまでリアルに浮かんだ。……嬉しくない。

「……複雑だわ。あたし、一番にレメクに飛びつきたいのに」

「……アタシも今、複雑だわ。とりあえず、あんたの脳内会議には出席できそうにないわね」

どういう意味でしょう？

首を傾げたあたしの耳に、また楽しげな歓声が聞こえてきた。

むむむむむ。男共。なにを楽しそうな声を上げているのだ。

「おじ様、男衆を集めて、なにやってるのかしら」

「……オトコシュウ、って……。いや、いいけど……。なんかねぇ、お風呂に入れてくれてるみたいよ？　女子は昨日で、元気な連中から順に、世話してくれてる女の人達に入れてもらったからさ。今日は男の番……」

あたしは皆まで聞かず飛び出していた。

後ろから悲鳴のような声で名前を呼ばれたが、そんなことはもう脳みそから全部閉め出されている。

うまい具合に、屋根の上への出入り口はナナリーが開けっ放しにしてくれていた。そこへ飛び込み、全力でお風呂場へ！

いささかの躊躇もなく脱衣所に飛び込み、素早くサーチ！　誰もいない！　ちょうど良い！！

あたしは大きな布を一枚ひっつかみ、素早く全ての衣類を脱ぎっぱなした。光の速さで大布を体に巻き付ける！

ＧＯ！！

「おじ様ッ！　あたしも洗ってーッ！！」

「服を着て出て行きなさいッ！！」
光速でずぶ濡れの上着が飛んできました。
何故！？
びしょぬれの上着にカウンターアタックをくらったあたしは、レメクの上着に張り飛ばされるようにして転がった。レメクの上着は大きく、転がったあたしはそれに覆われてしまって身動きもままならない。まごまごと暴れていたら、即座に駆け寄って来たレメクに上着ごと拉致されてしまった。
「むにやあ！？」
脇腹捕まれた！
あまりのくすぐったさに飛ぶあたし。すかさず拿捕され、濡れ上着にくるまれてしまった。ぬぁああ身動きがとれない！
あたしは往生際悪くモガモガ動く。なんとか顔を出すことに成功した！
レメクの裸体（バディ）はどこに！？
もちろんあたしを抱えているのがそうだ。あたしは素早く目をカッぴらく。全裸のガリガリ仲間はどうでもいい。むしろアウトオブ眼中。しかし、シッカと捕らえたターゲットは、
「だから、どうして服着たままでお風呂入ってるのーッ！？」
「あなたがそうやって飛び込んできそうだったからに決まってるでしょうが！」
決まっているのか。というか、予想の範囲内！？
あたしはその瞬間、天啓のように閃いた。
あたしを屋上に放り出したのは、このためか！
あああああ照れ隠しだと思ったのに！　なんということ！！
「ひどいおじ様！　あたしだって背中流しっこしたいのにッ！！」
「未婚の乙女の肌云々はどうしましたか！　いいからさっさと出なさいッ！」
ペイッと廊下に出された。あたしの服毎。
どんな神業速度！？

あたしが振り返った時には、ぴしゃんっ！　と音がして扉が閉められている。ぁあああ！

「おじさまーっ」

「いいから服を着て、部屋に行ってなさい！」

とりあえず、屋上に戻れとは言われなかった。そこはもう諦めたらしい。

しかし、

「開けてーっ」

「開けるわけないでしょう！？」

ガーンッ！！

あたしはショックで半歩下がる

どういうツンデレ！？

扉に張り付き直して引っ掻いた。

アイはどこへ！！

「大好きって言ってくれたのにっ！」

カリカリカリカリ

「言ってません！　同意しただけです！　そもそも、今のこれとは関係在りません！」

「うそンッ！？」

言い逃れ！？

「おじ様ひどいッ！　あたしの心を弄んだのね！？」

「人聞きの悪い言い方をしないでください！　だいたい、意味分かって言ってるんですかあなたは！」

「自分の心を慰めるものとして興じる。または自分の所有物であるかのように勝手に扱う」

「……合ってます」

「ほらッ！」

「なにが『ほら』ですか！！　そういうセリフは十年後に言いなさい！」

（……十年後、と）

「なんで計画立ててるんです!?」
脳内メモをした途端につっこまれた。
「いいから早く、風邪を引く前に服を着て部屋に戻りなさい！　貴女はメリディス族ですよ!?　そんな格好でうろうろして、万が一があったらどうするつもりです！」
ん!?　そんな心配を!?
「大丈夫よ、おじ様!」
あたしはグッと握り拳で叫んだ。
「すでに旦那が確定してる場合は、二番目以下は全却下だから!
おじ様が存命のうちは、あたしはおじ様のものよっ!!　もちろんおじ様も二号さん作っちゃダメよ!?」
「なんの話です!?」
「作る気なの!?」
「そっちじゃありませんッ!!」
扉の向こうとこちらで叫び合うあたし達。
あたしはカリカリと扉を引っ掻いた。
「開けておじさまーっ」
かりかりかり
「おじさまーっ」
かりかりかり
「おじさまー」
かりかりかり
しつこく扉を引っ掻くあたし。
中は何故かシンと静まりかえっている。男連中の声も聞こえない。
「おじさまー」
かりかりかり
ぐす、と鼻も出てきたのですすりあげる。かりかりかり。ぐすぐす。
「おじしゃまー」
かりかりかり……あ、出てきた。

ぎぃ～……と、いかにも不本意そうに扉が開き、涙目で扉にすがりついていたあたしをそこから出てきたレメクが眺めた。

後ろ手に扉がパタンと閉まる。

おじ様ーッ！

あたしは全力で全身ずぶ濡れのレメクに飛びついた。げふ、とか言われた。

それには構わずすぐさま匂いを嗅ぎ、顔をすりつける。くんくんくんくん以下略。

お湯に濡れたレメクはなんだかちょっと色っぽい。髪とか服とかへばりついててナイスな視界。透けるお肌。グッジョブ。

……なんか、鳥肌たてる気がするけど。あ。寒いのね！？　お風呂場から出ちゃったから！

大丈夫。あたしが暖めてあげる！　身長差はしゃがんでカバーしてね！！

ぐっと握り拳をつくったあたしに、レメクは何故かげっそり顔でぼやいた。

「……あなたは、頼みますから、もうちょっとこう……もうちょっとだけでいいですから、何とかならないんですか？」

もう何かイロイロなものを込めた切実なお願いをされてしまった。でも、言い方が抽象的すぎて、具体的に何がなんだかよくわからない。

目をぱちくりさせたあたしに、レメクはただ嘆息をつく。

そろそろと背後の風呂場の扉が開いて、中からめいめい孤児仲間が顔を出した。こっそりとあたし達を覗き見している。男共はレメクに磨いてもらったのか、お肌がツルツルになっていた。なんて羨ましい！

嫉妬に燃えたあたし視界の端で、追いかけてきたらしいナナリーが呆れ顔で立ち止まるのが見えた。

「……とりあえず、ちゃんと服に着替え直してください」

布一枚とレメクの濡れ上着にくるまっているあたしに、さらに嘆

息をつきながらレメクは言う。
あたしは微妙にもらい濡れしちゃってる自分の姿を見下ろし、さも不思議そうに尋ねた。
「背中流しっこは？」
「却下です！」
全力の拒絶。そんな！　アイを確かめあったのにッ！！
「あなたは、本当に頼みますから、もう少し自分が子供だということとよくよく考えて……」
「そうよ、子供なら一緒にお風呂入ったっていいじゃない！　ね！？」
「なに目を輝かせて言ってるんです！？　子供らしからぬことを考える人はダメです！　だいたい、あなたも女性なのですから、そういうところはしっかりと……！」
子供だと言ったり女性だと言ったり、忙しい人だ。
あたしはガシッとその体にしがみついて問うた。
「おじ様はあたしを子供として見てるの、女性として見てるの、どっち！？」
さぁ言い逃れはするな！
あたしは全力で念じながらじっと見つめた。ゴォッと燃え立つ情熱を背負った気分。誰もの視線がレメクに向かった。衆人環視の中、さぁ答えをカモンッ！
レメクはちょっと怒ったような顔で答えた。
後にアウグスタ達の物議を醸し出すことになる一言を。
「どっちもです！」
「それはどう判断していいものか、ビッミョウだな」
即座にツッコミが飛んできた。
あたし達は全員がそちらを振り向く。
どこから沸いて出たのかも謎なその人は、びっくりするぐらい豪奢な衣装でふんぞりかえった。
「……楽しげな光景だなァ、レメク」

オオカミの微笑。目が爛々。女王様は今日も絶好調。

突然現れた謎の巨乳美女に、あたしとレメク以外の面々がぎょっと目を見開いていた。彼等からすれば、突然人が湧いて出たように見えたのだろう。

……というか、今頃王宮（それとも神殿？）は大騒ぎなんじゃなかろうか？　門の紋章のせいでいつでもどこにでも飛んで行けちゃう女王様は、神出鬼没すぎて捕まえるのが難しい。この人に門の紋章を宿させるのは間違いだと思うのだ。未だに玄関からテクテク入ってくる彼女を見たことがないし。

だが、今日のアウグスタはいつもとはひと味違う。あたしの知るどの彼女よりも王様らしかった。

その身が纏うのは美しい白地の豪華なドレス。たっぷりとゆとりを持たせた絹は、流れるように滑らかにその肢体を覆っている。細かな金糸銀糸の刺繍も美しく、細かな模様をまるで光の欠片のように煌めかせていた。ふんだんに使われているのは、白っぽく光る綺麗な宝石。いったいどれほどの金貨を積み上げれば、この衣装が出来上がるのか。しかもその上から羽織られた深紅のマントは、貂の毛皮をあしらった豪華な逸品。それ自体が黄金の冠のような輝く髪には、優美なティアラまで乗せられている。

あたしはその姿を惚れ惚れと見上げた。正直、見惚れきっていた。それほど、アウグスタは美しかった。素晴らしく美しい勇姿だった。

……ん？　なぜ『勇姿』？

あたしは自分で首を傾げる。優美な、とか、豪華な、とかそう表現してもいいはずなのに、どう見ても『美しい勇姿』にしか見えない。

何故だろう。戦う女は美しい。そんな感じ。

「未来の妻を半裸で抱きかかえるとは、なかなかやるじゃないか。エェ？」

そんな戦う女王様は、一歩踏み出して戦闘開始を宣言した。

「……陛下」

嘆息混じりのレメクの声。
やる気満々のアウグスタに反して、レメクはただただため息をついて肩を落としていた。
戦う前から終わってる。なぜだろう？
なんか弱みでも握られた？
きょとんとしたあたしは、レメクの声で周囲がぎょっと身を引く様をハッキリと見てしまった。
まぁ、当然だろう。王様だなんて、物語にしか出てこないような「遙か雲の上」の住人だし。
おまけに今日のアウグスタは飛び抜けて美しい。言ってしまえば絢爛豪華な白金孔雀。あのモザイク水着や胸元半見えのキワドレスなら尊敬も半減だが、今日だけは違う。
典雅で優雅な、素晴らしい女王だ。
……いつもこんな格好なら、そんけーできたのに……
「……何しに来たんです？　あなたは。いろいろ忙しいはずではありませんでしたか？　まさか閣下に追い出されましたか？　それとも、猊下に追い出されましたか？」
丁寧ながらも失礼なことを言うレメク。愕然とした周囲に反して、アウグスタはニヤリ笑いでレメクの問題発言をスルーした。
まぁ、この二人の間では、こんなやりとりは普通だ。
「なに。おまえのおかげで裁判が超絶早く終わったからな。さっさと問題を片づけることにしたわけだ。……ベル」
ん？　あたし？
名を呼ばれて、あたしはきょとんとアウグスタを見上げた。
「喜べ」
なにを？
「罰ゲームだ」
なにを喜べと!?
疑問、期待、驚愕と変わったあたしの表情に、アウグスタは心底嬉しそうな顔をする。

どんなドエスですか！？
「あぁ、誤解するな。おまえには楽しい内容のはずだ。……なぁ、レメク」
「……嫌な予感がいたしますね」
「そうかそうか。ふっふっふ。聡明なおまえにこれをやろう」
「いりません」
何をとも問わずに速攻でレメクが拒否をした。アウグスタは気にしない。腰をひねるようにして両肩をクイックイッと揺らすと、巨乳の間から二つの手紙がニョキッと出てきた。
異次元ポケット！？
「受け取るがいい。招待状だ」
「ですから、いりません」
なま暖かい手紙二つをジト目で見て、レメクがあたしを抱えたまま一歩後ろに下がる。
アウグスタは獲物を追いつめる肉食獣の笑みで笑った。
「いぃやぁ？　拒否はできんなぁ、レメク。なにせお前、ベルを助けるために我々に大変な恩をうけたじゃないか。違うか？　ん～？」
くっ！　卑怯なッ！
そんな感じの気配がレメクから漂ってきた。ああ、レメクがアウグスタに一歩引いてたのは、そのせいだったのか。
あたしは申し訳なさを込めてレメクを見た。あたしが馬鹿だったばっかりに、レメクにまで罰ゲームが……
（……ん？）
レメクとあたしのセットなの？
きょとんとしてアウグスタを見ると、女王陛下はニンマリと笑った。
「おまえ達は私に借りがある。そうだな？　馬鹿夫婦。故におまえ達にこれを拒む権利は無い」
スッパリと言って、黄金の女王様はあたしとレメクの間に二つの手紙をねじ込んだ。

あたしは半濡れの指でそれをつまむ。
それは綺麗な金箔を押した、美しい招待状だった。
「王命だ」
歌うように楽しむようにアウグスタは言う。唇には悪戯な笑みが張りつき、パチンと瞑った片目にも楽しげな思いが濃く浮き出ている。
なのに、なぜか、もう片方の目だけが、恐ろしいほどの真剣さを湛えてこちらを見ていた。
「アウグスタ……？」
目を瞠ったあたしに、アウグスタは告げる。
厳かな声で。
「汝等二名に、王宮の夜会への出席を命ずる」
――どこか遠くで、未だ知らぬ世界の扉が開かれる音がした。

エピローグ（後書き）

こんな隅っちょまで読んでくださる貴方が大好きです。
断罪の章終幕、というより、次章への開幕編、終了です。
物語自体はこれより王宮編へと突入します。絢爛豪華な世界と、陰謀。そしてレメクやアウグスタの過去。少しでも楽しんでいただければ幸いです＾＾

番外編　【　夜明け前の戦い　】（前書き）

番外編その1。日常編です。
もう一人のレメクが来訪する前のお話。
本編では書くことのない、レメクだけが知っている「ベル」のお話です。
※※　注意！　※※
本編とはほぼ関わりのない内容です。

番外編　【　夜明け前の戦い　】

夜にふと目が覚めた。

静寂とともに忍び寄る夜気は、冷えきった夜明け前のもの。

体の芯まで凍らせようとする冷たさに眉を顰(ひそ)め、レメクはゆっくりと瞬きをした。

壁際の時計を見れば、針はちょうど午前四時を指したところ。

朝と言うにはまだ早すぎ、けれど夜と言うにはやや遅い時刻。周囲には深い闇が降り、窓から差し込む月明かりだけがそれを隅(すみ)へと押しやっている。

中途半端な時刻に起きたものだ。レメクは嘆息をつき、己に宿る紋章に意識を集中した。

闇の紋章は、闇そのものを支配する。

どれほど完全に気配を断ち身を潜めようとも、そこが闇の中ならば、レメクの側からは丸見えになるのだ。人のいる場所に「完全に闇のない場所」は存在せず、故にレメクを相手に姿を隠すことは不可能になる。

だが、まだ肌寒い外の闇には、異常らしい異常を見つけることができなかった。

レメクは二度、それを確認してから布団に潜り直す。奇妙な時刻に起きるのは、危険を察知してのことかと思ったのだ。……だが、杞憂だったようだ。

（……なにもないようですね）

平穏な生活というものが長続きしないことを知っている。だからこそ、過敏になっているのかもしれない。

……今のこの生活を、壊したくないから。

レメクは目を瞑り、そっと耳を澄ます。

意識を研ぎ澄ませ、どんな些細な異常も見逃すまいと『認識範囲』を屋敷の全敷地に集中させた。

敷地内にある様々な音と、命の気配。それらが余さず全てレメクの意識下におかれる。……異常は無い。自分の領域（テリトリー）に何者かが侵入したという形跡も、これから成されようとするような気配も無かった。

三度の『探索』を終えて、レメクは深く息をつく。

ふと、その時になって初めて、自分の横に温もりが無いことに気づいた。

「!?」

暖かいものを抱えて眠ったはずなのに、自分の隣はぺしゃりとへしゃげている。

「べ……！」

自分でも驚くほど焦って、レメクは上半身を起こしかけた。声が零れかけたのは無意識だ。

だが、そこで彼は気づいた。

どことは言えないが、とある場所にある奇怪な温もりに。

……ぴすぴす。

……ぴすぴす。

布団の中から、小さな音も聞こえてくる。

レメクはじわっと背筋に汗が浮かぶのを感じた。そっと目線を下の方に動かすと、口にするには少々難のある場所の近くに、こんもりとした盛り上がった小山が見える。

（……布団の中に……潜ってるんですか）

そうと結論をはじき出したとたん、ドッと疲れがきた。脱力、というものだろう。

だが、次の瞬間、先ほどとは違う意味で焦った。

（……どこにいるんです?!）

場所はわかっている。

いや、わかっているから問題だ。

というか、なぜそんな場所で丸くなっているのだろうあの少女は！

レメクは慌てて布団の中に頭をつっこむ。途端、小さな両足がレ

メクの顔面を出迎えてくれた。
思わずぎょっとなって身を退く。
小さく丸まるのが基本スタイルの彼女だから、丸くなっているのは予想通りだ。
だが、何故、彼女は上下が逆さまになっているのだろうか？
一緒に寝入った時は普通に同じ姿勢だったから、寝ている間に百八十度分半回転したのだろう。行儀良くそろった小さな両足の向こうでは、下着（ドロワーズ）が丸見えになっている。
パンツ丸見えの理由は、彼女の姿勢よりも寝間着にある。
ベルが来ている寝間着は、ワンピース型なのだ。
この寝間着は、きちんと着ている分にはとても可愛らしいが、寝相のオカシイ彼女には不適切だったらしい。どう見ても寝間着らしいものが体に纏われておらず、胸のあたりでぐしゃぐしゃに固まっている。今現在、ただの「胸巻き」だ。
（……ズボンを買いましょう）
レメクは心に決めた。
パンツ丸見えのレディなど、可愛いを取り越して可哀想だ。
……ぴすぴす。
……ぴすぴす。
この上ない脱力を覚えたレメクに、追い打ちをかけるように力が抜ける寝息が聞こえてくる。
なにか小動物が鼻を鳴らしているような音だ。可愛らしい。
（……いいえ。いけません。ここでほだされては、敵の思うツボです）
レメクはちょっと緩みかけた自分の心を戒めた。
敵は可愛らしい小動物のようでありながら、その実立派な小悪魔だ。ちょっと可愛いかもしれないなどと思ってしまったら、ギランと光る眼差しで狩られてしまう。
「……ベル。ちゃんと丸まらずに伸びなさい」
とりあえず、そこで丸まるパンツにそう告げる。

軽くめくった掛け布団のせいで、寒さが忍び込んだのだろう。布団の中の暖気が逃げ、寒さを感じたのだろうか、足とパンツがもぞもぞ動いた。

がんばって暖かいさらなる奥へ……ついでに真横の温もり（自分）に顔をひっつけてズリズリと動く。

その動きに、レメクは大慌てで両手を布団の中に突っ込んだ。

（なんて危ないマネをするんです？！）

サッと伸ばした両手が、ベルの両脇をはさんだ。そのまま引っ張り出そうと力を込める。

「にゃあー」

……気のせいでなければ、猫のような鳴き、いや、声をあげられた。

ぎょっとした途端、ぐにゃぐにゃと体が動いて、手から逃れて奥へと動く。

ダメです！　危険なんです！！　なぜ私の体にすり寄りながら奥に行くんです！？

際どいところで再度ベルを捕獲し、レメクは今度は逃れられないように一気に小さな体を引っ張り出した。

今度掴んだ場所は腰だったため、巨大猫もどきも逃れられなかったらしい。ただ、無理やり引き出したのでパンツが完全に丸見えになってしまった。

（……見てません）

心にそっと蓋をして、レメクはそそくさと服を直す。

すると直している手に足がからみついてきた。なんという寝相だろう。立派なレディになるという目標はどうなったのか。

「ベル。そういうはしたない真似はやめなさい」

注意するが、相手はまだ夢の中だ。ウンでもなければスンでもなく、ぴすぴすと寝息をたてている。レメクは嘆息をついて肩を落とした。ピスピスピス。……まぁいいか。

とりあえずタコのようにからみついている足を外す。

（……なぜ抵抗するのですかあなたは。寝てるというのに！）

意外と手間取りながら外すと、眠っているベルの眉間に悲しげな皺ができた。

なぜか自分が大変な悪者になった気分になる。

「……抱っこ一回でいかがでしょう？」

とりあえず夢の中の相手に謝罪がてら提案。笑顔が返ってきた。

……起きてる？

レメクはじっとベルを観察する。だが、どうやら眠っているのは確からしい。闇の紋章に意識を集中。相手の肉体の意識レベルを確認しても、ハッキリと夢の中だ。

（……偶然ですかね？）

首を傾げながら布団にもぐりなおす。横に設置した「縦に伸ばしたベル」を引き寄せると、向こうからぴたっと張り付いてきた。抱っこ一回。

ぴすぴすぴす。ぴすぴすぴす。

心なしか、寝息が早くなった気がする。というか、どうしてこう鼻息らしきものを感じるのだろうか。

相手の顔面が妙に自分に密着しているのも気になる。微妙にくすぐったい。

ぴすぴすぴぷ。

……最後の半濁音は何だ。

起きていても寝ていても気になって仕方がない相手に、レメクは無意識に頭を撫でてやりながら嘆息をついた。

気の休まる時間も無いような、こうしているだけでちょっと気分がいいような、なんともいえない奇妙な感覚。相変わらずぴすぴす鼻をならしている相手に、お返しとばかりに後頭部に顎をあててやった。

ごすっ！

即座に顎に向かって頭突きが飛んできた。何故！？

（……あ、頭を擦りつけられたんですか！？）

あまりの勢いに頭突きになってしまったが、どうやらそうらしい。
目標がズレたのか、ぐりぐりと喉に突進をくらいながら、レメクはちょっと遠い目になった。寝ているのに、やってることが起きている時と一緒。どういうことだろう？
「……夜ぐらい大人しくなさい」
頭を撫で、背中を撫でていると、しばらくして相手の動きが緩慢になってきた。
深い眠りに落ち始めたのだろう。レメクは少しだけほっとして、やんわりとその小さな体を抱きしめる。しばらくしぶとく動いていた小さな頭が、居心地が良い場所でも探し当てたのか、レメクの鎖骨のあたりで動きを止めた。そろっと見ると、至福の表情で眠っている。
その例えようのない幸せそうな顔は可愛らしい。
だが、レメクは同時にどうしようもなく気になる点を見つけて眉をひそめた。
小さな唇から、小さな舌の先が、ほんのわずかだけ覗いてる。
（……なぜ、舌が）
しかもそんな先っちょだけ。しかも微動だにせず出ているのか。
レメクは遠い眼差しになった。
これによく似た姿をどこか別の所でも見たことがある。……王宮の庭。自宅の庭。ちょろちょろとまとわりつく子猫達のお昼寝の時に。
（……猫……のようだと言えば、また怒られるのでしょうが……）
猫じゃないと必死に主張されるが、ならば何故、彼女の仕草は猫のソレなのでしょうか。
レメクは遠い眼差しのままで思う。ついつい「あなた」のことを思い出してしまうのは、私が悪いのでしょうか？
レメクはそっと、心の中で小さな小さな子猫に問いかけた。今はもうこの世のどこにもいない、たった一日だけ傍にいたその小さな命は、今は庭の片隅でひっそりと眠っている。小さな命の儚さを思

い知ったあの日から、今日でいったい何年目だろうか。名前すらつけてやれなかったあの子猫を思い出すたび、胸の中に冷たい滴が零れ落ちる。

そんな風に昔を思い出しかけたとき、ちゃっちゃっ、と音がした。

レメクは視線を下げる。……今度は何だ。

ジッと目の前の舌チョロ娘を見ると、何か食べている夢でも見ているのか、口がもごもご動いていた。時々「ちゃっちゃっ」という音がするのは、夢で咀嚼しているせいか。

でも舌はチロッとさきっちょが出たままだ。

レメクはそれを眺めながら、そっと指をその口先にもっていった。ベルは気づかない。当然だ。寝ているのだから。

そろそろと指を近づける。他意はない。他意はないが、どうしてかこう、チロッと出ている舌が気になるのだ。

レメクは意を決して、うっすらとだけ出ているベルの舌をちょんと突いた。

ぱくっと食べられた。

食べられた!?

「?!」

レメクは驚愕した。がんばって咀嚼する気なのか、指に小さな歯の感触が。

「待ちなさい！　私は食料ではありませんッ!!」

レメクは慌てて指を取り戻そうとした。しかし、食らいついてきた獲物（？）がそれを許さない。

痛い!?

驚くほどの顎の力。取られてたまるもんかと言わんばかりの必死の形相。キリキリと歯をたててられて、レメクはおろおろと周囲を見渡した。

喰べられる!?

どうやら自分は罠にかかってしまったらしい。

しかし、そうは思うが、あれは人としてやってしまうごく自然な

動作、もとい欲求だと思うのだ。あんな風に舌がチロッと出ていれば、誰だってついつい触ってしまうというもので……！

「……！」

レメクは葛藤した。

できれば即座に指を取り戻したい。

しかし、ここで力一杯暴れて彼女から指を取り戻そうとするのは、なにか大人としてというか、男としてどうか、と思うのだ。

ここは我慢だ。何かの修行と思えば、なに、たかが指一本。くれてやる気持ちでいればいい！

レメクは深呼吸して気持ちを落ち着けた。

（頑張れ私！）

指を食む小さな歯。

必死に食む小さな歯。

その大きさは可愛らしいが、これがなかなかけっこう痛い。

がじがじ、もごもご、ちゅくちゅく、きゅむきゅむ。

一生懸命味わわれている音がする。

思わずいたたまれない気分で視線を遠くへ投げかけた。助けてくれ。心からそう思う。何の修行だろう、これは。

しばらくして咀嚼行為に満足したのか、指を噛む相手の動きがゆるやかになってきた。

あぁ……このまま、もう一度眠ってください……レメクは祈った。

ちゅくちゅく、がじがじ、ちゅくちゅくちゅー……。

五分待ってもまだ味わわれている。……諦めた。

（……もしかして、毎晩、こんな調子ですかね……？）

ここではない場所の誰かにそっと問いかける。その相手は神様なのかもしれない。もしかすると悪魔なのかもしれないが、とりあえず、現実では問えない問いだろう。

帰ってくる答えが恐いから。

レメクはそっと心に誓った。明日は絶対にベルの寝姿を気にしない、と。したが最後、気になって眠れなくなりそうだから。

嘆息をついて時計を見ると、いつの間にか三十分も経過していた。
なんて濃い三十分なのか。
再度嘆息をついてベルを見下ろす。
まるで母親の乳に吸い付く子猫のように、両手をまごまご動かしながら指を噛んでいたベルの動きが、次第にゆっくりしたものになっていった。
このままブルルブルルと喉を鳴らせばそれこそ猫そのものなのだが、とりあえずそれだけは無いようだ。かわりにまたピスピスと寝息が聞こえてきた。
……ぴすぴす。
……ぴすぴす。
どうやら落ち着いてきたらしい。
だが、ここで指を取り戻そうと動かすのは危険だろう。獲物の奪取を恐れて、また盛大に噛まれそうな気がする。ここは我慢で放置すべきだ。
きっと起きたら自分の人差し指は皺だらけに違いない。
そんな予想をつけながら、レメクはベルの寝顔を見て苦笑した。
ベルはとても幸せそうな顔をしている。
（……まぁ、こういうのも……）
今日ぐらいは良いか、と。ついそう思ってしまった。
少なくとも、今、彼女は夢の中で幸せだろう。……どんな夢を見ているのかは謎だが。
けれど、辛い昔や孤児仲間を思い出して泣かれるよりはずっといい。そう思って、レメクはそっと息を吐いた。
己の口元に浮かんだ微笑みに、レメク自身は気づいていない。
子供を覗き込むその瞳の色にも、レメクだけは気づけない。
そこに宿る確かなものに。身の内より生まれて込められる、その色に。
わからないまま、気づけないまま、レメクは微笑って目を閉じた。
少しだけ疲れていて、少しだけ暖かくて、どこか満ち足りたよう

な、不思議な満足感。
（……悪くない）
それがどんな意味のものなのか、考える前にレメクの意識は闇へ落ちた。

数日後。
寝起きのベルは、何故かベットの上に正座させられ、懇々と説教を聞かされることになった。
詳しい理由もわからぬまま首を傾げる彼女に、レメクはただひたすらこう言ったという。
寝相直せ、と。

番外編【虹の彼方】（前書き）

この小説は、番外編です。主人公はベルではありませんので、お気をつけください。
時期は孤児院事件の後、王宮編の前にあたります。

番外編【虹の彼方】

王都北区、アロック邸。
王都の豪邸群の中でも、完成された造形美を誇る屋敷の一つである。
王国の象徴とも言える王城トゥルンヴァルトを模した屋敷は、確かに外観は素晴らしく美しい。
だが、その中は『珍妙』の一言だった。
大広間や応接室、客室といった場所は普通。
それが屋敷の奥に入った途端、奇妙な迷路へと変化する。
主人の部屋に行くためには、細い通路と小部屋を三つ、螺旋階段を二つ通過しなければならず、半地下の使用人部屋は扉が子供の背丈ほど。
唯一、最奥にあるリット老の部屋だけは普通の扉なのだが、何故か階段を登らないと行けない場所に奉られていた。
ナナリーなど、部屋に向かう老執事の姿を見るたびに、天国の階段を上っていくように見えて仕方が無い。
そんな風に住んでいる人間でも首を傾げる屋敷だったが、小さな子供たちにとっては格好の遊び場だった。今も幼い子供達が、使用人通路の冒険を楽しんでいる。
その様子を見やって、ナナリーは腰に手をあてた。
「こら！　あんた達、今はお休みの時間だろ！？　なにベッドから出てきてんだい？」
怒られた子供達は、飛び上がると慌ててナナリーを振り返った。
アロック邸に残留している孤児は、ナナリーを含め十名に満たない。
その中で、ナナリーは最年長だった。
そのためもあってか、リット老から子供達の監督を任されている。

突然上流階級の屋敷に放り込まれた子供達のために、身近な統率者が必要、と抜擢されたのだ。

孤児院仲間達を監督する分、個人の自由時間はほとんどなくなるが、それなりにナナリーは楽しくやっていた。

もともと孤児院に居た頃は年少組のまとめ役だったのだ。場所が変わっただけで、やることは変わらない。

「ほら、あんた達、『ご主人様』からも言われてるだろ？　ちゃんと体休めて、元気にならないといけないんだって。こっちは人手不足なんだ。早く元気になりな」

「でもさ、ナナリー、おいら達が働くったって、ここでいったい何して働くのさ？」

「どこもかしこも金ぴかじゃねーか」

「おれ、靴磨きしかできねぇよ？」

口々に言う弟分達に、ナナリーは上から覗き込むようにして顔を近づける。

異様に小柄な一つ下の友人と違い、ナナリーは年相応の体つきをしていた。

今年の夏で十歳。

その身長は、年下の少年たちよりも頭一つ分高い。

「いいかい？　よ～っく聞きなよ？　あたし達がここに残ったのは、ここの『ご主人様』があたし達に、これから先『良いところ』に働きに出られるよう、教育ってやつをしてくれるからだ。南の院にいたカッフェなんか、料理人になるために厨房で働いてるし、あたしも文字の読み書きを習ってるんだよ」

「文字を！？」

「料理！？」

「すげぇ！」

わっと顔を輝かせた弟分に、ナナリーはニッと口を笑ませた。

「ただーし！　全部無料でしてもらうってのは、虫が良すぎる話だ。違うかい？　だから、あたし達は働くことで恩を返すんだ。ここは

どこもかしこもピカピカだけどさ、誰かが毎日掃除しなきゃ、ずっとピカピカのままじゃないだろ？　庭だってそうさ。花だけ咲いて草が生えないってことは無いんだから、いくらだって人手はいるんだ。手先が器用なヤツだったら、宝飾技師にしてくれるかもしれないんだよ？」

「それって、儲かるのか！？」

勢い込んで訊ねられ、ナナリーは首を傾げた。

「さぁ？　でも、『ご主人様』は、その腕で王都でも有名になったみだいだから、腕がよければ儲かるんじゃないかい？　元手もかかるだろうけどさ」

おお、と熱く唸る弟分に、ナナリーは半分苦笑して肩をすくめた。

「でもさ、あんたら。なにか習いたいにしたって、まず元気にならなきゃはじまらないんだよ？　なんたって、一時は命も危ないって状態だったんだから。……　眠っちまった連中の分も、しっかり休んで、元気になりな」

尊敬する姉御に言われて、年少三人は顔を見合わせた。

今からおよそ半月ほど前、栄養失調と過労、そして異常な寒さと雨に倒れた彼らは、手厚い看病の甲斐もあって健やかに回復していた。

やせ細り、栄養失調でぼろぼろだった肌は少しずつ綺麗になり、目が見えにくくなっていた子供も、今は普通並に回復している。

だが、その中で、回復することなく息を引き取った仲間達もいた。

少しずつ回復していたのに、ある朝に永遠の眠りについた仲間も。

「……なぁ、ナナリー」

「なんだい？」

三人の中ではリーダー格の少年に、ナナリーは首を傾げる。

少年は前歯の欠けた顔でくしゃりと笑って言った。

「元気になったら、よ……あいつらの墓に、連れてってくれる？」

ナナリーは同じ顔で笑って頷いた。

「あぁ、いいよ。連れてったげる。立派なの建ててもらったからね。

……皆でさ、花摘んで行こうね」
「……うん」
「ほら、部屋に戻んな。また遊んでたりしたら、ただじゃあおかないよ？」
パンパンとそれぞれの背中を叩いて送り出すと、笑い含みの悲鳴をあげて子供たちが走り出す。
その元気な足取りを見守って、ナナリーは笑った。
少しだけ、泣いてるような笑顔だった。

※　※　※

春、三月。
気温は先月よりも暖かくなり、雨は少し回数を減らす。
これから先は、だんだん気温が高くなり、それに比例して雨が降らなくなる時期だった。
そのため、冬と春は大切な恵みの季節だ。
たとえその雨で、奪われた命があろうとも――
ナナリーは迷路のような階段状の通路を抜け、大きな段差を登って小部屋のような場所に入った。
屋敷には至る所に小さな尖塔がある。
だが大人が一人入るのとイッパイイッパイという大きさで、とてもじゃないが部屋として機能しない場所だった。
椅子を置いて景色を眺めるのがせいぜいで、ナナリーのお気に入りであるここも、そんな尖塔の一つだ。
屋敷の最南西にあるその尖塔は、他の尖塔より一回りほど大きく、円を描く壁は大きなガラス張りになっている。
壁際には腰掛けが並んでおり、それに座って景色を眺めるのが最近の楽しみだった。
「お、晴れてきてる！」
部屋の中は、雨雲から差し込む光でほのかに明るかった。

雨は大切な恵みだが、空が曇るのはいただけない。
ようやく晴れ間が見えてきた空を見て、ナナリーはガラス窓に顔をひっつけた。
「あ～……虹無いなぁ……出ないなぁ……」
孤児であった時にはほとんど見たことが無かった大きなガラスは、顔を近づけると白くけぶる。
息で曇ったそれをぬぐいながら、ナナリーは一生懸命目をこらした。
雨の少ない国だから、『虹』が見えることはほとんど無い。
水夫などは時折異国でそれを見るらしいが、王都から出たことの無いナナリーは、未だにちゃんと虹を見たことが無かった。
せいぜい、昔、教会の屋根の隅っこに、消えかけの一欠けらを見たぐらいだ。
「ん～……あのあたりとか、いかにも虹ができそーな感じなのにねぇ……このガラス、もうちょっと向こうに動けばいいのにさ……」
ガラスに額を押し付けて、ブツブツと。ちょうど見えない場所を覗き込もうとやっきになる。
押しつぶされた顔がおかしな形になったところで、頭の上に影が落ちた。
「なにか見えるのかい？」
「ぎゃあ！」
突然の声と温もりに、ナナリーは勢いよく飛び上がった。
途端、ガツンッという音と同時に目の奥で火花が散る。
「お……ご……ッ」
「い、いたたた……っ」
顎に頭突きをくらった男と、脳天に顎の一撃を受けた少女が呻きながらお互いを見た。どちらも微妙に涙目だ。
「な、な、なんであんた、じゃなく、『ご主人様』がここにいるのさ！」
痛む頭を抑えたまま、ナナリーはすっくと立ち上がった。

右頬がペッタリと赤くなっているのは、力いっぱいガラスに押し付けた跡だ。
「なんでって……ぼくの屋敷だもの。どこにいたっていいと思うんだけど……」
「こんな人気の無い、隠し場所みたいな所にかい!?　じゃなくて、ですか!?」
「だって、お気に入りの場所だもの」
「あんたも!?　じゃなーくーてッ！　ゴシュジンサマもっ!?」
「……あのさ、他に人いないから、ふつーに喋ってくれていいよ?」
「うッ」
半笑いで言われて、ナナリーは思わず口ごもった。
痛そうに顎を押さえていた男は、その様子に苦笑を深める。
ナナリーは頭の回転が速く、年の割にしっかりしているのだが、礼儀作法などは妙に苦手らしかった。主であるケニードへの対応にしても、どうしても孤児院の仲間のようなものになる。
その様子に老執事は困り顔だったが、ケニードは少しだけ喜んでいた。
もともと、父親の後継者に選ばれる前は、王都でのびのびと暮らしていた身だ。次期男爵となってからも、それは変わらない。
けれど、周りの反応はそうではなかった。
少しずつ少しずつ、変わっていく人々に、取り残されるような寂しさを味わっていた。
だから、最初から何も変わらない少女の存在は少し嬉しい。
同じ仲間のように見てくれているところが、嬉しいのだ。
もうずいぶん大きくなったというのに、と、我ながらおかしく思うのだが。
「他の人がいるときだと、ちょっと困るし、君も叱られちゃうけどね。二人だけの時は内緒にしとこう?」
笑って言うと、もごもごと口を動かしてから、可愛らしい顔がプイッとそっぽを向いた。

「……あとで罰とか言ったら、ぶんなぐるからね？」
綺麗な緑色の目がチロッとこちらを睨む。
「言わないよ～」
「絶対、絶対だからね！？　お菓子抜きとか無しだよ！？」
「そんなことしないって」
横目で睨みながら言う少女に、ケニードはくすくす笑う。
ナナリーの隣に座って、上半身を捻るようにして窓の外を眺めた。
「あぁ、晴れてきたんだね」
「う……ん、まぁね」
同じように窓の外を眺めて、ナナリーは頷く。
「でもさ、灰色の空と光とだけで、ちっとも綺麗じゃないよ」
「そうかい？　なんか荘厳な感じしない？　こう、天上から差し込む光って感じで」
「あんたは教会の神官みたいなこと言うんだねぇ。あたしからしたら、あんなのより虹が見たいよ」
「虹？」
きょとんと言われて、ナナリーは慌てて首を横に振った。
「な、なんでもないよっ！　珍しいもんだから、ちょっとどんなものかなって思っただけなんだよねっ」
「虹なら、さっき消えちゃったよ？　光が差してる場所の近くにあったんだけど」
「ぇえええええぇえ！？」
思わず盛大な悲鳴をあげて、ナナリーは愕然と相手を見上げた。
「き……消えた……！？」
「う……うん」
そのあまりの悲しげな顔に、言ったケニードのほうも顔を曇らせる。
「……見たかったんだね？」
ナナリーは俯き、すぐに顔を上げてそっぽを向いた。
「別に、いいんだよ。珍しいから、見たいってだけで。別に期待し

てたわけじゃないんだからさ」
「また出ると思うよ？　沢山雨降ってたし、光指してるし」
「うそっ。どこどこ！？」
慌ててガラスに張り付く少女に、ケニードは思わずのけぞり、ややあって笑い出した。
「な、なんだい……って、もしかして、嘘ついたのかい！？」
「違うよ。いや、だって、見たかったんだなって思ったら……あはは、ナナリーも可愛いところあるじゃないか」
「う、うるさいね！　いいじゃないか、いろんな色があるだよ！？　ちょっと見たいって思うのが普通だろ！？」
「うん。綺麗だよね、虹。あんまり見れないからさ、見た時はすごく得したなっていう気分になるし」
「……どーせあたしは見れなかったよ……」
口を尖らせて窓を見る少女に、ケニードは微笑む。
「いつか、さ」
「ん？」
「一つとってあげるよ。虹」
「……虹を？」
きょとんと相手を振り返って、ナナリーは大きく瞬きをした。
そうして、呆れ含みの苦笑をこぼす。
「そんなこと、できっこないだろ。いいよ、そんな慰めてしてくれなくったってさ。生きてればいつか見れるんだから、それほど気にすることじゃないのさ」
ケニードはただ微笑して首を傾げる。
その笑顔に見ほれそうになって、ナナリーは慌てて視線を外した。
本人は自覚していないようだが、ケニードは非常に見目の良い男だった。
淡い金髪と緑の瞳は、それほど珍しい取り合わせではなく、ナナリーの赤毛に緑の瞳と同じく、十人に一人はいるような取り合わせだ。

整った鼻梁や長い睫、やや切れ長のアミグダリア型の目も、典型的な貴族の顔立ちで、それだけなら十人並みの容貌と言える。

だが、彼の場合、そのバランスが並ではなかった。

一つ一つの部分の端正さもさることながら、全体の整い具合が実に秀逸なのだ。

見目だけなら、王侯や上流階級にだって負けてない。

そんな相手の顔をジッと見つめられるほど、ナナリーは幼くなかった。そういう意味では、友人であるベルとは違っている。

「あ、雨ってさ、食べ物育ててくれるから有り難いんだけど、こう薄暗いのはいただけないよねぇ。なんか気分まで滅入っちゃってさ！」

ややも焦って話を振ると、青年は首を傾げて言った。

「そうなの？　僕はけっこう好きだけど」

意外な意見だ。

お日様のようなこの男には、太陽の方が似合ってそうなのに。

「雨の音とか、なんか落ち着かない？」

「落ち着くどころか！」

ケニードの声に、ナナリーは思わず叫んだ。

身を震わせて、さも恐ろしそうに自分の体を抱きしめる。

「雨が降るたびに屋根や壁がガタガタいってさ！　いつ落っこちたり、穴が空いたりするんじゃないかって、院にいる間中震えてたんだよ！？　風まで吹いた日にゃあ、怖いったらありゃしなかったよ！」

「ご、ごめん……」

少女のいた環境を思い出して、ケニードはおどおどと謝った。

彼女等のいた孤児院は、外の煉瓦すらも半ば崩れた、ほとんど廃墟同然の場所だったのだ。

建物を痛めつけ、辺りを水浸しにする雨に、良い記憶があろうはずもない。

「あんたが謝ることじゃないさ。そうだろ？　王様があたし達のた

めにくれた金を、ネコババしやがった連中が悪いんだから」
「……うん」
「あぁもう！　ほら！　頷くんなら、その情けない顔をなんとかしなよ。あんた、ここでは一番偉いんだからさ。もうちょっとこう、ビシィッ！　としなって。そんなんじゃ、他の連中になめられるよ！？」
「……や、やっぱりそう思う？」
「思うね」
キッパリと頷いて、ナナリーは言った。
「あたしがあんたと同じ階級なら、舌先三寸で言いくるめてペロリだよ。貴族って、そういう連中ばっかりだろ？　……ま、あんたと、ベルの旦那さんは違うと思うけどさ」
「もちろんだよ！」
とある単語に反応して、ケニードは力のこもった眼差しで頷いた。
「クラウドール卿が他人を騙して私服を肥やすなんて、ありえないよ！　それだけは絶対だね！」
「……あのさ、そっちに反応して、自分のことは素通りってどうなんだい？　あんただって、あたし等から見たら、あの旦那と同じぐらい立派でイイ人なんだけど」
「とんでもない！」
ケニードは慌てて首を振る。
振りすぎて目を回しかけるほどだ。
「一緒じゃないよ！　僕なんか、自分のことで手一杯で、あの人みたいに他のことに全然目を向けれてないしさ！　食料不足の解消のために、自治領の開墾を自ら行っちゃうような人だよ？　東の国のイネだかヤネだかいう穀物を栽培してみたり、香辛料の自作を試みてみたり、灌漑工事だってどれだけ行ったかわからないし、肉や野菜の保存法を模索して実行したり、とにかくいろいろすごい人なんだよ！？」
「……いや、あの人がスゴイのは耳が腫れ上がるぐらい聞かされた

から。もう、嫌になるぐらい知ってるけどさ。だからって、あんたがダメダメなわけじゃないだろ？　第一、あんた、ちょっと心酔しすぎだって」

　勢いこんで言うケニードに嘆息をついて、ナナリーは少しだけ諭すような口調で言う。

「確かにスゴイ人だと思うよ？　あたしでもさ。なんていうか、絶対勝てないっていう感じの人じゃないか。……でもさ、かわりに……なんていうのかな……なんか、スゴイっていうのとは別の意味で、あたし達とは違ってるなって思うわけよ。えぇと……どう言えばいいのかな」

「彼は元から色々スゴイよ？」

「やー、たぶん、あんたが言うような意味じゃなくてね。……怒んないで聞いておくれよ？　別に非難してるわけじゃないからさ。……なんて言うか、あんたとあの人の場合、あんたの方はあたし達に近い……って言うか、わかりやすいわけよ。こういうこと考えてて、こうしたいだな、って感じで」

　でもね、と呟いて、ナナリーは眼差しを伏せる。

「あの人は、わかんない。なんていうか、見てる場所も、考えてることも全然違いすぎて、わかんないんだよ。……悪い意味じゃないよ？　きっとあたし達じゃ見えない場所を見て、考えもしなかったことを考えてんだろうなって思うんだよ。けどさ、なんて言うのかな……そうやって考えたりしてる時に、あの人、なんか自分自身のことは全然考えてないような気がするんだ。だから、すごく優しくてイイ人だって思うけど……『近く』ないんだよね。いつだって、どこか遠い場所で、足下があるのか無いのかわからない場所で、自分以外のことばっかり考えてるような気がするんだよね」

　あっけにとられた顔のケニードに視線を戻して、ナナリーは小さく苦笑する。

「あんたはさ、自分のことに手一杯だっていうけど、たぶん、あの人だって自分の事を考え出したら、似たような状態になるんじゃな

いかな？　だからさ、最初から『逆』なんじゃないかなって思うんだよ。自分のことを考えて、それに手一杯なあんたと、自分のことを全く考えないから、他のことにいっぱい手をのばせるあの人と。だってさ、普通、やんないだろ？　あたし達みたいな連中の命救おうって、全財産放り出すようなこと」

言われて、ケニードは半開きになっていた口を閉ざした。

レメク・クラウドール。

独自の権限と力を有する断罪官であり、王宮の高官であり、上級紋章術師であり、辺境とはいえ侯爵領を治める大貴族。遠い東の国の他、内海の南の国や隣国ともさまざまな貿易を行う彼は、一年で何十万、いや、何百万枚もの金貨を稼ぐと言われている。

だが、彼がその金貨を自宅にため込むことはほとんど無かった。

その金のほとんどは領地の未開地の開拓に使われ、こうして何かで入り用になった時は、惜しみなく持ちうる全てを擲(なげう)ってしまう。

また、栄養状態の悪い子供達のために、彼は領地から牛や山羊を大量に王都に連れて着た。恐るべきことに、山羊は夜の間、馬車で運んだらしい。

おかげで遠方でありながら一週間とたたず王都に到着し、子供達にたくさんの乳を与えてくれたが、かかった費用を考えると目眩がする。

王都の屋敷内の家畜では足りないからと、ただそれだけの理由でやってのけたのだから、確かにある意味『異常』と言えるだろう。

「ベルとも話してたんだけどね、あの人、あんまりにも周りのことしか見てなくて、心配だなって。人ってさ、お金いっぱい持ってる時には優しいけど、無くなるとそっぽ向いたりするだろ？　あの人、あんなに沢山のことしてくれてるけど、お金がつきちゃった時に、同じように誰かから助けを受けられるのかな？　って……あたし達が心配するようなことじゃないんだろうけど、誰かが心配しなきゃ、本人はそれすらどうでも良さそうな気がしてさ……」

遠い目で言う少女を、ケニードはしみじみと観察した。

自分より十何歳も年下で、一定以上の教養も受けていないのに、彼女達の視点は自分達よりも遙かに遠く、深く、そして細かい。

幼いながらも女性だからなのか、それとも、どこまでも先を考えなければ生きていけない環境だったせいなのか――それはわからない。

だが、彼女等の語る言葉はいつだって新鮮で、時折こちらの目を思い切り冷ましてくれる。

「ベルといい、君といい……女の人は怖いね」

淡く笑って言うと、ナナリーはキッと目をつり上げて、微笑むケニードを睨みつけた。

「なにが怖いって言うんだい。だいたい……って、なんでもっと笑うんだよ、あんたは！」

クルクルと表情が変わる様に、思わず笑うと叩かれた。

小さな小さなベルの手とは違う、少しだけ大きな少女の手。

ケニードは笑ってその手をとった。

「駄目だよ、ナナリー。女の子なんだからさ、そんな風に手を乱暴に扱っちゃ。君の手は、そんなことのためにあるわけじゃないだろ？」

「じゃ、なんのためにあるっていうんだい？　畑耕すためかい？　皿を洗うためかい？」

「ん～……いや、今は上手い言葉が出てこないなぁ……」

視線を天井に向けながらぼやいて、ケニードは苦笑した。

「けどさ、きっと、もっと暖かくて優しいものだと思うよ。女の人の手っていうのはね。だから、それが見つかるまで、大事にしないといけないよ」

「……だから、それが何かわかんなきゃ、大事にしようにも……」

やや顔を赤らめて呟きかけ、その途中でナナリーは大きく目を瞠った。

「虹！」

「え？」

「後ろ！　うしろっ！」
言われて、ケニードもそちらを見る。
雲間から差し込む光に溶けるように、小さい欠片のような色の断片が見えた。
一、二、三、四……数えれば七つか八つほどある、色の連なり。
「うわぁ！　虹だ、虹だわ！　あっは！　ほんと得しちゃった気分になるわね！」
小さいね、と言おうとした言葉を飲み込んで、ケニードは慌てて頷いた。
彼が屋敷に来るまでに見た虹はもっと大きくハッキリしていたが、そんなことは今言うべきことでは無いだろう。
大事なのは、隣で少女が目をキラキラさせながら虹を見上げていることだ。

――男たるもの、女性の気分を害してはならない。

問題だらけだが、女性に関しては沢山の格言を残している父に従って、ケニードはつつましく沈黙を守った。
それに、隣で笑う少女は、なんだかとても可愛らしい。
いつもこうやって笑っていればいいのに。
そう思うほどに。
「……いつか」
「ん？　なんだい！？」
興奮のためか、輝く笑顔で見上げる少女に少しだけ笑って、ケニードは淡い虹の彼方を見つめながら言った。
「いつか、一個、あげるよ。あれよりも、もっと綺麗で鮮やかな虹」
先に聞いた言葉と同じそれに、ナナリーは目をパチクリさせる。
そうして、惚れ惚れするほど鮮やかな笑顔でこう言った。
「期待しないで待っとくよ」

番外編　【呼び名】

「そういや、どうして嬢ちゃんはレメクを『おじさま』なんて呼んでるんだ？」

その問いが放たれたのは、店に入ってからかれこれ三十分は経過した後だった。

三月。

日差しは暖かく、人々の顔にも穏やかな笑みが浮かび始める季節。路地には可憐なカモミールが顔をほころばせるように花を咲かせ、王都を囲む貯水路の周囲ではアミグダリアが空を覆うほどに咲き乱れる。

百花繚乱の名に相応しく、色とりどりの花があちらこちらに己の存在を誇示する春。

海の匂いのする潮風もこの時ばかりは花の香りを身に纏い、港区にある家々の門戸を優しく叩いていた。

そんな港区の食堂の一つ、ホロムの肉屋でご飯を頬張っていたあたしは、バルバロッサ卿の声にモグモグしながら顔を上げた。

とある事情から知り合いになったおっちゃんが経営するこの店は、今日も沢山の人で賑わっている。その人種も実に様々で、あたし達の隣にテーブルに座っている人達も、この近隣では見ないような風貌の人だった。

強烈に日焼けしたような肌の人は、南の海を渡った向こう側の大陸の人。

血管が浮き出そうなほど真っ白な肌の人は、海路で北からやって来た人。

髪を隠す必要でもあるのか、頭にぐるぐると布を巻きつけた人は、確か西にあるどっかの国の人の特徴だったはずだ。

肌のほとんどを露出させてるようなサービス精神豊かな服の人もいて、色も姿も多彩で実に目に楽しかった。

（……レメクもあんな風に、サービス精神旺盛な服を着てくれないかなぁ……一万回ぐらいでいいから）

上半身裸で足も太股から下を晒している殿方を眺めつつ、あたしはうっとりと妄想、もとい連想した。

レメクがあの姿。レメクがあの姿。大事なことなので二度言いました。

きっとそれはそれは無敵に素敵に違いない。なにせレメクは細身に見えて実に素晴らしい筋肉の持ち主なのだ。バルバロッサ卿みたいな肉厚のムッキムキじゃなくて、筋なのか筋肉なのかどっちだと言いたくなるようなギッチギチに引き締まりまくった筋肉だったけど、俊敏な鹿とか馬とかそういう美味しそうな肉に違いない！　きっとお腹なんて縦横無尽に割れているはずだ！　胸まで割れてたらどうしよう！！　でもそれはそれでレメクなら良い気がするんだけどどうしてあたしの椅子になってくれているレメクが今あたしの両こめかみを無断でぐりぐりしはじめるんでしょうか痛い痛い！

「……ベル」

「み……みぎゃ」

「……私で変な想像をするのは止めてくださいと、いったいあと何十回言わなくてはいけないのですか」

「いぎゃ～」

両こめかみに左右から拳をあててグリグリするという、大変ひどい体罰を与えてくれやがるレメクに向かって、あたしはちっこい手でピッタンピッタン抗議を行った。

しかし！　なんということだろう！！　自分が叩く振動まで痛みになるという大変な罠がここに発動！

その痛みにあたしは悟りをひらき、目をカッと見開いた。

これは！　アレだ！！――　そう！

（別世界の扉を開くための試練！！）
「「……。」」
……あれ。なんかレメクが素早く拳を離しやがりましたよ？
なんでー？　と仰ぎ見ると、レメクはほんのりと血色の悪そうな顔。
ぐったりと俯いてこめかみを揉んでいるのだが、その理由は不明だ。
「……どうでもいいが、俺の問いはスルーかよ……？」
キョトンとしているあたしとぐったり気味なレメクの向かい側で、なにやら心も対岸にいるらしいバルバロッサ卿が小さく遠吠え。
あたしは慌ててバルバロッサ卿に向き直った。
「だ、大丈夫よちゃんと聞いてたもの！　おじ様の腹筋のことね！？」
「どっから出てきた話だ！？」
ありゃ。違いました。
「ベル……あなたの脳内会議に他の一般人を出席させないでください……」
愕然顔のバルバロッサ卿のかわりに、レメクが疲れた声で忠告してくる。
（なるほど！）
あたしは目をビカッと輝かせた。
（レメクは一般人じゃないから時々参加してるのね！？）
『紋章のせいです！！』
なんかソッコーで反論がキタ。
紋章使ってまで真面目に抗議しなくてもいいのに、レメクもなかなかオトナゲナイヒトである。
「……あー……なんかレメクがスゲー勢いで机になつきかけてるんだが、嬢ちゃん脳内会議で何言った？」
「たいしたことは言ってないにょ」

むしろ今、机とレメクに挟まれたあたしがちょっと苦しい状態になってるのを何とかしてほしかったり。

「まぁ……なんかいつものことっぽいからソレはいいとしてだな……」

いいのか。

「とりあえず、その、ひっくり返りそうになってる椀の中身を空にしてから、話続けよーか」

「あいっ！」

レメクに机に向かって押しつけられてる状態で、あたしは短い手を伸ばしてひっくり返りそうになっている大きな碗を引き寄せた。

なぜひっくり返りそうになっていたのかといえば、どっぷり落ち込んでるレメクの肘が、絶妙な角度で碗に当たっていたせいだったりする。

……レメクってば、センサイなヒトなんだな……

ちなみに港区にありながら肉類の料理が豊富な『ホロムの肉屋』は、日によっては十を超えるメニューが注文可能になる。

船乗りのにーちゃんによると『他国では宿屋で食べれる料理は一種類か二種類程度』なのだそうだから、これは大変珍しいことなのだろう。もちろん他国でも宿屋以外の食堂に行けばそれなりに種類はあるらしいが、それでもナスティアほど沢山あるわけじゃないのだそうだ。

ナスティア生まれのナスティア育ちではピンとこないが、どうやら我が国はご飯に関してかなり欲張りな国であるようだ。

（なんて素敵な国なんだろうか！）

ちなみにナスティアで最も食べられている食材は魚であり、肉は魚貝類に比べればそれほど身近な食べ物ではない。

なぜなら魚貝類に比べればお値段がチョイと高いのである。

もっとも、魚も種類によっては目玉が飛び出るぐらい高い。が、常に飼料が必要な家畜の方が全体的に高いのだ。……もっとも、それも日によってまちまちだったりするのだが。

あたし達が口にする『肉』は、たいてい近隣の村人が売りに持ち込んできたものだ。

食用に育てている豚や鶏から、乳が出なくなった山羊や老いた羊などが多い。冬に飼料が足りなくなることが分かっている時は、大目に山羊や羊が売りに出されるので、そういう時は値段も安くなる。余談だが、子羊や子ヤギはすごく高くて、特別な日のとっておき料理にしか使われなかった。

ちなみにウシとかいう生き物の肉は、市場にはほとんど出回っていない。レメクの所では試験的に飼育を初めているらしいが、あまり馴染みのない肉なのである。

……ものすんごく美味しかったけど……

あたし達がいるホロムの肉屋は、（ウシはともかく）そういった肉はもちろん、魚貝類も扱うお店である。

今日あたしが食べた料理はと言うと、鮪（トゥンヌス）のステーキ、エビの蜂蜜ソース和え、鯛のチーズとオイル焼き（アルパージョン）、塩漬け肉のシチューである。

おかみさん特製の煮込み肉は売り切れてしまっていて食べられなかったが、かわりに新メニューはしっかり制覇させてもらった。

……ええ。値段なんて聞いちゃイカンのですよ。あたしじゃ絶対払えないから。

今日のお財布であるバルバロッサ卿は、イトリアというゴマと蜂蜜で作った薄い焼き菓子を摘んでいた。これもホロムの肉屋の『新メニュー』であり、ちょっと前からおやつがわりに出している食べ物なのだそうだ。

評判も上々のため、小袋に入れて売り出すことも考えているのだとか。

（お土産に買ってくれないかな……）

あたしは碗の中に入っていた塩漬け肉のシチューを飲み干して、バルバロッサ卿に視線を向けた。

神殿の熊さんはあたしの食べっぷりとレメクのどっぷり気味な姿を苦笑顔で見守っている。

そして口を開いた。
「……で、だ。なんでレメクを『おじさま』なんて呼んでるんだ？」
あー……そーいやそんな問いだったですな。
「おじ様って呼んじゃ、おかしい？」
「いや……おかしくはねぇんだがな？」
首を傾げたあたしに、バルバロッサ卿は困り顔で苦笑した。
「嬢ちゃんの年齢とこいつ年齢考えたら、まぁ、オジサン呼ばわりで正解なんだが……よく考えてみたらよ、こいつを『オジサン』なんて呼ぶ人間っていなかったなァって思ってな」
オジサン。
言われてあたしは斜め横を見る。
あたしの椅子代わりになっているレメクは、机に肘ついた状態で俯いていた。その半端なく上品に整った貌は、人の多い王都でも珍しいほどウツクシイ。
（……オジサン……似合わないょ……思いっきり）
しみじみそう思うが、これについてはすでに協議済みだからしょーがない。
「でも、他に呼びようがなかったんだもん。しょーがないのよ？」
「しょーがないの、か……っつーか、最初っからオジサン呼ばわりだもんなぁ……」
「最初は『あんた』呼ばわりだったの」
一応訂正を入れておいて、あたしは蜂蜜を塗ったパンにかぶりついた。
これも新メニューなのだが……美味い！　この、ちょっとパサパサぎみなパンに蜂蜜がしっとりとからまって……！！
「むぐ……でもね、未来の旦那様を『あんた』呼ばわりは駄目だなって思って、いろいろ提案したの」
口いっぱいに頬張ったパンを飲み下してから、あたしはそう続けた。
何故かしばらく硬直していたバルバロッサ卿が、その言葉に魔法

が解けたかのように硬直を解く。
「お、おぉ……提案したわけか。……つーか、こいつに？」
そう。レメクに。
こいつ呼ばわりされたレメクが、微妙な顔でバルバロッサ卿を見る。
あたしは指についた蜂蜜をペロペロ嘗めとってから指折り数えた。
「えっとねぇ、主人様もご主人様も駄目で、旦那様も駄目だって言われたのよね。ね？　おじ様」
「……私はあなたを雇っているわけでも使役しているわけでもありませんから」
「旦那に様つけて旦那様なのに」
「まだ結婚してません」
……なんでこだわるんだろーか、そこ。
むぅ、と唇を尖らすあたしと無表情のレメクを見比べて、バルバロッサ卿は呆れたような笑いを零す。
「ははぁ……それで『おじ様』になったわけか？」
「うん。おにーさまも駄目だったし」
「おまえなんでソレ駄目なんだよもったいねぇ」
「……何がもったいないんですか……」
レメクが異様に胡乱な目。
「八つの子供に兄と呼ばれるような年齢ではないでしょう？」
「……細けぇなー……いいじゃねェか別に。おまえ下に弟妹いねぇんだからよ」
「二十以上離れているのですが」
「だからそこにこだわんなっつー話だろ？　そもそもその顔で三十代とか嘘みてぇな話だろーが」
……あれ。なんかレメクが微妙にへこんだ。
実は若く見られるのイヤだったりするんだろーか。
あたしは首を傾げつつ、とりあえずフォローしてみた。
「おじ様。若く見えるのはイイコトなのよ？」

「……いつまでたっても若造扱いされるのは微妙なところですが……」

レメクの目は暗いままだ。

……もしかして長屋のおじーちゃんに『坊』て呼ばれてるの気にしてるんだろーか。

「おめぇを若造呼ばわりする剛毅な奴っつったら……あれか。うちの猊下か？」

「……いえ」

「『いえ』！？　他にもいんのかよ！？　どんな猛者だそりゃ！？」

ギョッとなったバルバロッサ卿に、レメクは微妙な顔で視線を逸らしている。

長屋のじっちゃん達から見たら、そりゃあ大人なレメクも子供なんだろーけど……それだけじゃなく、レメクはゲイカとかいう人にも若造扱いされているらしい。

（……ゲイカって人、長屋のおじーちゃんみたいなおじーちゃんなのかな……？）

想像を膨らませているあたしの向こうで、神殿の熊さんが感心したような息を吐いてぼやいた。

「しっかし、そんな連中がいるとはなぁ……いや……だけどよ、考えたら、ケニードの部署にいた伯爵とかも、けっこうおまえさんのこと子供扱いしてたっけ」

レメクを若造扱いする人というのは、何気にあちらこちらにいるらしい。

まぁ、レメクはまだ三十前半だし、王宮にはもっと年上のエライ人がいっぱいいるだろうから、若造扱いする人がいたって不思議ではないと思うが。

「アロック卿の部署というと……ビットナー伯爵達ですか？　そう言われてみれば、そうですね……」

「伯爵達も面白い人だよなぁ。ちょっと老公に似てるんだよな、あの気さくさというかあっけらかんとしたところが」

言われて考える顔になったレメクが、「確かに」と小さく呟いた。
「言われてみれば、似ていますね。そもそも、あの部署にいる方々は総じて一般の方々よりも……」
よりも？
「大らかというか考え方が違うというか細かい事は気にしないというか見てる場所が違うというかこだわりをもつべき場所が違うというか……」
……褒めてないな……
「一つのことに熱中している反面、それ以外のことに対しては非常に……その……えぇ……大変寛容な部分がありますね。あまり他を気にしないというか……」
ものすごく言葉を選んで言ってから、何に気づいたのか、レメクはますます考える顔になった。
「……あの方々の下にいたから、アロック卿はああいう性格になったんでしょうか……」
「「ナイナイ。それはナイ」」
あたしとバルバロッサ卿は速攻で否定した。
「あいつは元からだぞ」
「ケニードは最初っからおじ様が大好きだもんね。他の影響じゃないと思うわ」
「だよなぁ。あれだろ？　おまえさんが昔、あいつのピンチ救ってからだろ？　聞いた話じゃ、パツイチで惚れ込まれたみてェじゃねーか。しかし、あいつもどこでどう感づいたのやら……本能だとしたら侮れねぇなぁ」
……ほにょ？
バルバロッサ卿の不思議発言に、あたしはキョトンと首を傾げた。
「なにをどう感づくの？」
何故か神殿の熊さんが慌てて目を逸らしやがる。
さらなる不思議に一層首を傾げていると、レメクが超絶冷たい目でバルバロッサ卿を見つめ、口を開いた。

「……ベル」
え？　あたし？
呼ばれて目をパチクリさせたあたしは、声をかけてきたレメクを見上げる。
しかし、レメクはそんなあたしを一瞥（いちべつ）たりともせず、冷や汗を流す熊さんを見つめたままで厳かにこう言った。
「私が許します」
なにを？
「今日は好きなだけ全力で食べなさい」
「えっ！？　いいの！？」
突然の胃袋解禁令を受けて、あたしは反射的に顔を輝かせた。
いつもいつも腹八分目でやめておけと言うのに、いったいどういう風の吹き回しか！
しかし、これは滅多にない大チャンス！！
「おじちゃーん！　ご飯おかわりーッ！」
あたしは前言撤回される前にと店中に響く声で追加注文を叫んだ。
「全メニュー十皿ずつーッ！！」
「待てぇえええい！　嬢ちゃん！　俺の飲み代全部吹っ飛ぶ！！」
「吹っ飛びなさい」
「ひでェ！！」
途端に泣き言を叫ぶバルバロッサ卿に、レメクは底冷えするほど冷たい眼差し。
そういや今日のお昼ご飯は熊さん持ちだったなーとか思い出したが、まぁ、いいか。
「バルバロッサ卿！　ごちそうさま！」
「全然　終了（ごちそうさま）じゃねーじゃねぇか！」
「大丈夫！　まだ入るの！」
「入るなぁあああああッ！！」
すぱーんっと許容量の大きなお腹を叩いてみせると、バルバロッサ卿が涙目で大絶叫。真っ直ぐに見つめる相手の瞳を見返して、あ

たしは真顔ですぱーんすぱーんっと腹太鼓を披露した。
まだまだ入るよ！
「……くそぅ……こいつがいるときに、嬢ちゃんにこいつの話振るのが間違いだった……！」
「……私のいない時ならいいというわけではないでしょう」
ぶちぶち文句を言いながら麦酒の入ったジョッキをあおるバルバロッサ卿に、相変わらずレメクは冷たい目。なにがイカンかったのかは知らないが、美味しいモノを沢山ご馳走になるのだから、細かいことは気にしないでおこう！
「んまんま！」
「……まぁ、嬢ちゃんがうまそーに食ってるから、いいけどよ……」
「今日の昼間の酒代ぐらいは私がもちましょう」
「昼間は量加減しながら飲んでるって、おまえ分かって言ってるだろ！？　絶対分かってて言ってるよな！？」
「ベルが食べ終わるまでしか待ちませんよ」
「嬢ちゃんちょっとゆっくり食え！」
「ゆっくりたべゆともっといっぱいはいゆよ？」
「がーッ！！」
熊さんが頭抱えて咆哮している。
その様子にくすくす笑いながら、ホロムの肉屋のおかみさんが大きな器をあたしの前に持ってきてくれた。おかわりのシチューだ！
「ありがとうございます、バルバロッサ卿。大変なお得意様ですわ」
「おぉよ、そーだろーよ。……なぁ、おかみさんよ。こいつらが入り浸ってたら商売やりにくくねぇか？　毎回こんな座り方で豪快な食べっぷりの幼女とちみちみ食ってるヤローだぞ？」
「いやですねぇ、バルバロッサ卿。むしろうちの名物ですよ」
「……名物かよ……」
朗らかに笑って答えるおかみさんに、バルバロッサ卿は呆れ顔だ。なんだか背後のレメクが肩落としてるよーな雰囲気なのだが、それはいったいどーゆー意味だろうか。

「お二方が食べに来てくださるおかげで、前より沢山のお客が入るようになりましたからね。それと、これはうちの主人からバルバロッサ卿にサービスです」

言って片手に持っていた新しいジョッキを置くおかみさんに、バルバロッサ卿は嬉しそうに相好を崩した。

「おお！　こいつぁ気が利く！」

そーか。熊さんはお酒で機嫌が良くなるのか。覚えておこう。

「うちのは混じりモノなしの麦酒ですからね。できれば侯爵にも味わっていただきたいものです」

「ベルを連れている時に酔うわけにはいきませんから」

何故かレメクが物凄い早さで断りを入れた。

バルバロッサ卿が胡乱な目。

「どんだけ飲んでも酔わねぇ奴が言う台詞じゃねぇなぁ」

「それはあなたでしょう」

「俺は酔うぜ？　それなりの量を飲んだら」

「十樽の葡萄酒を一人で空にしてふらつきもしない人の『酔う量』とはどれほどの量ですか」

「おまえだって同じ量飲み干してただろーが！　なんだその私は無関係みたいな顔は！」

「その範囲ならまだ酔う状態ではないというだけです」

「それなら麦酒一杯程度は軽いだろーが！」

「麦酒は葡萄酒と違った効用があるんです！」

なぜか言い合いになってる二人に、あたしはモグモグしながら首を傾げる。

言い合いの原因を放ってしまったおかみさんがおろおろとあたしを見てきたので、ダイジョーブと言うかわりに頷いてみせた。

こんな言い合いは、まぁ、二人の間柄ならただのじゃれあいみたいなもんだろう。たぶん。

「効用って……あー……そーいや、麦酒飲むと小便したくなるよなぁ」

「……どうしてあなたはそう、食事の場所で下の話を平気でするのですか……」
レメクがものすごく物言いたげな顔。
しかし、バルバロッサ卿の答えはあたしに素晴らしい名案を授けてくれた！
「おじ様！　麦酒を頼んで！　そして用足ししたくなったらあたしに報告ね！」
「ルド！！」
「うわ悪ぃ！　そっちに飛び火すんのかこの話！」
「だから避けていたというのに……！！」
ものすごい怒り目で睨むレメクに、さすがの熊さんも身を縮まらせた。しかし、悪い悪いと片手をあげる熊さんの目には、どことなく楽しげな色がチラホラリ。
「いやー、嬢ちゃんはあれだな。ケニードとはまた違った意味でマニアだな」
「もちろん！」
「……言っておきますが、褒め言葉ではありませんよ、ベル……」
「あたしとケニードはレメクマニア同盟を結んでいるんだもん！」
「……変な同盟を結ばないでください……」
変な同盟とは失礼な。
「真面目な同盟なのよ！？　一つ！　おじ様の持ち物はあたし達の宝！　一つ！　おじ様の行動は常に把握しておくこと！　一つ！　おじ様の言葉は言語録に綴っておくこと！　一つ！　知り得たおじ様の情報は必ず共用すること！」
なんかレメクが物凄い愕然とした顔になっている。
バルバロッサ卿の方はげらげら笑いながら机をブッ叩いているのだが。
「出来る限りおじ様の写真を撮って、いろんなものに貼って保存しておくのも大事な活動なの！　あたしはまだ紋様術使えないから、そっちはケニード任せになっちゃうんだけど……でも！　かわりに、

おじ様の感触とか匂いとかは全部あたしが手紙に書いてケニードに知らせてるの！」

「なにを知らせているんです！　というか、最近アロック卿と文通していると思ったら、なにをやっているんですかあなたたちは！！」

……えーと……

「モジノレンシュー」

「それは練習とは言いません！！」

えー。

ちゃんと間違い文字の直しとかもチェックしてくれてるから、ちゃんと練習になってると思うのだが。

「つ……つーか、あれだな、嬢ちゃん……おまえさん、本当にレメクが好きだなぁ……！」

「もちろん！！」

力一杯頷いて、あたしはフンヌーと鼻息を荒くした。

バルバロッサ卿が変な引き笑いを一生懸命堪えて麦酒を飲み始める。笑いすぎて喉が渇いたのだろう。

「なんてったって、おじ様は（あたしの）おうじ様なんだから！」

ぶぼッ！！

――なんか、スゴイ勢いで、バルバロッサ卿が盛大に麦酒を吹いた。

「ぎょぁあああ！　バルバロッサ卿、きちゃない！　きちゃないーッ！」

真正面にいたあたしは盛大にそれを被ってしまい、ポタポタ落ちる麦酒に頭をブルブルさせた。うぁあー……なんかすごいお酒くさいー……

「ゲホゴホガホッ……！」

バルバロッサ卿は声も出せない大変な状態らしい。気管にでも入ったのか、ひとしきりゲホゲホいっている。

あたしの方もなかなか大変な状態で、髪の毛から麦酒の匂いがぷんぷんしていた。おまけに上からもポタポタと麦酒の雫が落ちてきている。

……。

……。

……上から雫が……？

「わ……悪ぃ悪ぃ……つーか、王子様、って……え」

ひとしきり咳き込んで涙目になった熊さんが、こちらを見るなり硬直した。

あたしもピキンと硬直する。

バルバロッサ卿の真正面に座ってたあたしが麦酒の噴出を被ったということは、つまりあたしの椅子になっている人も被ったということで――

「……」

じわっと滲む汗を堪えて上を向くと、頭上からまたぽたぽたと麦酒の雫が落ちてくる。

ええ。

あたし同様、麦酒の祝福を否応なく被ったレメクの髪から落ちてくる麦酒の雫が。

「「「……」」」

あたし達は沈黙した。

神様が通って行っちゃったじゃなかろーかと思うような沈黙だった。

やや俯き気味のレメクの唇が、底冷えのする声を放つ。

「……ルド……」

「……わ……悪ぃ……」

「ちょっと、表に、出ましょうか」

表情が完全に消えたレメクというのは、尋常でなくコワウツクシイ。

固まってしまったあたしを置物を置くかのように横の椅子に設置して、レメクはゆらりと音もなく立ち上がった。動いた椅子が音一つたてなかったのが恐ろしく不気味だ。
気づけば周囲もシンと静まりかえっている。
そんな中で、レメクはクイッと手で立ち上がるように指示して言った。
それはそれは美しく恐ろしい目で。

「さぁ、表に出ましょうか」

バルバロッサ卿の顔はただひたすら青かった。

店の中に取り残されちゃったあたしには、その後の二人の様子は音声でしか分からない。
なにか戦争が始まっちゃったようなスゴイ音がしてたけど、帰ってきたレメクに連れられて店を出た時には大通りは綺麗な状態だった。
もしかしたら物凄い音は幻聴だったのかもしれない。
そう手紙に書いたら、後日やって来たケニードはものすんごく神妙な顔でこう言った。

「……熊と魔人の大戦争だったそうだよ……。途中で陛下が飛び込んできて街を元通りにさせたみたいだけど」

ちなみにあの時熊さんが吹き出した理由は、今をもって尚、不明である。

番外編　【　闇の王と黄金の魔女　】（前書き）

断罪の章と、求愛の章の狭間の物語です。
主人公はベルではありませんので、ご注意ください。

番外編 【 闇の王と黄金の魔女 】

立派な樫の林を抜けると、瀟洒な煉瓦造りの屋敷が見えた。
日に焼けた煉瓦は古く、所々に小さな欠けや薄いヒビが見える。
相当年季の入った屋敷なのだろう。白茶けた壁をつたう蔦は、南側を中心に屋敷のほぼ全域にまで広がっている。地面近くには苔の靴下まで履いていて、経てきた年月の長さをそっと語りかけていた。
王都の北区、クラウドール邸とは、そういったどこか素朴な風情の屋敷だった。
豪華絢爛な『貴族街』にあって、おそらくもっとも質素な屋敷だろう。だが、その敷地は個人の所有地としては破格なほどに広く、内容は濃い。
正門から屋敷へと続く木々の連なりは、もはや並木道を越えて林の如き有様。それを抜けた先の屋敷は先述の通りであり、屋敷から少し離れた場所には、広大な畑と、それに倍する面積の牧草地がある。
柵で囲われた牧草地帯には山羊が放たれ、メェメェとどこか嘆れた鳴き声を周囲に響かせていた。
山羊よりも大きな白い固まりは羊。
羊よりも一回り以上大きな生き物もおり、これは牛と呼ばれる生き物だった。
山羊よりも淡泊だが、大量の乳が搾乳できると先代が購入した生き物だ。当初、番の二頭しかいなかったのが、今では大小あわせて十頭がのんびりと草を食んでいる。
畑と牧草地帯の中間には、湖の如く大きな泉があった。
深さはおよそ大人の胸元ぐらいか。透明度が非常に高く、底に転がる藻の固まりがコロコロと転がる様までよく見えた。
畑の近くには煉瓦造りの平屋建てがあり、そこには十人を超える使用人達が暮らしている。平均年齢は七十二才。けれど鍬を持って

畑を耕す様は、ゆっくりでありながらも力強かった。
時刻はちょうど正午を過ぎたところ。平屋建てからは白く細い煙が立ち昇り、土と植物の匂いの中に、火で炙られた肉の匂いが混じる。
男は樫の木の傍らで立ち止まり、すぅっと息を吸い込んだ。
濃厚な自然の匂いと、人々の生活の匂い。両者が複雑に混じり合って、奇妙に混沌とした匂いがする。いい匂いとは思えなかった。だが、悪くもない。
口の端に苦笑を浮かべて、男は踵を返した。
三々五々散っていた老人達が、平屋建てへと帰路につきはじめる。それに背を向ける形で、林の中にある本邸のほうへと向かう。足音は無く、足跡も無い。
ふと、老人の一人が林のほうを振り返った。年と共に垂れてくる瞼のせいで、今ではごく薄くしか目が開いていない。それをさらに眇(すが)めて、彼は首を捻った。
「どぉした？」
一緒に歩いていた仲間が、怪訝そうにそんな彼を見る。
彼は「いんやぁ」とぼやくように呟いて、止めていた足を再び動かしはじめた。
近頃口が動きにくくなったことを自覚しながら、空気を咀嚼(そしゃく)するようにして声をこぼす。
「……誰かぁ、いたような気がしたんじゃが……」
彼の声に、仲間達もちらほらと林を振り返る。いないなぁ、という呟きは、少しだけ寂しい色を宿していた
彼――使用人の中で最も古株なゼリクも、同じようにもう一度だけ振り返る。
けれど彼は、ついぞそこに人の姿を見つけることはできなかった。

※　※　※

クラウドール邸と呼ぶべき本邸の横には、屋敷を守るかのように巨大な樫の木が座っていた。

樹齢は六百年余り。大地に根を張り、どっしりと佇む様は王者の貫禄すらある。

（ここの空気は、いつ来ても変わりませんね……）

足を進めながら、男は周囲をゆっくりと観察した。

以前見たときよりも大きくなった若木達。林の中はここが都心なのを忘れそうなほど、濃い緑の匂いに包まれている。木々の根本はうっすらと苔むし、地面もわずかな範囲を除いて全て苔で覆われていた。木漏れ日に照らし出されたそれが、深い緑の絨毯に見える。

苔の絨毯を作るぞ、と。

そう言って子供のような顔で笑った老人を思い出した。枯れ木のような腕に、白いものが沢山混じった灰色の頭。いつまでも若い魂とは逆に、死へと向かいつつある老いた体が悲しかった。

（ベラトリーテ）

懐かしく悲しい、かつての友に呼びかける。

（……あなたの願いは、叶いましたか……？）

もういないその人は、ただ子供のような笑顔だけを浮かべている。決して薄れることのない記憶の中で、永遠の笑みを。

男は目を伏せた。ただ嘆息だけが零れる。

その問いに、答えを返せる人はいない。

年輪を重ねたのは屋敷の周辺だけでは無く、屋敷そのものも過ぎ去りし年月の長さを物語っていた。

男は屋敷の前に佇み、そっと感嘆のため息を零す。

だがおそらく、ここに観客が一人でもいれば、ため息を零す男その者に対して賞賛の吐息を零しただろう。

尋常ではないほどに整った貌立ちは、もはや「美貌」という言葉ですら凡百陳腐に思えるほどだった。

艶のある髪は深い闇の黒。前髪だけがやや長く、他三方はどちらかと言えば短い。瞳は深く澄みきった海の蒼。肌は光のあたる部分は白く、影は淡い象牙に似た色をしていた。

均整のとれた長身は、全体的に細身と言っていいだろう。不思議なのはその男の印象で、どこか若木のそれに似たしなやかさと、年経た老木のごとき古めかしい重さを同時に感じさせた。

姿形だけなら優男と言っていいだろう。けれど、果たして彼と相対し、自我を保っていられる勇者は幾人いるだろうか。

男の名はポテトと言った。むろん、本名では無い。

その名前を使い出してからかれこれ三十三年ほどになるが、使ってみると周囲の反応もなかなかに良く、男はとても気に入ってた。

ポテトは屋敷を眺め、本人としては極めて素直な微笑みを浮かべた。

端から見ればそれは悪意のこもった冷笑にしか見えないが、本人にとってはこれが笑顔である。

ポテトの正面には屋敷の玄関があり、その手前には見えざる魔力の力場が構成されていた。

魔法というものが人々の記憶から薄れ、もはや伝説と化している時代に、これほどのものを見るとは思わなかったのだ。

（さすがです。ご主人様）

ポテトは脳裏に己の主を思い浮かべた。

その髪と同じく、輝く黄金の如き魂を持ったその人は、燃えるような瞳で爛々とこちらを睨みつけている。ただの昔の記憶であり、ただの幻視であるというのに、その眼差しは鋭くポテトの心臓を貫いた。

十三年という年月を音信不通でいた自分に対し、さてあの主はどういう反応をしてみせるのか。

かつてのように烈火の如く怒って罵声を浴びせてくるのか、それとも永久凍土のような視線で完全黙殺をしてくるのか。考えるだけで思わずうっとりとした微笑みが浮かんでしまう。

かつてベラトリーテの目を盗み、『主』がこっそりと植えていたミニバラは、今や屋敷のあちらこちらに蔓をからませている。なんだか巨大な獲物を捕まえようとする蜘蛛の糸のようで、ポテトはついつい笑みを深めてしまった。

（執念ありすぎです。ご主人様）

心の底から「素晴らしい」と思う。

否応なく呪的結界が自然発生し、周囲に奇妙な「対呪殺専用自動反撃結界」が展開している。

紋章を大量に宿す強力な「器」を持っていながら、使いこなすことがほとんどできなかったあの少女が……いつのまにこんなに立派な呪いをかけられるようになったのか。

（人の成長は早いですね。本当に恐ろしいことです）

うっとりとそう感想をこぼし、ポテトは玄関の扉を押した。

様々な『鍵』で閉ざされているようだが、男にとっては何の意味もない。そっと押すだけで軽々と開いた。

「さて……」

そう呟いた途端、

とんっとととととっ、と軽くて小さな足音がした。

何か小動物が物の上から飛び降り、こちらへと駆け寄ってくる音に似ている。

見れば、小さくて可愛らしい子供が（何故か口の周りを真っ赤にして）走ってきていた。

子供は一心不乱に、そして一直線に駆け寄り、

「おじ……ッ？！」

こちらに飛びつく寸前、

世界が崩壊（ほうかい）したかのような、とてつもない驚愕（きょうがく）の表情で凍りついた。

「……ッ」

凍りついた子供に、ポテトも思わず凍りつく。

世界の全てに裏切られたと言わんばかりの眼差しが、ちょっとシ

ョックだった。

「……」

互いにじっと見つめあう。

お互い言葉が出てこないので、沈黙だけが流れていた。

ポテトはほとんど俯くようにして小さな子供を眺める。

懐かしい色の髪であり、瞳だった。そして、その器が有する魂もまた、懐かしい色をしている。

（ああ、この子供が……）

即座に記憶が浮かび上がった。

此処（ここ）ではない時と空間で彷徨っていた『黄金の魔女の卵』。

肉体を有して相対していたわけでは無かったので、ポテトには彼女の「今現在の形」がわかっていなかった。彼の目には、あの時の彼女は丸い金色の光にしか見えなかったのである。

本人をこうして目の前にしても、『なるほど、こんな姿の子供だったのか』としみじみ見やるのがせいぜいだ。と同時に懐かしい『名付け子』の顔も浮かんで、ポテトはにっこりと微笑んだ。

おそらく子供の目には、その笑みは悪党が悪事を思いついた瞬間の笑みに見えただろう。

けれど驚くべき事に、子供はその笑みに対しては何の感慨も覚えなかった。

ただ、何故か、その金色の瞳にじわじわと「失望」を浮かべはじめたのである。そんな反応は、ポテトにとっては生まれて初めてだった。

外見だけなら四〜五歳ぐらいに見える子供は、稚さの域から脱してきれておらず、大きく目を瞠った様など小動物のそれに酷似している。

けれどポテトには、そんな風に驚愕と失望の目を向けられる理由がわからなかった。何かひどい詐欺を働いたような気分になったが、今はまだ何もしていないはずだ。なのになぜ、これほど悲しげに見上げられてしまうのか。

（タイミングが悪かったのですかね……？）

ポテトはそう推測する。他に理由らしいものが思い浮かばず、敢えてあげるとすればそれしか無かったのだ。

事実、未だに握られているナイフとフォーク、そしてフリルがたっぷりとついたよだれかけが、子供が食事中だったことを告げている。それらは全部赤いトマトソースで汚れていて、玄関には煮詰めたトマトの匂いが充満していた。

しかし、どんな風に食べればそんな風にソースだらけになるのか。ポテトは首を捻らずにはいられなかったが、それよりも急速に深まる相手の失望感のほうが気がかりだ。

しかし、はて、この現状をいったいどうやって打開すべきか。

ポテトが悩んでいる間に、子供は暗い目になって小さな肩をガックリと落とした。

なにがそんなに「ダメ」なのかわからないポテトは、子供の落胆ぶりに目を丸くする。

そんなポテトにチョコンと一度だけお辞儀をして、なんと、子供は何も言わずに後ろを向き、とぼりとぼりと廊下を戻っていってしまった。

ポテトはさすがに慌てた。

「あの……お嬢さん？」

とりあえず、そう声をかける。

子供はその言葉に三秒経ってから気がつき、ひどく残念そうな顔でポテトを振り返った。

「……あたし？」

どんよりとした声だった。

ポテトは頷く。

足取りも重く玄関に戻ってくる子供の、心底こちらに興味無さ気な姿が新鮮だった。

「レンさんは、ご不在ですか？」

ポテトの声に、子供は目をぱちくりさせた。

きょとんと首を傾げるのに、ポテトも首を傾げる。
「レンドリア、というのですが。……あぁ、この名はあまり使わないかもしれませんね。あの子は」
ふとそう思い返し、もう一つの名前を言おうと口を開いた。
だが、それよりも、目を丸くした子供の声のほうが早い。
「あーッ！」
この小さな体のどこからこんな大きな声が出るのか。そう思うほど体中から声を出して、子供はフォークをギラリッと突きつけた。
どんよりとしていた目が、キラキラとした輝きを宿す。
「不思議の国のポテトさんだ！」
とりあえず、
反論できなかったのがちょっと悔しかった。

※　※　※

「んっとね、おじ様はね、今お仕事に行ってるの」
そう言って子供が案内してくれたのは、何故か屋敷の台所だった。
ポテトはのんびりと椅子に座ったまま、目の前で一生懸命「食事」をしようとしている子供を見守る。
一緒に食べようと誘われ、ナイフとフォークを渡されたが、他人様の食事を横取りする気にもなれない。
結果、淹れてくれたハーブティーを飲みながら、果敢に「食事」に挑んでいる子供を眺めているのである。ちなみにお茶は、死ぬほど不味い。
机を挟んで真向かいにいるのは、ベルという名の八歳の少女だった。
名前だけは前々から聞いていたが、本人と実際にあっての名乗りは今回が初めてだ。とりあえず、こちらも「ポテト」の名を改めて名乗ると、即座に美味しそうだと言われた。
ポテトがベルを心底気に入ったのは、この瞬間である。

（レンさん。あなたのレディは、あなたと一緒の感性ですよ）

そのことがとても嬉しい。ポテトはうっとりと未来に思いを馳せた。

きっと成長の末には、誰もが道を空ける怪獣夫婦になってくれることだろう。……想像するだけで胸が踊る。

脳裏に浮かぶのは、十三年前に別れた時のレンドリアだ。

当時十九歳だった彼は、自分の「生」に対して意味や意義といったものを見いだせないでいた。若かりし彼がその後どのように生き、どのように成長したのかはまだわからない。

ただ、目の前にいる彼の伴侶となるだろう子供の存在が、少なからず彼の変化を伝えてくれる。それはひどく、ポテトの胸を打った。

（ベラトリーテ……あなたの願いは、叶ったようですよ）

ずっと自分の養い子を気にかけていた友人。

いつか自分自身で幸せを掴んでくれるようにと、ずっと願い続けていた彼。

そしてそんな彼の存在が、レンドリアにとってどれほど大きなものだったのか、ずっと見守っていたポテトはよく知っている。

（そうですね。あれからもう、十三年も経っているのですよね……）

懐かしい記憶に、ポテトは眼差しを細めた。

レンドリアはポテトと非常に縁の深い子供だった。

もう今年で三十二になったはずだから、子供、と呼ぶのはおかしいかもしれない。だが、こんな自分でも名付け親としての思いがあるらしい。親にとって、子はいつまでも「子」なのだ。

（あの賢くて心がカラッポだったあの子が、こんな可愛らしい女の子を奥さんにするような、そんな立派な変態に育ってくれたんですね……）

ポテトはそっと目頭を押さえた。

涙が出そうな心境というのは、きっとこういう心境を言うのだろう。

胸がどきどきするぐらい高鳴って、体中がホコホコしている。嬉

しさのあまり零れた笑みは、端から見ると凶悪極まりないものだった。

そっと目の縁の涙をぬぐって、ポテトは視線を前へと向ける。

彼の前には、デンと置かれたスパゲティの山があった。

いったいどういうつもりでこんなに大量に作ったのか。どちらかと言えば小食なレンドリアの顔を思い出して、ポテトは軽く首を傾げた。

その「スパゲティ・マウンテン」の向こう側で、ベルが必死に食べ物と戦っている。

大皿に積み上げられたスパゲティは、もはや麺類というよりも巨大な別の食べ物に見えた。それと格闘する子供の腕前は大変拙く、せっかくフォークとナイフという武器が手にあるというのに、腕近くまでトマトソースで染まりそうなほどだ。惨敗にも程がある。

それにしても、なぜスパゲティにナイフなのか。

ポテトはそこでも首を傾げた。普通、フォークと対になるそこは、スプーンでは無かろうか？

ポテトはしみじみとベルを観察する。この子供は大変興味深い。

何が興味深いかというと、本人の真面目ぶりが非常に可笑しいのだ。

おそらくテーブルマナーを特訓しているのだろう。彼女の近くには変な風に散らばったスープスプーンやデザートスプーンがあり、何故か遠くにデザートフォークが吹っ飛んでいる。

その中で手にとったのがフォークとナイフなのが謎だが、がんばろうとしている意志だけは伝わってきた。

とりあえず、未だにまともに一口も食べれてないが。

（素晴らしい）

ポテトは感心した。

（なんという可愛らしさでしょう）

これはレンドリアも情が湧くハズだ。ポテトは確信した。きっと毎日メロメロになっているに違いない。

なにせ一生懸命スパゲティを食べようとしている姿が、傍目からは子猫がミミズの固まりをこねてるようにしか見えないのだ。

一生懸命こねているが、こねているだけで口には入らない。

手元はベタベタ。苛立って口をつっこんで食べてやろうとするが、寸前で思いとどまってまたこねだす。

最後には口をぎゅむっとつむって、泣き出しそうな顔でこちらを見上げてきた。

上手くできなくて悔しくて悲しくてたまらないのだろう。今にも泣きそうで、けれど決して泣かない。

可愛らしすぎて思わず吹き出しそうだった。

（最高ですよレンさん！）

いっそ拍手を送りたい。けれどそれをすれば、この子供は心に傷を負って泣き出してしまうだろう。それを見てみたい気持ちでいっぱいになったが、そんなことをすればレンドリアに軽蔑されてしまう。

それはそれで楽しそうだが、徹底的に無視されるのは寂しい。

ポテトは必死に自分の衝動と戦った。これほど辛い戦いは、大事なご主人様を言い負かして泣かすか否かを自問した時以来だった。

あの時は衝動が勝ったが、今回は辛くも理性が勝ちを治めたようだ。

「いっぱい取ろうとせずに、少しだけフォークにからませるようにするんですよ」

内心の葛藤などおくびにも出さず、ポテトはにっこりと微笑んだ。

何か企んでいるような笑顔に見える笑みだった。

ポテトは近くで手本を見せるべく、席を立ってベルの後ろにまわる。

泣き出しそうな眼差しが、動きにあわせてずっとついてくるのが可愛らしかった。

トマトソースでべたべたの手を後ろから握ると、子供特有の小さくて柔らかい感触がする。

「あと、こちらはスプーンのほうがいいですね」
近くに専用のスプーンが無かったので、とりあえずスープスプーンをナイフと交換させた。
これで準備は完了だ。
「いいですか？　この二本ほどのスパゲティをこういう風にフォークに引っかけて、くるくるっと回すんです。ほら、スプーンの引っ込んでいる部分を上手くつかうと……」
実践すると、金色の瞳がきらきらと輝いた。
尊敬を込めて見上げられるのは、悪くない。
（……ええ。こういう義娘（むすめ）がいるのは、悪くないですね）
上手くフォークにからませたスパゲティを子供の口元に持っていくと、ぱくっと勢いよく食いついかれた。
雛にエサをやる親鳥のような気分になって、ポテトは満足げに微笑む。美味しそうに食べる子供がこれまた愛らしくて、この場にいないレンドリアに同情してしまった。
（レンさん。これを見られないなんて、あなたはなんて可哀想な人なんでしょう）
同情のあまり口に至福の笑みさえ浮かべてしまう。
ポテトは微笑みを口元にはりつけたまま、腕の中の子供を見下ろした。
「レンさんの料理は美味しいですか？」
幸せそうな顔で頬張りながら、次を待ちきれず、目をきらきらさせて次のスパゲティにフォークを突き刺していた（それでは食べれませんよ）ベルは、ポテトの声に顔を上げた。
きょとんとした眼差しが返ってくる。
「レンサン、ってのも、おじ様の名前？」
（おや）
ポテトは目を丸くした。
「あの子の名前の略です。私が勝手に呼んでいるだけですが。……ご存じではないのですか？」

その問いに、ベルはぱちぱちと瞬きをする。
「なにを？」
「あの子の『名前』です」
あの子、とベルが小さく呟いた。
「ポテトさん、あの不思議世界でも、おじ様のこと『あの子』って言ってたよね？」
その真っ直ぐな金色の目に、頷きながらふと首を傾げる。
（答えるポイントがズレているような？）
レンドリアの名を知っているのか否かは、結局のところサッパリ分からない。
とはいえ、それを指摘する気にはならなかった。自分の聞きたいものだけを答えさせるのは無粋だろう。
それに、この子供に関してはもう一つ不思議なことがある。
玄関での出会いがインパクトありすぎてつい流してしまったが、この子供とは「あちら側」ですでに会っているのだ。彼女の方でも、それを覚えているらしい。なのに、今まで一度もそのことに触れてこなかった。常に世界のほとんどに興味のない自分ならともかく、好奇心旺盛なはずのこの子供が、今まで何も尋ねてこなかったのは何故なのか。
興味津々でベル言葉を待つポテトに、子供はまさに好奇心に目を輝かせて尋ねてきた。
「おじ様と同じぐらいの年に見えるけど、ポテトさんはおじ様よりも年上なのよね？　おじ様のちっちゃい頃とかも知ってるのよね？」
断定で質問。
こちらを見つめてくる瞳の、そのギラギラ具合がとても気になる。
「とりあえず、レンさんの何倍も年寄りなのは確かです」
「そうよね。おじ様の『お父さん』なんだから、おじいちゃんだよね」
なにか妙な納得をされてしまった。

それ以前に、できれば「おじいちゃん」はやめてほしい。
「それで、おじ様のちっちゃい頃は？！」
ふんーっ、と鼻で息を吐いてベルが身を乗り出してくる。
「あの子の小さい頃ですか……。えぇ、大変可愛らしかったですね。私が知っている一番小さいサイズは、これぐらいですが」
言って、ポテトは人差し指と親指で直径一センチほどの大きさを示した。
ベルの顎が勢いよく落ちる。
「……ッ！？」
驚きのあまり声も出ない子供に、ポテトはにっこりと微笑んだ。
それはそれは悪辣な笑顔だった。
「ちょうど、ようやく『胎児』になったばかりぐらいの状態でしたね。妊娠七週目、でしたか……確かそれぐらいだったと思います。それはもう可愛らしかったですよ。エラとしっぽの名残みたいなのがちょっと残ってて」
「エラ？！　シッポ？！」
「えぇ。赤ちゃんの初期は、どちらかというと魚類とか両生類に近い感じですから」
よろり、と子供がよろめいた。そのままポテッと椅子から落ちそうな勢いだ。
「ぅぅ……あたしの知りたい『ちっちゃさ』と違う……」
「おや、それは申し訳ありません。ですが、人は皆そうやって長い時間をかけて、『人間』の形を作っていくのですよ。ふふふふふ……あの子がゆっくりと二頭身になっていく過程も見ましたが、大変可愛らしかったですねぇ……」
「……二頭身……」
なぜかベルはガックリと肩を落とした。
ポテトはそれに対してもニッコリと微笑む。
端から見れば、罠にかかった獲物を見下ろすような笑みだった。
「あの子の真名が決まったのも、その頃ですよ。身籠もられたこと

が周囲にも知れて、実の父親からも名前が贈られた次期です」
その声に、ベルが真顔で反応した。
パッとこちら側を見上げてきた目が、驚くほど深く静かな色を湛える。子供とは思えぬその瞳に、ポテトは薄く笑った。
(あぁ、なるほど)
悟った。
この子の基準は、あらゆる全てにおいてレンドリアなのだと。
そうと知ると、むくむくと好奇心がもたげてくる。
「レンさんの名前、お教えしましょうか?」
悪戯心を覚えてそう囁いたのだが、これにはあっさりとした答えが返ってきた。
「教えてもらっても、覚えられないからいいわ。おじ様から教えられたときも、最初と最後しか覚えれなかったし」
ポテトはぽかんと口を開けた。
(……驚きましたよ、レンさん)
本当に、心底驚いていた。
真名を告げるという行為がどういうものなのか。あのレンドリアが知らないはずがない。
この小さな少女にそれを告げた真意は何か。そんなこと、考えるまでもない。
ポテトは微笑った。それは驚くほど鮮やかな笑みだった。
「そうですか……もう、教えてもらいましたか」
口元にゆるゆると笑みが浮かんでいく。
あの子は、やはり選んでいたのだ。
自分の運命を決める唯一人を。とっくに選んでいたのだ。
未だ幼い、運命の黄金の魔女を。
(嗚呼、ならば貴方はいつか敵になるのですね)
ほのかな笑みが口元に浮かぶ。
この腕の中にいるのは、いずれ黄金の魔女と呼ばれるようになる子供だった。

ましてあのレンドリアが選んだのならば、それはそういう運命なのだ。

最初の選択がいつ行われたのか、それはいちいち考える必要などない。すでに選択の時は過ぎ、結果だけがここにある。

選別は完了した。「二人目の魔女」が生まれた。

世界は在るべき形に在るために動き出す。

いや、もうとっくに動いているだろう。

今この時、あの子がこの子供の手を選び取ったように。

今この時、この子供があの子を愛してしまったように。

今この時に、自分という存在が、およそ十三年ぶりに主に会うことになったように。

（嗚呼、運命とはかくあるべきなのでしょうね）

抗いようのない流れのように見えて、その実全てが己自身で選び取ったもの。

言い訳はきかず、

弁解は意味を持たず、

ただあるがままの事実だけが残るもの。

ポテトは感情の欠如した目で小さな子供を見下ろす。

やがて『王』の邪魔となるだろう、もう一人の『王』の卵を。

けれど、彼が何かの動きを見せるより早く、子供の口から言葉が放たれた。

「あたし、レメク・（なんとか）・クラウドールとしか覚えられなかったの。ちゃんと覚えたかったのに、何でかなぁ……」

その心底しょんぼりとした声に、ポテトは二度三度瞬きをし、ややあって破顔した。

それは、どこか気が抜けたような笑みだった。

「……覚えられなかったんですか」

それは、残念なことなのか、それとも、安堵すべきことなのか。

ポテトは思う。執行猶予のようなものなのだろう、と。

運命が決まったことは変わりないが、運命が運命として動き出す

のはまだ先のようだ。
真名を告げあい、交換して初めてそれは動き出すのだろうから。
「覚えられないということは、今はまだ、それを覚える時期では無いということですよ」
ポテトの声に、小さな魔女は目をぱちくりさせる。
「そうなの？」
「ええ」
ポテトは笑う。どこか仄暗い、悲しみにも似たものをとけ込ませて。
「全てが決した時に、それは確かな形となってあなたの魂に刻まれるでしょう。そう遠くない未来に、決別と永久の愛を天秤にかけながら」
「？？？　ポテトさんの言葉は、ちょっとわかりにくいわ」
首を傾げた子供に、それでいいんですよ、とポテトはさらに笑った。
「考えて考えて、考え抜いて答えを見つけなければならないのですよ。……いずれにしても、あなたはあの子を通してあの子と私の真名の一つを手に入れている。どういう関係が築かれるにせよ、私達はすでに家族となっています。あなたの真名は、いずれ時がくればあの子が読み取ってくれるでしょう」
ポテトの声に、ベルはいっそう首を傾げた。
「今はわからなくてもいいんですよ。いずれわかりますから」
「う、うん……」
困惑と疑問をいっぱい浮かべた顔をこちらに向けながら、子供の腕だけが別の意志を持つ生き物のように、一生懸命スパゲティを貫こうと動いていた。
一度も成功しない攻撃につい笑って、ポテトは話題を打ち切ることにした。
時期尚早なのだ。
これ以上の話は、したところで意味は無い。

「さ。とりあえず……先にこの難物を退治しましょうか」
話を切り上げたポテトに、子供の目が一瞬だけ静かな色になり、次いでキラリと輝いた。
「手伝ってね！」
即座に乗ってきた子供に、ポテトは心から微笑む。
何かを察して疑問を飲み込んだ小さな子供に、少しだけ畏怖を覚えながら。

※　※　※

眩しい輝きが深紅のベールを纏う頃、ポテトはクラウドール邸を後にした。
後にした、とは言っても、向かう先はこれまたクラウドール邸の一角だ。
夕暮れの赤に染められた木々はどれも血の色に似ていて、どこか不吉めいている。
ポテトは本邸から二百歩を数えた場所で立ち止まった。
ゆっくりと、背後を振り返る。
「意外と早かったですね。レンさん」
微笑みを向けられた相手は、どこか苦々しそうな顔で嘆息をついた。
「……おいでになるのなら、先に連絡をください」
どこか自分と似た部分を抱える男は、そう言って大きく息を吐く。
「ついでに、勝手に結界を張るのもやめてください」
「おやおや。だいぶ苦労したようですね」
「あなたの創った結界を、私が砕けるはずがないでしょう」
どこか不機嫌そうに言われて、ポテトは笑った。
以前なら、こんな言い返しはこなかった。そう思うと、とても楽しい。
「十三年という年月は、あなたをいろいろと変えてくれたようです

ね」
「……変わりませんよ。あなたが変わらないのとはまた違った意味で、ですが」
ポテトはその答えに笑う。
自身の変化とは、往々にして己では知覚しがたいものなのだ。
「私はともかく、あなたは変わったと思いますよ。……あぁ、しかし、最初に挨拶をしておくべきでしたね」
そう言って笑ったポテトに、男――レメクは嘆息をついた。

今更だとも思ったが、嫌がるようなことでもない。
「お久しぶりです、お義父さん」
ポテトは笑った。心の奥底の、暖かいものの全てを込めて。
「お久しぶりです、レンさん。私の小さな名付け子たる、もう一人の私」

レメクは、レンドリアという名前が嫌いだった。
実の父親から贈られた名だというだけで、そこまで嫌いになれる自分がいっそ不思議だったが、どれだけ年月が経とうとそれは変わらなかった。
その名についてまわる、面倒で忌まわしい様々なもの嫌いだった。
全てがどうでもいいと思っていた時でさえ、ハッキリと「嫌だ」と思うものがそこには沢山あった。
唯一の例外は、黄金色の魔女のいる領域だった。
彼女のいる領域の、ごく一部の人々だけは「どうでもいい」とも「嫌だ」とも思わなかった。
そこに在ってくれれば、なんとなくほっとした。そういう存在だった。
レメクがポテトと会ったのは、その魔女と会うよりもさらに前。
実は記憶すら定かではない時期だった。

ポテト自身は「生まれる前から」と言っている。そんなことで嘘を付くような相手もないから、それは正しいことなのだろう。覚えていない時期のことをあれこれ言われても困るが、それぐらい昔から「縁」のある相手だということは理解している。

その最たるものは、自分の名前だろう。

「相変わらず、レンドリアの名前のほうは使わないんですね。もったいない。私の名などより、よほど人として良い名前だと思うのですが、どうしてそんな不思議なことをするんです？」

なぜか並んで歩きながら、ポテトがどこかしみじみとした声でそう問いかけてくる。

レメクはなんとも言えない顔で嘆息をつくしかなかった。

「物心つく前から、そちらの名前で呼ばれてしまってますからね。それに、あちらの名前はいろいろうっとうしいから嫌です。……それよりも、私としては、なぜ貴方のような方が私に名を分け与えたのか、そちらのほうが不思議で仕方在りませんが」

まさかこの得体の知れない人外魔境の生き物が、自らの本質である真名の一つを自分につけるなど、実際名付けて貰い、その名を名乗って三十二年を経過した今でも信じられない。

言われたポテトは苦笑するだけで答えなかった。

「それは秘密です」

レメクはただ深く嘆息をついた。

ポテトと一緒にいた記憶は、そう多くない。

印象としても、強烈な個性を持っていたステファン老のほうが強すぎて、ポテトと過ごした日々の印象は曖昧だった。

ただ、共にいた。

共にいて、守ってもらっていた。

最も脆弱で、最も危険だった日々を、ただひたすら守ってくれた相手が、目の前の男だった。

その時の刷り込みのせいか、この相手にだけは絶対に頭が上がらない。

記憶も曖昧なぐらい希薄な印象しか残していないのに、おそらく、誰よりも自分に影響を与えた相手だ。

「では、それを秘密にさせているだろう、あなたのご主人様に早く会いに行かれたほうがいいのではありませんか？　私の家の方に先に来るなんて……いったい、どういうつもりで」

ふと、言葉の途中でレメクが声を途切らせた。言葉にしている最中に、「そのこと」に思い至ったのだろう。

あ、の文字で固まった相手に、ポテトは笑った。

脳裏に、暗い顔でずっと虚空を見ていた子供が浮かんだ。あの時の子供が、なんて素直に感情を表に出すようになったのか。

「ええ、あなたの導きの子に会ってきました。とても可愛らしかったですよ」

「……」

レメクは声もない。なぜか片手で顔を覆って俯いてしまった相手に、ポテトはぽん、と肩を叩いてやりながら笑った。

「なに。十年なんてあっという間です。あの子は仕込みがいありそうですよ。テーブルマナーなんか無茶苦茶で、顔中べたべたにしながら食事をしている様は大変素晴らしかったですから。ちなみにあのよだれかけは、あなたの作ですか？」

レメクはもうひたすらどんよりした顔でため息をつく。

ただし、頷きはしっかりとしてくれた。

「ええ、あの手の込みようといい、あの子に素晴らしく似合っていたことといい、あの『よだれかけ』はあなたの作でしょうとも。こっそりと小さく鈴（ベル）の刺繍まで入れちゃってるしてるあたり、あなたの芸の細かさがよく出ています」

褒められているというよりは、遊ばれているような賛辞である。

レメクは眼差しをどこか遠くへと飛ばした。おそらく、現実逃避したいのだろう。

その様子を笑って眺めて、ポテトは何気ない口調で問いかけた。

「それで、レンさん。あなたは今も、この国の王座には興味無いん

ですか？」
と。

※　※　※

雲が微睡むように紅色に染まり、空が深い濃紺のアイシャドーを降ろしていく。
闇に閉ざされるまでのわずかな時間をぼんやりと過ごしながら、ポテトは待っていた。
周囲に人影は無い。
ただ、深い森のような濃厚な木々の気配だけが満ちている。
ふと、その一角に唐突に「人」の気配が現れた。
濃厚な蜜のような甘い気配。けれど凍てつく氷山のような峻厳な気配。
その気配は、真っ直ぐに自分へと近づいてくる。
ポテトは口元に笑みをはき、レメクの時と同じように背後を振り返った。
過たず、そこにある黄金の輝き。
鮮やかな夜明け前の空の瞳。
誰よりも鮮明に、誰よりも確かたる存在感をもって自分を支配する黄金の魔女。
絶世と呼んでもいいだろう美貌を歪ませて、その魔女が第一声を放った。
「歯ぁ食いしばれェッ！」
「……はい？」
きょとんとする間もなかった。とんでもない一撃を左頬にくらって、ポテトは目を丸くする。
「……」
「……」
至近距離で、深蒼の瞳と、深紫の瞳が見つめ合った。

魔女の渾身の一撃を食らいながら、微動だにせずに立っている男は、恐ろしいことに皮一枚たりとも変形させていない。むしろ殴りつけた魔女の拳のほうが、金剛石を殴ったかのような痛みをうけていた。

「なんてことをなさるんですッ！」

一瞬の驚愕の後、ポテトは血相を変えて叫んだ。

有無を言わさぬ強さと早さで魔女の手を両手で包み込む。

ただそれだけであらゆる傷を治して、ポテトは顔を盛大にしかめた。

「私がどういう者であるか、一番知っているのは貴方でしょう！？レンさんのように反転属性を持っているのならともかく、あなたがこんなことをすれば、どういうことになるか分かってるはずじゃありませんでしたか？！」

焦りすぎて、言葉が変になっている。

切羽詰まった顔で視線をあわせてきたポテトに、冷ややかな怒気を込めて睨みつけていた魔女が初めて笑った。にやり、と。

「ふん。おまえのその顔が見てやりたかったのだ。手ぐらい安いものだろうが」

そのあっさりとした告白に、ポテトは呆れて口を開けた。

はは、と魔女は笑う。それはそれはとても無邪気な悪意ある笑顔で。

「コンのドグサレが。ァア？　十三年も音沙汰ないままだった上に、おまえはどーこーにー最初に挨拶に行ったんだコラァ？」

しなやかな指が飛んできて、ポテトの掌の皮膚を盛大につねり上げる。

「おまえがレメクに甘いのは知ってるし、あそこにちょうどおまえの領域から帰ってきた小娘もいるから、どうせいろいろくだらない理由と好奇心と悪戯心でちょっかいかけに行ったんだろうってぐらいは分かっているがな！」

バレている。

「なぁ、じゃがいも。私はおまえに言ったな？　ちゃんと言ったな？」

ぎゅむむむッ、と力一杯つねり上げて、黄金の怒れる魔女は、業火のような眼差しでポテトをにらみ据えた。

「あンの馬鹿助には野心なぞ欠片も無いから、いちいち気にするなと！！」

皮膚が千切れそうなほど力をこめてから、魔女はパッと指を離した。心底冷ややかな目をポテトに向けて、スタスタと離れていく。

「奴に断罪の紋章を与えたのも、私が私であるための戒めのためだ。あれにこの国をどうこうさせようとして与えてやったわけではない。それをなんだ、おまえ。人より偉くて賢くて長生きなくせに、最初の子供が初めて歩き出したのを見守る母親のようにオロオロしおってからに」

「……」

「言ったはずだぞ、『レメク』。この先の未来で、どんな選択を強いられ、どんな結末を迎えることになろうとも、おまえのおまえたる所以の力を借りるつもりは無いと」

そう言って胸を張った魔女を、夕日が後ろから照らし出す。

鮮やかな赤銅色に染まった女王に、ポテトは目を細めた。

眩しく思うのは、逆光のせいか、美しい人のせいか。

「人の世は人の理の中で治められなければならない。ならば、おまえの能力など無用なシロモノだ。おまえの無駄な美貌と同じぐらい無駄無駄なものだ。おまえもさっさと、予言など忘れてしまえ」

散々な言われように、ポテトはただただ嬉しそうな顔をする。ちなみにさっきから、ずっとこの表情である。

どこかうっとりとした目でこちらを見るポテトに、魔女は心底嫌そうな顔になった。

「おまえのその不思議回路は未だに健在なわけだな……なんで私が怒った時にばっかりそんな嬉しそうな顔をするんだか……」

盛大なため息をついてから、魔女はそこで、不思議なぐらい不自

然に視線を彷徨わせた。
「だ、だいたいだ……十三年だぞ！？　普通、手紙の一つでも寄越すものでは無いのか？！　世界中を見聞するのは、まぁいいことだろうさ。だがな、ちょっと長すぎだろう？！　なんで一度も連絡をとって来ない？！　しかも、なんだ！　久方ぶりにやっと会えたというのに、おまえのそのダメっぷりは！　す、少しはだな、もうちょっとこう、男らしく格好良いところを見せるとかだな、この私にしてみせたらどうな……なんでそんなガッカリな顔を即座にするんだ貴様はッ！！」
　途端にひどく残念そうな顔になったポテトに、魔女の怒りが炸裂する。
　ポテトは即座に嬉しそうな顔になった。
「くっ……！　貴様に幼年期を任せたせいで、あの馬鹿助もおまえに似た謎思考の朴念仁に育ってしまったし……えぇい、忌々しい！」
「ご主人様。そんなに褒められても困ります」
「褒めておらん！」
　目くじらをたてて怒るほどに喜色満面の笑顔を浮かべられて、黄金の魔女はガックリと項垂れた。
「ふっ……ベルよ。貴様の気持ちが微妙にわかるぞ。このなんとも言えない空振り感。ふふふ……後で拉致って一晩中語り明かそう……」
　ベル、の単語に、満面笑顔のポテトがちょっとだけ苦笑を浮かべた。
　魔女がとたんにジロリと睨む。
「……あれは、いかんぞ」
「おや。まだ何も言っておりませんが？」
「言わずともわかる。あれだろう。名前繋がりでおまえとレメクが闇の王であるように、あの小娘も黄金の魔女なのだろうが」
　ポテトは笑った。どこか薄ら寒くなるような笑みで。
「ええ。レンさんもうすうすは気づいているみたいですが」

「気づいてるさ。ただ、気づかないようにしておるだけだ。……全く、あいつもおまえと一緒でいちいち難儀なことをグダグダ考える」
これには苦笑だけを返して、ポテトはあえて返答しなかった。
魔女は豪華な黄金の頭を掻く。乱暴なその様まで美しくて、ポテトはこっそりと見惚れた。
「まぁ、なんだ。おまえはどうせ暇なんだ。しばらく王宮で大人しくでかい置物にでもなっておけ。おもしろいものを見せてやるから」
「おや」
興味を惹かれて声をあげると、魔女はにゅっと口の端を持ち上げて笑った。
どこか獰猛な笑みで、獲物を狩らんとするようにポテトを見据える。
「見せてやろうではないか。人の子が人を統べるために、どのような策を巡らすのかというのを」
人として。
言外に言われた言葉に、ただポテトは微笑む。
そうして、完璧な動作で一礼した。
ただ一人の主に、全てを託して。
「御意（イエス）、御主人様（マスター）。お望みのままに」

プロローグ

朝六時。

空は澄みきった紺青と金のグラデーション。淡く伸びた藍色のベールは、地表に近づくごとに色を変えていく。淡い藍から紫へ、美しい紫から赤紫へと。

透明度の高い宝石のような空は、どこまでも高く、どこまでも広く。光の塊を中心に、今この瞬間だけの輝きを周囲に敷いていた。

貴賤を問わずして与えられる至高の光景。それの名を夜明けという。

そんな輝かしい光を横目に見てから、あたしは正面に待ち受ける敵と向かい合った。

あたしの名前はベル。

あと数日で九つになる、メリディス族の女の子である。

レアポップモンスター並みに出現が稀なあたしの一族は、変な特徴を備えているせいで、悪漢共に狙われやすい。

そんなあたしのために、我が命の恩人にして未来の旦那様、レメク・（略）・クラウドール卿は様々な防御法を教えてくれた。レメクの友人であるバルバロッサ卿からは、『痴漢・悪漢・撃退法！』も教わった。

だが、二人から教わった攻略法では、決して倒せない敵がいる。

それが今、あたしの目の前に立ちふさがっている強敵だった。

あたしの右手には切り裂くナイフ。

あたしの左手には突き刺すフォーク。

二つの武器を手に、あたしは深呼吸をする。

落ち着け。落ち着くのだあたし。焦ってはいけない。例え三十を超える攻撃がことごとく無に帰していようとも、ここで焦っては事をし損じる！

あたしは目をカッぴらいた。

他の誰でもなく、あたし自身に対して戦闘開始を宣言する。
いざ！　尋常に、勝負！！
あたしは目を煌めかせ、最強の敵『肉』に向かって攻撃を開始した！
ぽーんっ！
あたしの閃く一撃を受けて、それは勢いよく正面に吹っ飛んでいく。
綺麗な弧を描いて飛んでいった肉（の一切れ）は、過たずそこにいるレメク向かって飛びかかり、
「……」
無言で上げた彼の掌に、軽々と防がれた。
（あぁ……あたちのお肉……）
あたしは口を半開きにしたまま、もの悲しい思いを込めてレメクを見つめる。
レメクは無表情を貫いて、そっと掌の上の肉をあたしの皿に放流した。
ぽんっと弾む美味しそうな肉。
生きている。
「……焼く前から死んでます」
心読まれた！
ぎくっと体を強ばらせたあたしに、レメクは深く嘆息をついた。
「ベル」
……はい。
「先程から何度も言ってますが、そんなに一生懸命『私に』食べさせようとしなくてもいいですから」
……はい。
「そしてそんなに勢いよく立ち向かわなくても、ステーキは逃げませんから」
……はい。
しょんぼりと俯くあたしに、レメクは手本のために自分用のナイ

フとフォークを握る。
優雅な手が操るフォークは、あたしの動きとは全然違う洗練された仕草で肉をプスッと指した。
「いいですか？　まず、こちらのフォークで肉を軽く押さえ……軽くですよ？　飛びかかるようにして突き刺してはいけませんよ？　そうしておいて、こちらのナイフで肉をゆっくりと切るんです」
レメクのナイフとフォークは、流れるような動きでステーキを切り分ける。
あたしの目はその肉に釘付けになっていた。
レメクがチラッとあたしを見る。
口からよだれが落ちそうなあたしを。
「……ベル」
……あい。
「今、切り分けた分を」
……切り分けた分を!?
「口に入れる一欠片分に、もう一度切り分けてください」
レメクの言葉に、しゅーん、とあたしは肩を落とした。
もうこのまま口にポイしてもいいんじゃないかと思うサイズだが、これでもまだ食べてはいけないらしい。
あたしは悲しみを込めた目でレメクを見上げてから、皿の上の『切り分けられた分』へと向かう。
大きさはレメクの人差し指一本分ぐらい。これをあたしのちっこい親指サイズに切るのです。
（まずは、左手のフォークで突き刺すんだったよね……）
あたしはそろそろと左手を動かした。
勢いよくやってはいけない。やってはいけないのだ。例えどんなに焦っていようとも！
あたしは葛藤のあまりプルプル振るえるフォークを実にゆっくりと肉に近づけていった。
なぜかその間にレメクが席を立つ。そろそろとテーブルから離れ

……壁際へ。
どういう意味!?
あたしはムッと口を引き結び、そうして肉をフォークで突き刺した!
すぽーんっ!
先程よりも勢いよく、お肉（の一欠片）が高く飛び立つ!
それは過たず、またしてもレメクの方へと飛んでいき、
「……」
あ、の形で固まったその口へとジャストインした。
飛び込んできた肉に、目を丸くしたレメクがぱくんと口を閉じる。
（……ぁー……）
思わず半開きになったあたしの口から、声なき声とよだれが落ちた。
「「……」」
レメクとあたしの眼差しが交錯する。レメクは何やら物言いたげだ。しかし、口に物が入っているので喋れない。
さすがに出すわけにもいかず、レメクは掌で口元を覆ってから、なにやらもぐもぐしはじめた。
あたしはジッとそれを見つめる。
例え掌で隠されようとも、口が動いてるぐらいはわかるのです。
もぐもぐもぐ……あぁ……なんて丁寧に咀嚼しやがるのか。
（……あたちのお肉……）
ジーッと見つめていると、レメクがもぐもぐしながらテーブルに戻ってきた。
もぐもぐもぐ……もぐ……こくん。
とても上品にお召し上がりになったレメクは、口の前から掌を退け、なんとも言い難い表情であたしを見る。
泣きそうな目のまま、口を半開きにしているあたしを。
「……ベル」
……あい。

「……そんなに私に、肉を与えなくても構いませんから」
……あい。
しゅん、と見上げながら肩を落としたあたしに、レメクはもう一度自分のナイフとフォークを握る。
そのまま何も言わず、音すらたてずに肉を切り分けた。
一欠片をフォークに刺して、あたしの方へ。
ぱくっ！
いささかの逡巡もなく飛びつくあたし。口の中いっぱいに、ジューシーなお肉の味が！
（……おいちいッ！！）
思わず涙が出そうだ。
もぐもぐと懸命に咀嚼するあたしをじっと見てから、レメクはさらに肉を切る。
必死に味わってから嚥下したあたしの前に、差し出される肉の欠片。
あたしはまたしてもそれにかぶりついた。
もっぎゅもっぎゅもっぎゅ……
無言で肉を切るレメクと、それを食べるあたし。
白々と明ける春の空は、いつのまにか淡い湖の色。さわやかな朝の光に照らし出されたテーブルには、あちこちに食べかすがくっついている。
テーブルマナーを学びだしてから約一ヶ月。
春の大祭は、あと七日にまで迫っていた。

1　魅惑のテーブルマナー

誰にだって『得意なもの』と『不得意なもの』があるのです。
例えばあたしの場合は、頭を使うようなお仕事。
大変、大変、苦手です。
といっても、別にお馬鹿ではありません。本当です。
面倒なのが嫌いなのです！
そして得意なのが体を動かす仕事のほう！
……なぜそこで生暖かく笑うのです！？
たんに体動かすのが好きなのです！
エエ。これを言った瞬間におじ様にはやんわり微笑まれましたが、あたしはやるときゃやる女なのですから、得意じゃない頭脳プレイだって一応はちゃんとできるのです。
ええ。任せなさいってなもんなのです！！
一かける五は百です。完璧です！
……なぜか神殿の熊さんとマニアさんには爆笑されましたが（……失敬な！）。
さて、それはともかく。
最近叩き込まれ……いえ、げふんげふん……教えてもらっている礼儀作法ですが、これはもう難しくていけません。完璧不得意分野です。体で覚えろったって無理です。

まず歩くことすらできませんので！

なんですかあの長ったらしいスカートは！
廊下擦るんですよ！？　ゴミ集めるんですよ！？
見た目ちょっと綺麗ですけどあの裾ってばもうボロボロのゴミゴミなんですよ！？
廊下に布巾はいりません。スカートの裾で綺麗に掃き清められて

ますから。
そんな長いスカートを穿かされた日にゃあ、さすがのあたしも裾踏んで飛びます。
毎回ぽんぽん飛ぶあたしに、さすがのレメクも哀れに思ったのか、口元を押さえて後ろ向いてぷるぷる震えたりします。あれはきっとあまりの悲しみに涙を堪えているに違いありません。なぜなら振り返ったときの彼の目じりには、うっすら涙があるのですから。
潤んだ瞳、グッジョブ。
そんな愛すべきレメクのために、あたしも毎日必死です。
しかし、必死になったからといって、礼儀作法とやらが一朝一夕で身につくはずがありません。
かの憎らしい敵は綺麗な刺繍入りの装丁本の形をとって、あたしの目の前にデンと構えてくれやがるのです。
読み上げてくれるレメクの美声は大好きなのですが、内容はいかんせん愛せれない。
嫌な内容をずっと読み上げられるのもくやしいので、あたしは一生懸命恋文を書いて件の本に挟んでみました。レメクは速攻摘みあげたうえ丁寧に小さく小さくたたみ、自分のポケットに突っ込みやがりました。
読んでもくれませんよ、あの人。
……しょんぼりだ。
いやまぁ、文字習いたての身だから、きちんとした文になっているのかどーか微妙ですけど。
ちなみに文字に関しては、あたしだけが無知だというわけではありません。
もともと、この国の識字率はそれほど高くないのです。
王侯貴族や協会の神官、町や村の長など、一定の裕福そうや商人はそれなりに文字が読める。
けれど、一般市民やあたしのような最下層の人間には、文字など全くわからないのです。

だからこそ看板は絵や図で描かれているのであります。
商人が文字を覚えるのは、商品の取引などで必要だからで、彼らは店の親方などに弟子入りして、商法と一緒に文字や数字を習います。
大きな商会であれば、富裕層との付き合いのために一定以上の教養を教えたりもするらしいのです。
とはいえ、それは『よっぽど』の場合ですが。
なにせ、礼儀作法もテーブルマナーも、普通に暮らすうえでは必要のないものなのだから。
そう。普通で暮らすうえでは。

※　※　※

はぁぁぁ……
あたしは深くため息をつき、右手に持っていた布を回した。
シューンという音をたてて、テーブルクロスの上に布が弧を描く。
精一杯背伸びしてもう一回転。
テーブルクロスの上の食べかすが、あたしの動かした布の範囲だけ綺麗に取り除かれた。
ふぅぅぅ……
あたしはもう一度ため息をつく。
あたしの目の前には、やたらと立派なテーブルがあった。
台所にあるテーブルなのだが、黒光りする威容に立派な物である。
もちろんセットの椅子も非常に立派で、あたしは今、それの上に靴を脱いで立っていた。
こうしないと、あたしの身長ではテーブルの上の食べかすを集められないのである。手が届かないせいで。
もちろん、ちんまいあたしの体では、テーブルが大きすぎて作業がなかなか終わらない。

この家の家具はどれも立派で、それ自体はいいのだが、とにかく掃除に時間がかかるのが難点だった。

（台所にっ、こんなにっ、大きなテーブルっ、いらないっ！）

フンッフンッと鼻息も荒く布を動かしたあたしは、数分後にようよう食べかすを集め終え、テーブルクロスをエッチラオッチラと小さく畳んだ。

それを床に置き、その上に食べかすを入れた器を置く。器の中は、いろんな食べこぼしでいっぱいになっていた。

（ふぅ……！）

労働に汗がキラリと光る。家事はなかなか重労働なのだ。

それにしても、テーブルの上の食べかすなんて、昔のあたしならひょいパクと口に放り込んでいただろう。

けれど、それはしてはいけないとレメクにキツく言われたのだ。

とてもはしたないことだから、と。

だからもったいないけど捨てないといけない。

……本当にもったいないと思うなら、あたしはもっともっと、綺麗に食べれるようにならないといけないのだ。

あたしは水で濡らした布を絞り、さらに深く嘆息をついた。

椅子によじ登ってテーブルに対峙し、キュッと唇を引き結ぶ。

零れたスープなどで汚れているため、テーブルも綺麗に拭かないといけない。だが、なんだか拭いてる途中で余計な水がぽたぽた落ちて、なかなか掃除が終わらなかった。

（……あたし、何やってんだろ……）

ぐい、と袖口で目元を拭う。

何度も何度も綺麗に拭いてるのに、しばらくするとまたポタポタと水滴が落ちた。

（……何、やって……）

パタッと、一際大きな水滴が落ちる。

……今日も自力でご飯を食べれなかった。

さすがに一月もそんな状態が続くと、情けないを通り越してかな

り辛い。
レメクはそんなあたしを叱ったりしないが、食事中ずっと憂鬱そうな困り顔をしている。
そして時折、なんとも言えないため息をつくのだ。
それがいっそう辛かった。
（……どうしよう……）
春の大祭まで、あと七日しかない。
もうそれほどまでに、時が迫っているのだ。
祭りの始まりと同時に開催される王宮の夜会に、あたしとレメクは出席しないといけないのに……
（……！）
あたしは布をギュッと握った。
正直、一日一日が辛かった。
路地裏で残飯を漁っていた子供が、いきなりそんな場所に出てまともに振る舞えるはずがない。足の運び方や挨拶の仕方だって、何度も何度も間違えている。
本番になったらどうなるのか。……考えるだけで目の前が暗くなった。
（どうしよう……！）
ゴシゴシとテーブルの上の水滴を拭き取ると、後ろの方でノックの音がする。
台所の入り口からだ。
その音に、あたしは慌てて目元を拭う。
今日はケニードの家に遊びに行く予定になっていた。だから、きっとお迎えが来たのだ。
そう思って椅子から飛び降りたあたしは、振り返った瞬間、のけぞった。
「おじゅ……ッ！？」
変な声が出た！
のけぞったあたしのすぐ真ん前にいたレメクは、あたしの声と動

作に眉をひそめる。
「……おじゅ？」
（あああ気にしないでおじ様って言おうとしてトチったの！）
ワタワタと腕を振るあたしに、レメクは首を傾げつつ手を伸ばす。
きょとんとそれを見守ると、そのまま手が伸びてあたしの両脇をガッシと掴んだ。
（おりょ？）
そのまま猫でも抱えるようにしてヒョイと持ち上げる。
「アロック卿の馬車が迎えに来ていますよ」
（あい）
あたしは頷く。
宙ぶらりんな足がぷらーんぷらーんと揺れた。
「私は王宮に行ってますから、しばらく大人しくしていてください」
（あい）
あたしはもう一度頷く。
レメクはそんなあたしを見て、ちょっとだけ口元を笑ませた。
そんな小さな笑みでも久々に見る気がして、あたしもちょっと笑う。
レメクはあたしを抱きかかえ直すと、反射的に張りついたあたしの背をポンポンと叩いてくれた。あたしはフンフンと匂いを嗅ぐ。
優しくて暖かい匂いは、どこかちょっぴりせつなかった。
「ベル」
すりすりとレメクの首筋に頬ずりをしていたあたしに、レメクが囁く。
「焦らなくてもいいんですよ」
その声はとても優しく、そして暖かかった。
あたしは目をぱちくりさせる。
……もしかして、めそめそしてたのを見られちゃったりしたんだろうか？
ぱちぱちと目を瞬かせたあたしに、レメクはただ穏やかに微笑む。

あたしはその笑みに、何も言わず、ただニッコリと精一杯の笑みを返した。

※　※　※

我が未来の旦那様（予定）は、非常に位の高いお人だった。

なにせ王国でも十数人しか使い手のいない『紋章術師』であり、また、裁判すらすっ飛ばして人を裁ける『断罪官』である。

次期男爵である我が友ケニードや、侯爵家の出であるバルバロッサ卿が一歩も二歩も退くほどの人物。それがレメクという男だ。

紋章術師は出自問わず厚遇され、身に宿した紋章に相応しい爵位が与えられる。

与えられる爵位は、だいたいが準伯爵位。

ただしこれは、紋章術師個人に与えられる爵位であって、世襲することはできないのだそうだ。

紋章術師が爵位を子供に与えようと思えば、自分の持っている紋章を子供に継承させないといけない。そうすれば、紋章の継承と同時に、その子供に爵位が移ることになるからだ。

もちろんその場合は元紋章術師は『唯人』になって、今まで持っていたあらゆる権限を失ってしまう。

紋章に爵位がくっついているのだから、紋章が移動すれば爵位も移動するため、そういう風になってしまうのだ。

そんな事情もあって、紋章術師のお家では時に『紋章』の跡目争いで血なまぐさい事件にまで発展するのだとか。

……レメクに教えられるまで知らなかったが、紋章術師というのも、なかなか大変なものであるらしい。

まぁ、ぶっちゃけ、あたしには関係ないのですが。

さて。その紋章術師の爵位や王宮内の地位だが、これは身に宿した紋章のよって決まるらしい。

一口に『紋章』といっても、内容や力はピンからキリで、中には

ほとんど役に立たないものもあるのだとか。
レメクがこっそり教えてくれた話によると、国が厚遇する紋章というのは、悪用されれば甚大な被害を受けるような紋章に限られているらしい。
例えばレメクの持っている紋章がそれだ。
また、我らが女王陛下が持っている『門』の紋章などもそれにあたる。
他にも自然的な力である『火』『水』『土』『風』『雷』『木』『雪』。おもしろい所では、金属である鋼、それに、鍵の紋章なんていうものもあるらしい。
それらの力の強さ、重要度、影響力などを吟味して、地位を決定していくのだそうだ。
レメクの紋章術師としての地位は、詳しくは言ってくれなかったがかなり上のほうらしい。
王家の秘術であるはずの『罪』と『罰』の紋章や、秘術中の秘術とされる『闇』の紋章を持っているぐらいだから、トップクラスなのは間違いない。
けど、頂点かと問えば「違う」と返されたので、まぁ、三本の指に入るぐらい、とったところなのだろう。
（……てゆか、じゃあ頂点はいったい誰……？）
ものすごく疑問だ。
ちなみにレメクが紋章術師として賜っている爵位は『侯爵』位。
準では無く、れっきとした侯爵様である。
これだけですでに雲上人だが、この上にさらに『断罪官』としての位がくっつく。
これは特殊かつ独立した権限を持つ役職で、その力は時に王すら凌ぐ。
人を裁くことに特化しており、簡単に説明するなら、そう！　『一人裁判』！
法廷でいっぱい人が集まってする裁判を、いつでもどこでも一人

でちゃっちゃとやっちゃえるのがレメクなのである。
普通はいろいろややこしいのに。
とはいえ、レメクはこっちの方の職務は毛嫌いしていた。
感情を制御できないから、人を裁きたくないのだそうだ。
一月ほど前、あたしを拾ったせいで責任者になってしまった『孤児院一斉粛正』で、レメクは断罪官として悪党どもをズバッと裁いた。その時に、そう零していたのである。
時に冷酷っぽく見えるぐらい冷静沈着な殿方だが、それと同じぐらい、彼はものすごい直情的な正義の漢なのである。
たぶん。
……いや、あたしが見たレメクというのは、どう見てもそういう人なのだが……
（でも、街の誰に言っても信じてもらえないのよね……）
レメクと一緒に買い物に行くと、たいていの人は道を空け、遠巻きにしげしげとあたし達を眺めている。あたしのよく聞こえる耳で人々の噂話を集めたところ、どうやらレメクは『厳格』で『冷淡』で『感情がない』人だと思われているようです。
そこであたしは胸を張って断言しました。
実はおじ様、ものすごく可愛くて世話焼きでとってもいい匂いのする人で、熱くて立派なモノをイロイロ持ってる人なのです！　そしてきっとエプロンドレスがこの上なく似合う人なのです！！　と。
なぜか全員に顎を落っことされ、おまけに飛んできたレメクにスピーチを止められたせいで、彼らの間違った知識を撤回させれませんでしたが、熱意だけは伝わった気がいたします。
彼らがレメクを見る眼差しが、ほんの少ぉし変化したから。
とはいえ、未だ街の大半はレメクを誤解したままだ。
しかし、あたしが何かするたび血相変えて飛んでくるレメクを見ていれば、きっと皆いつかは理解してくれるだろう。彼は確かに、熱くて立派なモノをイロイロ持っている、と。
それはともかく。

正義漢ゆえにあたし達の現状に怒り、同じく正義漢ゆえに、感情で裁いた自分を許せない。

約一月前に行った『断罪』で、女王様達はすごく褒めてくれたのに、レメク自身がものすごい自己嫌悪に陥っていたのは、きっとそのためなのだろう。

その自己嫌悪っぷりは凄まじく、しばらく鬱っぽく湿り、時折気もそぞろだったほどだ。

そんなレメクを見ていられず、あたしは慰めと励ましを込めて、いそいそと一緒にお風呂に入ろうと画策をしたのであります！

ええ。宿のおねえちゃん達の情報によれば、それが一番効果的に元気になってもらえる方法なのだそうです。

ちゃんとマイタオルとマイ風呂桶を用意して、お風呂に行くレメクの後ろからテクテクとついていったわけですよ。

……何故かいつも出入り口でバトルになりましたが。

そして一度も実行できなかったです。放り出されて。

……しょんぼりだ。

いや、それもともかく。

そんな風に地位の高いレメクだから、もちろん教養の方も大変素晴らしい。

お家が貴族であるケニードやバルバロッサ卿にだって負けてない。

で、そんなお三方から素敵なレディになるべく、暇を見つけては特訓されているのだが……

……少しは上達してるのかなぁ……あたし……

※　※　※

「あっはっはっは！？」

あたしの近況報告を受けて、なぜか疑問系で大笑いしやがったのは、一ヶ月ほど前に友達になったナナリーだった。

腹を抱えて床をバンバン叩きながら転がるという、なかなかに難

易度の高い大爆笑を披露してくれているが、あたしのこめかみは引きつる一方である。

てゆか、ナナリー。笑いすぎ。

「あのさぁ、ナナリー。あたし、これでも傷ついてるんだけど？」

あたしの声に、ナナリーは「ごめんにぇ？」とどうにも笑っている口調で謝る。

あたしは盛大に嘆息をついて、長いスカートの裾を懸命に避けながら壁際にもたれかかった。

あたし達がいるのは王都北区の中央、絢爛豪華なアロック邸だ。

我が友ケニードの街屋敷（タウン・ハウス）は、一月程前に行われた『孤児院一斉粛正』の際、行き場を失う孤児達の初期避難場所となっていた。

その後、ほとんどの孤児は新しく用意された孤児院に移ったが、現在も一部の孤児はそのまま残っている。

そのうちの一人がナナリーだった。

「あー……笑った笑った。いやもぅ、なんであんたってそうなんだか！」

どういう意味！？

未だクツクツ笑っているナナリーを睨みつけて、あたしは頬をふくらませる。

「なによ。ナナリーだって、テーブルマナー苦手だって言ってたじゃない！」

「当たり前じゃない。今までずっと手づかみだったのにさ、いきなり銀の匙と銀のフォークと銀のナイフを使いなさい、なーんて言われたって、上手くできっこないわよ」

ナナリー以下数名の孤児仲間は、ケニードの屋敷で雑用をしながらいろんな教育を受けている。言うなれば我が同士だ。

しかし、同じくレディ教育の辛酸を舐めているはずなのに、なんでそんな風に大爆笑しやがるのか！

「でもさぁ、ベル。あたし、食べ物つっつく度に『クラウドール卿』に飛んでいくような変な食べ方、しようとしてもできないわよ？

ちゃんと自分の口に持って行けるもの」
……むぅ！
痛い所をつかれて、あたしはぎゅむっと口を噤んだ。
ナナリーは目尻に浮かんでいた笑い涙を拭いながら続ける。
「誰よ？　豆つついて『クラウドール卿』を呼吸困難に陥らせたの。あたし、あれほど笑ったのは初めてよ？」
一番最初のハプニングまで持ち出されて、あたしはいっそう口を引き結んだ。
豆鉄砲と化した豆に急襲されたレメクが、喉の中を豆で打ち抜かれて延々咳き込むという、前代未聞の大珍事である。
えぇ、あれはとても大変な事件でした。
一瞬の惨事をつぶさに見てしまったため、あたし達一同の心に罪悪感とトキメキを受け付けてくれちゃったのですから。
……いや、ちょっと涙混じりになっちゃったレメクが色っぽかったとか、そんな不埒なことは考えてないですよ？　可愛かったとかそんなこと思ったりもしてません。はい。
ちなみに毎回あたしの『珍テーブルマナー』の犠牲になるレメクは、最近では鉄仮面を用意しようかと本気で悩んでいるようだった。
街の散策中に、長い間防具商の前で立ち止まっていたのを覚えている。あの目は本気の目だった。
「……あたしだって、別に、おじ様を襲うつもりでご飯食べてるわけじゃないわよ」
何故か自然にレメクに向かって食べ物が吹っ飛んでいくだけで。
あたしの抗議に、ナナリーはまたも笑う。
「そ、そういうナナリーこそどうなの！？　ちゃんとテーブルマナーできてるの！？」
「えー？　まぁ、時間はかかるし、上手く手が動かなくてテーブルクロス汚しちゃうけどさ、そこそこはできてると思うわよ？」
さらっと返された言葉に、あたしはガーンッ！　と棒立ちになった。

「な、なんで?!　どうやって?!」
「……いや、アタシとしてはさ、むしろどうやったらあんな風に特定の人物の口に向かって食べ物を飛びかからせれるのかっつーか……まぁいいけど」
　よくないわよ!?
「ようは慣れでしょ?　未だにフォークとか落としちゃうけどさ、最初よかだいぶマシになったし。でもさぁ、パンまで小さく千切って食べなきゃいけないのには、まいるよね。かぶりつくだけでいいじゃんとか思わない?」
「思うわ」
「だよねー。けどまぁ、確かに格好はいいわよね。こう、なんていうの?　上品、って感じで。なんつーかもう、格好つけて食べる、を意識するとけっこうできちゃうのよ。わかる?」
　格好つけて食べる……
　あたしは日々の訓練を思い出した。
「……むぅ」
「その様子じゃ、とにかく食べることに必死だったわけね……」
「だって、おじ様の料理すごく美味しいのよ!?」
「そんなの理由になんないわよ」
　ぅぁっ!　レメクと同じこと言われた!!
「アタシ思うんだけどさ、結局の所、テーブルマナーってそういうもんなんじゃないの?　食べ方なんてどんな風に食べたって同じだと思うけど、こう、道具使ってテキパキ食べてるのって、見てくれはいいわけよ。そういうのを追求してんじゃないのかな?」
　なるほど。
　あたしはおおいに納得した。
　確かに、『格好良く』を追求すれば、手づかみよりもナイフとフォークのほうが断然良い。
「格好良くかぁ……」
「あんたのその格好だってそうでしょ?　長いスカートって、見て

る方は綺麗でいいなぁって思うもの」
あたしの練習用スカートを指さして笑うナナリーに、あたしは顔をしかめた。
「でもこれ、すっごい歩きにくいわよ？」
「うん。あんた見てて、そうだろーなーって思った。けどさ、ハタから見てるほうにすれば、短いスカートより長い方が綺麗だなって風にも思うわけよ」
ナナリーが着ているのは、紺色のワンピースだった。
スカートは膝下十センチほどで、その上からエプロンをかけている。
ナナリーはもともと可愛いから、そんな格好もばっちり似合っていた。
ちなみにあたしが着ているのは、レメクが練習用にと長めに作ってくれたスカートだ。
なんと、端が床を擦るほどに長い。
これを踏まないように歩くのが一苦労で、あたしは常にビッタンビッタン床に倒れていた。
……そろそろ鼻もへこみそうです。
「こんなの着て踊ったりできる貴族って、やっぱりおかしいって思うわ」
思わず陰鬱にぼやいたあたしに、ナナリーは同情含みに苦笑する。
「だからさ、慣れなんでしょ？　どんだけ綺麗に格好良く動けるかっていうのを競ってるような連中なわけだから。服とかに凝ったり、髪型に凝ったりして」
そう言ってから、ナナリーは「ハッ」と鼻で笑った。
「アタシ達からすれば、連中のアレって、ナニアレ？　って感じだけど……まぁなんつーか……あんたの奮闘ぶりみてたら、あの連中も大変な努力してるのねーって感じになったわね。あんたすごい大変そうだし」
「それよ。あたし、あの連中がこんな苦労してあんなお高い格好し

てるとは思わなかったわ」
「だよねぇ。ん～、まぁ、けどあっちは好きでやってるんだから、同情はしないわよね。嫌ならやめれば？　って感じだし。あんたの場合、『クラウドール卿』に恥かかせたくない一念なわけだから、なんつーかもう……ガンバレって感じ」
……うん。
あたしはしょんぼりと頷いた。
頑張らないと、レメクがすごい恥をかくのです。
あたしがこうしてテーブルマナーやら長いスカートやらに奮闘しているのは、七日後に開催される春の大祭の夜会に出席するせいだ。
女王陛下から招待されちゃったあたしとレメクは、ペアで出向かないといけないのだ。
レメクはいい。あの人は完璧だ。外見も内面も動作もばっちりオッケーだ。
けど、あたしは違う。疑問に思う余地も無いぐらい、ダメダメだ。
外見はもうどうしようもないし、内面も直すには時間無さ過ぎて諦めるしかない。
けど、せめて動作ぐらいはそこそこきっちりさせたいのだ。
でないと、一緒にいるレメクに迷惑がかかる。
あたしと一緒にいる、ということは、そういうことだ。あたしの全部がレメクの評価につながってしまうのだ。
それに思い至った瞬間、あたしは「お城の夜会」のイメージが一気に暗黒街のソレになってしまった。……恐すぎる。
どうしよう。裾踏んで倒れたら笑われるだろうし。ご飯がっついちゃったら、こそこそ言われちゃうんだろう。
あたしは仕方ない。嫌だけど、自分でやったことに笑われたんなら、しょうがないって思うしかないじゃないか。
けど、レメクまで笑い者になるのは嫌だ。絶対にごめんだ！
ぎゅっと握り拳を作ったあたしに、ナナリーは笑いを引っ込めた。
「あんた本当に好きなのねぇ」

……真面目に言われると照れるじゃないか。
テレテレと頷いたあたしに、ナナリーはやや遠い目になりながら苦笑した。
「あぁ、まぁ、脈ないわけじゃないっぽいし。他の連中はともかく、アタシは応援するわ」
む？　なにか気になる言い方されたぞ？
「他の連中って？」
「えー、あー……まぁ、ほら、あんたの仲間とかさ」
むむむ？！
あたしは眉をぎゅっと寄せた。
あたしの仲間っていうのは、あたしが孤児院にいたときの孤児仲間だ。
「えー、ナニ、あたし、無謀とか思われてるわけ？」
「よくわかるわね、あんた。まぁ、そんな事言ってたわね」
むきゃーっ！！
「あぁほら落ち着きなって。普通、そう思うのが当然じゃない。あんたさ、もしアタシがすっごい身分上ですっごい格好良くてすっごい立派な『お貴族様』とか『大神官様』に惚れたとして、おーイケルイケルがんばれー、なんて言える？」
「……あ、相手によっては言うかも。ナナリー可愛いし」
「……あんたに可愛いって言われると、嬉しい反面複雑ね。鏡見ろっていうか……まぁ、あんたはそういう判断か。んー……これはあれよね。男女の違いのせいかなぁ？」
どういう意味だろう？
首を傾げたあたしに、ナナリーは心持ち声を潜めて言う。
「あのさ、ほら、アタシ達はさ、なんていうか憧れるじゃない。格好良い身分が上の人との恋愛っていうか、そういうの。仲間がそれに該当すると、不安もすっごいあるけど、脈ありそうだったら『がんばれっ！』て思っちゃうわけよね。羨ましいとか、そういう気持ちもあるけど」

うんうん。

「けど、なんて言うのかな……男にとっちゃ、相手の凄さのほうに憧れちゃって、無理無理って思うっぽいのよね。気持ちはわかるけど、相手が悪すぎるからやめておけ、って言う感じかな」

むむぅっ！

「まぁ、確かに相手がちょっとねぇ……反則じゃん？　あの人。アタシ、断罪官なんて役職初めて知ったわよ。王様でさえ裁けちゃうだなんて、超絶対権力じゃない。しかも王様と仲いいし。聞くところによると、宰相様とか教会の一番上の人とも顔見知りなんでしょ？　どんな人ヨって思うわよ。雲の上スギ」

むむむぅッ……！

「も、ぜぇーったい放っとかれないね。今まで散々綺麗なお姫様とかに言い寄られてるよ。あの王様とだってすっごい仲良いし。……てゆかむちゃくちゃお似合いじゃない？」

にゃにをぉおッ！？

さらりと言われた問題発言に、あたしは大あわてで反論した。

「アウグスタは違うわよ！　それだけは絶対！　確実！！」

「なんで？」

「なんで、って……なんでというか……なんていうか」

あたしは困った。

あの二人をよく見ていればわかるのだが、それは言葉にするのは難しい感覚なのだ。

「なんていうか、こう……親子を見てるような、っていうか……うーん、家族愛？　みたいな感じ？　に見えるのよ。アウグスタとケニードがラブラブか否かっていうのと同じぐらい、ちょっと傍目にハテナ？　な感じよ。あの二人」

「えー！？　ちょっと、エロックじゃなくてご主人様と陛下ってどうなのよ？！　なんで例えにそんなの出てくるわけ？！」

なんかすごい大反応された。

いや、気持ちはなんとなくわかるけど。

「いや、美形同士っていうのと仲良いっていうのなら、ケニードだって立派に美形で仲良しじゃない。そういう繋がり」
「そ、そんな繋がりで……」
「ナナリーだっておじ様を引き合いに出したじゃない！」
「い、いやまぁ、そうだけど！」
なにやらごにょごにょ言ってる。
あたしは首を傾げながら、そういえばと遠い目になった。
「それにねぇ、なんていうか……美形繋がりなら、むしろポテトおじいちゃ……じゃなくて、お父様のほうがそれっぽいのよね」
「？　誰がなんだって？」
あ。ナナリーはポテトさん知らないんだった。
「うん、なんていうか、すごい美形の……年齢不詳の人。おじ様の名付け親なんだって。アウグスタと並ぶと壮観だろうなぁ……」
なんていうか、凄そう。いろんな意味で凄そう。
あの超絶美形に負けないのは、たぶんいろんな意味で最強なアウグスタぐらいだろう。
「ふ～ん？　けどさ、『クラウドール卿』の名付け親なんだったら、相当な年上なんじゃない？」
「……いやぁ……どう見てもおじ様と同い年に見えるけど……」
実年齢は知らないが、外見年齢なら二十代後半だ。
あの若さは、悪魔とか妖怪レベルじゃなかろうか？
ちなみに彼に対するレメクの説明は一言だった。
人外魔境。それだけ。
……説明になってないのに、言い得て妙なのはコレ如何に？
「……ごめん。あんまり説明できないから、流しておいて……」
「んん、まぁ釈然としないけど。あんたがそこまで言うなら、このネタはここまでね」
あい。
あたしはコックリ頷く。
「まぁでも、あの人がお姫様達のアタック受けてただろうことは予

想できるでしょ？　あれだけ格好良くて凄い人なんだから」

うん。それはまぁ……

ナナリーの声にしょんぼり肩を落とすあたし。

ナナリーは肩をすくめながら言う。

「だからさ、あんたはそれを押しのけるぐらいの女になんなきゃいけないわけよ。綺麗なだけじゃダメだし、可愛いだけじゃダメで、教養もあってお金も持ってるだけでもダメ。……どんな超人なわけ、って思うでしょ？」

思う。思うとも。

「けど、そんなお姫様達だって振られてたのなら、それぐらい超人にならなきゃ落とせないってことじゃん。カッフェ達が無理無理って言うのは、そういう意味からだとアタシは思うのよね。……まぁ、実際の所、あんたは脈あると思うけど」

マジですか？！

目を剥いたあたしに、ナナリーはぎょっと身をひく。

「そ、そんなに反応しないでよ！　ただの勘なんだからさ！　根拠は無いけど、なんつーか、あんた等のやりとり見てたらね、なんつーかこう……あぁ、いけるんじゃないかな、って思うわけ。かといって努力しなきゃ、逃がしちゃうだろうけど」

あたしはぐっと握り拳を作った。

努力するとも。しないでか！

「とりあえずはテーブルマナーと、そのスカートで歩く練習よね。ご飯食べるたびに、食べ物に襲われてたんじゃ、あんたの大好きな『オジサマ』も逃げちゃうだろうし。長いスカートですっ転んでちゃ、貴族の奥さんなんてやってられないでしょ」

「……ぅぅ。結局そこに落ち着くのね」

「当たり前じゃん。あんただってそのためにがんばってるようなもんなんだし」

まぁ、そうなんだけど……

頷きながら、あたしはしょんぼりと肩を落とす。

「でもね、一ヶ月たっても何の進歩も無いなんて、どうかと思うのよ」

「……まぁ……あの謎なテーブルマナーはどうかと思うわね……」

豆鉄砲事件を思い出している気配がありありと伝わってくる。

とりあえず、笑うなら声だして笑え。

「と、とりあえずさ、やれるだけやるしかないね。あと七日しか無いんだし。……って、あれ？」

ふと、そこでナナリーは顔を上げた。

廊下の向こうに視線を向ける彼女に、あたしも視線を追い……あれれ？

「カッフェ。あんた、ナニやってんの？」

なんか一丁前に料理人のお仕着せをつけたカッフェが、大きなワゴンを押している姿を発見した。こっちに近づいてきている。

あたしの声に、カッフェは顔を上げ、嫌そうに顔をしかめた。

「あのな、それがお茶を持ってきてくれたダチに言う言葉かよ？おまえが来てるからって、うちの先生が大急ぎで作ったスコーンとクッキーだよ。へへ、オレも手伝ったけどな」

実は料理人志望だったというカッフェは、現在ケニードの所で台所の手伝いをしている。

使用人の一人としてがんばっている姿は、なかなか感動ものだ。

「あんたが手伝ったんなら、完璧な仕上がりにはならないんじゃないかい？」

意地悪くナナリーが言う。

だが目が笑っていた。

「うるせぇな。いいんだよ、先生にとってはベルは賓客だけど、オレにとってはダチなんだから。まぁ、味見してもらう意味もあるんだけどな」

「なに？　あたし実験台なわけ？」

あたしも笑いながら意地悪く言う。

カッフェは軽く肩をすくめた。

ちなみにカッフェの目も笑っている。
「ま、師匠の味に比べたら完璧落ちるけどよ、いいもん食わせてもらってるお前なら、味の良し悪しがよくわかるだろ？」
あたし達は顔を見合わせて共犯者の笑みを浮かべた。
ちらっと目が近くの部屋に向けられる。
「あそこの部屋、使っていいんだっけ？」
「あぁ、いいって言ってたよ。じゃ、そこでお茶しよっか？」
「そうしようぜ」
あたし達はにやにや笑いながら、大急ぎで部屋へと駆け込んだのだった。

※　※　※

「あ、前より美味しくなってる」
大量のクッキーを前に、ナナリーはそう評した。
一緒に頬張っているカッフェは難しい顔だ。
「前よりはまぁ、マシになってる……な。うん。けどなぁ、先生の物に比べたら雲泥だろ？　師匠の味とはもう比べ物になんねぇっつーか、比べる気にもならねぇや……」
あたしも同じクッキーをつつきながら、うーん、と首をひねった。
「これもこれで美味しいけどねぇ。てゆか、料理長とおじ様は別格でしょ？　いきなり比べるのってどうなの？」
ちなみにカッフェが言う「先生」は、ケニードの所の料理長。そして「師匠」というのがレメクだ。
一流の料理人になる夢を持ったカッフェにとって、一流の料理人である料理長は、憧れと同時に自分を鍛えてくれる直接の先生である。
そして料理人では無いものの、素晴らし腕前のレメクは、憧れというよりも尊敬する人になっているらしい。
初めてレメクの手料理を食べた時のうちの仲間連中の顔は実に凄

まじかった。
神様を拝むような感じで。
「ちょっと粉っぽいのが気になるよね。あんた、先生の言うことちゃんと聞いて粉をこねた？」
「当たり前だろ。てゆかこれ、粉のこねかただけが問題じゃねぇな……。くそ、もうちょっと上手くならねぇとなぁ……」
ため息をつくカッフェは、あたしとは違う意味で鋭利努力中のようだ。
ちなみに三人、行儀悪く絨毯の上に座ってのお茶である。
本来仕事中の二人だが、せっかくこうしてお茶があるのだから、ちょっとぐらい一緒にお茶してもいいと思う。
たぶん、料理長だって最初からそのつもりなのだろう。
カッフェが押してきていたワゴンにはカップが三つあったし、運ばれてきたクッキーやスコーンは山盛りになっていた。
ケニードの屋敷の人は、本当に優しいいい人ばかりなのだ。
「上手くなるっつったら、お前はどうなんだよ？　ベル。さっき、思いっきりスカート踏んづけてこけたけど」
ううっ！！
痛いところを盛大につかれて、あたしは床の上に撃沈した。
ガバッと起きあがって反論する。
「このスカート長すぎなのよ！」
「そんなの前からだろ。いい加減慣れたらどうなんだ？」
「無茶言わないでよ！　あんたはスカートはいたことないからそういうこと言えるけどね、無茶苦茶難しいのよ、これ」
「いや、確かにはいたことねぇけどよ。服をこうやって持ち上げてさ、そしたら裾もちょっと持ち上がるだろ？　あの綺麗な女王陛下がやってたじゃんか。ああいう動作すればいいんじゃねぇの？」
カッフェの言葉に、あたしとナナリーは思わず顔を見合わせた。
「なるほど！　そういう風にやればよかったんだ！！」
「あんた、よくそんな細かい動作見てたね！」

「……おまえら、同じ女だろうが……」
あたしとナナリーの声に、カッフェがどこか遠い眼差しでぼやく。
いやだって、アウグスタを見る時って、どうしてもあの立派な乳に目がいっちゃうしさー……
「ま、まぁいいわ。とりあえず、そうと気づけば特訓ね！」
「え。今かよ！？」
即座に立ち上がったあたしに、クッキー片手にカッフェがぎょっとなる。
大急ぎで紅茶セットとクッキーを避難させるのは、どういう意味だろうか。ちょっと問いつめたい。
「わ、忘れないうちにコツを掴んでおきたいのよ！　えぇと……つま先と進行方向がこうだから、こっちとこっちを掴んで……」
あたしはスカートを両手でちょっぴり掴み、ひょいっと上げる。
一歩。二歩。三歩。
おおおお？！
「歩けるわ！」
「……歩けてるけどよ。ちょっと持ち上げすぎじゃねぇか？」
「はしたないねぇ……」
あたしの輝く笑顔に、カッフェとナナリーが呆れ顔で言う。
むぅ！
確かに最初だったから、ちょっと大げさに掴み上げてたけど……
それでもナナリーぐらいの膝丈にしかなってないわよ？！
「もともとこの長さのアタシと違ってさ、あんたのは長いのを前提にしてるわけだから、もうちょっと持ち上げるの控えめにしなよ。ほら、降ろして……そそ、それぐらい」
あたしは床から五センチぐらい持ち上げたあたりに裾を固定した。
おし。ならばこれで歩くのだ。
一歩。二歩。三歩。
よし！！
あたしは顔を輝かせた。しかし、そこでまたクレームが。

「足ばっかり見ながら動くのって、格好悪くねぇか？」
「背筋丸まってるしねぇ」
「てゆか、歩く姿勢としておかしいだろ？　ちゃんと前向けよ」
外野ぁあああッ！！
キシャーッと牙をむく前、あたし達のいる部屋の扉が控えめにノックされた。
ん？　この気配は！？
「失礼。入ってもかまいませんか？」
おじ様キターッ！！
お仕事中のはずなのに何故こんな所に今来てるのとかどうでもいい、匂い、じゃなくておじ様カモンッ！！
あたしは文字通り全身を輝かせて返事した。
「もちろんよ！」
さぁ！　飛びかかる準備だ！
しかし、そうと急いだのが失敗だった。レメクが入ってくるのに合わせて飛びかかろうと、位置調整に動いたとたん、
ビタンッ！！
裾を踏み、ものすごい勢いで床に撃沈した。
……痛い……
「「ベル？！」」
カッフェとナナリーが同時に絶叫。
あたしは床に撃沈したまま、ひっそりと涙した。
あぁ……なんでまた、こんな場面で。
いつもならここでピョコタンと即座に立ち上がるのだが、今日のあたしは立ち上がらなかった。理由は簡単だ。
すぐそこにレメクがいるからだ。
即座に開いた扉の音と、駆け寄る足音。
彼は素早く膝をつく。
「無事ですか？　痛いところは？」
ひょいと抱き起こされて、顔を覗き込まれる。

恥ずかしいが、けっこう嬉しい。
あたしは唇をぎゅっと引き結んだ。
「鼻が赤くなってますね。……どうしてそう、あなたは顔面から倒れるんでしょうね」
きゅむっと鼻をつままれた。痛い。
「おじひゃま、いちゃい」
「骨は折れていないようですね。出血もないようで何よりです」
どういう確かめ方なんだか……
摘まれた鼻をさするあたしに、レメクがちょっと微笑う。
そうして、あたしが踏んづけたスカートの裾を見て眉をひそめた。
「まだ慣れませんか」
「え。いや、ちょっとは慣れてきたわよ？　さっきのは、そう、たまたまよ！」
「……私はいつも、その『たまたま』の場面しか見ていませんが」
「細かいことは気にしないで。とにかく、極意は掴んだから、これからは前みたいにばったんばったん倒れないわよ！」
「……そうですか」
心持ち不安そうなレメク。
あたしは胸を張って請け負った。
「心配しなくても大丈夫よ！　当日も、なんとかがんばってみせるわ！」
しかし、ぐっと握り拳まで作ったあたしの宣言に、レメクの顔はかえって曇ってしまった。
どういう意味ですか？
「無理に気負う必要は無いんですよ、ベル。あなたは、あなたのままでいればそれでいいんです」
いや、それだとマズイと思います。
レメクの目は真剣に心配そうで、そのことはとても嬉しい。
嬉しいけれど、それに甘えてばかりもいられないのだ。
「でも、あたしが失敗すれば、おじ様が笑われるわ」

あたしの反論に、レメクは首を傾げ、ややあって大きく目を瞠った。

……あれ？　なに？　この反応。

目を丸くしているレメクに、あたしも目を丸くする。

理由を求めてレメクを見返すが、レメクは驚きが大きすぎたのか無反応だった。

仕方なくササッと仲間二人に視線を向ける。

……って、なんですか二人ともこっちに背を向けて！！

「あなたは……いえ……」

レメクは何かを言いかけ、すぐに言葉を飲み込んだ。

かわりに、深く深く、息を吐く。

そうして、あたしの髪をくしゃっと撫でた。

「私のことなど、考えなくてもいいんです。あなたは今までこういった教育を受けていなかった。初めてのことで失敗しても、それを笑う気はありません。当たり前のことなのですから」

あたしはレメクを見る。優しい色の綺麗な目を。

「けれど、あの場所は……王宮は、それを許す場ではありません。特に夜会ともなれば、他人の足を引っ張りたい者も多く参加しています。私は、そういった連中にあなたが傷つけられることのほうが心配です」

え。

あたしは目を丸くした。

いや、あたしが心配なのは、そういう連中にレメクがどうこう言われることのほうであって……

言いかけたあたしの口を、レメクの大きな手が塞ぐ。

レメクの目は、まだ続きがあると告げていた。

「ディアトリマの姫君の故事があります。地方貴族のディアトリマの姫は、王都でも稀なほどの美貌の持ち主でしたが、地方貴族ゆえに王都近隣のマナーに疎かった。それ故に笑い者にされ、命を絶ったとされる故事です」

あたしの目がさらに丸くなった。
……なんて儚いお姫様だ。
いっそ影で暗躍して反撃すればよかったのに。
「同じ貴族同士でさえ、そのようなことがあるのです。あなたがどんな風に侮辱されるかはわかりません。……王宮の夜会がそういう場所なのだということは、理解できますね？」
イエス。マイハニー。
こっくりと頷いたあたしに、やや微妙な顔でレメクは頷いた。
む。いかん。闇の紋章で心の声まで筒抜けでした。
「無論、全てが全てそうだというわけではありません。あなたはまだ幼く、それ故に寛容な目で見られる可能性もあります。まして、今回は春の大祭です。他の夜会と違い、地方貴族達も多数来賓として招かれます。彼等は家族連れで来ますからね。他の夜会に招かれる時よりは、注目度は低いと思いますが……」
レメクはそう言って、嘆息をついた。
あたしは首を傾げる。
「普通の夜会って、どういうものなの？」
「主催者次第ですが、まぁ、普通、成人していない男女は招かれません。子供であるあなたが参加することは、本来不可能です」
ありゃ。そうでしたか。
あたしはなるほどと頷いた。貴族社会に詳しくないあたしが知るはずもないのだが、もしそんな所にあたしみたいな子供がいたら、確かに悪目立ちしちゃうわけだ。
春の大祭の時のやつは、そうではないようだが。
「春の大祭は、御前会議と同時に行われます。地方から招かれた来賓の方々は、昼の会議に出席した後、家族と共に夜会にも出席する。子供にとっては成人前に参加できる年に一回だけの夜会ですからね。はしゃいでいる子供もいますし、そういった子供がいる分、あなたの注目度も下がるわけです」
なるほどなるほど。

「けれど、あなたはメリディス族です」
……む。
「そして、今回は私のパートナーとして出席します」
むむ。
「それがどういう風に視線を集めるかは、あまり想像したくありませんね。……最近、王宮から退いていたのが、こんな形で徒になるとは……」
思いきり嘆息をつくレメクに、あたしはちょっと上目遣いで声をかけた。
「おじ様……今からでもアウグスタにキャンセルを……」
「駄目です。無理です。どうにもなりません。すでに大々的に宣伝されてます」
ちょいと待て。三連続の否定もそうだが、その大々的に宣伝ってナンだ?!
「一月前の粛正のせいで、王宮内でもいろいろ動きがあるんですよ。それを牽制してのことでしょうね……」
やれやれと言いたげな口調で謎発言をしつつ、レメクはさらに嘆息をつく。
なんだか、ものすごく面倒なことに巻き込まれているらしい。
「でもおじ様、そんな所であたしがご飯とばしちゃったり、裾踏んでこけたりしてら、おじ様もいろいろ言われて大変なんじゃ……?」
さらなる面倒事を起こしそうな気がするので、あたしはそう示唆した。
しかし、レメクは首を横に振る。
「その程度のことなど、どうでもいいんですよ。あなたが傷つかなければいいんです。躓いて倒れそうなら、私の方に倒れかかりなさい」
……なんですと?!
「必ず支えてあげますから」
「ホントに?!」

「当然です。何のためにいると思っていますか」
本当に当たり前のことのように言われて、あたしは感激のあまりに意識をどこかに飛ばしそうになった。いかん。いかんいかん。まだもう一つ危険は残っている。
「で、でもご飯は?!　あ、いや、食べなければいいという案もあるけど……！」
「育ち盛りの身で何を言っていますか。まぁ……出向く前に食べておくという案もありますが、夜会は夜遅くまで続きますからね。途中で、どうしてもお腹は空くでしょう。それに、あそこの料理長の腕は大変素晴らしいですから、一度はゆっくりと味わうべきです」
しかし、そのためにはあたしの謎テーブルマナーを改善しなくてはいけない。
思わず顔を見合わせて悩んだあたし達に、ふと、それまで背を向けていたナナリーから声がかかる。
「あの……クラウドール『様』」
なぜかこっそり覗き見るような格好で、ナナリーはそう声をかけてきた。
……てゆか、あんた達、その目を両手で覆いながら覗き見してる
「見ちゃいないよ?」的ポーズは何なんだ?
「そういう場で、ベルが直接食べるんじゃなくて、クラウドール『様』が食べさせ、てあげるのも、マナー違反なんですか?」
一生懸命丁寧な口調にしようとしている、涙ぐましい努力がみえる。言葉をつっかえる部分とか。
しかし、魅惑の提案をありがとう。その想像図だけであたしは今幸せです。
ぽわわわん、と夢の世界に旅立ったあたしの横で、レメクがちょっと真面目に検討する顔になる。
そして言った。
「……その手がありましたか」

2　宴の前に

春の大祭。

それは名の通り、春という季節を祝う、国を挙げての大きなお祭りである。

始まりは、国が出来るよりもはるか以前に遡るらしい。

どの部族でもやっていたお祭りのため、一つにまとまって『国』となってからも、ずっと長年続けられてきた行事なのである。

春の大祭の一番のイベントは、夜、王宮から打ち上げられる巨大な花火だ。

けどそれ以外にも、例えば大通りや小径を問わず屋台が並び、いろんなものが売られたり、大道芸人が来て様々な催し物をしたりと、なにかと楽しい事が多い。

また、この時期、王都の人口は爆発的にふくれあがる。

王宮で開かれる御前会議のために、地方から貴族がお供と共にやって来るし、観光客もドッと増えるからだ。

そんな人達から小金をせしめるべく、人々は声高に商品や見所などを道行く人に向かってアピールする。

その賑わいたるや、人々がひしめく南区から遠く離れているというのに、風にのって北区にまで声が響いてくるほどである。

ちょっとでも裕福な人は、懐に小銭を忍ばせて港区に買い物に行くだろう。

珍しい物を見たい人々も、いそいそと出かけるに違いない。

しかし、あたしとレメクは家から動かなかった。

昼になり、それこそ祭りが最高潮に盛り上がる中ですらも、家から一歩も出ないでいたのである。

で、何をしているのかと言うと……

「……で。貴様等は、いったい未だに何をやっとるんだ！？」
開口一番に言われた言葉に、あたし達はきょとんと部屋の入り口を振り向いた。
北区、クラウドール邸、台所。
レメクの太股の上にちょこりんと乗ってご飯を食べていたあたしは、口の端から出てるスパゲティをチュルリと吸い込んだ。
もちゅもちゅもちゅ。
あたし達が何をしているのかなど、これを見れば答えは一つだろう。
「食事ですが、何か」
咀嚼に一生懸命なあたしを乗せたまま、レメクが淡々と答える。
その答えに、女王陛下は盛大に嘆息をついた。
四月。
生きとし生けるものが等しく生命の喜びに触れる季節。
街路樹は萌え、むき出しの路地には名も無き花が花弁を揺らし、食卓の上にも彩りが溢れる。
春の花をつかった和え物。生ハムとカマンベールチーズと春野菜のサラダ。豆のポタージュスープに、小麦パン。子牛のソテーに、ラムのソルト&ブラックペッパー。トマトソースが絶妙なスパゲティに、フォンダンショコラのワンホール。
思わずよだれも流れる料理の数々は、もちろん全部レメクの手料理だ。
昼から豪華なそれらを食べているあたし達は、数刻後には王宮の夜会に出席することになっていた。
四月初日から七日間は、春を祝う大祭が国を挙げてとり行われる。
その大祭にあわせて、諸侯が王宮に集う御前会議が開かれ、夜には夜会が開かれるのだ。
その夜会に、なんと、元孤児で現クラウドール家居候のあたしは出席するのである。
そう。出席するのだが……

あたしはゴクンと咀嚼したものを飲み込みながら、アウグスタを見上げた。
なんで主催者の『王様』が、こんな時分にこんな所に来てるんだろうか？
「……お前達に常識とかそういうのを期待するのが馬鹿なんだと思うがな……。こら、レメク。夜会に出席する身で、なんだこれは。お前の家がすでにパーティじゃないか」
あたし達の前に並ぶ美味極まりない料理達に、アウグスタの眦がつり上がった。
レメクとあたしは一緒に首を傾げる。
「いけませんでしたか？」
「いかんか否かでは無い！　夜会とくれば、豪華絢爛な舞踏会！そして並ぶ超一流の料理！　この二つがメインだろうが！　そこでの食べ放題を前にして、わざわざ大量に飯食ってる意味は何だと言ってるんだ！　（もぐもぐもぐ）……美味いじゃないか！！」
文句いいながらツカツカ近寄り、ひょいぱくひょいぱくと手づかみで料理をついばむ女王様。
あたしの目がつり上がった。
「ぁあああーっ！　アウグスタ！　それ、あたしのご飯よッ！？」
「ちゃんと王宮に用意しておるわッ！！　くそ、このラム、下ごしらえが絶妙すぎる……！　酒が欲しいじゃないか！」
「ありません。というか、ベルのご飯を取らないでください。……あなたはいい大人でしょうが」
「こんなに大量にあるなら少しぐらいいいだろうが！　というか、王宮で食べろ！　王宮で！！　……というわけでこれらは私も頂戴する」
「って最初からアウグスタが食べる気満々なんじゃないのッ！！」
ものすごい神業速度で料理が消えていくのに、あたしは全力で悲鳴をあげた。ひどいひどい！
「おじ様！　抵抗して！！　もう超スピードで！！」

「……普通に落ち着いて食べれないんですか、あなた達は……」

レメクが呆れ混じりに嘆息をつく。

ぁあああそんなこと言ってる間にチョコレートのケーキまでぇえええぇッ！！

レメクの手に束縛されたまま、あたしはナイフとフォークを握りしめて涙目になった。

ナイフとフォークを手に持っているのはあたし自身なのだが、そのあたしの手ごとナイフとフォークを握っているのはレメクだ。

太股の上にチョコンと乗って、背後からレメクに操り人形のごとく動かされているのが、今のあたしである。

このやり方の場合、食べ物がレメクに向かってミラクルジャンプしない。それ故にこんな姿なのである。

最終兵器「鉄仮面」ですら即日廃棄処分と化したあたしの珍食事は、今では知人一同の間で伝説となっていた。

それの対抗策として生み出されたこのマリオネット状態だが、これがなかなかの優れもの。

なにせこれをやり始めてから、レメクは満腹以上になってトイレに吐きに行かなくてもよくなったのだ。素晴らしい、というか、ごめんなさい。

ちなみにあたしは、レメクの太股とか胸板とかを存分に味わうことが出来るという、素晴らしい環境だったりします。天国万歳！

だがしかし、この体勢には一点だけ落とし穴がある。

嗚呼、悲しむべきは体格差か。レメクがフォークを操るたびに、あたしはイッパイイパイ腕を伸ばす格好になるのです。

もちろんこんな格好だから、レメクが動かないことにはご飯は食べれない。

で、どうなるかと言うと……

「……ふぅ……うちの料理長が、おまえの不在を嘆いていたぞ。もし許されるなら自分の後継者になってほしかったのだそうだ。んっふっふ、その気持ちが実によくわかるな。この美味さ……！　堪能

できるお前は幸せだな、ベル！」
　満面笑顔で親指をおったてやがった女王陛下をあたしは涙を溜めた目で見上げる。
　もう仕方がないとばかりにレメクに解放されたあたしの手は、無意識に空になってしまったテーブルの皿をチョイチョイとフォークで引っ掻いていた。
　……オボエテロ。
「……ベル」
　涙がこぼれそうなあたしを見下ろして、レメクがあたしの頭を撫でる。
　おじしゃま……
　あたしは涙目でレメクを見た。
　レメクがおおいに怯みやがった。
「あ、後で作ってあげますから！」
　おじしゃま……ッ！！
　あたしはナイフとフォークを握ったまま、レメクにぎゅっと抱きついた。
「痛ッ！？」
　なんかフォークがレメクの脇腹に刺さったような感触が？
「私は今、攻撃されたんですか？　されたんですか？」
　確認のような疑問のような、ものすごく胡乱な声。
　あたしは、違うヨ、と盛大にレメクの鎖骨に頬ずりをする。
　ぴすぴすぴす。
　あぁ、なんて良い匂い。
　ぴすぴすぴぷ。
　レメクが盛大なため息をついた。
「……まぁ、いいでしょう」
「いいのか」
　速攻でアウグスタがつっこむ。
　その声を無視しつつ、レメクは彼女に向き直った。

「それよりも、陛下。こんなに早くおいでになったということは、ベルの準備はあなたが整えてくれるということですね？」
断定で問い。それは問いなのか、問いじゃないのか。
それ以前に意味がわからず、あたしはきょとんと首を傾げた。
どういうことですか？
そんな当事者を床に降ろして、レメクが椅子から立ち上がる。
すかさずあたしがガタゴトと重たい椅子を動かすと、すぐに大きい手が飛んできてきちんと元の場所に戻した。
……お片づけ失敗。
「まぁ、お前にドレスの着付けをしろと言っても、どうせ無理だしな」
「ええ。大変助かります」
「……素直に頷かれると、無理でも着付けをやらせたくなるが……まぁ、いい。今回はベルの初舞台だ」
そう言って、女王陛下はあたしにニヤァと笑いかけた。
「ふふふ……完璧に仕上げてやるぞ？　ベル」
なぜだろう。今、壮絶に寒気がいたしました。
あたしはレメクの太股にぎゅっとしがみつく。
レメクがつんのめってコケかけた。
「ね、ねぇ、アウグスタ。今、ドレスって言った？」
「言ったとも。嬉しいだろう？　ベル。素晴らしいドレスだぞ。……ちなみにレメク、貴様の服もあるからな」
何故だか一生懸命あたしを太股から引き剥がそうとしていたレメクは、その一言にぎょっと顔を上げた。
「私もですか？」
「当然だろう。ベルのパートナーなんだからな」
「礼服で十分でしょう？」
「馬鹿を言うな。全然十分じゃない。いいか、レメク。お・ま・え・は！　ベルのパートナーとして出るんだ。いいか？　重要なのは、ここだ。パートナー！　なんだ」

なぜか力一杯強調するアウグスタ。
あたしはふんふんと大きく頷いたが、レメクはうんうんと首を横に振りやがった。
「それでも、普通は礼服で……」
「王命だ」
ズパッと一言。
たぶん最終兵器。
レメクが深々と嘆息をついた。
「……どうせ、それを着ないと出席させないという腹づもりでしょう？」
「いや？　出席してもいいぞ。見つけ次第、裸に剥くが」
それはそれで良いですね。
「……ベル。人としてその反応はどうなんですか」
ぎゃーっ！　心読まれたッ！！
ぎょっとなって離れたあたしをアウグスタのしなやかな手が捕獲する。
ぷらーんぷらーんと片手で摘み上げられたあたしは、意外と強力なアウグスタに目を丸くした。
てゆか普通、女性が片手で子供を掴み上げますかね？
「ふふふふ。子猫みたいに目を丸くしおってからに。さーぁ、うちの連中によってたかって飾り付けられるがいい」
なんか語尾にハートマークがくっついてそうな声だ。
うきうきと言うアウグスタは、なんとなくいつもより子供っぽい。
なにがそんなに楽しいのか不明だが、今日の彼女は絶好調だ。
……いや、いつもか。
（てゆか『うちの連中』って？）
きょとんとなったあたしは、その時になってようやく、台所の近くで待機するメイドの一団に気づいた。
いつの間に？！
（というか、アウグスタ。まさか、玄関からトコトコ不法侵入した

んですカ！？）

いつもと同じ『門の紋章』を使っての瞬間移動かと思ったら、メイド部隊を引き連れての不法侵入。

何をどうした所で不法侵入なのには変わりないのだが、今まで一度として玄関から入ってきたことのない彼女だから、あたしはものすごく驚いた。

ええ。すごく驚きましたよ。どうやっても必ず不法侵入な所とかも。

……てゆか、普通、呼び鈴ならしませんか？　人として。

あたしはジトッとアウグスタを見る。

アウグスタはニュッと口の端を持ち上げた。

八重歯がキラリ。

「覚悟をしておけよ、ベル」

それはそれは美しい魔女の笑みに、あたしはシューンと意気地が萎れちゃうのを感じたのだった。

※　※　※

「ぎゃぁああ痛い痛い痛い中身出るーッ！」

「この程度で出るか！」

あたしの絶叫と、アウグスタの叱責が部屋に響く。

あらゆるものが完璧に揃った屋敷の居間で、あたしは拷問具を身につけさせられていた。

それの名はコルセット。恐ろしく強烈な敵である。

「女の魅力はくびれだぞ！？　おまえも女なら、ちょっとくびれてみせろ！」

「子供に無茶言うなーッ！！」

あたしは正論を叫び、必死にアウグスタの魔手から逃れようとする。

しかし！　メイド部隊がそれを許さない！！

「多少なりともくびれが無いと、このドレスは着こなせませんので」
嘘つけぇッ！！
あたしは件のドレスを睨みつけた。
どうあがいても寸胴型。胸も腹もツンツルテンなその服の、どこにくびれがいるっちゅーんじゃぁああッ！
きしゃーっ！　と威嚇するが、王宮の、しかもアウグスタの近辺にいるような猛者メイドには通用しない。
ぎゅーぎゅーと締め上げられて、あたしはよろよろぽたん、と倒れた。
「うぅ……腸が出りゅ……」
「……胃よりも先に腸が出るのか貴様は……」
どっちも出そうです。
床に撃沈しているあたしは、パンツとコルセットだけのあられもない格好。
しかし、すでにこれだけであたしは疲労困憊。むしろ瀕死。なんか一ヶ月以上かけて蓄えてきた生命力が、全力でダダ漏れしちゃった気がします。
「ほら、ベル。次は下着類をつけるぞ。さーぁ立った立ったぁ」
嬉しそうなアウグスタの声。
あたしは涙混じりにそれを見上げた。
よいこらしょ、とメイドさんがあたしを抱き起こし、姿見の前に設置する。
あたしは見た。鏡に映る、今にも泣きそうな蒼白な子供を。
あぁ可哀想だ。可哀想だあたし。
しかし、そんなあたしには構わず、メイドさん達はテキパキとあたしの身支度を調えていく。まさに着せ替え人形のごとく。
ぶわっと視界を覆った白いものは、おそらくドレスの本体だろう。
次の瞬間には引き下ろされ、メイドさんの姿が目の前に。
うぉ。美人だ。
あたしの真正面に立って着付けをしてくれているのは、二十歳そ

こそこぐらいの人だった。
お姫様みたいな綺麗な人だけど、表情がちょっと硬い。
きっと笑ったら素敵だろうになぁ……
あたしは思わずまじまじとその人を見上げる。何故かひるまれました。
どういう意味ですか！？
「ベル。ちょっと姿見を見てみろ」
やや笑い含みにアウグスタが声をかけてくる。
さっきからずっとあたしを面白そうに観察していた彼女は、今は綺麗な銀細工を手に微笑んでいた。
あたしは一度彼女を見てから、姿見のほうを見る。
綺麗なドレスを纏った小さなお姫様がいた。
もちろん、それは目の錯覚だ。
だってそこにいるのはあたしなんだから。
けど、一瞬でもそう見えてしまったほど、そのドレスは素敵だった。
「……きらきらしてる」
そのドレスに視線を落として、あたしはぽつりと呟く。
アウグスタが視界の端っこでちょっと微笑っていた。
あたしが着せて貰ったのは、なんだか柔らかい色合いの白いドレスだった。
白といっても、普通の白とはちょっと違う。
なんだか表面が柔らかくきらきら光ってて、すごく色合いが優しい。
全体的にそんな淡い白っぽい色のドレスだが、そこに輝きを押さえた銀で綺麗な模様が入っている。
大胆な模様は蔓草のそれにちょっと似ているが、無学なあたしにはそれがどんな模様なのかわからなかった。
ただ、とても丁寧に仕上げられていることはわかる。一針一針、職人が魂を込めて作ったものだ。

ちょいちょい、とドレスを摘んでいるあたしに、アウグスタが笑い含みに言った。
「これはな、ベル。真珠を粉にして、織り込んだ布で作ってある」
あたしの顎が落っこちた。
あの、一粒数百リメオン金貨とかいう、シンジュですか！？
「布は真珠、刺繍はミスリル。世界でこれ一着しかない逸品でな、当時はこれ一着で城一つが買えるほどの値段だった」
今でも充分買えそうです。ちっちゃいですが。
あたしはゴクリと唾を飲み込んだ。なんだかあまりのことに気持ちが悪い。
裾踏んで破いちゃったりとかしたら、どんな罰を受けるんだろうか？
青くなったあたしの髪を、アウグスタが慰めるように優しく撫でた。
「そう、気負うな。どうせ古着だ。昔、私が着たことのあるものだからな。実はあちこちに昔のやんちゃの跡がある」
アウグスタの声に、あたしは更にぎょっとなって彼女を見上げる。
昔のやんちゃ、というのも気になるが、それよりも、大問題なのがその前のセリフ！
女王陛下の着たドレス！？
「もう十年以上前のものだから、デザイン自体はちょっと古いがな。今でも充分着れるものだ。それをおまえのサイズに仕立て直したのがこれだ。……なかなか素敵だろう？」
あたしはこわごわとドレスの表面を撫でた。
確かにドレスは素敵だ。だが、その背景にあるものが怖すぎる。
あたしは半泣きでアウグスタを見上げた。
てゆか、なんでそんなドレスを着させてくれちゃったりするんですか！？
「こ、こんなの着ても、いいの？　あたし」
できればもっと素朴なのとかにしてほしいです、本当に。

そんな願いを込めて見上げたというのに、アウグスタは笑って頷いた。
「あぁ、いいとも。むしろ、おまえに着てもらわないと困るのだよ」
「？」
あたしはその声に首を傾げる。
女王様は笑ってあたしの頭を撫で、
そうして次の瞬間、
その笑みを消した。
強い眼差しが、真っ直ぐにあたしを射抜く。
「ベル。おまえは私の家族だ」
何かを確認するような、
何かを宣言するような、
そんな強い意志が宿った声だった。
「あの日あの時、私自らがそう告げた。その言葉に嘘は無い。故におまえにこれを贈る」
世界で一着しかない、自分が着たこともあるというドレスを。
「おまえ以外の者がこれを着ることは私が許さず、おまえ以外の者がレメクの傍らに立つことも私は許さない」
その声に、なぜか、あたしではなくあたしの背後のほうに動揺が走った。
けれどあたしは、ただアウグスタだけを見つめる。
なにか、大切なものを語ろうとしている魔女を。
「ベル。心しておけ。王宮は魔窟だ。あそこほど、華やかでおぞましい場所はあるまい。その中に、今日、おまえは足を踏み入れる。その理由は、おまえがレメクの傍らに立つ者だからだ」
「……」
「おまえがレメクの傍らにいるということは、そういうことだ。人と人とは繋がっている。レメクと共にいる限り、レメクの側の全てがおまえと繋がることになる。……王宮は、その最たるものだ。だからこそ、私は今日、おまえを王宮に招く」

そう言って、アウグスタはその夜明け前の空色の瞳にあたしを映し出した。
あたしだけを。
「おまえをレメクの正式なパートナーと認めさせるためにだ」
正式なパートナー。
その言葉の意味をあたしはゆっくりと噛みしめた。
「おまえにとっては寝耳に水で、準備期間もほとんど無くて、嫌な思いばかりする最悪なイベントだろう。……だが、これには意味がある。だから」
だから、と、アウグスタは続けた。
強い声で。
「赦せとは言わない」
強い瞳で。
「ただ、耐えろ」
耐えろ、と。
それが当然の如くアウグスタは言った。
ああそうだ。……当然なのだ。
あたしがあの人と一緒にいることを本当に望んでいるのならば。
それはごく当たり前のことなのだ。
あたしは頷いた。
逡巡など、しようはずがなかった。
「わかったわ」
アウグスタが微笑う。それはそれは美しい、清らかな笑みで。
「さぁ、最後の仕上げにかかろう。髪をいじってな、このティアラをつけてやるんだ。ふふ、可愛いぞぉ、ベル」
ふいに口元を緩ませて笑うアウグスタは、やはりどこか子供めいたものを感じさせた。
それは、何か昔の夢をもう一度見ようとしているような、どこか懐かしい思い出を開こうとしているような、そんな不思議な笑みに見えた。

あたしは首を傾げる。
メイドさん達の手が伸びてきて、そんなあたしの髪を櫛で梳く。
て、痛ッ！？
ここ丸一月以上全力でつや出し加工をしていた髪が、櫛に引っかかって頭皮を刺激する。
あたしは反射的にそちらを見た。
申し訳ありません、と即座に謝罪が飛んでくる。
けれどあたしは、それに対して何の返答もできなかった。
綺麗なメイドさんが、あたしの髪を梳いてくれている。
けれどその顔は、先程までよりもいっそう硬く、そして厳しいものだった。

3　「離れないように」

ナスティア王国の王城は、二重の水路に囲まれていた。
小難しい話は難しくて流してしまったが、敵から攻め入られた時の防御と、水の確保を込めて、いくつもの水路が王都には作られているらしい。
孤児だった頃には、沢山の水路にそんな理由があったなんて、全く気づけなかった。
けど、説明を受けた今ならわかる。
王都は、王城を含め、一つの要塞として造られているのだということが。
これは以前、下見と称して連れて行ってもらった時に教わったことだが、王都の王城は、この近隣諸国では珍しい形をしているそうなのだ。
だがそれは、城自体の形では無く、外壁や水路が特徴的なのである。
王都の外壁の向こうには、川と見紛うような巨大水路。
内側にも大きな水路があり、さらに街壁の所にも水路があって、それだけでかなりの量の水が、王都内に蓄えられている。
それらの大きな水路から、王都中に水の路が引かれていた。
王城付近にも巨大な水路がある。
その大きさは、王都の外壁付近にある水路とほぼ同じぐらい。
つまり、川の如く巨大な水路なのである。
王城に行くためには橋を渡らねばならず、その橋の向こうにある広大な敷地には、更にもう一つ巨大な水路がある。
その二つの水路を越えた場所に、女王陛下の住まう城が建っているのである。

もちろん、水路越しに見る城壁は見上げるほど高く、見張りが順次巡回をしている。

この城が造られたのは建国十周年ぐらいの時だったはずだから、指導者ナスティアの防衛に対する認識の強さがわかろうと言うものだ。

ちなみに水路には二つの種類があり、上水路と、下水路に分けられる。

上水路の方は、どこをどう走っているのか、あたし達の目にはなかなか触れない地下にあるらしい。

地下にある理由は、飲料水であるためなのだそうだ。毒物を入れられたりしないように、という意味でそうなっているらしい。

……とはいえ、大本である巨大水路に入れられたら終わりなのだが。

もっとも、全ての巨大水路には、清流にのみ棲むという淡水魚が放たれている。そのため、何かあればすぐにわかるようになっているらしい。

下水路は、文字通り下水の路である。

排泄物を流した後の水とかも、ここを通る。地下にあるものもあれば、大きな川のように街中を流れているものもある。

詰まったり溜まったりするとものすごい臭いため、下水路はかなり巨大なものが多かった。

大量の水が常に流れるため、港にまで汚れ物を流してしおうという作戦なのである。

こちらの水路には、淡水と海水の両方で生活できる魚達が泳いでいた。

ただ、この下水路。

港と直結しているため、満潮時には汚れ水が逆流してくるという困ったちゃんな一面もあった。

とはいえ、水路の幅が凄まじく広いので、街中に汚れ水が溢れるなんていう事態にはならないのだが。

さて。

そんな風に大小様々な水路が街中を走っているのが、あたし達が住まう王都の特徴である。

その水路を横目に見ながら、馬車は軽快に駆けていく。

王宮の夜会へは、馬車で乗り入れるのが通例だった。

王宮の正門を通り、広い前庭を通って一般家庭で言うところの正面玄関へ。

そしてそこで待ち受けるドアマンに扉を開けてもらい、人々は悠然と地面に降り立つのである。

馬車というのはまず最初に人々の目に留まるものだから、どこの貴族も華美な装いを凝らす。

その馬車で王宮に乗りつけるだなんて、物語のように素敵な事だと思います。

ええ。自分が当事者にならなければ。

あたしは生まれて初めて乗る『馬車』なるものの側面にへばりついたまま、ガタプルと震えていた。

さっきから心臓はバックンバックン鳴りっぱなし。震えは止まらず、呼吸は乱れ、汗もダラダラ流れっぱなし。

いっぱい飲んだ山羊の乳が、全部汗になっちゃったような気さえします。

「……ベル」

そんなあたしの真横。

ブルブル震えるあたしを困り顔で見下ろしているのがレメクだ。

あたしと対になる同じデザインの素敵服（男物）を着たレメクは、迎えに来たケニードが大暴走するほどに素晴らしい。

あたしも一発ＫＯをくらい、その場で失神しちゃいました。

しかし。そんなレメクの声ですらあたしは動けない。

ひたすら壁にひっついてブルブル震えるだけだった。

場所は王宮前。馬車の中。

外からは絢爛豪華な人々の気配。そして心配げに見守るケニード

とバルバロッサ卿。
中にはあたしとレメク。
そう。あたしは今、まさにこれから！　王宮へと足を踏み入れる（一歩手前）場所にいるのです！
動けませんがッ！！
「……ベル。大丈夫です。恐くないですから」
ブルブル震えて小さくなってるあたしに、レメクが比較的優しげな声で言う。
その明らかにいつもと違う作り声だけでもう駄目です。嘘バレバレです。
あたしは半泣きの顔でじーっとレメクを見上げた。
レメクがそっと視線を逸らした。
ほら！　嘘じゃないかぁああッ！！
ぎにゃーっと泣き出しそうなのをぐっと我慢。
かわりにジーッと見上げる視線を強くした。
こんな場面になったのは、いくつかの理由が原因だった。
そもそも、あたしが王宮の夜会とやらに怯えまくってるのが一番の原因だ。
物語で見聞する程度ならば夢いっぱいのキラキラ空間だが、実際にそこに立つとなると、憧れとかよりも恐怖の方が先に立つ。
しかも、それがレメクの評価にまで繋がってしまうという恐ろしい現実とセットならば！　あたしにはもう絶望しか見えないのです！！
（いやーっ！　お家に帰るーッ！！）
心の中で盛大に号泣。レメクが困り顔になっていた。
できれば困らせたくはない。
だから早くシャンとして一緒に外に出ないといけない。
けれど外から聞こえてくる人々の声と気配が、あたしの体を動けなくするのです。
馬車が王宮前に停まった時には、まだこれほど注目度は凄く無か

った。
　馬車が貴族としては中流のアロック邸のものだったからかもしれない。
　なかなかお洒落な馬車だが、公爵家とかのキンキラキン馬車に比べればそれほど目を惹かないのだ。
　あまり注目されたくないというレメクの注文に、ケニードはしっかりと応えてくれたと言っていいだろう。
　……まぁ、結局、ぶち壊しになったわけですが。
　何故ぶち壊しかと言うと、確かに馬車は目立たなかったですが、中に入ってたのが全員目立つメンバーだったからです。
　だいたい、ケニードからして眉目秀麗な美形である。
　降り立った時に、女性陣が素早く眼差しを交わし合ったのをあたしは（小窓から）しっかり見たのである。
　次にバルバロッサ卿。
　馬車が傾いちゃうんじゃないかと思うぐらいの重量級物体。
　こんな巨物がドカッと降りれば、どうしたって注目を浴びる。
　大神官が礼服着用で馬車で乗り込むのも珍しいらしく、綺麗に衆目を攫っておりました。
　で。トドメ。
　言わずと知れたレメクその人。
　この人いったい王宮でどういう存在なんでしょうカと、あたしは思わずにはいられませんでした。
　普通、降りた瞬間にどよめかれますか？　嬌声あがりますか？
　きゃーって何ですかキャーって！
　しかも野太い声が黄色い声の中に混じってましたよ！？
　そんな後に続いて出られますか皆様！？
　そんな注目度の中で！
　裾踏んで前方へ吹っ飛びそうな服着た状態で！！
（嫌じゃーッ！）
　あたしは心の中で絶叫した。

ひっそりと入場するという最初の計画はどこへいったんですかーッ！

おまけに出入り口でレメクが従者のごとく手を貸しに待っててくれたりするのです。

夢と言ってください夢でいいから！！

出るに出られず、逃げるに逃げれず。

結果、あたしは馬車の壁にへばりついてブルブル震える小動物と化したのでございます。

即座にレメクが馬車の中に戻ってきやがりましたが。

「ベル。ほら、痛くないですから。帰りに美味しいもの食べさせてあげますから」

猫の機嫌でもとるかのような優しげな声。けっこう無理してますね、おじ様。

あたしは、ぎゅむっと唇を引き結んでレメクを見上げた。

レメクの視線は右往左往だ。

「足、裾、踏みそうなの」

半泣きの声で訴える。

絶対に踏む。

一歩でアウトだ。

レメクが困り顔のままで提案。

「お姫様抱っこでよければ、しますが」

あたしの体が、即座にレメクの腕の中に飛び込んだ。

（あれ？）

思考が追いつかずに数秒きょとん。

しかし、ハッと気づいて壁に戻るよりも、そそくさと出て行くレメクの動きのほうが早い。

（ぎゃあああ正直すぎだあたしの体ーっ！）

あたしは半泣き顔でレメクの首ったまにすがりついた。

馬車から外へ出た証拠に、周囲が一気に明るくなる。

（お外出ちゃったぁああッ！）

「「うぉっ」」
至近距離で熊とマニアがどよめく。
しかし！　それよりもすごいドヨメキが周囲から！！
もはや個人の声など判別不可能なほどの音の嵐に、あたしは一層身を縮まらせる。
出ちゃったよ！？　外出ちゃったよ！
ソレッとばかりに停車を余儀なくされていた馬車が発車。
あたしも連れて帰ッテなどとこの場で訴えるわけにもいかず、ただひたすらレメクにしがみついているあたし。
レメクが苦笑して、あたしの背を叩いた。
「そんなに硬くならなくても、大丈夫ですよ」
その瞬間、ドヨメキが三倍増しになりました。
「……」
「いえ、あの。クラウドール卿。手続きは済ませてますから、とりあえずホールに向かいましょう！」
「そ、そうそう。嬢ちゃんも早く安心できる場所に連れてってやんなきゃいけないしなっ。なっ」
なぜかスーッと体温が下がっていくような気配を纏ったレメクに、慌ててケニードとバルバロッサ卿が声をかける。
レメクは無言で歩き出した。
「あぁ、ほら、嬢ちゃんも。そんな医者にかかる寸前の子猫みたいにしがみついてないで、ちょこっと上見てみろや。綺麗なもんだぞ～？」
熊さんの声に、あたしは視線をレメクの首から彼へと移した。
半笑いな大熊は、上、と小さく空を指さす。
空。いや、天井を。
あたしは目をぱちぱちと瞬かせ、そっと視線を天井へと向けた。
「……」
ぽかんと、頭の中に空白ができた。
その空白は、ちょうど今日のレメクの素敵衣装姿を見た時の衝撃

に似ていた。
天井一面に描かれた精緻な絵画。
驚くほど緻密で美しいそれは、降魔大戦のあらましを描いたものなのだろう。
どうやって描いたのか謎なほど高い位置にあるそれらの絵は、凄まじい迫力をもってして眼下のあたし達を見下ろしていた。
歪な闇の塊のようなものが森から溢れ、それに人々が立ち向かう。
不気味な影の軍に対峙するのが、おそらく女傑ナスティアだ。
王国の祖とも言える偉大なる英雄。その両脇にいるローブ姿の女性と騎士が、たぶん聖ラグナールの二人だろう。
鮮やかに描かれるそれらの絵に、あたしの目は釘付けになっていた。
その様子に、レメクが淡く微笑する。
「気に入りましたか？」
あたしはサッと視線をレメクへと戻した。
天井の絵画は特筆に値するほど素晴らしいが、この笑顔の対抗馬には弱すぎる。
目を煌めかせて頷くあたしに、レメクがちょっとほっとしたように微笑(わら)っていた。
視線の位置が変わっちゃってることには、気づいていないようだ。
「当時、当代随一と言われた画家、アロターシュの手によるものですよ。現在、国宝の一つとなっています。王宮一つまるごと使って物語が描かれているのですよ」
正面から始まる物語は、戦乱編、討議編、団結編、共闘編の四部門に別れて展開し、最大傑作とも言える大広間の『決戦』へと向けて収束するのだとか。
その後、後宮へと向けて開国秘話を綴った物語が描かれるが、これは一般には公開されていないらしい。
「ナスティアは生涯夫をもたなかったそうですが、その傍らには常に『暁の賢者』と呼ばれる魔法使いが控えていたそうです。一説で

は、その方が実質上のご夫君であったのではないかと言われていますね。後宮へと続く絵画の中にそれらしい記述があるのですが……その絵があるのが代々の国王の寝室ですので、結局、真偽のほどはわかりません」

「……アウグスタは、答えてくれないの？」

「誰が問うても意味深に笑うだけですよ。あれは王家の秘話なので、そうそう人に明かせるものでは無いのですよ」

ふぅん……？

あたしは首を傾げた。

レメクの言葉になにかひっかかるものを感じたのだが、その『何か』がよくわからない。

「この廊下が戦乱編。受付場となっている広間から右に向かうのが討議編。左に向かうのが団結編です。細かい通路にも小話のようなものが綴られていて、その細やかさに驚かされますよ」

ほぅほぅ。

あたしはレメクをじっと見つめたままで頷いた。

「大広間には最高傑作とも言える『決戦』が描かれていますからね。それを見るのも、夜会の楽しみの一つですよ」

……あんまり楽しみにできないかも。

しゅーんと眉の垂れたあたしに、レメクが困ったように微笑う。

「一つ一つ、私が教えてさしあげます。それに、夜会は主賓が到着するまでは、軽い挨拶程度のやりとりしかありません。今回は特に御前会議の後ですし、陛下主催のパーティですから、ハメを外しすぎる者もそういないでしょう。陛下がおいでになってからが本番ですからね。それまでは、のんびり構えていいんですよ」

そんな風に言えるのは、おそらくレメクが王宮の夜会に慣れているからだ。

初参加のこちらとすれば、目にするもの全てがキンキラキンな時点で、もうカチンコチンになっている。

……だいたいにして、なんだ、この絨毯。どこまで一枚で続いて

るんだ？
思わず床に視線を落とし、そして気づく。
遠目には赤一色に見えるこの絨毯が、実は赤一色では無いことに。
「銀糸を何割か混入しているそうです。強度と華美さをだすためだそうですが」
あたしの視線に気づいてレメクが解説してくれる。
なるほど、それで妙にキラキラしているわけですね。
感心して嘆息をついたあたしをチラと見てから、レメクはケニードに顔を向けた。
「アロック卿。受付はもう済ませているとおっしゃいましたね？」
「え？　あぁ、はい。一応、全員の分済ませています」
「ありがとうございます。では、広間に入りましょう」
頷き、大扉の前で恭しく頭を下げる人々に軽く会釈して、レメクはあたしを抱えたままで広間へと足を踏み入れる。
途端、ワッという音の壁のようなものがあたしの全身を叩いた。
飛び込んでくる華麗な宮廷音楽。
廊下のそれとは一線を画す鮮やかな明かり。
人々の熱気をそこに凝縮したような、絢爛豪華な貴族の集い。
それが、今。あたしの目の前に広がっていた。
「……」
こんな光景は、夢にだって見たことがない。
あたしの夢はいつだって、もっとのほほんとして小さなものだったからだ。
けれど、ここにあるものは、
この目の前に広がっているものは、
おそらく、国の大多数の少女が憧れる光景だろう。
美しく着飾った紳士淑女も。聞こえてくる美しい音楽も。いくつもの大きなテーブルに乗る美味しそうな料理の数々も。
あたしは息を呑む。
だが、ぼうっとしてはいられなかった。

なにせ、あたし達が入場すると同時に、そこのいた全員の目がザッと動いてあたし達に注がれたのだ！

（どういうこと！？）

あたしはとっさにレメクにしがみつく。

首根っこにがっつりしがみついてるあたしに、レメクが励ますように背中を叩いてくれた。

「しっかりしなさい、ベル。あなたはこんな所で居すくむような人でしたか？」

そうは言いますがね、おじ様。

このどよめきをどう脳内処理したらいいんですか？

どよっ、ではなく、ドヨッ！？　という驚愕のどよめき。

よほどレメクがこんな場所に来るのは珍しいのだろう。

そわそわと腰を浮かす者が大半で、その目は油断無くレメクを見つめている。

が。しかし。

その目が次の瞬間、レメクから離れ、仲間だろうお互いを牽制しあうのはどういうことだろうか？

おまけに、じりじりとレメクに近づこうとしております。

……包囲網？

「……おじ様」

「なんです？」

「……おじ様って、ものすごい有名人なのね？」

「……たんに時期が悪かっただけだと思いますが。よりにもよって、陛下の代わりに一連の騒動を終わらせたばかりですから」

一連の騒動というのは、言うまでもなく孤児院関連の事件だ。

一月以上経っているというのに、未だに『したばかり』的にとらえられるのが王宮らしい。

……まぁ、確かに。あんな大騒動は数年に一回あるか無いかだろうけど。

「アロック卿。ルド。カバーをお願いします。……あぁ、ベル。大

広間に入った後でいくらでも美味しい物をとってきてあげますから、今は我慢してください」

あたしの目がジリジリ近づく人々とテーブルの上の料理を交互しているのを見て、素早く先手を打つレメク。

わ、わかってますとも！

みっともなくがっついたりしないよう、ご飯もいっぱい食べてきたんですから！！

……アウグスタに半分ぐらい、横取りされましたが……

思い出してしゅんとなったあたしに、ぽんと背中を叩いてレメクが言う。

「今度また作ってあげますよ」

あい。

「それよりも、ベル。覚えておいてください。大広間へは、男女が揃っている場合、本来なら二人一組で入場し、そのまま最初の曲を踊るのが普通です。ですが……」

踊りなんて踊れません。

強ばった顔のあたしに、レメクが軽く苦笑(わら)う。

「ええ。ちゃんと先に了承を得ています。あなたが年若いということで、他の人々と同じように壁際から入場させていただける段取りになっています。ですが……まさかこのままで入るわけにもいきませんから、少しだけ歩いていただく形になります」

このドレスで！

あたしは頭から冷水を被せられたようにサーッと血の気が引くのを感じた。

だが、ここで泣き言を言うわけにはいかなかった。

そう。逆に考えてみよう。

あたしは今、ものすごい楽をしているのである。

本来なら、自分の足で馬車から降り、レメクにエスコートしてもらってここまで歩いて来なければならなかった。

それを変則技「お姫様抱っこ」で連れてきてもらったのだ。

その間中、レメクは周囲の好奇の目にさらされっぱなしである。
あたしはぎゅっと唇を引き結ぶ。
ぐっと握り拳を固めて頷いた。
「大丈夫ですね？」
一呼吸おいてから、レメクがあたしの目を見て問う。
あたしは目をキラリと光らせた。
バッチコイ！
ふと、レメクが微笑うのが見えた。綺麗な瞳が、暖かい色を宿す。
「それでこそ……ベルです」
そうして、そっと降ろされた。
特注で作ってくれたという靴が、柔らかい絨毯をしっかりと踏む。
ぉお。変な感触がする。
「ベル」
ほぇ？
裾を踏まないようにドレスをちょいと摘んだあたしに、レメクが声をかける。
顔を上げると、とても真摯な顔のレメクがいた。
「王宮とは魔窟です。本来なら、あなたを連れて来るべき場所ではありません」
「……」
「けれど、あなたをここに連れて来る理由が、私達にはあります。今という時に、此処という場所に在らねばならない理由があるんです。……けれどそれは、あなたにとっては辛くて、苦しいものでしょう」
「……」
「だからこそ、私は誓います。あなたの名誉は私の名誉、あなたの痛みは私の痛み。あなたの全てを、私の全てを賭けて守ることを誓いましょう」
その言葉を
こんな場所で、

そんな姿で、
そんな風にして聞かされたら、どんな錯覚を起こすのか……きっとこの人はわかっていないだろう。
それなのに、それがわかっているはずなのに……あたしは涙が出そうだった。
レメク。
鈍感で、天然な『大好きな人』。
その途方もない朴念仁ぶりは、もはや犯罪級を通り越して極悪級だ。
ふらふらしそうな体をなんとか立たせたあたしに、レメクは真剣な目で告げる。
何故かこちらに背を向けて、周囲との壁のように立っている仲間二人の背中をバックにして。

「だから貴女は、私から、絶対に離れないように」

そうして差し伸べられた手に、あたしは迷わず、自分の手を重ね合わせた。

4　華麗なる戦場

足を一歩踏み出す度に大きくなる音楽。
心臓の音にかき消されそうになりながらも、全身を叩く音の波に、あたしは緊張が高まってくるのを感じた。
隣を歩くレメクを見れば、こちらは悠然と前を見ている。
あたしの視線に気づいて視線を返し、彼は小さく目元を笑ませた。
（よし）
その笑みに勇気をもらって、あたしは最大の戦場――大広間へと足を踏み入れる。

後にあたしは、幾度と無く、このときのことを思い返すことになる。
確かにそれは、あたしにとって見知らぬ世界への一歩であり、そして、引き返すことのできない場所への、最初の一歩だったのだ。

※　※　※

大広間は、宝石箱をひっくり返したような輝きと、色と、美しい音楽に満たされていた。
降り注ぐ明るい光と、今までとは比べ物にならないほど鮮やかで豊かな音楽。
根性だけで進めていた足が、数歩進んだ所で無意識に止まった。
もしかしたら、呼吸も止めてしまっていたかもしれない。
まず最初に目に飛び込んできたのは、天井一面に描かれた精緻な

絵画だった。
廊下に描かれていたものとは、明らかに規模が違う。恐ろしく巨大な絵だった。
あたしは引き込まれるようにしてその絵を見上げる。
遙か高みにある天の、描かれた勇壮な絵を。
天井は高い。
それもそのはずで、二階部分が吹き抜けになっていた。
だが、それほどの高さだというのに、その絵の全容はあたしの視界には収まりきらない。
視界の端から端までが全て絵画で埋め尽くされている。
うねるように中央へと収縮するその絵は、紛れもなく、命ある者が全てを賭ける『決戦』だった。
溢れる色彩は、まるで世界中の全ての色がそこに集められているかのようだ。
力強い筆は、けれど驚くほど細かく美しい。
沢山の人や生き物が描かれているのに、その一つ一つがまるで違う形、違う色をしている。
いったいそれが何体集まって、この絵を完成させているのだろうか。
一体一体を目で追おうとすれば、丸一日がかりでも全員を見ることができない。それほどの規模の絵だったのだ。
あたしは歩くこともできず、ただただそれを見上げる。
天井の壁側にあるのは、中央のそれに比べれば小さな絵画の集まりのようだった。おそらく、決戦当時の一場面をあちこちに散りばめているんだろう。
けれどそれを把握するより前に、中央に展開する巨大な絵画に目が釘付けになる。
右手側に種族装備を纏ったナスティア軍。
左手側に、闇より出でたる魔族軍。
中央にいるのは黄金の髪の美女。

シャンデリアに照らし出されたその人は、どことなくアウグスタに似ている。
美しく、尊く、気高く、力強い。
距離があるせいで細かい部分はよくわからないが、その人が指導者ナスティアであることはわかった。その傍らにいるフードを被った隠者のような人影が、レメクの言っていた暁の賢者だろうか。
いや、だがしかし、それにしては……
（なんだか……暁っていうより、闇とか、影とかって感じだけど……）
暁というぐらいだから、もっと明るく爽やかな感じかと思ったのだ。
だが、隣の美女にほぼ隠れてしまって、どうにも『影』という印象が強い。
（顔も見えないし……）
「ベル」
目を凝らしていたあたしを、優しい声が引き戻す。
あたしはハタと我に返り、慌てて傍らを見上げた。
柔らかい笑みを浮かべたレメクが、あたしを見下ろしている。
「これが、王国が誇る至宝の一つです。中央にナスティアと、暁の賢者。魔族側の頭領。その配下たるそれぞれの軍の指導者。……正式な資料が残っていれば、おそらく、各人の名前もわかったのでしょう。紛失してしまっているのが、残念です」
そう言ってレメクも天井を仰ぎ見る。
それはどこか、懐かしそうな目だった。
「おじ様も、この絵、好き？」
「……そうですね。こういう場所でなければ、じっくりと見ていたいと思うほどには好きです」
それは、とても好きだということでは無いだろうか？
あたしは目をぱちくりさせ、ややあって納得した。
あたし達の周囲にも、あたしと同じようにぽかんと口を開けて天

井に見とれている人がいる。おそらく、この絵に会うのは初めてだという人達だろう。

そしてそれよりも中に入った場所には、そんなあたし達を興味深そうに、あるいは可笑しそうに見ている人達の姿があった。

こういう場所、というのは、おそらくそれを揶揄してのことだろう。

てゆか……あれ？

なんだか、ものすごくびっくりした目でこっちを見てくる人が増えていってるような……？

きょとんとしたあたしに、レメクが言う。

「一度は通る道、といったところですかね。絵に見惚れる余裕もないほど緊張している人ならともかく、たいていの人は最初に天井に目が釘付けになります。……まぁ、だからこそ、こんな風に大きく入り口をとっているわけですが」

その声に、あたしは前を気にしつつも後ろを振り向いた。

すぐそこにある入り口は、大人が十人ぐらい手をつないで歩けちゃうほど大きい。

あたし達はその一番左端から入ってきたのだが、なるほど、そこここで立ち止まって天井を見上げる人で、塊のようになっていた。右端の方も同様だ。

中央から入場する人は、例の『パートナーと手に手をとって』入っている人達。

すぐに踊りの輪に加わる彼等は、天井を見上げる暇もないようだ。おそらく、慣れている人も多いのだろう。

こちらをちらっと見る目には面白そうな色があり……

……あれ？　なんか硬直しましたよ？

「ねぇ、おじ様。他の人達、天井じゃなくてにこっち見て硬直しちゃったりしてるんだけど……？」

「目の錯覚でしょう」

そ、そうだろうか？

踊ってる人が足もつれさせてコケたりしてるんだけど。
こっち見たまま。
「さ。それよりも、アロック卿達がしびれをきらしていますよ。参りましょう」
レメクがそっとあたしの背を押す。その力に押されて、あたしは一歩を踏み出した。
ざわっと会場全体がざわめく。
ほらやっぱり！　こっち見られてますよ！？
「珍しいがっているだけですよ。気にせず行きましょう」
いや、無理だからっ！
あたしは内心で悲鳴をあげる。
しかし、場所が場所なため、レメクに飛びついて抗議することはできなかった。
あたしは必死で足を動かす。
大広場は、名の通り最初に入った広場とは一線を画す大きさだった。ということは、歩く距離も相当に長いということである。
歩き出したあたしは、早々に周囲への観察を放棄した。
天井の絵画も見たいし、生まれて初めて見る夜会の様子もつぶさに見たい。
だがしかし、あたしにはそんな余裕などないのである。
正直に言おう。
ほとんど床しか見えません、と！
あたしは必死で足を動かしながら、レメクが貸してくれている腕（というか肘）にギューッと爪をたてていた。
といっても、「すがりつく」だなんて格好の悪い真似はできない。根性と乙女心で背筋をピンと伸ばし、ドレスを摘んで歩いているのである。
……亀の歩みほどの速度で。
（歩きにくいッ！）
あたしは泣きたいのを必死で堪えて、ひたすら足を動かした。

大広間の床は、顔が映りそうなほどツルツルに磨き上げられている。

素材が何なのかは知らないが、こんなに磨かれていては、足を床に降ろすだけでも恐怖だった。

あたしはその床をじっと見ながら、一生懸命足を動かしていく。

もちろん、床を見ていると言っても、俯いているわけでは無い。

背筋はひたすらピンと伸ばし、顔面は前方に向かって真っ直ぐ固定。

ただし、視点だけは進行方向の床に一点集中。

ちょうど馬車の御者が馬を走らせているときの視線と同じである。

何故そんなことをしているのかと言うと、そうしていないと、歩くより早く体が前に吹っ飛ぶからである。

……その方が歩くより早いかもしれないが。

あたしは半分ぐらい飛んでる魂を呼び寄せながら、ただひたすら足を動かした。

歩くたびにコッツンコッツン音がする。正直、今にも足が滑りそうだ。

こんな床で滑るように踊り回ってる貴婦人達は、きっと足に魔法がかかっているに違いない。それとも半分滑りながら踊ってるんだろうか？

ちょっと問いたい気分です。

そんなことを思った瞬間、足がコツルッと滑った。

素早くレメクがあたしをカバー。そうして、励ますように背を押してくれる。

おぶおぶ。

あたしは歩きながら体勢を立て直し、シャコタンシャコタンと前へ進む。

そして、ぐらぐらする頭の中で必死に『合い言葉』を唱えた。

（踵（かかと）から爪先。踵から爪先）

シャコタンシャコタン。

時々レメクの手を借りながら、一生懸命、前へ前へ。
あたし達が歩いている大広間の左端は、人々が入場するための道になっているらしかった。
しかし、道とはいえ、明確な区切りがあるわけでは無い。
そこここで談笑しながら歩いたり、立ち止まったりしている人がいて、これを避けるのが一苦労だった。
（止まるなら、壁際に行けーッ！）
人々を避けながら進む都度、あたしは内心で絶叫する。
あたし達が歩いている『端』というやつは、一番端っこの壁際では無いのだ。
壁際には優雅な長椅子が多数揃えられており、そこには着飾った貴婦人達が陣取っている。その周囲にたむろしているのは、貴婦人の興味を惹こうとしている紳士達だろうか。
しかし、そういった場所があるのだから、立ち止まる人々はそちらへと移動するべきなのである。道を塞がずに！
進めば進む事にそういった『塊』に進路妨害されて、あたしはそろそろキレそうだった。なぜそういう配慮ができないのか。盛大に問いたい。
しかも、ほぼ全員がこっちを見ている。
なんでそんなにジッと見つめてくるのか。たぶん、レメクが目当てなんだろうが、その視線はあたしにとって拷問に近かった。
ただでさえ余裕が無いというのに、周り全部が監視のごとく目を向けてくるのである。さっきからずっと、手も足も震えっぱなしだ。
あたしは気合いと根性で足を動かす。
（カ・カ・ト！　カ・カ・ト！）
レメクがそんなあたしをチラ見して、口元に笑みを浮かべた。
どういう意味ですか？
ちなみに、隣のレメクは実に優雅に歩いていた。
彼が一歩進むためには、あたしは三歩歩かないといけない。
そのため、その優雅さもスローテンポだったが、それがちっとも

おかしくない。時々ちょっと立ち止まり気味だというのに、優雅さも高貴さも欠片も損なわれてはいなかった。

……しみじみ疑問に思うんだけど。どんな超人だろうか、この人。

足滑らせても素早くカバーしてくれるし、さり気なく動きやすい用に位置調整してくれるし。

しかもそれがすごく自然で、おまけにカッコイイんだな、これが！

思わずあたしの頬が緩む。

しかし、そんな風に気がゆるんだ次の瞬間、あ、とあたしの口が開いた。

裾、踏んだ。

そのまま前に吹っ飛びそうになるも、根性と乙女心で軌道修正！

レメクに向かって突撃開始！

……素早く逃げられました。

待てェいッ！

（支えてくれるって言ったのにッ！？）

内心で絶叫。涙がぽろり。

しかし、そう思った瞬間に空中でひょいと抱き上げられた。

……おや？

「（ベル。そのままちょっと寝てなさい）」

素早く小声で指示するレメク。

指示内容は謎だが、あたしは素早くたぬき寝入りに入った。

グタァッと全力で脱力するほどの迫真の演技。

即座に見知った声が飛んできた。

「ああっ！　ベル！！　初めてで緊張のあまり失神しちゃったんだね！」

嗚呼、なんて説明的なのケニード様。

というか、そういう筋書きなのですね。

あこがれのお姫様抱っこパートツーをされながら、あたしはレメクに悠々と運ばれる。

観客の皆様からは、どうやら「初々しい」との高評価。ああ、実

態を知らないって素晴らしい。
あたしは密着したレメクのお胸にスリスリした。
「（ベル。気絶してる人はそんな動作しません）」
ぎくり。
あたしは即座に体の力を抜いた。
グタァッ。
「……」
何故沈黙ですか、おじ様。
もの言いたげな気配をまといながらも粛々と進むレメク。
しかし！　そんな彼の前に敵が現れる！！
「おお、これはクラウドール卿」
横合いから声をかけられて、レメクの動きがゆっくりと止まった。
そのまま悠然と振り返る。
（誰だろう……？）
気絶した（という設定）子供を抱えてるのに、普通呼び止めますかね？
あたしは真っ暗闇の瞼の奥で素早くサーチ。
目を瞑っているので容貌は不明だが、声からして中高年。
身分もなかなか高そうだ。
「フォルマ侯爵。お久しぶりです」
受けてたつレメク。あたしを抱っこしたままでお辞儀。
嗚呼、レメクの息が顔にかかります。うっふーん。
『……』
なんで頭の中にわざわざ沈黙の気配を送ってくるんですか、おじ様。
「あぁ、いや、こちらこそお久しぶりで……いやしかし、本当にお懐かしい。最後にお会いしてからどれほどの年月が流れましたか。貴方のおられない夜会は、なんとも火が消えたようなものでしてな」
普通、そういう台詞は絶世の美女とかに贈らないだろうか？
あたしは気絶した格好のままで首を傾げた。

目を開けることができないので、フォルマ侯爵とやらの容貌はわからない。残念だ。ケニード並の美形ならば良いのだが。

『……何が良いのですか』

だからどうしてそう脳みそに直接ツッコミを送ってくるんですかおじ様。

しかもあたしの内心にツッコミ入れながら、レメクは優雅に侯爵様とも会話中。

「こういった場はあまり好きでは無いのですよ。役職柄、ほかの方々も私がいては羽を伸ばせないでしょう」

「なにを仰る。貴方がいないというだけで、出席を渋る紳士淑女も多くいるのですよ。またこうしてお会いできて、私は幸せでございます」

……だから、何故そういう台詞をレメクに言うのだろうか。

あたしはさらに首を傾げた。

薄目開けちゃっていいですか？

『駄目です』

すかさず却下されました。

エー。

「失礼。私のパートナーを休ませてさしあげたいので……」

あたしのウズウズを感じ取って、レメクがさらりと切り上げる。

気絶してる子供（あくまでも設定）を抱えているのだ。これ以上止める人もいないだろう。

侯爵もそのことに思い至ったのか、あぁ、となにやら慌てたような声をあげた。

「これは失礼。可愛らしいお連れの方を……」

声が途切れた。

どういう意味で？

疑問に思うも、気絶中なので問うに問えない。

空気が動いた所を見ると、どうやらスムーズに脱・会話はできたようなのだが……

「最初がフォルマ侯爵、ってことは、次に来るのはバンカム侯爵か？」
「その前にレンフォード公爵夫人が来そうじゃありませんか？」
「あー。あの強烈なオクサンかー」
熊とマニアが前の方でぼそぼそ言い合っている。
誰が誰なのかはさっぱりだけど。
『後でお教えしますよ』
あたしの「？」を読み取って、レメクがこっそり頭の中に『声』を送ってくる。
あたしは『うん』と返事を送りながら、内心で途方に暮れていた。
……覚えられるかなぁ……名前。
お貴族様の名前って、長ったらしいから苦手です。
「あ。ここですね」
ふと、前の方からケニードの声が聞こえた。
何か薄い布をめくるような音がする。しばしの間を置いて、音楽が少し遠くなったような違和感があった。
（おや？）
首を傾げると、そっと体を何かの上に横たわらせられた。
とても柔らかくて寝心地のいいものだ。
（ベッド？）
「ベル。もう目を開けても大丈夫ですよ」
レメクの声に、あたしはパチッと目を開ける。
目の前に、苦笑を浮かべたレメクが座っていた。
「……？　ここは？」
寝転がったままで、あたしは問う。
音楽や人々のざわめきから、大広間の一角なのは分かる。
だが、音も声も少しだけ遠い上に、周りもちょっと薄暗かった。
あたしは周囲を見渡す。すぐに合点がいった。
そこは三方を布で覆われた場所だった。残りの一方は壁だ。
壁を背後にして、左右は重くどっしりとした布。そして、人々の

声のする前方には、薄い布を幾重にも重ねるようにして視界と声を遮っている。
どうやら、その薄い布をめくりあげてここに入ってきたようだ。
「休憩所のような場所ですよ」
目をぱちくりさせているあたしに、レメクがさらっと答えてくれた。
その後ろからあたしを心配そうに見ていたケニードが、あたしの視線を受けてにっこりと微笑んだ。
「大きな夜会とか、舞踏会とかだと、どうしても気分が悪くなって倒れてしまう人がいるんだよ。貧血だったり、コルセットのしめすぎだったり……まぁいろんな理由でね。で、そういう人を介抱するための場所が設けられているんだ。……といっても、ここはちょっとそれとは違うんだけど」
???
あたしは身を起こしながら首を傾げた。
「休憩所とは『ちょっと違う』休憩所？」
意味不明だ。
「いやまぁ、なんつーか、やんごとなきお姫様が、しんどいから休むわー、って寝転がったりする場所があるんだよ。休憩所と同じような場所で、な。で、ここはそういう人用の場所の一つなわけだ」
あたしは首を傾げ、ややあってサーッと血の気を引かせた。
「ちょ、ちょっと待って、それ、あたしが使っちゃったらヤバイんじゃ……ッ」
あたし、お姫様じゃないし！
「落ち着きなさい。ルドが言ったのはただの例です。ここは私達にあてがわれている場所ですから、あなたが休むのに支障はありません」
「え。おじ様、お姫様なの」
レメクがものすごいジト目であたしを見た。
「ルドが言ったのは『例』だと言ったでしょう。……陛下の計らい

ですよ。夜会に慣れないあなたが休めるように、こうして場所を設けてくれているわけです。常に周りから見られているよりも、よほどくつろげるでしょう」

レメクの説明に、あたしは目を大きく瞠った。

（アウグスタ……）

この夜会への出席を要請してきた女王陛下。

レメクの傍にいるために、耐えろと、そう言ったのは彼女だ。

けれど、こうやって逃げ場も作ってくれている。……あたしがずっとは耐え続けられないことも、彼女にはわかっていたのだ。

（……ありがとう）

いつだって、強くて優しくて暖かいアウグスタ。彼女はどこか、レメクと似ている。

その強さも、優しさも、真っ直ぐにこちらを見る瞳も。

（……瞳？）

あたしはちょっと首を傾げた。

そのあたしの頭をレメクがワシッと両手の指で掴む。

「にょっ！？」

思わずギョッとなったあたしに、レメクは妙に真剣な顔で眉をひそめた。

「……ところで、ずっと気になっていたのですが」

な、なんでございましょう？

指でワシワシと頭のあちこちを揉まれながら、あたしは目で問いかける。

レメクはあたしの頭をじっと見つめたままで言った。

「頭痛くないんですか？　この髪型」

「痛い」

あたしは即座に答えた。

アウグスタのメイド部隊に結い上げられた髪は、あたしの天頂部から後頭部あたりで綺麗にまとめ上げられていた。真珠の飾りをあちこちにつけられて、ドレスと髪型だけは貴族のお姫様みたいに綺

麗になっている。
だが正直、涙が出そうなほど、痛かった。
「……頭皮が引きつっていますよ」
どこか心配そうに、レメクの指があたしの頭を揉んでいく。一時、頭の痛さを忘れてしまうぐらい、それはとても気持ちよかった。
思わずホッコリと顔も緩む。
「髪型を変えたほうがいいかもしれませんね」
言うやいなや、マッサージしてくれていたレメクの手が動いた。
あ、と声をあげるより早くあたしの髪が解放される。
バサッと降りた髪に、あたしは目をぱちくりさせただけだったが、それを見ていたケニードとバルバロッサ卿はギョッと体を硬直させた。
何故だろう？
レメクはそれを無視して、懐から櫛を取り出す。
シンプルで綺麗な櫛に、あたしは思わず顔を近づけた。
ふんふん。
ふんふん？
ふんふんっ。
「……ベル」
やああって、レメクが疲れたように声をあげる。
「……離してくれませんか？」
ハッ！
あたしはハタと我に返った。
思わず両手でしっかりとレメクの手を握り、櫛の匂いを嗅ぎまくってしまったのだ。
あああいくら人のいる場所からは布で遮られて見えにくいとはいえ、こんな場所でやっちゃった！
いや、でもだって、レメクの匂いがついてる小物って、ものすごい珍しくてッ！
あたしはあわあわと周囲を見渡す。とりあえず、布の向こうから

覗いてる人はいない。
よし！
「……いえ、よし、でなく。……まぁ、いいでしょう。そのままでいてくれますか？」
レメクのほうに向き直ろうとすると、クリッと頭を反対方向に向けられた。
ちょうどレメクに背を向けるような形で、ちょこりんと座らされる。
「ほぇ？」
「裸頭のままでは、いくらなんでも失礼にあたりますから」
そう言いながら、丁寧に髪を櫛で梳いてくれた。
痛みから解放されたことと相まって、あたしの顔が即座にとろける。
レメクの手つきはとても優しくて丁寧で、全然痛いとは思わなかった。
にこにこと同じ場所にいる二人に視線を向けると……なぜか二人とも、こちらに背を向けてしまっている。
何故だろう？
ナナリーとカッフェみたいだ。
内心で首を傾げている間に、レメクのほうはテキパキと作業を開始する。
綺麗に梳いた横髪をちまちまと編み込み、頭の後ろの方でまとめる。レースのハンカチと、外した真珠の飾りを使って、なにやらごそごそとしていた。
後髪のほとんどが結わえられずに背中に流れているが、編み込んだ部分だけは真珠と布で飾り付けられているようだ。
にしても、どういう髪型なのだろう？　これ。
首を傾げたあたしの頭に、ちょこんと置かれる銀細工。
どうやら作業は終了したようだ。
「こんなもんですかね」

そう言って、レメクはあたしの頭を一撫でした。
仰向くようにしてレメクを見上げると、苦笑を浮かべたレメクがペチリとあたしの額を叩く。
いちゃい。
「背筋を伸ばしていなさい、ベル。せっかくの晴れ姿が台無しですよ」
どうやら気が緩んでいたらしい。
あわてて背筋をピンと伸ばすと、満足そうに笑われた。
そうして、あたしの背中とかについた抜け毛をせっせと集め始める。
「なにしてるの？　おじ様」
何やら異様に丁寧に毛を集めているのに、あたしは首を傾げながら集められた抜け毛をつついた。
手をペチリと叩かれる。
「女性の髪には魔力が宿ると言われますからね。ましてあなたはメリディス族です。非常に珍しい髪ですから、変な輩に渡らないようにしないといけません」
で、抜け毛をせっせと集めているわけですか。
あたしは呆れた顔でレメクを見上げ、マメで真面目なレメクを手伝うべく、目を皿のようにして周辺を見渡した。
あ。落ちてる。
レメクと一緒にせっせせっせと手を動かすあたし。
意外と抜けるもんなんですね、髪って。
「ところでおじ様。さっき声かけてきたオジサンって？」
レメクの太股の上に落ちていた髪を嬉々として拾いながら、あたしは問う。
確か、なんとか侯爵。ああ、もう名前忘れてる。
「フォルマ侯爵ですか？」
「えーと（たぶん）、うん。どういう人？」
「フォルマ侯爵は……一言で言うなら、北の穀倉地帯の領主です。

数ある侯爵家の中でも、五指に入る実力者ですよ」
「ふぅん……？」
すごい人なんだ？
「現在、王宮において強い発言権をもつ一人ですね。陛下の信任も厚いです。ただ少し、一本気な所がありましてね……会うと昔のことを持ち出されるので、できればお会いせずにいたかったのですが……」
なんだろう。妙に逃げ腰だ。
過去に何かあったんだろうか？
「……ベル。なんでそこで目をギラギラさせるんです？　顔に鼻息がかかるんですが」
じーっと見つめていると、そんなことを言われてしまった。
失敬な！
ちょっと目と鼻の先で見つめただけなのにっ！
渋々少しだけ離れたあたしに、レメクは嘆息をつきながら説明する。
「フォルマ侯爵は、ステファン老と懇意だったんですよ。ヴェルナー閣下とも親しかったので、必然的によく顔を会わせていたんです」
ふんふん。それで？
「私の小さい頃も知っていましてね。会うと必ず昔の話をされてしまうわけです」
なるほどなるほど。
あたしは深く頷いた。
それは是非、お知り合いにならなければ。
「……ベル。近いです。近いですよ」
ズイッと迫ったあたしに、レメクが妙に逃げ姿勢で言う。
あたしはまたもや渋々と離れた。
「じゃあ、そのフォルマ侯爵が会いに来たんなら、次はなんとか侯爵とかだ、って言われてたのは？」
「……フォルマ侯爵が治めるトリアスの隣の領主、バンカム侯爵の

ことですね。先代国王陛下の忠臣……ということになっています。かつてはザルムス辺境伯の称号を得ていましたが、現在は侯爵の地位を与えられ、領地もザルムスからロートンゲルに移っています」

「……ふぅん？」

なんだろう。

今、頬がチリッとした。

あたしはレメクを見る。レメクは淡々と言葉を続けた。

「シャーリーヴィの森があるのが、ザルムス領です。領地の八割がその森で、現在ではメリディス族は国で保護されていますから、シャーリーヴィの森にいる彼等に税をかけることはできません。正直、旨味のない土地と言えますね。隣のヴェンツェル辺境伯の領地は金山銀山がありますが、ザルムスにあるのは森と川と小さな集落ぐらいですから」

「ロートンゲルっていう土地は？」

「半分が穀倉地帯、半分が山、という場所ですね。実りのいい場所ですよ。王都にも近いです」

「いい土地に移ったのね」

「ザルムスとは比べものにならなかったでしょうね。とはいえ、隣のトリアスは肥沃なことで有名な大穀倉地帯ですから、そちらが羨ましくてたまらないようですよ」

あたしは呆れた。

「欲張りなんだ……」

「ええ。だから、フォルマ侯爵が私に近づけば、続いて彼もやってくる、という形になるわけです」

迷惑だ。

顔をしかめたあたしに、レメクも苦笑する。

「よくある話ですよ。それに、夜会というのは、コネクションを作るのに最適な場所ですからね。誰もが自分が持つ武器を片手に、腹のさぐり合いをしたり情報を交換したりして、繋がりを作っていくわけです。そのことで壊れる関係もあれば、新たに築かれる関係も

ある」
「なんだか、酒場で商人達がやってるのと似てるわね」
あたしの声に、レメクは苦笑した。
「そうですね。ある意味、巨大な商戦のようなものです」
「おじ様は、そんな巨大な商戦に巻き込まれちゃったりするの？」
「私は『断罪官』という『力』を持っていますからね。バックにいてくれると助かる、ということなんでしょう。利用しようとする人もいますが……深く関わって自分の所の疚しい場所が見つかっては困る、という人がほとんどですからね。声をかけてくる人はいても、深く話をする人はそういません。そのため、巻き込まれることは稀ですが……」
そこで言葉を句切って、嘆息をついた。
「万が一巻き込まれる時は、相当の大事になります」
なんだかすごく大変そうだ。
あたしは「お疲れ様」の意味もこめて、レメクの肩をぽんぽんと叩いた。
あ。胸の所にあたしの毛がついてる。
摘み上げて、抜け毛を集められている布にポイッ。
それを見て、レメクが周囲を見渡した。
「……もう落ちてないようですね」
そのようです。
頷くあたし。レメクはテキパキと布を畳んで懐にしまい込む。
「それ、どうするの？」
「家で焼却処分します。前第二王妃のように、裏で好事家達に取引されるのは嫌ですから」
「……王妃様、そんなことされてたんだ」
「侍女達が良い小遣い稼ぎにしてたみたいですね。先王陛下にバレて厳罰に処されましたが」
王族というのは大変そうだ。
あたしは思わず同情してしまった。

レメクがそんなあたしの頭を撫でる。
そうして、穏やかに微笑まれた。
「あなたにはそんな思いをさせませんから、大丈夫ですよ」
どうしてこの人は、そんなセリフをさらっと言えちゃうんだろうか。
あたしは思わずレメクに頬ずりしそうになり、
「えーと、おまえさんら、ちっといいか？」
遠慮がちに声をかけてきたバルバロッサ卿に、大あわてで姿勢を正した。
なぜかレメクの目が冷える。
あれ？　なんで？
ぎょぐ、とバルバロッサ卿がたじろいた。
「客が来てんだよっ！」
何故か言い訳口調のバルバロッサ卿。
首を傾げながらそちらを振り返ると、大熊の隣に立派な初老の男性が立っていた。
その人を見た瞬間、ギョッとレメクが立ち上がる。
あたしもギョッとなってレメクを見上げた。
ビックリポカンな彼なら見たことあるが、仰天した彼は初見だ。
そんなレメクとあたしに、立派なオジイサマは綺麗な一礼をする。
どこかレメクのお辞儀に似た丁寧さで。
「お久しぶりでございます。……レンドリア様」
穏やかな笑みを湛えたその顔の中で、瞳が懐かしむように細まる。
それは何故か、あたしには、泣き笑いの顔のように見えた。

5　ナスティア大法官

入ってきたオジイサマと入れ違いに、バルバロッサ卿が休憩所から退出した。あたしは思わず目でそれを追う。

（え。バルバロッサ卿、なんで外に？）

そして気づいた。

垂れ幕のように広間とこちらとを遮断している淡い布の向こうに、それとわかるほどの人だかりができていることに！

（な、なんで！？）

思わずぎょっとなるほど、それはすごい数の人だかりだった。

布越しのせいで、人の姿は誰も彼も『影』にしか見えない。その中で、一番近くにいる影はケニードだ。

いつの間に席を外し、壁のように立っていてくれていたのだろうか。

こちらに背を向け、布の前で優雅に対応をしてくれている。

そこにバルバロッサ卿も加わって、二人で人だかりの前にデンと立ち塞がった。バルバロッサ卿の背中など、まさに鉄壁と言うべき貫禄である。

薄布越しに聞こえてくる声は遠く、断片的で、内容はよく分からない。

あたしは耳を澄ませた。

「クラウドール卿が……」「メリディス族の……」「では、あの噂は……」

……やっぱりよく分からない。

とりあえず、あたしとレメクの両方が話題に上がっているらしい。

考えれば、それも当然なのかもしれなかった。レメクは何かと『話題の人』のようだし、あたしは極稀にしか世に出てこないとされるメリディス族だ。珍しさも手伝って、一目見ようとする人がいても不思議じゃない。

あたしは視線をレメクに戻し、そうして、その前に対峙するオジイサマへと向けた。

人々が入ってくるのを遮っているバルバロッサ卿達が、何故このおじいさんだけ通したのか。

考えられる理由は二つ。

一つは、このおじいさんがレメクと個人的に親しい人。

そしてもう一つは、あの個性派な二人をして、なお道を空けずにはいられないほど身分の高い人、だ。

あたしはおじいさんを素早く観察する。

年の頃は七十前半か。宿のおねーちゃん達がキャーキャー言ってた『ロマンスグレー』という言葉が似合いそうな『イイ』おじいちゃんだった。

長身のレメクよりはやや低いが、平均よりは十分に高い身長。年齢を考えればかなりのものだ。もしかすると、若かりし頃はレメクより長身だったのかもしれない。

その長身に纏う服は、金糸銀糸の縫い取りも素晴らしい一級品。ダンスをするには向かないゆったりとした服は、深く鮮やかな海の蒼をしている。これほど鮮やかな群青色は、黄色や紫に次いで高価である。

おまけに生地もまた素晴らしい。光沢のある滑らかな生地は、おそらくベルベットと呼ばれるものだろう。レメクの屋敷の寝室にも使われていたし、金貨数十枚分の価値のあるカーテンも似た生地のものだった。

そこから換算するに、このおじいさんの衣装は金貨数十枚以上の品物であるようだった。

体格もなかなかに立派だ。

背中もビシッと伸びているし、ゆったり服のせいでわかりにくいが、それなりに筋肉もついてそうだ。

お顔のほうも実に素晴らしかった。

若い頃はきっと大変な美男だったんだろう。彫りの深い顔は上品

に整っており、涼しげな目元が印象的だ。撫でつけられたシルバーグレイの髪もビシッと決まっている。

レメクと並ぶとなかなか壮観だった。

うっとり。

レメクもおじいちゃんになったら、きっとこんな感じになるんだろう。

思わずそう思って見てしまうぐらい、イイおじいちゃんぶりなのである。

超うっとり。

あたしは顔をとろけさせて二人を見比べる。

レメクとおじいちゃんは、なんとなく似た雰囲気があった。

（あ！　もしかして！）

あたしはあることに思い至り、目をビカッと輝かせた。

（ステファン老のお友達とか！？）

レメクの育て親であるステファン老の友人ということは、レメクの小さい頃を知っているということだ。

つまり、貴重な情報源！

あたしの煌めく熱視線を受けて、おじいさんは初めてあたしを見た。今まで、あたしという存在に気づいていなかったようだ。

どんだけ集中してレメクだけ見てたんだろうか？　この人。

あたしの目が一層煌めいた。

「おお……なんと、愛らしいお嬢様でしょう」

おじいさんは上品に相好を崩す。

柔らかい微笑みと眼差しに、あたしの顔もにっこり笑顔だ。

おじいさんはあたしの前へと歩み寄ると、典雅な衣装に頓着せず、あたしの前に膝をついて目線をあわせてくれた。……いつものレメクと同じように。

「初めまして、小さなレディ。私の名前はヴィルヘルム・ホセ・ローエンブルグ・エゼルス・フォン・ヴェルナーと申します」

ごめんなさい。

覚えられませんでした。
内心の半泣きを押し隠して、あたしはレメクに教えられた通り、ドレスの裾を持ち、左足をちょっと引いてニッコリ微笑った。
「ベルと申します」
……短いなぁ……いや、いいんだけど……
ヴィルなんとかヴェルナーさんは、短いあたしの名乗りに首を傾げることなく、にっこりと微笑みを返すと、なんと！　あたしの手をとって手の甲に口づけまでくれちゃいました！
おおお！　お姫様！　お姫様！！
大興奮のあたしは、輝く眼差しをレメクへ。
なぜか複雑そうな顔をされました。
なぜですか？
あたしがきょとんとしている間に、ヴェルナーさんはすっくと立ってレメクに向き直る。
にこにこと好々爺な顔になって、やんわりとレメクに言った。
「お人が悪うございますね。こんな可愛らしいお嬢様ができていらっしゃるのなら、もっと早くにお話くだされればよかったものを」
どうやら抗議のようだ。
というか。あれ？　なんか不思議な言い方のような？
違う意味できょとんとなったあたしの前で、レメクがやや焦った顔で反論する。
「何か誤解がありませんか？　閣下」
閣下。
閣下？
あたしはヴェルナーさんを見上げる。
そう言えば、つい先程レメクとしていた会話の中でも、ヴェルナー閣下、という単語が出てきたような……？
「何の誤解がありましょうか。……レンドリア様」
「……レメクです。もしくは、クラウドール、と」
なぜか名前を訂正するレメク。

そういえば、ポテトさんも言ってたけど、レンドリアって名前嫌いなんだっけ。
ヴェルナー閣下はほろりと苦笑いを零す。その閣下に、レメクは嘆息混じりに言った。
「ベルは、二ヶ月ほど前に私が拾った子供です。……私の子供ではありませんよ」
「なんと」
ヴェルナー閣下が目を見開いた。
あたしとレメクとを交互に見比べて、心底悲しげな顔で言う。
「ご息女では無いのですか」
「「違います！」」
あたしとレメクが異口同音に叫んだ。特にあたしは必死だ。
「あたしはおじ様のもぐもんっ！」
ぬぁああ！　おじ様ッ！　なぜあたしの口を手で塞ぎますかッ！！
「もぅもももむもっ！？」
あたしの必死の抗議に、レメクは違う意味で必死の目配せ。言うな、言うな。そんな感じ。
目で抗議しながらも、しゅん、と肩を落とすあたし。
レメクがおおいに怯みました。
「……なにやら、楽しげなご関係のようですな？」
こちらを見ていたヴェルナー閣下が、口元に品の良い笑みを浮かべながら首を傾げる。
レメクがちょっと焦って身を起こした。
「ところで閣下」
「ぷはっ」
手が外れたので、あたしは大きく深呼吸。
なぜかまた、塞がれてしまいましたが。
どういう意味ですか？
「いつもより早いお越しのようですが、何かあったのですか？」
話題を変えようという意図に溢れた問いに、閣下はおっとりと首

を傾げる。
　レメクをジトーッと見上げるあたしと、中腰であたしの口を押さえたままのレメクを交互に見つめながら、閣下は品の良い暖かな笑顔を浮かべた。
「はは……最近は夜会などという華やかな場所は、遠慮していたのですがね。老骨に堪えますので。ですが、貴方がおいでになると言われては、駆けつけぬわけにはまいりますまい」
（ほぅほぅ）
　その言葉に、あたしは深く納得する。
　そして、じっとレメクを見上げた。
（確信しました）
　目がキラリ。
（レメク。貴方は、王宮のアイドルさんだったのですね！）
「違います」
　ものすごい真顔でレメクがあたしに向き直った。
　しかし、あたしには通じない。
　なにせ確信しちゃったのである。
　あのなんちゃら侯爵といい、ヴェルナー閣下といい、ケニードだってそうだが、レメクは殿方にもモテモテさんなのである。
　これを王宮のアイドルと呼ばずして何と呼ぼうか！
「だから、違うと言っているでしょう。私は十数年も王宮の夜会から姿を消していたんです。珍しいというという意味と、持っている権力とがあわさって、一時話題になっているだけに過ぎません。派手に動いてしまった後でもありますし」
　エー。
　あたしはこの上なく信じてない眼差しでレメクを見上げた。
　と、なぜか視界の端でヴェルナー閣下がそっと背を向ける。なにやら肩がふるふる震えていた。
　……笑ってる？
「……閣下」

気づいてレメクが苦い声をあげた。閣下は「失礼」と謝罪しながら、やっぱり肩を震わせている。
「な……なかなか、楽しそうなご関係のようですな」
どんな関係と思われたのだろうか？
きょとんとなったあたしに視線をあてて、閣下はなんとも味わい深い笑みをこぼす。
「陛下に、滅多に見れないようなものが見れると言われて来たのですが、なるほど、確かに……」
確かに？
「世にも稀な光景で」
どういう意味ですか！？
くつくつと小さく笑いを零す閣下に、あたしは目をカッぴらく。
説明を求めてレメクを見上げるが、レメクは何とも言えない苦い表情をするばかりだ。
「もぐもも、もうもぅもも？」
口を塞がれているため、もぐもぐ言うあたし。
しかし、レメクはチラッとあたしを見て……スーッと視線を逸らした。
どういうこと！？
「もぐももっ！？」
答えをはぐらかなさないといけないようなことですか！？
視線を逸らしてまで！？
少なからずショックを受けたあたしに、閣下が笑い皺を深める。
「ははは……流石の貴方も、こちらのレディには形無しのようですな」
「……閣下」
「いえ。詳しくはおっしゃらなくても結構です。想像を楽しむというのも、年老いた者には必要な娯楽なのですよ」
「閣下」
「しかし、いくら好みの女性がおられぬとからはいえ、ご自分で作

ってしまおうなどとお考えになるとは……いやはや、その常識の斜め上な発想には、このヴェルナー、深く深く感服致しました。いえ、もう感激とさえいっていいでしょう」

「閣下ッ」

抗議の声、というより悲鳴に近い非難の声をあげるレメク。

しかし、閣下は感激のあまり目頭にそっとハンカチをあててる有様。ズズッと鼻をすする音まですするあたり、どうやらマジ泣きのようです。

「……もぅまま……」

あたしはヴェルナー閣下にハンカチを差し出しながら、非難をこめてレメクを見上げる。

レメクが苦虫を噛みつぶしたような顔になった。

ちなみに、未だにあたしの口は塞がれたままだ。

「なぜ私が非難の目で見られないといけないのです？　ベル。その目は止めなさい。その目は。……閣下！　あなたも、誤解を招くような言動は止めて……待ちなさいっ！　そのハンカチは駄目ですッ」

レメク、大忙し。

あたしの差し出したハンカチは、涙目のヴェルナー閣下に渡る前にレメクに没収された。

かわりに閣下に渡されたのはレメクのハンカチだ。何故だろう。

あたしは物欲しそうな目を閣下の手のハンカチに注いでから、しょんぼりとレメクを見上げる。

「あ……貴方はハンカチを一枚しか持っていないでしょう。ですから、これはご自分できちんと持っていないといけないんです」

なぜか慌てて弁解しながら、あたしのハンカチを戻してくれるレメク。

とはいえ、このハンカチ。もともとはレメクから贈られたものなのだが。

「そうですな。いや、そうですとも。お嬢さん。あなたのお気持ちは大変嬉しく思うのですが、身の回りの小物を異性に渡す時には、

気をつけないといけませんよ。それは自分の心をその人に渡す、という意味ですから」

なんと！

閣下の声に、あたしは思わず返ってきたハンカチを抱きしめる。

小物を渡すということに、そんな意味が！

いそいでハンカチをポーチに仕舞い、あたしは目を煌めかせてレメクに空の両手を差し出した。

「「……」」

沈黙。

「「……」」

さらに沈黙。

あたし達は熱く熱く見つめ合う。

レメクの額にじわじわと汗が浮かんでいくのが見えた。

何故だろう？

何故かは不明だが、オジサマ、さぁ！　あたしにも一枚！

ハンカチとか！　靴下とか！　ぱんちゅとか！！

レメクがそっと視線を外した。

「……！！」

ガーンッ！　と心の底から大ショック。真っ白になったあたしに、閣下が憐憫の眼差しで涙を零す。

「……なんという、ツンデレ属性……」

「人におかしな属性をつけないでいただけませんか」

汗を拭き取った後のレメクの額に、くっきりと青筋が浮いていた。

※　※　※

閣下、というのはとても身分の高い人を呼ぶときに使われる。

国王を「陛下」と呼んだり、王子様を「殿下」と呼ぶようなものだ。

ヴェルナー閣下は、正式な役職は『ナスティア大法官』というや

つらしい。
三大法官と呼ばれる王国尚書局長官の一人であり、文字通り宮廷最高位の官職に就いていらっしゃる方なのだとか。
……とレメクに詳しく教えてもらったのだが、生憎ちっとも理解できない。
簡単に言えば宰相閣下である。
「私がお会いしたのは、ちょうど生後五日ぐらいの頃でしたか。それはもう愛らしくて愛らしくてたまりませんでしたよ」
それこそ頬が落ちそうなぐらい相好を崩して語るヴェルナー閣下は、ポテトおじいちゃ……いや、ポテトお義父さんよりずっと『親馬鹿』な顔になっていた。
隣でレメクがなんとも言えない不機嫌そうな顔。
「赤子など皆同じでしょうに」
「なにを仰いますか！　お母上によく似た面差しで、大変大変愛らしかったのですよ！　……今はこんな感じですが」
この人も、意外と『言う』人である。
「実を言いますと、わたくしもお母上様のお美しさにはいたく感銘を受けた者でして。あの気品ある優雅で儚い微笑など、遠目に拝見するだけでも甘酸っぱい切なさに打ち抜かれてしまったほどです。嗚呼……私があと十年若ければ、命を賭してでもかき口説いたことでしょう……！」
十年かい。
あたしは内心で思わずつっこんだ。
閣下のお年は、想像どおり七十二。
レメクとはちょうど四十違いなのだそうだ。
レメクのお母さんと会ったのは三十九才の時で、当時すでに人妻だったレメクのお母さんは、なんと十八。
十九歳の誕生日を目前に控え、なおかつレメクをお腹に宿していた状態の彼女にときめいてしまったらしい。
なかなかに難儀なトキメキである。

「手の届かぬ高嶺の花とはあの方のことでありましょうな。お優しくたおやかなあの方を遠目に拝見するのが、あの当時の唯一の楽しみでして。そうしましたら、ある時、ロードがお生まれになったこの方をこっそり見せに来てくださったのです」

この方、と掌でレメクを示す閣下。

ほぅほぅ。

あたしは目をギンギンに光らせて話に聞き入った。

休憩所で突如始まった『今語られる懐かしき時代のレメク』話は、あたしにとって最高のお話だった。

身を乗り出して聞くあたしに大いに気を良くした閣下は、それはもう立て板に水的にいろんなことを語ってくれる。

隣のレメクが無表情に睨んでいるのを無視して。

「それはそれは愛らしかったですよ。泣かず笑わず、ジーッとこちらを見てくるつぶらな瞳！　一言も声を発してくれはしませんでしたが、ぷにぷにの頬も小さな指も愛らしくて……！」

あたしは頭の中に赤ん坊レメクを想像した。

ぽわわわん。無防備に寝転がってこちらを見上げるレメク。

……どうしてか大人バージョンで想像してしまいました。大失敗。

とりあえず、脳内に永久保存しておきましょう。

「ベル。変な想像はしないように」

……バレました。

そんなあたし達を無視して、閣下は蕩々と語り続ける。

「ロードも、傍からは理解不能な意味深で不可思議な深い愛情をそそいでおいでのようでしたし。わたくしも、不肖なる身ではございますが、心から愛おしく思っておりました。侍従長や女官長、果ては猊下もメロメロでした」

ほうほう。

「ですが、お母上様が……お亡くなりなった後、ステファンが養子として北区の外れに連れて行ってしまい……私達は寂しくて、あの手この手を使って呼び戻そうとしたのですが、いつもいつも梨の礫

で……」

そう言ってハラハラと涙を零すおじいちゃん。

前々から話には聞いていたけど、宰相閣下、涙もろい人なのですね。……レメク関連で。

「ついにはステファンが死去したのをきっかけに、喪に服すと称して王宮からも去ってしまわれて……！　夜会の楽しみもこれで終わりと、侍従長と女官長、それに猊下と集まってひっそり涙していたのですよ。若者の成長ほど、年寄りにとって楽しい事はありませんからな」

ハラハラハラ。

「それ以来、私もこういう行事に参加するのは憂鬱になりまして……。正直、もうそろそろ潮時だろうと思っていたのです。若い方に位を譲って、どこかで隠居生活もいいのでは無いかと……ですが陛下には怒られてしまいまして」

「当然です。閣下ほどの方が何をおっしゃいますか。近隣諸国がきな臭いこの時期に、貴方ほどの方を失うのがどれほどの痛手か」

閣下の声に、やや慌てたようにレメクが言う。

そのレメクを見やって、閣下はじわじわとまた目に涙を溜めた。

「……貴方からそのようなお言葉をいただけるようになるとは……。しかし、そう仰るのなら、貴方もまた王宮に帰ってくるべきではございませんか？　陛下を補佐し、国を支えるべきお立場のはずです」

「私はとうの昔に去った者です。今更余計な波風をたてたくはありません」

「波風など！　貴方様と陛下のお力をもってすれば、たやすく圧することのできる代物でございましょう」

「閣下。力で押さえつければ、やがてさらなる大きな力を招くことになるだけです。今は国の内部も揺れている時期。正直、今回の夜会出席も、ベルのことが無ければ放置しておきたかったほどなのですよ」

レメクの声に、閣下は一瞬泣きそうな顔になり、悄然と肩を落と

してあたしのほうを見た。
「お嬢様……」
そうして、跪かんばかりにあたしの前に膝を折る。
「貴女の存在が、クラウドール卿を王宮に引き寄せてくださったのですね」
あたしはあわあわとレメクと閣下を見比べた。
引き寄せたわけでは無いのだが、王宮に行く原因を作ったのはあたしだ。結果的にはそういうことなのだろう。
だがしかし、王宮うんぬんの関連であたしに声をかけられても、どう対応していいのか分からんのです。
「感謝いたします。そして願わくば、そのお力を持って王宮の式部長官の座に就いてくれるよう、説得してはいただけませんでしょうか？」
「しきぶちょうかん！？」
あたしは思わず声をあげ、レメクは深いため息をついた。
「まだ諦めてなかったんですか」
「何を仰いますか！　私は、できれば宰相になって欲しいと思っているのですよ。それを断罪官としての地位を得てしまっているから駄目だとか、こじつけて逃げていらっしゃるのはどなたです！？もともと好んでもいない断罪官の地位など返上してしまえばいいのです。そうしたらわたくしは貴方様に地位をお譲りして、心おきなく隠居させていただけるのです。ええ……そうなってくれればもう、思い残すことはありません。いつお迎えが来てもいいでしょう」
お年寄りが言うとシャレにならない。
あたしは大あわてで閣下の両手を握った。
「そんな！　いっぱいいっぱい長生きしなきゃ駄目よ！　おじ様だって寂しいし、それにほら……えぇと」
先が楽しみになるようなこと。なにか、なにか。
小さな脳みそをフル回転させて、あたしはピンと閃いた言葉を叫んだ。

「ほら！　十年後には新しい家族が生まれる計画もあるんだし！」
「何の計画です！？」
すかさずレメクが声をあげる。
しかし、閣下には効果絶大だったらしい。
がしっとあたしの手を握りかえして、お爺さまは輝く笑顔を浮かべた。
「ええ。ええ、そうですね。まだまだがんばらなくてはいけません。……楽しみですね！」
「うんっ！」
「待ちなさい！　あなた達。何の話をしてますか！」
レメクが抗議の声をあげるが、そんなものは無視だ。
あたし達は輝く眼差しで見つめあい、全く同じタイミングでクルッとレメクを見上げた。
レメクが一歩後退る。
そのやや引きつった顔に向けて、あたし達は異口同音に言いはなった。
「「楽しみですねッ！」」
レメクは何も言わない。
ただ何とも言えない顔で仰向き、ぴしゃりと片手で顔を覆ったのだった。

6　優しさと矜持

夜会のメインと言えばダンスである。
着飾った紳士淑女は広間の中央へと繰り出し、絶え間なく流れる美しい音楽に身を任せていた。
上品に笑いながらクルリと回るおねーちゃん。
身なりの良い男の人がそれに合わせて、流れるように動いてみせる。
二人は手に手をとって密着すると、スィーッスィーッと泳ぐように別の場所へと消えていった。
「……ほぇ～……」
一連の動きの滑らかさに、あたしはただ嘆息をつく。
あたしが居るのは、アウグスタが用意してくれた休憩所の端っこだった。
端っこと言っても内側のことではない。大広間と休憩所を区切るやたらと重くて厚い布の中だ。
重たい布と薄いベールを使って作られた休憩所は、本当の意味では『部屋』になっていない。けれどその布をめくって入ってこようとする人間はいなかった。
出入り口となるのは薄いベールで隔てられた一方だが、そこにはケニードとバルバロッサ卿がいる。よほど弁が立つのか、中に勝手に入らないよう牽制してくれているようだ。
まして今、この中には宮廷の長とも言うべきヴェルナー閣下がいる。そんな場所に、無理やり割り込もうとする人もいないだろう。
閣下の登場はケニード達にとって有難かったに違いない。
とはいえそんな風に人集りができていると、あたしの方も広間を見に行けなかった。
レメクに恥をかかせるから外に出たくは無いが、あたしだって『王宮の舞踏会』とやらを見たいのである。

そこであたしは考えました。
人集りが出来ているのは、出入り口部分。ということは、出入り口部分以外の三方から広間を覗き見すればいいのである！
出入り口とは違い、三方は深い藍色のどっしりとした重い布で仕切られている。たっぷりとゆとりをきかせたその布をかき分け、目の所だけをちょろっと覗かせて、あたしは広間を見ているのである。
あ。誰かと目が合った。
ぱちくりと瞬きしたあたしに、目が合ってしまった相手もパチクリと瞬きをする。
あたしよりちょっと年上だろうか？　なかなか綺麗な顔した男の子である。
すごくイイ服を着てるけど、あの子もレメクが言っていた『地方貴族の子供』だろうか？
首を傾げながら、あたしはそそくさと布をかき分けて中に戻る。
服の裾を踏まないよう気をつけながら布の海を脱出すると、ベッドもどきに並んで座っていたレメク達が微苦笑を浮かべてこちらを見ていた。
どうやらあたしの動きをじっと観察していた様である。
「探検の成果はいかがでしたかな？　レディ」
おっとりと尋ねてくるヴェルナー閣下に、あたしは満面笑顔で歩み寄った。
よちよちよち。
「すごく綺麗だったわ！　あのね、女の人がクルッて回るとね、スカートがふわって浮くの」
よちよちよち。
「この滑りやすい床でどうやったらあんなにスイスイ動けるのかな。お互いの顔しか見てないのにね、全然足とか服とか踏まないの！」
よちよちよち。
ちまちまと歩いて近づくあたしに、レメクが苦笑を浮かべながら立ち上がる。

近くに来て手を差し出してくれたので、あたしは素早くその腕の中に飛び込んだ。
「おじ様！　あたしもあんな風に踊ってみたい！」
「その前に、あなたはまず普通に歩けるようにならないといけませんね」
レメクは苦笑しきりだ。
あたしを軽々と抱き上げて、何故か左腕の上に座らせる。
およ？
そして閣下を振り返った。
おりょりょ？
「では、閣下」
あたし達の姿にニコニコ微笑っていた閣下が、レメクの声にゆっくりと腰を上げる。
レメクの隣に並ぶと、あたしにニコッと微笑みかけて言った。
「参りましょうか」
なんですと！？
あまりにも唐突に言われて、あたしの思考が真っ白になった。
「（ちょちょちょ）」
（ちょっと待って心の準備が、てゆかやっぱりお外に出ないと行けないのね！？）
心の叫びを受け取って、すぐ近くにあるレメクの目があたしの目を覗き込む。
「無難な過ごし方は教えたはずです。……覚えていますね？」
「う……うん」
頷きながら、あたしは小さく首をすくめた。
「黙って笑っていればいいのよね？　何か問われて答えに困ったら、おじ様にピタッてひっついて顔隠すのよね？」
しおしおと肩を落とし、心許なげに確認するあたし。
レメクは淡く微笑んだ。
「基本的には、そうなります。……本当はこんな方法は良くないの

ですが、今晩だけの辛抱ということで我慢してください」
「……うん」
小さく頷くと、レメクはわずかに眉を下げる。
どこか心配げなその顔には、少しだけ哀れみが混じっていた。
「……こんなことに巻き込んでしまって、申し訳ありません。本来ならこんな真似はしたくなかったのですが……」
あわわわわ。
「い、いいわよ！　うん。ほら、なんて言うか、一生に一度できるかどうかっていう経験だし！　おじ様の一生の恥になっちゃうっていうのが恐いだけで……」
「そんな心配は無用です。前々から言ってますが、あなたが傷つかなければそれでいいんです」
「いや、あたしも前々から言ってるけど、おじ様の恥にさえならなければあたしはそれでいいんだって」
「恥など……何を恥とする必要があるんですか？　あなたは、多少不思議な方向に暴走する癖と、未知の領域に空想が飛躍するのと、言動が今ひとつ子供らしくないこと以外は、何一つ恥ずべき所のない子供ではありませんか」
……その三つの要素は恥なのか？
胡乱な目になったあたしに、レメクは全然気づかない。
「彼等に『あなた』を見せておく必要があるからこそ、こうして見せ物のようにあなたを連れ回しています。ですが、今夜一夜だけと必ずお約束します。例え誰に何を言われようと、今夜以外にあなたをこのような目にあわせたりはしません」
「……しかし、レ……いえ、クラウドール卿。それでは納得しない方々もおられるのでは？」
レメクの声に、閣下がどこか難しげな顔で声をあげる。
だがレメクはきっぱりと言いきった。
「幼い子供にこのような事を強いるなど、本来あってはならないことです。何と言われようとも、私は拒否いたします」

「ですが、応えなければ『侮られた』と思う者も出ましょう」
「それがなんですか」
「……」
「貴族の矜持ごときに、ベルをつきあわせるつもりはありません」
「……貴方のことも、どう言われるかわかりませんよ？」
「かまいません」
ハッキリと言いきったレメクをひたと見つめ、閣下はふと口元を笑ませた。
「……そこまで仰るのでしたら、わたくしからは、もはや何も言いますまい」
いや、マテマテ。
「いや、ちょ、ちょっと待って……待って、おじ様。あたし、おじ様が誰かに悪く言われるの嫌よ？」
レメクの服をギュッと握って、あたしはじっとレメクを見つめた。
「おじ様が、あたしが傷つかないように、って……気遣ってくれるのはわかってる。それはわかってるの。でもおじ様、あたしもおじ様が誰かに傷つけられるのは嫌。影でこそこそ言われちゃうの、嫌なの」
レメクもあたしをじっと見る。
その、綺麗な綺麗な明け方の空の瞳。
「おじ様が『それでかまわない』って言っても、あたしがそれを嫌なの。……ねぇ、おじ様。それはきっと、おじ様があたしを気遣ってくれてるのと、おんなじ気持ちだと思うのよ」
レメクがちょっと目を瞠る。
その瞳を覗き込んで、あたしは思いの丈を込めて言った。
「誰かにあたしが笑われたとしても、そんなことで傷ついたりしないわ。そ、そりゃ、ちょっと悔しかったり辛かったりするかもしれないけど……その程度で折れちゃう矜持なんて、あたし、持ってないもの！」
大切なのは、目の前の人。

強くて優しくて寂しがりやで暖かい……この人さえ変わらず輝いていてくれれば、誰に笑われたって構わないのだ。

もしかしたら、この気持ちは憧れとか尊敬とかに近いのかもしれない。

大好きだけれども、それだけでは到底言い表せないいろんな気持ちが体の中にあって、その全てでこの人の輝きを守りたいと思うから。

「……私も」

ふと、レメクが声を零す。

どこか呆とした眼差しが、あたしの目を見つめていた。

「あなたのことで、例え誰に何を言われたとしても……それで傷がつくような矜持など、持っていません」

『あなたは……』

コトリと何かが零れるようにして『声』が聞こえる。

暖かくて、なぜか少しだけ切ない声が。

『私の……』

私の？

あたしは首を傾げる。

けれど、声はそれ以降伝わってはこなかった。

ただ、途轍(とてつ)もなく暖かい気持ちが伝わってきた。暖かくて、けれどどうしてだか、涙が出そうなぐらい心を揺さぶる熱が――

「……ふむ。ならば、何の問題も無いようですな」

ふと聞こえてきた声に、あたし達はハタと我に返った。

思わず同時にそちらを見ると、なにやら大量の羊皮紙を懐に仕舞うおじいちゃまが。

「か、閣下」

レメクがちょっと焦った顔になった。

顔を上げてニコッと笑った閣下に、あたしは軽く首を傾げる。

……さっきの羊皮紙の束。なんか、ケニードのアレに似てるんだ

けど……？

（閣下も『複写紋章術』を使える……とか？）

あたしはジッと閣下を見つめる。

もしかして、閣下もレメクマニアなのだろうか。お年から考えるに、あたし達の先輩と見るべきかもしれない！

（……後でぜひ物々交換を！）

あたしの目がキラリと輝いた。

「さて」

その閣下の声に、暑くもないのに汗をかきはじめていたレメクがちょっと後退る。

「お若い方の時間は後の楽しみにしておいて、まずは次の戦いをどう制するかを考えましょう」

……どういう意味だろうか？

首を傾げたあたしに、閣下は晴れやかに笑う。

「なに。夜会とは絢爛豪華な戦なのですよ。人々は互いの持つあらゆるものを賭けて駆け引きをするのです。……ここで最も重要視されるのは、情報でしてね。それは何も真実に裏付けされた『情報』でなくても良いのです。そう……いわば、噂でいいのですよ。新しい噂、珍しい噂、貴重な噂。そういったものを持った者が勝者となるのです。人々はその人を称え、その人に注目し、その人は沢山の人に認識され、人脈を得るのですから」

そこで、と閣下は声を潜める。

「貴方様方に関してですが、お二人の場合この度の夜会は最上の舞台と言えるでしょう。注目度も目新しさもその貴重さも、全てが他の『噂』よりも抜きんでています。例えば……」

そこで言葉を区切って、閣下はちょっと引き気味のレメクに掌を向けた。

「もともと数多の方から誘いをかけられながら、一度として夜会に出席しなかった方の登場」

次に掌はあたしに。

「そして、数十年に一人世に現れるかどうか、とまで言われたメリディス族のレディ。この組み合わせは、それだけで大変な注目をされます。おまけに見栄えも大層良いですしね」

うん。それはもう、実体験しちゃいました。

あたしは出入り口のほうに視線を馳せる。

……なにしろ、あそこにも人集りができちゃってるほどですから。

「おまけに、お嬢様に関しては実に様々な噂が出ています。レン……いえ、クラウドール卿の元に貴女が居るという噂が流れたのが、今から一月半ほど前。その後、クラウドール卿の応対で爆発的に増えてしまった憶測の類がかなりの数に上ります」

「憶測の類？」

声を上げたあたしに、閣下はニコッと笑う。

「ええ。最たるものは、レ……いえ、クラウドール卿が、どこかのご令嬢との間に御子を儲けられていた、という噂です」

「！？」

ショックのあまり顎を落としたあたしに、レメクが慌てて声を上げた。

「噂です！　違います！　……違うと言ってるでしょう！」

しかし、その慌てっぷりがかえって嘘くさい。

あたしは絶望的な目で彼を見た。

「だから、あなたがその子供だと思われたんです！　言ったはずですよ！？　私に妻子は無いと！」

あぁ、そういえば。

あたしは開ききっていた口をパクンと閉める。

そういえば、出会った最初の方でそんな話をしたんでした。

……いやでも、世の中には結婚してなくても子供のいる人もいるわけで……

「だから、あなたがその子供だと思われているという時点で、誤解も甚だしいと気づいていただきたいのですが！？」

レメク、必死。

なぜかヴェルナー閣下がほんのりイイ笑顔になっていた。
「閣下！」
「……とまぁ、こんな風に事実無根な噂が宮廷で流れるようになってしまいまして。ご息女を頂きたい、などと言われることもあったそうなのですよ」
非難を込めたレメクの声に、閣下はニコニコとあたしに笑いかける。
あたしは「なるほど」と頷きながら、密かに感服していた。
……閣下。確かケニードのお話では、いつもつれなくされてたとか。
さては意趣返ししてますね？
おじいちゃまは大変イイ笑顔だ。
「そんなクラウドール卿を助けるためにも、この戦は制さなくてはなりません。……お嬢様、あなたの協力が必要なのです。なに、クラウドール卿にペッタリくっついていればいいだけですから、難しくはありますまい？　あと、そうですね……隙を見て頬にでも祝福をしてあげれば、尚良いですね」
「閣下！」
「祝福って？」
声を上げるレメクとあたし。
閣下はあたしの方だけに笑顔を向ける。
「キスをしてさしあげるのですよ」
あたしの目がギラッと輝いた。
「そうやって、とても親密だというのを周囲に知らしめるわけです。娘疑惑はクラウドール卿が必死に否定してくれますからね。やっていただけますか？」
「もちろん！」
閣下はにっこりと微笑み、レメクに向かって「さぁ、これで準備万端です」と言わんばかりに頷いてみせた。
レメクがとてもとても渋い顔。

「言っておきますが、そういった行為はこのような場でするべきことではありませんよ」
「なにを仰いますか。周知する必要がある場合、敢えて成すのが良策です。百聞は一見にしかず、という古の言葉をご存じでしょう？」
「意味が違うと思いますが」
「広義においては似たようなものです」
ピシャリと言いきって、閣下はあたしに向き直った。
「さぁ、では夜会を制しに参りましょう。大丈夫ですよ、お嬢様。不肖なる身ではございますが、わたくしもお傍におりますからな。レン……いえ、クラウドール卿ともども、わたくしの命をかけてお守りいたしましょう」
晴れやかに笑って言うおじいちゃま。その素敵発言にウットリと微笑んで、あたしはレメクへと視線を向けた。
さぁ。
さぁ、おじ様。
おじ様もここで何か、ズキュンッとくるセリフを一発！
目を輝かせてお願いすると、なぜか不機嫌そうな顔で睨まれる。
ペチコ。
「……ちょぁー……」
叩かれたおでこを押さえて呻くあたし。
閣下はそんなあたし達を見て、はんなりとした笑みを浮かべてこう言った。
「……貴方様も、照れるということをなさるのですね……」
レメクがものすごい目で睨んでいた。

※　※　※

休憩所から大広間に出る時、あたしはこう思いました。
（どうせ広間に出るんだったら、さっきのあたしの冒険は何だったのだろうか）

けれど大広間に出た後、あたしはこう思いました。
（……嗚呼、あの時見ておかなかったら、きっとコレがふつーの舞踏会の光景だと思っちゃったんだろうなぁ……）
流れる音楽こそそのままに、けれど踊っている人が一人もいない。
そんな舞踏会が、今ここに！
（……いや本当、おじ様、王宮でどういう存在なの……？）
胡乱になる目を伏せて隠し、あたしはこっそりとレメクに『声』を送った。
『おじ様、すごーくモテモテね？』
休憩所から出た途端わらわらと群がってきた人々は、どう少なく見積もっても全体の半数以上にのぼる。
踊り手を失った音楽が、それでも綺麗に鳴り響いているのがすごくシュールだ。
『再三言っているように、時期が悪かっただけです』
時期が悪いだけで、こんな人集りになったりするだろうか？
……ならないと思うなぁ……
一応、広間の端っこには音楽にあわせて踊ろうとしている人もいる。たぶん地方貴族の方々だろう。人の視線がこちらに集中しているのを利用して、一生懸命ダンスの練習をしているようである。
……羨ましい。
あたしはレメクの腕に座ったまま、遠いそちらに思いを馳せた。
歩くことさえ満足にできないあたしではあるが、ダンスにはものすごく憧れているのだ。
そう、おじ様と手に手を取って踊れたなら！
それはとっても素敵だろうなって思うのだ！！
（……いいなぁ……！）
現実を思うと涙が止まりませんが。
そんなあたしを腕に座らせているレメクは、方々《ほうぼう》を相手に応対中だ。
「……いいえ」「違います」「いいえ」

……なんだか否定ばっかりしています。
一人対多人数であちこちから質問されているからなのだろうか？
似たような質問が相次ぐせいで、否定回答が多いらしい。
もちろん、問いの中身は「ご息女ですか？」とかだ。
にしても、本当にそういう噂が横行してたんだなぁ……
あたしはちょっと遠い目になった。
レメクは御年三十二歳。そう思われても仕方がない、ということだろうか。
（それともまさか）
ハタとあたしは思い至る。
（レメク、意外とお手々の早い人だったり？）
『違います！』
思った瞬間に、ものすごい否定が飛んできた。
だがしかし、ならば何故このような誤認が広がっていたのか。
本来なら『極稀な』メリディス族の子供でさえ、もしかして娘さん？　などと言われるということは……
そう！　レメクならメリディス族の子供がいても不思議じゃないと思われたということで……
ということは、嗚呼！　つまり、イロイロと……！！
『違いますッ！！』
さっきよりも早く強烈な否定が飛んでくる。
なんでそんなに必死なのだろう。ちょっと問いつめたい気分です。
あたしはギラリと目を輝かせる。
けれどあたし達の脳内バトルは不発に終わった。
「しかし、メリディス族のご令嬢とお会いできるとは……幻と言われるだけあって、ここ二十年ばかり噂も聞きませんでしたからな」
質問では無く話題として、あたしの一族名が出てきたのである。
思わずビクッとなったのは、あたしのことを根掘り葉掘り聞こうという意図が伝わってきたからだ。
反射的にレメクの首にすがりついたあたしの背に、暖かい手がポ

ンと添えられる。ポンポン、と軽く叩くのは、心配するなの意思表示だ。

「本人は至って普通の子供ですよ。多少珍しい色の髪をしていますが、その程度です」

「いやしかし、一族は総じて類い稀な美貌だとか。曰く、妖精の如く美しい、と」

これはもっと顔を見せろという催促だろうか？

それとも褒めてくれているんだろうか？

あたしはレメクの首に顔を伏せたまま、心の中で「？」を飛ばす。

極稀な一族の、さらに稀な美人さんが有名だったのか何かだろうが、同じ一族だからって一緒くたに『きっと美人』だとか思わないでいただきたい。

こっちは普通の子供です。

『……いえ』

なぜかレメクから控えめな否定が飛んできた。

どういう意味ですか？

「はは、しかし、そのようにされてはお顔を拝見することも叶いませんな」

レメクの首に顔を埋めている（グッジョブ）あたしに、人垣の中の一人が笑いながら言う。追従する声もあがるが、アウグスタ級の美人さんならともかく、このあたしに顔が上げれるわけもない。

てゆかですね、メリディス族だから美人って決めつけて、そんな話題の最中に顔上げろなんて催促しないでいただきたい！

「申し訳ありませんが、このように大変恥ずかしがり屋でして」

微動だにしないあたしに、レメクがさらりと助け船を出す。

そう、今のあたしは恥ずかしがり屋で、初めての夜会に気絶しちゃうぐらい繊細なお嬢様なのである。

なのでこんな風に、わりと早くからレメクに密着して、質問攻撃から逃げていても不思議では無いのだ！

ええ。貴族様方が恐くてとっとととトンズラしたわけではありませ

んよ！？
もちろん、公衆の面前でレメクに密着できるイイチャンスだとかも思ってません！
本当です！！
『……ベル。あとでちょっと、お話が』
素早く飛んでくるレメクの『声』。
嗚呼、世の中って難しい。
「ははぁ……しかし、クラウドール卿はずいぶんと慕われたものですなぁ。いや、羨ましい」
ははは、という明るい笑い声は周囲から。
ちなみに、レメクは一度も笑っていません。愛想笑いも無いよ、この人。
しかし、そう思った途端、思わぬ所で奇跡が発生！
「……ええ、こうして慕ってもらえるのは嬉しいものです」
微笑ったぞ。今この人微笑ったぞ。
顔は見えないけど気配でわかる！　絶対ほんのり微笑ったぞ！！
その証拠にどよめきが起こったのだ。間違いない！
（あぁあああたしも見たかったぁあッ！！）
あたしは心の中で悶絶した。
いや確かにあたしは度々笑顔見てるけど！
見てるけどもっともっとと言うか笑顔全部見尽くしたいんです！！
あたしは素早く顔を上げると、まだちょっぴり微笑みの余韻を口元にはいているレメクを観賞。
よし。脳内保存。
そして素早く行動に出た。
ちゅ。
ちょっとズレて顎あたりになっちゃったけど、一応これもほっぺにチューだ。
どよめきが三倍増しになったが、そんなことはどうでもいい。
ひとまずあたしは元の定位置へ。ちょうどレメクの背後にいた閣

下と目が合った。
閣下は輝く笑顔でサムズアップ。
あたしもこっそりサムズアップ。
互いにお目々をキラキラリ。
なぜかレメクは何の反応もしてくれませんでしたが。
……てゆか、あれ？　なんか動き止まってる？
あたしはチラッとレメクを見た。
レメクの時が止まっています。
もう一発ブチューッとやっていい？
「！」
あ。気づかれた。
十秒ぐらい固まっていたレメクは、ぎょっとした顔であたしを見る。明らかに怯んでいるが、何故怯まれているのかがわからない。
まぁ、いいや。
「べ……！」
「ああ、レメク、レメク。ちょっといいか？　閣下がお呼びなんだが」
何か叫びかけたレメクを遮って、大きな熊さんが突如出現。
いや、本当はすぐ傍にいたんだろうけど。今まで全然気づきませんでした。
……この巨体が不思議なほど、気配消しちゃうんだなぁ、これが。
しかし、閣下が呼んでいるとはどういうことだろうか。ひょいと閣下を見ると、閣下は「わたくし？」と言わんばかりの目で自分を指さしていた。
だが、瞬きする間もなくにっこり笑顔になって、それっぽい顔に変身する。
何だろう？
「閣下が？」
レメクがくるりと後ろを振り返る。
自然、あたしは今まで背を向けていた人々に顔を見せるハメに。

おお、というどよめきに、あたしはとっさに俯きかけ……
気を取り直して、とりあえずにっこりと愛想笑いした。
そしてそそくさと体勢を立て直し、閣下にちょこんと向き直る。
で？　お呼びって？
「あぁ、クラウドール卿。一つお願いしたい事があるのですが」
「（衆人環視の前で、いつもみたくワァワァやるわけにゃいかんだろうが）」
なぜかちょっと声を大きくして言う閣下。その声に隠れて、ぼそぼそと熊さんが横でぼやく。
「（それなら、ベルの動きを止めていただきたいですが）。なんでしょうか？」
ぼそぼそと返しながら、レメクが閣下に首を傾げた。
「（あの突発行動をどうやって止めるっつーんだよ、てゆか嬢ちゃんもちょっと場面考え……）」
「お二人の結婚式には、ぜひわたくしが介添えを」
「「なんのお話です！？」」
レメクと熊さんが同時に叫ぶ。
バルバロッサ卿のフォローは裏目に出たようです。
上がったどよめきは先に何倍あっただろうか。
音楽が完全にかき消された所をみると、相当な音量だったと推測されます。
……爆弾発言もここまでくるといっそ見事だ。
「クラウドール卿！　で、でででではあの噂は本当だったのですね！？」
「いや、まさか！　貴方ほどの方が……！！」
「ご自分で育てて収穫を！？」
「ではさっきのはそういう意味での接吻で！？」
「さすがです！　まさかそこまでとは！！」
「お待ちください！　うちにもそれなりに美しい娘が！」
「いえ！　我が家にも同じぐらいの年頃の娘が！」

「普通の年頃の娘ではいけないのですか！？」
とたんにドッと押し寄せてきた人々の熱気に、さすがのレメクも思わず後退る。だが、彼の冷静さはこういう時にこそ発揮されるものなのだろう。
「待ちなさい。私はまだ何の返答もしておりませんよ」
「師匠と呼ばせてください！」
「何の師匠ですか！」
三秒と持たなかったが。
「おまえはどうして嬢ちゃんが関わると冷静じゃないんだ……。つーか、閣下ぁ……この事態どうするつもりですかー」
いつものクラウドール邸のやりとりのような言い合いをしはじめるレメクに、遠目になったバルバロッサ卿が閣下に非難の目を向ける。
珍しく『言い合い』の観客になっているあたしは、レメクと閣下を交互に見つめた。
と言うかですね、言い合いに参加してる一部の人以外、全員がすごいびっくりした顔になってるんだけど……どうしてでしょう？
……いや、たぶん、レメクとあたしの関係を誤解してビックリなんだろうけど……
「どうするもなにも、こういうことをやりたくて陛下はレン……いえ、クラウドール卿をお呼びしたわけでしょう？　こちらのお嬢さんとのやりとりを拝見して、わたくしも得心を致しました。それに、で……ぁあ、ゴホン、クラウドール卿の雰囲気が前と全然違っておられましたからな。こういう場面を見せておくのも良いかと思ったのです」
「……閣下」
「ご覧ください。あぁやって一生懸命発言を撤回させようとすればするほど、常のあの方との違いに、人々はかえって納得をしてしまうのです。素晴らしい認知のさせ方だとは思いませんか？」
「……閣下」

「ついでにわたくしの希望も叶えていただければ、これに勝る幸せはありません。……あぁ、できれば名付け親にもなりたいのですが、これればかりはお許しいただけないでしょうなぁ……」

「……閣下ッ」

夢見るおじいちゃんの横で、大きな熊さんが頭を抱えている。まるでレメクと閣下のやりとりのようだ。

（それにしても……）

あたしはワァワァ言い合っているレメクを見上げてから、ついと周囲を見渡した。

さっきから気になっているのだが、ケニードの姿が見えません。いつもなら、絶対にレメクの傍に……

……。

……あぁ……うん……

あたしは真正面の一角に目を止め、小さく親指を押っ立てた。

いました。

いましたよ。

光速の複写術師様が。

手も霞むほどの早さで何十枚（何百枚？）もの『写真』を増産しているそのお人は、一瞬だけあたしに親指を立てて作業の戻る。

そしてその隣には、助手の如く控える謎の黒ずきんさんが。

（……あれは……どう見ても、ポテトさん……）

……てゆか顔が見えないほど深くフード被ってるのに、なんであんなにキラキラしているんだろう……

あたしは遠い目になってその黒ずきんを見つめた。

顔が見えないのに美形の輝き。あの一角だけが妙に眩い。

あのヒトの謎美貌は、きっと袋詰めにしても輝くに違いない。……なんかヤだ。

あたしは視線をレメクへと戻し、もう一度閣下達の方を見た。

閣下は輝く笑顔で大きく頷く。

スキニヤッテイイヨ。

そんな言葉が顔に書いてありました。
あたしもしっかりと頷きを返す。
バッチコイ。
そう顔に書いておきました。
折しもレメクへと視界を戻したあたしに、とても立派な初老の女性が勢い込んで声をかけてくる。
「そ、それで、ねぇ、そちらのお嬢さん。お嬢さんは、クラウドール卿のこと、どう思っていらっしゃるのかしら!?」
こんな質問されたところで、あたしに何か気の利いた答えが返せるはずがない。
なのであたしは、全身全霊、心の底から、本音を言わせていただきました。
「大好き!」

7　物語のような王子様

大岩を砕くときに使う危険な薬を『火薬』といい、これを革袋や樽に詰め込んだものを『爆弾』と呼ぶ。

昔、採掘場に居たというおっちゃんから聞いたところによれば、その『爆弾』とやらは凄まじい破壊力をもつのだそうだ。

なにしろツルハシすら折れちゃう岩盤を、一撃で砕いてしまうのだから凄まじい。一度でいいから本物を見てみたいものである。

ただし使っている所を見る場合、必ず両耳をしっかり塞がないといけないらしい。

なぜなら爆弾が使われる時、それはそれは恐ろしい音がするのだとか。

噂によると、幾つもの雷が一度に落ちたかのような轟音なのだそうだ。

……本当だろうか？

その真偽のほどはともかく、故に周囲の人々が仰天して大声をあげちゃうような発言を爆弾発言と呼ぶのである。

だがしかし、世の中にはそうと呼ばれるのに相応しくない発言もある。

あたしはぎゅむっと唇を引き結んで、ものすごーく苦い顔で前に立つ大きな熊男を見上げた。

場所は大広間から出たところにある大きな通路。

綺麗な中庭の一つに面しているそこは、何人もの人が並んで歩けるぐらい広々としていた。今は誰もいませんが。

中庭には瀟洒な噴水もあって、やや水気を帯びた涼しい風がそよそよと流れている。

月明かりに照らされた中庭はとても綺麗で、あたし達以外見る人が誰もいないのがもったいないぐらいだった。

……というか、どうせならレメクと一緒に見たかったです。はい。

「だからな！　ああいうことは言っちゃイカンと言っとるんだって！」

あたしの目の前にいるバルバロッサ卿は、それこそ苦虫を十匹まとめて噛み砕いたような苦り顔でそう言った。

ずっと一緒にいてくれたレメクと離れ、彼と二人でこんなところに居るのには訳がある。あたしの発言に色めきたった紳士淑女が、矢継ぎ早にいろんな質問をあたしにしてきたのである。

途端、レメクはあたしをバルバロッサ卿に押しつけ、バルバロッサ卿は即座にあたしを抱えてその場から逃走。

そして今に至るというわけである。

あたしはぎゅむむーっと唇を一層引き結ぶ。

突然退場させられたのも不満なら、大好き発言をイカンと言われるのも不満だった。

「なんで大好きって言っちゃいけないの？」

ハッキリ言って納得いかない。大好きな人への気持ちをきっちり言っただけなのに、何故それを爆弾かつ問題発言呼ばわりされなくてはいけないのか。

確かに言った途端にあがったどよめきは、閣下の時と同じぐらいすごかった。

すごかったが、むしろ問題はあたしの発言じゃなく、驚く周囲の側にあるんじゃないかと思う。

レメクぐらい素敵な人だったら、誰だって大好きになるはずだからだ。

「だから……」

頭を掻きながら嘆息をつき、バルバロッサ卿は軽く天井を見上げる。

探していた言葉は見つかったのか、もう一度嘆息をついてあたしを見下ろした。

「社交界っちゅーやつはな、本音をのらくらと隠しながらそれとなーく臭わせるような言葉で話すのが普通なんだ。それをズバッと本

音で言うなんて……おまえさん、『はしたない』とか周りの連中に思われちまうんだぞ？」

むぅ……！

「そ、そんな変な常識なんて、知らないもん。それに、子供が素直でどうしていけないわけ？」

「ん～むむむ……子供だから寛容な目で見てくれる可能性もあるが……いや、だからって軽く考えてるとデッカイ落とし穴にはまっちまうぞ。いいか、嬢ちゃん。さっきのはもうやっちまったことだから、しょうがねぇと諦める。だが、これからは言動に気をつけろ。せめて、ハッキリ明言するのだけは避けてくれ」

「……だから、なんで？」

「それがルールだからだ。ルールが守れなきゃ、どこでだってつまはじきにされちまう。そうだろ？」

バルバロッサ卿の声に、あたしは沈黙した。

規則（ルール）と言われてしまえば、それに従うしかない。例え納得できなくてもだ。

「……わかった」

しゅんとして頷くあたしに、バルバロッサ卿は安堵のため息をつく。

頭をガシガシと掻いて、ほろ苦い笑みを口元にはいた。

「……おまえさんが不満に思うのもしょーがねぇんだがな。オレだってあんまり納得してねぇ。けどまぁ、納得できなくても合わせなきゃならんこともある。自分のやりたいよーにやっちゃならん場所ってのは、世の中にはいっぱいあるもんだ」

あたしは俯き、ややあって小さく頷いた。

自分の言いたいことややりたいことが出来る場所というのは、本当にものすごく少ない。ごく親しい人達だけの間とか、家族の間とか、そういう場所だけだからだ。

それ以外の場所で無理やり我を通せば、必ずどこかで報いを受ける。

なぜなら、人にはそれぞれの思いや考えがあって、絶えずそれはどこかで誰かのソレにぶつかっているからである。

こんな大きな場所の、身分も位も高い大人ばかりが集まる場所なら尚のことだろう。

何も知らない者が知らないままに好き勝手できるわけがないのだ。

「……いや、まぁ、そんなしょげんでもな……ほら、レメクが上手くとりなしてくれるって」

今更ながらに自分の言動への反応が恐くなったあたしに、バルバロッサ卿がフォローを入れる。

あたしはしょんぼりと大きな偉丈夫を見上げた。

「……あたし、またおじ様に迷惑かけたのかな」

「……エーいや、なんつーか……困ってたっぽいが、あれでも一応それなりに喜んでたように見えたり見えなかったり」

どっちなんだろうか。

しょんぼり顔のまま胡乱な目になったあたしに、バルバロッサ卿はさらにガシガシと頭を掻く。

せっかく格好良くまとまっていた髪が、見る間にぼさぼさになっていった。

「あいつの表情って分かりにくいんだよ。嬢ちゃんが来てからは、それなりに感情が表に出てるけどな。基本的に無表情だろ？」

……そうだっけ？

あたしはちょっと遠い目になった。

どちらかと言うと、基本『ちょっと困り顔』な気がするのだが。

……いや、『恐れ』とか『怯え』かもしれませんが。

「……ああ……なんつーか、そっちでは別か。だろうな……。いや、それはいいとして。俺等には基本的に無表情なんだよ、あいつ。昔なんて死んだよーな目ぇしてたしな。笑い顔なんぞほとんど見たこと無いし、いろんな意味で恐い奴だったからな」

そうだろうか？

あたしは一層遠い目になった。

今はどちらかと言うと、あたしのほうがレメクに怖がられてる気がするのだが。

「喜怒哀楽ってぇのが見えなくてな。つっても、怒ってるのとかはわかるんだよ。それも冷ややかに怒るんだよコエーコエー。底冷えするような目でジローって見つめられてな。めちゃくちゃ冷たい声で怒られるわけだ。……最近どっちかって言うと叫んでるけどな」

あたしは常に叫ぶタイプで怒られてます。

風呂を覗こうとしてはいけません!!　とか。

トイレについてきてはいけません!!　とか。

人の下着を盗ってはいけません!!　とか。

……なぜでしょう？　やっちゃいけないことばかりです。

大まじめに考え込んだあたしの前で、バルバロッサ卿も大まじめな顔でしみじみと言う。

「なんつーか、喜んでる所とか、悲しんでる所とか、楽しんでる所とか……そーいうのが無かったんだよなぁ……。なんかいつも淡々としててな……あぁ、こいつ生きてないんだなぁ、って思ったもんだ」

「？」

その言葉にあたしは首を大きく傾げた。

ちゃんとそこで生きているのに、『生きてない』っていうのはどういう意味だろうか？

けれどあたしが問うより早く、バルバロッサ卿はチラッと笑みを零す。

「けどな、おまえさんが来てから、あいつ目に見えて喜怒哀楽が出始めてよ。俺ぁビックリしたね。あいつが帰ってくると、おまえさん、全力で走って抱きつくだろ？　お帰りっつって。あの時とか特に顕著なんだよ。いやもう、あぁ、こいつ今嬉しいんだな、とか思っちまうぐらいに」

そ……そうだっけ？

あたしは更に更に遠い目になった。

最初にやったときは逃げ腰になられたし、一ヶ月経った頃ぐらいに諦めたようなため息をつかれ、最近になってやっと慣れてもらった感じなのだが。

あれでも喜んでたんだろうか？

しかし、喜ばれるようなことだっただろうか？　もちろん、あたし自身は大喜びでやってるのだが。

目をぱちくりさせているあたしに、熊さんはガシガシを頭を掻く。もう完全に夜会仕様から普段仕様に変わっちゃった髪型で、バルバロッサ卿はいつもと同じ男臭い笑顔を浮かべた。

「んー、あぁ、何言いたかったのかわからんようになっちまったが。まぁ、なんだ。レメクが嬢ちゃんを迷惑だって思うワケねェから。そういう心配はすんなよ？」

がしっと大きな手があたしの頭に置かれる。いつもみたいにワシワシと撫でなかったのは、あたしの髪型を考慮してのことだろう。

「さて。レメク達が上手く応対してくれてるだろうから、その間に俺等は用を足しに行こうか」

「用を足す？」

背中を押されて転びそうになったあたしは、相手のぶっとい足にしがみつきながら問う。

バルバロッサ卿はきょとんとした顔になってから、ニカッと笑った。

「便所だ、便所。ちょうどそこの廊下の所にあるんだよ。大広間には無いからな。あんまりこっちに行ったり来たりすると影で笑われちまうから、この機会に行っちまうほうがいいだろ。男と違って、嬢ちゃんは茂みで飛ばすわけにゃいかんのだから」

「……バルバロッサ卿も言動には気をつけたほうがいいと思うわ」

茂みで飛ばす、なんぞ普通に『難』だと思うのだ。

いろんな意味で。

「まぁ、気にすんな。ほれ、行った行った。待っててやっから」

「あい」

促す声に素直に頷き、あたしはちまちまと歩き出す。ちょっぴりずつしか進まないあたしを見て、なぜかバルバロッサ卿が「ぷ」と吹き出した。

失敬な！！

「失礼よバルバロッサ卿！　すごい失礼よ！？」

「あ、いや、悪ぃ悪ぃ！　はっはぁ、なんか、よちよち歩きの赤ん坊みた……」

「失敬なーッ！！」

ぽかすかと殴るが、大熊にはたいしたダメージでは無いらしい。あたしは口を尖らせ、バルバロッサ卿に憤然と背中を向けた。そして勢いよく歩き出す。

よちよちよち。

「……ぶはっ！」

背後で豪快に吹き出す音がした。

※　※　※

バルバロッサ卿は大変イイ男です。

けれど、女心をわかってはいないのです。

レースのハンカチで手を拭きながら、あたしは盛大に唇を尖らせていた。

あの後、あまりにも歩みの遅いあたしを見かねて、バルバロッサ卿はあたしを抱えてトイレの入り口まで運んでくれた。

それはとても素晴らしい紳士っぷりだと思う。……ええ、笑ってさえいなければ。

眉をギュッとしかめて、あたしは一層唇を尖らせる。

歩くのが下手なあたしの仕草は、きっと見ていてとてもオカシイのだろう。

笑いたい気持ちもよくわかる。だが、あんなに笑うことは無いと思うのだ！

（レメクは笑ったりしないのに！！）
愛するおじ様はほんのり笑顔になるだけで、あんな風に笑ったりはしない。
ほろりと口元をほころばせて、なんとも言えないなま暖かい眼差しで微笑む。あれぐらい大人な対応をしてほしいもんである！
……ん？
なにか今、ちょっと心に引っかかったような？
（……おかしいわね。なんでかしら）
あのほんのり暖かい微笑みが、今更ながらに引っかかる。
とても優しい眼差しなのに、優しすぎる色合いが微妙な感じ。
なんかこう……ほんのりと。
（……ま、まぁ、いいわ）
ハンカチを丁寧に畳みながら、あたしは考えを中断させた。なんだか気づいちゃいけないことまで気づきそうで、心にそっと蓋をする。
かわりに、丁寧に畳んだハンカチを大きく広げ直した。
とたんに可愛らしい花畑が目の前に広がる。
白一色のそれは、汚れ一つない艶やかな絹。
一見するといっぱい刺繍の入ったのハンカチのようにも見えるが、実は驚くほど細かい模様の総レースである。
丁寧に丁寧に編まれた可愛らしい花の中に、小さな鐘（ベル）が紛れ込んでいる。
どこに売っている品か知らないが、とても手の込んだ代物だった。
（この鐘（ベル）って……あたしの名前に因んでるのかな？）
脳裏に数時間前のレメクを思い浮かべる。
珍しい真珠色の礼服と、濃紺のマント。金糸の縁取りがついたそれを纏った姿は、どこか物語に出てくる王子様みたいだった。
……ちょっと年くってるけど。
（いやいや）
あたしは緩く首を左右に振る。

あの風格はむしろ王様みたいだと言うべきだろう（そしたら年齢関係ないし）。
立派な王冠と錫杖をもたせればきっと素晴らしく似合うに違いない。
うっとり。
せっかく揃いの服を着ているのだから、あたしも似たようなマント羽織って横に並びたいです。
ちんまり。
……。
……あれ？
なんでだろう……？
……なぜか今、心がとてもヘコみました。
（いやいや）
あたしはもう一度首を左右に振る。今のは無かったことにしよう。
そう、ハンカチを貰った時の話である。
あれは家を出る直前だった。
歩く練習をかねて玄関までよろよろと進んでいた時、あたしは見守ってくれていたレメクに呼び止められたのだ。
振り仰いだあたしに何かを言いかけ、しばし迷い、ちょっと困ったように微笑って彼は懐からこのハンカチを取り出した。

――あなたの初めての夜会が、つつがなく終わりますように。

そう言ってそれを渡してくれたレメクは、いつになく真剣な顔をしていた。
もしかすると、このハンカチはお守りなのかもしれない。
ハンカチ全体に花畑のように編まれた花は、あたしの大好きな蒲公英（ダンデライアン）だ。確か宿のおねーちゃんが、すごくイイ花言葉をもってると言っていた。

……忘れちゃったけど。
それはともかく。
真剣な顔をしていたレメクは、あたしが神妙な顔で受け取ると、どこか安堵したように微笑(わら)ってくれた。
あの染みいるような笑顔はとても素晴らしかった。あたしが見たレメクの笑顔の中で、五指には入る素敵さだったのだ。
（それにしても……）
あたしは手に持ったハンカチを見下ろす。
改めて思うが、よくこんな品が売っていたものである。
普通レースのハンカチだったら薔薇とか百合とか、そういう高貴そうな絵柄のほうが人気だろう。蒲公英は野草である。そこらの野にちょろっと生えている花なのだ。
わざわざそんな花を選んで作るだなんて、普通ならありえない。
（もしかして、レメク……）
あたしは久しぶりに小さな脳みそで推理をする。
珍しく冴え渡ったあたしの頭脳が、ピンと答えをはじき出した。
（さては特注しましたね！？）
きっとレメクのことだ、職人街のお針子さんに注文して作ってもらったに違いない！
この素晴らしく細かな編み目！　丁寧な仕上がり！　まさに職人芸な逸品である。
きっと作った人は名のある職人さんなのだ！
（おじ様……ッ！）
そこまでして『お守り』を作ってくれ、さりげなく渡してくれるだなんて、嗚呼あのお人はなんて素敵すぎる人なのだろうか！！
お手洗いの窓から見える星を見上げつつ、あたしは目をキラキラと輝かせる。そして、丁寧に丁寧にハンカチを畳んだ。
（んっふっふ。この名推理を披露して、レメクに頭撫でてもらわなくちゃ！）
そしてお礼を言いながら、思いっきり甘えるのだ！

よし、と気合いを入れてあたしはよちよちと歩き出した。
と、数歩も行かない所で我に返る。
（……いや、待てよ？　確かスキスキオーラをハッキリ見せちゃいけないんだよね？）
つい先程バルバロッサ卿から釘を刺されたばかりだ。
それとなく臭わせるのはいいけど、面と向かって好きと言ってはいけないのである。
ということは、もちろんハグも駄目だし頬ずりも駄目だ。
どうしよう。
（臭わせる程度の愛情表現って……どんなの？）
直接「好き！」っていうのがわかるのはいけない。
でもほっぺにチューは閣下も推奨してくれた。
（ということは、お触り程度ならオッケー？）
腰とか腰とか腰とか。
もしくは、尻とか尻とか尻とか。
よし、と握り拳をつくって、あたしは今度こそ出口に向かって歩き出す。
ただ出口から出る前に、ちょっとだけ心に引っかかりを覚えて首を傾げた。
（なんか……大事なこと忘れてるような……？）
なにかハンカチ関連で、ものすごく大事な事があった気がする。
なんだっけ？
あたしは首を傾げながら外に出た。
何故かは不明だが、ものすごくもったいないことをしたような気がしました。

※　※　※

大きな大きな大神官様は、聖職にいらっしゃる方ですが男性です。
男性だということは、女性用のお手洗いには入れないということ

です。
お手洗いから出たあたしは、近くにいるはずのバルバロッサ卿を探してきょろきょろと周囲を見渡した。
出入り口近くで待っててくれているはずの相手は、けれど目に見える範囲には居なかった。
（……あれ？）
あたしは首を傾げる。
慣れない靴とドレスのせいであたしの歩みは亀より遅い。
だからお手洗いにもすごく時間がかかったのだが、バルバロッサ卿はだからと言ってどこかに行ってしまうような人では無い。
（何かあったのかな……？）
あたしはもう一度周囲を見渡す。
小波のように寄せては引く、どこか遠い大広間の音楽。
人々の笑い声も話し声もひどく遠くて、あたしはじわじわと不安が増してくるのを感じた。
（……どこ行っちゃったんだろ……？）
黙ってどこかに行ってしまうような人では無い。
もし何かあったなら、例えマナー違反だろうとお手洗いの中のあたしに声をかけていくはずだ。
それすらも無かったのだから、もしかすると退っ引きならないことがあったのかもしれない。
けど、こんな場所で……？

――王宮とは魔窟です。

ふと、耳の奥でレメクの声が響いた。

――本来なら、あなたを連れてくるべき場所ではありません。

王宮が魔物の棲むという場所ならば、棲んでいる魔物はどこにい

るのだろうか。
あたしはもう一度周りを見渡した。
心臓がトクトクと忙しなく鳴っている。
どこからともなく耳鳴りがして、唾を飲み込む音が体中に響いた気がした。
（……レメク）
あたしは魔法の呪文をそっと唱える。
頭の中にその人が鮮やかに浮かんで、不思議とその瞬間だけは鼓動も落ち着いた。
（……レメク）
もう一度周囲を見渡す。
バルバロッサ卿は何処だろう。
早く合流して、レメクの傍に帰らなくては。
あたしはもう一度周囲を見渡し、
（……）
ある一点で硬直したように動きを止めた。
一瞬だが、呼吸も止まったような気がする。
廊下を見たあたしの目が、そこに立っている少年の姿を捕らえている。
いつからそこにいたのか、
いや、
いつのまにそこに現れたのか、
あたしにはよくわからなかった。
年の頃はあたしより少し上か。一目で上物とわかる贅を凝らした衣装に、品良く整った可愛らしい顔立ち。
それこそ物語に出てくる王子様のようなその少年は、あたしを見てにっこりと笑った。
「初めまして、藤の花の姫君。僕の名前はシーゼル。……君の名前を教えてもらってもいいかな？」

8　シーゼルとフェリシエーヌ

輝く金髪に甘い微笑み。優雅な物腰に典雅な衣装。
王子様と聞いてまず浮かぶのは、そんな典型的な人物像だろう。
王様の子供なら何歳でも王子様だろうが、そんなことは考えてはいけません。
王子というからには年は若く！
顔は美しく！
そして気品に溢れて輝いているのが鉄則なのである！！
もっとも、魅力で言えばレメクほど魅力的な殿方はいないのだがッ！！

さて、ゴホン。
それはともかく。
先の条件を踏まえて目の前の少年を見てみよう。
年は若く、おそらく十一か十二。
上品に整った顔立ちは、少年と言うより少女のそれに近い。
整った鼻梁に、薄い唇。肌は白く、瞳は綺麗な琥珀色で、髪はちょっと深みのある銀色をしていた。
絹服の上に着ているのは黄色のベストとワイン色の上着（ジェストコール）。
スカーフももちろん絹製で、上着の襟元（ルヴェール）には銀糸金糸の縫い取りがある。
裸にひん剥いて服を売り払えば、一年は遊んで暮らせそうだ。
（金の塊だわ！）
ビカッと目を光らせたあたしに、その少年は笑顔を不審そうに曇らせる。
整った鼻梁はちょっとだけレメクっぽくて好印象。
目が笑ってないので作り笑顔バレバレだが、それでも形的には申し分ない美少年ぶり。
改めて見れば、なかなか目の保養ではありませんか！

レメクの少年時代（の写真）には遠く及びませんが！！
（というか、あれに勝てる人はきっといないッ！！）
ふんぬーっ、と熱く結論を下して、あたしは目の保養を切り上げた。
（さて。バルバロッサ卿を探しましょう）
愛するおじ様の元に戻るためには、なんとしてもあの巨熊を捕獲しないといけないのです。
とはいえ、相変わらず廊下には他に誰もいないのだが。
（……まぁいいや）
三秒で諦めてちまちま歩き出す。
とりあえず、大広間に戻れば誰か気づいてくれるだろう。
よちよちよち。
「「……」」
よちよちよち。
「ちょ……ちょっと待て！」
ちまちまと歩くこと十数秒。
横を通り過ぎようとした瞬間、妙に慌てた顔で美少年が呼び止めてきた。
はて？
「僕は名前を聞いてるんだぞ！？　普通、無視して歩き出すか！？」
首を傾げたあたしに、相手は驚愕の表情でそう叫ぶ。
（ああ、そういえば）
すっかり忘れていたが、そういえば聞かれてましたね、何気なく。
ハタと思い出して見つめると、何故か相手の視線が斜めに逃げた。
……どういう意味ですか？
あたしは胡乱な目になって小さくぼやく。
「……というか、誰だっけ？」
名前も言われた気がするのだが、興味なかったので覚えられませんでした。
「……シーゼル」

ぼやきが聞こえたのか、少年がむっとした顔で告げてくる。
先の作り笑いと違い、その表情は素の顔のようだった。
（ふむふむ。シーゼル、と）
とりあえず脳みそに名前をたたき込む。
三秒で忘れそうだが。
「それで、そのシーゼルさんが、どうしてあたしの名前を尋ねるの？」
あたしの問いに、何故かシーゼルはビックリした顔になった。
だが、すぐにまたあの作り笑いを浮かべる。
今度の笑みはちょっと皮肉気味だ。
「何故って……知りたいから尋ねるんじゃないか。そうだろう？」
「そうね」
理には適っている。
笑みは気に入らないが。
「でも、あたしはあなたを知らないから、名前を教えられないわ」
「？　何を言ってるんだ？　知らないから、教えてもらおうとしてるんじゃないか」
首を傾げたシーなんとかさんに、あたしは呆れたような目になった。
「だって、あなたの存在って不透明なんだもの。どこの誰なのかも分からない、全く見ず知らずの人だわ。それにね、嘘の笑顔で名前を告げてくる人に、不用意に名前を告げちゃいけないのよ」
じゃあね、と片手をあげてよちよちと歩き出す。
さてさて。
熊さんはいったい何処でしょう？
「ちょっと待ってくれ！　なんなんだ、その理由は……というか、君、僕の名前は知ったのに、自分は名乗らないのか！？　非常識じゃないか！」
追いかけてきた相手に、あたしはジロッと振り返った。
……しつこいなぁ。

「心配しなくても、あなたの名前はもう忘れたわ」
シーさん、絶句。
「だいたい、非常識って言うのならあなたはどうなのよ。それとも、お手洗いから出てきた女性にいきなり名前聞くのは貴族の常識なの？」
うっと言葉に詰まった相手に、あたしは口を尖らせる。
「怪しいなんてもんじゃないわ。それこそレディに対する礼儀がなって無いじゃないの。そうでしょう？」
あたしの声に、シーさんは苦虫を噛みつぶしたような顔になった。
その顔を眺めながら、あたしは名前を教えたくない最たる理由を告げる。
「怪しくて笑顔も嘘っぽく、なおかつ自分から名乗ってくる相手っていったら、普通は悪魔か詐欺師じゃない。そうじゃない証拠が何もないんだから、名前なんて教えられないわ」
途端にシーさんは呆気にとられた顔になった。
妙にまじまじとあたしを見つめながら、素っ頓狂な声で叫ぶ。
「そんな迷信を信じてるのか！？」
迷信！？
「馬鹿馬鹿しい！　悪魔なんているわけないのに、そんなのと間違うだなんてありえない！！　言い訳ならもっと上手いこと言うんだね！」
「言い訳！？　というか、いるわけないだなんて、どうして言えるのよ！　聖書にだって書いてあるのよ！？」
無学だからと侮るなかれ！
最近はレメクにしごかれ……いや、教育されてせっせと聖書の書き取りだってやっているのだ！
レメクがあの低い美声で音読してくれちゃったり！
すると不思議なことに聖書の内容がするすると頭に入っちゃったり！！
そのくせ未だに文字がサッパリだったりするんです！！

……しょんぼりだ。

い、いや、それはともかく！

「『汝名を問うなかれ。其は神が与えたもう試練なり。汝名を告げることなかれ。其は悪魔が囁く誘惑なり。偽りの笑みにて近づきたるは悪しき者にして邪なる者。名を以て契約を結びしその後に、永劫の闇へと落とされたくなくば』」

レメクの蕩々とした口調を真似て諳(そら)んじたあたしに、相手は小馬鹿にした顔でフンと鼻を鳴らす。

「聖書は聖書じゃないか。そんなもので名乗りを控えてたら、どうやってこの王宮でやっていくんだ？　君はそれでもあのクラウドール卿の身内なのか？　信じられないな」

「なによ。お手洗いから出てきた女性を待ちかまえていきなり名前を問うてくるような人に言われたくないわ」

これには反論のしようが無いのか、相手はむっと口を噤んだ。

あたしはこの隙に話を切り上げようと口を開き、ハタとあることに気づいて相手を見つめた。

（……ちょっと待って……）

「……あなた、ここにいたバルバロッサ卿に何かした？」

あたしを待ちかまえていたのなら、ここにいたバルバロッサ卿とも会ったはずだ。

義理人情に厚くレメクからの信頼もある彼が、あたしを放ってどこかにいきなり消えるはずがない。

何かあったのだとすれば、今この目の前にいる少年に関係することではなかろうか？

「バルバロッサ卿は何処？」

あたしの問いに少年は軽く笑う。

「さぁ？」

「……何をしたの？」

「何もしてやしないさ。伝言を頼んだだけだよ。……それにしても君は人に問うばかりで、自分は問いに答えないんだね」

「嫌ならあなたも何も言わないことね。あたしはあなた個人には興味ないもの」
皮肉な声にキッパリと答えると、ムッとしたように相手が口を噤んだ。
あたし達は一歩分の距離でにらみ合う。
ふいに冷えた相手の眼差しに、あたしは負けじと目に力を込めた。
……本当はわかっている。
問答の内容を考えれば、あたしの方が失礼なことをしていることも、彼の言うことが正しいことも。
けどそれが分かっていても、どうしても素直に正しい対応ができない。
理由をあえて言うなら、そう、直感だろうか。
なにかが引っかかる。
なにかがおかしい。
彼の言葉は正しいけれど、彼の存在が正しくない。
嘘つきが嘘の土台に乗った状態で正しい言葉を語っているような、それこそ詐欺師が詐欺を働いているような、奇妙な違和感を感じるのだ。
あたしは相手と睨みあったまま足を動かし、真正面から向き直る。
やや金みがかった琥珀の瞳。
その瞳が宿すものに、あたしは自分の直感が正しかったことを悟った。
「あなたの言葉には真実が無い」
真っ直ぐに見上げた先にある瞳には、真摯な色が欠片も無い。
「あなたの笑顔にも心が無い」
最初に向けられていた笑顔だって、ハッキリとわかる作り笑いだった。
貴族というものがそういう生き物なのか、
それともこの少年がそういう人なのか、
あたしには判別がつかないけれど――

「心の無い言葉は人に届かないのよ。あなたがどんな理由であたしの名前を聞いてきているにしても、本当の意味で名を欲していないあなたに告げる名前は無いわ。もしかしたら名前を集める趣味を持っているのかもしれないけど、それにつきあう義務もあたしには無い」

どんな思惑があって近づいてきたのか分からないけれど、あたしを『あたし』として必要としてないことだけはハッキリしている。

そんな人に、告げる名前などどこにあるだろうか。

「あたしの名前は、あたしを呼んでくれる大切な人だけが知っていればいい。あなたにあげる名前は無いわ」

ハッキリと言いきると、はじめて相手の瞳の中に動きがあった。

皮肉や虚無とは違う色。

あたしの直感が正しいならば、それはある種の興味と好意だ。

（……なんで？）

意外な反応にあたしは眉をひそめる。

もしかして、つれなくされると燃えちゃうタイプだったりしましたか？

「嬢ちゃん！」

思わず首を傾げた瞬間、あたしの後方から声が飛んできた。

慌てて後ろを振り返ると、大広間の出入り口から偉丈夫のでっかい影が！

「バルバロッサ卿！」

顔を輝かせたあたしの近くまで走り込み、バルバロッサ卿はあたしにニカッと男臭い笑みを浮かべる。

巨体がかもしだす存在感と熱気に、少年が気圧されたように一歩後退った。

「悪ぃ悪ぃ！　ちょっと野暮用で席外しててな。事情話すのにも手間取ったもんだから遅くなっちまった」

（事情を話す？）

首を傾げたあたしに、バルバロッサ卿は意味深な笑みを浮かべる。
そうして、あたしの近くに立つ少年へと硬い視線を向けた。
少年。いつのまにか三歩分ぐらい離れてます。
「そういうことで、クレマンス伯爵。こちらのご令嬢は保護者が探しておりますので、連れて行かせていただきますよ」
「……僕は、僕が連れて行くから、と言ったはずだが？」
バルバロッサ卿の声に、不機嫌そうにあの少年が呟く。
あたしは思わず少年に視線を戻した。
なんと！　彼は伯爵様でしたか！！
えらくちっこい伯爵様もいたもんだ！
しかもやっぱりバルバロッサ卿がいなくなってた理由は彼にあった模様です！！
（おのれぇッ！！）
やはりあたしの直感は正しかったのだ！
目をギラギラと光らせたあたしに、伯爵（もう名前忘れきった）はフンとそっぽを向く。
そして、チラッと大男を見上げた。
「貴男がこんなに気の利かない人だとは思いもしなかったな。夜会の席で、無粋だとは思わなかったのか？」
「残念ながら、気を利かせるべき相手が違っていましてね。伯爵こそ、パートナーのいる相手に無粋な真似はおやめになるべきじゃありませんかねぇ？」
「パートナーといったって、あの人は保護者だろう。別に、僕が彼女と親しくすることに不都合はないはずだが」
「いぃえぇ、大ありなんですなぁ、これが。どうやら伯爵は先の騒動をご覧になってはいらっしゃらない模様！　近くにはいらっしゃらなかったのですかね？」
「……あれだけ人が集まっていれば仕方なかろう。……言っておくが、僕はあそこにいた連中とは違うぞ！　目新しい噂好きの連中や、何も理解していないのに人々が集まっているからと好奇心を刺激さ

れてその輪に加わるような連中と、この僕を一緒にしないでもらいたい」

「けど、その人達に負けて遠巻きになってたんですよねークレマンス伯爵様は」

「……ッ！」

おお。熊さん言う言う。

あたしは徹底抗戦体勢に入っているバルバロッサ卿を見上げ、こっそり拍手するフリをした。

「言っておきますがね、私が一度この場を離れたのはあなたのためじゃあないんですよ」

熊さんはため息混じりにそう言って嘆息をつく。

「こっちのお嬢様のために、あえて場を一度空けさせてもらったんです。……まぁ、そのせいでちょっと心細い思いをさせてしまったかもしれませんが」

あたしはバルバロッサ卿を見上げて「うんうん」と深く頷く。

なぜか少年伯爵が胡散臭そうな目であたしを見た。

どういう意味だ？

「ここで私があなたを言い負かせて追いはらうより、お嬢様の大事な大事な相手を連れてくるほうがいいと思いましたしね。だいたい、大人である私が子供相手にムキになるわけにいかない。大変、大変格好が悪いですし」

あたしは「うんうん」とさらに深く頷く。

少年伯爵がムッとしたのがわかった。

しかし相手が何かを言うよりも早く、バルバロッサ卿はニッコリと迫力のある笑顔を浮かべてこう言った。

「故に、この事態を収拾すべく動いたわけでございます。やぁ、私はここに宣言しなくてはいけませんなァ。我々はお払い箱だと言うことを。――なぜなら、保護者本人がここに来ておりますから」

言うや否や、バルバロッサ卿がサッと横に退いた。

（……おぉ）

あたしは息を呑んだ。

「……ぁ」

少年伯爵も思わず声を漏らす。

ぽかんとした顔は妙に無防備だったが、あたしはそちらに注意を払えなかった。

会場から漏れる明かりを後光のように纏って、その人物が姿を現す。

凛とした気配に相応しい怜悧な貌に、深い叡智を湛えた神秘的な瞳。

思わずウットリと見惚れてしまうその人物は、もちろんレメクに他ならない。

（……おじ様ッ！）

背後から聞こえてくる荘厳な音楽を従えて、王者の如く悠々とレメクが歩いてくる。

その全身が淡く煌めいているのは、おそらく服に施された真珠の光沢のせいだろう。

深い色の銀糸がその中で控えめに輝き、全身を使って大胆に描かれた模様を鮮やかに見せつけていた。

流れるような優美なフォルム。

服の下は筋肉で引き締まっていようとも、レメクはどちらかと言えば細身なほう。長身と相まって、その姿はまさに優雅の極みだった。

鼻血が出そうです。

（女王陛下ッ！！）

あたしは心の中でこの衣装を用意した女王陛下を賛美した。

（あなたはこれをご存じだったのですね！！）

あたしは今、初めて気づきました！

この服、格好良い美形が纏うと、男の色気満載なのです！！

（グッジョブッ！！）

その瞬間、悠然と歩いていたレメクがピタッと止まった。

……惜しい。あと五歩で飛びつけたのに。
そうして、何故か恐れを宿した瞳であたしを見下ろす。
……どういう意味ですか？
「……クラウドール卿」
きょとんと首を傾げたあたしの三歩向こうで、わずかに怯んだように伯爵が呟いた。
レメクは視線をあたしから伯爵へと転じる。
感情を払拭した目で相手を見つめ、丁寧に頭を下げた。
「お久しぶりですね、クレマンス伯爵」
「は……はい。ご無沙汰しております」
慌ててぎくしゃくと伯爵も頭を下げる。
レメクの丁寧さは相手にも影響を与えるようだ。
「最後にお会いしたのは五年ほど前でしたか。ずいぶんと大きくなられましたね」
「い、いえ。まだまだ小さいものです。いずれは父のように立派な人になりたいのですが」
レメクの声に、伯爵は小さく首を振る。
あたしはバルバロッサ卿をチラッと見上げた。
バルバロッサ卿もあたしをチラッと見下ろした。
（別人がいるヨ？）
あたしの無音の目線言語に、
（レメクの前じゃアァなんだよ）
バルバロッサ卿も目で返答を返す。
あたしは呆れたように小さな伯爵様を見つめた。
（……おのれ。こんな所にライバルが！）
「時がくれば自ずとなるべき姿に成るでしょう。今は焦らず、ゆっくりと成長なさることです」
「……貴方はそう言ってくださいますが……ですが、私は……」
伯爵は小さく俯く。
その瞳は、どこか暗い色をしていた。

あたしは大小二人を見比べてから眉を顰める。
あたしの時とは全く違う伯爵の応対も気になるが、それにも増して気になるのがレメクだ。
なんでさっきから、そんなに徹底した無表情なんだろうか？
もともと顔の作りも綺麗だから、淡々としていると妙に酷薄っぽく見えてしまう。
微笑んだ彼は無敵に素敵なのに。
そう思ったのがいけなかったのか、その途端にレメクの表情がちょっと揺らいだ。
「伯爵」
呼ぶ声も、ちょっとだけ暖かい。
顔を上げた伯爵に、レメクはゆっくりと言った。
「自らが誇れる自分とは、他の誰でもなく自分自身で己のあり方を決められる人でしょう。それは急げば成せるものでは無く、また誰かから押しつけられたものでもないはずです。ましてレンフォード公爵はあなたに無茶を要求するような方では無いはずですが」
「……えぇ、父は……」
「他者の言葉に耳を貸すのも、上に立つ者として持つべき姿勢です。ですが、それはあなたを束縛するものではありません。……あなたはまだ若い。無限の可能性があなたの前にあると言っていいでしょう。それを自分で狭めてはいけませんよ」
「……はい」
どこか呆然とした顔で伯爵は小さく頷く。
眼差しはレメクに注がれっぱなしで、傍にいるあたしやバルバロッサ卿は眼中外だった。
……別にいいけど。
あたしはレメクの方を見上げ、力を込めて瞳を閃かせた。
伯爵がレメクしか見ていないのはどうでもいい。問題なのは、レメクも少年伯爵しか見ていないということだ。
こっちは大変よろしくない。

（さぁ、おじ様。振り向け。振り向けぇえええッ！！）

祈りが通じたのか、レメクがちょっぴり汗を浮かべてチラッとあたしを見た。

あたしは目をキラリと光らせる。

そっと視線を外された。

（何故！？）

「ところで伯爵。このたびは、私のベルのために案内を申し出てくださったとか」

「え、あ。は、はい」

微妙に早口になったレメクの声に、伯爵が「そう言えば」といった顔で頷いた。

レメクはそれに対して淡々と言葉を綴る。

早口で。

「ありがたいお申し出ですが、彼女のエスコートは私が勤めることになっております。どうぞ伯爵はご自身のパートナーをエスコートしてさしあげてください」

（『ご自身のパートナー』？）

あたしは首を傾げる。

伯爵も首を傾げたが、レメクが掌で丁寧に指し示した場所を見た途端、ものすごい勢いで血の気を引かせた。

「フェ……フェリシエーヌ姫……！？」

「……ごきげんよう。クレマンス伯爵」

どう聞いても悲鳴にしか聞こえない伯爵の声と、異様に底冷えのする少女の声。

青ざめた伯爵をチラ見してから、あたしはレメクの掌が指す方を見やった。

場所はレメクの後方、大会場側。あたしからはゆうに十歩以上離れた所。

今までレメクに注目しすぎて気づかなかったが、そこには優雅に立つ一人の少女の姿があった。

（おお）
さすがのあたしも思わず唸る。
レメクよりも数歩後ろにいたその人は、それほど美しい姫君だったのだ。
同性にドキドキする趣味は欠片も無いが、やはり美しいものはウツクシイと感激してしまう。
闇をも霞ませる黄金の髪に、幼いながらも匂い立つような清楚な美貌。
唇は淡く艶やかな桃色で、大きな瞳は鮮やかな海の蒼。着る人を選ぶだろう薔薇色のドレスが、眩しいぐらい似合っている。思わず拍手したくなるほど目の保養だった。
うん。きっと末はアウグスタ並みの美女になるに違いない。
紛れもなく絶世の美少女だ。
（ナマお姫様！　ナマお姫様！！）
感動のあまり、あたしは思わずグッと握り拳を作ってしまった。
いろんな意味で『女王様』な人は間近で見たが、お姫様はまだ見たことがなかったのだ。
おそらく十二・三だろうその美少女は、顔立ちといい優雅な立ち姿といい、まさに絵に描いたようなお姫様だった。
……ちょっと眼差しが剣呑ですが。
（……てゆか、誰だろう？　あのお姫様）
優雅で立派な名前（忘れた）からして、貴族のお姫様には違い無いだろう。
だが、それにしてはこの眼差しの鋭さが尋常では無い。貧民街で生きてきたあたしですら怯んでしまう眼力だ。
そしてその眼が睨みすえているのは、冷や汗をダラダラと流している少年伯爵である。
（……おやおや？）
「少しでも早く会場内の雰囲気に慣れたいからと、早めに入場したのは一時間ほど前のことでしたかしら？」

一歩踏み出したお姫様に、伯爵は斜め後方へと半歩後退る。
「え……ええそうです、姫」
「まだ社交界に出席する栄誉を賜っていないワタクシは、この夜会をとても楽しみにしていたのですよ」
「それはもう、存じておりますとも」
スタスタと近寄る姫に、ジリジリ逃げる伯爵。
二人の距離は縮まる一方だ。あたし達からは離れて行ってるが。
「ワタクシも貴方も貴族の生まれ。そして共に年若く未熟な身。ワタクシも自分に課せられた義務を承知しております。故に、卑小なる身ではありますが先達の方々のお言葉を拝聴し、会話に加わらせていただくことで様々なことを学んでおりました」
「す、素晴らしいことです、姫」
「ええ。ワタクシもそう思いますわ」
そう言って微笑んだお姫様は、素晴らしく愛らしかった。
……目が笑ってさえいれば。
「それで、伯爵」
「はいっ」
「そのワタクシをエスコートするはずの貴方は、いったいこんな所で何をなさっておいででしたか？」
ニッッッコリ！　と力一杯微笑まれて、伯爵はぎょぐっと喉を鳴らせた。
じりじりと後退っていた伯爵は、背中にあたった壁でそれ以降の後退を阻まれる。
おそらく心理的にそちらに後退るよう、計算して動いていたのだろう。
ぎょっとなって背後の壁を見た伯爵に、姫君が悪夢のような素晴らしい笑顔になった。……ちょっと恐い。
（……貴族って……）
目の前で突然始まった王子様的美少年伯爵対美しいお姫様のやりとりに、あたしはちょっと遠い目になった。

それはまぁ、この国の王様が想像と違ったように、いかに外見が物語に出てきそうなほど美しい王子様&お姫様だろうと、現実なんて物語のようにキラキラしたもんじゃないとわかってます。
わかってますけど、もうちょっとこう、夢を見させてくれてもいいと思うんです。
わけのわからん理屈でトイレ帰りの女を待ち伏せするエセ王子的少年伯爵とか、
笑顔で殿方を壁際へと追いつめる美貌のお姫様とか、
そんなのばかり見せなくてもいいと思うのですよ。
あたしは遠い眼差しで薄暗い廊下の天井を見上げる。
夜の庭園を見せるための工夫なのだろう、この廊下の明かりはとても少ない。だから天井は暗く沈んでいるのだが、あたしの気持ちはもっと暗く沈んでいた。
（嗚呼）
思わず思う。涙もほろり。
（……儚かったな……あたしの夢……）
華やかで美しい王宮の夜会だというのに、夢物語以上に素晴らしかったのは宮廷音楽にあわせて踊る男女の姿（見れたの一瞬）と、レメクの艶姿だけとは……。
あたしはそっと涙を拭き取ると、未だあたしから三歩ぐらい離れた場所に立っているレメクへと視線を向けた。
常の黒一色の姿も素晴らしいが、煌々しさが違う今宵の艶姿。
ええ、これだけでもう救済完了ってなもんですよ。
（……ありがとうレメク。ありがとう！）
涙まじりの目に感謝を込めたあたしに、レメクがなんとも言えない困り顔になりました。
「そ、それは……」
ひきつった弱々しい声を聞きつけて、あたしは視線をレメクから修羅場を演じるお二人へと戻した。
美しいお姫様を見つめながら、伯爵は今にも泣きそうな顔で無理

やり微笑んでいる。
……ちょっと可哀想なぐらい、情けない泣き笑いだ。
「い、いえ、初めての夜会においでになった方を、その……案内しようと……」
すでにあたしから十歩以上遠くに離れている伯爵は、助けを求めるようにあたしのほうへと視線を向ける。
いや、向けられても困るんだけど。
正直、どう反応していいのかわかりません。
助ける気も起きなければ関わりたいとも思えない。
というか関わりたくありません。はい。
だというのに視線に気づいたお姫様は、一度だけあたしの方へ一瞥をくださいました。
おっそろしく剣呑な一瞥を。
（……こ、恐ぁ……ッ！）
一気に心の臓が冷えました。
視線だけで人を射殺せそうな一瞥である。
なんかこう、抹殺対象にされちゃったかのような嫌な予感。本能が危機を訴えます。
ぶるぶる。
「それは素晴らしいことですね。伯爵」
あたしを殺人目線で睨んだ後で、お姫様は伯爵に笑顔で向き直る。
「パートナーであるワタクシも、今日が初めての夜会ではありますが」
わー最悪だー。
あたしの口も半開き。
レメクとバルバロッサ卿がいるあたりからは、最大なため息が聞こえてきた。
ああ、やっぱりイカンのですね、彼の行いは。
「い、いえその、ご不浄の場からの帰り道のようでしたし」
「女性のご不浄の場からの帰り道に、貴方は何故、わざわざ！　出

向いていらっしゃったのかしら？」
「ぐ、偶然で……！」
「あら、ワタクシはお付きの者に大切な用事で席を外していると伺いましたが？　貴方の大切な用事はどこにいきましたか？　それとも、女性のご不浄の場からの帰り道を待ち伏せするのが貴方の大事な用事ですか？」
距離を縮めながらたたみかけるようにして怒濤の追求。
その様子を逐一観察しながら、あたしはこっそりと音なしの拍手を送った。もう拍手するしかないだろう。
（……どうでもいいが『女性のご不浄の場』ってのを連呼しないでほしいなぁ……）
どう綺麗に言いつくろっても、トイレはトイレだ。
蛇と蛙のにらみ合い（一方的）を見つめながら、あたしは深い嘆息をつく。
その間にてくてくと近寄ってきたレメクがあたしの頭にぽすっと指を乗せた。
何故、指。
チラッと目線を左斜め上に向けるが、位置がずれているの相手は見えない。
ただ、どこか嘆息混じりの声が聞こえてきた。
「……あまり心配をかけさせないでください」
おじ様ッ！！
あたしはバッと勢いよく振り仰ぐ。
ついでに飛びつこうと思ったのだが、横にいると思ったレメクは微妙にズレた場所にいた。
詳しく言うなら、一歩半後ろ斜め後方。
そこからちょいと指を伸ばしてあたしの頭にワンプッシュ。
何故！？
「ここは宮殿です。いつものように飛びつかないように」
指ポスはそのために！？

ショックのあまりガーンッとなったあたしに、レメクが苦笑を浮かべる。

「クレマンス伯爵は公爵家の嫡子です。もめると事ですからね。あなたが爆発する前に回収できて何よりです」

爆弾みたいな扱い。

さすがにムスッとなると、レメクは距離を一歩縮めてあたしの頬を軽く撫でた。

「それでも……心配しましたよ、なかなか戻って来なくて。いっそあのまま手元に置いておけばよかったと思いました」

（おじ様ッ！！）

さらりとそんなことを言われて、あたしは輝く瞳でレメクを見上げた。

思わずぐっと両手で握り拳。

（その発言は卑怯だわッ！）

「……なにが卑怯なんですか……」

（心読まないッ！！）

あたしの抗議に、レメクはちょっと困り顔。

『別に読もうと思って読んでいるわけではありません。あなたの場合、あなたの側から言葉が飛び込んでくるんです。……離れてても』

遠距離心話もバッチリ可能。

なんて太い愛で繋がっているのだろうか、あたし達は。

『……』

あ。なぜソコで沈黙の気配ですかおじ様ッ！！

そっぽ向かないッ！

びしびし抗議の波動を送るが、レメクは微妙に引きつった顔でそっぽ向くばかり。

おのれおのれッ！

「そ、それよりも……ルドからだいたいの所は聞いてますが、クレマンス伯爵とどんな話をしてたんですか？」

必死に話題を変えてくるレメクに、あたしはジト目で抗議しなが

ら答えた。
「名前聞かれたの」
「……」
何故沈黙だろうか。
妙に真顔になったレメクに、あたしは首を傾げる。
「それがどうかしたの？」
「いえ……それで？」
「断ったわ」
「……断ったんですか？」
レメクが奇妙な表情で声をあげる。
なんだろう？　その安堵したような呆れ顔は。
「だって、素性の知れない怪しい人じゃない。嘘っぽい笑顔ふりまくし。そんな相手に名前を名乗れないわよ」
「……賢明です」
褒められた。
「あたし、間違ってないよね？」
「まぁ……夜会の中ではやや不調法ですが、今回の場合あちらにも落ち度がありますからね。さして問題にはならないでしょう」
「うっ……！」
やっぱり問題アリなわけだ。
いやでも、今回はオッケーということで！
とりあえず、終わりよければすべてよし、だ！！
（……それにしても）
未だに頭の上に乗っているレメクの指をワシッと掴んで引きずり降ろしながら、あたしは疑問に思ったことを送信する。
『あの二人は、いったい何者？』
「……ベル。ちゃんと声に出して問いなさい」
『わざわざ声に出して会話する意味あるの？　あたし達』
「声を出さないと、無言で見つめ合ってるように思われますよ」
「え。それはそれで素敵なような……」

「……いやぁ……できればやめて欲しいなぁ……レメクの緊迫感ばかりひしひし伝わってきて、周りにいる連中は死にそうになるから」
どういう意味だ。
あたしは微妙に距離をとっている熊さんを睨む。
なぜか深く頷くレメク。
本当にどういう意味ですか！
「話を戻しましょう。あのお二方のことですが……。ベル。あなたも大概大事ばかり引き寄せますね……」
オオゴト？
「……レメク。話が逸れそうだぞ」
「ああ、失礼」
通路の闇に同化しちゃってる熊さんの忠告に、レメクはちょっと咳払い。
「クレマンス伯爵はレンフォード公爵の末の公子です。母親は先王の妹君であるマルグレーテ姫。降嫁されているので王族では無いのですが、現王家の嫡子が少ないので、王位継承権をどうするかで少し問題になっています」
ふむふむ。王族一歩手前の貴族なわけですね。
かみ砕いて納得したあたしに、レメクは微妙な困り顔。
「……かみ砕きすぎですが……」
気にしない。
「フェリシエーヌ姫は陛下の十一番目の姫君ですね。クレマンス伯爵の婚約者です」
ほぅほぅ。なるほど。
「……」
あたしはキツイ表情をした美少女をしみじみと眺め、次いでレメクをしみじみと見上げた。
ほぅほぅ。
……。
「「……？」」

あたしとレメクは見つめ合う。
首の角度は六十度。
なぜか互いに不思議そうな顔。
「ベル。理解してますか？」
「？」
あたしは目をぱちぱちと瞬かせる。
もう一度お姫様を眺め、再度レメクを見上げた。
（……ん？）
何だろう？
なにか異様なものが脳みそに浸透していきます。
「お姫様？」
問うたあたしに、レメクはあっさりと頷く。
「ええ」
「……王様の娘でお姫様？」
「そうです」
コックリ。
「……どの王様？」
「うちの王様ですが」
レメクの答えに、あたしはお姫様をもう一度見つめた。
無意識にパカッと口が開く。
そして声が飛び出した。
「アウグスタの娘ぇッ！？」

9　最後のダンスは唯一人と

アウグスタ。

未だ本名を知らないあたしにとって、国王陛下を表す名前はそれしかない。

神か悪魔の如く美しい貌に、思わず拝みそうになるほど立派な胸。

爛々と光る瞳は悪戯心が満載で、笑えば八重歯がキラリと光る。

美貌も気っ風も人十倍。おまけに殿方よりも遙かに男気を持ち合わせているという、ちょっと他ではお目に掛かれない女性である。

まさに女帝（アウグスタ）と呼ぶに相応しい女王陛下だろう。

露出狂でさえなければ。

（そのアウグスタに……娘！！）

「……ッ！！」

あまりのショックに、あたしはバターンゴンッと床に倒れた。

（うぉををを……）

倒れただけでは収まらず、ゴロゴロと廊下を転げ回る。

頭が大変痛いです。

「ベル！？」

「嬢ちゃん！？」

突然床に撃沈したあたしに、レメクとバルバロッサ卿がぎょっとなって駆け寄った。

「何事です！？　というか今、すごい音がしましたよ……？」

「頭から行ったぞ今の！　おい、大丈夫か……？」

……ものすっごく痛いです……

打ちつけたのは後ろ頭だ。レメクの足にぶつかることで回転が止まったあたしは、頭を抱えたままピクピクと震える。

（くぉぉお……）

レメクは慎重な手つきであたしを抱きかかえ、できるだけ頭を揺らさないように注意しながらそっとあたしの後頭部に手を伸ばした。

（痛い！！）
ビクッ！　となったあたしに、レメクが慌てて手を離す。
「大丈夫ですか？」
全然ですッ！
固く閉じていた目を開けると、そこには心配顔のレメクのお顔が。
（いちゃいです！　おじ様！！）
打ちつけてるってわかってるのに、なんでわざわざ触るんですか！
涙目で抗議するあたしに、レメクはそろそろとあたしの後頭部を覗き込む。
自然、あたしの顔はレメクの胸元に密着することに。うふふん。
「……心配ないようですね」
嗚呼なぜでしょう。
声が一気に冷たくなりました。
「コブまで作ってるのに、なんであなたはそんなに……嗅ぐのはやめなさい、嗅ぐのは。王宮ですよ、王宮ッ」
頭を揺らさないように固定してくれていた手が、ワシッと掴みに変化する。だがそれでこの吸引を止められるわけが……いやしかしここは王宮なわけですぅーっすぅーっくんかくんか。
「……」
あ。あ。なんでこめかみに両拳を押しつけるんですかイタイイタイ！
「に……にぎゃーッ」
じたばたじたばた。
「……レメク、それにベル……おまえら、場所ちょっと考えろ……」
馨しい匂いと目眩がするほどの痛みの狭間で揺れるあたしに、熊さんがそろっと進言する。
即座に痛みが緩和されました。
熊グッジョブ！
「あなたは本当に……いえ、もういいです……」
なぜかレメクががっくりと肩を落とす。

どういうことだろう？
首を傾げて覗き見ると、なにかとても遠い眼差しをされてしまった。
本当にどういうコトなんだろうか？
廊下に跪いてあたしを抱えているレメクと、ぺったり張り付いたままレメクをジトーッと見つめるあたし。
そしてそれを見守る呆れ顔の熊一匹。
いつもの光景ができあがった所で、ちょっと遠くからわざとらしい咳払いの音がした。
「……コホン」
訳【こっち向け】。
あたし達は揃ってそちらを振り向いた。
……ああ。
視線の先に、目を丸くした美少年と、白い眼差しの美少女が一人。
そういや、いたんだっけ。あの二人。
レメクがあたしを慎重に抱え直し、すっくと立ち上がって二人に向き直った。
「殿下。それに、クレマンス伯爵。お話し合いはお済みですか？」
「……むしろ、あなた様のほうの寸劇こそ『お終い』ですの？」
寸劇と言われた。失礼な。
ぎゅむっと唇を引き結んだあたしに、熊さんがぽつりと感想を零す。
「うまいこと言うなぁ」
重ね重ね失礼な。
むむっとしてバルバロッサ卿を睨むあたし。
レメクは何故かそんなあたしをじっと見てから「終わりのようですよ」と答えた。
……むぅっ！
「そう……ですか」
あたし達の様子に、お姫様はちょっとたじたじになりながら頷く。

そうして、盛大に嘆息をついて少年伯爵を睨んだ。
「でしたら、ワタクシの方もお終いにしておきますわ。……後で、じっくり、お話をさせていただきますが」
うーわなんか強調されてるぞー……
お姫様の声前半で顔を輝かせ、後半で青ざめた少年伯爵に、あたしはちょっと半笑いになった。
あの二人の力関係はあまりにも明らかだ。
（……可哀想に）
と、あたしの心でも読み取ったのか、お姫様がギラッとあたしを睨む。
（ぅおッ！？）
思わずレメクの腕の中で身構えてしまう。それほど、凄まじい一瞥だった。
（な、なんでそんなに敵意バリバリなわけ？）
あたし、あのお姫様に何かしたっけ？
お姫様はあたしをギンギンに睨みつけながら、レメクに向かって声をかけた。
「……ところで、クラウドール様。ワタクシ、先程聞き捨てならない言葉を聞いたのですけれど」
「聞き捨てならない言葉……ですか」
レメクはあたしとお姫様の様子に首を傾げつつ、ぼやくように呟く。
「もしや、『アウグスタ』の件ですか？」
「そうですわ！　よりにもよって陛下をそのような名で呼ぶなど……！」
「陛下から直々にそう呼ぶよう言われているのですよ、ベルは。むしろ今更『陛下』と呼ぶ方が、あの方は嫌がるでしょう」
「！」
その言葉が余程ショックだったのか、ビリビリと敵意を迸らせていたお姫様がよろめいた。

なにやら顔が青くなっている。
「陛下が……直々に！？」
「ええ」
「その名で呼べと！？」
「そうです」
嗚呼、とばかりに嘆いてから、お姫様は儚げに立ちつくす。
薄暗がりの廊下で、その姿はちょっとびっくりするぐらい美しかった。
「なんということでしょう。ワタクシの婚約者を誑かすような子に、親しき名を呼ばせておいでとは……！」
ちょっと待てぇえッ！！
「誰が誑かしたってもぐもぐっ！」
ぬぁあああレメク何故口を塞ぐんですかもごごーッ！！
「もごぐもッ！」
「落ち着きなさい。声が少し大きくなっていましたよ」
「もごごッ！！」
「わかってます。わかってますから……落ち着きなさい。（あとで美味しいケーキを焼いてあげますから）」
最後の小声にあたしは即座に大人しくなった。
あまりにも素早いその反応に、レメクがパクンと口を閉ざす。
（ケーキ！）
その麗しいお顔に向かって、あたしはキラリと目を輝かせた。
ケーキ！
ケーキ！！
この世で最も美しく、そして美味しく愛らしい食べ物！
溢れる期待に瞳がギラリ。そしてよだれがじゅるじゅるり。
あたしは握り拳を作ると、目を爛々と輝かせてレメクを見つめた。
とりあえず、本日食べ損なったガトーショコラを希望します！
『……了解です』
心の声で返答し、彼はお姫様へと向き直った。

動きにあわせて、フワンといつもの匂いがレメクから漂ってきた。
……ぴすぴす。
「殿下。お気持ちはわかりますが、目を曇らせてはなりませんよ。この娘はクレマンス伯爵を誘惑したわけではありません」
ぴすぴす。
「まぁ！　あなた様までそのようなことを仰いますか」
ぴす。
「殿下も本当はよくわかっておいでではありませんか？」
ぴすぴすぴす。
お姫様が沈黙した。
次いでその目がジトーッと少年伯爵を睨む。
ぴぷん。
（……ははぁ）
レメクの首にかきついたまま、あたしは遠い眼差しを二人へと向けた。
どうやら今回のような行動は、伯爵にとってそう珍しいことでは無いらしい。
他にも何か思い当たる事例があるのだろう、お姫様は氷のような眼差しで少年伯爵を睨んでいる。伯爵の顔色はもう真っ白だ。
……にしても、普通、パートナーそっちのけで他の女に声かけたりするかなぁ？
（……そんな相手が婚約者だなんて……）
あたしはピリピリしているお姫様を眺め、そっとため息を零した。
この姫様……ものすごく不憫かもしれない。
ぴすぴす。
「……ですが……」
苦い顔ながら何かを反論しようとするお姫様に、レメクは静かに言う。
「事実をきちんと把握し、認めることもまた必要ですよ。……それと、伯爵。時間がおありでしたら、後々に私からもお話が」

おや。どうやらレメクからも何やら『お話』があるらしい。
ぴす～。
伯爵が一層青ざめたのが謎だ。
ぴすぴすぴす。
「そしてベル」
ぴす？
「……そろそろかまいませんか？」
顔をこちらに向けてもいないのに、レメクの指が過たずあたしの鼻をきゅむっと摘む。
ぴぷっ。
「にょっ！？」
あたしは反射的にレメクの手を両手で掴んだ。
引き剥がそうと全力で引っ張る！
しかし！　レメクの手は離れない！！
「っ！　にょぅっ！」
一生懸命外そうするあたしに、レメクがツーっと静かな視線を送ってくる。
「「……」」
しばし見つめ合うあたし達。
「……ベル」
「みょい」
「そろそろ、かまいませんね？」
「……」
「かまいませんね？」
……あい。
真っ直ぐに目を見つめたまま二度も言われてしまった。
さすがのあたしもこれには抵抗できない。もしかして弱点バレちゃんたんだろうかと思いつつ、あたしはしょんぼりと手を離した。
何故かレメクが心底安堵の表情になりました。
「さて……」

自分とあたしの服の皺を丁寧に伸ばし、レメクは唖然とした顔のお姫様達と苦笑熊を見渡す。
最後にあたしの所に視線を戻して、彼は穏やかな声でこう言った。
「そろそろ陛下が入場される時刻です。会場に戻ると致しましょうか」
もちろん、否など言えるはずがなかった。

お手洗いに出ていた時間はそれほど長くなかったはずなのに、帰ってきた大会場内の混雑たるや想像を絶するものだった。
恐ろしいほど広かったはずなのに、そのほとんどが人で埋まっている。
もちろん王都大通りのようなゴミゴミとした混雑では無く、人々の間にはゆったりとスペースが空いている。だが、それにしてもすごい人出だった。
（うわぁ……）
おそらく、控えの広場にいた人達も全員集まっているのだろう。
着飾った紳士淑女の大集団は、まさに圧巻と言うべき迫力がある。
（すごいなぁ……）
これだけ沢山の人がいるのに、一人として同じ色、同じデザインのドレスが無いのがまたすごい。
いったい、その一着にどれだけの金貨をつぎ込んでいるのか。
考えるだけで冷や汗が出そうなほどだった。
（……ここに泥棒さんが入ったら、きっとすごいことになるんだろうなぁ……）
どこを見ても宝の山。全員の服を脱がせたら、いったい金貨何万枚分になるのだろうか？
（あ～……でも、あのお姫様のぐらい綺麗なドレスは、やっぱりそう無いのね……）
あたしにはドレスの流行とか善し悪しとかはさっぱりだが、抜き

んでて美しいものぐらいはわかる。
あの金髪のお姫様が着ていたドレスとかがそれである。
やはり王族の姫君が纏うものともなると、意匠も生地も他とは違う。
そういえば、アウグスタが着ていたドレスも、あの際どい露出はともかく、意匠も生地も大変素晴らしいものだった。
眼前の光景はと言えば、全体的にドレスは肩と袖口にフリルをあしらっているのが多く、高位だろう人達のドレスはそれが特に顕著だった。
おそらく、それがこういった場での流行なのだろう。
中にはフリルで手が見えなくなっている服まである。
……あれはちょっとイタダケナイ。
逆にそういった装飾がかなり少ないドレスもあった。
それらのドレスは布地も地味で、形も少しシンプルだ。
それでもあたしから見れば素晴らしく美しいドレスなのだが、纏ってる人は少し身の置き所の無さそうな顔をしていた。
……もっと自信をもっていいと思うのだが。とても綺麗で似合ってるし。
そんなことを思いながら、あたしは自分のドレスを見下ろした。
真珠の輝きを纏ったこのドレスは、銀糸も眩い一級品。
袖口には瀟洒なフリルが品良くあしらわれ、肩口には銀糸の縫い取りが鮮やかに輝く。
形はどちらかと言えばシンプルで、アウグスタが自ら「少し型は古いが」と言っていたのも頷ける。
大きい顔をしている貴婦人方の『フリルでちょっと膨張しちゃいました』的ドレスに比べると、ものすごくシンプルですらっとしているのだ。
ただ、お尻の上あたりにあるバッスルと呼ばれるものは立派だった。これは言うなればお尻の上あたりで布をふくらませ、鶏の長尾羽のようにスカートをゆったりとさせているものである。

……さっきのバターンゴンッでも全くへこんでいないあたり、とんでもなく丈夫なようだ。
「どうかしましたか？」
ドレスをちょいちょいと摘むあたしに、宰相閣下の元に戻りながらレメクが声をかけてきた。
相変わらず周囲の視線を集めながらの移動だが、足早に歩くレメクには誰も声をかけられない。
目指す場所に宮廷内最高権力者ヴェルナー閣下が待っていれば尚のことだろう。
あたしはレメクに視線を戻し、首を傾げて言った。
「あのね、このドレスなんだけど、なんて言う仕立て屋さんが作ったものなの？」
その瞬間、ビシッとレメクが固まった。
……およ？
ささっと視線を見交わし近づこうとする貴族達に、慌ててレメクは歩き出す。
「……仕立て屋では……ないんですよ」
……ないんですか。
スタスタと歩きながらのレメクの声に、あたしはいっそう首を傾げる。
なにか奥歯に物が挟まっているかのような声がとても気になる。
「趣味で仕立てとかしてる人がいるの？」
レメクの目がそっと逃げた。
何故でしょう。
「いるの？」
「……えぇ、まぁ」
……だから、なんでそんな言いにくそうに言うんだろうか。
「あたしの知ってる人？」
「……えぇ」
レメクの頷きに、あたしは脳裏に知っている人達の顔を思い出す。

だが、その中で裁縫関係が得意で……こういったすごくイイ品を扱えるような人となると……

あれ？　何故でしょう。

男しか残りませんでしたよ？

「……ケニードとか？」

とりあえず最有力候補を挙げる。

しかし、レメクは首を横に振った。

「いえ？　彼にはそういった才能は無かったと思いますよ」

あれ？　違いましたか。

じゃあ、と次を挙げる前に、レメクがなんとも言えない苦笑を浮かべて言った。

「義父（ちち）ですよ」

……。

……。

（ポテトさんッ！？）

驚きのあまり声もないあたしに、レメクは半笑いで頷く。

「昔からこういった関連はとても上手だったんです。よく教わりましたよ、いろいろと……」

……教わったんだ。

あたしはレメクをじーっと見上げた。

この名付け親子が並んでちまちま裁縫している所をちょっと見てみたいものでございます。

きっと素晴らしく眼福なことでしょう！

うっとり。

「あのヒトの手で創られたものですからね、いったいどんな魔法がかけられているのやら……おそらく、あなたの丈に直したのもあの方でしょう」

おじ……じゃなくて、お義父様はなかなか手先の器用なお方らしい。

それにしても『魔法』って……

あたしはレメクを見上げながらなんとも言えない顔になった。
魔法と言うのなら、レメクのもつ紋章だってとんでもない『魔法』だと思うのだが。
すると、レメクはちょっと真剣な顔になってあたしに言った。
「……ベル。覚えておいてください。私達が扱っているのは確かに『魔法』と呼ばれるものに最も近い『力』です。けれど、『魔法』そのものではありません。……『魔法』とは、私達ごときで扱えるようなものでは無いんですよ」
「……どういうこと？」
あたしは首を傾げる。
正直、あたしには魔法も紋章術も同じようなものに見えるのだが。
「……」
レメクは少し言いよどみ、あたしから視線を外して小さな声で言った。
まるで何か、恐れ多いモノを語るかのように。
「……『魔法』とは神代の力。それは人の手にあるまじき、人ならざる者の力です」

「あ。おかえりー」
人の海を泳ぎきり、ヴェルナー閣下の元にたどり着いたあたし達をケニードが笑顔で迎えてくれた。
あの凄まじい量の羊皮紙が無い所をみると、謎の輝く黒ずくめサンがどこかへ運んでいったのだろう。
会場に着いてから久方ぶりに見るケニードは、肌ツヤツヤで頬げっそりだった。
何故！？
「け、ケニード、その顔、どしたのッ！？」
「複写紋様術の使いすぎですね。……ただいま帰りました、閣下。それにアロック卿」

紋様術の使いすぎ!?

「お帰りなさいませ、レ……いえ、クラウドール様。お嬢様。バルバロッサ卿」

「お帰りなさい。……あははは～。紋様術って精神力使いまくるからねぇ～」

精神力使いまくり!?

驚きに口をパカーッと開けているあたしに、ケニードが情けない笑みを浮かべる。

「紋様術を使うには、三つの要素がいるんだ。紋様に関する正しい知識、精神力（スピリチュアルポイント）、そして魔力（マジックポイント）。あんまり使いすぎると、こんな風に外見にあらわれるぐらいゲッソリしちゃうってわけ」

……な、なるほど。

あたしは納得と同時に、呆れとも尊敬ともつかない眼差しをケニードへと送った。

そんな風にゲッソリするほど、限界ギリギリまでレメクの写真を撮りまくってたわけですね。君は。

その心意気に……敬礼!

「ところでお嬢様」

目をキラキラさせて互いに敬礼したあたしとケニードに、ヴェルナー閣下がおっとりと微笑みながら声をかける。

「先程、なにやら素敵な誘惑をされたそうですな?」

素敵な誘惑ぅ??

途端にあたしの顔が渋くなる。

「もしかして、さっきの変な伯爵のこと?」

「……変な伯爵、ですか」

レメクが微妙な表情でどこか遠くを見る。

あ。その方向に件の伯爵を発見。

大会場には一緒に入ったけど、いつのまにか別行動となっていたもようです。

……いや、別に一緒にいたいわけじゃないからそれでいいんだけ

ど。
ちなみに隣の美しい姫君に睨まれて、ほんのりと青白かった。
「あ～クレマンス伯爵でしたっけ。前国王陛下の妹君の末の公子様で、確か次期公爵の呼び声の高い方ですよね」
いつでもどこでも情報通なケニードは、さっきの場にいなかったのにスラスラと答える。
「たしか御年十三歳におなりでしたよね。フェリシエーヌ姫のご婚約者であられるのに、美しい女性を見ると声をかけずにはいられない御仁だとか」
「……十三歳にしてソレってどうなの……」
「うーん。あそこの公爵家は奥様方の上下関係がかなりきっちりしてるから、姫君のご不興をかわない限りお妾さん上等って感じじゃないかなぁ？」
……お姫様は大不興デシタヨ。
たぶん、それでも懲りないんだろうなぁ、あの少年伯爵様は。
まぁ、どうでもいいコトなんだけど。
「バルバロッサ卿が走ってきた時には何事かと思いましたが……いやはや、あの一幕はしばらく忘れられそうにありませんな」
なにか楽しいことでも思い出したのか、ヴェルナー閣下がくすくすと笑う。
あたしの「？」の視線に気づいた閣下は、穏やかに微笑んで解説してくれた。
「お嬢様がご不浄を理由に退出されてしばらくした後、バルバロッサ卿が一人で戻って参りましてね。お嬢様を一人きりにするなどありえない方ですから、何事かと思ったわけです。そうしたら、クレマンス伯爵がお嬢様にどうやらご執心のようだ、と」
あたしはバルバロッサ卿に視線を転じた。
大熊さんはカクテルグラスをぱかぱか空けながら、「あん？」と目をぱちくりさせる。
「そう仰ってクラウドール様を連れて行ってしまわれたわけですな。

ですが、なんとその時に、ちょうどおいでになっていたフェリシエーヌ姫もその話を聞いてしまったわけで」

わーお。

あたしは思わず半笑いになった。

（あー……だからお姫様あたしに敵意バシバシだったわけだー……）

そりゃ、自分の婚約者が別の人に「ご執心」だなんて言われちゃ、腹も立つというものだろう。

おまけに、初めての夜会なのにちゃんとエスコートすらしないパートナーだとしたら……

……うわ。マジで最悪かもしれない……

「あの時の姫君のお顔は素晴らしかったですね。陛下と血が繋がっていないとは信じられないほど、怒りの表情がよく似ておいででした」

そう言ってどこか微笑ましそうに笑う閣下に、あたしは半笑いを深め……

……あれ？　なにか気になる単語あったような？

「……血が……繋がっていない、って？」

あたしの問いに、レメク以下四名は「あぁ」と声を揃える。

「フェリシエーヌ姫は陛下の実の御子ではありませんよ」

一同を代表してのレメクの言に、あたしは目と口を丸くした。

「あんなに似てるのに！？」

「ええ。だからこそ、陛下もフェリシエーヌ姫を養女として迎えられたのです。現在、王女殿下と呼ばれるお方は十一名。いずれも金髪の美姫とのことです。そして第一王女であられたマリアンヌ殿下から第十一王女であるフェリシエーヌ殿下まで、全員陛下の実の御子ではありません」

全員養女！

てゆか十一人も養女迎えるって……

いったい、うちの王様の一家はどうなっているんだか……

「陛下はああ見えて、とても一途な女性ですからなぁ……」

ヴェルナー閣下がどこか暖かいものを込めた眼差しでそう呟く。
男三人は互いに目を見交わし、なんとも不思議な微苦笑を浮かべた。
どうやら男達は、閣下の言う「一途」な部分をよく知っているらしい。そしてそれはどうやらとてもとてもビミョーなもののようだ。
「ねぇ、おじ様。アウグスタはまだ結婚してないのよね？」
あたしの問いに、何故かレメクがギクッと固まる。
……何故ですか？
「そう……ですね。いなくなるまで何の進展もなかったですし、さらに今まで行方知れずだったわけですし……」
「？？？」
しどろもどろの言葉の意味が不明です。
それはともかく。
あたしは今まで『国王陛下のご結婚』などという話題は聞いたことも無かった。
というか、昔『王女様のご結婚』の話題は酒場であがったことがあるから、あたしはてっきりとうの昔に王様は結婚していて（この時は王様は男の人で、しかも年配の人だと思っていた）、王女様も沢山いるんだろうなーという風に思っていたのである。
が、実のところ『王様』はあのアウグスタ。
輝く美貌は二十歳前半ぐらいに見えるし、あの張りよし艶よしムッチムチの体だって、どう見ても二十歳前半に見える。
故に今までアウグスタの年齢も結婚のことも考えずにいたのだが……
「そういえば、アウグスタって今何歳……？」
「考えてはいけませんよ、ベル。それは女性にとって大変失礼に値する疑問です」
エ。ナニおじ様その真剣な顔。
てゆか目がものすごく恐いですよ！？
「陛下がお一人でいらっしゃる理由はさておき。お年のことはもっ

とさておき。まぁ、お嬢様におかれましては、今後クレマンス伯爵のように誘惑をかけてくる殿方が増えてくることでしょうから、どうぞお気をつけください。……ということでこのお話はこれまでといたしましょう」

最年長者であるヴェルナー閣下の声に、レメク達はさっさと大きく頷いてしまった。

それぐらいアウグスタの年齢は禁忌なのだろう。

……まぁ、いいけど。

なにやら釈然としないものを感じつつ、あたしも頷いて話題をきりあげた。

と、ケニードが何かを思い出した顔になって声をあげる。

「あぁ、でも。今年は『あの方』がおいでになるから、陛下もダンスを踊られるかもしれませんね」

アウグスタがダンス？

即座に頭の中に優雅に踊るアウグスタが浮かんだ。

見たい！　それはすっごく見たいです！！

「むしろ、『あの方』が素直に舞踏の場に出てくださるかどうかが問題じゃあないかなぁ？」

「え。出てくれませんかね。陛下は最初だけ踊られるけど、それ以降は絶対踊られないでしょう？　今回は『あの方』もおいでになっていることだし、最後の踊りはお二人で踊られるものだと思っていたんですが……」

最後の踊り。

その言葉に、あたしは耳をピンとたてて身を乗り出した。

「最後の踊り、って、物語でよく王子様と王女様が踊るやつだよね？」

「そうですよ、お嬢様。あなたは十年後ぐらいにこちらのクラウドール様と」

「勝手に未来を決定しないでください、閣下」

「それは確定だからいいんだけど、それってすごい大事な踊りよね

？」

「ええ。正式なパートナーと踊る最後の踊りは、それまでのものとは違って必ずお互いに寄り添いあって踊るダンスです。とても大事な踊りですよ」

力を込めて語るあたしと閣下の横で、レメクが「確定ですか……」と遠い眼差し。

それを無視して、閣下はしみじみと語り出した。

「思えば、私も陛下や殿下のラストダンスだけは拝見したことがありませんでしたな。前国王陛下の御代では誰が最後の踊り手になるかで熾烈な争いがあったというのに、今代の方々はあまりにも身が固すぎて一度も最後の踊り手を受け付けないというか……」

ふむふむ。

前の王様はいろんな美女を最後の踊り手にしてウハウハやってたのに、アウグスタや王女殿下達は最後の踊りを今まで一度も踊らなかったのですね。

「あれ？　でも、結婚した王女様もいるんだよね？　アウグスタの養女のお姫様の中で。その人も最期の踊りは誰とも踊らなかったの？」

あたしの声に、閣下は何故か一瞬真顔になり、すぐにほんのりと微笑んで頷いた。

「……ええ、わたくしは拝見していないのですよ。どの殿下方のものも。もともと、ここ数年はあまり長居せずにいましたし……」

そう言って、なにやら含みあり気な視線をレメクに向ける。

レメクは大変苦い顔だ。

そういえばレメクが王宮を去って以降、夜会に出るのも億劫になってきてたって言ってたっけ。

「願わくば、陛下と殿下……それぞれのパートナーを伴ってのラストダンスを見たいものです」

しみじみとそう締めくくった閣下に、あたしは真剣な眼差しで深々と頷く。

あたしを抱えるレメクは、どういう理由でかとてもとても苦い顔になっていた。

……ナゼデスカ？

「おじ様は、アウグスタや王女様達が誰かとラストダンスを踊るのが嫌なの？」

顔を覗き込んで問うあたしに、レメクは目をぱちくりさせてから首を横に振る。

「いえ……そういうわけでは無いのですが……」

じゃあ、なんであんな苦い顔をしてたんデスカ。

「特に陛下に関しては、頼むからさっさとまとまってくださいといつも思っているほどです。……いいかげん、『あの方』も腰を落ち着けていただきたいものです」

ため息混じりのレメクに、聞いていた他一同が青い顔になった。

それに首を傾げながら、あたしはレメクをまじまじと見る。

「おじ様は、最後のダンスを誰かと踊ったことある？」

「いいえ。他のものなら請われた時に適当にお付き合いいたしましたが……さすがに最後のものだけは遠慮させていただいていました」

「ふぅん」

そのあっさりとした返答に、あたしは妙にホッとしながら相槌を打った。

誰もが大事にとっておく『最後のダンス』。

レメクがそうであったように、アウグスタもそのダンスをずっとずっと踊らずにいたのだという。

それはきっと、踊りたいと思う人が……その時自分の傍らにいてくれなかったからだろう。

だからアウグスタは、誰の手もとらずにずっと待っていたのだ。

唯一人の、大切なそのヒトを。

それはなんて素敵な一途さだろうか。

あたしは微笑む。
脳裏に浮かんだアウグスタに、思いのままに賞賛を送った。
おりしも会場内にファンファーレが鳴り響く。
女王陛下の来場を告げる高らかな声。
全ての視線を集めて、優雅な女王が会場内に足を踏み入れる。
傍らに従えるのは、闇の美貌。
絶世という言葉すら色あせるそのヒトと共に現れたアウグスタは、あたしが知るあらゆる全ての『彼女』の中で、最も美しく輝いていた。
（……あぁ）
その瞬間、あたしは悟った。
彼女が待っていたのが、誰だったのかを。
（……アウグスタ……）
『王』を迎えるためにヴェルナー閣下が彼女のいる方へと歩み寄る。
同じく歩み寄るレメクに抱えられたまま、あたしは眩しい光景に目を細めた。
無意識にレメクの服を掴む手に力がこもる。
唯一人と並んで歩む黄金の女王――
その姿はあまりにも眩しく、尊く、そして何故か――
不思議な既視感を覚える――そんな光景だった。

１０　女王様の娘

広場の全ての視線が彼女達にそそがれていた。
絢爛な王宮の舞踏会にあって、なお輝く黄金の髪。
その髪に縁取られた貌は気高く美しく、青みがかった紫紺の瞳は強い意志に煌めいている。
白く滑らかな額を飾るのは、透明な宝石を連ねたサークレット。
何連にもなる煌めきは、ほとんど結わずに流している髪へと続き、その黄金をさらに輝かせていた。
身に纏うドレスは深みを帯びた銀の色。
バッスルは大きく、けれど大きすぎず形良く整っている。
豊かな胸元から細い腰へのライン、そしてそこから足下へと滝のごとく流れる布の滑らかさ。皺の一つ一つまで計算して作られたであろうそのドレスは、ある意味一つの芸術だった。
思わず拝んでしまったほどである。
もちろん、会場中の男性陣は当然のこと、女性の中にも陶然と見惚れる人が多数いる。それも当然だとあたしは思った。当然じゃないのは、あたしを抱えてるこの人ぐらいなもんである。
そう。レメクは男性陣の中には含まれないのです。いろんな意味で。
そしてアウグスタの隣にいる黒いヒトは、神様が間違えて紛れ込んじゃったんじゃなかろうか、と思うような凄まじさだった。
あまりにも桁外れな美貌は、それだけで一つの脅威なのだろう。
広場のあっちでバターンゴンッ、近くのこっちでバターンッドドドッ。老若男女問わず人々が倒れていく。
会場の人口は、瞬く間に半分ほどになりました。
……まるで悪辣な魔法のようだ。
とりあえず丁寧に拝んでおこう。
「……なにをやっているんですか、あなたは」

先を行く閣下に続きながら、レメクが腕の中のあたしに言う。
その呆れた顔は何かしら？
あたしは遠くに見える麗しい一組とレメクを見比べてから、キラッと目を輝かせた。
「アウグスタとポテトさんを拝んでたの」
それが何か？
「……」
レメクはアウグスタ達とあたしを幾度か見比べる。
アウグスタ達がいる一角では、根性のある人々が美しすぎる一組に果敢に声をかけていた。
輝く笑顔で応対するアウグスタは、まさに女帝と呼ぶに相応しい王様っぷり。
そして隣の顔面凶器さんは、凄絶なほどに美しい笑み。
……皆様できるだけそちらへは視線を向けないようにしている模様です。そうだろう、そうだろうとも。
見たが最後、時が止まるか心が止まってしまうのです。
嗚呼、また一人犠牲者が。
（ポテトさん……罪なヒト……）
あたしはそっと目頭を押さえる。
さっきみたいに黒いフード付きのマントをすっぽり被っちゃえば、被害は少なくてすむのになぁ……
そんなことを思っていると、レメクがなにやらしみじみと嘆息をつきました。
もしかしてずっと見比べていたのだろうか。気が付けば歩みも止まってる。
「……拝むようなものですか？」
……ずっと、ずーっと考えていたのだろうか……？
あたしは胡乱な目でレメクを見上げた。
レメクはどこかきょとんとしている。
あたしは思った。この人には審美眼が無いのかもしれない、と。

あの超絶麗しい一組を見ても、他の人のように陶然とすることも、ひれ伏すことも、ましてや失神することもなく無表情だなんて……

あたしは呆れと哀れみを混ぜた眼差しでレメクを見つめる。

ちょっと人として、何か間違ってる気がいたしますヨ？

途端にレメクからジトーッと見つめられた。

訳【あなたに言われたくありません。】

どういう意味だ！？

「すごいですね。眼差しで全部伝わるんですか」

ムキーッ！

ギンギンと睨みつけるあたしに、レメクは一度だけ微苦笑を浮かべ、もう一度未だ遠くの美しい二人に視線を馳せた。

二人は次第に集まりつつある人々の垣根の中にいる。アウグスタの晴れやかな笑顔がたまらなく素晴らしい。

しかし、その手がこっそりとポテトさんの腕をつねくっているように見えるのは、あたしの目の錯覚だろうか？

（ははははは……まさかね？）

いくらなんでも、こんな晴れがましい場所でそんなことを……しそうだなぁ……アウグスタなら……

そしてヴェルナー閣下は未だ二人の元に到達できていないようです。

倒れだした人々の救出指示に忙しすぎて。

（……閣下……）

あたしはこっそりと閣下に祈りを捧げた。

とりあえず、元気なうちにあの二人にたどり着きますように、と。

お祈りポーズのあたしに、レメクがどこか苦笑めいた声を落とす。

「……あなたはよく、拝んだり祈ったりしますね」

駄目ですか？

「いえ、いいことだと思いますよ。……時々、その理由が理解できないこともありますが」

なんか、時々というより「しばしば」と言いたげな口調だった。

「理由っていうか……綺麗なものとか、凄いものとか見たときに、うわぁーって感動するでしょう？　そういうときにね、なんだか拝みたくなるの。見せてくれてありがとうございます、みたいな感じで」

あたしの声に、レメクはちょっと目を瞠らせた。

経験無いだろうか？

例えば朝の最初の光を見た瞬間、

例えば夜に瞬く星々を見た瞬間、

例えば空にかかる虹を見た瞬間、

世の中はきっと見たくないものや、見るのが辛く苦しいもので満ちているけれど、

それだけでは無いと思える瞬間が、いくつもいくつも転がっている。

ただ一条の光に、

瞬きに、

煌めきに、

心が震えるその瞬間のように、

それらは強くあたしの胸を打ち、熱と鼓動を与えてくれる。

それらを目にした時に、どうしようもない気持ちで思うのだ。

時よ止まれ、と。

世界よ。今、おまえこそが美しい、と。

決して留まることのない時の中で、過ぎ去っていくもの達のその中で、

今その時にある『そのもの』こそが真に美しいと思うから。

その尊く貴重で愛おしいものを留めたくて、どうしようもない強さで祈るのだ。

時よ止まれ、と。

拝んだり祈ったりしてしまうのは、きっとそれを見れたことへの

感謝が強いから。
見せてくれてありがとう。
『在って』くれてありがとう。
いくつもの偶然の中で、奇跡のように在るそれらと出会えることは、とても貴重なことだと思うから。
世界は見苦しいもので満ちているけれど、
……それでも世界は、美しいものでも満ちているのだ。
例えばめったに微笑まない人が、穏やかな笑みを零してくれた時のように。
真っ直ぐに見つめたその人は、今はどこか優しい目であたしを見返してくれていますが。
「……そういう、ことですか」
そういうことです。
「……それでも、あの二人を拝む意味は少しわかりませんが」
……やっぱり審美眼に問題が。
胡乱な目になったあたしに、レメクは苦笑する。
「私の場合、それ以前の『慣れ』だと思いますよ。生まれて一番最初に見たのが、誰あろう、あの義父でしたから」
（うわ）
悲惨だ。
（人生終わってる）
あたしはその瞬間、レメクに多大な同情を寄せてしまった。
最初に見たモノがまずポテトさんだなんて。もはやその時点で一生が決定しちゃったようなもんじゃなかろうか。
なにせ後で見るもの全部へちゃむくれだ。一同以下同一みたいな感じで。
……あたしも含めてね……
「……いえ、あの……その評価はどうなんです？　それに哀れまれても困るのですが。……そして何故あなたは一人静かに落ち込んでいるんですか」

しゅーん、と一瞬で心の全てが折れたあたしに、レメクがちょっと困り顔でぼやく。

あたしはシュンとした半泣き顔をレメクへと向けた。

『でもおじ様、一番最初にこの世で最も美しいモノを見ちゃったりしたら、後全部幻滅じゃないですか？』

「心で問わずに口に出して問いなさい。……いえ、今はいいです。内容が内容ですし」

口で言えと言ったり、今はいいと言ったり、忙しい人だ。

「別に、そのあたりのことは何とも思いませんでしたよ。ただ……そうですね、あなたに会うまで、モノの価値観の一つに美醜があることを失念していた、と言うべきでしょうか。美しいがそれが何か？　という程度のもので……だから、ある意味『感性がおかしい』と言われても仕方がないのでしょうね」

……どういう意味だろうか。

あたしは全泣きでレメクを見上げた。

それは、今まで生きてきた中で見たこともないぐらい、あたしが醜かったということですね？

「いえ、違うんですが……違いますよ？　聞いてますか？　ベル」

聞きたくないです。

ぐずぐず鼻を鳴らしながら俯いたあたしに、レメクが弱った声をあげる。ぐずる子供をあやすかのように、背中をぽんぽんと優しく叩かれた。

……あやされても、心の傷は癒えないのです。

「逆ですよ、ベル。それに、美しいというモノの形がわからなかったわけでもないんです。綺麗だと思う形はよく知っています。……ただ、気持ちを揺さぶるというような……そういう、美しさに対する感動とかはまるでありませんでした。そういう意味で、外観の美しさを、本当の意味で『美しい』と思ったことが無かったんですよ」

けれど、今は違うという。

本当に美しいと思うことがあるのだという。

それは本当に醜いものを見たせいですね？
「だから、そこが逆だと言っているんです」
レメクがほとほと困った声で呟く。
「醜いものなど、腐るほど見てきましたよ。あなたを醜いと思ったことはありません」
ぐすぐす。ぴぷぴぷ。
「……二月十三日……いえ、あれは二月十四日ですね。……覚えていますか、ベル。あなたが決して罪を犯さなかった日のことを。私を『こちら側』へと引き寄せてくれた日のことを」
二月十四日？
あたしは目をぱちくりとさせた。
覚えている。忘れるはずがない。
それはエットーレと対峙した日のことだ。
振り上げた刃を下ろせなかった時のことだ。
夜の闇の中で、唯独りで立ちつくす……この人と一緒にいようと誓った時のことだ。
レメクが小さく呟くように言う。
「……あの時」
あの時。
そう、あの時、あたしは初めて本気で怒ったレメクを見た。
激しい怒りを
狂おしい憎しみを
純粋な狂気にも似た殺意をこの目で見た。
あの時、レメクのほうは何を見たのだろうか？
「初めて私は……」
私は？
あたしは言葉をちゃんと聞こうと耳を澄ます。
けれど、レメクはそれっきりぱくんと口を閉ざしてしまった。
そしてものすごく冷たい目で、あたしではなくその後ろのほうを見る。

……おや？

何だろうとそちらを向くと、なぜか目を煌めかせた女王陛下とポテトさんが、中腰かつ握り拳という格好でそこにいた。

何故！？

「なにをやっていますか、お二方」

レメクがこの上なく冷たい声。

「んん～。挨拶なしでまずソレかぁ？」

にゅにゅっ、とオオカミの微笑をした女王陛下は、さきほどの神懸かった美しさはどこへやら。いつもの悪戯魔女となってふんぞりかえった。

大きな荷物がバインと揺れる。でかい巨物は健在だ。

「いいシーンだから参考にと大急ぎでお傍まで駆けつけたんですよ。……お久しぶりです、と言うべきですかね。お二人とも、ご壮健で何よりです」

背筋を伸ばしたポテトさんは、またもや周囲のご婦人方（男性もいるぞ？）をバタバタと笑顔でなぎ倒す。アウグスタの目が恐い恐い。

にしても、この二人。

まだまだ入り口近くにいたはずなのに、今はこんなに至近距離。

もしかして門の紋章を使っちゃったりしたんだろうか？

二人がいたはずの地点には、未だにぽっかりとクレーターのごとき人垣と空白ができている。

そして二人の元へ行こうと先を進んでいたヴェルナー閣下が、置いてきぼりをくらった子供みたいな顔でこっちに戻って来てた。

……可哀想だ。

「んっふっふ。十年以上も夜会を離れていた上に、主に挨拶するより先に妻を口説くほうが先とは……なかなか立派になったもんじゃないか、レメク」

「ご無礼はお詫びいたします、陛下。ただし、訂正を。妻ではありませんし口説いてもおりません」

「自覚が無いっていうのは恐ろしものだなぁ……」
いやはや困ったものだと言わんばかりに大仰に首を振って、アウグスタは隣のポテトさんに流し目を送る。
それはそれは美しい色気満載の眼差しだったが、ポテトさんは輝き煌めく超笑顔。
「恐ろしいものですねぇ」
受けて流した。アウグスタ哀れ。
あたしの眼差しに、アウグスタは一瞬だけ瞳で訴えてきた。
訳『わかってくれ同志』。
バッチコイ。
朴念仁こそ女の敵だ。
「それよりも、まず挨拶でしょうね」
あたし達の共感を察したのか、ポテトさんがちょっと早口でレメクを促す。
レメクは丁寧にアウグスタに一礼した。
抱きかかえられている格好のため、あたしも一緒に上下運動。
「ご無沙汰しておりました、陛下」
息があたしにかかるのです。むふふんふん。
『……』
あ。あ。なぜあたしを下に降ろすのです!?
抱っこ！　抱っこ！
半泣きでぴょこぴょこ動くあたしを「めっ」という目で見てから、レメクはあたしの背を押して二人に真っ直ぐ対面させる。
あたしは反射的に『授業』を思い出し、ドレスをつまみ、片足を後ろに退き、ちょこんと二人にお辞儀した。
「お招きありがとうございます、陛下、お義父様」
王様とポテトさんはニッコリと微笑んだ。
どうやら及第点だったようです。
と思ったら、一瞬で豊かな乳に圧迫された。
「ぎゅむん!?」

「可愛いなぁ、ベルは。ふふふ、可愛いだろう、ポテト」
「ええ。大変可愛らしいですね。義父として鼻高々です」
息！　息！！
そろそろソレが凶器だと気づいてくださいアウグスタ！
乳ーッ！！
「陛下。ベルが他界する前に返してくれませんか」
「なんだ、堪え性が無いな。そんなにベルを抱っこしたいのか」
「それは陛下でしょう。……そろそろ本気でベルが窒息するんですが」
ハタと気づいたらしいアウグスタが、あたしを巨物の圧迫から解放する。
本当に気づいてくださいッ！！
顔に装飾品の後がくっきり入っちゃった気がします。
「……可哀想に。面白い顔になってしまったじゃないですか」
女王様の隣でポテトさんが至福の笑み。
顔と言葉があってませんよ！？
てゆか面白い顔とは失礼な！
むむっと抗議の眼差しを送ったあたしは、そこで二人の背後に立つ人影に気づく。
「……陛下」
苦み走った渋い声。ヴェルナー閣下登場です。
というか、ご帰還というか……
とりあえず、お疲れ様でした。
「おお、ヴェルナー。どうした、息があがってるぞ。さては若い娘とダンスでも踊っていたか」
「陛下の元へ行こうとしましたら、幻の如く消え、風のごとくすれ違われてしまいましてな。元来た道を引き返してきた次第です」
どうやらこの問題者二名。紋章の力なぞ使わず全力で走ってきたようです。夜会の主役たる王様なのに。
……ねぇ、ここ、王宮の格式高い夜会ですよネ？

あたしの心からの問いをにじませた眼差しに、レメクが申し訳なさそうな顔でそっと視線を外します。
答えに困られてしまいました。
「そうか。すまんな。ちょっと面白……いや、貴重な場面が見れそうだったので、つい」
「……なにが『つい』なんですか」
閣下のかわりにレメクが小声で抗議。
そして閣下はこのように抗議。
「私も見たかったというのに、さっぱりだったのです。これはもう、お二方に文句の一つでも言わねば気が済みません」
「……閣下……」
レメクがとても物言いたげな顔になった。
あたしはとても励ましたげな顔で閣下を見上げる。
閣下！　ファイト！！
長生きすればきっといつでも見れるから！
思いが通じたらしく、閣下は煌めく笑顔であたしにニッコリ微笑んでくれた。
あたしももちろんニッコリだ。
「いつのまにか仲良くなったらしいな、お前達」
そんなあたし達に、アウグスタはなにやら感慨深げに言う。
ええ、とても仲良しです。
なにせレメクスキスキ仲間（断定）ですから。
しっかりと頷くあたし達に、女王様は大変嬉しげなお顔。
その麗しい唇が開きかけ、
「陛下」
タイミングよくかけられた可愛らしい声に、反射的に閉じられた。
むむ？　この声は……
あたしはその声の主へと視線を向ける。
方向はちょうどあたしの右手側。
いつのまにかできていた人垣から現れたのは、愛くるしい美貌の

お姫様だった。
「おお、リーシェ。見違えたぞ」
アウグスタはその姿に破顔する。
そのアウグスタに向かって優雅に一礼したお姫様は、美貌の女王の言葉に頬を染めた。
「まぁ、光栄です、陛下」
軽く頬を染めてはんなりと微笑む様は、まさに深窓のお姫様。隣にいる少年伯爵もちょっとポーッと見惚れております。
がんばれ、姫様。浮気性の婚約者をガッツリ捕まえろ。
そして、こうやって応援してるんだから、チラッチラッと鋭い一瞥をこっちに送るのはやめてくれないかなぁ？
本気で姫様の婚約者には興味無いんだから。
「クレマンス伯爵も久しぶりだ。大きくなったではないか」
「は、はい、陛下。お、お久しぶりでございます」
伯爵はぎくしゃくとアウグスタに一礼。
その視線が輝く美貌と豊かな胸にそそがれているのは、たぶん、アウグスタ曰く「男として当然の反応」なのだろう。
理由は不明だが。
そして隣のお姫様は、もちろん冷たい一瞥を婚約者殿に。
……ヤキモチ焼きさんなんだなぁ……
「なかなかおおらかな交友関係を築きつつあるというのは、公爵からも聞いている。まぁ、何事も経験だが、ほどほどにな」
「は、はいっ」
言ってくれ言ってくれ、と言わんばかりの姫君の眼差しだったが、さすがに口に出しては何も言わなかった。……なるほど、本音を直接口にするようなことはしないのですね、お姫様方は。
レメクやバルバロッサ卿が前に言ってたのは、これのことだったのか。奥が深いものでございます。
ふんふんと頷いていると、アウグスタがチラッとレメクを見た。
「せめてその十分の一でもおまえに甲斐性があればなぁ……とはい

え、まぁ、ベルがいるからもうそれはいいんだが」
「……何のお話ですか」
「いやなに。おまえの……というか、ベルの未来の話だ」
ベル、と姫様の唇が声を出さずにあたしの名を呼ぶ。
あたしはお姫様を見た。
視線を感じたのか、お姫様もあたしを見る。……あのきっつい眼差しで。
……だーかーらー……
「……ふふん？　なにやら、こちらはいろいろありそうだな」
あたし達の様子に、アウグスタが意味深に笑う。
気づかれた姫様は顔を赤くしてそっぽを向くが、あたしは微妙な表情でアウグスタを見上げた。
お姫様の機嫌の取り方などあたしが知るわけもなく、こんな場所で「あんたの婚約者なんか興味ないから、いちいち睨まないで」だなんて言えるわけもない。
なんだか言ったが最後、決定的に関係が悪化しそうな気がするのです。
『……賢明ですよ、ベル。たいへん賢明です』
勝手に心を読み取ってくださったレメクが、あたしに向かって賛辞を送ってくる。
褒められた！
「なにがあったか、だいたい予想はできるが……仲良くするがよい。これから家族として末永くやっていくのだからな」
家族？
あたしと姫様はきょとんと互いの顔を見合わせた。
そろってアウグスタを仰ぎ見ると、女王陛下は晴れやかな笑顔。
「先だって会議で決定した」
女王様の眼差しはレメクに。
煌めく瞳でレメクを見つめたまま、彼女は軽く片手を挙げた。
白くしなやかな美しい手に、周囲の視線は再度彼女の元へと集う。

「皆にも聞いてもらおう。――私は我が真名のもと、ここに宣言する」

よく通る美声に、楽団員すらもその音を控えて止めた。

静まりかえった広場に、女王陛下の宣言が響く。

「この娘、ベルを本日をもって我が第十二王女として王宮に迎える」

あたしの顎が落っこちた。

レメクは微動だにしない。

ただ、ものすごく剣呑な気配が全身から漂った。

そしてそれを牽制するように、アウグスタは最後にこう言ったのだ。

「そしてこれより九年後、このレメクをベルの婿とする」

11　星空のダンス

得体の知れない沈黙が、その場の全てを支配していた。
時が止まったかのよう、というより、むしろ凍りついてしまったかのようだった。
百を超える群衆が、驚愕の表情で生きた彫像と化している。
まさにその瞬間を目にしたあたしは、思わず原因となった二人を見比べてしまった。
あたしの目の前に、ふんぞり返ったアウグスタ。
あたしの傍らに、恐ろしい気配を纏ったレメク。
二人を中心に空気がどんどん冷えていく。息とか白くなっちゃいそうな勢いだ。
（えーと……えーと……）
対峙する二人を見比べて、あたしはきょろきょろと周囲を見渡した。
主催者の挨拶も無いままに始まったこの氷結地獄。
これを打開する勇者様がどこかに一人はいるはずなのである。
お待ちください！　とか、陛下！　とか叫んで間に入る強者が……！！
「……」
……。
「……」
……あれ？
（って、誰もいない？）
あたしは目をパチクリさせた。
これだけ沢山の人がいるのに、誰一人「待った！」をかける人がいない。
おそらく周囲を見やる余裕すら無いのだろう。誰も彼もが凍りついたように動きをとめて、戦々恐々と件の二人を見守っている。

……いや、まぁ、ポテトさんは除くけど。
しかし、なんでまァ、あのヒトは『今』あんなに嬉しそうな笑顔なんだろうか？
今まで見てきた笑顔の中で、たぶん一番輝いてる。
むろん、この場の雰囲気を変える気など、蚊の目玉ほども無さそうだ。
（……しょうがないなぁ……）
あたしは嘆息をつき、勇者様を捜すのを諦めた。
こうなっては成り行きを見守るしかない。
だって仕方がないのです。どうやらこの場に勇者様はいらっしゃらないようですから。
そんな誰もが間に入るのを尻込みするこの二人は、例えて言うなら、そう、ドラゴン（金）対ドラゴン（黒）！！
凄いですヨ黒ドラゴン！
下手に動くとこちらの体を木っ端微塵に砕かれそうなほどの気配です！！
しかし金ドラゴンも負けてない！
婉然と笑ったまま、乳をバインバインと揺らしている！！
……どんな挑発だろうか、あの乳揺れは。
むしろアレはあたしに対する挑戦だ。
けれど揺らせられるモノがあたしには無い！
とりあえず対抗して尻でも振ってみよう。
あたしはすっくと背を伸ばし、腰に手をあてて一生懸命振りはじめた。
「「……」」
ん？
「「……。」」
んん？
無言でフリフリしてると、何故か件の二人がじーっとあたしの方を見る。

（睨み合い終了？）
きょとんと首を傾げたあたしに、二人は半笑いで咳払い。
（ナゼ？）
綺麗に空気が一変しました。
「あーぅん、なんだ……理解したか？」
変な咳払いをしていたアウグスタが、そんな風に声をかけくる。
口に端に妙な笑みをくっつけて。
あたしはしばしアウグスタを見つめ、フルフルと首を横に振った。
とりあえず、サッパリです。
だいたい、いきなり第なんちゃら王女とか言われても、いまいち理解がおいつかない。
せいぜい、あのおっかないお姫様より数字が大きかったとか、あのお姫様の姉妹かー、とかぐらいが関の山だ。
まぁ、婿レメクについての感想は『バッチコイ』で終わりだが。
そんなあたしの様子に、アウグスタはただ苦笑する。
「なに。簡単な話だ。おまえの籍がな、私の所に移動したということだ」
あたしはさらに首を傾げる。
籍と言うが、そもそも一月以上前に、あたしは間違って『死亡』扱いで処理されてしまったのである。
その後、他の孤児仲間の分と一緒に、アウグスタがこっそりどうにかしてくれたらしい。
……とはいえ、今の今までそんなこと忘れてました。
なにせあたしの最終目標は、レメク・（忘）・クラウドールのお嫁さんなんですから！
「ん～。まぁ、簡単に言うとだな」
あたしの様子に、アウグスタはちょっと困ったように眉を寄せる。
そうしてから、何故か変な咳を二回ばかりした後、あたしに向かって羽根扇（エヴァンター ユ）をビシッ！　と突きつけた。
胸を張って大いばり。

「私が！　おまえの！　お義母さんだ！！」
嬉しそう。
「お待ちくださいッ！」
即座にレメクが声を上げた。
おお。黒ドラゴンが勇者様に大変身。
正論という名の武器を手に、果敢に攻撃を開始します。
「本人に何の相談もなく！　何を勝手に決めていますか！！」
「入・籍！」
「何嬉しそうに言ってるんです！？　本人の同意なく話を進めないでいただきたいと申しているんです！」
「いいじゃないか、どうせ結果は同じだ。先にさっさと形を整えてやっただけだろう」
「整えた形が問題なんです！！」
……金ドラゴンには、正論はあまり効果なさそうだ。
「だいたい、そのような大事を陛下の一存だけで……！」
「一存じゃないぞ。ちゃんと教皇と侍従長と女官長と料理長と騎士団長と宮廷紋章術師長の賛成を得ている！」
……なんで料理長が数に入ってるんだろう……
「何故あの人達は……ッ！　い、いえ、それよりも、王室の問題と外交の問題はどうなります！？」
「欠片ほども問題ないッ！！」
「ありすぎですッ！！」
「ならば問おう！――ナスティア大法官！」

はり上げられたアウグスタの声に、「はい」と答えるおじいちゃま。
言い争いが続いている間に常の威厳を取り戻したのだろう。宰相閣下は、さすがの貫禄で女王陛下に一礼した。
「汝に問う！　異議はあるか！？」
「ございません」

「閣下！！」
レメクがものすごく焦った声。
「むしろよき案にございます、陛下。これで我がナスティア王国も安泰というもの。王家は強き力でより強固に結びつき、王朝は長く繁栄することでしょう」
「そうであろう！――次！　カードリック大法官！」

「は、はいっ」
アウグスタの声に、人垣の中からわたわたと恰幅の良い男の人が進み出た。
淡い金の髪に白い肌。ぽっちゃりとした丸体型。つぶらな瞳がどことなく小動物。
おそらく四十代後半だろうその人は、妙に愛嬌のある仕草できょときょとと目を彷徨わせながら、アウグスタに丁寧に一礼する。
「汝に問う！　問題はあるか！？」
「ございませんッ」
「……侯爵……」
ほとんど反射的に答えた男性に、レメクがガックリと肩を落とした。
どうやらカードリック大法官とやらは、侯爵様でいらっしゃるようだ。
……てゆか、この声……なんかどっかで聞いたコトあるよーな……？
首を傾げるあたしの前で、アウグスタは「どうだ！」とばかりに胸を張る。
「ふふん！　見るがいい、三大法官のうち、二人までもがこちらに賛同したぞ！」
「……どこの子供ですか、貴方は」
きらきらと目を輝かせて言う女王様に、レメクが呆れかえった顔でぼやいた。

あたしもつられるようにして苦笑を零し、ぐるり四方を囲む人垣を見渡す。

さて、最後の大法官は誰ダロウ？

たぶんこの会場内にいるんだろうけど……

「議会の半数以上、大法官二名、おまけに王宮はおろか奥宮の主とまで言える面々の賛同も得ている。これを覆すのは至難の業だぞ、レメク」

「だからその前に、普通、本人の意向を確認しませんか？」

「おまえの意向を聞いていたら、百年たっても結婚できんじゃないか。ベルのことも考えろ。やるときゃやる男なら、四の五の言わずに承諾するがいい。なぁに、九年なぞあっという間だぞ？　それとも何か？　もうちょっと早いほうがいいか？」

「問題はそこではありませんッ！」

王様の家族になるという大問題は、アウグスタにとってはどうでもいいようだ。

ふっふーん♪　などと視線を逸らすところを見ると、むしろ敢えてとぼけているようにも見える。

（……というか、レメクは何でそこまで嫌がってるんだろう？）

あたしは首を傾げ、青筋までたててアウグスタに詰め寄るレメクを斜めに見上げた。

普通に考えれば、これはたいへんなチャンスなのである。

ここでイエスと頷くだけで、レメクは自動的に王族に名前を連ねることになるのだ。普通だったら喜ぶところじゃなかろうか？

……いやまぁ、相手があたしだっていうのが問題なんだろうけど。

それ以前に、そんなことしちゃって国は大丈夫か？　とかイロイロ思いますが。

（王様の血筋が少ないって言ってたから、何かそれと関係するのかなぁ……？）

例えあたしを養子にしても、そしてレメクをその婿にしても、実質的に王の血が増えるわけじゃないと思うのだが……

それとも他に、何か理由があるんだろうか？
「浮かない顔ですね、お嬢さん」
（ぎゃわっ！？）
突然後ろから聞こえてきた小さな声に、あたしはびっくりして飛び上がった。
（ポテトさん！？）
後ろを振り返れば、なんと！　前にいるアウグスタと並んで立っていたはずの黒ずくめさんがすぐそこに！
（い……いつの間に動いたんだろう、このヒト……）
「せっかくの婚約披露です。もう少しにこやかになさい」
「でも、おじい……じゃなくて、お義父さま。あたし、いまいちピンときてないんだけど」
小さな声をかけてくるポテトさんに、あたしも小声でぽそぽそと返す。
ポテトさんは口元を軽く笑ませて首を傾げた。
「まぁ、ちゃんと本人に話をする前に会議で決定させましたからね。お二人が驚かれるのも、理解がおいつかないのも当然です」
「あたしがアウグスタの娘になるのよね？　で、おじ様がそのお婿さん？」
「簡単に言えば、そうです。面倒なことはこちらで全部処理しますから、あなたはただ、あなたのままでいればいいのですよ。……あぁ、王族としてのマナーはたたき込まれることとなるでしょうね。ま、そのあたりも大丈夫でしょう。教える気満々な人達がいますし、レンさんもいますしね」
「うっ」
あたしは一気に血の気が引くのを感じた。
テーブルマナーでさえまだまともにできないのに、王族のマナーだなんてできるんだろうか？
むしろ、あたしこそ簡単に考えすぎたのかも知れない。
ここはレメクと一緒に拒否すべきだろうか？

「……やめておきなさい。不穏を招くだけですよ」
「不穏……？」
ポテトさんの声に、あたしは目をぱちくりさせる。
「ええ。……考えてごらんなさい。突然現れた稀有な一族の美少女。位は無いが価値はあるその子が、王に気に入られて養子に。婚約者は国内でも有数の実力者であり、時に王を凌ぐ権限をもつ独身男性。……さて、人々はどんな物語を想像しますか？」
「……傍から聞くと、なんだかすごいドラマチックね」
「実際内容は間違ってないのに、どうしてこう印象が違うのかはともかくとして、まぁそういうことです。今年の夜会の噂は『幸運なメリディスの少女』で決まりでしょうね」
「……ということは、そんなあたしがここで反発なんかしたら、皆様方の不興をかってしまうってことね？」
ポテトさんは満足そうに微笑んだ。
「じゃあ、おじ様が反発するのはいいの？」
「ええ。突然の幸運というのなら、端から見ればレンさんだってそうなんですよ。ですが、レンさんは誰よりもそれを固辞しているでしょう？　本人の無欲さがよく出ていますから、彼を知る人々は驚きこそすれ妬みはしないでしょうね。野心家の人々にとっては、ある意味羨ましさのあまり憎しみ倍増でしょうけど、その反面、つけいる隙もあると安堵するでしょうし。それに……」
それに？
「レンさんが王室の近くにいないと、こちらとしてはいろいろ不都合でしてね。本人は無自覚ですが、味方が多すぎる上に、自身の持つ力が強すぎるんです。放置するには危険ですし、他家に取り込まれるのはもっと危険です。早い目に手を打たなくてはいけなかった所に、あなたが来たわけですよ」
なるほど。
「例えどんな手を使ったところで、レンさんは王族や王宮には近づこうとしないでしょう。今までそうだったようですしね。けれど、

あなたを使った時だけは別です。例外的に、レンさんは動きます」
「……あたしは人質みたいなもの？」
「ええ」
ポテトさんはあっさりと頷いた。
「もちろん、そうです。……おや、ここは喜ぶべき所ですよ？　愛する人が自分のためだけには動くだなんて、『女の浪漫』というやつではないんですか？」
……足手まといになってる女の浪漫って、ナンダ……
がっくりと項垂れたあたしに、ポテトさんはくすくす笑う。
「そういう所は『あの方』にそっくりですね。嗚呼、確かにあなたは、正しく黄金の魔女の卵なのでしょう。……世界を上書きしそうなほどに」
ふと、ゾクリと背筋が冷えた。
驚いて振り返ると、ポテトさんがにっこりと微笑む。
その瞳に人に在らざる光を宿して。
『承諾しておきなさい、小さき魔女よ。それが運命を回避する手段になるでしょう。あなた方がこちらに与するのなら、我々は争わずに済む。もとより争いあう気のない者同士。大局を見れば、今はこれが上策です』
ごくり、と。知らず唾を嚥下していた。
「争うって……あたしと、ポテトさんが？」
「いいえ」
ポテトさんは笑む。どこか薄ら寒くなる微笑みで。
「あなたと、私の主。もしくは、レンさんと、私の主が……です」
あたしはアウグスタとレメクを見た。
ポテトさんの主というのは、十中八九、アウグスタだろう。
けれど、どうしてアウグスタとあたし達が戦うことになるんだろうか……？
「戦の果てには何もありません。けれど、それがわかっていて尚、人は戦を起こします」

「？」

唐突に語られて、あたしはただ視線をそのヒトへと向ける。

「かつてこの大陸では、三度、全土を巻き込んでの大戦が起こりました。制したのは、いずれも『魔女』の血を継ぐ女性です。宵闇の魔女エリュエステーラ、深紅の騎士シェーラギーニ……そして、蒼月の魔女セリスティア」

聞いたことがある。お伽話で。

もう何百年、もしくは何千年もの昔に、大陸を統一した偉大なる女帝がいたという。

「あの方が生まれる年を指して、とある国で予言がありました。『やがて世は乱れ、この地に生きる全ての者を巻き込んで、凄惨な宴が催されるであろう』と」

人心は乱れ、国は滅び、世界には悲憤と絶望がはびこるだろう。

悪しき者は人ならざる者の領域へと手を伸ばし、世界は混沌の淵へと沈む。

その底に在りしは無数の異形。

世界の果てに封じられし、人ならざる異形の魔物。

「……ヤな予言ね」

「本当に」

あたしの感想に、ポテトさんは笑いながら頷く。

……その生き生きした顔はナニかしら？

「この予言をした者は、予言をしたその年に不吉を『読んだ』として処刑されました。……その国も、今はどこにもありませんがね」

あたしはポテトさんをじっと見つめる。

「……『人心は乱れ、国は滅び』……？」

「そう……かつて栄華を誇ったカストラーゼ王国。占術の都ラザスト。全て灰となって消えました。賢者の予言もその時に失われた。けれど、予言は今も生きています。……そう、世界には悲憤と絶望がはびこるのですよ。……南方では、民族紛争の果てに国が二つ滅び、未だ争いは続いているとか。西の地では得体の知れぬ軍勢が突

如現れ、虐殺の限りを尽くしているという噂です。北の地は天変地異が起き、いささか不穏な気配がただよっているとか。……十三年ほどかけてあちこち巡ってきましたが、なるほど、世界は徐々にきな臭くなってきているようですよ」

クスクスと、ポテトさんが嗤う。

「この国にも、腐敗の種があり、争乱の兆しがあります」

「！」

「たとえ回避することは不可能でも、その被害を最小限に留めることはできます。……あの方がやろうとしているのは、そういうことです。……失われた予言はね、こう続くんです。『けれど果ての地に舞い降りたる影あり。其は闇の王を従えし黄金の魔女。幾千の闇を切り裂きし、闇より出でし光の王』。果ての地というのは、地面の果てではありません。どこか一方の方角の果てでもありません。……それは、地下にあるのです」

「……地下？」

あたしの声に、ポテトさんは微笑む。

「そう。果ての地とも、最果ての地とも、世界の果てとも呼ばれるもの。……かつて暁の賢者が封印を施した、この国の魔の森の下にある巨大な地下迷宮。その最奥です」

あたしはパカッと口を開いた。

それは……それはもしかして！？

「……魔物の……」

「そう。数百年前に魔穴と呼ばれていたものですね。ちなみに魔の森は西の国との国境近くにあります。ん～、西の国と言えば、得体の知れない軍隊が現れた国ですね」

「ふ、封印が解けてる……とか！？」

「いえいえ。封印はまだ解かれてませんよ。……けれど、ねぇ、何故でしょうね？　どうして人は、ソレが世界に一つしか無いと思ったのでしょうね？」

ポテトさんはただ嗤う。

「入り口も出口も、確かにそう多くは無いでしょうが……決して一つだなんて、決まってはいないのに」
「……」
あたしはあまりのことに沈黙した。
正直、アウグスタの『王家に養子』発言すら頭からすっぽ抜けた。
他の誰かが言った話なら、大仰なホラ話だと思っただろう。もしくは妄想誇大な物語だと。
けれど、これを言っているのはポテトさんなのだ。
おそらくこの世で、最も人ならざる者の領域に立っているヒトなのだ。
あたしはじっとポテトさんを見上げた。そうして、口を開く。
「……けど、それと、あたし達とアウグスタが争うっていうことは、関係あるの？」
ポテトさんはふと笑みの質を変えた。
どこか異質だった笑みが、いつもの生ぬるい笑みに変わる。
「ええ。実は大ありなんです。予言された黄金の魔女。いずれ大陸を制するとされるこの魔女の一人が、誰在ろう、あなたなんですから」
「……は？」
あたしは盛大に眉をひそめた。
「まぁ、その反応が普通ですよね。ちなみにご主人様も、最初そんな反応でした。今はもう、諦められてますけど。……ああ、予言がどーとか言っても、基本的には特別今すぐ何かをしないといけないってわけじゃないんですよ。嫌でも運命がそう動きますから、受動的でも全然構わないわけです。……ただ、困ったことに、王というのは普通、一人なんですよね。二人も現れちゃったら、困るわけですよ。世界っていうのは、おおらかで許容量も大きそうに見えて意外と狭量でしてね。一人しか認められない椅子の近くに二人の有資格者ができた場合、無理やりにでも淘汰しようと動くわけです。さすがに世界の動きそのものには逆らえませんからね。……そうなる

と、あなたはご主人様と争うことになるんです。否応なく、ね」
ちょちょちょちょ、ちょっと待て！？
「い、いきなりそんなこと言われても……！？」
「ええ。理解できませんし、意味わかりませんよね。それが普通です。……ですが、これも事実です。だからうちのご主人様は、あなた方と争わずにすむように、あなた方を取り込むことにしたんですよ。少なくとも、こうすることで世界はあなた達……もしくは、私どものどちらかを『スペア』としてとらえます。どちらかが失敗した時の代わりとして認定するわけですね。全くの同じ、ではなくなった時点で、淘汰は免れます。……けれどそれを拒否すれば、世界は在るべき形に在るために、どちらかを消去しようとするでしょう」
えーと、えーと。
つまり？
「拒否すれば、いつか戦うことになるカモ？　なの？」
「そうです」
「……ちなみにちょっと聞きたいんだけどね、アウグスタとあたしとレメクが戦うっていう構図の中に、なんでお義父様は入ってないのかな？」
あたしの素朴な疑問に、ポテトさんはそれはそれは素晴らしい笑みを浮かべてこう言った。
「ああ。私は戦うことはしませんから。ただ、消すだけです」
……うん。ナンダ。そういうことか。
あたしは「はは」と小さく笑った。
……いやまぁ、予想はしてたけど。レメク達とはまた違う次元で、このヒトは大変な危険ジン物のようです。
「ま、夢物語にしても質が悪いですし、真面目にとりくみたくない気持ちでしょうが……覚えておいて損はありませんよ。いずれ身に染みてわかるようになりますから」
（……わかりたくないなぁ……）
のほほんとそんなことを言うポテトさんに、あたしはトホホな気

分で未だ言い合いをしているレメク達を見た。
ほんのすぐ傍で話しているというのに、二人ともこっちに注意を払っていない。夢中になっている、というより、全く気づいていないようだった。
それもそうだろう。なにせ、こちらにも彼等の声は聞こえないのだから。
（……『何か』普通じゃないこと、しちゃってるわね？）
ピンときた。
レメクから魔法なんてものはそれこそ人ならざる者の力だと言われた。
ということはだ、単純に考えてポテトさんなら使えちゃうぞってことではありませんか！
「……その認識は間違ってないのですが、何かちょっと心にひっかかりますね……」
横でこっそり人の心を読み取ってくださる人外魔境一匹。
闇の紋章で繋がってるわけでもないのに、そんなことができちゃう時点でもう『人ならざる』ってなもんです。
「……いえ、もういいですけど……。とりあえず、理解はされましたか？」
ちょっとしょんぼりと尋ねてくるポテトさんに、あたしはコックリと頷く。
「ん。とりあえず、理解したわ」
ちょろっとだけ。
「そうですか。……最後に付け足された言葉がちょっと気になりますが、いきなり全部理解しろって言うほうが無茶ですね」
「うん」
きっぱりと言いきって、あたしは大きく頷いた。
そうしておいて、目をキラリと光らせる。
「でもね、疑問があるの。なんでお義父様は、いきなりそんな話をしてくれたのかな？　って」

「あぁ、それなら簡単です。時間がないんですよ」
「……？」
意味不明。
「あれ？　理解してませんでしたか？　あの方の娘になるということは、王族として迎えられることです。これ以降、あなたのスケジュールは分刻みですよ。過密にも程がある、という状態でしたから」
「！！！」
あたしは思わず飛び上がった。なんだかいきなり現実に引き戻された気分だ。
「ま、ま、ま、またすぐ特訓！？　そんなにすぐに！？」
「ええ。それに、レンさんもあなたの一族の元に行くために、日程を組んでいたようですからね。ちょっと今の内に話しておかないと、あなただけずっと何も知らない状態になりそうでしたから」
……あたしだけ？
ふと思った疑問に、ポテトさんはにっこりと笑って頷いた。
「はい。レンさんもすでに知ってます。できるだけ考えないようにしてますがね。……ちなみに、他の大多数の方は知りませんよ。予言が出たのはもう何十年も前のことですし、予言者もその国もとうの昔に滅んでますから。……ただ、知っている人は知っています。とりあえず、あの方の近辺にいる人達はほとんど知っていますよ。……レンさんのことも含めて」
「……」
「敢えて深く考える必要はありませんし、思い悩む必要もありません。ただ、知っておくべき内容だと思ったから話しました。記憶の片隅にでも留めておけばそれでいいんです」
――記憶の片隅に。
あたしはじっとポテトさんを見つめた。
レメクとほぼ同じ身長、同じ体格。けれど徹底的に違う、ただひ

たすら深すぎるその蒼い瞳。レメクの持つ暖かくて奥深いものは、その中には欠片も見あたらない。

――けど、目に見えるものだけが真実では無いのだ。

「……ありがとう、お義父さん。教えてくれて」

きゅっとズボンを片手で握って、あたしはにっこりと微笑んだ。

ポテトさんが教えてくれなかったら、あたしはそんな不思議話、全く知らないままに過ごしていただろう。もしかしたら何もわからないまま、うっかり変な方向に人生を歩いていたかもしれない。

知っているからこそとれる回避があり、選べる選択肢がある。

知識を得るということは、そういうことだ。

得た時にはちゃんと把握できていなくても、頭の片隅にあって、時折忠告のように言動を抑制したり、守ってくれたりするものだ。

「まだあんまりピンときてないけど、任せといて！　絶対アウグスタとは仲良くやっていくんだから！！」

ニコッとさらに笑うと、ポテトさんもほろりと笑みを零した。

それは今まで見たこともないぐらい、優しくて暖かい笑顔だった。

「頼もしい限りです。――おや、あちらも話がまとまったようですよ」

口元に微笑みの余韻を残したまま、無敵な黒ずくめさんが手でそっちを指し示す。

そっち――つまりレメク達を。

「はっはぁ！　いいかレメク！　私が勝ったらおまえは承諾した上に私とダンスを踊る！　おまえが勝ったら、承諾した上にダンスだ！」

「賭けてなってませんよ！？」

パチンという不思議な音と同時に聞こえてきたおかしな会話に、あたしは目をぱちくりさせて二人を見つめ、次いでポテトさんを見つめた。

ナニゴト？
「どうやら無理やり賭けでまとめることにしたみたいですね」
「……勝っても負けても内容一緒だった気がするんだけど……？」
「いつものことです」
いつものこと！？
「それにのせられたらもう終わりだと言うことです。……あぁ、最終宣告来ますよ」
ポテトさんの声と同時に、アウグスタが目を爛々と輝かせてポテトさんを見た。
「こら！　そこ！！　いつの間にか移動してたコーンフォード大法官！　私の案に不服は無いな！？」
断定で問う。その絶対の自信が素晴らしい。
というか、コーンフォード大法官？
きょとんとしたあたしの横で、ポテトさんがにっこりと最終宣告を宣った。
「ありませんよ」
「はーっはっはっは！　ほらレメク！　私の勝ちだぞ！」
「答えがわかってる相手を選ぶのやめてください！　ちょ……なに引っ張って行ってるんですか！」
「さぁダンスだ！　皆、おおいに祝い喜び楽しみ遊ぶがいい！　今日は無礼講だ！！」
ワッと鳴り響く壮麗な音楽に、場の雰囲気が息を吹き返したかのように華やかになる。
あたしは呆気にとられて無理やり連れ去られるレメクを見送り、ついーっと隣のポテトさんをもう一度見つめた。
……コーンフォード大法官？
「私達は邪魔にならないよう、壁際にでも避難しておきましょうか」
にっこり笑顔であたしを抱え上げるその人に、あたしはただただ口をぽかんと開ける。
とりあえず、他のいろんなトンデモ話より、彼の肩書きが一番驚

きだった。

※　※　※

王宮の大会場を出て左側の廊下の最も奥。いくつもの階段を上り降りした先に、大きく開けたテラスがあった。

テラスとは言うものの、大きさはすぐ下の部屋と同じだから大変な広さだ。

衛兵も守備兵もいない場所だが、華やかな会場から離れてこんな所まで来る酔狂者はいないらしい。よろよろとたどり着いたレメクとあたし以外、そこには誰もいなかった。

あるのは目の前に広がる優美な庭と、満天の星空だけだ。

「うわぁ……！」

テラスの上に降ろされたあたしは、思わず叫んで裾をたくし上げ、ぱたぱたと走り出す。

ちょっと怒られそうなぐらい裾をたくし上げているが、これぐらい上げないと踏んづけて飛ぶ。

そしてレメクは、そんなあたしを注意する余裕すら無いようだった。

「……」

盛大なため息をついて、レメクは瀟洒な柵にもたれかかった。比喩でなく背中が丸まっている。

「……ごめんね、おじ様……」

その疲れ果てた姿に申し訳なくなって、あたしは立ち止まり、そっと声をかけた。

途端、びっくりした顔でレメクが振り返る。

「何故あなたが謝るんです。謝るべきなのは違う人でしょう？」

対象は一人しかいない。金色後光の女王様だ。

「でも、結果的に迷惑をかけてるのはあたしだし」

それでも尚そう言うと、レメクは途端に困り顔になった。その背

は相変わらず丸くなってしまっている。
　レメクがこうも疲れているのは、別にアウグスタに無理やりダンスにつきあわせれたせいではなかった。
　延べ一時間近く踊り続けるダンスはレンクリットなんとか（名前忘れた）という、恐ろしく複雑なステップのやつだったらしいが、レメクもアウグスタも軽々と踊りきってしまったのである。難しすぎて他に踊り手がいないという、まさに難曲中の難曲だったらしいが、あの超人達には『これも嗜みの一つ』程度のものだったようだ。
　ええ。見ている方はもちろん至福の極みでございました。
　あの光景は永久保存決定です！
　今も脳裏に、優雅に踊るレメクの姿が焼き付いているのです！
上着の裾がフワッと動く様から、脚のラインがチラッと見える様まで……ッ！！
　もちろん、ケニードが複写紋様術の使いすぎで倒れてしまったのは言うまでもありません。
（……根性で最後まで見ていってたけどね）
　あの執念にはただひたすら脱帽だ。
　さて。では何故レメクがこれほど疲れているのかと言うと、なんのことはない、踊ってる最中も（一時間近く！）えんえん例の件で言い争った挙げ句、結局言い負かされてしまったからだ。
　ポテトさんにまで「あきらめが悪いですよ」と諭され、大きく肩を落としたのはつい先程のことである。
　言ってしまえば体力でなく、気力の部分で疲れ果ててしまったのだ。
「迷惑とか、そういうのではなく……」
　レメクは何かを言いかけ、言いよどみ、また大きなため息をついた。
　そうして、しょんぼりと肩を落として見上げているあたしに、困りきった眼差しを向けてくる。
「……自覚が無いのかもしれませんが、一番被害を被っているのは、

あなたです」
いえ。
心の底からあなたのほうだと思います。
しゅん、とさらに肩を落としたあたしに、レメクは近寄ってきて膝をつく。
「陛下と義父の企みは、だいたいのところ把握しています。ですから、私のことについては、あなたは何の呵責も覚えなくていいんです。巻き込まれているのはあなたなんですから」
そうだろうか？
あたしは首を傾げた。
むしろ、あたし的には良い方向へと特攻してくれてる感じなのだが。
……いやまぁ、未だいろんなことにピンときてないせいもあるし、王族特訓メニューが始まったら大泣きするかもしれないけれど。
「本当なら……私の周囲には、近づかない方がいいんです。何に、どんな風にして巻き込まれるかわかりませんから」
正面にあるレメクの顔を見上げながら、あたしは目をぱちくりさせた。
そのセリフは、以前にも聞いたことがある。
「恨みを持つ人がいっぱいいるから……？」
「……それもあります」
嘆息をついて、レメクが頷く。
孤児院の騒動の時にレメクに言われた言葉は、あたしの心の奥に残っている。
自分から離れた方がいいと警告しようとしていたレメク。あの時、とても辛そうな目をしていた。
もちろん、あたしは彼の言葉を遮って、堂々と守ってあげるわ宣言をいたしました。いや、実際に守られまくってるのはあたしの方だけど。
（……み、未来は守れるようになるのよ！　強く格好良くなるつも

りなんだから！！）

内心の思いをこめてグッと握り拳をつくったあたしに、何故かレメクの眉が垂れる。

そうして、ふと、心を零すようにして声を零した。

「……ベル。どうしてあなたがそこまで私を思ってくれるのか……私にはわかりません」

……レメク？

「あの雨の中、あなたを助けたのは、人として当然の行為です。あなたを保護したことも、今も尚保護し続けることも。……もちろん、掟のこともあります。ですが、ベル。それは人としてごく当たり前のことです。好悪で判断するのなら、確かにそれは好意をもつべき内容でしょう。ですが……人生を決めてしまう内容にまで、発展させるべきことではありません」

「……」

「ベル。あなたの人生は、これからです。あなたはこれから、沢山の人に出会うはずです。良い人ばかりでは無いでしょうが、今まで会ったことないような、素晴らしい人にも出会うことでしょう。生まれて初めて、誰かを愛おしく思うこともあるでしょう。……その時に、今日の日の事柄が重い現実としてのしかかるのですよ」

じっとあたしを真っ直ぐに見つめてくれる人に、あたしも眼差しを真っ直ぐに合わせた。

レメク・（謎）・クラウドール。あたしより二十三も年上の、誠実で優しい大人の人。

「あなたの人生は、あなたのものです。誰かから決められたレールを無理やり歩かされるような、そんなことにはなってほしくありません。幸せになりたいと思わない人はいないでしょう？　……ならば、ベル。あなたは、この話を早く断らないといけないんです」

大きくて暖かい手が、あたしの両肩に置かれた。

あたしはじっとレメクを見つめる。

そして、声を落とした。

「……そうね」
レメクが言うことは、いつもとても正しい。
そして彼が言うことは、いつだってとても優しいのだ。
嘘も偽りも誤魔化しすらも無く、ただ真っ直ぐに相手を思うその声は、あまりにも強くあたしの心に響く。
――そこに紛れもなく、レメクの『心』がこもっているから。

「あたしはこれから、沢山の人に出会うわ。……きっと、素敵な人にも……もしかしたら、物語の王子様みたいな人にも出会うかもしれない」
でも、レメク。
あなたはあまりにも、あたしのことを知らなすぎる。
そしてあなたはあまりにも……自分を知らなすぎるのだ。
「すごく好きな人ができるかもしれないわ」
あたしはじっと見つめてくるレメクの表情を見続けた。
ほんのわずかな変化。きっと他の人では見落としてしまいそうなかすかな動き。
「でも、いらないの」
見つけた。
だから、最後まで言おうと決めた。わずかに動いた、その人の瞳に向かって。
あたしは知っている。
レメクが本当は、『自分自身』のことがすごく嫌いだってことも。
理由なんて知らない。でも、言葉の端々に感じるのだ。
……自分自身のことを『いらないもの』だと思ってることを。
周りの人はあんなに、レメクのことが好きなのに。
あたしはこんなに、レメクのことが好きなのに！
「他の人なんていらないの」
気持ちは伝わるだろうか？　この胸の奥にある、一番大事な気持ちは。

闇の紋章という奇跡の絆が結ばれていて尚、本当の意味では伝わっていない――この気持ちは。

あたしは手を伸ばしてレメクの服の裾をしっかりと握る。

決して逃がさないように。

「……だってもう、一番好きな人には会えてるんだもの！」

レメクは何の反応も返さなかった。

いや、返せなかった。

ぽかんと惚けたようにこちらを見るレメクは、なんだか妙に可愛く見える。

突っついたらそのまま後ろにバタンと倒れそうなほどの惚けっぷりに、あたしは目をぱちぱちと瞬きさせた。

（……。……。……　チャンス？）

あたしの目がビカッと輝く。

途端、レメクがビクッと立ち上がった！！

「あああああーッ！？」

おじ様ハグは！？　ハグは無しなのッ！？

立ち上がったレメクの周囲でぴょこぴょこと飛び上がるあたしに、レメクは呆気にとられたような顔になり、ややあって、ほろりと笑みを零した。

「まったく……あなたときたら……」

意味不明。

けれどぴょんぴょん飛ぶあたしをさっと抱きかかえてくれた手は、とても温かくて優しかった。

あたしはレメクの首に素早く張りつく。

「！」

ものすんごくいい匂い！

（あぁん！　めろめろンっ）

今までもレメクの匂いは素晴らしかったが、なんと言うことだ！

まだそのレベルが引き上げらるとはッ！！

クラッときてぐんにゃり力のぬけたあたしをレメクがぎゅーっと

抱きしめてくれる。
さらにメロメロんッ！
あたしは天にも昇る気持ちで、うっとりとその感触とか匂いとかを堪能した。ああなんていう天国だろうか。思わず腹もグーと賞賛の叫びを張り上げます。
……グー？
「……」
「……」
あたしとレメクと、二人分の沈黙が流れる。
たまにグーと不自然な音楽も一緒に流して。
「……　……。ぷ」
吹き出された！
「おじ様ッ！？」
「くっ……」
ぶるぶる震えているレメクのせいで、抱きしめられてるあたしもぶるぶる震える。ぬぁあああなぜあたしの腹はこういう時に鳴るのだぁーッ！！
しかもレメク、笑いますか！？　ソコ！
いつもの紳士ぶりはどうしたんですか！！
（ばかばかばかーッ！！）
思わずぽかぽかとレメクの肩を叩く。
レメクが笑いながら「痛いですよ」と抗議するが、全然痛がってそうにない顔だから説得力は皆無だった。
「はは！　いや、ぁあ、そういえば、ほとんど何も食べてない状態でしたね」
笑い涙まで浮かべたレメクに、あたしはぎゅむっと唇を引き結ぶ。
そう。せっかく王宮の夜会に来ていながら、あたし達はあんまりご飯を食べていなかったのである。
ヴェルナー閣下が来た時に、こっそり休憩所に軽食が運ばれてきたりもしたが、そんなものであたしのお腹が足るわけがない。レメ

クなど一つまみもしなかったから、なおさらだろう。
……まぁ、あたしの方は、レメクが踊りっぱなしだった時、横からポテトさんがせっせと口にモノをつっこんでくれたのでいろいろ咀嚼はしているわけですが。
（……なのになんで、あたしの方の腹が鳴るんだろうか……）
がっくりだ。
もしかして、恐ろしいぐらいハラヘリーニャになっているのかもしれない。そろそろ調整しないと、今後イロイロとやばいだろう。
……食費とか。
「できたらもう少し、ここでゆっくりしていたかったですが……。広場に戻りますか」
あたしはグーグー鳴るお腹を押さえながら、首を横にフルフルと振った。
せっかくの二人きり、しかも夜の王宮でという珍しい状況。もうちょっと味わいたいと思うのが乙女心である。
ちょっと腹の音楽が気になるが。
「……ですが、お腹が空いているのでしょう？」
「我慢する」
「しなくてもいいんですよ。あなたはまだまだ育ち盛りなんですから」
レメクはそう言って優しく微笑うと、くるりとあたしを抱えたまま方向転換をした。
そしてものの見事に立ち止まる。
「「……お義父さん」」
「や。間に合いましたね。差し入れですよ」
なぜか振り返ったすぐ後ろに、一抱えはある大皿を持ったポテトさんが立っていた。
大皿に乗っているのは食料なのだが、大盛りというより『モリモリ』と表現したほうがいい有様だ。
その唐突さと持っている物の異様さに、レメクもあたしも開いた

口が塞がらない。
　気配はおろか食料の匂いもまるで感じなかった所をみると、唐突に出現したと考えるのが妥当だろう。門の紋章を持ってるアウグスタより、この人はあらゆる意味神出鬼没だ。……紋章も持っていないのに。
　けれど大皿の盛り盛り具合は最高です。グッジョブお義父様！
そして肉！！
　レメクとポテトさんが全く同じタイミングで、腕の中のあたしと大皿をそれぞれ床に降ろす。
　あたしは素早く手袋を脱ぎ捨てると、大皿に攻撃をしかけました。
　素手で。
「……まぁ、今回に限り、テーブルマナーは目を瞑りましょう」
「テーブル自体もありませんし、衆目もありませんしね」
　笑いながら言うポテトさんに、レメクは嘆息をつきながら頷いた模様。
　食べるのに必死で、ちょっとそちらを見る余裕ないですが。
「なかなか凄いですね。素晴らしい健啖家ぶりです。しかもあの食事方法でドレスに汚れ一つ飛ばないというのがまた凄いですね」
　もちろんですとも！！
「そういえば、あのドレス……お義父さんが作ったものですよね？」
「ええ。ご主人様のご要望で、あなたが今着ている服と対で作りました。初めて社交界に出るということで、ずいぶん無茶な要求をされましたよ」
「そういえば、一緒に出られたんでしたね。パートナーとして」
「ええ。あなたはまだ小さかったから、部屋でおねんねさせられてたんでしたっけ。あなたも連れて行くんだと、ずいぶん言い張られて困りましたよ」
「連れて行かれなくてよかったですよ……」
「目を離すと何が起きるかわからなかったから、心配されたんですよ。実際、いろいろありましたしね」

「あの時はバルディア国からの使者も来てましたし……」
ふとレメクが口を閉ざした。あたしは口をもぐもぐさせながらじっと耳を澄ませる。
「……ベル。お話は終わりましたから、落ち着いてご飯食べなさい」
「!?」
あたしは大皿抱えて二人に耳を向けた格好で、ガーンッ！　と固まってしまった。
そんな！　レメクの昔話だなんて、滅多に聞けるもんじゃないのにッ!!
「……背伸びまでして聞こうとするあたり、さすがですね……」
「なにが流石ですか。ほら、せめてちゃんと座って食べ……無い!?」
「ごちそうさまでした」
きちんとお皿を床において、あたしはぺろりと口の周りを舌で舐める。もちろん、指についた肉汁とかもペロペロです。
「ああ、お嬢さん、それはこれで拭きなさいね。舐めずに」
ハンカチをいただきました。ありがとうございます。
ごしごし手を拭いていると、ポテトさんがなにやら嬉しそうにしゃがみこんできた。
「ところでお嬢さん。先ほどレンさんが踊っている時に、自分も踊ってみたいと仰ってましたよね？」
「うん」
そう。隣にいたポテトさんにご飯を口につっこまれながら、あたしはしみじみと語ったのです。咀嚼の合間に。レメクと踊りたいーでも身長足りない上に裾踏んで飛ぶー、と。
「本当に本当に踊りたいと願えますか？　例えそれが、自分の力で身につけたダンスでなくても、一度だけ、今、踊ってみたいと」
「うん」
一瞬の間もおかずに、あたしは力強く頷いた。
「お義父さん、何を……」

何か不穏なものでも感じ取ったのか、レメクが不安そうな顔で声をあげる。

けれどそれを制して、ポテトさんは不思議な笑みを浮かべてすっくと立った。

「ではその願い、叶えましょう。今日、婚約された二人のお祝いに、一度だけ」

「ちょ……！」

「あぁ、レンさんはそのままで。いいですか？　お嬢さん。思いは力です。願いも同じく。真実の願いだけが、天に通じます。世界の理さえも動かして……」

ポテトさんの綺麗な手が、あたしの借りていたハンカチをちょいと摘んだ。そのまま、サッとそれを引き抜かれる。

ブワッといきなり目の前が白いもので覆われた。

一瞬、あのハンカチが巨大になったかのような錯覚を覚える。

だが、白い布はすぐさま視界から退いた。目の前にあるのは先程と全く変わらない光景で、あたしはきょとんと首を傾げる。

（あれ？　何かした？）

「なかなかですね。……おや？　一つだけちょっと不備があるような？」

ポテトさんが奇妙に神妙な顔であたしを見る。

あたしはさらに首を傾げ、ハンカチを奪われた自分の両手を見下ろした。

「！？」

思わずぎょっと立ち上がった。

あたしの手……あたしの手が……！！

「おっきくなってる！」

我ながらちっちゃいと思っていた手が、すんなりとした綺麗な手に！

あたしは素早く自分の胸を見た！

「おっきくなってない！？」

「……あー……そこはちょっと私の管轄外です。わざとでもありませんし」

悲痛な目でポテトさんを見つめるが、ポテトさんはすーっと視線を逸らして逃げるばかりだ。

そんな！　手がおっきくなっているなら……いや、手だけでなく、立ち上がった時の視界を見ても全体的におっきくなっているんだから、胸だってバインでボインになっているはずではありませんか！？

「おじ様！　おじ様コレどう思う！？　なんで胸だけ変わらずぺったんこなの！？」

あたしは半泣きでレメクへとぶつかり……ぅぉおお！？　なぜそのまま倒れるのですー！？

「危ないですねぇ、レンさん。というか、お嬢さん」

慌ててレメクの背後にまわりこんだポテトさんのおかげで、そのままバタンと倒れるのを免れた。

てゆか、レメク、何事！？

あたしはぎょっとしてレメクを見つめる。

なぜか、さっきと同じようにぽかんと惚けてるレメクを。

「おじ様！？」

レメク、無言。

「おじ様！」

あたしはずずいっと詰め寄る。

目と鼻の先まで顔を近づけると、その瞬間、ものすごい勢いで後ろに下がられた！

「！！！！！」

声もない。

後ろにいたポテトさんすら引きずっての超後退に、あたしは思わず呆然と立ちつくす。

エ。ナニ。この反応。

「！！！！」

レメクは無言のまま、すごい勢いでポテトさんに目を向け、あた

しを見、またポテトさんに目を向けた。
何か言いたいらしいのだが、どうやら言葉が出ないらしい。
ただ、もんのすごーく切迫したナニカを感じました。
「あぁ、ええ、はいはい。言いたいことはわかります、というか、いいじゃないですかちょっとの夢なんですから。いいもの見たでしょう、よかったですね。未来図ですよ未来図」
やる気無さそうな声でポテトさんがレメクに言う。
しかし！　その目はいつになくキラキラと輝いていた。
声と態度が裏腹だ。
「ふっふっふ。あれですね。完全勝利というやつですね。きっとこうなるだろうとは思ってましたが、良い反応ですよ、レンさん」
ＨＡＨＡＨＡと不思議な高笑いをするポテトさんに、我に返ったらしいレメクがわしっとその襟元を掴んだ。
「お義父さん！」
「ん？　お礼は無用ですよ？　え？　違う？」
「早く！　元に！　戻しなさいッ！！」
「え。いつのまにそんな趣味に」
「違いますッ！！」
珍しい。レメクの顔が真っ赤になってる。
「いいですか！　あなたの常識は人のものに非ずとわかっていますが！　実際には幼い子供をあのような体躯に成すということは、現実には尋常ならざる過負荷がかかっているわけで……！！」
「あー大丈夫ですよ、私の作った服とさっきの食べ物の作用で一時的にそういう風になってるんです」
「ベル！　吐きなさいッ！！」
ものすごい勢いでレメクがあたしの元に走ってきた。
てゆか、吐け、ってさっきのご飯をですか！？
「無理だし！」
「無理なもんですか！　今入ったばかりの食物です！　吐きなさい！」

「吐けないから！　もう消化しちゃったし！」
「食べ物はそんなに早く消化されませんッ！！」
わぁわぁ言い合ってるあたし達を見つめて、ポテトさんが実に生き生きとした顔で言う。
「種のある魔術と違って、私のは一応魔法なんで、通常の法則はあまり適用されないんですけどねぇ……まぁ、心配する気持ちはわかりますが。……ところで、レンさん。魔法がかかっているのは服もなんですが、あなたが着ている服は、さて、誰が作ったものでしたっけ？」
ぎくり、と。レメクが見事に固まった。
軋んだ絡繰り細工のような動きでポテトさんを振り返ったレメクに、ポテトさんは煌めき輝く謎笑顔。
「人の血肉は、闇の領域。つまり、私の領域です。さ、お嬢さん、準備はいいですか？　あまり無茶はできないので、通し全曲は無理ですが……一番あなたが心躍らせていた一曲分だけ堪能させて差し上げましょう。頭で考えずにただ楽しんでください。いきますよ？」
「ま、待ってください、何を……」
「え、お義父様、てゆか、どうやって？」
ぎょっとなってそれぞれ声を上げるあたし達に笑って、ポテトさんはどこからともなく弦楽器を取り出した。綺麗な茶褐色の楽器の中で、銀色の弦が月光に煌めく。
「第三楽章です。レンさん、魔法は一曲だけですよ」
なにやら含みありげに言うポテトさんに、どういうわけかレメクは沈黙し、様々なものを諦めたように深くため息をついた。
え、えーと？
「ベル」
諦念を滲ませて、レメクが手を差し伸べてくる。
あたしはきょとんとそれを眺めた。
（お手々拝借？）
ちょこんと乗せると、微妙な顔をされた。

あれ？　間違った？
「……ベル」
はい。
「あのヒトは質は悪いですが、嘘は言いません」
へい。
「一曲というのなら、確実に一曲分踊れば魔法は効果を失います」
ほい。
「ですから、すぐに踊って元に戻りますよ。何かおかしな副作用が出ないうちに！」
あやや。
「……信用ないですねぇ……」
ちょっと傷ついた声をあげるポテトさんを睨んで、レメクは再度あたしに向き直った。
差し出された手をまじまじと見ているあたしを。
「これは予行練習です。いいですか？　まだ、あなたには早いんです。そのことをしっかりと覚えておいてください。……本当にちゃんと年を経て、あなたが今のあなたと同じ年齢になった時に、きちんと正式に言いますから」
（なにを？）
きょとんと首を傾げたあたしに、何故かレメクは一瞬だけ視線を彷徨わせ、ややあって真っ直ぐにあたしに向き直って言った。
「貴方の御手を押し頂く栄誉を私に与えていただけますか？　ベル」
ぽかんとなった。
なんかすごい言い回しされたよ？
「……お嬢さん。そこは『はい』と答えるんですよ、『はい』と。そして相手の手をとるんです」
棒立ちになっているあたしに向かって、音楽レッツスタンバイのポーズでポテトさんが声をあげる。
あたしはすでに差し出された手に乗せてしまってる自分の手を見つめた後、一回引っ込めて「はい」と頷いた。そしてもう一回ちょ

こんと乗せる。
なぜかレメクはすごい微妙な苦笑顔。
そしてポテトさんにチラッと視線を送って言った。
「……今はまだ、こんなものですよ」
ポテトさんは何も言わない。ただ、口の端を軽く上げて笑んだ。
上から下へと弦が滑るように降ろされる。途端に驚くほど胸に響く音楽が流れ、いきなりあたしの体がくりっと動いた。
「ひぇ!?」
「音楽に反応して動くんですか……操り人形のような形ですね」
レメクのほうはそんなことを呟きながら、あたしの手をとって滑るように踊り始める。
そう、踊り始めたのである!
「わ、わわ、わわ、えええ!?」
とんとん、トンッタタ、タンッツィーットトンッ。
足が見知らぬステップを踏み、腕が鳥の羽ばたきのように軽やかに力強く動く。
しなり、反り、レメクに触れ、離れ、誘い、すれ違い、からめとる。
レメクとの距離は時に近く、時に遠く、けれど無様に足を踏んだり躓いたりすることなく、まるで初めから示し合わせているかのように、ぴったりのタイミングで絶妙なステップを踏み続ける。
あたしは勝手に動く体に意識がついていかず、一瞬目を回しかけたが、すぐにそれも無くなった。
何のことはない。自分で体を動かそうと思ったり考えたりしなければいいのだ。
それこそ夢の中で踊ってる自分を体感しているようなものだ。ただ、感覚を楽しめばいい。傍にいるレメクの体温や、距離や、息づかいを感じながら。
「あはっ」
思わず笑みが零れた。相変わらず足は勝手に複雑なステップを踏

んでいるが、魔法にかかった体はほぼ無敵だ。どんなに音楽が早くても、どんなに動きが複雑でも、決して相手を踏んだりしない。

伸ばした手に触れるレメクの手。くるりと周り、背中合わせになり、感じる大きさと筋肉の張りと熱。いつもとあまりにも違う感覚は、あたしの体が大きくなっているから。

背中で背中を感じられるだなんて、なんて素敵なことなんだろうか！

あたしはくるりともう一度回って、レメクに笑いかけた。

広場で踊る人々を見つめて思ったことが脳裏に浮かぶ。踊りたいと思ったのだ。今目の前にいる、このレメクと。

いつもよりずっと近い位置にあるレメクの目は、不思議な奥深さを内に秘めてあたしを見つめている。

いつもと同じ優しい目なのに、いつもとちょっと違う感じだ。

まろむように深く暖かく、溶けそうなほどに熱くせつない。

……綺麗だと思った。胸が苦しくなるぐらいに。

（……レメク）

あたしはひたすら目の前にあるものを見つめ続けた。

満天の星空と、夜の静寂に溶けた庭と、あたしを真っ直ぐに見る——紫紺の瞳を。

12　求愛の方法

息があがってくるのを感じた。
心臓はドコドコと忙しなく動き、頭はクラクラと揺れている。
喉を通る息はアッと言う間に熱くなって、奥の方から灼けそうなほどだ。
ぜひゅぜひゅと息をするあたしに、レメクが訝しげな顔になる。
あたしは慌てて顔を背けた。
運良く音にあわせて体が離れる。しかし、すぐさま自動的にレメクの傍に舞い戻る。
ぁああレメク！　こっち見ないようにっ！
声なき悲鳴をあげて、あたしは一生懸命レメクの視線から逃げた。
視界の端っこにいるポテトさんは、何故かはんなりイイ笑顔。
（ぅぁああん！）
あたしが半泣きになったのは言うまでもない。
息があがっている理由はとても簡単だ。
例え魔法で踊っているとはいえ、『踊っている』のはあたしの体。
動きが激しければ息だってあがるし、体もカッカと火照ってくる。
まして慣れない動きの連続だ。体力などとうに尽きていた。
しかし、そんな状況でもあたしの体は見事に踊る。
息があがっていようがステップは間違えず、スピードは変わらず、姿勢だってこれっぽっちもフラつかない。
動きだけは実に優雅なものだった。
さすが魔法といったところだろう。……考えるとちょっと恐いものがあるが。
（と、言うかですね、ダンスって、もっと優雅でスイスイーッてモンじゃないんですか！？）
正直、全力疾走なみにキツいです。
こんなのを全曲（一時間！）踊りきったレメクとアウグスタの体

力は、いったいどれ程のものなのか。汗一つどころか息一つ乱していなかったのだから、底なしと言う他無いだろう。

……やっぱり金ドラゴンと黒ドラゴンだ。

（ぬぁああ！　負けるかーッ！！）

あたしは根性で踏ん張った。

もう最初のウフファハハな気分など、欠片ほどもありゃしない。

なんか踊ってる最中に気づいたこともあったのだが、それが何だったのかすら思い出せなかった。

とにかく踊る。息継ぎ必死。だんだんレメクが心配そうな顔になってきた。

（ま、負けないもんッ！！）

せめてこの一曲。

この一曲だけは踊りきってみせるのだ！

（絶対……最後まで！）

あたしは必死に気合いを入れた。

少しぐらいみっともなくてもいい。とにかく踊りきりたかった。

だってこれは、今だけの夢だ。

本当のあたしはとても小さい。だから、次に一緒に踊れるのは、きっと何年も先の事になるだろう。

それは本当に仕方がないことだけど、やっぱりちょっと……少し寂しい。

だから今、奇跡がおきているうちに、この曲を最後までを踊りきりたいと思った。

嘘で固めたまやかしの時間でも、全部を全部、踊りきってみせたい。

いつか本当に踊れるようになるまで、目標として心に持ち続けていられるように。

『いつか』を夢見て頑張れるように！

そのためには、途中で意識失っちゃいましたなんて、駄目なのである！！

（……レメクと一緒に！！）
最後まで！！
差し伸べた手をレメクが取る。
くっついて離れ、くるりと回って……
（……あれ？）
あたしは目をぱちくりさせた。
離れようとしたあたしの体が、すっぽりとレメクの腕の中に収まっていた。
予定外の制止に、体が一瞬だけ変な動きをする。
だが、それすらも閉じこめられて、あたしはパチパチと瞬きをした。
（なんで？）
おかしい。ここは、少し離れてそれぞれがステップを踏むはずの場面だ。
いくらあたしの脳みそがちっちゃくても、レメクの素敵ダンスを忘れるはずが無い。
ここは間違いなく、ステップの場面だった。
（……レメク？）
あたしはレメクを振り仰いだ。
いつもよりずっと近い場所にあるレメクの目は、明かりが乏しいせいで色が全く違って見える。
濃く深くなっているその色は、下手をすると黒に見えるほどだ。
（踊り、違うよ？）
首を傾げると、レメクもかすかに首を傾げた。
少し困っているような顔だった。
けれど、その口元には淡い微笑が浮かんでいる。
（……レメク？）
ふと、レメクが微笑（わら）った。
体が動く。緩やかに足がすべり出し、すぐにそれは記憶の中のダンスと『同じ』になった。……いや、違う。

動きが少し、ゆっくりだ。
「……他人と同じ事をしようと、思う必要はありません」
穏やかな声が優しく言う。
「基本は同じでも、踊り方は人それぞれです。足運びも、早さも、いくらでも変えようがある。……あなたは、あなたにあった踊り方をすればいい」
あたしは目を瞬かせた。
頭の中に、華麗に踊るアウグスタの姿が浮かぶ。
彼女の踊りは鮮やかで、力強く、けれど優雅で美しかった。
あれだけの踊りを習得するのに、いったいどれだけの時間を費やしたのだろうか。彼女の動きは全てが洗練されていて、無駄な動きが一つも無かった。
あの時と同じ音楽で、動きだけは（ポテトさんの魔法で）同じだったけれど、あたしは体がついていかなくて、ぜひゅぜひゅ息を荒げていた。
アウグスタの踊りは、今のあたしにはできないのだ。
「……それは別に、あなたの恥ではありませんよ」
レメクの手があたしの腰を引き寄せる。
くるりと回るターンは川の流れのように滑らかで、風の流れのようだったアウグスタの時とは違っていた。
ゆったりと穏やかに、けれどどこか力強い。
レメクに導かれるようにして踊るダンスは、あの時に比べてずっとゆっくりだった。動きそのものは似ているのに、動き方がかなり違う。
（……息……しやすい）
体が楽だ。
スイスイと泳ぐように動いていく。
なにがどう変わったのかはよくわからない。けれど、息はだいぶ楽になった。
レメクがあたしに向かってちょっと微笑む。

あたしもにっこりと微笑んだ。
なぜか急速に体の力が抜けていく。
時間がきたのだ。……そう理解した。
背中にレメクの背中を感じた所で、ピタッと綺麗にあたしとレメクの動きが止まる。ラストは背中合わせだ。
あたしの真後ろに、レメクの熱がある。
（……あたた……かい）
その瞬間、あたしの視界はグラッと後ろに傾いた。
（……あれ？）
近かった空が遠くなり、背中にあった温もりが消える。
それは後ろに倒れていっているせいか、それとも元の大きさに戻っていっているせいなのか、あたしにはわからなかったけれど――

「ベル！」
ただ、慌ててあたしの体を抱き留めようとするレメクの腕の感触だけが、薄れてゆくあたしの意識に強く残ったのだった。

※　※　※

……誰かが頭を撫でてくれているのを感じた。
優しくて暖かくていい匂いのする手だ。
あたしは嬉しくなって自分から頭を擦りつけた。
優しい手はちょっと驚いたように退き、けれどすぐにさっきと同じように撫でてくれる。
幸せだと……そう思った。
こんなことでこんなに幸せな気分になれる自分自身も、とても幸せだと思った。
暖かい気持ちが体の奥から溢れてきて、体中がぽかぽかしている。
その幸福にうとうとと微睡んでいると、すぐ近くでぼやく声が聞

こえてきた。
「失敗しましたねぇ……やはり器が完全に仕上がっていないと、負担が大きくなるんですか」
妙に単調な声だった。
はっきり言って棒読みだ。
（……これは……ポテトさん……）
「……お義父さん……」
その声に対し、すぐ耳元で別の声が抗議した。
低く押し殺した声は、どこか唸り声にも似ている。そして、何故か籠もったような響きをしていた。
それは左耳を押し当てた暖かいものから響いてきており、微かな振動をあたしの左半分に与えていた。
「えーと、そんなに怒った顔しなくても？　ちょっと疲れて、その上ちょっぴりお腹が空く程度の『負担』ですから。……にしても、あれだけ食べさせてまだ足りないんですから、許容量はかなりのものですよね。さすがはメリディス族というか……」
「それ以前に、この子はまだ小さな子供だということをお忘れなく！」
「それを言うなら、あなたが紋章術を扱った時のことはどうなります？　あれはたしか、三つの時じゃありませんでしたか？　……いやまぁ、あなたと他の子を一緒にするのは、確かに非常に危険ですが」
「その三つの時に、私は危うく死にかけたのですが？　……器が完全に出来上がっていない状態で力を使えば、その反動は必ず本人に返るという見本です。……この子はただでさえ成長が遅れているんです。未だこんなに小さいんですから」
優しい手が労るようにあたしの髪を撫でる。
あたしはちょっとしょんぼりしながら、暖かい胸元に頬ずりした。
確かに、あたしの体は小さい。孤児院の中でも小さい方だった。
そもそも、孤児院に大きな子はあまりいなかった。

草や花や野菜だって、栄養を与えなければ小さいままで、時にはそのまま枯れたりもする。ぐんぐん大きくなるためには、それなりの栄養が必要だということだろう。

あたし達子供もそれと同じで、大きく立派な体になるにはご飯がいる。

そしてそれをほとんど与えられない孤児達は、やせ細った小さな体になるしかなかったのだ。

そして、その中でもあたしの体は特に小さかった。

今だって、年下の……それこそ五歳になるかならないかという子と同じぐらいに小さい。

ここまで顕著に成長が止まっているのは珍しいらしく、孤児院の連中には親が小さかったんだろうとかいろいろ言われた。

失礼な話だ。あたしのお母さんは、レメクほどでは無かったけど、ケニードぐらいには大きかったのに。

(……そうよ。将来はレメクぐらいおっきくなって、レメクをがっちり守ってあげるんだから)

そんなコトを考えた途端、優しい指があたしのほっぺたをぷにっと押した。

「……？」

しばらく間を置いてから、またぷにぷにと頬を押していく。

……ナニゴト？

「……なにをやってるんですか？　レンさん」

「いえ……起きてるような気がしたものですから」

どういう確かめ方だろうか？

「起きてるというより、夢うつつですね。……ふむ。回復力の高さは子供といえど侮れませんか。やはりメリディスの血……いえ」

そこで区切って、低い美声の主はくすくすと笑う。

「それ以前に、『伴侶』の匂いですね」

「……」

「おや。なぜ睨むのです？　メリディスが嗅覚に優れ、『匂い』で

あらゆるものを判別するのはあなたもご存じでしょう？」
……どういう種族特徴だ？
あたしはちょっと眉を顰めた。
まるで犬か何かのようだ。
「先天的に巫女の力をもち、第六感に優れ、超人的な五感を有する……。確か、伴侶と定めた相手の匂いで、身体能力が飛躍的に引き上げられるんですよね？　さすがにこればかりは嘘だろうと思ってましたが、どうやら本当のようですね」
ほほぅ。
あたしはぽややんとした頭の中で感心した。
うちの一族は、そんなオカシナ特徴まで持っていたのですか。初耳です。
まるで変態のようではないですか！
と思ったらいきなり鼻を摘まれた。
「ぷなっ！？」
「……なにやってるんですか？　レンさん」
「いえ……なにか、一言言わなくてはいけないような気分になりまして」
てゆかどーして鼻を摘むのです！？
あたしはぱかっと口を開けた。
鼻を摘まれては息ができません！
妙に重たく感じる両手を動かして、まごまごと無体を強いる手に攻撃を仕掛ける。
しかし！　鼻を摘む指は離れてくれない！！
心持ち眉を垂れさせて目を開くと、ちょっと驚いたような顔のレメクがすぐそこにいた。
「あぁ、失礼。起きてしまいましたか」
「……あれで目が覚めないと思ってたんですか？　レンさん……」
その左隣にいるポテトさんが、非常に懐疑的な眼差しをレメクへと向ける。

レメクは無視だ。
「気分はいかがです？　体に不調はありませんか？」
「……その前に、鼻を摘むのをやめませんか？」
生真面目に問いかけてくるレメクの向こう側で、ポテトさんが大真面目にツッコミをいれる。
一拍置いて指を離したレメクに対し、あたしは抗議の『ぽかぽか攻撃』を行った。
……何故か二人に半笑いされましたが。
（むぅ……っ！）
「あぁ、はいはい。……肩を叩くなら、もう少し背中側にしていただけるとありがたいですね」
あたしのぽかぽか攻撃に、レメクが半笑いで注文を入れる。
攻撃されてるというのに、なんという暢気なセリフだろうか！
あたしは目をキッとつり上げた。
もっと抗議する意味で今度は胸を叩こう！
「……はいはい」
なぜ半笑いを深めるのです！？
「……逆効果ですよ、お嬢さん。レンさんを喜ばせてどうするんですか」
改めてツッコミをいれるポテトさんに、あたしはガーンッとショックで固まった。
叩かれて喜ぶだなんて、そんな！　レメクにそんな趣味があったなんて！？
「違いますよ誤解ですよ趣味ではありませんよ。……お義父さんも、誤解を招くような言い方はしないでください」
「……誤解を招く原因は誰にあると……？」
さすがのポテトさんもジト目だ。
あたし達がいるのは大広間の壁際、そこに設置されたカウチの一つだった。
無論、休憩所のように帳が降りていないため、二人（と、あたし）

の姿は周りから丸見えになっている。
そんな場所にこの目立つ男二人が並んで座っているものだから、周囲には奇妙に遠い人垣ができていた。
ちなみにあたしはレメクに抱っこされた状態である。太腿グッジョブ。
（というか、やっぱりここに帰ってきちゃったのねっ）
おそらく、あたしが気絶している間に帰ってきたのだろう。
できれば外で時間つぶしをしたかったのだが、そうもいかなかったようだ。
お腹のグルキュー具合からして、そう長いこと寝ていたわけでは無い模様。ならば、まだまだ夜会は続くということなのである！
……げっそりだ。
そしてお腹が空きました。
「まぁ、いいですけど……。ところで、お嬢さん」
ん？
しょんぼりと俯いた所で声をかけられ、あたしはきょとんとポテトさんを見上げた。
ポテトさんは口元をほころばせるようにして柔らかく微笑む。
「良い夢は見れましたか？」
バタバタと遠くで何かが倒れる音がした。
レメクがギョッとなってそちらを見るが、あたしとポテトさんは無視である。
「うんっ！　最高だったわ！」
「それはよかった」
ポテトさんは、それはそれは素晴らしい笑顔を浮かべた。
……土砂崩れみたいなすごい音がした。
さすがに無視できず、あたし達は揃ってそちらへと視線を向ける。
そして、見なかったことにした。
「お二人とも、なかなかに素敵なダンスでしたよ」
「でも、最後までアウグスタみたいには踊れなかったの……」

「それはそれでいいんですよ。多少のアレンジは許されますから。それに、後の踊りのほうが、雰囲気がでていてよかったです」
「本当！？」
「ええ。バッチリです。私が保証いたします」
「えへへへ。そうだったらいいんだけどなぁ……」
「……何を暢気なことを言っていますか。ベル。あなたはその結果、意識を失うほど消耗してしまったんですよ」
平然と会話をするあたし達に対し、レメクだけがちょっぴり額に汗をかいている。たぶん、良心の差なのだろう。
チラと問題の場所を見れば、大きな熊男さん達が一生懸命倒れた人々を搬出していた。
ものすごい呆れた目でこっちを見ているのは、来客の貴族達と会談していたアウグスタだ。
人が減っちゃった大広間の中央で、まさに女王として輝いている。綺麗な瞳がキラリと告げます。
『オマエタチ。アトデチョット、話ガアル』
あたしは目をそっと伏せました。
『オミヤゲハ、イリマセン』
アウグスタの目がギラッと輝いた。
「いいですか、二人とも」
目で会話するあたし達に気づかなかったのか、レメクが嘆息混じりに声を落とす。
あたしはそそくさと視線をレメクに戻した。
「今後二度と、あんなことはしてはいけません」
「「……」」
あたしはポテトさんをチラッと見た。
ポテトさんもあたしをチラッと見る。
以心伝心。心はガッツリ。
しかし、レメクがそれを許さない。
「また同じようなことをしましたら……私は、お二人とは三日間、

口をききません」
「「！！！」」
あまりのショックに固まった。
そんなあたし達に、レメクはただ深くため息をつく。
「場所が場所ですので、あえて詳しくは申しません。……ですが、ベル。私は昔、言いましたね？　急がなくてもいいと。かならず、あなたは大人になるのだから、と」
「……う、うん」
「なら、誓ってください。もう二度と、無理やりあんな姿にはならないと。ちゃんと時を経て、成長するのを待つと」
「……うん」
少々どころかものすごく未練があったが、あたしは渋々頷いた。
隣にいるポテトさんが、なんとも言えない微苦笑を浮かべる。
「普通、『私に』念を押しませんか？　あんな魔法、私以外に使える者がいるとは思えませんが」
「あなたは、相手の意向を無視しませんから」
あっさりと言って、レメクは自らの名付け親をじっと見つめる。
「相手がそれを願わなければ、あなたは叶えようとはしない。……つまり、そういうことです」
「……なるほど」
ポテトさんは小さく笑う。それはどこかくすぐったそうな笑みだった。
「そうですね。あなた方に対する『私』という者は、そういう者でしたね」
「？？？」
そうでない場合のポテトさんというのも、何処かにいるんだろうか？
首を傾げたあたしの前で、ポテトさんがあたしを見つめて言う。
「しかし、残念です。成長したお嬢さんは、とてもとても美しかったのに」

なんですと!?
あたしはその瞬間、顔を輝かせてレメクに向き直った。
って、あああ!?　なんで視線を逸らすのです!?
「おじ様!?」
「い、いえ!　ベル、あれは正しくない姿ですからっ」
「でも、おじ様!」
「きちんと一つずつ年を重ねて、本当に大きくなったら、ちゃんと言いますから!」
何年後の話ですか!?
あたしはぎゅむーっと唇を引き結んだ。
レメクは必死にそっぽ向いてる。
そしてポテトさんはニヤニヤだ。
「まぁ、それが無難でしょうね。言葉にすることによって、深まる感情というのもありますから」
「……お義父さん……ッ」
「いえ、あなたのことはよく知っていますから。深まろうがすでに手遅れだろうが、じーっと何もせずに、ずーっと見守っていくんだろうなってことはわかってます」
「?」
首を傾げるあたしを膝に座らせたまま、レメクが非常に居心地悪そうな顔になる。
手遅れって何だろう?
「あなたの性格からすれば、それも当然ですか。お嬢さんはあんなにいい匂いをさせていたのに、残念なことですね」
いい匂い?
あたしはポテトさんを見上げ、次いでレメクをじっと見つめた。
「いい匂いって?」
何故か視線を逸らすレメク。その顔を敢えて覗き込むと、ものすごい目でポテトさんを睨みだした。
……なんだろう。前屈み事件の時にソックリだ。

「残念も何も、あんな偽りの姿での」
ぐぅーるるるー。
「……種族特徴など」
きゅっきゅるるー。
「「……」」
くっくるぴー。
レメクとポテトさんがあたしを見た。
あたしは自分のお腹を押さえてしょんぼりと俯く。
……我慢ならんのだなぁ……あたしの腹は。
「……ベル」
……あい。
「……何が食べたいですか？」
あたしの目が涙に煌めいた。

※　※　※

くぅーぐぉおおるるうぉおおお。
なかなかに勇ましい雄叫びを上げるあたしの腹は、押さえても押さえても黙ってくれない。
ぎゅーっと両手を押しつけると、かえって勢いよく叫ばれた。
ぐぉおおおお！
……もはや腹が鳴るという表現ではおいつかない。紛う事なき、雄叫びだ。
「……どーしてこう、あたしのお腹は、大事な場面とかお話とかで鳴きだすのかしら……」
「……いやぁ、ふつーにお腹空いてるからじゃないですかねぇ……」
ぎゅぅー、とちっちゃい手で押さえられている腹を見つめながら、ポテトさんが不憫そうにため息をつく。
そしてヨシヨシと頭を撫でてくれた。
ちなみにレメクはここにいない。

あたしのご飯を確保するために、会場中のテーブルを巡りに行ったのだ。レメクが席を外してもあたしの所に誰も来ないのは、こうして横にポテトさんがついていてくれるからである。

「そういえば、お義父さまって、カードなんとか大法官だったのね？」

「違います。コーンフォード大法官です」

間違いました。……てゆかややこしいヨ。

「カードリック大法官はフォルマ侯爵ですね」

……どっかで聞いた名前のような？

「フォルマ侯爵はベラ……レンさんの養父の友人です。まだお会いしていませんか？」

おー。思い出した！

「一番最初に声かけてきた侯爵様ね！」

「ははぁ、やっぱり一番に行きましたか。流石ですね。夜会の受付が始まるや否や、一番に乗り込んで今か今かとレンさんの到着を待ってましたしねぇ」

「……そ、そこまで……？」

「おやおや。未来の奥方は旦那様を過小評価しておいでですかね？レンさんはああ見えて、大変人気者なのですよ。……本人はまるで気づいてませんが」

エエ。それはもう、よーく存じました。

「もっとも、目の色変えて寄ってくる人間が、全員真心をもっているわけではありませんがね」

ふと薄ら寒い笑みを浮かべるポテトさんに、あたしは目をぱちくりさせながら首を傾げた。

「でもフォルマ侯爵は、おじ様のこと好きそうだったわよ？」

「ええ。あの人はレンさんが大好きな人です」

「ケニードやバルバロッサ卿やヴェルナー閣下も好きそうだったわよ？」

「ええ。あの人達は更に大好きな人達です」

「アウグスタやお義父さまも大好きよね？」
「ええ。丸かじりしたくなるぐらい大好きですよ」
……レメクは食用であるらしい。
「まぁ、あなたはメリディス族ですから……おそらく、本能的に『誰が』『何』なのかを嗅ぎ分けることができるでしょう。隠された悪意すら嗅ぎつけるのなら、今ここで説明しなくてもいずれ理解するようになります」
「いずれじゃなくて、今でもいいと思うけど」
「おや。あなたは他人を理解する時、自分以外の者の意見を念頭におくのですか？」
う。
「人とは不思議なものでしてね。誰かにとっては忌み嫌われる者でも、別の誰かにとっては慕わしい人だったりします。相手によって、まるで態度が違ったりするからですね」
「それって、いいことなの……？」
「さて。それが良いことなのか悪いことなのかはともかく、それら全てをあわせて『人』という一つの生き物を形作っていますからね。善悪という分類では決して計れません。心の問題でもありますから、『誰かが悪い』という問題でも無いはずです」
むむむ。
「例えば、一つ例を挙げてみましょう。ものすごく横柄で横暴で守銭奴な官吏がいたとします。もちろん、周りからは悪い評判を受けます。けれど、家族にとっては優しく頼りがいのある人でもあります。……さて、その男は『悪い人間』でしょうか？」
「えぇと……横柄で横暴なのは、よくないと思うけど」
「そうですね。その場合、悪いのはその人の態度ということになります。態度はその人の本質や性根、または幼少時の周囲からの影響などに深く関わってきます。さてさて。では、その人は根本的に『悪い』人なのでしょうか？」
うーん。うーん。

「態度は悪いけど……人が悪いわけじゃない、ってこと？」
「そうかもしれませんね。とはいえ、人が悪いというのはまた解釈が難しいところなのですよ。人の世は白と黒の色分けのごとくハッキリとしているようでいて、実は非常に境界線が曖昧です。立場が変わるだけで、白と黒が逆転することもあります」
むむぅ？
「つまり、『一概に決めつけることはできない』ということです。それはどこの誰に対しても同じです。相手の本質を勝手に決めつけることは、ただ自分の思いたいように相手の型を作り上げることですから」
じっと見つめてくるポテトさんに、あたしはじっくりと言葉を噛みしめてから言った。
「……つまり、本当の姿ではなく、自分の思い通りの姿を頭の中に作って、それをその人の本質だって勝手に決定しちゃうってことね？　そしてそれは、本当は、しちゃいけないことなのね？」
隣に座っているその人は、ただにっこりと微笑んだ。
あたしは思わず苦笑する。
「……なんだか、お義父さまはおじ様にそっくりだわ」
「おやおや。それはあまりよろしくありませんね？」
「え。そうなの？　駄目なの？」
「いや、普通に考えて、その場合私がレンさんに似てるのではなく、レンさんが私に似ていることになってしまうでしょう？　いちおう、名付け親で育て親の一人なわけですし。ご主人様にも怒られたんですが、どうも私の不甲斐ない部分がレンさんに受け継がれちゃってるようですしねぇ……」
「……不甲斐ないんだ……？」
この名付け親とあの完璧人をどうやったら『不甲斐ない人』扱いできるんだろうか？
「かなり不甲斐ないらしいですよ。私は面白尽くでやってるんですが、レンさんは……なんだか天然で気づいてないような感じがしま

すねぇ……」
　……なんだろう？
　そんな天然で不甲斐ない部分を持ってたんだろうか？　レメクは。
「おじ様、鈍くて朴念仁でそっけなくてタジタジな所以外で何か不甲斐ない場所あったっけ？」
「……その時点で全て挙げきっちゃってるというか……凄いですねぇ、奥さんは」
　奥さん！？
「どこに奥さんが！？　しかも誰の！？」
「……嗚呼……いい勝負ですか、あなた達……」
　なぜかポテトさんが遠い目に。
　いったいどういう意味ですか？
「まぁ、そのあたりはおいおい時間が解決してくれることでしょう。……お嬢さんも立派にイイ匂いをさせてましたから、いずれレンさんも逃げられなくなるでしょうし」
　匂い？
「……ポテトさん」
　あたしは相手が逃げないよう、服の裾をしっかと握って声をかけた。
「さっきも、あたしの匂いがどうとかって言ってたよね？」
「ええ。言いましたよ？」
「その立派ないい匂いって、何？」
　ポテトさんは不思議そうに首を傾げた後、あたしの鼻をツンと指でつついて言った。
「何って……メリディスの最も有名な種族特徴ですよ。体臭です」
　……いや。それはだいたい理解してたのですが。
「あれ？　存じませんでしたか？　メリディス族が芳香とも言うべき匂いを纏うのは、言うなれば孔雀が美しい羽根を持つのと同じなんですよ？」
「孔雀の羽根？」

あたしは首を傾げた。
孔雀というのは、アレだ。昔、見せ物小屋で見たことがある。
ものすごく綺麗な羽根をもつ、ものすっごく獰猛な鳥だ。
なんか蛇とか食べてた印象が強い。
その孔雀の羽と、メリディス族の匂いが同じって……何でだ？
「ええ。メリディス族は嗅覚に優れています。と言うより、五感がかなり優れています。これはナスティア王国の全種族中でトップです。もともとメリディス族もクラヴィス族同様、卓越した技量をもつ狩猟民族ですからね。おそらく、そういった環境で長い時間かけて、磨かれていった能力なのでしょう」
ふむふむ。
「そして、そんな鋭い嗅覚をもったメリディス族は、同種を嗅ぎ分けるために独特の匂いを持つに至りました。……それが今日、メリディス族を保護指定にするきっかけともなった、体臭につながります」
ほぅほぅ。
あたしは深く相槌をうちながら耳をすませる。
なんだかレメクにお勉強させられている時を思い出しました。
説明の仕方がレメクとそっくりなんだなぁ……ポテトさん。
「この体臭は、幼少時にはあまりしません。なんとなく匂ってるかも、程度です。匂いが強くなりはじめるのは思春期頃。そして、最も強くそれがでるのが、伴侶となる相手を定めた時だとされています」
伴侶。
あたしはビカッと目を光らせた。
つまり、おじ様と会った時とかですね！？
「残念。ちょっと惜しいですね」
心読まれた！？
「もっと詳しく言うなれば、体が一定以上の成長を遂げ……つまり、成体と呼ぶに相応しい体になった時、伴侶と定めた相手と出会った

ら匂いが強くなるんですよ。……まぁ、なんというか……フェロモンですね」

「フェロモンって……」

「異性の気を引くための匂いと考えれば、だいたいおわかりになるかと。メリディス族の場合、これ以上相応しい言葉は無いでしょう」

呆気にとられて口をぱっかり開いたあたしに、ポテトさんは悠然と微笑んだ。

「鳥が美しい羽根でダンスを踊るように、人が宝石や花を片手に意中の相手に言葉を伝えるように……メリディス族は匂いで相手に求愛するのですよ。愛する唯一人を自分の虜にするために」

「に……匂い……」

あたしはがっくりと両手をカウチの上につき、涙混じりに項垂れた。

もともと微妙な体質の一族だと思っていたが、ここまで極めつけに変わっているとは。

というか、その匂いでレメクに負けてるあたしって、いったい何なんだろうか？

魅力ゼロってことですか？

「あれ？　なんでそんなに落ち込んでるんです？　意外と効果的だと思いますよ？　余波くらって他の種族があなたがたにメロメロになっちゃうぐらい、いい匂いするわけですから。狙われた相手はたまらないと思いますよ？」

フォローが追い打ちになってます。

「……でも、あたし……あんまりいい匂いしないし」

ぐすぐす。

「まだ小さいからですよ」

「おじ様のほうがずっといい匂いするし」

えぐえぐ。

「……おや。いい匂いなんですか」
「うん。もう、ものすっごくいい匂い。あたしメロメロ。しかも最近益々匂いが上がってるの。昇天しちゃいそうなぐらい！」
「……ほぅほぅ」
あれ。何故でしょう？
ポテトさんが、なにやらイイコト聞いたゼ的な笑顔になりました。
「ええ。それはいいことです。とてもいいことですよ、お嬢さん」
負けてるのに？
「……いいことなんだ？」
「ええ。とても素晴らしくイイコトです。完璧です。私はあなたを心から尊敬いたします」
何故！？
「まだこんなに小さいのに、そこまでとは……。いえ、たしかに最近いい匂いするなぁとは思ってましたが。お二人が揃っているときにやたらとイイ匂いしてたのは、やっぱりそういうことだったんですね。ちなみに大きくなったあなたの匂いは、決して負けていませんでしたよ」
「本当に！？」
「ええ」
「おじ様骨抜きにできそう！？」
「もうなってますよ」
「それは嘘だわ！」
あたしは固い握り拳をつくって、むん！　と気合いを入れた。
ポテトさんのお世辞はともかく、希望は出ました！
いつか大きくなったら、全身から匂いをムンムンさせてレメクに求婚するのです！！
できればレメクの方が求婚してくれるような立派なレディになりたいですが、それはちょっと難しいと思う！
それ以前に受け身は心配だ。
なにせ相手はあのレメク！

うかうかしてると、ボインでバインでムフフンな美女に獲られちゃうかもしれないのです！

「お義父さま！　あたし、がんばるわ！」

「ええ。その意気ですよ。そんな意気がなくても大丈夫ですが」

「匂いの出し方も教えてね！」

「……私はメリディス族じゃないから無理ですよ？」

「あと胸をおっきくする方法も教えてね！」

「それは管轄外です。レンさんに頼んでください。私もまだ死にたくありません」

何故！？

ガンッとショックを受けて固まったあたしの後ろから、ぬっと暖かい影が覆い被さる。

「……何の話をしていますか、あなた達は」

あァん！　おじ様ン！！

あたしはバッと振り返り、すぐそこにあったレメクの首ったまにしがみついた。

おほほぅ、やっぱりいい匂いがするーぅ。ふんふんふん。

「また大量に持ってきましたねー、レンさん」

「これで足りればいいのですが……。それに、私も少しばかり空腹でして」

「おや、珍しい。……って、ああ、あなたはまだ食事をとっていなかったんですよね」

「ええ。食べる間もありませんでしたよ。……あぁ、ベル。もう少し強く抱きついていただけますか？」

喜んで！！

全力で抱きついたあたしを張り付かせたまま、レメクがひょいと上体を起こす。

そして空いたスペースにすとんと腰掛けた。

座ったままその様子を見ていたポテトさんが、面白そうに笑っていた。

「あなたが横着をするのは珍しいですね」
「両手が塞がっていましたからね。……それにしても、あなたがいるとわずらわしい応対をせずにすむのがいいですね。あぁ……よろしければ、皿を一つ持っていただけますか？　ベルに食べさせてあげたいので」
「私をテーブル扱いするのは、あなたぐらいですよ、レンさん」
なぜかくすくす笑いながら、ポテトさんがレメクから大皿を受け取る。
その上に盛り上げられた食料は、ポテトさんの作った盛り合わせと同じぐらいモリモリだった。
「さぁ、ベル。王宮の料理長自慢の料理を堪能してください。まずは鶏肉の香草焼きからいきましょうか」
一口サイズに切られたお肉を、お皿に添えていたフォークで刺してあたしの口元に。
ぱくっと頬張ると、素晴らしく芳醇な味がした。
（美味ちひっ！）
思わず顔もとろけます。
次々に口にご飯を食べさせてくれるレメクとそれを頬張るあたしに、皿持ちをしてくれているポテトさんがややあってから呟く。
「……微妙にお邪魔な気がいたしますね……」
口をもぐもぐさせながら、あたしは小さく首を傾げた。
思わずレメクと二人揃って、フォークと食料を見比べる。
レメクが肉の一切れを刺して、ポテトさんに差し出した。
はい。あーん。
「食べますか？」
ポテトさんは唖然とした顔になった。
まさか自分に差し出されるとは思ってもみなかったのだろう。
まじまじとレメクを見つめ、意見を請うようにあたしまで見つめる。
「食べないの？」

どうしろと？　という眼差しにそう答えると、ポテトさんはなんとも言えない微苦笑を浮かべた。
「あなた方は……全く……」
どういう意味だろうか？
あたし達は首を傾げる。
そんなあたし達の前で上品に肉を口に入れたポテトさんは、丁寧に咀嚼し終わった後でニヤリと笑う。
「なかなか美味ですね。……それにしても、餌付けとはレンさんもなかなかやります」
「え……？　いえ、別にそういう意図は……」
不思議そうに首を傾げてから、何に気づいたのか、レメクがハッと顔色を変えた。
バッと会場の方を振り向く。
そこに、金色の魔女が立っていた。
「こぅおら、男共」
あたしは眼中外。
「男同士でハイ・アーンはないだろうが、ァアン！？」
「い、いえ、別にそんなつもりは」
「つもりもクソもそうだったろーが！！　だからお前は天然だと言われるんだ馬鹿者！　こら、ソコ！　おまえもだポテト！！　私がやってやった時はのらくらとかわすくせに、なにレメクの時だけぱくついておる！？」
「え、いや、別にそんなつもりも？」
「なぜ疑問系！？」
ギンギンに目を光らせて言うアウグスタに、非常に楽しそうに応対するポテトさん。
あたしは止まったレメクの手からフォークを外すと、誰も食べさせてくれない皿のお肉を仕方なく自分でつつきました。
ぷすっぽーんっ！
綺麗に弧を描いて肉が飛ぶ。

「……」
あたしはしばらく、そのままじっと消えた肉のあった場所を見つめた。
すぐ傍の沈黙がとても恐い。
そろそろとレメクを見上げてみる。
レメクがもぐもぐしてました。
「……」
あああ、怒ってる。目がちょっと怒ってる。
だから食べさせてやると言っただろーがという眼差し。
しかも肉がそこそこ頑丈だったらしく、なかなか咀嚼が終わりません。
「ご……ごめんなちゃい……」
上目遣いにしょんぼり謝罪。
レメクが目で「めっ」とやってから、ようやく咀嚼を終わらせた。
ごっくんこ。
「ベル」
「……あい」
「手を出しなさい」
あたしはフォークを差し出した。
レメクはあたしの手からフォークを抜き取る。
「……」
「……？」
そして、そのままあたしの小さな手を大きな手できゅっと握った。
「？？？」
首を傾げて見上げるあたしに、レメクはただ静かな眼差しを向ける。
と、隣にいたポテトさんが何故かいきなり立ち上がった。
持っていた大皿を自分のいた場所に置くと、アウグスタと一緒にあたし達の前に並ぶ。
移動させられたアウグスタが、一瞬変な顔をしたのが印象的だっ

た。
「ベル」
呼ばれて、あたしは視線をレメクへと戻した。
レメクの片方の手には、いつのまにか小さな布のようなものが握られている。
それをあたしのちっこい手に上に落として、包み込むようにしてもう一度握った。
「？」
（なんだろう？）
あたしはさらに首を傾げる。
手の中にあるのは、革の袋のようだった。
大きさは小さなあたしの掌ぐらい。
中に布でも入っているのか、袋はパンパンに膨れており、中心あたりがちょっと硬い。
なにか小さな硬いものを布で巻いて、それを革袋に入れたもののようだ。
首にかけれるようにしているらしく、長い革紐がちょろりと伸びている。
「……九年後です」
九年後？
「もし、九年後……その時も、今と変わらず、変わらないままに共にあったなら、この袋の中にあるものを取り出してください」
袋の中にあるもの？
「今はまだ、時期ではありません。けれど、事がこうなった以上、これをあなたに差し上げるのが筋だと思います。全ての判断は、九年後のあなたにこそゆだねるべきでしょう」
「？？？」
あたしはきゅっと唇を引き締めて首を傾げた。
一生懸命問いかけの眼差しをおくるが、レメクはそれには答えない。

ただ、いつか見た、真っ直ぐな目であたしを見つめていた。
「いらないと思ったなら、捨ててくださって結構です」
捨ててもいいと言われても、物が何かわからないと判断のしようがない。
だいたい、レメクは他人にゴミを渡すような人じゃないから、捨てろと言われても頷けはしないのだが……
あたしはレメクの掌につつまれたままの自分の手を見下ろした。
その手の中にあるものをきゅむきゅむと握る。中身が何なのかよくわからないが、とても大切そうな感じがした。
じっと見つめてくるレメクを見つめ返す。
なぜか、息が喉にからんだ。
「これ……何？」
「母の形見です」
あたしの頭が真っ白になった。
レメクの……お母さん!?
というと、ヴェルナー閣下が一目惚れしちゃったという、ものすっごい美人のお母さんのことですね!?
そういや名前も知りません！
ずいぶん前にお亡くなりになってるような印象ですが!!
そのお母さんの形見!?
「私が私の持ち物として持っているのは、これだけです。私は、女性がもらって喜ぶものが何なのか知りません。ですから、自分が持っている唯一つのものをあなたに贈ります」
「え。で、でももも」
いかん。どもった。
「そんな大事なもの、ど、どうしてくれるの？　あたし、いつも貰ってばっかりで、何一つ、お返しもできてないのに」
というか、これ以降もお返しできなさそうな気がします。……貰う量ばかり多すぎて。
するとレメクは笑みを零した。

なにかふと力が抜けたような、なんとも言えない柔らかい笑みだった。
「沢山、貰いましたよ。あなたから」
……何か渡したことあったっけ……？
「本当に沢山、貰っています。……それにこれは、今日の日のための贈り物には、あまり相応しくないかもしれません。……それでも、私が持っているのはこれだけでしたから」
えぇえぇと？
「今日の日って？　えと、あ！　春の大祭だから？　初めての夜会だから？」
レメクは首を横に振った。
優しい目が穏やかに微笑む。

「あなたの誕生日です」

「……」
「言うタイミングがわからなくて、少し、遅くなりましたが」
息すら止まったあたしに、レメクはただ微笑む。
暖かいものの全てを込めて

「誕生日、おめでとう」

体の中で、心臓が、一際大きく脈打った。

エピローグ

贈られた品とその言葉に、あたしの息は止まっていた。
誕生日に『おめでとう』――そんな言葉は初めてもらった。
誕生日に何かを贈られたことだって、今まで一度もなかったことだ。
自分がこの世に生まれた日。
その日がくるたびに思うのは、「あと何年で孤児院を出されるか」ということだけだった。
誕生日にはそれだけの意味しかなく、一年を無事に生き延びたことを喜ぶ暇もなかった。
なのに、そんなあたしに「おめでとう」と言ってくれるのか。
この日を迎えたことを……おめでとう、と、そう言って祝ってくれるのか。
たった一つしか持っていない、お母さんの形見まで譲ってくれて……
「……ベル？」
目の前にいるレメクが不思議そうに首を傾げる。
その姿がみるみるうちに水の中に沈んで、ツンと鼻の奥が熱くなった。
「ベル？　どうしたんです！？」
慌てたレメクの大きな右手が、あたしの小さな左顔を包み込む。
彼の左手はあたしの手を握ったままだ。
その手の中に、奇跡がある。
生まれて初めてもらった、純粋な祝福の形が。
（……レメク）
あたしはじわじわと息を吐き出した。
途端、ぽろっと目から何かが零れ落ちた。

「え。え！？」

聞こえてくるのは、かつてないほどに狼狽えた声。

だけどあたしの視界はぼやけていて、レメクの姿すらボヤボヤだった。

「い、嫌でしたか？　いけませんでしたか？」

おろおろと声と手が逃げてゆく。

あたしは顔をくしゃくしゃにしたまま、エイヤッとレメクに飛びついた。

「ベル……！？」

レメクは驚いたようだった。だが、そんなことにかまっていられない。

後で「はしたない」と怒られるかもしれない。

こんな所で何をしているのかと、特大のカミナリを落とされるかもしれない。

でも、そんなのことはもう、頭の片隅からも追いやられていた。

レメク。レメク。

頭の中がたった一つの名前で埋まる。

いっぱいいっぱい体の中で、光のように弾けている。

レメク。レメク。大好き。大好き！

「……喜んでくれたようですよ」

頭の上のほうで、ほのかに笑いを含んだ声がした。

動揺していたレメクの体が、その声にピタッと動きを止める。

立っているその人を仰ぎ見たのか、上体がちょっと反らされた。

レメクのとは違う大きな手が、あたしの頭を撫でてくれる。

どこかひんやりとしたその手は、けれどとても暖かかった。

「……そうですか。……初めてだったんですか」

人ならざるナニカであたしの過去でも読み取ったのか、ポテトさんがしみじみと声を零す。

「……それはまた……無理もありませんね」

どこか憂いを帯びたその声に、レメクが呆然と呟いた。

「……初めて？」
「ええ……そのようですよ。もともと、誕生日を祝うというのは、生活にゆとりがないとできないことですからね」
「あぁ……ですが、孤児院にも、出生日の記録に照らし合わせて祝い金が……」
言いかけて、そこでレメクは口を閉ざした。
思い出したのだろう。かつて自分が裁いた男が――孤児院の院長がどんな男だったのかを。
「……そう、ですか……」
ふいに力を失った声で呟いて、レメクはあたしをやんわりと抱きしめた。
優しい手が背中を撫でてくれる。
「……あなたも、今日が初めてでしたか」
あたしは額を擦りつけるようにして頷いた。
母がいた頃は、もしかしたら違っていたかもしれない。
けれど、記憶にある母は「おめでとう」とは言わなかった。
物心ついてからのほんのわずかな間だけ、おぼろげな記憶の中にいるその母は、誕生日に必ずあたしを抱きしめて、
「ありがとう」
そう言って、ギュッとしてくれた。
生まれてきてくれて、ありがとう。
一年を生き延びてくれて、ありがとう。
生きることそのものが大変だったから、無事に生きれたことに感謝していたのだろう。
けれどその母を喪って独りになって、孤児院に入った時に「ありがとう」も失った。
あとはただ、生きることに精一杯だった。
必死になりすぎていて……正直、自分の生まれた日だって忘れかけていた。
思い出したのは、レメクと出会ってからだ。

八歳のあたしに対し、しつこく「十年後」と言っていたから。
だから十八になるその日が待ち遠しくて、忘れかけていた記憶を掘り起こしたのだ。
四月一日。
あたしの生まれた日を。
「……なら、もっと良いものを贈ればよかったですね」
どこか悄然と呟かれた声に、あたしは首をぶんぶんと横に振った。
これ以上ないほど良いものを贈ってくれたのに、何故この人はそんなことを言うのだろう。あたしは手の中にある革袋をぎゅっと握りしめて、レメクに全力でしがみついた。
別のを贈ると言われても、困るのです。
そして、返せと言っても、もう遅いのです！
「……まぁ、贈り物として、アレは妥当だろうな……」
頭の上のほうで、ぼそりと女王陛下が一人ごちた。
レメクに張り付いたままチラとそちらを仰ぎ見ると、なんとも言えない呆れ顔のアウグスタがレメクを見下ろしている。
「しかし、レメクよ。おまえはどーしてそう、変なところで自信が無いというか、後ろ向きというか、駄目駄目なんだ？」
「……ご主人様。もう少し、優しい言葉でなじってやれませんか？　ヘタレとか」
「……それ、優しいか？　よけいひどくないか？」
「駄目駄目よりマシですよ」
「いや、ヘタレはよけいひどいだろう。反論できない分、可哀想じゃないか」
「なにを仰いますか。駄目駄目のほうがよっぽどひどいです。それこそ反論できなくてダメダメです」
「……二人とも、もう、あっちに行ってくれませんかね」
頭上で変な言い合いをはじめる（ちなみにどっちのセリフもかないりヒドイ）女王様と魔王様に、レメクが視線も向けずに冷ややかに言う。

……拗ねたんだろうか？
あたしは慰めをこめて、ギュッとレメクを抱きしめた。
キュッと抱きしめ返された。
拗ねたようです。
「……おじ様、気にしちゃ駄目よ」
あたしは目元をゴシゴシしながら慰める。
「……ベル」
「ちょっと気弱で、ヘタレで、ダメダメで、実はけっこうおっちょこちょいなのが、おじ様の魅力なんだから！」
何故でしょう。
レメクが地味に落ち込みました。
「……おじ様？」
「……」
顔が暗いです。
「……何故おまえがトドメをさすんだ、ベル……」
「……さすが狩猟民族は一味違いますね。追い打ちの機会を見逃さないと言うか……」
褒められました。
目をぱちくりさせたあたしを見下ろして、アウグスタが苦笑しながらふんぞり返る。
「まぁ、あれだ。人形みたいだと評されるよりはよほど良かろう。なぁ、レメク？」
「……」
「女の誕生日に贈り物をするなど、昔のおまえからは想像もつかんからな。そういう意味では、男前が上がったじゃないか」
「そうですよ、レンさん。無難に花とか宝石とか洋服とか小物とか贈らずに、世界に一つしかない形見を贈るだなんて、なかなかできるものではありませんよ」
どうやらフォローにまわったらしい二人組に、レメクは胡乱気な目をむける。

「……そんなものを贈るのでよかったんですか？」
「「……」」
二人が揃ってレメクの肩をポンと叩いた。
「……そうですか。レンさん……誰かに対しての贈り物とか、マジメに考えたの初めてだったんですか……」
「……祭典とか式典とか国家間取引の進呈物は完璧なくせにな……」
「大丈夫です。失敗はしていません。初挑戦のわりに飛び級ですが」
「もう少し小技が効くようになったら万々歳だ。……まぁ、この朴念仁の唐変木のド変態よりはよほど見込みがある」
「ご主人様。そんなに褒めても、何もあげられませんよ？　私」
「褒めとらん！！」
アウグスタのこめかみに青筋がたっていた。
しかし、怒られてるのにナゼ嬉しそうななのだろう、ポテトさん。
頬がちょっぴり染まってます。
二人のやりとりを見守ってから、あたしはレメクに向き直った。
愛するおじ様は、どこか薄しょんぼりと俯いている。
革袋を右手で握ったままで左手を伸ばし、あたしはポンポンと肩を叩いてあげた。
レメクが疲れた顔であたしを見る。
「……なんです？」
あたしは革袋を両手でぎゅっと握り直して、レメクにとびっきりの笑顔を向けた。
「えへへ」
思わず変な笑い声もこぼれました。
何かを言いたいのだが、正直、何を言えばいいのかわからなかった。
なんだかすごくソワソワするのに、どう動いていいのかわからない感じだ。
ただ、体の奥がポカポカと暖かい。
「あのね、おじ様。……あたし、大事にするね」

「……いえ」
なぜかレメクはあたしから視線を逸らした。そうして、ばつが悪そうに小さく言う。
「……古いものですし、それに九年後までお預けのようなものですから」
「うん」
「何か別のものをまた贈ります」
「ううん。これがいいの」
獲られないようにぎゅっと両手の中に閉じこめて、あたしはニコニコと笑う。
「あのね、あたしもね、お母さんの形見持ってたの。お母さんのお母さんからもらったっていう腕輪」
レメクがふと顔色を変えた。
あたしが過去形で話していることに気づいたのだろう。
顔を改めて向き直るレメクに、あたしはただ微笑む。
「そんなに綺麗なものじゃなかったの。何かの骨か牙か……そういう白っぽいモノで作った腕輪でね。模様とかもほとんどかすれちゃってたし、たぶん、質屋に持って行っても、たいしたお金にはならないと思うけど……」
けれど、それは今、あたしの手元には無い。
「孤児院に入る時にね、獲られちゃって、売られちゃって……外国の人が買って行ったらしいから、もう手元に戻ってくることもないの。あたし、あれ一個だけしか持ってなかったから、すごく悲しくて悔しくて、たまらなかった」
記憶はすぐに薄れていってしまうけれど、形見の品はずっとそのままの形で残っている。
だから、本当はずっと持っていたかった。
けれど、あたしのたった一つの宝物は、もう、どこにいったかわからない。
「……ねぇ、おじ様。あたし、これ、本当にもらってもいい？」

「……ええ」
「返せって言わない？」
「言いませんよ」
「でも、持っていたい時があったら、その時は言ってね。ちゃんとおじ様の気の済むまで、一時返却しておくから」
「言いませんから」
あたしはいそいそと長い紐を首にかけて、首から提げた革袋をぎゅっと握った。
「……えへへ」
嬉しかった。
たった一つしかないものを、大切な形見を、あたしにくれるその気持ちが嬉しかった。
この形見はあたしのお母さんの形見では無いけど、レメクを産んでくれたお母さんの形見なのだ。そう思うと、胸の奥がぽかぽかして鼻がまたツンツン熱くなる。
レメクが黙って頭を撫でてくれる。
そうして、ほんとうに小さく、声を零した。
「……そんなに、喜んでいただけるものでは……無いんですよ」
あたしはレメクを仰ぎ見る。
レメクはあたしを見ていた。だが、あたしそのものを見てはいなかった。
あたしを見ながら違う場所を見ているその目は、どこか寂しそうな、悲しそうな色をしている。
だから気づかずにはいられなかった。今彼を占めている感情に。
後悔――――だった。

※　※　※

月がだいぶ西に傾いた頃、ようやくあたし達はクラウドール邸に帰り着いた。

ガラガラと音をたてて馬車が敷地内に踏み入れる。

突如として月光が翳ったのは、森林と見紛うような庭園のせいだろう。高い木々に阻まれて、光も地上に届かない。

「……それにしても、今日はいろいろあったなぁ……」

ふと、馬車の音にかき消されそうな小さな声で、ケニードが呟いた。

あたしは窓の外を必死で見ていた視線を車内に戻し、どこかぼんやりとした微苦笑をしているケニードを見た。

アロック邸の馬車の中には、あたしとレメクの他にケニードだけがいる。

行きは一緒だったバルバロッサ卿は、久方ぶりに会うという家族のために、王宮に泊まることになったのだ。

ケニードやレメク、そしてあたしも王宮の一室に泊まれと言われたのだが、あたし達はそれを速やかに辞退した。

正直に言えば、慣れない場所に長居したくなかったのである。……疲れるから。

「まさか、ベルが王女様になるなんてね。……これからは、呼び捨てにもできなくなっちゃうね」

いろいろな思いが籠もったその声に、あたしはぎょっと目を見開いた。

慌ててケニードの方にすっ飛んでいく。

そういえば、そんな問題とかもイロイロあったのですね!?

「そんな、嫌よ？　ケニードが殿下とか呼んだり、敬語とか使うなんて」

「ん～。でも、それが普通だからね」

「だ、だって！　それなら、あたしだって、今までずっと貴族様なケニードを呼び捨てにしたり、こんなしゃべり方だったりしたじゃ

ない！」
「それはほら、僕らは同志だから！」
「そうよ！　これからも同志だから！」
あたしはケニードの服の裾をギュッと握って、一生懸命目で訴えた。
いきなり降って湧いたような養子の話で、彼等が変わってしまうなんて……あたしには耐えられそうになかった。
今までずっと、あたしは彼等に、大らかな目で見守ってもらっていたのだ。
何の力もないあたしなのに、まるで一人前の人のように扱ってくれた。子供だからと、優しく甘えさせてもくれた。
そんな彼等に、なぜ膝を折らせることができるだろうか？
なぜ頭を下げさせることができるだろうか？
いつだって膝を折って頭を下げないといけないのは、あたしの方だったのに！
「……でもね、ベル。ただの貴族と、王族は違うんだよ」
「でも……！」
反論しようとするあたしを目で止めて、ケニードはやんわりと笑う。
「王族は敬われなければならないんだ。誰もが頭を下げ、誰もが道を空ける人でなくてはいけない。権力っていうのは目で見えるものじゃないからね。対応する人々がそうやって形で示してようやく、周囲に誰が一番偉いのかを知らしめることができる」
あたしは口を閉ざした。
ケニードは困ったような笑みのまま、軽く首を傾げる。
そうして、諭すように言葉を続けた。
「……もし、もしもだよ？　ベル。僕が君に今まで通りに接して、王女様としていっさい敬ったりしなかったら、きっと周りの人は君を簡単に見くびってしまうだろう。王族の血を引いていない王女様は今までも沢山いたけど、たぶん君は、その中でも一番、元々の…

…その、ごめんよ、こんな言い方で……身分が低いんだ。孤児だっていうことも、人によっては見下す材料にするかもしれない」

あたしはぎゅっと服の裾を握りしめた。

それは、たしかに『無い』とは言い切れないことだった。

いや、貴族達の思考からすれば、ごく普通にありえることだろう。

「だからね、誰もが君に丁寧に接しなくちゃいけないんだ。友達だからって君を敬わなければ、それは君のマイナスになってしまう。僕は、そんなのは嫌なんだ」

「でも……でも、ケニード」

あたしは一度だけ唇を引き結んで、優しい友人を見上げる。

「それなら、あたしはずっと、ケニードに悪いことをしちゃったのね。ずっと、ちゃんとした接し方ができてなかったんだし」

「違うよ、ベル。思い出してごらん？　呼び捨てにしてって言ったのも、普通の会話を望んだのも、他の誰でもなく、この僕だったろう？　僕はね、もともと家の爵位も低いし、生まれが生まれなもんだから、あんまり敬語使われるのに慣れてないんだ」

「でも、ケニード……」

「けどね、ベル。王族はそういうわけにはいかない。王族という国で最も高い身分を与えられた者は、それに応じた姿を国民に示さなくちゃいけないんだ。……だから、今まで通りにはできないんだよ」

服の裾を握りしめたあたしの手を優しく包み込んで、ケニードはやんわりと笑う。

すると、今までぐったりと馬車になついていたレメクが、あたし達のほうを見ながら声をあげた。

「王族としての義務と、貴族としての義務を放棄することは許されません。……ベル。アロック卿の言うことは正しいのですよ」

「……」

きゅっと唇を引き結んだあたしに、けれどレメクは口の端を笑ませて言う。

「ですが、誰も見ていない場所なら、少しぐらい融通しても良いと

思いますよ」
　その言葉に、ケニードは呆気にとられたような顔になり、あたしは大喜びで顔を輝かせた。
「ほら！　ケニード。おじ様もこう言ってるわ！」
「い、いや、でも……ですけどね、クラウドール卿。もし、誰かがそれをうっかり見ちゃったら……」
「何かあっても、私がなんとかします。……アロック卿。敬語を使われるのは慣れていないと言ったあなたなら、これからのベルの気持ちを誰よりもわかってくださるのではないでしょうか？　私達が理解し得ないものも、あなただからこそ理解できるのではないかと期待しています」
「……クラウドール卿……」
「あの王宮で……親しい人にまで頭を下げられては、ベルもきっと寂しいでしょうし」
「……おじ様！！」
　あたしは目を輝かせてケニードに笑いかけ、そしてレメクに飛びかかった。どふ、とか言われた。
「おじ様！　ありがとう！！」
「……いえ……お礼を言われるようなことはしていませんし、言ってもいません。ただ、ベル。あなたはこれから、自分を律すること、そして場をわきまえることをまず覚えなくてはいけませんよ。アロック卿に無理を言っているのですから、彼に迷惑がかからないようにしなくてはいけません」
「うん！」
「……これからは、『うん』ではなく、『はい』と返事するように。王宮は揚げ足を取ろうとする人々で溢れていますからね。ちょっとした言葉でも、あなたの傷になってしまいます」
　……難しそうだ。
　あたしは情けなく眉を垂れさせながら、はい、と小さく呟いた。
　ややも疲れた顔をしていたレメクが、穏やかに笑ってあたしの頭

を撫でる。
「あなたはきっと、素敵な姫君になれますよ」
その言葉は、ものの見事にあたしのハートを打ち抜いた。
素敵な姫君に。なれそうですと！？
メラメラと闘志がわき上がる。
なれそう、ではありません。
ならないといけないのです！
そう。考えようによっては、これはあたしにとっても大いなるチャンスなのである。
王族という身分（つまり、侯爵であるレメクより上！）、そして教育（素敵な女性になるチャンス！）。
いつかレメクに求婚するために、必要な土台ができはじめているのだ。これをチャンスと言わず何と言おうか！
「おじ様。あたし、がんばるわ！」
「その意気です」
「でも、たまにはぺったり張り付かせてね！」
「……女性として、それははしたないことですよ」
そこは無視です！
ついでとばかりにトリャサッと腹に抱きつく。苦笑したレメクが、そんなあたしの背を撫でてくれた。
「アロック卿。ご迷惑をおかけしますが、ベルのこと、よろしくお願いいたします」
「……いいえ。正直に言えば、今までといきなり変わっちゃうのは、僕も寂しかったですから」
ほんのりと笑みを含ませて言うケニードに、レメクが軽く頭を下げるのがわかった。腹に張り付いているため、頭が微妙に胸部と下腹部でサンドイッチされるのです。引き締まった腹肉、グッジョブ。
「……まずは、ベルのこの謎思考を矯正するべきなのかもしれませんね」
失礼な。

「あはは。でもベルのそれは、クラウドール卿に対してだけですし……ああ、着いたようですね」
笑いながらレメクに答えていたケニードが、ふと止まった馬車にちょっぴり残念そうな顔になる。
綺麗に玄関前に横付けされた馬車に、あたしは馬車の中をちょろちょろと走った。
「ああ、ベル。今開けるから」
「ケニード、ありがとう！」
ぴょんとケニードに飛びついて、ぎゅっと抱きしめる。そして馬車の入り口でちんまり待機。
さぁ、お家に帰るのです。
「……」
ふと、レメクがあたしを見ながらどこか困った顔をした。
何か言おうとして、けれど言葉を飲み込んだような顔だ。
なんでしょう？
きょとんと仰向くと、レメクはゆるく首を横に振る。
「……いえ。なんでもありませんよ」
……とてもじゃないが、そんな風には見えなかった。
だが、それを言い合うより前にケニードが馬車のドアを開けた。
レメクがあたしを小脇に抱えて、そのドアからするりと外に出る。
「ありがとうございます、アロック卿」
「いえ。おやすいご用です。また何かありましたら、遠慮無く言ってください」
テレテレと答えるケニードに、ちょっと笑ってレメクは彼に頭を下げた。
抱えられてるあたしも、一緒にペコリと頭を下げる。
名残惜しげにドアが閉められ、カラカラと軽快な音をたてて馬車が走り出す。あたし達はそれをしばらく見送って、家の中へと入った。
「た・だ・い・まーッ！」

あたしはもう、大喜びである。
なんとも言えない開放感と安堵感に、思わず玄関で両手を上げてバンザイポーズ。
レメクの大きな手が、そんなあたしを廊下へと押し進めた。
「ほら。玄関で遊んでないで、部屋に上がりなさい。それとも、台所に行きますか？　一応、簡単なものを作り置きしておきましたが」
どうやら、帰ってきた時のために作ってくれていたようです。たぶん、あたしが着替えに手間取ってる時に作ったんだろう。
……あいかわらず、そつのない人である。
「台所に行く！」
「では、それが終わったら部屋に上がっていなさい」
レメクは目を輝かせるあたしの頭を撫でて、どこかゆっくりとした足取りで廊下を進む。
あたしはそれをしばし見送り、カッと目を見開いた。
お風呂だ！！
閃きました。
（チャンス！）
あたしは素早く部屋の一つに飛び込むと、そこにこっそり置いてあったマイ風呂桶とマイタオルを小脇にかかえた。
そして足音を必死に殺して、トテトテとレメクの後ろをつけて行く。
レメクはいつもより緩慢な動きで廊下を歩いている。よほど疲れているらしい。そろそろと後ろから忍び寄るあたしに気づくことなく、いつものようにお風呂場へ。
ＧＯ！
あたしはレメクがドアを閉めるより早く、その中に体を忍び込ませた。
潜入成功！
ぱたん、と仕舞った扉の前で、あたしは輝く顔でバンザイポーズ。
しかし、ここで気を緩めてはいけないのです。

サッと身構えてレメクを見る。
いつもこの寸前でバトル発生になるのだが、今日は中まで入れました！　けれどこれからが本番なんです！！
ペイッと放り出せないよう身構えたあたしに、けれどレメクは背を向けて壁に体を預けてしまった。
……あれ？
そのままのろのろと上着を脱ぎ落とす。
（……レメク？）
床に脱ぎ落とされ、放置される白い上着に、あたしは体が徐々に冷えていくのを感じた。
おかしい。
レメクが、服を脱ぎ散らかすだなんて、ありえない。
畳むこともせず、落とされたままの上着を拾い、抱きかかえ、あたしはそろそろとレメクの視界へと踏み入れた。
変だ。変だ。なにかが変だ。
どこか疲れた横顔が見える。そんな位置まで来ても、レメクはあたしに気づかない。
（レメク）
心臓がトコトコと小走りに走り出す。
嫌な予感がした。とても嫌な予感が。
そろそろと動き、ほぼ真正面に来たところで、レメクがふと足下のあたしを見る。
襟元のボタンを外そうとしている最中だったらしい。あれ？　と呟きそうな眼差しで、彼はあたしを見下ろした。
「……ベル？」
そうですとも。ベルですとも。
あたしはマジメな顔でこっくりと頷く。
今の今まで気づかなかったらしいレメクは、やや驚いた顔であたしを見下ろし、
「なぜ……」

そうして、どん、と背中を壁に打ちつけた。
「「え……？」」
あたしとレメクの声がハモる。
レメクの上体が揺れた。同時に、その瞳の中の光がふいに消えた。
「おじ様！？」
足が崩れた。壁に背をつけたまま、ずるずると床に落ちたレメクに、あたしは上着を放り出して駆け寄る！
「おじ様！」
体が傾ぐ。床に倒れそうなその上体をあたしは賢明に抱き留めようと突進し、
「ぷぎゅっ！？」
潰されました。
……体格差は、いかんともしがたかったです。
「むぎゅ……ぉ……おじ、さまっ！」
モガモガと重たい体の下から半身を抜き出し、あたしは体を捻ってレメクを見る。
そしてゾッとした。
触れたレメクの体は熱く、顔は青白いぐらい白かった。
「おじ様ッ！！」
あたしは叫んだ。脳裏にお母さんの姿が浮かんだ。
路地裏で、冷たくなってしまった母。
消そうとしても消えない、不吉な光景。
……知っている。人とは、ほんの些細なことで命を落とすのだと。
まるで冗談のように、突如としていなくなってしまうのだと！
「レメク！！」
あたしは叫んだ。
けれどその瞼は開くことなく、力無く投げ出された手は、ピクリとも動かなかった。

王宮編　陰謀の章へ続く。

エピローグ（後書き）

こんな隅っちょまで目を通してくださる、そんな貴方が大好きです。
第一部の折り返し地点であり、王宮編四部作の一つ、「起」となる求愛の章、終幕となりました。
とはいえ、物語はむしろ始まったばかり。
次章、陰謀の章でお会いできれば幸いです。
そして、少しでも楽しんでいただければ……光栄です＾＾

番外編　【幸せの形】（前書き）

ＨＰにて行われたました番外編用主人公選出投票、第一位「レメク」の物語です。
主人公はベルではありませんので、お気をつけください。

番外編　【幸せの形】

「幸せの形とは、どういうものだと思います？」
口元に淡い笑みを浮かべて、目の前の男はそう問いかけてきた。
王都北区、クラウドール邸。
その敷地内の一角に、彼等のいる四阿は在った。
街屋敷（タウンハウス）として破格の敷地を誇るクラウドール邸は、同じ北区の屋敷と違い、造園技術を駆使した庭を有してはいない。敷地内に植わっているのは、もっぱら太くて立派な樫の木だ。開国時からそこに在るそれらの木は、今では森のように巨大になっている。二人が居る四阿の傍らにも一本の樫の木がそびえ立ち、その立ち姿はまるで小さな四阿を守るかのようだった。
男の問いに、レメクは嘆息をついて顔を上げる。
テーブルの向こうにいる男は、ただ微笑んでいた。
恐ろしいほど顔形の整った男だった。
微笑一つで国を滅ぼした伝説の美姫ですら、この男の美貌には遠く及ばないだろう。その気になれば国どころか大陸一つ思うままに操れる男は、今はただ穏やかに微笑んでこちらを見ている。
その微笑みすら魂を奪われそうなほど美しかったが、レメクはこれと言って特別な感銘は受けなかった。
ただ深くため息をつく。
「……そんなことを聞かれても、困ります」
実際、彼はとても困っていた。
目の前にいる男がどういう意味でそれを問うているのか……『分かる』からこそ、この上なく困っていた。
なぜなら幸せの形など、彼には検討がつかなかったのだ。
幸せというものすら、彼には分からないのだから。
「そうでしょうか？　今のあなたには、分かっていると思いますが」
どこか楽しげに笑って、男はテーブルに置かれたままの紅茶に手

を伸ばした。
香気を楽しむようにゆっくりと飲み干し、チラッと揶揄するような目をこちらへと向けてくる。
「それは人によって、あまりにも形の違うものです。今、目の前にあるあの木々の影が一瞬として同じではないように、木漏れ日の形が常に異なっているように……それこそ無限の形があることでしょう」
「……」
「生きること、豊かな暮らしをすること、飢えないこと、寒くないこと、悲しくないこと、辛くないこと、苦しくないこと……声に出してみると、ごくごく当たり前のようなことのようですが、これらを『至上』とする人も多くいます。そして、それらが当たり前のように与えられている人と、そうでない人がいる……」
レメクは何も言わない。
それに薄く笑って、男は言葉を続けた。
「あなたはこれらの全てを持っていた。……けれど、あなたの幸せはその中には無かった」
レメクはため息をついた。
少しだけ胸が痛んだのは、ある少女を思い出したからだ。
自分がもつそれらを与えられることなく、悪環境の中、小さな体で賢明に生きてきた少女。
小さく稚く、けれどどこかひたむきな強さをもつ少女。
（……ベル）
その名前を思い浮かべれば、少女の輝くような笑みが脳裏に浮かんだ。
不思議だと思う。まだ出会って一月ほどしか経っていないのに、彼女がいない日を想像することができない。
あんなに小さな体なのに、なんという存在感だろうか。
（……ベル。私は、贅沢な人間なのですね……）
未だ痩せっぽちの小さな少女。

彼女の今までの不幸を思えば、自分がひどく強欲な人間に思えた。
彼女が与えられなかったあらゆる『幸せ』を持っているくせに、それらを『幸せ』としてとらえられない自分は、なんという傲慢な人間だろうか。
（けれど……）
それでも……どうしてもわからないのだ。
幸せというのが、本当に、どういうものなのか。
どうして分からないのかすら……わからないのだ。
「……私は、どこか、おかしいのかもしれませんね」
レメクは力無く微笑んだ。
いつからか、などということは考えるだけ無駄だ。
初めからそうだった。
幸せだと、実感したことがまるで無かった。
金銭や身分といった形でなら、恵まれていると言っていいだろう。
だがそれは、幸せと感じられるようなものでは無かったのだ。
生きていることに感謝するほどの、絶対的な幸福では無い……
何故だろうか？　自分はあんなに、他人から見て『恵まれている』立場にあったというのに。
手に入れようと思わないままに、沢山のものが手に入ってしまっていたというのに。
それなのに、何故、こんなにいつも虚しいのだろうか……？
「……別に、おかしくはありませんよ」
どこか困ったように微笑んで、目の前の男は軽く首を傾げた。
「人は誰も彼も、同じものを共有しているわけではありません。あなたは、人が持っていないものは沢山持っていました。ですが……人が持っているものは、持つことができなかった」
風にそっと溶かすように声を零して、男はほろりと笑う。
「それは多分に、私のせいなのでしょうね。私さえいなければ、あなたはもっと幸せになったはずでした」
「いいえ。それは違います」

珍しく自嘲めいたことを言い出した男に、レメクはハッキリと否定を口にする。

「あなたがいなければ、私はとうに死んでいました。おそらく、無事に生まれることすらなかったでしょう。……あなたがいたからこそ、私は今こうしてここにいられるんです」

お義父さん、と、レメクは相手をそう呼んだ。

途方もないほど年の離れている名付け親は、その言葉に淡く笑う。

「……あなたはあまりにも公正すぎ、あまりにも優しすぎ、あまりにも賢すぎた……それはあなたにとって、不幸だったのでしょうね」

レメクは沈黙した。

そんなことを自覚したことは無かったし、言われることも稀だった。そのため、どういう反応をしていいのかわからない。

だから、その話題を避けるようにして言った。

「……『私』は生まれた時からこうでした。あの両親の元に生まれたのなら、それは必定というべきでしょう」

相手はただ、なんとも言えない微苦笑を浮かべる。

「……過ぎた力やお金は、不幸を呼び寄せますからね……」

レメクは目を伏せた。

望んでそう生まれたわけでは無かったが、自分の意志など関係なく、生まれる前から立場も運命も決められていた。

あらゆるものに縛られて、生きることすら、ただ『義務』だった。

……そんな男が、何故、幸せなど理解できるだろうか。

生きていることに意味一つ見いだせないというのに。

幸せだと……感じたことすら、一度も無かったのに。

「けれどね、レンさん。私は、今だからこそ思うんですよ。もう大丈夫だと」

「……？」

ふと笑みを零した名付け親に、レメクは首を傾げる。

深い叡智を湛えた人外の瞳を和ませ、男は笑みを深めた。

「幸せの形など、本当は誰も知らないのです。目で見ることも、手

で触れることもできないのですから。……ただ、そこに『ある』と感じることはできる。……それはね、きっと何かの温もりや、安らぎや、暖かく愛おしいものに満ちているのでしょう。それを感じた時に、人は幸せだと思うのだと……私はそう思っています」

すでに人であった時代のことなど、忘れ果ててしまっても。

それほどに遠い昔になってしまっても。

それでも理解できるのは、自分が本当に『幸せ』だと思える瞬間をもっているから。

そして、だからこそわかるのだ。

目の前にいる、唯一人、自分が『主』以外に愛した愛し子の変化が。

「あなたはもう知っているはずですよ、レンさん。まだ気づけませんか？　あなたはようやく、ずっと探していたものに……ずっとずっと欲しがっていたものに、出会うことができたんですよ」

微笑みはただ優しく、どこまでも深く暖かい。

男は告げる。

自分の名を分け与えた、名付け子を祝福するように。

「あなたの『幸せの形』は、もう、あなたの傍らに在るのですから」

1　日常の中で

小さな鳥の囀りに、レメクはうっすらと目を開けた。

三月初頭。

早朝の空気は冷たく、朝の光はまだ淡い。

それでも一月前に比べれば、寒さは格段に弱まっていた。

街路樹には気の早い野花が蕾をつけ、まだかまだかと春の訪れを待っている。木々の枝には硬い芽が目立ちはじめ、春の準備をはじめていた。

レメクは軽く上体を起こす。

途端、肩あたりに張り付いていたパンツがころりと転がった。

反射的にそれを見る。
パンツからは小さくて短い足がちょろりと出ていた。
レメクは驚かない。いかにも予想通りと言いたげな顔で、目の前のパンツを無造作に隠してやった。慣れている。
「……ベル」
レメクは相手の名前を呼ぶ。そこに転がっているのは、小さくて可愛らしい少女だった。
少女とは言っても、実際の年より幼く見えるため、パッと見には五歳ぐらいの幼女に見える。けれど実年齢は八歳であり、来月には九歳になる少女だった。
そして頭の痛いことに、目下唯一人の同居人であり、一族の掟に従えば十年後に妻に迎えなくてはならない相手である。
最近になってようやく体に丸みを帯び、秀でた顔立ちが目立ちはじめてきた少女を見下ろして、レメクは盛大なため息をついた。
寝入っている少女の顔は、どこか悲しげに曇っている。おそらく、張り付いていた温もりが無くなって寒いのだろう。小さくて短い手足をまごまごと動かして、温もりを探そうとしていた。
その様子は非常に可愛らしい。だが、レメクはほだされそうな自分の心を戒めた。
慎重に相手との距離をとり、用心深く少女の体を布団の中に押し込める。無造作に手を伸ばすとタコのようにからみつかれるため、枕を使って中に押し込めた。
……自分も布団に入ったままだったのを忘れていたため、すぐさま胴体にからみつかれたが。
（……嗚呼）
レメクは遠くへと視線を馳せる。
脇腹あたりにフンフンと息らしきものがかかっていた。どうやらまた匂いを嗅がれているようだ。
（……私はそんなに、何か匂うんですかね……）
たまに噛られることから考えて、どうも食べ物と間違われている

ようだ。何度しっかり体を洗っても無駄なため、最近ではもう諦めていた。

「……　……　……」

布団の中から小さな声が聞こえる。

小さすぎて聞こえないが、何か寝言を言っているようだ。

興味を惹かれて布団をめくると、うふふふふ、という笑い声が。

「……」

なぜともなくわき上がる悪寒をこらえていると、まるで呪文のような声が聞こえてきた。

「……太腿胸胸脇腹ヒップ……」

「……」

レメクはそっと布団を元に戻した。

そうして、死にものぐるいで脱出した。

※　※　※

太陽は未だ水平線の彼方にその身を沈め、朝靄に包まれた街並みを朱金の帯のように煌めかせている。

早朝。

ようやく太陽が姿を見せ始めた頃とあって、周囲は黄昏に似た色に沈んでいた。

空は眠りの蒼から覚醒の金へ。ややも赤い色の混じった朱金は、落日時の赤にどこか似ている。違うのは沈んで行くのでは無く昇って行くという点と、その身の放つ光の強さだろうか。沈む太陽は深く鈍い光を放つが、昇る太陽は激しく強い光を放つ。

そんな光に照らされた王都は、どこか幻想的なまでに美しかった。

建国以来一度も戦禍を被ったことのない街並みは、古き時代の名残と、新しい時代の技術を随所に散りばめている。

かつて「大陸で最も美しい」と言われた王城など、朝陽に照らさ

れて黄金の城のように煌めいていた。それが下品に見えないのは、おそらく当時の建築技術が優れていたからだろう。あくまで気品と優雅さを失わない城は、王都の住民の誇りだった。

水平線からこぼれ落ちていた光が、突然、目を灼くほどの強い光を放った。

夜明けである。

一生懸命小走りに歩いていたベルは、突然の光に大きな目をしょぼしょぼさせた。眠さを堪えて歩いている所に光をくらい、一瞬視力がおかしくなったのだ。

手を伸ばして目的の布を掴むと、少しだけ安心する。引っ張ると、レメクの体が傾きかけた。

「……ベル。無理について来なくてもいいのですよ？」

ふらふらしている少女に、隣を歩いていたレメクが声をかける。返事は欠伸混じりの眠そうな音で、全く言葉になっていなかった。

（……無理もない……）

レメクは物憂げな目で少女を見下ろした。

ベルの朝は本来早い。

孤児院時代では、朝早くから夜遅くまでこきつかわれていたらしい。その時の習性がなかなか抜けなかったのだろう。拾ってから十数日は、朝陽が昇るのと同時に起き出し、仕事は無いかと毎日のように目で訴えていた。

もうそんなことをしなくても良いのだと、納得するまでに一体何日かかっただろうか。

最近になってようやく朝寝坊（といっても、それでも一般の人々よりは早いが）するようになった所に、今日の早起きである。根性だけで歩いているが、少女の頭は前後左右に大きく揺れていた。

（……ベル）

眠さを堪えて一生懸命ついてくる姿は可愛らしいが、それ以上に何やら可哀想で仕方がない。

彼女が起きる原因となった自分の布団大脱走を思い出しながら、

レメクはふらふら揺れる少女の頭に手を伸ばした。傾きかけた帽子を直してやろうと思ったのだが、追いはらわれるとでも勘違いしたのか、少女が慌てて反対側へと逃げていった。

「……」

レメクは苦笑混じりに嘆息をついた。

海から遠い北区の大通りにも、うっすらと朝霧が立ちこめている。北区にも大きな上水路が川のように流れており、そこから霧が街へと忍び寄るのだ。この霧もクラウドール家の本邸にまでは入って来れないが、本邸に至るまでの木々の間には漂っている。

しっとりとした空気は喉に優しく、乾燥しがちな冬の空気もこの時刻だけは潤っている。けれどその恩寵を、北区の人々はあまり知らないだろうと思われた。

霧に覆われた北区の街並みは、まだ深い眠りに包まれている。貴族達が暮らす北区の目覚めは遅く、住民の大抵は昼頃に起き出すのだ。毎日のように社交場に繰り出す彼等にとって、朝とは日の出では無く、正午頃を指す言葉だった。

結果、馬車二台が並んで通れそうな大通りには人気が無く、コツコツ、チコチコチコと響く足音は二人分しか聞こえてこない。

誰も見ていないのをしょぼしょぼと確かめて、ベルは大きく口を開けた。

「……ぁ～ふぁあふ」

大きな欠伸だった。目尻に涙が浮いている。よほど寝たりないのか、手探りで近くにある服の裾を握りしめ、もう一度欠伸をこぼしていた。

しかし、それでも家に引き返さない。

「……おじしゃま」

「なんです？」

簡素な服に黒い外套を羽織った姿で、レメクは足下でフラフラしている少女を見下ろした。

若草色のワンピースに深緑の外套を羽織ったベルは、相変わらず

目をしょぼつかせながら問いかける。
「これから、どこに行くにょ？」
眠さで語尾がおかしくなっている。
その様子に苦笑しながら、レメクは（ようやく聞いてきましたね）と可笑しな気分になった。出かける自分に一生懸命「ついていく！」とついて来たのはいいが、行き先を尋ねるほどには頭は起きていなかったようだ。
「朝市ですよ」
「朝市？」
「ええ。行ったことはありませんか？」
「……」
ベルの視線がわずかに逸れた。
なにやらよくないことでも思い出したのか、うろうろと目が彷徨っている。
思わず止まってしまった歩みに、レメクも足を止めて答えを待った。
「昔、手伝ったことあるの……かき入れ時とかに」
「そうですか」
「それと……」
ベルは口をきゅっと引き締める。
幾分か迷ってから、彼女は小さく呟いた。
「……お腹空いた時に……」
レメクは何も言わなかった。
その一言だけで何をしたのかを理解した。
彼女がいた孤児院は、子供に決して優しくなかった。それどころか、最悪の環境だったと言えるだろう。その実情を知れば、頭ごなしには怒れない。レメクは自身の方針を少しだけ曲げて、敢えて内容を追求しなかった。
けれど少女は自ら自身の罪を告白する。
「……並べられてた商品を……盗んで食べたの」

レメクの口から、思わず深いため息が零れた。
泥棒は悪いことだ。それはもう、間違いない。
だが彼女等の場合、生死の危険があったこともまた間違いない。
食べなければ死んでいる。それほどの極限状態だったのだ。
「……ベル」
服の裾をもつ小さな手を軽くつついて、レメクはその手と手を繋ぐ。あまりの身長差に少女はほとんど万歳をするような状態だったが、握り返す力は強かった。
「店は覚えていますか？」

小さな少女は、俯いたままこっくりと頷く。
「……うん」
「では、謝りに行きましょう。代金は私が払います」
「！」
告げた言葉に、ベルはビクッと体を強ばらせた。
レメクは真っ直ぐな眼差しを少女へと向ける。
その口元には、穏やかな微笑が浮かんでいた。
「ベル。悪いことをしたと思っているのなら、それをきちんと正さなくてはいけません。確かに、当時はそんなことを考える余裕も無かったでしょう。ですが、今は違いますね？」
「……う……うん」
「後悔していますか？」
「……うん」
小さな少女は唇をきゅっと噛む。
真っ直ぐにこちらを見返す目は強く、そして綺麗に澄んでいた。
「言い訳だけど……あの時は、もう、それしか方法が無いような気がしたの。お腹空いてて、なんだかだんだん体も冷たくなってく気がして……動けるうちに、何か食べなきゃ、って……」
ベルは俯き、小声で自分の知るその店の名前を告げる。
レメクは頷いた。その店は彼も知っていた。

「美味しそうな肉がね……置いてあったの。生肉は食べられないから、乾燥肉のほうを盗っていったの」

生肉が食べられない、というのは、火を熾す術が無いからだ。

小さな子供達では火を熾すことは難しく、その火で肉を焼くことはもっと難しい。

おそらく、焼いたところで誰かに奪われるのがオチだろう。孤児達は弱い。その中でも、体の小さな彼女たちは、最も弱い人間なのだ。

（……ベル）

その頭を軽く撫でてやって、レメクは彼女の手を引いて歩き出した。

話を聞く度に思う。よくぞ生き延びてくれた、と。

そして感じずにはいられなかった。この国に今も色濃く残る、差別と大きな貧富の差を。

現国王アリステラは、それを無くすために常に苦心していた。彼女の在位は二十年を超えるが、そのほとんどの時間が前王の尻ぬぐいに費やされている。

とはいえ、前王は悪王と呼ばれるほどに残虐非道だったわけでは無かった。だが、国を滅びかねないほどに傾けた意味では、れっきとした悪王だろう。

彼は国を統治することに関心を持たなかった。

彼の関心は、もっぱら狩りと後宮の美しい美女達に向けられ、その足が政治の場に向くことは一度も無かったのだ。

諸官諸侯と会うのは華やかな宴の時に限られ、玉座の間は常に主不在のまま、賢明に国を支えようとする官吏達の情報交換場となっていた。

それでも国が滅びなかったのは、ひとえに当時の王宮を仕切っていた大貴族達のおかげだろう。

そうでなければ、ただでさえきな臭かった当時のことだ、あっという間に周辺諸国に滅ぼされていたに違いない。

だが、王宮の歪みや腐敗は止めようが無かった。

頂点に立つ王がそもそも腐っているのだ。下にいる者がそれに感化されないはずがない。横領や賄賂が増えはじめ、下級貴族達がの手この手で王に取り入ってのし上がろうと画策する。

そして彼等のほとんどが、真っ当な国政など欠片も考えていない輩だった。

美しく充実した狩り場を提供する者は褒美を与えられ、美しい女性を献上した者は高官に抜擢された。政(まつりごと)は歪み、上の腐敗は下へと伝播し、人々の暮らしは徐々に悪くなっていった。

少女が暮らしていた孤児院も、その時によからぬ商人の手に落ちていた。

調べでわかったことだが、恐るべきことに、エットーレは生粋のナスティア人では無く、隣国の商人だったのだ。没落したブリル家の令嬢と結婚して戸籍を得た後、教会に多額の賄賂を渡して孤児院の院長に収まっている。

彼は商いで何でも扱った。そしてその中には、幼い子供も含まれていたのである。

また、見過ごせない商品として『火薬』があった。

火薬は、国外への持ち出しを禁じられている第一級の危険物だ。工事現場に使う以外の用途では使用を認められてはおらず、いかなる理由であれ、それを国外に持ち出せば大罪として裁かれる。

それは大陸のどの国でも同じだったが、昨今では少し状況が違っていた。

現在、ナスティア王国の周辺はどこもかしこも不穏だった。内乱に旱魃(かんばつ)、戦争、異形の跋扈(ばっこ)など、その内容も多岐にわたっている。

そして、その中に火薬を戦争で使ったとされる国が挙げられていた。今はまだ噂の域であり、確証はとれていないが、信憑性はあるという。

十三年かけて諸国を巡ってきた名付親(ポテト)の報告に、王宮の首脳陣は頭を抱えてしまった。先代が腐らせた内側の膿を必死に出している

最中に、外側が一気にきな臭くなっているのだ。落ち着いていられるはずもない。

（……戦に……なりますか）

レメクは陰鬱な気分で傍らの少女を見下ろした。

戦になれば国は荒れる。荒れた国の民もまた荒む。

荒みは貧困を招き、貧しさは容易に人を歪めてしまう。

貧しさのあまり盗みを働いた少女は、貧困から脱出した今、人として持つべき倫理と道徳によって、かつての所行を恥じていた。だが、国が荒れれば、彼女と同じ過ちをする者がでるだろう。

戦争になれば、どうなるのか。それを思うだけで陰鬱な気分になった。

人が死ぬ。命が消える。国は乱れ、誰もが辛酸を浴びることになる。

すぐ傍らを歩く少女だって、どうなるかわからない。

やっと……本当にやっと、元気になってきたというのに。

「……おじ様？」

陰鬱な思考に沈んでいたレメクは、おずおずとかけられた声に我に返った。傍らを半ば飛ぶように歩いている少女が、精一杯の背伸びでこちらを見上げている。

「怒ったの……？」

わずかに怯え混じりの問いに、レメクは軽く目を瞠り、ややあって首を横に振った。

「いえ。少し考え事をしていただけです」

まだ不安そうな顔をしている少女に、レメクは眉を下げる。

「あなたのことを怒ったのではありません。……ただ、とても難しいと思いまして」

「難しい……？」

飛びながら首を傾げる少女をひょいと抱き上げて、レメクは小さなその体を片腕に乗せる。嬉しげな声を上げる子供の体は、実際の年よりもずっと幼く小さく、そして軽かった。

「どれほど政を良くしようとしても、なかなか上手くいきません。この街一つですら、片隅に未だ救いきれない人々を抱えています。国が落ち着き、それが長く続けば端々まで手を伸ばせられるのでしょうが……」

「？　『落ち着く』って？」

きょとんとした顔でベルは首を傾げた。

彼女は生まれてからまだ八年ほど。確かに、その間に戦争や内乱などは起きていない。

それのみならず、おそらくこの大陸にあって、ナスティア王国ほど戦と縁の無い国もないだろう。建国時の異常な戦乱以降、乱らしい乱も無く、周辺諸国ともそれなりに上手くつきあっているのだ。彼女がピンとこなくても不思議では無い。

だが、レメクは感じずにはいられなかった。

まるで皮一枚隔てた向こう側に、荒れた濁流があるかのような感覚を。

「そうですね……。ベル。今、私達の前には朝陽に微睡む街が広がっています。ここから見るこの街には、不穏や争乱の気配は無いように思えます」

北区は他の地区に比べて小高い場所にある。視界の開けた場所にさえ出れば、そこからは都のほぼ全容が見渡せるほどだった。

その場所に立って広がる街並みを見渡したベルは、レメクの言葉にしっかりと頷いた。彼女の目には、街は静かに安穏を貪っているように見えた。

「けれどベル、覚えておきなさい。目に見えるものだけが全てでは無いことを。決して表面には見えなくても、その下で蠢くものがあることを。……ベル。あなたのいた孤児院も、ここから見る景色の中では他と同じ平穏の中にありました。けれど、実情は違った。……つまり、そういうことです」

ベルはじっとレメクを見つめ、ゆっくりと頷いた。

「わかった。例えどこか一方からそれ見て、それが平和そうに見え

ても、その中身は違っているかもしれないってことね」
その言葉に込められた理解の重みに、レメクは内心舌を巻く思いだった。
こぼれ落ちそうなほど大きな金色の瞳は、いつだって子供らしい好奇心で煌めいている。かと思えば今のように、深く、そして強い色を宿すのだ。
そんな時、なぜか胸に小波のような揺れを感じるのだが、それがどういう意味のものなのか、彼にはわからなかった。古今東西の知識を頭に詰め込んでいても、初めて体験する『感情』を理解することはできない。そういう意味では、彼はベルよりもずっと幼く、知識も経験も乏しかった。
ただ理解よりも先に唇はほころび、その顔は無意識に微笑を形作る。
「そういうことです。……だからこそ、いくつもの『目』と『耳』をもたなくてはいけません。一つの物事だけで全容を把握できるほど人の視野は広くなく、また理解できるほど万能ではありません。今、この街を見て美しいと思う人は多くいるでしょう。そして、平和だと思う人も。……けれど、確証のない確信は妄信と同じです。少なくとも、路地の片隅に飢えた目をした人々がいることを、私達は忘れてはいけないのです。例えこの場所からは隠れて見えなくても」
ベルの小さな手が、キュッと強く男の外套を握った。襟元を握るそのかつての労働で荒れた小さな手を、レメクはそっと握り返す。
そうして、彼はもう一度街を見渡した。
「もしそれを忘れてしまえば、私達は『人間』では無くなってしまうのですから」

2　突然の訪問者

港区の片隅にあるその店は、看板に錨と蝋燭の絵を描いていた。

錨の絵を描いてあるのは、港から上がってきた品を扱う店の印である。一本の蝋燭は店内で食事が出来ることを表しており、すなわち食品店兼飲食店ということだった。蝋燭が二本ならば宿もやっているという意味で、その場合は一階が酒場、二階が宿というのが通常だ。

その店の看板に描かれた蝋燭は二本。店の名と呼ぶような名前は無く、周囲からはホロムの肉屋と呼ばれていた。ホロムというのは先代の名で、今は二代目のオーランが継いでいる。先代同様立派な体躯の巨漢で、むきだしの二の腕は丸太のようだった。

オーランは今日で三十五の誕生日を迎えるのだが、その三十五年間で最も驚くべき事が起こった。

何の前触れもなく、一人の男が小さな子供を連れてやって来たのである。

食品店を宿に改築したこの店は、厨房が店の奥では無く入り口付近にある。

入り口の横に露天が肉を並べているような作りで、珍しさもあっていつも客の入りは上々だった。通りから商品や厨房が覗けたり、いい匂いを道に漂わせれるのも利点だったのだろう。

宿と食堂を妻子に任せ、今日も入荷したばかりの肉や魚を捌いていたオーランは、突然やって来た黒衣の男に度肝を抜かれた。

およそこんな界隈では見かけない洗練された物腰に、思わず見惚れるほど整った顔立ち。港区に住み様々な人を見てきたオーランにとっても、その男の容貌は驚愕に値した。

美しというだけなら、旅芸人の中には美女と見紛うほどの美男もいる。それに男の自分からすれば、そんな男達などより酒場やミュージックホールの美女達のほうが『美しい』し『魅力的』だった。正直に言えば、男の顔が綺麗でも何の役にも立たない、という気持ちである。多少のやっかみはあろうともだ。

黒衣の男の顔立ちは、整ってはいるが女性めいたものは感じられず、顔自慢の男優のような華やかさがあるわけでもない。

だが、それでもなお圧倒された。思わず口が半開きになった。ついついしげしげと見つめてしまったのも、無理なからぬことだろう。

男の凛とした佇まいは、そこに居るだけで場の空気を変え、朝市でごったがえす路地も、彼のいる場所だけ開けてしまうほどだった。

その男が誰なのか、オーランは知っていた。

面と向かって会ったことは無かったが、遠目に姿を見たことはある。

それに、闇を切り取ったかのような黒髪と、見たこともないほど印象的な色合いの瞳は、伝え聞く噂の通りだった。

王都でその名を知らぬ者はいない大貴族、クラウドール家の当代当主だ。

「あ……あのぅ……」

オーランは反射的に脱いだ帽子を両手で揉み、弱りきった声をあげる。

その前で、おそらく王都で一番有名な大貴族は、隣に立つ子供と一緒に、深々と頭を下げていた。

自分に対して。

「……あの、その、えぇと……旦那……勘弁してくださいやぁ……」

オーランは情けない声を零す。

さっきから周囲の注目は増すばかりだった。

朝市に貴族がお忍びでやってくるのはよくあることだし、時には王族に名を連ねる人々もこっそりやって来ているらしい。

だが、それでも『お忍び』であることをふまえ、こそこそと隠れ動くのが普通だった。彼等は『お忍び』であることを楽しみ、朝市の気配を味わって終わるのである。よほどのことが無い限り、こちらと直に話しをすることは無い。無論、この辺りで売られるものを自ら買おうとすることも無かった。

彼等にとって朝市は買い物をする所では無く、気晴らしに散策する珍しい見せ物小屋のようなものなのだ。

ところがこの男。真っ直ぐ自分の所に来て声をかけてきた。のみ

ならず、いきなり深々と頭まで下げてくる。優れた容姿と相まって、恐ろしいほど目立っていた。

おまけに連れの少女がこれまた凄まじい。

きちんと外套と帽子を被っているが、その髪はほとんど隠していない。淡く紫がかった銀の髪は、世にも稀なるメリディス族の特徴だ。痩せぎすではあるものの、その容貌も十年先が楽しみなほどずば抜けて愛らしい。緊張にきゅっと引き結ばれた口元と、一生懸命な目が特に印象的だった。

しかし、それにつけても目立つ二人組である。おまけにコレはどう見ても謝罪の礼だ。

何があったのかと興味津々な人垣に、オーランは情けなくも泣きそうになった。これはいったい、何の罰だろうか？

「頼みますよ、旦那。本当に頼みますから、顔を上げてくださいや。そっちの嬢ちゃんも」

おろおろと頼み込むと、きっちり揃って頭を下げていた二人が顔を上げた。

真っ向から紫の瞳に見つめられて、オーランはいっそう狼狽える。

「いや、さっき話は聞きましたがね。いや……えぇと、ちょっと今、考えがまとまらねぇですが……いや、その」

なぜか気持ちが落ち着かずに、あたふたと救いを求めて周囲を見る。周囲はサッと視線を外した。

（……コノヤロウ共……）

思わず目をつり上げたオーランに声をかけてきたのは、この様子を宿の中からびっくり眼（まなこ）で見ていた妻だった。

「おまえさん、中に入っていただきなよ。……あの、むさ苦しい所ですが、よろしければ、ど、どうぞ」

ややどもりながら、妻であるアンヌが男に言う。その顔が赤らんでいるのは気に入らないが、気持ちはわかる。オーランの顔もちょっと赤い。

男は感情の伺えない表情で二人を見、足下の小さい少女に視線を

落とした。少女は男の外套の裾を握って、緊張した顔で男を見返す。
目と目でどんな会話をしたのかは謎だが、男は二人に向かって静かに言った。
「もしよろしければ食事をさせていただきたいのですが、かまいませんでしょうか？」
オーランの目と口が極限まで開かれた。

王侯貴族の食べる物と言えば、目玉が飛び出るほど高価な珍味や、めったにとれない魚、または異常に美味い珍しい肉だと思っていた。
オーランはテーブルの上で自分の両手を握りしめ、目の前の光景を凝視する。
テーブルも椅子も長年使っている古びたもので、布で拭いてもそのボロさは隠しようが無い。どちらかと言えばきれい好きなオーランではあったが、新品を購入して揃える気はなかった。使えるものは、使えなくなるまで使うのが彼等の常識だった。
だが今日、買い換えておけばよかったと心から後悔した。
目の前の男と少女が座るには、あまりにも見窄らしかったのだ。
しかも、上等とは言い難いオーランの店には、食器と言えば木の器ぐらいしかない。しかも端っこがちょっぴり欠けている。もちろん、ナイフやフォークといった食器などあるはずがない。
肉は基本手づかみだし、スープは器を口にあてて飲むのが普通だ。
唯一小さい子供用にと隣人が作ってくれた木のスプーンがあったが、大人な男の手にあるとオモチャのようで、どうにも落ち着かなかった。
興味津々で見物がてら店に入ってきた客連中も、なぜか神妙な顔つきで男の様子を見守っている。せっかく妻が給仕した煮込み肉も、彼等の前で手つかずのまま冷めていった。
しかし、それを責める気にはなれない。
なぜならオーランも神妙な顔で見守っている。

「ベル。よそ見しないでちゃんと食べなさい」
子供のご飯を監督している、怜悧な顔立ちの男を。
海草サラダは丁寧に指でつまみ、煮込み肉は大きな塊を懐から取り出した小刀で切り分け、スープをスプーンにすくって上品に飲む。その膝の上で、一生懸命男の真似をする子供は、けれど真似しきれなくてちょっとテーブルを汚していた。
子供が男の膝の上に乗っているのは、体が小さすぎてテーブルの上の物を取れないからだった。酒場であるこの店に子供用の椅子などあるはずもなく、どうしようかとオーランが悩むより早く、彼等はそんな体勢に収まってしまったのである。どう見ても慣れている様子だったが、まさか毎日そんな姿でご飯を食べているのだろうか？
男の膝の上に収まった子供はご機嫌で、時々男の胸に頭を擦りつけている。ちなみに少女の帽子は、邪魔になるからと男の隣に座っていた。
朝食を食べる二人のうち、男はどちらかと言えば小食で、子供の方がその倍以上口に頬張っていた。妻も自分も洒落た料理など作れず、今出しているのも普段店で出ている物と同じだった。多少上品に整えようと苦心した跡はあるが、あまり成功しているとは思えない。二皿目の煮込み肉を食べ終えた少女は、大きなパンの塊を千切っては椀に浸し、肉汁を吸わせてからそれを食べる。パンは焼きたてだが、子供の手にはやや硬い。すると男の手が伸びてきて、何も言わずにパンを小さく千切り、子供が食べやすいように整えてやった。
（……なんとまぁ……）
オーランは感心して嘆息をつく。
パンを食べ終え、スープの最後の一掬いまで綺麗に食べ終えた子供は、満足そうに笑顔で「けぷっ」と小さなげっぷをした。
途端、男の手がぺしりと小さな額を軽く叩く。
「ソレはいけません、と前にも言いましたよ。せめて口を覆いなさい」

げっぷはしてはいけないらしい。
もっと下品なげっぷを毎日のようにしたり見たりしているオーランは、そっと視線を外して「見なかったし聞かなかった」ということにした。……自分の行状もちょっと恥ずかしかったので。
「もうお腹いっぱいになりましたか？」
「うん！　美味しかった！」
輝く笑顔の子供に対し、男の唇が初めてほころぶ。
「よかったですね」
その微笑に、周りは見てはいけないものを見てしまったように視線を外した。
胸を押さえる者がいるのは、動悸をおさえようとしているためだろう。気持ちはわかる。真っ正面でそれを見てしまったオーランなど、とっさに悲鳴を上げそうになったほどだ。
（あの、クラウドール侯が……微笑んだ！！）
先代クラウドール公爵は気さくで陽気な老人だったが、その後継者である現クラウドール侯爵は、厳格かつ冷然とした断罪官として有名だった。
王国でも史上二人目となる断罪官は、庶民にとっては生きた伝説である。
その実際の姿を目にすることは稀だが、誰に対しても丁寧に礼をとり、けれどそれ以上に身分にかかわらず厳しい態度をとる彼は、人々にとって近寄りがたい英雄だった。
ミュージックホールで歌姫を相手に無体を強いろうとした貴族や、この界隈で横暴な振る舞いをしていた大神官を裁いたのも彼だ。
厳格ではあるが庶民の味方。それが現クラウドール侯の評価だった。
けれどその逆も言える。
庶民の味方ではあるが、非常に厳格である、と。
彼が笑ったという話しは今まで聞いたことが無く、表情を変えたとい話もとんと聞かない。かわりに、どんな美女に迫られても眉一

つ動かさなかったという話は非常によく聞いた。歌姫メリッサと高級娼婦ファランナに言い寄られながら、顔色一つ変えなかった話は男達の間で『伝説』となっている。

曰く、ありゃ男じゃねぇヨもったいねぇ、といった感じで。

とはいえ同性趣味なのかと言えば全く違う。女性に対しては礼を尽くすが、そちらは遠慮無く徹底的に撃退するらしい。

くわえて『連れ』として有名なバルバロッサ大神官が語ったことには、あれは女に興味が無いのではなく、女に興味を向ける余裕が無いのだということだった。仕事で忙しすぎるマジメ人間はああなるのだと語られて、聞いた酒場の連中は非常に同情したものだった。

……真偽のほどは確かでは無いが。

しかし、では、目の前の光景は何なのか。

小さな子供に向ける瞳は驚くほど暖かく、冷然とした顔立ちもとても穏やかにほころんでいる。取り付く島も無いと言われ、どんな美女にも表情を一切変えなかったという話なのに、少女に向ける表情だけは優しいのだ。

オーランは思った。もしかして、幼女趣味なのだろうか、と。

しかし色めいたものはサッパリ感じない。むしろ涙が出そうなほど清々しい。

敢えて言うなれば『お父さん』。けれど印象はむしろ『お母さん』。

子供からは傍目にわかるほどの「大好き！！」オーラが放出されているのに。

（……可哀想に……）

満面笑顔で男の胸に頬ずりしている子供に、思わずオーランは同情を寄せてしまった。この小さな少女にとって、男が初恋の相手なのは明らかだ。全身で気持ちを表現している。

しかし、男にはサッパリ通じていないらしい。甘える子供をあしらう父親（母親？）そのものだ。

おそらく、彼女の初恋はやがて淡く消えるだろう。オーランはそ

う思った。
途端、大きな金色の目に力強く見つめられてしまったが。
「……う、美味かったか？」
なぜかギクッとして、オーランは咄嗟にそう問いかけた。
子供は満面笑顔で頷く。
「美味しかった！　あのね、煮込み肉がね、柔らかくて噛んだら美味しい汁がじわーって出るの」
嬉しいことを言ってくれる。
しかし、さっきのキラリと光る目は恐かった。
「ぉ、ぉお、そいつぁよかった。俺のカカアの料理は天下一品だからな！」
ややも引きつる笑顔で返したオーランに、子供は一層笑顔になった。
「うん！　すごい美味しかった！　おじ様の料理の次くらいに！」
酒場が凍りついた。
硬直した人々の中で、当人だろう黒衣の男だけがもぐもぐしながら眉を軽くひそめている。
オーランは尋ねた。頭が理解を拒絶した言葉を。
「……料理？」
誰の？
「うん。おじ様の料理ね、すっごく美味しいの。でも、おじちゃんのおかみさんの料理も美味しかったわ！」
いやいや、誰の？
周りの気配が一生懸命訴えている。
おじ様？　オジサマって誰誰？
そこの黒い人？　と。
「ベル。人様の料理を褒める時は、誰かと比べるような言葉を言うものではありません。それは大変失礼にあたる行為です」
「え。ありゃ……ごめんなさい」
その黒い人に注意されて、少女はしおしおとオーランに謝る。オ

ーランは反射的に天井を仰いだ。
（……料理……）
男が料理してはいけない、などという風習は無い。実際、自分も料理をする。
しかし。しかしだ、何故大貴族で見た目からして高貴そうな目の前の男が、そんなものをしなくてはいけないのだ。というか、あの、クラウドール侯爵が！
「……料理……するんですかい……？」
オーランの声に、もぐもぐしていた男は口の物を飲み込んでから頷く。
「ええ。男たるもの、料理一つできなくてどうするのかと、義父達に教えられまして」
……何かが違う。
だいたい、義父『達』って何だろうか？
「ところで、私もお尋ねしたいことがあるのですが」
疑問を口にする前に男に言われて、オーランは思わず背筋を伸ばした。体が一気に緊張する。
「な、なんでしょう？」
「この煮込み肉。大変美味しかったのですが、調味料は何を使っておいでですか？」
オーランの顎が盛大に落っこちた。

※　※　※

レメクとベルが食事を食べ終える頃には、周りの野次馬達も自分達の仕事に戻っていた。
珍客の様子は気になるが、仕事をしなくては日々のご飯は食べれない。後ろ髪を引かれる思いで彼等が職場に戻るのを、レメクはそれとなく伺っていた。最後の一人が店を立ったのを機に、緊張の面持ちで自分の前に座る男に向き直る。

忙しいかき入れ時に料理雑談をさせたりと、この男には大変な迷惑をかけた。さすがにその自覚のあるレメクは、帰り際に肉の注文をしていこうと心に決めた。もともと、食材を買いに朝市に来たのである。店の肉はどれも美味しかったので、問題は無いだろう。

「……さて、ご店主殿には先程も申し上げましたが」

声を改めて言葉を紡ぐと、なぜか店主はなんとも言えない顔になった。困ったようなその顔に、レメクは言葉を続ける。

「このベルは、貧しかった折にこの店の商品を幾度か盗んだことがあると言っています。例えどのような事情があれ、罪は罪。せめて代金の分働くと申しているのですが、この子の体はかつての貧困により健康を損ない、未だそれは癒えておりません。もしよろしければ、盗んだ物の代価の分、私が支払いたいのですがかまいませんでしょうか？」

緊張に顔を強ばらせながら一生懸命オーランを見るベルに、オーランも迷ったような困り顔で少女を見つめた。

その首が不安げに傾ぐ。

「いや、しかしですな、旦那。こっちの子はメリディス族でしょう？　国が保護してる子供が、なんでまた……。いや、だいたい、俺ぁ……いや、あっしはこんな子が盗みをしていく所なんて、見たこと無いんですがねぇ……？」

ベルは困ったように眉を下げた。オーランも眉を下げる。

かわりにレメクの眉が軽く上がった。

「当時、この子供は孤児院におりました。髪は色の判別がつかなほど汚れきり、体は今とは比べ物にならないほどやせ細っていました。着ていたものも、ボロという言葉ですら言い表せないほど見窄らしいものでした」

恥じるようにベルが顔を伏せた。その頭を撫でてやって、レメクはオーランを見つめる。

「南区三番街の聖ラグナール孤児院。彼女が収容されていたのは、そこです」

オーランはまじまじと少女を見つめた。

この印象的な髪は一度見たら決して忘れなかっただろう。確かに路地裏の子供達が、自分の店先から商品を盗んでいくのは時々見ていた。やせ細り、あれでどうやって生きているのかと不安になるほどに弱々しい子供達だった。

その子供達の中に、目の前の少女のような子はいなかったと思う。だが、髪の色を変え、あの子供達のようにやせ細らせれば……

「……ベル、っつったか……？」

思わず素の言葉で、オーランは目の前の少女に問いかけた。ベルは緊張の面持ちで大きく頷く。

オーランはじっとベルを見た。この愛らしい少女と同じ顔の子供は記憶には無い。だが、もっと飢えさせ、目元を暗くし、ガリガリに痩せさせて……そして金色の目……

オーランは目を丸くした。思わず立ち上がった。

「三番街のガキ大将か！」

「えええ！？」

オーランの叫びに、ベルが驚愕の声を上げた。オーランと同じぐらいビックリ眼になっている。

「ガキ大将！？」

「ああ、ベルだろうが！　悪ガキどもを従えとった！　あのちびっこい子が……！！」

オーランの声に、恐る恐るやりとりを見守っていたアンヌも寄ってくる。そうしてまじまじとベルを見つめ、やはり驚愕に目を剥いた。

「間違いないわ……！　倍以上大きな近所の子供をこてんぱんにやっつけたあのちっちゃい子だわ！」

レメクが目を丸くしていた。

「……ベル？」

なにか非常に問いたげに少女を見つめる。ベルはサッと視線を外した。

「ベル？」
しかし、重ねて問われ、ベルはチラッチラッと男を見上げた。聞くな、聞くな。そんな感じだが、男は退く気は無いようだ。
「ベル？」
再三名を呼ばれて、ベルは降参した。しおしおと男の膝の上で小さくなる。
「べ、別に、悪いことしてたわけじゃないもん」
「喧嘩ですか？」
「違うもん。悪者退治だもん」
ぽこ、大きな拳がベルの頭を軽く小突いた。
「ベル。事実がどうあれ、悪者退治などと言う言葉を使ってはいけませんよ。他者を一方的に悪として扱うことは、自らを正義と自称……いえ、偽証することに他なりません。そうして、自称する正義とは、往々にして傲慢かつ身勝手なものなのです」
「……はい」
しょんぼりと俯くベルに、店主二人は慌てる。
「い、いや、旦那、そっちの嬢ちゃんの言うことは正しいでスぜ？」
「そ、そうですよ。やっつけられてたのは、この辺りでも有名な悪たれでしてね。そりゃあ、もう、孤児院の小さな子を虐めたり、この界隈の年寄りから金品を盗んだりと、とんでもない奴らだったんですから！」
「そのくせ役人の子だとかで、なかなかお縄がかからなくって……ありゃあ、どうにもならねぇってんで、この辺りの界隈でも有名なバルバロッサ大神官に成敗をお願いしたぐらいなんですよ」
「バルバロッサ卿に？」
ベルが目を丸くした。思わず身を乗り出し、ちょっと背伸びしている。
対してレメクは何やら考える顔になった。
「……もしや、それはロー家のことでは……？」
「ええ、ああ、はい、そうです。……ぁあ！　じゃあ、やっぱり旦

那が裁きなすったんで？」
「いえ、裁いたのはルド……バルバロッサ卿です。私は証拠を揃えただけにすぎません」
そう断ってから、レメクは目を丸くしたままのベルを見下ろした。
「あなたは、本当に無茶をしますね。ロー家の子供といえば、一番小さい子でも十五にはなっていたはずですよ」
彼等の悪行はレメクもよく知っていた。喧嘩っぱやいとか、悪ぶっているとか、そういった悪童ではなく、彼等はれっきとした悪党だった。
殴る相手は自分よりも弱い者に限り、強い相手からは身を隠したりへりくだったりする。親の職を利用する手口も卑怯だったが、親はそれに輪をかけて卑怯だった。親子揃って実刑判決をくらったが、彼等の暴力で命を落とした者もいるほどだ。人死にが出た以上、多少のことでは罪を償ったとは言えないだろう。
「いやもう、強いのなんのって。この辺りじゃ、三番街のベルと言えば大抵の悪ガキが大人しくなるボスでしたよ。弱い子や小さい子ははきっちり守るし、強い相手にだって立ち向かうし。しかもちゃんと勝ってくるんですからね」
アンヌの褒め言葉に、ベルはますます体を小さくする。褒めてもらえるのは嬉しいが、喧嘩は喧嘩だ。おずおずとレメクを見ると、レメクはどこか呆れたような顔になっていた。
「……ベル」
「……はい」
「……無茶はしないように」
「……はい」
小言は言わず、かわりに頭を撫でてくれた相手に、ベルはすんすんと鼻を鳴らして抱きついた。レメクの大きい手が、その小さな背を叩く。
「弱い子を守って戦ったのですから、それは責めるべきではありませんね。けれど、あなたは女の子なのですから、怪我をしないよう

にしなくてはいけませんよ」
　よしよしと少女の頭を撫でる男に、店主二人は顔を見合わせ、なんとも言えない笑みを顔に浮かべた。
「いやしかし、あのベルがこの子なら、確かにうちの商品もちょろまかしていった悪ガキでさぁ。つっても……まぁ、なんですかな、うちらにも暗黙の了解ってのがありましてね」
　ビクッとなった少女と、真顔になった男に向かって、オーランはちょっと笑ってみせる。
「店の端っこのほうにゃあ、売れ残った品とか、そういうのを並べておくんでさぁ。ああいう子等に盗まれるのは、大抵そういう品で……言っちまえば、それほど被害があったわけじゃあ無いんで」
「あたしらもね、あの子等のことは気になってたんですよ。この界隈にだって浮浪者はいますけどね、日銭仕事にだってそれなりにありつけてるし、あそこまでやせ細っちゃあいませんよ。けど……あの子等は、小さいし、保護もあまりうけてないし……でねぇ、けど、あたしらだって商売ですし、可哀想ってだけじゃどうにもできないでしょう？　こっちも生きていかなきゃいけないし。だから、施し、って言うんですかね？　そういうのはできないんですが……」
　それでも、せめて、端っこにある少しの食料を盗って行くぐらいなら、目こぼしをしてやってもいいんじゃないかと思っていた。必要最低限だけを、必死の顔で盗んでいく彼等は、あまりにも哀れでならなかった。
「棒持って追いかけるにゃあ、ちっとばかり可哀想でなぁ……」
　なんとも言えない顔の店主二人に、見上げるベルの目がみるみるうちに潤んでいった。
「……ごめん……なさい……」
「いや、あー、なんだ……まぁ、悪いことにゃあ違いねぇんだが、こっちも嬉しくはなかったんだが……それでもまぁ、あれぐらいならな、まぁ、しょうがねぇってなもんだ」
「それにねぇ、立派になってからちゃんとお詫びに来るだなんて。

そうそうできないことだよ、お嬢ちゃん。あの痩せっぽちの子が、よくもまぁ、こんなに立派なお嬢様になって……」

目を潤ませたベルに、感激しやすい質のアンヌも涙目になった。

ほんの数日前。王都の孤児院の大半が兵士に取り押さえられるという騒動が起こった。聞けば王命で行われた一斉粛正であったらしい。暴利を貪り、子供らを虐待していた院長等は全て裁かれ、不当に溜め込まれた財貨は全て王の名の下に取り上げられた。そららは全て新たな孤児院の建設や運営に当てられるという。

その騒動の前に亡くなった孤児も数多く、彼等の慰霊碑は月末頃にそれぞれの孤児院跡地に建てられる。

オーランはそれらの話を聞いた時、目の前の少女達も無事では無かっただろうなと思っていた。正直に言えば、胸が痛かった。言葉を交わしたことは無かったが、必死に生きようとする姿だけは垣間見ていたのだ。できれば無事に育って欲しいと思っていた。

まさか、こんなに立派な人に保護してもらっているとは、思ってもみなかったが。

「よかったなぁ……本当に」

「よかったねぇ……」

小さくて弱い子供達を、誰か助けてくれないかと思っていた。路地でひっそりと冷たくなっている子供らを見ることほど、胸の痛むことは無い。けれど財力の乏しい彼等にできることなどほとんど無く、お情けをかけれるほどの余裕も無かった。可哀想だと思いながら、見て見ぬふりをするしかなかったのだ。

ぼろぼろ泣きだした少女を、アンヌは何も言わず抱き寄せた。ふっくらとした胸に顔を押し当てて、子供は声を殺して泣いている。アンヌの胸はいっぱいになった。

レメクは席から立つと、照れくさそうに目元を拭っている店主を見上げた。ほとんど身長差は無いが、横幅だけは二倍近くあるオーランは、じっと見つめる男にやや焦る。

その大男に向かって、レメクは深々と頭を下げた。

「ちょ、ぅわ、待ってくだせぇ旦那。ちょ……！」
下げられた方はたまったものではなかった。
そんな大仰に感謝されるほど、自分達は大層なことはしていない。見て見ぬふりをしてたぐらいだ、むしろ、何故もっと手を差し出してやらなかったのかと、怒るのが筋だろう。
それなのに、何故、頭を下げるのか。
目を丸くしておろおろするオーランの横で、アンヌもおろおろしている。その、おおよそ綺麗とは言い難い家事で荒れた手をとって、レメクは貴婦人にするようにその手の甲に恭しく口付けた。
「あなた方の優しさに、敬意を」
アンヌの顔はもう真っ赤だ。
開いた口が塞がらないオーランだったが、アンヌの腕の中に抱きしめられた少女の顔を見た途端、思わず吹き出しかけた。ベルは涙目のまま、眦をつり上げ、けれど眉を情けなく垂れさせて黒衣の男を見上げている。
（あたしも！　あたしも！！）
そんな一生懸命な訴えが聞こえてきそうなほどだった。
男はそれに気づいているのか……いや、気づいているのだろう。
なぜか少女から一生懸命目を逸らしている。
「商売人にとっての商品は、全て、彼等の生活のかかった大切な品です。子供達が一時飢えずにすんだかわりに、奪われた店主の側が飢えた可能性もあります。店が大きかろうが品が多かろうが、それに変わりはありません。そして、そういう意味で、窃盗は大罪なのです」
少女から目をそらし、じっとこちらの見つめながらのセリフに、オーランは同意の意味で頷いた。
男の言うことは正しかった。
野に生えたものと違い、誰かの畑や、何らかの収穫物や、店先に並んだ品というものは、それを生産し販売する者にとっては『生きるための糧』だった。

どのような理由であれ、それを奪ってはいけないのだ。それは簡単に、それを扱う者の命を脅かすことになり……時には死に追いやることにもなる。

「旦那。うちの通りに、じいさまとばあさまが商いをしている店があったんでさぁ」

レメクは頷く。その店のことも、彼は知っていた。

「孤児のちっこい子等はね、そこからは盗まなかった。俺ぁ、そのことに、ちっと感動しましたよ。近所の悪ガキどもなんざ、腹が減ったからといっちゃあ、満足に走って追いかけたりできないじいさま等の所から肉とかかっぱらっていきやがった。しかも上等のやつだ。……じいさま等は商売になりゃあせんかった」

オーラン達も見回りをし、時には代理で追いかけまわしてやった。だが、そういう悪党は一人や二人では無かった。

「……旦那。俺ぁ、旦那に感謝してるんでさぁ。あのじいさま等を、屋敷に招いてくだすったのは、旦那だ」

もう二年も前になるだろうか。老夫婦が倒れてしまったのは。

彼等は裕福では無かった。細々と店を切り盛りする、穏やかな人柄の暖かい隣人だった。仕入れた豚や鶏を、一頭まるまる綺麗に解体して、美味い所もそうでない所も美味しく食べれるよう下ごしらえをするのが実に上手かった。オーランの宿の定番のスープも、老婦人の直伝だった。

そんな二人が、近所の悪ガキのせいで難儀をしている。店をもつ者同士、商品を盗まれるということがどれほど大変なことかよくわかっていた。けれど、盗む側はそんなこと考えてもいないのだ。ただ、欲しかった。それだけで盗っていく。

生きるための資源を、ただそれだけで奪っていくのだ。それが、どれほど相手の生活を脅かすかも考えずに。

老夫婦の生活は厳しくなっていった。それはそうだろう。仕入れる豚や鶏の値段だって安いものではない。盗まれれば盗まれるほど、赤字になる。彼等の値段設定は買い手に親切だったから尚のことだ。

かといって値上げをすれば、今まで彼等の所で買い物をしていた貧しい人々の手が届かない値段になってしまう。彼等は困った。困ったが良い案もなく、ただ貧しくなっていった。

そうして、倒れたのだ。

「旦那が拾ってくださらなかったら、あン人等は今頃墓の中だったかもしれねぇ。俺ぁ……あんときばかりは本当に、なんつーか……感激っつーんですかね？　しましたよ。いや、そりゃ、前から噂ぐらいは知ってましたがね」

路地で蹲る人々の中に分け入り、彼等が自立して生活できるよう、仕事や居場所を探してくれる人。忙しい中でも路地裏に踏み入って、倒れている人を教会に連れていってくれる人。

出会えればそれだけで僥倖だった。他の誰も、そこまで親切にはしてくれないのだから。

「あの御夫婦でしたら、うちの屋敷でも重宝していますよ。あの人達の解体技術は実に素晴らしい」

「へへぇ、やっぱり今も捌いてるんですかい」

「ええ。この間は、牛を一頭つぶしてもらいました。牛なんて初めてだということで、なかなか気合いの入った解体を見せてくれましたよ」

「うし？　ですかい？」

「ええ。ご存じではありませんかね？　こう、体の大きな生き物で……」

さすがに肉も商う店主なだけあって、オーランも牛と呼ばれる生き物には興味津々だった。噂には聞いたことがあるが、未だにこのあたりでは見かけない生き物だから尚更だ。

「いずれ羊にかわる肉の主流となる可能性があります。馬と同じぐらい大量の肉がとれますし、味も良い。それに、乳牛からは大量の乳がとれます。あれだけでも沢山放牧する価値がありますね。今は乳も値が高いですから」

「そ、そうなんでさぁ、旦那！　山羊の乳は美味ぇがなにしろ高ぇ

から……病気になった時とかに、栄養のあるものをって思っても、どうにもならねぇんです」

「うちの領地にも放牧していますが、何分そう急激に数が増えるような生き物ではありませんからね……昨年も西の国から三十頭ほど購入しましたが、数が増えるのにどれだけかかるか……」

「いっそ国を挙げて食料対策に大量入荷するってぇのはどうですかね？」

「一応、案には挙げているんですよ。ちょうど領地で受け入れてもいいという人もいますから、そちらにも協力してもらう手はずです。増えればこれからの食料事情も変わってきますからね。あと、鶏も増やしたい」

「いいですなぁ！　卵も肉もまだ品薄で……！」

盛り上がり始めた男二人に、置いてきぼりをくらった大小の女二人は顔を見合わせる。

そうして、どちらともなくくすくすと笑い出した。

彼女等の目には、将来の展望を語る二人の男は、どこか可愛らしく見えたのだった。

3　幸せの形

ベルは意気揚々と街を歩いていた。

抱えた大きな麻袋のせいで、前は非常に見えにくい。だが、とりあえず隣に大好きな人がいるかぎり、自分の行く先は安心だった。匂いを辿れば、ちゃんと同じ場所にたどり着ける。

その大好きな相手は、自分の倍以上ある麻袋を二つも抱えて歩いていた。中に入っているのは肉や野菜で、朝市で買い込んだ品である。

「ねぇ、おじ様？」

見えない視界にえっちらおっちら歩いていたベルは、興味津々で尋ねた。

「お屋敷の中に畑があるって言ってたのに、どうして朝市で買い物をするの？」

ベル自身未だその目で見てはいないが、クラウドール邸の屋敷には大きな畑や放牧地があるらしい。野菜や肉の類もそこで手に入るらしいのだが、なぜか今日、レメクは朝市に向かっていた。

「作っていない野菜もありますし、なにより香辛料の類が足りません。それに、肉をそんなに毎日食べていては、うちの羊や山羊や牛達はすぐにいなくなってしまいますからね」

ベルは首を傾げた。彼女の食卓には、毎日のように肉が並んでいたのだ。

そうして目を丸くしたのは、おそらくその意味に気づいたからだろう。彼女は非常に頭の回転が速かった。

「あの……おじ様、あたし、そんなに贅沢しないから……」

おずおずと言ってくる少女に、レメクは思わず口元をほころばせる。

「あなたは、私に対して遠慮する必要はないんですよ。あなたはまだ子供であり、私は大人なのですから」

「……でも」

「私の保護下にある以上、あなたは私の……そうですね、言うなれば家族です。家族である以上、遠慮は不要ということです」

家族、という単語にベルは顔を輝かせた。目がきらきらと輝いている。

「あたし、いい奥さんになるからね！」

「……一応、今は子供でいてください」

「いい奥さんになるんだから！」

「……」

レメクはそっと視線を外した。

（……どうしましょうか……）

ちょっぴり顔が不安に曇る。

「とりあえず、その話は後々に置いておいて」

「あ。猫」
「話は聞きなさい。流してもいいですが……と、おや」
ベルの声に視線を同じ場所に向けたレメクは、塀の上にちょこんと座る赤茶色のネコを見つけて目を見開いた。
「モンプチではないですか」
「……モンプチ？」
ベルが首を傾げる。茶虎の猫は「にゃあ」と声を上げた。
「義父がもう着いたんですか」
猫は「るるぅ」と喉を鳴らす。レメクは真面目な顔で頷いた。
「ありがとうございます。後でお礼を持って行きましょう。ひとまず先を急ぎますので」
言うや否や麻袋から買ったばかりの魚を取り出す。やや大きめのそれを差し出すと、赤茶色の猫は目を煌めかせてそれを口に銜えた。そうしてとっとと走り出す。
「……」
ベルはそれをじーっと見守った。レメクはそんな彼女を見下ろし、大まじめな顔で言う。
「実は今日、義父が来ることになっているんです。……その前に食事の準備を整えておきたかったのですが、仕方がありませんね。とりあえず、急いで戻りましょう」
そう言って歩き出す相手の姿を追いながら、ベルは先程の赤茶色の猫を思い出していた。どこかで見た猫だと思う。何度か見たことがある気がする。
「……おじ様」
ベルはそっと声をかけた。レメクは振り返らずに「なんです？」と問い返す。
「猫とお話できるの？」
「？　できないんですか？」
レメクは不思議そうな顔で振り返った。ベルは首を横に振る。
「ううん。たまにしてる」

レメクは同意の意味で頷いた。
その様子にベルは少しだけ眉を下げる。彼女は知っているのだが、彼は知らないのかもしれない。
なぜなら、そんなことができるのは今まで彼女ぐらいであり、孤児院の誰も、猫や犬と会話をすることはできなかったのだ。
（……レメクはできるんだ……）
ベルはちょっと口元をほころばせる。
なぜかは知らないが、とてもとても嬉しかった。

※　※　※

「や。お帰りなさい、二人とも」
屋敷に帰ると、なぜかエプロン姿の男が出迎えてきた。
凄まじい美貌の男だった。おそらく相対した誰もが目を剥き、半数以上がその場で昏倒すること間違いなしな美貌である。あまりの美しさに、直視しつづけることすらできないほどだ。
だが、そういった本来の反応とは違う反応を返すのが、今相対している二人である。
「お義父さん……またですか……」
「わぁ、ポテトさん。そのエプロン可愛い！」
ふりふりレースのエプロンに、レメクのほうはげんなりと項垂れ、ベルのほうは目を輝かせた。
ふふふふふ、とポテトは笑う。
「ご主人様がプレゼントしてくださいましてね。すごく嬉しそうな顔で着ろと言ったくせに、きちんと着用したらすごく残念そうな顔になるんですよ。なんでしょうかねぇ、あの反応は」
しかし、それを語る彼の笑顔は素晴らしい。計り知れないほどに嬉しそうだ。
「……着るのを拒否する姿を見たかったのではありませんかね……？」

普通、男がふりふりレースのエプロンなど好んで身につけるはずがない。おそらくアウグスタはポテトが嫌がる顔を見たかったのだろう。それか、怒る顔か。……しかし、彼女の企みはあっさりと潰えてしまったのだ。

「この程度のものを着こなせなくてどうしますか。家事は男の嗜みですよ」

「……いえ、もう何も申しませんが……」

この義父に育てられた自分は、もしかして人として何か違う常識をもってしまったのでは無いだろうか。少し心配になったレメクだったが、ポテトの次に義父となったステファン老も似たような教育方針だったのだ。ならば、これが世間一般で間違いないのだろうと思いなおした。

彼は知らない。

その二人がちょっと世間とは違っていることに。

そんな彼の横で鼻をヒクヒク動かしていた少女は、目を瞑ってうっとりと呟いた。

「良い匂い……」

彼女のお腹が「きぅるるる」と鳴き始める。先程食べた『朝食』はすでにそこには無いようだ。……どんな消化速度だろうかと思いつつ、レメクも軽く匂いを嗅ぐ。

「ずいぶんと手の込んだ料理ですね。カボチャのスープと海鮮サラダとローストビーフと鶏の香草焼きですか」

「……なぜ一嗅ぎでわかるんですか……」

なぜ分からないんですか？　と言いたげな目で見返されて、ポテトは呆れた顔になった。意見を求めるようにして小さな少女の方に視線を向けるが、こちらからも同じ「わからないの？」と言いたげな目でこちらを見ている。

（嗚呼……似たもの夫婦……）

ポテトはしみじみと降参した。

「まあ、とりあえず、玄関先で話をするのもなんですから。とりあ

えず中に入って食事にしませんか？　というか、まずは挨拶ですか」
　ベルとレメクからそれぞれ荷物を受け取って、ポテトは穏やかに笑う。
「お帰りなさい、レンさん、お嬢さん」
　レメクはどこか面はゆそうに目を細め、ベルは顔を輝かせて声を揃えた。
「「ただいまです」」

　レメクの購入した食材は全て貯蔵庫行きとなったが、かわりに貯蔵庫にあった食材はあらかた消えていた。
　もともと残り少なくなっていた所にポテトという料理人がやって来たため、残っていた食材もほぼ使いつくされてしまったのだ。
「美味しいぃいッ！」
　舌鼓をうつ少女を時折見守りながら、二人はそろって台所で買ってきたばかりの食材を捌き始める。大きな肉の塊を処理しやすいように手早く捌いて、ポテトはくすくすと笑った。
「それで、そのお店の方に謝りに行ったわけですか」
「罪から逃げては前に進めません。せめて償える類の罪であるのならば、今できる時に償うべきですから」
　償えない罪を抱える男二人は、そろって視線を下に落とした。
　野菜室に買ったばかりの青菜を入れたレメクは、視線を下に落としたまま、嘆息をついて言葉を続ける。
「けれど、店主もなかなかの人物でしたよ。あの悪環境の子供達が、それでも飢え死にするのを免れたのは、きっとああいった人物が影ながら守ってくれたからでしょうね」
　店主達は「自分達は何もしていない」と言ったが、そうでは無いとレメクは思っていた。
　もし、彼等がかの孤児院の院長達のように、自分の利益だけしか見ていなかったら。そうしたら、盗みをはたらいた子供達は、きっ

と悲惨なことになっていただろう。飢えて体のやせ細った子供達は、それほど足が速くは無い。それに、大人達が本気になり、彼等を捕まえようとすればそれはそんなに難しいことでは無いのだ。盗んだその日でなくても、力無く座っている時にでも見つけて報復すれば良いのだから。

店主達は、そういった恐ろしい行為を一切しなかった。可哀想だが何もできない、と言う言葉の裏側で、それでも、少しだけでも目こぼしをして、彼等の生きるのを助けてくれたのである。

それが優しさでなくて何だろうか。

思いやりでなくて、何だというのだろうか。

「……不思議な気分になりましたよ。この国には、そうやって、弱い子等を守ってくれる人達がいるのだと思うと」

レメクの声に、ポテトは目を細めた。

彼は気づいていない。それが感動だということに。

長い年月を感情を排して過ごしてきた彼だったから、その心の動きが何という感情なのか、なかなか気づけないのだ。

「良い人達で良かったですね」

「ええ」

頷くその顔は穏やかに微笑(わら)っているのに、きっと微笑(わら)っている本人だけは自分の感情や表情に気づいていないのだろう。そう思うと少しおかしく、そして少しだけ胸に痛かった。

「ところでレンさん。お嬢さんの食事が終わったら、離れに彼女を連れていってあげませんか？　皆さん、会いたそうにしてましたから」

レメクはベルと顔を見合わせる。口の端に香草をくっつけたまま目をぱちくりしていたベルは、一度レメクとポテトを見比べ、輝く笑顔で言った。

「あたしも行きたい！」

レメクに否やは無かった。

クラウドール邸の長屋の住人は、レメクとベルの訪問を心から喜んだ。

特にベルは持ち前の愛らしい動作もあって、彼等の愛情をたっぷりと注がれていた。彼等はレメクのことも愛していたが、なにしろ相手はもう大きな大人である。まさか抱きしめたりかいぐりかいぐりするわけにはいかない。

「坊。飯喰ったか？」

「坊。喉乾いたか？」

せいぜいビスケットや蜂蜜酒をいそいそと持って行くのが精一杯だった。

それすらも、レメクにはなんとも言えず面はゆいものなのだが。

「……すみません。もう三十二になりますので、坊はよしていただきたいのですが」

言っても聞いてもらえない。

ステファン老がいたころからの住人にとって、レメクは未だに子供なのだった。レメク自身が屋敷に招いた人々は、もうちょっと遠慮しているが、それでも感化されているらしい。

「若旦那、よぅ来られたなぁ、よぅ来られたなぁ」

「待っとったで、若旦那ぁ」

自分の身分とか職業を忘れそうな勢いだ。わらわらと寄ってくるお年寄りに、レメクは何と反応していいかわからず、困り顔で突っ立ってしまった。嫌では無いのだが、なんとも言えずひたすら面はゆい。

ポテトから見れば、それは恥ずかしがっている、ということなのだが。

（いい傾向ですね）

一応部外者として、ポテトはひっそりとその場で気配を殺して見守っていた。常には驚くほど存在感のある男だが、闇に溶ければ剣の達人すらも彼を見つけることはできない。

そうやってこっそり隠れていたのだが、笑顔でちょろちょろとお年寄りの間を走り回っていた子供にはあっさり見つかってしまった。
「ポテトさん、見て見て！　これ、すごい綺麗なのっ」
彼女が見せてくれたのは、もらったばかりの綺麗な石だった。庭を耕している最中に出てきたという石は確かに綺麗な色をしている。
（……これは琥珀ですねぇ……）
ポテトはにっこりと微笑んだ。クラウドール邸の敷地からは、こういったものが時折ぽろっと出てくるのだが、誰もそれを取り合ったりはしなかった。彼等はすでに、世の中の欲といったものと無縁の場所で生きているのだ。
「よかったですね」
にこっと微笑んだポテトは、そこで自分を見ているお年寄り達に気が付いた。
しまった。自分は隠れていたはずなのに。
「ぉおー、べっぴんさんが来とる、べっぴんさんが来とる」
「おー、どっかで見たことがあるような無いようなべっぴんさんじゃ」
「よー来たなぁ、よー来たなぁ」
「えー、儂ぁ目ぇ見えんからわからん。そないにべっぴんさんなんかぁ」
「おおべっぴんじゃあ、胸ないがのう。残念じゃなぁ」
「いやでもよー来たのぅ。ほれ、飴ちゃんやろけ」
わらわらとたかられた。思わず反射的にレメクを見る。
レメクは「様をごらんなさい」と言わんばかりの目でこちらを見ていた。どうやら先程様子を見守っていたのを怒っているらしい。微妙に嬉し恥ずかしをしてたくせに、怒るとは何事だ。むしろ今自分を助けてほしい。一応名前繋がりの親子だし。
なぜか掌に押しつけられた沢山の飴を持ったまま、ポテトは「はぁ……」と力無く項垂れた。なぜだろう。彼等には逆らえない。
「いや、いいのう、やっぱり。若い人等が来てくれるのは……」

ポテトはそっと視線を外した。自分は彼等よりも年上だ。
「眼福じゃのぅ、いや、ええもん見たわぁ。三人ともべっぴんやからなぁ」
レメクとベルはそっと視線を外した。彼等二人は、自身を『べっぴん』とは思っていなかった。
「いやぁでも、どうなすったんじゃ？　珍しぃ。儂らン所に来るのは、あんまり無いことじゃが……？」
長屋の中では長老格の男にそう問われて、レメクは反射的にポテトを見た。行こうと言い出したのはポテトなのだ。
「実は少々レンさんとこみいった話をしなくてはいけませんでして。けれど、お嬢さんだけを一人で部屋に残すのは可哀想でしたから、皆さんの所にお邪魔させていただけないかと」
そつのない笑顔でそう言ったポテトに、お年寄り達は一斉に顔を輝かせた。
「そりゃあ大歓迎じゃ！」
「嬢ちゃん、何するけ？　積み木け？　それとも何か食べるけ？」
わっと全員がベルに向かった所で、解放されたポテトはぐっと握り拳をつくる。よし！　と言いたげなその相手に、レメクはあきれ果てた顔になった。
「……お義父さん……」
その一言にものすごいいろんな意味を込められてしまった。
ポテトは知らん顔をする。
「さ。とりあえず、我々は大人な話し合いをするべく席を外しましょうか」
「大人な話し合いをするのに、その手のバスケットは何ですか」
「え。紅茶とスコーンとサンドイッチです。いい天気ですから、そこらをまわって四阿にでも行きましょう」
「……それは普通、ピクニックと言いませんか？」
ポテトはにっこりとそれを黙殺した。

クラウドール邸には、大小七つの四阿があった。

上空から見ると長方形をしているクラウドール邸の敷地は、、南側に森のような木々の連なりがあり、中央下方に本邸がある。

中央上方は西側に湖があり、東側に田園と平屋建ての建物が一つ。湖からは小川のような水路が引かれ、東の平屋建てと北の放牧地へそれぞれ水を通していた。

ポテトがレメクと一緒に訪れたのは、その湖の畔（ほとり）に建つ四阿である。

遙か昔に建てられたその四阿は、美しい白亜で作られていた。その建築様式は、驚くことに王城のそれと同じである。

元々クラウドール家は、王族の血にも連なる大貴族だった。

先代のステファン老など、前王の叔父であり、当時王位継承権第二位のれっきとした『王族』だったのだ。この屋敷に隠居する前に王位継承権を放棄したが、王都に近い広大な土地を所有する大貴族であることには違いなく、その地位も最高位の公爵だった。

クラウドールの家を継ぐ者は、そういった者が非常に多い。

例外として挙げるのならば、初代のクラウドール公爵だろうか。後に女王の子を後継者に迎えたその人物は、王国の要とも呼ぶべき賢者であり、そして、当時において最強の紋章術師でもあった。罪と罰の紋章を宿すほどに。

ナスティア王国に燦然と名を残すその人物こそが、レメクの前に『断罪官』であった唯一の人。王宮において秘中の秘と呼ばれる偉人、暁の賢者だった。

史上二人目の断罪官であるレメクが、ステファンの後継者としてクラウドール家に養子に入ったときも、それを理由に納得する者が多かった。

それでもステファン老と血を同じくする血族達の中には、難を示す者も多くいた。当然だろう。れっきとした王族として公爵位をもっていたステファンと違い、当時のレメクは誰の子とも知れぬ子だ

ったのだ。
唯一、第一位の王位継承権を持つアリステラ王女と、王宮の最大の謎と呼ばれるナイトロード卿の庇護下にあったが、それ以外は、ほとんどの者がその存在を知らなかったのである。出自など言わずもがなだ。
だが、偉大な老公の死後、ステファンの所有地をそのまま継承したりせず、公爵位と所領を王に返上したことで、反発者の多くは納得した。
今では自身に授けられた侯爵位と王都の屋敷だけを受け継いだ彼を、無欲の人だとする者がほとんどだ。
むしろ、さすがの彼等も思うところがあったらしい。
義理とはいえ老公の子であったレメクが、全くの領地無しでは『クラウドール』の名を継ぐ者の沽券に関わると思ったのだろう。頼むからどこかの領地を治めてくれと言いだし、結局は王と宰相を巻き込んで協議し、先代が持っていたのとは比べものにならないほど旨味の少ない土地を拝領することになった。しかもそんな土地を希望したのは本人だと言うのだから、レメクという男の無欲さに王侯貴族達は呆れたものだった。
当時のあれこれを思い出しながら、ポテトはその優雅な四阿に腰を下ろした。
かつてこの四阿が建てられた時、このあたりは寂れた場所だったらしい。
王都は今よりもずっと小さく。今の北区のあたりは今の王城の築城の後に貴族達によって拡張された区域なのだ。現クラウドール邸の敷地は、かつての王都から離れた場所にぽつんと建つ『離れた小さな村』のような場所だったのである。
「あれから何年が経ったのでしょうね」
白亜の柱を撫でながら呟くと、テーブルの上にバスケットの中身を並べていたレメクがそっけなく答える。
「あなたが突然姿を消してからは、だいたい十三年ですよ」

「……いやぁ、何か棘がありますねぇ……」
ありますとも、と言いたげな目で見られた。昔なら何の感情も無く見上げられただろうが。
それを思うと、そんな眼差し一つがとても嬉しい。
くすくす笑う義父に、彼の内心を知らないレメクは嘆息をついた。
「陛下のことも少しは考えてください。義父上が亡くなった後、王宮はいろいろ大変だったんですから」
「おや。ベラはとっくの昔に引退してたはずですがね？」
「……引退はしていても、影響はあります。おわかりのはずでは？」
含みをもたせて言われた言葉に、ポテトはひょいと肩をすくめた。
レメクと同じテーブルにつきながら、視線を遠くに馳せて呟く。
「ですが、私のような者が長々と傍にいるのは、あまり良いことではありませんしね」
「それは言い訳でしょう、お義父さん。あなたが義父上を親友として大事にしていたことは陛下も私も知っています。傷心旅行に行くなら行くで、せめて旅先から手紙の一通でも出すべきです」
ズバッと言われて、ポテトは恨みがましくレメクを見た。
違うとは言い難い上に、レメクの言は正しく正論だった。
だいたいにして、自分のような者が『契約者』を放置してどこかをフラフラすること自体、本来あり得ない。
「……呼ばれれば戻るつもりでしたよ」
とりあえず、言い訳がてらそう言ってみる。
けれど、おそらく自分の他に誰よりも女王を理解している男は、嘆息混じりにこう言った。
「呼ぶはずが無いでしょう。あなたが落ち着くまで。あの方は、そういう方です」
ポテトは片手で顔を覆ってしまった。
まったく。どうしてこう、この子達はこちらの追いつめてくれるのか。
「……人というのは存外強いのだと、思い知りましたよ……本当に」

強く優しく気高いアリステラ。
初めて会った時から、その黄金の輝きに射抜かれていた。
その少女を経由して預けられた小さな赤ん坊も、驚くほど沢山のものを自分に与えてくれた。
運命にからめとられてしまったのは、いったいいつだったのか。
原初を問えば真っ先に浮かぶのは黄金の少女の眼差しであり、次に浮かぶのは深い悲しみと孤独を抱えた紫の瞳だった。
比べることはできない。愛情の種類が違いすぎる。
けれど等しく、自分にとって最愛の人。
そして、その二人を通して知り合った最初で最後の『人』の友人は、十三年も前にいなくなってしまったのだ。
「恐ろしくなったのかもしれませんね。初めて……人の死という現象が」
喪うという事実に打ちのめされたのは、いったいいつ以来だったろうか。
もうずいぶんと遥かな昔、この身がまだ人であった最後の頃にまで遡るその記憶が、かの友人の死で一気に蘇った。
恐ろしかった。そう……恐ろしかったのだ。
死というものをよく知る自分だからこそ、あまりにも恐ろしかった。
愛おしい者がいなくなるという現実が。愛している相手が……それも、今、すぐ近くにいる『最愛』と言える相手がいなくなるという、未来が。
「逃げたところでどうしようもありませんがね。時は決して待ちませんから」
ポテトの声に、レメクは目を伏せた。
時は待たない。それは、かつてレメクもベルに語った言葉だった。
何をしていたも進む時間という名の流れは、例え目を背け、逃げたとしても決して変わらない。ただ、進む。
そうしてその先に、生き物は死に至るのだ。

「自分という存在の弱さも思い知りましたよ。けれど、大陸を歩き通した十三年という月日は、無駄では無かったと思います」
そう、無駄では無かった。
離れたことでわかるものがあり、また、初めて訪れることでわかるものがある。
ナスティア王国のこと。女王のこと。名付け子のこと。他国のこと。
そしてその全ては、無駄では無いのだ。
「これから先、様々なことが起こるでしょう。運命は動き始めましたから」
ポテトの言葉に、レメクは眉をひそめる。
「回避する方法は」
「あります。ですが、難しい。人というものは、全てがあなたのように倫理を備えているわけではありません」
レメクは目を伏せる。だが、次にこちらに向けてきた目には、強い力があった。
「ですが、人が人である以上、言葉によって回避できるものもあるはずです。力で相手を服従するしか術がないのであれは、それはただの畜生です」
その通りだった。
だが、それがやや理想めいているのは彼も承知のはずだ。
人は畜生では無い。だが、それと同時、平気で自ら畜生に落ちるのもまた、人という生き物だった。
「……あなたは、人のもつ可能性を信じるのですね」
「信じずして、なぜ人で在ろうなどと思えますか」
「同じ言葉を喋っていても、言葉の通じない者も多くいますよ？」
「そのときは、そのときです」
一応、開き直る前向きさも持っているらしい。一つの方法に頑なに固執することは、妄信や執着と同じく愚かなことだった。変わらなくてはならないことがあるように、変えなくてはいけないことも

世にはあるのだ。
だが、
「けれど、それでも最後まで諦めたくはありません。諦めればその時に、全てを失うことになるでしょう。例えそれが、自分勝手な自分のためだけの理想であっても」
その言葉に、ポテトはただ眼差しを細めた。
言うようになった……そう思った。
昔はどうでもよさそうだった。何かあっても、ただ「そうですか」で終わるような子供だったのだ。世の中を冷静な眼差しで眺めながら、全てを諦めているような子供……それがレンドリアという子供だった。
それが、どうだろうか、この変わりようは。
彼の変化がいつ始まったのかはわからない。だが、決定的な理由は最近にあるだろう。
目に宿る強い力は、命の尊さを何よりも尊ぶものだった。失いたくないと思うものが無ければ、その強さを持つことはできない。
（……嗚呼）
ポテトは微笑んだ。
（……あなたはようやく、手に入れたのですね）
あの時も思ったのだ。運命とはかくあるべき、と。
レンドリアが幼い子供の頃に諦め、けれど心の奥底で長年求め続けていたもの。
それが予言された導きの子と重なるなど、これを運命と呼ばずして何と呼べばいいだろうか。
（私は本来、運命などという言葉は好きでは無いのですがね）
少し皮肉にそう思う。けれど、他に言いようがないのだから仕方がない。
しかしそれにしても、相変わらずの生真面目さが少し可笑しい。
ちょっとぐらい、愚かに正義とかいう言葉を振りかざしてみてもよかろうに。そうできるだけの力と知識をもっているくせに、決して

そんな言葉を使わない愛し子の性根が、ポテトにはたまらなく嬉しかった。

（どうも私達は、子供を愛しすぎたようですね、ベラ）

懐かしい友人に心の中で語りかける。

相手は決して何の答えも返してはくれない。それはそうだ。その人はもういなくなってしまったのだから。

けれど、心の中にはずっといる。

きっと、愛おしい人々の心の中にも。

ポテトは思いを噛みしめた。幸せだと思った。

十三年他国を巡って改めて思い知ったのだ。自分の幸せがどこにあるのかを。

アリステラとレンドリア。

誰よりも大切な人のいるこの国が、この場所が、自分にとっての『幸せ』であることに。

心からの微笑みを口に浮かべた所で、ふと走ってくる小さな体に気が付いた。

ポテトにとっては真正面だが、向かい合うレメクにとっては真後ろだ。だからまだ気づいてはいないらしい。息せき切らせて走ってくるのは、どう見ても長屋のほうに置いてきた少女だった。

「おや」

思わず声をあげてしまった。

その声にレメクも気づく。ポテトの視線を追って、彼は走ってくる少女に気づいた。

「ベル？」

反射的に立ち上がって迎えに行きかけるのに、ポテトは口元を緩ませた。

「まぁまぁ、レンさん。相手が一生懸命こっちに向かっているのですから、悠然と待ってあげなさい」

「は？　いえ……ですが、あんなに急いで来るなど、何かあったのかも……」

「あんなに顔を輝かせて、ですか？」
きらきらと瞳を輝かせ、頬を紅色に染めて駆けてくる少女に、レメクもしぶしぶと腰を下ろし直した。それでも迎えに行きたそうにうずうずしている様子に、ポテトはそっとあらぬ方を向いて口元を押さえる。吹き出しそうだ。
「……レンさん。私は今、なにやらすごく幸せですよ」
「はぁ？」
笑いを堪えて言うポテトに、レメクは素っ頓狂な声を上げる。ポテトの腹筋が痛んだ。襲ってきた笑いの発作を堪えるのが、これほど苦痛だとは思わなかった。
レメクの素っ頓狂な声など、聞けるとは思わなかったのだ。
そうこうしている間にも、少女は四阿に到着した。はぁはぁ息を乱しながら、過たずレメクのいる椅子によじ登り、一生懸命息を整える。
「何事です？」
「ん……あの、ね。今、ね。ゲーム、してるの」
必死に息を整えながら、ベルは目を輝かせてレメクを見た。
「それでね、今、ゲームを果たすためにね、来たの」
意味がわからない。
二人はそろって顔を見合わせた。
その瞬間、ベルが背伸びした。勢いよく、そして有無を言わさず、レメクの頬にチュッと唇を押しつける。
彼女は鮮やかな笑顔で言った。
「おじ様のほっぺに『大好き！』ってチューしてくるのが、あたしの役割なの。じゃあ、報告してくるね！」
そしてポテトは目撃証人であるらしい。
バイバイと手を振って駆け去る相手に、とりあえず音のない拍手を惜しみなく送ってから、ポテトはゆるゆると笑みを浮かべた。
レメクを見れば、レメクはテーブルに撃沈してしまっている。
それはそうだろう。あれは大変効いたはずだ。

離れている自分にまで心の声が届いたほどなのだ。直接くらったレメクには大打撃だっただろう。

「大好き！！」という、全身全霊の思いなど。

ポテトはトントン、とテーブルを指で叩いた。

撃沈していたレメクが嫌々顔を上げる。

そのやや赤らんだ顔に笑みを深めつつ、ポテトはこう問いかけた。

ただ一つ、間違いようのない確信を胸に。

「ねぇ、レンさん。幸せの形とは、どういうものだと思います？」

番外ＳＳ　【　Ｌａｄｙ　Ｂｅｌｌ　】（前書き）

※この小説は、連載中の【対オジサマ攻略法！】の、改題アンケートに端を発する番外編ＳＳです。
主人公はレメクです。
別名。レメクのときめき編。

番外SS 【Lady Bell】

「幸せそうな寝顔ですね」

そう笑い含みに言われたのは、大広間に戻って少し経った頃だった。

王宮最大の収容人数を誇る大広間。

通称『決戦の間』と呼ばれるそこは、現在煌びやかなダンスホールとなっている。

天には十ものシャンデリアが煌めき、色彩溢れる天井画の下では、色とりどりの衣装が揺れていた。

奏でられる音楽は、王国屈指の楽団によるもの。それらの中に笑いさざめく人々の声が混じり、音楽と声に満たされた広場は、溢れる熱量で眩暈がするほどだった。

壁側のソファに避難しながら、レメクは深い嘆息をつく。

人の垣根を抜けた時には安堵のため息が漏れてしまい、そのことにわずかに自己嫌悪する。

そんな中、腕の中の幼い少女は心底幸せそうな顔で眠っていた。

ようやく丸みをおびた頬に、まだまだ小さくて短い手足。あまりにも珍しい紫銀の髪に、今は閉ざされている金色の瞳。

体は小柄で、正直なところ、今日で九つになるとは信じ難かった。

少女の名前はベル。

何の因果か、雨の日に自分と出会い、一族の掟に従えば九年後に妻になる予定の子供である。

「……なにか良い夢でも見てるんですかね」

満面に笑みを湛えた少女の寝顔に、レメクも思わず笑みをこぼす。

ほんのつい先程まで、隣にいる自称『魔法使い』に『人形（マリオネット）』の魔法をかけられていた少女は、その反動のために昏々と眠っていた。

にもかかわらず幸せそうな笑顔なのは、その魔法の時間が楽しかったからなのだろう。
レメクには一足飛びに大人の姿になることが、幸せなことだとは思えなかったのだが。
そう口にした途端、なぜか隣のヒトが盛大にため息をついた。
「乙女の夢を理解していませんねぇ」
「……乙女？」
不審そうに呟き、小さな手でこちらの服を握り締めてくる少女を見下ろし、レメクはもう一度口を開いた。
「……乙女？」
「なんです。その異論アリアリな声は。こんなに可愛らしいお嫁さんを前にして」
「まだ結婚していません。……だいたい、乙女という年齢では無いでしょう、ベルは」
「おや。ご存じない。女性は何歳でも乙女なのですよ。それこそ物心つく前から、年を経て命の終わる瞬間まで。つまり、うちのご主人様も乙女です」
「……向こうから恐ろしい気配が向けられてますよ、お義父さん。頼みますから、言動には気をつけてください。……地獄耳なんですから」
遠くから即座に放たれた必殺の一瞥に、なぜかうっとりしてる義父。
その、自身の名付け親とは思えないほど若々しく美しい顔を見やって、レメクはしみじみとため息をついた。
ポテト、もしくはナイトロード。
黒い髪と蒼い瞳をもつこの男は、三十三年前、当時王女だったアリステラの傍らに突然現れたとされている。
およそ人の身で体現できる美を遥かに超えた容姿に、あまりにも広く深い叡智。
そのヒトが持つ人外の容姿と能力に、他の人々が畏怖を込めて『

魔王様』と呼ぶのも仕方無いことだった。
「お義父さん。あなたの顔は凶器なのですから、せめて目立たないよう、仮面をかぶるなり、フードをかぶるなり、麻袋に入ってるなり、してくださいませんか？」
「……何気にひどいこと言ってませんか？」
「言いたくもなります。あなたが会場入りしてから、いったい何人が気絶したと思っているんです」
先程から聞こえる人が倒れる音に、レメクのため息は自然と深くなる。
伝説的美女と名高かった前国王の二人の王妃、レティシアとアントワール。
そして、現在でも絶世の美女と名高い現女王アリステラ。
その彼女らをして「神か悪魔の如き美しさ」と言わしめる義父の顔は、その美貌ゆえにまともに直視できる者がほとんどいなかった。正気を保っていられないのだ。
少なくとも、彼と目をあわせて話せれるのは、レメクが知る限り、己を含めてわずか三人に限られていた。
そのうちの一人はすでに亡く、今はもう二人だけ……
……いや、
（……ベル）
もう一人。この腕の中で眠る、真っ直ぐな眼差しの小さな少女。
「……ベルは、大丈夫なんですよね？」
昏々と眠る少女の髪を撫でて、レメクは何度確認したかわからない問いを口にした。
ポテトはおかしそうに口元を笑ませる。
「本当に心配性ですね、あなたは。大丈夫ですよ」
「心配もします。だいたい、何故、この子にあんな魔法をかけたんです！　例えこの子がそれを望んでいたのせよ、時がくればいずれ必ず大人になるというのに」
そもそも、その『一時的に大人の姿になる』理由がふるっている。

こともあろうに、自分とダンスを踊るためだというのだ。
レメクとしては、頭の痛いことこの上ない。
「踊りなど、これから先いくらでも踊る機会はあるでしょう。今でなくてはならない理由など、無かったはずです」
「あれれ、本当に理解できてないんですね、あなたは。言ったはずですよ？　『乙女心』だと」
心底呆れたと言わんばかりの顔をした後、ポテトは唇の端を苦笑に歪める。
「わかりますか？　自分には出来ないことを他の人が悠々としてるときの寂しさが。
すぐそこにいて、一番大事な人が、自分以外の人と優雅に踊っていて……
それなのに、自分では決して同じように踊ることのできない悲しさが」
「ですから、時が経てば……」
「その、時が、待てないほどの気持ちが、乙女心というやつですよ」
「……」
沈黙したレメクに、ポテトはただ苦笑を零す。
「手に入らない宝物を前に、子供らしい駄々もこねず、ただ必死に見つめ続けていた子供が、あまりにも可愛らしかったのですよ。だから、ちょっと叶えてあげたくなりました。……特別にね」
……本来、この男は人の願いなど叶えない。
山のような財宝も、美しい女性達でも、願いの対価になりはしない。
この男を動かすのは、人の思いだ。
少なくとも、天をも動かすほどの思いでなければ、この男には届かない。
「……そんなに、願うようなものですか？」
レメクには不思議だった。
ダンスなど、ただの教養の一つだ。

誰といつ踊ったところで、そう意味があるようには思えないのに。
「そうですね、確かにあなたは、誰と踊っていても楽しそうではありませんでした。そんなあなたが、誰かの踊りを見て、憧れたり胸を焦がしたり、悲しかったりせつなかったり……そんな気持ちを覚えたり、察したりするのは、無理なんじゃないかなと私も思ってます」
その事実に、レメクはただうなづく。
その目を見て、ポテトは「けれど」と呟いた。

「お嬢さんと踊ったときも、あなたはいつもどおりでしたか？」
ドキリと、一瞬、体の奥で大きな音がした。
その様子に目元を和らげて、ポテトは囁くように言葉をこぼす。
「嬉しいも楽しいも、無いままでしたか？　昔と同じように？」
「……」
「……私には、そうは思えませんでしたが？」
なにかを揶揄するように、類まれな美貌が口元に笑みをはく。
なぜかいたたまれない気持ちになって、レメクは床に視線を逃がした。
腕の中の少女が寝返りを打って、ゴロンと大きくのけぞる。
「うわ」
「ありゃ」
レメクとポテト、とっさに二人がかりで子供を引き戻す。
転落を免れた少女は、膝の上にのびのびと伸びていた。
その寝顔は相変わらず嬉しそうだ。
（……ベル）
ふと思い出す。
魔法で一時だけ存在した、幻のような少女。
小さな体が大きく伸び、短い手足がすらりと長く、体は柔らかな曲線を――一部を除いて綺麗に描き、顎の腺、目元、小さな唇にそ

こはかとなく大人の色香を帯びた貴婦人を。

「……『あれ』が」

腰まで伸びた、幻想の紫銀の髪。

長いまつげの下の、金色の瞳。

「……ベルの、未来ですか？」

そこだけは変わらない、強い意志を秘めた瞳の輝き。

あまりにも強く、鮮明なそれは、そうであるが故に、記憶の中のもう一人のメリディス族と重ならない。

「大きくなる過程で変わっていくところもあるでしょうから、完璧に同じではありませんけれど、ね」

義父の答えに、レメクは目を伏せる。

眠っている小さな子供を見ていると、なんだか不思議な気分になった。

「……お義父さん」

「はい？」

「私は、正直、この子が大きくなったとき……『あの人』を思い出すのではないかと、思っていました」

「……」

「同じ髪の色だから、思い出すのではないかと……」

けれど、違った。

今、寝顔を見ているだけで、なにか暖かい気持ちになるように……あの時、自分の体温が確実に一度、高くなったような不思議な気持ちがした。

世界が大きく揺れて、一人以外の全てが消えてしまったかのような、

時が止まって、まるで一秒が永遠に変わったかのような、

未だ理解できない、不思議な感覚。
「大きくなったこの子を見たとき、誰の姿も重なりませんでした。ベルは、ただ『ベル』でしかありませんでした」
誰とも代わることのない、唯一人。

いつだって、今だって、小さな手で必死に自分と繋がっている…
…唯一人の人。

わずかに目を伏せて子供を見つめる名付け子に、ポテトは口元を綻ばせる。
「……それが分かっただけでも、お嬢さんを大きくした甲斐がありましたね」
そう言いながらも、自覚は無理だろうな、と心の中で独り言つ。
それはおそらく、もっと時間が経たないと無理なのだ。
あと九年。……いや、せめて、あと七年。
小さな子供が年頃の少女になって初めて、自覚しはじめることなのだろう。
すでに最初の恋は生まれていたとしても、始まりはきっとそれぐらいからだ。
そう、いつかこの稚い子供が、レディと呼ばれる年齢になってから。
「ふふふ。ねぇ、『レン』さん」
他に聞こえないよう、今この場では禁忌である名前で呼んで、ポテトは微笑んだ。
とっておきの宝物を夢見るような口調で。
「楽しみですね、未来が。……生きるということは、きっと、こんな風に楽しみなことなんですよ」

プロローグ

世界が翳った。
時は止まり、空気は凍り、あらゆる全てが歪に歪む。
目に映る全てのものが、暗く歪んだ世界に落ちる。
血の気を失った白い顔。
――レメク。

力無く投げ出された四肢。
――レメク！

呼んでも答えないその人。
――レメク！！
あたしは手を伸ばした。目の前にある光景が信じられなかった。
さっきまで話していたのだ。一緒に歩いていたのだ。すぐそこにいたのだ。抱きしめてくれたのだ。
なのに。なのに、嗚呼――神様！！

「ぁ」
音がした。
「ぁあ」
引きつった音が。
「あ…ああ……ぁあああああッ！！」
世界を引き裂く音が。
喉は痛く、灼けつくように熱く、頭はガンガンと割れるような激痛に襲われる。
痛い！

痛い！！
死んじゃう！
死んじゃう！！
（レメク！）
「レメク！！」
痺れたように感覚を失ったあたしの手が、尋常ではなく熱いレメクの体を揺する。触れているのに、その熱しかわからない。指先も掌もピリピリと小さく痺れて、触れているはずのレメクがわからない。
「レメクッ！！」
目も喉も胸も灼けるように熱くて痛くて、まるでそこから血が流れているようだ。
力を失ったレメクの体は、あたしの力に簡単に揺すられる。
何の抵抗もなく、何の反応もなく。
ただ（まるで）揺すられて（物のように）……

モノ　ノ　ヨウニ

あたしの喉がひきつった。
頬を伝う熱いものにふいに気づく。
目の熱は涙だった。喉の熱は叫び続けたせいだった。胸が痛いのは壊れそうな心のせいだった。
どうしてか。
そんなこと、わかってる。
わかっているのに、気づかなかった。
あたしの体が動いた。
息を吸った。意識の無いままに。
凍った心のかわりに、本能のようにそれがあたしを突き動かす。
考える間もなく、ただ叫ぶ。
たった一つ。彼を助けるための魔法を。

与えられた奇跡の術を。

「アウグスタ！！」

――そして、奇跡は発動した。

1　灰色の世界で

空間が歪んだ。

瞬き一つの間も置かず、過たず黄金の魔女が現れる。

門の紋章の『力』は、所持者を瞬時に別地へと運ぶ。それはもはや移動では無く、転移と呼ぶに相応しいものだった。

わずか一瞬であらゆる距離を踏破するその紋章は、もはや魔術というより魔法に近い。

その転移場所は、紋章の所有者が『紋様』を与えた相手の居る場所に限られる。逆に言えば、紋様を与えられた者は、任意に所有者を呼び出すことができるのだ。

そう。まさに、今回のように！

「ベル！？」

あたしのすぐ傍らに現れたアウグスタは、驚いた顔であたしを見た。

別れた時と同様、典雅で麗しいドレス姿。髪飾りは外していたが、彼女の黄金の髪はそんなものがなくても輝いている。その輝きすらもただの装飾にする絶世の美貌は、こんな時だと言うのに、鮮やかなほど美しかった。

けれど、

「何……が……」

その顔は、あたしのすぐ前に横たわる人を見た瞬間、世界が壊れたかのように凍りついた。

驚きとそれを上回る恐怖が、あらゆる思考を奪ったようだ。

美しい顔から色が消える。瞳が極限まで開かれる。

「レメク！！」

戦慄く唇から発せられた声は、完全に悲鳴の域だった。

覆い被さるように豪華なドレスをさばいて跪くと、アウグスタはレメクを抱きかかえた。

「レメク！　レメク！！」
揺さぶられても、レメクは反応しない。
あたしはよろよろとアウグスタの傍らに這い寄り、一緒にレメクの体に触れる。
その体が、少し、前より熱くなくなっていた。
「ぁ……」
冷たく……なろうとしていた。
「ぁあああア！！」
あたしの絶叫（こえ）に、アウグスタが息を呑んだ。
左腕でレメクを抱きしめたまま、右腕であたしを乱暴に抱き寄せる。
アウグスタは叫んだ。彼女を呼んだあたしと同じように！

「■■■■■■■！！」

その声はあたしには聞こえなかった。
いや、聞こえてはいたが、理解することはできなかった。
それはきっと彼女だけの呪文。彼女だけの言葉。
彼女だけが与えられた、奇跡を呼ぶ魔法。
声が響いた次の瞬間、レメクの影から立ち上がった深淵の闇に、あたしはアウグスタが呼び出した『もの』を知った。
それは瞬時にレメクの全身を覆い尽くし、まるで闇の沼に引きずり込むようにしてその全てを床に沈ませる。
「レメク！！」
あたしは手を伸ばした。アウグスタの腕に阻まれた手は、レメクを攫う黒い闇を掴むことなく宙を掻く。
「レメク！！」
必死に叫ぶあたしを強く抱きしめて、アウグスタは叫んだ。
ここでは無いどこかへと向けて。
「救え！！」

その強い言葉に、けれど静かな声が答える。
『代価が』
「持って行け！」
一瞬の迷いも無く、アウグスタは言いきった。相手にみなまで言わせぬほどの早さは、おそらく相手の返答を半ば予想していたからだろう。
あたしを強く抱きしめたまま、怒気のような気迫をみなぎらせて彼女は叫ぶ。
「だが、いいな！　万が一があった場合には、この私が赦さん！！」
ビリビリと空気が震えるほどの声だった。
その声に畏れを抱いたように、重なったあたし達二人の影が伸びる。それはあっという間に一人の人間の姿を模し、瞬き一つでよく見知ったヒトになった。
闇の化身のようだと思った、そのヒトに。
常と同じ神代の美貌に、常とは違う恐ろしい気配を漂わせて、そのヒトは口元を薄く笑ませた。
それはどこか冷笑のようであり、そして暖かな微笑のようでもあった。
『……願われますか、御主人様（マスター）』
「……そう言ったぞ。言葉遊びをしている余裕があるのか、■■■■■」
そのヒトはただ薄く笑う。
『止まった時を動かすまでは』
「……」
謎かけのようなその言葉に、アウグスタは眉をピクリと動かす。苛立ったようなその仕草に、彼はただ微笑（わら）った。
『ならば、改めてご命令を。御主人様（マスター）』
そうして、アウグスタの前で丁寧に一礼した。
アウグスタの口から歯ぎしりのような音が漏れた。
これ以上ないほど怒っているのを感じた。だが、アウグスタはそ

んな己を律して言った。
「二つ目の願いだ、■■■■■■■。レメクを助けろ。あれを死なせるな！」
『御意、御主人様（イエス マスター）。お望みのままに』
礼をとり、鮮やかに笑ってそのヒトは身を翻した。その姿がまるで空気に溶けるようにして消える。
アウグスタはピンと背を伸ばしてそれを見守っていたが、彼が消えた途端、深い息をついて体を丸めた。
一気に力を失った体から、あたしはこぼれ落ちるようにして解放される。
あたしはレメクが消えた床に這い寄り、何もないそこをカリカリと引っ掻いた。
頭が混乱していて、自分が何をしようとしているのかよくわからない。
ただ、力無く項垂れたアウグスタが、あたしのほうを見てちょっと泣き笑いのような顔になった。
「ベル」
カリカリと無意識に床を掻いているあたしを、アウグスタはもう一度抱き寄せる。やんわりと抱きしめて、深く深く嘆息をつく。
「大丈夫だ……大丈夫だ、ベル……」
その声は、あたしにというより自分自身に言い聞かせるようだった。
「大丈夫だ。……アレは、決して、契約を違えない……。二つ目を……使ったのだからな」
様々なものを込めて力無く呟いたアウグスタに、あたしはピスピスと鼻を動かす。
アウグスタからは、悲しくて切ない匂いがした。胸がツキンツキン痛くなって、体が冷たくて、涙が出そうになるような……そんな悲しい匂いだった。
「…　…　……」

あたしは口を動かした。声は出なかったが、アウグスタは微笑んだ。

「うん。……いや……ぁあ、おまえは気にしなくていいんだ。ただ、信じてやってくれ。アレが必ず、レメクを救うのだと。そして願っていてくれ。レメクが救われることを」

落とすため息はか細い慟哭のようで、あたしは何も言えなくなった。

ただ無意識に手がレメクを求めて彷徨う。その手ごとあたしを抱きしめて、アウグスタは言った。

「人の願いは強い。それこそ天の理すら変えるほどに。……けれど真実の願いだけが天に届く。生半可な願いでは理を覆せない。……運命を呪うほどの願いでなくては」

それはかつて、あのポテトさんが言っていたのと同じ言葉だった。

あたしは目を閉じる。

瞼の裏に、倒れたまま動かないレメクが映った。止まらない涙がそれを押し流そうと勢いよく溢れる。けれど見てしまった光景は消せず、この胸の絶望も消えない。

（レメク……！！）

喉が塞がれたように息苦しくて、頭が割れるように痛くて……なのに足下から、だんだん体が冷たくなっていく気がした。痺れた手足の感覚は無く、触れているアウグスタの柔らかさもわからない。

まるで世界があたしから切り離されてしまったかのようだ。

ただ聞こえてくる声と、それだけはわかる『匂い』だけが、あたしが世界とまだ繋がっていることを教えてくれた。

（……レメク……）

だんだんと思考が鈍くなる。

頭の中にあるのはただ一人の面影だけで、それ以外はわからなくなる。

「……ここでこうしていても、仕方がないな……」

手を彷徨わせているあたしを抱きしめたまま、アウグスタは立ち

上がった。
暗い視界の中で、アウグスタがあたしを覗き込む。
難解なダンスを踊り続けても疲れなかったというのに、わずか数秒で疲れ果ててしまったような顔だ。どこか痛ましいものを込めた目であたしを見たアウグスタは、あたしの頬に頬ずりをして呟く。
「……あの馬鹿助め……なにも、おまえの前で倒れることはなかろうが……！」
そんな筋違いな罵倒も、どこか慟哭のようだった。切なくて苦しくて、辛くて辛くてたまらない痛みに満ちている。
レメクが倒れた。……ああ、倒れたのだ。
すでにわかっていた現実を、改めて頭が繰り返す。倒れた……目の前で。その一部始終を繰り返す。
どうしてあたしは、もっと早くに気づかなかったのだろう。
彼は疲れていた。言動もそれを裏付けていた。
なのになぜ、自分はそれをもっと深刻に捉えなかったのだろうか。
レメクだから大丈夫だと思っていたのだろうか？　ちょっと疲れてるように見えても、明日になったらいつものように、優しく自分を見守ってくれると思ったのだろうか。
ああ、レメク。
本当にあなたの言う言葉はいつだって正しい。
まるで未来を読んで言の葉を紡ぐように、それは全て正しくあたしの未来で立証される。
いつだったか語ってくれた。朝陽に微睡む街並みを見下ろして。
嗚呼、レメク。本当だった。確証のない確信は妄信と同じだ。
誰がいつ保証したというのだろうか。何の保証もないままに、あたしは勝手に信じきっていた。
レメクはいつだって、自分の近くにいてくれるのだと。
ずっとずっと、元気で傍らにいてくれるのだと。
そんな保証なんて、これっぽっちも無かったのに……！！
（……あたし……知ってた……）

この2ヶ月間、誰よりも一緒にいたレメク。
あたしは知っていたはずだった。彼が、かつてのあたし同様、ボロボロの体だったことを。
死にかけたあたしを助けるために、己の命を捧げた。あの時から、レメクの体はボロボロだったのだ。
休め、体を癒せ、と。そう言ってあたしを守ってくれながら、けれど自分は働き続けたレメク。そんなレメクが疲れてないはずがなかった。体が癒えているはずがなかったのだ。
たとえ王宮で健康な人の間を巡っていても、無自覚に分け与えられている元気のおこぼれをもらうだけで、レメクの体が健康になるはずもなかったのに……！
（……休まなきゃ……いけなかったのに）
彼が休めなかったのは、何故か。
改めて考えるまでもない。
レメクは仕事でいつも忙しそうだった。孤児院の事件の時からずっと、彼には休みらしい休みは無かったのだ。
孤児達の今後の面倒や、事件の波及で滞ってしまったあらゆる問題も、彼が一手に引き受けていた。手を貸してくれる人がいないわけでは無さそうだったが、それでもレメクの手が必要なものがほとんどだったのだ。
ケニード達が言っていた。レメクほど有能な人は王宮にはいないのだと。
ヴェルナー閣下が「ぜひ自分の後継者に」と切望するほど、レメクの能力は際だっているのだ。その彼に仕事が集中するのはどうしようもない。
朝早くから仕事に出かけ、夜遅くに戻ってくる。たまの休日はあたしの淑女教育（レッスン）だ。つきっきりで一から教えてくれた。
なかなか上達しないあたしに、焦ることも苛立つことなく、ただ、どこか困ったような心配そうな瞳のままで。
（……あたしの……せいだ……）

違う箇所などどこにもない。間違いなく、あたしが原因だ。
そもそもの発端も、休めなかった理由も、全部が全部あたしなのだ。
しかもあの内容だ。きっと心休まる日もなかったことだろう。体も疲れていて、心も安まらないのでは、倒れても仕方がないのだ。
（あたしが……レメクを……）
レメクを……■■たのだ。
誰よりも大切で、誰よりも大好きで……そんなレメクを、あたしは二度も■したのだ。
無自覚だったから何だと言うのだろう。気づけなかったから何だと言うのだろう。
あれだけ傍にいたのに、気づけなかったことがそもそも罪なのだ。
（レメク……）
いつだってあたしは間違い続けて……レメクを危険な目にあわせる。
死という名の、最も危険な終焉へと。
（……レメ……ク……）
何かが音をたててあたしの中で壊れた。
砕け散ったものが何なのか、あたしにはわからない。ただ、壊れたと自覚した。
世界は薄暗い影の中に落ち、美しかったものの全てが灰の中に溶ける。
何の色も無いその中で、アウグスタがあたしの頭を撫でる。優しい手の感触は感じられなかったが、視界の映像でそうされたのだとわかった。
「ベル。おそらく、しばらくレメクは動かせない。『アレ』もここから動けまい。……そんな中に、おまえを残すことはできん。もともと、私の娘となったからには、王宮に引き取らねばならん身柄だ。……本当は、そのことをちょっといろいろ詰めたかったんだがな……こうなっては仕方がない」

苦渋を滲ませた呟きだけは、耳に届く。
色の無い世界のアウグスタはどこか現実味がなくて、あたしは何の反応も返さずにただ声を聞いていた。
「おまえを城へと連れて行く。女官長の元でなら、安全だろう。おまえは……」
言いかけて、しかしアウグスタは口を噤んだ。
視界の中のアウグスタの顔が歪む。今にも泣きそうな顔で、嗚咽をかみ殺すようにした言葉を紡いだ。
「そんなに思ってくれているおまえを残して……あいつは、逝ったりはせんよ。だからおまえも、あやつのために……強く、あってくれ……。もう、声も届いておらんかもしれんが……」
手が動く。髪を撫でてくれている。
感覚はわからなくても、視界で内容はわかる。
……けれど、何も感じなかった。
「ベル。聞こえておらんかもしれんが、聞け。おまえの身を守るために、これだけは届いてくれ。……王宮では、私がこれから言う者以外は信用するな。貴族も召使いも、男も女も、年齢の上下も関係なく、信用するな。何かあれば私を呼べ。私はずっと傍にいることはできないが、必ずおまえを助けに行く。いつもレメクが、そうしていたように」

イツモ　レメクガ　ソウシテイタヨウニ

あたしは口の中でそれを復習する。
声は無く、音は出ず、それでもそれを復習する。
アウグスタはますます泣きそうな顔になった。そうしてギュッとあたしの体を抱きしめる。
その瞬間、あたしの視界が歪んだ。本当の意味で歪んだ。
けれど驚きはしなかった。
瞬時に変わった景色は、先程までの素朴なものでは無かった。

ありったけの贅を凝らした、凝った意匠を施された部屋。
そこには十数人からなる人々がいて、全員が驚いた顔でアウグスタを見つめていた。
「陛下！」
「陛下……いかがなさいましたか！？」
女性ばかりだった。そろいもそろって女官服を身につけている。
なかでも一番年かさの女性が駆け寄り、アウグスタとあたしを見て愕然とした。
「陛下……『何が』、ございましたか……」
「話が早いな、女官長」
アウグスタが力無い笑みを零す。抱きしめていたあたしを抱え直し、彼女はあたしを女官長と呼ばれた女性に向き直らせた。
「先に言っていた、これが新しい我が娘ベルだ。おまえに任す。助けてやってくれ」
女官長と呼ばれた女性は、その瞬間キリッと顔を引き締めた。
「かしこまりました。わたくしの命にかえましても」
そうして、彼女はあたしを見た。その瞳は熱く、けれど優しく、何かとても尊い者を見るように細められている。
「初めてお目にかかります、姫様。わたくしは殿下方の乳母をしております、シェンドラと申す者でございます。姫様のご到着を……心よりお待ち申しておりました。どうぞお見知りおきを」
いささかならず熱のこもったその声に、あたしは無意識に口を開いた。
挨拶をされたら、きちんと挨拶をすること。
レメクから、そう教わった。だからちゃんと挨拶しないといけない。
けれど体はほとんど動かなかった。唇だけは動いたが、あたしの声はどういうことかあたしの耳には聞こえなかった。
他の人の声は、ちゃんと聞こえるのに。
「姫様……？」

シェンドラさんは軽く目を瞠る。
そうして、すぐさまアウグスタを見た。
「……陛下……あの、姫君は……」
アウグスタは一瞬押し黙る。
それはわずか数秒だったが、緊迫した表情のシェンドラさんに根負けしたように、彼女は小さく答えた。
「……レメクが、倒れたのだ」
部屋の全員が息を呑んだ。シェンドラさんの喉の奥からは悲鳴が零れた。
「そんな……ぁあ、そんな……！」
「ポテトがいる。あやつがついている。……だから、心配には及ばない。ちょっと疲れただけなんだ。しばらくは養生させる」
微笑ってそう言って、アウグスタはあたしの頬を撫でた。
「ベルが急を報せてくれた。だから早く手を打てた。……逆に言えば、ベルは見てしまったんだ。レメクが倒れる所を。それで……」
それで……その後が続かない。
シェンドラさんは驚いてあたしを見つめる。その目がみるみるうちに涙に滲んだ。
「……姫様……」
伸ばされたその手に、アウグスタはあたしを渡した。あたしは初めて会う人の腕に抱かれる。
けれど何も感じない。温度も、感触も、何も。
この人からは、ケニード達と同じ、優しくて暖かい匂いがするのに。匂い以外を感じられないのだ。
「姫様……そこまで……まだ、こんなにお小さいのに……」
それでも、これほどまでに……そう言って、その人はあたしをぎゅっと抱きしめてくれた。
『殿下方』の乳母だったという彼女。
なら、今までも姫様達にもこうやって、母親のごとく接していたのかもしれない。もしかしたら、王女様だった昔のアウグスタにと

っても乳母だったのかもしれない。
彼女の匂いはまさしく『母親』のそれだった。
あたしは匂いを嗅ぐ。
唇が動いた。
無意識に、おかあさん、と呟いた。
けれど、音は出ない。
「……　……　……」
あたしは唇を動かし……そうして、理解した。

あたしは、声を失っていた。

2．あなたを捜して

「一番好きなものは、何」
そう問われれば、真っ先にその人の顔が浮かんだ。
その顔を思い浮かべるだけで幸せで、思わず頬が緩んでしまう。
けれど人の記憶というのは曖昧なもので、思い出したと思っても、その像はすぐにぼやけてあやふやになる。
それが嫌でたまらなくて、あたしは暇がある度にレメクをジッと見つめていた。すると、レメクはなんだか怯えたような目で腰を浮かせる。うかうかすると逃げられるので、あたしはいつもそこでレメクに飛びかかっていた。
（ねぇ、レメク……）
不思議なの。
あなたと出会ってまだ二月（ふたつき）なのに、あなたのいない日が想像できないの。
いつのまにか『思い出』すら、あなたといた日々に占められていて、昔あった「悲しい」も「お腹空いた」も、今はどこにいったかわからないの。
（……レメク）
朝起きた時――
すでにいないレメクの温もりと匂いを求めて、あたしはいつも布団の中をぐるぐると這い回っていた。
寝室のカウチには可愛らしい服。起きたあたしがすぐ着れるように、いつもそこに揃えられていた。
階段を下りれば、台所に朝食。
時々ケニードが作りに来てくれるけど、それ以外の時はそこに朝食が置かれていた。
いろんな食材を挟んだサンドイッチ。保冷庫には山羊の乳。その

日に勉強しておく教材は居間にあって、書き取り用の用紙の傍らにはたっぷりのインクが置かれている。
昼食時にはケニード達が遊びに来て、一緒にご飯を作って食べる。時々レメクも帰って来てくれて……そんな時、あたしは大喜びで彼に抱きつきに行くのだった。
お昼を食べ終わった後は、夕方までお勉強の時間。
レメクを「行ってらっしゃい」と見送ると、少しだけ微笑って「行ってきます」と返される。少し面はゆそうなその顔が、あたしはとても好きだった。
（レメク……）
お勉強は苦手だったけど、レメクとする勉強は好きだった。
聖書や本を読んでくれる声も、ページをめくる指も好きだった。
少しずつ文字を覚えて、一人でもなんとか読めるようになって……最近では、練習がてら二人で交換日記をするようになっていた。
その日あったことや、思ったこと……拙いあたしの文に対して、レメクは丁寧に返事を返してくれた。嬉しくて楽しくて、もっともっと文字を覚えたくて、ずいぶんがんばったと我ながら思う。
（……レメク……）
今までの環境を思えば、なんて夢のような日々だったのだろうか。
美味しい御飯があり、暖かな寝床があり、優しくて大好きな人がいて、あたたかい人達に見守られる。
きっと神様がいる世界というのは、そういうあったかいもので満ちているんだろう。
昔そんな風に思っていた世界を、あたしは二ヶ月間、惜しみなく与えられたのだ。
手を差し出せば、その手をとってもらえる世界。
寂しい時は手を握ってくれ、体を抱きしめてくれ、大丈夫ですよと言ってもらえる世界。
それはなんて……幸せな世界なのだろうか。
（レメク……）

次第に遠くなる意識の中で、あたしはレメクのことだけを考え続けた。

レメクが倒れたのを見た時から、あたしの時間は止まっているみたいだ。

体はもう癒えているはずなのに、まるで死にかけたあの時のよう。

声だけは聞こえているけれど、肌に触れている『もの』の感触がわからない。

目を開けていても世界は灰色で、自分が本当にそこにいるのかどうかすら、わからなくなってくる。

目の前に食べ物を置かれても、食べたいと思わないし……口を動かしても、本当に食べているのかどうかわからない。

わからないままで体を動かして……

（――けれど）

ねぇ、レメク。

（おかしいの）

体を動かすっていうことすら、わからなくなってしまいそうなの。

（……レメク）

あたしは繰り返し繰り返し、ただレメクの名前だけを心に呟く。

目の前の光景の中に、アウグスタや年配のおばちゃんや……あのきっつい目のお姫様が見えた気がした。

でもそれが『いつ』の、『何』の光景なのか、よくわからなかった。

見ていても意味がないので、あたしはゆっくりと目を閉じる。

誰かが何かを言っているが、それすらももう聞こえない。

ただ黒い闇があたしを包み、深い底へと誘ってゆく。

（……レメク……）

レメク。大好きなレメク。

（あたし……嫌な世界……見てるの……）

これは夢だと思いたかった。
とびっきり幸せな夢の後で見た、とびっきりの悪夢だと。
きっと次に目を開けた時にはレメクがいて、そうしてちょっと呆れたような顔であたしを見て言うのだ。
少しだけ困ったような、そんな色の瞳で。

――悪い夢でも、見たんですか？

と。

※　※　※

名前を呼ばれたような気がして顔を上げた。
そこは真っ暗な世界だった。
影絵の世界に迷い込んだように、周りは一面黒一色に染め抜かれている。振り仰いだ頭上だけがちらちらと隙間を除かせて、そこは沈んだ灰色をしていた。
（……　……）
あたしは周囲をぼんやりと見る。
よく見ると、周囲の黒いものたちにはそれぞれ固有の姿があった。
地面から空へと伸びた長大な黒。柱のようなそれに、あたしは見覚えがあった。
（前庭の……木）
庭と呼ぶのも憚られるような、おそろしく大きな木々達。むしろ森に近いその集まりの向こうに、闇色に染まった屋敷がある。
（……レメク……）
あたしの足がそちらへと向かった。
からっぽの頭の中で、たった一人の名前だけがぐるぐると回っている。

どうして今、こんな所にいるのか……そんなこと、疑問にも思わなかった。

どうだってよかったのだ。そんなことは。考える意味もないことだ。

レメクがそこにいるのならそれが全て。

レメクがそこにいないのならそれで終わり。

あたしにとっての世界の意味は、ただそれだけだったから。

（おじ様……）

あたしは手を伸ばし、黒い塊でしかない屋敷の扉を叩いた。

（……おじ様……）

か細く呼びながら、扉を引っ掻く。闇色に染まった屋敷はあまりにも静かで、生きている人の気配がしない。

（おじ様……おじ様……）

カリカリと引っ掻く。

閉ざされたままの扉が悲しくて、あたしは泣きながら必死でそれを叩き、引っ掻いた。

（おじ様……おじ様……）

ふと、その闇色の扉から、白い手が現れた。

扉は閉ざされたままだというのに、その手だけが扉から出ている。頭より高い位置にあるその手に、あたしは瞬きをしながら手を伸ばした。

すると苦笑含みの声が聞こえた。

『おやめなさい、お嬢さん。まだ時は至っておりませんよ』

あたしは大きく瞬きをした。

闇色の扉の中から、ゆっくりとそのヒトが姿を現す。扉を素通りしてきたのは、レメクを攫（さら）っていったあのヒトだった。

（……お義父さま……）

『……あなたは本当に、無茶をしますね』

苦笑を含んだその声は、耳という器官を通さず、あたしの全身に直接響く。

『……何故あなたのほうが、今、死にそうになってるんですか』
淡く笑うような、畏怖を含むような。そんな不思議な『声』だった。
あたしは瞬きを繰り返す。
死にそう？　あたしが？
違うはずだ。死にそうなのは、あたしじゃない。
（……おじ様……）
この中にいる、レメクこそが……！！
（おじ様！！）
弾けるように、魂の奥底から声があがった。ビリビリと黒い世界が震えた。
けれど目の前に聳える黒い扉は動かない。
そこから半身を出している黒いヒトも、小揺るぎ一つせずそこにいる。
（おじ様！！）
『いいえ』
扉にすがりつこうとするあたしを、見えない手が後ろへと押し返した。
『今、死にそうなのはあなたです』
かわりにその場に立った黒いヒトは、あたしの胸を指し示す。
『人というものは、肉体だけで生きているのではありません。血肉は精神を持って初めて【生命】となるのです。……心が死ねば、肉体も遠からず死に至ります』
こころ、と。あたしは小さく呟いた。
そのヒトは淡く微笑む。
『あの子が倒れた一因もまた、あの子のもつ【心】によるものでした。……けれど、嗚呼、なんということでしょうね。それなのに貴女の方から、こんな風にして夜を渡ってくるだなんて』

……なぜだろう。

あたしは瞬きをする。

言葉の意味はわからないけれど、そこに込められた感情だけは読み取れた。

暖かく優しいものは『喜び』。伝わる震えは『希望』。

あたしは知っている。それが感動と呼ばれるものなのだと。

『精神転移（ジャンプ）はメリディス族の特有能力でしたか。魔法というものが伝説と化してなお、本能でそれを行う者がいる……。けれど本能であるが故に、それは行使者の命を脅かすものになるのです』

あたしは瞬きをした。

彼の語る言葉はいつも謎に満ちていて、あたしには理解が難しい。

それにあたしがどうとかいうことは、正直、どうだっていいことなのだ。レメクだけが大事なのだ。レメクが……レメクだけが……

よろよろと手を伸ばしたあたしに、そのヒトは少し眦を下げる。

『あの方が言ったはずですよ、私に。【救え】と。……命じられた以上、それを叶えるのが私です。信用してはいただけませんかね？』

口元に亀裂のような笑みを浮かべたそのヒトを、あたしは見つめた。

涙がぽろぽろとこぼれていく。

（おじ様……　おじ様……）

黒いヒトはちょっと小首を傾げ、ややあって口元に微苦笑を浮かべた。

『……そうですね……。誰かに対する信用と、誰かに対する心配は違いますね……』

白い指が伸びてきて、あたしの眉間をチョンとつついた。

『大丈夫ですよ、お嬢さん。あの子の体の方は、ほぼ完全に直しています。今はただ、深く眠っているだけです。……疲れがたまっていたんですよ。今まで気力でもっていたようなものですから』

（……気力で）

あたしは涙を零しながら、水の中でぼやけるその美貌を見つめた。

とても暖かい微笑を浮かべているそのヒトを。
『あの子はね……自分ではわからないんです。自分の体の限界なんてものに、全然頓着しない子ですから。無理をして無理をして無理をして、倒れるまで無理をしても、まだ進もうとする子なんです。……生きることに意味も無くて、興味も無くて、ただ生きているから生きている……そんな子供でしたから』
（……）
『あなたと会って、あの子は変わりました。……けれど少し、時期が悪かった。あなたはボロボロで、あなたを助けたあの子もボロボロになって……けれど忙しくて休めなかった。心も体も、ずっとボロボロだった』
あたしは唇を引き結んだ。
黒いヒトはただ微笑む。
『あなたのせいだけではありません。あなただけが悪いのではないのです。……あの子は自分で自分を休ませられなかった。それはあの子自身の罪です。あの子は沢山の仕事を持っていた……それは、あの子に頼らざるをえなかった者達の罪です。忙しいあの子が休めないほど、逼迫した状況を作り出した……それは私の御主人様の罪です』
少しずつ悪いことが重なって、レメクの体はまいってしまった。
気力だけでボロボロの体を動かして……あの日の夜に倒れたのだ。
『……悪いことばかりでは無かったはずです。あの子にとって、夜会に出席することは面倒で疲れることではあったでしょう。けれど今回は貴女がいた。貴女がいて、他の人達も貴女達のためにいろいろと手を打ってくれていた。昔の夜会などより、きっと気持ちも体も楽だったことでしょう。……運命の人の未来（すがた）も見れましたし』
（運命……？）
あたしは首を傾げる。
そんな出来事、あっただろうか？
『私は至近距離でその様子を見ましたよ』

くすくすと笑う声はどこか暖かく、影絵の世界を穏やかに彩ってゆく。

『人はね、必死にならざるを得ない時は、意外と踏ん張れるものなんです。けれど安心した時、それが一気に押し寄せてくる。……貴女が無事に夜会を乗り切って……あの子はとても、安心したのですよ。ずっと不安で、気に病んでいて……それがようやく、ホッと肩の荷を降ろすことができたんです』

そうして、意識の外へ追いやっていた疲労が襲いかかってきた。

極限まで酷使した体に、重なり続けた疲労は、下手をすれば死に至るほどのダメージだったのだ。

『それのみならず、あの子は心にダメージを受けていましたからね』

（……ダメージ……）

あたしはその言葉を繰り返す。

レメクは心に、何か傷を負っていたのだろうか。

それが何なのか、あたしにはわからない。あんなに傍にいたのに、これっぽっちもわからない。

『泣く必要はありません。それはあの子の杞憂ですから。……けれど、あんな風に倒れてしまうほど……尽きた体力を奮い立たせる力を奪うほど、【そのこと】はあの子にとって、とても深刻で辛いことだったのです。……自覚のないままに』

溢れた涙で前が見えないあたしの頭に、黒いヒトはそっと掌を乗せてくれた。

不思議なことに、その掌の感触はわかった。

『簡単なことだったんです。それはあまりにも単純で、あまりにも幼すぎて……それゆえに、誰もそれが原因だとは気づかない。……離れたくないのなら、そう言えばいい。失いたくないのなら、そう言えばいい。……けれど今まで【望み】を持たなかったあの子は、それを口にして言うことができない。望まぬものを覆すために、何をすればいいか……わかっているのに、その行動をとることができない。一言、そうと言えばいいだけなのに』

ポテトさんの気持ちが伝わってくる。
それはとても暖かいもので満ちていた。少しせつないぐらいに、慈愛にも似て深く深く、愛情。
血の繋がりはないけれど、育て親を違う人に任せていたけれど、紛れもなく、このヒトはレメクのお父さんなのだ。
『変化とは、往々にして大変な力を当人に強いるものです。急激な変化であれば尚のこと。……けれどあの子はその力が足りなかった。体力も尽きていた。肉体の限界と精神的な衝撃。対応できぬ変化。……人が倒れるのに十分な状況です。無理をしすぎるあの子なら、なおのことでしょう』
（……レメク……）
伝わってくる感情が、冷えきったあたしまでも優しく暖めてくれる。
その温もりを感じながら、あたしは新たな涙を零した。
レメクに離れたくないと思う相手がいたことはショックだった。
それが辛くて倒れてしまったのだと聞くと、尚のことショックだった。
あたしが迷惑をかけている間にも、彼はそんな大変な目にあっていたのだ。そんなことにすら、あたしは気づけなかったのだ……！
『……なにかオカシナ誤解が発生してませんか……？』
ポテトさんが微妙に眉をひそめている。
あたしは顔をぐしゃぐしゃにして黒いヒトを見上げる。手が、体が、無意識に扉へと向かう。
（……おじ様……おじ様）
よろめくように近づいて、ポテトさんの横の扉を爪で引っ掻く。
気づけなくて、ごめんなさい。
わからなくて、ごめんなさい。
あたしすごく迷惑だったのね。
あたしのせいでぼろぼろになって、そのせいで辛い時を乗り越えられなかっただなんて……なんて謝ったらいいんだろう？

（……おじ様……）
あたしで出来ることならなんだってやるから。
あたしで払える対価なら、いくらだって払ってみせるから……
だから、だからおじ様……
もう大丈夫ですよ、って言って。
頭を撫でて。
それが贅沢なら、せめて一言だけでもいい……
（声を）
声を――
聞かせて……！
『呼び続けるつもりですか？　目覚めないあの子を……』
静かに問われて、あたしは反射的に頷いた。どうしようもなく溢れた涙が、黒と灰色を混ぜてゆく。
そんな世界の中で淡く微笑んで、そのヒトはあたしに囁いた。
『ならば、あの子の名前を呼んであげてください。私のものでもある名前を。……あなたが呼ぶその名前だけは、【私】をいっさい含まない。だからこそ、あなたの声だけは、あの子に直接届くでしょう』
（……おじ様……）
カリカリ引っ掻きながら、あたしはレメクの顔を思い浮かべた。
人を寄せ付けない怜悧な美貌に、とても暖かいものを秘めた優しい瞳。
綺麗な綺麗な赤みがかった紫。
（……レメク）
心が震える。大事な大事な、魔法の呪文。
唱えるだけで幸せになって、せつなくなって、嬉しくなって、暖

かくなる最高の呪文。
（レメク）
世界が震える。あたしの世界が。
だって、それはそうだろう。そのたった三文字の言葉こそが、あたしの全てなのだから。
（レメク！）
けれど、『世界』はあたしの世界だけでできているわけじゃない。
名前を呼んでも黒い世界には何の変化もなかったし、何かの奇跡が起きたわけでもない。
それでもあたしは呼び続ける。
今すぐに届かなくても、いつか届くと信じながら……！
黒いヒトが白い手を伸ばして、そんなあたしを抱き上げた。
『……届いていますよ、あなたの声は。あなたとあの子は繋がっています。どこにいても……こんな場所にこんな風に来なくても、あなたの呼び声は必ずあの子に届きます。だから……あなたはそろそろ、あるべき場所に帰りなさい。戻れなくなる前に』
（レメク……レメク……）
扉へと手を伸ばしているあたしに、黒いヒトはただ苦笑する。
『あの子の贈り物を思い出しなさい。あの子の母親の形見を』
形見。
ドクンと、あたしの胸が一つ、大きく脈打った。
誕生日を祝ってくれたレメク。たった一つしかない、お母さんの形見を贈ってくれたレメク。
あの大切な皮袋を、あたしは今、どこに持っている……？
『血族の直系にだけ継承される物……古の一族には、そんな品があるのだそうです。そういった品には、古い古い魔法がかかっているのですよ』
あたしは胸の痛みに顔を歪めた。
親から子へと受け継がれるもの。……知っている。あたしのお母さんの腕輪が、そうだった。

先祖代々受け継がれるものには、特別な意味や願いが込められている。愛情、祝福、恵み、祈り……

あたしの腕輪は無くなってしまったけれど……けれどそのかわりに、無二の物をあたしは贈られていたのだ。

レメクが受け継いだ、彼の一族の継承の品を。

『あの子の母親の形見も、あなたが受け継ぐはずだったものと同じです。形は違えど、同じ【受け継がれる物】。古い品にかかる魔法は強力です。……あの形見に語りかけなさい、星の子よ。必ずあの子に届きますから』

あたしはゆるゆると手を伸ばして、無意識に自分の首から提げている革袋を掴んだ。

……在った。ここに、在ったのだ。

今の今まで、そんなものが在ったことすら忘れていた。レメクから渡された、大事な大事な形見だというのに。

（……　……）

あたしの中で、何かがストンと落ち着いた。

『自分を見失ってはいけませんよ。あなたが自分を見失えば、あの子も還る場所を失ってしまいます。……ちゃんと目を開けて、周りを見なさい。そして、たとえあの子が今、傍にいなくても、きちんと立って前を向きなさい。……あの子に恥じない自分になりたいのなら』

その言葉は、魔法のようにあたしの中に染みこんだ。

二度ほど瞬きをしたあたしに、ポテトさんはふわりと微笑む。

『忘れてはいけませんよ、お嬢さん。強い思いだけが天を動かすのです。死んだような心では、あなたの思いは届きません』

その微笑みが淡くぼやける。

あたしは大きな涙を一粒落とし、そうして、力一杯それを拭った。

黒い世界がぐにゃりと歪む。

強い力で引っ張られる感覚に、あたしは抗わず従った。

（あたし……あたしは……）

遠ざかるそのヒトと屋敷。
そこにいる大事な人と、優しいヒトに、あたしは心の奥底から声を振り絞る。

（――――――

声は出ず、変な呼吸音がヒュー、コー、と虚しく響く。
（……レメク）
革袋を握りしめて、あたしは涙を拭った。
世界が灰色でも、声が出なくても、
レメクが傍に、いなくても……
（……レメクに）
あの人に恥じない自分に。
ただそれだけで、体の中に何かが染み渡る。それが何なのか、あたしにはよくわからない。
けれどとても強くて、きっととても大切なものなのだ。
「……！」
パチンと頬を叩いてあたしは立ち上がった。
妙に体がふらふらするが、根性を出せばそんなの平気だ。お腹がグーとか叫びだしたが、食欲があるのはいいことじゃないか。
あたしはヘロヘロとベットの上を歩き、綺麗なレースの帳を開いて床に降りた。
（……にょ！？）
もひょっ、と足の裏を包み込む、ものすごい贅沢な感触。レメクの寝室の絨毯と同じぐらい豪華な感触に棒立ちになっていると、コンコンコン、と控えめなノックの音が聞こえた。
「……　……」
とっさにハイと答え、声が出なかったことを思い出す。
けれど、返事が無くてもその扉は開いた。
「……失礼いたします、姫様」
どこかしょんぼりとした声で入ってきたのは、どこかで見た年配のおばちゃんだった。
どこか……どこかで……
（……ああ！）
ピンときた。
確か、殿下方……王女様達の乳母だったという人だ！

「ご朝食を……」
悄然と部屋に入ってきたその人は、あたしを目にとめて棒立ちになる。
後ろからワゴンを押しながらやって来たメイドさん達も、同じように目を見開いて立ちつくした。
……何故？
「……姫様……姫様！！」
おばちゃまが悲鳴に似た声を上げ、大急ぎであたしの元に駆けつけてきた。その目にはいっぱいの涙が溢れている！
「ああ……姫様！　姫様……よく……よく、お戻りに……！！」
……お戻りに？？
あたしは首を傾げる。
（あたし、どこかにイッテタの？）
首を傾げるあたしのお腹から、ぐー、と悲しげな悲鳴が放たれる。
あたしのちっちゃな手を握りしめたおばちゃまは、あたしのお腹を見て、涙をこぼしながら大きく破顔した。
「ええ……ええ！　食欲もおありのようで……！」
ええ……ありますとも。なんか自覚したら、ものすごーくお腹がすいているのです。
何故？
夜会であれだけいっぱい食べたのに、やっぱりあたしのお腹はオカシイのかもしれない。
お腹を両手でギューと押さえるあたしに、おばちゃまは上品に涙を拭きながらすっくと立ち上がった。
「陛下と料理長に連絡を。姫様は三日ぶりにお目覚めになられたと――お急ぎなさい！」
おばちゃまの声に、呆然と立っていたメイドが二名、大慌てで走り去る。
あたしはぼんやりとそれを見送り、ピンと背筋を伸ばして立っているおばちゃまを見上げた。

（……三日ぶり……？）

お目覚めになった？

（……まさか……）

まさか、あたし、三日間、眠りっぱなしだったトカ……！？

「姫様。……ああ、姫様……本当に、よくお目覚めくださいました。私は、よもやこのまま、あなた様を失ってしまうのかと……！」

呆然と立っているあたしの前に膝をつき、おばちゃまはまたさめざめと涙を零す。

確か女官長だとかいう偉い人だったはずなのだが、この尋常でなく親身な態度は、いったいどういうことだろうか？

「先程、陛下がお知らせくださいました。ロードが言うところによれば、レ……いえ、クラウドール様のお体は、近日中に癒えるとのことでございます。わたくしはそれをお知らせしようと……思っておりましたのに……ああ、これも、きっと神様の思し召しなのでございますね。きっと姫様には、レンド……いえ、クラウドール様のことがおわかりだったのですね。いえ、きっときっと、あの方が、姫様を目覚めさせてくださったのでしょうね」

感激の涙を零すおばちゃまに、あたしは眉を垂れさせた。

違うのだ。あたしが起きれたのは、レメクというより、ポテトさんのおかげなのだ。

……いや、でも、レメクに恥じないために、っていう気持ちで起きたのなら、それは確かにレメクのおかげということに……

なるのかな？　……うぬぬ？

首を傾げるあたしにかまわず、おばちゃまは感激の涙を零し続ける。

「でも、ようございました。あの方の大事な姫様に万一があっては、わたくしはもう二度と太陽を拝めません」

（……そんな、大げさな……）

あたしは困ってしまって、涙を零すおばちゃまの涙をちっこい手で拭いてあげた。おばちゃまはビックリした顔になって、それから

いっそう顔をくしゃくしゃにする。
「……姫様……！」
ああああ何故ですか何故もっと泣いちゃうんですかー……！
わからなくて、どうしていいのかもサッパリで、あたしはおばちゃまの体をギュッと抱きしめた。
あたしが泣いている時に、レメクがいつもそうやって抱きしめてくれたように。
おばちゃまは嗚咽をこぼしながら、あたしを優しく抱きしめ返してくれる。その体はとても温かくて柔らかく、おかあさんのようないい匂いがした。
（……暖かい）
何故だろう。その温もりがとても懐かしい。
きっと今まで、そんなことすらわからなくなっていたからだろう。
あたしの世界はレメクが全てだけれど、あたしの世界はそれ以外のもあちこちに繋がっていたのだ。その中ではおばちゃまのように、泣いてくれるほど心配してくれる人が存在したのだ。

――ちゃんと目を開けて、周りを見なさい。

ポテトさんの声を思い出す。
（……うん。お義父さま）
あたし、これからは周りをちゃんと見るね。
世界はあたしとレメクだけで成っているわけじゃない。沢山の人がそこにいて、確実にその人達とあたし達は繋がっているのだ。
自分を見失っていても、何もならない。
心が死んでいては、心の声はレメクに届かない。
灰色の世界は変わらないし、声自体もまだ出ないけど……未だ辛い現実がここにあっても、自分の中に逃げ込んじゃいけないのだ。
あたしの手は、未だずっとレメクを捜して彷徨っているけれど……

「……　……」

あたしはおばちゃまに声をかけようとし、やっぱり出ない声にしょんぼりと肩を落とし、かわりにぽんぽんとおばちゃまの肩を叩いてあげた。

おばちゃまは顔を上げ、涙を拭きながらニッコリと微笑む。

「ええ、姫様。……ありがとうございます。……申し訳ありません。見苦しい姿をお見せいたしました」

あたしは首を横に振った。

そんなあたしに優しく微笑んで、おばちゃまはすっくと立ち上がる。ピンと伸びた背筋には、風格と威厳が備わっていた。

「では、姫様、朝の準備にとりかからせていただきます。……さぁ、こちらへどうぞ」

夜会で見た貴婦人に負けず劣らず優雅な仕草で、おばちゃまはあたしに手を差し伸べる。

あたしは背筋を伸ばした。

ちっぽけなあたしの、精一杯の背伸び。

王宮なんていうとんでもない場所で、そんなものが役に立つのかどうかはわからない。

けれどそれをがんばれなくて、どうするのだろうか。

（……レメクに恥じないように）

あたしは胸で揺れる革袋を握りしめる。

そうして、レメクが傍にいない日々の、第一歩を踏み出した。

3．伸ばした掌に

「ベルが戻ったのですって！？」

そう言ってやや小ぶりの塊が飛び込んできたのは、ちょうどあたしが三皿目の卵料理（名前不明）をたいらげた時だった。

全部灰色に見えるので色は不明なれど、あたしが居るのは王宮の一室らしい典雅な部屋だった。そこには今、あたし以外に五人ほど人がいる。気品溢れるおばちゃまと、口ひげの渋いおじちゃま、そして三人のメイドさんである。

あたしを含めた総勢六人に見つめられた小柄な塊は、真っ直ぐにベットに座るあたしを見つめ返した。塊は小さな少女だった。小さいといっても、あたしよりはずっと背が高い。その愛らしい顔立ちには一瞬だけ喜色が溢れ、なぜか即座にキツイ表情に変化した。

……そのキツイ表情に、妙に見覚えがあるような……？

「ふ……ふん！　ほら、ご覧なさい！　シェンドラ。ワタクシの言ったとおりでしたわ。この子がそんな、いつまでも眠ってるような、しおらしい子なわけないじゃありませんの！！　……グス……」

……最後の『グス』は、どう聞いても鼻水すすってる音なのだが……

あたしは口元を軽く拭きながら、その少女をしみじみと見つめた。黙って立っていれば、お伽話に出てくる妖精のような美少女だった。特徴的な金色の髪は今は灰色に沈んでいるが、際だった美貌といい、意思の強そうな瞳といい、どこかアウグスタに似ている気がする。年の頃は十二かそこら。精緻なレースを幾重にもあしらったドレスが、これ以上ないほど似合っていた。

しかし……

（なんか……いろんな意味で、相変わらずなのね……）

綺麗な顔に似合わぬ苛烈なツンツン。むしろ顔が綺麗な分より恐ろしい。

そう……彼女には見覚えがあった。ものすっごく最近会った人だ。
（……名前は……えーと……エート……）
……ナンダッケ？
「フェリシエーヌよ！！」
コテッと首を傾げたところで、なぜかものすごい形相で少女が怒鳴った。
（ああ！　そういえば、そんな名前を……！）
「あなたね！！　一応、ワタクシの義妹となるのですから、それぐらい覚えておきなさい！　失礼な！！　ワタクシは寛容ですから一度ぐらいは赦してさしあげますが、他ではこうはいかないのですからね！」
ビリビリと空気を震えさせて、フェリなんとか姫は叫ぶ。
ズンズカと肩を怒らせてあたしの傍まで来たお姫様は、ベッドの上にチョコンと座っているあたしを上から下まで眺めて「フンッ」とそっぽを向いた。
「……ま、まぁ、ちゃんと起きてきたことは、褒めてさしあげてもいいですわ。けれど、例えどれほど大切な方であろうとも……いえ、大切な方であればこそ！　その方が大変な時に自分まで倒れてしまうだなんて！　そんな弱いことでは、王宮で生き残れはしませんのでしてよ！？」
ビシィッ！　とどこかの色気魔女のように羽扇子（エヴァンターユ）をあたしにつきつけて、フェリ姫は眦をクワッとつり上げた。
「いいこと！？　ベル！　このワタクシの義妹（いもうと）となったのだから、どこに出ても恥ずかしくない一流のレディになっていただきますわ！　ええ、もちろんワタクシも鬼ではありませんから、元気のないあなたに無理は言いませんわ！　そう……まずは元気になることが先ですわね！　とりあえず、朝食程度は軽く食べてしまえるぐらいにならないと……」
（三皿目です）
「もうなってる！？　い、いえ、食欲があるのはいいことですわ。

まぁ、ここの料理長の腕はなかなかのものですからね。どんなに辛い時だって、ついついお代わりをしてしまうぐらい美味しいのですもの……うちの料理長も見習ってほしいものですわ……」

最後は小声でぼそぼそ言うフェリ姫に、あたしはしょんぼりと視線を空皿に移した。

あたしの近くに控えていたおばちゃまとおじちゃまも、一緒にしょぼんと肩を落とす。

「……なんですの？　皆様のその反応は……」

あたしはしょんぼりしたままお姫様を見上げる。

綺麗な顔のツンツン姫は、目があった途端になぜか怯んだ。

……ナゼデスカ……

「まさか、料理長の料理が口にあわなかったとでも言うおつもり？　これほどの美味を前にして、そんなことを言いはしませんわよね？」

フェリ姫の声に、あたしはますます肩を落とす。

これほどの美味とか、口にあわないとか、そういうコト以前に……

（……あたし、今……味わかんなくなっちゃってるし……）

「なんですって！？」

どんよりと視線を落とした途端、なぜかフェリ姫が叫んだ。

「味がわからないですって！？　あなた、まさか何かの病気……ハッ……いいえ、いいえワタクシ、これをどこかで聞いたことがありましてよ！」

姫様。なぜか顔を輝かせてグッと握り拳。

「そう！！　ルドヴィカの新作劇でやっていましたわ！　愛する人と引き裂かれたヒロインが、その後何を食べても味を感じなくなってしまったという悲劇……！！　ま……まさか、身近にそんな症例が出るだなんて……！！」

（……何故、そんなに嬉しそうなのだ……）

「べ、別にワタクシ、あなたの不幸を喜んでいるわけではありませんでしてよ！？　あの舞台は本当に素晴らしいものだったのです！

ああ、あなたも一度ご覧になるべきですわ。そうすれば自ずと教養も磨かれると言うものです！！」

なぜか嬉しげにそう語る小さな乙女に、あたしは胡乱な目になった。

（お義姉さま……あなたはちょっと、不思議なお方なのですね？）

「お……お義姉さま、ですって！？」

途端、フェリ姫が大きくのけぞった。

（……あれ？）

「ワタクシが、おねえさま！？　そ……そ、そうですわね、あなたはワタクシの義妹（いもうと）になるのですもの！　そう呼ばれても……そう、仕方がないことですわ！」

なにやらブツブツと険しい表情で呟くお姫様。

……違う名前で呼んだほうがいいんだろうか……

（フェリ姫様……とか？）

「なぜわざわざ違う名前で呼ぶのです！？　おねえさまとお呼びなさい！！」

……難しい人だ……

（……てゆか、心読まれてる！？）

遅まきながらそのことに気づいて、あたしは目をカッぴらいた。

そう、相変わらず喋れないあたしは、さっきからずっと無言だったのである！

なのにそれに反応しているということは、嗚呼、なんということ！　お義姉さまはレメクと同じく、あたしの心を読めちゃっているということである！

なんで！？

あたしの驚愕の眼差しに、お義姉さまは「フン」と鼻を鳴らす。

「なにを珍しがっていますの。ワタクシはアザゼル族でしてよ。この程度のこと、嗜みですらありませんわ！」

……人の心を読む『嗜み以前のモノ』ってナンダ……

唖然としたあたしに、お義姉さまはエヘンと胸を張る。ちょっと

嬉しそう。
「あなたもご自分の血統魔術や種族技能ぐらいは完璧に所得なさいませ！　それに、他族の特徴や技能を覚え込むのは王族の嗜みでしてよ。全てに勝つために、あらゆる情報を覚えなければならないのです！！　……ま、まぁ、あなたがどうしてもと言うのなら、ワタクシが教えてさしあげてもかまいませんわよ？　一応、陛下からあなたの世話も頼まれていますもの。……ええ、あなたを完璧なレディにするためにも、ワタクシの力は必要でしょうとも！」
本気で嬉しそう。
「さぁ、そうと決まれば準備ですわ！　食事はもう終わりまして？　それともまだ？　ああ、それから今日は一日お部屋から出てはいけませんわよ。三日も寝たきりだったのですから、一日はゆっくり休まなくてはなりません。もちろん、否はありませんわね？　ベル。さ、女官長、準備をお願いいたしますわ」
すぱすぱズンズン決めていくお義姉さま。
おばちゃまはクスクス笑いながら「かしこまりました」と優雅に挨拶をした。
そう、おばちゃまは女官長様なのです。なぜかあたしのすぐ傍にいてくれますが。
「そして料理長……なぜあなたがここにいらっしゃるのかは敢えてお尋ねしませんが、一応、ここは淑女の寝室でしてよ？　遠慮なさるのが普通ではありませんでして？」
「これは申し訳ございません。体調にあったものを作るために、特別に入室を賜った次第にございます」
「陛下の言でして？」
「はい」
頷くおじちゃまに、お義姉さまも鷹揚に頷く。
「では、ワタクシが何か言う必要はありませんわね。ワタクシこそ、非礼をお詫びいたしますわ」
「滅相もございません」

おじちゃまも柔和な笑顔でご挨拶。レメクが『王宮にその人在り』と称えた素晴らしい腕前の料理長様は、とっても渋い男前なおじちゃまなのです。……ええ、未だ味のほうは堪能できてませんが……

（……なんであたし、人の匂いはわかるのに、食べ物の匂いや味はわからないんだろう……）

しょんぼりだ。

おばちゃまやおじちゃまからは、暖かくて優しいイイ匂いがする。それはわかるのに、卵料理の匂いはサッパリわからなかったのだ。

そっちもイイ匂いだったに違いないのに……

「メリディス族の『匂い』に対する感覚は、通常で言うところの嗅覚と違う……そう聞いたことがありますわ。危険を感知したり、愛情を察したり……どちらかと言えば、それは直感という感覚に近いのではありませんの？　そういうものを『匂い』として感じ取るのでしたら、味覚や普通の嗅覚とは別次元の感覚ととらえるべきですわ」

（……そうなんだ……）

「あなた、ご自分の種族技能ぐらいきっちり把握なさいませ。メリディス族は数がとても少なくて、未だ解明できていないコトの方が多いですが……ワタクシでさえ知っていることを、本人が知らないだなんて……」

あたしはしょんぼりと俯いた。

本来、一族のもつそういう能力は、親から代々伝えられるものなのだ。

けれどあたしのお母さんはずっと昔に亡くなり、他に教えてくれる同族の大人はいなかった。だから、あたしはほとんど何も知らないのだ。

……一族の居る森の名前だって、レメクが教えてくれるまで、どこにあるのかすら知らなかったのだから。

「……ま、まぁ、その、ホラ、そ、そういうこともありますわ？　し、知らなかったのなら、今から知っていけばいいのですもの……

ほら！　いい加減シャキッとなさいませ！　そんなことでは、クラウドール様にお顔を見せられませんわよ！！」

お義姉さまの言葉に、あたしはシャキッと背筋を伸ばした。

レメクの名前は不思議だ。ものすごい力が沸く。

けれど、

（でも、まだ……レメクは……）

すぐにしょぼぼんと萎れてしまう。傍にレメクがいないから。

「が、我慢なさいませ！」

そんなあたしに、お義姉さまが叫んだ。

「これは……そう……愛の試練でしてよ！？」

アイノシレン！！

その瞬間、あたしの背筋がビシッと伸びた。

口がギュムムッ！　目がビカッ！！

一瞬でギンギンと熱意を迸らせたあたしに、お義姉さまは満足そうに頷く。

「そう。それでよろしくてよ」

（はい、お義姉さま！）

あたしはギラリと輝く瞳で頷きを返した。

なぜか同室にいたおじちゃま達が目を丸くしているが、そんなのは気にしない。

（レメク……！　レメク！！）

思いの全てを力に変えるのなら、心はいつだって強くなくちゃいけないのだ。

しょんぼり俯いていたって何にもならないなら、できるだけ背筋を伸ばして！　上を向いて！！　踏ん張らないといけないのだ！！

例えそれが、悲しい空元気だとしても……！！

（レメク……！！）

ぎゅむっと唇を引き結んだあたしに、お義姉さまは一瞬目を瞑り、そうして覇気に満ちた笑みを閃かせて目を開けた。

「さぁ！　では、そろそろお着替えさないませ！　午後からは陛下

もいらっしゃいますわ。それに……あなたのご友人もおいでになるはずです！　あなたが起きられたことは、もう知れ渡っているのですもの」

艶やかに笑って言うお義姉さまの合図で、壁際にひっそりと待機していたメイドさん達が動き出した。

あたしは反射的にお義姉さまを見る。

「……」

お義姉さまは一瞬だけ眉を顰めた。

そうして、あたしの近くにきたメイド達に合図をおくる。

「お待ちなさい。……あなたがた、そういえば、どちらの方々ですの？」

三人はサッとお義姉さまに礼をとった。

「わたくしどもは陛下より姫君のお世話を仰せつかった者でございます」

「そう。で、どなたの縁（ゆかり）の方かしら？」

……どなたの縁？

あたしはきょとんと首を傾げる。

メイド達が口を開いた。

「わたくしはレンフォード公爵の縁にございます」

「わたくしはセルヴェスタン侯爵の縁にございます」

「わたくしはバンカム侯爵の縁にございます」

「そう……。では、ご苦労でした。あとはワタクシが用意を調えます。あなたがたはお下がりなさい」

「「「殿下！？」」」

三人の合唱に、お義姉さまは婉然と微笑む。

「陛下より世話を仰せつかったのはワタクシもです。準備はワタクシの配下の者にさせますわ。あなた方は本来の業務にお戻りなさい。人出が足りないからと集められたのでしょう？」

「い、いえ、殿下、わたくしは」

「あなたの上に立つ方で、何か言う者がいれば、ワタクシが直接お

話いたします」
　ニッコリ、キッパリ。
　一言で反論を封じたお義姉さまは、ベットの上のあたしを見下ろして胸を張る。
「さ、ベル。参りますわよ」
　言うや否や、お義姉さまはベッドサイドに置かれていた小さな呼鈴（ベル）を優雅に掴み、リンと軽やかに響かせた。
　一瞬の間も置かず、寝室のドアからピンと背筋の伸びた美女達が入室する。そのエプロンドレスは王宮のメイドさん達のとほぼ同型だが、襟元やヘッドドレスが微妙に違う。また、同じ灰色の世界に沈んではいても、色の深さが微妙に違っていた。ということは、本来なら色そのものが違っているのかもしれない。
　……今のあたしには、やや灰色気味、やや黒気味、って感じにしか違いがわからないけど……
（お義姉さまの配下、って……メイドさん？）
　それにしても、全員が素晴らしい美女ばかりだった。
　華やかな人、涼やかな人、色っぽい人、可愛らしい人……なんというか、もう、いろんなタイプの美女を全員揃えたような感じである。
　しかも人数が多い多い……
（……全員……入ってこれるのかな……）
　十数名入ってもまだ続々と入室してくるメイド群に、最初からいた王宮のメイドさん達もたじたじになっていた。
　……気持ちはわかる。あたしも逃げたい。
（……にしても……あの籠、何？）
　美女メイド達は、全員がそれぞれ一抱えはある巨大な籐の籠を持っている。かなりの重量だと思うのだが、彼女等の足運びは異様なほど優雅だった。しかも完璧に揃ってる。
「体のことを考えれば、できれば着替えも控えて休ませてあげたいところですが……そのような姿で他の方々と面会などできませんも

の。仕方がありませんわよね」

……どう答えればいいのやら……

気になりすぎるメイド群を見ながら、あたしはジリジリとベッドの上をちっこい尻で移動した。ちょっぴり腰が逃げるのです。

「ベル。何か好きな色はありまして？」

素早くあたしの前に並んだ姫メイド達は、お義姉さまの声にバッと揃って籠を床に降ろす。そのあまりにも揃った動作に、あたしは思わずビクッと飛んだ。

（兵隊！？）

昔、祭りのイベントで見たことがある。なんとか隊とかいうすごい上の兵隊さんがやってた演目で、こんな風に全員が揃っていたヤツを……！

「それは近衛隊の集団舞踏（マスゲーム）ではなくて？　……まぁ、あれはあれで凛々しくて素敵ですけれど、あんな華のないシロモノと一緒にしないでいただきたいですわ」

心読まれた！

さらにビクッとなったあたしに、お義姉さまは「フフン」と素晴らしい笑顔。サッと片手を挙げると、姫メイド達が一斉に巨大な籠をパチンと開けた。

……だからナゼ、そこまで揃う……

「今日は……そうですわね……少し明るい色にいたしましょう。暗い気分が吹き飛ぶように！　ワタクシが藤色のドレスなのですから、あなたはクリーム色のドレス。バッスルはできるだけ軽いものにするべきですわね。かわりに飾りレースで華やかさを演出いたしましょう」

……全部同じ灰色に見えるのです……

きっと本来は煌びやかなのだろうそれらを見下ろして、あたしは困った顔で首を傾げた。

それにしても、巨大な籠の中が全部衣装とは……

衣装部屋をそっくりそのまま詰め込んできたんじゃなかろうか？

と思うような、とてつもない量である。
「姫様、妹姫様の御髪はいかがいたしましょうか？」
「そうですわね、髪は……」
お義姉さま、しばし沈黙。
「……なんですの？　この不揃な髪は！　これだけ見事な髪をもっていながら……！」
……怒られました。
見上げながらしょんぼりと肩を落としたあたしに、お義姉さまは「コホン」と変な咳払いをする。
「し、仕方がありませんわね！　左右にわけて、軽くカールさせて……そう、リボンと花で飾りましょう。リボンはもちろんレースでしてよ」
「こちらの物などいかがでしょう？　姫様のおつけになっている飾りレースと同じヴィレントの作ですわ」
「素敵ですわね。それにいたしましょう。……まぁ、ベル。なにをしていますの。座ったままでは着替えられませんことよ？」
呆れきった目で見下ろされるが、まともな反応など返せるはずがない。
テキパキと目の前で広げられるドレスやらレースやらに、さっきから呆然としっぱなしだ。（お……お姫様って……お姫さまって……）
動くとき、いつもこんな衣装舞台を引き連れてるのだろうか！？
「まぁ、違いましてよ、ベル。これはワタクシがあなたのために用意したドレスですわ。言うなればプレゼントです」
（プレゼント！？）
あたしは耳を疑った。軽く二十は超える巨大籠の中に入っている、この大量のドレスがプレゼント……！？
「陛下からも言われましたの。あなたはまだ、ご自分のドレスをあまり持っていらっしゃらないから……」
ほぅ、とため息をつきながら、お義姉さまはクルクルと自分の髪

を指で弄ぶ。
「だから、ワタクシの小さい頃のドレスを何着か、あなた用に都合してやってはくれないか、と……。ええ、もちろん、陛下のご幼少の頃の物もあなた用に仕立て直してくださるそうですわ。本当なら、新しく仕立てたものを贈るべきなのですが、今は仕方がありませんもの。諦めて、袖を通していただきますわ。それに、ワタクシ、大好きなドレスしか選んできてませんのよ？　一度しか袖を通せなかったものや、一度も袖を通せなかったものとか……！」
グッ、と握り拳で語るお義姉さま。
というか、ナゼ一度も袖を通さないよーなドレスがあるのかが不思議です。
「あら。ドレスなんて、月に何着も作ったり贈られたりするのですもの。時には体の成長に置いてきぼりになってしまう、困ったちゃんなドレスもありますわ。袖を通すことのないまま着れなくなってしまう、という風に」
……貴族って……
あたしはガックリと肩を落とした。
お風呂というお金のかかるモノを聞いた時にも思ったが、なんというか、お金の使い方というか考え方が、あまりにもあたし達と違いすぎる。
（使わないドレスが何着もあるって……これ一着でお腹一杯食べられる子が、いったい何人いることか……！！）
違う意味で握り拳なあたしに、お義姉さまはちょっと眉をひそめる。
「ベル。今まで過ごしてきた環境が違うのですもの、いきなりこちらの考え方に合わせろとは言いませんわ。ワタクシも『そのこと』は重々、陛下から伺っております。けれど、ベル。今のあなたは王家の娘。例え血は繋がらなくても、魂で陛下と繋がっているのです。毅然とした態度で、優雅に、そして時に傲慢になりなさい」
（……傲慢、って……）

「王族がたった一着のドレスに執着してたら、民はいったいどういう目でその姫を見るかしら。物を大事にするお姫様？　……いいえ、そんなことにはならなくてよ。なんて貧乏くさい姫君かと、恥ずかしいと嘆かれてしまいますわ！　まして他国の使者に、うっかりそんなところを見られてごらんなさい！　あの国の姫はいつも同じものを着て、格好はつけているが実はナスティア王国は大変な貧乏国なのかもしれないと……！！　そんなとんでもない噂を流されてしまいますのよ！？」

（お……大げさな……）

「大げさなどではありません！　もちろん、我が女王陛下の治めるこの国は、近隣諸国の中でも一・二を争うほどの強大国ですわ。ですが、それすらも王族のちょっとした行動で、誤解も甚だしい『見かけだけ』と思われてしまうかもしれないのです。現に十年ほど前、西の国で起こった戦争は、ある一国がとても慎ましい生活をしていたことがきっかけでしたのよ」

（ナゼ！？）

唖然としたあたしに、お義姉さまは胸を張って背伸びする。

「ですから、慎ましい生活、イコールお金がない、つまり国力が低いと判断されてしまったのですわ。国力が低いということは、戦を仕掛けても楽に領土をとってしまえるということ。他国がその国に戦をしかけてきた理由が、それなのです。ですがその国は慎ましいだけで、国力は大変豊かでしたから、あっという間に返り討ちにしてしまったのですわ。そしてその戦争に『ついでに』参加していた他の国々も返り討ちにして、現在に至るというわけです」

……すごい国もあったもんだ……

呆然と感心するあたしに、お義姉さまは宛然と微笑む。

「もちろん、贅沢すぎるのは慎ましいよりもかえって悪いですわ。けれど、そう……贈られたドレスが成長にあわなくて着れなくなってしまうことなんて、貴族にはよくあることですもの。そんなに気にすることはありませんのよ」

（そ、そういうものなんだ……？）

「そう思わなくてはならないのです。いいこと？　ベル。物を大事にすることはとても素晴らしいことですが、こだわりすぎるのは悪いことでしてよ。物を大切にする心とは別に、使えなくなってしまった物を諦める潔さも、人には必要なのです。……まぁ、それでも、とてもとても大切な思い出の品は、いつまでも持っておくべきだとワタクシも思いますけれど」

そう言って、ナゼかもじもじと胸元のブローチをいじるお義姉さま。なにか思い出があるのだろうか？　あのブローチには。

「さ。お説教はここまでせすわ。……ええ、まぁ、なかなかいい感じに仕上がったではありませんの。これなら、ワタクシもドレスを贈った甲斐があったというものですわ」

お義姉さまに満足げに頷かれて、そこであたしは初めて自分が着せ替えさせられていたことに気づいた。なんか腕ひっぱったり体を持ち上げられたりしてると思ったら……てゆか完了してる!?

いつのまにやらドレス（たぶん本当はクリーム色）を着せられ、髪を可愛く左右で結われたあたしは、おろおろと周囲を見渡した。

姫メイドさん達が一斉に素晴らしい笑顔を煌めかせる。

「素敵でいらっしゃいますわ、妹姫様」

「可憐ですわ、妹姫様」

「とてもよくお似合いですわ、妹姫様」

……あたしの名前は『イモウトヒメサマ』になったようです。

それにしても、どうでもいいが、ナゼいつも一斉に反応するのだろうか。しかも完璧に揃ってるし……でもセリフ被らないし……

カリコリと頭を指で掻くと、お義姉さまは「めっ」という顔であたしを見る。

「ベル。そのような仕草をするべきではありませんわ。もし髪の中が少々気になるようでしたら、こう！」

お義姉さまはとても上品に髪を押さえられる仕草……って、ソレは掻いているのですか!?

「よろしくて？　ベル。優雅に、気品ある仕草で！　どのようなものであれ、ワタクシ達に求められる仕草というのは、そういうものです。お話をする時も、イヤリングに触れる時も、そう、ドレスの皺を気にする仕草すらも気品高く！　美しく！！」

その気迫に、あたしの喉が「ぎょぐっ」と変な音をたてた。あまりの迫力に、思わず唾を飲み込んでしまったのだ。

「困ったことがあったときは、か弱く、儚く、美しく！　困ったわ、というポーズでせつなげにしているのです。そうすれば、きちんとした男性は必ずあなたの力になってくれます。悲しことがあったときは、せつなく、儚く、美しく！　今にも消え入りそうな風情でいれば、必ず男性は膝をついて助力してくれますわ。そして戦わなくてはならないときは、気高く、尊く、美しく！　我こそが正義という気迫をみなぎらせて、相手を叩きのめしてしまうのです！！」

……なんかすごいことを教えられている。

あたしは引き気味な腰を必死に押しとどめて、心にしっかりと言葉を刻みつけた。

綺麗なお姫様の語る『王族の女としてのあり方』は、なにかヒジョーに役にたつ気がするのです。

対レメク攻略で。

「さぁ！　それでは午後からいらっしゃる陛下やお見舞いの方々に披露すべく、特訓をいたしましょう！　……あぁ、けれどベル、これだけはしっかり心にとめておかなくてはいけませんでしてよ？」

バッチコイ、と気合いを入れてヨロヨロお義姉さまのもとに向かったあたしに、お義姉さまは宝石のよう瞳をキラリと光らせて言う。

「無理な時に無茶なことをするのは、勇敢ではなく無謀と言うのです。つまり、今のあなたの体調にあった特訓をしなくてはいけません。いいですわね？」

あたしはお義姉さまの瞳をジッと見つめた。

覚えている。

今は灰色にしか見えないけれど、この人の瞳は、まるで鮮やかな

海のような綺麗な青をしていた。どこかポテトさんの瞳にも似たその瞳。

それを脳裏に思い浮かべながら、あたしはニッコリと笑って頷いた。

（はい！　お義姉さま！！）

お義姉さまがナゼか一瞬、くらりと立ちくらみをおこされた。……ナゼ。

「よ……よ……よろしくってよッ！！」

そして握り拳。……ナゼデスカ？

よたよたとおぼつかない足取りで近づくあたしの、その伸ばした掌をグッと可憐な手で握りしめて、お義姉さまは爛々と輝く瞳でこう言った。

「ベル。今日からはこのワタクシが！　お義姉さまであるこのワタクシが！！　あなたの味方ですわ！！」

あたしはとりあえず、おずおずと小さく頷く。

お義姉さまの後ろには、ズラリと並ぶ美しい姫メイド達。

最初に会った時には想像もつかなかったが、ものすごく力強い味方ができたようだった。

（……ねぇ、レメク）

これを話せば、レメクはどういう反応をするだろうか。

呆れるだろうか、苦笑するだろうか――それとも、優しく笑ってくれるだろうか？

（早い会いたいって言ったら……カミサマに怒られちゃうかな……？）

もし、そんな存在がいるのならば。

あらゆる元凶のくせに、まだこんな我が儘を思ってしまうあたしを。きっとカミサマは赦してはくれないだろう。

（でもね、レメク……）

それでも、会いたいの。

話したいの。

体の奥の一番大事な場所で、トクトクと心が騒いでいるの。
けれど会えないのは、愚かで鈍いあたしのせいだから。
（……レメク）
あたしはお義姉さまの手をギュッと握り返す。
伸ばした掌を掴む手は違っていても、この温もりはレメクと同じ優しさに満ちている。
見つめ返す瞳はレメクの瞳とは違うけれど、その強さはレメクと同じ強さを湛えている。
あたしは唇を引き結んだ。
感じているものを、目に映るものを、あたしは決して忘れてはいけない。
もう二度と、同じ過ちを繰り返さないために。

4　触れる小さな熱

お義姉さまことフェリシエーヌ（やっと覚えた）姫の淑女教育（レッスン）は、レメクの淑女教育（レッスン）と『形は』ほぼ同じだった。

もともと、一月以上かけてたたき込まれた教育である。気合いさえいれれば、なんとか形ぐらいは整えられる。

しかし、お義姉様のレッスンはレメクよりも厳しかった。

何が厳しいかというと……

「固い！」

「優雅さが足りない！」

「顔がひきつってますわ！」

「あなた木偶人形ですの！？　もっとしなやかに動きなさい！」

……コレなのです……

レメクの時にはお目こぼししてくれていた『優雅さ』や『柔らかさ』を、これでもか！　と追求させられているのです。

カチコチと動くあたしは、フェリ姫に言わせれば「優雅さの欠片もない木偶」であるらしい。さっきから何度もやり直しを繰り返し、ヘロヘロになったところでようやく「よし」が出た。

……ちにそうだ……

「まぁ、これなら及第点ですわね。形はわかっていらっしゃるようだから、後はいかに美しくしとやかに『魅せるか』ですわ。……それにしても、クラウドール様もやはり殿方でいらっしゃるのね。形は教えれても、女性特有の『美しさ』を出す仕草はサッパリ……」

……レメクにそれを求めること自体、ナニか間違ってやしないだろうか……？

遠い眼差しになったあたしにかまわず、フェリ姫は優雅に室内を歩きながら、なにやら小声でぶつぶつと呟く。

「おいでになるのは、陛下とロード、宰相閣下、教皇猊下、それにバルバロッサ大神官とアロック様……ご挨拶は体調を考えて略式で

お願いするにしても、長丁場となる可能性がありますわね……猊下は極秘でいらっしゃるから、短時間で終わるとしても……飲み物の手配と軽食と……お部屋はこちらを使わせていただくのでかまわないのかしら……」

ぶつぶつぶつ。

なにやらとんでもない単語がチラホラと混じっていた気がするが、敢えて尋ねるのも恐ろしい。

（……てゆか、なんで教皇様だなんて……スゴイ人が来るんですか……）

「あなたがクラウドール様とご婚約なさったからですわ。それに、陛下のご息女にもなられたことだし」

勝手に心を読み取ってくださったお義姉さまが、すかさずそうツッコミを入れる。

あたしはちょんぼりと床に撃沈した。

「まぁ！　ベル！！　いけませんわよ。床に倒れるだなんて！　だいたい、何です！？　その美しくない倒れ方は！！」

……倒れ方にもウツクシサがいるのですか……

床にべちゃっと倒れていたあたしは、めそめそと顔を上げた。

途端、お姫様がなぜか怯む。

「そ……そんな可愛らしい形を……！　……くっ……優雅さはないけれど、小動物的愛らしさ……それで勝負ということ！？　思ってもみなかった戦略ですわ」

……思ってもみなかった解釈です……

めそめそと床に張り付いたままのあたしに、姫メイドさんの一人が小走りに駆け寄って来る。

「妹姫様。お体が冷えてしまいますので、どうかお立ちくださいませ」

そして優雅に抱き起こされた。まるでどこかの紳士のようだ。

（……おお）

新鮮な感覚に驚きながらお辞儀をすると、姫メイドさんはそれは

それは美しいお辞儀をかえしてくれた。
……ナニかが負けた気がいたします。
（……あたしには、ユウガさとか、ウツクシサとか……無いのです……）
「無いのではなく『出せていない』のです。誰だって、生まれた時は皆一緒ですわ。泣いて喚いて暴れて終わり。どこに違いがありまして？　何の違いもありはしません。……もし今のワタクシ達に優雅さがあるというのなら、それは鍛錬によって長年かけて身につけたものですわ」
しょんぼりと俯いたあたしに、胸を張ってお義姉さまがそう仰（おっしゃ）る。
だからこそ、今からがんばらなければならないのだ、と。
いつか優雅で気品溢れる、立派なレディになるために。
「そういうことです」
またもや勝手に心を読み取ってくださったお義姉さまに、あたしはちょっと遠い目になった。
（いつになったらなれるかなぁ……）
「そう遠くないと思いますわよ。やろうと思えばすぐにでもなれますわ。劇を演じているようなものですもの」
（劇？）
首を傾げたあたしに、フェリ姫はニッコリと微笑んだ。
「ええ！　人生は一つの劇ですわ！　始めた以上、最期の時まで終わらせることのできない劇！　どのように演じ、どのような結末を迎えるかは全て本人次第。劇の中なら、街中の子供がお姫様になることだってできますわ。そうでしょう？」
あたしは目をぱちくりさせた。
劇と言われてあたしが思い浮かべるのは、旅芸人の一座が広場でやっていた劇だ。
貴族や富豪が足を運ぶような劇場のチケットは、あたし達のような貧困層（もの）には手が出がない。入場料がものすごく高くて、とてもじゃないが観るなんて出来ないのだ。

だが、王都の大広場で開催される一座の劇は違う。
大きな円形広場に布で巨大なテントを作って、その中で演目を披露するタイプだからだ。
入場料は銀貨3枚から銅貨5枚まで様々あり、端っこの方ならあたし達のような人間でも入場できる。もちろん、普通はやっちゃいけないが、こっそり入ってタダ見していくことだってできちゃうのだ。
……見つかったら後でコッテリ怒られますが……
ちなみに一座のお手伝いをかって出れば、入場料無料で劇が見れる上、お駄賃までいただける。もちろん観客になれるのは全公演日程中せいぜい数時間程度だが、それでもあたし達にとってはとんでもない特典だった。
劇の演目はいろいろあるが、一番人気なのは恋物語（ラブ・ロマンス）。身分差のある男女がドキドキハラハラ苦難を乗り越え、試練を突破し、やがて迎えるハッピーエンド！　ラストでは、一緒に観ていた子達とキャーキャーはしゃぐほどの大盛りあがりなのである。
超うっとり。
（ああ！　あたしもいつかレメクと……！！）
脳裏にぽわわんとレメクを思い浮かべます。
想像の中のレメクは、あたしを怯えたような目で見つめながら華麗に微妙な逃げ腰に。……ナゼに想像の中でもつれないのでしょうね、オジサマは。おまけに想像するたびに怯えの色がひどくなってる気がいたします。
……それはともかく。
劇の中では役者がお姫様や王子様になって、キラキラした世界をあたし達に見せてくれる。
もちろん、それは舞台上のことであって、現実のお姫様や王子様になるわけじゃない。
けれど、舞台の上の王子様は、現実の王子様よりキラキラしてるし、お姫様もとても愛らしくて素敵だった。

いきなり現実で「お姫様になりなさい！」と言われたって、そんなに急になれるわけがない。

けど、演技するのだと思えば……舞台の役者さんみたいに、演じるのだと思えば……

「お分かりになったようですわね？」

目をキラリと輝かせたあたしに、フェリ姫は満足そうに頷く。

「今でしたら、丁度ルドヴィカの新作劇がやっていますわ。『アウトレーゼの姫君』はとても素晴らしい出来で、ワタクシ、観ているだけで胸がいっぱいになってしまいましたのよ！　小国の姫君と騎士の物語……はぁッ……あんなに素敵な恋が出来れば、きっと人生は何倍も素晴らしいでしょうに……！」

（……あの伯爵とはソンナ恋にならないのだろうか……？）

「伯爵は、まぁ、アレぐらいでいいのですわ！　べ、べつにワタクシ、それほど不満ではありませんことよ？　ええ、多少うっかり者で女の人が大好きであっちこっちでニヤニヤしてだらしなくてどうしようもない方ですけれど！！」

ぎりり、とフェリ姫の羽扇子が異様な音をたてた。そのままへし折られそうな勢いだ。

（お……お義姉さま、落ち着いて……！）

「え、えぇ、ワタクシ、落ち着いておりましてよ？　エエ。あんな人のことで心など乱してなるものですか。今日もガルシア伯のご令嬢のご機嫌伺いですって？　勝手に行けばよろしいのよ！！」

……なんだかものすごく大変そうだ。いろんな意味で。

思わず冷や汗が流れます。恐い恐い。

（でも、それならどうして、婚約なんかしたの？）

恐る恐る心の中で尋ねたあたしに、心を読み取ったフェリ姫が軽く目を瞠る。

そうして、微妙に視線を逸らしながら言った。

「……ワタクシ達の婚約や結婚は、言うなれば国の政策の一つですもの。ワタクシ達の自由になるようなものではありませんわ」

（エ）
あたしは絶句した。
（ということは、下手をすれば、あたしも見知らぬ誰かのところに……！？）
「クラウドール様がいるかぎり、それはあり得ませんわ」
あっさりとそう言って、フェリ姫はサッと姫メイドさん達に目配せをした。
姫メイドさん達は素早く部屋の四隅や窓際、暖炉脇などに散り、キリッとした眼差しで頷きを返す。
（……おりょ？）
「ベル。これから申し上げることは他言無用でしてよ？」
そっと体をかがめ、あたしのすぐ近くでフェリ姫は声をひそめた。
「ワタクシ達の婚約は、国の政策と……ワタクシは言いましたね？」
（はい）
あたしは頷く。フェリ姫もゆっくりと頷いた。
「王家の娘の結婚は、個人の自由になるものではありません。国同士の結びつきや、有力貴族との結びつきのために行われるのが普通です。事実、ワタクシ達は、陛下の忠実な部下として、娘という立場をとり、誰かの元に降嫁することになっているのです」
（……忠実な、部下？）
「ええ。契約をいたしましたもの。この身と引き替えに、現状の打破と輝かしい未来を」
胸を張って言うフェリ姫に、あたしはじっと息をすらつめて彼女を見つめ続けた。
お義姉さまは宛然と笑う。
「アザゼル族は流浪の一族ですわ。この身に受け継がれる血統魔術により、かの降魔大戦でも指導者ナスティアをよく助けたとされていますけれど、現在はほとんどが遊牧民として、あるいは旅芸人として各地を転々とする少数の民族です。農耕で自らの生きる土地を定め、人を増やし続けたパルム族と違い、ワタクシ達の数はとても

少なかった」
そうして視線を遠くへ馳せたフェリ姫は、どこか空虚な眼差しで声を零す。
「ワタクシの母は、ある劇団の女優でしたの。劇場で公演をすれば、全席を埋め尽くせるほどの名女優であったそうですわ。その母を見初めたのが、ワタクシの父であるシュヴァルツブルク侯爵――いえ、元侯爵ですわ」

――元。

その言葉に、あたしはキュッと唇を引き結ぶ。
フェリ姫はそんなあたしを見て、ちょっと口元を笑ませた。
「シュヴァルツブルク家はもうありませんわ。領地も親族達に奪われてしまいました。爵位こそ手放しませんでしたが、家もなく土地もない身では、爵位などあっても意味がないもの。当時のワタクシはわずか五つでしたが……負債を減らすため、結婚のお話も、持ち上がっていたのです」
（……）
あたしはそっとフェリ姫の手を握った。綺麗なお義姉さまの手は、表面がほんのすこしひんやりしている。
けれど、握っているとすぐにそれがほんのりと暖かくなった。
「陛下に養子の話をもちかけられたのは、それよりも前のことでしたわ。父は国の要職に就いていましたし、陛下とお会いする機会にも恵まれていました。ワタクシの力のことで、ご相談にのってくださったこともあるようなのです」
（……力？）
「ええ。アザゼル族の血統能力でもある、心話です。今、あなたの心を読み取っている能力ですわ」
（なるほど）

あたしはフンフンと頷いた。すると、フェリ姫はちょっと苦笑する。

「素直というのは、素晴らしいことですわね。あなたはまるで、海綿が水を吸うようにいろんなものを吸収してしまうのでしょう。偏見や独断を挟まずに」

……それは買いかぶりというものです。

なにせレメクやケニードとの初対面時、思いっきり偏見をもっていたのはこのあたしなのでございます。

昔のイロイロと思い出しながらそう心の中で呟いたあたしに、フェリ姫は柔らかく微笑んだ。

「……ねぇ、ベル。大昔、アザゼル族の『心話』は、それほど特殊な能力ではありませんでしたのよ？　魔法というものが、この大陸に残っていた時代……その頃ならば、ごくあたりまえの能力だったのだそうですわ。言語が発達する前からもっていた基本能力だとすれば、ワタクシ達の一族は、原初の頃からそれを無くすことなくただ持ち続けているだけ、ということになるのでしょう」

難しく言われて、あたしは微妙に眉を垂れさせた。

頭の中で整理整頓。

簡単に言うと、原始人がもってた能力を、失わずに持ってるってことですね？

「……ちょっと引っかかりますが、まぁ、そういうことです」

コホン、とお義姉さまは咳払い。

何か言い方がまずかっただろうか？

「まぁ、もっとも、アザゼル族の『心話』は、無節操に誰彼かまわず人様の頭の中を覗き込むようなものではありませんけれど。心を開いて……簡単に言うと、心の中で『こちらに語りかけて』いらっしゃる方の言葉や、強い感情を伴った言葉、そういったものを読み取ってしまうだけなのです」

（……つまり？）

「つまり、『本来は』あなたが内緒にしておきたいことや、心の中

に仕舞っておいてあることまでは、ワタクシ達には読み取れないということですわ。ワタクシ達だって、好きで読んでいるわけではありませんもの」

（……ありゃ）

あたしはバツの悪い思いで首をすくめた。勝手に読み取られていると誤解していたのだ。

「ええ、よくそう誤解されてしまいますわ。けれど、ワタクシ、陛下ともお約束しましたのよ。国家の大事や『どうしても必要』な時以外は、みだりに人様の心の中を覗いたりしない、と」

（ふむふむ）

「逆を言えば、どうしても必要な大事な時だけは、ワタクシは人の心の中を覗きます。そしてその力こそが、ワタクシの父が陛下に相談した事なのですわ」

（相談した事……？）

どこかしょんぼりと肩を落としたフェリ姫に、あたしは首を傾げた。姫メイドさん達が、気遣わしげな眼差しを彼女へと向ける。

フェリ姫はぽつりと呟いた。

「ワタクシは……生まれつき、読み取る力が強かったのですわ。お母様には聞こえない『隠された』心の声さえも、ワタクシには普通に……そう、ちょっと小声程度の形で、聞こえてきてしまっていたのです。あの頃、幼かった私はそのことに気づかずに、ごく普通にそれを交えて会話をしていたのです。……周囲は大混乱に陥りましたわ」

……それはそうだろう。

心の中の声まで筒抜けで、それに対するコメントを子供から返されれば、場合によっては修羅場や愁嘆場に発展するだろう。

「その頃、お父様には愛人がいたのですわ」

……ド修羅場だ。

「貴族ですもの。そういったことがあっても不思議ではありませんわ。アザゼル族は重婚可能な一族でいたから、別にそのことに対し

てそれほど強い反発があったわけではありませんのよ？　……けれど、父はパルム族でしたの」

（げ）

あたしは目を剥いた。

フェリ姫は頷く。

重婚はおろか、愛人を認めることすら稀な、パルム族が浮気！？

「それはもう、大騒動でしたわ。その頃、運悪くお父様が出資していた事業が破綻し、商会が倒産してしまったのも逆風となってしまいました。父は爵位を追われ、けれど家屋敷や土地を売っても爵位にだけはこだわり続け……ワタクシを五十も上の貴族に嫁がせることで負債を補おうとしたところで……葡萄酒にあたってお亡くなりになってしまいましたの」

（……）

あんまりな内容に、あたしは絶句してただ話に聞き入る。きゅっと強く手を握ると、フェリ姫はほんのりと微笑んだ。

「陛下は、それよりも以前から……ワタクシの力を知った時から、養子に来ないかと話を持ちかけてくださっていました。ワタクシの力は、制御しなくては本人はおろか周りまでも破滅させるだろうから、と。……陛下も、真実の紋章と、ご自身のもつもう一つの紋章のせいで、ワタクシと同じ……いいえ、ワタクシ以上の苦痛を味わっておいでになったのです」

（アウグスタの持つ……紋章？）

「ええ」

頷いて、フェリ姫はものすごい至近距離まで顔を近づけ、あたしに小さく耳打ちした。

「王国の秘宝の一つ――光の紋章です」

光の紋章。

その名前にあたしは目をまん丸に見開いた。
闇があるなら光があるのは道理だが、そんなものを……アウグスタが持ってる？
そして――

（……光の紋章って、どんな紋章……？）
あたしは大きく首を傾げた。
炎とかそういう、わかりやすいモノならなんとなく『こうじゃないかな？』と想像できるのだが、光なんて言われるとピンとこない。
夜にカンテラがわりに明かりを灯す能力……じゃあ、無いよね？
「光の紋章とは、名の通り『光』そのものの力。闇夜を照らすこともできれば、光そのものの持つ純粋な熱で物を焼き尽くすこともできる力です」
……なんか意外だ。もっとキラキラした、明るい感じのものを想像していたのだが。
「強い光は強い熱を伴いますわ。時に炎よりも強く、純粋に対象を消滅させてしまうほどの力なのだそうです。伝承によれば、紋章の中でも一・二を争うほどの攻撃力を秘めた紋章なのだそうですわ」
（そ……そうなんだ）
あたしは絶句した。なんかもう、想像以上に危険な紋章のようです。
「紋章の中でも、光と闇、罪と罰、火・水・土・風・雷・雪・鋼は特に攻撃力が特化しているので有名ですわ。とはいえ、ワタクシもそちらの分野にはあまり詳しくはありませんから、一般教養範囲の中で、のお話ですが」
（……その一般教養も無いあたしって、いったい……）
「あら。王族としての一般教養ですもの。これから覚えていけばよろしいのよ。……さて、その光の紋章ですが、ワタクシ、この紋章の最も恐るべきところは、人の精神を支配することにあると思いま

すわ」

人の精神を……支配する？

意味がわからずに眉をひそめるあたしに、フェリ姫は軽く肩をすくめる。

「『人は光と闇の両方から成り立ち、体は闇の領域、精神（たましい）は光の領域となる』……ということはご存じ？」

（その言葉は……）

いつか、どこかで聞いたことがある。

今ではない時、此処ではない場所で。

（……ポテトさん……）

「……！　……そう……そうなのですの。あのロードが、自らあなたに語られたのですね」

なにかひどく畏れ多いものを語るように、フェリ姫はブルリと体を大きく震わせた。

……というか、ロード、ってナンダロウ？

「あなたが、その……『ポテト』という風に呼んでいらっしゃるお方のことですわ。その名前は、あの方の――言うなれば『召使いとしての』お名前なのだそうですわ。そんな名前、畏れ多くてワタクシどもでは使えませんでしょう？　ですから、あの方をお呼びする時は、ロード――ナイトロード（夜の王）様とお呼びするのですわ」

あたしはポテトさんの凄まじいお顔を思い出した。

……なるほど。『ポテト』という名前よりは似合ってる。

「あの方のことは……まぁ、謎の人、というのが王宮全体の強制認識ですから、ひとまず横に置いておきますわね」

……お義父さま。謎の人で通っているのか。

てゆか強制認識ってナンダ……

「件の光と闇の領域の言葉は、そのまま紋章にも当てはまるのだそうです。『闇の紋章』が肉体を司り、『光の紋章』が精神を司る。

光の紋章をお持ちの陛下は、あらゆる全ての人間の精神を覗くことも、操ることも、壊すこともできるのだそうですわ。……人としての意識が、それを許容することができれば……のお話ですけれど」

お義父さまの不思議認識に首を傾げていたあたしは、フェリ姫の言葉にちょっととまどった。

（えぇと、ちょっぴり聞き逃しちゃったけど、つまり、光の紋章というのは、心を覗いちゃったりできる、ちょっとアレな紋章なのですね？）

「……エエ……まぁ……敢えてツッコミはいたしませんわ。その程度の認識でもよろしくてよ？」

微妙に怒られました。

「コホン。そんな紋章を宿しておいででしたから、陛下もかなり辛い思いをされたらしいのです。……ベル。想像ができまして？　お部屋に誰もいなくても、いつでもどこからか声が聞こえてくる、ということがどういうものか。一人部屋に蹲っていても、呪うような恨み声や、けたたましい金切り声や、大笑いや、口にするのもおぞましい言葉が聞こえ続けるということが……どういうことなのか」

（……）

あたしは力無く首を横に振った。

正直、想像もつかなかった。

フェリ姫は力無く微笑む。

「……ええ。想像がつかなくて、当然ですわ。ワタクシにも、あなたが今まで経験してきたという、下街の暮らしは……想像もつきませんでしたもの。そんな風に、人は、自らが経験したことでなければ、辛さや痛みを本当の意味では理解しえないのでしょう。想像したり、慮（おもんばか）ることはできますが」

（……）

あたしはコックリと頷いた。

互いに手を強く握り合う。触れあった小さな熱に何を感じたのか。

フェリ姫はさっきより元気に微笑んだ。

「陛下は、ワタクシの苦しみも悲しみも、全て理解してくださいました。同じ苦しみを味わった者として。陛下は、自分に苦しみを解いてくれた人がいたように、ワタクシにとって自分が、苦しみを解ける者になれればいい……そう言ってくださったのですわ」

お義姉様は、そう言って自分の額を指した。

「ベル。ここをよく見ていてくださいませ。一瞬だけですから、見逃してはいけませんわよ」

あたしはその白い額をじっと見つめる。

ふと、その額に赤い何かが浮かんだ。一瞬だけ。すぐに消えてしまったそれは、小さな円を中心に、上下左右に羽根のような模様を伸ばした形をしていた。

「今のが『光の紋章』の加護――その紋様です。この力によって、ワタクシは制御できなかった強すぎるアザゼル族の能力を、他の同族と同じぐらいに引き下げることができました。……完全に無くすことはできませんでしたが、日常生活には困らなくなりましたわ」

（……お義姉さま……）

なんと言っていいかわからず、あたしはギュッとフェリ姫の体を抱きしめた。

「……ありがとう、ベル。けれど、ワタクシはまだマシですわ。ワタクシの力は種族特有のもの。幼い頃でも、お母様という理解者はおりましたもの。……けれど、陛下はそうではなかった。紋章という尋常ならざる力を宿したために、どれほど運命を狂わされてしまったのか……」

ギュッと抱きしめ返してくれたフェリ姫に、あたしはやるせない気持ちで唇を引き結んだ。

人の心を読める――その苦痛は、あたしにはわからない。

けれど想像することはできる。読みたくもない心を読んでしまう苦痛。知りたくない本音を嫌でも知ってしまう苦痛。……知っている。世の中は、善意で満ちているわけでは無いことを。

知らなければ知らないままでいたほうがいい……そんなことが数多くかることを。

もしそんなことまでも『知ってしまう』状態になって……理解者のいないまま、一人で苦しまなくてはならなかったとしたら……それはどれほど苦痛だろうか。

「ワタクシは紋章を宿すことはできません。ですから、紋章を身に持つ方々の苦しみはわかりません。……けれど、紋章が紋章である限り、なにかしらの苦痛はあると思いますの。例えどのようなものであれ……あの力は、人ならざる者の力なのですから」

（……人ならざる者の、力……）

あたしは目を瞠った。

脳裏に畏怖をたたえたレメクの瞳が浮かんだ。

――それは人の手にあるまじき、人ならざる者の力です。

そう言ったレメク。けれどあれは、紋章では無く魔法のことを語っていた。

けれど――

「紋章術というのは、血で継承する純粋な血統魔術です。けれどそこに宿る力は、人の手で創り出されたものではありません。……紋章術とは、尋常ならざる強大な力を、『紋章』という形に押さえ込んだもの――ワタクシはそう聞いてます。今はもう伝説でしかありませんが、遙か昔、山が吹き飛ぶほどの強大な火の力が世に現れた時、その『力』を自分自身の『身』に封じ込めた偉人がいたのだそうですわ。その方が、現在のクラヴィス族の始祖なのだそうです。……そして、封じ込めた力が象ったのが【炎の紋章】。同じように、国一つ水没するほどの水の力が現れ、その力を封じた時、その方の

身に現れたのが【水の紋章】と呼ばれる力なのだそうです」
（……それって……）
息を呑んだあたしに、フェリ姫は頷く。
「……ええ。そもそも紋章術というのは、この世界の力そのものを身の内に封じ込めることで生まれた魔術です。かつてクラヴィスと呼ばれた男が成し得た奇跡の秘術が、今日の紋章術なのですわ。もう何百年も昔のお話のようですから、それを知っている者は稀でしょうが……指導者ナスティアや、彼女と共にあった同族の勇者というのは、皆そのクラヴィスの末裔なのだそうですわ」
あたしはぼんやりと頷いた。
だからこそ、彼等は『クラヴィス』族と呼ばれたのだ。かつて偉業を成し、その成果でもある紋章を一族に継がせた男の名をとって。
今日、この国がナスティア王国と呼ばれるようになったように。
「一族名に関しては、我がアザゼル族も同じですわね。確か、一睨みで竜をも殺したとされる勇者の名をとって、一族の名としたのだそうです」
（一睨みで？）
目をパチクリさせるあたし。
睨み一つでドラゴンを倒すだなんて、いったいどんな勇者なんだろうか？
「アザゼル族の血統魔術は精神魔術ですもの。いくら強固な鱗をもっていても、精神を殺されては生物は生きていけませんでしょう？……もっとも、そんな強い魔術を使える者など、もう一人もいないでしょうけれど」
……なるほど。
「そんな風に、一族名というのは誰かの、または何かの名前をそのままつけていることが多いのです。メリディス族は、確か医術に長けていたことでついた名前だと伺いましたわ。メリディスの血統魔術は何だったかしら……？」
すみません。存じません。

しょんぼりとしたあたしに、フェリ姫はちょっぴり苦笑する。
「まぁ、仕方がありませんわよね。あなたも、早くにお母様を亡くされたのですものね」
（……あなた『も』？）
「ええ。ワタクシのお母様は、お父様と一緒にお亡くなりになってしまいましたもの。葡萄酒の中毒で」
そのとき、なぜあたしの頬がピリッと震えたのか、あたしにはわからなかった。
頬を押さえて首を傾げているあたしに、フェリ姫はそっと目を伏せる。
「陛下が迎えに来てくださったのは、お父様とお母様の葬儀を執り行う直前でしたわ。勝手にワタクシの籍をご自分の籍に入れようとしたバンカム侯爵から、ワタクシを救ってくださったのです。そうして、ご自分の養女としてワタクシを迎え入れてくださったのですわ」
（……アウグスタが）
「ええ。陛下が」
頷いて、フェリ姫は強い眼差しで顔を上げた。
「だから、ワタクシは陛下のためならばなんでもいたしますわ。陛下はワタクシをレンフォード公爵の公子、シーゼルに嫁がせるおつもりでいらっしゃいます。シーゼルは末の公子ですが、今いるご兄弟の中で一番お母上の身分が高いのです。故に、次期レンフォード公爵とみなされています。その方の後見人として、陛下がつく。そのために、王女の称号を得たワタクシがシーゼルの元に嫁するのです」
（……そのために）
「そう……ですがこれは、何もレンフォード公爵……というより、シーゼルのためだけのことではありませんわ。前国王の妹君が降嫁されたレンフォード公爵家には、もっともっと強い絆が必要なのです。マルグレーテ様はお美しく、才気に溢れた姫君でいらっしゃい

ましたが……それ故に、今も王家の椅子に未練がおありのようですから」

あたしはぎょっとなってフェリ姫を見る。お義姉さまの目はギラギラと熱く輝いていた。

「おわかりかしら。未来のお義母さまは、シーゼルに期待しているのですわ。今の陛下には御子がおられませんもの。王家の直系と呼べるのは、陛下を含めてわずか五名だけ。それほどに少ないのです。シーゼルは、前国王陛下の妹君の血を引いておいでです。さらに、シーゼルのお父上であるレンフォード公爵のお父様は、前々国王陛下の弟君でいらっしゃいました。つまり、血がとても濃いのです」

……確かに。

「王家直系の男子であるアルカンシエル様は高齢の上、教皇の座にお就きですし、ステファン老はお亡くなりになってしまいました。マルグレーテ様は降嫁されたので、ご自身以降の血筋は王族ではありません。レンフォード前公爵はご存命ですが、なにぶんご高齢でいらっしゃいますわ。その御子でいらっしゃる現レンフォード公爵は、王族の血に連なるだけで、王族そのものではありません。シーゼルも同じくです」

なるほどなるほど。

あたしはフンフンと頷く。

「ですが、王族の血を濃く引く男子というのは、とても貴重なもの。故に、シーゼルはとても微妙な位置にいるのです。下手に他の有力貴族とくっつき、国家の転覆を謀られては一大事ですからね。ワタクシがしっかりあの男の首根っこをひっつかまえて押さえつけないといけないのですわ……！」

……なんだか最後の部分に、異様な気迫を感じました。

「なにせあの男、すぐにフラフラとあちこちに……！　……い、いえ、ワタクシは、次期レンフォード公爵夫人として、そして陛下の忠実な部下として、あの男……いえ、あの方の手綱をとっておかなくてはいけないから、怒っているのですわよ？　あんな男……いえ、

あの方の浮気性に、苛立っているわけではありませんわ」

（……イエ……あぁ……）

あたしは一生懸命ツッコミを飲み込んだ。

飲み込んだのだが、心の中はバレバレだった。

「違うと言っておりますでしょう!?　ワタクシは、あんな浮気男のこと、なんとも思ってなどいませんもの！　そうよ！　あの時、ワタクシを助けてくれるよう、陛下に頼み込んでいかれたのだって、どうせワタクシがとても美しかったから、ちょっと魅了されてしまっただけのことですわ！」

なにやら不思議な言い訳をされている。

しかし、それにしても……

（……お義姉さま。アウグスタの養女になる前から、シーゼルと知り合ってたんだ？）

「存じません！！」

ものすごい勢いでピシャリと言いきられた。さっきまでのヒソヒソ声はいったいなんだったのか。

唖然としたあたしとプリプリしているお義姉さまに、部屋で番人よろしく立っている姫メイドさん達がくすくすと笑っていた。

「と、とにかく！　そんな風に……ワタクシ達『王女』は、あらゆる事態を想定して、あちこちに嫁がされる、言うなれば陛下直属の私兵なのですわ」

後半を小声で言って、フェリ姫はあたしと繋いでいる手とは別の手で、指折り数えながら言った。

「第一王女であられたマリアンヌ殿下は、東のバルディア国に嫁がれましたし、第二王女であられたエリーナ殿下は、北のアシリア王国に嫁がれました。第三王女であれれたルイーゼ王女は、南のイルベスタン王国へ。第四王女ナザゼル殿下と第五王女ナフタル殿下は、共に西のイステルマ連邦の方に嫁がれています」

あたしもちっこい指で数えた。

ひーふーみー……えぇと、五までわかって、十一番目がお義姉さ

まで、十二番目があたしだから、あと五人かな？

「一応、後で系譜を見ていただきますわ。それに、教本をいくつか持って来て差し上げます。王女として知っておかなければならないことは、山のようにありますからね。貴族年鑑（デブレット）も全部覚えてしまわなくてはいけませんことよ？」

（デブレット？）

首を傾げるあたしに、フェリ姫はムンッと胸を張る。

「高位の貴族になれば、第二第三の爵位ぐらい持っています。例えばワタクシの婚約者であるクレマンス伯爵は、レンフォード公爵家の末の公子でいらっしゃいます。ですが、正式に名前を言う時は、伯爵はレンフォードでは無くクレマンスを名乗ります。……では、クレマンスという名前がどこから出てきたのか」

（どこでしょう？）

さらに首を傾げたあたしに、フェリ姫は指を一本ピンと立てて言った。

「答えは簡単ですわ。レンフォード公爵の持っていらっしゃる二番目の爵位が、伯爵。その位（タイトル）がクレマンスなのです。そして公爵の嫡子であり、次期レンフォード公爵であるシーゼルは、この位（タイトル）を名乗るのですわ」

（ほぅほぅ）

あたしは感心するやら呆れるやら。なんともいえない嘆息をついて頷いた。

（なんてややこしい……）

「慣れればそうでもありませんわ。けれど、名乗る名前が血縁を示す名前で無いのですから、何かで確認しないと誰が誰と血縁であるのかわからなくなってしまいますでしょう？　ですから、貴族年鑑（デブレット）が必要になるのです。そこに全て載っているのですもの」

（……ひぃぃぃ……）

言っちゃあなんだが、そんなものを見せられたところで、あたしにはきっと覚えきれないと思います！

さすがに血の気が引いたあたしに、フェリ姫は苦笑する。
「まぁ、そんなに怖がらないで。これらも自然と身についていくと思いますわ。要は慣れですもの。それに、クラウドール様やアロック様がご一緒なら、お二方が全てご存じですわ。あのお二人は生きた辞典のようなお方ですし」
（……生きた辞典……）
あたしは二人の顔を思い出した。
……確かに、あの二人の物知り具合は尋常でなく凄まじい。生きた辞典とは、まさにその通りだ。
（……ん？　てゆか、ケニードのこと知ってる……？）
「あら、知らないレディなんておりませんわよ？　あの方は、とても素敵な宝飾類を数多く取り扱っていらっしゃるのですもの」
（なるほど）
あたしは納得した。
そう言えば、ケニードはアロック宝飾店の店主様でもあったのです。
「王宮のレディのほとんどは、あの方の店の顧客ですわ。ご本人もとても素敵な殿方ですもの、当然ですわよね。あの方とクラウドール様が並ぶと、それはもう見事で……！」
どこかうっとりとそう言うフェリ姫に、部屋中の姫メイドさん達も一斉に大きく頷く。その揃った頷きと握り拳と夢見る瞳がとても気になった。
（有名……なんだ？）
「ええ！　それはもう！」
……そうなんだ。
あたしはちょっぴりしょんぼりと肩を落とす。
そりゃ、レメクはものすごく素敵だし、ケニードだってとても美形だ。どっちも非常に目立つ外見だから、一人や二人、憧れてる女性がいたって当たり前だと思ってたけど……
（なんか……複雑……）

ちょっと寂しいような悔しいような、どこか悲しいような……しょぼぼんぼん。

「あら、何を落ち込んでいらっしゃいますの？　ご自分のご婚約者が人気で、何が悪いというのです？　それに、あの方は大変厳格で冷たいお方ですから、遠目に憧れる方は多くいても、近くに寄れる者など一人としていませんでしたわよ？　アロック様も素敵で可愛らしいお方ですが、違う意味でワタクシ達など眼中外でいらっしゃるようですし」

（？　そうなんだ？）

「ええ。そうですとも」

しょんぼりコテリと首を傾げるあたしに、フェリ姫はフフフと謎笑顔。

「だってアロック様は、クラウドール様に憧れていらっしゃるんですもの。うふふ。ワタクシ達でどんな誘惑をしたって……ねェ？」

「「「「「左様でございますわ、姫様」」」」」

見事に揃った声で姫メイドさんが鮮やかに笑う。

その全員の超笑顔がスゴイ謎。

（……なんで嬉しそうなんだろうか、みんな……）

確かにケニードはレメクスキスキ人間だが。

（でも、ケニードは前の第二王妃様がすっごく好きだったんだから、同じようなタイプの人に弱いと思うんだけど……？）

あたしは心の中でフェリ姫に問いかけた。

途端、フェリ姫がギクリと身を強ばらせる。

「ベル！　……その方のお名前は、決して王宮では出してはいけませんことよ」

（……その方のお名前……？）

あたしは眉をひそめる。

フェリ姫は一層声をひそめて言った。

「……レティシア第二王妃様のことです」

その瞬間、姫メイドさん達が一斉に息を呑んだ。ぎょっとした顔

で、慌てて周囲の気配を深く探る。緊迫感が伝わってきて、あたしは思わず身を縮こまらせた。

（な……何？　この反応……？）

「まぁ！　……当たり前ではありませんの！　誰があなたにその名前を語ったのか……あぁ……いえ、アロック様でしたら、あのことをご存じなくても仕方ありませんものね。もうずいぶん昔のことですし」

十二歳の少女に『ずいぶん昔のこと』と言われても、年代がちょっとわかりません。

困り顔で見上げるあたしに、フェリ姫は仕草でカウチを薦めてくる。並んでそこにチョコンと座ると、フェリ姫は小声のままで語った。

「ベル。先程に増して、このことは他言無用ですわよ。あなたも王家の娘となったからには、これは絶対に知っておかなくてはいけないこと……だからワタクシは語るのです。いいですね？」

強い眼差しと声に、あたしはおずおずと頷く。

なんだか、とてもオオゴトな予感。

「レティシア様のお名前は、王宮では禁忌なのです。まして陛下の養女となったワタクシ達は、決して口にしてはいけない御名なのですわ」

（……なんで？）

あたしは首を傾げる。

フェリ姫は一層声をひそめた。姫メイドさん達も万が一の盗み聞きを警戒しているようだ。

そんなに気を遣わなくてはいけない『内緒話』というのは、いったいどういうものなのか。

あたしは背筋を這う嫌な気配を感じながら、じっとフェリ姫の言葉を待った。

フェリ姫が口を開く。

そして、ほとんど消え入りそうな声で小さく、こう言った。

「その方は、陛下を亡き者にしようとし、果たせず自害された方だからです」

5　優しさは翼を与え

（亡き者に……って、殺そうとしたってこと！？）

あたしの驚愕の心声に、フェリ姫は険しい表情のまま頷いた。

「そうです。……恐ろしいことに、陛下……いえ、当時は王女殿下であられたアリステラ女王陛下を殺害なさろうとしたそうなのです」

（！！！）

あたしは息を呑んだ。

（アウグスタを！？）

正直、最初に『陛下を亡き者以下略』と聞いた時、アウグスタの前の王様のことを言っているのだと思っていたのだ。だが、違っていた。よりにもよって、あのアウグスタをそんな目にあわせようとしたと言うのだ！

（そんな……どうして！？）

「それは……ワタクシにも詳しいことはわかりませんの。ワタクシ達が生まれるよりも前のことなんですもの。事が事だけに誰彼構わず尋ねるわけにもまいりませんでしょう？　それに、これは王宮内での公然の秘密なんですもの」

（……公然の秘密？）

首を傾げたあたしに、フェリ姫は嘆息をつくようにして頷いた。

「そうなのです。……ベル。本来、王族の方が誰かに殺められかけたのなら、その相手は裁判の上、公開処刑になるのが普通です。一族の方も連座、関係者も同じく……それぐらい恐ろしい大罪なのですわ」

あたしはコックリと頷いた。王様達に手を出せば死罪、というのは、あたし達だって知っている。

「けれど、第二王妃様は処刑はおろか裁判もされておりません。だから……この国の大多数は、そんな事件があったことも知らないのですわ。ワタクシも、陛下の養女として王宮に招かれるまで、そん

な話は聞いたこともありませんでしたもの。そして……公然の秘密ということは、王宮の、一定以上の立場にいる方々にとっては、ごく普通に皆が知っているということです。けれど、誰もそれを口にすることができない……それぐらい憚りのある事、だということです」

（……）

頭の中が混乱しているあたしに、フェリ姫はちょっと笑う。

「誰も喋ってくれませんし、まさか陛下ご本人にそれを尋ねるわけにもまいりませんから、事件そのものの詳細はワタクシも存じませんのよ？　それでも……今の状況はなんとなく分かります。……フェン、紙とペンを」

呼ばれた綺麗なメイドさん――あたしを抱き起こしてくれた人だ！――は、素早く上質の紙とペン、そして何故か綺麗な石でできた大きな器のようなものと燭台を持ってきた。

「ありがとう。――ベル、字は……えぇと……お読みになれまして？」

（難しくない単語なら……）

しおしおと答えると、フェリ姫はむしろ驚いてあたしを見た。

「素晴らしいですわ。ずいぶん上達なさいましたのね！」

……なぜお姫様があたしの勉強の進行状況に驚くのだろうか……

「陛下から伺っておりますもの。孤児院にいらっしゃった子達のほとんどは、文字を教わることなく放置されていたのだと。……あの、恥知らずな人達のせいで！」

恥知らずな人達というのは、たぶん前孤児院院長や神官達のことだろう。裁判で裁かれた彼等は、国の慈善事業の一つであった『孤児の子供達に文字を教える』ための費用を自分達のお金にしちゃっていたのだ。文字を教える教師になるはずだった神官達もグルである。

……そういえば、お金、ちゃんと全部戻ってきたんだろうか？

そのあたりの詳しいことは説明されてないから、未だにあたしに

はサッパリだ。
……まぁ、別にいいんだけど。
「お金のこと……？　彼等の財産のほとんどは没収されましたから、それなりに回収できたのではないかしら？　それよりも……そんな環境にいらっしゃったのに、もう読めるだなんて素晴らしいですわ。とても努力なさったのね」
優しい手に髪を撫でられて、あたしはテレテレと俯いた。ええ。とても努力しましたとも。レメクと交換日記したいから。
（……レメク）
ふと、ストンと意識が後ろに落っこちた。
あれ？　と思う間もなく――フェリ姫のビックリした声で目を覚ました時には、なぜか仰向けにソファに転がっている。
おりょ？
「ベル！」
うぉぅ！　姫様が目の前にッ！！
相変わらず綺麗なお顔に見つめられて、あたしはビクッとなった。
（にゃんです！？）
「何、って……いきなり倒れられたら、驚くのは当然でしょう！？もう！　……まぁ、まだ本調子では無いということでしょうけれど」
あたしを引き起こしながらそう言って、フェリ姫はしみじみと嘆息をついた。
「それにしても……あなたは本当に、あの方が大好きでいらっしゃるのね」
あの方とはどの方でしょう？
「クラウドール様ですわ」
ツキンと胸が痛んだ。
あたしは「？」の顔で自分の胸を見る。
なんで痛かったのか、よくわからない。
「クラウドール様のお体は、近日中に癒えるとのことですわ。あな

たも、女官長からお聞きになったのでしょう？」
　コックリ。
「それでも、そうやって……思いに沈んでしまうほど心配してしまうのは、やはりそれが『愛』だからなのでしょうね……！」
　お姫様。握り拳でウットリ。
　見ればメイドさん達も頬に手をあててウットリしていた。
　皆様はアイという単語にとても弱いようです。……あたしもだけど。
「さ。その愛にかけて、あなたは立派なお姫様にならなくてはね！――そこでお話を戻しますけれど、当時の王宮の状況はこんな感じだったようですわ」
　フェリ姫はそう言って、綺麗な紙にペンでサラサラと名前を書き始めた。……とても綺麗な字なのです。……あたしの字と大違いだ。
「文字も絵だと思って書いてみなさい。そうすると美しい形というのがどういうものか、理解できますから。――さ。できましたわよ」
　そう言って見せられた紙には、複数の人の名前が書かれていた。
【国王】レーブレヒト。
【第一王妃】アントワール。
【第一王女】アリステラ。
【第二王妃】レティシア。
「このレーブレヒトというのが、先王陛下ですわ。あまり良い噂は聞きません。王宮の腐敗はこの方の時代に頂点に達したと言われるほどのお方です」
　つまり、最悪だったわけですね。
「アントワール様はワタクシ達の陛下のお母様ですわ。それはそれは気高くお美しい方だったそうです。……ただ、少ぉし、ヤキモチ焼きさんだったみたいですわね」
　あたしはフェリ姫をジッと見た。
……なるほどなるほど。

「……どういう意味ですの？」
……イエ。なんでもないのです。
第一、血は繋がっていないから、似る道理が無いのです。
「……コホン……。で、問題のレティシア様ですが、こちらの方はメリディス族のお方で、バンカム侯爵が主催されていたご領地での狩猟の際、シャーリーヴィの森で陛下と出会われたことで王宮に招かれたお方です」
……何故だろう、頬がビリッとしました。
「大変お美しい方で、絶世の美女と言われたアントワール様に比肩していらっしゃったそうですわ。……おまけに、その珍しい髪の色もあって、諸国の方々にも絶賛されておいでだったとか」
……その場合、アウグスタのお母様の立場はどーなったんだろーか……
「鋭いですわね。そう、第一王妃であられたアントワール様よりも褒めそやされてしまったのですわ。おまけに、レーブレヒト陛下はレティシア様を溺愛なさっていたそうです」
（……うわっ……）
あたしの背筋に異様な震えが走った。寒気というやつだ。
（……それって……）
「ええ……もう、ドロドロの愛憎劇だったらしいですわよ。当時の王宮はまっぷたつ！　第一王妃であり、次の王となるアリステラ陛下……いえ、殿下をお産みになったアントワール様を擁護し、秩序を保とうとする方々と、陛下の寵妃であるレティシア様を擁護し、王宮の奥から権力を得ようとする方々と……。実際の所、レーブレヒト陛下はレティシア様が仰る事なら、なんでも叶えてさしあげたでしょうから、力関係は非常に微妙だったそうですわ」
微妙って……レティシア様のほうが強かったんなら、圧勝じゃないんだろうか？
首を傾げたあたしに、フェリ姫は微苦笑を浮かべる。
「レティシア様は、いっさい、政治に口を挟まなかったそうです。

今日においても、レティシア様を悪女と呼ぶ者がいないのは、そのためですわ。先王の寵を一身にうけながら、何の欲も出さず、ただ後宮で静かに生きていらっしゃった……もし、アリステラ王女殿下を殺害しようとした、という事がなければ、今でも『無欲の人』として称えられていらっしゃったことでしょう」

あたしはキュッと口を引き締めた。

だったら……何故、そんな無欲な人が、アウグスタを殺そうなんてしたのだろうか？

「……そのあたりのことは、ワタクシにもよく分かりません。情報が足りないのですもの。……ただ、愛憎劇とワタクシ申しましたでしょう？　レティシア様は確かに無欲な方でしたが、陛下の愛情は一身に受けていらっしゃいました。アントワール様はそれが面白くなくて、ことある事に、その……いじめていらっしゃったようですわ」

（……うわぁ……）

「もしかしたら、そのことが原因だったかもしれません。……けれど、事件が起こったのはアントワール様が亡くなられてから何ヶ月か経った後のことなのです。憎いというのなら、アントワール様の方でしょうから……あぁ、でも……恐いアントワール様が亡くなったから、そのご息女であるアリステラ殿下に刃を向けたとも考えられるわけです」

（……むむぅ）

「けれど、陛下……でなく、アリステラ殿下とレティシア様は、とても仲が良かったそうなのですわ。後宮で唯一、レティシア様を擁護してアントワール様に公然と立ち向かっていらっしゃったのが、アリステラ殿下だと聞いています」

あたしは唖然とした。

自分の母親がいじめている女性を、その娘が庇っていた？

「昔、とても辛い時期に、レティシア様に助けていただいたことがあったのだそうです。それで、その時からずっと、年の離れた友人

としてつきあっていたのだそうですわ。両親の思惑や、誰かの憎しみに関係なく、ただ一人の『人』同士として……」

（……）

「レティシア様も、アリステラ殿下にだけはいろいろな話をされていたそうです。というのも、レティシア様はあまり口数の多い方では無いらしくて、先王陛下といらっしゃる時でも、ずっと黙っていらっしゃったそうですわ」

……仲、悪かったんじゃなかろーか……

「そう……ですわね……。もともと、一族の掟のせいで先王陛下とご結婚なさったと言われているお方でしたから、先王陛下のこと、お好きではなかったのかもしれませんわ。無欲であられたのも、どうでもよかったからと考えれば、納得できますし……」

あたし達は（うーん）と首をひねる。

しかし、それにつけても、アウグスタに刃を向けた理由がわからない。

好きでもない人と結婚して、その一番目の奥さんからはいじめられて……その中でアウグスタだけは味方をしていてくれた。年の離れた友人として。

刃を向ける理由が、いったいどこにあると言うんだろう？

むしろ手を取り合って、一番目の奥さん亡き後、王様を支えていくよーな関係じゃなかろうか？

「ええ。ワタクシも、そこが分からないのですわ」

あたしとフェリ姫は二人そろってさらに首を傾げる。

フェリ姫は両腕を胸の前で組んで「ん～」と可愛らしく唸った。

「王宮では、レティシア様がご自分の御子を王位につけさせたくて、アリステラ殿下を亡き者にしようとした……というのが一般的らしいんですの。でも、納得できませんでしょう？　レティシア様がご自身の御子に王位を継がせたいのでしたら、最初からそう先王陛下に申し上げればいいのですわ。レティシア様のおねだりでしたら、たぶん周りがどんなに反対しようとも、最終的には王の権限でいろ

いろやっちゃったのではないかしら？　それこそ国が二分するぐらいの騒ぎになったでしょうけど……ご自身で刃をもつよりは、よほど『ありえる』ことだと思いますのよ。でも、それはなさらなかったし……」

（う～ん……）

あたしも両腕を胸の前で組んで首をひねる。

自分の子供を王様にしたいなら、たしかに刃の一つも握るだろうけど……なんだか、こう……それこそお伽話の中の出来事みたいで、なんとなくピンとこない。

だいたい、そんなことをして、無事に子供が王位につけたかどうかも疑問なのだ。

普通、親子そろって断頭台のはず……

……って……あれ？

（レティシア様って……子供いたの？）

「え？　えぇ……確か、王子殿下をお産みになっていらっしゃったはずですわ。年の離れた弟君で、シェンドラやアリステラ殿下が面倒をみていらっしゃったとか」

（……え。なんで？）

あたしはきょとんとした。

実のお母さんは、どうしたのだ？

「上流貴族でもそうですけれど、正嫡の御子は乳母達が世話をするのが普通ですわ。教育のこともありますし。……ただ、レティシア様の場合、その……先王陛下がベッタリでしたし。先王陛下は、レティシア様のことは溺愛なさってましたけれど、ご自分の御子には何の感心もなかったみたいですから」

……ひどい男だ。

あたしはギュッと唇を引き結んだ。

「さらにアントワール様もいらっしゃったから、たぶん、相当悲惨な幼年期をお過ごしだったのではないかしら？　陛下……でなくてアリステラ殿下も、ものすごく不憫に思っていらっしゃったようで

すわ」

あたしは一層、唇を引き結ぶ。

「けれど……あまりお体が丈夫では無い方だったのか、後宮の奥でずっとお育ちになって……公式の場には一度しかお目見えしていないそうなのです。一番最初のご生誕披露の時ぐらいで……。赤ん坊の時のことですけれど、シェンドラが言うには、メリディス族特有の――あなたと同じ美しい紫銀の髪の、とても愛らしいお方だったそうですわ」

（……そう）

あたしはちょっと顔を俯かせる。

……同じメリディス族の王子。

何故か少しだけ、胸が痛かった。

（……体、弱かったの……？）

「そういう噂ですわ。ただ……レティシア様の事件のこともあって、あまりその方のことを口にする人はいませんの。だから、事件の後どうなったかというのも……よくわからないのですわ。国外追放された、という噂もありますし……王位継承権を返上して、教会に身を寄せられたとも言われていますし」

つまり、サッパリ分からない、ということですね？

あたしはちょっぴり眉を下げて、しょんぼりと肩を落とした。

なんというか……少しせつないのです。

見ず知らずの人だけれど、同じメリディス族で、おまけに『母親を亡くし、父親には無視され』という、なんとなくあたしと似た環境だから……ちょっと会ってみたかったのです。

もしこの王宮にいるのならば――今なら――あたしとその人は『叔父』と『血の繋がらない姪』として、お話もできる（かもしれない）のに……

「……そうですわね。ワタクシも、一度会ってみたかったですわ。とても聡明なお方だったと……そう、閣下に伺っておりますもの」

（ヴェルナー閣下に？）

「ええ」
フェリ姫は頷いて、ほんの少し頬を染めた。
「物静かで聡明で、ちょっぴり影があって……うふふ……。レティシア様やその御子でいらっしゃるお方の肖像画は、写真を含め、ほとんど全部焼き捨てられてしまっていますの。だから、ワタクシもその方のお顔は存じていないのですが……絶世の美女と呼ばれたレティシア様の御子ですもの、きっと素晴らしい美少年……いえ、今なら美青年ですわね。きっとそうに違いありませんわ」
ほぅほぅ。
あたしも興味津々で頷いた。
もしかしたら、レメク並みに美形なのかもしれない。もしくはポテトさん並み……は……ちょっと無理かな。いや、きっと無理だな。
そう思ったところで、脳裏にレメクの顔が浮かんだ。
物静かで聡明で、ちょっぴり影がある……あぁん！　レメクのようではありませんか！！
（……レメクー……）
思わず意識がフゥッと遠ざかる……ぬぅぁあいかんいかん！
根性で復帰すると、フェリ姫がなんともいえない優しい笑みを浮かべていた。
「……さて。王宮の昔の謎はともかく……どうしてレティシア様のお名前を口にしてはいけないのか、これで納得していただけまして？」
合点（ガッテン）です。
フェリ姫はあたしの頷きに満足げな顔になり、手元の紙をくしゃくしゃにすると石の器に放った。フェンという名のメイドさんが、その紙を燭台の火で燃やす。
（え！？）
「王宮の秘事です。万が一、誰かに見られたりしてはいけませんもの。だから、このお話も、ここだけのお話でしてよ？　決して、余所でお話してはいけません」

真剣な目で見つめられて、あたしはギョッと浮かしかけた腰を元に戻した。

そしてしっかりと頷きを返す。

「それでけっこうですわ。……ちょうど、今はまだ春の大祭の最中。他国からの使者も、余所にお嫁にいかれたお姉様達も王宮においでになりますし……王宮に不慣れなあなたが何かをすれば、何を言ってくるかわかりませんもの」

あたしは（うっ）と硬直した。

そういえば……そうでした。この部屋のお外は、御貴族様や王族の方々が跋扈する、人外魔境の巣窟なのです！

「……まぁ、あながち間違っていない感想なのですけれど……。ベル。あなたもその人外魔境の一員になったのだということを、決して忘れてはいけませんわよ？」

……そーでした、あたしも今は、オウジョサマだったのです。

……サッパリ自覚無いですけど。

「最初はそんなものですわ。ワタクシだってそうでしたもの。……けれど、大切なお方がいらっしゃるのですもの。きっとすぐに慣れますわ。だってそうでしょう？」

フェリ姫はふわりと微笑む。

「その方のために強くなり、美しくなり、気高くなり、最高のレディとなるのです。その方の存在はまるでこの背に授けられる美しい翼のよう……その方のためならば、どこまでも高みに昇ってゆけるのですわ。そうではありませんこと？」

ものすごいセリフに、あたしは唖然と口を開けた。

けど、違うとは言えなかった。

レメクと出会ってから、あたしはずっと大きな翼を与えられていたような感じだったのだ。

汚泥の底のような場所から地上へと引き上げられ、そのまま上へ上へと導かれている。高みというのがどこにあるのか、今はまだよくわからないけれど、確かにレメクと一緒にいれば、どこまでも上

に行けそうな気がするのだ。どこまでもどこまでも高い場所に――！
そしてたぶん、あたしにとって『最上』の場所が、レメクが立っているだろう場所なのだ。あたしにとっては遙か高みに思える、とても気高い場所なのだ。
「『姫』と呼ばれても、自分自身の心に『王女』たる自信が無くては、たさぁだ居すくんでしまうだけですわ。けれど、ワタクシ達にそれは許されない。そして、己こそが一番に、それを自分に許してはいけないのです」
なぜなら、あたし達は『王女』として立派に立たなくてはいけないから。
あたしにとっては――そう、他の誰でもない、レメクに誇れる自分であるために！
「そう。ワタクシ達は、ワタクシ達の大切な人に誇れる自分であるために、常に最高の自分でなくてはいけないのですわ！」
あたしとフェリ姫はガッシリと手を握り合った。
あたしはフェリ姫のことをあまり知らない。
フェリ姫もあたしのことをあまり知らない。
出会ってから数日で、きちんとした話をしたのも、今日が初めてだから当たり前だ。
けれどこの時から、あたし達は盟友となったのだ。共に、大切な誰かのために生きる女として！
（頑張るわ！　お義姉さま！）
「ええ！　頑張るのよベル！　ワタクシもついていますからね！！」
（はいっ！）
キラキラと見つめ合った所で、ふと、扉の所にいたメイドさんが密やかに近くへと走り寄ってきた。
「……姫様。伝令が」
「……どなたから？」
ひそめられた声に、お義姉さまの顔が引き締まる。
「メアリです」

途端、フェリ姫の眉が跳ね上がった。
「では、マリアンヌ様が……？」
「はい。妹姫様がお目覚めになったことを知って、ご面会を求めようとなさっておいでのようです」
……あたし？
きょとんとしたあたしの前で、フェリ姫はキュッと形の良い眉を顰めて首を振った。
「……いけませんわね。ベルが目覚めたのを知っておいでになるということは……例の件に間違いないでしょうから」
「はい」
（？）
険しい二人を前にしてあたしは首を傾げる。……何がイケナイのだろうか？
見渡せば、部屋の中の全員が険しい顔をしていた。
一人「？」の顔のあたしに、フェリ姫が真剣な目で言う。
「ベル。あまり嬉しくはないお話だと思いますけれど、聞いてくださいます？　マリアンヌ様をはじめ、ワタクシ達のお姉様達は、ワタクシと同じく陛下と契約をされ、自らの意志で他国に嫁がれた方々です。けれど……その……お姉様達だって、恋はするのですわ」
（……それは……まぁ……）
そうだろうけど……？
首を傾げたあたしに、フェリ姫は言いにくそうに言う。
「その……第一王女様でいらっしゃったマリアンヌお姉様なのですが……その、あくまでお噂ですわよ？　お噂なのですが……」
なのですが……？
さらに首を傾げるあたしに、フェリ姫は非常に言いにくそうに言った。
「昔……クラウドール様と恋仲だったという噂があるのですわ」
レメクと。

突然襲いかかってきた衝撃に、あたしは大きく目を見開いた。
フェリ姫が慌てて腰を浮かす。
「噂ですわよ!?　あの方に懸想していらっしゃる方は、それはもう、かなりの数になりますの！　そのうちのお一人が、かつてのマリアンヌ様だったというだけで……その、他の方々には珍しく、マリアンヌ様は活発でいらっしゃったから、よくクラウドール様の職場に顔をお見せになったり、一緒に食事をとられたりしていたという……その、噂ですわよ!?」
あたしはぼんやりと頷く。
そしてヨロヨロパタンとソファに倒れた。
（……キタ！　レメクの昔の女性!!）
「だから！　噂だと言っているのです!!」
（しかも王女様!!）
「元です!!　今は別の国の王太子妃ですわ!!」
（つまり別の人の奥さん……!!）
そしてあたしはムックリと起きあがった。
（じゃあ、別にいいや）
「……思ったより、立ち直りが早いのね……」
あたしはキラリと目を光らせた。
（ええ。相手はレメクなのです、これぐらい覚悟していたのです!）
「……涙目でしてよ?」
（鼻水なのです!）
「そんなところからそんな水は出ません！　しかも言い訳がちょっと綺麗じゃありませんわよ!?」
ハンカチでぐいーっと目頭を押さえられて、あたしはグスグスと鼻を鳴らした。
（負けたくないーっ負けたくないーっ）
「勝てばよろしいのよ！　なんです！　会う前からめそめそして！　そのようなことでは勝てませんわよ!?」

フェリ姫の叱責に、あたしはぐしぐしと目元を拭う。
ペチッと頭を軽く叩かれた。
「そのような拭き方をしてはいけません！　ハンカチで、こう！　そっと押さえるだけで終わるのですわ！　涙も女の武器でしてよ！？」
武器……でも、身長差があってレメクからたぶん見えないのです……
今いないし。
「そこでヘコまない！　だいたい、今、公式にクラウドール様のご婚約者であるのはあなたです。そのあなたがメソメソのウジウジだったら、他の方がチャンスだと思ってしまうのですわ！　強い姿をお見せなさい！」
ビシィッ！　とあたしの背筋が伸びた。
フェリ姫が力強く頷く。
「そう！　その意気です！　いいこと？　ベル。恋は戦なのですわ。勝ち目のない相手だと思わせることが勝利の秘訣です！　心の中に唱えなさい。自分は婚約者。自分は婚約者。他に誰がいようとも、認められたのはこのワタクシ！　誰が何を言ったところで、それを覆すことはできないのだと！！」
力強いフェリ姫の断言。なんだか多分に私情が入ってる気がいたします。
……お義姉さま……いつも苦労なさっているのですね……
「ええ。これぐらいの意気がなくてシーゼルの婚約者など……って、今はワタクシのお話ではなくてよ！？」
（お義姉さま……）
あたしはホロリと涙を零した。とりあえず、教えてもらったとおりにハンカチで目元を押さえる。……うっかりチーンとかしちゃいそうだ。
「と、とにかく。誰を相手にしたときでも、その意気で乗り越えるのです。大丈夫ですわ。負けたくないという気持ちがあるのでした

ら、最後には勝利をもぎとれます！」
あたしは力一杯頷いた。
まだ自分磨きの最初の段階で、未だにダメダメだってわかってるけど、いつかはレメクに胸を張って紹介してもらえるような、スンバラシイ女性になる（予定）なのです。負けられません！
あたし達は「（よし！）」と互いにガッツリ頷きあう。
ちょうどそこへ、別のメイドさんの声が響いた。
「姫様。妹姫様。バルディア国王太子妃マリアンヌ様がお越しでいらっしゃいます」
あたし達は反射的に顔を見合わせる。
アウグスタや他の人達よりも早い、ある意味フェリ姫を除けば一番乗りの面会だ。
その素早さに、あたしは違う意味で戦慄する。
――ライバルだ。
直感した。マリアンヌという人は、まだレメクのことが好きなのだ。
でなければ、どうしてこんなに早く動いたりするだろうか。
何かがゴォッとあたしの中で燃えさかった。思わずギュッと小さな手が握り拳を作る。
フェリ姫はそんなあたしをしっかりと見つめ、そうして扉の前に立つメイドさんをゆっくりと振り返った。
「お通しなさい」
そして、あたしをもう一つじっくりと見つめる。
あたしもその瞳を見つめ返した。
言葉はいらない。
心は瞳で伝わった。
――最初の戦場だ。王宮の、王女としての、初陣が今から始まるのだ。
しばらくして、遠くで扉が開いた気配がした。王宮の部屋がどういう風になっているのか、あたしは知らない。けれど、寝室に来る

までに、何部屋かあるらしかった。
気配がだんだん近寄ってくる。
メイドさん達がわらわらと寄ってきて、あたしの背や周りに大きなクッションを入れてくれた。フェリ姫は手ずから膝掛けをあたしにかけてくれる。
「バルディア国王太子妃マリアンヌ様、ご入室なさいます」
扉の前に立ったメイドが、律儀にそう宣言する。
あたしは背を伸ばした。
フェリ姫がそんなあたしの手をしっかりと握ってくれる。
扉がゆっくりと開き、そうして一人の女性が入ってきた。
あたしはその人を真っ直ぐに見つめる。

さぁ、戦いを始めよう――

6　心はあなたの元へ飛び立つ

その人を最初に見た時、思ったのは『大きな茸』だった。

相変わらず視界全部が灰色のため、その人の髪の色も目の色もわからない。もちろん着ているドレスの色も帽子もサッパリだったが、形だけはしっかりとわかる。

そのドレスの形が、茸の傘にそっくりなのだ。

ちょうどポッコリとした大きな茸傘の上に、やたらと細い腰とそれなりにふくよかな胸があり、むき出しの肩と細い首、小さな顔、妙にボリュームのある髪と帽子、といったモノが乗っている。細い両腕は、綺麗な刺繍の入った手袋（ガン）で二の腕あたりまで覆われていた。

初めて見る格好だが、別の国の王太子妃だというから、そちらの国独自の服なのかもしれない。

かつてアウグスタから夜会用のドレスを着せられた時も、お尻の上にボコンと膨らみを出させるバッスルというモノに唖然としたが、目の前の人の着ているドレスはその更に上をいく。

なんというか……非常識だ。横幅の大きさとか、邪魔さ加減とかが。

「ごきげんよう、ベル王女殿下」

茸の人は、そう言ってニッコリと微笑んだ。

アウグスタほどではないが、十分に傾城と呼べる美貌だった。どちらかと言えばホワンとした甘い顔立ちで、声も鈴のように可憐だ。

しかし、それ以上に、その顔を覆うホワンホワンな髪がとても気になる。

（茸の傘の上にブロッコリーが乗ってるみたい）

と思ったら、何故か横のフェリ姫がものすごい勢いで後ろを振り向いた。体がブルブル震えているらしく、隣にいるあたしにも微妙にブルブルが伝わってくる。

（……どうかいたしましたか？　お義姉さま）

お義姉さまの奇行はとても気になるが、しかし、この状況下でよそ見はできない。正面の妃殿下をじっと見つめたまま、あたしはとりあえず特訓通りにニッコリと微笑んだ。そうして、精一杯おっとりと小首を傾げる。

（えーと……次は……）

手順を頭の中で思い出す。知り合い以外の人と挨拶するときの手順は……ああ、喋れないから、フェリ姫に通訳してもらわないといけないんだった。

思い出したあたしは、（必死に）優雅に隣のフェリ姫を見つめる。フェリ姫は未だにブルブル震えたままだった。

（……お義姉さま。出番ですよ）

影でこっそりフェリ姫の脇腹にフィンガーアタックをくらわすと、お義姉さまが慌てて体を妃殿下へと向けた。そうして、即座に美しい笑みを浮かべる。

「『お会いできて光栄です、マリアンヌ様。このような姿で失礼いたします』と申しております わ」

あたしはもう一度その人を仰ぎ見て、にっこりと微笑んだ。

マリアンヌ妃殿下はややたじろぎ、気を取り直すようにニコッと微笑んだ後、そっと眉をひそめた。

「……もしや、フェリシエーヌ王女殿下？」

「はい。妃殿下におかれましては、ご機嫌麗しく」

ニッコリと、それこそ華のような笑みを浮かべた美姫に、マリアンヌ妃殿下はいっそう怯んだようだった。……気持ちはわかる。

フェリ姫の気迫ニッコリは、ものすごい迫力があるのだ。

「あら……あなたもこちらにおいでだったのですね。扉の所にシュネーがいたから、もしかして、とは思っていましたが」

（……シュネー？）

あたしはニコニコ笑顔のままで小首を傾げる。

途端、頭の中で声が弾けた。

（ワタクシの侍女（メイド）の一人ですわ。一番外の扉で、訪問者のチェック

をしてもらっていたのです）

なるほどなるほど。

しかし、いきなり頭の中に声を送るのは止めてほしい。ちょっとビックリしてしまうから。

（ごめんあそばせ）

悪戯っぽい気配を滲ませて、フェリ姫はチラッとあたしを見た。

そうして、妃殿下にニコッと微笑む。

「ベルはワタクシの義妹（いもうと）ですもの。体調の芳しくない妹を見舞うのも、世話をするのも、姉であるワタクシの役目ですわ」

ね？　と微笑まれて、あたしもニコッと微笑んだ。……そろそろ頬が引きつりそうです。

「まぁ……とても仲良しになられたのね。私は、夜会の折にクレマンス伯爵が新しい王女殿下に言い寄られて、あなたがとてもヤキモチを焼いていらっしゃったと聞いていましたから、心配しておりましたのよ」

ほほほ、と笑う妃殿下に、フェリ姫の背中から一瞬異様な気配が漂った。

あたしもちょっぴり眉を顰める。

……普通、言うかな……こういう場で。

チラとフェリ姫を見ると、フェリ姫は悠然と微笑みを深めてこう言った。

「妃殿下にご心配いただけるとは、光栄ですわ。けれど、心の定まった、特別な相手のいるお方に嫉妬するなど、愚の極みですもの。ね、ベル？」

にこりと極上の笑みを向けられて、あたしも慌ててニコッと精一杯の笑みを返した。

……をぉ……なんか、妃殿下のほうからすごい恐い気配が漂ってくるのです。

なんだろう。向きたくない。向きたくない。

一生懸命フェリ姫の方だけを向いてニコニコしていたあたしに、

ホホ、という、どこか恐ろしい笑い声が聞こえてくる。
「あらあら。本当に仲良くなられましたのね。それに、ベル王女殿下も、お倒れになっていた、というわりにはずいぶんとお体の調子もよいご様子で」
「まぁ、妃殿下。それは誤解ですわ。ベルはつい先程、ようやく体を起こすことができた所なのです。クラウドール様が倒れられたと聞いて以降、心配のあまり三日も寝込んでしまったのですわ。その時に、声まで失ってしまって……」
まぁ、という声は妃殿下の後ろからあがった。
さわさわと小波のようなその小声は、妃殿下に付き従ってきた侍女（メイド）さん達の声のようだ。全員が淡い灰色（……いや、単にあたしの目には灰色に見えるだけだろうけど……）のドレスを着ている。驚くことに、そのドレスも横にボワンと膨れた巨大なものだった。
……あの人達、ドレス同士が衝突したりしないんだろうか？　ドアの所とかで。
お城の扉はどれも大きなものだが、馬車のドアとかはそこまで大きくない。どうやって入るのかが謎である。
（……てゆか、あのスカート、どうやって膨らませてるんだろうか？）
中がとても気になります。
ソワソワしだしたあたしの腕を、隣にいたフェリ姫がぺちっと叩いた。ハッとなってそちらを見ると、フェリ姫は真剣な顔で妃殿下のほうを見ている。
（……ん？）
「……ええ。レメクが倒れたという噂は聞きましたわ」
どこか寒気のする声で妃殿下が呟いた。
その瞬間、ピリッと空気が震えた。
フェリ姫が何故か驚いた顔で『あたしを』見る。
あたしはスッと視線を妃殿下のほうへ向けた。
妃殿下があたしを見て、一瞬目を見開く。あたしは真っ向からそ

の目を見返して、目をビカッと光らせた。
（……レメク、って言った……）
気安げに。
（名前を呼んだ！）
それこそ、格下の者を呼ぶかのような口調で！
もうそれだけで、あたしの心はゴォゴォなのです！！
「あ……あの方が倒れられるなど、初めてのことではないかしら？
とても丈夫なお方でしたのに。よほどのことがあったのでしょうね」
メラメラと嫉妬の炎を燃やすあたしの視線から、微妙に視線を逸らせて妃殿下が言う。あたしは更にゴーゴーと炎を燃やした。
「そういえば、ベル王女殿下におかれましては、この度ご婚約なされたとか。お相手があのレメクと聞いて、私、驚いてしまいましたのよ」
キタ！　本題！！
あたしの目がビカァッと光った。
フェリ姫が何故かあたしを肘でつつく。あたしは反射的にニッコリと力いっぱい微笑んだ。
（ええ！　婚約なのです！　あたしの旦那なのです！！）
ビカビカビカカッ！
「……。『とても良いお方と縁を結ぶことができました。これもひとえに我が女王陛下のお心によるものです』と言っておりますわ」
言ってないけど、その通りなのです。
笑顔のままコックリ頷いたあたしに、妃殿下は一瞬だけものすごく顔をしかめた。それはほんの一瞬だったが、目に焼き付いちゃうぐらい凄まじいものだった。
（……ああ）
やっぱり……と。頭の中の冷静な部分が呟く。
この女性（ひと）は今でも、レメクのことが気になっているのだ。
どうして昔レメクと一緒にならなかったのかは知らない。けれど、

今でも好きなのなら、当時はもっともっと好きだったことだろう。
そんな彼女にとって、目の前にいる『あたし』はこの上なく憎々しい相手なのだ。まだちっちゃくて、綺麗でもなくて、おまけにレメクにとって得になるようなものを何も持っていないあたしなんかは、レメクの近くにいさせるのも腹立たしい相手なのだ。
何故そんな子供がレメクの婚約者に収まっているのかと、それこそお腹の中がグラグラと煮立っているに違いない。
けれど。
（……けれど！！）
あたしはビシッと背筋を伸ばした。
（負けられないのです！！）
例え昔がどうあれ、あたしだってレメクのことが好きなのである。失いたくない、傍にいたいと思う気持ちなら、絶対に負けたりしないのである！！
そ……そりゃあ、身長とか胸とか腰とかお尻とかはものすごく負けてるけど……
気持ちだけは大丈夫よ！？
そりゃあもう、巨人とかドラゴンなみにおっきいんだから！
（……そ、その意気ですわよ？　ベル）
隣のお義姉さまから、なぜかおっかなびっくりの声援が届く。
（ありがとうお義姉さまっ！）
あたしは目をキラリと光らせてその声援にお答えした。
さぁ、来るのです。
来るのですヨソの国のお妃様！
胸を張って爛々と目を輝かせているあたしに、妃殿下はスッと目を細めた。
「レメクはかつて王宮の筆頭であられたクラウドール公爵の後継者。いずれ宮廷の長となる人です。……そのレメクの婚約者となるのなら、あの人を支えられるだけの力が無くてはいけませんわ。あなたはあの人に、いったい何をしてさしあげれるというのです？　聞け

ば後ろ盾も無い、メリディス族というだけで有り難がられているだけの貧民が……」

「「「妃殿下！」」」

悲鳴のような声は、むしろ妃殿下の後ろに控えていた侍女達のほうから発せられた。

こちら側に揃っているメイドさん達は一言も発しない。ただ、硬質化した空気を纏ってあたしとフェリ姫の近くに勢揃いしていた。

フェリ姫が小さく息を吐く。

その薄紅色の唇が開いた時、零れた声は驚くほど底冷えのするものだった。

「いくら他国の王太子妃といえど、我が国の王女に対し無礼でありましょう。伏せっていた相手の元に赴きながら、労りの一言も、華の一輪すらも無く、まして婚約の祝いを述べるわけでもない……そのなさりよう。栄えあるバルディア国の、王太子妃という御位にお就きの方の所行とは、とても思えませんが？」

棘どころか言葉の一つ一つが氷の刃のようだった。

さすがに思うことがあったのか、妃殿下が視線を逸らす。フェリ姫はたたみかけるようにして言った。

「王太子妃殿下。我が女王陛下が決めた婚約に対し、ご意見があるようでしたら陛下に直接お言いくださいませ。クラウドール様とベルの婚約は、陛下が自ら宣言なされた事。成立に際し宮廷の主立った官吏、および教皇アルカンシェル猊下の承認を得ています。ベルは最後に初めて打ち明けられた立場の者。この者に抗議をするのは筋違いでありましょう」

「なっ……」

「再度申し上げますが、決められたのは陛下です。クラウドール様のご婚約者として、他の誰でもない、ベルを望まれたのは陛下なのですわ。そして陛下が決められた事に、否を唱えることは許されません。それでも尚ご意見がございましたなら、陛下に直にお言いくださいませ」

「……ッ」

妃殿下は唇を噛んだ。

いくらなんでもそんな事はできない、ということだろう。

国のゴチャゴチャしたことはよくわからないけど、他国の結婚や婚約に、王太子妃が口を挟むだなんて話は聞いたことがない。

周辺諸国から求婚が殺到した大昔の美姫の話の中でなら、選ばれた国にそれ以外の国が抗議しまくったという話は聞いたことあるけど……それだって、最低でも国王レベルでの話し合いだった。

王太子妃というのは、次の王様になる王子様（王太子）の奥様だ。つまり、国王と比べれば立場は低いのである。

……言えないよね……普通。

例え元この国の第一王女であっても、他国の妃になった時点で、他国側の立場を考えなくちゃいけないはずだから。

鮮やかに微笑むフェリ姫と、冷ややかに睨む妃殿下を交互に見つめていたあたしは、ふとその時、部屋の片隅に揺れる黒いものに気づいた。

なんだろう……？

プラプラ揺れてるソレは、床のちょっと上あたりに浮いている。ちょっと細めの縄のようで、色はすごく濃い。今のあたしの目には真っ黒に見える。たぶん、実際の色も黒だろう。

……ってゆか、アレ……もしかして、髪ですか？

揺れるその髪の先から上へと視線を動かすと、鮮やかな模様の入った布が見えた。直線では無く、ゆるやかな曲線を描くそれは、どう見ても人の太腿の形に見える。

人だと知覚した途端、まるで魔法が解けるかのように一人の女性が姿を表した。なぜ今まで気づかなかったのか。それが不思議でたまらないほど、その美女は存在感があった。衣装からして際だっている。

服は見たこともないほど大きくて豪奢な布達。淡い薄布を幾重にも体に巻いて、その上から豪華絢爛な布をさらに巻いている形だ。

余分に膨らましている場所がない分、素晴らしい曲線美がくっきりと見える。

豊かな腰に、折れそうな腰。腰に巻かれている布は帯というやつだろうか？　その上に乗った胸は実に豊かで、ボリュームだけならアウグスタに匹敵するかもしれない。薄布を幾重にも重ねた胸元はやや透けていて、豊満な胸の魅力を「これでもか！」と強調していた。

むき出しの腕と首もとを飾るのは、恐ろしく豪華な装飾品。顔は小顔で、どこか異国めいた魅力に満ちていた。アウグスタとは違った意味で、迫力満点の美女である。

……てゆか、誰だろう？

（？）

小首を傾げたあたしに気づいて、フェリ姫が笑顔をあたしを見た。目をパチクリさせているあたしの視線を追って、同じように扉の方を見る。

そうして飛び上がった。

「ナザゼル様！？」

「なっ！？」

フェリ姫の声に、戦闘態勢に入っていた妃殿下もぎょっとなって振り返った。驚愕の表情でその人物を見つめる。

「ナザゼル……王妃！　なぜ、ここに？」

「んー……ふふふ」

ナザゼル（王妃？）様と呼ばれたその異国美女は、それはそれは艶めかしい笑みを浮かべて胸の前で両腕を組む。

ずんもりと盛り上がる素晴らしいお胸。

なんだかアウグスタがそこにいるようだ。

「見つかってしまったのぅ……もう少し観戦しておきたかったのじゃが。……メリディスの王女殿下は、妾を感知するほどに鋭いお方のようじゃ」

……なにやらお年寄りのようなしゃべり方でおじゃります。

目をぱちくりさせたあたしに、フェリ姫はあわあわと視線を行ったり来たりさせる。
「べ、ベル。あちらのお方はナザゼル様と仰って、我が国からイステルマ連邦に嫁がれたお方で……」
「ふむ。挨拶が先であったの。失礼、ベル王女殿下。妾はイステルマ連邦が一つ、アルティルマの王妃、ナザゼルじゃ」
（イステルマ連邦の、アルティルマ？）
「イステルマ連邦は、元々十五の国が集まって出来ているのです。アルティルマはその筆頭。そして、ナザゼル王妃様は、連邦の代表を務めておいでの方です」
「簡単に言えば、十五の国の代表じゃな。分かるかえ？」
あたしはコックリと頷いた。
「ふむ。頭も普通じゃな。……あぁ、いや、悪く言うつもりは無いのじゃ。ただのぅ、噂では『顔だけの何もわからぬ愚者』である言われておったのじゃ。あのアリステラ殿がそのような娘を養女にするわけが無いのじゃが、そういう悪しき噂を流す者も多くおっての……まぁ、手っ取り早く言えば、そういう噂の否定のためにも、試させてもらったのじゃ。あとは、のぅ……動作がかわゆいから、ちと見てみとぅなっての」
悪ぅ思わんでおくれ、と軽やかに笑うのに、あたしは唖然としながらもコックリ頷いた。
……なんと言うか……変わった人だ。
「ああ、それと、フェリよ。先程からの、廊下でおぬしの姉君達がうろうろしておった故、妹姫の体調が落ち着くまでは面会は止せと言うておいたぞ。構わなんだかの？」
「え！？　え……えぇ、はい」
「それからの……マリアンヌ殿。ぬし様の気持ちは分かるがの、コレはあまり褒められた行為では無かろうよ。いらぬ噂をたてられる前に、他国の王太子妃たる身に相応しい行動をなさるがよい」
音もなく滑るように部屋の中に入ってきたナザゼル王妃は、そう

言って優雅にむき出しの腕を扉の方へと向けた。
お帰りはあちらから、というヤツだ。
「……」
妃殿下はスッと眼差しを細くする。
けれど、ここでナザゼル王妃を相手に喧嘩をするほど愚かでは無かった。
「……後で見舞いの品を届けさせましょう。ごきげんよう、ベル王女殿下。フェリシエーヌ王女殿下、ナザゼル妃殿下」
「「ごきげんよう」」
見事にそろった声で、ナザゼル王妃とフェリ姫が答える。……あたしの口からはヒューコーという呼吸音しか出なかったけど。
（それにしても……なんか、結局、あたしはまともに戦えなかったのです）
お帰りになる後ろ姿を見送りながら、あたしはしょんぼりと肩を落とした。
やる気だけは十分だったのだが、実際に戦ってくれたのはフェリ姫で、あたしは横で目をビカビカ光らせていただけだったのだ。これでは初陣とも呼べないだろう。フェリ姫にかけた迷惑も計り知れない。
……しょんぼりだ。
（……ベル。気になさることはありませんわよ。それに、あなたは十分、戦っていましたわ）
フェリ姫からねぎらいの心の声が届きます。
（お義姉さま……！）
ぴすぴすと鼻を鳴らして、あたしはソッと目元を拭った。
フェリ姫があたしの手を握ってくれる。
あたし達は目と目で互いを励ましあい、改めて静かに退出する妃殿下一行を見守った。
途端、フェリ姫はそっと下を俯き、あたしは顎を落っことす。
（……カニ歩き……）

ご一行様、横向きでドアをくぐられておいでです。あの横に膨らんだスカートのせいで。

おかげで普通の倍以上時間のかかっている退出に、ナザゼル王妃も皮肉な微苦笑を禁じ得なかったようだ。彼女の着ている大きな布を幾重にも纏ったような独特の服は、現在退出中の人々とは正反対に、ものすごく動きやすそうだった。体の線がハッキリ出てしまうので、よほどプロポーションに自信が無いと着こなせないだろうが……

「……それはそうと、ベル王女殿下。妾は気になる噂を聞いて来たのじゃが……不躾な質問をしても構わぬかえ？」

「？」

未だにえっちらおっちら退出している人々をチラチラ見つつ、あたしは大きく頷いた。

ナザゼル王妃はニッコリと笑って問う。

「そなた、あのクラウドール卿より、婚約の祝いに贈り物を貰ったそうじゃな？　なんでも、それはそれは大変貴重な物だとか」

（婚約の祝いに……？）

なんか貰ったっけ？

あたしは首を傾げる。そうして、通訳のためにフェリ姫を見つめた。

（あたし、誕生日の祝いに、お母さんの形見を貰っただけなんだけど）

フェリ姫が目を見開いた。

「お母様の形見の品ですって！？」

驚愕の悲鳴。

あたしは目をパチクリさせながらコックリと頷く。

首から提げている革袋を胸元から取り出すと、フェリ姫のみならずナザゼル王妃まで勢い込んで身を乗り出してきた。

何故！？

「こ、これがクラウドール卿のお母様の形見！？」

「そ、そなた、よくぞこのような品を……！　もしやと思っておったが、そなた、本当にかの者の心を絡め取っておったのじゃな！」

目をギラギラと輝かせている二人に、あたしは呆気にとられて口を半開きにした。

……あ。あの妃殿下の侍女さんまでビックリ眼でこっちを見てる。

……あーあ……ドレスが扉にぶつかったよ……

「こ、これを……触ってもよいか？　よいじゃろう？」

「ワ、ワタクシも触りたいですわ。ベル。よろしくて？」

そわそわと手を伸ばしたり引っ込めたりする二人に、あたしは視線を二人へと戻し、呆気にとられたままコックリと頷いた。

途端に二つの手がワシッと革袋を掴む！

「ま、待つのじゃ！　フェリ！　ここは年功序列であろう！」

「そ、それはひどいですわ！　ワタクシもどのようなものか……ん？　ちょっと硬いですわね」

「布で厳重に巻いておるのじゃな。これは……おお！　指輪では無いか！」

「指輪！！」

きゃーっ！　という歓声はメイドさん達から。

何故か全員、顔がほころんでいます。

「指輪ですって！　ベル！！　素晴らしいわ！　あのお方、そのような真似も出来ましたのね！」

「むぅ！　妾はあの男を見くびっていたようじゃ！　そのような真似は出来んだろうと思っておったが……しかも、先物買いとはなかなかやりおる！」

「素敵ですわ！　ねぇ、なんて素敵なんでしょう！　ベル！　あなた果報者でしてよ！？」

え……エエ。カホウモノだと思います。

思いますけど、二人で革袋をきゅむきゅむ指で揉むのは止めてほしいのです。

……てゆか、指輪なの？　それ。

「きっと結婚指輪ですわ！」
「然り！」
「あああーっ！　どうしてこういう真似をあの男はしてくれないのかしら！　あのクラウドール卿ですらこのように機転をきかせているというのに！！」
　なんかついでに本音もダダ漏れになってるけど、興奮しているお義姉さまは気づいていないようだ。
　あたしは二人の手から解放された革袋を掌に乗せ、二人がやっていたようにきゅむきゅむと両手の指で揉んでみた。
（……指輪……かなぁ……？）
　二人は声を揃えて「指輪」だと言うけど、本当に指輪なのかはハッキリしないのです。確かに輪っかのようだけど、妙に大きいような気がするし……
「中身を取り出してみればすぐに分かりましてよ！」
　袋を揉んでいるあたしに、フェリ姫が顔を輝かせて言う。ナザゼル王妃もキラキラと目を輝かせたが、あたしは緩く首を横に振った。
（開けては駄目なのです。あたしが十八になった時に、取り出す約束なのです）
「十八になった時に中身を取り出せと！　言われたのですね！？」
（そうなのです）
　首肯したあたしに、何故か周りが大喜び。
「もう間違いなくてよ！　なんていう遠回しな申し込みでしょう！」
「なかなか素敵ではないか。のぅ、フェリ。妾らの婚約も、かようであればよかったのにのぅ」
「ええ。それだけが残念でなりませんわ」
　大盛り上がりな周りに取り残されて、あたしはしょんぼりと袋を元の位置に戻した。
　元の位置に戻すと、なんだかそれだけでホッとする。
（……よし）
　そうして顔を上げると、こちらを見下ろしていたナザゼル王妃と

目があった。
　ニヤリと微笑む王妃に、あたしはニコッと反射的に笑みを返し…
…ややあって首を傾げる。
（……そういえば、ナザゼル王妃様って、いったいなんのためにあ
たしの所に来たんだろうか？）
「ナザゼル様。なぜ、突然ベルのお見舞いに？」
　あたしの意志を素早くくみ取ってくれたフェリ姫の問いに、王妃
は鮮やかに笑った。
「妾が見舞うのはおかしいかえ？」
「いいえ。ナザゼル様も、ワタクシ達のお義姉さまですもの。けれ
ど、ナザゼル様ほどのお方になれば、まわらなくてはならないお方
の数も、かなりのものではありませんか？　ベルはついこの間、王
女という位を与えられたばかり。ましてこのタイミングというのが
……」
「気になるかえ？」
「……正直に申し上げれば……」
　おずおずと言ったフェリ姫に、ナザゼル王妃は鮮やかに笑う。
「それはのぅ、妾らのお母様に頼まれたからじゃ」
「陛下に？」
「うむ」
　目を見開いたあたし達に、ナザゼル王妃は笑う。
「二日前にな、会談した折に頼まれたのじゃ。此度養女に迎えた娘
には、後ろ盾も何も無い。この王宮ではおそらく、生き辛かろう…
…と。それでの、力になってくりゃれと頼まれたのじゃ。我が恩人
たるアリステラ殿の頼みじゃ。きかぬわけにはいくまいて」
「……」
「それにの。妾は式典の初日からここに来ておった。つまり、婚約
発表の折にもあの場におったのじゃ。なかなか楽しませてもろぅた
ぞ。あのクラウドール卿を百面相させるなど、前代未聞であったの
ぅ。妾も王女に興味があったのじゃ。渡りに船じゃ思うて、いそい

そと馳せ参じたのじゃよ。おかげで、相変わらずな義姉上の姿も拝見できたしの」

……義姉上？

あたしは一瞬首を傾げ、すぐに納得した。

あの妃殿下は、確かアウグスタの養女の一人だ。一番上のオネエサマ、だったかな？　ナザゼル王妃が四番目ということは、面識があってもおかしくはない。

……てゆか、あれ？　なんか、そのわりにはフェリ姫とのほうが仲良さそうだけど……？

「ワタクシは、六年前の春の大祭の折にナザゼル王妃様に親しくさせていただいたのです」

「妾もアザゼル族での。名が近かろう？　もっとも、妾にはたいした読み取り能力は無いのじゃがな」

「けれど、かつて『竜殺し』と呼ばれた英雄アザゼルの『魔眼』を継いでいらっしゃるのは、今の世ではナザゼル様だけですわ」

「まぁ、いささかきな臭い世であるからの。この目もそれなりに役に立つが……それよりも、フェリ。おぬしは武術の腕を磨くべきでは無いか？　女とて、剣を使えねば命に関わる時代ぞ？」

「……ナザゼル様と一緒にしないでくださいませ。ワタクシ、スプーンより重い物は持てませんの」

「……これじゃ。のぅ、ベル王女殿下。この娘に言うてやっておくれ。せめて短刀の一つでも扱えるようにならねば、いざという時、己の命も、慕わしき者の命も守れぬと」

（もっともです）

あたしはウンウンと頷いた。

フェリ姫は嫌そうに顔をしかめる。

「まぁ！　そんなところで結託なさらないでくださいませ」

（でもお義姉さま、あの伯爵が危険な場所に行かなくちゃいけない時、武器を持てなきゃ一緒について行けないわよ？）

「あの方は、そういう時、むしろワタクシを家の中に残そうとなさ

るのですわ。危険だから、と。……それは、まぁ、ずっと待ってるだけというのは、嫌なものですけれど」

（ほら！）

「それでも！　人には得手、不得手というものがあるのですわ！！」

あたしとナザゼル王妃は顔を見合わせた。

（お義姉さま……剣術は苦手？）

「そう言えばそなた……弓も満足に引けなんだの……」

「だから！　ワタクシはスプーンより重いものは持てないのですわ！！」

プイッとそっぽを向いたフェリ姫に、あたし達はしみじみと嘆息をついた。

（しょうがない……）

「仕方あるまいの。……うん。こちらの姫君は頑張る気がありそうじゃな？」

バッチリです。

チラリと向けられた瞳にキラリと目を輝かせて、あたしは大きく頷いた。

（よぼよぼになった未来のおじ様は、このあたしが守るのです！）

なぜかフェリ姫があんぐりと口を開けていた。

「ふむ。なかなかに根性も据わっておるようじゃ。体が癒えた後は、妾が手ほどきをしてやろうぞ」

（よろしくお願いします！）

あたしはペコリッと勢いよく頭を下げた。ナザゼル王妃は満足そうに笑む。

「うむ。このような場で新しい弟子ができようとはな。人生、何があるか分からぬものじゃ。……ん？　あぁ、いかん。妾ともあろう者が、危うく役目を果たさぬ所であったわ」

（役目？）

突然、扉の方を向いてそうぼやいた王妃に、あたしは首を傾げた。

あたしの横のフェリ姫は、同じように首を傾げてからハタと顔を上

げる。
「まぁ……！」
「フェリも気づいたようじゃな。……しかし、こういう時、心話の能力は楽で良いのぅ。人の心が読めるのじゃ。よほど無心にならねば、おぬしの前で隠れるのは至難じゃろうて」
「ナザゼル様ほどの方でしたら、ワタクシの力など太刀打ちできませんわ。むしろ、ベルのほうが凄いと思いますけれど。……隠れていらっしゃったあなた様に『気づいた』のですから」
「全くのぅ……メリディス族の五感は侮りがたいということじゃな」
言葉を交わす二人を「？」の顔で見比べながら、あたしはしょんぼりと肩を落とした。
二人だけで何かを分かり合っているようだが、あたしにはサッパリ分からないのです。
説明プリーズ。
「まぁ、ベルったら……。陛下達がこちらに向かっていらっしゃっているのですよ。ナザゼル様は気配で、ワタクシは心の声で、それぞれ察しただけのことですの」
……なるほど。
「妾が先に行って、皆が来る前に準備を整えさせよう、と……そう、アリステラ殿に宣言しておいたのじゃが……。いかんな、直前まで忘れておった。それにしても、珍しいことに大神官殿もおいでのようじゃな。アロック卿は、宝飾類のことで招かれておるのかの？」
熊とマニアの気配でも感知したのか、ナザゼル王妃がそうぼやく。何故か懐かしく思う二人の話題に、あたしはそわそわと体を揺らせた。
「アロック男爵のご子息でしたら、ベルの個人的な友人ですわ」
「ほぅ！　あのアロック卿と？　あぁ、そう言えば、かの者は自他とも認めるメリディスの崇拝者であったか」
「最近は昔よりずっと落ち着いていらっしゃるようですの。ベルのおかげかもしれませんわね」

「まあ、実物が近くにおれば、行き過ぎた妄想は減るであろうよ」
フェリ姫はその声にクスクスと笑って、あたしにニッコリと微笑みかける。
「ベル。陛下はきっと、クラウドール卿の事を話してくださるはずですわ」
トクンと心臓が小さく踊った。
脳裏にレメクの顔が浮かぶ。
……優しくて暖かい、あの瞳が。
「……まぁ……ベル。嫌ですわ。なんでいきなり泣きそうになってらっしゃるの？」
唐突にぼやけた視界の中で、フェリ姫が笑ってあたしにハンカチを差し出した。
あたしはそれを受け取りながら、ツンと熱い鼻をすする。
（……レメク）
名前を心で唱えるたび、意識が奥底へと沈みそうになる。
元気になろうと誓ったけれど、ふいにやってくる寒々しい『何か』だけは、自分ではどうしようもないのだ。
（……会いたいの）
傍にいられないのが、寂しくて、苦しくて。
何ができるわけでも無いけれど、少しでも倒れたあの人の傍で、自分でできる何かをしたいのだ。
（……レメク……）
俯いてしまったあたしの頭を、大小の掌が優しく撫でてくれる。
あたしは一度だけ頷くように頭を下げて、ぎゅっと唇を引き結んだ。
顔を上げると、二人が柔らかく微笑んでくれる。
「さぁ、皆様を迎えるための準備をいたしましょうか」
「殿方もおられるのじゃ。ここで皆を迎えるのはいかんじゃろうな」
「移動いたしましょう。三部屋ほど動けば、応接室ですわ」
「うむ。では、妾が抱えてさしあげよう」

そう言って優雅に掌を差し出されて、あたしは一瞬、とまどった。
フェリ姫を見ると、どこか羨ましそうな目であたしを見ている。
「お言葉に甘えなさいな。ナザゼル様はとても力持ちでいらっしゃいますわ」
「ふふふ。鎧を着込んだ男に比べれば、姫など小鳥のようなものじゃ」
鎧を着た男を持ち上げるようには到底見えないが、自信たっぷりの言葉に『嘘』の臭いはしなかった。
あたしはよろよろとソファから降りる。
そうして、作法通りのお辞儀をしてから王妃の手に自分の手を重ねた。
――かつて、レメクの手をとった時と同じように。

ナザゼル王妃がふと微笑む。本当に小鳥か子猫を扱うように軽々とあたしを抱き上げて、妖艶な王妃は言った。
「ほんに、小鳥のような姫君じゃな」
笑ったその顔が、何故かレメクの笑みと重なった。
あたしは目からポロッと零れたものを慌てて拭って、シャンと背筋を伸ばした。
……少しだけ思う。この背に本当の翼があれば、と。
そうしたら、迷うことなく、レメクの所へと飛んで行くのに。
「さて、行こうか姫君」
柔らかな声と一緒に、あたしを片腕で抱えたナザゼル王妃が歩き出した。レメクは男の人だったからそんな抱え方でも疑問に思わなかったが、女の人にやられるとちょっとビックリしてしまう。
……しかし、よくよく考えれば、アウグスタにも同じ抱え方されたんだっけ……何故かアウグスタ相手だと疑問に思わなかったのだが。
後ろを振り向けば、一歩半後ろからしずしずとフェリ姫がついて来ている。あたしの視線にニッコリと笑う彼女は、歩く姿も美しか

った。
あたしはシャキンと背を伸ばし直す。
メイドさん達が手早く扉を開け、部屋を整え、手の空いた者から順にナザゼル王妃とフェリ姫の後に続く。まるで最初から決められていたかのような淀みない動きは、美しい舞を見ているかのようだった。
彼女たちの動きもまた、とても洗練されたものだからだ。
あたしは俯き——そして、顔を上げてしっかりと胸を張った。

——ベル。

大事な人の声が聞こえる。
あたしの頭の中で、いつか語ってくれたその人の声が。

——小さくても、あなたは貴婦人（レディ）です。

頭を撫でてくれる優しい指も、暖かな体温も、まるで昨日のことのように思い出せる。
例え出自が貧しくても、こんなに小さな体でも、それでもしっかりと地面を踏みしめて、胸を張って生きなさい。——そう言った、その人の眼差しを。
（……大丈夫）
レメク。あたし、忘れてない。
完璧にはまだまだほど遠いくても、貴婦人（レディ）としての気品と誇りを忘れないかぎり、あたしはレメクにとっての貴婦人（レディ）になることができる。

あの人に誇れるあたしであるために。
あたしの手が無意識に胸の辺りに伸びて、ドレスの内側にある革袋を布越しに触れた。
（……あたしも、がんばるから）
きゅっと握ると、円を描く硬い感触がする。
それは何故か、あたしを励ますように、一瞬だけ暖かな温もりを灯したのだった。

7　偽りの世界は終わりを告げ

「ベル！　起きてるな！？」
バァン！　と盛大に扉を開けて、相変わらずな女王陛下が登場した。
……おお……珍しい。門の紋章使わずに来ましたヨ。
思わず感心していたあたしは、フェリ姫に肘でつつかれてハタと思い出す。
慌てて座っていた（待ちかまえていた、とも言う）ソファから降り、チョコリと宮廷風の挨拶をした。……ぉっとっと。ちょっと体が揺れるのです。
「……ッ！」
何故かアウグスタがツカツカ足早に駆け寄ってきました。そして問答無用であたしを抱き寄せる。
（むぎゅむぎゅんっ！）
「可愛いじゃないかッ！！」
（息ッ！　息ッ！！）
いつものごとく爆乳で圧迫されて、あたしは咄嗟にここにいない人に助けを求めた！
（レメクたちけてーっ！）
相変わらずの凄まじいムニュムニュが――
――……？
（？？？）
……って、アレ？　なんか違和感があるような……？
あたしの感覚がおかしいのか、いつもとムッチリンの感触が違う気がする。おかしい。色彩とかはまだ元に戻ってないけど、肌に触

れるモノはわかるようになってたのに。
（……なんか、もっちりしてない……）
あたしはペチペチとアウグスタの脇腹を叩くのをやめ、かわりにエイヤッと巨乳を下から上へと押し上げた。
ズレました。
（――!?）

ズレました!?
綺麗に上に移動した巨乳に、あたしはショックのあまり固まってしまう。途端、ムニ～ッと両頬を指でつねられた！
「べぇえるぅう？　なぁにをしとるのかなぁ～？」
（いひゃい！　いひゃい!!）
体罰禁止ーッ!!
「へ……陛下……お胸がズレて……」
「……リーシェ。言わんでよい」
「は、ハイッ」
思わずつっこんだフェリ姫にも、カチコチの言葉を放つ女王様。
あたしは引っ張られた両頬をそのままに、涙混じりの目でアウグスタを見上げた。
（……なんで……なんで、胸が……!?）
「おまえとレメクのせいだろうが!!　あの風呂場に呼び出しおってからに……!!」
アウグスタの声に、あたしは首を傾げ――ややあって目を丸くした。
まさか、あの『胸がぺったんこになる呪い』とかいうやつ!?
「その通りだ！　おまえを抱えて戻った後に気づいてな……フッ……こんなに胸が軽かったことなど、いったい何十年ぶりか……」
ガックリとうなだれたアウグスタに、あたしはあんぐりと口を開けた。

（……ポテトさんに治してもらわなかったの？）

「あやつがこんな面白いことを治すと思うか！？　仕方なくとんぼ返りして向かったら　結界張って追い出しおったんだぞあの馬鹿たれは！　扉叩いたら『入ってます』とか言われる始末！！」

……なるほど。

ポテトさんに治す気は無いようです。

「……それで、詰め物でごまかしておるのじゃな……あれほど見事な巨物が、もったいない……」

ぼやきながらズレてしまった右のムッチリンを元の場所に直すアウグスタに、ナザゼル王妃がなんとも言えない微苦笑を浮かべた。

「アリステラ殿ともあろうお方が、呪いの解除もできなんだのかの？」

「無茶を言うな。こと肉体にかかる呪いに関して、レメクの右に出る者はおらん。おまけにこんな単純な魔術は、単純ゆえに綻びが無い」

「なるほどのぅ。つまり、それほどに強力なのじゃな。……確かに、我が『目』から見ても、綻びがまるで無い。……むしろ、これほど完成された器の状態が、たった五日で元に戻ることのほうが不思議でならぬよ」

「無期限よりも期間限定のほうが魔術は強力だからな。『元々あるべき形』を歪めるのだから、反発は必定だろう？　それを押さえつける時間が長ければ長いほど、卓越した能力が必要となる。……アレは、その卓越した能力を持つ少数のくせに、わざと時間限定をかけてより強力にしおったのだ馬鹿助めぇえぇッ！！」

……なんだかすごい怒りがこもっている。やっぱりあの爆乳はアウグスタにとっても大事なものだったようだ。

「当たり前だろうが。ベル、いいか？　胸は女の武器の一つだぞ？　私のような者になればな、武器はいくらあっても足りんのだ！」

「まぁ、殿方には受けが良いからのぅ……美貌とプロポーションで虜にしておけば、後々交渉がいろいろとやりやすいのじゃ。領地問

題然り、商業の問題然り……」
「それだ！　……くっ……それがこのザマだぞ。大々的な宴ゆえに賓客の数も多いというのに……！」
握り拳をギチギチいわせるアウグスタに、あたしはしょんぼりと謝った。
（……ごめんなさい……）
「待て！　なぜおまえが謝る！？　悪いのはこんな罠を張り巡らせた馬鹿助だろうが！」
でも、そのレメクのピンチに呼び出したのはあたしなのです。
ピスピス鼻を鳴らして、あたしはアウグスタにぎゅっとしがみついた。
（ごめんなさい……！）
「ああ……くそ……えぇい！　可愛いじゃないかッ！！」
（ぐぇえ）
即座に抱きしめられて、あたしの喉が綺麗に絞まる。
「陛下！　息！　息！！　ベルが窒息してしまいますわっ！」
「相変わらずかわゆいものが好きじゃのぅ、アリステラ殿は」
「おまえもだろうが、ナザゼル。……だが、礼を言う。ベルを守ってくれたようだな」
フェリ姫の尽力もあってヨロヨロと偽巨物から解放されたあたしは、ふいに真顔になったアウグスタに目をパチクリさせた。
ナザゼル王妃はニヤリと笑う。
「貴殿の頼みであれば妾は何でも聞こうぞ……我が女王陛下よ。この程度の助力など、受けた恩に比べれば利子分にもならぬよ。……しかし、『姉上』は未だかの者に未練があるようじゃな」
王妃の言葉に、アウグスタは盛大に頭を抱えた。
「……あれはなぁ……私のせいだからなぁ……」
「違うであろ。自ら選んだのは『姉上』じゃ。アリステラ殿が気に病む必要など何一つない。まして、あの恋着はもはやただの妄執じゃ。本当にどうしても欲しかったのなら、恥も外聞も無く行動すれ

ばよかっただけの話。せずに安易にプライドを満足させてくれる道を選んだのじゃから、全ては『姉上』の責任じゃ。あの時から、『姉上』の恋は終わっておったはずなのじゃ。少なくとも、そうでなくてはならぬ」

「……そうは言うがな、この手合いの話は、そう簡単に割り切れるものでは無かろうよ」

「アリステラ殿は優しすぎるのじゃ！　それは悪いことでは無いが、優しいのと甘やかすのとは違うぞよ？　あの『姉上』に対しては、優しいというより甘いのじゃ！　そんなことでは、かの者の増長を招こうぞ！」

「……ちょっと嫉妬してないか？」

「しておるとも！」

胸を（こちらは自前）張って言うアザゼル王妃に、アリステラは大笑いした。

「相変わらずだな！　はは！　しかし、今回おまえがいてくれて助かったぞ。イステルマの掌握もそうだが、何よりおまえという存在は頼もしい」

「ふふん。もっと褒めるのじゃ。妾は褒められて育つ子じゃったゆえな。……しかし、アリステラ殿もまた新たな養女を迎えるとは、相変わらずのようじゃな」

チラと視線を向けられて、二人の会話をじーっと聞いていたあたしは目をパチクリさせた。

「……しかも、メリディス族とは、の。……ということは、ふっきれたと思うて良いのじゃな？」

それが誰のことなのか……ハッキリ言われなくてもすぐに分かった。

「……あの人のことは、な……本当を言うと、とっくの昔に決着をつけてあったことだ。だが、まぁ……感傷というか、そういうのがな……」

「妾は直に件の君に会うてはおらぬゆえ、詳しい事情も何も分から

ぬが……無理に気持ちを切り替えようとしても、逆効果になることもあるのでな……時間が経って、自然に大丈夫になるのを待つのがよかろうよ」

「そういえば、昔からおまえは何も聞かなかったな？」

「なに。妾とて聞かれとう無いことは多くあったのじゃ。アリステラ殿は妾のその領域に絶対に口を出さなんだ。妾はそれを覚えておるのじゃ」

アザゼル王妃の声に、アウグスタはくつくつと笑った。

あたしは二人を見て羨ましく思う。

気心が知れる者同士の、なんともいえない連帯感が二人の間にはあった。

（似たもの親子というか……似たもの姉妹って感じだなぁ……）

すると、頭の中で声が弾けた。

（ナザゼル様は、昔から陛下を尊敬していらっしゃったもの。歴代の王女殿下の中で、一番陛下に近いお方ですわ）

フェリ姫の心話だ。

あたしはしみじみとフェリ姫を見て『返答』する。

（……お義姉さまも十分アウグスタに似てるけど……）

（まぁ！　それは光栄ですわ……！！）

それとわかるほどに頬を染めて嬉しがるフェリ姫に、あたしは首を傾げる。尊敬している人に似ていると言われて、そこまで喜べるフェリ姫がちょっと不思議だった。

（まぁ……！　あなただって、クラウドール様に似てるって言われたら、嬉しいのではなくて！？）

即座にあたしの顔がとろけた。フェリ姫が「ほらみなさい」と言わんばかりの顔になる。

（でも、あたしのは愛だものっ！）

（ワタクシのも愛ですわよ！？　そりゃあ、愛の種類が違いますけれどっ！）

（じゃ、じゃあ、お義姉さまは伯爵に似てるって言われたら嬉しい

！？）

フェリ姫がどんよりと沈みました。

（……この世の終わりかもしれませんわ……）

……そこまで言われる伯爵がちょっと不憫だ。

「じゃが、さすがに十年近く場を離れておると、掌握しきれぬ情報が多いの。孤児院の不正がああも早く片づくとは驚きじゃが、かわりに教会内部が後回しになってしもぅておる……難題ではないのかや？」

「なに。どこもかしこも難題だらけだ。それに、命を脅かされている孤児院の方が、正直、金を貯め込むだけの教会より『急ぎ』だったしな」

「ふむ。まぁ、他国に持ち出される金は抑えねばならぬし……溜め込まれておる金なら、後ではき出させれば良いだけじゃものな」

「そういうことだ」

何やらオトナノハナシアイに没頭している二人に、あたしは小首を傾げる。

邪魔するのも気が引けたので、落ち込んだフェリ姫を慰めながらトコトコと移動することにした。

壁際で、従者よろしく立ってる大小二人の殿方に。

（ケニード！　バルバロッサ卿！）

アウグスタと一緒に入室しながらも、一歩も二歩も譲って大人しく戸口で控えていた彼等に、あたしは満面笑顔で両手を広げた。

抱っこ！　抱っこ！！

二人が苦笑してそれぞれ優雅に一礼する。そうして、抱っこでは無くあたしの前に跪いた。

「王女殿下におかれましては、ご機嫌麗しく」

ぉぉ。熊さんがニヒルな男前笑顔で手の甲にチューしてくれましたよ。

「殿下のご無事な姿を拝見いたしまして、我ら一同、深く安堵いたしました」

マニアさんはなんとも優雅な手の甲チューなのです。
なんだかお姫様になった気分だ。
……いや、なってたんだった。
（……でも、他人行儀なのはちょっと寂しいのです……）
しょんぼりちんまりと肩を落とすと、二人がなんとも言えない優しい笑顔になった。
「（いきなり倒れたっつーから、心配したぞ、嬢ちゃん）」
「（クラウドール卿のことも聞いたよ。大丈夫。ロードも『もう心配ない』って言ってたから、きっと数日もすれば会えるよ）」
小声でそう囁く二人を交互に見つめ、あたしはギュッとドレスの裾を握りしめた。
……駄目だ。泣いちゃ駄目だ。もうメソメソは卒業しないといけないのだ。
けれど、そんなあたしにケニードはいつもの暖かい笑顔で言う。
「（きっと、もうすぐ会えるよ）」
ぽろっと、目から水滴が零れた。慌てて目元をゴシゴシするあたしに、ケニードが綺麗なハンカチを差し出してくれる。
受け取ったあたしに、二人が微笑(わら)う。隣のフェリ姫もニッコリと微笑んだ。
「ベルにとっての本題を、陛下でなくあなた達からお聞かせ願えるとは思いもよりませんでしたわ。……本当に、大人の方は難しいお話を先になさるのね」
ちょっぴり皮肉が混じってる。
慌てたように大人の話し合いをしていたアウグスタがあたしの元にやって来た。
「いかんな。祭りの間はどうも頭が戦略脳になってしまう」
「数年もすればフェリも妾等と同類になるぞよ？　今からでも参加してはどうかのぅ？」
「それよりも、最初に言うべきことがあると思いますわ。言葉も失ってしまいましたよの？　ベルは」

「ん～～。ベル。オカアサマと言ってごらん？」
オカアサマ。
あたしは口を動かした。ヒュコーココ、という音が漏れた。
「……まぁ、聞こえなくもないが、言葉では無いな……」
「身体の異常では無いのであろ？　ならば、やはり精神的なことじゃな。妾も、一族郎党を皆殺しにされた時は声を失ったものじゃ」
なんかすごいことサラッと言われた！！
さすがにぎょっとして振り仰ぐと、異国の美妃はニッコリと色気満点の笑みを浮かべた。
「んふふふ。妾はもともとイステルマの隣にあった小国の王女でな。アリステラ殿の機転で命を救われたが、故郷も家族も喪った者なのじゃ。苦労話なら掃いて捨てるほどあるゆえ、いくらでもして進ぜよう。……声はな、きっかけがあれば戻るのじゃ。無理に急ぐでないぞ？」
笑顔の中の真剣な眼差しに、あたしはしっかりと頷いた。
王妃様は満足そうに微笑む。そうして、フェリ姫にニッコリと微笑みかけた。
「ちなみに、さっきは妬いておったんじゃろ？　フェリよ」
「存じませんわ」
プイッと頬をふくらませてそっぽむくフェリ姫。態度でバレバレだ。
「ふふふ。アリステラ殿よ。一癖も二癖もあった『我ら』と違って、最近の『王女殿下』はなかなかに愛らしいのぅ」
「おまえ達もそれぞれに愛らしかったと記憶しているがな。まぁ、なんだ。おまえのような百戦錬磨の盟友というのは珍しかったな」
「したが、我が『お母様』よ。我らはもともとそのような契約であったであろ？　若干、違うのもおるようじゃがな」
「……あいつはなぁ……」
「一の姉上様には、少し己の立場を考えてもらったほうがよかろうよ。このままでは、末の妹姫に何をするかわからぬ」

末の妹姫……ってことは、あたしか。
二人の美女に頭をかいぐりかいぐりされているあたしは、目をパチパチさせながらフェリ姫達を見た。
美少女と熊＆マニアという異様な三人組は、なんともいえない微苦笑を浮かべてあたしを見ている。
その半笑いは何でしょう？
そしてオカアサマとオネエサマよ。無意識のかいぐりかいぐりのせいで、あたしの頭が今すごいことになりつつあるのですが。
「レメクが戻れば決着はつくだろうが……。あの歪みようからして、別の問題が生まれそうだな」
「頭の痛いことじゃな」
「全くだ。……あぁ、そうだ、ベル――ぉお！？　なんだそのボサボサ頭は！？」
（……オカアサマ達にやられたのですが？）
撫でくりまわされて滅茶苦茶になった髪のまま、あたしは二人に抗議の視線を向ける。二人がそわそわと体を揺らした。
「い、いや。可愛いぞ？　可愛いが、なんだ。おまえ達、ちょっと直してやってくれ」
「う、うむ。可愛いぞ、姫よ。その、変な方向に吹っ飛んだ髪留めも」
「お二方とも。それよりも先に、言うべきお言葉があると思いますが」
笑ってごまかす大人二人に、フェリ姫が冷ややかにつっこむ。
二人はしょんぼりと頭を下げた。
「すまん」
「すまぬ」
……なんでしょうね。子供に窘められる大人というのは。
フェリ姫は二人の謝罪にコックリと頷いた後、それはそれは美しい微笑みをあたしに向けた。あたしの両手をとり、クルリと二人に背を向ける。

「さぁ、ベル。陛下達はお国のことでお忙しいようですから、ワタクシとお庭に遊びに参りましょうね。クラウドール様のことは、アロック様や大神官殿からお聞きいたしましょ」
（はーい）
とことことこ。
「ちょ……！　待て待て待て！　分かった！　私がわりと悪かったッ！！」
慌てて飛んでくるオカアサマ。あたしを奪うように抱きかかえて、フェリ姫をメッという目で見つめた。
「おまえまでレメクみたいな物言いをせんでもいいだろうが！」
「クラウドール様のご指摘は、いつも的を射ていると思っておりますもの」
「くっ……！　あの馬鹿助め。朴念仁のくせに人の心を掌握しおってからに……ッ！」
「乙女心の不理解と、道理は違いますわ。……それよりも、陛下。ベルはずっと、陛下のお言葉を待っているのですよ？」
（いるのですよ）
キラリと目を光らせたあたし達に、アウグスタは苦笑する。
そうして、あたしの頭を優しく撫でた。
「ベル」
（あい）
「レメクは危機を脱したぞ」
（……あい）
「おまえの声は、届いたぞ」
（……あい！）
キュッと唇を引き結んだあたしを、アウグスタは優しく抱きしめる。
「……よく、頑張ったな」
あたしはギュッと目を瞑った。
頑張った、と。褒められるようなことをあたしはしていない。た

だ一人でメソメソしていただけだ。周りの人がいなかったら、未だに暗い気持ちの中で、周りを見ることなくジメジメしていただろう。
頑張ってくれたのは、周りにいる人達だ。ポテトさんや、フェリ姫や、シェンドラおばちゃまや、いろんな人があたしを助けてくれたのだ。
「ベル」
アウグスタが優しくあたしを呼ぶ。顔を上げると、優しい笑みがそこにあった。
「今度のことでおまえが得た、その何物にも代え難い沢山の思いを……決して忘れるんじゃないぞ」
（あい！）
あたしの頷きに、アウグスタはいっそう笑みを深める。
「少し、大きくなったな……ベル」
その笑みは、まさに女神のように美しかった。

※　※　※

アウグスタの計らいで、その日は他の訪問客は全て『お断り』させてもらうことになった。
何の前触れもなく突然『王女』になったあたしだ。人の多い春の大祭時期とはいえ、そんなあたしの元に客など無いだろうと思ったのだが……なんと、実に二十を超す人々から面会の申し出があったらしい。
世の中には、不思議なお方が沢山いらっしゃるようである。
けれど、その人達とあたしは会うことは無かった。
アウグスタの指示を受けた女官達が扉を守り、時折忙しい時間を縫ってやって来る女官長が目を光らせ、フェリ姫とそのメイドさん部隊がつきっきりで傍にいてくれているのである。顔はおろか声も知らないままで終わったのだった。
「今はまだ体調が良くないのですもの。疲れる面会は、後々にして

いただきましょう」
そう言ってニコリと微笑むフェリ姫は、なんとも頼もしいことに来た人のリストと簡単な紹介文まで書いてくれたのだった。感謝である。
アウグスタとナザゼル王妃は他の面会のためにあの後すぐに退出し、お見舞いに来てくれていたケニードとバルバロッサ卿も、しばらくしてから帰路についた。沢山話したいことはあったが、あまり無理をするといけないから、ということらしい。
気遣いはとても嬉しいが、王宮に残る身としてはちょっぴり寂しかったりする。
フェリ姫はずいぶん長い間あたしの傍にいてくれたが、夜も更けてくるとさすがに留まることはできなくなったらしい。ゆっくり一人で体を休めるのも大事だと言って、彼女もまた帰ってしまった。
結果、今、あたしは広い部屋にぽつんと一人でいるのである。
大きすぎるベットに入ると、無意識に手がいない人を捜してわさわさ動いてしまう。大きくて立派なベットは、いつものレメクのベットに似ていて——けれど、一番大事なものが一つ欠けていた。
（……レメク）
あたしはベッドの中に潜り込む。そこで丸まると、自分の体温が布団の中に籠もって少しだけ暖かかった。
（……レメク）
目を閉じて心に思い浮かべる。
その人はほんの少し困ったようないつもの笑みで、じっとあたしを見下ろしていた。
（あのね、レメク。いろんなことがあったの）
ツンツンしていたフェリ姫は、どうしてかものすごく優しくなっていたの。
彼女の連れていたメイドさん達は、全員すごい美人で、おまけに行動が綺麗に揃っていて面白かった。
女官長のシェンドラや、料理長のおじちゃんは、忙しいのに度々

あたしの所に顔を出しては、なんだかすごく嬉しそうにあたしを見てまたどこかへと行くのだ。彼等とは面識は無かったはずなのだが、いったいどうしてなんだろうか？

ナザゼル王妃はとんでもなく綺麗な色っぽい王妃様で、アウグスタの親友という感じで頼もしかった。

（それにね、それに……レメクの昔の恋人っていう人にも会ったの）

レメクは不思議そうに首を傾げる。ただのあたしの想像のはずなのに、それはどこか現実味のある動作だった。

（マリアンヌって人なの。顔は可愛いんだけど、ちょとキツイ感じで嫌な人だったの。でも……でもね、あたしもレメクのことすごく好きだから、同じ立場だったら同じように嫌な子になっちゃうかもしれないの）

あたしは今、たくさんの幸運によってレメクの傍にいる。

けれどそれを失ってしまったら……きっと彼女のように、心を歪めてしまうと思うのだ。

（不思議ね、レメク。レメクが傍にいない時のほうが、レメクのこと、沢山人から教えてもらえちゃうのよ。あたし、ずっとレメクのことといろいろ知りたかったから……今、ちょっとだけ嬉しいの）

レメクの顔が曇る。

あたしは笑った。けれど笑顔は、なんだか変な風にくしゃくしゃになってしまった。

（でもね、レメク……どうしてかな、沢山いろんなこと教えてもらって……今まで知らなかったいろんな話もしてもらって……王宮なんていう、夢にも見なかったとんでもない所にいるっていうのにね……ちっとも気持ちがドキドキしないの）

レメクと一緒にいる時のような、ワクワクが何も無いの。

（なんだか胸の中がスカスカしてて、気を抜くと意識がフッて途切れちゃうの。なんでかな……？　未だに、ご飯の味もわかんないし……目の前は灰色のままだし）

今、こうして記憶の中の彼を見ても、あの綺麗な夜明け色の瞳が

わからないように……

（レメク。あたしね、強くなるって決めたの。決めたんだけどね……）

あたしは手を伸ばす。けれど手は、レメクにたどり着く前に何もない空間に遮られて、彼に届くことは無かった。

（レメク……レメク……）

触れられない。

声が聞けない。

だから心がギリギリと締め付けられる。

（……寂しいよぅ……）

心が零れるのを、止められない。

（寂しいよぅ……！）

ねぇ、どうすればいいんだろうか？　こんな風に、いつまでもずっとずっと同じ気持ちをもてあましているあたしは。

どんなに両足に力を入れても、一生懸命顔を上げても、ぼろぼろと零れてしまう弱くて情けないあたしの心は。

本当の意味で、ひとつも強くはなっていないあたしは――！

（会いたいよぅ……！！）

あたしは必死に歯を食いしばる。両手は力一杯ドレスを掴んで、無理に手を伸ばしそうになるのをなんとか堪えた。

一生懸命その場で留まっているあたしに、ふと、何かとても暖かいものが触れる。

あたしはしゃっくりと一緒に顔を上げた。

暖かい温もりがあたしを包む。

優しい笑みを浮かべたレメクが――そっとあたしを抱きしめてくれていた。

夢から放り出されるかのように、唐突にあたしは目を覚ました。

薄暗い布団の中で、あたしの小さな手が握り拳を作っている。目の前にあるそれをぼんやりと見つめてから、あたしは目をごしごしと擦った。

……目も頬も、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「……」

ずぴ、と鼻をすする。のろのろと体を起こして、ふわふわの布団から這い出た。

もこもこの雲のような布団の外は、相変わらずの灰色世界だ。目を閉じる前よりもその色が淡いのは、きっと朝になっているからだろう。

（……）

あたしはペタンと布団の上に座る。何かを期待していたわけではない。……けれど、少しだけ胸がスカスカした。

（……おじ様）

しょげたあたしの耳に、チチチという朝を歌う鳥の声が聞こえる。レメクの家で聞くよりも数が少ないのは、周りに森林のような木々が無いからだろう。あの自然に囲まれた屋敷は、王都という大きな都市の中にある小さな田園のようだ。誰もが夢見る、穏やかで暖かな幸せ――それがあそこには揃っている。

ぐし、とレースの袖で目元をもう一度ぬぐって、あたしは豪奢なカーペットの上に降りた。

（もひょうっ！）

相変わらずの素晴らしい感触が足の裏を包み込む。ちょっとこしょばい。

思わず足でカーペットの表面をなで回していると、ふと視界の端に何かが映った。

あたしはそちらを見て――動きをとめる。

ベッドサイドのテーブルに、ハンカチが一枚きちんと畳まれて置

かれてあった。
色はたぶん白だろう。灰色に見えるそれは、広げると可愛い模様の総レースだった。
小さくて可愛らしい蒲公英（ダンディライアン）と、リボンを結んだ鐘（ベル）の。
「……」
昔、これと似た意匠のハンカチをもらったことがある。
そしてそれよりもさらに昔――こんな風に、テーブルにある贈り物に、大泣きした記憶がある。
（……）
あたしは胸元の革袋を握りしめた。
――ここにいるはずは無い。いるはずが無いのだ。

それでもその人の顔が一番に浮かぶのは、そうであって欲しいと願ってしまうからだろう。
「……失礼いたします、王女殿下」
扉をノックされ、静かな声で告げられて、あたしは慌てて零れそうな滴を目の奥に引っ込めた。降りたばかりのベットによじのぼると、しずしずと初めて見る顔のメイドさんが入ってくる。
扉の所をチラと見れば、こちらはすでに見知っているフェリ姫のメイドさんがにっこりと微笑んでいた。……フェリ姫は、あたしの世話用にと何人かのメイドさんを傍につけてくれたのである。
「ご洗顔の準備に入らせていただきます」
そう言って頭を下げた初見のメイドさんは、ワゴンの上に大きめの器（……銀？）と、美術品のような意匠を凝らした水差し（……これも銀？）、そして小さな小瓶をいくつか乗せていた。これが洗顔のための道具なのだろうか？
（……お姫様って……）
呆気にとられて見ていたあたしは、その時、何かを感じてそのワゴンの下を見た。
何かと目があった。

（？）
目があった！？
「……！！」
ぎょっとなって身を引くより早く、それが突然飛びかかってくる！
「きゃあ！」
悲鳴があがった。あたしでは無く、あたしの前にいたメイドさんがあげた悲鳴だ。
「殿下！」
扉の所にいた姫メイドさんが駆けつける――ってその手の剣は何ですか！？
ぎょっとなったあたしに、飛びかかってきた小さなモノは素早くとりつき、するすると肩に登って首のあたりに張り付いた！
「キィッ！」
耳の近くで小さな声が聞こえた。どうやらソレの声のようだ。
……てゆか、コレ、何ですか！？
「リスザルだと！？」
リスザルって……ナンダ？
意味がわからずに首を傾げたあたしの耳は、その時、ぶちっという何かが千切れる音を聞いた。
唐突に、首にあった重さが消える。
（……え？）
「あ……あーッ！　殿下のものを……！！」
姫メイドさんが血相を変えて走った。何事かと駆けつけた他の姫メイドさん達も一気に気色ばむ。
「なんということ……！！」
「婚約の証を奪うですって！？」
ものすごい殺気だ。手に手にどこからともなく武器をとりだし、小さなリスのような生き物―（リスザル……だっけ？）を追いかける。
あたしは呆然とそれを見送り、のろのろと自分の首に触れた。

……何もなかった。

（……）

そこにあった、紐も……それで吊していた革……袋……も……

（！！！）

突然雷に打たれたように、あたしの頭の中が真っ白になった。

なんということ！　あの小動物は、あたしの命より大事なお宝を奪っていったのだ！！

「……ッ！！」

声にない怒号があたしの全身から迸った。

なぜかその場にいた全員があたしを見る。突然動きを止めてぎょっとこちらを振り向いた犯人に、あたしは猛然と飛びかかった！

（返せーッ！！）

「キキィィッ！」

凄まじい悲鳴が小動物の口から迸った。捕らえ損ね、あたしの手が空を切る！

しかし！　一撃ぽっちで諦めるあたしでは無いのである！

（返せぇえええッ！！）

どたん！　バタン！　ドドンッ！

逃げる小動物を追いかけて、あたしはそれこそ床から壁から走り回った。扉から飛び出た小動物を幾度となく捕まえ損ね、駆けつけるために新たな姫メイドさんが扉を開けた隙にさらなる外へ逃げ出した小動物の尻尾を掴み損ねる！

（ぬぁああ！　あとちょいッ！！）

「妹姫様！」

「殿下！」

仰天しておいかけてくる姫メイドさんを置いてきぼりに、あたしと小動物の捕り物劇は始まった！

（まぁあああてぇえええッ！！）

朝を迎えた王宮の廊下は、灰色世界のせいで豪華さはピンとこないが、とにかく凄まじく広かった。

小動物は時折柱に登ったり展示物の裏に隠れたりと小細工をしたが、そんなものがこのあたしに通じるはずがない！

柱はよじ登って追いつめ、展示品の裏に隠れればすかさず鷲づかみにしようと手をつっこむ！

しかし！　敵も然る者！！　小さくて軽い体を生かしてひょいひょいと逃げるのです！！

「キィイイイッ！」

……なんかすごい絶叫みたいな悲鳴あげながら。

日が昇ってどれぐらいたってる時間なのかしらないが、王宮の廊下にはほとんど人がいない。小動物の大騒ぎ（あたしじゃないわよ！？）に気づいてちらほらと顔を出す者もいるが、それでもその数は片手の指の数より少ない。――というか、見物人！　呆気にとられてないで、そのコソドロを捕まえてッ！！

（待てこらぁあああッ！！）

あたしは心の中で絶叫した。

他のモノならともかく、大事な大事なあたしのお宝を――よりにもよってレメクのお母さんの形見を！　奪っていくとは何事かッ！！

（どこのモノじゃぁあああッ！！）

あたしは目をつり上げて爆走する。小動物も死にものぐるいだがあたしも必死だ。邪魔なモノはなぎ倒す勢いで廊下を驀進し、そうしてその人物達を見つけた。

「キキィッ！」

心なしか嬉しげに小動物が声を上げる。速度を上げて一目散にそちらに走る泥棒の行く手には、綺麗に着飾った男女が呆然と立っていた。

そのうちの一人は、誰在ろう、あの王太子妃だ！

「……リリィ？」

王太子妃の隣に立っていた、優美な美青年が呆然と呟く。その美

青年の前で、小動物は大きくジャンプした！
「！」
王太子妃が息を呑む。美青年を素通りして彼女に張り付いた小動物は、そのまま凄まじい勢いで華奢な肩に回り込み、あたしのお宝を小さな両手に持て「キィキィッ」と鳴いた。
「リリィ……いったい……それに……」
唖然とした顔の王太子妃の横で、美青年は繰り返しそう呟く。それに、と見つめる先にいるのは、彼等の前に走り込んできたあたしだ。
「……！　……！！　……ッ！！」
あたしはゼィゼィと肩で息をしながら、竜をも射殺す気迫で小動物を睨みつける。
悲鳴を上げて王太子妃の後ろに隠れるソレに向かって、バッと右手を突き出した。
（返せ！）
「「……」」
王太子妃と美青年は絶句する。
特に美青年は、王太子妃とあたしを見比べ、小動物を見て目を丸くしていた。
（返せ！！）
そんな中で、あたしだけは真っ直ぐに小動物を睨み据えて手を伸ばす。あたしの気迫と動作に、美青年も意味に気づいたのだろう。小動物を覗き込んで言った。
「また悪戯かい？　リリィ。駄目だよ、悪いことをしては」
そう言って伸ばした彼の手を、けれど小動物は「キキィッ」と抗議して小さな手で叩いた。……なんて生き物だ！
「リリィ」
美青年は困った表情になる。そうして、未だに呆気にとられた顔のままの王太子妃に視線を向けた。
「マリー。リリィに言ってくれないかな。どうやら、こちらのお嬢

さんの大事なものを盗ってきてしまったようだよ」
マリー。
どうやらそれは、王太子妃の呼び名であるらしい。
美青年の声に、王太子妃はぎくしゃくと動いた。手を小動物の近くに向けると、それだけで小動物は意を得たようにあたしの宝物をその手の中に落とす。
（……返せッ！！）
あたしは鬼の形相で手を更に伸ばした。
王太子妃はそんなあたしを見下ろす。
その瞳に、鬼火のようなものが揺れた。
「……これは、私が貰うはずだったものですわ」
「……マリー？」
ぼそりと呟いた王太子妃に、美青年は首を傾げる。
王太子妃は、手の中の革袋をぎゅっと握りしめた。
「私が貰うはずだったものです。リリィは、きっとそれに気づいて、取り返してくれただけですわ」
（なにを言っとるのだーッ！！）
あたしはギンギンに目を光らせた。
それは、レメクがあたしにとくれたものなのだ！
自分はこれしかもっていないから、と。だから、自分の唯一の持ち物であるそれを、あたしに譲ってくれたのだ！
断じてこの茸ブロッコリーの物では無いのだ！！
「殿下！」
そのまま激情にまかせて飛びかかりかけたあたしを、後ろから追いついてきた姫メイドさんの声が引き戻す。
「殿下！　くせ者はどこに……！！」
血相を変えて走り込んできた……ぎぇえええ！？
振り返ったあたしは、思わずその光景に目と口を極限まで見開いてしまった。
そこにいるのは姫メイドさんだ。それはわかる。それはわかるの

だが……何故、数人しかいなかったはずの彼女らが、数十人にふくれあがっているのでしょうか！？

おまけに全員が箒やバケツやモップを構えている。さすがに部屋の中みたく剣は抜いていないが、それにしても異様な出で立ちだ。

「妃殿下！？　王太子殿下まで……！」

彼女らは、あたしの前に立つ二人に大きく目を見開き――そして一斉に凄まじい怒気を全身から放った。

「妃殿下。こちらに王女殿下の宝物を奪ったリスザルが走って来たりはしませんでしたか」

妃殿下は答えない。さすがに顔をひきつらせて、半歩分後ろに下がった。

「王女殿下は先の婚約の折、婚約者であるお方からこの世で唯一つしかない大切なものを譲られました。賊であるそのリスザルは、こともあろうにその世にも稀な宝物を盗んで行ったのでございます！　見つけ出し、取り戻さねばなりません！！　これは我が王女殿下に、ひいては我が王室に対する挑戦になりません！」

さらに半歩下がった妃殿下に、隣にいた美青年（王太子殿下？）が目を丸くする。そうして、ふとあたしを見下ろした。

「……もしや……ベル王女殿下でいらっしゃるのですか？」

あたしは頷いた。

とりあえず、今はそう呼ばれている者です。

さぁ、返せ！

ずいっと手を伸ばしたあたしに、美青年はなにやらしみじみと頷き、そうして、どこか悲哀を込めた目で王太子妃を見つめた。

「……マリー。お返ししなさい。リリィの悪戯は、ちゃんと謝らないといけないよ」

さぁ、と促されて、王太子妃は顔を歪めた。親に叱られた子供のような顔の中に、一瞬だけ、醜悪なものが滲む。

けれど、ふいに無表情になって、あたしのほうに革袋を放った。

（レメクのお宝！）

あたしはそれにバッと飛びつく。同じタイミングで小動物も飛びつきに来たが、あたしの一瞥をくらって尻尾を巻いて逃げ去った。

……勝った！！

「妃殿下！」

喜ぶあたしに反して、王太子妃の行動に目くじらを立てたのは周りのメイドさん達だ。王太子妃は知らん顔でそっぽを向く。

ぎゅぅっと戻ってきた革袋を抱きしめるあたしに、美青年は困ったような微笑を浮かべて跪く。そして、自分の羽織っていた上着を脱いであたしにかけてくれた。

「申し訳ありません。我が妃のペットが失礼をいたしました。あの子はよくああやって、悪戯ばかりするのですよ」

穏やかな微笑みの中で、その声だけはひどく苦いものを含んでいた。あたしは優しい顔のその人を見つめる。どこか寂しそうなその人の笑みは、少しだけ空虚だった。

（……おじちゃんのせいじゃないの）

首を緩く横に振るあたしに、その人はちょっぴり微笑む。なんだか切ないような悲しいような、そんな淡い笑顔だった。

（……この人は……？）

首を傾げて見上げるあたしから視線を王太子妃に移し、彼は静かに言った。

「マリー。君も、王女殿下に」

「お断りいたいますわ」

言葉を遮って、ぴしゃりと王太子妃が声を上げる。

ざわりとメイドさん達の気配が揺らいだ。

あたしも軽く目を見開いた。空気は王太子妃の方からあたし達の方へと流れているらしい。なぜなら、滲むような凄まじい異臭が、風に乗って彼女から漂ってきたのだ。

「なぜ私が謝らなくてはならないのです。バルディアの王太子である、あなた様まで膝をついて謝られたというのに」

「私の謝罪と、君の謝罪は別だろう？　マリー」

「まぁ！　あなた様は、妻である私に恥をかけとお言いになるの！？」

妻！？

あたしはびっくりして美青年を見上げた。

この、ケニード並みに麗しい美形さんが、この王太子妃の殿下！

（なんてもったいない！！）

そしてこの王太子妃から臭ってくる、鼻の曲がりそうなとんでもない臭いは、ナニ！？

どんどん醜悪になる臭いに、あたしはたまらず鼻を摘む。

「罪を認めることは、とても大事なことだよ。まして彼女は、こんな格好で追いかけるほど、その小さなものを大切にしていたんだから。君も見ただろう？　あの必死の姿を」

こんな格好、で、あたしは自分の姿を見下ろした。

……ぉー。そう言えば、起きたてだったので、薄い寝間着一枚だったのである。

あたしはいそいそと羽織らせてもらった王太子様の上着で自分を包み込んだ。こっちの人の匂いは、ちょっぴり切ない感じの爽やかなものだった。

しかし、王太子妃から漂ってくる異臭はいただけない。あたしはすぐにまた鼻を摘みなおした。

「私は……私は……！」

王太子妃が歪めた顔を背ける。

そうして、その場で硬直した。

（……ん？）

その様子に、あたしも王太子様も首を傾げる。

ちょうどあたしの後ろの方に視線を向けたまま、彼女は愕然と棒立ちになっていた。

「マリー？」

王太子様はきょとんと名を呼び、そうして、彼女と同じ方向を見て目を見開いた。

こつん、と。足音がする。
それだけで、あたしも動きを止めてしまった。
同じタイミングで、ざわり、とあたしの後ろが大きくざわめいた。
大慌てでメイドさん達が場を開けるために走る。そんな中でも、その足音はあたしの耳に聞こえていた。
（……）
息が止まる。
体が軋む。
鼻を摘むことすら忘れてしまった。解放されたあたしの鼻が、王太子妃の異臭と、王太子様の爽やかな匂いとを嗅ぎ取る。
望んだ匂いはまだしない。
しないけれど……けれど、この、足音は……
コツ、と。あたしの後ろでその足音が止まった。
背後にいたはずのメイドさん達は、コソとも音をたてずにいる。
ただ、気迫にも似たものすごい熱があたしに注がれているのを感じた。
いや、あたしと、たぶん、あたしの後ろに立った人に。
けれどあたしは振り向けなかった。
振り向いて……もし違ったら？
足音を似せただけの、アウグスタや、ポテトさんだったりしたら？
そうしたら、もしかしたら、何か大事なものが壊れてしまいそうな気がするのだ。
今、体中が心臓のようになってしまっている、あたしのこの気持ちとかが。
（……　……！）
あたしの口からあるかなしかの呼吸が零れる。
心臓が今にも飛び出しそうだ！
ぎゅっと革袋を握りしめたあたしの後ろから、その人はそっと声を落とした。
ただ一つ。あたしが願った、聞きたいと心から願ったあの声で。

「……ベル」

8　世界は色を取り戻す

何度思ったことだろう。
その声が聞きたいと。
名前を呼ぶ声は沢山あれども、あたしが願うのは唯一（ただひと）つだった。
この深く暖かな呼び声だけを、ずっとずっと待っていたのだ。

■■■

頭に浮かんだ言葉が、鼓動と同じリズムで明滅する。
心臓がドクンと大きく脈打って、体がドカンッと暖かくなって、
手足の先にまで熱が行
き渡るような――そんな不思議な感覚。

「……　……」
あたしは空気を求めるように口を開く。
息を吸おうと思った。
けれど、体は動かなかった。
なぜか小刻みに震え続けていて……それなのに、動こうと思っても体が動かないのだ。
喉の奥には重い蓋があり、空気すらも通らない。
まるで時が止まったように体が硬直して、手も、足も、心はその人を求めているのに、全く動いてくれなかった。
（……　……）
思考まで止まる。
何も思いつかない。
誰も何も言わなくて、誰も動こうとしなくて……本当に時が止まったかのように、そこには無音の空間ができていた。

「ベル」

その空間を裂いて、もう一度名を呼ばれる。
先程よりも近く、少しだけ大きく。
けれど、あたしは振り向けなかった。
そんなあたしに焦れたのか、背後の人がしゃがみこむのを背中越しに感じた。
空気と熱が動く気配。あたしのすぐ後ろからその人は手を伸ばし、あたしの両肩をそっと掴んだ。

――嗚呼。

嗚呼、なんて、なんて、懐かしい熱。
なんて暖かくて、胸に痛い形。
『誰か』なんて問うまでもない。
この声、この熱、この形。わからないはずがないのだ。
このあたしが……！！

「ベル」

声はすぐ後ろから聞こえた。肩に込められた力で体が動く。意志のない硬直した体が背後を向く。
視界が動いた。
止まったままだった全てが流れて、
そこに、
見たいと、
思った、姿、が……

――レメク。

一瞬で、その全てがぼやけた。
だけど、ぼやけた視界には黒い影があり、両肩には熱がある。
震える体はそのままに、口がいっそう大きく開く。

「……ひぃいイ……ッッック……！」

変な音が響いた。
何の音かわからなかった。
瞬きしても視界は変わらない。ただ、黒い影が驚いたように息を呑んだ。

――レメク。

頭のどこかで、文字が躍る。
――レメク！

止めようもなく全身が震え出す！
あたしは両手を伸ばした。
暖かい人の手が、そんなあたしを引き寄せる。
無意識に、戦慄（わなな）く口が大きく開いた。

そうしてそこから、何か、言葉ですらない音が迸（ほとばし）った。

※　※　※

ビリビリと近くの窓すら震えさせたその音に、視界内にいたメイドさん達がぎょっとして耳を塞いだ。
あたしを腕の中に引き寄せた黒い人は、ただ息を呑んでこちらを見下ろしている。
「～～～～ッ！！」
長く長く迸っていた音が、体中の空気を出しきってかすれて消えた。
頭の中が真っ白になっていて、うまくものを考えられない。
体中から絞り出した力が、音になって出たような感じだった。音は「あ」や「わ」の音に似ていたが、麻痺したあたしの頭にはよくわからなかった。
喉がひきつれたような音をたてて、失った空気を奥へと送り込む。
それはまた大きな音となってあたしの口から放たれた。
「……ベル」
あたしの声に――そう、あたしの声だ――レメクはあたしを抱き寄せる。
腕の中に閉じこめられて、あたしの声は微妙にくぐもった。
レメクはため息をこぼすようにして息を吐き、あたし頭にコツンと頬を当てる。
「……ベル」
（……！）
少しだけ切ないその声に、あたしの喉が再度引きつった。
ギュッと抱きしめられているせいで、体はほとんど動かない。それでも一生懸命もごもご動いて、わずかな隙間でトンと拳をお見舞いした。
「ッ……！」
トン。
「ッ……！」
トン。
「ベル」

トントン叩くと、レメクが優しく名前を呼んでくる。
あたしはもう一度拳を打ちつけ、声の限りに叫んだ。
「ばかぁッ！」
力一杯の声だった。
周りがぎょっと後退る。
あたしは構わずさらに叫んだ。
「ばかばかばかーッ！！」
トントンポカポカ。
小さく拳を打ちつけるあたしに、レメクが少しだけ驚く。
あたしは泣きじゃくりながら、いっぱいいっぱいの思いで拳をお見舞いした。
「レメクの馬鹿ぁッ！！」
レメクは避けない。ただ黙ってあたしの拳を胸で受けて――

何故かはんなりと微笑みを浮かべた。
「し、しんっ…しんっ」
しゃくりあげる喉のせいで、顎がガクガクいってる。
まともに喋れないのがなんだかすごく腹立たしくて、八つ当たりのようにレメクをポカポカ叩いた。
レメクは優しく微笑うばかりで、それがなんだか無性にくやしい。
「しんっ、配、したぁッ！」
声に出したとたん、いっそう涙がこぼれた。
寂しかった。
悲しかった。
もう会えないかもしれないと思った。
手を伸ばしても触れられなくて、声が聞きたくてももう聞けなくて……お母さんやプリムみたいに、もうどうやっても会うことのできな場所に行ってしまうのかと思った。
「こ、こ……」
まともに呼吸ができないあたしの頬をレメクが暖かい手で拭って

くれる。
あの時は「熱い」と思った手が、今は心地よく温かい。
あたしは自分からギュッとレメクに抱きついた。
レメクの手があたしの背を撫でる。
「こわ、か……ッ」
「……ベル」
恐かった。
ものすごく恐かった！
人は簡単にいなくなってしまうのだ。元気に見える人でも、本当に、目を閉じて開いた次の瞬間には、あっけなくいなくなってしまうのだ。
だから――――！

「も、もぅ……あ、えな……かった、ら」
もし、レメクが、
「いな、く、なっ、っちゃった、ら！」
どこかへと、いってしまったら。
「あた、し、どうや、って……生き、て」
これから先をどうやって、生きていけばいいのだろうか？
どうして……生きようなんて、思えるのだろうか？
この人を喪って生きる世界に、意味なんてありはしないのに！
「い……き、て……」
「……ベル」
泣きながら声をあげるあたしに、レメクはけぶるように眼差しを細める。
その、綺麗な綺麗な――夜明け色の瞳。

「すみませんでした……」
その声に、あたしは一層大きく泣きじゃくった。

レメクが謝る必要は無い。レメクが倒れた原因だってあたしにあるのだ。レメクはむしろ怒るべきなのだ。

それでも彼は、泣いてるあたしのために両手を広げて、理不尽な言葉を受け止めてくれる。抱きしめて、暖かいものの中で、あたしを癒してくれるのだ。。

なんていう人だろう。

そして、あたしはなんて愚かで我が儘な人間なんだろうか。

こんな時だと言うのに、ここにいてくれるレメクに、「おかえりなさい」も「ありがとう」も言えないなんて！

「お、おじ、しゃっま。あ、」

呼吸が変になっていて、しゃっくりに声が何度も潰される。

レメクはあたしの髪を丁寧に撫でながら、ほろりと笑みを零して言った。

「……倒れている時、ずっと、あなたの声が聞こえていました」

あたしは唇を引き結ぶ。

見たいと願い続けた人の顔。

綺麗な黒髪と、綺麗な赤紫の瞳。

「いつだって、あなたの声が聞こえない時は無かった……」

あまり日にやけていない肌。

着ている服は懐かしい黒い服。

金糸銀糸の縫い取りがあるのは、きっとここが王宮だからだろう。

「こんなに小さいのに、あなたは……あんなに大きな声で、呼び続けてくれたんですね……」

レメク越しに見える王宮の天井。

色彩豊かな美しい模様と、品良く配置された典雅な装飾。

向かって左側の壁には窓。そこから見えるのは、どこまでも澄みきった空の青。

色のある世界の、そのなんと美しいことか。

「ベル……」

優しい声があたしを呼ぶ。

二つの音で作られた、あたしの名前を。
抱きしめ合った体から、交わした言葉から、暖かいものの全てが互いに流れ込む。
あたしはギュッと唇を引き結ぶ。
会いたかった。
ただ、会いたかった。
強く、ただひたすら純粋に――傍にいたかったのだ。

この人の傍に――――

「あなたに……会いたかった」
「ふ……ぅえ」
安堵とも歓喜ともつかないものに思考を奪われて、あたしの口からまた大きな音の塊が飛び出す。
レメクはあたしの髪をもう一度撫でると、しっかりとあたしを抱きしめてくれたのだった。

※　※　※

昔、プリムが言っていた。
気持ちのままに泣くのは、すごく体力がいるのよ――と。

あれは確か、お母さんを亡くして寂しくて悲しくてたまらなくて、泣いていた時のことだった。
悲しい、という気持ちでいっぱいになって、その気持ちのままに泣いていると、体中の力を使い果たしてしまって、やがて力尽きてしまうのだそうだ。
確かに泣いた後はすごく疲れて、まともに動くこともできなかった。

頭もどこかぼんやりとして、半分夢を見ているようだ。
そう――あの時とは気持ちこそ違うものの、今がそうであるように。
あたしはヒクヒクしゃくりあげるのを一生懸命堪えて、レメクの腕の中で丸くなっていた。
レメクは病み上がりだというのに、あたしを抱きかかえたまま降ろそうとしない。
いつまでも丁寧に頭を撫でてくれて、その気持ちよさにあたしはついウトウトしてしまった。
「ッ……ッ……ッ」
何故か定期的におとずれるしゃっくりを堪えるあたしに、レメクがあやすように時折背中を撫でてくれる。
優しくて穏やかな時間は、レメクの家にいる時のようだった。
だからあたしは忘れていた。ここが王宮だということも、周りに誰がいるのかということも。
バキッ、と。
不意に聞こえた音に意識を引き戻されるまで、あたしは本気でレメク以外の全てを忘れ去っていたのだ。
「……？」
ずぴ、と鼻をすすって顔を上げると、折れた羽扇子（エヴァンターユ）を握りしめたまま、ものすごい目でこちらを睨んでいる茸が一匹。
いや、一人。
（……忘れてた！）
パチンと夢が覚めたような気持ちで、あたしはギュッとレメクにしがみついた。
ザーッと音をたてて血の気が下がる。
例え性格が悪かろうが、相手は美女。しかもそこそこ巨乳。
さらにレメクの昔の恋人。おまけに王太子妃と位も高い。
隣に旦那さんがいようがいまいが、あの形相ではおかまいなしだろう。

（……ま……ま、負けないッ！！）

絶対渡さない構えでレメクの服を握りしめ、あたしは目をビガッと光らせた。

ビリビリと空気が震えるような錯覚。

何故かレメクが不思議そうに『あたしを』見た。

「……ベル？」

後頭部に視線を感じる。

黙ってひたすら王太子妃と睨みあっていると、再度「ベル？」と名を呼ばれた。

（ちょっと黙っててください、おじ様）

あたしは意識を目に集中してビカビカ対抗する。

（あたしは今！　勝負中なのです！）

「……？」

レメクはこの上なく不思議そうだ。

全身から「？」の気配が伝わってくる。

……目の前に過去の女がいるというのに、何故理解できないのだこの人は！

あたしはビカッとさらに目を光らせ、レメクの腕の中から半ば身を乗り出すようにして威嚇した。

（下がれッ下がれェーッ！！）

王太子妃の隣の美青年（というか、バルディアの王太子）も、呆気にとられた顔であたしと王太子妃とを見比べていた。レメクに視線を向けたりもしているが、なんだかそれは恋敵を見るというより「どうしましょう？　コレ」と相談するような視線だった。

（あああ殿方とはどうしてこうお暢気なんでありましょうか！）

あたしと王太子妃はさらに目力を上げて睨みあった！

（ムキィイーッ！）

無言で始まった女の戦に、レメクは首を傾げてから王太子の方に向き直る。

その動きに、美青年はすばやく姿勢を正した。

「お久しぶりです、殿下。このような姿で御前に参りましたこと、お詫び申し上げます」
第一声はレメクからだった。深みのある美声に、爽やかな笑顔で王太子は答える。
「いや、クラウドール卿。そのような些細なこと、気にされることはない。意識不明の重体と聞き、案じていましたが……」
そこで言葉を切って、未だ睨みあっているあたし達をチラと見てからフワッと微笑む。
「……少し、元気になったようで……何よりです」
その心のこもった暖かい声に、レメクも少しだけ微笑んだ。
「ありがとうございます。情けない話ではございますが、今こうして立っているのがやっとという有様です。後ほどご挨拶に伺わせていただくとして、今は退席をお許しいただけますでしょうか？」
「ええ、構いません。あまり無理をされぬように」
そう言って品良く微笑む美青年に、あたし達の後ろの方から押し殺した「（きゃ～）」という音のない歓声が上がる。
レメクはそれに反応せず、丁寧に他国の王太子に礼をした。
そうして、心持ち妃殿下のほうに向き直る。
（キタ！）
あたしはギューッとレメクに爪をたてた。
レメクが妃殿下に礼をする！
「妃殿下もお変わりないようで、なによりです。それではまた後ほど」
そして優雅に踵を返……す、ぇえー？
あたしは思わずポカンと口を開けてしまった。
視界の端っこでは、妃殿下が「ガーンッ」という顔で固まっている。
互いに予想外だったレメクの言動に、睨み合いも中止になってしまった。
メイドさん達も唖然としていて、唯一けろっとしていたのは爽や

か笑顔の王太子だけだ。
（て、てゆか、おじ様……むむむ昔の女に、それだけですか……！？）
「？」
固まっているあたしを覗き込んで、レメクが不思議そうに首を傾げる。その何もわかっていない顔に、あたしはパクンと口を閉ざした。
（ま……まさか。まさかまさかまさか……！）
昔の女なんて、眼中外？
てゆか、本気でどうでも良いと？
「？　何の話です？」
あたしの心を勝手に読み取っているのに、レメクはひたすら不思議そうな顔。
「ま……待ちなさい！」
そんなレメクにあちらも納得できなかったのか、妃殿下がひきつった声でレメクを呼び止めた。
心持ちゆっくりと歩いていたレメクは、それで普通に振り返る。
「何か？」
その、本気で普通の『無表情』。
あたしやアウグスタ達といる時と違うその顔は、数日前の舞踏会でも時折見たものだった。
思い返せば、あたしやアウグスタ、それに馴染んでからのケニードやバルバロッサ卿達と会っている時以外は、こんな顔が多かった。
（……そういえば、バルバロッサ卿も言ってたっけ……無表情が普通だ、って）
閣下達のような例外はあれど、基本、彼は無表情だったのです。
ということは、今、レメクはその「普通の顔」。
親しい人と会っている顔では無いのだ。
（……なんで？）
昔の恋人でも、別れたら他人ってコト？

首を傾げるあたしに、何故かレメクもあたしに視線を向けて首を傾げる。

（……何故あなたも首を傾げるのですか、おじ様）

果てしなく疑問だ。

とはいえ、他国の王太子妃に呼び止められてそちらを無視するわけにもいかない。

レメクはすぐに王太子妃に視線を戻した。

あの無表情で。

「何かご用でしょうか？」

「ご用……って」

王太子妃は絶句だ。

そんな反応を返されるとは思ってもみなかったらしい。あたしは二人を見比べて眉を顰める。王太子妃から臭ってきた異臭はいつのまにか霧散しているが、レメクから微妙に冷たい匂いが漂ってくるのは何故だろうか？

「ご用が無いようでしたら、これで失礼させていただきます。……それと、妃殿下。一つだけ忠告を」

「な、……なんです！？」

何故かギクリと王太子妃が後退る。

レメクは感情のこもらない目でそんな王太子妃を見つめ、淡々とこう告げた。

「他者の物を盗んだ以上、例え他国の王太子妃のペットといえど、盗人には違いありません。まして、ベルは我が国の王女。双方に和解の意志なくば我々は貴国に対しこのことを抗議しなくてはなりません」

「……なッ……！」

王太子妃がぎょっと目を剥いたのが見えた。

さすがに隣の王太子殿下も困り顔になる。

「クラウドール卿。できれば、国同士の諍いにまで発展させたくは無いのだが」

「ええ。こちらとしてもそれを願います。……けれど、他国の王族の方に我が国の王女を侮辱されて、黙っていられるわけがありません。あなたの国が、我が国を侮辱したのに等しいのですよ」
「ああ……そのことについては、私が如何様にも詫びよう」
真っ直ぐにレメクを見つめてそう言う王太子に、レメクは緩く首を横に振った。
「……咎のない方に謝罪を強いるわけには参りません。けれど、国を背負うということは、まさにそういうことなのでしょう」
嘆息をついて、レメクはあたしを見た。
「殿下。バルディア国の謝罪をお受けになりますか？」
あたしはきょとんとした。
デンカって誰だ？
「……」
パチパチと目を瞬かせると、レメクが目で合図する。
（……ああ、あたしか）
数秒おいて、ようやく納得した。
しかし、レメクから「殿下」。しかも丁寧な言葉……は、いつも似たようなものか。
ちょっとドキドキのような、しょんぼりのような……
肩をしょぼんと落としたあたしに、何故かレメクが大いに焦る。
あたしはしょんぼりのまま王太子殿下を振り返り、困ったように微笑むその人の顔を見て、心を決めた。
「はい」
王太子殿下がふわっと微笑んだ。
「ありがとうございます、殿下。もしよろしければ、後でお見舞いの品を届けさせてください。クラウドール卿の分と、あなたの分と」
あたしはコックリと頷いた。
できるだけ王太子妃の方は見ないようにして、レメクを振り仰ぐ。
（これでいい？）
目で訴えると、レメクは軽く微笑んだ。

「殿下がよろしいのでしたら、私から言うことは何もございません。――それでは、失礼いたします」

きちんと王太子達のほうに一礼して、レメクは颯爽と身を翻す。

視線の先で真っ白になった王太子妃と、軽く手を振る王太子の爽やかな笑顔がひどく印象的だった。

※　※　※

王太子妃達の前から去った後は、奇妙な行進となっていた。

レメクはヒクヒク言うあたしを抱えたままだし、彼の後ろには三十を超えるメイドさん達が一列になってしずしずとついて来ている。

あたし達は無言のままだし、もちろん後ろのメイドさん達も無言だ。

ただ、なんだかキラキラとした熱を後ろから感じる。

それこそ、足を止めればワッと群がられそうな気配に、レメクの足も微妙に速かった。

（……レメク）

泣きすぎたせいでチクチク痛い目元を拭って、あたしはレメクの服をチョイチョイと引っ張る。

レメクが「なんです？」という目であたしを見た。

（……あたしも歩く）

レメクに抱っこされるのはすごく嬉しい。いつまでだってこうして張り付いていたい。

けれど、彼は病み上がりなのだ。こうやって、あたしを抱き上げていることだって大変な労苦だろう。

そう思ったのだが、レメクはちょっと困ったように眉を寄せた。

（……おじ様？）

フェリ姫と話していた時のように心で問いかけると、レメクの目がちょっと逃げる。

心持ち抱きかかえている腕の力が強くなったような気がしたが、その理由は不明だ。

（？？？）

きょとんとしているあたしを抱えたまま、レメクは無言で歩き続ける。

もう一度降りる意志を伝えようとしたところで、ふと、左手側の扉に『手』が見えた。

豪奢な扉から伸びているということは、どうやら部屋から手だけを出して、ひょいと挨拶しているらしい。

レメクがそれを見て思わず立ち止まった。あたしもだが、レメクも相当驚いたようだ。

しげしげと手を見つめ、逡巡した後で再び歩き始める。しずしずと並んで後をついて来ているメイドさん達を従えたまま、レメクは手が招く方へと向かった。

（……誰の手だろう？）

あたしは首を傾げる。

白くて綺麗な手だが、妙に無機質な感じなのが気になった。

ついでに言えば、なんだか手の位置がちょっとオカシイ気がするのだ。手はだいぶ下のあたりから出ていて、もし中にいる人が手を出していたとすれば、床に寝転がった体勢ということになる。いくら綺麗な王宮の床とはいえ、立派な宮廷人達が床に転がって手を廊下に出すだろうか？

しかも、扉の近くまで来ると、手はひょいと中に引っ込んでしまった。

（……なんか、変）

疑問に思うあたしにかまわず、レメクは軽く開いていた扉を押して中に入る。

途端、あたしの視界一杯に青一色に統一された美しい部屋が現れた。

（……うわぁ！）

あたしは思わず目を瞠る。

美しい色の優美な部屋だった。

落ち着いた深い蒼を基調に、瀟洒で品の良い装飾を随所に凝らしている。大仰な飾りはほとんど無く、むしろ豪華さと言うならこの部屋よりも廊下のほうが遙かに豪華だろう。

けれど、この部屋には気高さと落ち着きがある。あたしは思わず感服して部屋を見回した。

……というか、なんかこの間取り、ちょっとどこかで見たような気がするのです。

部屋の大きさや、意匠なども妙に見覚えがある気がする。……いや、色は初めて見る色ですが。

なんとなく相違点を捜そうと床の絨毯に視線を落とすと、そこにさっきの手が落ちていた。

（……）

って、ぇえええええ!?

「……あーぁ……結局、来ちゃいましたか」

さすがにぎょっとなってソレを見ていると、唐突に横合いから声が聞こえてきた。

驚いてそちらを見るあたしと、何故か平然とした顔で声の主を振り返るレメクの前で、壁にもたれかかって腕組みしていたポテトさんが苦笑した。

床に転がっていた手がチコチコと指で動いて、その黒い人の影にひょいと潜り込む。

どうやら、白い手はポテトさんのペット（？）のようだ。

「私は、しばらく安静にするように、と……そう言ったはずですよ？　レンさん」

揶揄を含んだその声に、レメクは深々と頭を下げた。

「申し訳ありません」

「……いえ。まぁ、最初から無理だろうと諦めてはいましたが」

苦笑混じりに嘆息をつくポテトさんは、何故かあたしをチラッと見る。

「動かずにはいられなかった、ということでしょうね」

その口元にある笑みは、どこか満足そうなものだった。
ちょっと居心地悪げにレメクは身じろぎ、ポテトさんは笑みをますます深くした。
「それに、あなたが動いてくれなければ、事態はもっと複雑になっていましたからね。それを思えば、むしろ礼を言うべきかもしれません」
「……まさか、陛下が？」
「ええ。そのまさかで」
レメクの声に、ポテトさんはため息混じりに頷く。
「未だにあの方にとって、あの人物は『娘』なのですよ。すでに『手から離れて』いるというのに……」
「……危険ですね。『あちら側に行った』相手を危惧するようでは」
「さっきも間に入りに行こうと動くもんだから、こっちは慌てましたよ。ご自分が国王だということを、もっと自覚していただきたいものです」
「……あなたがそんなことを言うとは、いささか衝撃ですね」
「失礼ですね、レンさん。国の間柄については、たぶんあなたよりも私のほうが詳しいですよ」
「それは存じてます」
「常にはそれを気にしないというだけで、常識だってあるんです」
「……できればそれは常に気にしてください」
えへんと胸を張ったその人に、レメクが疲れた顔で声を零す。ポテトさんはそれはそれは素晴らしい笑みを浮かべた。
「そういうわけで、今、御主人様は私の空間に閉じこめてありますから、後で機嫌取りをお願いしますね」
「……何故、私ですか」
「え。だって私が顔を合わせたら、絶対一発や二発じゃすみませんから」
片手で握り拳を作って言うポテトさんに、あたしもレメクも絶句した。

……この超絶美形を殴るのか。アウグスタ……

（……やりそうだ……）

他の誰にもできないだろうが、あのアウグスタなら問答無用でやりそうな気がする。

しかし、殴られるポテトさんというのもあまり想像できない。

レメクは何故か非常に微妙な顔をしてから、いかにも嫌そうにため息をついた。

「……あなたの場合、殴られても無傷ですが……陛下も何故、わかっていてやるのでしょうね」

「勘弁していただきたいですよ。あの方に怪我されるぐらいなら、いっそ自分が怪我したほうがマシです」

妙に切実なポテトさんの声に、レメクはなんとも言えない微苦笑になった。

「それを本人に言えば、たぶん危険は回避できると思いますが？」

「本当ですか？　嘘じゃありませんね？　嘘だったらちょっとヒドイですよ？」

「……それだけ真剣なら、どうしてもっと早く……いえ、なんでもないです」

ポテトさんの必死さが微妙に謎だ。

あたしは二人を交互に見比べ、このままだと延々と話を続けそうな相手に声をあげた。

「お義父さま。それより、おじ様が休めるところ、無い？」

ポテトさんはあたしを見て、ちょっと目を見開いた。

その顔が柔らかくほころぶ。

「それならば、ここで休ませてあげればいいと思いますよ。ここはあなたの部屋ですし」

あたしとレメクの両方が息を呑んだ。

息を呑んだあたしに、レメクがさらに目を丸くする。

「あなたが驚くんですか？」

「え。だって、あたし、ここがあたしの部屋って……」

「ずっとこの部屋を使ってたはずですよ？」
アワアワするあたしを見て、ポテトさんも目を丸くする。
「いや、でも、あたし、何見ても灰色にしか見えなくて、こんな色の部屋だったんだな、って、今知ったとこだし」
どうりで間取りとかイロイロ見覚えがあるはずだ。
ぽかんと周囲を見渡すあたしに、何故か全員が絶句していた。
「……声はおろか、色まで失ってたんですか、あなたは……」
ポテトさんはまじまじとあたしを見ている。
あたしはしょんぼりと身を縮こまらせた。なんというか、自分の弱さを露呈させちゃった感じです。
「……お嬢さん」
「……はい」
「もう、大丈夫ですね？」
ポテトさんの声に、あたしは顔を上げる。
レメクを見上げ、ポテトさんを見上げて、あたしはしっかりと頷いた。
「うん。もう、大丈夫」
その答えに、レメクは眼差しを細め、ポテトさんは極上の笑みを浮かべた。
「それは良かった」
その顔に、ふと、いつか見たケニードの笑顔を思い出した。
かつての孤児院事件の折、あたしに同じ質問をした人。
あの時はレメクのことだったけど、今回はあたしのことだ。
すると、ポテトさんはクスクスと楽しげな笑みを零した。
「しかし、あなた方は本当に似たもの同士ですね。頼みますから、交互に倒れるのだけはもう止してくださいよ？　周りの心臓がもちませんから」
彼の心臓は含まれないらしい。なんとなく納得して、あたしとレメクは深く頷いた。
「さて。では、レンさんはお嬢さんのお部屋で休ませてもらうこと

にして、お嬢さんは陛下や他の皆さんに元気になった姿を見せに行きましょうか。まだ本調子ではありませんが、心配している人達には、挨拶しておいたほうがいいですから」

「あい」

あたしはコックリと頷いた。

しかし、あたしは差し出されたポテトさんの腕に移れなかった。

レメクが離さなかったのだ。

「……おじ様？」

あたし達の視線に、レメクはハッとなってあたし達を見る。ちょっとぼうっとしていたようだ。

「……」

ふと、視界の片隅でポテトさんが口元を笑ませた。

差し出された両手が引っ込められる。

「……いえ、やっぱりよしておきましょう。お二人とも本調子ではありませんし。なにより、一番心配していた人がまだ不安定ですから」

「？？？」

誰のことだろうか、それは。

首を傾げたあたしに、ポテトさんは淡く笑う。

「二人とも、奥の部屋でお休みなさい。お嬢さんが飛び出して行ってから、この部屋はほぼ無人ですから、誰にも見咎められることはありませんよ。残っていた番人の方も、御主人様が来た時に一緒に私の空間に放り込んじゃいましたし」

「……なにをやってるんですか、あなたは」

「いちいち説明するのも面倒でしたから」

ひょいと肩をすくめて、ポテトさんは部屋の奥を指さす。

「ゆっくり眠ってらっしゃい。後は私がなんとかしておきますから」

レメクはポテトさんを見つめ、ゆっくりと頭を下げた。

「任せます」

「はい。任されました」

全面的に信用されて、どこかくすぐったそうにポテトさんが笑う。
そうして壁から体を起こすと、軽く手を振った。
そのまま普通に部屋の外に出て行くのを見送って、あたしはふと今まで気づかなかったことに気づいた。
あのメイドさん達がどこにもいないのだ。
あたしはきょろきょろと周囲を見渡す。
あたし達の後ろについて来てくれていたメイドさん達は、いったいどこに行ったのだろう？
「……たぶん、放り込まれたんでしょうね。あのヒトの空間とかに」
……無事なんだろうか、あの人達……
「陛下が一緒なら大丈夫ですよ。それに、普通の人を長時間取り込むことはないはずです。今頃、どこか適当な場所に放り出していると思いますよ」
「そうなの？」
「ええ」
しっかりと頷かれて、あたしはホッと肩を下ろした。
ポテトさんの言う『自分の空間』というのが、あの死一歩手前の空間だったらどうしようかと思ったが、どうやら杞憂だったようだ。
「それにしても……あなたがこの部屋を……」
あたしを抱えたままで、レメクは部屋を見渡す。
一緒になって部屋を見渡して、あたしはしみじみと嘆息をついた。
「こんなに綺麗な部屋だったんだ……」
「……そういえば、灰色に見えると言っていましたが」
う。
あたしはソローッと目線を左に逃がした。
レメクはそんなあたしを黙って見つめ、何も言わずにギュッと抱きしめてくれる。
（……おろ？）
意外な反応に、あたしは目をぱちくりさせた。いろいろ言われると思ったのだが、レメクにそんな気は無いらしい。

（お小言無し？）
レメクはただ微笑む。そうして、部屋を見渡して苦笑した。
その瞳にどこか懐かしげな色を認めて、あたしは首を傾げる。
「おじ様？」
レメクはあたしを見てちょっと微笑った。
「ベル。休ませていただいても構いませんか？」
もちろんですとも。
あたしは即座に頷く。
そうして、レメクをベッドに促すべくその腕から飛び降り……れなかった。
（おじ様。離してくれないと、案内できないのです）
ジーッと見つめると、それにようやく思い至ったらしいレメクが、やや慌てたようにあたしを離した。
あたしは地面に着地する。華麗に、と言えないのは、そのままヨタヨタふらついたからだ。
……むぅ。あたしもまだ、本調子じゃないようです。
さすがに根性入れてた時は、がんばれたけど。
「休養が必要なのは、あなたもですね」
レメクがあたしの頭をそっと撫でる。それに大喜びで頭を擦りつけながら、あたしはヨタヨタと寝室に入った。
「「……」」
そして絶句する。
部屋の中は、微妙にイロイロ荒れていた。
「……泥棒でも入ったんですか……？」
レメクの声に、あたしは視線を逸らした。
……言えません。犯人が、泥棒リスザルを追いかけたこのあたしだとは。
しかし、闇の紋章はそんなあたしの乙女心すら勝手にレメクに横流ししやがります。
微妙な表情で部屋を見渡していたレメクは、最後に何やら言いた

げな顔であたしを見つめた。
む……無視です。
無視なのです！
「……とりあえず、休みましょうか」
汗いっぱいの顔でそっぽ向いているあたしに、レメクが可笑しそうに口元を緩ませた。
あたしは大喜びでレメクに飛びつき、すぐさま整えられていないベッドの中に飛び込んだ。
（さぁおじ様！　来るのですおじ様！）
頭だけ出してパンパンとシーツを叩くと、レメクが苦笑しながら入ってくる。
（さぁ、おじ様。一緒にぐっすりなのです）
目をキラキラさせているあたしの頭を撫でて、レメクはどこか懐かしそうな顔をした。
「そういえば、あなたが横にいるのは三日ぶり……いえ、四日ぶりですか」
そういえば、そうでした。
うんうん頷くあたしに、レメクはわずかに微笑む。
あたしが意識を失っていた時間が三日として、その前日に倒れた分も加算すれば合計四日間、あたし達は離ればなれだったことになる。なんてことだ。
あたしはもぞもぞ動いてレメクに飛びかかると、その腕の中に無理やり収まってゴロゴロした。
うむ。やはりこの腕の中は落ち着くのです。
あまりの心地よさと安堵感に、即座に眠りに落ちそうになる。
自覚してはいなかったが、どうやら王太子妃との対決や捕り物劇は、今のあたしにはすごくしんどかったようだ。
（うぅ、でも、すぐに寝ちゃったらいけないのです）
今すぐに落ちそうな意識を無理やり引き起こして、穏やかな目でこちらを見ているレメクを見る。

やっと会えたレメク。
すぐ傍にいる、たった一人の人。
「おじしゃま」
……眠気のせいで変な呼び方になりました。
「……？　なんです？」
一瞬だけ間をおいて、レメクが首を傾げる。
あたしはギュッとレメクの服を握って、眠気と戦いながら声をあげた。
……次に会った時には、言おうと思ったことがあるのだ。
「あのね、おじ様。おじ様はね、自分の傍にいちゃいけない、って……危ないから、関わらずに離れていた方がいいって、前に言ってたけどね……でも、それって、不公平だと思うの」
「……不公平？」
レメクの声もちょっと眠気混じりだ。
レメク自身が疲れていることを思い出して、あたしはできるだけ手早く言おうと小さな頭を振り絞った。
「うん。だってね……おじ様はあたしの傍にいるせいで、いろんな辛いことやしんどいことを受けなきゃいけなかったでしょ？」
孤児院のことも。王宮でのことも。
誰もが忌避し、回避しようとする面倒事をレメクは黙って受け入れてくれた。
傍にいて、まるで当たり前のように助けてくれたのだ。
そのたびに倒れ、命を失いかけながらも。
「おじ様。あたし、ちゃんと自分が子供だってこと理解してる。理解してるから、すごく辛いの。……おじ様。あたし、まだちっちゃいから、おじ様のためになるようなこと、ほとんど何もできてないにょ……むむにゅ……沢山のもにょをもらったのに、沢山のことをしてもらってるのに、何一つお礼ができてないの」
一瞬落ちそうになった意識を無理やり引き戻して、あたしは必死で言葉を紡いだ。

大人だから当然だと、レメクは笑って言うけれど、子供だから当然と、あたしはそれを受け入れられない。

だって、あたし達はお互いに——例えどれほど年に隔たりがあろうとも——それぞれ一人の人間なのだ。

助け合い、支え合うことのできる、人間同士なのだ。

ならば、あたしだけが助けてもらって、それで終わりだなんてありえない。

「あたしが小さいから、まだ子供だから……だから、おじ様だって、あたしのこと頼りになんかできないと思うけど」

けれど、レメク。

少しでいいの。

「ほんの少しずつでもいい……がんばって大きくなるから、強くなるから……だから、おじ様。あたしにも、おじ様のもってるいろんなものを分けてほしいの。辛いこととか、悲しいこととか、そういうの……全部」

きっとまだまだ頼りなくて、こんなこと言われても困るだけだろうけど。

「何もせずに、ただ甘えさせてもらえるだけなんて、もう駄目だと思うの。おじ様にばかり甘えて、だからおじ様は倒れちゃったんだから。もう二度とそんなことにならないように、あたしの方でもちゃんと、おじ様を助けられるようにならないといけないの」

昨日より今日。

今日より明日。

そうやって少しずつでもいいから、必ず強く逞しくなってみせるから！

「おじ様もあたしに甘えられるような、そんな立派なレディになってみせるから」

その荷物を少しだけ、あたしにも分けてほしい。

ほんの少しずつでいい……同じ道をずっとずっと、隣で歩いて行くために。

途中で置いてきぼりになる時が来るとしても、別れてしあう時が来るかもしれないけれど……それでも、そこまででもいいから……一緒にいさせてほしいから。

「約束……してね」

さすがに限界がきたらしく、しだいに視界が掠れていく。

そんな中で、レメクが淡く微笑むのが見えた。

あたしは服を掴む力を強くする。

本当は、もっといろいろ話したかった。

レメクが目の前で倒れて、どらだけ寂しかったとか、王太子妃のことや、今まで見てきたいろんなことを。

けれど、優しいレメクの目を見ていたらだんだん眠気が勝ってきて、言葉を考えることも難しくなる。

あたしは不思議と頬を伝う冷たいものを感じながら、レメクを離さないように手に力を込めた。

かすむ視界の中で、レメクが眼差しを細める。

夢に引き込まれるようにして遠ざかる意識の果てで、穏やかな声がそっと囁いた。

「約束します」

そうして、いつか聞いた誰かと同じように、暖かい声でこう言ったのだ。

「……大きく……なりましたね……ベル」

エピローグ

何度かざわめきを耳にして、その度に意識が浮いたり沈んだりするのを感じた。

何度微睡んでもすぐ近くには優しい温もりがあり、素晴らしい匂いがあたしを包み込んでいた。

それに安堵して意識を手放し……幾度目かの浮上の後、あたしはビクッと飛び起きた。

周りは黒い静寂に包まれている。

あの灰色世界とは違い、青をものすごく濃くしたような黒だった。

夜だと、意識の片隅で冷静な自分が理解を示す。

けれど、あたしはそれどころじゃなかった。

今が昼だろうが夜だろうがどうでもいい。

問題なのは、ぱたぱたと隣をまさぐるあたしの手が、そこに温もりを見いだせずにいることだ。

部屋の中にも匂いが残っていない。

あたしは真っ青になって周りを見渡した。

（レメク……レメク！？）

すぐ傍にいたはずだった。

戻って来てくれたはずだった。

それとも、あれは全部夢だったんだろうか？

（……レメク！）

あたしは真っ青のままよろよろとベッドを這い降りる。

動揺しすぎてベチャッと床に落ちてしまったが、痛みは感じなかった。

「……おじ……しゃま……」

痛みは無いのに、涙が出た。

よたよたと歩き出したあたしの視界の端で、闇が切り裂かれるようにして光りを零す。

そちらを見ると、燭台を片手に、なにやら大層美味しそうな匂いのするものをもう片方に持ったレメクが、器用に扉を開けて部屋に入って来るところだった。

（……レメク……）

あたしは呆然とその様子を見る。

燭台を近くの家具の上に乗せたレメクは、泣きながら棒立ちになってるあたしに駆け寄った。

「ベル！　何事ですか！？」

あたしはその姿をぼんやりと見つめ、近くに来たレメクの体に飛びついた。

「！？　べ、ベル！？」

レメクが驚いたように半歩下がる。

左手に持ったままのプレートが落ちそうになり、慌ててレメクはそれを持ち直した。

プレートからはいい匂いが漂ってきたが、今のあたしにはレメクの方が大事だ。

「……！！」

ぎゅぅう、と抱きつくあたしに、レメクが息を呑む。

そうして、荷物（プレート）をどこかに置いたのか、しばしの間をおいて両手であたしの頭を包み込んだ。

「ベル」

ギュッと爪をたてると、暖かい声が振ってきた。

「どうしたんです？」

あたしは首を横に振る。

なんでもない、と言おうと思った。

実際、何かあったわけでは無いのだ。

けれど何も言えなかった。

何もなかったけれど、目覚めた時にレメクがいなかったショックは、ちょっとやそっとでは薄れそうにない。

「ベル」

名を呼ばれて、あたしはぐしゃぐしゃの顔を上げる。
レメクはそんなあたしを見て、優しく笑った。
（……レメク）
あたしはギュッと服を掴む手に力を込めた。
――いつ頃からだったろうか。彼がそんな風に、優しく笑ってくれるようになったのは。
他の誰に向ける眼差しとも違う、この暖かい目で見つめてくれるようになったのは。
（……レメク）
強くなろうと思ったのに、傍にレメクがいないだけですぐに不安になる自分が、なんだかすごく恥ずかしかった。
あたしは泣いた恥ずかしさを誤魔化すために、目をゴシゴシと擦った。
それを慌てて止めてから、彼は淡い微苦笑を浮かべる。
そうして、未だ目覚めた時のショックを引きずるあたしに、優しい目でこう言った。
悪夢を終わらせる唯一の呪文を。

「悪い夢でも、見たのですか？」

番外編【始まりの日】（前書き）

第一回、番外編主人公選出人気投票第2位ケニードの話です。
主人公はベルではありませんので、お気をつけください。
この小説は、改稿後の第一話とリンクするよう設定されています。
ケニードとレメクが出会った十五年前の話です。

番外編【始まりの日】

王都の北区と言えば、言わずと知れた富裕層の街である。
貴族、豪商、大神官など、その身分は様々であり、屋敷の様相もそれぞれに特色がある。
豪商の屋敷は全体に大きく角張っているものが多い。どっしりと力強く、どこか商館に似た雰囲気がある。庭は小さく、そこに厩舎と倉が入っているため、敷地内はぎっちりと詰まった感が強かった。外壁は厚く、高く聳えるような形が多い。
神官の家は他に比べると少なく、特別高い地位にいる者が数人、屋敷を構えているぐらいだ。建物は瀟洒なものが多く、大きさよりも外装の荘厳さに目を瞠るものがある。また、庭が大きいのも特徴だった。
貴族の屋敷は、そのほとんどが『領地持ち』の街屋敷（タウンハウス）だ。
建物は王宮の建築様式を模したものが多く、装飾の類も華美を極める。街壁や門に至るまで手の込んだ意匠を施す者が多かった。
そんな北区の一角に、贅を凝らした白亜の屋敷があった。
王宮を精一杯小振りにしたような建物は、近隣の屋敷の中では大きい部類に入る。庭は広く、厩舎や大きな倉の他に美しい花園を有していた。
屋敷の持ち主はケニード・リンクス・アザルト・フォン・アロック。
アロック男爵家の跡取り息子である。

※　※　※

ケニードの朝は一杯の紅茶から始まる。
朝、九時。
他の貴族ならば、未だ眠りを貪っている時刻である。

貴族であると同時に事業家でもあるアロック家では、よほどのことがない限り『昼まで眠る』ということは有り得ない。

今日も時計の針が九を指すよりも早く起き出し、見計らったように現れる執事の紅茶で、体に残る夢の余韻を押し流す。

喉を潤している間に部屋中のカーテンが開かれ、手際の良い女中（ハウス・キーパー）頭が洗顔の用意を調える。顔を洗い、拭き終えた後には服を素早く着付けられた。その流れは淀みがなく、目覚めてから着付けが終わるまでの時間は十分にもならない。

屋敷でケニードの傍らに立つのは、幼少より面倒を見てくれている執事のリットだった。

今年で七十八を迎える体は小柄で、顔の皺は深く、その髪は燻した銀に染まっている。だがその背はしっかりと伸ばされており、立ち姿はある種の貫禄すら備えていた。

「工房より、注文の品が出来上がったとの連絡がございました。係の者に取りに行かせましたが、かまいませんでしたでしょうか？」

「うん。なんとか間に合ったみたいだね」

「はい。――それから、侯爵夫人がネックレスに合わせてイヤリングも新調したいと仰っているのですが」

「……それも夜会用だよね？」

「左様でございます」

若い主は渋い顔になった。

ケニードは男爵家の跡取りであるが、同時に王都屈指の宝飾店の店主だった。彼の作った意匠は洗練されたものが多く、身分を問わず多くの人々から支持されている。

多くの場合、客は店に並べられた品を購入するのだが、上流階級の貴婦人ともなるとそれだけでは満足できないらしい。多くの者が伝手（つて）を使って自分だけの品を作ってくれるよう頼みに来る。特に王宮の夜会が開かれる時期になると、日に十を超える依頼状が届くようになる。そうなると、抱えている職人のほとんどが不眠不休となる忙しさだった。

「レトの工房はもう手一杯だろうから……セズンの所はどうかな？」
侯爵が相手ともなると、そうそう依頼を断ることもできない。困り顔の主に、老執事はおっとりと首を横に振った。
「彼の本領が発揮されるのは腕輪類です。イヤリングはあまり得意ではなかったと記憶しております」
「ん～、でも、イヤリングが得意なのって、レトとベンネの所だよね。ベンネはこの前倒れちゃったし……いっそ僕が作ろうかな」
「恐れながら申し上げます。御主人様がお作りになると、今度は別の方々から苦情が参ります。安易にお作りになるのはおやめになったほうが良いかと存じますが」
「う～……」
情けない声を上げて、彼は天井を見上げた。
部屋を整え終えた女中頭（ハウス・キーパー）が、そんな主を見て口元を綻ばせて退出する。
二人きりになったのを確かめてから、老執事は軽く苦笑して言った。
「ナット殿の工房が、昨日最後の仕事を仕上げ終えたと記憶しております。あちらの専門はネックレスですが、同じ意匠のイヤリングを拵（こしら）えるのでしたら、問題ないかと。なにせ最後の仕事が、件のネックレスでしたから、ある意味一番相応しいでしょう」
「あ～、ナットがいたか。うん。彼に頼もう。寝てる所を叩き起こす形になっちゃうだろうけど……起きられるかな」
「起きますとも」
力強くリットは請け負った。その意は「起こしますとも」だ。
「じゃあ、早速連絡してくれるかな。料金はちょっと色つけるから、って言っておいて」
「かしこまりました」
「他に急ぎの用事はあるかな？」
「フォーゲル伯爵夫人から指輪のご依頼と、ルーベン伯爵夫人からネックレスのご依頼が来ております」

さらりと言われた言葉に、主は三秒ほど固まった。
「……やっぱり夜会用？」
「おそらく」
老執事は深々と頷く。ケニードは盛大なため息をついた。
「も～、なんで間際になってから連絡してくるかなぁ！」
「先日、ケール侯爵の夜会にお二方が招かれておいでだったのを確認しております。おそらく、その折りに御主人様を見つけられたのでございましょう」
ケニードもまた、その夜会に出席していたのだ。
「……時期を考えて欲しいよ。こんな間際で何作れって言うんだか。だいたい、なんで二人からそれぞれ注文が来るんだい！」
「お二方は常に競い合っておいででしたから」
主はどっぷりと深い嘆息をついた。
「さすがに無理だ。新作は断るよ。既製品で良いのがあれば、見繕いもできるけど……」
「では、試しにいくつか品をお持ちいたしましょう。ご希望に添うものがあれば、そこで商談させていただきます。お断りの文面は、陛下からの品を仕上げているため、でよろしいでしょうか？」
「そうだね。あと、先方の依頼で余力が無いと……あぁ、僕が手紙を書くから、それを届けてくれる？　一言断った方がいいだろうし」
「かしこまりました」
「……もうちょっと早く依頼してくれていたら、どうにかできたかもしれないのにね……」
背中を丸めながら椅子に座った主に、老執事は眦を和ませる。
そうして、戸口に帰って来た女中頭に目配せをした。
「御主人様。本日の朝食は、クラウドール様よりいただいた品です。先日のお礼にと早朝お持ちくださいましたので、ぜひ御主人様にご賞味いただきたく、朝食に取り入れましてございます。どうぞお楽しみくださいませ」
ケニードの顔が輝いたのは、言うまでもない。

「あぁ～、生き返るというか、幸せすぎて死ねるというか……！」
二人前はあった朝食を珍しくペロリと平らげ、食後の一服を経てはじめてケニードはそう口にした。
食器を片づける侍女（メイド）達を見守ってから、リットは主の姿に小さく微笑む。
「さすがはクラウドール様です。うちの料理長もずいぶん唸っておりました」
「皆の分もくれたんだね」
「はい。我々の分はおろか、工房の者の分までくださいました。忙しいだろうからと、工房の方にわざわざ届けてくださったようでございます」
工房の反応が目に浮かぶようだ。
「そういえば、前にレトがあの人の装飾品を作りたいって騒いでたなぁ……」
「御主人様が先約してるから駄目だと押さえつけたのでございましたな」
「う。いや、その。だって彼の装飾品を作るのは僕の十年以上前からの使命なんだよ！」
「そうでしたな」
「うん。店に置いてある品だって、彼をイメージして作ったものばかりだし！」
それが売れに売れて今のアロック宝飾店があるのだから、クラウドール侯爵の存在は大きい。
「そういえば、最初に作った品もクラウドール様の装飾品でしたな」
「うん」
お代わりの紅茶を味わいながら、ケニードは目を細めた。思わず顔が綻んでしまうのは、その時の記憶を思い出してしまったからだ。
今でも時折夢に見る。

頼れる人のいなかった王宮で、毎日心細い思いをしながら働いていた日々のこと。まだ周りの温もりに気づかず、向けられる侮蔑と悪意に怯えていた時代に、静かな眼差しでこちらを見てくれた人――

「思えば、あれが始まりだったんだよね……」

それは、今から十五年も昔の話だった。

※　※　※

王宮という場所は、なによりも爵位がものを言う。

爵位とは本来、領地に与えられるものである。

単純に言えば、公爵領を治める者は公爵であり、伯爵領を治める者は伯爵となる。

領地は滅多に他者に譲渡されることがなく、そのためそこを治める一族が代々爵位を名乗ることになるのだ。

ケニードが将来継ぐことになる『男爵』も、男爵領であるバルツァーを治めているからである。

逆に、役職や功績に対して個人に与えられる爵位がある。

これは一族で保有することのできない爵位であり、領地を伴うものでは無い。

そのため、領地持ちの爵位と領地無しの爵位であれば、基本的には領地持ちの爵位の方が上位となる。

ただし、それも同じ爵位同士であればの話だ。

もともと、個人に対して爵位を与えるという行為は、それ自体が相手の優秀さを示している。すでに王宮内に確固たる場所を得ているということであり、王宮内の立場としてはそちらのほうが高い。

ましてその爵位が『領地持ちの爵位』よりも上であるなら、どちらが上位であるかなど考えるまでもない。

そんな王宮にケニードが初めて足を踏みれたのは、彼が五つになる少し前のことだった。

父である男爵が何か大変素晴らしい功績を残し、それを称えられてのことだ。

当時はよくわからなかったが、その時、次期男爵のお披露目として彼は連れられて来たらしい。それまで男爵の何人もいる子供の一人でしかなかったケニードは、その日を経て初めて男爵家の跡取り息子になったのである。

それから七年。

今年十二になるケニードは、王宮を走り回っていた。

「ビットナー伯爵はおられますか！？」

練兵場に飛び込んできたひょろ長い少年に、近くで談笑していた何人から顔を向けた。いずれも練習を終えたばかりらしく、体から湯気が出そうなほど汗をかいている。

「おぅ、ちび男爵。伯爵ならさっきオレ等のケツぶっ叩いてから向こう行ったぞ」

「今頃、ダーミッシュ子爵の所じゃねぇか？」

「ばぁか、それならその前にダマー夫人の所だろーが」

「おお、来たのかあのご夫人。旦那のいねぇ間にまたしけこむのかよ！」

「どうせだ、一緒に混ざってこいよ！　なぁに、大人の段階なんざ、一足早い程度で丁度いいんだ！」

げらげらと笑う声に、ケニードは困り顔で俯いた。思わず耳まで赤くなる。

「おいこら、冗談ばっか言うな。こっちはあっちの旦那と違って真面目な坊やだ」

「おお、クラナッハが坊主庇ったぞ。なんだ、宗旨替えか？」

「阿呆、こちとらあっちの旦那に借金があるんだ。息子に優しくすんのは当然だろうが」

実に堂々とそう言う偉丈夫に、周りの兵士達が腹を抱えて笑う。

ちなみに、あっちの旦那、とはケニードの父親のことだった。
「なぁ、ケニード。オレ等ぁダチだろ。ちっとあの旦那に言ってくれねぇか？　あと三日ばかり待ってくれってよ！」
「よせよせ！　坊主に言っても無駄だろクラナッハ！　借金こさえたおめぇが悪いよ！」
笑い声が大きくなって、クラナッハが眉を怒らせる。ケニードはそろそろと足を後ろに下げた。
「えぇと、僕はその、お父様の事業には関わってないから……」
「あン！？　言ってくれりゃあいいんだよ！　言ってくれりゃあ！　それっぐらいしてくれたっていいだろ？　使えねェなぁ！」
途端に喉の奥で声を濁らせるクラナッハに、ケニードはパッと走り出した。笑い声と怒鳴り声が追いかけて来たが、足音は聞こえない。仕事時間のうちはまだ安全だと、ケニードは危険区域から逃走した。
また『お使い』を頼まれた時、クラナッハに会わないよう気をつけるのは大変そうだが。
（あぁもう、なんでお父様も金貸し業に手を伸ばすんだか……！）
廊下を駆け、庭に出てから少年は大きく息をついた。
ダーミッシュ子爵のいる西館へは、廊下を駆けるより庭を突っ切った方が早い。国指定保護機関に官吏見習いとして雇われて以降、伝言役として王宮のあちこちを走ったケニードの頭には、使用人通路を含む様々な近道が入っていた。それらの半分は、先輩である官吏から教えられたものであり、残りの半分は自分で見つけた道だ。
「王宮って……借金してる人が、なんであんなに多いんだろう……」
弾んだ息を落ち着かせながら、ケニードは思わず独りごちる。
王宮に赴くたび、彼はいつも複数の人間にからまれていた。その大半は父親に借金をしている者で、身分は一般兵から侯爵までと幅広い。
クラナッハの父はケニードの父と同じく男爵の称号を得ている。だが、彼等の男爵位は土地ではなく個人に与えられたものだった。

そのため、クラナッハ自身は貴族では無い。彼の階級は騎士だった。
「にしても、騎士団って規律が厳しいはずなんだけどな……なんで借金を作ることになったんだろ……？」
首を傾げて木々の脇を通り抜けた瞬間、ケニードはギョッとなって元いた場所に舞い戻った。しかし、遅かった。
「ぉお！　アロック男爵の跡取り殿！！」
（ああ！　見つかってた！！）
大仰な喜び声に、ケニードは木の影で飛び上がった。クラナッハに続いて、またしても借金組との遭遇である。
「やぁそんな所に隠れないでくれよ、ケニード。ボクと君の仲じゃないか！」
近づいて来る声に逃げれないのは、相手が自分よりも身分の高い人間だからだ。まだ爵位こそ継いでいないが、オーフェルヴェック伯爵家の嫡男である。フレートという名のその青年が、ケニードは大の苦手だった。
そろそろと顔を出せば、相変わらず不気味なニヤニヤ笑いをはりつけた男が、取り巻きと一緒にこちらに向かっている。二十をいくつか過ぎたばかりの、外見だけなら貴族らしい風貌の青年だったが、服を着崩して歩く様は街のゴロツキとそう変わらなかった。
（最悪だ）
ケニードは悟った。逃げたほうがマシだと。
なにせ、取り巻きを引き連れた時の貴族ほど、質の悪いものはない。
彼はそう判断するや否や、脱兎の如く逃げ出した。
しかし、相手の方も動きが速い。
「逃がすな！」
「捕まえろ！」
なにかの獲物にされたらしく、猟犬さながらに取り巻き達が走って来る。ケニードの足は素早いが、なにしろまだ子供である。鍛え方の差もあって、あっという間に追いつかれてしまった。

「おい！　伯爵が止まれって言ってるだろ！」
　未だ伯爵では無いはずだが、フレートは仲間内で伯爵と呼ばれているらしい。伸ばされた手を避け、足払いを飛んで避けながら、ケニードは近くの茂みに飛び込んだ。そこから一直線に走れば、高官が集うエリアに出られるのである。そこまで行けば、いかにフレートとその取り巻きといえど、下手な真似は出来ない。
　そう思って勢いよく飛び込んだのだが、茂みに上着が引っかかってしまった。
「うわ！」
　しまった、と思った時には勢いを殺されていた。どうやら一際太い枝に引っかかったらしい。後ろに引っ張られ、嫌な音がして上着が裂けたのを感じた。しかも、伸びてきた手がそれを鷲づかみにする！
「捕まえたぞ！」
　勢いよく飛び込んできた男は、その勢いのままにケニードを押さえつけた。それがあまりにも強かったため、二人してもつれるように地面に転がる。したたかに頭を打ちつけて、ケニードはその痛さに思わず頭を抱えた。
「手間かけさせんなよ」
「伯爵～。押させましたぜ～」
　次々に到着した取り巻きが、どこのゴロツキかと思うような声を上げる。押さえつけた男が馬乗りになり、体格差のあるケニードは這い出ることも出来なくなった。。
「あ～あ～、駄目じゃないか、マテュー。相手はボクの財布の紐を握ってる相手……の息子なんだぞ？　怪我なんて無いだろうなぁ？」
「ありませんよ。なぁ、ねェよなぁ？」
　覗き込まれた顔には地面で擦れた跡があったが、そんなものはもちろん無視されている。打ちつけた後頭部の痛みに涙目になっていると、面白いオモチャを見るような目でフレートは笑った。
「なぁ、ケニード。なんで逃げたかなんて聞いたりはしないよ。ボ

クは親切だろ？　君だって、誰かから逃げたいと思うことはあるんだ。そう、ボクが君のお父上から逃げたいと思うようにだ」

押し殺した笑い声は、取り巻きの何人かから。フレートがアロック男爵にしている借金は、噂ではかなりの額になるという。その取り立てに、オーフェルヴェック伯爵が渋面をしているという噂も聞いていた。

「なぁ、ケニード。ボク達は親友じゃないか。君の父親にちょっと言ってくれないかな。たかが男爵のくせに、伯爵家の金をむしり取りに来るあの男にさ」

顔を横からのぞき込み、いけしゃあしゃあと言ってくる男に、ケニードは怒りが沸いてくるのを感じた。

彼自身、父親が金貸し業をしているのには嫌気がさしていた。こういった目にあいだしてからは、嫌悪を通り越して憎悪すら抱いていた。

だが、借りた側のこの厚顔さはいったい何だろうか。

こんな連中が金を借りていくから、金貸しなんていう商売が成り立ち、父のような商売人が生まれるのだ。そして自分のような被害者が出る。

（借りる方が悪いんじゃないか！）

そう言ってやりたかった。

だが、相手はどれほど愚かであれ、自分よりも遙かに目上の男である。言いたくても、口に出すことはできなかった。

だが、時に目は口よりもものを言う。

「……なにかな？　その目は」

押さえつけたひ弱な獲物に、フレートが鼻を鳴らした。マテューの押さえつける力が強くなって、ケニードは息苦しさに咳き込んだ。

「おまえの父親はな、政にたいした貢献もしたことがないくせに、その間に金集めばかりしているろくでもない男だぞ。そのうえ、政で忙しく、物いりになった父上のような人間に金を貸して、そこからもうまい汁を得ようとするような輩だ。おまも人の子なら、恥を

知るべきじゃないか？」

嘲笑を浮かべながら見下ろしてくる男に、ケニードは押し黙る。言い返したい言葉は山とあったが、言葉が通じないことは今までの経験からもわかっていた。言っても意味が無いのだ。

「おまけに、最近じゃあ年若い女に入れ込んで、その恋人を陥れて自分のものにしようとしているらしいじゃないか。なぁ、ケニード。来年には新しい妹か弟が……おい、何だ」

得意げに言いかけたフレートの声が、不満げに揺れた。彼の視線の先を追うと、押さえつけているマテュー以外の取り巻きが逃げ腰になっている。

「おまえら、なにやって……」

言いかけて、フレートが沈黙した。

それと同時、マテューの力が緩む。胸を圧迫する力が消えて、ケニードは大きく息を吸った。

「何をしておいでですか」

声が聞こえたのはその時だった。

マテューが慌てて背後を振り返る。声の主は、彼の後ろ側――茂みの方にいたのだ。

体をひねったマテューの影から、わずかに黒い外套が見えた。王宮で黒い外套を羽織れるのは、公、候、伯の三位のみだ。

「別に、なにも……おい、マテュー、どけ！」

苦い顔になったフレートが、半歩後ずさりながら声をあげた。大慌てでマテューが大きな体を退かし、それでようやくケニードは相手を見ることが出来た。

「……！」

その瞬間、衝撃がきた。

一瞬、昔見た、美しい人を思い出してしまった。幼かった彼が味わったその時の衝撃と、今の衝撃はよく似ている。違うのは、相手の性別が同性なことぐらいだ。

（……なんて……）

美しい人だろうか。彼はそう思った。
王都でも稀な黒髪に、驚くほど整った顔立ち。
昔見た美しい王妃を除けば、おそらくケニードが今まで見てきた中で最も完璧に近い美貌だった。年は自分より少し上だろうか。すらりとした体は細く、にじみ出る気品が眩いほどだ。
「ちょっと、ふざけてた、だけだよ。なぁ、皆……そうだよな？ほら、追いかけっこぐらい、誰だってやるだろう？」
相手の格に押されてか、フレートが後退りながら言う。
その様をじっくりと眺めていた少年は、視線を地面に転がったままのケニードへと向けた。
（赤紫！）
その瞳の色に、ケニードは大きく目を瞠る。
様々な一族が集まる王都でも、そんな色の瞳は見たことがなかった。思わず魅入っていると、ふいと視線を逸らされる。
「いささか、乱暴であるように思われますが」
「いいんだよ！」
叫んだ後、相手の身分に思い至ったのか、フレートが顔をしかめる。すでにじりじりと逃走を始めている取り巻きに舌打ちをしながら、彼はケニードの方を一瞥した。
「……後でな」
その言葉に反応したのは、ケニードでは無かった。
そのまま去ろうとした男に、少年は目を細める。整った顔立ちなだけに、その表情はゾッとするほど冷たかった。
「オーフェルヴェック伯爵のご子息とお見受けしますが」
ギョッとなって振り返ったフレートは、そこで冷ややかな眼差しと相対して息を呑んだ。
「アロック男爵にリメオン金貨にして八十枚以上の借金がおありだとか。理由は賭博と聞き及んでおります。伯爵ご自身の政とは全く関係ない、ご自身の借金だったとも記憶しておりますが、違いましたでしょうか？」

男の顔が引きつり、ケニードの目が丸くなった。
「残念なことに、伯爵はともかく、貴方様ご自身が王宮において何らかの働きをしたという記録はありません。最近、何かの勲功をおたてでしたか？　無いのであれば、すでに保護官見習いとしていくつかの論文を纏めた方のほうが、遙かに政に貢献しておいでですが」
フレートの目がケニードを見つめ、ケニードはぽかんと少年を見上げた。
保護機関に身を置いて以来、時折上官から保護物の論文を任されることはあった。だが、それらは上官の名で提出されているはずだった。なのになぜ、この少年はこちらの内情を知っているかのようなことを口にするのだろうか。
「最後に申し上げておきます」
そんな二人の様子には構わず、少年は淡々と言葉を続けた。
おそらく、フレートにとっては最終通告となる言葉を。
「王宮で、あなたの伺候を許可している者はおりません。そちらのお三方におかれましても同じくです。伯爵の名で登城されておいでのようですが、伯爵はそのような真似を許してはいないと、先日会議で仰っておいででした。あなたの行いは、すでに王宮中に知れ渡っています。そして今のあなたは、不法侵入者です」
「な……ッ！」
「大人しく、指示に従ったほうが賢明かと思われますが」
顔に血を昇らせた相手の気勢を上げた片手で削いでから、彼はチラと違う場所に視線を走らせた。それはケニードが逃げようと思っていた方向であり、見ればそちらからパラパラと複数の兵士が駆けつけている。
その向こう、建物側に数人固まっている人影は、こちらを指さして何か言っているようだった。衣服の色合いを見るに、高官だろう。どうやら、向こうからこちらは丸見えで、それなりに目立っていたようだ。
「……逃げれば、その分印象が悪くなると思いますが」

唖然としてケニードがそちらを見ている間に、フレート達は逃げ出したらしい。その後ろ姿に向かって小さく呟いてから、少年は転がったままの相手へと向き直った。

「立てますか？」

そう言って差し出された手は、驚くほど優雅なものだった。なんとなく掌に汗をかきながら、ケニードはその手に捕まる。容貌に反して、その掌は意外なほど硬かった。

「使いの途中であったとお見受けいたしますが」

立ち上がったケニードに、少年はもう片方の手を差し出した。そこにあったのは、彼が上官に届けようと握っていた書簡だった。

「あ、あー！」

「踏まれてしまっているようです」

見ればくっきりと足跡がついていた。どうやら逃げる途中で落としてしまったらしい。わずかな破れ目も見えて、ケニードはがっくりと肩を落とした。

「誰をお捜しですか？」

問われて、彼は力無く「ビットナー伯爵」と口にした。

「伯爵でしたら、ちょうどあそこにおられます。説明する手間が省けましたね」

少年が指さす方向では、未だ野次馬よろしくこちらを見ている高官の人影が。

「……あ、あんな所に……！」

ケニードは安堵するやら腹が立つやらやら、なんとも言えない気分を味わった。やっと書簡を渡せるという気持ちと、彼がもっと捜しやすい場所にいてくれればこんな事には、という気持ちが半々だ。

肩を落として盛大に息を吐くケニードに、少年は静かに一礼をした。

「それでは、これで失礼させていただきます」

「待って……！」

あっさりと踵を返す相手に、ケニードは咄嗟に手を伸ばした。相手の二の腕あたりをしっかりと両手で掴む。
「あのっ、あり、がとう！　助かりました！」
「……はい」
「お名前は！？」
勢い込んで尋ねると、静かな表情のままで「レメクと申します」と答えられた。
（『レメク』）
ケニードはしっかりと心に刻みつけた。
その間に到着した兵達が、なにかものすごく奇怪なものを見る視線で二人を見比べ、レメクの目配せで走り去る。その腕を力一杯掴んだまま、ケニードは必死に考えていた。何を考えていたかというと、会話の糸口だ。
しかし、なぜか何も思いつかない。焦りばかりがどんどん募り、相手が口を開きかけた瞬間、遮る勢いで叫んでいた。
「好きなものは何ですか！？」

この顛末を聞いて、ビットナー伯爵は爆笑した。
「いやァさすがケニード君！　もう、しばらく夜会の話題は君で決まりだよ！」
恰幅のいい伯爵の横で、縦に長いダーミッシュ子爵も笑いを噛み殺している。
「あのステファン老のご子息に、そういう問いをする人間は初めてだなぁ……ぶくっ」
噛み殺しきれなかったらしい。
さすがにぶすくれた表情で立っている少年に、二人は思う存分笑ってから労うように肩を叩いた。
「まぁ、なんだ。良かったじゃないか。通りかかったのが『彼』で」
「全くだ。『彼』に見つかった限り、あの連中もただでは済まない

だろう。今までのこともあるし、下手をすると廃嫡だな」
「廃嫡!?」
その言葉に、ケニードは驚いて声をあげた。慌てて口を噤むと、目上の二人はにやにやと笑み崩れる。
「うん。ケニード君は相変わらず優しいな」
「痛めつけてきた相手でも同情するのかね？　彼等の所行を考えれば、同情には値しないと思うが」
「いやいや、子爵。これがうちのケニード君なのだよ。まだ十二……いや、十一だったか。将来が楽しみだと思わないかね？」
「保護官としては申し分ないが、間違っても兵士や騎士にはならぬほうが良いな。しかし十一……クラウドール侯爵は十六だったはずだが……」
「遠目にはさほど変わらぬ年のように見えたけど、確かそれぐらいの年齢だったはずだよ」
「侯爵がお若いのか、ケニード君の発育がいいのか……」
「両方じゃないかね？　ケニード君は、十一にしては背が高いよ。うちの倅（せがれ）より高いぐらいだ」
伯爵の長男は今年で十五になる。ニョキニョキ伸びているケニードと違い、彼の子供はおっとりとしか成長していないらしい。
「成長は人それぞれだからねぇ……伯爵のご子息は、保護官にはならないのでしたかな？」
「あやつは近衛に入りたいそうなのだよ、子爵。そんな仕事より、保護官の方がよっぽど充実していると思うのだが……」
「女王陛下が美しすぎるのがいけないのですよ、伯爵。あの美しさには私どもですら胸が騒ぎますからな」
「これ、子爵。そのように言っては、ロードに何をされるかわかりませんぞ？　なんでも、女王陛下に邪な思いを抱いた公爵が、毎晩悪夢にうなされるという呪いをかけられたとか……」
「ああ、レンフォード公爵でしたかな」
笑う二人の間に挟まれて、ケニードは居心地悪げに視線を彷徨わ

せた。身分の高い人々は総じて噂好きで、その噂は大半が色事に関してのことだった。

「おや、退屈かな、ケニード君」

「い、いえ。そういうわけでは」

「ちなみにクラウドール侯爵は何が好きと答えてくれたのかね？」

ずいと顔を近寄らせて問う伯爵に、少年は顔を引きつらせた。

「こ……侯爵？」

「そう。クラウドール侯爵。かの名宰相ステファン老の秘蔵っ子だよ。君も噂ぐらいは聞いているだろう？　クラウドール公爵のご養子で、陛下の覚えも目出度い宮殿一の美少年！　見たかね、あの神秘的な紫の瞳！　噂では、どこかのご令嬢との間にステファン老がもうけたご子息では無いかということなんだが……いや、かのナイトロード卿が後見として立ったというからには、卿のご子息なのかもしれないな。なにしろ、あの美貌だ。ロードのような人外の美貌では無いが……とすると、下手をすれば我らが女王陛下のお血筋かもしれんよ？」

「伯爵、それこそ人に聞かれてはならぬ類の噂では無いかね。それに、陛下のご子息であるのなら互いの年が近すぎる。第一、陛下は王女殿下であられた頃からずっと、変わらず引き締まった腰をしておられるぞ？　膨らんでいたところなど、見たことがない」

「う～むむむ。それもそうであった……」

ずんずん話が逸れていっている二人に、ケニードは大きく瞬きをした。

「では、あの人が『断罪官』……ですか？」

大人二人は、ピタリと口を閉ざした。両者とも「しまったそうだった」という顔だ。

「うむ。そうなのだ、ケニード君。かの麗しき侯爵閣下は、世にも稀なる王国史上二人目の断罪官様なのだよ」

「陛下から直々に侯爵位を賜るほどのお方であったな」

「紋章術師としては最高峰の地位であるな。確か術師としては猊下

の次……いや、陛下もいらっしゃるから、第三位か？」
「ステファン老がいらっしゃるではないかな？」
「いや、ステファン老は、ご自身の紋章をほとんど侯爵に引き継がせたのだそうだ。なんでも、優れた器を持っておられるそうで」
「なんとまぁ……では、それを考えれば第二位となる可能性もなきにしもあらず……」
またもや脱線していきはじめたが、さすがに伯爵は目的を忘れてはいなかったらしい。「で」と前置きをしてから、彼は年若い見習い保護官の肩を掴んだ。
「その侯爵閣下は、何が好きと答えてくださったのかな？　ん？」
「は、伯爵……なんだか目が恐いんですけど……」
「いや、ははは。なに、別に賄賂など送ろうとは思っておらんよ？　うん」
贈る気だ。
目を輝かせている伯爵と、こっそり目を煌めかせている子爵に、ケニードは困った顔になった。答えを期待されているのがわかる分、答えを告げにくい。
なぜなら、あの少年は彼の問いにこう答えたのだ。
決して変わらない、真っ直ぐなだけの――空虚な目で。
「何も無いのだそうです。――好きなものも、そうでないものも」

※　※　※

レメクと会った次の日から、ケニードの日常が変わった。
あの断罪官と私的な話をした、という噂は、あっという間に王宮中に広まったらしい。相手の特殊な役職もあって、王宮に赴くたびにからんできていた人々は、反対にケニードの視界から身を隠すようになった。下手にからんで告げ口をされては敵わないと思ったの

だろう。

実際のところ、告げ口をするどころか、あれ以降会えてもいないのだが。

前よりも積極的に伝言役を引き受け、王宮に入るたびに目を更にようにしてケニードは相手を探した。しかし、さすがに仕事を放り出してまで探すわけにもいかず、結果として全く出会えないまま数日が過ぎていた。こうなると、意地でも会いたくなってくる。

「彼がいそうな場所……いそうな場所……」

噂で聞く出没地を少しずつ巡ってみるが、範囲が広すぎて影すら見つけられなかった。広大な王宮ではバッタリ出会える確率などほんのわずかなのだ。

裏庭、西館の屋上、東の庭の片隅、王宮の端っこ。少しずつ行ける範囲でチェックしていった場所に頭の中で印をつけながら、ケニードは密かに首を傾げていた。彼が『仕事』でうろつく場所は王宮の中枢なのだが、それ以外の目撃情報はいつも人気がない場所に集中しているのだ。あまり人付き合いが好きでは無さそうだとも聞いている。

三番目の候補地も見回った後で、彼は使用人通路に忍び込んだ。そろそろ職場に戻らないと、上の人々から怒られてしまう。ケニードが並々ならぬ意欲でレメクを探しているのは、すでに職場内では知れ渡っており、上官達も面白がって協力してくれている。だが、それで仕事が疎かになるのは褒められたことではなかった。

そのため、彼は一回の伝言で探す場所は三カ所のみと決めている。行き帰りですでに三カ所調べ終わっている。あとは、近道をして職場に帰るだけだ。

足早に狭く暗い通路を駆けていたケニードは、向こうからも人が来るのを感じて慌てて壁際に身を寄せた。使用人通路は狭いため、真ん中を通ってはすれ違う時に邪魔になってしまうのだ。

だが、すれ違う寸前、相手の顔を見て足が真ん中へと戻った。さらに一歩を踏み出した！

「クラウドール侯爵！」
ぎゅむ、っと。
足が何かを踏んづけた。
「「……」」
二人そろって下を見る。
年に似合わぬ大きな足が、見事に相手の足を踏んでいた。
「すみませんッ！！」
ケニードは文字通り飛び上がった。
出会い頭に足を踏まれた相手は、微動だにしない表情で淡々と五歳年下の少年を見ている。暗い通路ではあったが、これぐらい近ければなんとか互いの姿を把握できた。形から察するに、身長差と同じく、足の大きさもほとんど変わらないらしい。ただ、身長とは逆に足はケニードの方が大きかった。
「あ、あの！　改めて、お礼を……」
「結構です」
相手の返答はニベもない。
そのまますれ違って去ろうとする相手に、ケニードは慌てて手を伸ばした。伸ばした手が、とっさに外套を掴む。
「あの！　あなたのおかげで痛ッ！？」
ビンッ、という音とほぼ同時、上から落ちてきた何かに手を刺されて、ケニードは慌てて腕を引っ込めた。カツン、という硬い音が狭い通路に響く。
「……留め具？」
通路に転がった物を見て、少年は小さく呟いた。白い手が、黒い塊にしか見えないそれを拾い上げる。間近に覗き込んだそれは、確かに外套の留め具だった。
「す……すみません……！」
壊れた留め具とズレ落ちた外套を抱える相手は、表情はおろか感情も動いていなさそうだったが、ケニードは真っ青になって謝った。お礼どころか相手の持ち物を壊してしまったのだ。どう謝ればいい

のか、それすら思いつけない。
「……元々、留め金が壊れかけていましたから。お気になさらず」
「そういうわけにも……！」
「古い品です。壊れたのは寿命でしょう」
そう言って終わろうとする相手に、ケニードは必死に食い下がった。
「駄目です！　古い品なら、尚更大事でしょう！？　僕が直します！　直させてください！！」
「……直すのですか、これを」
「はい！」
力一杯の返答に、少年はしばし考える風だった。
手の中に持っていた留め具を見下ろし、小さな嘆息と同時に必死の顔をしているケニードに向き直る。
「では、お願いいたします」
「はいッ！！」
声と同時に渡された品を、ケニードは顔を輝かせて受け取る。
掌にすっぽり収まってしまうそれは、彼の手にはずっしりと重く感じられた。

「う〜む……」
小さな留め具の前で、ビットナー伯爵が唸った。
「う〜ん……」
伯爵と反対側から、ケニードも唸った。
二人の間にあるテーブルには、凝った意匠の留め具が置かれていた。半球体の貴石を銀で装飾した代物だ。幾重にも重なった羽根の意匠だが、その繊細さは目を瞠るものがある。
「……なぁ、ケニード君。確か君は、幼少の頃、名工と呼ばれたオーディルクに学んだことがあったんだったかな？」
「はぁ……一応、お弟子さん達に混じって、いろいろ教えてはいた

だきました」
　ちなみに、工房に踏み入れた限り、師匠と呼ばなければ拳骨を飛ばしてくるような『師匠』だった。
「そうか。では、その作品はだいたい知っているのかな？」
「作風というか……そういったものは、知っています」
「うむ」
　伯爵は頷き、テーブルの上の留め具を指さして問うた。
「で、君の見立てでは、コレは？」
「オーディルク師匠の作品です。留め具の部分は何度か直した痕があるので、表の部分だけ、ですけど」
「……ステファン老の持ち物なんだろうね～これ～。それを壊されたのに怒らないっていうのもすごいけど、ポンと渡しちゃうのが一番恐いな……ケニード君が盗むとか考えなかったんだろうかねぇ？」
　さすがに嘆息をついた伯爵に、周りで戦々恐々二人の様子を見守っていた一同が声を上げる。
「盗まれても、追いかけて追いつめられるっていう自負じゃないですかね……？」
「相手がケニードだってわかってるわけだし」
「素性はハッキリしてるよな」
　だが、言われたケニードはそうでは無いような気がした。あの表情を見るに、なんだか何もかも興味無さそうだった。
「……あの、伯爵」
「ん？」
　じっと留め具を見つめたまま、彼は声を落とした。
　伯爵は軽く首を傾げる。
「これを直すのに、お弟子さん達の所に行きたいんですが……少し、休みをもらってもかまいませんか？」

※　※　※

ケニードがもらった休みは、七日ほどだった。
当時一番弟子だった人には会えなかったが、仲の良かった弟子の何人かとは会うことができた。その中でも特に男性用の小物が得意だったセズンに頼み込み、工房の隅を貸してもらってちまちま直させてもらったのである。
もともと、父親である男爵の伝手で知り合ったオーディルクに、幼少時、一から叩き込まれた経験がある。長年腕を磨いているセズンには到底敵わないが、その技術はきちんとしたものだった。細かい修復作業程度なら、なんとかこなすこともできる。
それでも七日かかってしまったのは、ついでだから新しいのも作れと、半ば無理やりセズンに作らされたせいだった。工房を貸す駄賃だと言われれば、嫌だとも言えない。デッサンしたいくつかは貸し賃の一部として持っていかれたが、それは別に構わなかった。
問題は、出来上がった品があんまり満足できる品では無いことだ。
ケニードはどんよりと出来上がり品を見る。
一緒に見ていたセズンもどんよりしていた。
「……おまえさんはなぁ……なんでこんなの作れるくせに、男爵家の跡取りだったり、保護官見習いだったりするんだろうなぁ……」
どんよりの意味が百八十度違うのだが、ケニードは落ち込んだままだった。
「やっぱり、上手く作れないもんだよね……羽根は野暮ったいし、全体的にどっしりしすぎてるし、全然洗練されてないし……」
「……これで不満か？」
「だって、セズンのほうがずっと綺麗に作れるじゃないか」
「そこは当たり前だ。年季が違う」
一生懸命職人と張り合おうとする子供に、大きな拳をやんわりとお見舞いしてから、セズンは苦笑を深めた。
「不満なら、時々腕を磨きに来るんだな。少しずつでも上達すりゃあ、おまえさんの理想の形も作れるようになるだろうよ。……まぁ、また、銀細工を扱えるぐらいの資金が貯まれば、だが」

なけなしの給料から持って行かれた銀の代金に、ケニードの肩がさらにしょんぼりと落ち込む。金を使うことに異論ないのだが、それで出来上がった品がコレというのがガッカリなのだ。しばらく、立ち直れそうにない。

変なところで職人魂が発揮される少年に、セズンは苦笑を深めた。その横から、かつて同じオーディルクに学んだ男が顔を覗かせる。

「そういや、坊ちゃん。おまえさんのスケベ親父なんだがな」

「え。また誰かひっかけたの？」

ふられた話題に嫌な記憶を呼び起こされて、ケニードはパッと顔を上げた。その反応に工房のあちこちから苦笑が零れる。アロック男爵の恋のお相手はあまりにも多すぎて、家族ですらその全容を把握しきれていないのだった。ケニードがオーディルクと誼を結ぶに至ったのも、当時オーディルクの後見人がアロック男爵だったためである。オーディルクは年経てなお美しい女性で、男爵は彼女が作る作品に惚れて彼女と面会し、作者本人に惚れてしまったのだった。

以来、病で亡くなるまでずっと、その縁は続いていたらしい。

「今度は誰？　まさか、また職人さん？」

オーディルクに会いに行く合間に、近隣の美女達にもふらふらと寄って行っていた父親を見てきたケニードなだけに、この手の話題で傷つくような心は持ち合わせていなかった。もともと、父は重婚可能なケルティ族だ。パルム族だった母と違い、その恋愛には自由がありすぎる。

もっとも、そのおかげで、十数人いる妻が産んだ『数十人の子供のうちの一人』であるケニードが、男爵家の跡取りに収まっているのだが。

「それがなぁ、今回はちっとややこしそうでなぁ……」

「……珍しい。後腐れがないよう、そのあたりは気をつかってたのに」

「いやいや、あれは相手が悪いよ。おまけにライバルもいるもんだから、よけに盛り上がっちまったんだろうな」

「ああいうのも悪女って言うんだろうな。俺ぁあの女のための装飾品をいったい何個作らされたか……」
「一人はそれで借金までこさえたんだろ？」
「で、その借金の相手がアロック卿」
「……泥沼じゃねぇか。つーか罠かそれ？」
口々に言う男達に、ケニードはふと嫌な予感を覚えた。どこかで聞いた話だと思ったのだ。
「……ライバルってことは、女の人には恋人がいたの？　それとも、どっちも片思い？」
「いやぁ……一応、片方は恋人……だよな？　少なくとも、二月前までは恋人だったぜ」
「その半月前は、別の男が恋人だったけどな」
「歌姫ってのはそういうもんなのかねぇ？　なんか、とうとう別れたって話も聞いたけどよ」
さらに嫌な予感がしてきた。ここ数日王宮には行ってないが、その前の段階で、すでに『彼』の様子はおかしくなっていた。そういえば、『彼』はあのとき、借金を三日待ってくれと言っていなかっただろうか？
「……あの、さ。その相手の名前分かる？」
「ん？　女？　それなら、ほれ、ミュージックホールの歌姫メリッサだ」
「いや、男の人の方」
ケニードの問いに、男達は顔を見合わせた。セズンが肩を竦めて言う。
「西区のクラナッハだよ」

ミュージックホールは、港区の中央よりやや西より、大きな通路と通路を結んだ場所にあった。
この地区が最も華やぐのは深夜で、人通りが多くなるもの夜が深

まってからだった。
今は夕刻になったばかり。オレンジ色に染まった通りには、ほとんど人の姿が無かった。ミュージックホールの係員達も、夜の準備で忙しいのだろう。劇場はまだ固く閉ざされ、奥の方で大勢が足早に駆けている音が響いてきている。
（……いや、ここに来たって、どうしようもないんだけど……）
大きな建物を呆然と見上げながら、ケニードは途方に暮れていた。
あまりにも自由人な父親の恋愛は、まだ十二にもならないケニードには理解しがたいものだった。だがそれでも、いつも女性に対して礼を尽くそうとする姿勢には一目置いていた。そういう父だから、人に恨まれるような恋愛は極力避けるだろうと、勝手に思いこんでいたのだ。
だが、どうも今回は勝手が違う。
なにより、惚れた相手が悪かった。
歌姫メリッサと言えば、噂で聞くだけでも、父以上に恋多き人だ。二人がともに笑って出会い、笑って別れられるようならそれでもいい。だが、わざわざ他に恋人がいる時期に出会って仲良くしなくてもいいじゃないかと思う。おまけに、その恋人が貢ぎ物のために借金を作るようになったら、もはや波乱は必須だろう。
どこか捨て鉢な声を上げていたクラナッハを思い出して、苦労性の子供はどんよりとしたため息をついた。自分の与り知らぬこととはいえ、気が重い。
うろうろと玄関前を徘徊し、ケニードは聳える劇場を見上げた。なんとか中に入って、歌姫と会えないだろうか。そう思ったが、さて会って何を話せばいいのか、まさか父と別れてくれと言うのか、その辺りでぐるぐると思考が回っている。
「どうしようかな……」
ケニードはしばらくその場をうろつき、肩を落としながら背を向けた所で、建物の中から凄まじい物音が聞こえてきた。
悲鳴と、何かが倒れて割れる音だ。

「!?」
ギョッとなってケニードは扉に張り付いた。途端、扉の片方が大きく開かれる!
「おい! 早く警備兵呼んで来い! 急げよ!!」
ちょうどケニードが張り付いた扉と反対側だったため、急ぎ足で駆け去る男の姿を間近で見ることになってしまった。よほど急いでいるのか、飛び出して行った男はこちらに気づかなかったようだ。
建物の中からは悲鳴と物音がまだ続いている。
そろそろと扉から中を覗き込むと、舞台衣装だろう服を片手に支配人が右往左往していた。
「早く! 誰でもいいから、あの男を止めてこい! メリッサに何かあったら、どうするつもりだ!」
裏返ったその声に、ケニードは飛び出した。音が聞こえる方へと駆けると、見知った怒鳴り声も聞こえてきた。走る見知らぬ少年に何人かが気づいたようだが、止められる勢いでは無い。階段を駆け上がり、開かれたままの部屋の一つに飛び込むと、下着姿かと思うような身なりの美女が、偉丈夫を相手に眦をつり上げて怒っていた。
「なぁにが女の優しさですってェ!? あたしに捨てられかけてた男が、なに素人女に引っかかってるのよ! ちょっと甘い言葉かけられたらコロッといちゃってさ! あたしに本気だったって!? そんなコロコロ転がる心が、本気なはずあるもんか!」
なにか、想像と違う光景だった。
思わずポカンと見守ったケニードの前で、美女から陶器をぶつけられかけながらクラナッハが怒鳴る。
「バカヤロウ! その本気を鼻であしらってオレを捨てたのがおまえだろうが!! わざわざ最後のケジメで別れを言いに来てやったってのに、なんだその言いぐさは! 言ってることとやってることが違うだろうが!」
「うるさいわね! あたしが男を捨てるのはいいけど、あたしが男に捨てられるのは良くないのよ!」

「なんつう勝手な言いぐさだ！」
全くだ、と何人かの男がウンウン頷いた。
「だいたい、こっちは借金のかわりにおまえさんを諦めさせられたんだ。同情されるべきなのはオレのほうだろうが！」
「ハッ！　それぐらいしか金が無いのがあんたの限界なんじゃないか！　だいたいね！　金で女を諦めたんなら、そんなさばさばした顔してんじゃないよ！　もっとメソメソするか、意地汚くしがみつくぐらいはするもんだ！」
「だからどういう勝手な言いぐさだそりゃ！　なんでオレがおまえの思う通りの行動をしなきゃならねぇんだよ！」
「ほとんどしてたじゃないか！　別れないでくれ～って！　それがなんだい！？　一日二日でコロッと変わっちまいやがって！」
「おま……本気で性格悪いな……」
恋人だったのに、そういう面は今まで気づかずにいたらしい。唖然として見つめていたケニードだったが、この様子なら自分の出番なんて無いようだ、と踵を返した。
しかし、その動きがかえって衆目の中では目立ったようだ。
「あ！　ケニード！」
（うわ見つかった！）
誰もが注目する中、一人背を向けたケニードは悪目立ちしてしまったのだ。早速声をあげたクラナッハに、ケニードは飛びあがって驚いた。
「いいとこに来た！　おい！　こいつの本性見たか！？　おまえ、親父に言っておけよ！」
「はぁ！？　なんでそんなガキが……あら……ちょっと可愛いじゃない」
「おまえ十以上年下のガキまで手ぇ伸ばす気か！？　つーか、男爵の息子の顔も知らねぇのかよ！」
「アロック男爵の息子！？」
周囲から一斉に注目されて、ケニードは心の中で父親に必死に抗

議した。
「うそっ。やだ、まだちっちゃいって聞いてたのに、嘘じゃない。背ぇ高いわよ、可愛いわよ。肌綺麗だわ～」
「え。うわ、ちょ……！？」
「男爵の息子ってことは、時期男爵よね。ねーぇ？　坊や。綺麗なおねぇさんは嫌い？」
「そいつはまだ十一だ！」
「じゅういちぃ！？」
すかさず近寄って肌を撫でてくる美女に、ケニードが逃げ腰になりクラナッハが真っ赤な顔で怒鳴った。実年齢に驚いて手を引く美女から逃れて、ケニードは扉にへばりつく。
そんな子供をジロジロと見つめてから、美女はニンマリと微笑んだ。
「ま。そこまで育ってれば問題ないわ。男爵より綺麗な男に育ちそうだし～？」
「おい支配人！　そいつ保護しろ！　男爵家から抗議がくるぞ！」
「なにさ！　あんたはもう関係無いんだから口出ししてんじゃないわよ！　さっさと素人女の所にでも行けば！？」
「アー行かせてもらうぜおまえさんの本性も見れたことだしな！おい、ケニード！　しっかり親父にこいつのこと言っておけよ！？ろくでもねぇぞ、こいつ。金つぎこむだけ無駄だ！」
「い、いやあの、僕はお父様の恋愛には興味ないから」
「はぁ！？　だから、ただ言えばいいだけなのがなんッで出来ねぇんだよおめぇは！　つっかえねぇなァ！」
「……それがものを頼む人間の言葉ですか」
ふいに横から聞こえてきた冷ややかな声に、ケニードはおろかその場の全員がギョッとなって声の主を見た。
「クラウドール卿ぉお！」
一番反応が劇的だったのはケニードだ。
顔を向けた瞬間には、すでに両手を広げて相手に抱きついている。

全力で飛びついてきたケニードに、少年は眉一つ動かさず、変わらぬ無表情で相手をぶん投げた。
「ぉおおお」
ひょろ長い体が宙を飛ぶ。
そのまま綺麗な弧を描いて廊下の端に転がるのを横目に、レメクはわずかに乱れた服を叩いて直した。
「……失礼。身の危険を感じましたので」
「ひ……ひどい……」
その横にいた支配人が、投げ飛ばされたケニードを見ながら同情混じりに呟いた。
「あのぅ……我々が呼ばれたのは、喧嘩の仲裁……ですよね？」
支配人の後ろから、二人の兵士が恐る恐る進み出る。問いは本来支配人にするべきはずだが、彼等は黒髪の少年に問いかけていた。
少年は周囲を見渡して静かに頷く。
「そこの男女二人です」
「ちょっと待ってくれ！　オレぁ兵士に取り押さえられるよーな事はしてねぇぞ！？」
「はぁ！？　なに言ってんのよ！　騒動の原因は、そもそもあんたじゃないの！」
「バカヤロウ！　それはおまえだろうが！　ビン投げたり鏡叩き壊したり！」
その声に、ケニードは床に転がったままで遠い目になった。
あの派手な騒動の音は、美女が暴れた音だったらしい。
「だからその原因があんただって言ってんのよ！　なにさ！　負け惜しみが言いたくて、のこのこ捨てられた女の所に来ちゃってさ！」
「なんだとこの……！」
またもや言い争いだす二人に、レメクは静かな目で周囲を見渡してから二人の兵士に目配せした。
兵士がいそいそと二人に近づき、鼻息の荒いクラナッハの方を捕獲する。

「な……おい！　ちょっと待てよ！　なんでオレの方だよ！？」
「あなたはこの劇場の部外者です。暴れていたのが関係者の方であれ、この場から退出するべきなのは、どう考えてもあなたでしょう」
「だけどなぁ……！」
「そちらの女性も、ショーが終われば係の者が迎えに行きます。少なくとも、起こした騒ぎの責任はとっていただきます」
「そ、そんなぁ……！」
甘えた悲鳴を上げながら、美女は悲しげにうなだれてみせた。その様はハッとするほど美しかったが、黒髪の少年は表情一つ変えずに支配人に向き直った。
「そちらの関係者がされたことのようですので、損害賠償などはお身内の中で片づけられた方がいいでしょう」
「は、はい……！」
「それと、近隣の方々からも最近の『歌姫』の所行に対し、苦情が寄せられています。何か事件が起こる前に、本人に注意を促すべきだと思いますが」
「え。えぇ……それはもう、もちろん」
冷や汗をダラダラと流す支配人は、おそらく、相手の身分を知っているのだろう。チラチラと黒い外套を見つめ、その留め具に暗いため息をつく。
青い貴石をあしらった金の留め具に、遠くで転がっていたケニードも飛び起きた。遠くて意匠は見えないが、あの取り合わせは上級紋章術師に下賜される物に似ている。下賜品であれば、青玉（サファイア）に金の鳳凰だ。
彼は慌てて外套の内ポケットを漁った。布に包まれた二つの留め具の感触に、転ぶようにしてレメクに駆け寄る。
「あ、あのっ！　クラウドール卿！」
「あなたも退出なさい。何故ここに来ていますか」
「ぇえぇと」
氷りの一瞥をくらって、思わずそのまま足踏みした。一歩踏み出

してきた相手に、ぴょんと後ろに飛ぶ。
「聞けばあれから数日、仕事を休まれているとか。時期が時期です。男爵の所行に対し、何らかの行動に出たのではと思っておりました。ここにいるところをみると、あながち間違ってはいなかったようですね」
「……や、休んだ理由は違うんですが……」
「ではそれは後ほど伺うとして、何故このような場所に来ていますか。あなたの年では来場はできないはずですが」
ミュージックホールに入れるのは、十三歳以上に限られている。雑用係として雇われるのならともかく、十一の子供がやすやすと入れる場所では無いのだ。
「男爵の身内であるあなたは、もう少し身辺を警戒しなくてはなりません。今はあなたも王宮に仕える身。ビットナー伯爵が次期保護官長とみなしている人物です。せめて街中では護衛をつけなさい」
感情のない目で言われて、ケニードはしおしおと肩を落とした。これが怒り口調なら案じてもらえたと喜べるのだが、少年の口調はあまりにも淡々としすぎていた。彼は事実を言っているだけなのだ。
それにしても、次期保護官長とはどういうことだろうか。ケニードは俯きながら首を傾げる。それはダーミッシュ子爵のはずなのだが。
「支配人。後始末はおまかせできますね？」
「は……はい！　それはもう……！」
「では、我々はここで失礼いたします。あなた方は、クラナッハ殿を騎士団長の所に連行してください。処罰はあの方が下します」
「「はっ！」」
綺麗に敬礼した兵士の間で、クラナッハが絶望的な悲鳴を上げた。
少年は綺麗にそれを無視して歩き出す。ケニードとすれ違い様、一瞬だけ視線を向けて言った。
「行きますよ」
やはり淡々とした声だった。

外に出ると、すでに周囲は青に近い紫色に染まっていた。
「男爵には、あなたの現状を伝えてあります」
その薄暗い道を歩きながら、闇に溶けそうな少年は口を開く。起伏の乏しい声は、報告書の文字がそのまま音になったようだった。
「借金はする側のほうに問題があるとはいえ、苦境に立たされた者がどのような動きにでるのか、わかっていて放置するのは問題がありすぎます。街の商会からも陳情が届いておりました」
「……陳情、ですか？」
「男爵は商会に関わっておられません。それなのに、商売は手広くやっておられる。商売人にも暗黙の了解というものがあります。事業に乗り出す貴族もまた、彼等の取り決めを知る必要があるのです。人は誰しも、自分だけで生きているわけではないのですから」
「……」
「あなたは将来、男爵の後を継がれます。今のままでは、その時受け継ぐ遺産の中に、他者の憎しみが混じることでしょう。金銭の貸し借りだけでなく、商業においてもまた、彼には敵が多すぎます」
例えば、と少年を声を落とした。
「値崩れをしないよう調整をしていた品を暴落させられたり、値を安くするために出していた品を買い占められて高値に跳ね上げられたり……民の生活水準と自分達の利益との間で調整していた金の動きを、男爵は幾度となくかき回しておいでです。一番問題となったのが、値を下げていた塩です。これに関しては、王宮内部でも問題の声があがっています。わざわざ商会に手を回して値を下げせたものを、男爵が横から手を出して暴利を貪ってしまったのですから」
寝耳に水の話に、ケニードの顔から一気に血の気が引いた。声もなく目を見開いた相手に、レメクはただ静かな眼差しを向ける。
「ご存じではありませんでしたか」
「知りま……せんでした。僕は、父の事業には関わっていないから

……」

「知らなくてはなりません」

弱い声を切り捨てるように、怜悧な美貌が冷ややかに紡ぐ。

「例えあなた自身がその事業に関わっていなくても、あなたは紛れもなく男爵の息子であり、次期後継者です。彼の行いの全てはあなたの肩にものしかかってきます。子であり跡継ぎである以上、知らぬ存ぜぬは通りません」

ケニードは俯いた。頭から冷水を被せられたように、衝撃が寒気を伴って全身を浸していた。

（……お父様の……事業……）

今まで、関わりないものだと思っていた。

父は父だと。自分とは違うと。

――だが、それはどうだろうか？

そう思っているのは自分だけで、他人は誰もそうは思わないのだ。クラナッハやフレートだってそうだった。父親の行いは自分の行いも同じなのだ。

「例え自身の思いがどうであれ、その血を引き、その名を名乗り、その庇護において育つのならば、それ相応のものは背負わなくてはなりません。あなたは今まで、男爵の血筋として飢えることのない生活を送ってこられた。着る服も、身の回りの世話をする従僕も、王宮に士官できる境遇そのものも男爵の血筋であればこそです。その恩恵を受けた限りは、必ず果たさなくてはならない使命があります。それが子としての使命であり、人としての使命です」

与えられた恩恵には、相応の代価を。

「与えられるものを当然と受け取ってはなりません。また、受け継ぐものは良いものだけだと思ってもいけません。裕福であれば裕福であるだけ、そこには誰かの悪しき感情が交じっているのです。『継ぐ』のであれば、それら全てを理解し、受け止めなくてはなりま

せん。そして『受け継ぐ者』は常に、それを念頭において、受動的にならぬよう努めなくてはならないのです」

「どの……ように？」

「あなたの場合は、金貸しを止めることが先決でしょう。最も恨みを買いやすく、憎しみが長引きやすい事業です。また、商会の規則を知り、男爵の事業が枠組みから外れないよう監理しなくてはなりません。今のあなたには難しいかもしれませんが……ダーミッシュ子爵に相談されれば、良い案を授けてくださるでしょう。彼はグスタ商会の重鎮です。男爵と話をする際、どのように誘導すれば良いかなどを教わるといいでしょう」

頷きながら、ケニードは掌に滲んでいた冷たい汗を服で拭いた。その顔にわずかに血の気の戻ったのを確認してから、少年は口を開いた。

「最後にものを言うのは、おそらく、男爵のあなたへの愛情でしょう」

「……それは期待できないと思う」

世の正論である言葉に、ケニードはほろ苦く笑って首を横に振った。

赤みがかった紫の瞳が、小さく瞬きをする。わずかに意志の宿ったその目は、話を促しているようだった。

ケニードは口を噤む。そうして、ため息を零すようにして言葉を零した。

「お父様の子供はいっぱいいるけど、男は僕一人だった。だから跡継ぎに据えられた。……それだけだから」

アロック家唯一の男児。

幼い頃、ただそれだけの理由で王宮に連れていかれた。あの時、もし他の『お母さん』達に男児が生まれていれば、その子供が後継者になっていただろう。

数十人も子供がいるのに、男児が一人しかいないというのは男爵家としては良かったのだろう。明確な線引きのおかげで、後継者争いが熾烈化することは回避された。

けれど、ケニードの母にとって、それが良いことであったのかどうかは分からない。

「僕のお母さんは、パルム族だったんだ。どこかの劇場で、ショーをしていた時に見初められたんだって。他のお母さん達より身分も低いし、パルム族は重婚も愛人も認めない一族だから、一族全体から存在否定されてる状態だし……そういう意味で、立場はすごく弱いんだ」

父親の『妻』の中には、伯爵の娘もいれば、富豪の娘もいた。

突然『跡継ぎの母』となった母親と、後継者に選ばれた子供に、彼女等が嫉妬しないはずがない。

「領地の本邸に行けば、どんな目にあわされるかわからない。うんと小さい頃に一回だけ連れて行かれたけど、食べ物を食べればかえって具合悪くなるような場所だったから、すぐに王都に逃げ帰っちゃった」

少年がわずかに目を細める。

気づかず、ケニードは俯いて自嘲した。

「本邸の記憶は、だからあんまり残ってないんだ。僕とお母さんは、王都の小さな家にずっといて……『お父様』に王宮に連れられて行ったあとは、無理やりまた領地に連れ帰られそうになったけど、死にたくないから嫌だって言ったら、今の街屋敷（タウンハウス）を作ってくれた。時々手紙はくるけど、そういえば、直に会ったのはその時が最後だったな……」

しみじみと思い出した過去に、ケニードは顔を歪めた。教育を執事に任せて、父親は領地の生活に戻って行った。母が死んだ時にも来なかった。そういえば、それだけの関係だったのだ。

「だから、お父様の事業にも関心なかった……お父様も、僕のことに関心は無いと思う。与えられた分野の勉強さえしていれば、それ

でいいみたい」
だから、愛情が決め手と言われれば苦笑するしかない。そんなものは無いと、心の底から思っているから。
「ですが、男爵は、少なくとも金貸しに関しては、手控えると明言されましたよ」
「……え？」
「あなたが襲われたという事は、彼にとっても衝撃だったようです」
「……」
「それが愛情によるものなのかどうかは、私にはわかりません。そして、関与するべきことでもないと思っています。ですが少なくとも、どうでもよいと思われているわけでは無いようです」
客観的な意見ですが、と締めくくった少年に、ケニードはぽかんと口を開けた。何か熱のようなものがじわりと胸に染みたが、それが何なのかはよくわからなかった。
ただ、体の奥が暖かい。
「……そう……かな。でも、たぶん、深い意味ないと思うよ」
「そうですか」
「うん。お父様のことだから、他の跡継ぎ選ぶのが面倒だってだけだろし」
「あなたがそう思うのでしたら、そうなのでしょう」
「……うん」
「先程、あなたの屋敷に男爵の馬車が来ていたりもしましたが、あれもきっと意味が無いことなのでしょうね」
「……」
さらりと言われた言葉に沈黙して、ケニードは口を引き結んだ。なにか、変な表情をしそうな気がしたのだ。
そんな年下の少年に、黒髪の少年は瞬きをする。形良い唇が動いて、淡々と言葉を紡いだ。
「嬉しい時には人は笑うのだと、義父（ちち）は言っていましたが」
ケニードの顔がくしゃりと歪んだ。

笑い顔なのか泣き顔なのか、よくわからない表情だ。
「嬉しい、のかな、これ。よくわからないよ」
「口は笑っているようですが」
「笑ってる？　そうかな？」
「口角が上に上がっていますので、笑っているのではないかと。……ところで、アロック卿」
ふと声の質が変わって、ケニードはふにゃふにゃな口元を引き締めた。
見返した相手の表情は変わらない。だが、その目を見た瞬間、湧き上がっていた暖かいものが急速に萎んでいくのを感じた。
「護衛をつけたほうが良いと、先程私が言ったのを記憶しておいでですか」
「え……うん」
「今はまだ、つけておられませんね？」
「うん」
ケニードは頷いた。
見つめる紫の瞳の中に、静かな炎のようなものが揺らいでいる。その色に、ざわざわと肌が粟立つのを感じた。少年が初めて目に宿した感情がなんなのか、ケニードにはわからなかったのだ。
どこか底冷えのする瞳のままで、少年はケニードを眺める。ほとんど身長差のない縦長の体は細く、訓練を受けた者の体躯では無かった。
「参考までにお聞きしますが、武術や剣術は習っておいでですか？」
「いや……えと、いえ、習ってないです」
「武器もお持ちではありませんね？」
「……はい」
少年は素早く腰から短剣を取り外す。装飾のない実用的な剣だった。
「これを持っていてください。無闇に抜かないように。誰かが抜き身の武器をもったまま向かってきたら、構えてくださって結構です。

……走りますよ」
言うや否や、力強い手がケニードの腕を引っ張った。半ば引き倒される勢いでケニードは駆けはじめる。
「な……何!?」
「喋らない!」
初めて鋭く叱責された。それと同時、他に通行人もいなかった路地から慌ただしい足音が響いてくる。
ケニードは驚いたが、振り返ることはできなかった。問答無用で引っ張って行く力は強く、余計な動きをすればそのまま引き倒されて引きずられそうだったからだ。
だが、その力故に感じずにはいられなかった。
今は、暢気に問答をするような場合では無いのだと。
「……!」
ケニードは必死に足を動かした。フレートとその取り巻きに追われていた時以上に懸命だった。後ろから聞こえてくる足音は大きく荒く、数も多い。
「……逃げ切るのは無理ですね」
いくつかの路地を通りすぎた所で、少年が呟いた。ケニードは初めて周囲を見渡し、息を弾ませながら声をあげる。
「あのっ大通りっ行けば」
「塞がれてます」
素早く口をはさんで、彼は周囲を見渡した。ほとんど暗がりでしかない路地の一つに眼差しを細め、そこへと躊躇無く飛び込んで行く。
「あ……あのっ」
「命のやりとりを今までしたことは?」
「な……ない、ですっ」
細い路地を通り、奥へ奥へとひたすら走る。すると、前方に異様に高い壁が見えた。
行き止まりだ。

「な、そ、そんな……！？」
「壁に背を向けていなさい。その壁の向こうから敵が来ることはありません」
その壁際へとケニードを押しやって、少年は通路の中で立ち止まった。その手には何もない。
「あ、あの……っ」
「なんです」
こんな時でも静かな声に、ケニードは空気の塊を飲み込んだ。ぎょぐ、っと鳴った喉の痛みに、夢ではなく現実なのだと思い知る。
「なにが、どうなって……？」
「わかりません」
「わ……え！？」
「誰かがつけてきている。それも複数。そして殺気がある。これらは事実です。分からないのは理由です。狙いがあなたなのか、私なのか。二つに一つです。どちらが狙われていたのかがわかれば、理由がわかります」
「いや、あの……狙われるって、でも、それに殺気って……」
「私を邪魔だと思っている人は多いです。あなたの場合は、男爵の関連でしょう。言い忘れていましたが、オーフェルヴェック伯爵は、フレートを廃嫡することにしたようです。決定がくだされたのは三日前。時機的に、何かしてくるとすればここ数日であり、その相手は彼でしょう」
ケニードは頭が真っ白になるのを感じた。唐突に足から力が抜けて、そのままその場所にへたりこむ。
「私があの場にいたのは、男爵と、ビットナー伯爵、ダーミッシュ子爵にあなたの保護を頼まれたからです。この二日間、フレートの身柄を確保することはできませんでした。先程、ようやくよからぬ場所に出入りしていたと情報を掴んだのですが、あなたは登城されてない上に、あまり治安の良くない南区に行っていました」
静かな黒い背中をケニードはただ見上げる。

「次からは護衛をつけなさい」
路地の向こう側から音が聞こえてきた。追いつかれたのだ。子供でも並んで通れない狭さのため、走る速度が鈍っているのだろう。粗野な足音と聞こえ始めた怒号に、ケニードは青ざめた。
「……あ、あの、くら、くらら」
「……誰を呼んでいらっしゃるのか存じませんが、私ならばレメクかクラウドールです」
「あの、剣、剣は」
渡された短剣をガチガチいわせながら差し出すと、静かな目が一度だけ振り返った。震えているケニードと剣を見つめて、一言。
「それはあなたが使いなさい。この狭さなら、一体一です。突き刺して、引き抜いて、また突き刺せば倒れます」
恐ろしいことを言われて、彼の血の気は瞬く間に下がってしまった。白いその顔を一瞥してから、少年は見え始めた追っ手へと向き直る。
「しばらくすれば、『誰か』が動きます。それまで永らえていることが大事です」
「でも、あなたは……つ、強いんですか!?」
ケニードの目にも、少年の体ごしに追っ手の姿が見えた。自分達の二倍以上ありそうな男達だ。その手には、大ぶりのナイフが握られている。
「剣術とか、あの、この剣とか」
「その剣はあなたが使いなさいと言ったはずです」
言ってから、少年は無造作に一歩踏み出した。ケニードと違って震えることも、体を強ばらせることもない。
いつもと同じ淡々とした声で、彼はこう言った。
「残念ながら、私が習ったのは護身術だけです」
そうして、勢いよく突進してきた大男のナイフを、避けることなくその場で受けた。

「……な」

無意識に零れた声に、ケニードは気づかなかった。

少年の黒い背中が一歩分後ろに下がる。向かってきていた男の体勢から、ナイフを突き刺されたのだと思った。

だが、倒れたのは大男の方だった。

「……が、ご」

何が起こったのかよくわからなかった。彼の目には動きが見えなかったのだ。

突進してきていた男の体が傾ぐ。その喉には、少年に突き立てたはずのナイフが深々と刺さっていた。

――喉を貫かれたのだ。

「い……いぇあぁッ！」

気勢を削がれながら、二人目がナイフを振りかぶって襲いかかった。ケニードの目には、少年がその脇をすり抜けたように見えた。だが、ナイフを避け、すり抜けた時には、男の胸には深い一撃が刻まれている。

そうして、三人目に向き直る彼の手には、血に濡れたナイフが握られていた。

「……ぇ」

音をたてて倒れた二人目に、追っ手もさすがに足踏みをした。暗がりで表情が見えなくても、警戒と恐怖の気配は伝わってくる。ケニードは剣を胸に抱いて、闇に溶けそうな少年の輪郭を必死で追った。

レメクはただ、静かにそこに立っている。

「な……なんだ、こいつ！」

「護衛か」

「馬鹿な……ガキだぞ」

彼等に比べれば縦も横も厚みも無い相手だったが、だからこそいっそう不気味に思えたのだろう。瞬く間に二人を屠った腕は、とうてい普通のものでは無い。

動揺を見取って、レメクは無造作に声を放った。

「金貨を何枚摘まれた。百枚か。千枚か」

「……は？」

言われた言葉に、全員が唖然となった。その隙に、少年の体が動いた。

「な……！？」

「ごッ！」

「ぎっ」

連続して響いた鈍い音と悲鳴に、一人置いてきぼりになっているケニードは体を竦ませる。少年が動くたびに距離が離れていってしまうため、今の彼には暗がりの向こうから悲鳴や物音が聞こえるだけとなっていた。

壁に背中をこすりつけるようにして、震える足でなんとか立ち上がる。何もしていないのに呼吸が荒いのが、ひどくおかしく感じた。

「は……は」

荒い息がまるで野良犬の呼吸のようだ。必死に深呼吸を繰り返していると、ふと闇が揺らぐのを感じた。ぎょっとなって剣を構えると、それは少年の姿をとった。

「……あ」

今まで見たものが夢であったかのような、劇場で会った時と変わらない姿の少年だった。わずかに髪が乱れているものの、差違があるとすればその程度だ。いや、違う――

ケニードの目は、そのまま少年が持つナイフへと吸い込まれた。夜にそれとわかるほど濡れている刃は、青い銀色に黒い筋をいくつもつけている。

「……それでは誰も倒せませんよ。よくても打撲です」

少年のほうもケニードの剣を見て、相変わらずの口調でそう告げ

る。ケニードは自分が構えた鞘をつけたままの剣を見て、そのままへたりと座り込んだ。

その瞬間、

「伏せなさい！」

理解より早く、体が地面にくっついた。ドンッ！　という音と同時、すぐ近くの地面に土埃がたつ。黒い大きな足が地面を躙(にじ)るかのように一瞬動き、

「わ……わぁっ！」

大きく揺れて、ケニードの方に倒れかかった。

反射的にかいくぐるように隙間へと飛び退くと、いままでケニードがいた壁際に男が倒れ込む。その背には深々とナイフが食い込んでいた。

「……壁を越えて来ましたか」

その声だけは、今かで聞いた声の中で最も低く苦いものだった。

予想が外れたからだろうか。そう思ったが、見上げた視線の先にいたのは、ゾッとするほど冷ややかな顔をした少年だった。

先程までとは、あきらかに顔が違う。

ケニードは改めて最後に倒れた男を見た。不思議なことに、最後の一人だけは他の連中と服装が違っていた。反対側に倒れている男達は、粗末ながら町人らしい服を着ている。だが、最後の一人は全身黒ずくめだった。その手にもっているのも、湾曲した太短い刀だ。

「……クラウドール卿……」

「……」

少年は答えない。ただ、空を見上げるようにして高い壁の向こう側を見ている。

「……いないようです」

しばらくしてから、彼はそう呟いた。武器を失った手をパンパンと軽く叩いて、汚れを落とすような仕草をする。ケニードは慌ててハンカチを差し出した。

「あ、あの、怪我、とかっ」

「ありません」
「……し、死んじゃったんですか、あの、全員……」
「最初と最後は。後は余裕がありましたので、気絶させています」
ケニードは足下にある遺体をそれぞれ見下ろした。寒気が足下から昇ってきたのは、今まで人の死というのを見たことが無かったからだ。
唐突に命を奪われる――そんな現状を目にしたことがなかったからだ。
無意識に震えだした唇が、ぽつりと言葉を零した。
「……護身術……です、か」
これが。
この、一撃で相手を殺す術が。
「護身術です。生き残るために、叩き込まれましたから」
息が止まった。
ケニードは大きく目を瞠る。
言われた言葉の意味を本能で理解したせいだった。
生きるために学んだ術が、人を一撃で殺す術だとすれば、その意味は一つだ。
――殺さなければ、殺される。

そんなやりとりが、普通に行われてきたというのだろうか？　この、王都という大きな都市の中で。王宮の中枢にいるであろう、この少年の周りでは。
「……兵が来たようですね」
ふとざわめきに顔をあげて、少年が踵を返した。立ちつくしていたケニードは、弾かれたようにその後を追う。
「あのっ！」
しかし、その後の言葉を考えていない。
振り返った少年の目にそれに思い至ったケニードは、足踏みをし

ながら手を握りしめた。
気づいた。
「け、剣、ありりがととうございました！」
どもっていることにも気づかない。
「……いえ」
「留め具が！」
言われて、レメクは自分の留め具に視線を落とした。上級紋章術師を表す外套の留め具は、変わらずそこで輝いている。
「？」
そんな少年の前で、ケニードは上着に手をつっこみ、懐に入れてあった二つの包みを取り出した。二個の青い包みに、レメクは瞬きをする。
「壊してしまったやつです。直しました！」
「……分裂でもしましたか」
渡された二個を見て言う相手に、ケニードはわずかに震えている足を踏ん張って声をあげた。
「もう一個は、僕が作りました！」
少年の目がわずかに大きくなった。
「お礼を、言いたくて。あのときも、助けてもらって」
ありがとうと、言おうと思ったところで目から涙がこぼれ落ちた。
おや？　と頬に触れると、ぼろぼろと止まらず零れおちていく。
「あれ……？」
レメクはただ頷いた。
「ありがたく頂戴いたします。……無事で何よりです、アロック卿」
それは優しい声では無かった。
慰めでも、労りでも無かった。
肩を叩いてくれるようなことも、腕を擦ってくれるようなこともなかった。
それでも、今更ながらに押し寄せてきた恐怖と安堵には勝てず、ケニードはぼろぼろと泣きながら相手にすがりついた。

五歳年上の少年は、何も言わず、何もせず、ただ黙ってそれを受け止めた。

※　※　※

青天白日の空の下、なぜか野外に集まった国指定保護機関の面々は、それぞれの飲み物を片手に円座を組む。

「さて。それでは恒例の報告会といこうではないか！　諸君！！」

伯爵の声に、おう！　と周りが声といっしょに握り拳を上げた。

一人声を上げれなかったケニードは、よろよろと握り拳だけ持ち上げる。

ケニードにとっては一生分のハラハラドキドキから丸二日がたっていた。

あの後、彼は高熱を出して寝込んでしまったのだった。

周りからは『安心したせいだ』と判断され、暖かく見守られてしまったが、ケニードはそれだけでは無いと思っていた。多分、知恵熱とか他のいろんな熱もいっぱい混じってる。

「まずは第一。え～、保護対象にされたケニード・リンクス・アザルト・フォン・アロック卿についての報告」

「はい！？」

突然の指名に、ケニードは素っ頓狂な声を上げた。

周りが一斉に口を押さえて俯き、笑顔満面の子爵に飛び上がりかけたケニードが押さえつけられる。

伯爵は得意満面で書面を読みあげた。

「先だって保護を依頼され、第一の襲撃において身柄を確保した対象者ですが、このままでは第二、第三の襲撃があった時、心身に傷を負いかねないと判断いたしました。――うむ。その通りですな――故に、騎士団の何人かに護身術の手ほどきをしていただくよう、男爵ならびに騎士団長に話を通したところ、快く承諾をいただきましたのでご報告いたします。――おお、素早い――先述の襲撃の首

謀者は、元オーフェルヴェック伯爵家嫡男フレートであり、現在、彼は身柄を拘束され、三日後の裁判にて裁かれる予定となっております。なお、事件よりも先に騒動を起こしていたクラナッハ殿とメリッサ殿に関しては、迷惑料として劇場関係者に謝罪といくばくかの金銭の支払いが命じられました。また、上記二名に関しましては、互いの感情と金銭のもつれゆえの事件であり、これ以降アロック卿に関わらない旨の誓約と、クラナッハ殿に関しては度重なる非礼に対する謝罪を文面にしたためさせましたので合わせてご報告いたします。――そういえば、かの歌姫は最近クラウドール卿に熱烈なアプローチをかけておるそうだな」

「まぁ、あの容姿と身分に惹かれない女はおるまいなぁ」

ぱくぱくと魚のように口を開け閉めしていたケニードは、暢気な伯爵と子爵の声に悲鳴をあげた。

「というか、その報告書、誰が書いたんですか!?」

「「「「「クラウドール卿」」」」」

全員の合唱がかえってきた。

ケニードはあんぐりと口を開けて固まる。

「いやぁ、あの御仁。なかなか洒落がきいておるぞ。んむ。実に柔軟な思考の持ち主だ。の？　子爵」

「いや、あれは普通に素だったと思うがね……なんと言ったか、最近では、そう、天然、と言うのではないのかな？　ああいう御仁は」

「な、なんで、保護官じゃないあの人が、報告書を!?」

「そりゃあ、簡単だ。おまえさんを保護したのは誰だったかな？」

「「「「「クラウドール卿」」」」」

さらに合唱されて、ケニードは肩を落とした。

子爵がその肩をバシバシと叩く。

「やぁ、うちの人間が保護対象にされるとは前代未聞だ。ある意味記録だよ、これは」

「んふふ。さすがは次期保護官長だね。私の目に狂いはない！」

「だ……なんで次期保護官長なんですか！　子爵！　子爵でしょ！

？」

「私は隠居したいなぁ……嫌だよ、上役になったら大好きなモンプリートちゃん達を保護しに行けないじゃないか」

モンプリートというのは、大人の握り拳ぐらいの大きさの疑似翼竜だった。その愛らしい姿で多くの人々を魅了する珍獣なのだが、それゆえに保護対象となるほどに数を減らしている。

「そこへいくと、ほら、君は大好きなのがメリディス族じゃないか。国の秘宝、麗しの一族！　国の中枢にくいこんだほうが保護しやすいヨ？　会いやすいヨ？」

「そ、それは嬉しいですけど、そういう大切な役割は、もっとずっと目上の人のほうが……！」

「あ～、俺ドラゴンラビットの保護したいからパス～」

「あたしもモンテンパリパリの保護したいから以下同文～」

「パスって言ったほうが早くないか？　俺も以下略」

一人が声をあげれば我も我もと続くパスコール。

唖然としたケニードの背を叩いて、子爵と伯爵が左右からひょろ長い体を挟み込んだ。

「うん。うちの部署はね。上に立ちたい人って全然いないのだこれが。困ってたんだよ～、皆、好きな対象にどっぷり浸かってたい人間ばっかりでさ～」

「我々も含めてネ！」

「もう、ケニード君が来てくれた時には嬉しくて嬉しくて。今は仮雇用で、見習いだけど、十三になったら正式雇用になるから。あとは時機をみて長になってくれればそれでいいから～」

「とりあえず、一方に偏らず、全体的に保護してるよーに動けば自動的に長に座がまわってくるからね。がんばって！」

ケニードは誓った。

絶対、長だけは回避しよう、と。

そんな少年の頭をくしゃくしゃに撫でて、伯爵はじんわりと笑みを浮かべた。

「まぁ、とりあえず、これからは私達もいっぱい手をかすから、君はもう少し我々を頼ることを覚えるようにね」
目を瞠ったケニードの頭を、逆方向から子爵もくしゃくしゃにする。
「男爵は王宮に来る気なさそうだけど、ここにはほら、私達がいるからね。もう少し、大人を頼ることを覚えなさい。お金は貸せないけど、知恵は貸せるからね」
周りを見れば、にこにこと微笑んでいる人々の笑顔にあう。
ケニードは口を引き結んだ。そうしないと、なにか変な顔をしそうだった。
ふと、夜の中で聞いた声を思い出す。
――嬉しい時には人は笑うのだと――

視界が歪んだ。俯いた時に、何か透明なものが零れおちた。
その髪がぐしゃぐしゃとかき混ぜられる。その手を暖かいと感じながら、寒々とした少年の表情を思い出した。
(……あの人は)
笑ったことがあるだろうか。
あんな術を、あんな風に無造作にふるうほど、命のやりとりを経験している彼は。
「あの、伯爵……」
「なんぞい？」
「クラウドール卿は……あの」
様々な疑問を胸に顔を上げると、一瞬だけ、驚くほど真剣な目をした伯爵がそこにいた。
(え)
だがその表情は、いつもの飄々とした顔に隠れてしまう。
「ふふん。クラウドール卿といえばな、この前から珍しい留め具をつけておいでなのだ」
「お！　あの銀の留め具だな。あれ、うちの奥方も欲しがっておる」

「ぬふふ。我が愛しのご婦人もな、あの留め具のような髪飾りが欲しいと言うのだよ。実に優美でな。こう、なんとも美しくて。どこの作かと私はかの御仁に尋ねたのだよ」

ぬっと近寄ってきた顔に、ケニードはおもわず後退る。しかし、肩をつかまれていてはあまり効果がない。

「あの留め具、ケニード君が作ったそうだな？」

キラリと、伯爵の目が輝いた。

「裏はとっておる。そして注文したいというご婦人が数多くいる」

子爵の目も輝いた。

「クラウドール卿は歩く宣伝板みたいな御仁だ～、聞かれたら聞かれたことにだけ答えるから、情報の巡りが早い早い」

「ちなみに工房はどこかね？　なに、意匠だけ紙に書いてくれれば、作ろうという工房もあるだろう。ちっと一つ二つ、作ってくれんかね。できればああいう優雅なやつがいいな。アメジストに翼。なかなか美しいじゃないか」

ぬぬっと近づけられた顔に、ケニードはひきつりながら声をあげた。

「あの……身につけて……ましたか？」

「うむ。よく似合っておった」

「ちと似合いすぎなぐらいだな」

「そ、そう……ですか」

ケニードは口を綻ばせる。今度は、引き結ぶことはできなかった。くしゃくしゃになった顔で彼は笑う。確かに、嬉しいと人は笑うのだ。恐いことや、不思議なことや、気になることがいっぱいあっても。

こんなふうに簡単に、顔は素直に気持ちを表すのだ。

「使って……くれたんですか……」

それが、後に王都随一となる『宝飾技師』が誕生した瞬間だった。

※　※　※

「じゃあ、ケニードはおじ様に出会わなかったら、宝飾技師にならなかったのね？」

大きな目をさらに大きくした少女に、ケニードはにっこりと微笑んだ。

王都北区、クラウドール邸。

南側の大きなテラスで、二人は午後の紅茶を楽しんでいた。

かつて遠く感じたあの少年とは、今はこんなに足繁く通えるような仲になっている。その最大の理由である目の前の少女は、美しい金色の瞳を煌めかせて身をのりだした。

「じゃあ、今もおじ様持ってるの？　その、ケニードの最初の作品！」

「ん～、どうかなぁ……あれ以降、時々こっそりいろんなもの贈ってたから、あれつけてるの見たことないし……」

遠い目になった青年に、幼い少女はティーカップに噛みつきながら上目遣いになる。

「……そういや、ケニード、おじ様のもの、こっそり盗んじゃ新しいのと取り替えてたんだって……？」

「う」

ちょっぴり非難を込めたその目に、ケニードはそっと視線を外した。

あの後、子供だったケニードと少年だったレメクが仲良くなったかといえば、そうでもない。

相変わらずレメクはそっけなく、ケニードはいつだって空回りだった。なんだかがんばればがんばるほど裏目に出ていたようだと、最近になってようやく思い知ったほどだ。

彼があの時の少年と仲良くなれたのは、目の前にいる、この小さな少女が現れてからだ。

「いや、だってね、彼、自分のことに頓着しないじゃないか。見栄えいいから、できれば最高の状態でいつもいてほしいと思うけど、なんというか……うーん、放っておくと、すごいボロのペンでも使ってそうで……」

「……それはわかるわ。服とかはちゃんとするけど、ある一定のもの以外は、すごい頓着しないよね……」

二人は知っている。レメクという男が、意外とあちこちで手を抜いていることを。

「外見で騙されるよね。すごい完璧そうに見えるから」

「そうそう。なんでも知ってそうに見えるんだよね。常識とか非常識とか」

「そんでもって、すごい細かそうに見えるのよね。まぁ、ある一定までは細かいんだけど」

「そうそう。でも見た目は『全てに』細かそうに見えるんだよね。ある一定区域から外れたらそうでもないんだけど、そこんところは普通の人には見えないから」

例えば、使用してない部屋とか、身だしなみ以外の小物とか。

「もう、見つける度に取り替えて取り替えて……でも、ほら、大事なものだったらいけないから、こっそり手紙とかはさんで、直しておくから必要なものでしたら取り返しに来てくださいって……でも一度も来てくれなくてさ……」

しょんぼり。

「あんまり大事じゃなかったんじゃない？」

「いや、でもさ、普通、古いものって大事にしてるって思うじゃないか。もしステファン老の形見だったりしたら、やっぱり嫌だろ？

持って行かれちゃうの。だから、原型をとどめて、壊れた部分だけ補修して……いつでも返せるように宝物倉の中に奉ってあるんだ」

「……奉ってるんだ……」

「うん。日付いれて、奉ってある」

「……日付つき……」

少女ががっくりと肩を落とした。しかし、次の瞬間には、その小さな肩がひょこっと元気よく持ち上がった。
「でも！　このあたしが来たからには、もうコレクションは駄目よ！？」
「え～、ちょっとぐらい分けてよ」
「ちょ……ちょっとぐらいならいいけど、あたしも欲しいもの！　ぱんちゅとか」
「……それはさすがに、盗ろうとは思わないよ、僕……」
年齢的に幼いはずなのに、なぜそのような凄まじい品を欲しがるのか。ケニードは五歳にしか見えない小さな体をしみじみ見やって、遠い場所へと視線を馳せた。
「……そういえば、前、洗濯物してたとき……」
「……うっ……」
「干されてたね……布団に包まれて、縄でひっくくられた状態で」
少女自身が。
「……あ、あれはっ……おじ様がいじわるでっ」
「その状態で、フンフン気張って体揺らして、反動で干されてる洗濯物に手を伸ばそうとしてたよね……」
ブンブンと勢いよくブランコのように揺れる少女が、洗濯物に必死に手を伸ばしてジタバタしている光景に、偶然見てしまったケニードは絶句して立ちつくしてしまったものだった。
ちなみに問題の男性は、てきぱきとベッドシーツなどを干していた。
後で気づいて、反動のあまりグルグル回っていた少女に驚いていたが。
「いやぁ……退屈しないよねぇ……ベル」
「むぅう！」
少女は小さい手でぺちぺちとケニードの手を叩きにくる。短すぎて届かない手に、ケニードは思わず笑ってしまった。
「なにをやっていますか、あなたがたは」

そんな風に遊んでいると、屋敷の方から青年が一人、ワゴンを押しながらやってきた。素晴らしい美青年に成長した相手に、ケニードもベルもうっとりと相好を崩す。

「腰がいいわよね、ね、ケニード」

「首も捨てがたいよ、ね、ベル」

「……何の話をしているのですか」

何か身の危険でも感じたのか、近寄ってきていた足が後退る。ベルがビョンッとカエルのように椅子から飛び出して、小さな手足で果敢に相手に飛びかかった。

「ベル！　そういうはしたない真似はやめなさい！」

「はしたなくないもん！　スキンシップだもん！」

「そんなあやしい目をしたスキンシップはありません！　ほら、お菓子をあげますから、席に戻りなさい」

「あい」

ワゴンの上にのっていたクッキーを一つ、受け取って噛りながらベルが走ってくる。

たどり着く前に食べ終わって、あっという間に舞い戻った。

「ベル！」

「く、くっきー、欲しいの」

必殺。上目遣い。

くりっとした目で一生懸命見られて、男は口を引き結んだ後、嘆息をついてクッキーを二枚渡した。ぽりぽり噛っている少女をそのままに、足早にテーブルまでやってくる。

「も……もっふ！」

慌てて追いかける少女が、なんともいえず可愛らしかった。

ケニードは二人の様子に笑ってから、青年を見上げて目を細める。

「クラウドール卿。本日はけっこうな品をありがとうございました。皆で美味しく頂かせてもらいました」

「お口にあったのなら、何よりです」

さらりと言う男の声は、昔と同じく静かなものだった。

だが、あの時見たような空虚な色は、今はどこにも感じられない。
「そういえば、先程から何の話をしていたのですか？　懐かしい名前が出ていたようですが」
首を傾げながら、男はワゴンの上の果物や菓子を次々にテーブルに並べる。そのカフスには、美しい意匠の宝石がボタンとしてついていた。
鮮やかに美しいその紫の宝石に、ケニードは微笑む。
あれから十五年が経った。
その間に知ったこと、わかったこと……数えればきりがない。
もちろん、知らないことも多い。
その中で、小さな少女と出会った日の後に、わざわざ打ち明けられたこともあった。おそらく、人生で一番驚き、そして魂を震わせたのはあの日だろう。
最初にあった日から十五年。
あまりにも隔たりのあった相手に、認められたのがその日だったのだから。
「……懐かしい話ですよ」
様々な思いをこめて、ケニードは口にした。
いろんな意味で子供だった彼に、これから生きていくための道を示してくれた唯一人を見つめて。
「今の僕が生まれた、その時の話です」

SS【遊んであげているのです！】（前書き）

ベル＆レメク、ある日の一コマ。
王宮編の前のお話です。

※本編とは関係のない話です※

SS【遊んであげているのです！】

目の前で、綺麗な指がクルクルと円を描いてる。
あたしはそれにカプッと噛みついた。
しかし、指はサッと避けると、小馬鹿にするようにまたクルクルと目の前で円を描く。
「むむぅ」
あたしは思いっきり口を尖らせた。
王都北区、クラウドール邸。
うららかな昼下がりである。
目の前の立派なカウチにはレメクが座っていて、一生懸命背伸びしているあたしの目の前で指をくるくる回していた。
構ってくれるのは嬉しいのだが、彼の構い方はちょっと問題がある。
どうも子猫を相手にしてるような構い方しかしてくれないのだ。
頭も撫でてくれるが、鼻を摘まれたり頬をプニプニ押されたりする。
それに抗議して指をペチペチ叩いたり噛みつきにいったりするのだが、そうするとこうして鼻先で指をくるくる回されるのだ。
あたしはジーッと鼻のちょい先で小さな円を描いている指を見つめる。
漂う緊張感。目は一点集中。指は匂いまで嗅げちゃいそうなほどの近さ。
――と思ったら鼻を摘まれた。
「にょぉッ！！」
あたしがバッと暴れると、レメクも指をパッと離す。
そしてまた鼻先で指をくるくる回すのだ。

お……おのれ……ッ！！
あたしは今にも増してレメクの指に集中した。
ここで一つ断っておきたい。
あたしは別に、こんな風にしてレメクに構ってもらいたいわけでは無い。
こんな遊びは望んでいないのである。
けれど最近のレメクはこんなことばっかりするのだ！　乙女を何だと思っているのかとそう問いたい！！
しかし、デキル女は、遊びたい盛りのトノガタにつきあってあげるものなのです。
そう、あたしはレメクに遊んでもらっているわけではない。
遊んであげているのです！
「……おや、もうこんな時間ですか」
あっ！　おじ様、もうやめちゃうの！？
突然カウチから立ち上がったレメクに、あたしは愕然と飛びついた。
待って待って！　あたしはまだ満足してないのですよ！？
ここでやめるなんて、それはもう、男としていろいろイカンってなもんでしょう！
「ベル。後で遊んであげますから」
なんと！？
「ち、違うもん！」
聞き捨てなら無いお言葉です！
あたしは慌てて抗議した。
「遊んであげてるんだもん！」

主要登場人物紹介（前書き）

簡単な人物紹介です。
最初の方のキャラや、重要キャラのみ載せています。
なお、以前までに出ていない内容（種族その他）は、???表記となっています。
＜追記＞教皇の年齢が大幅に間違っていましたので訂正しました。

主要登場人物紹介

【ベル】メリディス族・女性・九歳
本編主人公。母親を亡くし、孤児院に身を寄せていた。劣悪な環境下にいたため、外見年齢は五歳ほどであり、体は非常に小さい。死にかけていたところをレメクに助けられ、掟に従って押しかけ女房となる。
『春の大祭』の夜会で、ナスティア王国の女王アリステラの第十二王女となった。

【レメク・（いつも中略）・クラウドール】??族・男性・三十二歳
倒れていたベルを助けたために、彼女の未来の旦那に確定してしまった。外見年齢は二十歳後半。
闇の紋章や断罪の紋章など、強力な紋章を持つ。王国史上二人目の『断罪官』。
その権力は時に王をも凌ぐ。

【アウグスタ（アリステラ）】クラヴィス族・女性・??歳
いろんな所が謎な巨乳美女。外見年齢は二十歳前半で止まっている。
本名はアリステラ。アウグスタは異称。
その美しさは国の内外にも広く知られ、中央の黄金の薔薇（トゥリアフィラ）と呼ばれている。
ナスティア王国を統べる黄金の女王。

【ケニード・アロック】ケルティ族（母親はパルム族）・男性・二十八歳
ベルの盟友にして、理解者。レメクに心酔している。

アロック男爵家の跡取り息子。宝飾店を営み、自身も優れた宝飾技師である。

【ルドゥイン・バルバロッサ】??族・男性・??歳
王都の大聖堂で大神官を務めるレメクの友人。人間が到達できる大きさの限界にチャレンジしているような巨体で有名。通称・熊。
侯爵家の三男だが、家訓により教会に預けられた。家族とは仲が良いらしい。

【ヴィルヘルム・ホセ・ローエンブルグ・エゼルス・フォン・ヴェルナー】クラヴィス族・男性・七十二歳
名宰相と誉れ高い現ナスティア大法官。いつも人手不足に悩んでいるらしい。

【ポテト（ナイトロード）】???人?・男性・?????
正体不明の謎のヒト。一説には人外という噂だが、昔は人間だったとの発言あり。
アウグスタ（アリステラ）にのみ忠誠を誓う。真名の一つはレメク。
レメクの名付け親であり、育て親の一人。

【フェリシエーヌ】アザゼル族・女性・十二歳
アリステラの養女の一人。第十一王女。誰もが認める宮廷一の美少女だが、乙女心と焼き餅焼きも宮廷一。女たらしの婚約者にいつもヤキモキさせられている。
愛称のリーシェは王族名。
ベルを一人前のレディにすることに燃えている。

【シーゼル】クラヴィス族・男性・十三歳
レンフォード侯爵家、正嫡の末子。フェリシエーヌ姫の婚約者。

異父異母あわせて五十八人の兄や姉がいる。
四年前に出奔した五歳年上の兄（正嫡。現在勘当中の身）のかわりに、クレマンス伯爵位を継いでいる。

【アデライーデ】???族・女性（新規）
アリステラの養女の一人。美しい容貌をしているが、着飾ることにあまり興味がなく、活動の邪魔になるため地味な服を好んで着る。知識欲を満たすことを第一にしており、その言動は怪しい。

【アルトリート】クラヴィス族・男性　（新規）
レンフォード公爵家ゆかりの若者。シーゼルの異父兄。ひどく高慢な言動が目立つ男性らしいが……

【クリストフ】クラヴィス族・男性　（新規）
レンフォード侯爵家の馬番。前王の落胤という噂。レンフォード公爵夫人が後見人となっている。

【マリアンヌ】クラヴィス族・女性・二十八歳
バルディア国王太子妃。かつてはナスティアの第一王女だった。いまだレメクに恋着しているらしい。

【レンナルト】バルディア国人・男性・三十歳
バルディア国王太子。爽やかな美青年。

【フォルマ侯爵】ケルティ族・男性・六十三歳
ナスティアの有力貴族。

【バンカム侯爵】アザゼル族・男性・六十二歳
ナスティアの有力貴族。

【マルグレーテ】クラヴィス族・女性・五十一歳
前国王の妹。美貌の公爵夫人。夫に負けず劣らず、数多くの恋人がいる。
王女時代の暮らしに未練があるらしいが……

【アルカンシエル】クラヴィス族・男性・百十七歳
教皇。クリストフの王族入りに、肯定的な意見のようだが……

【レーブレヒト】クラヴィス族・男性・故人
前ナスティア王国国王。アリステラの父。

【アントワール】クラヴィス族・女性・故人
前第一王妃。アリステラの母。

【レティシア】メリディス族・女性・故人
前第二王妃。アリステラを殺害しようとし、果たせず自害した。
息子が一人いるが、現在、行方を知る者はいない。

プロローグ

春。

冬の恵みの雨を受けて、咲き乱れるのは様々な花。

野にはパンジー、クローカス。鮮やかな赤は芥子（パパルーネス）。枝に花を灯すのはアミグダリア（アーモンド）。

花壇で誇らしげに揺れるチューリップ。西区で咲くのはナルキッソスとヒュアキントス。

3月から春となるナスティアでは、四月は花の真っ盛り。五月に花祭りを控えながらも、街のあちこちに花は咲く。

特にアミグダリアは圧巻だ。王都の街壁の向こう側、巨大水路を挟んだ通りには、距離を置いてアミグダリアが並んでいる。

幹は低い場所から枝をボワンと横広げ、春にはそこに白っぽい花をいっぱいつける。密集して植えていないのはそのためで、水路から距離をとってるのは、収穫期の作業のためだった。この木は秋に収穫されて、実の中の種を食べるのである。

近隣の土地を含め、王都にはそういった食用の木が多く植えられていた。

あたしが知っているだけでも、えーと、レモンでしょ、オレンジでしょ、ザクロでしょ、あとは……なんだっけな、あの果物……忘れたけど、まぁ、いろいろだ。

ちなみに街のあちこちに設置された花壇にも、食べられるものが多く植わっている。

ええ。もちろんちょろまかして食べましたとも。花だって食べちゃいますよ。飢えてましたから！

昔の王様の時代には、そういった木や花はほとんど無くて、石畳ばっかりが通りを埋めていたらしい。

アウグスタが王様になって、街には緑がすごく増えた。

馬車や荷車は通りにくくなったらしいけど、あたし達からすれば

食べ物が植わってるほうが有り難い。
前王の時代には餓死者が毎年いっぱい出てたそうだから、まぁ、そういうことなんだろう。
アウグスタ……がんばってたんだな……。レメクから教えられるまで、全然知らなかったけど。
そんなアウグスタが住む王宮、その最奥の一つ。
俗に後宮と呼ばれる場所に、今、あたしは居る。
堅固な城壁の中にある城は、頑丈さを重視した城壁と違い、実に優雅なものだった。
もちろんその一部である後宮も例に漏れず、その美しさに目が潰れちゃいそうである。
だいたいにして、あてがわれたこの部屋からして尋常ではない。
通称『青の間』と呼ばれる色で統一されている。
柱や暖炉、配置された様々な家具は白に金。縁取りや装飾はどちらかと言えば控えめで、それが一層この部屋の上品さを引き立てる。
昔の王太子サマとかが使っていた部屋なのだそうだ。前の第二王妃サマや、そのお子様も使っていたことがあるそーだ。
……頼むから、そんな由緒正しい（ついでに、なんか曰くもありそーな）部屋をあてがわないで欲しいものである。一応これでも、繊細でか弱い乙女なのだから。
……なんですか、レメク。なにか物言いたげな目でこっち見て。
ゴホン。それはともかく。
そんなウツクシイ部屋の中は、春らしく色とりどりのチューリップで飾られていた。
白が多いが、一言に白といっても様々だ。縁の部分が赤紫色だったり、花弁にピンクの筋が走ってたり……なんか、見たこともない形がいっぱいある。
チューリップって、こんなに色んな形があったんだな……
目から鱗が落ちるってもんです。

ちなみに、あたしの部屋がチューリップ畑になってるのは、某王太子さんが謝罪とお見舞いをかねて贈ってくれたせいだった。

そういや、なんかそれっぽいこと言ってたな、と思いつつも、この量には度肝を抜かれた。

部屋にあった花瓶では数が足りず、最後はバケツまで借り出される始末。王宮中の花瓶を集めたかのような陳列物に、さすがのレメクも唖然としたぐらいである。

まぁ、あたしは球根が一つ残らず切り落とされてるのを知って、絶望したが。

……食べたかったのにな……

「……王都中の花屋からチューリップが消えたかもしれませんね……」

あまりの量に、応接室や居間だけでは収まりきれず、花は寝室にまで持ち込まれている。

持ち込まれたのは朝が明けてしばらく経ってから。

朝の早いあたしやレメクは起きていたが、そういうのはやっぱり王宮では異常であるらしく、持ってきた部屋付き侍女の皆様は驚いていらっしゃいました。

……いや、もしかしたら、あたしの髪を編んでたレメクに驚いたのかもしれないが。

ちなみに、レメクは本日丸一日、ベッド上安静を命令されている。

二ヶ月ほど前のあたしのようだが、やーい、とは言えない心境だ。

なぜなら、お勉強のあるあたしは、お昼以降はレメクと離れてお義姉さまの特訓を受けないといけないのである。

つまり、レメクと離ればなれ。

……一緒にいたかったなぁ。

「一応、これが謝罪ってやつなのかな？」

ツンツンと花弁をつつくあたしに、レメクは呆然とした顔のまま。

「……まぁ、そうでしょうね」

淡い色の夜着姿のままで、深い深いため息をついた。

呆れかえっているのだろう。
ベッドの横では、いやに冷ややかな目をしたポテトさんが立っている。
ナゼかあたし達が目覚めてからずっと、傍についてくれているのだが……そのツメタイ目は、何かな……？
視線を注がれている白いチューリップが、心持ちシオシオと萎れてゆく。
お義父さまはフンと鼻をならした。
……おや？
「いささか常識を逸している気がしますがね」
なんと言うか、このヒトに言われたら、おしまいだろう。
しかし、えぇと……もしかして？
「……お義父さま、コレ、嫌い？」
あたしはおずおずと綺麗なフリフリのチューリップを指さす。
花よりも格段にウツクシイお義父さまは、白けた目で花を見つめて、一言。
「……別に」
……う。なんか、すごく嫌そう。目が嫌そう。
あたしは答えを求めてレメクを見る。レメクが非常に言いにくそうな顔をした。
「……お義父さん、まだ、嫌いなんですか……」
「花は嫌いではありませんよ。別に」
「……そちらを言っているのではありません」
ため息。
ポテトさんは非常に冷たい顔で花々を見渡し、またフンと鼻で笑った。
「あのおぞましさは、私の好むところですが……不快です。ただ、それだけですよ」
……えーと……？
首を傾げるあたしに、ポテトさんはフワリと微笑む。

「まぁ、花に罪はありませんからね。枯れるまで目を楽しませると良いでしょう。……ところでレンさん。くれぐれも……」
「……わかってます。大人しくしていますよ」
「それが本当ならいいのですが。あなたは実のところ、目を離すと危険な子供でしたから」
ほうほう。なにやら意外なお言葉です。
目をキラリと光らせたあたしに、なぜかレメクが焦る焦る。
「それよりも、お義父さん。陛下の所に行かなくてもいいのですか？　朝からずっと、こちらに来てますが」
レメクはそれを、話題を変えるきっかけにしたかったのだろう。それか、ポテトさんを追い出す手段か。
しかし、この時は失敗した。
なぜなら、その言葉を受けたポテトさんは、にっこりと、それはそれは恐ろしくも美しい笑みを浮かべてこう言ったのだ。
「ご主人様の所には、バルディアの夫妻が来ているのですよ。……ええぇ。私に同席しろとおっしゃいますか？」
……あたしは未だかつて、あんな恐ろしいポテトさんを見たことは無かったのであります。

1　人としての在り方

※※※

昔、あるところに、とても美しい女王様がいました。
女王様の元には、毎日山のような恋文が届きます。
求婚者は退きも切らず、その列は玉座の間から遙か城門の向こうまで続くほど。
隣国はもとより、大陸中の強国から縁談が押し寄せるにあたって、ついに女王様はこう仰いました。

私の夫となる男は、
この大陸で最も生命を尊び、
生きることの全てを知る者である――と。

その頃、ちょうど女王様の国には隣国の王太子が来ていました。
王太子は言います。

我が国は生命の木を抱き、命の水の沸く場所です。
この大陸の果てまで見渡しても、我が国以上にあなたの出した条件を満たす場所は無い。
どうか私と一緒に、二つの国の王となってください。

王太子は女王様を心から愛していました。
女王様も王太子を憎からず思っておりましたが、彼女の答えは『否』でした。

隣国の王の子よ、
貴殿の国は生命を抱き、生命の水を得ていても、

その全てを知ってはいない。
それは恩恵を受けているだけ。

女王様の愛を得られなかった王太子は、それでも諦めきらずに求婚し続けます。
けれど女王様が彼に振り向くことはありません。
周囲も半ば諦め、半分の者は王太子をなだめました。
けれどもう半分は、誰の手もとらない女王様を諫めました。
彼女の前には山のような財宝と、山のような美辞麗句が並んでいます。
女王様はただ微笑んで、それらを眺めているだけです。
決して誰のものにもならない女王様に、しだいに他国の王子達は気づきはじめました。
彼女は条件の全てを満たす相手以外、決して認めはしないのだと。
強く美しく豊かな国と、誰よりも美しい女王様。
誰のものにもならないのなら、それで諦めようと、彼らは一人また一人と帰っていきます。
彼らには彼らの国があり、彼らの仕事があるのです。いつまでも女王様の前に跪いているわけにはいきませんでした。
けれど彼らが全員、一人で帰ったわけではありませんでした。
なかには、女王様の近くにいた姫君を伴って、自国に帰られる王子様もいました。
そんな中、かの王太子だけは諦めきれず、ひたすら女王様に求婚をし続けました。
最初に求婚してから、何度季節が変わったでしょう。
その長い長い日々に、女王様の国の民も、王太子の国の民も、このままでは終われないと思いました。
※※※

「けれど、『女王様』が振り向くことはありませんでした。どれほ

ど月日が経っても、です」
悠然と足を組んで、ポテトさんはそう語った。
王宮、青の間、寝室の一角。
大きな窓から差す日差しは、朝ということもあって少し柔らかい。
ポテトさんが座っているのは、そんな窓際の大きなソファだった。
顔は逆光で見えないはずなのだが、何故か煌めくウツクシサである。
あたしはパンを咀嚼しながら、ふんふんと相槌をうつ。
あたしが居るのは暖炉前の応接セットで、大理石の机には銀食器がずらりと並んでいた。もちろん、中身はとっくにあたしの胃の中である。
「国同士で考えれば、お互いの力は伯仲。けれど一方は女王で、一方は王太子。国を継いでからならともかく、継いでもいない王子では立場が弱い。おまけに、『女王様』の国は年々国力を高めていましたからね。別に、王太子と結婚しなくても困らなかったわけです」
「じゃあ、フッたんだ？」
「まぁ、結論だけ言えば」
どこか苦笑めいたものが口調に混じる。
「けれど、互いに大国同士。ああも長くなると、一方がずっと求愛し続けていたのに、片方が完全に無視、というわけにもいかないんです。面子というか、体裁というか……国民の感情というか」
影になっている顔の中で、亀裂のような笑みがチラリと覗く。
「そのままでいれば、両国間の軋轢は必至です。すくなくとも、王太子の国は『女王様』の国に対し、悪い感情をもつでしょう。『女王様』の国としても、そんな事態は遠慮したい。……最終的には、王太子は他国の王子と同じように、『女王様』の傍にいた姫君の一人を伴って帰国されることになりました」
ふむふむ。
「それが、バルディアに第一王女が嫁ぐことになった事の顛末です」
ごっくんこ。
パンの塊を飲み込んで、あたしはポテトさんをジッと見た。

「……身代わりに、お嫁にいったの？」
「さて？　そのあたりの解釈は、人によって違いますからねぇ……両国の安寧のために自ら志願したとか、つれなくされた王太子を慰めているうちに恋が芽生えたのだとか、弱っている王子に言い寄ったのだとか、高官の誰かに言われて誘惑しに行ったのだとか、まぁ様々です。ただ、その結果として助かったのは事実ですし、ご主人様などは、未だに自分に責任があるとか言ってますけど」
ご主人様というのは、もちろん我らが女王アウグスタのことだ。
けど、『責任』って、なんでだろう？
王太子に惚れられちゃったこと？
ウツクシサは罪、とかいうやつだろうか？
「あぁ、違いますよ。レンさんのことですよ」
勝手にあたしの頭の中を読み取って、ポテトさんはチョイチョイとベッドの方を指さした。
そこに転がっている巨大な布団のグルグル巻きに、あたしは首を傾げる。
「おじ様のこと？」
巨大芋虫のような物体には、あたしの大事な大事なレメクが封入されていた。ピクリとも動かないところを見ると、どうやらまだ気絶、もとい昏倒しているらしい。
あたしを心配して養生を渋った押し問答の結果、ポテトさんに無理やり眠らされてしまったのである。
……にしても、ハグ二秒で気絶って、どんな魔法なんだろうか。
「ん～……もともと、レンさんにあの姫とつきあうよう命令したのは、ご主人様なんですよねぇ」
……なんと！？
慌てて振り返ったあたしに、ポテトさんは何故か頭を掻きながら視線を逸らす。
「なんと言いますか……レンさんはね、昔っから妙に冷めてるというか、生きてるのに生きてないというか……目を離した隙に、いつ

のまにかどこかで永遠に眠ってそうな人でして……」

……なんかひどいこと言ってる。

「でも、すごいしっかりしてると思うんだけど……生活とか」

「『決められたルールを守って生活している』だけだからですよ。起きて、食べて、仕事して……そういう、誰かから『ちゃんと実行するように』と命令されたことをこなしているだけの生活です」

言われて、妙に規則正しかったレメクの生活を思い出した。

起きる時間とかご飯の時間とか、そういえばいやに定刻だった気がいたします。

……い、いや、あたしがだい～ぶ、ぶち壊しにしちゃってたけど。

「まぁ、ベラやご主人様がそうやってでも、あの子を生かしたいと思ったのは当然ですけどね。……けれど、そんな生活がどれほど『しっかりして』いても、心がこちら側に無い状態では、生きているとは言えません。なんというか……ある意味、神や精霊の領域なんですよね、ああいう『在り方』は」

「あたしから見たら、お義父さまのほうがそれっぽいんだけど……？」

あたしの言葉に、お義父さまは小さな苦笑を零した。

「『私』に面と向かってそう言えるのは、あなた達ぐらいですよ、本当に……。けれど、残念ながら、今の私はそう呼ばれるような生き方はしていません。……お嬢さん、この大陸で信仰されている『教え』、宗教と呼ばれるものは、なんだと思います？」

「えぇと」

あたしはちっこい脳みそをしゃかしゃか振って、レメクから教わった言葉を取り出した。

「たしか、『多神教』って」

「ええ。『神は万物に宿りて我々のすぐ傍らに在り』……世界のありとあらゆる場所に宿る力、神秘、人の手には負えぬもの、その理解を超えたもの、それらを指して人は『神』と呼びました。ずっと昔から……」

けれど、と呟いて、その目元にわずかな憂いを浮かべる。
「時に、人は神々にまでも優越をつけたがります。かつてこの大陸には、人の創りだした『神』のみが正しいという教えが広まったことがありました。三番目の統一帝国が生まれるより前の話ですが」
「人の創り出した神？」
あたしはきょとんとする。
神様って、人の手で作れるんだっけ？
「簡単ですよ？　人の世の仕組みにあてはめればいいんです。唯一人の王を頂点として、他は皆平等。そんな感じです。崇めるべきなのは唯一神。それ以外に神はいない。いるとすれば、それは邪神。そうやって、他の教えを否定し、弾劾し、滅ぼし去って大陸中に広まっていった教えがありました。……まぁ、後に完全に否定されてしまったわけですが」
「ふぅん？」
「あ。反応薄いですね。いちおう、その時のいざこざで、三回目の大陸統一戦争が勃発したんですけど」
「そうなの？」
よくわからないが、なんかけっこう大事（おおごと）のようだ。
それにしても、大陸統一戦争――って、どんだけ昔の話なんだろーか？
どっかの劇団が、昔、劇にしてたような気はするのだが、内容は難しくて覚えていない。
第一、戦争があったのは、ナスティアが誕生するよりもずっとずっと昔である。
大陸中の言葉が同じなのは、三回も統一されたことがあるせいだ、とかは、世界中を巡る船乗りのにーちゃん達から聞いたことあるがりする。
――
正直、戦争の発端とかまでは知らないし、今まで興味も無かったりする。
大昔の話を知ってても、腹は膨れたりしないのである。

なんか、うちの母さんは言い伝えとか大好きで、時々寝物語にどこそこの国がどーとか、いろいろ話してくれたが、なにせ当時のあたしは五歳未満である。内容などほとんど覚えていなかった。

「まぁ、もうずいぶん昔の話ですから、あんまり伝わってないんですけどね。もともとは、虐げられた他宗教の人々、とりわけ魔法使いと呼ばれる人々が手をとりあって、自分達を殺しに来る人々の力に抗ったのが最初です。それが国を巻き込む争いに発展し、それを助けた魔女と、その魔女を慕う人々とで大陸のほとんどがまとまり、結果として大陸中が一つの大きな国となりました。それが第三番目の帝国ベルナディです」

……ん？

あたしは首を傾げた。

「なんか……その名前、どっかで聞いたような……？」

どこで聞いたんだっけかな？

「レンさんから教わったのでは？」

「……そうだったかな？　それより、昔、そういうシューキョーがあって、今無いってことは、そっちの教えのほうが滅ぼされたってこと？」

「厳密に言うと、無くなったわけではありません。信じる者がいる限り、教えとは伝えられていくものですからね。今も大陸の一部では信仰されていますよ。多神教というのはね、本当に沢山の神がいるんです。面白いことに、他の宗教の神もまた、崇められるべき神なのですよ。たとえ人が己の都合によって創り出したものであっても」

「ふぅん……」

曖昧に頷いて、あたしは（あれだろうか？）と似たような状況を思い出した。

昔、宿のおねーちゃん達が、別の地区の宿のおねーちゃん達とシマの問題で争った後、『ふん。あんたらも同じ立場なんだ。昨日までは敵だが、今日からは仲間だよ』と言って戦いを収めちゃったコ

トがあったのだ。
どうやら、神様をあがめてる人達の世界も、宿のおねーちゃん達と同じようである。
「……イエ。その納得の仕方はどーかと思うんですが……」
なぜかポテトさんが遠い眼差しでぽそぽそ言う。
「でも、敵も自分と同じ立場だって認めたり、最後までバシッとやっつけちゃおうとしなかった、っていうのは同じよ？」
「そう考えると、違うとは言えませんね……。宿のおねーさん達もなかなか侮れないものです」
なにやら感心したように言うポテトさん。
あたしは我が事のようにエヘンと胸を張ってみせた。
なにせ、彼女はあたし達孤児の『お母さん』や『お姉ちゃん』のような人なのである。
しかし――
「でもね、あたし不思議なの。向こうから仕掛けてきて、戦いが起こって、それに勝ったのに、どうして相手をコテンパンにしちゃわなかったんだろう、って」
あたしの疑問に、ポテトさんは軽く微笑んだ。
「それをしてしまうと、過ちを犯した者――戦いを仕掛けてきた相手と、同じことになるでしょう？　誰かを虐げるために戦ったわけでも、仕返しがしたくて戦ったわけでも無いのなら、最後まで拳をふるい続ける必要は無いんです」
「……ふぅん？」
よくわからなくて、あたしは首を傾げる。
ポテトさんはそんなあたしを見下ろして、苦笑を深めながら言った。
「統一戦争の時も同じですよ。人は、争うために生まれ、生きているわけではありませんからね。だから、誰かの思いや、祈りまでも踏みにじるような真似はしなかったんです。例え、自分達がそれをされてきたのであったも、ね。……だからこそ、大陸が一つにまと

まったんです」
「一つに……」
「ええ」
ポテトさんは微笑う。
「魔女も、魔女の元にあった者も、国を一つにまとめようとか、大陸を制覇しようとか、そんなことは思っていなかったんですよ。けれど、世界はそれを望んだ。望まれたが故に、それは成った。ゆえに帝国は生まれた」
「む？」
よく分からない。
「其れは望む者には決して与えらないものであり、無欲な者だけが頭上に頂くことのできる宝冠なんですよ。いつの時代でも、人を征服しようなどと思う人のもとには、至高の冠は与えられないんです。簡単に言えば、大陸を統一しようなんて思う人には、決して大陸を統一することなんてできないということです。欲望でもって纏められるようなものでは無いんですよ。世界というものはね」
どこか誇らしげに言うポテトさんに、あたしはただ首を傾げる。
ジーッと見つめていると、何故かコホンと嘘くさい咳をされた。
「まぁ、それはともかく。話を戻しますが、神というものは、本来どこにでも存在するものなんです。そこの暖炉にも神はいますし、あなたの右手につかまれたパンにだって神はいます」
「のぉ！？」
この、白くてもちもちのパンに神様が！？
「とはいえ、そこにいる神が何か有り難い訓辞をくれたり、語りかけてくれたりするわけではありませんよね？　何らかの意志をもって行動をするわけでもありません。けれど、確かにそこに在る。この世界を形成する万物こそが神であるのならば、それが自然なのです。わかりますか？　個としての意志のない存在、個人としての意志の無い強大な力。決して唯人の手に負えない者」
つまり――？

「それが、神。そういう意味では、昔のレンさんはどちらかというとそういう存在なんですよね。下手したらあっちの世界にいっちゃってたんじゃないですかねぇ？　時々、本当に人間から神の位にまで達する人っていますしね」

あわわわわ。

あたしは慌てた。正直、言われた言葉の意味は半分も理解していないし、半分以上は垂れ流しだったのだが、レメクがあっちの世界にいっちゃってたかも、というのだけは聞き逃せない。

「じゃ、じゃあ、早くおじ様こっち側にたたき落とさなきゃ……！」

「……たたき落とすんですか」

そうと気付けば一撃必殺！

あたしは椅子から飛び降り、呆れ顔のポテトさんに見守ってもらいながら、芋虫レメクへと向かって突撃した。

ベッドに飛び上がって、デンと伸びているソレのど真ん中にジャンピングあたーっく！

とーぅ！

「過去の話であって、今はもう大丈夫ですよ？」

どぉんっ！

「……！　……！！」

……なにか、

あたしの体の下で、

くぐもった悲鳴があがったよーな……

「……今、どこに体当たりしましたか？　お嬢さん」

何故か青い顔でお義父さまが中腰。

「わかんない。お布団分厚いから。……体の真ん中っぽいトコ」

ポテトさんが内股になりました。

「ぶ、無事だと、いいんですが……というか、お嬢さん、あなたも反転付加属性なんですから、レンさんみたいな相手に突撃するのはやめたほうがいいですよ。下手すると周りが大惨事です」

「ハンテンフカって？」

何故か小刻みに震えている巨大芋虫巻きをナゼナデしながら、あたしはポテトさんへと視線を向ける。
彼のお話は知らない言葉がいっぱいだ。
ポテトさんは非常に気遣わしげな目をレメクにチラチラ向けつつ、ぷち悪魔でも見るような目であたしを見て言った。
「人がもつ属性の一つですよ。例えば、魔術で言うとどの魔術と相性がいいか、という形であらわれます。血統魔術はクラヴィス族が紋章術で、メリディス族が音声魔術ですが、個人でその能力に差があります。例えば、火の扱いが上手いとか、水を操るのが上手いとか、そういう形ですね」
初耳だ。メリディス族って、オンセイマジュツとかいうやつなのか。
にしても、オンセイってナンダロウ？
「声ですよ。音と、声で、音声」
……叫ぶんだろうかナ？
「その辺りのことは、またレンさんにお聞きなさい。彼には三十余ある民族の、全ての属性について教えてありますから。――で、魔術がそうであるように、肉体にも属性があります。ただし、こちらは一族の縛りは無いようですね。全く別の国の者であっても、持ち合わせている属性ですから」
……えーと？
「誰でも持ってる体の特徴、と覚えるのがいいでしょう」
なるほど。
「例えばたいていの人は『耐性』属性です。これは、一度受けた力に対して耐性がついて、次に受ける時にはダメージが軽くなるんですね。徐々に打たれ強くなっていく体、と覚えるといいでしょう」
ふむふむ？
「稀に現れるのが『物理無効』属性です。これは、名の通り物理攻撃が無効となります」
「……ブツリ攻撃って？」

「ああ、失礼。拳などの打撃や、剣などの斬撃などの攻撃です。肉体に与えられる痛みの類と考えてください。それらが無効になるわけですから、火や水や毒でないと相手を倒せないということですね。北の大雪原に住む屈強な一族には、時折この属性の持ち主が出ます」

あたしは遠くに視線を馳せながら首を傾げた。

……それって、無敵なんじゃなかろーか？

どんなに叩いても蹴っても駄目なうえ、武器が効かないだなんて、いったいどんな人外魔境なのだろうか？

「でも、火や水は効きますから、完全に無敵というわけでは無いんですよ。言ってしまえば、外側が異様に硬いだけ、という特徴です」

相変わらず勝手に心を読み取って、ポテトさんがニコニコとあたしの無敵説を砕いてくれた。

「さらに稀に出るのが『反射』属性です。これはある意味、攻め手には嫌な属性でしてね。持っている人にとっては、自分に与えられるダメージが、そのまま相手へと返るという――言ってしまえば自動的なカウンター攻撃です。魔術の方でも反射属性というのがあるので、それと区別するために『物理反射』属性と呼ばれるますね。

――ただし、反射できる力には限界があるようで、かつて竜殺しの名で呼ばれたゲテルハイドが最後の戦いで古代竜に殺されてしまったのは、自身の『反転』属性への過信だと言われています。……ええぇと、ゲテルハイドの竜殺しの話は知っていますか？」

頭を抱えていたあたしは、知っている話題にパッと顔を輝かせた。

「お伽話で聞いたわ！」

宿のおねーちゃんが、『お客サン』のいない時にそういう話をしてくれたのだ。

「邪悪な刃は我に届かず！　その刃は汝そのものを傷つけるであろう！　とか言ってた英雄ね！？」

「そうです。そして、それが『反射』属性の特徴です。で、跳ね返せる力には限界があるので、限界以上の力がくると、限界を超えてる分だけは自分にあたります。この特徴は、本人がどれだけ自分の

能力に溺れずにいられるかが重要になるんですよね。ゲテルハイドは駄目だったわけですが」

英雄さんも、ポテトさんからすればダメダメな人らしい。

……あたし、ちょっぴり憧れてたんだけどな。

「『反射』と同様、稀に現れる属性が『反転』属性。これは、立場がひっくりかえる、という意味で名がつけられました。受けた攻撃を反射するだけでなく、自分が攻撃する時でも、相手の力そのものを自分の力として使用することができます。簡単に言えば、相手の力をそっくりそのまま自分の力にしてしまえるわけです。拳闘士と戦えば、拳闘士の力が手に入ります。戦ってる間だけは、ね。ただし、技術までもらえるわけではなく、ただ拳の強さなどがもらえるだけですけど。かわりに最大の力が常時使える状態なので、ある意味無敵に近いです。防御もたいていのものは反射してしまいますしね」

よく分からないが、なんか最強っぽい。

説明が長いのは、きっとそのせいだろう、うん。

「……理解してないのですね？」

ぎくっ。

「まぁ、簡単に言えば『モノマネ』ですよ。技術とは経験に基づくものですから、真似することはできません。ですか、力という単純なものは真似できます。例えば、あなたの友人であるバルバロッサ卿。彼は人間にしてはかなりの強者です。で、そんな彼と、『反転』属性持ちの普通の女性が腕相撲した時、どちらが勝つと思いますか？」

「バルバロッサ卿」

「と、思いますよね？　けれど、『反転』属性がある限り、彼女はバルバロッサ卿のもつ最大時の力を使うことができる。――つまり、引き分けです」

なんと！？

「とはいえ、やっぱり『反転』できる力にも上限はありますからね。

これらの上限は、肉体の鍛錬度でそれぞれ異なります。それを考えると、鍛えていない者が属性で得た強い力を振るおうとすると、未だかつて無い力に振り回されて意識を失ってしまう、という現象も納得できますね」

……うふふん。よく分からないのです。

たぶん、自分で身につけてない力は、どれだけ与えられてもちゃんと扱えないってことだろう、たぶん。

「それになにより、あなた達が持っている属性はもっと凶悪です。『反転付加』。名のとおり、相手の力を自分の力に上乗せして使用します。さくっと言えば、あなたとレンさんが戦った場合、あなたの拳には、自分自身の力に加えて、レンさんの力までもがプラスされてしまうわけです」

「……」

あたしはチラとぴくぴくしている芋虫巻きを見て、ちょっぴり額に冷や汗を浮かべた。

と、いうことは……？

「今の、あたしの、攻撃って……？」

おじ様の力も、プラスされちゃってた、と？

「あぁ、大丈夫です。同じ属性同士の場合、互いの体に及ぼす効果は消えますから」

「そ、そうなんだ？」

「ええ。ただ、攻撃がズレて地面とか叩いちゃうと、地面が陥没したりしますよ」

その一言に、あたしは大きく目を瞠った。

閃いたのは、一月半前の出来事だ。

「あーッ！　てことは、あの破れフライパン！」

「……破れフライパン？」

きょとんとしたポテトさんに、あたしはかつて孤児院騒動の時に手にしていた武器と、陥没した地面の話をした。

ポテトさんはあきれ顔だ。

「……それは、まぁ、普通に、そのキンニクダルマの最大の力があなたの力に加わって、引き起こされた現象でしょうね。……というか、下手したら大惨事ですよ？」
「……ぅ」
確かに、あの力がそのままあの大男に向かっていたらと思うと……か、考えると怖い状況なのであります。
……攻撃があたらなくて、よかったかもしれない。
「とりあえず、私やレンさんと戦ってる時に、私達の体以外を叩くのはやめましょうね。……対象が木っ端微塵、ではすみませんから」
「……あい」
しゅん、と俯き、あたしは自分の小さな手を見下ろした。
いつだってあたしの戦いに貢献してきた、ちっこい拳を。
「あのね、ポテトさん」
「なんです？」
「あたしね、昔から不思議だったの。孤児院での生活って、自分達を守るために、いろんな人と全力で戦わないといけなかったのね。その中で、あたし、強い相手にだって最後には勝ててたの。そりゃ、こっちもボロボロになったけど……。仲間内でいたときは、特別力が強いわけでもなかったし、なにか習ってたわけでもないのに。なんでだろうな、って……ずっと思ってたの」
「……」
「全部、そのハンテンムカとかいうやつのおかげだったのね？　だから、ちっちゃいあたしでも勝てたのね？」
「『反転付加』です。……が、まぁ、想像する限りそうでしょうね。けれど、お嬢さん。一つだけ言わせていただければ、そんな属性があったから、戦いに勝てたわけでは無いと思いますよ」
口の端に笑みを浮かべて、ポテトさんは穏やかに目を細めた。その顔は、びっくりするぐらい印象がレメクに似ている。
「決して諦めない、あなただからこその勝利ですよ」
その笑みに、あたしもニコッと微笑みを返した。

「女は度胸と根性よ！」
「やー……本当に、うちのご主人様とそっくりですよあなたは……レンさんの好みも、やっぱりこっちなんですねぇ。どこまで私に似てくれちゃってるんでしょうか、あの子は」
なんとも言えない笑みのポテトさんに、あたしはハタと気付いてベッドから飛び降りる。
全力でソファに突撃すると、ポテトさんが大慌てで身構えた。
「お義父さま！」
「なんです！？」
足がちょっぴり内股気味。
「バルディアの王太子妃と、おじ様の話ッ」
「あ。あぁ、そういえば、そんな話からでしたね、最初は。まぁ、纏(まと)めると、レンさんのほうにはぶっちゃけ恋愛感情無いんですよ、綺麗さっぱりこれっぽっちも」
「……！？」
「誰に対しても執着しないし、なんだか生きてるっていう感じもしないし、誰か一人だけでもレンさんとずっと一緒にいてくれる人いないかな、と思って、いろいろぶつけたりしてたんですけど……」
「『ぶつける』？」
「えー、いえー、まぁ、そのイロイロと。それはともかく、そんな中でとあるお嬢さんがレンさんにご執心。昔から知っているお嬢さんだし、これはと思って一の姫に迎えてレンさんの攻略に向かってもらったのですが……あえなく玉砕いたしました。それだ元第一王女です」
あまりと言えばあまりな真実に、あたしはあんぐりと口を開けて固まった。
あの、顔もかなり綺麗で胸もバボーンッのお姫様でも駄目だったのか……
「でも、一の姫はずーっとレンさんのこと好きでしてねぇ。……最後の方は、なんだか歪んじゃってましたけど。けど、レンさんは誰

にも執着どころか興味も無さそうで……命令だから一緒にいます、っていう感じでね。あればっかりは本当に……ちょっと、どうかと思いましたよ。いや、私も決して人のコト言えないんですが……というか、だからこそだいたいのところは分かっちゃったりするんですが……」

言って、ポテトさんは深々とため息。

……なんか、聞けば聞くほど、あの王太子妃が不憫になってきた。

「どうしたところで無理だからと、一の姫には諦めてもらったんです。その頃には、ご主人様の『娘』も沢山増えてましたしね。それぞれに見合わせましたけど、誰にも興味無さそうでした。一番よく話してたのは、たしかナザゼル姫で……けっこう仲が良かったんですけどね。あの方はもともと最初から他に婚約者いましたから、レンさんの婚約者候補から除外してたんです」

「……？　おじ様の、婚約者候補？」

「ああ」

首を傾げたあたしに、何かに気付いたらしくポテトさんが大きく瞬きをする。

「そういえば、話してませんでしたね。もともとご主人様が養女を迎えようとしたのは、レンさんの婚約者を作るためだったんですよ。最終的には違う所にお嫁に行っちゃう形になりましたけどね。第三王女までは、完全に候補者でした。第四のナザゼル姫と、第五のナフタル姫は亡命をきっかけに迎え入れた王女で、それ以降の姫は政略のための同盟者ですね。あわよくばレンさんの心も射止めてくれることを祈ってたのですが……まぁ、そっちは無理だったようですが」

……えーと……

「……アウグスタって、そんなに、おじ様を手元に置きたかったんだ？」

そのために、わざわざ養女まで迎えるほどに？

「そりゃあねぇ……。普通に考えても、ちょっと手放せないでしょ

う。持ってる力も強すぎますし。ご主人様にとっては、大事な大事な大事な子供ですし。前にも言いましたけど、あなたを王女に迎えたのも、そういう理由なんです」

「？　あたしも？」

なんかあったっけ……って、ああ！

「そっか。あたし、掟でおじ様のこと縛っちゃってるもんね」

おおいに納得したあたしに、なぜかポテトさんは半苦笑。

「まぁ、そういう掟のこともありますしね。一番の問題があなたで解決したから、ご主人様達もすごく安心してるんですよ」

なるほど。メリディス族の掟がある限り、レメクはあたしのお婿さん。アウグスタからすれば、やっと成功した、というところなのだろう。

そう考えると、宰相閣下や女官長や料理長があたしに優しかった理由も理解できた。

フンフンと頷いているあたしに、ポテトさんは目元を和らげる。

「それだけでは無いんですけど……まぁ、そのあたりは追々、でしょうね」

「？」

ポテトさんの言葉は、相変わらず意味不明だ。

「感謝していますよ、お嬢さん」

「んぉ？」

「あなたのおかげで、今、レンさんは人としての在り方で生きています。今のあの子を見て、生きてないようだと評する人はいないでしょう。それは紛れもなく、あなたが起こした奇跡ですよ」

奇跡とまで言われてしまった。

あたしはそろそろとベッドに転がる芋虫巻きを見る。

「……あたし、少しは、役にたってる？」

「ええ。この上なく」

「おじ様の邪魔になってない？」

「レンさんは、決して邪魔だとは思わないはずですよ。自信をもっ

て断言できます」
　そのヒトの神々しい笑顔に、あたしはくしゃりと笑みを浮かべた。
「……よかった。あたし、おじ様にいっぱいいろんなものもらってるのに、何一つ、役にたててないから」
　大きな綺麗な手が伸びてきて、あたしの頭を優しく撫でる。
　それは少しだけレメクに似ていて、なんだかちょっと泣きたい気持ちになった。
「ねぇ、お嬢さん。何かをしなくては役にたったことにならないなどと、誰が決めたんですか？　レンさんはね、あなたに沢山のものをもらっていますよ。あなた達は、互いにそこに在るだけで、沢山のものをお互いに与えあっているんです。……自信を持ちなさい。あなたは、誰よりもレンさんに必要な人ですよ」
　ポテトさんの声に、あたしは目元をグイとぬぐった。
　けれど思う。
　本当に、そうだろうか？　と。
　そういう人に、なれているだろうか？　と。
　アウグスタのように堂々と、ポテトさんのようにしっかりと、レメクの心の中に在る人になれているだろうか？　と。
　あたしは俯きかけ、グッと唇を噛んで顔を上げた。
　俯いていてはいけない。
　顔を上げて、前を向いて、しっかりと立たないといけない。
（……レメク）
　ポテトさんやフェリ姫から教わった。
　その人に誇れる自分であるためにも、そして何よりも大切なその人のために、ビシッと格好良く生きなきゃいけないのである。
（そうしたら、いつの日か、アウグスタやポテトさんみたいに、レメクの大事な人の中に入れてもらえるかな？）
　グッと握り拳を握ったあたしに、ポテトさんが穏やかに笑う。
　その視線の向こうで、コロリと、芋虫巻きが一回転していた。

2　動き出す者達

あたしにあてがわえた部屋は、大小あわせて十室ある。
廊下側から順に、待機室、応接室、鏡の間（大）、青の間、鏡の間（小）、談話室、執務室、寝室、浴室、化粧室兼衣装室。
これらを全部まとめて『青の間』と呼ぶ。
本来は四番目の大きな部屋を指す言葉なのだが、十室全部『高貴なる青』で統一された部屋なので、全部まるごとを指してそう呼ぶのだそうだ。
正直どうでもいい話ではあるが、城の内部構造はきちんと把握しないといけないため、あたしの乏しい脳みその中にも、いろんな部屋の名前が詰め込まれていた。
詰め込み人であるフェリ姫は、あれでなかなかの教育者である。
その教え方ときたら、レメクと違って途轍（とてつ）もなく……い、いや、よそう。なんか変な汗が出てきた。
それはともかく。
部屋の一つ、執務室にフェリ姫がやって来たのは、予定よりも早い朝十時のことだった。
あたしは丁度クッキーを頬張っていたところ。
さくさくのクッキーはうまうまなのだが、一人で食べるのは妙に味気なかったり。
誰か来ないかな、と思っていた矢先だったので、フェリ姫登場にはちょっぴり心がトキメキました。お義姉さまなんてイイタイミング！
ちなみになんで一人執務室で食べているかというと、あたしが居るとレメクがちっとも安静にしないせいである。
レメクときたら、安静にしていないといけないというのに、起きている間中ずっと王宮での心得を諭してくれちゃうのです。
ええ。ぐるぐる巻きのアノ姿のままで。

……レメクいい人。愛ち（・）てる。

とはいえ、そんなことばっかりしていてはレメクが全然休めない。

ということで、泣く泣く離ればなれとなったわけであります。

そんなあたしがいるこの執務室は、本来はお仕事のための部屋なのだそうだ。

執務机だとかいう重厚な黒い大机の前には、大机の倍以上あるおっきなテーブルがドンと座っている。

聞くところによると、前にこの部屋を使っていた王子様や王女様は、ここで重臣（ヴェルナーのおじいちゃまみたいな人達ね！）達と様々な会議を開いていたらしい。

王子様達が重臣達と会議するなんて、王様はどーしたのだろうかその場合、とか思っちゃうが、まぁ、前の王様も政治に全然興味が無かったというし、きっとそういう困ったオトーサンをもった王子様達だったんだろう。

王様の子供というのも、イロイロ大変そうである。

まぁ、そんなテーブルも、今はあたしのお菓子置き場と化しているが。

しかし、あたしも今では『王様の子供』。

そして、メイド部隊を引き連れてやって来た、お義姉さまことフェリシエーヌ姫も『王様の子供』である。

……あんまり他人事と思わない方がいいかもしれない。

今日も清楚で可愛らしい美少女姫様は、取り次ぎの侍女さんを間に挟まず、ちゃっちゃと部屋に入って来た後、クッキーを頬張っていたあたしを認めてニッコリと微笑んだ。

「さぁ、今から教皇猊下の元へ参りますわよ！」

部屋に入って開口一番。

フェリ姫の第一声がソレである。

「ふ……！　ふんぐぅ！？　ぐぅぅッ！」

「まぁ！？　ベル！　あなた何を喉に詰まらせて……！」

「ふごぶぉ！？」

喉に詰まったクッキーの塊に、あたしはビッタンビッタン机を叩いて助けを求めた。
慌ててお義姉さま達がすっ飛んで来たのだが、ドンドンと容赦なく背を叩かれ、口の中には水を突っ込まれ、助けられてるのか追いつめられているのかサッパリな状況に。
……コロしゅ気ですか？
（おじ様助けてーッ！）
あたしは全力で最愛のおじ様に救援発信。
モチロン、未だに隣室でグルグル巻きにされてる彼の人が、助けに来てくれるはずはないのだが――

「ベル！　いきなり何事ですか！？」

来ましたよ。
縄と布団の残り物を体にくっつけて、微妙に寝乱れちゃってるレメクが登場――
――かと思いきや、瞬時に黒い何かに捕縛され、あっという間にドアの向こうへと消えてしまった。
きぃ～パッタン。
「「……」」
……ごっくんこ。
「ぐふ！　と、とれた。てゆか飲み込げふっ！」
「あら？」
やっとこクッキーを飲み干したあたしの背に、容赦なくキマるメイドさんの一撃。
あたしの体が吹っ飛んだ。
「ひ……ひどいのです……」
綺麗に床に飛ばされたあたしをメイドさん達が慌てて起こす。涙目で見上げれば、そこにはキラキラしいお姿の美女達が。
「申し訳ございません、妹姫様。お体は大丈夫でしたでしょうか？」

……相変わらず、あたしの名前はイモウトヒメサマであるらしい。
どうでもいいが、綺麗な顔してけっこう力強いぞ、このオネーサマ達。
「と、ところで、ベル。さっきチラッと見えた、半分お布団に包まれてた方……ドナタダッタノカシラ……？」
寝室への扉を凝視したまま、あたしの顔をぐいぐいハンカチで拭こうとしているフェリ姫が、顔をひきつらせながらそう問うてきた。
ちなみにハンカチは、あたしの頬とか喉とかをぐいぐい拭ってくれてます。
……おねーさま。とりあえずこっち見ろ。
「おじごふ、様、にゃげふ、のです」
ちょっと喉えぐられた。
どうやらレメクの『半分蓑虫』姿は、お義姉さまに少なからぬ衝撃を与えたようだ。
メイドさん達が寄って来て、引きつった顔のまま寝室を見ているフェリ姫から、あたしを救出してくれる。
ゴシゴシと顔を拭かれて、あたしはようやく一息ついた。
「で、ですけれど、ベル？　あの黒い物体は……」
「アレはポテトさんのオヤゴコロなのです」
「あのウネウネしていた縄みたいなのが！？」
モチロンですとも。
「それよりも、お義姉さま」
「ぇえ！？　あぁ、な、なんです？」
何か非常に動揺している姉姫様に、あたしは部屋を見渡して首を傾げた。
「この部屋に、何か言うことはないのですか？」
もちろん、部屋には所狭しとチューリップが飾られている。
もはや飾っているというより並べているという有様だったが、フェリ姫は何度かの瞬きの後、軽く首を傾げてからこう言った。
「青の間が美しいということは、この前じっくりと堪能させていた

だきましてよ？」
……異様な数のチューリップは、どうでもいいことらしい……
唖然としたあたしの心を読み取って、フェリ姫は「あぁ」と笑った。
「お花のことでしたのね。ベルは初めてだから驚いたのでしょうけれど、バルディアの方はお花を贈るのが大好きなのですわ」
大好きって……
「祝いの時、慰めの時、お詫びの時。時節や挨拶、お手紙のついで……それはもう、いろんな理由で花を贈るのだそうですわ。とても有名なことなのでしてよ？」
といっても、限度ってもんがあると思うのだが。
「まぁ……これほど凄まじい量なのは、王族ならではでしょうけれど」
「……おじ様もびっくりしてたのですよ」
なにせ十室ある部屋全部が花で埋まっている。寝室にまで持ってこざるを得なかった花々は、正直アリガタイというより迷惑だ。
おじ様、で先程の光景を思い出したのか、フェリ姫が頭を抱えて唸る。
しかし、ほどなく復活してシャキンと背を伸ばした。
「普通、殿方に大量の花を贈る殿方、というのはいらっしゃいませんもの。そのせいですわ」
けっこう立ち直りの早い人である。
しかし、男の人に花を贈る男の人。……別のものを贈りまくってる人なら約一名、心当たりがあるのだが。
なんとなく遠い目になったあたしに、フェリ姫は「あぁ、でも」と何を思いだしたのかくすくす笑いだす。
「わたくし、昔に聞いたことがありますわ。クラウドール卿がわたくし達よりも少し年長……そうですわね、十五、六ぐらいの頃でしたかしら？　バルディアのどなたかに毎日毎日花束を送られたことがあったのだと」

……なんと!?
「で、クラウドール卿は、その花束を毎日毎日陛下に届けていたのですって。持ってても仕方がないからと仰って」
……な、なんと……
「確かそのお方も、バルディアの王太子様でいらっしゃったと思いましてよ?」
あたしの顎が落っこちた。
「まぁ、ベル。なんてお顔をなさいますの」
「だ……え、えー!?」
「ふふふ。面白いお話でしょう? あの方、お気に入りの人には花を贈らずにはいられないお方のようでしてよ。わたくしも会うたびにお花を頂戴いたしますの。何かあるたびに花を贈るのはバルディアの風習ですもの」
……でも毎日ってどうなんだろ……
ある意味ケニード以上に危険なお人のような気が。
(……ん? でも、そうなると、ポテトさんが嫌そうな顔してたのって……)
異様に冷ややかな目のポテトさんを思い出して、あたしは(もしかして)と名推理を働かせた。
ポテトさんと言えば、レメクのことが大好きなお義父さんである。その大好きっぷりたるや、『丸かじりにしたいほど』だと自ら言うほどである。そんな『おとーさん』が、大事な息子に寄ってくる危険っぽい人をどう思うか。
おまけにアウグスタに結婚を申し込んでいたこともあるようだし、それはもう、ポテトさんから見たらすっごいイヤな人に違いない。
あたしから見たら、爽やかそうな美青年だったんだけどなぁ……
「ねぇ、ベル」
「ほぇ?」
なかなかに難しい人間模様にウンウン唸っていると、フェリ姫がなにやら微苦笑を浮かべて声をかけてきた。

「このお花、ありすぎて邪魔なのでしたら、女官長にお願いしておきましょう。これだけ見事なお花なのですもの。飾る場所は沢山ありましてよ？」

「頂き物なのに、良いのでありますか？」

かしこまって問うと、フェリ姫は「ええ」と首肯。

「王太子殿下には『素晴らしいお花でしたので、みなにも見ていただきたくて飾らせていただきましたの』とでも伝えればよろしいのよ。お手紙を書いておくといいですわ。実際、沢山の花を頂いたときは、侍女に下げ渡すか何かしないと、どうにもなりませんもの」

フェリ姫ぐらい綺麗なお姫様なら、そういう体験もあるのだろう。なるほどと頷いて、あたしはシャキンと背を伸ばした。

一つの問題が解決したのなら、もう一つの問題にとりかかるのです。

「ところで、お義姉さま。教皇様の所に行くって、本当なのですか？」

「えぇ」

頷いて、フェリ姫は軽く苦笑する。

メイドさんの一人が髪飾りをあたしの髪にあて、首を傾げてからまた別の髪飾りをあてていた。

「本当ならもっと早くお目通りするはずだったのに、結局、いろいろあって一度もお会いできていませんでしょう？　最初の時はあなたが目覚められたすぐ後で、体調も思わしくない時でしたし……」

……あー。確か、三日ぐらい昏倒してた後のアレですね。

「その次は――つい昨日のことですけれど、クラウドール卿ともども、ナイトロード様に眠らされてしまったでしょう？　あの時も、猊下はわざわざ足を運んでくださっていたのですが、会うこともできないままに教会にお戻りになりました」

「えぇ！？」

お、お、お義父さまっ！？

なんか、お義父さまがあたし達を眠らせたことになってますよ！？

そして、教皇様は追い払われるかなんかしたらしい。
前のアウグスタのとあわせると二回目だ。
「まぁ、事情が事情でしたから、猊下も怒ってはいらっしゃらないと思うのですけれど……不愉快には思われたでしょうね」
口元に軽く手をあてて、フェリ姫は困り顔。
「そ、それってやっぱり、すごくマズくていけないことなんじゃ……？」
「ベル。言葉遣い」
……あい。
「猊下とナイトロード様は、あまり仲がよろしくないと聞いています。あの凄絶にお美しい方に面と向かって悪態をつけられるのは、今は猊下と陛下だけですわ」
……それって仲良いんじゃなかろーか？
「教皇様は、どういう人なのです？」
「猊下、とお呼びなさいませ。……猊下は厳格な御方ですわ。前々国王陛下の異母兄君という、お血筋もとても高貴な御方で、国の内外に強い影響力をもっておいでです。噂によると、お若い頃は血気盛んでいらっしゃったそうなのですが……わたくしは、『貫禄ある落ち着いた』猊下しか存じませんから、詳しいことはわかりませんの。……ただ、陛下曰く『頭の硬い頑固ジジイ』なのだそうですわ」
……ガンコジジイって……
なんかアウグスタの感想のせいで、せっかくできていた『厳格で貫禄のあるおじーちゃん』像が、偏屈おじーちゃん像に変わってしまったのです。
身内だからって、神様に一番近い（ポテトさん除く）人なのに、ちょっと遠慮が無さ過ぎるんじゃないだろーか？
……いや、そういえば、前々国王陛下のお兄さんってことは、アウグスタにとっては――
……えーと、なんだ。家族だ。
「……お祖父さまの兄、と覚えなさい」

「……あい」
「それと、もうクラウドール卿から習ったかもしれませんが、今の国政は三つの力から成り立っています。一つは『王』。つまり、陛下。もう一つは『貴族』。これは、筆頭貴族として宰相閣下が代表に立たれます。そして最後の一つが『教皇』。つまり猊下ですわ」
……習ったかもしれませんが、忘れてます。
「政や、何か大きな物事を動かす時、三つの権力のうち二つ以上が『可』を出さなくてはならない。すなわち、猊下はそのうちの一柱を担うほどの御方なのです」
……えーと？
小首を傾げて見上げると、フェリ姫はちょっとこめかみを指で揉みながら言った。
「つまり、尊くて高貴で偉い方なのです」
なるほどなるほど。とにかく偉い人なのですな。
「でも、国で一番偉いのは、アウグスタじゃないのですか？」
「もちろん、陛下が一番『偉い』方ですわ。けれど、お一人で何もかもやってしまえるわけではありませんの。考えてもごらんなさいませ。前王の時代、もし『王』が何もかも独断で出来るような形だったら、ナスティアはとうに滅んでいましたわよ」
……と言われても、前王の時代を知らないから、よくわからないのだが。
「まだそこまで授業が進んでいませんのね。仕方ありませんわ。神殿への道すがら、私がお教えいたしますわ。……とりあえず、訪問の用意をなさいませ。ここでお喋りをするのは楽しいことですけれど、万が一猊下をお待たせするようなことがあってはいけませんもの」
ふと気付けば、周りには帽子やらドレスやらをもったメイドさん達がわらわらと寄ってきていた。
……そーいや、会話の間中、髪飾りとかドレスとか体に合わせられてたな……

「ドレスはそのままのほうがよろしいわね。飾り襟をもう少し大人っぽいものに交換して、髪を結いましょう。それが終わったら、神殿に参りますわよ」

「「「「はい。姫様」」」」

見事にそろったメイドさんの声。

あたしはキョロキョロと周囲を見渡し……しょんぼりと俯いた。

こういう時、とっさにレメクの姿を探してしまうのは、あたしの心が弱いせいだろう。

テン、テン、と両足を踏ん張って、あたしは俯いていた顔を上げる。

足がちょっとプルプルしてきたのは、誰にも内緒なのです。

執務室を出て三部屋ほど通過すると、そこには先客が一人いた。

「シーゼル!?」

上品な応接室の中、大量のチューリップの前で所在なげにうろうろしていたのは、フェリ姫の婚約者である……

えー……トイレ待ち伏せ伯爵である。

『シーゼルですわ』

速攻でツッコミが。

「あぁ……フェリシエーヌ姫」

あたし達のほうを見たシーゼルは、どこかホッとした顔でフェリ姫を見つめ、チラッとだけあたしを見た。

……およ?

「あなた、なぜベルの部屋に来ていますの!? ここは陛下の許可がなくては入れない場所でしてよ!? おまけに、何です! 取り次ぎの侍女もなしに部屋の中にまで……!」

「ま、待って、姫! 僕……私はべつに無断で入ったわけじゃなくて……!」

「姫様。クレマンス伯爵は、陛下の許可を得てこちらにおいでにな

ったのです」
　怒りの気炎を身に纏いつつ、ズカズカと大股に伯爵に詰め寄っていくお義姉さまと、腰が引けている少年伯爵。
　あたしは思わず半笑いで見守ってしまった。
　……力関係がハッキリしてるなぁ……
「では！　陛下の許可を得てまで、ベルの部屋に入ってきているのはどういうことでして！？」
「そ、外だと……その……ちょっと障りがあるから……」
「障り！？　なんの障りがあると言うのです！？　だいたい……シュネー！　どうしてシーゼルをここに入れたりなんてしたの！　用件もわたくし達に伝えないで……！」
「姫！　あなたに会いに来たんです！　部屋に行ったら、こっちに行ったって言うから！」
「え」
　言われて、フェリ姫はビタッと動きを止めた。
　とばっちりで怒られていた美貌のメイドさんが、コクコクとお義姉さまに頷いてみせる。
　フェリ姫が大いに動揺した。
「わ、わたくしに、会いに、ですって？」
　ぎくしゃくと後ろ歩きでこっちに戻って来たかと思ったら、そっぽ向いて長い金髪を指でクルクル。
「あ、会いに来たのでしたら、そう仰ればよろしいのですわ！　だ、だいたい！　普通は使者を先にたてるものではありませんでして！？　他の方にはそうやって手間暇かけるくせに、わたくしの時だけ頓着しないだなんて……！」
「い、いや、急いでたから」
「急いで……会いに……おいでになったの！？　そ、それならそうと言ってくだされればわたくしだって……」
　フェリ姫。ごにょごにょ。
　頬がほんのり染まっているのが、なんとも乙女なのであります。

……相手はアレな人なのだが……

「そ……そうですわ。いつもいつもあなたがいけないんですわ。縄で縛っておかないとあっちこっちにフラフラして！　樽に詰めて浮かべてあげようかしらなんて本気で考えてしまうんですもの！」

……お義姉さまもアレな人なのだが……

「わざわざベルのお部屋にまで追いかけて来られるなんて、す、少しはトノガタとしての心構えが」

「そんなことより！　フェリシエーヌ姫、話を聞いてもらえませんか！？」

急ぐ理由でもあったのか、シーゼルが大慌てでフェリ姫の言葉を遮った。

薔薇色の気配だったお姫様が、黒い声で「……『そんなことより』……？」と呟く。

「大事な話があるんです。そんなに時間はとらせませんから。ただ……人払いをしていただきたいのです」

「……人払い……」

真っ黒な声のままのフェリ姫に、あたしはそろそろと後退しながら二人を見比べる。

シーゼルと目があって、あたしは数歩分をぴょんと飛び退いた。

「？　あぁ……すまないが、少しだけ席を外してくれないか」

シーゼルの声に、あたしはコクコクと頷いた。

すでにメイドさん達は壁際に待避済みで、あたしはそそくさとそちらへと逃げ……いや、赴いた。

しかし、

「……お待ちなさい。ベル」

……ギクッ！

そらおっそろしい声で呼び止められ、あたしはビクッと飛び上がる。

（……お……お義姉さま？）

振り返った眼差しの先で、ゆらり、とフェリ姫が動いた。

「あなたはこの部屋の主。退出にはおよびませんわ」
（ひぃ！）
「姫……！」
「シーゼル。用があるなら早くお話になれば？　わたくし達は、猊下の元へ行かなくてはいけませんの。時間がありませんのよ。……ええ。早くお話になればよろしいのよッ」
ものすっごく険悪な目のお義姉さま。
受けて、シーゼルはおろおろと視線を彷徨わせた。
「え。で、ですが」
「早く！」
「内密な話で」
「誰も他にべらべら喋ったりいたしませんわ！」
シーゼルは困った顔であたし達とフェリ姫とを交互に眺めていたが、あたし達が隅っこでプルプル震えているのを見ると、諦めたような息をついて言った。
「……『母上』が……動いたんです」
その一言に、不穏なオーラに包まれていた姫君が目を見開く。
シーゼルの『母上』っていうと……
「レンフォード公爵夫人が……？」
フェリ姫の声に、あたしはふんふん（そんな感じの名前でした）と頷いた。
「そう……あの人は……あなたならご存じでしょうけど、昔、前第二王妃の後見人になって、王宮を牛耳ろうとしたこともある人です。今の陛下の代になった時も、年若いからって同じことをしようとしたぐらいで……」
「知っていますわ。それで提案を断られた腹いせに、ご自分の腹心や知古の貴族達を連れて領地にお帰りになったんでしたわよね？　当時、王宮では重臣達とされていた者も多く引き連れて行って。『政が上手くいかなくなればいい……』と」
……ヤなオバサンだな……公爵夫人……

「おそらく、そういう気持ちでやったのでしょうね」
「王家の出であるのならば、なおのこと国民のために在らねばならぬというのに……！　いったい政治をなんと心得ているのか……ッ！　あの方々が『お母様』と血の繋がった家族だなんて、信じられませんわ！」
「ま、まぁまぁ、姫。今の女王陛下は傑物でいらっしゃるから……」
「ええ！　陛下は素晴らしいお方でいらっしゃるわ！　けれど、実のお父上や叔母上があんなだとは……ッ！」
なにか思うところが多々あるらしく、フェリ姫は羽扇子（エヴァンターユ）をギリギリと握りしめる。
……いつか壊れるんじゃなかろーか。あの羽扇子……
「まぁ、とはいえ、陛下はそのことを殊（こと）の外（ほか）喜ばれたそうですけれど！　過去をお話くださった時、『これで鼠に倉庫を荒らされずにすむ』と思ったのだと仰ってましたわ！」
……アウグスタなら言いそうだ。
にしても、公爵夫人って……一体どんな人なんだろーか？
アウグスタが喜んだってことは、某孤児院の腹黒院長達みたいに、正義の仮面が爆発しちゃいそうな相手だったのかもしれない。
あんまり近づきたくない相手である。
「その公爵夫人がわざわざこの時においでになるということは……」
呟きながら、フェリ姫がチラッとあたしを見た。
「？」
あたしは首を傾げてみせる。
お義姉さまとあたしの動作に、シーゼルは首を縦に振る。
「たぶん、あなたの想像通りだと思います。母上が屋敷を発ったのは三日前です。なんでもすごく急な行動だったらしくて、随従もいつもみたいに沢山連れていません」
フェリ姫は苦い顔になり、チラとまたあたしを見た。
なんでしょう？
「つまり、夫人は『不服申し立て』においでになるの？」

「……おそらく。少なくとも、似たようなことは言うと思います。末姫も侯爵も母とは本来関係のない人ですけど――」

言って、シーゼルもチラッとあたしを見た。

「けど、彼女は『王の娘』になった。なら、『前王の妹』である母は、書類の上では近親者。だから、不服申し立てはできるはずなんです」

「……わたくしの時は、あなたが婚約者だったから何もなかったですけれど……」

「そう。母は、王の血をひかない『王族』の誕生が気に入らないんです。以前から、陛下の養女に関しては難をつけていたぐらいだから……。実際に王族としてこの地に留まるわけじゃないと知ってても、どうにも許せないらしいです。『王族の血』に、相当こだわりがあるようですから」

ギリッ、とフェリ姫が唇を噛みしめた。

忌々しそうな目で床に視線を落とす。

「婚姻公示が始まったとたん、コレですものね。バルディアの王太子妃だけでも厄介だと言うのに……」

「それに……その、母は……侯爵のこと……」

「存じてますわ。あれだけの男ぶりですもの。目が行かない方がおかしくてよ？　夫人の恋愛遍歴はよっっっく存じておりますわ。……さすがあなたのお母様ですこと」

ジロリと姫君に睨まれて、シーゼルは居心地悪そうに視線を床に落とした。

その様子に唇をいっそう尖らせてから、フェリ姫はうってかわって優しく微笑む。

「けれど、ありがとう、シーゼル。わざわざそのお話を持ってきてくださって」

「え。い……いや……」

「ベルのこと、気にしてくださったのね。嬉しいわ。……違う意味で気にしていらっしゃるのでは、ないのよね？」

なぜだろう。
ナイノヨネ？　が、凄まじくどす黒い声だったような気がします。
……笑顔も、なんか怖かった。
「ち、違、違いマス。それに、そっちが本題じゃなくて……！」
「まあ。じゃあ、本題はなぁに？」
にこやかな笑顔で、ズズイッと迫るフェリ姫。
……あの迫り方は、やめたほーがいいんじゃないかなぁ。えらい怖いから。
「母と一緒に、兄が来るんだ」
「……『おにいさま』？」
「そ、そう。僕……いや、私の異父兄が」
「……というと、公爵家に嫁ぐ前に身ごもられてたっていう、アノ？」
頷いて、シーゼルは重いため息をついた。
「そう、母の私生児である、『あの』異父兄です。大貴族の……いや、片方の血が誰のものかなんて、このさい大した問題じゃ無くて……」
勢いよく頭を振って、シーゼルはフェリ姫を見つめ、その両肩をわっしと掴んだ。
「きゃ！？」
「フェリシエーヌ姫。……頼みます！　彼が来ても、近づかないようにしていてくれませんか！？」
「えっ！？」
「あいつは……外面はいいから、人はすぐに騙されるけど……！心の中じゃ相手を利用することしか考えてないヤツなんだ。あなたは綺麗だから、絶対あいつが近寄ってくる。僕の婚約者だってことも知ってる。正嫡に生まれていれば、いい身分の女をあてがわれるんだなって言ってた。あなたにどういう風にからんでくるかわからない……！」
「し、シーゼル……」

「母が来ること以上に、あいつが来るってことが問題なんだ」
シーゼルの様子に、あたしは首を傾げながら言った。
「女の子にちょっかいかけるから？」
「それもある！」
……あるのか。
「けど、それだけじゃない。母があいつを領地の外に出すなんて、今までなかったんだ。可愛がってたけど、外には出さなかった。私生児だから、自分の汚点だっていう意識があったんだ。けれど、今回、わざわざあいつを連れてきた。この時期に……！　あいつと……もう一人……！！」
「「もう一人？」」
あたしとフェリ姫の声がハモる。
シーゼルは唇を噛んで、言いにくそうに俯いた。
「……馬番……です。今は」
「「『今は』？」」
またハモるあたしとお義姉さま。
「噂があるんだ。……けど、本当かどうかはわからない。もし本当なら、母はとんでもないことを考えて……いや、でも……正式に認められれば……」
俯いたままブツブツ言うシーゼルに、フェリ姫は一瞬だけ気遣わしげな目を向け――
ぺちん。
――唐突に、羽扇子でその頭を叩いた。
「！？」
「顔をお上げなさい、シーゼル。このわたくしの目の前で、俯くなどというみっともない真似をなさらないでくださいませ。あなたはわたくしの婚約者。女王アリステラ陛下の信任を受けた、このわたくしが嫁ぐ相手です。顔を伏せ、鬱々と独り言を言うなど、わたくしの婚約者としては許されません」

「え、い……はい」
「同様に、わたくしは陛下の信任を受けたあなたの正式なパートナー。あなたの悩みはわたくしの悩み。ならば、あなたを悩ませる問題はわたくしの問題です。全部残さずお話なさいませ。あなたが抱えているものの全てはわたくしのものですわ」
「ひ……姫……」
シーゼルが大きく目を見開いてフェリ姫を見る。
呆然としたその顔の、頬がわずかに赤らんでいくのがわかった。
思う存分、惚れ直してるようである。
「お義姉さま。いい女なのであります」
「ありがとう、ベル」
鮮やかな笑顔のお義姉さま。
あたしとメイドさん達も、惚れ惚れとその笑顔に見惚れた。
「それで？　シーゼル。その『もう一人』とやらの、あなたを悩ませる『噂』というのは何なのです？」
シーゼルは一瞬夢から覚めたような顔になって、迷うように視線を落とした。
だが、フェリ姫の一睨みで慌てて顔を上げる。
「む、昔、母上が言っていたのを聞いたことがあるんです」
「その『馬番』のことを？」
「そう……あの母上が『馬番』のことを口にするなんて、ありえないから……余計気になって聞いてたんです。あの時、母上は僕が聞いているなんて知らなかっただろうし。僕は隠し通路の中にいて、母はずいぶんと酔っていたようだから」
まぁ、と眉を顰めてから、フェリ姫は「それで」と促した。
自覚は無いかもしれないが、フェリ姫の目は爛々としている。
「公爵夫人は、何と仰っていたの？」
「く、詳しくは省くけど……気になったのは次の言葉です。『馬番の血など汚らわしい』『認められるものか』『我が兄ながらなんという不始末をしでかしたのか』『下賤の血が混じるなど許し難い』」

「!?」

声なき悲鳴を上げ、口元を押さえているフェリ姫に、シーゼルは深刻な顔で頷いてみせた。

メイドさん達もギョッとなって顔を見合わせており、驚きの意味が分からないあたしだけが首を傾げている。

フェリ姫がシーゼルの腕を掴んで叫んだ。

「まさか……！　ですが、いえ……年はおいくつなのです！?」

「二十二か、三か……たぶん、そのあたりのはずです」

「……レーブレヒト陛下が亡くなられたのが……第二王妃の約三年後……二十一年前……」

「先王陛下は、以前より各地で狩りを楽しんでいたと聞いています。一番多くいたのは、我がレンフォード家の領地のはずです。狩りの時には必ず馬がいるから……」

「そこで馬番の娘を見初めたと!?」

見初めた、って……？

なおもキョトンとするあたしの前で、フェリ姫はどんどん青ざめていく。

「嗚呼！　そうですわ……なんてこと！　妃殿下がお亡くなりになって以降、あの方、自暴自棄になって見境がなかったと女王陛下も仰ってましたわ！」

「うちの領地でもいろいろあって大変だったみたいです。料理を運んできた侍女達の中には、婚約者がいた者もいましたが……」

深刻そうな二人の顔を見合わせて、あたしはしょんぼりと肩を落とした。

盛り上がってる二人には悪いのだが、あたしにはサッパリ意味がわからない。

まぁ「見初めた」っていうのは、アレだ。王子様とか王様とかが、可愛らしい街娘を見て「彼女こそ私の運命の人！」とか、そう言う時に言われるヤツだ。お芝居でもやってたから、それに間違いない。

……ん？

……て、ことは……？

「前の王様、馬番のおねぇちゃんを三人目の王妃様にしたの？」

あたしの問いに、二人がギョッと飛び上がった。

どうやらあたしの存在を忘れていたようである。

「べ、ベル！　そのようなことを口にしてはいけませんっ」

いや、イカンて言われても。

「末姫、内密に！　内密にッ！」

「そうですわ！　それに、馬番の娘が三人目になど……なろうはずがありませんわ。あまりにも身分が違いすぎるのです」

「じゃあ、見初めた、って？」

あたしの問いに、二人は何故か棒を飲み込んだような顔になった。

……はて？

「見初めた、って、お嫁さん探しの王子様とかが、理想のお嫁さんを見つけた時とかに言う言葉よね？　だから、前の王様は、馬番のおねぇちゃんをお嫁さんにしたんじゃないの？」

二人はひきつった顔を見合わせ、なにやら先程とはまた違う深刻そうな目で合図を送りあっている。フェリ姫の肘がシーゼルの肘をグイグイ突いたりと、まるで何かを押しつけあっているようだ。

……しかし、はて。何をだろうか？

「あ、あのですね、末姫」

押し付け合いはフェリ姫が勝ったらしく、妙に強ばった顔のシーゼルがあたしに言う。

「えぇと、王妃様にしなくっても……その、子供はできるわけで痛ッ」

「こ、このっ、お馬鹿さんッ！　どういう言い方をしているのッ」

「なるほど！　自由恋愛とやらのアイジンさんなのですね！」

「ベルーッ！」

フェリ姫が真っ赤になって叫ぶが、もう遅い。あたしは理解しちゃったのです。

そう。偉い人にはよく居るのだ、こう、なんとも困ったちゃんな男の人が。

宿のおねーちゃんの所に来る『お客さん』もそういう人だった。彼らはあたし達に自分達は『自由恋愛』をしているのだと声高に言っていた。

そもそもレンアイは自由であるはずなのだが、わざわざそう口にしておねーちゃんの所に来るのが不思議である。

なにか後ろ暗いことでもあるのだろうかと、友人一同、深く考え込んだものだ。

（そうかー。王様も言うってことは、大人の人はそういう風に表現しないといけないのかー）

また一つ賢くなった気がいたします。

ちなみに、宿のおねーちゃん曰く、そういうのはアイジンさんというらしい。

どうも結婚してない恋人を表す言葉なのだそうが、恋人にもイロイロ種類があるということだろう。

む？　ということは、あたしもレメクのアイジンさんになるのだろうか？

「ま、待ちなさいベル！　それはまた別のお話でしてよ！？　い、いえ、それ以前に、ちょっと意味が違……いえっ！　やっぱりそのままでよろしくてよ！？　だから、そんなつぶらな目でわたくしを見ないでッ！」

ナゼデスカ。

あたしの眼差しに大慌てで顔を背けてしまったお義姉さまに、あたしはしょんぼりと肩を落とした。

……まぁいいや。今度レメクに訊いてみよう。

「それよりも、王妃様になってないおねぇちゃんが、どうしたのです？」

「い、いや、だから」

向こうで「ぁあ」とか「うぅ」とか呻いているフェリ姫を横目に、

シーゼルがしどろもどろに言う。
「つ、つまり、ほら……細かい事情はともかくとして、先王陛下のご来訪と、えー、馬番の娘の、ですね」
うんうん。
「身籠もっ……い、いや、子供が出来た時期が一緒で」
「おめでたなのですね」
「そ、そうデス」
顔をひきつらせながらウンウン頷くシーゼル。
文字通りめでたい話なのに、何故緊張の面持ちで話しているのだろーか。
……って、ん？
「だから、うちの母はそれを認めたくないって否定してて……」
「おめでたい話を？」
「……そう」
あたしは首を傾げる。
むむむ？　なにかすごく嫌な予感がしてきましたよ。
「あのね、一つ訊いていい？」
「い、いっこだけですからね！？」
……ケチだ。しかもなんで怯えるのだ。
「王様の子供なら、王子様とかになるんじゃないの？」
「いや、だから……だから今それの話をしているんであって……ッ！」
何かシーゼルの心の琴線に（嫌な風に）触れたらしく、彼は顔を真っ赤にして叫んだ。
「その馬番の子供が、今こっちに来ようとしてるんだよ！　うちの領の、もしかしたら前王の息子かもしれない男が！」
「先王陛下の御落胤……ということですわ」
爆発したシーゼルの横、深いため息をついてフェリ姫は何かを払

うように頭を振った。
「けれど……シーゼル。もしその話が本当なら、もっとずっと早くに教会から連絡があるはずではありませんの……？　そう……きちんと出産届を出されていれば！」
「それはッ、母が……隠蔽したのだと思います。僕は前の陛下にはお会いしたことがありませんが、古くから仕えている従僕達によれば、身なりさえきちんとさせれば、『彼』とレーブレヒト陛下はよく似ているそうです」
……どんな顔だろーか？
あたしはちょっと『王様』の姿を想像してみた。
というのも、あたしは未だに前の王様の姿なんて見たことがないからだ。
今の女王様の姿ならバッチリわかるんだけどなぁ……
「肖像画の通りでしたら、鮮やかな金髪と、青紫色の瞳の、素晴らしい美男でいらっしゃいますわ。もっとも、クラウドール卿にはおよびませんが」
あたしの「？」を感じ取ったのか、メイドさんの一人、確かシュネーという名前の別嬪さんが耳打ちしてくれた。
あたしは即座に頭の中に想像図を思い浮かべる。
レメクにおよばないが美男、というと、どうしてもケニードを思い出してしまう。そういえば、彼も綺麗な金髪だった。瞳は春の若葉みたいな綺麗な緑だけど。
「それにしても……なんということをッ」
ぽややんとしているあたしの前で、フェリ姫がいらだたしげに吐き捨てる。
「隠蔽など……許されるはずがありませんのに！　前王の御子は、陛下と行方不明の王弟殿下しかいらっしゃらないのですわよ？　王弟殿下が見つからなければ、陛下ただお一人で……ッ！！　だからこそ、陛下のご結婚やご婚約に関して、水面下で醜い争いが起こっているというのに……！！」

「僕だって……！　これがどれほど恐ろしい事か分かってます！！　母にそれとなく忠告したこともあります！　こんな噂がありますが、と。素直に言うと思いますか！？　あの人が！　『あなたが気にするようなことではありません』って……全然答えになってないコト言うんですよ！？　そのくせ、馬番には一切近寄らせてくれなかったし……！　あの人は、我が母ながら、何を考えているのか分からない……！！」

同じく吐き捨てるような口調になったシーゼルに、フェリ姫は大きく目を瞠り、ややあって苦しげな顔で俯いた。

「……そうでしたわね。あなたにとっては、それでもお母上でいらっしゃるのですもの。わたくしなどが踏み入れることのできない、お心もありましょう」

「……ッ」

途端にシーゼルはぎょっと顔を上げた。

「姫……まさか……『読んで』……？」

「まさか」

シーゼルの声に、フェリ姫はほろりと苦く笑う。

どこか悄然としたその微笑は、悲しくも美しかった。

「シーゼル。わたくしは、例え何があろうとも、あなたの心だけは読みませんわ。どのような時、どのような場面でも、それだけは決していたしません。それがわたくしの誓いなのですもの」

「……っ。わ、私は……」

なにか大変な失敗をしたような顔で、シーゼルが青ざめる。

慌てて伸ばされた手に自らの手を添えて、フェリ姫は優しく微笑んだ。

「それにね、シーゼル。あなたは、ベルと同じで心を読まなくても、顔で全部言ってしまっているのですわ。読む必要が無いくらい」

「なっ……！」

「ふふふ。……ねぇ、シーゼル。あなたはアザゼル族では無いから、思わず『そう』思ってしまうのでしょうけど……人の思いや、心は、

特別な力がなくても……そう、誰にだって読み取れるものだと思いますのよ。その人の人となりを知って、心を知って、考えればわかるというものですわ」

お義姉さまの声に、シーゼルは一瞬惚けたような顔になり、次いで、なんだか泣きそうな顔で俯いた。

壁際のあたしとメイドさん達は、こっそりと姫君に音のない拍手を贈る。

「「あ」」

あ。

気付かれた！

なぜかビクッとこちらを振り向いた二人が、慌てたように身を離した。

せっかく手と手をとりあって、甘酸っぱい雰囲気満載だったというのに！　なんというもったいないことをするのだろうか！！

「と、と、とにかく！　そういうわけだからっ！　あいつらが来ても近づかないで欲しいんですっ！」

「わ、わかりましてよ！？　ですがっ、わたくしとしても！　陛下の娘としてっ、事の次第を判断するために！　件の馬番の君にはお目にかからなくてはなりませんわ！！」

「な……っ！　だから！　それが駄目なんだって！」

「あなたのお兄様とやらに近づかなければよろしいんでしょう！？　馬番の君は関係ないじゃありませんの！」

「駄目なんだ！　あいつら大抵セットでいるんだから！」

「……ご一緒ですの？」

「そう。だから、僕も異父兄とはほとんど会ってないんだ。もともと、こっちは本館に住んでいて、離れに住んでる兄とはあまり顔をあわす機会が無いし……たまに会うのは夜会の時だから、『馬番』はいないけど……それ以外の普通の時は、だいたい一緒にいるらしい。……似てるらしいよ。あの二人。まぁ、兄妹のそれぞれの子供、っていう繋がりだったら、似てても不思議じゃないんだけど」

……およ？

「……そうなると、いっそう信憑性がありますわね。……というか、どうしてあなたのお家はそういう醜聞が多いんですの！？　今までよくも隠しておけたというか、なんというか……！」

「うちの父母の所行考えてよ……！　あの二人が揃ってるのに、どうやって清く正しい家になれるっていうんだよ。だいたいにして、あの『馬番』にしても、母上の子じゃないかって最初言われたぐらいなんだから。先王の子って考えるより、そっちのほうがありえるって思われてるんだから……僕もそう思ってたんだけど……」

……およよ？

「あなたも立派にお家に染まっておいでのようですけれど？」

ムッと口をとがらしてそっぽ向く姫に、自分に飛び火した話に慌てるシーゼル。

それを見ながら、あたしは首をちょこんと傾げた。

隣のシュネーのスカートをちょいちょいと引っ張る。

「どうかなさいました？　妹姫様」

「ん……あのね、あの二人……もしかして、本当はすっごく『親しい』の？」

いつのまにか、シーゼルの口調がすごくくだけているのだ。

シュネーはちょっと口元を笑ませて、あたしの耳にこっそり告げる。

「幼なじみなのですよ、姫君と若君は。生まれながらの婚約者だったのですが、侯爵がお亡くなりになった時にゴタゴタしまして……姫君が王女の位を得てからは、身分が違ってしまいましたから、若君も言葉遣いを改めているようですけれど」

笑い含みのその声に、あたしは目をパチクリさせた。

……なんか、意外だ。

思わずしみじみとシーゼルを見てしまう。

最初に会った時は、嫌味で変な偽王子サマだと思ったものだが――

（……ちょっとだけ、似てるかも……）

そう。似ているかもしれない。ケニードに。
王族となったあたしのために、決して他に侮られることのないように、躊躇無く膝を折ることを選んだケニード。
……シーゼルもそうだったのだろうか？
フェリ姫が『王女様』として立派に見てもらえるように、わざと丁寧に話してたんだろうか？
そうして今の話し方が、彼の本来の姿なのだろうか？
だとすれば……彼は――
（フェリ姫のこと、すっごく好きなんだ……）
それこそ、強く出られれば思わず腰が引けちゃうぐらいに。
「だから！　僕が女性達と話をするのは、いろんな情報を得るためであって……！　女性の情報網は侮れないんだよ！？　僕が『馬番』のことを知れたのも、女性達の噂を辿っていったからだし、母上が彼等を連れてくるのを教えてくれたのも、ガルシア伯のご令嬢でしたし！　情報を制するものが世界を制するんだって言ってたのはあなたじゃないか！！」
あたしの横で、こっそりとシュネーが教えてくれる。
「ガルシア伯夫人は、レンフォード公爵夫人の親友で、伯のご令嬢その人は、公爵夫人の政敵である方のご息女と仲が良いそうです。そのため、二つのルートから情報が入ってくるのでしょう。かなり正確で、早い情報だと思われます」
えーと。自分のお母さんの友達は、自分の友達のお母さんの敵、というやつかな？
あたしは（ふむふむ）と納得した。なんのことはない、下街でもよく繰り広げられていた、裏側の戦いとかいうやつである。
宿のおねーちゃん達は、これを熟知することが生き残る必須条件だと言っていたが、どうやらシーゼルもそれを知っていたようである。
なぜだろう？　宿のおねーちゃんと知り合いなんだろうか？
とはいえ、もし宿のおねーちゃんと同じように裏側に通じていて、

あちこちの女性の情報網を把握しているとすれば、シーゼルはそらおっそろしい人物である。

なんてたって旦那の財布の中身も分かっちゃうのだ。アイジンさんの人数も回数も分かっちゃうのであう。

（……ところで、回数ってナンダロウ？）

宿のおねーちゃん達は笑いながら答えてくれなかったが、把握されると嫌な回数なのは確からしい。今度レメクに訊いてみよう。

心に決めて前を見ると、未だにワァワァやってる姫と伯爵が。

「まぁ！　どこからどこまでが『情報のため』なのか分かりませんわ！　いつだって嬉々として他の女性の手をとっておいでじゃありませんの！」

「そ、それは、僕だって一応、男だし！」

「まぁッ！　そんな言葉が言い訳として通用するとでも！？」

クワッとなったお姫様に、腰が引けてる伯爵様。

精神的に立場が弱いのは、どうやら素のようだが……うーん。

「ところで、お義姉さま。教皇様の所に行くのはよいのですか？」

なんだかシーゼルが気の毒で、あたしはタイミングを見計らって声を上げた。

眦をつり上げていたフェリ姫が、ハタと気付いてあたしを振り返る。

「まぁ！　いけませんわ。わたくしともあろう者が。急がなくては、猊下をお待たせしてしまうかもしれませんわね！」

「……神殿……下手をすると、到着したあいつらと鉢合わせるかも……」

「丁度良いではありませんの。猊下とお会いしなくてはいけない状態なら、たとえ会ってもすぐに切り上げてこれますわ。わたくしも敵の顔ぐらい一度は拝んでおきたいところですし」

……敵、て。

「……姫……頼みますから、穏便に……。あなたは、あまり荒事は得意では無いのですから……」

というか、フォークより重いものは持ったこと無いんじゃなかろーか？

あたしとシーゼルの心配そうな眼差しに、フェリ姫は婉然と笑って髪を掻き上げる。

「あら。いざとなったら私も禁忌を使いましてよ？　公爵夫人が何を考えていらっしゃるのかは存じませんが、先王陛下のご落胤を隠蔽されていたことといい、陛下の敵である可能性はとても高いですもの。シーゼル。あなたには悪いですけれど、わたくし『お母様』の敵に容赦するつもりはありませんの」

「……それは……もし、陛下や陛下の治世に害をおよぼすようなら、僕だってあなたの側に立つよ」

「無理はなさらなくてよろしいのよ？　あなたには、公爵夫人は実のお母様でいらっしゃるのだから」

「そういう、甘い気持ちはあまり無いよ。大人しくしていてくれるなら、少しは慕えるかもしれないけど……。それよりも、あなたのほうが心配だよ。あなたは本当に弱……いや、か弱い女性だろう？」

シーゼルの声にちょっぴり嬉しそうに微笑みながら、けれどフェリ姫は宛然と笑って答える。

「あら。ナザゼル様ほどではありませんけれど、心の壊し方は陛下から習っておりますわ。剣を持って敵と戦うのは殿方ですが、心で敵を滅ぼすのは女なのです」

キラリと輝く瞳に見つめられて、ぎょぐっ、とシーゼルは喉を鳴らした。

「……あなたと喧嘩は……しないでおきます……」

「懸命ですわ」

大きく頷いて言うフェリ姫に、あたしも青ざめた顔で頷いた。

……あたしも、お義姉さまと喧嘩はしないでおくのです。

3　繋がり

教皇サマのお名前は、アルカンシェル・なんとかかんとか……なんとか。

全然覚えられなかったが、レメクと同じぐらい、やたらと長くて立派な『名前』の御方である。

名前が長いのは、たいてい『正当な血の流れ』をくんでたり、特別な領地をもってたり、先祖代々の家を継いでたりするせいなのだが、この条件が全部揃ってたりするとものすンごく長い名前になる。

例えばヴェルナー閣下とか、レメクとか、アルなんとかじーちゃんみたく。

迷惑だ。

（えーと……アルカンシェル・オルト……ヴォ……ヴァ？）

フェリ姫に書いてもらったメモを片手に、あたしは口の中で『尊い名前』を繰り返した。

しかし、いくら繰り返しても覚えれない。

名前なんて一個あれば十分だろうに、なんでこんなに、四つも五つも六つも七つもくっついてるんだろうか！

（もう、アルルじーちゃんでいいや）

ムスッと結論をくだして、あたしはメモをバックに仕舞った。

教皇様にお会いするということで、フェリ姫に着飾ってもらったあたしのドレスは青。

これは元々レメクに着せてもらったものなのだが、飾り襟と飾り袖を豪華なものに替えられていた。白い総レースのそれにあわせて、レースのショールも豪華になっている。

それと一緒に持たされたのが小さなバックで、中には可愛い手鏡とハンカチが入っていた。ついでに、アルルじーちゃんの名前メモも。

また、外に出る時には必ず付けろ、と言われたのが帽子で、これ

はレースのショールや髪飾り、またはティアラを代わりにすることができるらしい。
そういや、王宮にいる人はみんな何か頭に乗っけてたな……
メイドさんのフリフリ布とか、フェリ姫の髪飾りとか。
「帽子を被るのには、何か意味があるのですか？」
フェリ姫と手を繋いで廊下を歩きながら、あたしは頭の上に乗っている帽子をつつく。
綺麗な刺繍と鳥の羽根で飾られた帽子は、日差しを防ぐ帽子、というよりどちらかと言えば装身具（アクセサリー）だ。
「『身につけなくてはいけない』という規則はありませんわ」
あたしの問いに答えながら、フェリ姫は優雅に廊下を歩む。
いつもならその後ろにズラズラとメイドさん達が続くのだが、今は誰もおらず妙に廊下はガランとしていた。
見慣れた光景が広がってないと、なんだか妙な感じがしてソワソワしてしまう。
だが、聞けばメイドさん達を引き連れて歩いていたのは、あたしの世話をさせるためだけであって、フェリ姫自身のためではなかったらしい。
で、今から向かう先は教皇様のお膝元、大神殿。
そんな場所にメイドさん達を連れて行くわけにはいかない、ということで、あたしとフェリ姫の二人で廊下を歩いているのである。
ちなみにフェリ姫のメイド部隊は、今現在、あの大量のチューリップを分配するという使命に燃えていた。
どこに何を飾るべきか、などを熱く討論する彼女らに任せておけば、たぶん、帰って来たときにはすっからかんになっているだろう。
やれやれ。これでポテトさんの機嫌も治ればいいのだが……
「ナスティアは日差しが強い国ですから、直接太陽を頭に浴びないように、ということで誰でも昔から帽子を被っていたでしょう？その流れなのですわ」
言葉を続けたフェリ姫に、あたしは目をパチクリさせ、ジーッと

美しいお義姉さまを見上げた。
「あたしみたいな貧民は、帽子なんて持ってませんでした」
「き、貴族にとってはそうだったんですのっ」
慌てて言い直し、フェリ姫はコホンと咳払い。
「もっとも、日差しを防ぐのでしたら日傘が一番良いのですわ。でも、乗馬中は日傘を差していられませんでしょう？　だから、どうしても帽子を被りますの。なら、その帽子は美しく趣味の良いものであるべき。それで、帽子にも趣向を凝らしますの。ドレスに流行があるように、帽子にも流行がありますから、それをしてないと『遅れてる』とか『センスが無い』とか『きっと帽子を身につけることもできないんですわよ。おほほ』とか、他の方に馬鹿にされてしまうのですわ！」
過去に何かあったのか、フェリ姫がギリリ、と羽扇子を握りしめた。
「馬鹿にされるのが悔しいから、身につけるの？」
おっと、デスマスが抜けてしまった。
「べ、別に、全てがそうだというわけではありませんのよ？　美しく着飾りたいのは女として当然のことなんですもの。着飾る内容は多い方が良いということですわ。帽子、髪飾り、耳飾り、首飾り、腕輪、指輪、つけ爪、扇子、ドレスや靴もそうですし、ショールやベールも凝りたいところですわね。我が国では流行していませんけれど、バルディアでは付け黒子（ほくろ）も流行っていますのよ？　星形とかハート形とか」
それは果たして黒子と言うのだろうか？
「アクセサリーの一つですわね。でも、黒子一つで印象がガラッと変わってしまうんですもの。それはそれで楽しそうでしょう？」
ウキウキと言うフェリ姫に、あたしは「はぁ」と気のない返事をしてしまった。
綺麗な服を着させてもらうのはすごく嬉しいのだが、元々そういう暮らしに慣れていないからか、着飾る、という言葉にはあまりド

キドキしない。
なんというか、綺麗なものは遠目に憧れるほうが楽なのだ。
今着ているドレスだって、そりゃあもう細かいレースやら深みのある青色やらですごく綺麗なのだが、こんな服では街中を走り回るなんてできやしないし、ご飯の用意もできやしない。
掃除の手が行き届いていて、なおかつ絨毯が敷き詰められていて、埃や汚れとは無縁のお城の中でしか身動きできないような服だ。
ぶっちゃけ、生活するための服とは思えない。
考えてもみてほしい。
こんなドレスで掃除したり洗濯したりご飯作ったり買い物に行ったり、そういう普通の生活ができるかどうかを。
もちろん、できっこないのである。
綺麗なものは「綺麗だなぁ」と憧れるし、実際、街の服屋の前で、友達と一緒に飾られた服を憧れの目で眺めていた時もあった。
だが、実際こうして着飾られれば、嬉しい反面、どうにも落ち着かない。変な言い方だが、座りが悪いような気がして、なんとなくモゾモゾしちゃうのだ。
汚したり破いたりしたらどうしようっていう、気持ちが強いからだろうか？
考え込んでしまったあたしを見て、フェリ姫が背筋を伸ばして言う。
「ベル。上流階級の姫、特に王女は、自ら動くものではありませんの。それは褒められた行為ではありませんの」
「どうしてなの？　です？」
おぅ。危うくデスを忘れるところだった。
「だって『姫』なんですもの」
意味不明。
「簡単ですわ。人はね、自分の見たいように相手を見るんですの。ワタクシ達は相手が望むよう振る舞わなくてはいけないんですわ。姫といえば、美しく清らかで愛らしい微笑みを浮かべ、時に言葉で

相手を翻弄させながら無邪気そうにくすくす笑っているのが理想なんだそうですわよ」

無理だ。

「それから外れた行為をすると、途端にコソコソ裏で噂されてしまいますの。自分で何でもかんでもするなんで、育ちが悪いのではないかしら？　とか。だから、動かずに『困ったわ』という仕草で他人を動かすのですわ。そうすると、ほら、服が汚れるような事態にはなりませんでしょう？　そういう前提のもとに、こんなに動きにくい姿になっているのです」

ハッキリとそう言うところを見ると、フェリ姫もこの着飾った姿を『動きにくい姿』だと認識しているらしい。

だが、そもそも動かないことを前提にしているのだと言われれば、なるほどなぁ、と思うしかない。

「自分から動いたりしたら、所詮は没落した貴族の娘だから仕方がありませんわね女王様もあんな方を養女になさるなんてどういうことかしら、とか言われるのですわッ！」

またギリギリと羽扇子を握りしめるフェリ姫に、あたしはハラハラしながら周囲を見渡した。

お昼になっていないせいか、それともここが王宮の奥の方だからなのか、廊下はガランとしているがそれでも無人というわけではない。ちょっと離れた所には衛兵がいて、チラチラとこちらを見ていた。

まぁ、あたし達の声は小声だから、内容が駄々漏れってことは無いと思うけど。

「心配なさらなくても大丈夫ですわよ、ベル。あの方達は、ワタクシがこんなことを言っていても聞こえていませんもの。人はね、自分の聞きたい言葉だけを聞こうとするのですわ。よほどのことがない限り、言っても聞いてもらえませんの。今だってそうですわ。あちらにいらっしゃる方の頭の中にあるのは、可愛らしい姫君が二人でどこへ出かけるのだろう、ということだけですの」

「心を読んだのですか？」
「読まなくても聞こえてくるんですもの。ちょっと耳を塞ぎたい気持ちですわ。……塞いでも無駄ですけれどね」
はぁ、とため息をつくフェリ姫は、一瞬だけひどく疲れた顔をした。
人の心の声が聞こえ続けるというのは、いったいどんな感じなんだろうか。
あたしにはサッパリわからないが、きっと年中あちこちでザワザワと喋り続けられているような感じなんだろう。
って、今思ってることも聞こえてるのかな？
「聞こえてますわ。けれど、あなたのはあまり気に触りませんの」
そう言ってから、フェリ姫はピタリと足を止めた。
ちょうど下に降りる階段の近くだったので、あたしはキョトンと首を傾げる。
道を間違えたのだろうか？（とはいえ、あたしには今居るのだ何処かなんてサッパリわからないのだが）
「そういえば、ベル。ワタクシ不思議だったんですけれど、あなたの声は、聞こえたり聞こえなかったりで、なんだかすごく波があるのですわ」
「波？」
波というと、港でザザーンザザーンとくるアレのことだろうか？
「大きいときと小さい時がある、ということですわ。独り言のように考えが全部伝わってくるときがほとんどなんですけれど、時々、怖いぐらいシンとしてる時がありますの。他の方はたいてい全部筒抜けに聞こえてくるんですけれど……」
と言われても、その感覚がわからないあたしに分かるはずがない。
「アザゼル族同士だと無意識の『声』が聞こえにくいという風に、メリディス族にもそういうのがあるのかもしれませんわね。陛下みたいに特別な紋章を持っていらっしゃる方が相手の場合は、向こうから語りかけられない限り聞こえないように……」

ぶつぶつとフェリ姫が呟く。
どうやらフェリ姫にとってソレは大事なことであるらしい。
種族の特徴を把握するのは王族の務め、と言いきっていたフェリ姫だから、無視できない内容なのだろう。うん。
「……ベル。他人事ではありませんわよ？　あなたの特徴なんですから」
「……う。そうでした」
「なにか心当たりはありません？　私に問いたそうな声はすごく聞こえるのに、深く考えてそうな時は全く聞こえてこないのですわ」
と言われても困る。
頭で考えるのは苦手なのです。
い、いや、頭脳プレイだってちゃんとできるんですけれどもっ！
例えばおじ様のお風呂に入る時間帯を察知して奇襲をかけるためには、まずおじ様がどのタイミングでお風呂に行こうとするのかを把握しないといけないわけで、それを分析するためにはその時の帰宅時間と疲れ具合と足運びと重心のほんの少しの差違を見分けて……
「……ベル。侯爵のお風呂の時間については考えなくてかまいませんから」
「なぜ筒抜けなのです！？」
すっごく深く考えているというのにっ！
「あなたの侯爵に関する声はそれはもうヒシヒシと感じるというか、聞こえてくるというか声高に叫ばれているような感じなのですわ」
それはもう、心の底から叫びたいという愛が迸っているのですよ！
この愛が！　愛が！！　愛がッ！！
「『それ』は聞こえてるのに、どうして真顔で考えているような時には何も聞こえないのかしら？　何かを考えてる、というのは分かりますのに。い、いえ、さっきも真顔ではありましたけれど」
「ナゼ真顔じゃアカンみたいな顔で言うのですか……」
ぼやきながら、あたしは顔をゴシゴシと手で擦った。
元々、フェリ姫自身『聞こえる声と聞こえない声があって、全部

が聞こえるわけじゃない。それに自分から無理に心の中を読もうとはしていない』と言っていた。

なら、それでいいんじゃないかと思うのだが。

「ちょっと気になっただけなのですわ。だって、あなたの場合、その『聞こえる声と聞こえない声』の状況が全然一定じゃないんですもの。何の理由もなく『そう』だというのなら、相手の心の動きによって『聞こえてくる』幅が違うのではなく、ワタクシの力のほうに波があって、それで心の声が聞こえてこない、ということになるのですわ。この二つは全然違うことでしょう？　もし、今まで思っていた『自分の能力の把握』が違っていたとしたら、大変なことですわ。いざ何か起こって、力が必要となった時に、手痛い失敗をしてしまいます」

なんだかすごくムズカシイことを言っている。

残念ながら、あたしにはサッパリだ。

もう『相手の人に問いかけたい内容だから聞こえてる』とか。

『大声で叫びたいぐらいの気持ちだから聞こえてる』とか。

『自分だけで考えたい内容だから聞こえてない』とかいう分け方でいいんじゃないかと思う。

あとは、その時一緒にいた誰かの存在でかき消される声があるとか。

ほら、いろんな人が一斉に喋ってたら、言葉じゃなくてワァアンていう音になっちゃうみたいな感じで。

「！？　なるほど、そういう考え方もありますのね」

目を見開いて納得したフェリ姫に、あたしはとりあえずウンウンと頷いてみせた。

どうやら今の考えは筒抜けだったようだが、口で説明すると頭で考えるようにはうまくいかないから、ある意味ありがたいことだった。

あれですよ。

あたしは口下手なのです。うん。

「……そこは果てしなく疑問ですけれど」
どういう意味ですか？
ぼやいたお義姉さまをジーッと見上げるが、フェリ姫はまだ何か気になることがあるらしく、心ここにあらず、といった顔をしていた。
「むぅ」
困った。
あたしは立ち止まったままのフェリ姫の手を引っ張り、ピョンピョン跳ねながら言った。
「お義姉さま、それよりも教皇様、なのですよ」
「え？　あぁ！　そうでしたわね。いけませんわ。ワタクシとしたことが」
跳び回ったのがよかったのか、フェリ姫はハタと我に返り、慌てたように階段の方へと向かった。
考えに夢中になっていただけで、道はそのままで正しかったらしい。
それに安心しつつ手を引いてもらいながら歩き出したところで、またフェリ姫の足が止まる。
「お義姉さま？」
「……出ましたわ」
ぽつりと、あたしだけに聞こえる声で一言。
出ましたわ？
あたしはキョトンと瞬きをし、フェリ姫の視線を追って納得した。
階段の下から、こちらへ上ってこようとしている二人の青年。
よく似た面差しのその二人のうち、背の低い方がこちらを認めてニッコリと微笑む。
青年は、美しい金髪と青紫の瞳をしていた。
「御前を失礼いたしました、フェリシエーヌ王女殿下、ベル王女殿

下」

階段の端に退き、丁寧に一礼する青年に、フェリ姫はあたしを背に庇うような形で相対する。

「あら。どなたでしたかしら？」

微笑みを含ませた愛らしい声。

優しく愛らしく柔らかい声、というのはこういう声のことを言うのだろう。あたしはうっとりとしながら、フェリ姫の声を頭の中に叩き込んだ。いつか真似してみるのである。

あら。どなたでしたかしら？

レメクに言ってみせたら、レメクもうっとりしてくれるだろうか？

「失礼いたしました、姫君。私の名はクリストフと申します」

フェリ姫は答えない。ただ、小首を傾げる仕草で「それで？　どなた？」と表現する。

あたしの位置からは後ろ姿しか見えないが、きっとフェリ姫は無邪気そうな愛らしい表情をしているに違いない。

あたしは自分がフェリ姫の影に隠れているのを利用して、こっそりと相対する二人の様子を観察した。

美青年だ。大事なことなので二度言います。美青年だ。

どうも王宮という場所は美形があちこちから湧いて出るらしい。

レメクを筆頭にいろんな美形がいっぱいだ（ちなみにポテトさんは別格なので数に数えない）。

「レンフォード侯爵様の所でお世話になっている者でございます」

恥ずかしげにそう言う相手の名が、クリストフ、というらしい。

なんか忘れそうなのでクリさんと呼ぼう。

綺麗な金髪は柔らかそうで、クリンクリンと癖がついている。曲がりのない真っ直ぐな髪にしようと思えば大変な苦労をしそうな髪だった。

顔立ちはすごく良い。レメクには負けるが、ケニードとはいい勝負だろう。

外見から推測するに、年は二十を過ぎたところ。

ただ、なんか変な感じがした。もやっとしたような感じだ。
なんだろう?
肌の色は白くて、瞳の色は青紫。
アウグスタと同じ目の色だ!
ただ、アウグスタみたいな爛々と輝く『綺麗さ』は無かった。なんかちょっと、濁ってる感じだ。
簡単に言えば、キラキラした美青年なんだけど、なんかドロッとした感じ。
……近づかない方がよさそうである。
その隣にいるのは、クリさんよりやや背が高い青年だった。
顔は隣のクリさんに似てるけど、こっちの人のほうがちょっと男らしい。日に焼けてるせいだろうか? 髪の色はやっぱりキラキラした金色で、クリさんよりはクリンクリンしていない。でもなんか、触ると気持ちよさそうな髪だった。
瞳の色はやっぱり青紫。
爛々としてないけど、濁ってもない。けど、なんか冷たくて暗い目の色だった。
ドロッというよりシーンッとかツーンッて感じ。あと、やっぱりなんかモヤモヤした感じがする。
これまたあんまり近づかない方がよさそうだった。
と思ったら相手と目があった。
思わず怯むが、向こうは一瞬、あたしよりも怯んだ顔をしていた。
だがすぐに無表情になる。
……おや?
「レンフォードというと、シーゼルのお知り合いかしら?」
朗らかな声でクリさんに尋ねるフェリ姫。
クリさんは恥ずかしそうに顔を伏せた。
「知り合いなど、とんでもございません。私は、しがない身の上ですので」
恐縮しきった声だったが、あたしは見た。

シーゼルの名前が出た瞬間、わずかに目元がひきつったのを。
フェリ姫も何かを感じ取ったのだろう。あたしの手を握ってる掌が、一瞬だけピクッと動いていた。
「まぁ……。それで、そちらの御方は？」
フェリ姫の声に、もう一人の方がちょっと目を瞠る。
自分に声をかけられるとは思ってもいなかったらしい。
……そういや、さっきからずーっと傍観者みたいな顔でいたな、この人。
出会ってから今まで、視界の片隅にあった相手の表情を思い出して、あたしは一人首を傾げていた。
クリさんなんかは恐縮したような態度でいるのだが、この男はちょっと違っている。
あたし達のこともあんまり興味無さそうな顔で眺めていたし、目があっただけで怯んでいたところを見ると、自分が見られているってことにも気づいていなかったらしい。
自分に無頓着な傍観者。敢えて表現するなら、そんな感じだ。
どういう人なんだろうか？
「レンフォード家の、アルトリート、という」
ぶっきらぼうな声で、彼は答える。
クリさんみたいに礼をするでもなく、突っ立ったままの返答は、フェリ姫の神経を逆撫でしたらしい。ピクッとまた掌が動いて、さっきまでふんわりしていたフェリ姫の空気が一変した。
「まぁ。では、あなたがシーゼルの異父兄様（おにいさま）ですのね？」
どこかヒヤッとした気配を宿して、フェリ姫が言う。
アルトリートは軽く片眉を上げ、皮肉そうに笑った。
「そうなるな」
言葉の前に、フン、という笑いつき。
……あたしが言うのもなんだが、貴族にしてはガラ悪いぞ、この人。
シーゼルがフェリ姫に忠告してきたのも、このガラの悪さのせい

かもしれない。
　そういや、街に遊びに来る貴族にはこういう手合いがよくいたなぁ……金持ちのボンボンだってのに、ゴロツキみたいな感じの人。
　まぁ、宿のおねーちゃん達には面白いぐらい簡単に手玉にとられてたけど。
「フェリシエーヌ、ってことは、あんたが次の公爵夫人か。確かに、見たことないぐらい綺麗な顔してるな」
「アル！　駄目だよ、お姫様相手に。謝らないと……」
　慌ててクリさんが注意するが、相手は顔をしかめるだけで、お姫様相手に頭を下げる気はまるでない。
　いや、まぁ、今の対応で、どこをどう謝ったらいいのかはあたしにはサッパリだが。
　綺麗っていうのは、褒め言葉なのです。
「あら。褒めてくださって嬉しいですわ。けれど、見たこともないぐらい、というのは褒めすぎでしてよ」
「そうか？　あぁ……そっちのちっこいのもそうか」
　ちっこいの、というのはあたしのことらしい。
　なんか、口は悪いけどおべんちゃらは上手いようだ。
　ちっこいの、というのは余計だが。
「……いや、だけど……ちっこすぎないか？　ベルっていう姫なら、たしか九つだって聞いてたが」
　ムカッ！
　さすがにムッとして、あたしはフェリ姫の後ろから飛び出し、彼女の横でムンと胸を張ってみせた。もちろん目はギンギンだ。
　しかし、アルトリートは口の端をニィとつりあげる。
「やっぱりちっこすぎだろ」
　失敬なーッ！
　シャーッと飛びかかった途端、慌てたフェリ姫に抱きしめられてしまった。
　とはいえ、フェリ姫の力はあんまり強くない。結果、あたしを抱

きしめた格好のまま、フラフラと足下をふらつかせた。
「ベルっ！　落ち着きなさいませっ」
「お、おねぇしゃまっ!?　危ないのですよ!?」
「誰のせいだと思っているのです!?」
「おい馬鹿！　段差！」
フランフランと階段から落っこちかけたあたし達に、アルトリートも慌てたらしい。
ギョッとした顔で手を伸ばし、下へ落ちかけたフェリ姫ごとあたしを抱えて体勢を整えた。
「危ねぇだろ!?　階段だぞ!?　ここ！」
「失礼な事を言うのが悪いのですよ！」
「ちっこいのをちっこいって言って何が悪いんだよ!?」
「人の身体的特徴をあげつらってはイカンと教わらなかったのですか！」
怒り心頭のあたしに、アルトリートは「教わってねぇ」とぼやく。
ちなみにあたしは現在進行中で教わっている最中である。
ぺちぺちとフェリ姫ごと抱き留めてくれている手を叩くと、アルトリートは嫌そうな顔であたしとフェリ姫を見下ろし、何を見て思ったのか、やおら低い声でぼやいた。
「くそ……ガキを相手にしたのが悪かった」
「「ガキ!?」」
あたしとフェリ姫の声がハモる。
なにやら頬を染めていたフェリ姫が、眦をつり上げてバシッとアルトリートの腕を叩いた。けっこう痛そうな音だ。
「あなた！　誰の許しを得てこのワタクシに触れているのです！」
「うをっ!?」
怒鳴られたアルトリートがギョッと目を剥く。
怒ったフェリ姫の迫力たるや、地獄の悪魔に等しいから当然であろう。
……って、あっあっ！　お義姉さま!?　なんであたしをギュー

する力が強くなるのです！？
「ぐぇえ」
ジタバタするあたしを抱きしめたまま、フェリ姫は素早くアルトリートの腕の中から逃げ出した。
あ、あたしも逃げたいのですよぐぇえええ……
「シーゼルの異母兄とはいえ、この王宮に入る許可を得ていない者が、なぜこんな奥深くまで来ているのですか！　衛兵に摘み出されないうちに立ち去りなさい！」
「はぁ！？　なんなんだおまえ達は……くそっ。王宮の女はこんなのばっかりか！？　さっきの女といい……て、おまえらそういや礼もねぇのかよ！　助けてやったってのに！」
「助けて！？　あなたがベルに暴言を吐くから起こった事態でしょう！？　ご自分の言ったことをまず謝りなさい！」
「だからちっこいのをちっこいって言って何が悪いんだよ！　これから成長すりゃいいだけのことだろうが！」
「その『ちっこい』という言葉が女心を傷つけるのですわ！　ベルだって好きでこんなに『ちっこい』わけではありませんのよ！？　これからの成長だって、どうなるかわかりませんのに！　あなたの言う『ちっこい』という言葉に、どれだけ傷ついていると思いますの！？」
「……今も傷ついているのですよお義姉さま達……」
「「あっ」」
どんよりとしたあたしの声に、二人して声をあげる無神経ども。
力の緩んだ隙にフェリ姫の腕の中から逃げ出して、あたしは階段の隅っこに丸くなった。
……くしょぅ。あたしだって好きでちっこいわけじゃないんだからね！？
「べ、ベル。ほら、これからいくらだって成長するわけですからっ」
「……さっきこれからの成長がどうなるかは分からないって言ってなかったか……？」

「うるさいですわ！　あなたちょっと黙りなさい！」
ガァッと怒鳴られて、アルトリートが嫌そうな顔をしながら離れていく。
「くそ……本気でここの住人ってどうなってやがる……」
あの赤毛女といい、とぼやくのを聞いて、あたしはムッツリとふくれた顔のままアルトリートを見た。
赤毛女って誰だろう？
涙目でジトーッと見上げたのを何と誤解したのか、アルトリートは気まずそうな顔で視線を反らした。
「……悪かったな。ちっこいって言って」
また言ったな！？
「あなた学習能力が無いんですの？」
ツンツンしはじめたフェリ姫の口調はものすごく冷たい。
言われたアルトリートとクリさんが変な顔になったのも、たぶんそのせいだろう。元々綺麗な顔をしているだけに、フェリ姫が冷たくなるとすごい迫力なのだ。
……ええ。何に似てるのかなどは、もう怖くて口に出せませんが。
「さぁ、ベル。猊下にお会いしに行きますわよ」
あたしを覗き込み、ニコッと笑うフェリ姫に、あたしは目元をゴシゴシ拭いてから頷く。
「……あい。行くのです」
「あ、あのっ。姫君方」
そのままさっさと階段を下りはじめたあたし達に、慌てたようにクリさんが声をかけた。
振り返ると、ふてくされた顔のままそっぽ向くアルトリートに困ったような目を向けてから、クリさんがこちらに頭を下げる。
「申し訳ありません。実は王宮で迷ってしまっているんです。私達も連れて行ってはいただけませんか？　城の入り口までででかまいませんから！」
クリさんのその言葉に、フェリ姫とアルトリート、二人が揃って

嫌そうな顔をしたのが印象的だった。

「まったく！　王宮で道に迷うですって！？　一本道を真っ直ぐに行けば玉座の間にたどり着くというのに、いったいどういうつもりだったのかしら！」

馬車の中、豪華な椅子の上のクッションに体を預けながら、フェリ姫は憤慨したように叫んだ。

実際、彼女はこのうえなくオカンムリだ。

「どういうつもりだったと思うのです？」

お義姉さまの怒りと言葉の意味がわからず、あたしは首を傾げて問うた。

フェリ姫の対面側に座っているあたしは、床に届かない足をプラプラさせながらクッションの海に埋もれている。

白地に花の模様が刺繍されている馬車内は、恐ろしいことに床も壁も天井も椅子も全部布張りでフカフカだった。レースやフリルもふんだんに使われている上、一緒に乗っているクッションもフカフカのフリフリ。

ちなみに外側は、陶器で出来たような艶やかな白に、金の装飾が施されている。もちろん、牽く馬は美しい白馬が二頭。

なんか魔法使いとかが魔法で出してきそうな馬車である。

ケニードの家の馬車と違い、恐ろしく可憐なこの馬車は、フェリ姫のためだけに作られた専用馬車であるらしい。

道理で凄まじく乙女チックなはずだ。

「どうせ王宮が物珍しいと探検していたに違いありませんわ。田舎者ですのね！　けれど、萎縮せずに堂々とあちこちを回っていたというのなら、たいした度胸と言うべきかしら。それともなんという厚顔な、と怒るべきかしら！　あぁ、それにしても、あの男、誰の胸が小さいですって！？」

「？」

そんな一言、言ってたっけかな？
あたしは思いっきり首を傾げ、ややあって「ああ」と思い至った。
「心の声が聞こえたのですね？」
「『うわ、胸、ちっさ』ですのよ！？　あの男ッ！　あンの男ぉッ！！」
怒りのままに叫びながら、フェリ姫はクッションをギューギューと両手で絞める。
哀れなクッションは、もう二度と元に戻らなさそうなぐらい絞られてしまった。
……心の声が聞こえるというのも、考えものである。
「オネーサマは、あたしのために怒っていたわけでは無かったのですね？」
「ワタクシ達二人のために怒っていたのですわ！」
クッションがいっそうギューギューと絞られる。そのうち縫い目から中身が飛び出しそうだ。
「それよりもお義姉さま。あの人が言っていた『赤毛女』という人に心あたりはあるですか？」
あたしの問いに、フェリ姫は怒り顔のまま顔をあげ、パチクリと目を瞬かせた。
「赤毛……？　あぁ、アデライーデ姫のことですわね」
「アデライーデ？」
初めて聞く名前だ。
というか、赤毛女だけでよく名前が思いついたなぁ、お義姉さま……
「イメージが流れ込んで来たのですわ。赤毛、姫、眼鏡、胸が大きい、不躾、やや変態気味、観察、突拍子もない」
……そんなイメージってどーなんだろうか……
「そして十六、七才。これらの条件に該当するのは、アデライーデお姉様だけですわ」
全該当で断言！？

てゆか、どういう人なのです、そのお姉様は！
って……アデライーデ『お姉様』……？
その呼び方を使うということは、つまり――
「王女様……？」
「ええ。第十王女アデライーデ殿下。豊富な知識をもっていらっしゃる、通称『本の虫』ですわ」
……ヤな通称だな。
「ワタクシもどうかと思うのですけれど、ご本人が自らそう仰っているんですもの。あとは『真実の探求者』とか『智を求める者』とか『世界を読み解く者』とか」
「自分で言ってるのです？」
問うあたしに、フェリ姫はコックリ。
「ええ。ご自分で」
……危なそうな人だ。
忌憚無い意見を申し上げれば、そう「変人」。そう言わざるをえないだろう。
というか、そんな姫がいるのか……えらく個性的な人を選んだんだなぁ、アウグスタ。
「というか、アウグスタが養女にしてるのって、そういう人ばっかりなのかな……」
あのナザゼルという美女も、なかなかに一筋縄ではいかなさそーな人だった。フェリ姫も言わずもがな。なにやら個性的な面々ばかりだ。
「ベル。あなたもその例に漏れないということをお忘れ無く」
なにやらジト目のお姫様。
え。あたしも変人なの！？
「誰が変人でして！？　そういう変な一括りにするのはおやめなさい！　……それにしても、あの男達、どうやってアディ姉様と知り合ったのかしら？　むしろ、姉様の方から近寄って行ったのかしら……」

あたしを叱ってから、フェリ姫は思案する顔で小さくぼやく。
アデライーデ姫という人は、どうやらアディ姫と呼ぶらしい。短くて呼びやすいから、あたしもそっちで覚えよう。
「あの方は、好奇心をくすぐることがあるとすぐに飛んで行ってしまうから……あなたにも会いたがっていましたから、今日中にはお会いできると思いますわよ。もしかすると、猊下とお会いした帰りに待ちかまえていらっしゃるかも」
なかなか行動的な姫君のようだ。
フンフンと頷いていると、フェリ姫は苦笑して締め上げていたクッションを解放した。
クッションは完全にヨレてしまっている。
「まぁ、それにしても、あの二人……シーゼルの話を聞いた時にはどういう相手かと身構えましたけれど……」
呟いて、彼女はふと真剣な目をあたしに向けた。
「……ベルはどう思いまして？」
「モヤモヤなのです」
思ったままを言ったあたしに、フェリ姫が首を傾げる。
「どういう意味ですの？」
「それがよくわかんないの。……デス。なにかこう、二人ともモヤッとしてて、なんか違うなっていうか、でも何が違うのかはわからないっていうか、モヤモヤしてる感じ。あと、クリさんはドロッとしてて、アルトリートって人は暗い感じ」
「よ、よく分かりませんけれど……あなたの直感がそう思わせているのでしたら、何か意味があるのでしょうね」
フェリ姫いわく、メリディス族は直感で相手を判別する一族らしい。あたしが感じる『人の匂い』とやらも、その直感によってもたらされるものなのだろうと言っていた。
匂い。
「って、あれ？　そういや、匂いがしなかったわ。あの二人」
「匂いがしない……？」

同じ言葉を繰り返して、フェリ姫は眉をひそめた。
「匂いを感じるのは特別な感情をもつ相手に限る、ということかしら」
そしてそのまま何かを考える顔になる。
「ということは、少なくともあの二人はあなたに対し、特別な感情を一切持っていないということですわね。マルグレーテ様の尖兵、と考えるのは早計かしら。いえ、違わないとしても、感情まで左右されてはいない、ということかしら。……それにしても、あの二人が王宮に着いているということは、マルグレーテ様も王宮に着いていると考えていいわけですわね。あの二人を登城させたのもあの方かしら。でなければ、誰が登城を……？　それに、前王の妹君が到着したというわりには、王宮で騒ぎになっていないのが不気味ですわね。いったい、あの方はどこで何をしようとしているのかしら……」
ぶつぶつと呟くフェリ姫に、あたしは同じようなムズカシイ顔を作って腕組みをしてみる。
けれど、姿を真似たからといって、あたしの頭がフェリ姫みたいにいろんな想像を膨らませれるはずもない。
「マルグレーテって誰なのです？」
しばらく真似してから諦め、情報を集めようと口を開いたあたしに、フェリ姫は一瞬大きく目を見開いて言った。
「レンフォード公爵夫人ですわ」
知らなかったの？　と問いたげな眼差しに、あたしはチョロッと視線を逃す。レメクから聞いたことがあるような気もするが、長そうな名前の人をこのあたしが覚えているはずもない。
……いや、そろそろ本気で覚えなきゃまずいとは思うのだが。
「えっと、シーゼルのオカアサマなのですね？」
「お母様、の呼び方が何やら微妙な感じでしたけれど……そうですわ。レンフォード公爵閣下の正妻でいらっしゃる方で、シーゼルの実のお母様。そして、陛下にとっては実の叔母にあたる方です」

「……えぇと。王族じゃない他人が王族になるのをすっごく嫌がってる人でしたよね？」
「ええ。ワタクシは王女の地位を得てシーゼルと再度婚約いたしましたから、そのことについてはそれほど文句は言われませんでしたけど……。あの方は、ある意味『貴族らしい貴族』ですから」
「貴族らしい貴族？」
「ええ。昔シーゼルの婚約者だった頃、家が没落した瞬間に婚約を破棄されてしまったことがありますの。地位が無ければ価値が無い、という考え方が徹底している御方ですわ。また、地位はあっても血筋が悪ければ同じく価値が無いという考え方の御方ですから、他の方が王女の地位を得たときはそれはもう大反対なさって……」
言って深いため息をつき、フェリ姫は言葉を続けた。
「ワタクシはまだその被害が少なかったとはいえ、やっぱりブツブツ言われましたのよ。今のあの方にとって、自分の血を引く息子で、なおかつ地位も血筋も良い姫君と娶せられるのはシーゼルだけですから。陛下の養女にならなければ、シーゼルとはもう一度婚約できなかったでしょうね」
皮肉な笑みを浮かべるフェリ姫に、あたしはちょっぴり身を乗り出す。
「お義姉さまの言い方だと、シーゼル以外にも血筋の良い息子さんがいたっぽいのですが」
「え……。え、ええ」
フェリ姫はわずかに顔を強ばらせ、視線を逸らした。
その様子にあたしは首を傾げる。
「性格がよくない息子さんだったの？　ですか？」
「まさか！　むしろ非の打ち所のない方でしたわ。穏やかで、優しくて、頭が良くて、とっても素敵な方でしたの。シーゼルにとっては憧れのお兄様でいらっしゃったのですわ」
ほぅほぅ。
「シーゼルより五つほど上で、小さい頃はシーゼルと一緒に遊んで

もらったこともありますのよ。うんと小さな頃ですけれど」
ほんのりと頬を染めて微笑むフェリ姫は、なんだかとっても可愛らしく見えた。たぶん、フェリ姫にとっても『憧れのお兄様』だったに違いない。
……シーゼル。嫉妬したんじゃなかろーか。おにーさんに。
「でも、四年前に突然いなくなってしまいましたの」
「えぇ！？」
言われた言葉に驚いて、あたしは思わずビョンッと飛び上がる。
フェリ姫は一瞬だけビックリした顔をしてから、ややあって真面目な顔に戻り、何も知らないあたしに語ってくれた。
「シーゼルが末の公子であることは、知ってますわよね？　シーゼルのお兄様やお姉様は、全員で五十八人。それでいて次の公爵と目されているのは末の子であるシーゼル。どうしてかは、わかりますわよね？」
「えーと……」
問われて、あたしはここ最近のレメクの授業を一生懸命思い出した。
確か、貴族の子供がいっぱいいる時、最も有力な後継者として候補に挙がるのは――
「『お母様の身分が一番高い』から？」
フェリ姫は大きく頷いた。
「そう。前国王陛下の妹君であるマルグレーテ様の御子以外に、レンフォード家を継げる人はいませんわ。畏れ多いことでしょう？他の方を据えるなんて。でも、最初はシーゼルではありませんでしたの。シーゼルより年長で、マルグレーテ様と公爵閣下のご子息がもう一人いらっしゃったのですわ。だからこそ、当時王女ではなくシュヴァルツブルク侯爵の子であったワタクシとシーゼルは生まれながらの婚約者となったのです。もしシーゼルだけしかご子息がいらっしゃらなかったら、マルグレーテ様はワタクシを婚約者に据えようとは思わなかったはずですわ。是が非でも陛下に早く子を産め

とか言いそうですし」
「アウグスタに子を産めって……」
「生まれた子が王女だったら、婚約者にできますでしょう？　そういう意味ですわ。けれど、シーゼルより前に生まれているご子息がいて、その方は陛下のご養女と婚約なさっておいででしたから、シーゼルとは格下の家である侯爵家のワタクシでも婚約できたというわけです。いちおう、シュヴァルツブルク侯爵家にも、昔王女殿下が降嫁されたことがありますし、領地も大きかったですから、マルグレーテ様にとっては『許容範囲』だったのでしょうね」
なかなか生々しい話である。
というか、両親が同じお兄さんがいて、なおかつその人も『王女殿下』の婚約者だったんだ。
……そのわりに、そういう話がどこからも伝わっていないのだが。どうしてだ？
「伝わっていないのは当然ですわ。ある意味そのお話は禁忌ですもの」
「なんで？」
「だから、出奔なさったからですわ」
「あ！」
言われて、あたしはなるほどと納得した。
確かに、いなくなってしまった人なのだから、内緒にしてても不思議じゃない。
しかも相手が『前の王様の妹さんが産んだ子供』で、さらに言えば『レンフォード侯爵の跡取りになるはずだった』人だとすれば、誰もが口を噤んでしまったとしてもおかしくないのだ。
誰だって、自分より力の強い人の悪い噂をベラベラ喋りたくないはずだから。
……いや、敵対してれば、逆にベラベラしゃべるだろうけど。普通は挑発したくないから、ソッとしておくものなのである。喧嘩っ早い下街でさえそうなのだから、ドロドロした王宮ならもっと『そ

う』であるに違いない。
かわりに、裏側がすごいドロドロになってるかもしれないけど。
しどけなくクッションにもたれかかっていたフェリ姫は、あたしがちゃんと納得したのを確認してから、姿勢を正しながら当時を思い出そうとするように瞳を閉じた。
可憐な唇が言葉を紡ぐ。
「家も婚約者も放り出して、どこかに消えてしまって……四年前のことですから、当時お兄様は十四才――いえ、十四になる直前だったはずですわ。レンフォード家では代々十四になると同時に正式に後継の名乗りをあげることになっていますの。十四になるまでは、いつ後継者の身に何かあるかわからないから、という昔の教えを守っていらっしゃるから。……その儀式の前に、姿を消されたのです。レンフォード家は大混乱でしたのよ。……陛下は、驚いていらっしゃらなかったですけれど」
その言葉に、あたしは首を傾げた。
公爵様のお家のことで、なおかつ王族の血をひいてる子供のことで、さらに自分の養女の婚約者でもあった人がいきなり消えたのに、驚かなかった？
「おそらく、陛下は知っていらっしゃったのではないかしら。その方が決して公爵家を継がないということが。……だから、ワタクシを『公爵夫人にするべく』シーゼルの婚約者にしたのですわ」
そういえば、前にもそんな感じの話を聞かされていた。
もっとも、その時にはシーゼルに同じ両親をもつお兄さんがいたなんて、聞かされなかったけど。
「陛下が本当に知っていらっしゃったのかは、確認していないから分かりませんわ。けれど、そう考えなければ、つじつまがあわないのです。陛下は何かを知っていて、それでワタクシをシーゼルの婚約者に据えたのだと思いますわ」
「尋ねたら答えてくれるんじゃないかな……？」

「それは分かりませんわ。情報というものには、与えるべき情報と、与えてはならない情報とがあるのです。ワタクシ達があの方がいなくなってしまったことに、どれだけ動揺していたか……陛下はご存じでいらっしゃいますわ。それなのに、何も言ってはくださらなかった。それはつまり、何かを知っていらっしゃったとしても、それをワタクシ達には知らすことはできない、という類のことなのでしょう。……それにね、あの方のことはシーゼルにとって深い傷なんですの。大好きなお兄様で、憧れの人で……それなのに、突然何も言わずにいなくなってしまったんですもの。陛下と問答をして、それがシーゼルの耳に入るのだけは、ワタクシ、嫌ですの」

「……お義姉さま……」

「大変でしたのよ、あの当時のシーゼルは。ワタクシに対しては、何も心配ないっていう顔をしてみせてましたけど……心の中はボロボロで」

心の声を聞いてしまうフェリ姫にとっては、シーゼルの本音は筒抜けだったのだろう。

けれど、たぶんシーゼルは表面だけはいつも通りに振る舞っていたに違いない。

あたしは知っている。男の子というのは、そういうものなのだと。孤児仲間の男共にも妙にそういう意地っ張りなところがあった。たぶんあれが、男の矜持というやつなのだ。

「昔からお兄様と比べられながら育ってきた、ということもありますしね。それでもお兄様に表だって反発したりしなかったのは、お兄様のことが大好きだったからですわ。それなのに、そのお兄様もいなくなってしまった。残されたレンフォード家の人達は、すぐにシーゼルを次の公爵と見なしてお兄様のことは無かったことにされてしまった。クレマンス伯爵の地位を押しつけられ、いっそうお兄様と比べられながら育てられ……」

「……」

「……もし、クラウドール侯爵がシーゼルに言葉をくれていなかっ

たら、とっくの昔に心がどうにかなっていたかもしれませんわ」
「……？　おじ様、が？」
「ええ。昔に、王宮でお会いした時にお言葉をいただいたそうですわ。その時はまだお兄様もいらっしゃって、シーゼルはただ、優れたお兄様と比べられてる末の公子、っていう状況でしたけど」
「……普通にその時点で拗ねたりすると思うんだけど」
誰だって、人と比べられながら過ごすのは嫌なはずだ。
その人が優秀であろうがなかろうが、それに違いはない。
「ええ。そうですわね……。シーゼルはお兄様のことがとっても好きでしたけど、それでもやっぱりいろいろ抱えていましたもの。でもお兄様のことは大好きで……苦しかったと思いますわ」
「それで、王宮でおじ様に会って、なにか言ってもらったのですね？」
それがどういう状況でなのかは知らないが、きっとシーゼルにとってはすごく印象的で、大事な言葉だったに違いない。
最初にシーゼルに会った時、ふてぶてしくて傲慢そうだった彼が、レメクに対してだけは人が変わったようになったのを覚えている。
あれはきっと、そういう過去を経たからこその態度なのだ。
「どういう言葉をいただいたのかは、ワタクシにも教えてくださいませんでしたわ。でも、心の支えにしているのだと思いますの。……ちょっと妬けますわよね。殿方同士のそういうのって」
少しだけ拗ねたように言うフェリ姫に、あたしは大きく頷いた。
確かに妬けるのです。
けれど同時に、レメクの言葉を――それが何であったのかは知らないが――心の支えにしただろうシーゼルの気持ちもよくわかる。
レメクの言葉には、そういうところがあるのだ。
例えどんなことがあっても、ギリギリの線で大事なものを守らせてくれるような、そんな力が。
「……ワタクシはね、ベル。本当は知っていますの。シーゼルが沢山の姫君とお話をして、情報を集めているのは……お兄様の消息を

つきとめたいからなんだって」
「……」
「沢山の情報を集めて、それを有効利用することが大事だと言ったのはワタクシですわ。そして、シーゼルはすぐにそれを実践した。その動機は、いなくなってしまったお兄様なのです。見つけてどうしたいのかは、分かりませんけれど。見つけたいと、そう思って、今なお探し続けているのですわ」
「……でも、お義姉さま」
シーゼルは、たぶん、それだけのためにお姫様の間を回っているのではないと思う。
その中には、確実にフェリ姫のための部分もあるはずだ。たくさんの情報を仕入れて、その中で大事なものを選択して、フェリ姫に伝えたりとか……
「ええ。分かってますわ。そういう一面もあるということは。……それに、女の人と会話することを心から楽しんでいるということも！」
……あ。なんか、いい話になりそうだったのに、最後に違うモノが混じってきた。
見れば、しんみりしていたフェリ姫が、眦をつり上げてしまっている。
「名を負う者として、果たさなくてはならぬ責務を負う者として、立派になってくれるのはワタクシとしても嬉しいですわ。……ですけどっ。レンフォード家のいらない習性を受け継ぐ必要は無いと思いますのよ！？　あんの女好き一族……！」
姫君にあるまじき罵倒をするフェリ姫に、あたしは乾いた笑いをしながら遠い目になった。
そーいやアルトリートだかいう異母兄さんも、アディ姫とかいう巨乳の王女のこと口にしてたり、フェリ姫見て胸が無いとか言ってたりと、女の人に妙にからんでいる印象だ。
なんというか、血筋なのだなぁ……きっと。

あたしはプリプリ怒り出したフェリ姫を見ながら、ちょっとだけ思う。

人には、本当にいろいろなことがあるのだな、と。

最初に会った時には、あのシーゼルにそういう過去があるだなんて想像もできなかった。

フェリ姫にしてもそうだ。

王女になった際の経緯も、シーゼルと幼なじみであったことも、全く想像ができなかった。その時に教えてもらった言葉だけで、相手を判断して見ていた。

きっとその場かぎりの人であったなら、こんな風に過去を知ることはなかっただろう。

繋がりが深まることで、驚くような過去を垣間見て、少しまた少しとその人を理解する。

そしてその人達を通して、もっと沢山の人と繋がって、様々なことを知っていく。

不思議だと思う。

そういうのを何と表現するのかは、あたしには分からない。

けれど、レメクに聞けば微笑んで答えてくれるだろう。

確信をもって、そう思う。

答えはいつだって、あの人が持っているのだと。

だって今のあたしの全ては、レメクからはじまっているのだから。

3　繋がり（後書き）

※アデライーデ姫の赤毛は誤りではありません。理由はご本人登場までしばらくお待ちくださいｖ※

4　負う者

教皇という職業を簡単に説明すると『神様の代理人』であるらしい。

あたし達のいる大陸には沢山の国があり、その国ごとにいろんな神様がいるのだそうだ。

もちろん、その神様ごとに宗教とやらがあり、その宗教ごとに頂点に立つボスのような人がいる。

例えば、うちの国にいる教皇サマとか。

で、宗教っていうのはその国の文化とか風習を学ぶのに大事だから、最初に覚えないといけないのだそうだ。

あたしがレメク教わった『宗教』のは、五つ。

西方のイスカル教。

北方のノールス教。

南方のアスマダルタ教。

西中央のエラス教。

東中央のトゥーラ教。

他に有名なのは東の国のシンタオなのだが、あっちは宿のおねーちゃんやおにーちゃんから教わったりしてたのでわりとよく知っていた。

あの国の『格言』はなかなかに優秀なのですよ。カエルノツラニションベンとか。あたしもよく使ってはレメクに眉をひそめられています！

……あれ？　よくない言葉なのかな？

まぁいいや。

さてさて。我らがナスティア王国は、大陸の西中央の国。

手で『コ』という形を作ったときに、上側にくる指の中央部あたりがうちの国なのである。

この周辺の国は『エラス教』というやつを信仰していて、我が国

の教皇様はそのトップ。
すごいですよ!?　他国にも影響力があるのですよ!?
なんでそんなことになっているのかというと、この宗教を信仰している国の人々はもともとうちの国と同じ部族だったからなのだそうだ。
四百年前の降魔戦争の後、ナスティアを筆頭に固まってできたのがうちの国。
でも、その時に別の場所に定住しちゃった人々もいて、彼等が作った国が周辺の小国なのである。
もともと三十もの民族が集まって出来た集団で、それぞれに広大な土地をもっていたのだから、戦争後に分散しちゃっても不思議じゃない――らしい。
そのあたりの細々したことも教わっていますが、もちろんとっくの昔に忘れてしまいました。
……なんか隣のフェリ姫がすごいジト目で見てるけど、まぁそれはともかく!
そんな風に周りの国からも『へへ～っ』と拝まれる教皇様がいるのだから、西区の大神殿たるや凄まじい大きさと豪華さだった。
あたしが居るのは、その王都西区、大神殿前。
馬車でコトコト揺られて着いた、ナスティア王国における『神様のお家』である。
本当に神様が住んでるかどーかは知らないが、街の大人達はそう言ってたから、たぶんそうなのだろう。
実際、間近で見た大神殿は神様が住んでても不思議じゃないぐらい荘厳華麗だった。
ちなみに、荘厳とは「おお……っ！」となる感じで、華麗とは「おお～っ」となる感じである。
そんな素晴らしく美しい大神殿は、一般には公開されていない。
西区のシンボルでもある大神殿と大聖堂は、揃って西区最西端の中央にあるのだが、大聖堂がちょっと手前に建てられていて、大神

殿はその斜め後ろに建てられていた。
人々に親しまれているのは大聖堂であり、その奥にある大神殿に足を向ける者はいない。
なぜなら、大神殿は上流階級か上級神官しか入れない建物なのである。
大神殿前には大きな鉄格子の門があり、剣を下げ槍を手にした門兵がそこを固めている。
門兵が羽織っている外套（マント）は青。青いマントを羽織れるのは、兵士の中でも百人以上の部下をもつ隊長さんである。
こういう人に近づこうものなら、昔はそれこそ怒鳴り散らされたもんだった。
それが今や直立不動で敬礼しているのだから、身分ってやつは凄まじい。
あたしの中身は、全然変わってないのだが。
なんとも言えない気持ちで立つあたしの前には、ドンとデカイ扉が聳えている。
金縁、黒檀、神々のレリーフ。
妙にわかりやすい『神様がここにいるぞ』的な扉である。
その印象を強くしているのは、扉両横の柱にビッシリと刻まれた『祈りを捧げる聖人聖女』の彫刻達だろう。
左右に見えるそれらのおかげで、正直、荘厳だの華美だの言う前に気持ち悪かった。
ちょっとだけ想像してほしい。
自分より大きな『人間そっくりの石像』が、天井から床まで、柱の形に左右ビッシリとお祈りポーズで並んでいるところを。
なんというか、今にも彫像が動いてこちらをギロリと見つめてきそうだ。
「こちらが有名なエッケハルト・ゲルトナーの作、『祈り集う人々』ですわ」
扉の左右に展開する、綺麗すぎて不気味な一群を紹介するフェリ

姫。
　あたしはなるべく彫像達を直視しないようにしながら、フェリ姫の掌の動きにあわせて、目線を送るフリをした。
「大神殿の中は王城とはまた違った芸術品の宝庫です。神々が宿っていると称えられた素晴らしい彫像が、いくつも収められているのですよ」
「そ、そうなのですか」
　誇らしげに言うフェリ姫に、あたしは嫌な汗をかきながら相槌を打った。
　人間が石に変えられちゃったように見える彫像は、綺麗とか凄いとか言う前に恐ろしい。できればそんなモノはあまり見たくないのだが。
「大神殿にはめったに来られませんから、よく見ておくといいですわ。猊下がいらっしゃるのはこの神殿の奥にある『神々の間』を挟んだアルティア神殿。その道中には、それはもう他では見られない数々の彫像が」
「お義姉さま、神殿はいくつもあるのですか？」
　案内を待たずに神殿へと乗り込み、嬉々として語るフェリ姫の言葉を遮って、あたしは首を傾げた。可哀想に、案内人だろう神官さんが、慌てたようにあたし達の後をついてきている。
「ここが大神殿では無いのですか？」
「ここも大神殿ですわよ？」
「？？？」
　いっそう首を傾げるあたしに、あぁ、とフェリ姫は笑った。
「西区の『大神殿』は、五つの神殿から成っているのです。その全てを指して『クレマリス大神殿』と呼ぶのです」
「なんと！？」
「最奥にあるのが、『神々の王』レゼウスの神殿、その右に猊下のいらっしゃる『戦と勝利の女神』アルティアの神殿、左が『婚姻と出産の女神』ヘラテュイアの神殿。この三神殿が、大神殿区の玄関

である今居る神殿『光と太陽の神』アルバストロの神殿の対にあるのです」

「それだと、全部で四つなのですよ？」

「最後の一つは神殿の間にある『神々の間』。別名を『屋根のない神殿』とも呼ばれる場所ですわ。これは実際にご覧になったほうが早いでしょうね。口では上手く説明できませんの」

ふふふと笑うフェリ姫は、目をキラキラさせながら足を進めて行く。

「それに、この神殿に来たならばぜひ見ておかなくてはならない神像がありますの！　猊下にお会いする間に少しだけそちらに向かいましょう！」

そう言って彼女があたしを引っ張って行ったのは、大きな扉を三つほどくぐった先、巨大な白大理石の台座がある部屋だった。

いや、部屋というより通路だろうか？

奥に続く大きな通路のど真ん中に、巨大な台座がある。

「ご覧なさい、ベル。あれがゲルトナーの最高傑作『太陽と光の神』アルバストロですわ」

言われて見上げれば、やたらと高い所に裸のにーちゃんが立っていた。

イイ筋肉のおにーちゃんなのだが、いかんせん土台の高さとあたしの身長の低さとで、顔のほうはサッパリ見えなかった。

よく見えるのはムキッとした太腿とかお尻とかそのあたりだ。

「神々の中で最も美男と言われるアルバストロ神は、その身そのものが芸術だということであのとおりのお姿なのですわ！　素晴らしいでしょう！？」

嬉しそうに言うフェリ姫には悪いが、やっぱり見えるのは足とか腰の部分だけだ。

あたしはしょんぼりと周りの人を見渡した。

「あたしの身長では、お顔は見えないのです」

「まぁ！　それはいけませんわ。ぜひお顔を見ておかなくては！

とはいえ、そうですわね、この位置では見えにくいでしょうから、後ろに下がって、えぇと、そこのあなた、ベルを持ち上げていただけないかしら？」

「は、はいっ」

ズンズン進むフェリ姫とあたし達に追従してきた神官さんが、突然の指名に慌てて返事をする。

けれど、あたしは石像の前で微動だにせず頭上を見上げていた。

「お義姉さま。あたしはそれよりも、すごく気になるのですよ」

「まぁ？　なにかしら？」

あたしはあたしに見える範囲のものをじっくりと見上げ、自分の体を見下ろし、もう一度彫像を見上げて首を傾げた。

「神様の足には、見慣れないものがついているのです」

その瞬間、

なぜかフェリ姫が硬直した。

……おや？

「お義姉さま？」

フェリ姫は彫像を見上げた姿のまま、カチンコチンに固まってしまっていた。

見渡せば、あたしの声が聞こえたらしい辺り一面がギクシャクと強ばっている。

なぜだろう？　とりあえず、手近にいた神官さんに声をかけてみよう。

「あの神様についてるものは、なんなのですか？」

「え、ええ!?　あのっ」

「あれが神様の武器なのですか？」

「ち、え、いえっ、ちがっ」

えらい勢いで首を横に振られてしまった。

神様というのは、ものすごい威力の武器を身につけているらしいのだが、あの裸のにーちゃんは剣も槍も持っていない。なら、神様の体についてるアレが武器に違いないのだが、どうやらそれも違う

とか。
「違うのですか？」
「ち、違いますっ」
「あたしには無いのですよ？」
「そ、それは、無いです、わねっ」
隣のフェリ姫は真っ赤な顔でギクシャクと頷いた。なんだか錆びた時計の針のような動きだ。
「神様の印なのですか？」
「いえっ、それも、ち、ちがいましてよ！？　というか、もう見るのはおよしなさいっ！」
「お義姉さまがご覧なさいと言ったのです」
「いいえっ！　あなたには早すぎました！　見てはいけませんっ！」
「じゃあ、あの神様についてるものは」
「考えてもいけませんっ！」
何故だろう。フェリ姫は首まで真っ赤っかだ。
やたらと興奮しているお義姉さまに、あたしはため息をついた。
神様の下半身はそんなに秘密がイッパイなんだろうか？
今度レメクに尋ねてみよう。きっと即座に答えをくれるに違いない。
「……ううっ！」
なにやら隣で心を読み取ったらしフェリ姫が壮絶な声をあげたが、その意味は不明である。

半ば無理やりにアルバストロ神殿を駆け抜けさせられ、出た先が『神々の間』と呼ばれる大きな庭園だった。
「うわぁ……！」
目の前に広がった大きな空間に、あたしは歓声をあげる。
晴れ渡った空の下、地面には短い丈の芝がびっしりと生え、白い円柱や石像がズラリと並んで陽光に煌めいてた。

やや離れて作られた大きな神殿は三つ、あれがフェリ姫の言っていたレやらへやらで始まる三神の大神殿なのだろう。神殿の近くには大きな木があり、枝振りから察するにオレンジの木らしかった。

どうやらうちの国は、城下町のみならず神殿の中にも果樹が植わっているようである。

その大きな三神殿と、今居る神殿の間も『大神殿』と呼ばれているらしいのだが、見たところ屋根や壁といったものは見あたらなかった。

野原に柱と石像だけが等間隔に並んで建っている。ちょっと不思議な光景である。

「お義姉さま！　大きい石像がいっぱいなのですよ！」

「え、えぇ、そう、ですわね」

広々とした空間は、それだけで気持ちをスカッとさせてくれる。

思わず大きく深呼吸したあたしの横で、フェリ姫はぜひゅぜひゅ呼吸を整えていた。

「お義姉さま、運動が苦手なのですね」

あのちょっぴりの距離で、そこまで息切れがするとは……

「わ、わたくしのような者は、そんなに走り回ったりしないものなのですわ！」

「でも、ダンスもすごく体力いるのですよ？　お義姉さま、大丈夫なのです？」

「ダンスはダンスですわ！　力の抜きどころがあって……と、ベル、あなた、もうダンスのレッスンを受けていますの？」

「まだなのです。転ばずに歩けるようになったのが最近なのですよ」

ええ。今でもまともに歩けているかどうか不安ですよ。急ぐと速攻でスッ転ぶし。

「けれど、踊ったことがあるような口ぶりではありませんでした？」

「それはポテトさんの魔法のおかげなのです！　おじ様とクルクル踊ったのですよ！」

夢のような一時を思い出して、あたしはポワワンとつい数日前の

出来事を思い浮かべた。大きくなったあたしと、レメクのダンス。
あぁ……！　あと何年待てばもう一度……！
「ロードの魔法で……大きく！？　それは、すごく見てみたいですわね」
「すごかったのですよ！　おじ様の顔がすごく近かったのです！　飛びついたら足じゃなくて首に抱きつけちゃうのですよ！」
「まぁっ！」
「でも胸はぺったんこのままだったのです……」
ショボンと最大の欠点を述べると、フェリ姫もしょんぼりと肩を落として頭を撫でてくれた。
「あきらめてはいけませんわよ、ベル」
「あい、お義姉しゃま……」
「『婚姻と出産の女神』ヘラテュイアなら、きっとお願いもきいてくれるはずですわ。後で祈願いたしましょう」
「あい……。でも、祈る相手は愛とか美の女神では無いのですか？」
「『愛と美の女神』アウロディアよりヘラテュイアのほうが胸が大きいのですもの」
「なるほど！」
おおいに納得して、あたしは神殿の方へと足を踏み出した。
けれど、それはわずか数歩で止まることになる。
大理石の階段を下り庭園の石畳を踏んだ瞬間、サワッと空気が全身を撫でるのを感じたのだ。
（なに？）
思わず止まった足に、フェリ姫が振り返る。
あたしはそれに気づかず、体が浮き上がるような感覚に呆然とした。
（匂いが）
違う。
空気がずっと全身を包んでいるような、不思議な感覚。
水の中のそれに似た、まとわりつく何か。

何もないのに、何かある。
木々の姿は見えないのに、なぜか感じる濃厚な緑の匂い。
それでいてムッとするような臭気はなく、どこか清々しくて、心地よい。
（なんだろう、これ……）
初めての感覚なのに、どこか懐かしい感じがする。
少しだけ首を傾げ、ややあってその懐かしさに思い至って目を丸くした。
レメクの家だ。
古く立派な木々に囲われたクラウドール邸。街の一角とは思えないほどの深い緑。
この空気は、あの家の空気に似ている。
「ナスティアの聖地」
呟いたフェリ姫に、あたしは視線を向けた。
「魔物の軍勢に立ち向かう前、全ての部族を集めてナスティアが演説したのが、この場所だとされています。だから、ここは全ての始まりの土地。あらゆる部族がここで己の神々に祈ったのだそうですわ。その神々の似姿を建てたのがこの場所。この場所に立つ神々が、当時の人々が信仰していた神」
見渡せば、広い空間に並ぶ沢山の神像。
丁寧に彫られた人々の『祈り』。
「だから、ここを人々は『神々の間』と呼ぶのです。これほどの数の神像が並ぶ場所は他にはありませんの。そのせいなのか、それとも何かしらの魔術が施されているのか、この場所にはどんな嵐の時でも雨粒一つ落ちないのだそうですわ」
「雨が？」
あたしはキョトンと空を見上げた。
あたし達の頭上には晴れ渡った空が広がっている。遮るもの一つない空間は、雨を防ぎそうに無いのだが。
「不思議でしょう？　実際にその神秘を見ることができるのは、ご

く限られた人間だけですけれど……特別な場所なのだということは人々に知れ渡っています」

《もっとも、そのせいで神殿の神聖性に拍車がかかって、一部の神官の増長を招いたりするわけですけれど》

こっそりと心の声を送ってくるフェリ姫に、あたしは周囲を見渡してため息をついた。

全身から伝わってくる不思議な感覚は、確かにここを『特別な場所』だと思わせるに十分だった。

けれど、そういったものが自分の何かを偉くしたり凄くしたりするわけじゃない。

凄いのは場所であって、そこに住む人やそこに行き来できる人では無いのだ。

けれど、一部の神官にとっては違うらしい。

《人は錯覚を起こしやすい生き物なのだと、陛下はおっしゃっていましたわ。特別な場所に住んでいる者は特別なのだと、そう思い誤る者が多すぎる、と。……だから、ワタクシは養女に迎えられた時、決して認識を誤らない女になれと言われました。己は『己』という身と心だけで成る者である、と。その者の評価は他者がつけるものであって、自ら言うようなものではない、と。自分の持つモノや自分が得たモノで自らを飾ったところで、そんなものはただの『飾り』でしかない。己の価値にはなりはしない。それを決して誤るな、と》

フェリ姫の心の声を受け取って、あたしは並ぶ神像を見つめた。

そこにあるはずのない、一人の姿が目の前に浮かんでいる気がする。

並ぶ神々の像よりも美しい一人の姿が。

《名を負うということは、名に連なる全てを負うということ。その覚悟の無い者は、決して名を負うことはできない。自らの意志で『負う』ことを決めたのなら、命が尽きるまでその名を負い続ける責務をも負わなくてはならない。それが、名を負うということ》

名を負う、ということ。

《ワタクシの名はフェリシエーヌ。フェリシエーヌ・エアハルト・リーシェ・アルヴァストゥアル。陛下の盟友（とも）にして義娘。その名を負う者ですわ》

その名乗りに、ドクンと体の奥で大きな音がした。

（……名前……）

記憶がふとその蓋を軽く開く。

誠実な眼差し。神秘的な夜明け色の瞳。薄い唇が告げる名前。

――チガウ――

パチンと、何かが頭の中で弾けた気がした。

一瞬だけ真っ白になる光景。

違う。

違っていた。

名前が違っていた。でも、なんで？

足下の感覚がふいに消える。

目の前にある光景が白くなる。

見えているのは一人の姿だけだ。

先程まで幻のように見えていた美しい黄金の女性ではない。

あたしの大切な、誰よりも大切な人。

レメク。レメク――

レ
ア
ド
ン
レ
リ
ア
ク
メ
ス
ル
タ
「ベル！」
ふいに強く体を引き起こされて、あたしはギョッと体を強ばらせた。
目の前に驚いた顔のフェリ姫がいる。
倒れ込むようにしてその腕に抱かれているあたしは、パチパチと瞬きをしてフェリ姫を見上げた。
「……おねぇ、さま？」
「驚かせないでくださいませ！　いきなり……」
いきなり？
「いきなり浮いて……」
「浮いて？」
不思議なことを言うフェリ姫に、あたしは首を傾げた。

唐突にジャンプでもしたのだろうか？　あたしは。
「な、なんでもありませんわ。それより、早く猊下の所に参りましょう！」
半ば抱えるようにして、フェリ姫があたしを連れて走り出す。
あんまり体力ないのに、また走ったりして大丈夫なんだろうか？
心配になって、一緒に来てくれているはずの神官さんを振り返ると、彼は愕然とした顔であたしを見ていた。見てしまった何かはそれほど強烈なモノだったのか、棒立ちになってしまっている。
（あ、あたし、よっぽど変なジャンプとかしたんだろうか？）
やばい。
一応、王女さまっぽく振る舞わなくてはいけないというのに！
いや、だいぶ手遅れなような気もするけれどッ！
（はわわわわ）
このままいけば、レメクやアウグスタにまで迷惑をかけるだろう。
こうなったら教皇様の前でだけはシャキンッと変身しなくては！
頭を振って気持ちを切り替えたあたしは、一生懸命走るフェリ姫の横顔を見て（そういえば）と首を傾げる。
（……なんか、レメクの声が聞こえた気がしたんだけどな……？）
それは、何かとても大切な言葉だった気がする。
けれどそれが何だったのかは、今のあたしにはわからなかった。

女神アルティアの神殿は、先程まで居た『神々の間』とも、アルバストロの神殿とも違う造りになっていた。
形としては、巨大な円柱に支えられた神殿、ということで『神々の間』に近い。
アルバストロの神殿のように高い尖塔を持つお城のような造りではなく、大きな箱のような神殿だ。
そしてその内部も、アルバストロの神殿とは違っていた。
先の神殿が彫刻と彫像の神殿だったのなら、こちらは壁画と彫刻

の神殿だ。
その彫刻も、アルバストロ神殿の『神様の姿』を模したものとは違い、木々や花々の彫刻である。
それ以上に印象的だったのは、その床だろうか。
色とりどりの石で造られた床は、大きな一枚の絵になっていた。
黄金の林檎を差し出す美しい女神。その右手に握られているのは剣であり、金色の髪には宝冠でも髪飾りでもなく、黄金の兜を被っている。
「女神アルティア？」
「ええ。黄金の戦女神、戦勝の光明、輝ける剣、の称え御名で知られる戦神です」
……そんな名前は初めて知りました。
「非常に美しい女神で、黄金の髪と黄金の瞳を持っているのだとされています。けれどワタクシ、初めて陛下とお会いした時、きっとこの方こそ女神アルティアに違いないと思ったのですわ。瞳の色は違うのですけれど」
言われて、あたしは最初にアウグスタに会った時のことを思い出した。
……金色の魔女だと思ったもんです。もしくは女王様。
「ある意味そちらのほうが凄いですわよ？　ベル。真なる魔女は、神々すらも滅ぼす力を持っているのだそうですから。ほら、ずっと昔、それこそ神々の時代には、神をも恐れさせた『原初の魔女』がいたと伝えられていますでしょ？」
「そうなのです？　初耳なのですが」
「あら、そこは習っていませんのね。最初にこの大陸を統一したとされる魔女は、原初の魔女最後の生き残りだそうですわよ？」
ですわよ？　と言われても、そんな大昔の話などサッパリわからない。
何千年どころか万とかいう単位の昔話じゃなかろーか。
「いくらなんでもそんな大昔では無い……と思いますけれど。とは

いえ、ワタクシもそう詳しいことは存じませんの。大昔の神話や、大陸の歴史書にはたびたびお名前が出てまいりますから、なんとなく覚えてしまったぐらいで。こういうのはアディ姉様がとても詳しいのですけれど」

本の虫とか言われるお姫様なら、そういうのもよく知っているのだろう。

もし会えたら聞いてみようかな。

――ハッ！

「そうだ！　さっきの彫像のことも赤毛のお姫様なら――」

「それは尋ねてはいけませんッ！」

ナゼでしょう。

速攻で止められました。

「それよりも、猊下にお会いしなくてはいけませんのよっ。さっ、早く参りましょう！」

ねっ！　と言われてあたしは唇を尖らせながら頷く。

なんというか、フェリ姫はさっきから、あたしの疑問をはぐらかしてばっかりなのである。やはりこうなったら最後の手段はレメクだ。

「くっ閣下ごめんなさいませわざとではありませんのよワタクシのせいなのかしらいえ違うと思ってくださいませ」

なにやらフェリ姫が小声でブツブツ言っている。

どうも誰かに対して謝っているようなのだが、フェリ姫の言う閣下って誰のことだろうか？

小さく頭を抱えて小走りに駆けるフェリ姫に、あたしは首を傾げながらチョコチョコ走った。急ぎすぎると絶対に転ぶので、足運びにけっこう必死だ。

……それにしても、この神殿、他の神殿に比べてえらく人が少な

いな……

あたしは足下に注意しながら周囲を見渡した。

美しい薔薇や百合の装飾を施された壁や柱、王宮もかくやという素晴らしい壁画。

けれど王宮と違って衛兵達がおらず、さっきまでいた神殿のように神官の行き来もここには無い。

ガランとした美しい箱の中にあたしとフェリ姫の足音だけが響き、それはひどく寂しいことのように思えた。

神殿というのは、神様のいる場所だと昔聞かされた。

神様は寂しくないのだろうか？

こんなに静かで、人のいない場所。

あたしは人気のない通路と、開け放たれたままの部屋を通りがけに眺め、ふと、その中の一つを前に足を止めた。

小さな部屋だった。

すぐ隣は大きな部屋らしく、次の扉はずっと向こうにあった。

もしかすると、王城の大広間と控えの間のような関係なのかもしれない。

その部屋の中に、人がいたのだ。

あたしはずっと向こうを走っているフェリ姫を呼び止めかけ、すぐに口を閉ざす。

そうして、部屋の方へと足を向けた。

どうしてかは分からない。

けれど、この前を黙って通過してはいけない気がした。

部屋の中にいるのは、こちらに背を向けた白い髪のノッポさん。

深い黄色のマントを羽織ったその人を見ながら、あたしはひっそりと足音を殺して部屋の中へと踏み入れた。

そうして息を呑む。

部屋の中には一枚の大きな絵が掲げられていた。

黄金色の髪に、青みがかった紫の瞳。

気高く美しいその顔は、あたしのよく知る女王にそっくりだった。

アウグスタ。
そう呼ぶ相手の名前が、アリステラということを知ったのは、王宮に足を踏み入れてからだった。
綺麗でかっこよくてちょっと変な女王様は、なぜかあたしを気に入っていろいろと手を貸してくれている。
その理由の最たるものはレメクらしいのだが、あたしには彼女がなぜそこまでしてレメクを気にするのかは分からない。
きっと彼女には彼女の立場や理由があるのだろう、と。その程度にしか考えていない。
そう言えば、義理の娘になっちゃった今ですら、あたしはアウグスタのことをほとんど知らないのである。
そんなことを思いながら眺めた絵は、ひどく美しく、そして同時に、ひどく恐ろしかった。
（……違う）
あたしは、心の中でポツリと呟く。
（『この人』はアウグスタじゃない……）
顔立ちだけならそっくりだ。目も髪も、鼻や唇の形もそっくりだ。けれど違う。明らかに違う。
一瞬でもアウグスタだと思ったのが不思議なほどだった。
その違いは、彼女を包む気配だ。
その瞳の中にある意志の光だ。
アウグスタの持つ圧倒的な強さと力と潔さが、この絵からは全く感じられない。
絵だから、と言えばそれまでなのかもしれないが、少なくとも、あたしにはこの絵がアウグスタを描いたものだとは思えなかった。
だってアウグスタなら、こんな他人を見下したような目をするはずが無いのである。
ため息をついて、視線を絵から部屋へと移す。

本当に小さな部屋だった。
装飾過多な神殿の中にあって、その内装は驚くほど質素だ。
円形に近い小部屋の中は全て木で造られている。
所々に施された金と、彫り込まれた彫刻、寄せ木細工の美しい紋様。装飾といえばそれぐらいで、他の場所と比べると貧相と言えそうなほど。
天井はまるくカーブを描き、そこも見事な寄せ木細工。自然の色を上手く組み合わたそれは、目に優しくも美しい。
あたしはぐるりと見渡してから、絵の前に立つ人に視線を移した。
背の高いおじいちゃんだった。
白く長い髪に、長い髭。
ゆったりとした黄色のマントには金の刺繍がいっぱいで、なんだかひどく重そうだった。
中に着ている服はマントのせいでほとんど見えない。だが、きっと立派で豪華なやつだろう。
右手には金の杖が握られていて、それ一つ売れば軽く一年は遊んで暮らせそうな感じだった。
全部ひっぺがして売り飛ばしたら、いったい何年遊んで暮らせるだろうか？
（シーゼルの時も思ったけど、王宮とか神殿とかって、お金の塊みたいな人がいっぱいなんだな……）
こんな人が下街を歩いたら大変である。
きっと五歩も進まないうちに真っ裸にされちゃうことだろう。
指輪の一個ぐらいなら、あたしでもおこぼれもらえるかな？
なんとなくそんなことを考えながら、あたしはおじいちゃんの横に立ってみた。
「……」
おじいちゃんは絵を見上げたままだ。
それを見上げ、あたしは首を傾げる。
横から前へ回り込み、真正面にテンと立ってみた。

肖像画に集中しているおじいちゃまには、あたしの姿は見えないらしい。
あたしはジーッと下からおじいちゃまを見上げた。
綺麗な顔の人だった。
深い皺におじいちゃんらしさを感じるが、彫りの深い顔はすごく整っていて、きっと若かりし頃はとんでもない美形だったのだろうと思わせた。
どうやら王宮や神殿の奥には、こういう年とった美形がゴロゴロいるようだ。
「……んむ？」
そんなあたしの熱視線に気付いたらしく、おじいちゃまがひょいと俯いてこちらを見た。
その瞳の色にあたしは目をまん丸にする。
紫だ。
それも、青みがかった紫ではない。レメクほど赤みがかってはないが、青くもない紫である。
「……誰だ」
「ベルです！」
その瞳に魅入ったまま、あたしは咄嗟にハイッと手を挙げて答えていた。
なぜかおじいちゃんが沈黙する。
「……新しい王女か」
「そうなのです！」
あたしはおじいちゃんの目を見つめたまま肯定する。
あたしはこれまでの生活で、紫という色が一般的な色じゃないことを学んでいた。
例えば、紫紺の瞳は今のところ王族の血を引いている人しか持っていなかった。
じゃあ、紫色はどうなのか。
このおじいちゃんの紫の瞳や、レメクの赤紫色は？

あたしはキラキラと目を輝かせておじいちゃんを見上げた。
「……なぜ、ここに居る？」
「神殿に誰もいなかったのです。そしたらおじいちゃまの後ろ姿が見えたのですよ」
「……おじいちゃまは、よすがよい」
小さく呟いて、おじいちゃんは嘆息をついた。
「案内は、いなかったのか」
「居たのですが、神々の間に置いて来ちゃったのですよ」
「それでは、案内の意味が無かろう。仕方のない……」
もう一度嘆息をついて、おじいちゃんはあたしを見る。
その瞳はひどく深い色を宿していた。
「……こうして、もう一度メリディスの娘を見るとはな……」
「ベルなのです。メリディスの娘では無いのです」
「……なるほど」
……なるほど？
「ベル、か。そうか……違うか。そうだな。同じであるはずがない……」
「？？？」
おじいちゃんは呟きと同時にため息をつき、そのまま絵を振り仰ぐ。
同じようにして絵を振り仰ぎ、あたしはおじいちゃんのマントをきゅっと握った。
すると、何故か驚いたような顔で見下ろされる。
「？」
「……いや」
首を傾げてみせると、おじいちゃんは戸惑ったような目であたしを見つめ、あたしの手を見てから、もう一度壁にかかる大きな絵を

振り仰いだ。
「娘」
「ベルなのです」
「……いいから、娘。この絵の女のどう見る？」
「怖そうな女王様なのです」
忌憚無く言うと、ぶくっ、と変な音をたてられた。
「怖そう、か」
「怖そうなのです。アウグスタのほうがカッコイイのです」
「……アウグスタ、はよすがよい。それは、あの娘を揶揄する言葉だ」
おじいちゃんはちょっと眉を顰めて言う。
あたしは首を傾げて言った。
「アウグスタがそう呼べと言ったのです。それに、アウグスタなら今にきっと、誰もにそう呼ばれる凄い人になるのですよ」
「……どういう意味かな？」
「だって、アウグスタは強くて大きくて格好よいのです。あのお城は綺麗でおっきいけど、アウグスタの前には霞むのです」
そう、春の大祭の初日、舞踏会場であの二人を見た時に思ったのだ。
なんて美しいのだろうか。なんて強いのだろうか。
圧倒的な存在感と美しさで、全ての人の視線を攫っていった二人。
寄り添う光と闇の化身。
あの場には沢山の人がいて、そんな人達を収容できる城は確かに大きくて――
けれど、足りないと思ったのだ。
足りない。まだ足りない。もっと多く集められるはずだ。もっと多くの人が集うはずだ。
倍でも足りない。さらに倍でもまだ少ない。
初めて見る素晴らしく美しい光景のはずなのに、なぜかいつかどこかで見たことがあるような気がして、だからこそ妙に「少ない」

というヘンテコな感想を感じずにはいられなかった。
もっと沢山の人に囲われた二人を見たことがある気がするのだ。
もちろんそんなのは錯覚だと思うのだが。
「ポテトさんだって傍にいるのです。もっとこう、それこそ見渡す限りの全部使うぐらい、ババーンッと大きくて強そうなお城のほうが相応しいのです」
「……恐ろしいことを言うな」
口の端に苦笑をくっつけて、おじいちゃんはあたしを見下ろした。
両手をイッパイイッパイ広げて言ったあたしは、その言葉に首を傾げる。
何か怖いコトを言っただろうか？
「すると、娘」
「ベルなのです」
「おまえはあの娘に、世界を手にしろとでも言うつもりか？　見渡す限りの全ての土地を。あの娘はそれを望んではいないが」
「アウグスタが欲しいものは、アウグスタにしか分からないのです。それに、ポテトさんが言っていたのです。世界を欲するような者は世界の制することはできないと。得ようと思って得られるもんじゃないって言うなら、得ようと思ってないアウグスタの方が得られるのですよ」
「……おかしな理屈だな、それは。得ようと思わずして得られるものでもなかろう」
「それでも得ちゃったら、それはもう運命ってやつなのです」
「……運命か」
口の端を歪めて、おじいちゃんは眦を下げた。
「運命か……そういうことか……そうであるのなら、嗚呼……納得するしか、あるまいな」
「？」
小さくそう零して絵を見上げるおじいちゃんは、ひどく遠い目をしていた。

それは、いつか見たアウグスタの目に似た色の瞳だった。
その瞳自体がもつ色ではなく、そこに宿る感情の色。
どこか悲しい、思い出を振り返るような――――

「誰もを巻き込み、翻弄するものが運命という名の化け物だ。ならばせめて、名を負う覚悟のある者に、儂は道を指し示すとしよう」
「運命は化け物なのですか」
「そうであろう。人であれ何であれ、それの前にあっては塵芥と同じよ。道理も何もなく、人の意志や心など無視して、全てを力ずくで押し切ってしまうのが運命というものだ。あれほどおぞましく、無慈悲で恐ろしい力はあるまい」
「……」
どこか乾いたおじいちゃんの声に、あたしは寒々とした冬のことを思いだした。
お母さんが目覚めなかった朝のことを。
あたしが街角で死にかけた雨の日のことを。
「……でも、運命を切り開く人もいるのです」
例えば、あたしを助けてくれたレメクのように。
「切り開く時、運命は大きな代償をその者に課すだろう。何の対価も無く運命を変えられるものなどいない。人の世の理に反した者ですら、それはできぬものだと言っていた。それができるなどというのは、ただの夢幻にしかすぎぬ」
「じゃあ、何かを引き替えにして、別の運命を望むことはできるのですか？」
「……できるであろうな」
ポツリと呟いて、おじいちゃんはあたしを見下ろした。
「おまえが今ここにいるのも、あの『人ならざる者』がこの地に戻ったのも、おそらくそういった力の成したものであろう。……娘よ」
「ベルなのです」
「おまえは何を望む。この地で」

……このおじーちゃんも、人の名前を覚えない人だな……
「おじ様と一緒にいられることを望むのです」
「……なんと？」
怪訝そうな顔になったおじいちゃんに、あたしは胸を張ってみせた。
「おじ様と一緒にいられれば、それでいいのです。おじ様しか望まないのです」
「……アレか。あの……なにかそのへんでいつのまにか死んでそうなあやつのことか」
……なんか誰かさんと同じこと言ってるよ……
「昔のおじ様のことは知らないのです。今のおじ様は、目を離すと何か無茶をしそうで危ないけど、そのへんでいつのまにか倒れてそうな気は……するようなしないような……」
「微妙な答えだな……。しかし、相変わらずの無気力者、というわけでは無いのか」
なにか呆然とした顔で呟いて、おじーちゃんは嘆息をついた。
「……知らぬ間に、いろいろと動いていたのか。あの者達が来たように、この国はまた大きく動くというのか……」
なにかぼやいているが、言葉の意味はサッパリだ。
「娘よ」
「……だから、ベルなのです」
「おまえのことは、アリステラから聞いておる。……孤児であったな」
いきなり話がこっちに来た。
「そうなのです」
「……恨んでいるか？」
「『何を』ですか？」
首を傾げて問い返すと、細い目が大きく見開かれた。
あたしはもう一度首を傾げる。
「おじ様も同じ事をあたしに尋ねたのです」

そう、レメクも前にあたしにそれを尋ねてきた。
最低最悪な孤児院を粛正した後のこと――――

建物は古く、環境も劣悪ではあったが、歴史だけはあった孤児院をあっさりと潰し、彼はそこに新しい孤児院と、あたしの仲間達のお墓を作ってくれた。
教会を兼ねているそこで、生き残った仲間達は今、のびのびと暮らしている。
丸太で作られた一風変わった孤児院は、明るいうえに暖かく、木のいい香りがした。
庭の一角に作られたお墓の前には祭壇があり、事件のあらましと一緒に『二度と同じ過ちを繰り返さぬように』という文字が刻まれている。
祭壇には花の苗がいっぱい植えられていて、今頃綺麗な花を咲かせているだろう。
……見せてあげたかった。
あたしの大切な仲間。友達。
ああ、プリム達に見せてあげたかった。
泣くあたし達を抱きしめ、慰めてくれたレメクは、その日の夜、ポツリとため息を零すようにしてあたしに問うたのだ。
国を恨みますか、と。
「恨んで友達が戻ってくるなら、あたし、いくらだって恨むのです。考えるたびに、悔しくて、お腹の中がグラグラして、頭がカッカするのです」
でも、一番恨んでいた相手はもう処罰されている。
なら、それ以外に……誰を、何を恨めばいいのか、わからない。
「……エットーレ達と一緒にお金を奪ってたっていう、悪い人達は全員許せない。みんなの命を返してって言いたい。あいつらを放置してた人達にも言いたい」
……でも。

「でも、アウグスタは、頑張ってたの。いっぱいいっぱい、頑張ってたの。エットーレ達のことはすごく恨んでる。でも、あの人もこの人もって、どんどんその先にいる人を挙げていったら、最後には王様のところまでいっちゃうの。アウグスタのところまでいっちゃうの」

それは駄目だと、そう思った。

理由はわからない。

ただ、そこまで次々に恨む人を増やしていっては、いけないと思った。

「どこまで恨んでも、気持ちは全然晴れないの。スカッとしないの。恨んでもプリムは帰って来てくれないし。どうしてって、どうしてこうなったのって、そう叫びたいけど！　でもそれしちゃったら、アウグスタはきっと悲しむの。おじ様もきっと悲しむの。それは嫌なの」

「……だが、国のことで責任を負うのは、国王の役目だ」

静かに言ったおじーちゃんに、あたしはギュムッと唇を引き結んだ。

おじーちゃんは眼差しをあたしに向け、表情の見えない声で言う。

「同じく、儂の管轄下の者の不始末は、儂に責任がある」

「……」

「娘。おまえには、儂を恨む権利がある。なぜあのような神官をのさばらせていたのかと、なじる権利がある」

「……？」

「儂がもっと目を光らせていれば、下の管理を徹底していれば、少なくとも悪辣な神官がいなかった分、おまえ達の暮らしはまともになっていたはずだ。ならば、それが出来なかった儂もまた、おまえの友達を『殺した』者だ」

「……おじいちゃんが？」

「……『おじいちゃん』か。ベラあたりが聞いたら、大喜びで笑う台詞だな」

「ベラ？」
「弟の子だ。……フン。儂より若いくせに、病なんぞで先に逝きおった。あの大馬鹿たれが今ここにいれば、もう少し世の中は楽であったであろうよ」
「弟さんの子供？」
「おまえは、ベラの養子と婚約したのであろうが」
「おじ様のこと？」
じゃあ、ベラっていうのは、ステファンおじーちゃんのことだろうか。
「ステファン・ベラトリーテ・ベネディクトゥス・アルヴァストゥアル。クラウドールの名で言うなら、ステファン・ベラトリーテ・フォン・クラウドールか。……ベネディクトゥスの名は、嫌っておったな」
「……おじ様も、好きじゃない名前がいっこあるみたいです」
「フン」
小さく鼻で笑って、おじーちゃんは口元になんともいえない微苦笑を浮かべた。
「アレの名前か。……嫌っているのは、目を背けているからであろう。確かに、嫌いにならざるをえん名前であろうが……負う気が無いから、余計にであろうよ。今まではそれもよかろうと思っていたが、あのような輩が出るようでは、今までのようにはいくまい」
ため息を零すようにして言うおじーちゃんに、あたしは首を傾げた。
一人で納得してないで、こっちにもイロイロ喋って欲しいってなもんです。
「娘よ」
「……いいかげん、名前を覚えてほしいのですよ」
「おまえ、名を負う気はあるか」
「その名前をまず覚えてほしいのですよ」
「アルヴァストゥアルの名だ」

……話聞いてないな、このじーちゃん……
あたしはブスッとして唇を尖らせた。
「アルヴァストゥアルなんて名前、知らないもん」
「おまえが此度得た名前だ。王族として」
思わず振り仰いだあたしに、おじーちゃんは真っ直ぐな目を向けて言葉を紡ぐ。
「名を負う覚悟はあるか。王族として、あの不肖の子供と一緒に、その身をとりまく全てから目を逸らさず、不条理でおぞましい運命というものと向き合う覚悟が」
「それがおじ様と一緒なら、どんな覚悟だってするのですよ」
「できぬ覚悟まで含めずともよい。だが、これだけは明確な覚悟を必要とするぞ、娘」
……だから……
「ベルなのですってば！」
「あの者のためなら、世界を敵に回す覚悟はあるか？」
「あるに決まっているのです！」
反射的に叫んでから、軽く目を瞠ったおじーちゃんに「むふんっ」と鼻息荒く腕組みした。
「見損なってもらっちゃ困るわ、です！　そりゃあ、あたしはちっこいけど、おじ様のためだったら誰が相手でも立ち向かってやるのです！」
「……それが、おまえを娘としたアリステラであってもか」
「そんなことはさせないのです！」
ビシッと指をつきつけて、あたしは目をギンギンにつり上げさせた。
「大きな道には、抜け道だっていっぱいあるのです！　なんでもかんでも真正面からぶつかればいいってもんじゃないのです！　敵に回す覚悟があっても、敵に回したくない人からは逃げるのです！」
「……微妙な答えだな、それは」
なんとも言えない顔で笑ってから、おじーちゃんは軽くため息を

ついた。
「……だが、考え方はわかった。……なるほど。あの馬鹿たれが選ぶのは、おまえのような娘か」
「？」
その生ぬるい笑みはどういう意味だろうか。
そしてその『馬鹿たれ』というのはレメクのことだろうか？
「あれも存外、育て親に似ているな。それとも、こういうのも母親依存症というのか？　あれの母親は、実質あの娘だったようなものだからな……」
「おじーちゃんは、もう少し一緒にいる相手のことを考えて独り言を言うべきだと思うのですよ」
「おじーちゃん、はよすがよい。儂にもアルカンシェルという名がある」
「あたしにもベルという名があるのですよ、おじーちゃん」
「弟の息子の嫁か……長生きはするものだが、いささか長生きしすぎた気がするな」
「……ちょっとは人の話を聞くのですよ、おじーちゃん……」
ぺち、とおじーちゃんの足を叩いて注意を促すが、おじーちゃんは変な笑みを浮かべるだけでこちらの言葉には答えてくれなかった。
やれやれである。
「だが、そうだな……少しは、楽しくなってきた。これなら、あともうしばらく、長生きをしてみたいと思えるであろうよ」
「長生きするのは良いことなのですよ、おじーちゃん」
「ならば、あの馬鹿たれにもそれを言うがよい。……あぁ、おまえの連れが呼んでいるようだな」
苦笑して、ふとおじーちゃんは顔を上げた。
耳をすませば、なるほど、あたしを呼ぶフェリ姫の声が聞こえている。
「ぁっ。お義姉さまとはぐれたままだったのですよ」
「あぁ、こら。急がずともよい。どうせ用は済んだのだ。ゆったり

と構えるがよい。おまえ達は、とかくせっかちでいかん」
「おじーちゃんはのんびりしすぎなのですよ。探してる人がいるのです。こっちもおっきな声で返事するのが礼儀なのですよ」
「そんな礼儀は初めて聞くな」
苦笑を深めて、おじーちゃんは悠然と足を運びはじめた。
その動きはとてもゆっくりで、ふとあたしは不安になる。
「おじーちゃん、服が重いのではないのですか？」
「ああ、この年になると、堪える重さだな」
「脱げばいいのですよ。無理はイカンのです」
「だが、それがこの名の重みでもある。負えなくなった時が、退く時だ」
「負う重み？　なのですか？」
首を傾げるあたしに、おじーちゃんは頷いた。
そして、静かな眼差しであたしに告げる。
「娘よ。あの馬鹿たれに……おまえの夫になる男に、伝えておくがよい。名前から逃げようとすることに意味は無いのだと。名を持たぬ者が名乗りをあげ、名を持つ者が彷徨うような世の中だ。嘘はやがて己の身に返ってくるであろう。……名を負う覚悟ができたのなら、早めに儂を尋ねて来るがよい。全てが手遅れになる前に」
「手遅れ？」
薄く笑って、おじーちゃんは細い目をいっそう細めた。
深い皺を刻む顔が、どこか悲しげな笑みを浮かべる。
「運命は動き続ける」
あたしの名を呼ぶ声が近づいてくる。
フェリ姫以外にも、沢山の足音。
神官さん達も一緒に探してくれていたのかもしれない。
おじーちゃんと一緒にゆっくりと歩くあたしの頭の上に、どこかため息にも似た声が落ちた。
「名を負う覚悟のない者は、ただ淘汰されるだけだ」
アントワールのようにな、と。

5　アデライーデ

「あんと、わーるさん？」
どこかで聞いたことのある名前に、あたしは首を傾げた。
おじいちゃんは口の端を皮肉げに歪ませて、後ろに置いてきた絵を顎でしゃくる。
「この世で最も愚かな男に嫁いだ……愚かな女だ」
「はぅ……」
振り返り、見上げた先にいる美女は、冷ややかな目でこちらを見下ろしている。
「どことなくアウグスタに似ているのです」
「母親だ。似るのも道理であろうよ」
「お母さん！？　というと、第二王妃様に負けちゃったという、あの！？」
「負けた、か……言いにくいことを言う娘だな」
おじいちゃんはあたしを見下ろしながら、なんとも言えない微苦笑を零した。
「確かにな……『あの女』も、外見だけならアントワールにも勝る美しさであった。だがな……ああいう女は、国を滅ぼす元にしかならぬ」
「国を、なのですか」
「そうだ」
頷いて、おじいちゃんは深く嘆息をついた。
「『傾国の』とは姿の美しさを称えての言葉であろうが、実際に国を傾けるのは、美しさ云々よりも中身の軟弱さだだ。アリステラを見れば分かろう？　外見の美しさだけでなく、中もまた強靱な女であるなら、国が傾くことはそうそうない。……前王の第二妃は弱かった。あまりにも弱かったのだ……アントワールと同様に、な」
「……」

ゆっくり歩くおじいちゃんに連れ添いながら、あたしは皺の深いその顔をジッと見つめていた。
あたしは前王を知らない。
第二妃様や、アウグスタのお母さんのことも知らない。
知っているのは、他人から聞いた話だけだ。
ずいぶん前に亡くなったという第二王妃。——綺麗で、無欲で、儚い人。
「ヴェルナー閣下は、無欲で綺麗な人だって言ってたです」
「フン……ヴェルナーの小僧か……惚れた相手のことだ、良い部分しか見えなくても、仕方のないことであろうよ」
「閣下は小僧さんなのですか」
「儂からすれば、たいていのものは皆、小僧や小娘だ」
言って、おじいちゃんはあたしを見下ろした。
「おまえなど、赤子も同然であろう」
「し、しっけいなのです！　あたしだって、それなりに成長してるのです！」
「ナリが小さいのは、栄養が足りておらなんだからであろうよ。あの馬鹿たれがついておるのだ。放っておいても肥えるであろう」
「こ、肥えるのはイカンのです。あたしには、格好良いベッピンさんになっておじ様を誘惑するという、すーこーな使命があるのです」
「……おまえは本当に、あの娘に似ておるな……」
苦笑を深めて、おじいちゃんは部屋の外に一歩を踏み出した。
「猊下！？」
すぐ近くから悲鳴のような声があがる。
見れば、慌てたようにフェリ姫と神官一同が姿勢を正していた。
「御前をお騒がせして申し訳ありません！」
「……いや、よい。この娘を捜していたのであろう」
チラッと見下ろされ、あたしはチョコチョコとおじいちゃんの横に並んだ。
「ベル！」

「おねぇしゃまっ！」
パッと飛び出してきたフェリ姫に、あたしもポンと飛びついた。
「あなた！　どこに行ったのかと思ったら……！」
ひしと抱き合うあたし達に、おじいちゃまは苦笑して言った。
「儂を見つけて、足を止めてしまったらしい。伝令を受けながら、このような場所にいた儂にも責があろう」
「あ、猊下っ。し、失礼いたしました」
慌ててあたしを背に庇い、フェリ姫が綺麗な一礼をする。
「この度は、ワタクシの妹が」
「よい」
フェリ姫の言葉を遮って、おじいちゃんは言葉を告げる。
「もう、話しはすんだ。二人とも、王宮へ戻るがよい」
「え！？　ですが、あの……」
「どのような娘なのか、分かった。だから、もうよい」
「そんな……」
フェリ姫の顔がみるみるうちに青くなる。
あたしは首を傾げ、おじいちゃんを見上げた。
「おじーちゃんが、教皇サマなのですね」
「そうだ。……察しておらなんだのか、おぬし」
「偉いおじーちゃんだということは、分かっていたのです。立派なお洋服着てるし」
「べ、ベル！」
「よい。……娘よ」
「だから、ベルなのです！」
「それは、愛称であろう」
「？」
愛称？
「おぬしの名は、もっと長い。儂は、ナザゼルのような『目』も、リーシェのような『耳』も、おぬしのような『鼻』も持っておらぬが、真なるものを探り当てることはできる。おぬしが人の善し悪し

を嗅ぎ分けられるようにな」
「ふに？」
意味がわからず、あたしは首を傾げた。
もしかして、おじいちゃん、じゃなく、教皇サマも、種族的な何かを持ってるのだろうか？
「一段落ついたら、同胞のいる森を尋ねるがよい。あの馬鹿たれも、再三希望を出しておった……。儂が女王を説得しよう。おぬしは、もう少しおぬし自身のことを知らねばならぬ。……あの馬鹿たれのこともな」
「シャーリーヴィの森に行くのですか？」
「あぁ。一度、会っておくとよかろう」
そういえば、レメクもあたしをそこに連れて行こうと頑張ってたな……
置いて行くわけじゃない、と約束してもらっているので、行くのもいいかもしれない。
そう思った瞬間、ぎゅっ、と腕を掴まれた。
って、お義姉様っ！？
「ですが……ですが、ベルはワタクシの妹ですわ！　誰が何と言おうと、ワタクシの妹になったのですわ！」
「……リーシェよ」
「森になんかやったりしないのですわ！　ワタクシの妹として、城で暮らすのです！」
「……落ち着くがよい、その娘が王族となることに、儂は異を唱えておらぬ」
「え……っ！？」
驚いて叫ぶのをやめたフェリ姫を見つめてから、教皇サマはあたしを見下ろして「娘」と呼びかけた。
……どーあがいても、ベルとは呼んでくれないようである。
「おぬしには『ステラ』の名を贈ろう」
「すてら？」

「王族となった者には、教皇が名を贈る習わしになっている。つまりは、そういうことだ」
言われて、あたしはフェリ姫を見た。
お義姉さまは安堵のあまり涙混じりにあたしをぎゅっと抱きしめる。
「素敵な名前ですわ、ベル！」
「親族か、それに準ずる者でなくば、名を贈ることはできぬ。おぬしはこれで、王族となった。……ステラよ」
ぬぉ。自分のつけた名前で呼びやがりますか、教皇サマ！
「王女としての責務を果たすがよい」
王女としての責務。
なんでしょう、それは。
あたしはジッと教皇サマを見上げ、冴え渡る頭脳を煌めかせて自ら答えを出した。
「任せておいて！　おじ様はあたしがメロメロにしてあげるのです！」
「……どういう経緯でそうなる？」
なぜかご一同様が顎を落っことしたが、違うと言われなかったからきっと正しいのだろう。
セイリャクケッコンが王女様のお仕事なのだから、あたしも頑張っておじ様をデレデレにするのだ。
「まぁ、よい……さぁ、二人とも、王宮へ帰るがよい。おぬし等に会いたがっている者も多くいよう」
「あ、は、はい」
「あい！　おじ様の所に帰るのです！」
「ベル！」
窘められ、慌てて首をすくめるあたしに小さく苦笑して、教皇サマが踵を返す。
相変わらずゆっくりと動くその背に綺麗な一礼をして、フェリ姫はふと表情を引き締めて言った。

「猊下。一つだけお尋ねしたいことがございます」
「……なにかな」
ゆっくりと歩きながら、教皇サマが呟くように促す。
「つい先程、先王陛下の御落胤という殿方と会いました。猊下は、かの殿方を王族と認められたのでしょうか？」
「……あの若造か……」
ピタリと足を止めて、教皇サマは呟いた。
だが、こちらを振り向かない。
声に苦笑を滲ませて、教皇サマは言った。
「愚王の息子のわりには、まだ分別のある若造であったな……」
「！？」
その一言に、フェリ姫はビックリして目を見開いた。
「ですが……あの殿方は……」
「王族の血を引く者は少ない。……もともとクラヴィスの血統は、身に持ちたる魔力が強すぎる。受け止められる母体でなくば、新たな生命は宿らぬのだ。血が濃くなれば濃くなるほど、その傾向は高まる。……愚王の下劣な振る舞いに反し、子が少ないのはそのためだ」
「す、少ない血統を守るためでしたら、お認めになると仰るのですか！？」
「正統なる血は、評価せねばならぬ。だが……どのような血であってもよいというわけではない」
あたしには意味不明なやりとりをして、教皇サマはまた歩き出した。
フェリ姫はギュッと拳を握りしめて佇む。
「リーシェ。そして、ステラよ。時間があれば、また参るがよい。おぬし達ならば、よい退屈しのぎになろう」
フェリ姫は弾かれたように顔を上げ、顔をほころばせて頷いた。
「ありがとうございます、猊下」
教皇サマは答えない。ただ、ゆったりとした足取りで廊下の向こ

うへと去って行った。
「お義姉さま……？」
あたしは残された神官達とフェリ姫を交互に見る。
フェリ姫はなにやら獲物を狙う猫のような瞳でニッコリと笑った。
「さぁ、ベル。早く陛下にお会いしなくてはいけません。すぐに王宮に帰りますわよ！」

教皇サマという人は、本当に本当に偉い人である。
お城から大神殿に行く最中にフェリ姫が教えてくれたところによると、こうだ。
貴族――政策を決め、王様に可否や裁可を申し出る人。
国王――政策を決定する国のボス。
教皇――唯一、国王の決定を覆せる人。

本当はもっと詳しく教えてもらったのだが、もちろん半分以上覚えていない。
で、前の王様の時代は、王様そのものがダメダメな人だったから、無茶苦茶な政策を止めるのにかなり大変だったらしい。でも、教皇サマが王様を押さえていてくれたので、変な命令を出さずにすんでいたのだそうだ。
とはいえ、教皇サマが「駄目だ」って言っても、何人かの偉い重臣と国王が結託してしまえば、ダメダメな案だって通してしまえたらしい。三方のどれかに力が傾かないように、という配慮から、そうなっているんだそうだ。
詳しくは教えてくれなかったが、綺麗なおねーちゃんはお城の女官にならなきゃいけないとか、そういう「あはん？」な命令があったとかなかったとか。

前の王様……イロイロ困ったちゃんな人だったんだなぁ……

しかし、今、大神殿から城に戻りながらフェリ姫が語るのは、昔の困ったちゃんな王様のことではなく、城で見た困ったちゃんぽい二人組のことである。

「つまり、猊下もあの『殿下』をすぐに王族と認めるつもりは無い、ということですわ」

鼻から息を吐きそうな勢いでフェリ姫はそう言った。

「『殿下』って、あのガラの悪い人と一緒にいた、もう一人の方？」

「ええ。あのサイッテーな殿方と一緒にいた、影の薄そうな殿方ですわ」

……なにげに酷いことゆってる。

「先王によく似たご容姿といい猊下のお言葉といい、あの御方を先王陛下のご子息とみて間違いないようですわね。問題は、どうしてこの時期においでになったのかということですけれど……」

言って、フェリ姫はあたしを見た。

あたしは首を傾げる。

「あたしが、関係しているのです？」

「……そう考えるのが妥当でしょうね。シーゼルのご母堂たる御方を悪く言いたくはありませんけれど、相変わらず器の小さなご婦人ですわ。正当な血をひかない名前だけの王族を増やされるぐらいなら、馬番の子であろうともいっそ血をひいている子供のほうがマシだとでも考えたのでしょう」

「今まで隠していたのに、ひどいのです」

「まったくですわ！　ワタクシ、これから陛下のところに文句を言いに行くつもりですの。どうせあの二人も陛下に謁見を願うつもりでしょうし！　……それにしても、嗚呼！　なぜわざわざ他国からの賓客の多いこの時期に！？　悪意あるにしてもあんまりにも考え無しですわ！」

ギリリ、と歯を食いしばるフェリ姫に、あたしは途方に暮れた顔で肩を落とした。

「それも、あたしのせいなのです？」
「なにを言うのです！　あの女の根性悪さがあなたの責になるはずがないではありませんの！　あの女は……失礼！　あの女性は昔っから選民思想に凝り固まった前時代的な遺物なのですわ！」
……だいぶ酷いことゆってる。
「でも、前の王様の妹さんで、アウグスタのオバサンなのです」
「ええ。最低の王の最悪の妹ですわ。あの兄妹がいなければ、この国はもっと豊かでありましたでしょうに！」
ぼすんぼすん、とシワのよったクッションを殴っていたフェリ姫は、ふと何かに気づいたようにあたしをジッと見た。
「それより――あと少ししたら正午ですわね。ベル、昼食はどちらでお召しになるの？」
「ご飯です！？　もちろん、おじ様と一緒に食べるのですよ！」
「まぁ」
目をキラリと光らせたあたしにフェリ姫は上品に微笑み、そっと声をひそめて言った。
「では、これを忘れてはいけませんわ。今まで言い忘れていたかもしれないのですけど、侯爵と同じ場所で起居されていることを決して口にしてはいけませんわよ？」
「ほぇ？」
「以前ならともかく、今は婚姻公示の期間なのですもの。本来、その期間は、婚約者となる二人は同じ家で住んではいけませんの」
なんと！？
「婚姻公示は四十日間。その間は同居不可ということです。なので、侯爵は王都のお屋敷で起居されていることになっているのですわ。王宮で見かけた場合は、陛下に呼ばれて来た、ということにしていますの」
「でも、お城には門番さんがいるのですよ？　門のところで出入りが無かったら、やっぱりばれちゃうのではないのですか？」
「そこは大丈夫です。あの侯爵ですもの。人知れずこっそり城にあ

がっても不思議ではありませんし、面と向かって尋ねられる人なんて少ないですから、うやむやにしてしまえますわ！」

……レメクって……意外とグレーな人なのですね……

「だから、あなたも喋ってはいけませんわよ？」

「でも、侍女さん達には見られたのですよ？」

「ワタクシの侍女達なら問題ありませんわ」

「違うのです。花を持ってきた侍女さん達なのです」

「……何時頃、ですの？」

「朝早かったのです。おじ様に髪を編んでもらってた時に来たのですよ。あと、朝食を持ってきてくれた料理長さんにも見られているのです」

そして料理長さんは輝く笑顔で謎のサムズアップをくれました。

「料理長なら大丈夫ですわ。あの方、昔から侯爵贔屓ですもの。……他の侍女達についてはワタクシ達のほうでなんとかしてさしあげます。平気ですわよ。あなたと侯爵の濃い間柄を考えれば、いくらでも言い訳が作れますもの！」

「お願いするのです！」

頼りになるお義姉さまに、あたしはギュッと抱きついた。フェリ姫もあたしをギュッと抱きしめてくれる。

「では、昼餐会まで一時間ほどありますから、ワタクシと一緒に陛下にご挨拶に参りましょう！　その後、侯爵のところにお帰りになるとよいですわ」

「にょっ！？　お昼ご飯は正午では無いのですか？」

「市井ではそうかもしれませんけれど、貴族の昼餐は一時頃ですわ。その後、三時にお茶会があって、七時頃に晩餐となるのです」

「お昼とお茶の時間にほとんど間が無いですよ？」

「ええ。だから、昼餐は軽いものがほとんどなのです」

あたしは毎回ガッツリ食べてた気がするのだが……

「それは、侯爵があなたのために特別に料理を作っていらっしゃったからではないかしら？」

「う……」
そういえば、最初の頃などは食べる量に唖然とされたものだ。今では慣れてしまったのか、大量のご飯を用意してくれているのだが。
「閣下はきっと、ベルが大事でしかたないのですわ。お顔を見ればわかりますもの」
「ほ、本当？」
「ええ。もちろんですわ」
力強く請け負って、フェリ姫は輝く笑顔で言った。
「だってワタクシ、あの方の笑顔なんて、あなたと出会うまで見たことも聞いたこともありませんでしたもの！」

※　※　※

王様のいるお城のメインといえば、やはり謁見の間だとあたしは思う。
なにせ雲上人である王様と会うことができる場所なのだ。それはそれは凄い造りに違いない。なんたってあのアウグスタが人と会う部屋なのだから！
そう思っていたあたしは、フェリ姫と共に訪れた部屋を見てキョトンとした。
普通の広間よりやや広めの部屋。
大広間ほど大きくも広くもないそこは、造りだけなら大広間と同じような形になっていた。
高い天井も、つり下げられた豪華なシャンデリアも一緒だ。
違うといえば、大広間のように両端に二階席がなく、頭上から見下ろされることはないということ。
そして、正面最奥に設置された玉座の後ろが、ガラス張りになっているということだった。
……なんか、思ったよりフツーなのだな……
「来たな、リーシェ。ベル」

背後に光を従えて、豪奢な美貌が宛然と微笑む。
謁見の間にはすでに何人もの人々がいたが、そのほとんどは両端に避けられていた。どうやら、謁見が終わったあとの何人かは――おそらくかなり高位の人々だろうけど――そのまま部屋に留まることを許されているらしい。
その中にバルディアの王太子を見つけて、あたしは目を丸くした。
（王太子妃は……いないのね……？）
別に居てほしくはないのだが、いなければいないでレメクのところにちょっかいかけに行ってやしないかとハラハラする。まぁ、ポテトさんがいる以上、よっぽどでないと誰も近寄れないだろうけど。
「ご機嫌麗しゅう、陛下」
「ごきげんうるわしゅー、陛下」
アウグスタの前で綺麗な一礼をしてみせたフェリ姫に、あたしも習って一礼する。
アウグスタは相好を崩してあたし達を抱きしめた。
「はは！　おまえたちは本当に可愛いな！　教皇に会いに行ったのだろう？　どうだった？」
「さすがは猊下、素晴らしい威厳に胸が高鳴りましたわ」
……そんな様子は欠片も無かったと思うんだけどなぁ……お義姉さま……
アウグスタにギューされながら遠い目になったあたしは、綺麗な瞳を向けられて慌てて言葉を紡いだ。
「た、たくさんお話をしてもらったのです。名前もつけてもらったのですよ」
「ほう！　名前を貰ったか！」
ザワッと揺れた周囲に、あたしは咄嗟に頭を巡らせかけ――
「んふふ！　さすがの頑固者も、おまえの愛くるしさには敵わなんだということか！」
「ぎゅむっ！」

「へ、陛下！　ベルが窒息してしまいますわっ」
相変わらずスバラシイむっちりんに圧迫されて、そのまま腕に閉じこめられてしまった。
……とはいえ、この感触……どうやらまだ偽乳っぽい。
「それで、どんな名前をもらったのだ？」
暴れるに暴れられず（なにせ暴れれば乳がズレる）、解放されるのを待っていたあたしは、ぷはっと息継ぎをしながら答えた。
「ステラ、なのです」
「ステラか……良い名だ。実に良い名だ」
深々と頷いて、アウグスタはあたしの額に唇を落とした。
「ふふふ、私とお揃いだな。ステラとは星という意味だ。ベル。教皇はおまえを王族として認め、祝福した。おまえとレメクの結婚が楽しみだ！　なぁ、リーシェ」
すぐ近くのフェリ姫の額にも唇を落として、アウグスタは満足げに微笑む。
フェリ姫もニッコリと微笑んだ。
「ええ、とても楽しみですわ、陛下」
「その前に、おまえがレンフォード家に嫁ぐのが先か。ん？」
「まぁ、いやですわ、陛下ったら」
可愛らしく照れてみせるフェリ姫に、あたしも同じような仕草を真似してみた。
なぜかアウグスタにはニンマリ笑われてしまったが。
「レンフォードといえば、叔母上がなにやら珍しい話題を持ってきてくれていたな。本人はまだ城に到着していないが」
「「え？」」
あたし達を手放しながら言ったアウグスタに、フェリ姫とあたしは思わず顔を見合わせた。
「陛下。噂のお二方でしたら、ワタクシ達、猊下にお会いする前に王宮の奥で顔をあわせましたが」
「案内の人がいなかったので、お義姉さまと二人でお城の入り口ま

で連れていってあげたのです」
「ほぅ……？　さすがだな、リーシェ。叔母上の話をおまえはもう知っているのか」
「はい。猊下からお言葉もいただきました。口ぶりから察するに、猊下はすでにお二方とお会いしておいでのようでしたが」
「ふむ。だが、私のところには挨拶はおろか、到着を知らす伝令も来ておらんぞ？　それに、叔母上自身はまだ王都にも着いていないらしい」
「まぁ……」
フェリ姫が驚いて眉をひそめ、あたしも首を傾げた。
当人があれだけ堂々と城の奥まで来ていながら、王様に連絡がいっていないってどういうことなんだろう？
「解せませんな……」
ふと渋い声が聞こえて、見ればヴェルナー閣下が眉をひそめていた。
「どなた様であれ、王宮の奥に足を踏み入れるのなら、陛下の許可を得なくてはなりません。まして、新参の者が勝手に歩き回るなど、あってはならぬことです」
「左様。例えレンフォード公爵の御一族といえど、王城内で勝手な振る舞いは許されません。そもそも、公爵夫人はこのたびの大祭も、欠席すると仰っておいでだったはずですが」
そう言ったのはヴェルナー閣下の隣にいた男の人で、四十前後という感じのハンサムさんだった。彫りの深い顔が、なかなかに渋い。
「無茶を言うのは王族の常だな。私からして無茶の大盤振る舞いだから、大きな声では言えないが」
口の端に笑みをくっつけて言うアウグスタに、周囲に満ちはじめた不穏なざわめきが微苦笑に変わった。一瞬ヤな感じに動きそうだった空気が軽くなって、あたしは目をキラリを光らせる。
アウグスタは、場の空気というのをよく分かっているのである。
「何にせよ、今宵の舞踏会には顔を出すであろうよ。出さぬなら、

不法侵入者としてしょっぴくと兵どもに伝えておけ。ヴェルナー、指示は頼むぞ」
「畏まりました」
恭しく一礼する閣下に、アウグスタは頷く。すぐに視線をあたし達の方に向けて、柔らかく微笑んだ。
「さて、我が娘達よ。私はこれから二、三人と顔をあわせてから昼食なのだが、どうする？」
「ご一緒してもよろしいの？」
「かまわんよ。……とはいえ、ベルは他に一緒に食事をしたい相手がいるだろうがな」
にや、と口の端を上げた女王様に、あたしはキラッと目を光らせる。
「おじ様の様子を見てくるのです！」
「ふふ。ならば、明日は二人揃って私の所に来るようにな。久しぶりに家族揃って食事といこうじゃないか」
「伝えておくのです！」
「よし。では、行け。――ポテト」

その声と同時に、広間にいた全員が息を呑んだ。
玉座の傍らに、いつのまにか凄まじい美貌の主が佇んでいたのだ。
「案内してやれ」
「畏まりました」
ポテトさんが浮かべた微笑みに、一撃でノされてしまった一同がバタバタと倒れてゆく。無事だったのは顔を背けていた閣下等、わずか数人だ。
……ぬぉ！？　バルディアの王太子さんも無事だ！
あの笑顔に耐えるとは、なかなかの胆力である。ちなみにフェリ姫は早々と失神していた。
「さぁ、参りましょうか、お嬢さん」

にこっと笑ったポテトさんに、あたしもニコッと笑う。
「よろしくお願いするのです！」
視界の片隅に、倒れたフェリ姫を抱きかかえるアウグスタが見えた。
その美しい顔には、苦笑と、どこか疲れたような笑みが浮かんでいた。

「アウグスタは大丈夫なのですか？」
城の奥へと向かいながら、あたしは手を引いてくれるポテトさんに声をかけた。
城の表側付近は人でごったがえしていたが、この辺りにはほとんど人がいない。
表にいるのは他国からの来客や、昼頃になってようやく起き出して来た貴族の方々なのだろう。彼等貴族にとっては、正午を回ってからが一日の始まりなのだ。
「なんだか疲れてるように見えたのです」
「まぁ、ようやくレンさんが落ち着いて、ホッとした途端に新たな問題がやって来ましたからね」
「馬番さんの所の弟さん？」
「ええ、まぁ」
ポテトさんは苦笑して頷く。
「あの姫君の情報網は侮れませんね。……いや、真に侮り難いのは伯爵の情報網ですか」
「ポテトさんは、シーゼルのお兄さんのこと、知ってる？」
「私がこの国を出たのは十三年も前のことですからね。まぁ、名前ぐらいは聞いたことがありますが、正直、たいして気にもとめていませんでしたから」
「そっか……ポテトさんなら、なんでも知ってそうな気がしてたけど、そーだよね……」

「帰ってきてすぐにイロイロ話しは聞きましたけどね。……なかなか興味深い方のようですが、私は深く関わるのを遠慮させていただきます」
「え。なんで？」
「面倒そうな人達が絡んでますからね。まぁ、どうせ出会うことは無いだろうという人は別にいいんですが、ご主人様の養女である方のほうはいつバッタリ会うかわからないから、あんまり近寄りたくないんですよね」
「なんで？」
「苦手なんですよ、どうにも。研究対象にされそうで」
なんとも言えない顔で言われて、あたしは思わず口を半開きにしてしまった。
「ポテトさんでも苦手な人っているんだ！」
「いますよ～、もちろん。その苦手がイッパイ詰まってるような人に押しかけられると、私としても面倒でかないませんからね。件の兄君というのはその人に深く関わってますから、あんまり口にしたくないんですよ。ということで、このお話はここまででお願いします」
「はゃ～……」
無敵に見える黒い人の意外な言葉に、思わず変な声が出る。
世の中には凄い人もいるもんだ。
「話しは元に戻しますが、ご主人様のことに関しては、そんなに心配する必要はありませんよ。むしろ、義弟がもう一人いたって聞いて喜んでましたから」
「えっ！？　そうなの？」
「ええ。自分より年下の王族って、今まで一人しかいなかったですからね」
「あ！　行方不明だっていう、メリディス族の王子様ね！」
「王子様……まぁ、そうですね」
ポテトさんが微妙な半笑いになる。

「元々血の近い親族も少ないものですから、血の濃い『正統な』血筋をどうにかしないと、と悩んでいましたからね」
「……王様って、大変なのです」
「そうですね」
苦笑して、ポテトさんはあたしの頭をポンポンと叩いた。
「まぁ、件の新しい弟とやらが、どこまでの人物なのかによってこれからの対応も違ってきますがね。そういえば、お嬢さんはもうお会いしたんですよね？」
「そうなのです！」
「どう思いました？」
「モヤモヤなのです！」
「そうですか」
あたしの言葉に、ポテトさんは頷き、なるほど、と口の端を歪めた。
「どうやら、面白いことに……」
「……ポテトさん？」
ナゼか途中で変な顔のまま硬直したポテトさんに、あたしはきょとんと首を傾げた。
ポテトさんは青ざめた顔で硬直したまま、お嬢さん、とあたしを呼んだ。
「通路をこのまま真っ直ぐ進むと、中庭に出ますから、匂いを辿ってレンさんの所まで行ってくれますか？」
「にょ？　案内は？」
「申し訳ありません。ちょっと苦手がイッパイの人が待ちかまえているようですので、このあたりで失礼させていただきます。ああ、いっそその方に案内させてもらうのもよいかもしれませんね。聖女の木陰、という場所だと言えばわかりますからってもうこっちに突撃してきてます失礼ッ！」
最後の部分は早口で告げ、ポテトさんはサッと身を翻した。途端、その姿が幻のように消える。

と同時に、カカカカカカカッと凄まじい音が今まで向かっていた先から聞こえてきた。
「あっ！　いたわっ！」
そちらに向き直り、真っ先に飛び込んできたのは紅蓮の髪。
長く艶やかな髪に薔薇の髪飾りをつけ、その美少女はあたしの前に滑り込んできた。
「いやぁあああああ！　メリディス族だわすごいわ本物よ！　この髪ってばどんな色素でこうなってるのっ！？」
バインバインと大きな胸を揺らせて駆け込んできたのは、見た目十七・八ぐらいの少女だった。胸はアウグスタよりは小振りだが、巨乳ぞろいの宿のおねーちゃん達と同じぐらいには大きかった。そして形がよい。
「うわぁカッワイイわ！　さすがメリディス族ね！　肖像画のレティシア様とは印象が違うけど、バッチリ美少女だわ！　いや、これはもう美幼女と新分類をつけるべきね！　うん！　そうするべきだわっ！」
フンフンと鼻息も荒くあたしの全身を嘗めるように眺めるオネーサマに、あたしはじりじりと後ずさりながらポテトさんの気持ちを理解した。
そうか。この人か。この人がポテトさんの『苦手がイッパイ』な人なのか！
「この愛くるしさはアレね、子猫とかが強者の保護を受けるために愛くるしく出来てるのと同じ理屈ね！　この瞳！　この鼻！　この口！　ちっさい体に、短い手足！　そのくせ大きな頭！　間違いないわ！」
「……なにげに酷いこと言ってるのですよ……」
「声も可愛いわ！　メリディス族は美声揃いって文献は正しかったのね！　その歌声で魔法を発動させるんだったっけ！？　ね、ちょっと歌ってみて！　ねぇねぇねぇ！」
ずいっずずずいっと迫ってきた乳と顔に、あたしはいっそうじ

りじりと後ろに下がった。
しかし、下がった分だけ両手をワキワキさせた変態美少女ににじり寄られる。
あたしはぎゅむっと唇を引き結んで活路を探した。
しかし、この美少女、細いナリのくせに妙に隙がない！
「お……」
「『お』！？」
「おじしゃま……っ」
「か、可愛いワッ！　可愛いわその涙目っ！　ん～スリスリしたいわっ！」
「ってもうスリスリしてるのですみょぎゅん！」
アウグスタほどでは無いものの、なかなかの圧力をもつ凶器に顔面を圧迫され、頭のあたりにズリズリと頬ずりをされてあたしはもがいた。
（ぽ、ぽ、ポテトさんの馬鹿ーッ！）
相手がこんな危険人物だっていうのなら、もっと前もって情報を！　情報をくれていたら！　そしたらあたしも逃げれたのにッ！
あたしは短い手でペンペン抗議を行いながら、この少女が誰であるかを確信した。
アルトリートが言っていた相手。
フェリ姫が言っていた相手。
その特徴が示す変態――すなわち、アディ姫であると！
「もにゅーっ！」
「奇声も可愛いわっ！　これは大分類『愛玩』小分類『人科』に区分けしてじっくり研究をすべきねっ！」
ハァハァと熱い意気込みを語る変態少女に、あたしの顔から血の気が下がった。
イカン。本気で研究対象にされている。
ここまで身の危険を感じたのは、最初にケニードと会った時以来

である。
「もっ、もたしあっ、おじゅしゃまのところっ、いくですよ！」
「あっ！　そんなに暴れないでよ、末姫ちゃん。おねーちゃんと一緒にいよーよー」
「やだっ！　おじ様の所でご飯食べるんだからっ！」
グネグネ動いて巨乳の間から顔を突き出し、あたしは短い手足でがんばった。
しかし！　巨大な蛭のようなむっちり美少女は、そんなあたしを体を使って束縛する！
「じゃー、ご飯終わったら研究させてね！」
「うぁあん！」
逃げられないあたしをモッチリと腕の中に捕獲したまま、アディ姫はスタスタと歩きはじめた。その様子に、あたしは慌てて声をあげる。
「おじ様がいるのはそっちじゃないもん！　中庭だもん！　聖女の木陰だもん！」
「およん？　それって王族専用の庭園じゃない。侯爵ってば本当に特別視されてるわ～。うん。確かに食指をそそられる相手だけどね～」
……なぬっ！？
あたしは抵抗をやめ、目をギラッと光らせてアディ姫を睨みあげた。
「おじ様はあたしの旦那様なのです！」
「およよっ？　あっは～、末姫ちゃんヤキモチだー」
「ヤキモチだって焼くのです！　おじ様を食べるのはあたしなのです！」
「そーゆーのは食べ方知ってから言わなきゃ駄目よ～？」
むぅ！　ピンポイントで痛いところをついてきましたね！？
「それはこれから勉強するのです！」
「まぁ、年からしてそうなるだろうけど。……って、聖女の木陰で

いいの？」
　あたしが指さす方向に方向転換し、スタスタと歩いていくアディ姫。あたしはウンウンと大きく頷いた。
「そこでお昼ご飯を食べるのですよ。ようやくおじ様に会えるのです！」
「でも、聖女の木陰ってけっこう広いわよ？」
「近くまで行けば匂いがわかるのです！　もう匂ってきてるのですよ！」
　あたしは通路の匂いをフンフンと嗅ぐ。フンフンフン……フンフンむっはぁ～！
「おじ様の匂いがするのです！」
「……メリディス族の嗅覚は個体を識別するほどに能力高し」
　ブツブツと呟いて、アディ姫がニヒルな笑みを浮かべる。
「んふふふふ……これは、領地から王宮に来た甲斐があったってものね。メリディス族にクラウドール侯爵、この二つの研究対象を確保できるなんて！　春の大祭様々だわ！」
「あたし達を研究しても面白くなんてないのです！」
「いやいや～？　面白いわよ～？　この世の不思議神秘謎不明解、全て解明しなきゃ気がすまないじゃな～い？」
「そんなの気にもならないのです！」
　というか、不明解って何だ？
「あと気になるのが、新顔のニーさんなのよねー。どーも後ろ暗いこと抱えてそうでさ～、血も気になるし、ちょっと裏とってみようっかなー？」
「そうです！　そっちのニーさんを研究すればよいのです！」
「でもそのニーさんも、さっき聖女の木陰と同じ中庭に行こうとしてたのよね。基本、王族以外立ち入り禁止っての、知らないのかもねぇ」
「ええっ！？　あの二人組、そんなところにまで行ってるのです！？」

「およよん？　二人組じゃなくって一人だったけど？」
「ええッ！？　てゆか、それ以前にどーしてアディ姫はそれを止めなかったのですか！」
　あたしの声に、アディ姫はニンマリと笑って赤毛をくるくると指に巻き付けた。
「だぁってさー。そんなことしちゃったら、それをネタに研究協力させられなくなっちゃうじゃない？　相手の罪は、徹底的に利用しなきゃ駄目よ～？」
……キケンだ。
　このオネーサマは途方もなくキケンだ。
「あ。大丈夫よ、末姫ちゃんは、家族だからそういうのナシ！　それにこんなに可愛いんだもの！　家族割引兼可愛い割引でいてあげるわ！」
「わ、割引以前に何の利用なのか怖いのです！」
「んふっ」
　笑って、アディ姫はぎゅむっとあたしを強く抱きしめた。
「それにしても～、私は名乗った覚えないんだけどな～？　なんで末姫ちゃんは私を知ってるかな～？」
「アルとぇーとなんとかさんと、フェリお義姉さまから聞いたのです」
「おー。フェリ経由かー。あと、アルトリートね。ふむふむ。そういや、二人組っていうぐらいだから、本当なら二人セットでいるのが普通なの？　で、噂じゃその二人って顔似てそうなんだけど、どれぐらい似てるの？」
……えーと、あの二人はどんなだったかとゆーと……
「……顔の作りとか、あと、目と髪の色が似てるのです。でも、身長とか、髪の質とか、ちょっと違ってるのですよ」
「お！　いい観察眼持ってるね～」
「そういうの分からなくちゃ、下街では生きていけないのです」
「んんっ！　賢いぞっ！　それが出来なくちゃ王宮でも生きていけ

ないから、がんばるのよ～？」
グリグリと旋毛付近に顎を擦りつけられ、あたしは「ぎょむー」と思わず悲鳴をあげてしまった。
ううう……早くレメクに会って、このモッチリ地獄から解放してもらわなくては！
あたしはアディ姫に無理やり運ばれながら、口をギュムッと引き結んだ。
アディ姫は長い足でサクサク歩き、はやばやと中庭に降り立つ。
建物の中にポカンとできた空白のように、そこは吹き抜けの庭になっていた。
その広さたるやかなりのものだ。あの大広間より一回りは大きい。
建物の屋根を越えた風が、勢いを殺されながらあたし達のところにふんわりと降りてくる。それは直接受ける風にくらべて真綿のように柔らかく、弱かった。
「……？」
あたしはフンフンと匂いを嗅ぐ。
大好きなレメクの匂いと一緒に、もう一つ不思議な匂いがした。
スッとした潔さと、泣いてるような湿っぽさと、迷ってるようなモヤモヤ感がある匂いだ。そしてその中に、なにか甘くてしょっぱいものが混じっている。
誰の匂いだろう？
とりあえず、あたしを抱えている変態王女の匂いでは無さそうだ。
あたしはヒクヒクと鼻を動かし、ふとあることに気づいて目を見開いた。
アディ姫は、足音を殺して歩いていた。
その歩みは今までと変わらず、なのにコソとも音がしない。
完璧な無音で歩くお姫様の顔は、好奇心と欲望にギラギラと輝いていた。
「……が！　どうして！」

音をたてないアディ姫に反し、行く手からは声が聞こえてきた。
なんだか悲鳴のような声だ。しかもどこかで聞いたことがある声である。
（あれは……）
「ですが……の色は！」
確か、アルトリートとかいう、あのガラの悪いにーちゃん。
「誰と……」
「しっ」
思わず呟いたあたしに、アディ姫が短く警告を発する。
あたしは咄嗟に口を噤み、そそくさと声に近づくアディ姫を見上げた。
アディ姫は真剣そのものの表情だ。
小径と生け垣を迷路のように仕立て、道順を間違えればそれこそ出てこれなさそうなその庭をアディ姫はスイスイと泳ぐように歩いていく。
そうして、とある生け垣の近くにソッと身を潜めた。
あたしは鼻をヒクヒク動かす。
集中しなくてもわかるほど、強く濃いレメクの匂いがした。
「俺は……！」
「静かに」
驚くほど近くから、アルトリートとレメクの声がした。
あたしは思わず飛び上がりかけ、アディ姫にムッチリと押さえつけられる。
だが、

「ベル、そこにいますね？」

バレてました。ナゼでしょう？

唇を尖らせて目線を上げると、驚いたような困ったような顔をしたアディ姫と目があった。

見つめ合うこと一秒。

すぐにアディ姫は生け垣の向こう側へと身を滑らせる

「あっ！　赤毛女！　と、ちみっちょ！」

「誰がちみっちょですかっ！」

予想通りそこにいたアルトリートとレメクに、あたしはとりあえずアルトリートの方にクワッと眦をつり上げてから、ビョンッとアディ姫の腕の中から飛び出した。

「おじさまーっ！」

全力で突撃。

ごふ、とか言われた。

「べ、ベル……少し、加減していただけませんか」

「ご、ごめんなさいなのです」

そういえば、レメクは病み上がりのヨワヨワさんだった。

しゅんとなったあたしの頭を撫で、レメクがやんわりと抱きしめてくれる。アウグスタやアディ姫みたいな力一杯でない分、優しくて暖かいギューである。

「猊下にお会いしてきたそうですね」

「そうなのですよ。お名前もらったのです。ステラなのです」

「そうですか……星と名付けられましたか」

そう呟くレメクの口元には、ハッキリそれとわかる微笑みが浮かんでいた。なんだか安心したような笑顔だ。

「……アデライーデ姫には、四月前にお会いした以来でしたね。素晴らしい隠行の術に感服いたしました」

「い、いやぁ……別にそんなたいしたことないし？」

なぜかポカンとしていたアディ姫が、レメクに話しかけられバツ

の悪そうな顔になって視線を逸らせた。
……てゆか、おんぎょーの術ってなんだろうか？
「ベルを案内してくださったのですね。お礼申し上げます」
「あーうん、はい」
「これからベルと二人で昼食を摂るのですが、お二方もご一緒にいかがですか？」
「「えっ！？」」
レメク以外の三者からあがった声に、レメクは素早くあたしに視線を向ける。
めっ、とやられて、あたしはシオシオと首をすくめた。
えー……レメクと二人っきりがよかったのにー……
「お二人とも知らぬ仲というわけではなさそうですし、食事は大勢でとったほうが美味しいようですから」
言いながらあたしを降ろし、レメクは近くに置いてあった大きなバスケットに手を伸ばした。パカッと開くと、中にはパンやら肉やら果物やら。
「この通り、食べるものは沢山あります。飲むものも。私としましても、お二方にはお聞きしたいことがありますから」
そう言って、レメクはいつもと変わらない静かな表情で、こちらを見ているアルトリートとアディ姫を見つめた。
「今この時に、あなた方が、この王宮においでになったことについて」
と。

6　アルトリート

ピリッと空気が震えたのを感じた。
わずかに身構えるアディ姫と、唇を引き締めてレメクを睨むアルトリート。
一瞬で緊張した二人に、レメクはただ静かに答えを待つ。
「あたしは――」
「俺は――」
二人は同時に声をあげ、咄嗟に互いの顔を見た。
「陛下に呼ばれて――」
「付き添いで――」
さらに同時に言葉を発し、ムッとした顔で睨みあう。
「あたしが喋ってんのよ！？」
「俺が喋ってんだぞ！？」
――なんだろう。この息の合いっぷりは。
二人はなにやら腹の底を探り合うような目で互いを熱く見つめつつ、グリグリと肘でつつきあっている。
ふつー、若い男女が熱く見つめ合えば、そこはかとなく桃色な空気が漂うと思うのだが、この二人にはどーやら当てはまらないらしい。

……宿のおねーちゃんが言うことにも、例外ってのがあるんだな……

彼等の目は、酒場で商人のおっちゃん達が互いを見る目にソックリだ。

それにしてもこの二人、ここにいる理由を問われただけで、なんで緊張なんかしたのだろうか？

……なんかヤマシイコトでもあるのかな？

「お一人ずつお願いします」

首を傾げているあたしを地面に降ろして、レメクは未だ睨み合いを続けている二人に声をかけた。

延々目の前で睨み合いを続けられても困るため、あたしもウンウンと賛同を示す。

なにより、彼等が答えてくれないと、あたしはご飯にありつけないのである！

ぐー！　と勢いよく催促する腹を押さえて、あたしは礼儀正しく二人の答えを待った。

「あたしから言うわっ！」

ぎゅー。

「って言っても、お義母様から『図書館にばっかり籠もってないで、大祭の間ぐらいは王宮に来い！』って言われて出向いてきただけなんだけどね」

ちなみに、彼女の言う『お義母様』は女王陛下（アウグスタ）のことだ。

「あ～……この庭に来たのは、たんに末姫ちゃんがここに侯爵がいるから、って言ってたからなのよね。侯爵だってピンときてたんでしょ？　案内人だって。ま～、ついでに侯爵と末姫ちゃんの二人をじっくり研究したいっていう素朴な欲求もあったわけだけど」

……ヤな欲求だな……

ぐきゅーぅー。

「あと、一応言っとくけど、あたしは大祭の初日っからいたわよ？　そりゃ～侯爵みたく目立たないから、そちらは知らなかったでし

ょーけど」
腰に手を当て、ふて腐れたようにそう言う彼女は、けれど決して人目を惹かない容貌ではない。
豊かな赤毛は艶やかで美しく、プロポーションも抜群に素晴らしい。
そう、特に乳。
王宮にいるわりにドレスも髪型も地味っぽいのにしているから、確かにキラキラに着飾った人達ほどは目立たないだろうけど、これで着飾ったらかなりすごいことになりそうだ。
レメクもそう思ったのか、彼は微苦笑を浮かべて頭を下げた。
「なるほど。それは失礼いたしました」
ぎょぅろろー。
「で？　そっちのニーさんは？　てゆか、レンフォード公爵家のアルトリートって言ったら、社交界でも有名みたいだけど。あっ！　そーいや、チョイ前にチラッと見たんだけど、なんかよく似た背格好の人と一緒だったよねぇ？　君。君とは直に一回廊下で会ってるけど、もう一人の方とはまだ直接会ってないのよね。後ろ姿しか知らないけど、前から見ても似てるんだって？　なんか君より毛色良さそうな感じだったけど、あれが噂の『公爵夫人の隠し玉』？　夫人が王家の乗っ取り企んでるって本当？　にしてもなんだってこの庭に来てるわけ？　君」
「一息にイロイロ質問すんな！　そしてズンズン近寄ってくんな！　近ぇよ体が！　だいたい……」
きゅるっきゅるっきゅるっ。
「「「……」」」
三人の視線があたしに集中した。
あたしはしょんぼりと腹を押さえる。
「……なぁ」
そんなあたしを眺めたまま、なんとも言えない顔でアルトリートが呟いた。

「……腹空かせてるヤツに、先に何か喰わせてやらねぇか？」
あたしの目が涙でキラリと輝く。
アディ姫とレメクの目もちょっぴりキラッとしたのだが、その理由は不明である。

「こ、このっ、このパン、美味ぇ！」
「このもふっ、ほの、さんどういっちもっ、う、うまうまっ！」
目の前に広がる楽園のごとき光景。
大きなマットの上に並べられた料理の数々は、野外であることを除いても驚嘆に値した。
白いもちもちパン、炙り肉と野菜を挟んだサンドイッチ、にんにくと鷹の目を加えられた魚貝スパゲティ、瑞々しいサラダ、トロトロの煮込み肉、香草焼きのチキンに、香辛料をきかせた炙り肉、そして色とりどりの果物！
あたしもアルトリートも競うように手を動かし口を動かし、次々に料理を頬張った。
「うもっうももっ！」
「ううう！　ううう！」
「……人間の言葉を喋っていただけませんか、二人とも」
ひたすら口に食べ物を押し込み、咀嚼し、飲み込み、押し込む。
それを繰り返すあたし達に、レメクはただただ呆れたような顔で嘆息をついた。
マットを囲んで座るのは、時計回りにアルトリート、レメク、あたし、アディ姫。
アルトリートとあたしは向かい合う形になっているのだが、マットが大きいため互いの位置はそこそこ遠い。
しかし！　この感動を分かち合うには十分すぎる距離である。
「……ベル、せっかく良くなっていた食事マナーが台無しになってますよ」

ハッ！
指摘され、あたしは両手に肉を握りしめて固まった。
ああっ！　王宮用に特訓してたのにっ！
全部台無しに！　ああ台無しにッ！！
でも美味しすぎて止まらないやめられないっ！！
涙ながらに見つめつつ口に押し込みエンドレスを繰り返しているあたしに、レメクは何とも言えない微苦笑を浮かべた。
「……あぁ……えぇ……そこまで喜んで食べていただければ、作り主としては喜ばしい限りですが」
「ぶぶふむふっ！？（つくりぬしっ！？）」
すると、口にモノいっぱい詰め込んでたアルトリートがギョッと目を剥く。
「ぼんばばぶぶっ（あんたが作っ）……（ゴックン）たのかっ！？」
「……食べ物を口にしたまま喋らないように」
「……意外と食べ方汚いのねー……レンフォード家の人って……」
野外ランチだというのにナイフとフォークで小綺麗に食べている他二名は、そろって呆れ顔だ。
「し……しかたねぇだろ！？　俺だって、やりゃあチャラチャラした喰い方できんだよ！　けど、こんな美味いメシそうそう食えるもんじゃ……ああっ！　ちみっちょ！　それ俺が取り皿に置いてた鶏！」
「ももぃもんもむももんっ！」
「ァアッ！？　『早い者勝ちだもん』だと！？　だったら……こうだっ！」
「もぉっ！？」
ぁあっ！　この男！！
あたしの大事なニクニクモリモリを盗りやがったぁあああッ！！
ごっくん。
「アルとえーとなんだったかさん！　ひどい！　そっちは腕が長いんだから、あたしの守備範囲外から取っていけばいいじゃない！」

「あほぅ！　だったらなんで俺の皿からぶんどってったんだテメェ！」
「手の届く範囲にあったから！」
「ぬ……ぬかせこのガキ！　むしろ必死に体伸ばして盗ってったろうが！」
そんなこともあったかもしれない！
「って、ああっ！　それもあたしのお肉ーッ！」
「肉ばっかり喰ってんじゃねぇ！　たいたいなぁ！　食い物ってのはなァッ！　弱！　肉！　強！　食！　なんだよ！」
――――くっ！

「じょ、じょーりゅーかいきゅーのくせに、なんて下街根性……！」
「う、うるせぇ！　下街関係ねぇ！」
叫びつつ、アルトルートはあたしの手の届かない範囲の料理をどっかりと皿に盛りやがった。
嗚呼！　なんて羨ましくも卑怯な真似を！
――――と思ったら、あたしの前にそれをデンと据えてくる。

「おら！　それ喰ってろ！　俺の盗るんじゃねぇ！」
「やはぅはーぅ！」
「……落ち着いて食事できないのですか、あなた達は」
大喜びでフォークとフォークをとるあたしに、深い嘆息をついて片手のフォークをナイフと取り替えてくれるレメク。
上品にモムモムとサンドイッチを啄んでいたアディ姫が、そんなあたし達をしみじみと見て言った。
「……なんてゆーか、侯爵もだけど……アル君、意外と面倒見がいいのねぇ……」
「モ！？」
口に白パンを詰め込んだまま、アルトリートがギロッとアディ姫

を睨む。
　睨まれた方はケロッとしているが……
　それにしても、この男。王族の血筋とは思えないガラの悪さだなぁ……
　おかーさんが元王女様のはずなのに、どーゆーことだ？
「別に面倒見とかいうほどの内容じゃねェだろ。フツーだ、フツー。つーか何だ今の『アル君』ってのは」
「いいじゃん、別に。アルトリートって呼びにくいのよ。あたしの名前とカブるし」
「カブらねぇ。どうやっても『ア』しかカブらねぇ」
「あとは可愛らしさの追求ね。君、素材いいのに粗暴すぎて愛らしさに欠けるのよ」
「うるせぇ！　つか、カワイイつーよりキモイなオイ！　男の名前にそんなもん要求すんな！」
「なによ～、いいじゃないのよ～。どうしてもアル君が嫌だって言うなら、今日から君はアルルンだからね！」
「なんでパワーアップしてんだよ！？」
　……仲良いなぁ、この二人。
　肉とか肉とか肉とかをモリモリ食べながら、あたしは言い合う二人を眺めた。
　かたや華麗な美少女　（とても変態）、かたや野性的な美青年（ふつーにガラ悪い）。
　……見た目だけは抜群なのに、どーしてこう注意事項みたいな補足がついちゃうんだろうか。しかもいらん感じの補足が。
「……おじ様、王宮ってこーゆー人ばっかりですか？」
　挽肉とトマトのスパゲティをほおばりながら、あたしはなんでも知ってるレメクに問いかけた。
　レメクは白い布を取り出しながら、困ったように首を傾げる。
「王宮に限らず、複数の人がいれば、それぞれに個性があるのは当然でしょう」

……そーかなー……？
なんか王宮には特別変な人が集まってる気がするんだけど。
「ほら、ベル。じっとしてなさい。ちゃんとテーブルマナーも習ったというのに、こんなに口の周りを汚して……他の人に笑われてしまいますよ？」
「オラ見ろあれ！　面倒みてるっつーのは、アアいうのを言うんじゃねぇか？」
あたしの口の周りを拭いてるレメクに、アディ姫と言い合ってたアルトリートが「コレ！」と指さす。
「……人を指さすのはやめなさい。失礼ですよ」
あ。睨まれた。
「うっ！」
「教育が知れるわよー、アルルン。言動には気をつけたほうがいいわ」
「おまえが言うか！？」
……アルトリートに激しく同意。
しれっとした顔で忠告するアディ姫は、確かに食事マナーは完璧だった。
座る姿も香りたつ華のように美しい。
しかし、彼女は変態だ。
あのでっかい胸の中には、色んなモノへの欲求が詰まってる。
主に知識とか知識とか知識とかへのムラムラが。
「それにしてもねー。侯爵がメリディス族の子を保護したって聞いた時は、あの侯爵が子供を泣かさずに世話できるのかしらって思ったけど、けっこう様になってるのねェ」
「……何気に失礼なコト言ってねぇか？　オイ」
大きなパンの塊にかぶりつきながら、アルトリートは胡乱な目でアディ姫を睨んだ。
レメクは全然気にしてないよーな無表情だが、その実ちょっぴり落ち込んでいる。

「……そうですね。ベルは最初に出会った時から平手打ちを放ってくるぐらい普通でしたが、それ以外の子供達には『黒い神官だ』と泣き叫ばれましたからね……」

……なんか変なトラウマが出来てる？

「おじさまっ。あれは時期が悪かったのですよ！？　皆が怖がってる時期だったから、そーなっちゃったっていうだけなのです！」

「あっはー！　『黒い神官』ってアレでしょ！？　お伽話に出てくる死神でしょ！　あっはー！　そういや侯爵って全身黒ずくめだもん間違われるわァそれは！」

「おめぇ、フツーに人が気にしてそうなコトでそこまで笑うか？　というか、俺はそれ以前に『出会った時から平手打ち』ってヤツのほうが気になるけどな」

問うようなアルトリートの目に、レメクの視線が逃げる逃げる。

「いえ……その、昔のことです」

昔と言うか。

「アレですよ。おじ様は乙女心をわかっていない、ということなのです！」

「ベル！」

「だからベチコーンとあたしがこの掌で一発かましてあげたのです！」

この掌！　と右手を高々と上げてみせたあたしに、この掌、とジッと見る他二名。

レメクが横で「三発だったと思いますけど……」とぼやいていた。

……無視！

「ちっこい掌だなぁ、オイ」

「あんまり強くなさそうね～」

失敬な！

「ちゃんとおじ様のほっぺには赤い紅葉が出来たのですよ！？」

「えっ！？　そこまで強く叩いたの！？　この顔を！？　『この顔』をっ！？」

「なぜ二度も強調して言われるのです？　そして私の顔を指さすのはやめていただきたい」
　レメクの素晴らしいお顔を指さすアディ姫に、あたしは胸を張って大きく頷く。
「きょーいくてきしどーというやつです！」
「うっわー……度胸ねぇ。『この顔』叩くかぁ……」
　いや、まぁ、確かにあの時は状況が状況だったからブッ叩いたけど、今やれって言われたら叩けないかもしれないなぁ……この『顔』は。
　あたしはジッとレメクの顔を見つめ、握り拳を固めて宣言した。
「次からは顔じゃなくて体の中心を殴ることにするのです！」
「どこを殴る気ですか！？」
「よけい悪いだろソレ！？」
　ナゼか男性陣からクレームが。
　二人揃ってあたしから距離をとるのだが、その理由は不明である。
「殴るとイカン場所なのですか？」
「当たり前だーッ！　そこに何があるともごっごごご……ごごっ！？」
　血相を変えて叫ぶアルトリートの口をレメクが凄い勢いで塞いだ。
　そして立ち上がりながら、アルトリートの体を片腕で拉致。
　細長いアルトリートが軽々と浮き上がった。
「うわっ！？　なっ！　なんだよっ！？」
「『なんだ』ではありません。ご婦人の前で何を喋るつもりでしたか、あなたは。ちょとこっちに来なさい」
「つーか降ろせっ！　オイ！　……あんた馬鹿力だなッ！」
　あっさり持って行かれるアルトリートに、残されたあたし達は唖然と口を開いた。
「おじ様、力つよーい」
「……ねー、末姫ちゃん。侯爵って、あれ、紋章の力とか使ってないのよね？」

「無いと思うけど……」
心許なげに答えてから、あたしは首を傾げた。
「紋章って、使ってるとか使ってないとか、パッと見てわかるもんなの？」
その素朴な疑問に、アディ姫は「うーん」と考える顔になる。
「あたしが知りうる限りでは、やたらと強い力を使う時には、発動のための言葉を口にするはずなんだけど……末姫ちゃんは聞いたことない？　そういうの」
あると言えば、あるのだが……
「うーんとね、昔、おじ様がエットーレと対峙した時、断罪のヤツ使ったんだけど……あたし死にかけてたし、目瞑ってたし、耳塞いでたし……」
正直に告げたあたしに、アディ姫は目を瞠った。
「えー！？　もったいない！　なんで目瞑ってたりしたの！？」
と言われても困る。
例え死にかけていたとはいえ、こっちも目とか瞑る気はさらさら無かったのだ。
それなのに、あの時、レメクが『耳塞いで目瞑れ』って言ったら体が勝手に動いて……
あれはたぶん闇の紋章の力なんだろうけど、こっちの紋章は喋っちゃ駄目だから、下手に状況説明するわけにもいかないし……
……と、ん？　待てよ……？
「あ、でも【声】は聞こえてたわ。なんか、えーと……誰それのなんとかにより、断罪せよとかなんとか」
「あ！　それよそれ！　やっぱり強い紋章術は発動の言葉がいるのね。断罪、ってことは、罪と罰を連動させたってことか……ふむふむ。複合紋章術の一つね。手順踏まなきゃ発動できないって考えるたほうがいいかしら」
どこからともなく取り出した小冊子にペンを走らせる彼女。
「お義母様の『光の紋章』も『炎の紋章』も、広範囲になると言葉

が必要って言ってたし……でも、意志一つで発動できるやつもあるから、全部が全部ってわけじゃないし……とはいえ、怪力になる紋章なんて聞いたこと無いしなぁ……」

……闇の紋章だと、怪力になるんだろーか？

あたしはこっそりそれについて考えてみた。肉体を司るとかいう闇の紋章なら、それもありえるかもしれない。

レメクはというと、緑の垣根の向こうに行ってしまったらしく、ここからでは全く姿を見ることができなかった。

……いったい、どこまで遠くに行っているのだろうか。匂いはかすかにするから、庭園から出てはいないようだが。

「にしても、もどかしいわねぇ。あたしもちょっとでいいから紋章術とか使えれば、こういうのガンガン研究できたのに」

「……え？」

アルトリートのくれた肉盛りを制覇していたあたしは、耳に拾った言葉にきょとんとなる。

「アディ姫って、紋章術使えないの？」

「使えないわよー。ちなみに紋様術も使えないわ～。だってあたし、魔力すっからかんだもの～」

「魔力？」

レメクの席にあった食べかけのパンをかっさらいながら、さらにきょとんとする。

「およよ？　聞いたことない？　紋章術も紋様術も、魔力が無いと使えないのよ。魔術を使うには、その本質を理解した正しい知識による術式の行使、その行使によって人為的に自然現象もしくは超常現象を生み出す魔力、そしてそれを制御する精神力の三つが必要なのね。あたしはそのうちの一つ、魔力がサッパリなのよね～。だから、他の人みたいに紋様術も使えないし、紋章はそもそも宿せないし～」

「そうなの？」

おっと、デスが抜けちった。

まぁいいや。今更だ。

「そーなのよー。紋様術だったらね、紋様符とか紋様板とか紋様珠とかに魔力さえ込めれば、まぁそれなりに誰でも使えるの。知識のあるないで、しょぼいか強烈かが違ってくるけど。でもねー、なのにねー、あたしには使えないのよね～」

しょんぼりと。

「紋章もね～、あれって、結局体の中に強大な力を封じ込める術なのよ～。で、封じるのには魔力が必要なのよね～。ということは、魔力のないあたしには封じ込めれないから、紋章は宿らない、と」

「はゃ～……」

「ん～。末姫ちゃんは知識さえ身につければ使えるんじゃないかなぁ？　文献の通りなら、メリディス族は魔力強いはずだし、精神力もかなりのものらしいから」

「そうなの！？」

あたしは思わず飛び上がる。

ということは、もしかして――――！

「複写紋様術も！？」

使えるのなら、レメクの写真を！　レメクの写真を！！

おっきい布に写して、カーテンとか！　壁紙とか！

ああ天井にも貼りまくりたいっ！

目を輝かせて立ち上がるあたしに、アディ姫ははんなりとした苦笑。

「んふふ。そうきたかー。んとねぇ、複写紋様術使える人に複写の方法と複写紋様術符の作り方を教えてもらうのが一番いいかなぁ。術符は自分で作れなくても、誰かに作ってもらうことも可能だから、そっちのが手っ取り早いかもかも？　で、末姫ちゃん、確かアロック男爵の跡取りさんと仲いいでしょ？　あの人、なんちゃって紋様術師だから、頼んでみるといーよー」

……なんちゃって紋様術師って、何だ……？

あたしの胡乱な表情に気づいたのか、アディ姫は手をパタパタ振りつつ言う。

「んふ？　あー、正式に紋様術師になるのって、国の試験で合格しないといけないのよね。でも勉強だけなら誰でもできるわけ。で、試験は突破してないけど紋様術は使えるっていう、無資格の紋様術の使い手がけっこういるのよね～。紋様術師は待遇いいから、たいていは国に雇用されるわけだけど」

ふーん……

そーいや、昔、レメクがバルバロッサ卿のことを、紋様術は使えるが術師じゃないとか言ってたな……

てことは、バルバロッサ卿もケニードと同じ『なんちゃって紋様術師』なわけか。

「ちなみに、試験ってどんなの？」

「確か筆記試験と実技試験だったかなぁ。実技の方が重要で、紋様術の術符が作れて、それをきちんと発動させないといけないのよね。ほら、火の紋様術があれば、野営の時に火を熾すのが楽だし、土の紋様術があれば、土木事業が楽でしょ？　そういうので、重宝するらしいのよね～」

……土木作業……

「……って、そういえば、街の街灯も光の紋様術だったっけ」

「そうそう。すごい初歩の術らしいんだけど、すっごく役立つのよね、あれ。王宮の照明とかもけっこう光の紋様珠が使われてるのよ。あ、紋様珠っていうのは、紋様の力の宿った珠ね。んでね、有事の際にしか役立たない軍隊を増やすより、平時でも役立つ紋様術師を沢山育てて、紋様術符を大量生産したほうがいいっていうのがお義母さまの持論なのよね～。兵士や騎士を沢山抱えてても、戦争しなきゃ大半はただの無駄飯食いじゃない。まさか毎日鍛錬と称して薪割りさせたり、下水処理させたりするわけにいかないし。どこか行く時の護衛とかだけなら、何万もいらないしね～」

けれど紋様術師なら、日常の勤務時間に簡単な紋様術符を作らせることができる。
そして有事の際には、その能力で敵をやっつけることもできるのだそうだ。
「それで、今は騎士や兵士にも簡単な紋様術を教えてるのよね。そしたら暇な時にちまちま光の紋様珠とか作ってもらえるでしょ？」
アディ姫の説明に、あたしは呆れ半分に嘆息した。
……どこまで人員を有効利用するつもりなんだろうか……
「あればあるだけいいしねぇ。紋様術のおかげで、うちの国、他の国よりすっごい経費が削減できてるし」
「はぁ……」
あたしは思わず気のない相槌をうってしまった。そして鼻をヒクヒク動かす。
それにしても下街で暮らしているときには知らなかったが、うちの国の王宮って、なんか微妙に貧乏くさいというか、ケチくさいというか……
王宮って、もっと金貨ジャラジャラー宝石モリモリーって感じに贅沢してるもんだと思ってたんだけどな。
「ま、そうしないとどーにもならないぐらい、昔の国庫は火の車だったから、しょうがないんだろーけど」
……ん？
「火の車……？」
「ん？　あぁ、フツー知らないか～コレ。あのねぇ、お義母様が王位に就いた時にはね～、国庫スッカラカンになってたんだって。前の王様が使い果たしちゃってたから」
……なぬっ！？
「普通なら兵士に給料も払えないよーな状況なわけよ。うちの国って、領地持ちは税を払わないといけないから、その支払日が来れば最低限の金貨は貯まるらしいんだけど、それだってすぐ使っちゃうわけじゃない？　お給料とか、そういうので。だから、新しい事業

をしたくてもなかなか出来なくて、もー大変だったらしいわ。松明やら蝋燭やらの消耗品を全部紋様術に変えて経費削減したって、たかがしれてるでしょ？　昔の王族のドレスやら宝石やらガンガン売っても、焼け石に水。当時の宰相が裏でこっそりお金を回してくれてたからなんとかなったらしいけどね……まぁ、そんな理由で、クラウドール家はいっそう色々な特権を与えられるに至ったわけだけど」

「？」

「ん？　あれ？　知らない？　当時の宰相閣下がクラウドール公爵だったって話。末姫ちゃんの旦那さんの、義理のお父さん。ステファン老」

……おー……

そういや、どっかでそんな話をチラッと聞いたよーな？

「今の王家は潤ってるけどね～。散財する人がいないうえに、現クラウドール侯爵がむちゃくちゃ実入りの良い領地を王家に渡してくれたから」

……えーと？

あたしは一抱えもあるパンを二つほど抱えて首を傾げる。

正直に言おう。

「よくわかんないですヨ？」

国のムズカシー話は苦手なのです。

「およよ？　駄目よ～、ちっちゃいからって、こーゆーコトちゃんと知らないままなのは。財布の中に入ってくるお金と出て行くお金はちゃんと把握しとかなきゃ駄目でしょ？」

「それはもちろん！」

ビタ一銅貨たりとも紛失は許しませんとも！

「じゃー、知らなきゃね」

……ううっ。

パンをモリモリ食べながら首をすくめるあたし。

パンは三秒で胃袋に消えました。

「前クラウドール公爵……面倒くさいから、ステファン老って言うわね？　その人が持っていた土地っていうのが、王都の北、大きな山脈の向こうにある広大な領地だったの。大陸行路の要であり、陸の交易の街として有名なワルプシェールがあり、行路ぞいにも大きな街がいくつもあって、関税がガッポリ入る王国一の領地なわけよ。それが、シェーグレン領。王都のあるシュトックフェルム領よりも大きいのよ～」

「へ……へ～」

「でね、現クラウドール侯爵が、ステファン老の跡取りとしてクラウドール家を継いだとき、それを嫉んだ貴族達がブーブー文句言ったのよ。ほら、侯爵って養子だったわけだから。でね、当時の王宮はその話で大騒ぎだったんだけど、文句言われた侯爵ってば、あっさり爵位も領地もお義母様に渡して王都の屋敷に籠もっちゃったわけね。そのおかげでお義母様ってば一気にお金持ちになったけど、かわりにむちゃくちゃ有能な腹心がいなくなっちゃったもんだから、大慌てしたみたい。王宮の方でも、仕事できる人がいきなりいなくなっちゃったわけだから大わらわで、文句言いに行った貴族もすーっごく困ったみたいよ。ま～、自業自得なわけだけど～」

「はゃや……」

「で、侯爵はクラウドールの名前と、王都にある家屋敷と、ステファン老が持ってた特権と、頼むから持ってくれって言われて自分から指名した実入りのショボイ領地を所持するに至ったわけ。その領地があんまりにも前のと比べてショボイから、特権を引き継ぐことに対してはそう文句でなかったみたいね。それよりも、引きこもられるほうが困ったようよ」

「……えーと、おじ様って、すごい人なのですね」

他云々はともかく、それだけはわかったのです！

ウンウンと納得して頷くあたしに、アディ姫は悪戯っぽい目で頷く。

「まぁ、仕事の面だけに関してなら、ちょっと異常なぐらい出来る

人だったからね～」
……なんか、他はちょっとアレレ？　な感じっぽい言い方だな……
まぁ、あの乙女心のワカラン具合は、確かにアレレな感じだが。
それにしても、特権って何だろうか？
「あ～、ほら、元々、代々クラウドール家って王族の血筋でしょ？　ステファン老もそうだしね～」
あたしの疑問に、アディ姫はスラスラ答えてくれる。
「だから、王族並みの待遇が約束されてたわけ。でも、君の旦那さんは、あたし達がそうであるようにただの『養子』でしょ？　だから、そういう待遇はおかしいんじゃないか、って言う人も多いのよ。あたし達の場合、姫って言ってもたいして力がないから放置されてるけどね～」
あたしは正直に頭を抱えた。
「む……難しいのです……」
「そーなのよー。王宮って難しい場所なのよー」
……いや、あたしが言う『難しい』は、そういう意味とはまた別なのだが……
まぁいいや。
「他にも交易権や、港の一部占有権も持ってるし、商業権も持ってるでしょ？　たいていの商売ができちゃうのよね～。だから領地がショボくなったのに、むちゃくちゃ儲けてるわけだ」
ほぅほぅ。
「じゃあ、前の領地手放して、よかったってこと？」
「面倒事が消えたってゆーなら、まぁそーなんだろうけどね～。領地ってさぁ、遊んでてもお金入ってくるわけじゃない？　でも、商売だといろいろ手間かかるでしょ？　だからねぇ、どっちが得だったかって言ったら、そりゃあ領地が良いほうがずっと得なわけよ。副産物もいっぱいあるしね～」
「な……なるほど」
大人の世界は、いろいろ複雑そうである。

あたしは生け垣の方をチラチラ見つつ、がんばって真面目な表情を作ってみせた。

「侯爵の場合、貿易もやってるし、上級紋章術師でもあるし、貴族の中でもかなり裕福な方だけどね。それでもやっぱりシェーグレン領は惜しいわよ。普通、ドロドロの陰謀を張り巡らせてでも手に入れようとする土地なわけよ？　シェーグレンって。なんで手放しちゃうかな～」

よほどその土地は魅力的であるらしい。

が――――

「そういう土地を持っていれば、色々と面倒ですからね。必要でないのなら、手放したほうが楽です」

「あやっ、侯爵!?」

アルトリートを半ば引きずりながら帰ってきたレメクには、たいして惜しいモノではないよーだ。

「あややや～。侯爵ってば、どのあたりから聞いてたの？」

慌てて居住まいを正すアディ姫に、レメクは静かな表情で答える。

「『昔の国庫は火の車』あたりからですね」

……わりと最初の方だな……

匂いがけっこう近くからしてたことといい、どうやら垣根の向こうで男二人ボソボソやっていたらしい。声は聞こえなかったのだが、なんか紋章とか使ってたのかな？

――にしても、アルトリートが妙にふて腐れた顔をしているのだが、どーゆーことだろうか？

「なになに～？　男二人で盗み聞きしてたの～？」

レメクに手を引っ張られてぶすくれているアルトリートに、アディ姫がニヤニヤッと笑う。

途端、アルトリートが狼狽えた。

「べ、別に盗み聞きってわけじゃねぇよ。つか、てめぇがベラベラ

喋ってたんだろうが！」
「そうよ～？　だから気にせずちゃっちゃと帰ってきて会話に加わればよかったのに～」
「べ……別にいいだろ！？　どういうタイミングで顔出しゃいいんだよ、あの話題で……」
「別に普通に顔を出せばいいと思いますが」
「あんたも立ち止まってただろーが！」
しれっとした顔で言うレメクに、アルトリートの目がつり上がる。
どっちが立ち聞きの首謀者か知らないが、どっちにしても二人そろって垣根の向こうで突っ立っていたことには間違いないだろう。
しかし、なんでまた立ち聞きなんかしてたんだろうかな、この二人は。
「侯爵達の話し合いはもう終わったの？」
「……ええ」
元の位置に座りながらレメクが頷く。
ようやく手を離されたアルトリートが、またふて腐れた顔になってそっぽ向いた。
「それにしても……ベル……ずいぶん食べたみたいですね」
……ぎくっ……
じーっと見つめてくるレメクの視線に、あたしは体を強ばらせた。
「食べかけていたパンが、どこにも無いようですが？」
「……お、美味しかったのですヨ」
「って、ァア！？　つーかもうほとんど残ってねェじゃねーか！」
遅ればせながらアルトリートもその事実に気づいたらしい。マットの上に広がる残骸達に、彼は愕然と声をあげた。
「ちみっちょ！　てめぇ、少しは残しておこうって気は無かったのかよ！？」
「お、美味しかったのです！」
「ンなこたァわかってる！」
どこか悲鳴じみたアルトリートの声に、さすがのあたしも良心が

チクチクと……

や、やっぱり悪かったかな……

「……まぁ、ベルは食べ物に必死にならざるをえなかった時期が長かったですからね。こういうのは、なかなか直らないものです」

どこか諦めた顔で、レメクが食後の紅茶を準備しはじめる。

あたしはしょんぼりとアルトリートを見上げた。

「ごめんなさい……」

「……くそ。怒れねぇだろ……」

アルトリートはそっぽ向いてぼやいた。

ガラは悪いが、彼はなかなかイイヤツだった。

「アルルン、あれだけイッパイ食べてたのに、まだ足りないの？」

「足りねぇ。つかその呼び名ヤメロ。だいたいなぁ、食べられるだけ食べとかなきゃ、やってらんねぇだろ。つか、ちみっちょよりずっと少ねぇぞ？」

「ま～末姫ちゃんの胃袋はちょっと尋常じゃない感じだもんねぇ……」

言って、アディ姫はチラッとあたしの腹を見る。

あたしは自分のお腹を見ながら、片手でスポンと鳴らしてみせた。

「私はそれ以前に、自分の体積以上のものが、いったいどこに消えているのかといつも不思議に思いますが」

砂時計で紅茶の蒸らし時間を計りながら、レメクまでがそんなことを言う。

「まぁ、食べてしまったものは仕方ありません。夜になればまた夜会が始まりますから、そちらで食べるしかないでしょうね」

アディ姫が頷き、あたしは顔を引きつらせた。

「夜会は苦手なのです……」

「ですが、三日も出ずにいましたからね。今日は出たほうがいいでしょう」

「おじ様は？　お義父さまに外出禁止をくらってたけど」

いやまぁ、ここにいる時点で、全然外出禁止になってないわけだ

が。
「出ますよ。条件付きで許可をもらいましたから」
「条件付き？」
あたしの問いに、レメクは頷く。
「日中はこの庭でのんびりしていること。仕事はしないこと。夜会の間は陛下か義父の近くで大人しくしていること。この三つを守らないといけません」
「ふーん……？」
「あなたも傍にいたほうがいいでしょうね。一人でいたらもみくちゃにされますよ」
「も、もちろんなのです！」
ヒシッと背中に抱きついたあたしにレメクは苦笑する。
そうして、アルトリートを振り返った。
「あなたも一緒にいなさい。面倒な人が何人か寄ってくるかもしれませんが、それ以外の多数の人は無視できますよ」
その言葉に、アルトリートは目に見えて狼狽えた。
「……お、おれは……行く気ねぇし」
？　行く気がない？
あたしは首を傾げる。
「でも、アウグスタが兵士さんに命令してたわよ？　えーと、確か、舞踏会には出席させるって。出席しなかったら不法侵入でしょっぴかれるみたい」
「は！？」
アルトリートの顔が一瞬で青ざめた。
……おや？
「お、俺が……？　なんで！？」
「なんで、って……まだ挨拶に行ってないからじゃない？　アウグスタがそう言ってたもん。王宮に来たのに、王様に挨拶しなのは駄目だと思うわ。クリ……えーと、クリなんとかさんと一緒に挨拶行ったほうがいいんじゃないの？」

「いや、俺は関係ねぇだろ？　俺はただ、付き添いで来ただけで……！」

そんな言葉が通用するかなぁ……？

さらに首を傾げたあたしは、なんでも知ってるレメクを見る。

レメクは静かな表情でアルトリートを見つめていた。

「陛下が命令された以上、どうあがいてもあなたは挨拶に行かなくてはいけませんよ。そもそも、あなた方がおいでになった理由を考えても、挨拶なしに終われるはずがないでしょう」

全くである。

「観念して一緒にいなさい。それと、ここから出る時は必ずベルを伴うように」

「ほぇ？」

いきなり言われて、あたしはきょとんとレメクを見上げた。

レメクはジッとアルトリートを見ながら言う。

「この庭は、王族以外に立ち入りを禁止している場所です。今のあなたの身分では、足を踏み入れることも許されません。正式に王族と認められている者以外で、ここに出入りができるのは陛下から許可を得た者だけです。見つかれば、咎を受けることになるでしょう。場合によっては投獄もありえます」

アルトリートはますます青くなり、ややあって「へっ」と乾いた笑いを零した。

「いいじゃねぇか。面倒な夜会に出るくらいなら、むしろ喜んで牢屋に入ってやらぁ！」

「駄目です。――ベル」

「あいっ！」

名を呼ばれて、あたしは高々と手を挙げる。

「この庭から出て以降は、彼の傍から離れないように。王宮ではあなたのほうが先輩ですから、守ってあげなさい」

「おっけーです！」
「ま、待て！」
何故か慌てるアルトリート。
「ンな必要ねぇ！　守ってもらう理由も……ねぇだろ！」
「あります」
言って、レメクは真っ直ぐに彼を見つめた。
「あなたはよい子です」
アルトリートの目が点になった。
「私はあなたをほとんど知りません。けれど、あなたがよい子であることは間違いないでしょう。私はあなたでよかったと思っています」
意味不明だ。
アルトリートがあんぐりと口を開け、なにやらぱくぱくと開閉している。
声が出ないのは――まぁ……度肝を抜かれたせいだろう。

……さもありなん。
「王宮は、あなたのような子にとっては、あまり居心地の良い場所では無いでしょう。わずかな間の縁になるかもしれませんが、せめてその間ぐらいは守りましょう」
棒立ちになっているアルトリートと、唖然とした顔で男二人を見比べているアディ姫。
どーでもいいが、レメクにとってアルトリートって、子扱いなんだな……
あたしはレメクの背から飛び降りると、アルトリートに向かって飛びかかった。
「とーぅ」
「うっうわっ！　ちみっちょ！　こら！　おまえなっ！　一応は王女様だろうがっ！」
腰のあたりに張り付いたあたしに、彼はどこかレメクと似た踊り

をエッチラオッチラ。
「抱っこしてくれればよいのですよ。あたしは決めたのです！」
「何をだよ！？」
「おじ様が守れと言ったからには、アルなんとかさんはあたしが守るのです！」
「名前ぐらい覚えろよ！！　つか、守るつっても、おまえだってイロイロ怪しいだろうが！　言動とか！」
アルトリートの声に、レメクが深々と頷きやがる。
ふっ……甘いな！
「アルとえーとなんとかさんは知らないのですね！　あたしは日々進化しているのです！　そしてやるときゃやる女なのですよ！」
「じゃー、ちょっとやってみろ」
思いきり信じて無さそうな顔で言うアルトリートに、あたしは目をキラリと光らせる。
ばかめっ！
今日フェリ姫から学んだ素晴らしい動作を見るがいいっ！
あたしは素早く彼の腰から飛び降りると、紅茶の用意に戻ったレメクに近寄る。
お茶を淹れる前にカップを温めていたらしいレメクは、カップを手にあたしを見下ろした。
えーと、たしかこうやって、おっとりと首を傾げて……
「ベル。どうかしまし……」

「『あら？　どなただったかしら？』」

バリン。
レメクの手の中で、可憐なカップが砕け散った。

7　ちみっちょ

「しっかし……おまえ等って、おかしな関係だよな」
やたら広くて長い廊下を進みながら、アルトリートがそうぼやいた。
磨き上げられた白大理石に、分厚くて豪華な絨毯。
それを踏みつけて歩くアルトリートの姿は、お世辞にも格好良いとは言い難い。
彼自身は間違いなく美青年なのだが、立ち姿とか歩く姿とかがどーにもこーにもガラ悪いのだ。
なんというか、成金貴族の道楽ボンボンだったらこんなかな？という感じ。
そのせいか、廊下に等間隔で立っている警護兵が訝しそうな目でこちらを見ていた。
不審そうな目はアルトリートに向けられるものであって、その小脇に抱えられているあたしに対してではない。たぶん。
……てゆか、なんでこんな抱えられ方なんだ？　あたしは……
「おまえ等、って、あたしとおじ様のこと？」
左脇に荷物か何かのよーに抱えられているあたしは、歩くリズムで揺れる視界の中、少々「うぇっぷ」な気持ちになりつつ尋ね返した。
彼は「あぁ」とぶっきらぼうに返事を返す。
ちなみにあたしの口調は完璧『素』だが、アルトリート相手なら別にかまわないだろう。
どっちかってゆーと、アルトリートの言葉遣いの方があたしよりヒドイのだから。
「あたしとおじ様は、それはもーらぶらぶなのよッ！」
あたしの声に、アルトリートはそれは胡乱げな顔になった。
あたし達がいるのは、王宮の奥、あたしが寝起きしている『青の

間』へと続く（はずの）廊下である。
　食後のお茶をことごとく台無しにしたレメクは、用意していた外国製のティーセットを全て壊した挙げ句、欠片を拾う真似をしつつ吹っ飛ばすという、新しい遊びを見せてくれた。
　飛んだ破片を追いかけてどこかへと消えていきそうなレメクに、慌てた他一同が力をあわせてお片づけ。
　なぜか心が仄暗い海の底に沈んでるレメクを囲んで、いったい何事かと問おうと思ったのだが、ここで絶望的な現実が発覚した！
　お勉強の時間が迫っていたのである！！
　そんなものこの際無視しちゃってもいい気がしたのだが、これにはレメクが猛反対。
　結果、様子のオカシイレメクの見張りにアディ姫を残し、お勉強のあるあたしは泣く泣くお部屋に帰ることになったのである。
　……あたしも一緒にいたかった！！
　なにせレメクが一人遊びをするなど初めて見たのである。
　彼の心におこった唐突な変化を、ぜひとも知らねばならぬのだ！
　そう、ツマとして！！
　も、もちろん心配だってしてるんだけど、ええ、心配ですとも！
　ちなみにレメクはというと、お勉強に向かうあたしに大変真摯な眼差しでこう言った。
「あなたはまず、人の名前を覚えることをなさい。覚えることを。そして忘れないように」
　……彼のココロは謎ばかりだ。
「なぁ……アノやり取りのどこにラブがあったっつーんだ……？
　俺はおまえがあの人を弄んでるよーに見えたがな……」
　残してきたレメクに未練たらたらのあたしを抱え、アルトリートが疑わしそうにぼやく。
　ちなみにアルトリートは、あたしの勉強につきあうよう、レメクに命令されている。
　アルトリート自身、あたしと同じがあたし以上にダメダメな言動

だから、言われるのも当然だろう。
　なぜレメクが彼の勉強にまで心を砕いているのかは不明だが。
「そんなアクジョなことしてないわよ！？　だいたい、あの愛あるやり取りのどこをどう見ればそう見えるっての！？」
「あきらかに仲のいい知りあいに向かって『どちらさま？』とかフツーは言わねェ」
「あ、あれは素敵言動だったんだからっ！」
「素敵っつーより悪意言動だったぞ、アレ。どーせおまえの義理の姉とやらの言動を真似たんだろ？」
「そう！」
「……悪いことは言わねェ。もう真似すんな」
「なぁ……！？」
　あっさり駄目だしされて、あたしは愕然とした顔になった。
「気づけよ。使いどころが間違ってんだよ。ちったぁ場面とか相手とか考えて使えよ。あれじゃあただの嫌がらせだろうが。さっきの反応見ただろ？」
　ま、まぁ、確かにレメクはコップ割りやがったうえ、破片を拾おうとしながら吹っ飛ばすという不思議な遊びをしていたが。
「あ、あれはきっと動揺してくれたのよ！　珍しくこう、シトヤカな仕草したから！」
「……まぁ確かに激しく動揺してた気はすっけどな……」
　そうか。そんなに激しい動揺だったのか。
　やはりフェリ姫の言動は良い手本になる！
「……いや、目ぇ光らせてないで、ちょっとは頭使えよおまえ。アレどうあがいてもイイ意味での動揺じゃねーだろ。……ったく、ほんっと、どーゆー関係なんだおまえ等は……」
　呆れたような疲れたようなため息をついて、アルトリートはあたしを抱え直した。
　左脇から右脇に。
「……ところで、なんであたしはこんな抱えられ方なの？」

移動と一緒に向きまで逆になったあたしは、進行方向とは逆を向いてしまっている。
今まで歩いてきた廊下の向こう側で、兵士さん達が唖然とこっちを見ていた。
……とりあえず、手でも振っとこう。
「あ？　あー……いや、おまえちっこいからこれでもいいかな、と」
「いいわけないわよっ！？」
「かといって下手に降ろしたら変なところに飛びついてきやがるし……おまえな、あの人にも同じことやってんのか？」
「あの人ってのはおじ様のこと？」
「他に誰がいんだよ？」
嫌そうに聞き返されて、いないけど、と思わずぼやく。
てゆか、アルトリート……なんか微妙にレメクに対して腰低いな……
「言っとくけど、おじ様相手なら、もっとガッツリガップリかぶりつくわよ？　あたし。一度引っついたら離れないんだから！」
「……よくやれるな、あの人相手に……」
呆れきった嘆息に、あたしは頭をグンと上げた。
まぁ、そーやっても見えるのは相手の背中ぐらいなのだが。
「アルとえーとなんとかさんは、なんでおじ様相手だと一歩引いちゃってるの？」
「はぁ！？」
「だって、あたし達に対するのとあきらかに態度違うじゃない。なんてゆーか、兄貴分を見る弟分て感じ」
「な……だ……ダレがだよッ！？」
……自覚無かったんだろうか……？
あたしのツメタイ視線に、アルトリートは激しく動揺したらしい。
抱える力が緩み、危うく落っこちかけたあたしは相手にしっかと張り付く。
尻に。

「ってオラァ！　おまえはどこに引っ付いてやがるっ！？」
おしり。
「もうちょっとエライヒトを見る感じだったら、親分を見る子分な感じなんだけど、そーでもないからやっぱ兄貴分を見る弟分って感じなのよ」
「なんでそーなる！？　てかそのココロは何だ！？」
「ゴロツキ」
アルトリートの拳があたしの頭に押しつけられた。
「いちゃいいちゃい～っ」
「て、てめぇな……野生児みてぇな言動やりまくってるヤツが、ヒトをゴロツキ扱いかよ！？」
「自覚はもちょータイタイタイタイッ」
ぐりぐり頭を抉ってくる拳に耐えかねて、あたしはガブッと反撃した。
尻に。
「ぎゃぉーっ！　痛ぇてどこ噛みついてやがんだッダダダダっ！！」
おしり。
「離せコラ！　はな……ギリギリすんなーッ！！」
あたしの必殺歯ぎしり攻撃に、アルトリートが悲鳴をあげる。
フッ。愚かなっ！
このあたしに攻撃したのが悪いのだっ！
何を隠そうこのあたし、三番街のベルと呼ばれたこともあるゆーめーじん！
自分から喧嘩売ることはホドホドしか無いけど、売られた喧嘩はモリモリで買い取るオンナなのです！
ぎりぎりぎり。
「ぐぉお！？　こ、この……てめェ！　最終手段使うぞコラ！」
「ふふぁっふぇみふふぁふふぁ（使ってみればいいわ）」
勝利の予感にキラリと目を光らせたあたしに、アルトリートは据

わった目でボソリと言った。
「屁ぇひるぞ」
……逃げ！！
すかさずビョンッと飛んで逃げたあたしは、しかし、次の瞬間、ワシッと両手で捕らえられる！
「ああっ！？」
逃げるの失敗！
「く、離ちぇっ！　離しぇっ！　くちゃいのはっ！　駄目なのよっ！」
なにせ鼻が特別イイものだからっ！
ジタバタ暴れるあたしに、アルトリートは呆れ顔。
「まだやってねぇーよ。つーかお前臭いが弱点かよ。……よくそんなんで孤児なんてやってこれたな」
「そんなの鼻が麻痺しちゃってたからに決まってるじゃない」
真正面から見上げて言うと、「うっ」とアルトリートが動揺した。
「あたし自身がそーとー臭かったはずだから、そりゃあ鼻も馬鹿になってるわよ。そうでしょ？　あんまり嗅ぐ機会のないご飯の匂いはビンビンに感じとれたけど、悪臭の類はいつだって満ち満ちてたから、ぜぇんぜん感じなかったわ」
そう――レメクに会うまでは。
沈黙したアルトリートに、プランプラン足を揺らしながらあたしは言葉を続けた。
「おじ様に助けられて、石鹸（サポーネ）とかでゴシゴシ洗ってもらって……そうやって初めて、今まで居た場所がすごく臭い場所だったんだって思い知らされたわ。それまでは全然、そんなこと思わなかったのに」
知ったからこそ、わかってしまった。
本当に、自分が『底辺で』生きてきたのだと。
そこには食べ物も無ければ体を綺麗にする術もなく、汚れても交

換する服も無ければ、温もりを求めて羽織るわずかな布すらも無い。
人々が捨てたものや残したものでなんとか食いつなぎ、布をかきあつめて寒さから逃れ、自分の姿がどうであるかなど考える余裕もなくただひたすら生きていた場所――
それが、あそこ――人々が貧民街と呼ぶ、最下層区なのだ。

「体はね、ちゃんと洗わないといけないんだって。どうしてかっていうと、体の中から汚いものとか古いものとかが毎日肌の上に出てきてて、それをちゃんと洗い流さないと体に悪いからなんだって。おじ様がそう言ってたわ。汗とか、垢とか、そういうのは、その汚いものや古いものの集まりなんだって。だから洗い流して、綺麗なままでいるの。そうすると、病気になる確率も減るんだって！」
「……」
「でもねぇ、あたし達を入れてくれるお風呂屋さんなんてどこにも無かったし、孤児院のお風呂は院長達だけしか使えないから、あたし達が体洗おうと思ったら、こっそり水路に飛び込むしかないじゃない？　でも、水路って、綺麗なやつは飲み水用だからドボンしちゃ駄目だし、飛び込んでもいい水路の方は、大きし流れ早いし岸と水の高さに差があるから、飛び込んだら海まで流れてっちゃうし……そうすると、よっぽど泳ぎが上手くないと生きて帰ってこれないから、命がけなのよ」
実際に川に飛び込み、帰ってこれなかった子供をあたしは何人も知っている。
頭はいつもドロドロでシラミがわき、かゆくて気持ち悪くてたまらなかったが、どうしようもないことだと諦めていた。
得にあたしは最悪だった。
なぜなら、髪を洗えばメリディス族特有の色がわかってしまうため、洗いたくても洗えなかったのである。
「雨が降った時にね、みんな外に出て頭洗ったり体洗ったりするの。でもね、あたしってメリディス族でしょ？　だから、バレないよう

に髪洗わずに、体だけなんとかゴシゴシ洗おうとしてたのね。屋根の下とか、たまった雨水とか使って」

もっとも、汚れ果てていたあたしは、雨水を多少被った程度では髪の色など元通りにならなかったのだろうが。

「そうすると、ちゃんと洗った子より汚れたままだから、臭いとかも残ったままなのね。だから、お仕事もあんまりいいの貰えないのよ。掃除とか、汚れる内容なら平気でまわってくるけど。あたしがもうちょっと体が大きかったら、お掃除の仕事も楽だったと思うんだけどね」

しかし無い物ねだりしてもしょーがない。

やれやれ、と嘆息をついて話をまとめたあたしに、しかしアルトリートは何も言わなかった。

ただ、やたらとバツが悪そうな、妙に追いつめられたみたいな、変な顔で俯いてしまっていた。

……おや？

「アルとぇーと……えーと？」

「……アルトリート、だ」

あたしの声に、ボソッと呟くアルトリート。

……なんかねぇ、口に出して言おうとすると、なんでか上手くいかないんだよねぇ、アルトリートって名前。

「……ちみっちょ」

……コイツもあたしの名をちゃんと呼べないんだから、まぁいいか。

「ベル！」

「……悪かったな」

……およ！？

謝罪に目を剥くあたしに、アルトリートはぶすくれた顔のままぼやく。

「おまえの体が『ちっこい』って言って……。一応、悪い意味じゃなかったんだぞ。なんつーか、ちまっとしたモンて、ほら……子猫

とか子鹿とか、カワイイだろ」
……喧嘩売ってんだろーか、この男は……
カワイイの一言がなければ、もう一度ガブッとやっていたところである。
「ちゃんとメシ食えなきゃ、ちっちぇえのは当たり前だよな。鳥だって何だって、餌があたらなきゃチビのまんまだし……下手すりゃ死んじまうもんな」
この男……？
あたしはジッとアルトリートを見上げ、こっそりと首を傾げた。
……もしかして、基本、イイヤツなんだろうか……？
どうもシーゼルやフェリ姫は、アルトリートにいい感情持ってなさそーだったんだけど。
「おまえ……よく……生きてたな」
あたしを見下ろして呟くアルトリートの目は、とても深く、そして澄みきっていた。
その瞳にあたしは目を瞠る。
最初に会った時に見た、濁った色がまるで無かった。
とても綺麗なその色は、どこか悲しく寂しげで、少しだけ暖かい色を含んでいる。
あたしは直感する。
たぶんこれが、アルトリートの本当の瞳なのだ。
嘘偽りのない『彼』なのだ。
「あたしは運が良かったのよ」
「……運かよ」
胸を張ってみせるあたしに、どこか苦笑じみたものをこぼすアルトリート。
あたしはエヘンとさらに胸を張ってみせた。
「運なのよ。今まで他の人にメリディス族だって見破られなかったのも、生き抜いてこれたのも、あの雨の日におじ様と出会えたのも、全部、あたしがどーのっていうんじゃなくて、ただ、運なのよ」

そうでなくて一体なんだというのだろうか。
それ以外に、あたしと、失ってしまった大事な友達の間に違いは無かったはずなのだ。
あっては――いけないはずなのだ。

「だって、あたし……友達より、何か努力してたってわけじゃないもの」
プリムより、優れていたとか、劣っていたとか、そういう差って無かったはずだ。
「いつ誰が、どこで、死んじゃっても、不思議じゃなかったんだもん」
ふいにぼやけた視界の中で、アルトリートが何かを口にした。
声が小さすぎて聞き取れにくかったが、ほとんど呼吸の音のようなそれは、たしかに『泣くなよ』と言っていた。
……な、泣いてなんかいないんだからね！？
「俺もなぁ、ちみっちょ。治安の悪い所によく出入りしててよ……そこにゃ、おまえみたいなのがゴロゴロいてよ……」
アルトリートはあたしを普通に抱っこして、ワシワシと頭を撫でてくる。
遠慮のないその手つきは、下街にいた年配の孤児達の手つきとよく似ていた。
「いい奴等だったぜ。ガリガリに痩せてても、抜け目ねぇっつーか、イイツラしててよ。目ぇキラキラさせてるやつもいて……へっ……お屋敷の奴等よりずっと生き生きしてやがった」
「……」
あたしはゴシゴシと目元を拭って、改めてアルトリートを見る。
公爵夫人と、公爵以外の誰かとの子供だというアルトリート。
そういえば、彼はいったいどういう思いで、どういう風にレンフォードとかいう屋敷の中で暮らしていたのだろうか？
「なかにな、一際ちっちぇえのがいてよ。こいつがまぁ……おまえ

みたいにカワイイツラしてねぇんだけどよ、歯もだいぶ欠けてたし……けど、ちっこい手足でがんばるからよ、なんか可愛くてな……」

そう言って「へっ」と鼻で笑うアルトリートは、けれどどこか暖かくて優しい顔をしている。

「そいつも、そこらにいた連中と変わらず捨て子でよ。親から名前ももらってねぇようなヤツだったんだ。そういう連中は珍しくなくてよ、たいていみんな好き勝手に名乗ってるんだが……そいつ、馬鹿でな……名前も思いつかなくて、他の連中からはチビって呼ばれてた。……ちっちゃくて可愛かったからな。別に悪気があって言ってたわけじゃねぇんだけどよ」

「……でも、言われた方にとっては、そうじゃないかもしれないのよ？」

「……ああ」

アルトリートは俯く。

目が痛みを堪えていた。

「……後で知った。俺もな、ちみっちょってそいつのこと呼んでた。チビって呼ぶとどのチビかわかんねぇっつー理由だけだったんだけどな。けどよ、あいつ、なんかと勘違いしたのか、やたら喜んでてよ……笑いやがるんだよ。嬉しそうに。くそ……もっとマシな名前つけてやりゃあよかったよ。けど……なぁ、オンナの名前なんて、そんなにスッと考えつくか？　いくらチビだって、そいつオンナだったんだからよ。ゴンザレスとかサドンデスとかつけられねぇだろ？」

むしろそのネーミングセンスに文句をつけたい。

「ああいうところにいる連中ってよ、おまえならわかると思うが、無事に生きられる可能性がむちゃくちゃ低いだろ？　……ゴロツキまがいやって、裕福な連中からかっぱらいやって、捕まれば袋だたきで殺されるし、捕まらなくても全員が喰う分にはならねぇし……。俺も一緒にイロイロやったけどよ……駄目でな。あいつもあっさり死んじまいやがった。別に病気でもなんでもなくてよ……」

アルトリートの声に、あたしも顔を俯かせる。
あたしにはわかった。病気じゃない死に方の理由が。
餓死だ。
「なぁ……あいつ、墓に、なんて名前いれればいいんだ？　ちみっちょって、呼び名なんか彫れないだろ？　そんなの名前じゃないだろ。それなのによ、あいつ、その名前いつも嬉しそうで……」
声が歪むのを聞いた。
あたしはただ沈黙を守る。
呼吸が、鼓動が、こういう時、どういう風に軋み、どういう風に弾けるのかをあたしは知っていた。
「ちくしょう……なんだで俺、もっとちゃんとした名前考えなかったんだよ！？」
慟哭と、人はそれを指してそう呼ぶ。
あの地の底のような生活の中で、失った命の前で、体験したあたしにはよくわかる。
そして、アルトリートの声に、ようやくあたしは理解した。
最初に会った時から、アルトリートに対して、がんばった王女さまぶりっこでなく、素で反応してしまっていたのは何故か。
同じ匂いがしたのだ。
鼻でヒクヒク嗅ぐ匂いじゃなく、気配で感じる匂いが。
彼とあたしは、同じ場所を知る者同士だったのである。

「くそ……俺、なんでこんな話してんだよ……」
噛みしめた歯の間から、アルトリートがそう零した。
それは彼が声も嗚咽も何もかもを飲み込んでから、数十秒経った後のことだった。
あたしはそれを素直に凄いと思った。
あたしだったら、思う様ワンワン泣いてただろう。思い出したこととか、そういうもののために。

けれど彼は、大声で泣いたりせず押し殺してしまったのだ。
それが良いことなのかどうかは分からないが、少なくとも、これが子供と大人の差なのか、と思わずにいられなかった。
「ちみっちょ、は、その子の名前だったんだ」
アルトリートの言動には気づかなかったフリで、あたしはそう口にした。
宿のおねーちゃんが言っていたのだ。
オンナには、オトコのプライドを守る義務があるのだと。
「まぁな……おまえがな、なんか、あいつと似ててよ……ちっこくって、一生懸命で、けどなんか変な方向に間違ってる感じで」
……どーゆー意味だ。
「見てて飽きないっつーか、世話しなきゃなんねぇみたいな、そんな感じでよ。……まぁ、おまえはもう王女様だし、あの人がついてるんなら、あいつみたいに手ぇ引っ張ってやんなきゃならねぇわけじゃ、ねェだろうけどな」
……手を引っ張ってあげていたのだろうか。アルトリートは。
その、死んでしまった『ちみっちょ』の手を。
「……あたしは、大丈夫なのです」
「……そうだな」
アルトリートの声に、あたしは心の中で呟く。
そしてその手を失ったのか――と。

「食べるものが無いってぇのは、悲惨なことだ。居る場所がねぇのや、名前が無いのも、悲惨なことだ。……俺はよ、王様ってのが一番偉くて立派な人ならな、なんであんな風に死んじまうヤツがいるんだって叫びたかった。金なんか溢れるほど持ってて、贅沢三昧してるヤツなんだろうって思ってたからさ」
そんな！！
「けど、アウグスタは……！」
「さっき聞いた」

反射的に叫んだあたしに、アルトリートはほろ苦い笑みを浮かべる。

「……ちょろっとだけどな。だからよ、分かんなくなっちまった」

どこか迷子になった子供のような目で。

「ここに来たのは本当にただの付き添いで、ぶっちゃけた話、俺なんかいなくてもいいだろ？　って散々言ったもんなんだぜ。それでも一緒に行こうって言われてよ、しぶしぶ来たのは……あいつに……いや、それより、王様ってやつを一目見たかったってのもあったんだ。こんな綺麗な場所にふんぞりかえってるヤツをさ」

けど、アルトリートは聞いた。

アウグスタが王位に就いたとき、王宮の金蔵がカラッポだったことを。

もちろん、それだけでアウグスタの苦労の何もかもにピンとくるはずはない。なにせあたしも未だにピンときていない。苦労したんだろうな、ってだけで、どれほど苦労したのかは分からないのだ。

それでも、ただふんぞりかえっていただけじゃないことはわかる。

それに、あたしみたいな子供を王女に迎えたりと、いろいろやっていることも。

「あの人にも言われたよ。時間をかけてゆっくり知りなさい、だってよ。へっ……そんな時間、俺には無ぇと思うけどな」

「……なんで？」

自嘲するアルトリートの目はどこか悲しげで、あたしは思わずギュッと服を握りしめていた。

アルトリートは苦笑する。

「ンなに長いこと王宮になんざとどまれるわけねぇだろ？　だいたい、呼ばれて来たわけでもねぇんだからよ、用事がすめば、さっさとレンフォード家の屋敷に帰るに決まってるじゃねぇか。だいたい、ここに用事があるのは俺じゃなくて……あいつのほうなんだからよ」

「クリスーなんたらさん？」

「……おまえはほんっっっとに名前覚えないな……」

……だってー……
しゅん、と肩を落としたあたしに、アルトリートは盛大にため息をつく。
「あいつの用事がすんだら、俺は帰るさ」
「えー」
「なにが不満だ。それが普通だろが」
「だって、アルとぇーと……」
「アルでいい、アルで」
どこか呆れたように言いながら、アルトリートはあたしを抱え直した。
そうして廊下を歩き出す。
「どーせ長い名前苦手なんだろうが」
……バレてる……！
「お、覚えられないんじゃないんだからね！？　覚えにくいのは確かだけど！」
正直に言うと、なんか変な苦笑をされた。
どっちかというと自嘲に近いような苦笑だ。
「いーさ、別に。どのみちどんな呼び名でも一緒だからな。好きに呼べよ」
「じゃあ、アルルン」
「……なんで長くするんだよ。つかその名前、本気でヤメロ」
……好きに呼べっつーのは嘘だったんだな……
あたしは胡乱な目でアルトリートを見あげ……って、いやいや、とりあえずそれよりも言うべきことがあるのだった。
あたしは姿勢を正すと、アルトリートに向かって言った。
「あのね、アル」
「あ？」
「アルはね、『よい子』なのよ」
アルトリートの顎が落っこちた。
「おじ様がそう言うんだから、もう間違いなく『よい子』なの。お

じ様がね、守るなんて言うのはそうそうないことなのよ」
「……どういう意味だよそれ」
「だから、おじ様は、アルがここにいたほうが嬉しいってことだと思うの」
アルトリートの目が丸くなった。
しばしそのままでいてから、
「はぁ!?」
なんかすごい素っ頓狂な声をあげる。
「なん……でぇ!?　嬉……!?」
「理由なんて知らないもん。けど、この子は守らなきゃだめだな、って思ったってことは、大事だってことで、大事だってことは、好きだってことなのよ」
「!?!?!?!?」
アルトリートの顔色がイロイロ忙しい。
青くなったり赤くなったり紫に落ち着いたり白くなったり。
「じつはアルトリートって、おじ様と面識あったの?」
「ねぇよ!!」
ものすごい否定がきた。
なんかかえって嘘くさい。
「ねぇよ!　マジで!　あの庭で会ったのが初めてだ!　だいたい……会えるわけねぇだろ!?　俺はレンフォード家にいて、あの人は王宮にいるんだぞ!?　どうやって会うんだよ!?　だいたい、おまえ達もあの人に普通に接しすぎだろ!?　なんで料理作ってもらってんだよ!?　ありえねぇだろ普通!」
……まー、確かにレメクの世話やきっぷりは、最初に見る全ての人の常識を粉々にするシロモノのよーだが。
「ありえねぇだろ?　なんか普通に王宮内で過ごしてるし。噂とだいぶ違うじゃねぇか。それともあれか?　世の中に満ちてる噂は全部デマか?　馬鹿な考えを起こす奴等を引っ捕らえるための罠……」
そこまで言って、アルトリートはまともに顔色を変えた。

血の気が完全に下がりきり、目まで虚ろによどんでしまう。
「……そうだ……駄目だ……駄目だ！」
なにが駄目なのか。
問う前にアルトリートは走り出した。
いや、走りだそうとした。
「おや。珍しい。……龍眼ですか」
声と同時止められたアルトリートの体には、芸術のような白い手が触れている。
あたしは顔を上げ、アルトリートの肩越しに見える凄まじい美貌に顔を輝かせた。
「お義父さま！」
神殿の神々よりも美しいそのヒトは、アルトリートを見つめながら、どこか亀裂のような笑みを浮かべていた。

8　龍の眼と神の耳

「レンさんに頼まれましてね。あなた方が変な所に行ってしまわないように案内してくれ、と」
そう言って微笑むポテトさんは、相変わらず素晴らしいお顔だった。
その凄まじい美貌を気配で感じ取りでもしたのか、ポテトさんに触れられてるアルトリートはピクリともしない。
あれだけ血相変えて走り出そうとしていたのに、ヘビに睨まれたカエルもかくやという硬直っぷりだった。
「アル？」
とりあえず名前を呼んでみる。
「アルルン？」
意外にもスルー。
手を伸ばして目の前でパタパタ振るが、これがまた見事なぐらい無反応だった。
……鼻に指でも突っ込んでやったら気づくかな？
「お嬢さん。なにか不穏なこと考えてませんか？」
止められました。
「でも、お義父さま。アルが動かないのですよ」
「ん～。龍眼もちだからですかねぇ」
……だからそもそも『リューガン』てナンダ。
ジト目で見上げるあたしに、ポテトさんは半笑いで言った。
「名の通り『龍族の目』ですよ。まぁ一口に『龍族』といっても、古代龍とか真龍とか呼ばれるタイプに限定されますけど」
はてな？
「いろいろあるんです。そーゆー種類が。で、そういった特殊な龍族は、『目』そのものに強大な力を持っています。魔術回路を読み

取る目や、それを破壊する目、命を奪う目や、呪詛をかける目、石化させる目、真実を見抜く目……これらは個体毎に違っていて、どの龍がどの力を持っているのかは、相対しなければわかりません。これらの能力は基本的には龍族独自のもので、人が生まれながらに持つことは無いんです」

あたしは思わずアルトリートを見上げた。

「じゃあ、アルはりゅーさんなの？」

そーいや、人間にしてはガラ悪いよーな。

「いぃえ。ただの人間ですよ」

……シツレイシマシタ。

「人が龍眼を持つのは『龍の呪い』のせいです」

「呪い？」

っていうと？

「死の間際の呪詛です。簡単に言えば、とんでもなく強い龍を殺しちゃったために、その龍から呪われて『目』が『殺した龍族の目』に変わっちゃったのが『龍眼』です。子々孫々にわたる呪いなので、血族が全員死に絶えるまで血族内の誰かが龍眼になり続けるという、困ったタイプの呪詛なんですよね、これが」

……えーと……？

首を傾げるあたしに、ポテトさんは三秒ほど天井を見上げてからニコッと笑った。

「え～……つまり！　龍をザクッと刺し殺したら、なんと目が『龍の眼』になっちゃいました！　という感じです」

「なるほど！」

「そしてその目は、持ち主が死ぬと血族と誰かに移っちゃうという、変な伝染病みたいなやつなのです！」

「なんと！」

「ついでに言うと、コレはナスティア王家にかかってる龍の呪いですね。力の波動が同じですし、特徴も同じようですから」

「え！？」

ついでに言われた言葉に、あたしはビックリしてポテトさんに飛び移った。

「王家の!?　王家の呪いって……じゃあ、アウグスタも龍眼になっちゃうの!?」

「いや、だからなりませんってば。一族の誰かに龍眼があらわれてる場合、その人物が死なない限り他の誰かに龍眼が現れることは無いんですよ。つまり、今代の王族の中で『龍眼』持ちは彼だ、ということです」

チラとアルトリートに流し目を送って、ポテトさんは薄く笑った。

「彼が死ねば、誰かがかわりに『龍眼』をもつことになります。彼だって最初から『龍眼』だったわけじゃないと思いますよ。彼が『龍眼』になったのは、おそらく十三年前のはずですから」

十三年前?

「ベラですよ。この『目』の前の持ち主は。レンさんの養父です」

ベラ、と。

ポテトさんが呼んだその名前は、あたしの中では別の名前になっていた。

ステファン、ベラなんとかかんとか、なんとかクラウドール……

そう!

「ステファンおじーちゃん、リューガンの人だったの?」

あたしの声に、ポテトさんはほんのり苦笑。

「そうなります。ちなみに、ステファン・ベラトリーテ・ベネディクトゥス・アルヴァトゥアルが本名ですよ。ステファン・ベラトリーテ・フォン・クラウドールの方ばかり名乗ってましたけどね」

……だから、長い名前は覚えられないんだってば……

「ベラの持っていた龍眼は、『この世のありとあらゆる真実を見抜く』目でした。うちのご主人様の『真実の紋章』に近いですね。その目に映った全てのものの真実を文字通り『見抜く』わけです。た

だ、その瞳で『見る』だけで」
あたしは改めてアルトリートの瞳を見上げた。
白くなってしまったアルトリートの顔にある、綺麗な紫色の瞳を。
「じゃあ、アルはふつーに見るだけで、周りの人が隠してるものとか全部見えちゃうの？」
例えばヅラとか偽乳とか底上げ靴とか。
「……えー……確かに身体的特徴も見抜きますね」
最悪な目だ！
「ウィッグや矯正下着は、見た瞬間に『ブレ』を感じ取るのだとベラは言っていましたよ。なんというか、その人物が二重に見えるらしいです。で、よりハッキリ見えるほうが真実なのだそうで。それに、染め粉を使った髪の染色とかも全部意味がありませんからねぇ。綺麗な黒髪の人に、やぁ見事な金髪ですね、とか普通に話しかけちゃったりしてましたよ」
……もしかして、持ってる本人も大変なんじゃなかろーか。
人が隠してるものまで普通に見えちゃってたら、もちろん隠してるなんてこと分からないだろうし、そうすると、素で秘密をばらしちゃうことだってあるのかもしれない。
「人と違う力というのは、そういうものですよ。何かの時には役に立つかもしれませんが、それ以外の普通の時にはかえって邪魔になるもんなんです。……ただね、そういう目ですから、この私の『全て』も見抜いてしまったんじゃないでしょうかね？　彼は。普通の人なら気づかない、もしくは、気づきそうになっても、気づかないまま目を背けていられることを……否応なく『一目で』看過しちゃったんじゃないでしょうかね？　ね？　『アルトリート』という名前の人？」
薄い亀裂のような笑みを浮かべて、ポテトさんはソッとアルトリートから手を離した。
途端――

「にょおっ！？」
いきなり視界がブレた。
奪うようにあたしを抱きかかえたアルトリートが、ほとんど一瞬でポテトさんとの距離を空けたのだ。
飛び退るようにして反対側の壁に背を張り付かせたアルトリートは、ひどく切羽詰まった顔で浅い呼吸を繰り返している。全身から痛いほどの緊張が伝わってきて、あたしも思わず息をつめてしまった。
「……アル……？」
そっと問うが、答えはない。
ただ、信じられないものを見る眼差しで、彼はポテトさんを睨み続けていた。
「なんで……こんな、所に……！」
ほとんど掠れるような声は、深い絶望と焦燥に満ちていた。
あたしは首を傾げる。
視線を転じてポテトさんを見れば、彼の方はニコニコだ。
「やー。久しぶりですねーこういう反応。最近、ご主人様とかレンさんとかお嬢さんとか、全然平気で接してくる人ばっかりだったから、ちょっと自分が『何』だったのか忘れかけていましたよ」
その言葉にあたし更に首を傾げた。
はて？
彼はいったい『何』だとゆーのだろーか？
「お義父さま。ただの変態な顔面凶器さんじゃなかったの？」
「……おじょーさん……今、かなりヒドイこと言いましたよ」
何故かポテトさんが床に蹲ってしまったが、その理由は不明である。
「ちみ……っちょ、おまえ、あれが、なにか、わかんねぇのか！？」
あたしとポテトさんのやり取りに、アルトリートが愕然とした声

で叫ぶ。
　なにか、って言われても……
「あのね、ポテトさんはおじ様の名付け親で、育て親の一人で、アウグスタが大好きな変態さんで、顔がちょっと可哀想なぐらいアレなヒトなの！」
「……そんな説明なんですか、私……」
「おじ様もね、お義父さまには頭が上がらないの！　きっとすごーく好きなんだと思うのよ！　てゆか、アル。ヒトをアレよばわりはイカンのよ？」
「ば……！　そんな次元の問題かよ！　あきらかに……あきらかに違うだ！？　なんで人間の形してんだよ！？　ありえねェ！」
「ほんとーにねぇ」
「ぎょゃあ！」
　いつのまに距離を詰めてきたのか（たぶん瞬時）、至近距離でポテトさんにウンウン頷かれて、アルトリートが悲鳴をあげてのけぞった。
「死、死、死の塊が……！」
　死の塊？
「うわー、そーゆー風に見えるんですかー。ということは、あなたにとって『恐怖』とは『死』そのものなんですねぇ」
「ちっ近よ……っ！」
「あぁ、面白いですねぇ、あなた。同じ紫の目、同じ龍眼なのにだいぶ反応が違ってて。まぁ、『彼』とあなたを比べるのは、少々あなたが可哀想ですけど。いや、久しぶりに見ますよ。全てを理解しつつ、恐怖を恐怖と受け止めてなおかつ私を見返せる人間って」
　伸びてきた白い手に両頬を挟まれ、恐慌状態に陥っているアルトリート。
　二人の間に挟まっているあたしはというと、そんな二人のやり取りを至近距離でのんびりと眺めていた。
「この『龍眼』を持っていながら、振り回されずにいる人間という

のも珍しいですけど……あぁ、違いますね、あなたの場合、諦めてしまっているわけですか。特別なものに意義を見いだすことも、期待することも……」

ポテトさんの声に、あたしは首を傾げる。

どっちかっていうと、アルトリートは諦めが悪そーな感じなんだがな？

「そういうところは『あの子』と似てますねぇ……だから私好みなわけですか」

「……ッ　……ッ　……ッ」

もはやアルトリートは声もないよう。

なんというか、ぶっちゃけポテトさんがアルを襲ってるよーにしか見えなかったりするのだが、まぁレメクがターゲットじゃないからいいだろう。

問題ナイ。

「大ありだろ！？」

「……あなたもなかなか人でなしですね、お嬢さん。私が言うのもなんですが」

「あれ？　なんで反応がかえってくるの？」

しかも二人して。

「口から出てんだよおまえのは！」

「素直なのも考えものですねぇ」

ありゃー。

「ま。おかげで目的も思い出しましたし、お遊びはこれぐらいにしておきましょうか」

「……そこはかとなく本気だった気がするけど？　お義父さま」

「私は遊びに本気なんです」

ポテトさんは超真顔。

……なんとか大法官とかいう、仕事はどーした。

「とりあえず、お二人をちゃんと部屋に案内いたしましょう。……ちなみに、さっきのまま進んでいたら、あなた方がたどり着いてい

たのは部屋じゃなくて厨房でしたよ」
「厨房!?」
「ソコ反応しない。目を輝かさない。こっち見ないでください！私にだって果たさなきゃいけない約束ってのがあるんです！」
えー。
「ちゃんと案内するようにご主人様に言われてるんです!!」
何故そこまで必死に言われるのだぐるっきゅー……
「部屋の方に軽食も用意してあげてますから、そっちに行きましょうね、そっちに。で、龍眼くん。あなたも一緒に行くんですよね？
もちろん」
「ひぃっ!?」
ガシッと肩を組まれて、アルトリートが飛び上がった。
それを無視してガッツリと肩を組み、ポテトさんはニッコリと微笑みかける。
「さっきの説明で分かったかどうかは不明ですけど、あなたの目は世界の真実を見抜きます」
「そ……それ、が、何!?」
「いいですか？『あなたの目は』です」
「……ッ」
アルトリートの目が大きく見開かれた。
恐怖も一瞬吹っ飛んだのか、そのままポテトさんを食い入るように見ている。
「……つまり、そういうことです。私としてはね、あなたのようにこれから面倒を起こしそうな相手は、さっさと消してしまいたいんです。けれど……それをすると、あの子達はきっとすごく怒るでしょうからね……」
なんとも言えない微苦笑を零しから、ポテトさんはアルトリートに告げる。
「あなたが大人しくしていてくださるのなら、私も手出しはしないと誓いましょう。私は、私の知るあなた方の事情を口にすることは

いたしません。けれど、あなたが知り得た全てを誰かに話すのなら、私も全てを公にいたしましょう」
「なん……だと？」
「侯爵夫人の企みを『私が』知らないと思いますか？」
「……」
「底の浅い、計画性の無い『企み』です。見通しも甘く、想像力も乏しく、自己の満足だけで行われた、雑で拙い、正直言ってただの思いつきで行われたような内容です。けれど、それでもすでに、行われてしまった」
「……」
「時は戻りません。ましてこの時期、他国からの使者も大勢いる中で情報は巡りました。取り返しのつかない、というのはまさに今の状況でしょう。……今更あなたが何を言ったところで、遅すぎるのですよ」
愕然としているアルトリートに、ポテトさんは笑った。
「すでに動き出してしまったものを止めることはできません。あとはただ、行き着く場所へと向かうのみ。――大人しくしていなさい。あなたも、こんな所で消滅させられたくは無いでしょう？」
ゾッとするような気配と同時、アルトリートの体が強ばった。おそらく無意識なのだろう、何かに耐えるようにぎゅっと腕に力を入れ――
「ぐぇえ」
あたしを締め上げやがった。
「あっ！　ちみっちょ！」
「ありゃ、お嬢さん」
綺麗に全身を絞められたあたしに、二人そろって声をあげる。
てゆか、あたしの存在、忘れてたな！？
「くるちかったわょ！？」
「わ、悪ぃ……」

「お義父さまも！　アルはおじ様が可愛がってるんだから、いじめちゃ駄目なの！」
「え～……いじめてるつもりは少々しか無かったんですけど……」
「少々でもあったらイカンのです！　アルをいじめるなら、あたしが戦うのですよ!?　おじ様から『アルを守ってくれ』って言われてるんだから！」
「……そのわりに、おまえ、さっき傍観してなかったか……？」
「細かいことは気にしない！」
胸を張ってみせたあたしに、何故かアルトリートは微妙な顔。
ポテトさんはというと、苦笑してアルトリートから身を離した。
「はいはい。では、今回はお嬢さんに免じてこれぐらいにしておきましょうかね。けれど、龍眼くん。忘れないように。あなたが動けば、私も動きます。……すでに運命は動き始めているんですから、あとはただ、成り行きに従うのが賢明ですよ」
薄い笑みを口元に浮かべて、ポテトさんが踵を返す。
そのまま悠然と歩き、ややあってから突っ立っているアルトリートを振り返った。
「なにをしているんです？　ついて来ないと部屋に帰れませんよ？」
アルトリートの顔が盛大に引きつったのは、言うまでもない。

※　※　※

「さ。着きましたよ～」
そう言ってポテトさんが扉の一つを開けてくれたのは、えらく長い道のりを歩いて歩いて歩きまくった後だった。
「青の間って、すーっごく遠い場所にあったんだー……」
完全に息があがっているアルトリートに抱っこされたまま、あたしは感心してそう言った。
延々歩きづめのアルトリートはというと、喉が渇いているのかさっきからずっとヒューヒュー言ってる。

その顔がほどよく白いのは、道中さんざんポテトさんにからまれたせいだろう。

怖がりながらもイロイロとツッコミをいれてしまうアルトリートは、どうやらポテトさんの大好物であったようだ。可哀想に。

（てゆか、アルにはきっと『がくしゅーのーりょく』とかゆーのが無いのね。うん）

ちなみに、歩いてる間中「あそこは何々の部屋」「あちらはなんたらの庭」などと朗らかに説明してくれていたポテトさんのほうは、いつも通りの涼しげな顔である。

……やっぱ体力も人外なんだな……このヒト。

「おや？　この部屋、そんなに遠かったですかね？」

しれっとした顔で言う彼に、あたしは大きく頷いてみせた。

「遠かったですヨ？　でも、フェリ姫の時も玄関まですごく長く歩いたもんね。王宮って、やっぱすンごく大きいんだわ」

「おや」

あたしの声に、ポテトさんは素晴らしく優しい笑み。

「場所的には、さっきあなた方がいた所から数百歩程度なんですけどね？」

……ほぇ？

「でも、なんかすっごく長く歩いてたような……！？」

「ええ。それはもう、じっくりと延々歩かせていただきましたよ？」

「？？？」

なぜか指をくるりと逆時計回りに回すポテトさんに、あたしはキョトンと首を傾げた。

近いのにイッパイ歩いたって、なんでだ？

「……テメェ」

そんなあたしを抱えたまま、ヒューヒューいってるアルトリートが凄まじい目でポテトさんを睨む。

「……わざと、逆方向から、ぐるっと、歩いたな！？」

声と目は怒り満載。けれど腰はちょっぴり逃げかけ。

……そーゆートコがポテトさんに絡まれる原因だと思うのだな、あたしは。

れーせーに考える頭脳派のあたしの前で、ポテトさんは超笑顔。

「あははは～。よくお分かりで～」

……。

……って、なんですと!?

「単に私があなた方を引き連れて『王宮中を』練り歩いただけなんですよね～。でも二人とも、今の今まで全然気づいてなかったんですねぇ。地理が無いって、ほら、こんなに怖いことだったりするんですよ？　あっはっはっは」

「あっはっはっはじゃないわよ!?」

ぺしぺし。

「なんでそんなことしちゃうの!?」

ぺしぺし。

「アルなんてほら、歩かされまくってるからカンカンに……」

ほら！　とポテトさんを叩いていた手でアルトリートを示すと、そこには青ざめながらも素晴らしい仏頂面……になってないアルトリートが一人。

……あり？

「……怒ってない……の？」

「……」

アルトリートは無言。

怖いぐらい真剣な目でポテトさんを睨んでいたかと思うと、一言一言、確認するようにして言った。

「……あんた……敵じゃねぇのか……？」

「さぁ、どうでしょう？」

はぐらかすような笑みを浮かべて、ポテトさんは肩をすくめる。

「あなた同様、それを決めるのは私ではありませんからね」

「……」

「王宮には、人の出入りを制限している場所が数多くあるのです。

あなたのように何も知らない者は、できるだけ彷徨かずにいるのが賢明でしょう。……けれど、それができない状況というのも多々ありますからね」

謎な発言をしてから、ポテトさんは部屋の中を掌で指し示した。

「さ、中へどうぞ。『先生』の方は先に到着して待ってくれているようですから、早く行ったほうがいいですよ」

アルトリートは逃げ腰のまま胡散臭そうな目でポテトさんを睨み、あたしと顔を見合わせてから扉をくぐった。

……というか、先生って……

「まぁっ！」

あ！

「ちょっと、あなた！　なぜこんなところまで来ているのです！？」

フェリ姫だ！

「お義姉さま！」

「げっ！？　なんでおまえが！？」

しまった。あたしの『先生』であるフェリ姫と、アルトリートは仲が悪いんだった！

廊下からすぐの小部屋で、なぜか細い棒みたいなのを持って立っていたフェリ姫は、あたしを抱えたアルトリートに目をクワッと怒らせている。

なんかドレスが午前中のと違ってる気がするのだが、それよりもその手にあるしなやかーな細い棒が気になる。

「『おまえ』呼ばわりとは何です！？」

ひゅんっ！　とそのしなやかーな細い棒をしならせて、フェリ姫は目をギンギンにつり上げた。

「だいたい、あなた！　陛下から了承を得てもいないのに、よくも王宮内を自由気ままにうろついてくれましたわね！」

「あ、あのっお義姉さまっ！　アルはですね、おじ様がですね」

「ベル！　あなたも、そんなろくでなしに抱っこされてないでこっち来なさい！」

ひぃ！

迫力に負けて、あたしはアルトリートにしっかとしがみつく。

そのあたしを抱えて、アルトリートもじりじりと後ろに下がった。

「お待ちなさい！　あなたが退出するのはけっこうですけど、ベルを持って行くのは許しませんわ！　第一、あなたがどうしてベルを抱っこしているんですの!?　クラウドール卿はいったいどこに……」

「まぁまぁ、そうまくしたてずに」

「はうっ！」

あ。気絶した。

倒れたフェリ姫に「ありゃー」と間の抜けた声をあげるのは、事の元凶ポテトさん。

しかしそんな姿すらもウツクシイものだから、フェリ姫の元に駆けつけていたメイドさん部隊も――

「ほぅっ！」「はぁっ！」「ああっ……！」

ものの見事に二次災害。

ばったばったと倒れ伏す美女達に、あたし達はただボーゼンと突っ立っていた。

いやまぁ、あたしは抱っこされた状態なわけだけど。

……てゆか、どーすりゃいいんだろーか、コレ……

「……お義父さま。どー始末つけるのですかコレ」

「え。私のせいなんですか、コレ」

「どー考えてもお義父さまのせいです」

「……いい顔で気絶してんな、こいつら……」

アルトリートは唖然とした顔のまま、床に転がる美女の山を眺める。

ややあってポテトさんを振り返り、逃げ腰ながらもマジマジとその顔を見つめた。

「あぁ、そっか。あんた、顔が凄まじくイイもんな」
……今まで気づかなかったのだろーか。ソコに。
「よく言われますけど、そんなにイイモノですかね、コレ」
……本人は自覚ないのか、顔。
「そりゃ、そこまで整いすぎてたら『いい』とか『悪い』とか通り越して怖ぇけどよ。ほら、よく言うじゃねぇか。怖いもん見たさとか、怖すぎて目が離せねぇとか」
「……一個も褒められてません」
「アル、それはきっと意味が違うわ！　ほら、よく言うじゃない。ウツクシサは罪とか、甘くてキレーな花には猛毒があるとか、顔面凶器とか、天然災害とか！」
「……もっと褒められてません……」
ポテトさんの心がほんのり暗くなった。
「ま、まぁ、とりあえず、部屋にはたどり着けたんだよな。えっとほら……悪ぃな、つーか、助かったっつーか」
じりじりとポテトさんから距離をとりつつ言うアルトリート。
どうやらアリガトウの一言がなかなか言えない質らしい。
ならばここでお手本を見せるのだ！
「お義父さま！　ありがとう！」
「いえ。ご主人様から頼まれただけですから」
言って、ポテトさんはにっこり笑顔であたしをギューと抱きしめてくれる。
アルトリートごと。
「☆〇××★△□■～ッッッ！！」
アルトリートが人外言語で叫んでるが、まぁ無視だ。
「それでは、私はご主人様の所に帰っていますから。お二人とも、しっかりと勉強するんですよ」
「あい！　もう時間無いような気もするけど、がんばるのです！」
「その意気です！　楽しい他人の貶め方や、言われたでまかせを無理やり実現させる話術なんかでしたら私も教えてあげられますから、

いつでも言ってくださいね」
「今度教わりに行くのです！」
「ふふふふふ。楽しみにしていますよ～」
「てゆか行くなら早く行けよッ！！」
延々とギューされてるアルトリートが絶叫。
その魂を振り絞るような声に、ポテトさんが大変嬉しそうな顔をしたのは言うまでもない。
真実を見抜くとかゆー彼の目に、ポテトさんがどんな風に映っているのか。
ぜひとも同じモノを見てみたいものである。

※　※　※

王宮、青の間、応接室。
倒れ伏していたフェリ姫をそこに運んで、待つこと約三十分。
復活したフェリ姫は、あたし達の事情を聞くや深い嘆息をついてこう言った。
「……そうですの。侯爵の指示であなたもお勉強を……」
なんと言うか、ものすごーくドス黒い声だった。
「……侯爵がそう仰るのなら、致し方ありませんわ。例えシーゼルをいじめてくれた御方といえど、教育を施してさしあげることに異論はありません。ええ。ありませんとも」
真っ黒な声で言うフェリ姫は、今まで寝ていたソファの上。
その前であたしとアルトリートは、身の置き所のない感じにチョコンと正座していた。
ちなみに、アルトリートはさっきから尻が逃げかけている。
「てゆか、アル、シーゼルをいじめたのですか」
「俺！？　俺は……ッ、いや、えー……したかもしれねェな」
一瞬ギョッとしてから、なぜかしどろもどろに言うアルトリート。
あたしの目がクワッとつり上がった。

「いじめはイカンのよ！」
「わぁってる！」
「わかってたらやっちゃイカンのよ！　やった方はなんとも思ってなくても、やられた方がずーっと心に傷を負うの！　そんなつもり無かったなんて、逃げは許されないんだからね！」
「だから、わぁーってる！」
「だったらなんでシーゼルを、ってゆかシーゼルに何したの？」
「いや、だから……ッ」
「……ベル。そこまでになさいませ」
言いよどむアルトリートに、何故か一番怒るはずのフェリ姫が静かな声をあげた。
ソファを振り仰ぐと、ひどく青ざめた顔のフェリ姫が、呆然とした表情で口を戦慄かせている。
「意味が……ありませんわ……」
？？？
意味が無い？
「……本当に、意味がありませんわ……なんて……ことなの……」
あきらかに尋常ではないフェリ姫の様子に、あたしとアルトリートは顔を見合わせる。
「マルグレーテ様は、いったい何を考えていらっしゃるの……どうしてこんな……いいえ、むしろどういう風にして……あぁ、違うわ……駄目だわ、考えがまとまらない……！」
「お……お義姉さま……？」
「おい……？」
弱々しく頭を抱えてしまったフェリ姫に、あたし達が腰を上げる。
だが、フェリ姫は片手でそれを制した。
「侯爵は……ベル、クラウドール卿は、守ってくれ、と言ったのですね？　彼を」
……ほぇ？
「う……ん。王宮ではあたしの方が先輩だから、って」

「では、侯爵は……」
呟いて、フェリ姫はゆるく頭を横に振った。
「……そのうえで……」
「「？？？」」
首を傾げるあたし達の前、意味不明な呟きを零してからフェリ姫は深呼吸をする。
「……わかりましたわ」
「「？？？」」
あたしとアルトリートはまたしても顔を見合わせてしまった。
てゆかフェリ姫、いったいさっきから何事なのだ？
「ベル。今日のお勉強は無しですわ。それから、あなたも、今日はちょっと諦めてくださいませ。それよりも片づけなくてはならないことができました」
「？　お義姉さま。どういう意味なのです？」
「マルグレーテ様の動向を探りに行ってきます」
……へ？
「お、おい！」
「言っておきますが、あなた、邪魔をするのなら容赦いたしませんわよ。侯爵が保護なさるおつもりであっても、陛下の災いになる者ならワタクシは排除いたしますわ」
「お義姉さま！」
あたしのあげた非難の声に、フェリ姫は厳しい顔のまま告げる。
「どのような事情があれ、陛下の災いになる者は全て敵。それがワタクシの考えですの。例え王家の血をひいていらっしゃる方であろうとも、例外はありません。……もちろん、マルグレーテ様も」
その瞳に冷ややかなものを宿したフェリ姫に、あたしもアルトリートも息を呑んだ。
フェリ姫はあたし達を順に見つめてから、戸口の方へと視線を向ける。
「もちろん、あなた様の保護があろうとも、です。クラウドール卿」

「！」
その声に、あたしは思わず体ごと振り返った。
「おじ様！」
応接室の扉前に立つレメクは、静かな表情でフェリ姫を見、次いであたしを見て少しだけ微笑んだ。
「おじ様ーッ！」
あたしは大喜びでレメクに飛びつきに行く。
庭にいた時は一人遊びするほど不思議なココロ状態だったが、今は完璧にいつも通りのようだ。
「ベル」
床に膝をついて、レメクはいつものようにあたしを迎えてくれる。
大喜びで飛びついたあたしに、彼は真剣な顔でこう言った。

「私の名前は、ちゃんと覚えていますか？」

……　……　……
……アレ？
いつも通りとチガウ？
「……オイ。まだ、アレを引きずってんじゃねぇのか……？」
アルトリートがあたしに向かって、ぼそっと非難含みの声。
「？　アレとは、何ですの？」
「いや、あのちみっちょがな、おまえの真似して『どなたさま？』とか面と向かって言いやがったんだよ……あの人に」
「まぁ!？　ベル！　なんてことなさいましたの!？」
うわ！
フェリ姫からもすごい非難の声が！
「だ、だって素敵だったんだもん！　フェリ姫の仕草が……！」
「あら。まぁ、そんな……って、使いどころを間違ったら台無しというか、危険ですわよ!？」
「つーか、一番危険な所を盛大に踏んづけた気がするんだけどよ、

俺は」
ああ！　非難イッパイな視線を頭の後ろに感じます！
そんな状態で目の前にいる真顔のレメクと向かわねばならぬとは！
「お、おじ様」
「はい」
「あの、覚えてるですよ？　あたしは。ええ！　もう完璧ってなもんです！」
「では言ってくださいますか」
「もちろん！」
「フルネームで」
「ふるねぇむ！？」
嗚呼！　神様ッ！！
あたしは全力で神様に祈った。
今まで不信心でいてゴメンナサイ！
助けて神様！　もうコレ一回こっきりでいいからッ！！
あたしとレメクはただひたすらに熱く熱く見つめ合う。

もちろん、神様が助けてくれるはずはなかったのである。

9　隠された悪意

青の間の一つ、応接室には素晴らしいモノが溢れていた。
それの色は、白、黒、銀、青、そして血よりも濃くて深い不思議な赤。
手にとって広げたそれは、あたしの何倍もある男の人の服だった。
あたしはそれの中に「とう！」と飛び込み、全力で鼻に集中する。
ふんふんふん。くんくんくんくんくんかくんかくんか！
「……ベル。匂ってないで、その服、こっちにお渡しなさいな」
あっ！　ご無体なっ！
宝の山に埋もれるあたしの目の前で、秘宝が一枚奪われて行く。
慌てて伸ばした手をピシャリと叩いて、略奪者もといフェリ姫は呆れ混じりの目であたしを見下ろした。
「ベル」
「……あい」
持っていった服をメイドさんの一人に渡し、フェリ姫は腰に手をあてすっくと立つ。
「あなたはまだ小さいから、手伝えとは言いませんわ。けど、お邪魔になるようでしたら、奥のお部屋に閉じこめてしまいますわよ？」
ああ！　ご無体なッ！！
慌ててあたしは服の山から這い出、両手に数枚を確保するだけにとどめる。くんくんくん。
「……後でそれも没収ですわよ」
あぁん！
「……つーか、俺ぁいったい、あと何回着替えさせられるんだ……？」
ボソッと呟かれた声に、あたしとフェリ姫は数歩離れた場所にいる彼を振り返った。

大きな姿見を前に設置され、さっきから延々メイドさん達に着替えさせられているのは、この素晴らしい宝物を与えられたアルトリートだった。今も綺麗なメイドさんの手で、深い緑の上着を羽織らされている。

「肩の具合はいかがでしょう？　動かしにくいところは？」

「えっ……いや、つーか、こういった服ってよ、どれもこれも多少窮屈ってゆーか……」

「腕を伸ばしてみてください」

上着（ジェストコール）を引っ張ったりしているアルトリートに、姿見の前でどんより曇っていたレメクが声をかける。

「伸ばす？　こうか？」

「ええ。……丈はいけそうですね。背中がつっぱるようなところはありますか？」

「いや、ねェけど……つーか、その前にその暗い顔なんとかしてくれねぇかな……」

「地顔です」

きっぱりと言われ、アルトリートがあたしを非難の目で振り返る。

ああっ！　視線が痛いッ！

あたしは宝物をしっかと抱え、必死に目を逸らした。

応接室には現在、あたしとレメク、フェリ姫、アルトリート、そしてフェリ姫のメイドさん部隊がひしめいている。

そこで何をやっているのかというと、アルトリートの着せ替えである。

夜会用の衣装を持たないアルトリートに、レメクの昔の服をあてがう作業をしているのだが、その衣装たるや量も質もとんでもなく凄かった。

ちなみに衣装は、あの後、王宮の兵士さんが大量に持ってきてくれたものである。

……なんで王宮の兵士さんが持って来てくれたのかは謎だが。

「あ、あの……おじ様？」

あたしは奪われないよう宝物を抱えたまま、おずおずと暗い顔のレメクに声をかけた。
「なんです？」
レメクはこっちを向きもしない。
「この服、すっごいのばっかりなんだけど、おじ様が作ったの？」
「いいえ。頂き物です」
……ダレに貰ったのだ、こんな上物の服。
「……こんな服、お屋敷では見たことなかったんだけど、どこに置いてあったの？」
「陛下の所に」
……アウグスタの所に！？
ギョッとしたあたし達に、レメクは淡々とした声で言う。
「夜会に出なくなってからは不要でしたから。もともと陛下から頂いたものがほとんどです。お返しするのが筋でしょう」
……普通、もらったままにしておくのが筋なんじゃなかろーか……？
あたしは首を傾げつつ、レメクに似合いそうな服の数々を見渡した。
（……アウグスタ……男服の趣味はいいんだな）
自分のドレスはアレな感じなのに。
「今回、彼が夜会に出席するにあたり、服の新調は間に合わないだろうからと陛下からお返しいただいたのです。私の服で申し訳ないのですが、何分、急なことですから。出席を義務づけられている以上、今回は仕方ないと諦めてください」
「い、いや……そりゃかまわねぇっつーか、俺にはちょっと豪華すぎるっつーか、もったいねぇ感じなんだけどよ」
暗い目のままのレメクに真正面から言われ、アルトリートがしどろもどろに返事する。
心許なげに服の裾を引っ張ったりしているのは、たぶん、そういう服が慣れていないってことなんだろう。あたしがそうであるよう

に。
「よく似合っていますよ」
「そっ……そーか？　ゼッテェあんたの方が似合うと思うんだけどよ……」
レメクに褒められ、まんざらでもなさそうなアルトリート。
あたしとフェリ姫はしみじみと着飾った彼を見上げた。
本人は不安そうだが、アルトリートはかなりの美青年なのだ。立ち振る舞いさえしっかりしてれば、そこらの王侯貴族にだって負けはしないだろう。
ええ。……なんか隣でフェリ姫があたしをジーッと見つめているのが今とても気になりますが。
「あとはダンスですが……教養を受けたことはありますか？」
「だんす！？」
ひっくり返ったその声音だけで、彼の答えは明らかだ。
「……鍛えればそれなりに踊れそうだと思いますが、今日はまだ無理でしょうね。アデライーデ姫に手ほどきをお願いしていますので、時間が空き次第特訓いたしましょう」
「アディ姫に？」
「あいつに！？」
あたしとアルトリートの声に、フェリ姫がきょとんと首を傾げた。
「あら？　ベル達はもうアディお義姉様とお会いになったの？」
「え？　うん。お昼ご飯の時に一緒だったの」
そーいや、アルトリートとレメクの事を話す時、アディ姫のことには触れなかったっけ。
「まぁ。それであの方、陛下の昼餐会にはおいでにならなかったのですわね」
「え。アディ姫、アウグスタの昼餐会すっぽかしたの！？」
ギョッとなったあたしに、フェリ姫は「あら」と微笑む。
「別に強制とかではありませんのよ。ただ、アディお義姉様は王宮にいる間、たいてい陛下の所でご一緒だったから。でもお義姉様の

ことですもの、寝食を忘れて本に没頭していることもありますから、今回もそうなのでは、というお話だったのですわ。まさかベル達の所にいるとは思いませんでしたけれど」

「おじ様に会いに行く途中で捕まったのです！」

「あら……まぁ。そういえば、お義姉様、ベルのことに興味津々だったですものね」

うむ。

「お義姉様はとても研究熱心で、知識を得ることに貪欲でいらっしゃるから、初めて会うときは少し驚いてしまうでしょうけれど……とても良い方ですから、何か困ったことがあれば相談してみるといいですわ。ワタクシ達が知らない沢山のことを知っていらっしゃるから」

ほぅほぅ。

「それに……そうですわね、アディお義姉様が手を貸してくださるのなら、ワタクシ、そろそろおいとまさせていただいても大丈夫かしら」

言って、フェリ姫はあたしとレメクを交互に見た。

そう、マルグレーテとかいう人のことを探りに行きかけたフェリ姫は、あの後、どんよりと曇ってしまったレメクと、困り果てたあたし達を見捨てておけず、メイドさん部隊ともどもこの部屋に居残ってくれたのである。

レメクが曇っている理由は、えー……なんだ、早い話が、あたしがレメクのフルネームを言えなかったせいだったりするのだが。

フェリ姫はちょこちょことあたしの傍に寄ると、声をひそめてあたしに囁いた。

「ベル。早くクラウドール卿のご機嫌を直してくださいましね。あの方があんな風になってるところなんて、今まで見たことがありませんの。直せるのはきっと、あなただけだと思いますわ」

「けど、お義姉さま……どーやって直せばいいのです？」

正直、あんな風になったレメクがどうやって機嫌を直しているの

か、よく分からないのだが。
「それが分かれば苦労はありませんわ。けど、殿方というのは案外心が繊細に出来ているのですもの。ちょっとしたことでも落ち込んでしまうのですから、助けてあげないといけませんわ」
「……あい」
途方に暮れてしょんぼり頷くあたしに、フェリ姫はニッコリと微笑む。
「大丈夫ですわよ、ベル。たぶん、いつも通りのあなたでいれば、きっと機嫌を直してくださいますわ。だってあなたはこんなにあの方が大好きなんですもの」
それはもう！
あたしは力一杯頷き、微笑んだフェリ姫はレメクに二言三言告げてから部屋を出て行ってしまった。
何人かのメイドさんはその後に続いたが、アルトリートの着付けを手伝う大多数のメイドさんは残ったままだ。
「……」
アルトリートがチラッとあたしを見る。
あたしもアルトリートをチラッと見上げた。
分かってる。分かってますとも。そう目で合図しなくても分かってるんだってばっ！
「……おじ様？」
あたしは精一杯勇気を振り絞って、おずおずと服を選んでいるレメクに声をかけた。
「なんです？」
嗚呼！　相変わらず振り向いてもくれないっ！
悲しみのあまり、あたしは近くにあった宝物を一枚ひっかぶった。
「……なぁ、あんた……ちょっとほら……」
アルトリートが困ったような声をあげる。
「……大人なんだからよ……」
「……」

レメクのいる辺りから、微妙な沈黙が漂ってくる。
あたしは手探りでもう一枚宝物をひっかぶり、腕に抱えてるほうの宝物にしょんぼりと顔を埋めた。
「……おじ様」
「……」
「あのね……」
あのね、レメク。
「お馬鹿で……ごめんなさい……なの」
「……？」
「名前ね、ちゃんと覚えようと思っても……覚えられないの。一つぐらいでイッパイイッパイなの」
それもアルトリートや、アルルじーちゃんみたくちょっと長めの名前になると、なんだか頭がこんがらがっちゃって、いざ口にしようとするとつまってしまう。
「ごめんなさい……」
しょんぼりと宝物を抱きしめ、すんすん鼻を動かしているあたしに、レメクのものらしい嘆息が聞こえていた。
「……あなたが、人の名前を覚えないのは……そういえば、最初からでしたね……」
……なんだろう、その、非常に諦めの入った声は……
いっそうしょんぼりしたあたしは、レメクが振り返る気配を感じた。
おじ様っ！
「あなたは……　……　……」
あれ？
なんで沈黙？
「……なんで私のズボンを頭から被ったうえ、他の服に埋もれているんですか？」
んを？　なんか声のトーンが変わったよ？
「ちみっちょ……おまえな……」

なんかアルトリートの方からもすんごい呆れた声がきた。
あれー？　と首を傾げていると、宝物で塞がれていたあたしの視界がパッと明るいものに変わる。
ああっ！　あたしの宝物がっ！
「なに飛びついてきてるんです！？　これはあなたの帽子ではありません！」
「そ、そんなぁっ！　いい匂いがっ！　おじ様の匂いがっ！」
「そんなものを嗅ごうとしないでくださいっ！！」
今まで被っていたズボンを奪われ、あたしはピョイコラピョイコラ飛び上がる。
自然、抱えていた宝物が下に落ち、すかさずそれもメイドさん達に奪われてしまった。
「あぁああーッ！　宝物ーッ！！」
悲痛な声をあげるあたしに、レメクはズボンを抱えて嘆息。
あたしの宝物もといレメクの昔の服を奪っていったメイドさん達は、アルトリートの傍に駆け寄ると、なんと！　服をせっせとアルトリートになすりつけやがった！
「あぁあああ……おじ様の匂いが、アル臭にッ」
「をいちょっと待てっ！　なんだ！　俺はなんか臭いのかッ！？」
「だっておじ様の匂いじゃなくなるんだもん！　おじ様の匂いじゃないと駄目なんだもんっ！」
あたしは残った宝物に駆け寄り、奪われてなるものかと数枚まとめて抱え込む。
キッと振り向くと、呆れ顔の他一同の中でレメクがなにやら複雑そうな顔で突っ立っていた。
「……ベル」
「あいっ」
「……その服は、彼にあげたものですから、あなたが確保してはいけません」
そんなっ！！

絶望を目に溜めたあたしに、レメクの視線がソッと逃げる。
そんな様子を眺めて、アルトリートがあたしに呆れ果てた口調で言った。
「つーか、ちみっちょ。おまえなぁ、そんなもん抱え込まなくても、生があるだろーが、生が」
生が、と指さすのは生レメク。
……そうでしたッ！！
あたしの目がビカッと輝いた！
「とーぅっ！」
「そこから！？」
多少の距離など無問題！　助走なしに飛び上がったあたしは、ものの見事にレメクの顔に張り付いてみせる。
ふんふんふんくんかくんかおでこにむっちゅぅぅぅぅぅぅっ！
「べ……ベル！　ベル！？」
素早くレメクがあたしを鷲づかみ。
抵抗も虚しく引き剥がされると、そこには髪の毛が乱れちゃってるレメクが。
「あなたは何をやっていますか！」
「嗅いでるの！」
「それだけでは無かったでしょう！」
目くじらをたてるレメクの額には、あたしが吸い付いた後がくっきりと。
てか、嗅ぐのは別にいいのかな？
首を傾げたあたしを抱えたまま、レメクはキッとアルトリートに向き直る。
「あなたも！　ベルを煽るようなことを言わないでください！」
「え……」
アルトリートはなにやら不思議な半笑い。
「つか、えー……いや、別に嫌がるよーなことでもねェんだろ？
だったら別にいいじゃねぇか。子供ってな、そーゆー無茶苦茶真っ

直ぐなもんなんだしよ」
すごい。レメクに真っ正面から意見ゆってる。
思わずソンケーの眼差しを向けると、アルトリートが苦笑して肩を竦めた。
「ちみっちょはあんたのことが大好きで、あんたのことが一番なんだろ？　俺なんか何度名乗ってもアルしか覚えてくれなかったし」
うっ！
「まぁ、呼び名なんてどーでもいいけどよ……アルルンは別として……。で、あんたの気持ちも分かるけどさ、ちっこいヤツと付き合うのって、そういう根っこの部分が大事なんじゃねェか？　そりゃ、そんだけ懐いてるのに名前全然覚えてくれなきゃ、ちょっと悔しいっつーか虚しい気するけどよ。気持ちだけは汲んでやらなきゃ、可哀想じゃねぇか。そいつ、まだこんなにちっこいんだし」
……アルトリート……いい人ッ！！
あたしの目がキラッと輝いた。
彼はケニード並みにいい人だ！　ちっこい呼ばわりはちと気に入らんが！
「……そう……ですね」
レメクがやや困り顔になってあたしを見る。あたしはジッとその目に熱い眼差しを向けてから、にこっと微笑んだ。
「子供……ですからね」
「そーそー。こっちが大人なんだから、大人げない拗ね方はやめよーぜ」
大人げないとまで言われて、レメクがちょっと目を丸くする。が、なにやら思い当たることでもあるのか、気まずそうに顔をそむけた。
「で、ちみっちょ。おまえは人の名前覚える練習な」
「うっ」
「『うっ』じゃねぇよ。いつまでも覚えないままじゃ駄目だろうが。いろいろ世話んなってるんだろ？　根性いれて覚えやがれ」
「う……うん」

頷いて、あたしはギュッとレメクに抱きついた。
一瞬レメクの口元がほころんで、大きな手があたしの背をポンと一回叩いてくれる。
「さて、と。一件落着ってことで……」
アルトリートはそう言って、羽織っていた上着をばっさと脱ぎ落とした。
「う～肩凝った！　なぁ、俺、もういいだろ？　着替えばっかりしんどいんだけどよ」
「待ちなさい。それはまだです」
すかさずレメクが待ったをかける。
服を手にしたメイドさん達も、ウンウンと頷いてレメクに同意した。
「いや、だってさっきから何回着替えしたよ！？　つーか、もうコレでいいだろ！？　これ以上着替えする意味あんのかよ！？」
「あります。まだ装飾品の準備も整っていませんし、カフスも今の流行に替えないといけません」
「そうしょくひん～！？　いらねぇだろ！　女じゃねぇんだから！」
「いいえ。王宮の夜会においては男であれ身につけるものに細心の注意を払わないといけません。まして春の大祭中の夜会です。各国の賓客もおいでになっているというのに、完璧に整えずにどうしますか」
「い、いや、別に俺ぁ添え物なんだしよ……！」
「いいえ」
びっくりするぐらい強い口調でレメクは言う。
「誰がどんな思惑であなたをこの場につれて来たにせよ、私がいる限りそんな風には扱わせません。いいですか、あなたはこの……
……いえ……れっきとした王族の血をひく者なのですから」
？　なんか変な言い方したぞ？
「レンフォード家でどのような扱いをうけていたにせよ、この場では私の……身内として扱っていただきます。第一、あなたは陛下と

対面もしなくてはいけないのですよ。初めて会うというのに、きちんとした身なりでいなくてどうしますか」
「……俺……は……」
「装飾品に関しては、最も優れた技術を持つ人を呼んであります。アロック卿ならば、あなたに合う品を見繕ってくれるでしょう」
お？
「ケニードが来るの？」
パッと顔を輝かせたあたしに、レメクは頷く。
「ええ。王都中を探しても、装飾品で彼の右に出る者はいないでしょう。あなたのために新作を作ったと言っていましたよ」
「し……新作ッ！？」
あたしはギョッとなった。
なにせあのケニードの新作だ。詳しくは知らないが、普通に買えば金貨が何枚も吹っ飛ぶシロモノのはずである。
しかも夜会の最中はすっごく忙しいと言っていたのに、言っていたのに作ってたと！？
「……私達が倒れている間、心配して、夜眠れなかったのだそうです」
「……」
「それで、その間に思いついたものを作っていたのだそうですよ。体を動かしていたほうが楽だから、と」
……ケニード……
あたしは目が覚めた日に会った、暖かい彼の笑顔を思い出した。
「……ケニードが来たら、うんとお礼言うね……」
「そうですね」
レメクが淡く微笑む。暖かいその笑顔は素敵だったが、なぜかアルトリートが面白くなさそうな顔になっていた。
何故？
「アル？」
「んぁ？」

「なんかムッとしてたわよ？」
「べ、別にしてねぇだろ？　おまえの気のせいだっつーの」
言いながら顔を背けられては、むしろ肯定されてるよーなものなのだが。
「でもアル……」
言いかけて、あたしはふと耳に拾った音にパッと戸口を向いた。
レメクが「あぁ」と呟く。
「来たようですね」
その声にあわせるように、ガションガションという音を響かせて笑顔の素敵な美青年が駆け込んできた。
「お呼びと聞いて駆けつけましたよ！　クラウドール卿！」
ああ！　笑顔が眩しいッ！！
全身からレメクスキスキオーラを発している彼に、アルトリートが唖然と棒立ちに。
慣れてるあたしはレメクの腕からピョンと飛び出すと、ケニードに向かって飛びかかった。
「ケニード！」
「ベル！」
あたし達はしっかと抱き合う。
相変わらず暖かいおかーさんみたいな匂いのする彼に、あたしはすりすりしてから顔を上げた。
「ケニード！　あのね、この前ね、心配かけてごめんね！」
「この前？　って、どの前？」
きょとんとする彼に、あたしは「倒れてた時のやつ！」と叫ぶ。
「どうしたんだい？　改まって。元気になった姿見れたから、もう全然平気だよ！　あ！　そうだ、コレ……」
言って、彼はごそごそと懐から小冊子を取り出してくる。
「この前の夜会の写真だよ。ほら、コレ！　大事なシーンだったから大きく貼り付けておいたからね！」
もちろん小冊子はレメクとあたしのツーショット。しかもあたし

がレメクのほっぺにチューした場面が大きくアップになっていた。
「ケニード！　大好きよっ！」
「僕も大好きだよっ！」
あたし達は再度しっかと抱き合う。
「……なぁ、アレ、いいのかよ……？」
「？　別にいいんじゃありませんか？　猫がじゃれてるようなものですし」
向こうの方でアルトリートとレメクがなんかゆってる。
てゆか猫ってなんだ、猫って！
「それとね、この前から作ってたのがようやく仕上がったんだ。春らしくアミグダリアの花にしてみた。これなら、春の大祭らしくていいし、結い上げなくても可愛く仕上げられるよ」
シャーッ！　と飛びかかりに行きかけたあたしを止めたのは、ケニードが荷物の中から取りだしてきた綺麗な髪飾り。
満開のアミグダリアのようなその髪飾りは、びっくりするぐらい精緻で美しかった。
「け……ケニード……これ……」
「うん。快気祝いというか、婚約祝いというか、そんな感じだね」
ああっ！　彼の笑顔が眩しすぎるッ！！
「で、でもっ！　あたし、なんのお礼もできてないのにッ！」
あたしの声に、ケニードは微笑んだ。
「僕はね、ベル。君から素敵なものをいっぱい貰ったよ。嬉しくて舞い上がるようなことも沢山沢山あったよ。だからね、これは僕から君へのお礼なんだ」
そう言って本当に嬉しそうに笑う彼は、涙が出そうになるぐらい素敵だった。
あたしはギュッとケニードに抱きつく。
ケニードは笑って、そんなあたしの頭を撫でてくれた。
「そんなに気にしなくていいんだよ。笑って貰ってくれればそれだけで嬉しいから。女の子は、やっぱり笑顔が一番素敵だよ。ね？

ベル」
にこっと笑う彼の笑顔の方が何倍も素敵だと思う。
思いながらもニコッと笑うと、やっぱり数倍素敵な笑顔を返された。
「……なぁ、やっぱりいいのか？　アレ。なんかタラされてねぇか？」
「いえ……そうですか、ああいう風に言えばいいんですね……」
「なに学習しようとしてんだよ！？　あんたがあんなこと言い出したら、周り中がえらいことになるだろ！？」
……なんか向こうが賑やかだ。
ケニードもそれに気づいたのか、金属で補強されてる荷物入れを手に立ち上がり――
「あああーッ！」
なんかすごい悲鳴をあげた。
「そ、その深緑色の上着は！　確か十三年前の九月に行われた狩猟の晩餐会で二時間三十七分だけ着ていた服！」
……細かいな……記憶が。
「……よく覚えていらっしゃいますね」
「もちろんです！　あなたの着ていた服は全て日付と時刻入りで記憶しています！」
さすがにマニアは一味違う。
日付と時刻入りってどんな記憶なんだか。
「その服が、なぜっ！　なぜ……」
言って、彼は壮絶な目でアルトリートを睨んだ。
「私の名前はケニード・リンクス・アザルト・フォン・アロックと申しますが、王宮でお会いすることは一度もありませんでしたが、どちら様でいらっしゃいますか？」
受けたアルトリートは、なぜかこちらも不機嫌そうな顔でケニードを睨む。
「……レンフォード家のアルトリートだ。つーか、てめぇ。初対面

でガンつけてくるってぇのはどんな作法なんだ？　ぁあ？」
「『アルトリート』……？」
顎をしゃくってけんか腰のアルトリートに、しかしケニードは険しい顔のまま訝しげに眉をひそめる。
「レンフォード公爵夫人が王女時代にお産みになったという……『アルトリート・ジュダ・フォルスト・レンフォード』卿？」
長ッ！！
アルトリートの名前も長いよ！！
「……そうだっつったろうが」
「王宮の貴婦人がたの閨に忍び入り、数々の浮き名を流しただけでなく、使用人の若い女性に次々に手を出し泣き寝入りさせ、賭博に手を出して借金を作っては公爵に支払ってもらっているという、あの？」
アルトリート以下、愕然。
思わずシンと静まりかえった中で、ケニードはまだ訝しそうな顔をしている。
てゆか、アルトリートが愕然としてるのはどーゆーことだ？
初対面のケニードに知られてるとは思わなかった、とか？
（てゆか、アルトリート。女の子好きなんだな）
にしても、泣き寝入りさせたっていうのはどーゆーことだ。
「アロック卿……」
静まりかえってしまった部屋に、レメクの静かな声が響く。
が、ケニードは珍しくその声に口を噤みはしなかった。一瞬だけレメクの方を見ると、わずかに目を瞠り、厳しい表情でアルトリートに向き直る。
「……本来王宮の夜会に出られる状態ではない君がこんな場所にいるということは、レンフォード公爵夫人が先王陛下のご子息を隠し続けた挙げ句、他国の耳目のあるこの時期にわざわざ自分の手柄のように連れて来たっていう噂は本当だったようだね」
「アロック卿」

「クラウドール卿。例えあなたが何を仰っても、僕はこの件に関しては黙っていられません。……王宮で、今、誰が何をどんな風に囁いているかご存じですか！？」

ケニードの声が跳ね上がった。

「陛下にはまだ御子がいない。王弟殿下は行方知れず！　なら、公爵が連れて来る御落胤は、次の王太子となるのではないかと……公爵夫人は、長年先王陛下の遺児を隠していたにもかかわらず、裏では褒めそやされているのですよ！　彼女は先王の遺児を守ったのではないか、とか言われて！」

「？　どーゆーことなの？」

あたしは首を傾げる。

前の王様の子供を隠していたのに、守ってたってことになる意味が分からない。

「幼い頃から、王弟殿下……当時は王弟でなく、第一王子だけど……その人が王宮にずっと姿を現さないのは、病弱だからじゃなく、暗殺を恐れてのことだって、裏では言われてたんだ。実際、王族の数の少ないナスティアの王家は、他国からの暗殺者が毎年送られてきてたみたいだしね。けど……第二王妃様がお亡くなりになって、王子も行方不明になり、先王陛下が亡くなられて、今の陛下が王位を継がれた時に、とんでもない噂が流れたんだよ。第二王妃と王子は、女王陛下に殺されたんじゃないかって」

そんな……

「そんなの……！」

「ありえない！　ありえるはずがないんだ！！　でも、そういう噂を流す連中がいるんだよ！　女王陛下が即位されてから、王宮内の膿みたいな役に立たない貴族は一掃された。それを恨んでる連中は沢山いる。けど、彼等が女王に刃向かおうにも、先頭に立つ人間がいない。そんな力のある人はいなかったし、なにより、女王以外に王位に近い人物は、行方不明の王弟殿下以外全員女王派の人間だった。レンフォード家に嫁したマルグレーテ様では、教皇達に拒否さ

れる可能性が高い。だから連中は、こそこそ裏で悪い噂を流すしかなかったんだ。けど、今回、そんな連中に彼等は格好の餌を与えた！」

今にもアルトリートの胸ぐらを掴みそうな勢いで、ケニードは叫んだ

「新しい、もう一人の王弟殿下の存在は、彼等を活気づけさせたんだ。連中は、公爵夫人は女王陛下のことを不審に思っていて、そのため先王であった兄の遺児を隠していたんじゃないかって言ってる。……馬鹿げた話だよ。けど！　そういう連中が、今の王宮でそんな話しをしているんだ！　他国の賓客がいるというのに！　彼等の耳にも入るというのに！！　何も考えずに！！　何故？　決まってる。今のこの時期に、君達がやって来たからだ！　どうして一番してはいけない時期に、こんなことをしたんだ！」

ケニードの怒りは、真っ直ぐにアルトリートに向けられていた。

アルトリートは蒼白になっている。

「君達が何を考えたのかなんて知らない。公爵夫人の浅はかな考えなんてもっと分からない！　けど！　君たちが行ったことは、今、王宮のみならず国そのものを揺らしかねない事態を招いているんだ！　どうして……！」

たまりかねたように、ケニードがアルトリートの胸ぐらを両手で掴んだ。

「どうして……君達は……　……なのに！」

ケニードの声は小さくくぐもっていて、途中、あたしには聞こえなかった。

けれど、アルトリートには聞こえたらしい。

真っ青になた彼は、ぱくぱくと震える唇を開け閉めしていた。

「……クラウドール卿……」

アルトリートの胸ぐらを掴んだまま、その胸に頭突きをかましているような格好で、ケニードは声を振り絞った。

「……あなたのお考えは、僕ではわかりません。どんな気持ちでい

るのかは……察するのがせいぜいです。けど、僕の言っていることは間違っていますか。彼等の行いは、許されるべきものですか！？」

「……いいえ」

静かな声で、レメクは答えた。

ゆっくりと首を振って、もう一度「いいえ」と呟く。

「許されざるものです」

「では、なぜ彼等を今放置していますか！　彼等が夜会で顔を出せば、もう後戻りできないところに来るんですよ！？　おまけに……こんな……」

言って、彼は痛みを堪えるような顔で言葉を続けた。

「許されないことを……どうして……！」

悲痛なその叫びに、アルトリートがよろめいた。

ケニードは掴んでいた手をとき、唇を噛む。

レメクは二人を深い眼差しで見つめ、少しだけ疲れたような嘆息をついた。

あたしはそんな三人の男を見上げたまま、ただただ首を傾げていた。

正直、あたしはケニードが何に対してそんなに激昂し、絶望しているのかよくわからない。

そう。ケニードは絶望しているのだ。

けれど、ケニードがそんな風に思い詰めるほどとんでもないことが起こっていて、その原因がアルトリート達だっていうのが今いちピンとこなかった。

「……クラウドール卿。僕が呼ばれたのは、彼の装飾品を見繕うためですね？」

「……はい」

「……僕には出来ません」

ゆっくりと、けれどハッキリとそう言って、ケニードは俯いたまま深いため息を零した。

「申し訳ありません。……けど、僕には無理です」

「……ケニード」
あたしの声に、ケニードは一瞬だけ顔を上げかけ――けれどやはり俯いたまま、嘆息をついて頭を下げた。
「持ってきた装飾品は好きに使ってくださってかまいません。なんでも好きなものを使ってください」
「アロック卿」
「……失礼します」
顔を上げず、レメクの方を見ないまま、ケニードは踵を返してしまった。
レメクは呼び止めない。
ただ、少し寂しそうな顔でケニードを見送っている。
あたしは蒼白のまま俯いているアルトリートと、珍しい表情をしているレメクを交互に見てから、ケニードを追って走り出した。
理由は分からない。
ただ、彼をこのまま見送ってはいけない気がした。

「ケニード！」
青の間を出てしばらく走ると、大きな階段がある。
その階段を駆け下りた先にあるのが、王宮の中庭へと続く廊下だった。
王宮には中庭が沢山あり、そのため、中庭と中庭の間に廊下があったりもする。左右の壁が無いその廊下をケニードがとぼりとぼりと歩いていた。
「ケニード！　待って！」
声をかけた三秒後に、ケニードが立ち止まって振り返ってくれた。
しょんぼりとしたその顔は、なんだかいつもより老けて見える。
「……ベル……」
「とぅっ！」
悄然としている彼に力いっぱい飛びかかると、よろめきながら抱

き留めてくれた。
「……クラウドール卿達が……いい顔しないよ？」
「んにゃ。あのままケニードを行かせるほうが、たぶんイイ顔しないと思うわ」
きちんと抱きかかえ直してくれるケニードに胸を張ってみせ、あたしはニカッと笑う。
「だってね、おじ様、さっき寂しそうな顔してたもの。ケニードが仲間になってくれないから、しょんぼりしたのよ、きっと」
「なっ……そ、そんな……いやでも、こればっかりは……」
驚き、喜色、困惑、複雑、という表情を見せてくれたケニードは、「うー」と唸ってから深いため息をついて蹲った。
「……分かってるんだ。本当はさ……」
右の中庭から吹いてきた風が、通路に立つあたし達を撫でてから左の中庭へと去っていく。
「僕がギャンギャン言わなくったって、彼がちゃんといろいろ考えてるんだってことは」
「……おじ様が？」
「うん……」
頷いて、ケニードは落ち込んだ顔で呟いた。
「でもね、我慢できなかったんだ。嫌だよね、子供っぽくて。でも……僕は、クラウドール卿のことが一番好きだけどさ、女王陛下のこともすごく好きなんだ。だから……悪く言う人や、そういう人に力を与える人は許せない」
さわさわと風が通る。
春の柔らかく暖かな日差し。
花弁を揺らす鮮やかな花々。
春の庭はあまりにも穏やかで明るくて、暗くなっているケニードをよりくっきりと浮き彫りにしてしまう。
「あの二人は、きっと……さっきの人のこと、大事にしようって思うだろうけど。でも……僕には許せない。そんな彼等にこんな迷惑

をかけるなんて……」
　怒りがぶりかえしたのか、途中で怖い顔になったケニードは、けれどすぐにシュンと沈む。
「でも、余計なお世話かもしれないね。彼等には僕にはない強い力があるし、頭もいいし、公爵夫人や周りの人が何をどう言ってきたって、きっと撃退しちゃえるだろうし……」
「……でも、ケニードは、アウグスタが裏で悪く言われたり、王宮が変な風になっちゃうのが許せなかったんだよね？」
「……うん。でも」
　でも？
「それって……半分ぐらいの理由かもしれない」
「半分？」
　うん、と頷いて、ケニードはふて腐れたような、ちょっと拗ねた顔で呟いた。
「だって、あいつ、絶対大事にされるから」
　……えーと……？
「あいつ、って、アル？」
「へ？　あぁ……うん。さっきの彼」
「そういや、最初っからなんか大事にされてたのよね」
　やっぱり、王族の血を引いてるっていうのは、大事なんだろうか？
　……というか、もしかして……？
「ケニード。ヤキモチ焼いたの？」
「うっ……たぶん、半分ぐらい、そうだと思う」
「じゃー、あたしと一緒だ」
　正直に告白する彼に、あたしもウンウン頷いて正直に言う。
「え？　ベルが？」
「そう。だって、レメクってなんかアルに甘いんだもん。ちょっとくやしい。服だってあんなにあげちゃうし！　あたしにはぱんちゅ一枚くれないのに！」
「……いや、下着は誰にもあげないと思うよ、普通……」

「あたしは欲しいのに！　せめてズボン一枚でもくれたら、匂いが薄れるまで嗅いで嗅いで嗅ぎまくるっていうのに、一枚もくれないのよ！？」
「……僕でも嫌だなぁ……それは……」
ひどい！　ケニード！！
あたしの同志なのにッ！
目をつり上げてぽかぽか肩を殴ると、何故かケニードが笑い出した。
「あはは！　あぁ……ベル、なんだか君と話してると、気分が軽くなるよ」
「どーゆー意味ッ！？」
「素敵だってことだよ。あぁ……でも、そうだね……彼にクラウドール卿が服をあげるのは……僕もものすっっっごく悔しいけど」
……今、スゴイ本気こもってたな……
「でも、あれって、陛下や上の姫君が君にドレスをあげるのと同じなんだよね……」
「んぉ？」
アウグスタや、フェリ姫があたしにドレスをくれたのと同じ……？
「しょうがないんだ……そういうもんだから。けど、気持ちがねぇ……なかなかこう、上手く処理できないっていうか、悔しいっていうか、憎たらしいっていうか……！」
「同感なのです！」
声を上げるケニードに、あたしも握り拳を振り上げて同意する。
「僕だって欲しかった！」
「あたしもです！」
「僕だってちょっと優しくしてほしい！」
「全くです！」
「世話とかやかれてて、むちゃくちゃ羨ましい！」
「その通りなのです！」
おー！　と両手握り拳で賛同すると、ケニードがくすくす笑いな

がら「けどね」と零した。
「そういうもんなんだよね……それが家族だよね」
「？」
家族？
「アルは家族なの？」
「え……うん……ほら、クラウドール卿が保護したってことは、そういうことだよ。君だってそうだったわけだし。いや、君のは事情がちょっと違うけど」
なんかしどろもどろに言われた。
「……ケニード。なんか隠してない？」
「……ないよ」
目が泳いだ！
「隠してるのです！」
「い、いや、ほら……って、アレ？」
いきなり声のトーンを変えて、ケニードが体を起こす。
中庭の方を向いた彼に、あたしは目をクワッとつり上げた。
「ケニード。そんなわざとらしい話題の変え方、このあたしには通用しないのです！」
「いや……そうじゃなくて、ほら、アレ」
アレ、と指さす方向を疑いの目で見ると、
なんと！
そこにはアルトリートの姿が！
「え。噂を聞きつけて来た？」
「いや、違うと思うけど……」
「だって、さっきまで青の間にいたよね？　ついて来てなかったよね？」
「違うと思う。それに、降りてきた階段も違うみたいだ。だって同じ階段を下りて来たなら、僕らの後ろ側にいるはずだし」
そう。アルトリートは、あたし達の進行方向にいるのだ。
しかも、廊下でなく右の中庭に。

「アルって、アウグスタみたいに門の紋章でも持ってるのかな」
「いや、それは無いと思うけど……」
言いながら、ケニードはちょっと複雑そうな顔で歩き出した。
中庭にいるアルトリートは、あたし達の方には気づいていない。
足に手をついて上体を支え、荒い呼吸を繰り返しているところから察するに、どうやら全力疾走して来たようだ。
だが、荒い呼吸のまま上げた顔はなにやら複雑に歪んでいる。その紫の瞳も、苛立ちと困惑と、どうしていいか分からない不安を濃く宿していた。
その様子に、庭に降りたあたしとケニードは顔を見合わせる。
あたしはピョンとケニードの腕から飛び降りると、ちっこい足で数歩先にいるアルトリートに駆け寄ろうとした。
その瞬間、
「やめろ！」
声が聞こえた。
それと同時にすぐ真横を何かが勢いよく走っていった。
目の前に見えたのは、すごい早さで遠ざかるケニードの背と、ギョッとした顔でこっちを見たアルトリートの顔と――――

その真上から、降ってきた茶色い物――

「――――！」

あたしは思わず叫んだ。
それがケニードの名だったのか、アルトリートの名だったのかはわからない。

だが、ケニードがアルトリートとぶつかるのと、彼等の上に茶色い物が被さるのとはほとんど同時で――

がしょん、と。

重いものが落ちて割れる音だけが、やけにハッキリと耳に届いていた。

10　マルグレーテ

何が起きたのか――

分かりきっているはずなのに、頭の中がカラッポになっていた。
倒れている二人。
近くで粉々になっている陶器。
散ったチューリップの鮮やかな赤が、やけに毒々しく目にうつる。
「……け……にー……ど？」
呟くように声を零して、あたしは一歩を踏み出した。
今までどこに消えていたのか、ドッと音が押し寄せてくる。
誰かの悲鳴。
慌ただしい足音。
人を呼ぼうとしている大人の声。
「アル……」
あたしはさらに一歩踏み出した。
足は止まらず、そのまま駆けだした。
「ケニード……！」
建物側で重なって倒れている二人は、時が止まっているかのように動かない。
彼等の肩あたりから頭のあたりまでは、水でビッショリと濡れていた。
そう――水だ。

あたしは嫌な予感を感じながら、必死で自分に言い聞かせた。
あれは水だ。だってほら、濡れたチューリップが近くにいっぱい

散っている。
だから、二人が被っているのは水なんだ。
赤いのは、チューリップの花なんだ！
「ケニ……ッ！」
あたしは駆け寄り、名を呼びかけ――近づくことでハッキリと見た彼の姿に声をひきつらせた。
うつぶせになっている彼の左肩がありえない形にくぼんでいる。
（なに……これ……）
なんで彼の肩が、途中からくぼんでいるんだろう？
普通にあるはずのものが、どうして下にズレているんだろう？
マントが濡れているのは水のはずなのに、きっと水のはずなのに、どうして、彼の下に溜まっていく水は、赤い色をしているんだろう……？
「……っつ……く～……ッ」
硬直したあたしの前で、ケニードの下敷きになっていたアルトリートが身を起こした。
後頭部を押さえているところを見ると、突き飛ばされた時に地面で強く打ったようだ。
だが、それ以外に外傷らしいものは見あたらない。
「～ッて……頭打ったぞ！　一体なんだって……んだ……」
悪態づきながら身を起こし、彼はすぐ間近にいるケニードを見て声を失った。
それはそうだろう。
アルトリートの真正面に、問題の肩があるのだから。
「おい！　あんた……！　なん……だよ、この肩！？」
真っ青になってケニードを揺り動かしかけ、その異様な体に触れられず手を止める。
あたしは散らばった陶器の破片をよけながら、二人の傍にもっと近寄ろうとうろつき――
「アル！」

ふいに聞こえた大声に、思わず廊下側を振り返った。
「アル！　何が……ッ！？」
駆け込んで来たのは、アルトリートとよく似た青年だった。髪の毛がアルトリートよりもクリンクリンの……えー……
クリ……えー……
クリンクリンさんだ！
「なん……で……」
クリンクリンさんは、信じられないものを見るようにアルトリート達を見ている。
その愕然とした顔を見て、あたしはちょっと眉をひそめた。
変な感じがしたのだ。――何かがズレているような。
「あ……ッ」
アルトリートが何かを言いかけ、体を起こそうとした。その動作と同時に落ちかけたケニードに、彼は必死に抱き留めようと動く。
――パタ、と。
その瞬間、力無く投げ出されているケニードの腕のあたりから、赤いものが零れて大きな溜まりの中へと落ちていった。
「……けに……ぃど」
より近くへと踏み出した足が、硬いものを強く踏む。
王宮にいる間中、ずっと履かされている硬い硬い靴の下で、それはガリッと嫌な音をたてた。
あたしは気にせず、そのままふらふらとケニードの傍に寄る。
彼の体まであと数歩分の距離。
歩いて手を伸ばせば触れられる距離。
だからもう、自分をごまかせない。騙せない。
「ケニード……」
あたしの鼻に、まとわりつくように鉄錆びのような匂いがしているのだから。
（ケニード……！）
――目眩がする。

倒れている人。動かない人。
こんな光景は嫌だ。もう嫌だ！
大事な人が倒れているところなんて、もう、見たくなんかないのに！！
「ベル！」
フラフラと、彼らの間近に落ちている大きな破片の上に足を踏み出した瞬間、まるで引き留めるように強く名を呼ばれた。
「お……じ様ッ！」
ドクンと心臓が大きく鳴った。フラフラだった足下の感触が、たった一声でしっかりとしたものになる。
兵士か誰かに呼ばれたのだろう。中庭に走り込んできたレメクは、その場の状態を見るや否や厳しい顔で叫んだ。
「警備兵！」
「ハイッ！」
ちょうど庭に駆け込んできた濃い灰色の服を着た男数人が飛び上がり、転ぶようにしてレメクの傍に走り寄る。
「この場所の上、全ての階とこの場の現状を確保しなさい。フェリシエーヌ姫の侍女を呼んで、消えている花瓶の場所の確認を。一人は陛下に報告！　それと、担架はどこです！？」
「い、い、今っ、と、取りに行っていま……」
「槍とマントで作りなさい！」
言われて、兵士達は再度飛び上がって槍を落とした。
あたしとアルトリートは、こんな時だというのに思わずポカンとレメクを見上げてしまう。
場を仕切るレメクというのは過去に何度か見たことがあるが、正直、声を荒げて命令している姿は初めてである。
「……おっ……かねぇ……」
アルトリートの言葉は、おそらくその場全員の心の声だろう。
しかし、ボソリと呟いたアルトリートはなにやら惚けた顔をしていた。

あたしも惚けた顔でレメクを見上げていたが、首を振って慌てて叫んだ。

「おじ様！　ケニードが！」

「わかっています。動かさないように」

足下の破片に一切目を向けず、レメクは無造作にケニードの傍に膝をついた。

下敷きになったままのアルトリートにも手で「動くな」と命じてから、懐から白い布を取り出す。

あたし達の目は自然、その布に集中した。

小柄なあたしなら、マントにしちゃえそうなぐらい大きな布だった。

生地には大きくて複雑な模様が描かれている。その模様は、不思議なことにゆらりゆらりと自ら動いているように見えた。――紋様術だ！

（……あれは……）

あたしはその紋様を見て目を瞠る。

あんなに複雑な模様に見覚えは無い。けれど、それに似た紋様をどこかで見た気がした。

どこかで――そう、あたしの左胸の上で。

（『闇の』……）

レメクはその布を手早く、けれど慎重にケニードの左肩に巻きつけた。マントの上から巻いているので、下がどうなっているのか、詳しいことはよくわからない。

分かるのは、やはり首の横のあたりから大きくくぼんだようになっているということ、そしてそのせいで腕がぐにゃりと下の位置に下がっているということだけだ。

一見して肩が外れているように見えるのだが、場所が少し違うように見える。

第一、そこが外れているのだとしたら――

肩の――骨は――どうなって……？

「……な、なぁ、あんた……こいつ、大丈夫、だよな……？」

布を巻きつけた（布は一気に赤く染まった）その上からさらに自分のマントを脱いで被せたレメクは、真っ青になっているアルトリートにチラと目を向ける。

「こんなッ、怪我……！　なぁ……大丈夫だよな！？」

アルトリートの声が今にも泣きそうなのは、ケニードの怪我がとても軽いものには見えないからだろう。

そのうえ、ケニードが怪我したのはアルトリートのせいでもある。なぜなら、ケニードを怪我させた茶色い物体――大量のチューリップが生けられていた花瓶は、ケニードが庇わなければ、アルトリートの頭上に落ちていたはずなのだから。

「……。私の方では、まだなんとも言えません」

「……ッ」

「努力はします。今、処理を施せば、『命を失うほど』には至りません」

「じゃ……じゃあ……」

「ただ、彼は宝飾技師です」

険しい顔のまま、レメクは告げる。被せたマントの上に軽く手をかざして、担架を作っている兵士達の方に視線を向けた。

「……後遺症になるかどうかまでは、私では分からないのです」

呟きと同時、うつぶせで倒れたままのケニードの体を抱え、彼は立ち上がった。

ぐにゃりとした左肩部分はできるだけ動かさないように。

これ以上ないほど丁寧に抱え、必死に即席の担架を作って来た兵士に目配せして、その上にそっと横たわらせる。

「『青の間』へ。――王女、よろしいですね？」

その声は、あたしに対して。
あたしは一拍おいてから慌てて頷き、レメクは厳しい顔のまま兵士に向き直った。
「出来る限り振動を与えないように、丁寧に運んでください」
「はいっ」
「それと――この場所の確保は任せました。陛下が来られるまで構いません」
「はッ！」
踵を揃え敬礼する兵士をその場に託して、レメクは立ち上がった。
呆然と地面に座り込んでいるアルトリートを見下ろして手を差し伸べる。
「立ちなさい。あなたも関係者です。『青の間』について来ていただけますね？」
「……俺……は」
無意識に伸ばした手を引っ張られ、よろめくように立ち上がったアルトリートは、白くなった顔で唇を噛んだ。
思いつめた表情で頷く彼の頭の中は、運ばれていくケニードのことで一杯になっているのだろう。その場にいる他の者のことなど、ほとんど頭に入っていない感じだった。
あたしは不安に走り出した鼓動を押さえて、運ばれていくケニードを見送り、レメク達を見る。
――レメクは、一度もクリンクリンさんを見なかった。

※　※　※

人の肉体というのは『闇』の領域に属する。
何か無茶をするたびにレメクから教わった闇ネタの話は、小さなあたしのノーミソにもしっかりと入っている。
光の領域にある『魂』を闇の領域にある『肉体』が内包して、初

めてあたし達のような『生命』になるのだそうだ。
だから魂を内包しない肉体は、不死人（アンデット）と呼ばれ、『生命』もつ者とは区別されるらしい。また、逆に『肉体』を持たないものは、彷徨魂（ウィル）と呼ばれるらしい。
――ええ。長い名前は覚えられませんよ。まったくもって。
まぁ、そのあたりの細かいことはともかく。レメクの持つ『闇の紋章』が、人体に対して凄まじい力を持つのはよく分かっている。
なにせ本気で死にかけていたあたしを、本人に気づかせることなくずっと生かし続けていたのである。それこそ神様みたいな力だろう。
ただ、その神様みたいな力は、いつでもどこでも誰に対しても使えるわけでは無いらしい。
そんなことが簡単にできるなら、レメクは孤児院の騒動の時に孤児全員に対してやっていただろう。
――と、唯一そんなことを簡単にできちゃえそーなポテトさんが言っていた。
そのあたりのこともあたしにはピンとこないのだが、結局、人間には『出来る時』とか『出来る事』てのがイロイロ決まっていて、それを超えちゃうような奇跡なんて、そんなに都合良く起こせるもんじゃないってことなんだろう。
「……ベル。下がっていなさい」
青の間の一室、応接室に即席で作られた寝台の前で、レメクは静かにそう言った。
寝台の上には、やはりうつぶせの状態で寝かされたケニードがいる。
広くて豪華な部屋の中には、他にはあたしとアルトリートしかいない。
ケニードを運び込んでくれた兵士さんも、駆けつけてすぐ即席の寝台を作ってくれたフェリ姫のメイドさん達も、全員部屋の外に出されていた。細かく言うなら、応接室の外、でなく、思いっきり廊

下に、である。
さらに窓には分厚いカーテンがひかれ、部屋の中はかなり薄暗くなっていた。
厳重な人払いも、カーテンも、彼の持つ『力』が決して公にしてはいけないからである。
「……」
あたしは厳しい表情で立つレメクを見上げ、そろそろと数歩離れた。
ちょっと離れた場所で棒立ちになっていたアルトリートの傍に寄り、てんつくと両足を踏ん張る。
――何故、あえてアルトリートだけはこの場所に残されているのか。
その理由はあたしには分からなかった。
確かに、ケニードの怪我は彼に原因がある。
けれど、それだけで『秘中の秘』とかいう『闇の紋章』を見せてちゃっていいのだろうか？
（アルも一応は王族の血筋とかゆーやつだから、そのせいなのかな？）
王家の秘宝のことだから、もしかすると王族には見せてもいいのかもしれない。……まぁ、そのへんの事情もサッパリだが。
あたしはいっぱいの疑問を抱きつつ、アルトリートをチラッと見上げた。
アルトリートは表情の無い顔で、ジッとケニードのことを見ている。
固められた拳は細かく震えていて、何かを必死に我慢しているような、祈っているような――強くて切ない思いが感じられた。
元気づけるようにその拳をペチと叩き、あたしも並んでケニードを見つめる。

が、レメクの長身と祭壇のように高めに作られた即席寝台のせいで、ケニードの姿はほとんど見えなくなっていた。

（……むぅ！）

何かを始めようとしているレメクの背中を見つめつつ、あたしは何か台は無いかと素早く周りを見渡す。

遠くに椅子や机はあるが、それだとケニードの傍にいられない。とはいえ、レメクが何かやってる間中、ずっとジャンプし続けるわけにもいかない。

何か台は……台は台は……

あたしはもう一度周囲を見渡し、ふと隣のアルトリートを見て顔を輝かせた。

よじ登りました。

（あっ！　ケニードがハッキリ見える！）

なかなかイイ感じの視界である。とはいえもうちょっと高みのほうが良さそうだ。

肩に立つぐらいが丁度いいとみて、あたしは「よいしょ」と生きた彫像の上に登りきった。絶景である。

そのいつもと違った視界の中で、まさに今、レメクがケニードの上に手をかざす。

――ふわり、と。

風もないのに、空気に肌を撫でられるような感覚がした。

さわさわと何かが動くような感覚。世界からレメクへと収束し、レメクから周囲へと広がる何かの力――

【　闇よ　】

一言。
ただそれだけで部屋に光が満ちた。
――『それ』は黒い光だった。
――『それ』は複雑な紋様だった。
光る黒というもの不思議なものだが、『それ』はそうとしか言いようのないものだった。
基本となる色は黒。
文字のようでもあり何かの図形のようでもある『黒』が、光ることによって複数の色を放っている。
黒から、夜の闇を薄めたような深い蒼、濃度の淡い青、それはすぐに白くなり、一番外側となる部分では黄色に近い色になっている。
あえて『それ』を細かく色分けするならそんな感じだ。
『それ』はケニードの体を挟むようにして天地に展開する。その大きさは縦長のケニードがすっぽりと入ってしまうほどだった。
レメクは最初の一言以外、何も言わない。何もしない。
それなのに、展開した『それ』はあたかも生き物のように自ら形を変えはじめた。
大きな円形の模様から、小さな円の集まりになり、ぐるりと回って全く別の模様になったかと思ったら、一瞬で最初の模様に戻り――

（……すごい……）
その様子は、まるで模様がダンスを踊っているかのようだった。
光る闇が手をとりあい、くるくると永遠のワルツを踊っている。
繰り返し繰り返し、螺旋のように終わりのないダンスを。
「……　……」
アルトリートの口から、音のない空気が零れた。
彼がジッと見ている先には、淡い光に包まれたケニードの肩がある。
あたしも同じ場所を見て、大きく目を瞠った。

（戻ってる……！）

もちろん服の上からの判断だし、さらに例の白い布が淡く光っているものだから、正味のところ、中がどうなっているのかは分からない。

それでも、あの明らかに異常と分かるような形では無くなっていた。

（……ケニード！）

あたしは、肩から転がらないようにと掴んでいたアルの髪の毛をギュッと握りしめた。涙が出そうだった。

（……すごい……！　すごいすごいおじ様ッ！）

何がどうなって、どういう風に治っていったのか――分からないけれど、目の前で奇跡が行われたのは確かだ。

そして、ケニードの腕が治りつつあるということも！

「……ッ」

アルトリートがグッと全身の力を込める。

ポテトさんの言うところの『なんでも本当のものが見えちゃう』彼の目には、あたしじゃわからないもっと詳しい何かが見えているのかもしれない。

彼から感じるのは希望や熱のようなもので、さっきまでの冷たい落ち込みとは違っていた。

（アル……）

けれど――

（……おじ様？）

あたしはふと首を傾げる。

レメクから感じられる気配が、最初からまるで変わっていかなった。

安堵も、希望も……そこからは欠片も感じられない。

ケニードは治っているように見えるのに――

不安がじわじわと増してくるのを押さえ込み、あたしはジッとレメクの背中を見つめた。
それと同時に、フッと周囲に展開していた光が消える。
「「！？」」
一瞬で薄暗がりに戻った部屋に、あたしとアルトリートが息を呑んだ。
シャッと音がして光が差し込み、そちらを見ると、いつのまに移動したのか、カーテンを開けたレメクが疲れた顔で立っていた。
「……怪我は、これで治っているはずです」
「！」
あたしとアルトリートは無言の歓声をあげる。
思わず同時にケニードを見て、ホッと安堵のため息をついた。
けれど、
「折れていた骨も、寸断されていた筋肉も治しています。ですが……」
「「……『ですが』……？」」
ふと言葉をきったレメクに、あたし達はそろって再度レメクを見る。
「「「……」」」
沈黙。
「「「……」」」
さらに沈黙。
レメクは唖然とした顔だ。
ナゼ？
あたし達は二対一で熱く見つめ合う。
「……どういう格好ですか……それは」

唖然とした顔のまま、レメクがそう呟くように問うてきた。
――って、ん？
視線、あたし限定？
呆然と唖然を足して二で割ったようなレメクの様子に、アルトリートもハタとあたしの存在に気づきやがった。
「って！　ちみっちょ！　おまえ、なんで俺の肩の上に立ってやがる！？」
「んにょあ！」
のっぽさんの右肩に右足を。左肩には左足を。
てんつくと乗せたままでいたあたしに、ブンブンと勢いよく頭を振りだすアルトリート。ぬぉおお！？
「お、ま、え、は！　どーしてそう、王女様らしくないことばっっっかりすンだよ！？」
「のぁーっ」
「普通、肩に乗るっつったら肩車じゃねェのか！？」
「ぬぉーっ」
「つーか、いつのまに俺の上によじ登ってやがった！？」
「もぎょーっ」
あたしを振り落とそうとするアルトリートと、頭にしがみついてガッツリ離れないあたし。
レメクが額を押さえて嘆息をついた。
「ベル。こっちに来なさい」
喜んで！！
ビョンッと振り飛ばされる勢いのままにレメクに向かって飛ぶと、何故かギョッとした顔で避けられた。
どゆこと！？
そのままポーンッと空を飛ぶあたし。
涙も空を流れます。
「ッ！」
あわや即席寝台上のケニードにアタック！　というところで、慌

てたレメクがあたしを空中捕獲。
――ギリギリで。

「あなたは……！」
そのまま同じ目線の位置に持ち上げられたので、窘める目のレメクに負けじと恨みを込めて目を光らせてやった。
（こっち来なさいって言ったのにっ）
ぷらんぷらん。
（言ったのにっ！　言ったのにっ！）
ぷらんぷらん。
「……」
ぷらんっ。
……何故だろう。
レメクが非常に困った顔であたしを抱っこしてくれた。
ぴすぴすぴす。
「……なぁ……この、肩の。治ってるんだよな？　――だよな？
そこのバカップル」
今、アルトリートがイイコトゆった！
『一つも良い事は言ってません』
……なんかわざわざ心の声を送ってくる人が一人。
「断裂した肉や血管、折れた骨が元通りになったかどうか、という問いでしたら『はい』と答えれます」
前置きみたいな返答。
「しかし」
キタ！
「私が出来たのはあくまでも治癒であって、それ以外の奇跡ではありません。怪我を負った、という現実を消したわけではないのです」
レメクの声に、あたしは鼻をひくつかせながら首を傾げた。
ぴす？　ぴすぴす？
「肉体にも記憶というものがあります。負った怪我を『無かったこ

と』にできない以上、彼の体は覚えているわけです――自分が大怪我を負ったのだ、ということを」

ぴすぴすぴす？

サッパリだという意味で匂いを嗅いでいると、レメクはあたしをジッと見て言った。

「例えば、あなたがいつものようにアロック卿に飛びかかるとします」

……飛びかかるとは失礼な。

「すると、おそらく彼の体は、一瞬恐怖に強ばるでしょう」

さらに失礼な！

「彼の意志ではありません。体が『覚えている』からです。『何か』に『強打されて』『大怪我を負った』という記憶を」

「……」

「火傷を負った人が火を怖がるようなものです。……下手をすれば、頭上にある『物』に対して恐怖を覚えるようになるかもしれません」

言われて、あたしは部屋の上を見上げた。

綺麗なシャンデリアがキラキラと輝いている。

「……もしかして……アレも？」

あたしの指さす物を見てから、レメクは憂鬱そうに目を伏せる。

「可能性はあります。……どんな風になるのかは分かりません。それに……一番考えたくないのは後遺症です」

レメクの声に、ケニードの傍に立ったアルトリートがビクッとなった。

「怪我は治っています。けれどそれは、日常生活に支障をきたすことの無いレベルにおいて、です」

？

それじゃイカンのだろうか？

「……つまり、技師なんつー特別繊細な指を持ってるヤツの、普通に過ごす分にゃ分からないけど、細かい作業レベルの違和感とかは、どうなるのか分からねェってことだな……？」

あたしと違い、アルトリートは一足早く駄目な理由を理解したらしい。
硬い声でそう問うのに、レメクはやはり疲れた顔で頷いた。
「そうです。……どなたか、実例をご存じですか？」
「存じるも何も……いっぱいいたからな、レンフォードの土地には」
小さく唇を噛んで、アルトリートは何かを否定するように首を横に振った。
「怪我で指が動きにくくなったってぇのは……何度も聞いた。怪我は治ってるのに、指が動かねぇって……」
ケニードの肩にかかっている布に――色が赤黒く変わっている――触れかけ、痛みを堪えるような顔で手を止める。
「あの土地じゃ、人を蹴落とすために……職人同士でつぶし合いすンのは珍しいことじゃねェからな。何人も見てきた……」
けど、と呟いて、アルトリートは強く唇を噛んだ。
「けどよ……こいつは……違うだろ!?　なんで俺の前で、あんなッ……！　俺……庇って……！」
血の臭いを感じたのは、おそらく気のせいでは無いだろう。
唇を噛み切るほど強く噛んだアルトリートは、悲痛な声を絞り出す。
「だいたい、どうして！　あんなモンが落ちてくるんだよ!?」
そう。それはあたしも知りたいことだった。
あの時、ケニードがアルトリートを突き飛ばすまで、あたしはあんなものが落ちてきていたなんて気づかなかった。
割れる前の姿はハッキリと見えなかったが、落ちてきたのはかなり大きな花瓶だったのだ。割れた破片もかなりの量散らばっていたし、なにより、中に入れられていただろうチューリップの量が凄かった。
あの量から察するに、たぶん、あたしの体がすっぽり入っちゃうぐらい大きな花瓶に違いない。
そんなものが普通、空から降ってくるはずがない。宿のおねーち

ゃんが窓際でチューリップを一本育ててるのとはわけが違うのだ。
誰かが――それもおそらく複数の人間が――持ち上げ、移動させ、落とさない限りは。
「……私はそれよりも、あなたがこの部屋を出る理由となった、レンフォード家からの手紙のほうが気になりますが」
「手紙？」
きょとんと聞き直したあたしに、レメクは頷く。
「えぇ。ベル、あなたとアロック卿が退室してから、すぐのことです。レンフォード家からの手紙が彼に届いたのは。その後すぐ、急用が出来たと外に出られ……」
言葉を句切って、彼はアルトリートの方を見つめた。
「その後起きたのが、あの騒ぎです」
「……ッ！」
アルトリートの顔が真っ青になった。
言われた言葉の意味に、先程まで以上に打ちのめされた顔だ。
「……待てよ……なんだよソレ。つまり、なにか？　あいつが呼び出したから、こんなことが起きた、ってのか？」
（……『あいつ』？）
無意識に後退るアルトリートに、あたしは眉をひそめた。
あいつって、誰だ？
「あいつがこんなことしたって言うのかよ！？」
「『あいつ』というのは、どなたのことです？」
「ッ！！」
レメクの静かな声に、アルトリートは息をつめた。
握りしめた拳がギチリと音をたてる。
何かを堪えるようなその軋みに、あたしは二人の男を見比べた。
「私は、あなたがレンフォード家の手紙を見て出て行った、ということしか知りません。差出人の名前はあなたしか見ていないのです。誰があなたを呼び出したのかを知っているのは、あなただけでしょう。……その人物があなたがここにいることをどうして知っていた

のかは……まぁ、うちの義父が関係しているようですが」
……そーいや、お義父さまに連れられてあちこちぐるぐる回ってたんだったな……
それじゃあ、辿って行けばこの部屋に着くってもんだろう。
「指定された場所に行ったら、死ぬかもしれない怪我を負いそうになった。……普通に考えて、偶然では無いでしょう」
「けどよ……！」
「理由が無いのでしょうか。それとも、信じたく無いというだけなのでしょうか。いずれにしても、向かった先であなたが危険な目にあったという事実は認めなくてはいけません。自分の身を守るためにも――周りの身を守るためにも」

「……ッ」
こういう時のレメクは容赦がない。
押し黙ったアルトリートは、唇を噛みながらケニードを見た。
痛みを堪えるようなその瞳に、あたしはレメクを見上げる。
レメクもケニードを見ていた。その瞳には、深い陰りがある。
「……おじ様。ケニードはいつ起きるの？」
あたしの問いに、レメクは小さく嘆息をつく。
「……一番強く強打されたのは肩ですが、大きさが大きさでしたからね……頭も強く打っています。少なくとも、すぐに目覚める、ということはないでしょう」
「「！？」」
ギョッとなったあたしとアルトリートに、レメクは目をわずかに伏せた。
「脳は正常ですし、内部で血管が切れているようなこともありません。強打したであろう場所で少し血が溜まっていましたが、それも治しています。……ただ、目覚めてみないことには、詳しいことはわかりません」
聞けば聞くほどひどい状態だったらしいケニードに、アルトリー

トの顔がますます蒼い。
あたしも人のことは言えない顔色だったのだろう。レメクは慰めるようにあたしの頭を撫でてくれた。
「おじ様……」
その服をギュッと掴んで、あたしは唇を噛む。
言わなければいけないことがあった。
ケニードが怪我をした時から、ずっと嫌な感じに気になっていたことだ。
「……あの場所にね、クリンクリンさんが来てたの。気づいてた？」
「……。それはもしかして、『クリストフ』と言いたいのですか？」
そんな感じの名前でした。
「気づいてた？」
細かいことは無視して重ねて問うと、レメクは深い眼差しで頷いた。
あたしはその無言の答えにきゅっと唇を引き結ぶ。
……レメクは気づいていたのだ。
気づいていて、無視したのだ。『彼』という存在を。
「……気になっているのは、それだけですか？」
胸の中のモヤモヤが増しているあたしに、レメクの方から問いかけてくる。闇の紋章で繋がっているから、こちらのモヤモヤは筒抜けなのだろう。
「もう一個あるの」
言うと、眼差しだけで促される。
「あたしね、アルが危ない時、全然それに気づけなかったの」
「……それは仕方のないことです」
「でもね、ケニードは何かに気づいたみたいなの。先にアルに向かって行ったあたしの後ろから、『やめろ！』って言って、アルに走っていったの。あたしを追い越して」
「……『やめろ』？」

ふと眉をひそめたレメクに、あたしは頷く。
「うん。『やめろ！』って言ってた。……おじ様。ケニードは、あの大きいのが上から落ちてくる前の瞬間を見たんじゃないかな……？」
レメクは眼差しを鋭くする。
そうして、弾かれたようにあたし達を見ていたアルトリートに視線を向けた。
「あなたを呼び出した手紙を見せていただいてもかまいませんか？」
アルトリートは一瞬顔を歪めたが、懐から一枚の封筒を取り出してくれた。
赤い封蝋のついた綺麗な封筒だ。
「お借りします」
受け取って、レメクはその封筒に書かれている文字を目で追う。
その眉が一瞬、ピクリと動いた。
あたしも一緒に覗き込んで、必死に文字を解読する。
レメクの注視する場所、差出人のところにはこうあった。
マルグレーテ・ジークリンデ・フリーダ・ファラ・レンフォード
――と。

11　『ポテト』

沈黙が場を支配していた。
封筒を見つめたまま、レメクはピクリとも動かない。
彼が見ているのはそこに書かれている名前と、ちょっとヨレてる封蝋付近の部分だった。
封蝋の模様はレンフォード家の紋章――『蛇を喰らう鷲』。

この『家の紋章』というのは、上流階級には必ずあるやつで、まぁ簡単に言えば『家』とか『血筋』とかを一つの絵で判断できるよーにしている模様である。
ぶっちゃけ、宿屋の看板とか魚屋の看板とかと同じよーなもんだ。
……まぁ、そう言ったらレメクには微妙な顔をされてしまったが。
それはともかく。
そんな感じのシロモノだから、もちろん『紋章』と呼ばれていても紋章術とは全く関係ないモノである。
で、この紋章、それぞれの家に因んだ動植物の模様が多く、それらの多くは建国後の十数年の間に決まったものなのだそうだ。
例えば、建国前に羊をいっぱい飼ってた某家の紋章は大きな羊だったり（美味しそう）、山羊を飼ってた家は山羊だったり（美味しそう！）、鳥を飼ってた家は白鳥だったり（美味しそう！！）と、文字を覚えるよりも簡単で面白いので、あたしのちっこい脳みそにだってしっかりと入っている。
ええ。もちろん、別にその絵が美味しそうな動物とかの絵だったからではありませんよ。本当です。
で、ゴホン！
我らがアウグスタの家、つまり『王家』の紋章は『双頭の黄金鷲』

。

鷲の頭上にはゴーカな宝冠があり、両足にはそれぞれ剣と錫杖、胴体に大きな盾があって、その中にいろんな模様が入っているという、なかなか賑やかな紋章だった。

……焼き鳥にしたらどんな味なのだろーかな……黄金の鷲って。

で、我が最愛のレメクがいるクラウドール家の紋章は、頭一つの黄金鷲。

両足に剣と錫杖を持っているのは王家と一緒だが、こっちには宝冠はついてなかった。かわりに鷲の背後に黒い蔓草みたいなのがブワッとあって、なにやら華やかだったりする。

似たような紋章をあげるなら、教皇おじーちゃまの紋章。

宝冠つきの黄金鷲で、頭は二つ。

両足に持ってるのは錫杖と天秤。背後には金色の蔓草みたいなのがブワワッとあって、華やかというよりかなり派手だった。

……なんつーか、王様に近い家の紋章ってのは、あーゆー派手な感じなんだろうなぁ、きっと。

ちなみに、バルバロッサ卿の実家の紋章は『剣と盾を持つ熊』。

ケニードのいるアロック男爵家の紋章は、どういうわけか『ハートと白鳩』だったりする。

……誰があんな柄に決めたんだろうかな、あの紋章は……

まぁ、それもともかくとして。

レンフォード家の紋章は、先にも言ったとおり『蛇を喰らう鷲』。

レメクに見せられた紋章図鑑で見たその紋様は、鷲の色は黒で、食いちぎられる蛇の色は緑だった。

とはいえ、封蝋は溶けた赤い蝋燭の上から紋章の印で模様をつけるだけなので、そういう細かい色はわからない。だが、絵柄は全く一緒だ。

レメクは丁寧にその封蝋の部分に触れ、封筒をひっくり返す。温度を感じないその眼差しは、ゾッとするほど人間らしい感情が宿っていなかった。

「中……見ねぇのか？」
封筒ばかりジッと見ているレメクに、アルトリートがおずおずと言ってくる。
青ざめたその顔を一瞥してから、レメクは中を開いた。
……む？　なんか匂うぞ？
ちょっと濃いめのインクの匂いと、モワンとした変な匂いに、あたしは鼻をひくひく動かす。
気づいて、レメクが微苦笑を浮かべた。
「ベル。彼の所に行ってなさい」
床に降ろされたあたしは、しばらくレメクの周りをぴょこぴょこ飛び回っていたが、相手にしてくれなかったので渋々アルトリートの傍に行った。
アルトリートはなにやら珍妙な表情だ。
「なに？」
「……いや。おまえ見てると、たまに状況を忘れそうになるよな……」
どういう意味だ？
あたしはムッとアルトリートを見上げてから、簡易寝台の上によじ登る。
うつぶせに寝ているケニードは、依然として目を覚ましそうになかった。
「……ケニード」
そっと名前を呼んでみる。
笑っていない彼を見るのは、なんだかすごく久しぶりな気がした。
いつも笑顔ばかり見ていたから、笑っていない顔を思い浮かべるのが難しいぐらいだったのだ。
だけど、今はただ、表情もなく眠ったまま――
「ケニード」
あたしはケニードを揺り起こそうと手を伸ばし、ふと、肩に巻か

れている布を見て手を止めた。
最初白かった布は、今は赤黒くなっている。
この布、巻きつけた当初は赤くなって、術中は白く光っていたのだ。赤黒い色は血の色だろうかと思ったが、それにしてはなにやら色のどす黒さが違う。
（……なんか……これ、ヤな感じの色……）
その不吉な色の布を外そうと手を伸ばすと、後ろから伸びてきた手にワシッと握られた。
「駄目ですよ、ベル」
「!?　……おじ、様？」
ぎょっとなって振り返るあたしに、レメクはわずかに困り顔。
あたしの手を握りこんだまま、彼はすぐ近くに立つアルトリートに向き直った。
「……拝見いたしました。お返しいたしますが、くれぐれもこの手紙は捨てないように」
言われたアルトリートは、なんとも言えない表情だ。
「捨てちゃ……まずいのかよ？」
「ええ。不愉快でしょうが、持っておいてください」
彼はほとんど無意識に唇を噛み――一瞬、顔をしかめた。
おそらく、噛みきってしまった傷が痛んだのだろう。唇の赤い血の痕が、なんとも痛そうな感じだった。
そんなアルトリートの肩を軽く叩いてから、レメクはあたしを見下ろす。
「ベル。あなたは、何かあるたびにすぐに手を出してしまうのを……止めないといけませんよ」
シュンとして見上げると、レメクはあたしの体を持ち上げ、ケニードの足下あたりに設置した。かわりに先程まであたしがいた場所の近くに立ち、物憂げな視線をケニードへと注ぐ。
「……ベル」

あたしの名を呼びながらも、その視線はケニードの肩に注がれたままだ。
「紋様術にはいくつかの種類がありますが、その発動はたいてい二つです」
「二つ？」
ケニードの肩とレメクの顔を見比べながら、あたしは首を傾げる。
「瞬間的な発動型と、継続的な発動型。例えば火の紋様術の場合、発動と同時に発火現象や爆発を起こすのが瞬間的な発動型。発動後に熱を一定期間持ち続けるのが継続的な発動型です」
ふふふん。
このあたしにそんなムツカシー話をするなんて。あれですね。ちょっとオトナのオンナとして認められてきたってことですね！
「……炎が一瞬で燃え上がったりするのが『瞬間的な発動型』と呼ばれるもので、料理に使っていた鉄板のように熱を長時間持ち続けているものが『継続的な発動型』と呼ばれるものです」
……なんで言い直すのだろーか……
「継続的な発動型なら、身近な所で使われていますよ。街灯に使っている『光の紋様珠』や、噴水の所にある『水の紋様珠』などがそれにあたります」
「……へぇ……じゃあ、領地にあった『勝手に水がわき出てくる井戸』ってのにも、そういう紋章術がかかってんのかね……」
アルトリートの声に、レメクは頷く。
「王都や大都市では、高位の紋章術師が多数配属されていますからね。生活で必要な消耗品の大半は、彼等が作った紋章珠を使用しています。それらのほとんどは、継続的な発動型です。……レンフォード家の井戸といえば、生活用水にと『水の紋章珠』を特別に支給していたはずですよ。周辺の田畑や民家の水の供給用になっているはずです」
「……いや、なんか、連中の水遊びとかにしか使われてねぇけど……」

アルトリートの声に、レメクは一瞬押し黙った。
「……厳重注意が必要ですね……」
うぉー……すごい怖い目になってるぞ。
「え、えぇと……おじ様、この……は？」
なんか空気がゾワワッとしたので、あたしはケニードの肩を覆っている布を指さした。
レメクの怖い空気が霧散する。
「それも継続型です。永久持続ではありませんから、効果が切れる前に新しいものに交換しないといけませんが」
あたしが見つめる前で、布はどんどんどんどんその色を深めていく。
ただでさえ赤黒くなっていた布は、今はもうただの黒にしか見えない色になっていた。
「可能な限り正常な状態に戻るように術を発動させていますから、完全に効果が無くなるまでは触れてはいけません」
……なるほど。
「……それ以前に、大きな力を持つ紋章というのは、扱いが難しいのです。術者以外が下手に触れると、術が反転して襲いかかる可能性もありますから」
「襲……ッ！？」
ギョッと身を引いた瞬間、あたしは台から落っこちかけた。
「にょおっ！？」
それを片手で支えて、レメクは上着のポケットから白い布を取り出す。
（あぶっ……あぶっ……！）
ひし、とレメクに掻きつくあたしの前で、彼はその布をバサリと広げた。
かなり大きな布だった。たぶん、今、ケニードの肩に巻いているのと同じぐらいの大きさだろう。
体勢を立て直したあたしと、背後に来ていたアルトリートが見つ

める前で、レメクはそれに自分の右手を乗せる。
――その瞬間、フッと左胸に熱がともった。

（……？　なに？）

【この思いは我が思い】

レメクが不思議な声で言葉を紡ぐ。
それと同時、皮膚が一気に粟立つ。

【この願いは我が願い】

紡がれる言葉にあわせて、空気がビリビリと震えだす。

【綿々と紡がれし血の系譜にかけて、我は我が願いのままに其を叶えん】

ざわり、と――

周囲一帯が音もなくざわめいた。
（な……に……これ！？）
何かの気配のような、密度のような、人の目には見えない、不可視の『何か』。
それは圧迫感のようでもあり、ものすごく濃い空気のようでもあった。
尋常ならざる現象に、アルトリートも驚いた顔できょろきょろと周囲を見渡している。普通なら体験することのない感覚だから、きっと驚いたのだろう。
……けれど、あたしにとって、この感じは初めてではない。

あたしは思わず背筋を伸ばす。
そう、初めてではない。
フェリ姫に連れられて神殿に行った時、神々の間で感じた濃密な『何か』の気配――
今感じているコレは、あのときの気配に似ている。
（これが……紋章の力……？）
それとも、精霊とか、そーゆーモノの気配？
レメクと出会うまで、魔法どころか魔術とかとも縁の無かったあたしだから、そこのところはよく分からない。
だが、それよりも気になるのは……
（さっきのスゴイ魔術の時より……この、気配みたいなのを『強く』感じるのは――なんで？）
あたしから見たら、光の模様がグルグル回っていたさっきまでのやつのほうが、ずっとずっとスゴイ魔術に見えた。
なのに、今の方が体中がゾワゾワするほど、不思議な力の気配を感じるのだ。
不思議なのはそれだけではない。
ケニードの肩を治す時はたった一言だったのに、今のは最初に長い台詞を言っていた。
もしかすると、あれがジュモンとかゆーやつなのかもしれない。
だけど……あの派手な魔術の時は一言で、布に手をあててるだけの今のほうがジュモンつきっていうのは、どーゆー理由なんだろうか？
首を傾げている間も、ザワザワする『何か』はその濃度を増している。
それにあわせるかのように、あたしの体もどんどんポカポカしていった。
何もしていないのに、トクトクと心臓もいつもより早めに動いている。
（……なんでだろう……？）

あたしはレメクに問いかけの視線を向け――ポカンとなった。

（レメクの手に……）

黒い模様が――

（浮き出てる……）

まるで舞い散る羽毛のような、

絡みつく蔓草のような――不可思議な模様。

袖口で隠れている手首から、それは手の指に向かって走っている。

一部は指の中程にまで達していた。

（あれは――）

先ほど見た模様とは少し違う。

けれど、それもまた『闇の紋章』の一部なのだと、誰に言われるまでもなくあたしは理解していた。

なんと言うか、なんとなく懐かしいような、そんな感じがするのだ。

たぶん、あたしに宿ってる闇の紋章の写しが、そーゆー風に感じ取っているんだろう。

見つめているあたし達の前で、右手が触れている部分から布に闇の黒が浸食をはじめる。

ソレは生き物のように蠢き、まるで急激に成長する蔓草のように、不思議な『流れ』にそってゆっくりと精緻な模様を描いていった。

不思議で――どこか美しい光景だった。多分にレメクの外見の良さが影響していると思うが。

（あれが……紋章の力を写してる、ってやつなのかな……）

見た目的になんかそれっぽい。

……アウグスタのデコチューとは、だい～ぶ違うんだな……
いやまぁ、紋章によって写し方が違うとか、人間に写すんじゃなくて布に写すからなのかもしれないが。
あたしは首をコテコテと左右に傾げ、ふとあることに気づいて自分の胸を見た。
左胸にある、ちっちゃな闇の紋様を。
（……そーいや、今まで気にしたことなかったけど……）
あたしがもらった闇の紋章の『写し』って、いったいどーゆー風にしてもらったんだろーか……？
そもそも、どーやって瀕死だったあたしを治してくれたのかも実はサッパリだ。
（さっきのマホーみたいな紋章ぐるぐるをやってくれたのかな……あれー？　でも、それだったらケニードにも紋様が宿っちゃうんじゃなかろーか……？）
などとウンウン唸っていると、突然、周りに満ちていた『何か』の気配が消えた。
「みょ！？」
（なんで！？）
驚いて顔を上げると、レメクがちょうど布の上から右手を下げているところ。
その手にもった布には、ケニードに巻いている布よりも遙かに精緻な模様が浮き出ていた。
（う、うわ……うわー……闇の紋様ってすごく綺麗な模様なんだ……）
正直、その模様は、魔術うんぬんを抜きにしてもスゴイ綺麗だった。
細かな文字はまるで蔓草のようで、全体的には円形に近く、中心から外へと向かって広がっているようにも、中心に向かって収縮しているようにも見えた。
レメクはケニードの布をほどき、すぐに新しい布を被せ、巻き付

ける。
一瞬だけ見えたケニードの肩は、異形でこそなかったものの、赤黒いものでひどく汚れていた。
――血だ。

「……おじ様」
「……なんです？」
「それをずっと巻いてたら、ケニードは治る？」
あたしの問いに、レメクはただ口を閉ざす。
「……何もなかった時みたいに……治る？」
「……」
「おじ様？」
レメクは何も言わない。
巻き終えた布の上に掌をかざし――小さく、ため息に似た嘆息をついた。
そのどこか疲れを感じさせる顔に、あたしはふいに胸騒ぎを覚える。
何か取り返しのつかない間違いを犯したような気がした。
気づかないといけないことに、気づけなかったような――

（レメクは……）
あたしは思わず手を伸ばし、レメクはケニードの見つめたまま、小さく唇を開いて――

「……駄目ですよ」

止められた。
静かな声と同時、後ろから伸びてきた白い手がレメクの手を持ち上げる。

弾かれたように振り返る彼の後ろで、そのヒトは困ったような顔で微笑んだ。
神々すら赤面しそうなほど、美しい顔で。
「私は言いましたよね？　レンさん。……大人しくしているように、と」

「……お義父さん」
一瞬怯み、息をのんだレメクは、すぐに表情を消して相手に向きなおった。
「ですが……」
「『ですが』ではありません」
ピシャリとそれを遮って、そのヒトは凄まじい美貌を曇らせる。
「また無理矢理眠らされたいんですか？　……言っておきますが、次に力を使えば確実に倒れますよ。……今ですら、ほら、手を振り払えないぐらいに弱っているんですから」
軽く持ち上げたレメクの手をプラプラさせて、ポテトさんは深い深いため息。
それを渋い顔で眺めて、レメクもまた深い嘆息をつき――あたしは真っ青になった。
そう――レメクは病み上がりだったのだ。

あれからまだ、一日も経ってはいないのだ。
「……あんた……」
あたし達のそんな様子に、アルトリートが不安そうな声をあげた。
「弱って……たのか？」
「ヨワヨワです」
とは、ポテトさん。
レメクの視線がちょっと泳いでる。
「……そこまで弱っては……」

「ついこの前まで死にかけていたのは誰です？　普通なら寝ていないといけない状態なのに、お嬢さんが心配で無理矢理起きて王宮に駆けつけたのは？」
「……」
「あれだけ安静にしろと言っておいたのに、休むどころか紋章術なんて使ってさらに寿命縮めてるのは？」
そんなレメクに向かって、ポテトさんはいっそう強い口調。
「子供の頃から何度も何度も言ってきた気がしますが、あなたは所詮、ただの人間なんです。魔力が強かろうが肉体がどれだけ鍛えられていようが、人間という枠組みは外れることがありません。強すぎる力を使えば使うごとに、あなたの命は削られているんですよ。無理を重ねれば尚更に、あなたの死は近づくんです！」
逸らされた視線を無理矢理合わせさせて、ポテトさんは鋭い目でレメクを見据えた。
「私があなたに真名の一つを与えたのは、あなたにまとわりつく死を遠ざけるためです。なのに、あなたが自ら死に近づいてどうするんです？」
レメクはひどく困ったような目でポテトさんを見つめ、ややあって「すみません」と呟いた。
ポテトさんは渋い顔だ。
「……謝ってほしいわけではありません」
そう苦々しく口にして、嘆息と同時にレメクの手を離す。
珍しく心底嫌そうな顔で、彼はブツブツと呟いた。
「……どーして私の身近にいる人は、こう、手がかかるというか、目が離せないというか、不在だった十三年間、よくもまぁ無事でいてくれたというか……」
ぶつぶつぶつ。
そのままだと延々ブツブツ言ってそうなポテトさんをそのままに、あたしは困り顔のレメクを見上げた。
「……ねぇ、おじ様？」

「……なんです？」
「あたしじゃ、紋章術は使えない？」
「……あなたが？」
レメクが不思議そうに首を傾げる。
その手の甲を指さして、あたしは言った。
「さっきみたいなの、使えない？　おじ様が無理をするのはね、あたし、イヤなの。あたしが使えるなら、おじ様は休めるでしょ？」
レメクはあたしを見つめ――何故か絶句した。

「……お嬢さんが……ですか」
呆気にとられているレメクの横で、ポテトさんが考える顔になる。
どうやらブツブツ言うのは終わったようだ。
「……そう……ですね。使えないわけでは……ないですね」
「！　お義父さん……！」
血相を変えたレメクを片手で制して、ポテトさんは渋い表情で言葉を続けた。
「可能性の『有る』『無し』だけの話ですよ。……お嬢さん、あなたには、紋章術を編み出したクラヴィスという男の血は流れていません。ですが、メリディスの血がかなり濃いですから、魔法への親和性は高いです。クラヴィスとは別系統の力ですが、魔力も十分にあります」
シンワセイとかベツケイトウとか言われても、何のことやらサッパリだ。
だがしかし、なにやら肯定っぽい意見であることだけは分かる！
「じゃあ、使えるのね！？」
「駄目です」
「駄目！？」
てゆか、さっきまでの肯定っぽい意見は何！？
「素質の問題でなく、器の成熟度の問題なんですよ。あなたのそのちっこい体では、紋章の力は強すぎます」

「むぅっ！」
ちっこい、って……ちっこい、って……！！
自分で言うのはかまわないけど、人に言われるとどうしてこうムキッとなるのか！
「しょーがないでしょー……お嬢さんはちっちゃいんだからー……」
必殺ぽかぽか攻撃をはじめたあたしに、ポテトさんは遠い眼差しで困り顔。
「あれだけ食べてねぇ……いまだに縦にも横にも伸び出さないっていうのは、ちょっと問題だと思うんですけどねー、私」
「好きでちっちゃいんじゃないんだからッ！」
ベッチンベッチン！
「分かってますよ。だからこそどーしたもんかと……」
ベッチンベッチン！
「度胸と根性でどーにかなるもんなら、とっくにどーにかしてるんだから！」
「……あのー……そこは普通、努力とかそういうのがくると思うんですけど……ついでに、愛嬌とか可愛らしさとかは介入しないんですか？　そしてジャンプしてまで私の尻を叩きにくるのはやめてください」
「ヨイ尻です！」
もちろん、レメクの尻だってコレに負けないぐらいスバラシイもんですが！
目をキラリと輝かせたあたしに、未だかつて無いぐらい真面目な顔になるポテトさん。
「ねぇ、レンさん。私思うんですけど……」
「言葉は不要です」
なぜだろう。
あたしを見る義理親子の眼差しが、果てしなく遠い気がする。
「えー……まぁ、それはともかく」
ゴホン、と嘘くさい咳払いをして、ポテトさんがあたしに向き直

った。
「そんな感じの理由で、今のあなたには紋章は宿せません。宿せない以上、紋章術は使えないわけです。まぁ、紋様術だったら、習得さえすればそこそこ使えるでしょうけどね」
「……もんよーじゅつ？」
言われて、あたしはケニードの肩に巻かれた布を見つめる。
「これ。紋様術？」
「え？　えぇ。紋様術ですよ」
よし！
ポテトさんの返答に、あたしは目をキラリンと光らせた！
「はい、ソコ、待ちなさい。知識も無いのにいきなり難しい紋様術にチャレンジしなーい」
「ぅぎょっ」
ぴょいっとケニードの肩に飛びつこうとしたあたしをポテトさんが猫でも摘むようにして摘み上げる。
てゆか、首！　首ッ！
なんで襟首つかんで持ちぐぇえ……！
「お義父さん！　なんて持ち方をするんですか！」
釣り上げられたあたしに、レメクが慌てて救いの手を伸ばす。
ポテトさんはキョトンとした顔だ。
「……あれ？　時々あなたがやってるのを真似してみたんですが」
「持ち方にはコツがあるんです！　その持ち方では首が締まるでしょう！」
「「……コツが……」」
ポテトさんとアルトリートが同時にボソリ。
……てゆかアルトリート。静かだったから居たの忘れてかけてたよ。
そのアルトリートは、なにやら強ばった顔でポテトさんを見つめている。
気づいたポテトさんが視線を向けると、後ずさりかけながらも意

を決したように口を開いた。
「じゃ……じゃあよ……ちみっちょじゃなく、俺なら、どうなんだ？」
「……」
「使えねぇのか？」
「……」
ポテトさんは沈黙する。
助けに来てくれたレメクの体に張り付きながら、あたしはポテトさんを振り仰ぎ――
「！？」
ゾワッ！　と、全身を総毛立たせた。
「……そう、ですね……」
ポテトさんの表情は先程と変わらない。
変わらないはずなのに、あたしの目には、ソレは薄ら寒くなるような笑みに見えた。
そう――
まるで、人を誑かす悪魔のような――
「……あなたであれば使えるでしょう。クラヴィスの血統であるあなたなら」
「なら……！」
「けれどそれは、正しい知識を学んでいればの話です」
薄ら寒くなるような笑みを口に浮かべて、ポテトさんは目を細める。
なにやら悪巧みをしてそーなワル顔だが、今まで見てきたポテトさんの中でサイコーに美人顔だ。
「……今の俺じゃ、役に立たないってことか」
「えぇ、今のあなたでは、まず無理です」
「……」
ポテトさんの言葉に、今度はアルトリートの方が沈黙する。

一瞬浮かんだ沈痛な表情を見れば、彼がそれに一縷の望みをかけていたことは明らかだった。
彼もあたしと一緒なのだ。
もし自分で何かできることがあるなら、それをしたいのだ。
――ケニードのために。

「……願いますか？」

そのタイミングで、ポテトさんは声をかけてきた。
「彼に起きた『災い』を無に帰したいと願いますか？　人の手では叶えられない奇跡を起こしたいと」
誰もが願うだろうその『奇跡』を――
まるで願えば叶うかのように囁いて、ポテトさんは微笑した。
恐ろしくも美しい、その壮絶なる美貌で。

「――この『私』に」

12　ケニード

「ッ！」

息を呑んだアルトリートに、レメクが何かを言いかけ、それをポテトさんが片手で制した。

仰ぎ見たポテトさんの顔は、厳しく引き締まっている。

「駄目ですよ、レンさん。あなたには口を挟む権利がありません。『契約者』の保護下にあるあなたに、私との交渉権はありませんから」

ケーヤクシャってなんだろーか？

などと思いつつ、駄目出しされたレメクのかわりに、あたしは彼の腕の中からビョンッと飛び出す。

「あたしは！？」

「お嬢さんも駄目ですね～。今のあなたでは私に代償を支払えません」

……しょんぼりだ。

「……てことは、俺か」

ガックリと着地したあたしの斜め後ろ、顔をひきつらせたアルトリートに、ポテトさんは宛然と微笑。

「ええ。今、この場において、私に契約を持ちかけることができるのはあなただけです」

その笑顔のスバラシサといったら、たぶん、フツーの人なら速攻で倒れるシロモノに違いない。

向けられたアルトリートの顔の青いこと青いこと。

そんなアルトリートにさらに笑みを深めて、ポテトさんは指を一本、ピンと立てた。

「一つの契約につき、代償は一つ。それだけを頂戴いたします」

「……一つ、か」

「ええ。ちなみに、私、個人との取引は三つまで、と『先代』から言われています」
（……『先代』とかいたんだ……）
思わず心の中でツッコむあたし。
てゆか、このヒトの『先代』って、どんなんだろーか？
ヒジョーに気になる疑問だったが、口を挟める雰囲気では無い。
仕方なく口をギュッと両手で押さえると、気づいたレメクが、うんうん、という顔で頷いてくれた。
……褒められました！
「あぁ、代償ならご心配なく。あなたの名前が必要だと私が判断した時に、たった一度だけ、その名を使わせていただければ結構。……言うなれば、あなたの未来の一欠片をいただく形ですね」
「俺の名前……なんかを……かよ？」
「ええ。あなたのお名前を」
掌でアルトリートを指して、ポテトさんはさらなる深い笑み。
「あなたに必要でなくとも、私には必要な時がありますから」
「ッ」
その指摘にどんな意味が込められているのか。
サッパリなあたしは首を傾げていたが、アルトリートはひどく動揺していた。
だが、すぐに目に力を込めて口を開く。
「俺の名で――」

「駄目です」
その声を遮ったのは、さっきから厳しい顔でポテトさんを見ていたレメクだ。
あたしへの「うんうん」の時にはビミョーに暖かい目をしていたのだが、今は完璧に目が据わっている。
対するポテトさんはなんとも言えない呆れ顔。

「……レンさん……」
「なにを考えているんです？　お義父さん」
レメクの問いに、ポテトさんは緩い笑みを浮かべた。
「……今は、ご主人様とあなたのことを、ですよ」
……ソレはいつものよーな気がするのだが。
「では言わせていただきますが、例え『陛下のため』にこの子を使ったとしても、それで陛下が喜ぶとは思えません」
相変わらず『この子』扱いのアルトリートが、実に微妙な顔でレメクを見る。
それにちっとも気づいていない様子で、レメクはただ真っ直ぐにポテトさんを見つめた。
「……他に方法は無いのですか？　彼は――アロック卿は、私が知りうる限り最高の宝飾職人です。その腕に何かあったとなれば、国の損失とさえ言えるでしょう」
「ふふふ。つまり、ひいてはご主人様の損でもあるから、何とかしてくれ――と言いたいわけですね？」
なにやら楽しそうにそう言って、ポテトさんは軽く腕を組む。
「言わんとすることは分かります。助けが必要であることも。けれど、レンさん。この願いは『私の』願いではありません。そして、自分以外の誰かの願いを……何の代償もなく叶えることは私にはできません」
その言葉に、どこか苦しげな顔で俯いて、レメクはゆっくりと頷いた。
「……知っています」
「誰かの願いを叶えるためには、それ相応の力が必要です。それがその人の『運命』に強く作用することであれば尚更に。……そう……かつてあなたの『運命の女性』が、あなたをこちら側に繋ぎ止めるために、魂すらふり絞ったように」
まるで神託を告げる聖者のように、厳かにポテトさんが言う。
何故か全員が揃ってこちらを見たので、あたしは自分の後ろを振

り返ってみた。
誰もいない。
「おじょーさん。あなたです」
「おふっ！？」
ごすっ！　とつむじに指の一撃を喰らわされて、あたしは思わず飛び上がった。
……てゆか、オトーサマ、一瞬で間合いを詰めるのはやめてくれないかな……
「人の運命を変えるというのは、それだけの力を要するのです。そして、残念ながら、今のあなた方の願いの力というのは、かつてお嬢さんが見せたような奇跡の領域にまで達していません。……天を動かすほどの願いでなければ、世界はそれを叶えない。私であれ、私以外のモノであれ、届かぬ願いを叶えることはできないのです。
……そう……『代償』が無い状態では」
意味不明なことを言って、ポテトさんはクスクスと笑った。
首を傾げるあたしの前で、そのヒトはアルトリートに向き直る。
「さて――――」

アルトリートが思わずビクッとなるのは、相変わらずポテトさんが苦手だからだろう。
……いやまぁ、今のポテトさんの雰囲気は、誰でもビクッとなりそーな感じなのだが。
「レンさんに遮られてしまいましたけど、どうしますか？　『アルトリート』という名の人」
「……どう、って……？」
「技師さんのことですよ。願いを叶えず、現状のままで放置しますか？」
……ヤな聞き方するなぁ……
あたしは思わず窘めの意味でポテトさんに視線を送り――――

彼の向こう側に見えた人物に、パッと顔を輝かせた。
「あ！」
あたしの声に、レメクとアルトリートも弾かれたようにそちらを見る。
「もしそれが……ぼくの、けがのことなら……」
穏やかで柔らかな声。
穏和な気配。
「ぼくはじたいしますよ、ろーど」
力無く起きあがったケニードがそこにいた。

「ケニード！」
簡易寝台の上で身を起こした彼に、あたしはベッドによじ登り、その勢いで飛びついた。
「ケニード！　ケニード！！　ケニードっ！！」
「うわっ」
ぎゅーっと遠慮無く抱きつくと、反動でひっくり返ったケニードが力の抜けきった声で笑う。
「あはははは～。べる、そんなにちからいっぱいだと、いたいよ」
ケニードの声は、相変わらず優しくて暖かい。
……けれど、飛びついた瞬間、その体が強ばったことにあたしは気づいていた。
「アロック卿……」
足音一つたてずに近寄ってきたレメクが、ケニードに声をかける。
ケニードが顔を上げるのにあわせて、あたしも涙目でレメクの方を見た。
「具合は……いかがですか？　痛むところや、動かしにくいところは……？」
「ぁ～いや……それよりも、しょうじき、なにがどうなっているの

か、よくわからないんですが」
レメクに向かって、相変わらずのんびりと答えるケニード。起きあがろうとするのに手をかして、レメクがほんのわずか眉をひそめた。
（……ん？）
「違和感は……ありませんか？　なにか、常と違っているところは」
「いえ……そういうのも、あまり、わからなくて」
やはりのんびりとした口調で答えるケニード。
のんびりと……
……　……のんびりと？
あたしは眉をひそめ、慌ててケニードを見上げた。
ケニードはちょっと困ったような、戸惑ったような顔で頭に手をあてている。
「なにか、ぶつかって……それからいしきが、ありませんでしたから」
声はいつも通り優しく、穏やか。
けれど、どこか間延びしているように感じられるのは、あたしの気のせいだろうか？
（……どゆこと……？）
激烈にイヤな感じがして、あたしはレメクを振り仰ぐ。
レメクの顔も少し強ばっていた。
「……気分が悪いとか、そういうことは……ありませんか？」
「いえ。すこし、ふわふわしてるかんじがしますが、それぐらいです」
「頭が痛むとか、そういうことは……？」
「それもないです。だいじょおぶですよ」
くしゃりと笑う彼の表情も、いつも通りだ。
でも――

（口調が……）
ちょっと……違う気がする。
ろれつが回っていないような、そんな感じがするのだ。
（……なんで……？）
レメクの手がケニードの頭に伸びる。
おそらくそこが、花瓶で強打された場所なのだろう。後頭部に近い左側の部分に触れて、戸惑うように告げた。
「あなたが負った傷は……治しています。鬱血なども……」
闇の紋章を持ってるレメクには、もしかすると触れるだけで異常とかそーゆーのがわかるのかもしれない。
だが、その表情を見る限り、ケニードの頭に異常は見あたらなかったようだ。
なら――どうして……！

『おじ様！　ケニードの頭、変なトコないの！？』
あたしはレメクをひたと見つめ、渾身の力で心の声を送信した。
レメクが困惑顔のまま頷く。
……つーじたのか……触れあってないのに……
……い、いや、今大事なコトはソコじゃなく！
『じゃあ、なんで言葉が舌ったらずなの！？』
あたしはさらに心の声を送る。
が、今度はただただ困り顔をされてしまった。
……それは『私にもわかりません』という意味なんだろうか？
それとも通じなかったってことなんだろーか？
「傷は……もう無いはずなのですが……」
困惑を浮かべたままの顔は、少しだけ青ざめている。
後頭部を撫でられているケニードは、照れ笑いをしながら頷いた。
「ないと、おもいます。……なんとなく、はなしは、きこえてました。すこしまえから、いしきがもどってたんです」

言って、眩しそうにレメクを見上げる。
「ありがとうございます、くらうどーるきょう。……ほんとうなら、あんせいにしなくてはいけなかったのに……」
それはきっと、自分のために紋章術を使ったことに対して。
レメクのことが大好きな彼だから、自分のために何かをしてくれたという、それだけで天にも昇る気持ちなのだろう。
それなのに表情がちょっと悲痛なのは、本当にレメクが大好きだから、無理をさせてしまったことに胸がいたんでいるからだろう。
「あなたが……それを、言いますか？　最初に、自分を犠牲にしてまで、あの子を助けに行ったのは、誰です！」
どこか怒ったように、珍しく声を荒げてレメクが言う。
ケニードは一瞬きょとんとしてから、それはそれは嬉しそうに笑った。
「だって、しかたがないじゃないですか」
……仕方ない、って……！
「めのまえで、あぶないひとがいるんです。かんがえるまとか、ありませんよ」
「……ッ」
その微笑みに、ポテトさん以外の全員が声を失った。
あまりにも自然で、あまりにも暖かくて——教会の聖母像だってこんなに暖かい顔してないんじゃないか、ってぐらい、優しい笑顔だったからだ。
「それに、かれになにかあったら、かなしむでしょう？」
ケニードは、誰が、とは言わなかった。
言わなくても、わかった。
わかったから……レメクは何も言えずに唇を引き結ぶ。
「ケニード……」
あたしは彼の名を呼んだ。
困ったように微笑んでいるケニードをぺちっと叩いて、注意を自分に向けさせる。

「でも、だからって、ケニードが危なくなったら、おじ様は悲しむのよ？」
「……うん」
「危ないのは、駄目なんだかりゃね？」
目の前が涙でにじんで、あたしはぎゅっと唇を引き結んだ。
優しい手があたしの頭を撫でてくれる。
「うん……ぼくもね、もうちょっとたいみんぐよくできたら、よかったんだけどね」
そーゆー意味じゃなくて！
ペチペチ叩くと、少しだけ強く頭を撫でられた。
大丈夫だよ、と言うように。
「うまくいかないもんだね……あのときは、あぶない、ってきもちでいっぱいだったけど……もっとはやくきづいてて、もっとはやくうごければ、だれにもめいわくかけなかったかもしれないのにね」
「迷惑だとか、誰が言うのですか？」
レメクが少し怒った声で言う。
顔もちょっと怒ってるよーな……いや、あれは、もしかしてちょっと傷ついてるんだろーか？
言われたケニードはくしゃり笑いだ。
「つよいもんしょうは、からだによくありませんから」
「だからと言って……！」
「それに、あなたはいま、むりをできるからだでは、ないでしょう？」
数日前まで昏睡していたレメクは、なんとも言えない顔で沈黙した。
それればかりは反論できなかったのだ。
あたしはスンと鼻を鳴らす。
額を服に擦りつけると、ポンポンと優しく叩かれた。
「だいじょおぶだよ。そんなにしんぱいしなくても」
――大丈夫だろうか？　本当に？

あたしには、とてもそうだとは思えないのだが。
不安を抱えるあたしの慰めながら、ケニードは言葉を続ける。
「じっさい、なにがどうなったのか、よくわからないけど……いたいとこともないしね。それと……」
言って、彼は顔を上げた。
気配でそれを感じて、あたしも顔を上げる。
「……これは、だれのせいでもないんだよ。もちろん、かびんをおとしたひとのせいではあるけど、それいがいのひとのせいでは、ないよ」
それは、あたしに言っている言葉はなかった。
ケニードの目は少し離れて突っ立っている青年に向けられている。
そう——アルトリートに。

「きみのせいじゃ、ないんだよ」
アルトリートの顔が歪んだ。
泣く一歩手前の顔で必死に留まって、戦慄く唇を開く。
「なんで……そうやって……笑ってられるんだよ!?」
「……」
「わかってんだろ!?　なんか具合悪いな、って!　いつもと違うって!　腕だって……でかい怪我してたんだ、どうなるのか、わからねぇじゃねーか!」
「……うん。いやまぁ、おおきいけがだったのかどうかは、ぼくには、よくわからないんだけどね」
「でけぇ怪我だったんだよ!」
そのへんは気絶していたからピンとこないらしく、ケニードは左手をワキワキさせて首を傾げる。
その眉が少しひそめられているのが、あたしの不安をさらに煽った。

「指、ちゃんと動く？」
「……え？　あぁ、うん。うごくよ」
ウソダ。
なんとなくわかった。
優しいケニードの笑顔は、いつも通りのものだ。
だけどわかるのだ。嘘だということが。
……指に、変なトコロがあるのだ。
「でもさ、べつに、いきしにかかわる、ってかんじじゃないし」
「そーゆー問題じゃねェだろ！？」
のほほんと笑って言うケニードに、アルトリートは絶叫気味。
「なんであんた、そうやって笑えるんだよ！？　大事なことだろ……！？　あんた、あんなすごいモン作れるぐらい、有名な職人なんだろッ！？」
「そんなに、すごくは……」
「俺にだってそれっくらいは分かるんだよ！　見ろよコレ！」
声と同時、アルトリートは懐から小さな革袋を取り出し、中に入っていたものをケニードにつきつけた。
「俺は今まで、コレ以上にすげぇモンは見たことなかった！」
金色の時計だった。
掌に収まるほどの大きさで、表面にも綺麗な模様が入っている。
――宝冠を被った双頭の黄金鷲の模様が。

「あいつ……いや、ババァが持ってるやつだって、確かに綺麗だったけど、これよりスゴイのは持ってなかった。だけど、あんたの作ったっていうヤツは、これより綺麗だった！」
「……」
目の前でプランプラン揺れる金時計をケニードはジッと見つめている。
あたしも一緒にプランプラン揺れる金時計を見つめながら、そわそわと手を動かした。

……なんか、レメクが、金時計じゃなくあたしの方をジッと見つめているのが、今とてもとても気になりますが。
「なぁ、それは……スゴイことじゃないのか！？」
アルトリートの声に、ケニードは答えず、目の前で揺れる金時計を指さして呟いた。
「……これ、おーでぃるくししょうのさくひんだ……」
「し……へ？　師匠？」
「うん……けんじょうひんの……」
けんじょーひん、ってなんだろか？
間の抜けた声をあげるアルトリートを見上げて、ケニードは呆れ顔。
「……ほかのひとには、みせないほうがいいとおもうよ。すごく……めずらしいもの、だから」
その瞬間、アルトリートの顔が真っ青になった。
青ざめる意味がわからず、あたしはキョトンと首を傾げる。
「珍しいものなの？」
「……うん……」
ケニードは不思議な微苦笑。
「ケニードのお師匠様って、たしか、ずっと昔に亡くなっちゃった人だよね？」
「うん……」
「誰かに見せると、盗られちゃうぐらいスゴイってこと？」
「……そうだね」
にこ、と微笑む彼は、なんだかちょっと心が遠い感じがした。
これは隠し事をされている時によく感じるやつである。なんというか、レメクが時々こんな感じになるのでよくわかる！
けれど、いったい何を隠されるというのだろうか？
ぐるっと周囲を見渡すと、何故か全員がそろって顔を背けてしまった。
……どーゆー意味……？

首を傾げまくっているあたしに苦笑しつつ、ケニードはアルトリートを見る。

「……あのさ……ほんとうは、ことばづかいをあらためないといけないんだろうけど……」

「……ッ」

「けど、いまはこのままで、いわせてもらうよ」

困り顔で微笑みながらケニードは言った。

「ぼくは、きみとあったのはついさっきで、そんなにきみのことしらないけど……なんていうのかな、きみは、じぶんのことを、どうでもいいようにおもってるきがするんだ」

アルトリートは無言。

ポテトさんがチラッとレメクの方を見るが、これはたぶん『誰かさんとそっくりですね』と言いたいんだろう。

「じぶんがここにいるのは『ばちがい』で、どうでもよくて……でもちょっときょうみがあって……でもやっぱりじぶんはここはむかんけいなんだって、おもってるようにみえたんだ」

「……」

「……けどさ、きみはもうむかんけいになれないひととであってるだろう？　あわなくちゃいけなくて、そしてたぶん――あってみたかっただろう人と」

その言葉に、アルトリートがハッと息を呑んだ。

探るようにケニードを見つめる瞳が、一瞬、レメクの方をチラと見る。

「あわなきゃいけないひとは、もうひとりいるよね。……ほんとうは、もっとはやくに、もっとちゃんとしたかたちで、あいたかったんじゃないかな」

「……それは……ッ」

「でも、むりだとあきらめてなかった？」

何かを言いかけ、声をつまらせるアルトリートに、ケニードは穏やかな微笑。

「どうでもいいって、じぶんにいいきかせてなかったかい？」
「……俺……は……」
何か言いにくいことがあるのか、言葉を必死に探している様子のアルトリートに、ケニードは微笑みを深める。
「いまも、むりなままだとおもってるのかい？」
それはとても優しい顔だった。
小さな迷い子を見守るような、あったかくて、触れたらフワンと包み込んでくれそうな表情。
「むりじゃないんだよ。もう、ぶたいはととのっている。……ほんとうはととのっちゃいけないかたちのぶたいだけど、それでも『あう』きかいはえているんだ」
「……けど、よ」
何かを反論しかけ、しかしやはり言葉にできず、アルトリートは俯いた。
「きみは、じぶんがあえるわけないって、おもいつづけてきたんだろうけど、そんなじぶんだけのじょうしきは、すててしまったほうがいいよ」
「……」
「どんなかたちであろうと、きみはもう『おうきゅう』のなかにはいって、いま、このばをこうせいするひとりとして、くみこまれてしまっている。……きみがここにきて、であったひとたちのかおをおもいだしてみて」
素直に思い出そうとしているらしいアルトリートに、ケニードの笑みが深まった。
「そのなかに、きみがいてもいなくてもどうでもいいっていうひとが、なんにんいる？」
「……」
「すくなくとも、このへやにいるひとのなかには、いないとおもうけど？」
アルトリートは唇を噛みしめた。

瞬き一つしないのに、俯き、睨むように見つめる絨毯の上に、ぽたりと何かが零れ落ちる。
それが何なのかは、あえて言う必要はないだろう。
「……きみは、じぶんがだいじにおもわれてるんだって、じかくしたほうがいいとおもうよ。……もったいないじゃないか。くらうどーるきょうにだいじにされるだなんて、なかなかないことなんだよ!?」
「……そこは強調するようなことなんですか?」
ケニードらしい駄々漏れな本音に、なにやらミョーに無表情な顔でツッコむおじ様が一人。
ケニードは輝く笑顔で頷いてから、アルトリートを見て、右手を伸ばした。
よろめくようにして近寄って来た彼の手を軽く叩いて、お日様のような笑顔でニッコリと笑う。
「しんぱいしてくれるのは、うれしいよ。きみが、ぶっきらぼうだけど、やさしいひとなんだってわかるから。だけど、だからって、じぶんをぎせいにしてでも、っておもうのはだめだよ」
「……あんたは、したじゃねぇかよ……!」
ボソリと呟いて、アルトリートは乱暴に自分の顔を腕で拭う。
「俺を助けなきゃ、怪我なんてしなかったんだぞ!?」
「それはとっさにうごいちゃったから」
ケニードはへにょっと笑った。
少しだけ情けなくて、とびっきり暖かい笑顔で。
「で、たいみんぐがわるくて、けがしちゃった、ってことだよ。でも、さっき、きみ、じぶんがなにかのだいしょうになるようなこと、いおうとしてただろう? そういうのは、だめだよ」
「けどよ……!」
「ひとのうんめいって、きっと、ひとがとっさにうごいてしまったこととか、そういうののつみかさねなんだよ」
アルトリートの声を遮って、ケニードは穏やかに言った。

「だから、かみさまのちからとかをつかって、かえようっておもっちゃだめなんだ。そうしたら、きっと、どこかでひずみがでるから」
「……」
身に覚えでもあるのか、ポテトさんが苦笑し、レメクが少し辛そうな顔で俯く。
それらに淡く微苦笑を向けてから、ケニードはアルトリートへと視線を戻した。
「じぶんをたいせつにしなきゃ、だめだよ。そうしないと、かなしむひとがいるんだから」
（……ケニード……）
あたしはギュッと唇を噛む。
その言葉を、ぜひ、彼自身に言ってやりたかった。
アルトリートが怪我をしなくても、ケニードが怪我をしたら悲しいのだ。
大切にしてほしいのだ。あたし達にとって、ケニードは大事な人だから。
だから――
「ケニ……」
「……まいりますね……これはどうも」
あたしが声をあげる寸前、なんとも言えない口調で人外の美貌が苦笑した。
思わず視線を向けたあたし達の前で、そのヒトは眼差しを細める。
ケニードを見る瞳は、なぜかしら、何かを懐かしむような感じだった。
「……昔、ね。……あなたと同じことを言った人達がいましたよ。底抜けにお人好しで、いつも貧乏くじばかりひいてる人達でした」
その人のことを過去形で語るのは、きっと、もういない人だからだろう。

口調の端々からそれを感じ取って、あたしはキュッと唇を引き結んだ。

ポテトさんはゆっくりとケニードの傍に行く。

なにをするでもなく、ただ懐かしさを込めて、きょとんとした顔の相手を見つめた。

「……断言しましょう。あなたの身に降りた災いのうち、いくつかはその身に残っています。指に感じる違和感に、言葉を喋りにくい感覚、『頭上にあるもの』や、上半身より上の位置に『飛んでくる』ものに対しては、恐怖を感じることでしょう」

その言葉に、ケニードは大きく目を瞠って――困ったように微笑んだ。

「しかたがないですね……」

ごく自然な声だった。

どこまでも穏やかなケニードに、ポテトさんは苦笑し、あたしはケニードの腕の中からピョンと飛び降りる。

「べる……？」

「ベル……？」

ケニードとレメクが同時に声をあげる。視線がジッとついてくるのを感じながら、あたしはケニードの傍らに立つレメクの背後にまわりこんだ。

ちょっと思いついたことがあるのである。

とはいえ、レメクが自然体を装いながら心の中で身構えているよーなので、今やっても失敗しそーな気がするが。

（むむむ……）

「……ベル」

「もい」

「……なにか、その、異様な気配を感じるのですが」

「なにもないのですよ」

なんかレメクの背中がいっそう緊張しているのだが、これはきっとケニードのことで気が張っているからだろう。うん。

（てゆか、近くにいるポテトさんがちょっと邪魔だけど……）
と思ったら絶妙に位置をズレてくれた。
よし！　これで準備は万全だ！
「ベル……」
またレメクが声をかけてくる。
「その……そこはかとなく嫌な予感がするのですが」
「別になにもないのですよ？　気のせいってなもんです」
腕をカッポンカッポンいわせながら、あたしはへーぜんと答えてあげた。
とってもセンサイなレメクには、安心を与えてあげないといけないのだ。
ええ。今回は別にお尻を狙ってるわけではないのだから。……いつもと違って。
（よーしガンバレがんばれガンバレあたし！　チャンスは一回！）
常に隙のないレメクだから、一回で完璧にやっちゃえなければ次は無い。
あたしはジッと素敵なアングルで相手を見上げながら、目を光らせてチャンスを狙った。
「……」
「……なにか……レンさんが緊迫感アリアリな状態になってますが……まぁ、それはともかく」
面白そうにあたしとレメクを眺めたポテトさんが、ひょいと無造作に手を動かした。
その瞬間、ゾワッ！　と凄まじい悪寒に全身が粟立った！
「「なッ！？」」
目の前のレメクと、その横にいるアルトリートがギョッとなる。
声をあげるほど驚くレメク、というのはなかなか珍しいのだが、アルトリートの顔が一瞬で真っ青になったのがそれ以上に気になった。
「なっ……なっ……なっ！」

よろめくように後ずさり、彼はポテトさんを指して指を震わせている。

……えー……

……位置的に、レメクの背中が邪魔になって何がなんだかサッパリわからないのだが……

あたしは位置とタイミングとを外さないようにしながら、チラチラとポテトさんの方を見る。

どーやらケニードに何かしたみたいなのだが、さっきとそう体勢が変わってるよーには見えない。体勢的には、ケニードの頭に手をやってるよーな感じっぽいのだが……

あたしは必死に体を伸ばし、様子をうかがった。

……サッパリ見えません。

「痛みは無いはずですよ。さてと……」

言って、ポテトさんはわずかに後退る。

手が何かを手繰り寄せるように動いており、それはどうやら、ケニードの髪の毛の毛……というか、頭から伸びているもののようだった。

……なんだろうか？

あたしは更に背伸びしてソレを見る。

あ。ちょっと見えた！

どうやら、ケニードの髪の毛のあたりから、黒い紐のようなものが出ているよーである。

ポテトさんはそれを引っ張ってぐるぐる手繰り寄せているのだ。

（……なんだろ、アレ）

すごく気になる。

とはいえ、それに気をとられていてはチャンスを見逃す。

現段階、ポテトさんの謎行動にレメク達は目が釘付け。たぶん、意識が全部そっちに向いた瞬間がチャンスだ。

あたしは『その瞬間』に集中しながら、チラッチラッと問題の黒い紐を観察する。

……なんか、見てるとすごい背筋がゾワッとするのだが……

それが何かはやっぱりサッパリなのだが、悪いモノなのは間違いないだろう。うん。
「まぁ、こんなところですかね」
ポテトさんがそう呟くのと同時、ケニードの髪の間から黒い紐がすぽんと抜けた。
レメクの視線も、黒い紐のようなソレに集中。
――チャンスだ！

「とぅ！」

ごづんっ！

「「ッ！？」」
ものすんごい音がして、レメクの頭とケニードの頭がぶつかった。
おぉぅ……自分でやったことながら、なんかすっごいイタソーな……

「おっおっおまっ……ちみっちょ！　おまえ何やった！？」
なんかアルトリートがすごい驚愕の顔でこっちを見る。
あたしは両腕でレメクの両足を抱えたまま、アルトリートに向かって胸を張ってみせた。
「おじ様とケニードをごっつんこしてあげたのです！」
やり方は簡単だ。
目の前にあったレメクの両足を、あたしがエイヤッと持ち上げたのである。
一息で。
「「〜〜〜ッ！！」」
そんなあたしの前、なんか変な格好でレメクが頭を抱えている。
ケニードも頭を抱えているようなのだが、その顔が痛そうなのか嬉しそうなのかは不明だった。なにせあたしの位置からだと見えや

しないので。
とりあえず気配は幸せそーだ。
そんな二人の傍ら、ポテトさんは唖然とした顔であたしを見つめていた。
「……さすがに……これは、私でも予想外です……」
なんと。ポテトさんの意表もついたようだ！
えっへん！
「……えー……胸を張られても困るのですが」
「つーか、おまえ！　どうやって持ち上げた！？　てゆか、どんだけ怪力だよ！？」
「あたしはやるときゃやるオンナなのです！」
「説明になってねェ！」
なんか悲鳴じみた声で叫ばれた。
「というか、反転付加属性をフル活用してますねぇ……標的さえきちんととらえていれば、巨人でも持ち上げることは可能ですからね。しかも、下手に抵抗すればあなたを蹴ってしまうせいで動けないレンさんの、配慮と愛情を盾にとった攻撃ですか。……素晴らしい」
褒められた！
目をキラリと輝かせるあたしに、ものすごい怯えた目で遠ざかるアルトリート。
「……反則だ……ぜってー反則だソレ。なんでそのナリで力だけ倍以上に跳ね上がってんだよ……」
……彼の目には何かイロイロなモノがうつっているのかもしれない。
本当に、一度リューガンってやつの視界を見てみたいものである。
「それよりも、そろそろ離してあげたほうがよくないですか？　お嬢さん」
チョイチョイとあたしの手元を指さすポテトさん。
おっと。ずっとレメクの足を抱えたままでしたよ。
どーりでレメクが変な格好のままだと思いました。失敗失敗！

「よいしょー」
「……」
キレーに捕獲していた両足を離したあたしに、体勢を立て直したレメクがぐるぅりと振り返る。
……あ。
怒ってる。
「……ベル」
怒ってる怒ってる。
「ちょっと、ソコに、座りなさい」
あんっ！
「……なぁ、あんた平気か？　……すげぇ幸せそーなツラしてっけどよ……」
本気で怒ってるレメクと対峙するあたしの視界の中、簡易ベッドに転がってるケニードの方では、アルトリートがビミョーな顔で相手に声をかけていた。
心配するべきか呆れるべきか、判断に困っている顔だ。
ちなみにケニードの顔はあたしからは見えないが、その様子から察するに、たぶん、いや、きっと心底シアワセそーな顔に違いない。
……って、よそ見したら余計にレメクの気配が怖くなっちゃいました。
あぁん！
「あれですかね。お嬢さんは、もしかしてショック療法みたいなのをしたかったんですかね」
じりじりと対峙するあたしとレメクに、ポテトさんはゆるい微笑。
その両手では黒い紐がぎゅーぎゅー圧縮されており、けっこうな長さがあったはずなのに、今では小さな丸薬のようになっていた。
……どんだけ握力強いんだろーか……おとーさま……
「なんですか。そのショック療法というのは」
レメクは静かな怒り声。
黒い丸薬もどきを懐に仕舞いながら、ポテトさんは微笑み、

「昔はよく聞きましたけどね。頭を打って記憶を失った人に同じ衝撃を与えるとかなんとか」
「……頭を強打されて障害が出ている人に、さらなる衝撃を与える理由にはなりませんね」
ツメタイ一瞥をくらって半笑いで後退した。
……おとーさま……レメクに弱いよな……
……いや、アウグスタにも弱いけど……
「だいたいにして、ベル、さっきのは悪戯にしても質が悪いですよ。私もそれなりに痛かったですが、アロック卿はもっと痛かったはずですから」
「……超弩級の石頭ですものね……」
ポテトさんがぼそっとぼやき、レメクに素早く睨まれていた。
「で、でもっケニードはシアワセそーなのですよ！？」
「……シアワセそーだよな……確かに……」
慌てて言うあたしに、アルトリートが呟きを零し、レメクが静かな眼差しをケニードへ。
そう。ケニードは大変シアワセそうなのだ。
主に気配とか気配とか気配とかが。
「い、いや、えーと、痛かったのは痛かったんですよ？　でもほら、得難い体験というか、普通に有り得ない体験とゆーか」
レメクにジーッと視線を向けられて、シアワセそーに頭を抱えていたケニードが慌てて弁解。
しかし、顔はゆるゆるだ。
「ほら、おじ様！　おじ様の頭突きはシアワセなのですよ！」
「……私はそこそこ痛くて不幸だったんですが」
「じゃあ、今度はあたしが、むっちゅーっ！　とオマジナイをしてあげるのです！」
「いりません」
光の早さで拒絶キタ。なぜ！？
「あ、愛が足りないっ！」

あたしはビシッとレメクに指をつきつけ、ピョイコラ跳ねながら抗議する。
「おじ様！　愛が足りないです！」
びしびし。
「あ……そ、そういう話では無いでしょう!?　あなたは少し、年相応とか、そういう言葉の意味を考え……いえ、覚えてください！」
……怒られちゃ。
「だいたい、さっきの変な攻撃にしても、私がとっさにバランスをとろうと動いていたらどうなっていたと思うんです!?」
しょんぼりと見上げるあたしに、何故か焦り顔で言うレメク。
レメクがバランスをとろうとしてたら……
えー……
どーなってたんだろーか？
真面目に首を傾げるあたしに、レメクは目をさらに怒らせた。
「義父も言っていたでしょう！　あなたを蹴っていたかもしれないんですよ！」
そーいや蹴り飛ばされる畏れもあったのですね。
「まぁ……下手に動くと、少なくともお嬢さんのちっちゃな顔は蹴られてましたね」
「……抵抗するに抵抗できなかったわけですね……クラウドール卿」
「……ひでぇな……ちみっちょ……」
レメクに同情の視線を送る男三名。
ううっ……！
なんか形勢が悪いですよ!?
「で、でもっ！　シアワセな記憶って、悪い記憶を拭っちゃえるんだもん！」
「い、いや、確かにそこはシアワセだけど！」
「……てゆか、そこでシアワセを感じる時点でなんかチガウ気がするんだけどな……俺としては」
ケニードの言葉に、アルトリートが静かにツッコミ。

そうしてから、彼は怖いはずのポテトさんに真っ直ぐな視線を向けた。
「……てゆーかよ、『叶えられない』んじゃなかったのか？」
視線がわずかに揺れたのは、ポテトさんが懐に仕舞った丸薬もどきを示すため。
ポテトさんは軽く肩をすくめた。
「『他人の願い』は、代償なしには無理です。そういう風に、呪われてますから」
「……じゃー、コレは？」
という台詞は、ケニードを指さしながら。
……指さしちゃイカンのだっつーのに、アルトリートってば……って……
んん？
目をパチクリさせたあたしの前で、ポテトさんは悪戯っぽい笑み。
「この方の」
と掌でケニードを示して彼は言った。
「そこはかとなく歪んでいながらもひたすら真っ直ぐ言動は、そこそこ気に入ってますから」
……歪んでるのに真っ直ぐなのか。
ケニードの言動は、なかなか複雑な形をしているよーである。
「まぁ、サービスですよ。……ただし、これが最初で最後です。……古き良き時代を思い出させていただきましたからね」
「お義父さん……」
呟くレメクの声には、驚きと、それを上回る感謝が滲んでいた。
それに気づいたのだろう、ポテトさんはどこかくすぐったそうだ。
「私達の力はあてにしない……目の前にあって、本気でそう言える人は珍しいですしね。とはいえ、指の後遺症に関しては何もできません。あまりにも深く運命に関わっていますからね。……それは自力で治していただくしかありません」
「後遺症……ですか」

その声に、自分の指を見つめてケニードは呟く。
一瞬だけ目が暗かった気がするが、それは本当に一瞬だった。
誰もが見つめるその顔には、いつもの笑顔が浮かんでいる。
「がんばりますよ！　命さえあれば、いくらだって可能性はあるんですから！」
「……その意気です」
苦笑を浮かべて頷き、ポテトさんは笑い含みの一瞥をレメクに送った。
「ちなみにレンさん。『生命の賛歌』は身体能力の活性と修復です。お嬢さんが歌えば、かなりの効果が期待できると思いますよ」
「！」
……あたし……？
突然の指名に、あたしは首を傾げた。ケニードとレメクが弾かれたようにあたしを見るのだが、意味はサッパリ不明である。
てゆか、せいめいのさんか、ってなんだろーか？
「お嬢さんもいい練習になることでしょう。それでは皆さん、また、『私』の時間になった頃にでもお会いしましょう」
言うやいなや、謎めいた笑みを残してポテトさんの姿が消えた。
慣れているあたしやレメクは普通に見送ったが、ケニードとアルトリートはポカンとしてその消滅場所を見つめている。
……まー、普通は驚くわな……ヒトが目の前でいきなり消えるんだから……
「……『生命の賛歌』……ですか」
絶句している二人の間で、レメクがポツリと呟いた。
あたしは首を傾げながらレメクの足をよじのぼる。
「おじ様。せーめーのさんか、って何？」
「ベルッ」
べりっと足から引き剥がされて、あたしはプランプランと揺れながらレメクに持ち上げられた。
目の高さまで持ち上げて、レメクは呆れ半分な困り顔であたしを

見る。
「足をよじ登るのはやめなさい。……『生命の賛歌』は歌ですよ。歌にはもともと聞き手に作用する特有の『力』があるのですが、メリディス族が歌えばその力は何倍もに引き上げられます。クラヴィスの紋章術と同じく、メリディスに伝わる種族特有の魔術です」
「歌なのに？」
「ええ」
頷き、何故か目をキラキラさせているケニードをチラッと見て、レメクは言う。
「それが、メリディスが音声魔術の使い手と呼ばれる由縁。……万物に作用する『呪歌』です」

１３　クリストフ（前書き）

邂逅の章から、改稿版を出来上がり次第順次差し替えＵＰ予定です。

13　クリストフ

王宮、青の間、談話室。
大きなお部屋の隅っこで、あたしとレメクは対峙していた。
「違いますよベル」
互いの膝がくっつきそうな至近距離で、レメクは真顔で駄目出しをしてくる。
「『かそけきひかり　のべにみちて』です」
「か、かそけけ」
「かそけき」
「か、かしょ！」
「か、そ」
むぅ！
むっすりと唇を尖らすあたしを見て、長椅子に寝転がっていたケニードが朗らかに笑う。
「あはは。言葉で覚えようとすると、かえって難しいですよクラウドール卿」
それを見上げて、絨毯に直座りのレメクは深いため息をついた。
「メリディスの『呪歌』は、ある意味特殊な能力です。心さえこもっていれば旋律だけでも発動しますが……歌詞に『力』を乗せたほうが威力は高いですからね」
「まぁ、確かに文献でもそうなってますけど……」
レメクの声に苦笑して、ケニードはチラとあたしを見る。
「ベルにとって馴染みのない歌詞というのは、覚えるのが難しいんじゃないかなぁ、と」
「……まぁ、普通、日常会話で『幽き（かそけ）』なんて言葉、使いませんからね……」
まったくである。
ウンウンと深く頷くあたしを見下ろして、レメクはまたしても大

きなため息。その息を顔面に浴びに行くのは、乙女としては至極当然のことである。えへん！

「……なにをやってるんですか、ベル」

おっと。レメクに変な顔されてしまいました。

慌てて姿勢を正し、あたしはピンと背を伸ばした。

ちなみに現在、あたしとレメクは床に敷かれた絨毯の上に座っている。

やたらと縦に長い体なのに、床に座るとそれほど高く感じないのは、きっと足が長いせいだろう。

……いやまぁ、あたしは体はどのみちちっこいから、どーやっても見上げる形になっちゃうわけだが。

さてはて。

そんな状態であたし達が何をやっているのかというと、お歌の特訓、もとい習得である。

大きな怪我をしちゃったケニードのために、メリディスの『呪歌』とかゆーのを覚えないといけないのだが、これがなかなか難しかった！

今習っているこの歌、『生命の賛歌』という名前なのだそうだが、なんかコムズカシー言葉がチラホラあって、あたしのちっこい脳みそにちっとも入ってきてくれないのだ。

ちーちーぱっぱーとかだったら、今すぐにだって歌えるんだけどな。

「ベルの場合、好きな歌を心を込めて歌ってもらって、それで効果があるかどうかを試した方が早いかもしれませんね」

なんか速攻で諦めたらしいレメクが、あたしを可哀想な子を見る目で見ながら呟く。

あたしは唇をさらに尖らし、目の前にあるレメクの膝をペチッと叩いた。

「それはシツレーなのです！　あたしはやるときはやるオンナなのですよ！？」

「では、最初から」
はい、と掌で指し示されて、あたしは顔を唇を尖らせたまま目をチョロッと右に逃がした。
「べ、ル？」
「うう……っ！」
静かな口調で促してくるレメク。
くっ……！　おにょれレメク！
イタイケなあたしをいじめるとは！
あたしは意を決し、すっくと立ち上がると、レメクに向かって大きく口を開いて歌い出した。

ちーちーぱっぱー　ちーぱっぱー♪
すずめのがっこのせんせーはー♪

「歌違ェ！　そして無駄に上手ェ！！」
なんか部屋の中央あたりから声が飛んできた。
ぴょいっと飛び上がってそっちを見ると、メイド部隊さんに着せ替え人形　（特大）扱いされているアルトリートが、こっちを見ながら呆れ顔で突っ立っている。
「アルは黙って人形になってるのです！」
「無茶言うな！　つーか真面目にやってくれよ！　そっちの兄貴の運命がかかってんだからよ！」
髪の毛をいじくられながら必死に言うアルトリート。
怪我の元凶その一である彼にとって、ケニードの治療に貢献できる（かもしれない）あたしの『歌』というのは、いわば希望の星なのだろう。すんごい期待を寄せられている。
「おまえが物覚えがすこぶる悪いってのぁ知ってるけどよ！」
「しっけいな！」
「頼むよちみっちょ！　ケニードの兄貴の腕はおまえにかかってんだからよ！」

服が半脱げの状態で隅っこにいるあたし達の所に走り込んできたアルトリートは、あたしのちっこい肩をがしっと掴んでガクガク揺すった。
「わ、わかっりぇるのです！　がんばってんのよあたしだって！」
「どこがだよ！　一行も進んでねぇだろーが！」
「ちっけいな！　一行は進んだわよ！？　三行は進んでない気がするけど！」
「……進んでませんね……」
歌詞を書いた羊皮紙を見つめて、遠い眼差しでレメクがポツリ。
そうして、なにやら大変複雑そうな顔でボソッと呟いた。
「……というか、アロック卿が兄ですか」
そうなのである。
あの一件で株が急上昇したのか、ケニードはいつの間にかアルトリートの兄貴分になってしまったのである。
なんでそれに対してレメクが複雑そうな顔をするのか不思議なのだが……
って……もしかして！？
「おじ様！　ケニードにヤキモチね！」
「……。なんでそうなるんです！？」
なんか今、変な間があったな……
ギョッとした顔でこちらを見るレメクに、あたしは胸を張ってビシッと指をつきつけた。
「だって、アルにとっておじ様が兄貴分って感じだったのに、いつのまにかケニードの方が兄貴って呼ばれてるんだもん。だからおじ様、ヤキモチなの！」
なんかレメクの手の中で羊皮紙がすごい音をたてて破れちゃっている。
……どんだけ動揺してるんだろーか……
まぁ、そーゆートコがカワイイのだが！
むふん！　と鼻息荒く胸を張ると、レメクがじりじりとあたしか

ら距離をとりはじめた。
……どーゆー意味だ？
「い、いや、ほら、つーか、なぁ？　俺べつにほら、兄貴とか、よ、呼んでねぇし、なぁ？」
なんかアルトリートも激しく動揺しているらしく、意味不明なことを言いながらおろおろと周囲を見渡している。着崩れまくってる服がいっそうズレてあられもない格好になっているが、まぁなんだ、相手がレメクじゃないから半脱げでも全脱げでもどーでもいい。
「そ、そうだよベル。ほら、あぁ、えーと……あ……？　ん？　でもそれだったら別にクラウドール卿を『兄貴』呼びでもいいんじゃない？」
「なにを言ってるんですか！」
「なに言ってんだよ！」
途中でイイコト思いついた的なケニードに、何故かレメクとアルトリートが揃って同じ反応をする。
ケニードはヘラッと笑って、その劇的な反応をユルくかわした。
「え。だってほら、僕が『ケニードの兄貴』なら、クラウドール卿が『クラウドールの兄貴』でも不自然じゃないじゃないですか。世話になったから兄貴呼び、って、それで通じるんじゃ？」
なるほどなケニードの声に、二人は絶句。アルトリートがすぐに考える顔になったのは、やっぱり『なるほど』と思うところたあったからだろう。
すンごい御貴族サマなレメクには、ピンとこないようなのだが。
「……そっか。そーだよな。なにも気構える必要ねぇんだもんな」
「え」
相変わらず一人動揺しているレメクに、アルトリートはグルッと向き直る。
「あ……」
「……」
「……」

「……」
「……」
「……」
「じれったいッ！！」
なんかお見合いみたいに緊迫感アリアリな構えで対峙する二人に、あたしはキレて声を上げた。
ギョッと振り返る二人に、ビシビシと指を突きつけて怒る。
「男二人で見つめ合うのはイカンのです！　そう！　おじ様が見つめる相手はあたし！」
さぁ！　おじ様！
「……」
さぁ！　かむかむ！！
「……」
なぜかじりじり後退するレメクに、あたしもじりじりと間をつめる。
そのままじりじり動いていくあたし達に、置いてきぼりをくらったアルトリートが空気の抜けた声で呟いた。
「……なんでさっきより緊迫感があるんだよ……」
失敬な。
「そ、それよりも、あなたは服の着付けをしてもらいなさい。選ぶ段階で躓（つまづ）いているわけでしょう？　夜会までそれほど時間はありませんよ」
「ぐっ……つーか、なぁ、ほんっとに、もうコレでいいんじゃねぇか？」
半脱げの上等な服を指して言うアルトリートに、レメクはメイドさんが用意してくれた紅茶を受け取りながらツメタイ目。
「……そんなだらしない状態で判断してくれと言われても非常に困りますが」
「ぐぅっ……！」
ベルトする前に走ってきたせいか、ズボンがズリ落ちて大きめの

ぱんちゅまで見えている。だらしないにもほどがあるだろう。
「そーなのです。アルはだらしない子なのです」
「ちみっちょ！　おまえにだけは言われたくないぞ！」
「あたしはしっかりやってるわよ！？　一応！」
「走って吹っ飛んでパンツ丸見えだったのは誰だ！」
「ぬぅ！？　いつそんなトコ見たの！？」
「クラウドールの兄……貴、に！　飛びかかってる時は毎回だろーが！」
「そこは目を瞑ってあげるのがシンシってやつなのよ！　そしてパンツはおじ様のお手製！　苺柄！！」
「ンな情報はいらん！」
ぐっと親指を押っ立てて言ったあたしに、アルトリートが何故か絶叫。
ふふん！　このミリキがわからんとは！
「ワンポイント苺のせくすぃーさが分からないなんて！　アルはやっぱりだらしない子なのです！　ね！　おじ様！」
「……どっちもどっちです……」
「「ひどっ！！」」
呆れ顔で言うレメクに、あたしとアルトリートは声を揃えた。
なんか向こうでケニードやメイド部隊さんがクスクス笑ってる。
「まぁまぁ。妹姫様も、若君もそのへんで。紅茶をどうぞ」
クスクス笑いながらやって来た美人メイドさん（確かフェンとかいう名前）が、あたしとアルトリートにも紅茶をふるまってくれる。
暖かいカップに噛みつくようにして飲みながら、あたしはふとアルトリートを見上げた。
ぱんちゅが見えてるアルトリートを。
「アルのぱんちゅは灰色なのです」
ごほっ

なんか男三人が茶を吹いた。
「つーかちみっちょ！　てめぇは何を観察してるんだ！」
「それ以前にあなたは身なりを整えなさい！」
「情操教育に難がありまくりだよね……」
わぁわぁ言い始めた三人に、首を傾げつつあたしは脳内メモに書き込みをする。
アルのぱんちゅは灰色で、なにやらちょっと見窄らしい、と。
御貴族様なのだから、もっとビラビラーでキラキラーな下着だと思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。
いやまぁ、あたしが狙う秘宝『レメクのぱんちゅ』だって黒の健闘士下着（クサーパンツ）というシンプルすぎて華やかさのないものなのだが。
……というか、アレ、いったいいつになったらゲットできるのかな……
「なんでしょう……今、そこはかとなく嫌な予感がしてきたんですが」
ジーッとレメクのぱんちゅ（着用中）を注視しているあたしに、レメクが悪寒でも覚えたように身を震わせる。周りの男二人が生ぬるい笑みを浮かべているのが、レメクとの対比で非常に気になった。
「まぁ、えーと……ほら、下着はともかくとして、夜会までそれほど時間もないことだし、歌の習得はまた後にして、とりあえず着替えを済ませたほうがいいんじゃないかな？」
ケニードの声に、レメクが頷く。
「それもそうですね。こちらも準備をし……なぜ目を輝かせて走り込んでくるのです？　ベル」
「あたしが手伝うのです！」
「いいです。けっこうです。自分で出来ます」
三連続で拒否がキタ。何故！
「あたしだって手伝うのです！」
「どうやって手伝う気ですか。上着持っても引きずるでしょう、あなたの場合」

「着替え終わった後の服を片づけてあげるのです！」
「そうやって自分の巣に人の服を確保するのはやめなさいと前から言っているでしょう（一息）！　だいたい、以前渡した私の服はどこに持って行きましたか！」
「か……返したのですよ！？」
「返ってません！」
ぷぷっぴぷ♪　と口笛を吹くあたしに、レメクが怖い目で言う。
「一度屋敷中を家捜ししないといけないようですね」
なんと！？
「だっ駄目なのですよ！？　オンナの秘密を暴いてはイカンのです！」
「何が女性の秘密ですか！　私の家です！　そしてそもそも私の服です！！」
「そしてひいてはあたしの宝物ですッ！」
「なんでそうなるんです！？　というかやっぱり隠し持ってるわけですね！？　ベッドの下も棚の上もくまなく探したのに、いったいどこに隠しているんですか！」
……言えません。
ベッドの天蓋の上だなんて。
きゅっと口を両手で押さえたあたしに、レメクがゆらりと不気味に揺れる。
「……ベッドの天蓋の上ですか……」
ああんっ！
闇の紋章で筒抜けだった！！
「うぁーん！　あたしのなのあたしのなのあたしのなのーッ！！」
「あなたのでは無く、私のです！　だいたい、ベル！　盗みをしてはいけないと教えておいたはずですよ！？」
「借りてるだけだものいつか返すんだもの！！　……百年ぐらい後に」
「どれだけ借りてるつもりですか！？」

レメクの足にしがみついてるあたしと、それを引っぺがそうと変な踊りをしているレメク。
ちょっぴり離れた場所にいるケニードとアルトリートは、何故だかとても遠い眼差しであたし達を見ていた。
「……てゆか、もう諦めたほうがイイんじゃねェか、って俺思うんだけどよ……」
「そうだね……僕もそんな気がするよ……」
その意見には大賛成だ。
レメクにベリッと引き剥がされながら、あたしは二人に向かって「うんうん」と頷いてみせる。
――と、

「――姫様がおいでになりました」

くすくす笑いながらこちらを見ていた美人メイドのフェンが、さっと身を翻して戸口へと向かった。
あたし達の目は勢いそちらへと向かう。
その瞬間、
「ベル！　そろそろ夜会の準備を致しますわよ！」
ぱーん！　音をたてそうなほどの勢いで扉が開き、美しい姫君が現れた。
輝く金髪、煌めく瞳。なにやらひさしぶりに会う気がするが、その実たった数時間前に別れたばっかりの我が義姉上、フェリ姫である。
「きゃあ！」
そのフェリ姫は、何故か部屋を見るなり顔を真っ赤にして身を翻してしまった。
彼女が見た部屋の中っていうと……
……えーと……

「……服はちゃんと着ましょうね……」
未だにぱんちゅ半見えなアルトリートに、ポンと肩を叩きつつ疲れた口調でレメクが言う。
おぅ、と慌ててズボンをはくアルトリートに、他一同も半笑いだ。
どうも深窓の姫君には刺激が強い内容だったらしい。
ただのぱんちゅなのだが。
……って……んん？
ふとあるコトを思い出して、あたしはため息をつきながらボタンの留め方を教えているレメクを見上げた。
「そーいえば、おじ様。神様はね……」
「お待ちなさいベルそれは言ってはいけませんのよッ！！」
……なんかスゴイ勢いでフェリ姫が飛んで来た。
「もむーふふ！」
「おねえさま、ではありませんわ！　いいえ、お姉様ではありますけれども！」
……どっちだ。
「く、クラウドール卿！　お気になさらないでくださいましね！　ベルは、その！　ちょっと好奇心旺盛なだけですわ！」
わしっ！　と口を塞がれて、あたしは「もがむが」とジタバタ。
「あの……」
「あぁっ！　もうこんな時間ですのねッ！！　まぁ大変！」
「ええ……」
「寝室をお借りいたしますわ！　ベルを着飾ってあげなくては！」
「……はぁ」
レメクに何かを言う間を与えず、フェリ姫はあたしを抱えて脱兎の如く寝室へと逃げ込んだ。
その後からメイドさん部隊が慌てて駆け込んでくる。
「それではクラウドール卿！　殿方はそちらで衣装を整えてくださいませ！　全てが終わってからお会い致しましょう！」
ごきげんよう！　と鮮やかな笑顔を振りまいて、フェリ姫はバ

タンと扉を閉めた。
ようやく口を解放されたあたしは、ひーふーと深呼吸する。
それにしても、フェリ姫。
銀のスプーン以上に重い物持ったことがないとか言ってたのに、あたしを軽々運んでたな……
意外な力に感心して、あたしはクルリとフェリ姫に向き直り、
「べ～る～……」
相手の魔物さながらの形相に、飛んで逃げた。
「お待ちなさい」
あっ！　逃げるの失敗ッ！！
首根っこをひっつかまえられて、あたしはワタワタと空気を引っ掻く。
「あれだけアレは聞いちゃいけませんと言ったでしょう！　なにをしれっとお聞きになろうとしていますの！」
「だ、だってお義姉しゃま……」
「可愛く言っても駄目ですわ！　カワイイですけれど！」
ギューと抱きしめられて、あたしの喉がキュッと絞まる。
嗚呼！　お義姉さま！
愛情を注いでいるようにみせかけての首絞め攻撃！　見事ですぐぇえええ！！
「ひ……姫様、妹姫様が大変な状態になっておられますが」
見かねたフェンに救出されて、あたしはひーはーと必死に酸素を取り入れた。
助かった！！
「大丈夫ですか？　妹姫様」
言って、美人メイドはあたしを抱えて扉と反対側に方向転回。
やり取りの間にスタンバイしていたらしいメイド部隊が、そこにズラリと勢揃いしていた。
衣装籠片手に。
「お時間もあまりありませんし、手早く着付けいたしますわね。さ、

あちらのコルセットからいきましょう！」
助かってなかった！！
一瞬で青ざめたあたしを抱えたまま、彼女は拷問具の前へとあたしを連れて行く。
……数秒後、あたしの悲鳴が部屋中に響き渡ったのは言うまでもない。

※　※　※

「女って……すンげェ大変なんだな……」
ようやく地獄から生還し、よろよろと談話室に出てきたあたしを見て、着せ替え人形が終わったらしいアルトリートがそう呟いた。
あたしはその前でよろよろパタンと倒れ伏す。
「……ち……ちにました……」
「生きてます」
あっさり一言で片づけながら、あたしをヒョイと抱き上げてくれるのはもちろんレメクだ。
相変わらず男の色気満載なレメクは、今日は光沢のある黒を基調とした服を着ていた。
いつもの黒服より格段に装飾品が増えたその服は、袖口、襟元、服の裾などに豪華な刺繍が入っている。
もちろん袖のところには華麗なフリルがあり、よく見れば刺繍の入った裾にもフリルがこっそりと施されていた。
なんて言うか……フリルが似合わなさそうな感じなのに、意外に似合うのがレメクなんだな……
そんなレメクは持ち上げたあたしをじっくりと見て、優しい顔で微笑んだ。
「今日も可愛らしいですよ、ベル」
「なんと！？」

笑顔プラス素敵発言に、あたしの生命力は一気に復活。
プランプラン揺れながら必死にレメクに腕を伸ばした。
……ええ。短すぎて全然相手に届かないですが。
「おじ様あのねっこの服ねっちょっと重たいのっ」
袖口に「これでもか！」とふんだんにフリルが縫いつけられたあたしのドレスは、青を基調とした典雅なもの。手を伸ばすとワサワサするほど、そのフリル量は凄まじい。
「でも裾のトコとか刺繍がキレーなのよ！」
この前の夜会の時よりちょっと横広がりなスカートは、たっぷりのドレープがとられており、なんだか全体的にフワンフワンしている。
スカートの中央は、足下から上へと登る形で豪華な刺繍が入っていて、それは舞い上がる羽根と咲き誇る花、そして空へと登る蔓草のような形をしていた。
よーするに、クネクネでブワッとしている感じの模様である。
「そしてコルセットはギューギューなの！」
最後に一番苦しい内容を告げると、レメクは優しい笑顔のまま頷いた。
「そうですね……あなたは特に樽のようですから」
「ちっけいなぁッ！！」
樽って……！　樽って……！！
たしかに最近、あたしも「自分って樽に似てるかも」とか思うぐらいアレな体型してるけど！　してるけどーッ！！
「……クラウドール卿……今のはかなり失礼ですよ……」
「……女に言う言葉じゃねェよな……」
さすがに他男二人もあたしに同情気味。
涙目でそちらに訴えかけると、カワイソーニナ、というなま暖かい目で見守られた。
……あんまり同情されてない気がする。
そんなゴクアクヒドーな二人はというと、これがまたなかなかに

スバラシイ姿だった。
アルトリートは深い緑で（結局あの服に決まったんだな……）、ケニードは濃紺。どちらも金糸の縫い取りが素晴らしく、袖口には華麗なフリルがついている。
襟元のフリルと留め具も完璧で、これを昔、レメクが着ていたと思うと……おっといかんいかん！　ヨダレが出ちゃったじぇ。
と思ったら、男二人の腰が逃げた。
「……なんだろうな……俺、一瞬だけど、兄貴の悪寒を理解しちまったぜ……」
「……なんか狩られそうな気配ってゆーか、ちっこい怪物を見る気持ちだよね……」
ナゼかじりじりとあたしから距離をとる二人。
どーゆー意味だ？
ちなみに、アルトリートもそうだが、どうやら一緒くたに着替えさせられたらしいケニードも、いつもより二割増しに美形だった。おそらく着ている服が良いのだろう。
……てゆか、アウグスタ……
……本当に男服の趣味はいいんだな……
たぶん、身近に史上最強の美形を従えているからなのだろう。じゃがいもの異名をもつアノヒトを。
（それに……）
着せ替え人形になっていたアルトリートを思い出して、あたしはチラとレメクを見た。
素敵レメクは不思議そうに首を傾げる。
（……たぶん、アウグスタ……レメクを着飾りたくてしょーがなかったんだろーなぁ……）
いつもそっけない黒服ばっかり着てるから、夜会の時ぐらいはと張り切ったに違いない。なんかそういう場面が簡単に想像ついちゃって、あたしはしみじみとため息をついた。
「オンナに服を貢がれる男って、カイショーとしてはどーかと思う

のですよ、おじ様」
「……私は今、窘められているのでしょうか？」
真剣な顔でぼやくレメクに、ケニードとアルトリートが口を押さえてそっぽを向く。
ため息一つでその話を打ち切って、レメクはあたしを抱えてフェリ姫に向き直った。
ちなみにフェリ姫の今日のドレスは淡い金色。
全体に細かい刺繍がびっしりと入り、小さなフリルも恐ろしい量縫いつけられている。おそらく体重は軽く二倍になっているだろう。
もちろん、そのかわりに素晴らしく美しいのだが。
「フェリシエーヌ姫、いつもベルのためにありがとうございます」
「あら。かまいませんのよ、クラウドール卿。ワタクシにとっても大事な妹ですもの」
羽扇子で口元を隠して、フェリ姫は優雅に笑う。
……そうか。笑う時はホホホなのか。今度練習しよう。
「ワタクシこそ、卿には深く感謝しておりますのよ。よく……本当に、よく……ベルを見つけ、助け出し、ここまで育ててくださいました」
「……育てる、というほどのことはしておりませんが」
ほほほ、と優雅に笑って、フェリ姫は眼差しを細めた。
あたしもこっそり「ほほほ」と声だけ真似してみる。真顔で。
「人々の闇に埋もれてしまっていた幼い子供をこれほど愛らしく生まれ変わらせたのです。育てた、と言っても過言では無いでしょう？　例えそれが、わずか二ヶ月ほどの間だとしても」
「二ヶ月かよ！？」
ナゼだかしらないが、アルトリートにすごいビックリした声をあげられた。
「二ヶ月でアレかよ？　つーか、マジか？」
「大マジだよ、ビックリだよね。人って、二ヶ月であんなに変わるんだねぇ」

それはきっとあたしの変貌っぷりを称えてのことだろう。
エヘンと胸を張ったあたしに、イヤおまえじゃないから、とアルトリートが真顔で手を振る。
……ショックだ！！
ガーン、と固まったあたしに困り顔を向けながら、レメクがよしよしと頭を撫でてくれた。
「うふふ。卿のそんな姿が見られるだなんて、王宮の誰もが思っていなかったことでしょうね。大祭の初日にお二人を見た時には、ワタクシも、まさか自分がこんな風にお二人と接せられるとは思っていませんでしたわ」
うふふ、と真似しながら、あたしもウンウンと頷いた。
最初、フェリ姫ってばすっごいおっかなかったもんなぁ……いや、今も時々おっかないけど。
「クラウドール卿。貴方様がベルを見つけてくださらなければ、ワタクシはベルとは出会えませんでしたわ。そして、ワタクシ以外の者も皆、今の貴方様と出会うことも出来なかったことでしょう。……お二人の出会いに感謝と祝福を。出会ってくれて……そして、出会わせてくださってありがとうございます」
言って優雅にお辞儀するフェリ姫に、レメクは少しだけ息をつめ、そうしてほろりと笑みを零した。
「……私はただ、自分が出来ることをしてきただけです」
深い声だった。
穏やかで暖かい――あたしの大好きなレメクの声。

「ベルのことは……」
言って、彼は腕に抱えたあたしを見る。
「ベルがベルであったからこそ、今の私達があるのだと……そう思います。私が何かをしたわけではありません。ベルが私に与えてくれたのです」
……あたしが……『与えた』……？

不思議な言葉に、あたしは目をパチクリさせる。
なんか前にもそんな感じなコトを言われたのだが、相変わらず意味不明な内容だった。
一体いつ、そして『何を』レメクにあげれたんだろーか？
「ふふ。ベルは何の自覚もないみたいですわよ？」
ふふ、と真似しながら、あたしはキョトンと首を傾げる。
レメクはなぜだか軽く苦笑して、あたしの頭を撫でてくれた。
「……気づかずに行っているからこそ、沢山のものを含んでいるのだと思いますよ」
「そうですわね。打算のない真心というのは、得難いものですもの」
くすくす笑って、フェリ姫はパチンと羽扇子を閉じた。
そうして、優雅な仕草でレメクに手を差し出す。
受けて、レメクはこれまた優雅にその手の甲に口付けた。
「あなたを義兄とお呼びできることを心から嬉しく思いますわ」
……ナゼデショウ。
レメクの顔が引きつりました。
「……まだ結婚しておりませんが」
「ほほほほほ」
楽しげに笑って、フェリ姫はまた羽扇子で口元を隠してしまう。
ほほほほほ、と真顔で真似するあたしをジッと見て、レメクはなんだか遠い眼差しを窓の向こうへと逃がした。
「……遠いですね……」
どういう意味だ！？
そんなあたし達に、自分の服をチョイチョイ引っ張ってたアルトリートが笑う。
「まぁ、いろんな意味で遠そうだよな。つーか、ガキなんだからそれぐらいが普通じゃねぇか？」
「そのわりにおかしな知識が沢山あるのですが……」
「下街で一回暮らしてみっか？　そこらでいろんな言葉聞かされるぜ？　意味なんか知らないうちから先に言葉覚えちまうんだ。誰も

何も教えちゃくれねぇからよ」

苦笑含みにそう言って、アルトリートは軽く肩をすくめた。

「自分で見聞きして、自分で考えて、自分で知識にしちまうしか方法がねェんだ。お偉い連中みたいに、賢い先生がついて何でもかんでも教えてくれるんなら、間違った知識なんか覚えたりしないんだろーけどよ」

「……そうですね」

苦笑に苦笑を返して、レメクはあたしを抱えなおす。

しっかりとその体に抱きついて、あたしは「でもね」と声をあげた。

「おじ様はあたし達のもキョーヨーを身につけさせるために、あちこちに手ぇまわしていろんな先生をつけてくれたのよ？　新しい孤児院にはね、ちゃんと先生がいるの！」

「へぇ……」

さすがにそれは初耳だったのか、アルトリートが軽く目を瞠る。

そうして、くしゃりと笑って言った。

「……いいな、そういうの。王都に住んでるやつらは幸せだな」

それが何処と比べてなのか……問うまでもなかった。

彼はレンフォード家の人間だ。彼が身近に接している下層の人間は、レンフォード領の人間に他ならない。

「王都も、ついこの前ようやく救われたところだよ。ほら、一斉粛正があったっていう話題、レンフォードの方では噂にならなかった？」

ケニードの声に、アルトリートは「あぁ」と何かを思い出す顔になる。

「なんかおっかねェ断罪官が高官をばっさばっさ斬り飛ばしたって噂があったな」

「……斬ってませんが……」

さすがに微妙な顔になったレメクに、アルトリートはケラケラ笑って手を振った。

「あー、噂なんてそんなモンだろ？　断罪官ってのがどんなのか、ってゆーのも、普通、俺等の仲間連中にゃ伝わってこねぇしよ。なんか怖くてスゴイ力もった裁判官だ、っていうのがせいぜいだ。てことはだ、一昔前の正義の味方みたくよ、悪人をザクザク切り倒すようなヤツかなって思うじゃねぇか。ほら、昔流行った劇みたいによ」

「ああ！　『怪盗ヴォルサーク』ですわね！」

「うおっ！？　なんか意外なヤツを姫さんが知ってるよ……」

目を輝かせたフェリ姫に、アルトリートがギョッとなる。

それに向かってムッと顔を膨らませ、フェリ姫はアルトリートを睨み上げた。

「失礼ですわね！　ワタクシ、演劇と名のつくものはほとんど網羅しておりますのよ！　まぁ、もっとも、恋物語のような甘く華やかな物語のほうが好みですし、ヴォルサークは何をどう言いつくろったところで盗人。民衆の味方であり、悪党を懲らしめるくだりは胸がスッとしますけれども、悪・即・斬の思慮に欠ける振る舞いは少々難ですわ！」

「あぁ！？　あのぬたくった蜂蜜みたく甘甘なコイモノガタリとヴォルサークを比べてどーするんだ！？　誰もがムカつく連中を懲らしめてくれるってぇんで、ヴォルサークは人気なんじゃねェか！」

「なんですって！？　あなた！　ルドヴィカの劇を一度でも見たことありますの！？　人の恋の切なさも苦しみも織り交ぜたあの物語の、どこが蜂蜜みたいですって！？」

「どのみち甘甘なんだろーが！　だいたいなぁ！　所詮他人事の恋だの何だのにキャーキャー言えるのは、それだけゆとりのある連中だけだっつーんだよ！　生きるのに必死な奴等にゃ、そんなのは夢もまた夢って話だ！」

「それだったらヴォルサークだって一緒ではありませんの！　現実にはそんな人いないんですのよ！？」

「いるじゃねぇか！　ほらここに！」

ここに、と指されて、レメクがヒジョーに呆れた顔でペチッとアルトリートの手を叩いた。
「人を指さすのはいい加減やめなさい。そして私はヴォルサークではありません」
……てゆか、レメク、怪盗ヴォルサークを知ってるのか……
演劇として非常に有名なお話を思い出しながら、あたしはお楽しみとは無縁そーなレメクをジッと見つめた。
怪盗ヴォルサークというのは、老若男女に支持される大衆娯楽活劇で、一言で言えば勧善懲悪の物語である。
とある貧乏貴族の青年が、夜な夜な黒い衣装に身を包み、民衆を苦しめる悪い高官を叩きのめすという物語なのだが、その途中で沢山のお金をゴッソリ盗み、貧困に喘ぐ人々の戸口に投げ入れていくので非常に人気の高い作品だった。
……そーいや、レメクってヴォルサークみたいだな。黒服だし、悪人懲らしめるし、お金をあたし達ビンボー人のために使いまくってくれるし。
「おじ様はヴォルサークだったのね！」
なるほどと目を煌めかせたあたしに、ナゼかレメクがスゴイ微妙な顔で呻いた。
「私は……あんなに……節操なしなんですか……」
……？
せっそーなし、って、どーゆー意味で？
きょとんとしたあたしに、外野三人がこそこそ話し出す。
「……そういや、ヴォルサークは毎回違う女性と恋仲になってましたよね。作中で」
「決まったヒロインいなかったか？　ほら、有名貴族のお姫様」
「ある意味身分差の恋ですわよね。そこはワタクシ、けっこう好きですわ」
こそこそひそひそ。
なんかレメクが密かにしょんぼりしているようなので、あたしは

慰めを込めて肩をポンと叩いてあげた。
「だいじょーぶよ！　おじ様の方が数倍スゴイから！」
……ナゼでしょうか。
レメクがよけいに落ち込みました。
「あっあのっ！　ヴォルサークはともかく！　ほら、えぇと……そろそろ会場に行きませんか!?　控えの間は開いてるでしょうし、その、クラウドール卿達や姫君はともかく、僕達はパートナーも探さないといけませんし！」
僕達、と自分とアルトリートを示すケニードに、落ち込み顔だったレメクが一瞬で復活した。
「あぁ、その点でしたらご心配なく。ルドにあなたへの言付けを頼んだ時、一緒にご令嬢を捜してくれるよう依頼しておきましたから」
んを？
てことは、ケニードが喜び勇んでこの部屋に来たのは、バルバロッサ卿を介して連絡がいってたからなのだな？
……というか、パートナー云々って、なんだっけ？
「夜会は男女ペアで赴くものなのですよ。初日はともかく、四日目以降はパートナーがいない人はダンスホールに入れない決まりになっています。ですから、独身の方や連れ添いの方と離れてご出席されている方は、最初の三日間の間に四日目以降でパートナーとなってくれる方を見つけておかなくてはいけないのです」
「……そんなルールがあんのかよ……」
やや青ざめた顔でぼやくアルトリートは、あたし同様、そーゆー内容を全く知らないようだった。
「つーか、それ、俺ヤバイんじゃねぇか？　飛び入り参加みたいなもんだろ？　出席しないといけねぇらしいけどよ、パートナーなんていないぜ？」
「そちらも大丈夫です」
万事抜かりないレメクの言葉に、アルトリートは安堵とガッカリとがまぜこぜになった顔で眉をひそめた。

「……大丈夫っつったって、俺、そいつのこと知らないし、そいつも……俺のこと知らねぇだろ？」
「そうでもありませんよ。お話を向けたところ、快く引き受けてくださいましたし」
レメクの言葉にアルトリートは訝しげな顔になる。
……って……
ん？　もしかして？
あの人かな、と想像すると、レメクがちょっと悪戯っぽい表情で頷いた。
なるほど。やはりあの人か。
てことはアルトリート……たぶん、すンごい振り回されるんだろーな……
「……をい。ちみっちょ。なんで俺をかわいそーな子を見るような目で見る？」
「なんでもないのヨ？　がんばってね！」
「なんの応援だ！？　つーか、おまえ、心当たりあんのかよ！？」
ぷぷっぴぷ♪
「うわ！　無駄に上手い口笛が倍むかつく！」
アルトリートが向かって来たので、あたしはピョイッとレメクの腕の中から飛んで逃げた。
「こら待てちみっちょ！　ちょっと説明しろ！」
「お楽しみなのです！」
「楽しみじゃねェ！　つーか、俺はダンスなんざ踊れねぇぞ！」
「壁の鼻になりやがるのです！」
「壁に鼻はねェだろ馬鹿っちょ！」
誰が馬鹿っちょだ！
ちょこまかとアルトリートの腕をかいくぐっていたあたしは、数部屋抜けた先でグルッと回転してゴロツキ貴族と対峙した。
場所は応接室。そう、あと一部屋で廊下に出る場所。
そして標的はアルトリート。意識もバッチリ一点集中。

確か、こーやればハンテンムカとかゆーのが発動するはずである。
「……うっ！？」
途端、あたしの異変に気づいたらしく、アルトリートの足が止まる。
じりじりと互いに隙をうかがいつつ対峙して、あたしはシュッシュッと拳を打ってみせた。
しゅっしゅっ
しゅっしゅっ
「……くそ……」
しゅっしゅっ
しゅっしゅっ
「見た目はメルヘンなのに、その馬鹿力はどーなんだ……」
メルヘンってどーゆー意味だ！？
クワッと目を怒らせ、ついでに特攻しようと足を踏み出すと、廊下側の部屋から美人メイドさんが顔を出した。
「あのっ！　妹姫様、お客様がおいでになっているのですが」
しゅっしゅ……？
軽快なステップで間合いをつめようとしていたあたしは、その言葉にキョトンと振り返る。
「「「お客様？」」」
その声は、あたし達を追って来たらしいレメク達の側から。
レメク、ケニード、フェリ姫と一風変わった三人組は、互いに目配せをして首を傾げる。
「陛下……ではありませんね？」
「あ……はい。その……」
フェンとは違う美人メイドさんは、心持ち困った顔であたし達全員を見てからこう告げた。
「……クリストフ、とおっしゃる方がおいでです」

※　※　※

メイドさんに案内されて来た美青年は、部屋の中にいるアルトリートを見るや否や、挨拶もそこのけに駆け寄ってきた。
「アル！　本当にここにいたんだね！」
「……あ……あぁ」
出迎えたアルトリートは困惑顔で頷く。
いやしかし……
並ぶと余計にわかるのだが、背格好のよく似た二人だった。
クリ……えー……
クリ……えぇい！　クリンクリンさんの方が、確か髪の毛がクリンクリンだったはずなのだが、こうして髪を整えられてしまうとそれもよく分からない。
とはいえ、アルトリートをよく知った今では、外見以外のものでハッキリ見分けることができるのだが。
（……ちょっと影があるけどサッパリしてるのがアルトリートで、どろっとしてるのがクリンクリンさんね）
そう。クリンクリンさんはドロッとしているのだ。
何か、奥底によくないものを抱えているよーな感じで。
「さっきすごい騒ぎがあったろ？　心配で心配で……！　けど、クラウドール卿が連れて行ったってことは……その、僕なんかが口を差し挟める内容じゃないってことかな、って思って。……でも！　だからって何もせずにいられなくて……！　それで、ここに来させてもらったんだ」
「……この辺りは王宮でも限られた人しか出入りできないはずですが」
レメクの静かな声に、クリンクリンさんは慌てて居住まいを正す。
「す、すみません、クラウドール卿！　そして姫君。突然押しかけたうえ、ご挨拶が遅れてしまいました！」
「……いえ」
静かすぎる声で、レメクは答える。

それに気づかず、いや、それが普通だと思っているのか、全然気にしてない顔でクリンクリンさんは鮮やかに笑って優雅に一礼。
「初めまして。クリストフ・アルトゥルです」
簡素な名前に、しかし笑う人は誰もいない。
「レメクです」
さらに簡素に返したレメクに、クリンクリンさんは輝く笑顔。
「存じ上げています。クラウドール卿といえば、レンフォード領にもその名が伝わってくるほど高名な方ですから！」
憧れの英雄を見る眼差しで、彼はレメクを見上げていた。
対するレメクの方はといえば、わずかに目を伏せてみせるだけ。
「この前の孤児院の子供達を救った一件は、すでに民衆の間で語り草になっています！　ナスティア史上二人目の断罪官であるあなたは、民にとってはまさに英雄ですから！」
「……民、ですか」
「ええ！」
笑顔で頷いて、クリンクリンさんは言葉を続ける。
「これからも王都の民のために、どうか頑張ってください！」
その言葉は、あたしのような貧困層にいた人のために頑張ってほしい、という願いのようにもとれる。
けれどあたしは、違和感を感じていた。
なんか……なんとなく、イヤな感じがする。
だいたいにして、王都の民のため、って……強調するのが妙に気に入らないのだ。
「……それより……いいのか？　そっちの用事とかは」
放っておけば延々レメクに話しかけてそうなクリンクリンさんに、アルトリートがやや遠慮がちに声をかける。
あっ！　という表情をしてから、クリンクリンさんは慌ててアルトリートに向き直った。
「ごめん！　舞い上がっちゃったよ。……姫君も、すみません。きちんとご挨拶できないままで」

これはあたしに対して。
てゆか、本気でレメク以外の人のこと眼中外だったよな……この人。
「別のいーの。用事って？」
「え？　あ……そう、アルに」
あたしの返事に一瞬キョトンとしてから、クリンクリンさんはアルトリートを見る。
そうして、すごく真剣な顔で彼に向き直った。
「アル。これからお城で舞踏会があるんだけど、パートナーがいないと出席できないらしいんだ！」
それをさも重要なことのように言うものだから、あたしは思わずポカンとしてしまった。
だが、貴族にとってはすごく大事なことのようだ。
特に途中参加するクリンクリンさん達にとっては大事なのだろう。
「俺もさっきソレ聞いた」
「本当か！？　僕もここに来て初めて知って……！　だってほら、僕はこういう所、縁がなかったから……！」
その言葉に、ナゼかレメクがツメタイ眼差し。
「でも、王都だと君も一緒だろう？　奥方様が相手の人を見つけてはくれたんだけど、どうしよう……君のパートナーがいないんだよ……！」
その後半の台詞は、まさにアルトリート自身が言った言葉だった。
だが、
「彼のパートナーでしたら、ご心配なく」
静かな声で口を挟んだレメクに、他にも何か言おうとしていたクリンクリンさんが慌てて向き直った。
「ご心配、なく、って……クラウドール卿？」
「すでに申し分ないご令嬢がパートナーについてくださっています」
「ご令嬢……？　！　まさか……」
何に思い至ったのか、クリンクリンさんは慌ててフェリ姫を見た。

「？」
「フェリシエーヌ姫。まさか、シーゼルのパートナーである君が……？」
シーゼルの名前に、フェリシエーヌの目が一気に冷たくなる。
……ナゼダ。
「……ワタクシはシーゼル以外の殿方のパートナーにはなりませんわ」
「そ、そうですよね。でも、そ、それじゃあ、誰が？」
理由は不明だが、クリンクリンさんからはすごく焦ってるような気配がしていた。
その様子にあたしは首を傾げる。
どうも彼は不自然だった。……思い返せば、最初の出会いから不自然だったよーな気もするが。
気になる点はもう一つある。
なんかインパクトのある知人の匂いがするのだが、遠慮のない性格だったはずなのに、何故だか控えの間からこっちに来る気配がまるで無いことだ。
クリンクリンさんより後から来たんだろうけど……なんで入ってこないのかな？
「アル。君の噂は社交界じゃけっこう広まってるし、王都にいるような姫君は、僕や君のような人を見下す人が多いから、すごく心配だったんだけど……」
ひどく困惑したような声と表情で、クリンクリンさんはアルトリートに言う。
「ねぇ、誰が君のパートナーになってくれたんだい？」
そんな人いるの？　本当に？
そんな声が聞こえてきた気がした。
もちろん、クリンクリンさんが口で言ってるわけじゃない。
けれど、そんな風に聞こえたのだ。
（……この人って……）

あたしは眼差しを細める。
最初に出会った時から態度が悪いのはアルトリートの方で、クリンクリンさんは礼儀正しかった。
対応もどちらかといえば控えめで、一生懸命かしこまろうとしているようにも見えた。
けれど――

（……レメクは……）

――違和感があった。

（最初から、無視してた……）
その違和感が何なのかは分からなかったけれど。
（……レメクは、何か、クリンクリンさんに思うことがあるの……？）
違和感の理由は分からない。
大人の難しい事情とか、レメクはあたしに話してくれないから、そーゆー内容も全然知らない。
だからあたしは想像するしかなくて、正直、その想像だってサッパリだから、どーしてどーして？　と思うしかないのだが。
（……でも、なんとなく）
それでもなお、分かるものがある。
肌で感じるものがある。
どうしてレメクが最初からクリンクリンさんにはツメタイ反応なのか。
どうしてレメクはアルトリートには最初から優しくて暖かいのか。
アルトリートはガサツでゴロツキみたいで全然お貴族様っぽくないけど、すごく真っ直ぐで熱い正直者なのだ。
クリンクリンさんは控えめっぽくてアルトリートよりお貴族様っ

ぽいけど、すごく曇った硝子を間に挟んでるような、妙にナニカチガウと感じさせる相手なのだ。

嘘っぽい。

何かが嘘っぽい。

いや……もしかすると、彼の全部が。

（……そー思うのは、あたしが疑い深くて、悪い見方しかできないイケナイ子だから……？）

レメクからは、人をすぐに悪い風に決めつけてはいけないと言われている。

けれど、自分の直感を否定することはできなかった。

これでも極悪な環境下を生き抜いてきた。自分の直感を信じたから助かった場面も多い。

そのあたしの直感が告げるのだ。ナニカガチガウと。

彼は『違う』と。

あたしは困った表情で立つアルトリートと、心配そうな顔を作っているクリンクリンさんを見比べ、たしッ！　と一歩を踏み出した。

「アルにはちゃんと、素敵なパートナーがいるのです！」

「……姫君？」

ちっちゃいあたしを見下ろして、クリンクリンさんが眉をひそめる。

あたしはアルトリートの前に走り込んで、クリンクリンさんの前に立ちはだかった。

「だから、クリンクリンさんはお呼びじゃないのです！」

「……ベル」

ナゼかレメクが疲れた声。

背後から「……クリンクリンじゃねェ」とかぼやき声が聞こえてきたが、この際ソレは無視だ。

「……姫君は、そのご令嬢をご存じなのですか？」

なんかちょっとヤな目になったクリンクリンさんに、あたしは大きく胸を張る。

「知っているのです！」
そうして、あたしは彼の後ろ――控えの間を指し示した。
「そこにいるのです！」
全員が一斉にそちらを見た。
開け放たれたままの大扉の向こう、宛然と微笑む、驚くほど美しい黄金の姫君を。

「ごきげんよう、皆様」
その人は、そう言って優雅に微笑んだ。
アウグスタのように張りのある美声とは少し違う、しっとりとした美しい声。
長い金髪を優雅に結い上げ、白い花を散らした姿はまるで女神のよう。
体の線にそって流れる白いドレスは、驚くほど整ったプロポーションをこれでもかと際だたせている。
アウグスタのキワドレスと違ってデザイン自体はごく普通で、胸が大きく開いているわけでも足が見えているわけでもないのに、なんともいえない色気がホワホワと漂っていた。
淡く化粧を施した顔は、アウグスタにこそわずかに及ばないが、これまた目が覚めるような素晴らしさ。綺麗な珊瑚のような唇は、つやつやと輝いていて魅力的だった。
「夜会が始まってしまう前に一度お会いしたいと思い、恥ずかしくもお伺いさせていただきましたの。……どうかわたくしを、はしたない女と思わないでくださいましね」
そう言って淡く微笑む様は、まさに物語に出てきそうな深窓の姫君。
清らかに美しいのに、なんだか男心をワシッと掴みそうなほど妖しい色香があった。

……なんとゆーか……宿のおねーちゃん達とイイ勝負しそうな『仕草』だ……

「あ……え……」

その美女に真っ直ぐに見つめられて、アルトリートが愕然とした顔で声をつまらせている。

美女は微笑みを深め、しゃなりしゃなりと優雅にアルトリートに歩み寄った。

思わずアルトリートの体がじりじり逃げかけるのに、素早く伸びたしなやかな手が相手の腕を優雅に掴む。

……いや、優雅なのは仕草だけだ。

掴んだ瞬間、アルの腕がミシッと鳴ったのをあたしは確かに聞いていた。

「ねぇ、アル。そんな顔をなさらないで」

おそらく痛みで顔を引きつらせたアルトリートに、美女は淡く儚い微笑。

「あなたに見合う姿になろうと、頑張ってみましたの。……何かお言葉をいただけないかしら？」

わずかに身をかがめて上目遣い。

アウグスタに今一歩届かないもののビックでバイーンな胸の谷間が、アルトリートの眼下にドンと強調されていた。

「わたくしはそんなに……見窄らしいかしら……？」

悲しそうに、寂しそうに、そう言って微笑む美女に、複雑怪奇な顔をしていたアルトリートが「そうじゃねェけど……」と魂を振り絞るような声でぼやいた。

途端、美女が華やかに微笑んでアルトリートにしなだれかかる。

「あぁ、アル！　あなたのその言葉は、わたくしに寄せられる幾千幾万の美辞麗句に勝りましてよ！　今日はお義母様もあなたのためにお時間をとってくださるそうなの。ぜひ会ってくださいましね？」

「お……おぉ……」

「約束でしてよ？　破ったら承知いたしませんわよ？」

悪戯っぽい表情を浮かべて、美女はしなやかにアルトリートの腕に自分の腕をからめる。そのタイミングや仕草といったら、自然で滑らかで美しく、あたしがやったらレメクと変な踊りになるというのに、この差はなんだろーかと思わずにいられなかった。

……今度、極意を聞いておこう。

「……あら。そこにいらっしゃるのはレンフォードの方？」

今更のようにクリンクリンさんに視線を向けて、美女は口元を羽扇子で隠す。

……いつのまに取り出して広げてたんだ？　あの羽扇子は……

「あ、あの……アル、の……パートナーの方ですか？」

「えぇ」

言って、美女は婉然と微笑む。

その輝く空色の瞳に強い光をたたえて。

「ナスティア王国第十王女、アデライーデと申します」

「……お見事です」

半ば以上アディ姫に追いはらわれるようにしてクリンクリンさんが退出した後、レメクが深いため息と同時にそう言った。

受けたアディ姫は、優雅に微笑む。

「たいしたことはしていませんわ、クラウドール卿」

その仕草もまた『王女』に相応しい美しさと威厳をかねそなえたもの。

が。

「ってゆーか、あー！　すっとした！！」

直後にガバッと大口を開けて、彼女はあたしの知るアディ姫らしい声をあげた。

その様子に、あたしとフェリ姫はパッと駆け寄る。

「アディ姉様！　素敵でしたわ！」

「おねーさま、なんで変身してるの！？」

「うっふっふー。てゆか末姫ちゃん、変身て何、変身て」
へんっしーんっ！　とポーズを決めてから、あたしはビシッとアディ姫の輝く金髪を指し示す。
「髪の毛が金色になってるのです！」
「あー……」
納得したのか結い上げた髪に手をあてて、アディ姫は軽く肩を竦めた。
「なんてゆーか、金髪に青い目っていうのが、うちの『王女』の特徴なのよね。別に揃える必要ないんだけどさー、こうやってれば素の姿だと楽じゃない？　ほら、街中歩いたって『王女様だ！』なーんてバレないしさ」
「え。じゃあ、そのために髪の毛取り替えたの？」
あたしの言葉に、アディ姫は「あっはっは」と大笑い。
「染めただけよー、染め粉、染め粉。最近のはスゴイわよぉ。こんなにキンキラキンになるんだから！　といっても、その分、髪の毛痛んじゃうからイヤなんだけどねー。……落とすと最初からやり直しだから、あと三日ぐらいこの髪でないといけないし。ムレて痒くなるのがイヤよねぇ」
……なんか百年の恋も冷めそうな言動だ。
思わずチラとアルトリートを見ると、彼は不気味なものを見るような目でまじまじとアディ姫を見ていた。
「ん？　なにアルルン」
「その呼び方ヤメロ。てゆか、おまえ、どこが金髪だ？」
「おろ？」
アルトリートの声に、アディ姫はキョトンとした顔。
だが、誰に何を聞くより早く、ニヤリと唇を歪めて言った。
「あっはー。龍眼にゃ染め粉は効かないかぁ」
「！」
あっさりとリューガンを見破られて、アルトリートがギョッと退く。その腕にからまったまま、アディ姫はニヤニヤと笑み崩れた。

「最初っからずーっと引っかかってたのよねェ。君の態度はちょっと普通じゃなかったし、庭に行った時にわずかに聞こえた会話とかね～」

「……ッ」

アディ姫の含みありげな声に何を感じたのか、アルトリートが顔を引きつらせた。

レメクとケニードも一瞬で顔を引き締め――ナゼかフェリ姫が青い顔で進み出る。

「……アディお義姉さま」

「ん？　なぁに？」

フェリ姫はそれ以上の言葉を紡がない。

ただ静かな表情で、ゆっくりと首を横に振った。

まるで、言うな、とでも言うように。

「……んん。……ま、あたしとしちゃ、誰が誰だろーとどーでもいいわけなんだけどね？」

ニヤッと小悪魔のような笑みを浮かべて、アディ姫はそう言った。

未だに腕を組んだ（というか組まされている）アルトリートをグイッと見上げて、ニヤリと笑みを深める。

「あたしはさー、真実を知りたいだけであって、知った真実を誰かに言いたいわけじゃないのよねー。だってさ、せっかく得たとっておきの真実を、何の苦労もしてない連中に渡すのってシャクじゃない」

なんとなくアディ姫らしく感じるその言葉に、その場の全員が軽く苦笑する。

一同を代表して、軽く嘆息をついたレメクが言葉を零した。

「……あなたのように、一で百を察知する人はそうそういませんしね」

「お！　侯爵様ってばイイコトゆった！　んふふ。あったしは褒められるとグングン育つのよこの胸のよーに！」

その立派な胸をバインバインと揺らせて、アディ姫は心底嬉しそ

うな顔をアルトリートに向けた。
　揺れる凶器に思わず目がいっていたらしいアルトリートは、見上げられて慌てて顔を背ける。
「だから、ま、心配しなさんなって。侯爵からも言われてるし、お義母さまも心配してるから、君はあたしが守ってあげるわ。なんたって、借りのある二人からそれぞれ頼まれちゃったわけだからね！」
　……借りってなんだろーか？
　首を傾げるあたしの前で、レメクが小さく苦笑する。
　なんか貸しでもあるのだろーか？　アディ姫に。
「ま！　まずは王宮のこわ～い夜会を上手く切り抜けてあげちゃいましょ！　あたしの言うとおり振る舞ってくれれば、完璧……は無理でも、ほどほどにこなしてあげちゃうわよぅ？　全！　なんたって、逃げ場所もちゃんと確保してるし、準備は万！　んまー、一つだけ不備があるけど、そこさえクリアすれば無問題よ！」
　綺麗な手でグッと握り拳をつくるアディ姫に、相変わらず引っつかれて複雑な顔のアルトリートがぼやく。
「……つーか、兄貴の言ってたパートナーっておまえかよ？」
「そう！」
「……なんで引き受けてんだよ？」
「面白そうだから！」
　なんかアルトリートがガックリ肩を落とした。
　そのガッカリの意味は何だろーか？
「まぁ……アデライーデ姫がパートナーを務めてくれるなら安全だね。王宮で一二を争う智者だし、すごく頼りがいのある女性だから」
　感心したように言うケニードに、アディ姫は鮮やかに笑って投げキッス。
「さっすがアロック男爵の跡取りさん！　女性を褒めることに関しては右に出る者がいない達人だわ！」
「……宝飾技師よりそっちが有名なのかよ……」
「どっちもよ！　……というかねぇ、なんか大怪我したとかなんと

か噂がめぐってたけど、あれれ、アレってばデマだったのかしらん？」

さすがに情報通なアディ姫は、目をキラリンと光らせてケニードを見る。

ぐっ、とつまった隣のアルトリートに気づいて、彼女はにんまりと微笑んだ。

「ま。そのあたりは君からたっぷりねっとり聞かせてもらいましょ！」

「やな聞かせ方だなオイ！」

「時間はあるんだし、いーじゃなーい。それに、アルルン知らないの？　ニコニコ笑顔でひそひそ話してたら、ハタからはコイバナに見えるっていうミラクルが発動するのよ？」

「しらねぇ！　つーかアルルンは本気でヤメロ！」

「じゃー名前教えなさいな」

「だから……！」

苛立ったように名前を言いかけたアルトリートの唇に、綺麗な指がチョンと触れる。

ギョッとなって身を引く彼の前で、人差し指をピンと立てたアディ姫が鮮やかに微笑んだ。

「そっちの名前じゃナーイ。……もらったでしょ？　あなただけの名前」

「……なんだよ、それ」

ちょっと顔を赤くしながら、じりじりとアルトリートが体を離そうとする。

それを一息で引っ張り戻して、アディ姫は大きな胸を押しつぶすようにしてアルトリートに密着する。

「もらったでしょ？　教会に行ったと・き・に！」

「なっ……おっ……ちょっ……」

むっちりとした胸が二人の間でモッツリと潰れている。

あたしとフェリ姫はイイ教材だとじっくり二人の様子を見上げて

いたのだが、ナゼか音もなく背後にまわったレメクに目をふさがれてしまった。

……エー……お手本がー……

「会ったでしょ？　猊下に」

「い、いや、俺は……！」

「猊下に会った、でしょ？」

「あ、会った、つか、俺は、すれ違った程度で……！」

レメクの手と戦うあたしの視界は真っ黒クロクロ。

じたばたしながらなんとかチョロ見できたのは、アディ姫がなにやら「勝ったゼ」的なイイ笑顔でアルトリートを引っ張り出したところからだ。

「んふふ。そこが唯一つの不備だったのよ。んふっふふー、さーぁもらった名前をおしえなさーい。そしてあたし達はラブラブ腕組みでクネクネ夜会を練り歩くわよ！」

「キモイ！　普通にキモイぞその言動！　つーかなんで俺を引っ張って行く！？」

「パートナーだからじゃなーイ。ほらほら名前言っちゃいな。言っちゃいなヨ！」

ぐいぐいアルトリートを引きずっていくアディ姫に、見送り一同がなにやら唖然とした顔。

一人必死な形相のアルトリートは、救いを求めるようにレメクを見て、

「……行ってらっしゃい」

非情にも見送られてしまった。

「ひ、ひどくねェか！？　つかひどくねェか！？」

「大丈夫です。他の方にからまれるよりは身の危険は少ないです」

「フォローになってねェ！」

叫ぶアルトリートに、おほっほーと不思議な笑いをあげながら、アディ姫がイイ笑顔であたし達に手をふる。

なんとなくそれに手を振り返すあたし達の前で、アディ姫は最後

の抵抗のように戸口に張り付いたアルトリートをベリッと剥がして持っていった。
……なんかすごい怪力だ。
「やぁねぇ、お医者様にかかるちっちゃい子みたいになっちゃってー」
「降ろせーっ！　つかおまえ！　なんだその怪力は！」
「アルルンってばかわいー」
「アルルンはやめろ！　本当にやめろ！」
「だから名前言っちゃいなヨ～。教皇サマからせっかくもらったんだからさ～。じゃなきゃアルルンよ～」
「『アルフレッド』だ！」
なんか絶叫めいた声が聞こえてくる。
その言葉にレメクが「おや」と呟きそうな表情になり、その直後に苦笑した。
「……なるほど、アルフレッドですか」
……なにやらウレシソーな顔なのはナゼでしょう？
「あれを聞くと、なんというか、確定だなぁって思いますよね」
「というか、バレバレですのよ。騙してるなんて、冗談にしか思えませんわ」
レメクと同じような苦笑を浮かべるケニードに、呆れ顔で言うフェリ姫。
メイドさん部隊もなんともいえない微苦笑を浮かべていて、あたしは一人「？」を飛ばしながらそんな一同を見渡した。
「なにが『なるほど』で、なにが『確定』なの？」
あたしの問いに、レメク以外の全員がキョトンとする。
唯一の例外であるレメクは、ただ微苦笑を浮かべてあたしに歩み寄った。
「あなたは気づいてはいなかったんですね」
手を差し伸べられたので、遠慮無くピョンと飛びつく。
抱っこされ、目の前にある素敵なお顔をじっくり見つめて、あた

しは首を傾げた。
「だから、何が？」
「アルフレッドのことですよ」
苦笑を深めて、レメクは言う。
あたしはさらに首を傾げた。
そんなあたしの頭を撫でて、レメクは言葉を紡ぐ。
「あなたに『ステラ』の名を贈ったように、猊下は王族と認めた相手にのみ名を贈ります」
どこか暖かくて、優しい声で。
「名を贈られるのは、王族の直系、もしくはそれに準ずると認められた証」
そう、つまり――――
「『彼』が本当の『クリストフ』です」

１４　輝く宝石のごとき

アルトリートが、本物のクリストフ。
そう言われてあたしがとった反応は、「ふーん」という我ながら実にそっけないものだった。
……なんかレメクがちょっと残念そーな顔をしている。
「……驚きませんね」
「驚くようなことじゃないもん」
あっさりと言って、あたしは胸を張ってみせた。
「あたしが知ってるのは今のアルで、アルはアルのまま変わらないんだから、今更名前がどーとか言われてもどーでもいいもの」
えへんぷぃ。
「……名前についてくる背景は、あんまりどーでもよくないと思うよ？　ベル」
なんかケニードが半笑いで突っ込んできた。
そちらを振り返って、あたしは目をパチクリさせる。
「アルがクリストフなのよね？」
「うん」
「ええ」
「そうですわ」
三者三様に頷いて、彼等はそろってあたしを見つめる。
あたしはそんな三人を順繰りに見つめ……
……
「あれ？　じゃー、アルがオーテイデンカなの？」
「理解していませんでしたの！？」
あたしの声に、フェリ姫が悲鳴じみた声で叫んだ。
いや、まぁ、そーいやそんな装飾品みたいな名称もくっついてた

んだなぁ、と今更ながらに思い出しましたようふふふ？
「いやだって、ほら、王様の弟だろーと前の王様の妹の子だろーと、結局は王様の血筋だからどっちでも似たようなもんかと」
「なんですのその十把一絡げは！？　王の弟と、前王女の息子では全く立場が違いましてよ！？」
「えー……どのみち王様の一族で御貴族様には違いないもん」
「～～～ッ！！」
なにやら頭を抱えてしまったフェリ姫に、レメクが非常に沈痛な顔になる。
「……申し訳ありません、フェリシエーヌ姫。私の教育不足です……」
「……ッ！　いいえっ！　これはっワタクシの教育不足でもありますわッ！！　王女として、なんとしても完璧にしごかなくてはッ！！」
う〝っ…！
なんかスゴイ殺意がこっちに！
「ねぇ、ベル。王位継承権ってわかる？」
思わずビクッとなるあたしに、ケニードが近くでかがみ込みながら問うてきた。
「えぇと……次の王様になる権利よね？」
「そう。その権利は、王家……つまり、女帝ナスティアの直系であるアルヴァストゥアル家の人間だけが有しているんだ」
うんうん。
「アル……えっと、アルフレッドの御名をもらった本物の『クリストフ』殿下は、その直系であるアルヴァストゥアル家。そして実際の『アルトリート』は、アルヴァストゥアル家でなくレンフォード家の私生児。……確かにどちらも王家の血は引いてるけど、この差はとんでもなく大きいよ」
「シーゼルと一緒で、元王女様の血筋でも王位継承権は無いから？」
フェリ姫の婚約者でもあるシーゼルの名を出すと、ケニードはほ

んの少しだけ苦笑して首を横に振った。
「それどころか、正嫡でも無いから『アルトリート』にはレンフォード家を継ぐ資格が無いんだ。どれほど母親の元の地位が高かろうと、公爵家を継げるのは公爵の血筋の人間だからね」
……つまり、ある意味、シーゼルよりも『下』。
「アルヴァストゥアル家の人間として認められていないから、『アルトリート』は王家の血は入っていても王族とは認められない。まぁ、両親とも血筋が血筋だから、適当な爵位をもらってどこかで暮らす、っていうパターンもあるだろうけど……少なくとも、前王の子である『クリストフ』の立場とは比べものにならないだろうね。猊下から御名をもらったってことは、王族として正式に認められたに等しいから」
「王族の承認には、王と教皇の両方の認可がいりますからね」
ケニードの言葉を受け取って、レメクが嘆息混じりに言う。
「陛下はもともと、彼の王族入りには肯定的ですから……」
アルトリート……でなく、本物のクリストフ……てゆか……
えぇいややこしい！
偽アルトリートことアルフレッドのことを気に入っていたはずなのに、なんかレメクは憂鬱そうだ。
「おじ様は、アルが王弟だとイヤなの？」
問うたあたしに、レメクは僅かに目を瞠ってから苦笑。
「違いますよ。……今、『王弟（クリストフ）』の名を我が物顔で使っているのは、本物の彼ではありませんからね」
……あ！
言わんとすることに気づいて、あたしはようやく慌てた。
「大変じゃない！」
「……ええ。大変なんですよ、本当に」
「大事だわ！」
「……そうですね。……本気でピンときていなかったんですね、ベル」

あんっ……おじ様の目が遠いっ。
「だ、だって、アルはアルであればそれでいいんだもん！　ね！？」
同意を求めて言ったというのに、ナゼかレメクは沈黙した。
……んを？
「おじ様？」
微妙な顔で目線をずらすレメクに、あたしは大きく首を傾げる。
レメクの横でケニードがなんとも言えない笑みを浮かべていた。
「さすがに……それは妬けるよ？　ベル」
「？？？」
意味がわからず、あたしはさらにキョトンと首を傾げる。
一体、なにをジェラるというのだろうか？
てゆか、誰が誰にジェラシーなのだ？
「……まぁ、それはともかくとして……」
ハテナ？　をいっぱい飛ばしているあたしに、フェリ姫は半分ぐらい苦笑の入った笑みをこぼす。
そうして、ゆっくりとした口調で言った。
「つまり、『王族』でない者が『王族の名』を騙り、よりにもよって『王弟』として世間に認められようとしている、ということですわ。……今、まさに、この王宮で」
レメクもケニードも、その言葉に顔を引き締め、唇を引き結んだ。
あたしも一生懸命その表情を真似る。
「タイヘンなことです」
「……ナゼかしら。あなたを見ていると、なんだかそうでもないような気がしてしまいますわ」
……どーゆー意味だ？
真剣に眉根を寄せるあたしに、フェリ姫は視線を外してゴホンゴホン。
軽く腕を組んだレメクが、苦笑しながら近くのカウチにもたれかかった。
「まぁ、ベルはともかく……実際には、極めて深刻な事態と言える

でしょう」
……だから、どーゆー意味だ？
「現状を把握している人って、どれぐらいいるんでしょう？」
「ほとんどいないでしょうね。……と言うより、居てもらっては困る、というのが本当のところですが」
苦笑じみた笑みを浮かべるレメクに、確かに、とケニードも苦笑する。
嘆息をついたフェリ姫は、あたしの傍に来ると無言であたしを引っ張ってレメクのもたれかかっているカウチに座った。
「醜聞ですわよね。こんなことが他国に知れたら、どれだけ侮辱されるかわかりませんわ」
「威信も地に落ちますね。ただでさえ前の時代がヒドイ状態だったのに……」
「前王の時代、ナスティアは他国からずいぶんと侮られましたからね。陛下の御代になってかなり持ち直しましたが……ここに来て、妹君まで祟りますか……」
「問題は、誰が首謀者か、ってことですよね」
レメクの隣に並んで、ケニードが考える顔になる。
あたしは立ってる大人二人を見比べて目をパチクリさせた。
「首謀者、って？」
「簡単な話、前王の血を引く『クリストフ』という人間と、元王女の連れ子『アルトリート』を取り替えようって企んだのが、誰か、っていうこと。あとは、それに協力しているのが誰なのか、ということなんですが……」
「協力者、と思しき方々には目星をつけていますわ」
難しい顔のケニードに、フェリ姫が静かな表情で言う。
大人二人の視線が集まるのを待って、彼女はわずかに自嘲めいた苦笑を見せた。
「ただ、その方々が全てをご承知で協力しているのかどうかまでは判明していませんの。……シーゼルが調べていたようなのですけれ

ど、朝に別れて以来、姿が見えなくて……」
ふと不機嫌そうな顔のフェリ姫の顔が思い浮かんで、あたしは「あぁ」と思わず呟いてしまった。
「？　ベル、何か知っていますの？」
「みょ？　いぁ、偽クリストフがシーゼルの名前を出した時、お義姉さま、そーいや不機嫌そうな顔したなぁ、って思って」
「なっ……！」
何故か真っ赤になったフェリ姫に、あたしはウンウンと大きく頷く。
「おねーさま、シーゼルに会えなくてガッカリだったからなんですな！」
「ち、違いますわよ！？　あのお馬鹿さんがまたきっと他の女性のところで現を抜かしておいでだろうから、それでワタクシ機嫌が……って、ち、違いましてよ！？　大事な時期だというのに、姿が見えないから……！」
「……おねーしゃま……語るに落ちるというやつなのです」
あたしのスバラシイ名言に、フェリ姫は真っ赤な顔で口をパクパクしはじめる。
それを気の毒そうに見やって、ケニードはふと眉をひそめた。
「……というか、伯爵が今のタイミングで姿を消したというのは……少し、気になりますね」
「！」
その瞬間、嫌な言葉を聞いたとばかりに、フェリ姫がギョッとケニードを振り仰いだ。
ケニードは慌てて作り笑いを浮かべる。
「い、いえ、ことがレンフォード公爵家の内部に関わることでしたから、気になっただけです。伯爵が関与する可能性は低いですし……！」
「……関与せずとも、関係はしてくるでしょうね」
「クラウドール卿……！」

せっかくのフォローをぶち壊しにするレメクの発言に、ケニードは悲鳴じみた声を上げる。

レメクは何処吹く風といった感じに言葉を続けた。

「伯爵は、今回の企みについては何も知らなかったことでしょう。伯爵が計画に関わっていたとすれば、もっと時間をかけ、関係者一同に完璧に役割を叩き込んでから行動しているはずです。アルフレッドの言動と、本物のアルトリートの態度を見れば、計画が杜撰で稚拙であることがよく分かるでしょう？」

意外とシーゼルに対して高評価であるレメクの言に、フェリ姫も真剣な顔で頷く。

「……ワタクシもそう思いますわ。シーゼルは本当にこの件には関わっていない、と。……けれど……それならどうして、シーゼルの姿が見あたらなくなってしまったのでしょう？」

「……心当たりはないのですか？」

レメクの声に、フェリ姫は悲痛な顔で俯いてしまう。

それは、無い、というより、むしろ……

「……もしかして、お義姉さま……シーゼルは、偽クリストフとか、レンフォードの家の人と会ってたの？」

「！」

途端、キュッと唇を噛んだフェリ姫に、あたしは思わず口をパクンと閉めてしまった。

……なるほど、その後から姿が見えないのだな……シーゼルは。

「……会ったと思しき相手は……もしかして、公爵夫人ですか？」

フェリ姫は俯いたまま小さく頷く。

レメクはわずかに目を伏せ、嘆息をついた。

「ご母堂である公爵夫人がお相手でしたら、会っていたとしても何も不自然ではありませんよ。……ただ……お会いした後で姿が見えないのでしたら、巻き込まれた可能性がありますが」

「……おじ様……」

さらに俯いてしまったフェリ姫を見て、あたしはレメクをジッと

見上げる。
　レメクがわずかに怯んで、ゴホン、と嘘くさい咳払いを一つした。
「実の親子のうえ、伯爵は正嫡で、なおかつ次期公爵です。何かあったとしても、手荒な扱いはされません。……ただ、真っ直ぐな方ですから、もし公爵夫人が今回の首謀者だった場合、事の次第を正そうとして監禁される可能性が……」
「……おじしゃま……」
　ますます俯いてしまったフェリ姫に、あたしは更にジッとレメクを見上げた。
　何故かレメクがうろうろ視線を彷徨わせはじめる。
「その……可能性の問題です。限りなく起こりうるであろう事態をですね……」
　じ～。
「あげておかなくては……方針が定まらないと、全てが非効率になると言うか……」
　じ～～。
「ですから……なぜ私が責められるような目で見られないといけないんです！？」
　うぉ。レメクが逆ギレした。
　珍しい現象に、あたしは目をパチクリさせる。
　そうして、エイヤッと飛びかかった。
「言わんとすることはわかるよーでわからないよーなですが、おじ様はもうちょっと乙女心をくまないとイカンのです！」
「言おうとしている事の理解は大事ですよ！？　そして、ベル！　ドレスが台無しになるような飛びつき方はやめなさい！」
「ドレスよりお義姉さまの気持ちのほうが大事なのです！」
　がっぷりかぶりついているあたしに、レメクはドレスを気遣ってか控えめにエッチラオッチラ。
　しかし以前と違って体力が底辺なレメクは、すぐにぐったりと諦めた。

「……とりあえず、伯爵についてはこちらも手を打ちましょう。女官長や宰相閣下にもお力をお借りすれば、何らかの情報は得られるはずです」

「てゆか、お義父さまの力を借りたら早いんじゃないの？」

あたしの言葉に、レメクは困ったような微苦笑を浮かべた。

「義父は、よほどのことが無い限り他者のためには動きませんよ。あの方は、厳密にはナスティア国人でなく、陛下の契約者ですから」

……？

どういう意味だろうか？

首を傾げるあたしに、レメクは苦笑を深める。

「義父の『大法官』の地位にしても、陛下の傍に在るために持っているだけのものです。というのも、昔のあの方はただの素性の知れない謎のヒトでしたから」

……それは今も変わらないよーな気がするのだが……

「さすがにそんな状態のヒトに陛下の……まぁ、当時は王女殿下でいらっしゃいましたが……その傍にいられるのは色々と体裁が悪い、という理由で押しつけられたのがあの地位です」

……いいのか、大法官の地位がそんなんで……

「そもそもあのヒトに国のために何かをしようという気持ちは皆無です。ただ、陛下のためになることなら何かと助言をくれたりしますし、知識量に関しては間違いなく王国随一でしょう。そのため、何か困った事態が起こるたびに知恵を借りようとする人はいます」

「……その場合、貸してくれないの？」

恐る恐る尋ねたあたしに、レメクはキッパリと言いきる。

「貸してもらえます。ですが、高くつきます。中には人生を狂わされた人もいます」

……お義父さま……

「そういうヒトですから、生半可な考えでは手を借りれません。……それに、ベル、あなたも薄々は気づいているでしょうが、あのヒトは普通の人とは根本的に存在が違います。……そういう相手を軽

々しく頼ってはいけないのですよ。本来なら、こちら側に関わってはいけないヒトでしょうから」

レメクの言葉に、あたしは眉をちょっぴり下げた。

レメクの言おうとしている事はなんとなく分かる。

分かるのだが……

「……でも、それは……ちょっと寂しいのです」

「……」

「お義父さまも、ちゃんとそこにいるのです。いるのに、いっさい頼りにされなかったら、寂しいと思うのです」

レメクは答えない。

ただ、静かな目であたしをジッと見る。

それを見返して、あたしはグッとお腹に力を込めて言った。

「頼りすぎるのと、全然頼らないのとは、意味が違うと思うのです。駄目なときは駄目って言ってもらえればいいし、手伝ってくれるのなら今度何かの時にこっちが手伝わせてもらえればいいのです」

静かな眼差しのままゆっくりと瞬きし、レメクはホロリと苦笑した。

「……なるほど」

わずかに自嘲の混じったその笑みに、あたしはギュムッと唇を引き結ぶ。

そんなあたしの頭を軽く撫でて、レメクは深い声を落とした。

「……大きな力に頼りすぎてはいけないと、そう教えられてきましたが……そこに居るのに居ない者のように扱うこともまた、相手には失礼なのかもしれませんね……」

「あい！」

あたしは大きく頷き、頭を撫でてくれるレメクの手を握って言った。

「そーゆーのはイジメって言うのです！」

「虐め……ですか」

苦笑を深めて、レメクは目を伏せた。

「今度……義父に謝らないといけませんね」
「あい！　そして手伝ってもらうのです！」
力一杯主張すると、何故だか微妙な顔をされる。
「……なにか、高くつきそうな気がしますが」
「ちょっとぐらい高くてもいいのです。払えないのならあたしが手伝ってあげるのですよ？」
「いえ……なにか……もっと大変な事になりそうなので遠慮します」
……どーゆー意味だ。
さすがに胡乱な目でジーッと見上げると、レメクはあたしからサッと視線を外してフェリ姫のほうを見た。
あたし達のやり取りの間に復活したフェリ姫は、レメクの視線にちょっとだけ笑って小首を傾げる。
そうして、レメクが何かを言うよりも前に口を開いた。
「何も……おっしゃらなくても大丈夫ですわ」
「……姫君」
「あなた様が、通常考えうる中で、最も高い可能性のものを挙げてらっしゃるのだと……そう、分かっておりますもの。ただ……あの方はああみえて、お身内の方の事になると情緒不安定になるものですから……」
「……ご心配なのですね」
ため息にも似た嘆息を零して、レメクは言う。
フェリ姫は頷き、あたしを見てちょっと笑った。
「ベル。ありがとう。心を砕いてくださって。……でも、心配だからと言って可能性に目を瞑っていては、大事なものを失いかねませんもの。……ワタクシが掴んだ情報によれば、公爵夫人はお昼を少し回った頃に王都の街屋敷においでになったらしいですわ。その当時、王宮にはまだ連絡は来ておりませんでしたけれど……シーゼルは独自の情報網を持っておりますから、気づいて問いただしに行ったのでしょうね。ワタクシがそうしようとしたように……」
そして、公爵夫人に会って……

「……それ以降の足取りが分からないということは、公爵家の街屋敷に居るのだと考えるべきなのですが、屋敷の方では『若君はおいでになっていません』と言うばかり。……とはいえ、あそこは王都でもかなり警備の厳しい屋敷ですし、公爵夫人にはワタクシの部下は全て面が割れていますから、警備の者を懐柔することも難しいのです」

そう言って嘆息をつくフェリ姫に、あたしは首を傾げた。

「お義姉さま。実際にお屋敷に行ってみたのですか？」

「え？　……いいえ。ワタクシ自身は行っておりませんわ。下手に動くと、身動きがとれなくなりますから」

キョトンとした顔のフェリ姫に、あたしは目をキラリと光らせて言った。

「でも、お義姉様はシーゼルの婚約者なのです」

そう。

それは強みだ。

少なくともあたしはそう思う。

誰もが認める『確固たる関係』というのは、いつだって強力な盾になり、剣になるのだ。

「婚約者のおかーさんに挨拶に行ったって、全然怪しくないのです。いつものように気迫込めて『ごきげんよう！』と挨拶に行けばいいのです。怖いのなら、あたしがついて行ってあげるのですよ！」

ドンと胸を叩いて立候補すると、何故かレメクが慌ててあたしの体を抱きかかえた。

「ベル！　相手は公爵夫人ですよ!?　あなたの論法や特殊なやり方が通じる相手ではありません！」

……マテ。レメク。

なんですか、その、あたしの特殊なやり方っつーのは……？

思いきり胡乱な目になったというのに、レメクは気づきもしないのか、一生懸命な顔のままで言う。

「だいたい、あなたは自分自身の危機管理ができていません！　公

爵夫人はあなたが最も苦手とするであろう、王宮の闇を現したような女性ですよ!?　下手に近寄れば、どんな傷をつけられるか分かりません！」

なんかスゴイ失礼なことを言ってるレメクに、さすがのフェリ姫も呆気にとられた顔になっていた。

ちなみにケニードはといえば、なんかスゴイ勢いで写真を撮りまくっている。

……さっきまで半死半生だったてのに、そんなに複写紋様術を使ってダイジョーブなのだろーか？

「そもそも、ピンときていないのかもしれませんが、あの方がわざわざこの時期においでになることの不自然さを考えても、十中八九、あなたと私の婚約については反対意見を持っているはずです」

そーいや、フェリ姫達もそれっぽいこと言ってたな……

まぁ、フツーに考えて賛成されるはずもない話だから、さして気にしてはいなかったのだが。

「王族以外の者が王族になることについて、一番反対をしているのは彼女です。おそらく、あなたをひどい言葉で侮辱することでしょう。そんな人の所にあなたを向かわせるなど、とんでもない！　いいですか？　ベル。世の中には、決して相容れないが故に近づいてはいけない人、というのが存在するのです。互いに悪い影響だけを与えあってしまう間柄なら、会わないほうがいいんです」

真っ直ぐにあたしを見て言う相手に、あたしもジッと熱い視線を注いだ。

レメクがこんなに真剣に言うのだから、おそらく、あたしが想像する以上に公爵夫人は危険な人なのだろう。

確かに、かつて最下層にいたあたしは知っている。

決して人扱いしてくれず、命すらいとも簡単に奪っていく人達がいることを。

そう――まるでただゴミを片づけているかのように……

（……公爵夫人って人も……）

そういう人なのだろうか？

ただ、汚い、と。たったそれだけの理由で、あたし達を死ぬまで殴らせていた、昔会った大貴族のような……

あたしの頭に理解が染みこんだのを確認して、レメクはあたしをギュッと抱きしめてくれた。

「……あなたが悪いのではありません。それがどの場所であろうとも、生まれて生きることに悪いことなどあるはずがないんです。精一杯生きるあなた方を貶める人に、あなたが傷つけられる必要はありません」

……レメクは優しい。

けれど彼の言葉のいくつかが、現実では実現されにくいものであることをあたしは知っていた。

人としての理想だ、と言うつもりはない。たぶん、レメクは本当にそう思っているのだろうし、実際、そうあるべきなのだと思う。

けれどそれは……優しい心をもった、真心のある人達の世界なのだ。

現実の世界はいつだって弱者に厳しく、レメクの言葉のように労りに満ちてはいない。

人としての在り方の中で、彼の言葉ほど美しく優しいものは無いけれど、それは世界に満ちた悪意と狭量な心の中で、輝く宝石のような人達の在り方なのだ。

そう、例えば、レメクやケニードやフェリ姫達のような。

「……おじ様。あたし、ちゃんと分かってる」

優しい人の胸に頬ずりして、あたしはペチンと相手の肩を軽く叩いた。

大丈夫、と伝えるために。

「優しい人だけじゃないことも、意地悪な人だけじゃないことも……なかには、本当に危険な人もいるってことも」

かつてあたしの友を、仲間を、不条理に痛めつけ、命を奪ってい

った人達のように。
「……避けられることなら、避けておかないといけないこともいっぱいあるんだってことも」
「……ベル……」
真剣にあたしを案じてくれているのがわかるから、あたしはニッコリと笑って心配性のレメクに言った。
「危ない人には近づかないの！　……でもね、どうしても近づかなきゃいけなくなったときは、ごめんなさいなのよ？」
「……そういうときは、できるだけ逃げてください」
「世の中には、逃げられない事態ってゆーのもあるのです」
てゆか、だいたいそーゆーので危ない目にあったりするのだが……
こそっと上目遣いに相手を見ると、レメクはなんとも微妙な顔であたしを見つめ、目を瞑って天井を仰いでしまった。
なにかイロイロなものを無理やり納得しよーとしている気配がする。
「……できるだけ、逃げてくれますか？」
妥協点は見つかったのか、ややあってそう言ってくるレメクに、あたしは力一杯頷いた。
「もちろんなのです！」
「……信じます」
……信じられてしまった！
思わずガビンッと硬直すると、途端にレメクの目が冷たくなった。
「……なぜそこで『しまった』と言わんばかりの顔になるのですか」
「えっ、そっ、う、嘘じゃないのですよ!?　でも、ほら、往々にして思うよーにいかないってゆーのが世の中の常なのですっ」
「……そういう言葉をいったいどこで習ってくるんでしょうね、あなたは……」
呆れ半分諦め混じりに呟いて、レメクはあたしの頭にこつんと顎を乗せた。
あたしを包むあったかい匂いに、無意識にぴすぴすと鼻を鳴らす。

鼓動と一緒に声の振動が伝わるような、耳に心地よい音があたしを優しく撫でてくれた。
「できるだけ自重してください。……あなたに何かあれば、私も生きてはいられませんから」
思わずうっとりしていて、レメクの台詞を聞き逃してしまった。
なにかすごくもったいないことをした気がします。
とてもとてももったいない何かがあったような気がします！
「……ベル……」
なんかフェリ姫からすごーく窘め系の波動が送られてきている気もします！！
「さて。そろそろ会場に向かうといたしましょう。閣下達に伯爵のことを頼まなくてはいけませんし」
今まであった暖かくて甘い空気など無かったかのように、レメクはあっさりとあたしをカウチの上に降ろした。
慌てて飛びつこうとするあたしをメッと窘めて、実に悠然と歩いていく。
うぁああん！
繰り返しは無し！？　繰り返しは無いの！？
「……照れてるんだねぇ……」
半泣きで追いかけるあたしの後ろで、ケニードがそう小声で呟いていた。

※　※　※

王宮は伏魔殿であると、そう言われたのはつい数日前のことだった。
あの当時は初めての夜会にドキドキしていて、言葉の意味をあんまり理解していなかったように思う。
今だってドキドキしているのは変わらないし、変な汗が背中に浮かんでいるのも同じなのだが、少しだけ落ち着いて周りを見ること

ができた。
それはたぶん、前と違って、王宮で知り合った優しくて頼もしい人達が沢山いるからだろう。
「さ。では、ワタクシはワタクシの出来ることをしてまいりますわね」
大会場前の控えの間で、その頼もしいフェリ姫はあたし達を見送ってくれた。
パートナーであるシーゼルがいないため、彼女は会場に入れないのだ。
シーゼルのことが心配だろうに、彼女は気丈に笑ってみせた。
「シーゼルのことは気にしないでくださいませ。もしかすると、いつものようにどこかのご令嬢と楽しく話をしているのかもしれませんもの。ね？」
自分自身全く信じてないだろうことを言って、あたし達を心配させまいとする彼女に、あたしはギュッと抱きついた。
控えの間にいる誰よりも輝いている姫君が、会場に入れないというのが悔しい。
けれど、たとえここで誰かからパートナーを申し出られたとしても、彼女は受けはしないだろう。
……たぶんそれが、たった一人を思うということなのだ。
「……がんばるのですよ、ベル。ワタクシは傍にいられませんけれど……あなたが素敵な姫君として振る舞ってくれることを信じていますわ」
「……あい」
すんすん鼻を鳴らして、あたしはフェリ姫に頬ずりした。
フェリ姫がくすくす笑いながらあたしの頭を撫でてくれる。
「それと、大事な髪飾りをしているのですから、あまり無茶な振る舞いをしてはいけませんよ」
「あい」
「……クラウドール卿」

フェリ姫はレメクを仰ぎ見る。
けれど言葉は発しなかった。
レメクも何も言わない。
ただ、深い眼差しで頷いた。
フェリ姫は安堵したように微笑む。
「よろしくお願いいたします」
その微笑みはまさに宝石に勝るほど美しかった。
（お義姉さま……）
けれど――そのことにかえって不安を覚えるのは、何故だろうか？
（……？）
あたしをやんわりと離し、優雅に一礼して去っていくフェリ姫を見送って、ふと、あたしは心臓が嫌な風に跳ねるのを感じた。
どく、どくん、と。
何か悪いものが染み出てくるような、すごく嫌な気配がする。
「……お義姉……さま……」
呼び止めようと――どうしてかは分からない――思わず手を伸ばしかけた瞬間、会場のほうから声があがる。
「オーフェルヴェック伯爵家令嬢、シャルローゼ様！」
名を呼ばれたらしい女性が、あたしの視界を遮って、しずしずと会場の方へと歩いて行った。
慌てて横に避け、再度見た時にはフェリ姫の姿はどこにもない。
（……お義姉さま……？）
なぜともなく沸き上がる不安と、胃を灼くような不快感に、あたしはただ立ちつくす。
――その不安が的中するのは、それからわずか数時間後のことだった。

15　全てを背負う者

天井で輝くシャンデリア。
笑いさざめく紳士淑女。
着飾ったレディ達の装飾品が、降り注ぐ光にキラキラと輝く。
鳴り響く音楽は会場の隅々にまで満ち、それにあわせて踊る人々は、相変わらず優雅で素晴らしかった。
……ええ。
あたしは前と同様、通路の端っこをフツーに通過させていただきましたがね。
「いつか踊れるようになれればいいですね」
ちょっぴりブーたれているあたしを見て、なにやら可笑しそうにレメクが言う。
ムッと唇をとがらすと、私はいつでもいいですよ？　と言わんばかりの余裕顔をされてしまった。
（むぅ！）
ちなみに、あたしがこうまでブーたれているのには理由がある。
フェリ姫がいなくなって、なんかヤな感じにまごまごしていたら……なんと！　その間に、知らない女性がレメクにパートナーを申し込んできたのである！
なんたること！！
もちろん、誠実で紳士なレメクだから、自分にはパートナーがいますからと断ってくれていましたが！　ふと気づけばそこら中から狙ってそうな視線がレメクに集中しているではありませんか！！
ええ！　油断も隙もありゃしません！！
慌ててレメクにすがりついたあたしに、申し込んできていた女性は目がまん丸。

あたしとレメクを見比べて「……踊れますの？」と真剣な顔で問うてきやがった！

……ええ。ぐうの音も出ませんでしたよ。……ぐぅ……

「私のことも、あなたのことも、ご存じでない令嬢のようでしたね」

それ以降、ブーたれているあたしに、レメクは笑いを噛み殺している。

そういう表情もなかなかヨイのだが、いかんせん、あたしの機嫌は良くならなかった。

「おじ様。会場って、パートナーがいないと入れないのよね？」

口をとがらせたまま言うあたしに、レメクは「ええ」と笑う。

「じゃあ、なんであんなとこでパートナーを申し込んでくる人がいるの？　パートナーいるんじゃないの？　さっきの……なんとかっていう、女の人にも」

えぇモチロン、先程の女性の長い長い名前なんて、欠片も覚えてないのがあたしですよ。

シルルブレだかシャラララランだか、ちょっと変わった名前でしたが。

「他国のご令嬢でしたから、あまりこちらの風習をご存じでないのかもしれませんね」

……外国産の令嬢でしたか。

「それに、決まったパートナーがいらっしゃらない方も、控えの間には多数おいでになるんですよ。そこで希望の方がいらっしゃったら、互いに声をかけてパートナーとなるんです。……大祭の四日目以降は、通常、パートナーとダンスを踊りながら会場に入りますからね。二人一組になっていない場合、どうしてもああいう風に声をかけられたりします」

二人一組。

あたしは真顔で自分とレメクを交互に指さした。

チョイチョイ。

チョイチョイ。

「……小さくて、見えなかったのかもしれませんね」
ちっけいな！！
「あぁ……ほら、拗ねないでいただけませんか。身長差でパートナーとは思われなかったというだけのことです。……だからどうしてそう拗ねるんです？」
ふくれっ面でツカツカ歩き出すあたし。
一生懸命早足になっているというのに、レメクは悠然と追いついてきやがる。
くっ……足が長いからって……長いからって……！！
プリプリ怒りながら進み、簡易休憩所が並ぶエリアまで歩くと、そのうちの一つ――やけに立派な休憩所――から呆れ顔のアルトリート……じゃなく、アルフレッドが顔を出した。
「……なにやってんだよ兄貴……つーか、ちみっちょ」
「アル！」
あたしはパッと顔を輝かせると、アルに向かって駆け出し――
裾を踏んで吹っ飛んだ。
「……ベル……」
後ろから伸びた手が鮮やかにあたしを空中捕獲。もちろん、捕獲者はレメクである。
なんとも言えない顔であたしを見る彼に、あたしは口を膨らませた。
……ぶー。
「……見つめ合いはいーからよ、そこのバカップル。はよこっち入ってくれねェか？　……あんたらワル目立ちすぎるんだよ」
なぜだかやたらと小声でそう言って、アルトじゃなくアルフレッドは顔を引っ込めてしまった。
あたし達は見つめ合ったまま首を傾げ、彼に続いて休憩所の中に入る。
すると――

「うふっふー」
すんごい格好の美女が、
「いらっしゃーい」
いろんなものが全開の状態でそこにいた。
「「……」」
唖然と立ち止まること約三秒。
――あっ！　レメクがいきなり回れ右した！

「兄貴！　頼む！　頼むから出て行かないでくれ！！」
あたしを抱っこしたまま退出しようとするレメクに、必死の形相でアルト……（えぇい！　アルでいい！）アルがしがみつく！
「……情操教育に難があります。ベルをこんないかがわしい場所に誘い込まないように！」
「いかがわしいってナンだよ！？　つーか、俺はなんにもしてねェからな！」
すんごい硬い声のレメクに、アルはさらに必死に言いつのる。
その様子を見やりながら、あたしは背伸びしてレメクの肩越しに問題の人物を眺めた。
アデライーデ姫である。
紛う事なきアデライーデ姫である。
ドレスの裾をガバッとたくし上げて、ベッドの上に胡座かいて座っているが、正真正銘ナスティア王国第十王女のアデライーデ姫である。
緩めまくったドレス前はほぼ全開。
たくし上げたドレスの裾からは太腿チラリ。
寝起きの女性だってここまでヒドくないだろう。
というか、知り合いの宿のおねーちゃんにそっくりだ。
「……アデライーデ姫。なんですか、その格好は」

渋々向き直ったレメクが、超絶ツメタイ目と声で叱責。
アディ姫は頭を掻きながら口をとがらせた。
「だぁああってさー、ドレスって重いわ堅苦しいわ暑苦しいわの三重苦なのよ。胡座もくめないしさー」
「……普通、女性はドレス姿で胡座を組みません」
何気に怒ってるレメクの声に、アディ姫は渋々ドレスを直す。
……てゆか胡座組むのは直さないんだな……
「見えなきゃいーでしょ、見えなきゃ。アルルンも侯爵も頭かったいわー」
「あなたが柔らかすぎるんです」
「つーかアルルンはやめろ。てゆか名前教えたっつーのに変わらねエじゃねーか！」
相変わらず小声で怒鳴るアルに、アディ姫はにんまり笑顔。
「だぁって、アルの文字は変わらないじゃない。アルトリートがアルフレッドになったって、アルはアルなんだから、アルルンでしょ？」
「せめてアルにしてくれ。頼むからアルにしてくれ」
ケロッと言われて、アルはガックリと肩を落とした。
レメクが「あなたも大変ですね」と妙に共感含みの慰めをかけている。
……何を含んでいるのかナ？　おじ様？
まぁ、いいけど。
「お義姉さま、アルと二人でここに入ったのです？」
何か互いに共通性を見いだしあってる男二人をぶち放って、あたしは簡易寝台のような大きいソファによじ登った。
その上で胡座を組んでいたアディ姫は、ニヤリと笑って大きく頷く。
「ンまぁね？　あっ、そーだ。ここって末姫ちゃんの休憩所なわけよ。無断でちょっくら借りてるわねー」
……いやまぁ、それは別にいいのだが。

あたしは未だだらしない格好のアディ姫を見て、アルの方を振り仰いだ。
何故かアルが慌て顔で叫ぶ。
「言っとくが！　俺ぁ無実だかんな！？」
？
無実って、ナンダ？
首を傾げているあたしに、レメクがいたたまれない表情で呟く。
「……それ以前に、ベルにはまだそういう知識はありません」
「……あー……そっか。そうだよな」
……どーゆー意味なのだ？
説明を求めてレメクを見るのだが、相手はあたしから視線を外している。
仕方なくソファから降り、傍まで行って見上げると、くるぅりと後ろを向かれてしまった。
……グレてやる！
「あっはっは！　まーまー、末姫ちゃん。そこんとこは、このアタクシが教えてしんぜよー」
「待ちなさい！」
アディ姫の「おいでおいで」に顔を輝かせて舞い戻ると、すかさずレメクがあたしを捕獲した。
何故！？
「姫君！　ベルにはまだ早いです！！」
「もきゅ！」
力一杯抱っこされて思わず悲鳴。
ギューが嬉しい！
けど苦しい！！
「なによぅ、外見は五つかそこらにしか見えないけど、本当は九歳でしょ？」
「……くっ」
「ふつー、親から教わる時期じゃないの？　まー、男のクラウドー

ル卿に『教えろ』とは言わないけどね。てゆか、過保護も過ぎると、かえって教育に悪いのよぅ？」

羽扇子片手に宛然と微笑むアディ姫。

あたしはジタジタと手を振って、ぐぅの音も出ないレメクに意思表示した。

おじ様！　あたしの首が絞まってます！！

「これからのこと考えても、やぱちゃんと知らないといけないでしょー？」

「ですから……！　まだ……早いと……！！」

絞まってます！！

「むしろ遅いわよぅ。フェリだって七つぐらいの時にはちゃんと本読んで習ってたんだから」

絞まってるんだってば！！

「……教わる前に死にそうなんじゃねぇか？　ちみっちょが」

ピクピクしはじめたあたしに、アルトリートがぼそっと呟く。

慌てて解放するレメクに向かって、あたしは最後の力で飛びかかった！

「むもぎょーっ！」

「何語ですか！？」

――そして力尽きて倒れ伏す。

レメクの顔面に。

「……」

もふ。

「……」

もふ。

「……いいけどよ……おまえ、どこでもフリーダムなのな……」

身じろぎ一つしないレメクの顔面に張り付いたまま、あたしは「むふん」と復活の吐息を吐いた。

んっふっふ。レメクに張りついている限り、あたしは無敵なのである！　……絞められてさえなければ！！
ちなみに現在、腹に感じるレメクの呼吸がとてもこそばい。
てゆか、もしかして名前呼ばれてる？
「ま、あっちはあれでいいとして」
そんなあたし達を放っておいて、アディ姫がパチンと羽扇子を鳴らす。
アルが微妙な顔でぼやいていた。
「……いいのかよ……」
「いーのよ。末姫ちゃん幸せそーだから。……ま、ついでに言っておくと、あたし達はダンスしながら入場したわけじゃないからね～」
……おや？
「そーなの？」
顔面に張り付いたままそちらを見ると、アディ姫はパタパタと手を振る。
「そーなのよぅ」
「でも、四日目以降は、ダンスしながら入るのがフツーって言ってたですよ？」
「じゃー、末姫ちゃんはダンスしながら入ってきたの？」
「んにゃ。あたしがちっちゃいから、特例で端っこ通らせてくれたの」
先の一幕を思い出し、思わずぶーたれた顔で答えると、アディ姫はケタケタ笑いながら頷いた。
「あっは！　まぁ、そんだけ身長差あればそうなるよねェ。しょーがないしょーがない。あと数年もすれば踊れるわよ」
カラッと笑ってそう言われて、あたしはしょんぼりと頷いた。
でも、ぶー。
「あはっは！　ほらほら、ふくれないのっ！」
レメクの頭をがっぽり抱え込んで、あたしはひたすらふくれっ面になる。

なんかレメクがペンペンあたしの横っ腹を叩いているが、慰めるのなら頭撫でてほしいってもんです。
「で、話し戻すけど。踊りながら入るのって、まぁ、大祭の慣例みたいなモンなんなのよねェ。だけどホラ、そーゆーの面倒くさいって人や、年配の方で踊りとかもうできないって人もいるわけじゃない？　そういう人はね、端っこを普通に通らせてくれることになってんの。大祭の前三日間と同じようにね」
ふむふむ。
なるほどと頷いて、あたしはアディ姫を見た。
「……つーか、俺ぁ踊れねェっつの」
……なんかアルが向こうでぶーたれてる。
「じゃあ、お義姉さま達も、面倒くさいからって端っこ通らせてもらったの？」
「まさか！　こう言ったのよ！」
言って、アディ姫はふいに表情を変えた。
「『申し訳ありません……わたくし、人に酔ってしまったようなのです……この方と一緒にゆっくりと歩かせていただきたいのですが……』」
そこに現れたのは、まさに可憐な深窓の姫君。
触れれば淡く消えてしまいそうな、そんな儚い風情すら漂っている。
しかし、それはわずか数秒足らず。
「そしたら『どうぞどうぞ！』って言ってさー、通してくれたわけよ！」
あっはっはー！　と闊達に笑って手を振るアディ姫に、あたしとアルは揃って遠い目になった。
表情、つーか……人間を変えたんだな……アディ姫。
「……もむももも」
ん？　なんかあたしの腹の下でレメクがゆってる。
くすぐったりですよ？

《……ベル。いいかげんに離れなさい》
あ！　心の声で叱責が！
渋々ズルズル顔面からズリ降りると、現れたレメクの顔にはくっきりとあたしのドレスのレース跡がついていた。
……ありゃー……
「……ベル……」
「……あい……」
あたし達は熱く熱く見つめ合う。
「私の頭は、抱き枕ではありません」
なんか向こうでアディ姫がベッドに沈没してる。
「そして場所をわきまえなさい。いいですね？」
「……あい」
真剣に怒っているレメクに、あたしはしょんぼりと頷いた。
あたし達の足下では、アルが蹲ってブルブルしている。
ベッドに撃沈しているアディ姫もブルブル震えていて、彼等の心に何が起こったのかが気になった。
……つーか、なんかどっかで見た光景なんだが……？
そのままで待つことしばし、
「っ……く……くく……っはー！　死ぬかと思ったーっ！」
すごいイイ笑顔で身を起こしたアディ姫に、あたしはキョトンと首を傾げる。
顔のレース跡も華やかなレメクは、すごい渋い顔になっていた。
「あー、もぅ！　末姫ちゃんてば……てゆか、クラウドール卿……変わったわねぇー！」
「……何がですか」
あたしをきちんと抱っこしたレメクは、仏頂面をアディ姫に。
笑い涙を拭きながら、アディ姫は足を放り出すように伸ばして言った。
「なんて言うのかなぁ……隙が出来たっていうか、人間ぽくなったってゆーか……あぁ、悪い意味じゃないのよ？　なんて言えばいい

のか……こう、絡みやすくなったってゆーか」
「……それのどこが悪い意味では無いんですか」
「あっはっはっは」
仏頂面を深めるレメクに、アディ姫は笑う。
レメクの顔からはいつのまにかレース跡が消えていて、あたしはチョイチョイと跡があったはずのほっぺたをつついてみた。
……治りの早い肌だなぁ……
「一応、あたし的には褒めてるつもりなんだけどなァ。だってさ、前のクラウドール卿って、ホント、生きてる人間ぽくなかったじゃない」
つっつくあたしの指を握って、レメクがメッと目だけであたしを怒る。
「でもさ、今の卿はさ、ちゃんと生きてるってわかるわけよ。簡単に言えば、そうねぇ……目がね、暖かくなったよね」
「……」
「優しくなったんだよね。……ねぇそれって、とてもいいことだと思うんだけどな？」
アディ姫が笑う。
さっきまでのアクジョみたいな笑みじゃなく、どこか暖かいおねーさんの笑みで。
「人と人の出会いって、ほんっっと、不思議だよねー」
すごく揶揄を含んだ声で、アディ姫はレメクと、何故かアルに向かって笑顔を向けた。
「ね！？　アルルン！」
「アルルン言うな！」
すかさず突っ込んでから、アルは頭をガシガシ掻く。せっかく綺麗にセットした髪だというのに、あちこちがピンピン跳ねてしまっていた。
「つーかよ、俺ぁ、今しか知らねェから、何がどー変わったのかもサッパリだがな」

「あ！　あたしもなのですよ！　あたしから見たら、えーと……むひょーじょーが少なくなったぐらいで、あとは最初からわりとこんな感じだったのですよ！」

「……まぁ、そりゃ、末姫ちゃんからしたら、そーよね」

苦笑して、アディ姫はアルの方を向く。

「てゆか、アルルンは末姫ちゃんに感謝したほうがいいと思うわよ？　前のまんまのクラウドール卿だったら、たぶん怖くて声もかけられなかったんじゃないかしら？」

「……そこまでひどかったのかよ……」

唖然と呟くアルに、レメクはさらなる仏頂面。

けれど、それに対しては何も口を挟まなかった。

――挟まない理由がそこに来ていたからだ。

「あぁ、ひどかったぞ。なにせ、生きた人形のような有様だったからな」

そう、黄金に輝く、誰よりも美しい女王が。

あ、の形で口を固めて、アルはその場に棒立ちになっていた。

忽然と休憩所内に現れたその人は、月にも太陽にも譬えられそうな美貌を鮮やかに笑ませる。

光を撒くような淡い金のドレス。

ふんだんに施されたレースとフリルが、まるで咲き誇る黄金の薔薇。

畏敬と崇拝を呼び起こされそうな美しさに、さしものアディ姫も慌てて居住まいを正していた。

……まぁ、格好はアレな状態なのだが。

「……ようやく、来たな」

深い声で、アウグスタはそう呟いた。

ジッと見つめられたアルはと言えば、一言も喋れずに固まってい

る。
あまりのことに度肝を抜かれているのだろう。
「黄金の……魔女？」
ややあって呟かれた言葉に、アウグスタは軽く破顔した。
「ふ。ベルと同じようなことを言う」
そうして、ふと眉をひそめる。
「……ん？　……ははぁ、なにやらどこかで見た『目』だと思ったら、ステファンの目か。なるほどな……今代の『龍眼』は、おまえへと移ったわけだ」
ほとんど一瞬で看破するアウグスタに、アルはパクパク口を開閉させている。
まぁフツー、一目で『龍眼』なんて見破ったりしないよなぁ……フツーに見ればふつーの目なんだから。
「しかし、そのおまえが『見て』、この私が『黄金の魔女』か……これは、どうしても運命が動くということか……」
その台詞は苦い笑みとともに。
どこか悲しげに呟いて、アウグスタは嘆息をついた。
「だが、今はそんなことをぼやいている場合では無いな」
チラッと悪戯めいた笑みを閃かせ、アウグスタは立ちつくしているアルに無造作に歩み寄った。
それと同時にレメクも動く。
思わず身を引きそうになったアルの後ろにまわりこんで、トンとその背を軽く押した。
「！　おわっ」
「背は、まぁ、そんなもんか」
たたらを踏んだアルの目の前にはアウグスタ。
なかなか心臓に悪い状況だったのか、アルの背が飛ぶようにしてこっちに戻ってきたので、レメクがまた手で押し返した。
「ちょ……！」
「ははは！　なんだ。おまえ達、早速仲良くなったのか。アディか

ら話しは聞いていたが……よかったな、おまえ。偶然とはいえ、こいつと会うことができて」

こいつ呼ばわりされたレメクは、抗議含みのアルにそ知らぬ顔をしながら、少しだけ口元に笑みを浮かべた。

おまえ呼ばわりされたアルは、なんだか複雑そうな顔で口を歪めている。

照れているのだろーとアタリをつけて、あたしはウンウンと訳知り顔で頷いてやった。

それを見守って、アウグスタも微笑む。

なにか、ひどく様々なものをこめた笑みで。

「時期が悪ければ、本当に、会っても何もないままに終わっていたかもしれん。……いや、そもそも、ベルが来なければ、全て、何も始まらないままだったのだろうな」

「？」

なんか話しがこっちにキタ？

キョトンと首を傾げると、レメクがあたしを見下ろしてわずかに微笑んだ。

けれど、アウグスタはそれ以上あたしのことには触れなかった。

彼女には、それよりも先に触れておかねばならない相手がいるのだ。

「……名は、なんとつけてもらった？」

アウグスタはアルへと手を伸ばす。

避けることもできず、アルはギクシャクと口を開いた。

「……『アルフレッド』」

「……戦場の審判者、か」

強ばったアルの頬を撫で、アウグスタは噛みしめるようにその名を呼んだ。

アルフレッド、と。

「……苦労をかけたな。何も知らず、何もできずにいて、すまなかった……」

「……え……いや……」
「できれば、おまえのご母堂にもお会いしたかった。……何の慰めにもならないだろうが、わずかでも、あの愚かな父の償いをしてさしあげたかった……」
「そんな……俺は……」
触れられた場所に熱でも感じたように、アルの体が逃げる。
レメクに押し返され、おどおどと視線を彷徨わせて――

アルは愕然と立ちつくした。
「……んだって？」
「？」
呆然としたその声に、あたし達は全員キョトンとする。
いつのまにか姿を整えたアディ姫が、ソファから降りながら「あ！」と叫びそうな顔になった。
レメクも「しまった」と言わんばかりの顔になり、ピンとこないあたしとアウグスタは顔を見合わせる。
「？　どうかしたのか？」
「どうしたの？」
あたし達二人　（と、レメク）に挟まれる形で、アルは立っている。
その体が小刻みに震えているのを見て、あたし達はますます顔を見合わせてしまった。
「なんで……ちょっと待てよ……なんで、俺の、母親……？」
「？　おまえをお産みになったご母堂だ。お会いしたいと思っても不思議では……」
「でなくて！」
アウグスタの声を遮って、アルは声を荒げた。
「あんた、なんで……待てよ……俺は……ッ」
軽く混乱しているらしいアルは、誰かを捜すように周りを見る。
誰を捜しているのか……なんとなく分かった。

彼だ。
おそらく、アルを王宮に連れてくることになった人物でもあり、アルの名前を今使っている――

本物のアルトリート。
「……アル……」
あたしは迷子のような顔のアルに声をかける。
アウグスタも何かを感じ取ったのか、大きく目を瞠ってから顔を引き締めた。
「……アルルン」
静かな声で呼びかけて、アディ姫が一歩、アウグスタの後ろから彼へと歩み寄る。
アルは彼女を見た。
眩く美しい、真剣な顔をした彼女を。
「……違う」
なにが違うのか。
なにを違うと言いたいのか。
後ろに退き、レメクに当たって慌てて飛び退き、逃げ場を探すように休憩所内を見回して、アルは首を横に振った。
「違う……違うから、俺は……！」
「……でも、アル」
「俺は……！」
「誰と違ってても、アルはアルなのよ？」
なにかよってたかって彼を追いつめているようで、あたしは心を込めてアルに声をかけた。
アルの目が一瞬、あたしを見る。
口が何かを言いかける。
けれど何も言わないまま、グッと唇を噛みしめ――

「あっ！」
休憩所の仕切りでもある大布の中に飛び込んだ。
「！」
「まてレメク！」
瞬時に動いたレメクをアウグスタが鋭い声で止める。
ハッとなって立ち止まったレメクと、その腕の中のあたしに、アウグスタはゆっくりと首を横に振る。
「……アディ。行ってくれるか？」
「お任せください」
アウグスタの声に一礼して、アディ姫は静かに動く。
足音すらたてず風のようにアルの後を追って大布に飛び込んだ彼女は、先のレメクに迫る早さだった。
……アディ姫……もしかして、体術とか、スゴイ？
あの身のこなしは、ただ者ではないとあたしの勘が告げている。
そういえば、アルを軽々抱えて歩くほど力も強かったはずだ。
（……アディ姫って、魔力ないかわりに、腕力とかスゴイのかも）
だからこそ、目立ちまくるレメクのかわりに追跡者になったのかもしれない。
……いやまぁ、今のアディ姫も十分目立つのだが。
「……？」
なんとなく二人の消えた場所を見ていたあたしは、ふと、深いため息を耳に拾って振り返る。
先程と同じ場所で、アウグスタが悔しげな顔で俯いていた。
「……失敗したな」
悔いるような口調で呟いて、深い深いため息。
レメクは無言でその傍らに歩み寄り、あたしは腕を伸ばしてアウグスタの二の腕にタッチした。
「……おかーさま」
「……慰めてくれるのか」
少しだけ視線を上げ、アウグスタはホロリと笑う。

「……おまえ、本当に、こういう時に有り難い存在だな」
レメクの腕からあたしを抱き上げて、アウグスタはあたしをギュッと抱きしめた。
そんな彼女へと向かって、レメクは静かな声をかける。
「……申し訳ありません。先に、話しを詰めておくべきでした」
「……すり替えか」
「はい」
頷いて、彼はその顔から表情を消した。
人の減った休憩所はなぜだか寒い感じがして、あたしはアウグスタにキュッと抱きつく。
「『彼』自身も、それに荷担しています。……強制か、それとも任意かは存じませんが、何かを盾にとられているような気配はありませんでした。ただ……」
「……『花瓶』の件か」
頷いて、レメクは右手を差し出した。
「情報を。……万が一、あの時、アロック卿が近くにいなければ、『彼』はあなたに会う前に命を落としていたでしょう」
アウグスタは差し出されたレメクの右手を見つめ、小さく「貰おう」とだけ呟いた。
そうして、レメクの手に自分の手を重ねる。
動作はたったそれだけなのに、ほんの一瞬、ザワッと皮膚が粟立つような気配を感じた。
アウグスタはすぐに手を離す。
「……アロック卿には、どれほど感謝しても足りないな。文字通り、体を張ってあの子を守ってくれたのか……」
「指に後遺症は残るそうですが、それ以外は義父の尽力もあって治っています」
「……というか、おまえはまた、使ってはならん時に使いおったな……」
ジロリと睨みあげられて、レメクは少しだけ居心地の悪そうな顔

になった。
「ですが……そうでもしなければ、アロック卿を助けられませんでした」
「……分かっておる。分かってはいるんだがな……！」
苛立たしげに言って、アウグスタはガシガシと綺麗な髪を荒々しく掻いた。
……なんか、そーゆートコがアルとそっくりだ。
「おまえは自分に頓着しなさすぎるから、私達はヤキモキするんだ！　命は普通、やったりもらったりできるもんじゃないというのに、おまえときたら……！」
「助けられる命があるのなら、助けるのは当然で……」
「だから、それも分かっておる！」
ビシッと言いきって、アウグスタは盛大に嘆息をついた。
「……おまえが、そういう風に育ってくれたのは嬉しく思う。だがな……それと、心配とは別物だ。そうだろう？　おまえだって、ベルが同じようなことをして命を縮めたら、どういう気持ちになる？」
言われて、レメクは初めて何かに気づいたような顔になった。
呆然とあたしを見下ろす顔には、明らかに焦りがある。
「……やっと分かったか馬鹿助が。……まぁ、今回は……というか、今回『も』、緊急事態ということで無理やり納得はしよう。だが……頼むから、自重してくれよ。おまえに何かあったら、私達も無事ではいられないからな」
む？
なんかどっかで聞いたよーな気がする言葉だぞ？
それが誰がどこで言ってた言葉なのかは、微妙に思い出せないが。
「あと……問題は、馬鹿助二号か」
「「……二号」」
思わず呟いたあたし達にチラと視線を向け、アウグスタは口の端を歪める。
「花瓶は三階から落とされたものだ。……アロック卿の頭蓋が陥没

しなかったのは、不幸中の幸いだったな。犯人は捕まえている。……おまえ、尋問するか？」

「……絶望を味あわせても良いのでしたら」

「許可する」

不穏な言葉を吐くレメクに、アウグスタは真顔で頷いた。

ギョッとするあたしにかまわず、厳しい表情のままで言う。

「己のしでかした罪の重さを痛感させてやるがいい。拷問などはどうせおまえの趣味ではあるまい。今の状態での紋章の使用は許可できんが……そういえば、ベルに『生命の賛歌』を教えているんだったか？　あれができるようになっているのなら、多少の融通はきくが……」

……うっ……！

二人に視線を向けられて、あたしは慌てて顔を背けた。

てゆか、生命の賛歌って、そんなにスゴイ力の歌なんですか！？

「……メリディス族の『呪歌』は特別だからな」

あたしの疑問を受信でもしたのか、アウグスタが肩を竦めながら答える。

「歌一つで人間の力を限界まで高めることもできるし、無理やり眠らせることも、恐慌に陥らせることもできる。最高の力を持つ者は『言霊使い』と呼ばれ、わずか一言で全てを操るらしいが……」

無理！

「……まぁ、そこはこれからの鍛錬次第だろうな」

苦笑を零してから、アウグスタは「……さて」と呟いた。

「人も出来事も千客万来といった感じだが……今回の騒動の行く末はどこかな？」

その顔には疲れや憂いといったものは無く、いっそ獰猛にも見える覇気ある笑みが浮かんでいた。

「……陛下」

「ふふふ。案ずるな。事態を楽観しているわけでも、己を過信しているわけでも……楽しんでいるわけでも、ないからな」

どこからともなく取り出した一枚の書簡をレメクに向かってピンと弾き、アウグスタは嗤う。
「だが……ある意味、愉快じゃないか？　いったい誰が、こんな馬鹿げたことを企んだ？　よりにもよってこの時期を選んだのは、衆目を味方につける算段があってのことか？　それともたまたまか？　前者であればなかなかに抜け目が無いと言えるが、あまりの考えの足り無さに目眩がするな」
「……おそらくは後者かと」
「嗚呼、救いようがないな、それは」
嗤みを深めて、アウグスタは口を開いた。
「レメク」
「はい」
「滅ぼすぞ」
「はい」
「全ての責は私が負う」
言いきって、アウグスタは爛々と輝く目をレメクへと向けた。
「国を滅ぼしかねない害虫は、一族にはいらん。それが誰であろうと、手加減はするな」
それが例えどんな反発や、反感をかうことになっても。
その全てを自らの名で負って――――

「我が真名において命ずる。事の首謀者は、誰であろうと必ず裁け」

例えそれが、王族であろうとも。

声のない言葉すらも受け取って、レメクは恭しく一礼した。
全てを背負い、力を託す相手に、ただ一言。
「御意」

16　同じでは無い者

「……さて。そろそろ会場に姿を現さねばならん時間だな」
ふとそんな声が聞こえて、あたしはハッと身を起こした。
薄暗い部屋の中、離れた場所にある燭台が、ちらりちらりと光を撒く。
ぅぉー……よく寝たのですよ。
しょぼしょぼする目を擦りつつ、あたしはほんのりと暗い周囲を見渡す。
小さな部屋だった。
深い色のカーテンに四方をぐるりと囲まれ、その向こう側の景色はほとんど見えない。
部屋の光源は燭台にささった数本の蝋燭のみで、その薄暗い部屋の中に男女が二名。
……おや？　レメクとアウグスタではありませんか。
てゆか……えーと……ここどこだっけ？
「……よく寝ていましたね。ベル」
あたしを膝の上に寝かせていたレメクは、呆れたような目であたしを見下ろしている。
なんだかいつもより数段素敵度の高い服を着ているが……
……って……あー……
「……夜会で爆睡してる幼女、というのは珍しい光景だったな」
レメクの隣にいるアウグスタは、クツクツ笑いながらそんなことを言った。
そう――ここは王宮、夜会の会場たる『決戦の間』。
いくら周囲を布で囲われているとはいえ、いつ誰が覗きに来てもおかしくないような場所で、あたしはぐっすりと眠り込んでしまっ

ていたのである。
……い、いや、理由はあるのよ！？　イロイロと！
アルがどっか行っちゃって心配だなー、とか！
フェリ姫今どこにいるんだろ心配だなー、とか！
シーゼルはどこにしけこんでるんだろ、フェリ姫の制裁が心配だなー、とか！
お腹空いちゃったけど近くにご飯がないから寝てよーかなー、とか！
レメクとアウグスタが難しい話しをしはじめて眠いなー、とか！
ほらっ！　こんなにイッパイ！！
「……ベル」
焦りもイッパイなあたしを、レメクはそれこそイロイロなものを含んだ声で呼ぶ。
「……」
……あー……
「……」
……うー……
「……」
「……ごめんなちゃい」
上目遣いで、しょんぼり反省。
レメクの手がグワッと迫った！
「……疲れているのでしょうね。ベルもまだ本調子ではありませんから」
頭を撫でてもらいました！！
わずかな笑みに含まれた「仕方がありませんね」を読み取って、あたしはパァッと顔を輝かせる。
さすがレメク！　あいちてるっ！
「……中身のほうはいつでも本調子な気がしますが」
えっ！？　なぜ目が遠くを見るのです！？
ガーンッとショックのあまり固まるあたしを見て、アウグスタは

笑いを噛み殺しながら言った。
「どちらかといえば、レメク、おまえが居眠りしてたほうがよかったんじゃないか？　疲れてるのはおまえも一緒だろう」
「……そういうわけには」
困ったように苦笑を零して、レメクは嘆息。
「開拓の問題にしても、諸侯が王宮に集っている間に交渉しないといけませんから。……改めて場を設けるのは時間がかかりますし、かといって書状ではさらに時間がかかってしまいますから」
「あー……おまえの領の、あの開墾なぁ……」
何か思い当たることでもあるのか、アウグスタは渋い顔だ。
しかし、何も知らないあたしには、何がなんだかサッパリだった。
てゆか、開墾ってゆーのは、アレですか？
畑をいっぱい作ったりするヤツ！
「……ベル。あなたが生まれるより前の話しですよ」
ジッと見つめるあたしに気づいて、レメクが語る。
「万年水不足の領地に、水路を作ろうとしたことがあるんです。その時、紋章術師長の命令で、かなりの数の術師がその工事に参加しました。……私の要望ではありませんでしたが、その結果として予定より格段に早く工事が仕上がりました」
「おまえが寄越せと言ったわけじゃないんだがなぁ……」
ぼやくアウグスタを見て、あたしは首を傾げた。
てゆか、なんでそんな状況になったのだ？
「新しい複合紋章術を編み出すのに、紋章術師長がどうしてもレメクの補助が欲しいと言ってきかなかったんだ。で、こいつは自分の領地の水路工事があるから、しばらく王都に帰って来れん、と言う。……まぁ、普通、領地の水路工事ってのは数年がかりで取りかかるもんだからな。言われた長も慌てたんだろうよ。……とはいえ、まさか部下をおまえの所に送りつけて工事を早めるとは思わなかったが……」
「結果的には助かりましたが」

苦笑を深めるレメクに、あたしは首を傾げながらペチッと合図した。

説明もっとプリーズ。

「土木関係の工事は、普通、人の手で掘ったり材料を運んだりするのですが、私の場合、紋章を使って行うんです」

ほぅほぅ。

「私の領は、土地こそ広いのですが、その半分は不可侵の森で、残りは荒れ地がほとんどです。それほど痩せた土地というわけでもありませんから、ちゃんと手を入れれば収穫は見込めるのですが……森の近くに行かない限り、水源が無いのですよ。川も近くにありませんし、井戸はかなり下まで掘らないと水が出ないような有様ですから」

ふむふむ。

お野菜は土地と水とお日様がないと駄目だって言うから、水が足りないレメクの土地はあんまりイイ土地じゃないってことだ。

……そーいや、前の領地とは比べ物にならないぐらいショボイ土地、って他の人もさんざん言ってたな。

「ちゃんと手を入れれば、土地はいくらでも活用できます。何もしないままに利益をあげようとするから、実入りが少ないと感じてしまうのです。……私の場合は、前任者がかなり無茶な租税をしていたらしく、領民も減っていましたからね……そもそも工事のための人足が足りませんでした」

……ん？　『領民が減って』た？

「おじ様の領地って、人が少ないの？」

思わず問い返すと、苦笑と頷きが二カ所から。

「あそこは少なかったなぁ」

「今は少しずつ増えてきてますが、最初は本当に少なかったですね」

「……へぇ……」

思わず意外な気持ちで大人二人を見上げた。

生まれも育ちも王都なもんだから、領地に人が少ない、と言われ

てもいまいちピンとこない。
が、宿のおねーちゃんは言っていたのだ。領民の数は領主持つ力に比例するのだと。
……ということは、レメクは最初、すごーく力のない領主だったってことになる。
「……おじ様、なんでそんな土地を受け持ったの？」
あたしの素朴な疑問に、レメクはほんの少しだけ自嘲めいた笑みを浮かべた。
「反発の少ない土地、というのも理由の一つなのですが……」
言って、少しだけ言いよどむレメクに、アウグスタが痛みを覚えたような目になる。
そちらにチラと目配せをしてから、レメクはあたしにこう告げた。
「……その領地は、昔、一度でいいから行ってみたいと思った土地なのですよ」
……なんと。
「そんなにショボイ土地なのに？」
「まぁ……当時は荒れ地と森が大半でしたから、そう思われても仕方がありませんが。……森の中にね、美しい湖がいくつもあるのだそうです。大半が湧き水で出来た湖で、月の夜には、人々はそこに集って歌を歌うのだと聞いています」
「ふぅん……」
レメクの言葉に、あたしは北区のクラウドール邸を思い出した。
敷地内に森のごとき林と、美しい湖を持つクラウドール邸。
もしかすると、レメクの領地にある森というのも、あんな感じなのかもしれない。
「話にだけはよく聞いていましたからね。子供心に一度は訪れてみたいと思ったものです。……とはいえ、まさか自分の領にする日が来るとは……思いもしませんでしたが」
……なるほど。
「思い入れのある土地ってやつね！」

「……まぁ、そうですね」
苦笑して頷くレメクに、あたしはウンウン頷いた。
そしてしっかりと脳内メモに書き込みをする。
なにせレメクが領地について語ってくれるのはこれが初めてである。しっかり勉強して、いつかお手伝いをしなくては！
そう、ツマとして！
「……で、どーしてその土地が、今、むつかしそーな話しになってるの？」
一生懸命情報を仕入れようとするあたしに、レメクはなにやら考える顔。
その横で苦笑して、アウグスタがあたしの頭をくしゃっと撫でた。
「まぁ、簡単な話、その水路工事に、本来関係ないはずの紋章術師や紋様術師が大勢参加したのが問題なんだ。……そうだろ？」
「えぇ……普通、手伝っても数人程度ですからね」
考えがまとまったのか、レメクがアウグスタの言葉を受け継ぐ。
「個人の領地に関する問題ですから、国がそこまで関与するのはおかしい、という訴えです。私自身の役職のこともありますから、何か裏で取引があったんじゃないか、と言われてますね」
「……おじ様が手伝えって言ったわけじゃないのに……？」
「そういうものです」
あっさり言うレメクに、あたしは頬を膨らませた。
「でも、そんなの、おかしいじゃない！　おじ様のせいじゃないのに！」
「ようは『妬み』だ」
横から伸びてきた白い指が、膨らませたあたしのほっぺを「ぶしゅっ」と潰す。
そちらを向いて再度頬を膨らませると、アウグスタは面白そうな顔であたしを見た。
「紋章術師に何らかの作業を頼めば、けっこうな金額の人件費がかかる。特にこいつがやろうとしていたのは、北の山脈から水を引っ

張ってくるという、ちょっと普通じゃ考えられないぐらい巨大な水路の工事だ。そんなものを個人で造ろうとすれば、それこそ破産するぞ。王都をもう一つ造れるぐらいの金が必要だからな」

む。むむむ。

「……むちゃくちゃお金がいるってことね！」

「……まぁ、普通の人間が想像もつかないだろう大金だな」

なにやら指折り数えていたアウグスタが、指を折り曲げる途中でげんなりした顔になった。

「……同じ工事を正規でやれと言われても、ちょっと予算が足らないな……」

……国王にそう言われるよーな事業って、どーなんだろうか……

「普通に人を雇えば、どうしても賃金と日数がかかりますからね」

同じように指折り数えていたレメクは、難しい顔でそう答える。

「私の場合、紋章がありましたから、そこまでかからないと踏んでいたわけです」

「……紋章の使いすぎだ。馬鹿助が」

そんなレメクを横目で睨んで、アウグスタは小言。

「おまえ、デカイ水路を掘るついでに、周囲の荒れ地を耕してただろ。紋章で」

「硬い土地を柔らかく混ぜて、中の砂利を撤去しただけです」

「よりにもよって大地の紋章でな」

「土系の紋章は使いやすいんですよ。無理やり何かを生み出すと違って、そこにあるものを混ぜたり仕分けしたり動かしたりするだけですから」

「……結合力を高めて岩の板を造ってたのは誰だ？」

「最初は私ですが、紋章術師達が来てからは彼等に任せましたよ」

「……その紋章術師達の存在が、今こーして問題になってるんだがな」

「まぁ、そうなんですが」

……なんか怒られてる。

前々から思ってたのだが、アウグスタはレメクが紋章を使うことにあまり賛成では無いらしい。
レメクの場合、使った結果体を壊す、ということがいっぱいあるから、きっとそのせいなんだろう。
「だいたいな、水路だけでも大工事なのに、木の紋章で苗木を大きくして、脇に木陰とか作ってなかったか？」
「水路脇の木々でしたら、雨水の確保と用水の蒸発防止をこめて……」
「理由とかを聞いているんじゃない。やりすぎだと言っているんだ」
怒ってる怒ってる。
「紋章を使うな、とは言わん。私も徹底的に利用しているからな。……だが、おまえの場合は限度が無いだろう。やらなければ、とか一人で思って体調考えずにガンガン使うだろーが。それをやめろと言っているんだ」
「……」
「木は植えて、手入れを怠らなければそれなりに育つ。年月で育てればいいんだ。確かに紋章を使えば早いし効果も高い。理屈は分かるんだ。……だがな、おまえは一人でやりすぎる。だから周りは心配するんだ」
「……はい」
頷くレメクは、なんだかちょっとしょんぼりしているような感じだった。
あたしは慰めをこめてレメクの胸に頬をスリスリする。
アウグスタがそんなアタシのあたまをワシッと掴んだ。
「いいか？　レメク」
ぬぉぉ。
「おまえがやろうとしていることをベルがやろうとしているのだと考えてから、行動しろ。ベルがやってもかまわないと思えるような内容なら、やれ」
むぉぉ。

「でなければ、おまえの無茶はベルにもうつるぞ」
ふぬぉ。
「……わかりました」
頷いて、レメクは頭を鷲づかみにされてのけぞっているあたしを見た。
「……とりあえず、アイアンクローはやめてあげてもらえませんか」
「おお。いかん。力を込めすぎたか」
こめすぎだ……！！
解放されたあたしは、素早くレメクの膝上から脇へと避難する。
あたしは悟りました。レメクを説教している時のアウグスタは危険だと！
「……まぁ、そんな感じで紋章を使う工事を進めていたら、王都から援軍がやってきて、彼等が手伝ったことが今問題になっている、ということです」
そう纏めたレメクが、「わかりましたか？」という目であたしを見る。
あたしはきゅっと唇を引き締めて頷いた。
「……でもね、それって、偉い人とか、他の領地の人とかが文句言ってるの？」
「ええ」
「動員された術師さん達からは文句でてないの？」
「あぁ……」
あたしの質問に、レメクは笑った。
「私の所には直接来ていませんが、紋章術師長の所にはいったんじゃないですかね？」
「まぁ、そもそもあやつが元凶だからな。術師連中は命令されて従っただけだし、レメクの方に文句を言うヤツは……貴族連中の取り巻き以外にはおらなんだな」
……てことは、ちょっとはいたってことか。
「まぁ、どこにでもそういうヤツはいるからな」

軽く肩をすくめて、アウグスタは苦笑った。
「しかし、あの時の長の命令はふるってたな。言うに事欠いて、実技テストときたもんだ」
「実技テスト？」
……ってナンダ？
「まぁ、手の空いてる術師連中を集めてだな、日頃の鍛錬をテストすることにした、と言ったわけだ。で、テスト内容が、レメクの所の水路工事の手伝い」
「……そんな無茶な……」
「いや、これがフツーに受け入れられてな。というのも、あやつの言い方がな……『紋章術の実用性を世に知らしめるため、クラウドール卿は紋章術を使っての一大事業に乗り出された！　ちょうどいい機会だ、貴様等が日々鍛錬しているかどうかのテストをさせてもらう！　卿の元に赴き、貴様等の実力を見て貰うがいい！　そこで日々の成果を発揮できなかった者は、一から修行のやり直しだと思え！』とかなんとかだったらしい」
……ありゃ……
「紋章術師っていうのは意外と地味な職でな。警備についたり新しい紋様術や紋章術の開発をしたりする以外は、街灯用の紋章珠を作ったり、土木工事用の紋章符を作ったりしかしてない連中だ。中には気持ちが弛んでこっそり遊んでるようなヤツもいる。長ともなるとそういう連中に頭を悩まされたりするからな……渡りに舟だと思ったんだろうよ」
「……で、おじ様の所で、紋章術師、もしくは紋様術師として相応しい力を持ってるのを照明して来い、と……」
「そういうことだ」
あたしの声に満足そうな笑みを浮かべて、アウグスタは大きく頷いた。
あたしはただただため息をつく。
……長って人のことはよく知らないが、まぁ、サボり癖のついた

ヤツをビビらせるのと、レメクの手伝いの一石二鳥を狙ったんだとゆーことはわかる。
大きな鍛冶屋の親方が、弟子達を鍛えるのに似たようなことをやってたから、そーゆー感じなのだろう。
……地位が上に上がっても、やってることは下街と同じなんだな……
「最初に彼等が来た時には、いきなり何事かと思いましたが」
「手紙は行ってなかったのか？」
「入れ違いになったらしく、彼等の到着後に届きましたよ。私も一カ所には留まっていませんでしたから」
苦笑して答えるレメクに、なんとなくその当時が想像できて、あたしはウンウンと首を縦に振った。
「おじ様は、じっとしていられないヒトなのです」
「……なぜ落ち着きのない人間のように言われなくてはいけないのですか」
なんか不服そうな声がキタ。
あたしはジッとレメクを見上げる。
どーせいつものように忙しく動き回ってたんだろーに。違うと？
「……コホン……」
わざとらしい咳を一つして、レメクは視線を横に逃がした。
「それはともかく」
あ。話題変えた！
「彼等の事情はよくわかりませんでしたが、テストを兼ねているということでしたので、簡単な術を延々行ってもらいました」
……延々……て……
「とりあえず、力尽きるまで」
……鬼ダ。
さすがに顔をひきつらせたあたしに、レメクはしれっとした顔で話しを続ける。
「限界を試してくれと本人達から言われましたからね。どれだけの

術を行使できるのか、回数を見ておきたかったですし。紋章術師の方には紋様板を力尽きるまで作ってもらい、その枚数を記録しました。紋様術師の方は、その紋様板を使って水路を強化する……まぁ、言うなれば大きな石の板を作る作業を延々としてもらい、その強度と個数を記録しました」

「……実際に、ちゃんとテストになってたわけだよな。アレ……」

「そうでなければ、引き受けはしませんでしたよ」

アルグスタのぼやきに苦笑を返し、レメクはあたしの頭に手を置いた。

「まぁ、理由や背景はともかく、それが問題になっているのは事実です。不公平感というのは、なかなか消えないもののようですし」

「……おまえと同じ仕事をこなしてから、文句を言ってほしいものだがな」

アウグスタは疲れたため息をつくと、勢いよくソファから立ち上がった。

「まぁ、そんなわけで……ベル。ちょっとレメクを借りるぞ」

「ほぇ？」

いきなり言われて、あたしはキョトンとアウグスタを見上げた。

アウグスタは腰に手をあててふんぞりかえる。

「高官や貴族どもと面倒な交渉をしなくてはいかんならな。おまえ、そんな所についていってみろ、根掘り葉掘り素性を聞かれたり、わけのわからんいちゃもんをつけられたりするぞ」

……うっ……！

「……そ……それは嫌だけど……」

「そうだろう。それに、おまえがいるとどうしても連中の興味はそっちに行くからな。本題に入るまでに時間がかかる可能性がある。……おまえには悪いと思うが、しばらくここで休んでいてくれ。面倒な客もそろそろ来るしな」

面倒な客、の言葉を皮肉な笑みを浮かべて言うのに、レメクの目がスッと冷えた。

「……来たのですか。『あの女性』が」
「……おまえ、その目は怖いからやめろ」
一言忠告して、アウグスタは肩をすくめた。
「……来たようだぞ。今、門の所でポテトが対応している。……あの大馬鹿助、嬉しそうに頭の中に声を送ってきやがったぞ。あの女性にとって王宮は未だに『我が家』らしくてな、出向くのに何の咎があるのかと言わんばかりの態度だそうだ。ちょっと虚無の空間に放り込んでもいいかとか問うてきた」
……おとーさま……
「安心しろ。とりあえず、人目がなくなるまでは何もするな、と言っておいたから」
……おかーさま……
「あいつが時間を稼いでいるからな。例の連中はしばらく足止めをくらっている。その間に、面倒な交渉を片づけるぞ。それが終わった頃ぐらいにでもポテトに連中を案内させよう。……その頃には、ベルは部屋に戻っていたほうがいいだろうな」
「……そうですね」
レメクがあたしを心配そうに見下ろす。
その綺麗な瞳に、あたしは大きく頷いた。
「大人しく帰るのですよ。大丈夫なのです。デキる女は男の邪魔をしないのです！」
「……せっかくの夜会なのに、堪能することもできませんね」
ほろりと苦笑を零して、レメクはあたしの頭を撫でる。
その掌に頭を擦りつけて、あたしはレメクに笑いかけた。
「夜会に未練は無いのですよ。でもご飯には未練があるのです！」
「……そーいや、まだメシ喰ってなかったか」
そうですとも！
そうですとも！！
ようやく大事なことに気が付いてくれたアウグスタに、あたしは力一杯頷いた！

「ぺこぺこなのです！」
ぐぉお！　と腹からも声援があがり、アウグスタは笑いを噛み殺しながら頷いた。
「わかった、わかった。どうせそこらにいつもの連中が来てるから、メシを持ってくるように伝えておく」
……いつもの連中？
「ケニードとルドゥインだ」
なるほど！
納得して、あたしは大きく頷いた。
「二人ともどこにいるの？」
途中まで一緒にいたケニードは、パートナーを迎えに行かなくてはいけないからと、会場に行く前に別れている。
バルバロッサ卿に関しては、それこそ昨日から会ってない状態だ。
「会場内にはいるんだがな。どうやらパートナーが友達との話に夢中になっているらしい。抜けてこっちに来るらしいから、おまえの相手を任せることにした」
任せることにした、って……
「……アウグスタ。いつ会話したの？」
「さっき。紋章でな」
コツコツと自分の頭を指で叩いて、アウグスタはニヤリと笑った。
……なるほど。
精神を司るとかゆー『光の紋章』か。
納得しつつ、あたしはちょっと遠い目になった。
いきなり頭の中に喋りかけられてたら、普通、ビックリするんじゃなかろーか……？
フェリ姫にいきなり心話をされた時には、あたしもビクッとなったもんだ。
（人前で悲鳴とか上げなきゃいいけど……）
宿のおねーちゃんが言っていたのだ。オトコノヒトはプライドが高いから、恥をかかせちゃいかんのだと。

「ベル」
「みょ？」
名を呼ばれて顔を上げると、レメクは相変わらずあたしの頭を撫でながら言う。
「クレマンス伯爵のことは、宰相にお尋ねしておきます。フェリシエーヌ姫も、ご自分の配下を使っている間は、無茶をなさらないから大丈夫でしょう」
「……うん……」
暖かい手と声に頷いて、あたしはキュッとレメクの服の裾を握った。
レメクの大きな手が、そんなあたしの拳を包んでくれる。
「せめて場に慣れる程度には、周りの様子を見せたかったですが……私もあなたも本調子ではありませんから、なかなか思うようにはいきませんね」
「……ん」
「私は陛下と行きますから、あなたは大人しくしていてください。あなたはまだ王宮に来て日が浅い。人々の間で上手く立ち回るには、もう少し成長してからのほうがいいでしょう」
「……うん」
頷き、同じ日の浅い仲間であるアルを思い出して、あたしはレメクを見上げた。
「おじ様。……アルは？」
薄暗がりの中、少しだけ翳（かげ）りを帯びて見えるレメクは、口元を笑ませて頷く。
「彼なら大丈夫ですよ。アデライーデ姫がついています」
「……アディおねーさまなら、アルを守れる？」
「おそらくは」
妙に自信をこめて、レメクは頷いた。
その口元にはなんとも言えない微苦笑が浮かんでいる。
「この王宮で、彼女に勝てる人はそういませんよ。魔術が使えない

ことが何のマイナスにもならないほど、自分を磨き続けてきたのが彼女です。……西の隣国、ボドムスでは毎年武術大会が開かれるのですが……」

そこで区切って、レメクはアウグスタを見た。

アウグスタが苦笑しながら頷く。

それを受けて、レメクは言った。

「彼女はそこの連続優勝者（タイトルホルダー）ですからね」

――――と。

タイトルホルダー。

それは、大会などで三年以上連続して優勝し続ける人の呼び名である。

あたしがそれを知ったのは、今から約二年前。

漁のおこぼれをくれていた船乗りのおにーちゃんが、ある日、お酒片手に語りに語ってくれたのである。

聞くところによると、西の方には大きな武闘大会があって、そこに強烈に強い連続優勝者（タイトルホルダー）がいるのだそーだ。

その大会、どーやら賭博の対象になっているらしく、そのやたらと強い連続優勝者のおかげで、おにーちゃんはそこで小銭をしこたま稼ぐことができたのだとか。

大金を稼いだわけじゃないあたり、なかなか真実味のある話しである。

……いや、まぁ、酔っぱらいの話って、たいてい実際より大きな話しになるのがフツーだからね。

んでもって、その連続優勝者（タイトルホルダー）という名称だが、これは三年以上連続して優勝しないと、そういう風には呼ばれない。

理由は簡単で、トーナメント戦とかゆーやつの場合、一回や二回

なら、偶然も重なって最強な人以外が優勝することもあるのだそーだ。

けど、三回目ともなるとそうはいかない。

だから三回以上連続して優勝した人は、その大会の第一位、というタイトルを所持するに至り、周りから『連続優勝者（タイトルホルダー）』と呼ばれるのである。

聞いた話では、その称号を持ってさえいれば、連続四回目の出場時は決勝戦だけを戦えばいいらしい。

ただ、連続四回目の大会に出場しなければその称号は消えてしまうので、次からは毎年参加しなくてはいけないというプレッシャーがあるのだそーだ。

まぁ、そんなタイトルなんてあたしには何の関わりもないし、そういう人と会うこともまず無いだろうとその時は思っていたのだが……

いたのですね。何気に。

……てゆかアディ姫。そこまで強かったのか……

あたしは口と手を必死に動かしながら、初めて知った大変な事実を整理していた。

ええ。なんたって、あたしはズノー派の女ですから、考え事だってするのですよ。もぐもぐもぐ。

「おら、嬢ちゃん。眠りながら喰ってたら口の周りが大惨事になるだろ？」

ちっけいな！

空になった大皿を別のと取り替えてくれながら、バルバロッサ卿が大変失礼なことを言う。あたしはそちらに口を尖らせてみせてから、次の大皿を猛然と攻略していった。

じつに丸一日ぶりに再会したバルバロッサ卿は、やはりいつも通りに熊だった。

相変わらずの巨体に、特注でしかありえない礼服。これが意外と似合っているのが王宮の七不思議である。

とはいえ、なんだかいつもよりこざっぱりした顔になっていて、そこらへんはやっぱりいつもと違っていた。

まぁ、実家の人間がよってたかって仕度を手伝ってくれるからなのだそーだが。

髪の毛とかも綺麗に整えられちゃって、初日の夜会仕様よりもずっと人間らし……いや、げふんげふん……男前があがっていた。

ちなみに、バルバロッサ卿のパートナーや実家の家族は、会場には来ているものの、すでにダンスホールから出て行ってしまっているので、チラとも見ることはできなかった。

入るときはパートナー同伴でないと駄目だが、出る時は別にそーでもないらしい。

（……なるほど。それで、控えの間にパートナーのいない人も集まるんだな）

即席でもパートナーになってしまえば入れるのなら、それを目当てに集まる人がいても不思議では無いだろう。

……それにしても、こんなに一生懸命もぐもぐ考え事をしているあたしをごっくんこ居眠りしているとは何事ですかバルバロッサきぅ……

「……疲れてんなら、素直に寝たほうがよくねぇか？」

ちっけいな！！

ちょっぴり意識が遠のきかけたのを無理やり戻して、あたしはバルバロッサ卿にキラリと光る目を向ける。

次の深皿を用意しながら、ケニードがそんなあたし達に笑って言った。

「ベルの場合、寝るよりも前に食べないと回復しなさそうな気がしますね」

もちろんですとも！

ペロリと平らげた大皿を片づけて、あたしは両手をテーンッと差し出した。

「ご飯は大事なのですよ！」

「……それは『そのとおり』という返事のかわりか？」
肉の脂でテリテリになってるあたしの両手を拭いて、バルバロッサ卿は遠い眼差し。
拭き終わったあたしの両手にケニードがすかさず深皿を乗せてくれた。
ずぴずぴずぴ。
「……こんなに豪快にスープを飲む姫ってのは、嬢ちゃんが初めてだろーなぁ……」
ずぴぽぽぽ。
バルバロッサ卿のぼやきを無視して、あたしはひたすらスープを飲む。
ほとんど一息に飲み干すと、キューキューいってたお腹もようやく収まってきた。
「ぷはぁ！」
「いい飲みっぷりだ」
おっと口を拭かれました。むぎゅむん。
「ベル。だいぶ食べたけど、まだ食べ物いるかい？」
床に積み上げられた皿を数えながら、ケニードが尋ねてきた。
バルバロッサ卿に口を拭いてもらったあたしは、すぽんと腹を叩いてみせる。
「腹八分目なのです！」
「……これで腹八分目か」
ケニードと同じく皿を数えていたバルバロッサ卿が、なにやら思うところがありげな声で呟く。
「おじ様は、腹八分目ぐらいでやめておかないと、体に悪いと言っていたのです」
「……いや、それは腹八分目ギリギリまで食えってことじゃねェと思うぞ？　たぶん」
三十三まで数えて、バルバロッサ卿はやめたやめたと言わんばかりの顔でぼやいた。

「……俺より喰ってんだなぁ……嬢ちゃんは」
バルバロッサ卿は意外と小食のようだ。
「まぁ、それはともかく。……とりあえず、これ以上はもういらないってことだね？」
「あい！」
笑いながら問うてくるケニードに、あたしはしっかりと頷きをかえす。
そうして、座っていたソファから床にピョンッと降りた。
アウグスタの言葉通り、ケニードとバルバロッサ卿が大量のご飯と一緒にこの休憩所に入ってきたのが約十分前。
それから延々ご飯を食べていたのだが、その間に、レメクと一緒に一旦門の紋章で姿を消したアウグスタは、会場の入り口から悠々と登場あそばされたらしい。
初日と違って『国王陛下のおな～り～』とかゆー知らせは無いのだが、ざわめきと人の動きでなんとなくそれがわかった。
ちなみに、今現在、王宮の門のところにいるであろうポテトさんのかわりに、レメクがアウグスタをエスコートしているようである。
クラウドール卿だ、とか言う囁きが聞こえていたから、まず間違いないだろう。
エエ。レメクの名前に関しては、あたしは地獄耳なのですよ！
「しかし、休憩所でメシ喰ったら部屋に戻れって……嬢ちゃん、夜会に何しに来たかわからねーなぁ」
食後の一服として美味しい紅茶を淹れてくれながら、バルバロッサ卿が嘆息をついた。
熊の手にあると、あたしには大きいはずのポットがちっちゃく見えるから不思議だ。
「おじ様は、場の雰囲気に慣れさせたかったみたい。初めてだと、どうしてもカチコチになっちゃうから、空気にだけでも慣れておきましょう、って」
「……まぁ、今はまだダンスがどうとか言う状態じゃないしな。場

数を踏ますっていう意味じゃ、正解か」
「でも、何もなければずっと一緒にいたかったんだと思いますよ。公爵のことがなかったら、延々抱っこしたまま会場をぐるぐる回ってたんじゃないですかね」
「違いねぇ……」
なにか面白い想像でもしたのか、バルバロッサ卿がクッと笑いを噛み殺す。
「まぁ、けどよ、お披露目自体は初日にやってるから、そこまで嬢ちゃんを連れ回す必要は無いわけだよな」
「そうなんですよね。他国に花嫁に出すつもりなら、祭りの間中顔を出しっぱなしにしておいたほうがいいでしょうけど、ベルは嫁ぎ先がもう決まってる状態ですし」
「だよなぁ……」
頷いて、バルバロッサ卿は床の上でちびちびお茶を飲んでいるあたしに苦笑した。
「てことは、最終日もここに籠もって夜会の様子だけ見て終わる可能性があるわけか？」
「それはどうでしょう？」
立ったまま優雅にお茶を飲みながら、ケニードは首を傾げる。
指に後遺症があるためか、若干、指が強ばっているような印象を受けたが、あたしはあえてそのことについて何も言わなかった。
そういうのをいちいち指摘されれば、きっとケニードもしんどいだろう。
「毎年、最終日は何らかの余興があるでしょう？」
「あー。あったな、そういえば。去年は紋章珠のつかみ取りだっけか？」
……ナンダ。ソレハ。
思わず疑問イッパイな目になったあたしに、ケニードは笑って言う。
「風の紋章で作った球体の中にね、紋章珠を入れて会場中に放った

んだ。ちょうど大人の目の上あたりでふわふわ浮く感じだったかな。それが、そこら中に漂っていたんだよ」

「で、参加者はそれを好きなだけ持って帰っていい、ていう形だったんだよな、確か」

ほぅほぅ。

背のちっこいあたしには、なかなか難しそうなゲームである。

「水の紋章珠が一番人気でな。けっこう血眼になって集めてるヤツがいたよなぁ……」

「水不足の領地では、かなり助かる品ですもんねぇ」

「魔力と知識さえあれば、他国人でも使えるからな。それに、持って帰ればそれを研究できるしで、他国からの賓客もけっこう必死で集めてたな」

「……そんなのを大盤振る舞いしちゃって、大丈夫なの？」

なんとなく心配になって、あたしは思わず声をあげた。

すると、二人はなんとも人の悪い笑みを浮かべて頷きを返す。

「罠がね、あるんだ」

「アタリとハズレがある、って形でな。紋章珠が入ってる球体は、翌日にならなきゃ割れない仕組みになってるんだ。で、皆が喜び勇んで球体を持って帰り、翌日それが割れた時、アタリだったら紋章珠。ハズレだったら、中に入ってたはずの紋章珠の効果と同じものが炸裂するっていう罠だ」

「僕、ちょうど水の紋章珠を手にしたんだけど、ハズレだったらしくて、翌日、割れた瞬間にびしょぬれにされたんだよね」

「あー……水はそうなるんだよな……。つーか、水瓶の中にほうりこんどきゃ、ちょっとは水の足しになったんじゃねェのか？」

「そうなんですけどねー。水の紋章珠って、クラウドール卿が作ったやつなんですよねー」

……飾ってたんだな。絶対、飾ってたんだな。

「……いっそ罪の紋章珠のほうがよかったんじゃねェか？　あれ、確か相手の罪を暴くっていうシロモノだろ？」

「尋問不要で罪を割り出すんですよね。そういう意味では、真実の紋章珠も人気でしたよね～」
「ハズレだと、内緒にしてた色んなことを勝手にベラベラ一日中喋ってしまうという、恐ろしい罠が炸裂したらしいけどな」
……なんか、お宝を手に入れた後も大変そーなゲームだったんだな……
罠をくらった人々のその後がとても気になったが、後ろめたいことのない人間なら罠でも何でもなかっただろうから、それはもう人次第というやつなんだろう、きっと。
……ええ。あたしだって全然怖くないですよ！？　本当です！
ちょっと効果切れるまで丸一日おトイレに籠もらせていただきますが！
「ま、いくつかは本物の紋章珠だから、上手く手に入れれた連中はホクホクだっただろうなぁ」
「今年は何の余興があるんでしょうねぇ。実は密かに楽しみだったりするんですが」
「俺ぁ三年前の全領地特産葡萄酒飲み比べ大会がいいなぁ」
「あ！　それなら僕は、五年前の魅惑のドルチェ大展覧会のほうがいいですね！」
「……それ、レメクが特別に手伝ってたやつだろ」
「ええ！　もちろん！」
なんか夢イッパイな目で頷くケニードに、バルバロッサ卿は苦笑を零した。
「つーかおまえさん、今なら頼みゃあ作ってくれると思うぞ？」
「忙しい卿の手を煩わせるなんて、とんでもない！　時々ご相伴させていただけるだけで幸せですしね！」
「……欲がねぇよなぁ、おまえさんは」
じんわりと笑って、バルバロッサ卿は一人こっそりと準備体操をしていたあたしを見下ろした。
「……で、嬢ちゃんはさっきから、何を変な踊りを踊ってるんだ？」

失敬な！
「準備体操なのですよ！」
「……なんの準備体操なんだそりゃ」
おいっちにーさんしー、と前のめり・反り返りを繰り返していたあたしは、大きく胸を張って言った。
「面倒な人が来る前に会場を出ないといけないなら、いなくなっちゃったアルを探しに行きたいのですよ！　そのための準備運動です！」
「……いなくなった……？」
「てゆか、アルって誰だ？」
眉をひそめるケニードとバルバロッサ卿。
おっと。バルバロッサ卿はアルと会ったことなかったんだった！
「バルバロッサ卿は、おじ様の仲間なのよね？」
「まぁ、レメクにゃでっかい借りがあるからな」
頷くバルバロッサ卿を見て、あたしはケニードを見上げる。
「じゃあ、言っちゃってもいいのよね？」
「うん。バルバロッサ卿なら、大丈夫だよ」
「……なんだ。なんか込み入った話か」
「コミコミなのです！」
頷いて、あたしはソファにどっかり沈んでいる（文字通り、沈んでいる）バルバロッサ卿のぶっとい足をよじのぼった。
「アルはねぇ、アルトリートっていう嘘の名前を使ってる、クリンクリンさんなのです！」
「……王宮で、今噂されている、クリストフ王弟殿下です」
一生懸命顔をひきしめ、ひそひそと打ち明けたあたしの後ろで、ケニードが丁寧に丁寧にツッコミをいれてくる。
「そのクリンクリンさんなのです」
しっかりとそれに頷いて、あたしはバルバロッサ卿に視線を戻した。
巨熊もどきは見たこともないほど引き締まった顔で、浅く首を引

く。
「……『本物』か」
太い声だった。
どっしりと腹にくる音には、なにか言葉以上の重みが込められている。
ビックリして口をつぐむあたしの後ろ、ケニードもまた引き締まった顔で重々しく頷く。
「『本物』です。……卿も、猊下も、認めていらっしゃいますから」
「……あの二人が認めたってことは、確定だな」
静かにそう言って、バルバロッサ卿は盛大な息をはいた。
おおっぷ！　髪が吹っ飛ぶかと思いましたよ！
「つーか、この時期に来るってぇのはどーゆー悪巧みなんだか。……おまけに、嘘の名前がどーとかってことは……入れ替えか」
最後の部分は超小声で、ほとんど口の動きだけで内容を読み取るような感じだった。
それもちゃんと読み取って、ケニードは頷きを返す。
「今、背後関係や協力者の洗い出しを行っています。それがすめば、陛下の号令を待って捕縛しますよ」
捕縛。
その言葉に、アウグスタの覇気ある笑みを思い出した。
レメクに、滅ぼすぞ、と告げていた彼女を。
「ところで、ベル」
「の！？」
思わずブルッと身を震わせていたあたしは、突然ケニードに声をかけられて飛び上がる。
「な、なんです！？」
「いや、そのアル……えぇと、本物版クリストフ殿下が、いなくなっちゃった、ってどういうことなんだい？」
……本物版クリストフ殿下。
……名前交換されてるからって、めんどーな呼び名だなぁ……

「なんかね、アウグスタと会ってる最中にどっか行っちゃったの」
「……公式で対面したのか？　二人が」
「んにゃ。この休憩所の中で」
ここ、と休憩所内を指さすと、二人とも珍妙な顔になった。
「……まぁ、目立たなくていいっちゃあ、いいよな……」
「感動の姉弟対面……ですからねぇ」
「でもその途中でどっか行ったってぇのは、どーゆーこった？」
二人の目がこちらに来たので、あたしは胸を張って答える。
「アルのおかーさんに会ってみたかった、ってアウグスタが言ったら、俺は違うとか言ってどっか言っちゃったの！」
「……。あぁ、なるほどな」
「え。今のでわかったの！？」
あたしは思わず驚愕の声をあげてしまった。
我ながら意味不明だったというのに、バルバロッサ卿はあっさり理解したらしい。
「……いや、つーか、名前とりかえて、殿下は別人になってるはずなんだろ？　それなのに、陛下が母親に会いたかった、なんて言えば、正体がバレてるってわかるだろーが」
「……あ！」
言われて、あたしはようやくアルの「俺は違う」の意味を理解した。
そーか……アル……正体バレてないつもりだったのか。
……い、いや、そりゃーあたしはサッパリ気づいてませんでしたけど！
「つーことは、だ。途中でどっか行った、でなく、正体がバレてるのを公爵の関係者に知らせに走った、ってのが妥当なとこだろうな」
「……で、でも！　アルは『よい子』なのよ！？」
ちょっと怖い目になったバルバロッサ卿に、あたしは慌ててアルを弁護した。
しかし、バルバロッサ卿は怖い目のままでゆっくりと首を横に振

る。
「いいヤツだろうが、なんだろうが、王族の名を他者が騙るのに荷担すれば、大罪だ。まして相手に協力的であれば、致命的だな」
「でも……！」
慌てて声をあげるあたしに、バルバロッサ卿はちょっとだけ目元を和らげる。
「嬢ちゃんがそんなに必死になるってぇんなら、そりゃ、イイヤツなんだろーとは思うけどな」
「そう！　アルは『よい子』なのです！」
「レメクはそいつのこと、どう言ってたんだ？」
「『よい子』なのです！」
「……あいつ、嬢ちゃんと一緒にいる間に、なんか変わったんじゃねーか？」
……どーゆー意味だ？
妙に遠い目になったバルバロッサ卿に、あたしも含みを込めた遠い眼差しを向ける。
後ろでケニードがちょっと笑って言った。
「でも、確かにとても『よい子』ではあるんですよ。ぶっきらぼうですけど、優しい子でしたよ。……罪は罪ですけど、クラウドール卿も気にしてますし、あの子の罪は軽くなるといいなぁと思います」
「……レメク至上主義のおまえさんまでそう言うってことは、ちっと重大だな……。よし。そいつが悪い道に転がらないよう、俺もちょっと手ぇ打っておこうか」
「どんな手を打つの！？」
のそっ、と立ち上がったバルバロッサ卿の足にしがみついたまま、あたしはキッと眦を鋭くした。
バルバロッサ卿は男らしい笑みを口に浮かべる。
「ようは、新しい殿下が公爵達と接触しなきゃいい。それを阻止してりゃあ、今より悪い状況にはならねぇだろ」
なるほど！

「それなら、早く行くのですよ！　あたしも行くのです」
よいしょ、とドレスの裾を持ち上げて、あたしは駆け出す準備に入った。
大きな熊の手がそれをムンズと押しとどめる。
「まてまてまてい！　嬢ちゃんが動いたら目立ちすぎるだろーが！」
……巨熊に目立つとか言われると、何気にショックだ……
「だいたい、どこに向かうつもりだ？　普通に考えりゃ、やっこさんは公爵の所に行くだろうが、王宮に慣れた人間じゃないかぎり、このデカイ城で一人を捜すのは無理だ。やっこさんにしてもそれは同じで、案外そこらへんで道に迷ってウロウロしてるかもしれねぇだろ？」
「アディおねーさまが後を追ったから、公爵の所には行けてないと思うのですよ！　そしてアディおねーさまの匂いなら、バッチリ覚えているのです！」
「……アデライーデ姫、か」
なんか空気の塊を飲み込んだみたいな顔で、ボソッとバルバロッサ卿が呟いた。
……おや？
「バルバロッサ卿。アディおねーさまのこと知ってるの？」
「知ってるつーか……うちの武闘派神官の武術指南してるからな、あの姫さん」
……アディ姫……お姫さまなのに、何をやってるんだろーか……
「つーか、匂いを覚えてるっつっても……たどれるのか？　犬みたく」
失敬なッ！！
心持ち不審そーなバルバロッサ卿に、あたしは目をクワッとつり上げた。
「あたしは一度覚えた匂いは絶対に忘れないのです！」
「……いや、覚えてもな……」
「当日の匂いであれば、他の匂いでゴチャゴチャになってない限り、

後を追えるのですよ！」

「……そ、そうか……」

そりゃすげー、まじすげー、となんかココロの遠い声で褒められて、あたしはむふんと勝利の鼻息をはいた。

「だから、今から行くのですよ！　……会場には、怖いオバサンが来るから、出なきゃいけないし！」

怖いオバサン、でケニードが慌てて口を塞ぎ、ぶふっ、と噛み殺しきれなかった笑いをこぼしていた。

「……ベル。それを誰かの前で言っちゃ、駄目だよ？」

もちろんですとも。

「だけど……確かに、問題の夫人達が来るよりも先に動いたほうがいいだろうね。……バルバロッサ卿。行きましょう。僕も、彼には道を違えてほしくありませんし」

「……よっしゃ」

ばすんっ！　とあたしが張り付いていない方の膝頭を叩いて、バルバロッサ卿は野太く笑った。

「じゃー、件の新しい王弟殿下とやらを探しに行くか」

「姿は偽物さんも本物のアルもよく似てるから、間違わないでね？　あたしが匂いを嗅いで正しい方を教えてあげるのです！」

「嗅ぎ分けなきゃなんねぇぐらい似てるのか？」

「うん。似てる」

「似てましたね」

あたしとケニードは頷き、バルバロッサ卿は渋い顔になった。

「……つーか、たぶん、そもそもの発端はそこかもしれねぇな」

……どーゆーことだろ？

「すり替えなんてぇのは、よっぽど互いが似てるか、さもなきゃどっちもが人前に出てない状態でなきゃできはしないんだよ。子供の頃は似てるが、大きくなったら個性が出て全く違う外見になるっていう兄弟とか親戚とかいるだろ？」

「おー……」

なるほど。
「なのに、成人した二人がよく似た外見。……なるほどな。最初から偽物を紹介してりゃあ、なんとかなるとでも馬鹿な考えをおこしたヤツがいたのかもしれねぇなぁ」
「どっちも王様の血筋で、そこらへんは同じなんだけど、やっぱり絶対駄目なんだよね？」
あたしの問いに、二人は厳しい表情で頷いた。
「絶対に駄目だな」
「問題外だよ」
……問題外とまで言われますか……
なんとなくしょぼんと見上げると、真剣な表情で頷かれた。
……本当に、絶対に駄目なんだな……
「それにね、ベル。誰かと『同じ』である者なんて、この世に一人もいるはずがないんだよ」
ケニードは真っ直ぐな眼差しであたしを見つめ、一言一言を噛みしめるように言った。
「人は誰もが世界でたった一人だけの人なんだ。だから、誰かとすり替わったりなんてできはしない」
そうして、彼はふと視線を別の所に向けた。
薄布を重ねた休憩所の出入り口。
わずかに見える光の向こう側にいる、『誰か』へと。
「……してはいけないんだ。絶対に」

17　揺るがざる信念

大広間をこっそりと抜け出すと、そこは夜の静寂が支配する別世界だった。

「はふー……」

華やかな喧噪から離れ、あたしは安堵の息をつく。

「お疲れ様」

そんなあたしを笑って見下ろして、ケニードは周囲を見渡した。

廊下だった。

ただし、大祭初日にも出たことのある中庭側の廊下ではない。その反対側にある、王宮の奥へと続く廊下である。

本来、こういう所には衛兵さんとか警備兵さんとか、そーゆー見張り役がいるのだろーが、今回はいなかった。

理由は簡単で、その出入り口がちょうどあたし達がいた休憩所で塞がれているからである。

「……つーか、変な場所に作ってるなぁとは思ったがな……やっぱ奥の入り口前に設置してあったのか。……悪い連中が逆側から侵入してきたらどーするつもりだったんだ？　こりゃ」

丁寧に扉を閉めたバルバロッサ卿が、周囲を見渡しながらそんな風にぼやく。

かなり広めにとられている廊下には、あたし達以外に人の姿は無い。

扉一枚隔てた向こうでは今も音楽が鳴り響いているというのに、こちら側はシンと静まりかえっていた。

「……なんか……神々の間にいるみてぇだな……」

閉めたばかりの扉を振り返り、バルバロッサ卿はボソッと呟いた。

その言葉にあたしとケニードは顔を見合わせる。

「『神々の間』ってゆーと、いっぱい神様の像が建ってるトコ？」
「『戦勝の間』とも『宣言の間』とも呼ばれている、大戦時代に英雄ナスティアが演説を行った『神託の間』ですか？」
あたし達の言葉に、熊男はのっそりと頷いた。
「おぅ、そこそこ。……なんっか、あそこの気配に似てるんだよな、ここ」
頭を掻きながらぼやくバルバロッサ卿に、あたしは首を傾げた。
「似てる？　あたし、どっちかっていうと、あの神殿の空気はおじ様の屋敷と似てるよーな気がするけど」
「あ？　あぁ、そりゃ似てるだろーさ。どっちも暁の賢者が作った場所だからな」
……暁の賢者サマが？
きょとんと首を傾げると、バルバロッサ卿は厳つい肩を竦めた。
「文献ではそうなってるんだよ。負傷者や魔物の脅威にさらされてるチビどもや、じっちゃんばっちゃんを保護するために、暁の賢者が魔力の高まりやすい場所に結界を張ったんだそーだ。英雄サマが演説ぶちかましたのも、そこが一番安全な場所だったからだな。で、レメクの家っつったら、その暁の賢者が住んでた所だろ？」
……なるほど。
「もともとは『聖霊の森』と呼ばれる場所を模してるらしいな。神々の間は、聖霊の森の祭壇。クラウドール邸は、聖霊の森の中にある集落の家。だから、どっちも似たような気配がするんだろーな」
「ふぅん……」
「……ただな、さっきケニードが言ってたろ？　『神々の間』のことを『神託の間』って。あそこはちょっと特殊でな……巫女の素質のある人間が、時々、本来知りうるはずのない知識や情報を得ることがあるんだよな。忘れさっちまってた昔の記憶や、未来の出来事なんかも読んじまったりするらしい」
ほぅほぅ。
初めて知った知識に、あたしはフンフンと興味深く頷いた。

なるほど、さすがは教皇サマがいる大神殿。神秘的なコトがイッパイつまっているようだ！

……て。ん？

ふと何かひっかかりを覚えて、あたしは一人首を傾げた。

……なんか今、ちょっとひっかかったぞ？

「そういう所なせいか、あそこの結界は他とはちょっと違う感じなんだよな。閉じてる、ってゆーより、浸食されてるっつーか……空間から体の中に何かが染みこんでるみたいな感じでな」

バルバロッサ卿の声に、あたしは慌てて頭を切り換えた。

思い出すのは、あの神殿の独特の空気だ。

何か目には見えないもので満たされていた『空間』。

確かに、あの場所にいる間、何かが満ちて、体に染みこんでくるような感じがした。

そう――まるで世界が染みこんでくるような……

「魔力に満ちた場所ってのは、得てしてそういう感じがするらしい。魔力ってのは世界に満ちた純粋な力だ。魔術が発動する時なんか、特に顕著に現れる。ひどいモンになると時々空間が歪んだりもするらしい」

（それって……）

その言葉に、あたしはチラッとケニードを見上げた。

彼の肩を治している時の、何とも言えない感覚。あの不思議な感覚は、なるほど、魔力とかゆーのが満ちていたせいだったのか。

……てことは、魔力って、何かの気配みたいな感じなんだな。

「……同様に、強烈に魔力の強い『何か』がいるときも、こーゆー感じになるらしい。……俺ァなんか、いやぁな予感がするぜ……」

なにやら微妙な顔になっている熊男に、あたしとケニードはまた顔を見合わせてしまった。あたしも微妙にチンプンカンプンなのだが、ケニードはそれこそサッパリ分からないという顔をしていた。

「……僕にはよくわかりませんが、そんなに特別な感じがするんで

すか？」
　どうやら、彼にはそーゆーサワサワした感じがわからないらしい。
　あたしは周囲を見渡して、ケニードの足をペチッと叩いた。
　とりあえず、感覚以外でハッキリとわかる異様を教えよう！
「会場の音楽が消えちゃってるのです」
「ああ！」
　はたと気づいて声をあげるケニード。
　……今まで気づいてなかったんだろーか。彼は。
「そういえば、やたらと静かだなって思ったんだよね。……そっか。扉一枚隔てただけにしては、この静けさは異様だよねぇ」
　……彼はなかなか暢気な人である。
　とはいえ、少なくとも頭の回転は暢気じゃない。彼はすぐさまバルバロッサ卿に心配げな声をかけた。
「でも、それってどういうことなんでしょうね？　ロードのような別格クラスじゃないとしても、神殿に匹敵するような魔力が満ちてるなんて、普通じゃないでしょう？」
「……そこなんだよな」
　バルバロッサ卿は渋い顔。
　ぶっとい腕を組んで、周囲を用心深く見渡した。
「俺も王宮には何年も足を運んでるがよ……こんな気配を王宮内で感じるのは久しぶりだ。陛下かレメクが傍にいりゃあ、もうちっと詳しくわかったんだろーがな……」
「？　なんで二人がいれば、詳しくわかるの？」
　あたしの素朴な疑問に、バルバロッサ卿は苦笑した。
「陛下にゃあ真実の紋章があるからな。レメクの場合は……あー……なんつーか、魔力系統の関係なら、たいていのものは読みとっちまえるつーか、まぁ、なんだ。そーゆー感じだからな」
　なにか一生懸命言葉を濁しているバルバロッサ卿に、あたしは眉をひそめつつ足下ににじり寄った。
　……よくわからんですよ？　熊さん。

「……オメェの旦那は器用だっつーこった」
よくわかった！
即座に力一杯頷き、あたしはムンと胸を張った。
「おじ様は大変キョーなのです！」
「……違う意味では大変ブキヨーだけどな……」
一瞬だけチョイ遠い目をしてから、バルバロッサ卿はデカイ手であたしの頭をワシッと撫でた。
「ま。ロードがいる以上、下手なモンは王宮に入ってこれねぇだろーからな。もしかしたら、誰かが結界でも張ってるのかもしれねぇし。たいして気にすることもねェだろう」
そう言って、彼はワシワシとあたしの頭を撫でた。
……なんか、華奢な髪留めがちょっぴり悲鳴あげた気がするけど、まぁ、だいじょーぶだろう。……たぶん。
「さて。嬢ちゃん」
「むぉ？」
ちょっと首がもげそうなぐらいあたしをナデナデしてから、バルバロッサ卿はデカイ手をのけた。
「嬢ちゃんの鼻が頼りだ。いっちょ気合いいれて頼むぜ！」
「まかしといて！」
グッと親指をおっ立てたバルバロッサ卿に、あたしもグッとサムズアップ。
そうしてから、フンフンと鼻をひくつかせた。
ふんふんふん……ふんふんふん！
「……こっちなのです！」
ビカッと目を光らせ、左側に伸びる廊下の奥を指さすと、男二人から力のない拍手が。
「……本当に嗅ぎ分けるんだなァ……嬢ちゃん……」
「メリディス族の意外な特技を見ましたよネー」
……なんですか！　そのちょっと夢壊れてガッカリみたいな顔は！！

失礼な男二人にペチッと一撃喰らわせてから、あたしは匂いのする方に駆けだした。
置いていってやるのです。
遅れたって知らないのです！
「おーい、嬢ちゃん。急ぐと転ぶぞおまえさんは」
「ベル。危ないよ。裾踏んで飛ぶよ」
余裕で追いついてきやがる大人が二人。
ぬぁああ！　ドレスでさえなければ！　踵の高い靴でさえなければ！！
「つーか、嬢ちゃんは指示だけして、俺等が走ったほうがよさそーだがなぁ」
「そうですね」
短い足でがんばっているあたしに対し、男二人はなんとも気配りにかけたコトを言う。
「ほら、嬢ちゃん。こっち来い」
「いらないのです！　あたしだって走るのです！」
「つーか、急ぐんだろうが。残念だがなぁ、嬢ちゃんの足だと、俺等にゃ駆け足程度なんだわ」
「……ごめんよ、ベル。ジョギングにしかなってないんだよ……」
かえすがえすも失礼な二人に、あたしはギラッと一瞥を喰らわし

すっぽーんっ！

「「「……」」」
ものの見事に裾踏んで飛んだのだった。

※　※　※

夜の王宮に足音が響く。

「次はどっちだ！？」
「右っぽい」
どたどたどた。
「次はどっちだ！？」
「左っぽい」
どたどたどた。
「次はどっちだ！？」
「真っ直ぐ直進」
「窓越えろと！？」
あたしの指示に、なぜかバルバロッサ卿が絶叫した。
夜の王宮、二階、どっかそのへん。
細かい場所は不明なれど、やたらと広大な城の一部には違いない。
あの大会場から出て以降、あたしの指示のもとえんえん城をかけずり回っているのだが、あたし達はいまだにアディ姫もアルも見つけることはできていなかった。
……どんだけ力一杯逃げたんだろーか。アルってば……
というか、これはもう、普通に迷子になってるとかゆーレベルじゃない迷走っぷりなのだが。
「なぁ、嬢ちゃんや」
体のちっこいあたしを腕の上に座らし、バルバロッサ卿が真っ直ぐ直進した先の窓辺で声を落とす。
「……ほんっっっとーに、窓越えた先から匂いがしてるのか？」
「うん」
その彼に向かって、あたしは力一杯頷いた。
匂いを辿って走るうち、いつのまにか二階にたどり着いていたあたし達。つまり、窓の外は何もない空間が広がっていて、地面までチョイ距離があるという状況だ。
……でもねぇ、ほんっっっとに、匂いこっちからしてるのよねー
……
あたしは引きつった顔をしているバルバロッサ卿と、窓の外を覗

き込んでいるケニードを見比べ、開け放たれたままの窓辺を指さした。

「そこにね、匂いがついてるの。でね、右にも左にも曲がってないらしくて、そっちからは匂いがしないの。だから、外に出たのは間違いないはずなの」

「……えらく元気な王弟殿下なんだな……」

まぁ、ふつー、二階の窓から飛び出したりはしないだろーけど。

「……というか、これ、足場がありますね」

窓から身を乗り出していたケニードが、窓枠に足をかけながらそう言った。

慌てて窓に駆け寄るあたし達の前で、彼はひょいと外に飛び出す。

「「あ！」」

あたし達は思わず声をあげてしまった。

が、ケニードの体は半分ほど沈んだところで、ピタッと落下を止めてしまう。

「ここに足場があるんですよ。バルバロッサ卿だとちょっと苦しい感じですけど、人一人通れるぐらいの足場ですよ」

「……て、こたぁ……そこを走って行ったと考えるのが妥当なのか……？」

釈然としない顔で窓をまたぎ、足下にある『足場』とやらを見てバルバロッサ卿は呻いた。

「……俺にゃあ、ちっと狭いな……」

……そりゃまー、こんだけデカイ体じゃーねぇ……

実際、ケニードが言う『足場』は、あたしぐらいのサイズなら余裕で通路がわりにできる広さだった。

細身のケニードやレメクだって平気で歩けちゃうだろう。

そもそも通路として作ってるわけじゃないんだろうから、バルバロッサ卿みたいな巨物の通行は想定外に違いない。

「よっぽど切羽詰まってなければ、こんなトコ通らないと思いますけどねぇ。……もしかして、追いかけたアデライーデ姫に気づいて

逃げてたんでしょうか？」
　非常にありえそーなことを言うケニードに、しかし、ケニードに続いて窓の外に出たバルバロッサ卿は「まさか」と言わんばかりの表情になった。
「……あのアデライーデ姫の隠行を見ぬくのか？　他国に嫁がれたナザゼル殿下ほどじゃないにしても、かなりの腕前のはずだぞ？」
　おんぎょー、ってナンダロウか？
　前にレメクも言ってたよーな気もするが、説明してくれないので意味がサッパリだ。
「俺等でもたまにだしぬかれちまうぐらいの腕前だっつーのに……新しい王弟殿下は、もしかして何かの修行でも受けてたっつーのか？」
　ハテナを飛ばしているあたしを抱え直して、バルバロッサ卿は遠い目。
　アディ姫に抱えられていったアルを思い出し、あたしは真顔で手を横に振った。
　ナイナイ。それはナイ。
「アルにはそんなカッコイイスキル無いのです！」
「いや、えーと……その……そこまでヒドくはないと思うけど、まぁ、普通の技量じゃないですかね。特別鍛えてるって感じはしませんでしたから」
「じゃあ、あの特別鍛えまくってる姫さんの尾行にゃあ気づかねェんじゃねーか？」
　不思議そうにぶっとい首を傾げる熊に、ケニードは軽く笑う。
「『龍眼』の持ち主なんですよ。今代の」
「『龍眼』！」
　さらりと言われた言葉に、バルバロッサ卿がギョッと目を剥いた。
「ちょいと待て！　王家の血筋で『龍眼』て……！　何か？　そいつは『真実の目』の持ち主ってことか！？」
「アデライーデ姫の言葉から推理すれば、そうなるんだと思います」

「な……っ！」
「彼女の『染めた金髪』を前にして、どこが金髪なんだ、と言ってましたから」
「やべぇじゃねーか！」
チョコチョコとカニ歩きで通路を移動しながら、バルバロッサ卿は血相を変えて叫んだ。
「あいつ、会っちまってんだろ！？　『真実の目』にゃ、紋章の目くらましだって通用しねぇってのに！」
それがどういう意味なのかはよくわからないが、バルバロッサ卿にとっては一大事であるらしかった。
そう――カニ歩きでさえなければ、先を行くケニードを締め上げてしまっていたかもしれない。
……声と顔は緊迫感あるのに、格好がどーにも緊迫感ないなぁ……
「落ち着いてください、バルバロッサ卿。彼は大丈夫ですから」
「って……なァ、おい……」
なにやら切羽詰まった顔をしているバルバロッサ卿に、ケニードは自信満々に笑って言った。
「本当に大丈夫なんですよ、バルバロッサ卿。会えばわかります。なんていうかね、すごい真っ直ぐな子なんですよ。ちょっとベルに似てる感じで」
「……あたし？」
突然話しをふられて、あたしはキョトンと首を傾げた。
ちなみに、ここで大きく動いたりしてはいけない。
そんなことをすれば、あたしを抱えてくれているバルバロッサ卿ごと地上に落っこちてしまいそうだからである。
「人の痛みを自分のことのように感じたり、相手のことで一喜一憂したり……なんていうんですかね、人の裏側に慣れてしまった僕らみたいな、そういう変な曲がり方をしてないんですよ。びっくりするぐらい真っ直ぐで……」
「……」

「……だから、彼なら大丈夫だと思うんですよね。今はまだ公爵家との繋がりが切れてないから、どっちの陣営になるんだろうかって不安なとこもありますけど……」

「……」

バルバロッサ卿はチョコチョコ移動しながら、深い深いため息をつく。

真横に進んでいく視界を見ながら、あたしはそんなため息を盛大に浴びた。

「……おまえさんがそこまで言うなら、そうなんだろうって信じたいけどな……」

「たぶん大丈夫だと思いますよ。直感で判断するベルも『よい子』と言ってるわけですし」

「……つーか、俺ぁ、あのレメクまで『よい子』とか言い出すとは思わなかったがな……」

はぁあ、という、さらに盛大なため息を頭に浴びて、あたしは小さな掌でバルバロッサ卿の腕を叩いた。

「なにを心配しているのかはわかんないけど、バルバロッサ卿は心配性なのです！」

「……けどなぁ、嬢ちゃんや……」

「会えばわかるのです！　会ったことないから、イロイロ不安に思うのですよ」

「そういうんだけじゃねェんだけどな……」

あたしの頭をワシッと撫でて、バルバロッサ卿はチョコチョコ横移動しながら嘆息をつく。

「……人ってのはな、状況やしがらみなんかで、いつだって簡単に人を裏切ったりするもんなんだ」

深い声でそう言って、バルバロッサ卿はふと遠い目になる。

――ここにはいない、誰かを見るような眼差しに。

「……いつだって、な……」

※　※　※

二階、窓の外側通路は、ある程度進むと行き止まりになっていた。
「……おーい、じょーちゃーん」
って、ああっ！
なんかバルバロッサ卿の視線が頭上からッ！！
「嘘なんかついてないわよ！？　ほんっとーに、アルとアディ姫の匂いがするんだから！」
ビシビシッと匂いのする方向を指さし、あたしは頬を膨らます。
先に通路の行き止まりにまでたどり着いちゃってたケニードが、周囲を見渡しながら頭を掻いた。
「……まいったなぁ……、これ以上先に進むとなると、下に飛ばないといけないみたいですよ」
下に。
あたしとバルバロッサ卿は揃って足下を見下ろす。
地面までの距離は、あたしの体の何倍もある。
「腹ぁくくって、飛び降りるか？」
ひぃぃ……！！
「いや、一気にいかなくても、飛び石みたいに段階を踏んで降りれますよ、これ」
さすがにブルッたあたしに、ケニードは苦笑。
チョイチョイとケニードが指さす方向を見れば、なるほど、なにかの出入り口らしい場所の屋根とかが、イイ感じに段差になっていた。
「……あれを伝って降りたのか……」
ふんふんふん！　ふんふんふんっ！
「アルの匂いがするのです！」
「……絶対、アデライーデ姫のことに気づいてますね。というか、どれだけ必死に逃げてるんでしょうかねぇ……これ」

そろそろと降りはじめしているケニードを見ながら、あたしは鼻をひくひくと動かす。
なかなか強めの匂いだ。
そろそろ追いつけるかもしれない！
「ゴールは近いとみた！」
「……それが本当ならいいんだがよ……」
順番を待って下りはじめたバルバロッサ卿は、あたしを頭の上に移動させながら呆れ顔だ。
「しっかし、逃げる殿下も殿下だが……追いかけてるアデライーデ姫もどーなんだろーなぁ」
「どう、って？」
あたしの問いに、バルバロッサ卿は肩をすくめる。
「あの姫さんの実力からすれば、追い抜いて取り押さえるなんざ簡単なこった。わざわざえんえん追いかけっこする必要なんざねェと思うんだがなぁ」
「……追いかけっこしたかったんじゃない？」
「……少なくとも、こういう時に、そーゆーオモシロイコトはしねェ姫なんだがな」
バルバロッサ卿の声に、あたしは目を瞠った。
……正直に言って、ちょっと意外だ。
常にオモシロイコトばっかりしてそーな姫に見えたのだが。
「あの姫さん、むちゃくちゃ頭がイイからな。遊んでいい時と、そうでない時の区別はきっちりつけてるんだ。……昔っからそーだったからな」
「……昔から？」
「あぁ、ちっこい時分……そうだな、今の嬢ちゃんぐらいの頃には、そこらの大人よりも遙かに分別があったな」
「ほぇ～……」
アディ姫の子供の頃を想像し、あたしはちょっと眉をひそめる。
……なにか、アヤシー器材を抱えてニヤリ笑いしてる姿しか想像

つかなかった。
「その当時から、今みたいにケンキュー熱心だったの？」
「ケンキュー……？　……いや、つーか、すげぇ勤勉だったのは確かだけどな。あの頃は薬学や医術、それに魔術系統の勉強に没頭してたんじゃなかったっけかな」
「薬学とか、医術……？」
「おぉ。それも、王宮のトップクラスの連中に師事するぐらいのレベルだったな。……つっても、あの当時、まともに会話できるのがレメクや陛下ぐらいしかいなかったっぽいから、ほとんど独学だっただろーが……」
「……ほぇ？」
意味がわからずに、あたしは首を傾げた。
そんなあたしに、バルバロッサ卿は頭を掻く。
「うー……なんつーかな、あの姫さんとは、他の連中、会話にならねぇんだよ」
いくつかの段差を降りた先、地面への最後の関門の如き柱をずるずると滑り降りながら、巨熊は嘆息をつく。
「……ぁー……例えば、だな……会話ってぇやつの流れが、一から十までの段階であるとする」
熊の背中にしがみついた格好で、あたしは「ふんふん」と頷いた。
「普通は、一から十まで全部言うもんだ。時々、全部言わなくても相手がピンときて、飛び飛びで話しが進んじまうこともあるけどな」
「ふむふむ？」
「それが、あの姫さんの場合、一つ言えば十飛び越えて十一にまで話が進む。自分の家にオレンジの木があって、それがなかなか美味で、その様子を見ていた隣の家が同じ木を植えた、っていう状況の場合、『隣の家が木を植えました』つったら『オレンジが食べたかったのね』って、いきなりそこまで一気に話が飛ぶ」
おお？　中間の内容が無いぞ？
「たいていの噂や、相手の事情は全部頭の中に入ってるらしいから

な。それで、最初の一言で会話の内容をはじき出しちまうらしい。その回転の速さに周りがついていけねぇんだよな。……なんつーか、まだ最初しか話してないのに『わかった』とか言われたら、普通は『はぁ！？』ってなるもんだからな」

「そ……それはそーかも……」

『龍眼』をあっさりと看過した時のことをを思い出して、あたしはちょっと眉を下げた。

ほんのわずかな情報と、直感。それだけで答えを導き出してしまうのだから、彼女はそーとー頭がイイのだ。

「レメクや陛下は、いきなり話が十も先に飛ぼうが、気にせずそのまま会話を進めていく。けど、普通の奴は違うだろ？　相手が理解してるかどうかは、ちゃんと語って、それを相手が聞いてるのを確認して、初めて『自分の話を理解してもらった』っつー認識になるわけだ。それがほとんど無い状態だったら、本当に理解しているのか、と疑う。……姫さんはそーゆーのが煩わしかったらしくてな。あんまり人と話さなかった」

「……」

「……難しいもんだよな。姫さんを信じていれば、あぁ理解したのか、ですむ話なんだがな。なかなか、そうはいかないもんだ」

どん、と重い体を地面に降ろし、バルバロッサ卿は汚れのついた両手を叩く。

その背中からぴょんと飛び降りて、あたしはフンフンと鼻を鳴らした。

……おや？

「姫さんも一生懸命だったからなぁ。一生懸命すぎて、相手の心の機微になかなか気づけなかった。……そういう意味じゃあ、まだ子供だったしな。なんつっても、当時の姫さんはまだ九つかそこらだ」

ガシガシ頭を掻いて言うバルバロッサ卿に、あたしはソワソワと体を揺らす。

二階から降りて来た先は、巨大な円柱が並ぶ通路の端だった。

中庭と外庭を分けるような通路で、柱の一つ一つがかなり太い。人間なんて軽く二、三人隠れちゃいそうな太さに、あたしはチラチラとバルバロッサ卿にアイコンタクトを送った。

が、それに気づかなかったのか、バルバロッサ卿は憂鬱げなため息をついて俯く。

「子供の時間ってのは、案外短いもんだ。俺もそうだったが……姫さんも、あんまり子供の時間を過ごせないままだったんじゃねェかな」

言って、彼はそのままあたしを見下ろした。

見上げた先にある巨熊の瞳は、ひどく深い色をしている。

「……嬢ちゃんを拾った時な、レメクがそれをやたらと気にしてたんだよな……。おまえさん、ちっこいナリのくせに、一生懸命背伸びしてただろ？　働かなきゃいけねぇって、そのことで頭いっぱいで」

「……」

「あいつも、俺も……考えれば、ここにいる連中のほとんどが、子供らしい時間を過ごしてねぇんだ。だから、おまえさんを拾った時、せめておまえさんだけは子供の時間を大事にしてほしい、ってな……皆が思ったもんだ。実際におまえさんを拾ったレメクにとっちゃ、なおのことだったんだろうな……」

しみじみと言われて、あたしはジッとバルバロッサ卿を見上げた。

……あたしは覚えてる。

時を止めることはできないから、いつか必ず大人になるから、だから子供である今を大事にしてくれと言った人の瞳を。

「……バルバロッサ卿は、子供の時間無かったこと、後悔してるの？」

あたしの問いに、バルバロッサ卿は男臭い苦笑をこぼす。

夜に沈んでいる城を見上げ、その瞳に懐かしさを込めて、彼はゆっくりと首を横に振った。

「……後悔はねェな。最初はどうあれ、結局は俺が選んで進んでき

た道だ。……けど、少しだけ、ああすればよかった、こうしたかったっつって……思っちまうことがある」

「……」

「……未練ってやつだな。過ぎちまったことに対して、『もしも』を並べたってどーにもならねェ。それがわかってても、ついつい思っちまうのが未練だ」

「……未練と後悔は違うの？」

あたしの素朴な疑問に、バルバロッサ卿は小さく笑った。

「どうだろーなぁ。俺ぁ違うと思うが、もしかするとたいした違いはねェのかもしれねぇな。……俺ぁ、もともと体が弱くてな、ガキの頃はひょろひょろのモヤシみてぇだった」

……。

「どぇえええ！？」

思わずあげたあたしの声に、何故か男二人がギョッとなる。

「どういう声あげてんだ嬢ちゃん！」

「……ベル。今のはちょっと、女の子としてどーかと思うよ？」

「い、いや、だって！　だってバルバロッサ卿って……！」

あたしは驚愕に目をひん剥いて、ドンと聳えるバルバロッサ卿を見上げた。

いつ見ても巨漢を通り越えて巨熊にしか見えないこの男が！

人間の大きさの限界にチャレンジしてるよーなこの男が！

ひょろひょろのモヤシだったって……！？

「……いや……なんつーか……今じゃあ、誰も信じてくれねェ話しだがよ」

ぼりぼりと頭を掻いて、バルバロッサ卿は口の端をひん曲げた。

「俺が神殿に放り込まれたのは、そもそもそのせいだからな」

「……へ？」

「うちの家は、代々将軍職を賜るぐらい武術に力を入れてきた家だ。『我らは王国の盾であり剣である』っつーのがうちの家訓でな。将来将軍になって、国民を守るのが我が家の仕事だという家だった。

……そんな中じゃあ、病弱でひょろひょろの俺はお呼びじゃなかったってわけだ」

「……そんな……」

皮肉げな微苦笑を浮かべて言うバルバロッサ卿に、あたしは呆然と立ちつくした。

……昔、思ったことがある。

こんなに立派な大男が、どうして大神官なんかやってるんだろうかと。

お家は偉い武人さんだというのに、どうしてそっちの道に進まなかったんだろうかと……

「……小せぇ頃はよ、悔しかったっつーか、情けなくてたまらなかったな。自分がいらない人間扱いされたような気がしてな」

見上げる先で、並はずれた大男はほろりと笑う。

「……けどよ、悪いことばっかりじゃなかった。いいやつとも知り合えたし、いろんなことを学べれた。それに、神殿ってのは治癒魔術の最先端を担ってやがる。生活も俺の体にあってたらしくてな、あっちにうつってから、少しずつ体も丈夫になっていった」

「……」

「それを狙って俺を放り込んだのかもしれねぇ。……そう思えるまでにだいぶ時間はかかったけどよ。少なくとも、あの当時、がむしゃらに寝る間もおしんで自分を磨いたのは、間違いじゃなかったと思うぜ。楽しみの少ない、今思えば無駄だらけの子供時代だったけどな。……全部、ちゃんと活かされてる」

「……バルバロッサ卿」

あたしの声に、バルバロッサ卿は笑った。

いつもと同じ強くて男臭い笑みで。

「だからな、後悔ってぇのとはちっと違うんだろーと思うわけだ。なにかの拍子に思い返した時、どうにも虚しいような悲しいような、変な気分になることもあるけどよ。……あの時、俺を支えてたものを含めて、全部今の俺に必要だったものだからな」

だからこそ、それはきっと、本当の意味では唯の一つも無駄ではない。

……そして、だからこそ、『後悔』は無いのだ。

「揺るがざる信念をもって進めば、どんな道でも自ずと開かれる。そして進んだ先で振り返った時、後悔の無い道であったと思うことができるんだそうだ」

そう締めくくって、バルバロッサ卿は大きく息を吐いた。

そうして、ゆっくりと太い円柱の向こうに視線を投じる。

ひどく静かな眼差しで。

「……姫さんらは、どうだい？」

18　その人にとっての禁忌

「あやや～。やっぱ気づかれた～」
柱の影から暢気な声をあげて出てきたのは、眩いばかりに美しい姫君だった。
口さえきかなければ妖精のように美しいアディ姫は、あたし達を見て大きな胸を張る。
「やるじゃない、バルバロッサ卿～。探索能力アップしちゃった？」
「……つーか、ふつーにしか隠れてなかったでしょーが」
……ふつーにしか、って、ふつーじゃない隠れ方があるんだろうか？
疑問に首を傾げているあたしの前で、アディ姫は左手に掴んだモノを引っ張りながらこちらへと歩み寄る。
無理やり引っ張って来られているのは、この上なくぶすくれた表情のアルだった。
「アル！　無事だったんだ！」
「……無事じゃねェっつーか、どーゆー意味の『無事』なんだ？
そりゃ」
「なんとなく！」
ピコッと飛び跳ねて答え、あたしはアルの体によじ登った。なぜかあちこちに土やら草やらがくっついているが、逃げてる最中にコケでもしたんだろーか？
「おまえな……女の子なんだからよ、男の体によじ登るなよ……」
なにやら疲れた声で言うアルに、アディ姫がニヤリと笑って掴んでいた手を離す。
「はっはぁ～？　そっかー。アルルンは逆に女の体によじ登りたいのだね？」

「誰がンなコト言ったよ！？　つーか、お前も姫なら姫らしい言動しとけよ！　普通に変態オヤジだろうが！」
「失敬ね～。これだけ立派なモンぶらさげてる女に対して～」
「言動が変態オヤジだっつってんだよ！　おまえ以外にそんなオヤジ言動してる姫なんていねェだろーが！」
アルの一言に、アディ姫は真顔であたしをビシッと指さした。
「そこに」
「どういう意味！？」
なんという失礼を言うのだろうか！　アディ姫は！
しかも見たことないぐらい真剣な顔ですよ！？
言われたアルはといえば、なんとも口惜しげな顔でギリリと歯を鳴らす。
「ちみっちょか……くそ……ぐぅの音もでねェ」
「失礼なーッ！！」
あまりにも失礼なアルに、あたしはベチンとその背中をぶったたいた。
なんか「うごっ！？」とか叫んでよろめかれたけど……えぇい！
なんて大げさなッ！
「くそっ。おまえな、自分が変な馬鹿力もってるって自覚あるか！？　ちったぁ考えて叩けよ！」
言いながらあたしの頭を乱暴に撫で、ふと、アルはバルバロッサ卿に目をとめた。
（あ！）
あたしは焦った。
偽王弟に協力しているアルに、バルバロッサ卿はキビシー意見を持ってたはずだ！
「あっ、あのねっ、アル……」
「で……っけェ……」
そんなことを知らないアルは、バルバロッサ卿に対しやたらと暢気な感想を言う。

……いやまぁ、あのデカイ体を見て何のリアクションもなければ、かえってオカシイと思うけど……

「あのヒトはね、バルバロッサ卿ってゆーの！」

「……バルバロッサ……って、軍団長（レガトゥス・レギオニス）の、か？」

……レガトゥスほにゃらら、ってナンダ？

きょとんと首を傾げるあたしに、アルも「知らねーのか？」と首を傾げる。

てゆか、ショーグンとかゆーんじゃないのかな？

そんなあたし達をニコリともせずに見ていたバルバロッサ卿は、ジッとアルを見つめたまま、慎重な声で言った。

「……王弟殿下であらせられますね？」

その瞬間、アルの顔がひきつった。

バルバロッサ卿はそれ以上何も言わず、ただ、一瞬たりとも気を抜かない構えでひたとアルを見つめている。

ケニードとあたしは、そんな二人を固唾を呑んで見守った。

アディ姫も神妙な面持ちで……　……おや？

「……そこのバルバロッサ卿は、軍団長じゃなく、大神官よ」

硬直した面々に構わず、アディ姫はズイとアルの前に立ち、肩越しにアルを振り返って無造作に言葉を放る。

「そして、裁判官でもあるわね」

「裁判官……！？」

アルは息を呑んだ。

ギョッとしたその顔に、あたしはキュッと唇を噛む。

そう。バルバロッサ卿は裁判官なのだ。

レメクみたいにその場でちゃっちゃと一人裁判しちゃえるよーな力はないけど、三人揃えばサクッと人を裁けちゃう人の一人なのである。

バルバロッサ卿は「得たり」と言わんばかりの顔で笑った。

「『裁判官の問いに対しては常に真実を述べなくてはならない』『語られた言葉は全て証拠として提出される』……意味はおわかりか

と存じますが」
「……ッ」
言葉をつまらせたアルに、あたしはよじのぼりを再開しながらバルバロッサ卿を「メッ」と睨む。
「アルを脅しちゃ駄目なのです！」
「……嬢ちゃん……俺ぁ事実を言ってるだけなんだがよ？」
「怯えてるってことは、脅してるってことです！」
「……まぁ、違うとも言えねェが」
ぼりぼりと頭を掻いて、バルバロッサ卿はため息をついた。次いで、アルとの間に立ちはだかっているアディ姫をチラと見る。
「……姫さんもなぁ……威嚇せんでもええだろーに」
「んふ」
なにやら満面笑顔っぽいアディ姫の気配。
「この程度で威嚇なんて、チョロいわよぅ？」
「いつでも必殺の一撃繰り出せるよう力溜め込んでおいて、この程度、とか言わんでほしいんだが……。つーか、アレか？　俺ぁ悪者か？」
困り顔で眉を寄せるバルバロッサ卿に、あたしはしっかりと頷いてみせる。
「アルを虐めようとするから、そーなるのです」
「……虐めてねェっつっても……まぁ、状況次第によるから、どーとも言えんか」
盛大にため息をついて、バルバロッサ卿は「あー」と背伸びした熊みたいに両手を広げた。
思わずアルが後退り、ケニードがちょっとだけ苦笑する。
巨熊もどきはそのままドッカと地面に座り込んで、大仰に嘆いてみせた。
「やめだやめだ。なんで俺がわざわざ憎まれ役やらにゃならんのだ。……つーか、レメクの野郎、本来ならあいつがビシッとやらにゃならんことだろーが」

「おじ様はアルが好きだからビシッとできないのですよ」
ビシッと言いきったあたしに、熊さんの目が丸くなる。
「……いやまぁ……まぁなぁ……あいつもなぁ……くそ……てことはやっぱり俺が悪者にならにゃならんのかよ!?」
……なんか熊さんが葛藤してる。
「……というかねェ、バルバロッサ卿。別に誰がどーとかじゃなくってね、アルルンの身柄を確保しとけばこっちの勝ちでしょ？」
相変わらず背中にアルを庇ってるよーな立ち位置で、アディ姫はクイッと親指でアルを指し示した。
……なんかアルルンが「アルルンじゃねェ」とかぼやいてるけど、まぁコレは無視だ。
「詰めなきゃなんないのは、『誰が首謀者か』ってことと、アルルンを『殺そうとしてるのが誰か』っていう二点。アルルンの身柄を確保した上で、この二つの証拠を揃えちゃえばクラウドール卿が裁くでしょ」
あっさりと言いきったアディ姫に、熊さんはポカンとした顔になった。
「……つーことは、間のモロモロはうやむやにしちまう気か？」
「しょーがないじゃなーい。上の人間がそろって庇うんだからさァ。……アルルン、君は果報者ダヨ？　普通、王様と断罪官が揃って一人を擁護するだなんて、ありえないんだからね？」
意味深に笑って言われて、アルが思いっきり動揺する。
「いやっ、つーか俺は……！　いや……それよりもだ！」
なにかイロイロとココロの葛藤があるらしい。
彼は必死に何かを考える顔で叫んだ。
「なんだよさっきから。俺を殺そうとしてる誰か、って！」
「まーだそんなコト言ってるー」
やや呆れたような顔をして、アディ姫は胸をバインと揺すった。
「さっきチラッと話したでしょーが。アロック卿がいなきゃ死んでるよーな目にあってんだから、某氏が君を殺そうとしてるってのは

確定なの」

「……！」

ぐっ、と詰まったアルに真正面から向き直り、アディ姫はそのままズンズンとアルに歩み寄る。

「認めたくない気持ちはわかるわよ。誰だって『誰かに殺されそうになってる』って言われればいい気はしないわ。けどね、事実から目を背けるのはやめなさい。見たくない現実から目を逸らして、聞きたくない言葉から耳を塞いで、それでいったい何がどう好転するっていうの？　君の場合は、ただ、君がどこかで殺されるってだけだわ」

ズンズン。

「……俺、は……！」

「いいこと？　アルルン。君が自分をどう思っていようが、君に流れている血はこの国にいる誰もにとって無視できるもんじゃないの。今まで一領主の馬番として暮らしてたっていうほうがおかしいのよ。……ある意味、奇跡に近いわね」

「……奇跡、って……」

ズンドコ。

「ヤなコトもいっぱいあっただろうけどさ、誰かに命を狙われたり、ってことは無かったでしょ？」

あたしが慌ててアルの背中に避難した直後、アディ姫のバインと張り出した胸がアルの胸をドンと突いた。

「いいこと？　『アルフレッド』殿下。王家の血を引く者はね、常に誰かに狙われているのよ。命も、心も、立場も、権力も、財産も！　いつだって誰もが狙いを定め、舌なめずりしながらさぁどう食べてやろうかと歯をギチギチ鳴らしてるのよ。……君はまだ、そういう場面に遭遇してないでしょ」

「……俺……は」

大きな胸に押されるようにして、アルが三歩退く。

それにさらに一歩迫って、アディ姫は底冷えするほど冷徹な目で

言った。
「覚悟を決めなさい。この場所に連れてこられたその時から、君の命は君以外の人の手に握られているのよ。誰がこの地に連れて来たの？　誰が何の目的で？　それが全ての鍵であり、答えよ」
ゴクリ、とアルの喉が鳴るのをあたしは聞いた。
背中から頭の上によじ登って、あたしはアディ姫を見る。
真正面からアルを見上げるアディ姫は、おっそろしく美しかった。が、その冷静かつ厳しい美貌は、すぐにいつものニヤリ笑顔に変わる。
「ま、話したくなければ、別に話さなくてもいいんだけどね？」
「オォイ、姫さんやー」
すかさず嘆く熊一頭。
「そこまで追いつめておいて、それかよー？」
対するアディ姫はあっけらかんとした顔だ。
「いーのよぅ。どうせどれだけ追い込んだって、相手を信じちゃってる間は何も話しはしないんだしー。……だいたいねー、最初っからねー、答えは出てるわけだし～？」
「……へ？」
思わずポカンとしたあたしだったが、それはバルバロッサ卿達も同じだったらしい。
全員が「え？」という目でアディ姫を見るのだが、アディ姫はあたし達が「はてな？」であることにも気づかないようだった。
「まぁ、それにそれに？　それが結局は答えになっちゃうんだから、あえて無理やり口を割らす必要は無いのよぅ？」
「なっ……！」
あっさりと身を離してバルバロッサ卿の方に歩いていくアディ姫に、アルは慌てて声をあげた。
「どういうことだよ！？」
「だぁーって、公爵夫人や公爵家の内情知ってれば、最初っから答え出てるんだもん～。わざわざ頭悩ませるよーなことでもないのよ

う。それにさぁ、君、公爵夫人のこと嫌いでしょ？」
どこからともなく取り出した羽扇子をビシッと突きつけて、アディ姫はニヤリと笑う。
「その公爵夫人を庇うだなんて、まぁ、ちょっと考えにくいわよねェ？　てことはだ、年の近い偽王弟殿下役の『本物版アルトリート』が君をここに誘った張本人ってことじゃない？」
「ち……違うぞ！　そりゃ、あいつが、心細いからって言ったりもしたけどよ……！　実際に決めたのは公爵夫人だ！」
「あらー？　そうかしらー？」
否定されても全然めげずにアディ姫は笑う。
「誰かが君に対して『ついて来て欲しいんだ』って言わなきゃ、君は動かなかっただろうし、公爵夫人にしても、息子から言われなきゃ、君を連れて来ようなんて考えたりもしなかったはずよぅ？」
「なんでそんなことが言えるんだよ!?」
アルの絶叫に、アディ姫はフフンと笑う。
「公爵夫人は、貴族以外を認めないものぅ」
口元にはイイ笑みがあるのに、その目は欠片も笑っていなかった。
そんな笑顔に相対して、アルがちょっと身を退く。
「……それが、なんだよ」
「ハッキリ言おうかしら？　あの女（ひと）には貴族以外はただのゴミなんだー、って」
本当にハッキリと断言して、アディ姫は歌うように行った。
「馬番のお嬢さんと前の王様。その間に御子ができた。前の王様の行為はゲスの極みだけど、身分どーこーってのは、まぁ、どーでもいいこと。けどけど、あの女にとってはぜーんぜん違う」
アディ姫の声に、アルは沈黙する。
何か思い当たることでもあるのか、目がちょっと逃げた。
「王族の血が半分入ってるだなんて、死んでも認めようとしないはずよ。えェ、それぐらいならいっそ殺してしまおうかと思うぐらいじゃないかしら？」

「……だったら」
「でもねー、彼女は『王族の娘』だったの」
何かを言いかけたアルを遮って、アディ姫は言った。
「王家の血がどれほど尊いか、どれほど貴重かを教え込まれているのよ。王族の、それも王の直系の血を消すだなんて、彼女にはできないわ」
それが答え、と目で言う彼女に、アルはグッと歯を噛みしめた。
「……そんなの……分かんねェだろ!?」
「いーえ、分かるわ。だって、君、今まで生かされてきたじゃなーい」
あくまでも反論するアルに、突きつけた羽扇子をくるくると回してアディ姫はニィと笑う。
「陛下にしてもそう。あの女にとって、陛下は邪魔で腹立たしい存在なのよ。けど、だからといって何かをするわけでもない。せいぜい、政の邪魔をちょろちょろしてみたり、悪巧みをちょろっとする程度よ。他の連中みたいに、暗殺者を雇ったり毒を盛ったりするわけじゃないの」
その言葉にはむしろあたしの方がギョッとした。
「アウグスタに……毒!?」
「日常茶飯事よぅ？　毒とか暗殺者とか求婚者とか」
ひょいと肩をすくめて、アディ姫は笑った。
あたしは唖然として開いちゃった口をパクンと閉じる。
……てゆか、求婚者も一括りにされちゃうのか……アウグスタの場合……
「王族が少なくて、王国の力が強い場合、少ない王族を殺してしまえば国盗りは楽でしょぅ？　だから、連中はこそこそ裏で暗躍するのよ。陛下は美人で独身だから、結婚して国を盗ろうっていう連中も多いわね。まぁ、もっとも？　あの陛下に簡単な毒だの安い暗殺者だのが効くわけないし、求婚だなんて、されてもウンと頷くはずがないんだけどね？」

……いや、それは……まァ……
なんとなく納得できるのだが。
「けど、そんな中でも、あの公爵夫人は動かないわけ。自身は前の王の娘で、れっきとした王族で、今の王家の直系が全滅すれば、それこそ自分の方に王位がまわってきそうだってゆーのにね」
クスクス笑って、アディ姫は薔薇色の唇を引き上げた。
「禁忌なのよ。彼女にとって。王族の直系の血っていうのは、決して殺めたりしてはいけないものなの。それは自分自身を殺すようなものなんだって魂に刻み込まれてるわけよ。……ほら、最初から答えが出てるでしょ？　彼女は王族を殺せない。じゃあ、そういう禁忌を叩き込まれてなくって、君について来てって言える人間で、今回のことを企んだのは誰でしょー？」
「……本物の『アルトリート』？」
「ぴんぽんぴんぽんせいかーい！」
呆然と呟いたあたしに、アディ姫が明るい笑顔で言う。
そして直後に表情を消した。
「……彼が首謀者よ」
「ッ！」
人が変わったかのような冷徹な顔に、アルがビクッとなる。あまりの豹変に、ちょっとビビッてしまったのだろう。
ちなみにあたしは、アルの頭にしがみつくことで『ビビッ』から耐えました。
「……なぁ、姫さんや。そこまで推理してくれるのはありがてぇんだがよ？　それで、それをレメクが裁けば終わりでいいのか？」
「裁けるだけの状況が揃えればね？」
質問するバルバロッサ卿に対して悪戯っぽい笑顔を向けて、アディ姫は腰に手をあてた。
「バルバロッサ卿だったらわかると思うけど、難しーでしょ裁判って。限りなく黒に近い灰色だとしても、絶対的に黒だという証拠がなくっちゃ裁けないでしょ？　特に、相手が王族の血を引いてたり

すると」
「……泥沼だな」
げんなりする熊さんに、ケニードも渋い顔で頷く。
話しについていけてないあたしは、とりあえず、目の前にあるアルの毛繕いをしはじめた。
……おお。白髪がある。
「結局のところ、あたしが何を言ったところで、それはただの推理でしかないからねぇ。情報を整理すれば簡単に割りだせる答えだけど、それを万人に示すための証拠がなくっちゃ何もできない。まぁ、まずはその証拠を揃えることね。目撃証人も一応数に入れれるから……アロック卿～」
軽やかに呼ばれて、ケニードが「はい？」という顔になる。
「花瓶落下事件の被害者にして、目撃者。……ってゆー風にアルルンからも聞いたけど、間違いナシ？」
「ええ……そうです」
頷く彼に、アディ姫はにんまり笑顔。
「よし。確保。その件に関しては犯人の身柄を陛下が押さえてるし、夜会が終わればどーせクラウドール卿が尋問するでしょーし」
……うわ。読まれてる。
「そうすると、そこから芋づる式に証拠が出てくる可能性大。……てことは、今、危険があるのは……一、アルルン。二、アロック卿。三、犯人ＡとＢ」
「……口封じか」
低い声で唸って、バルバロッサ卿は重量級の巨体が嘘のような軽やかさで立ち上がった。
「確認したほうがいいだろうな。……ケニード。おまえさんはとにかく一人になるなよ」
「あ、はい」
言われて頷きながら、けれどケニードに同様の色は見あたらなかった。

あたしはそのことにちょっと驚く。
「ケニード……怖くないの？」
「？　なにが？」
「なにが、って……」
きょとんとしている彼に、あたしは目をパチクリさせた。
「だって、危険があるのは、ってアディ姫言ってたでしょ？　てことは、アルみたいにケニードも危ないってことよね？」
口封じ、という言葉があたしの考えている通りの言葉なら、それは殺される可能性があるっていうことで……
そんな風に不安に思っているあたしに、ケニードは何故か淡い苦笑を浮かべて言った。
「いや……一応、命を狙われたり危害を加えられそうになったり、っていうのは、今回が初めてじゃないし」
「「……ええッ！？」」
あたしとアルトリートはギョッと目を剥いた。
この、顔と身のこなしは上級だけれど牧歌的でお人好しでのほほんとしているケニードに、そんな危ない過去があったって！？
「……いやほら、ベルには前に話したと思うけど。うちの父親の金貸し業関係のアレ」
「……おー！」
言われて、あたしは納得した。
そーいや、そーゆーこともあったんでしたっけね。
「……なんだ？　その、金貸し業関係って」
おお。アルには全てが初耳でした。
「あぁ、うちの父親がね、金貸し業に手を出してて、借金をこしらえた人とか、ちょっとアレな人の逆恨みとかで時々命を狙われたりしたんだよ」
なんでもないことにように朗らかに笑って言われて、アルの顎が落っこちた。
「ちょ……笑いながら言える話か！？　ソレ！　つーか、あんた、

よく無事だったな！」
「まぁ、イロイロとねー」
ケニードはニコッと笑った。
たぶん、今の『ニコッ』は、当時助けてもらったレメクのことを思い出しての『ニコッ』だろう。
たいへんスバラシイ笑顔だったので。
しかし、その笑顔はアルには別の作用をもたらした模様。
「……今度から超兄貴って呼ぼう」
超兄貴。
「エ。なんで！？」
なんかランクが上がってる呼び名に、さしものケニードもビックリ悲鳴。
命のやり取りを笑顔で語れるケニードに、アルはちょっとどころでなく感銘したよーだ。
……まぁ、それを考えれば、レメクなんて超々兄貴になっちゃうんじゃなかろーか？　とかあたしは思ってしまうのだが。
足腰立たなくなったら刃物片手に来そうな人が数百人って言ってたし。
「護衛をつけたほうがいいでしょうねェ」
そんな二人を眺めて、アディ姫はポツリと言った。
「とりあえず、アロック卿は末姫ちゃんと一緒にクラウドール卿に面倒みてもらうのが一番でしょうし」
「え！？」
あ。ケニード。イイ笑顔。
「そんでもって、アルルンはあたしが守るわ」
クイッと親指で自分を示し、アディ姫も超イイ笑顔。
その素敵に無敵な男前笑顔に、あたしは「おお」と思わず唸った。
「アルすごいねー」
「……なにがスゴイんだよ」
アルはなんだか青い顔だ。

「アディおねーさまはスゴイ強いらしいのよ！　そのアディおねーさまがついてるなら、アルの命は完璧守られてるってもんよ！」
「……俺の貞操が風前の灯火だと思うんだがよ……」
「アルスゴイネー」
「……おまえ、今、すげェ適当に言っただろ」
だって、普通、オトコノヒトがテイソーとか言わないし。
きょろん、と登った頭の上から覗き込むと、アルは盛大なため息をついた。
「……まぁ、いいけどよ」
「およ。アルルン。いいのかい」
「なんでおまえがそこで反応するんだよ！？　つか手をワキワキさせんな！　動きが妖しい！」
「へっへっへ」
およそ姫君らしくない笑い声をあげるアディ姫に、アルは慌てて身を退いた。
なんかレメクみたいな身の退き方なのだが、どーしてオトコノヒトってゆーのはそーゆー動きをするんだろーかナ？
「……まぁ、とりあえず基本はソレでいくとしてだな」
「ちょっ……俺は別の意味で危機じゃねェか！？」
「神殿に来てくれるんなら俺等でも守るけど、たぶん、アデライーデ姫のが強いからなぁ」
「……」
アルが愕然とした顔でアディ姫を見る。
まぁ、武術大会のタイトルホルダーっつったら、それぐらい強烈に強いもんだとあたしも思う。うん。
ソンケーするですよ、アディ姫！
「なぁ、あんた……」
「なんだいアルルン？」
力無い声をかけるアルに、ニヒルな笑みを浮かべるアディ姫。
なにかが逆転しちゃってる気がするのだが、たぶん、いやきっと、

気のせいだ。
「アルルンはヨセ。……つーか、なんでそんなに鍛えてんだよ、体」
「魔術使えないから」
けろりとした顔で言って、アディ姫はパタパタと扇子で自分を扇いだ。
「自分とか誰かとか守るのにさぁ、力が無くても魔術が使えれば、それなりになんとかなるわけじゃない。けどあたしはそっち方面サッパリだからねぇ。諦めて体鍛えることにしたのよ」
「……鍛エスギダ……」
なにか魂を絞るような声でアルが言う。
「ま、いいんじゃない？　そのおかげでイロイロできることもあるんだし。まぁ、それよりも、今誰の手にも守られてない刺客ＡとＢをそろそろ見に行きましょうか」
パンパンと手を打ち鳴らして、アディ姫はそう締めくくった。
その様子を苦笑半分で見守っていた巨熊さんは、なんとも言い難い声を零す。
「つーかな。改めて言うまでもなく確定してんだがな」
「ん？」
アルの髪の毛をちまちま分けたり戻したり撫でたりしながら、あたしは苦笑しきりのバルバロッサ卿を見る。
全員の視線が集まったのを見て、バルバロッサ卿は苦笑を深めて言った。
「……結局、殿下のことは確定しちまってんだが、まぁ、それはいいわけだよな？」
「あ！」
ギョッとした顔になるアル。
……彼はなんというか、常に語るに落ちるとか、そーゆータイプのようである。

※　※　※

暗くてじめっとした城の地下。
分厚くて頑丈な扉をくぐると、そこはなおいっそう暗く陰鬱な場所だった。
「さぁて。楽しい楽しい地下牢探索ですよー」
そんな中でもマイペースなアディ姫は、大きな鍵の束をじゃらつかせている兵士さんの真後ろで、目を輝かせながらせっついている。
「さぁ早く。ほら早く。この滅多に入れない陰鬱とした世界を案内してくださいな！」
思いっきり地が出ているアディ姫に、案内の牢屋番は夢が壊れちゃったカワイソーな人の表情でとぼりとぼりと歩く。
地下牢、と聞くと、もっと臭くてドロッとしていた、時々白骨死体とかが転がってるのが普通だと思っていたのだが、この城の地下牢はそういう感じではなかった。
暗くてじめっとはしているが、ドロッとした雰囲気は無い。臭いもそこそこするのだが、下街の路地裏よりは臭くないし、もちろん白骨死体なんか転がっていない。
劇とかだと、閉じこめられた囚人が苦悶の声をあげてたりするのだが、そーゆーこともなかった。
「地下牢って、意外と清潔なんだ」
思わず呟いてしまったあたしに、最後尾の熊さんが苦笑する。
「……そりゃあまぁ、定期的に掃除してるからな」
定期的に掃除。
それって、ある意味、下街の通路より綺麗なんじゃなかろーか？
思わず「ウムム？」と唸ってしまう衝撃の事実に、あたしはアルの頭にしがみついたままで唇を尖らす。
もう完璧に素性がバレちゃってることにしょんぼりしているアルは、とぼりとぼりと歩いていた。
その前にいるケニードは、気遣わしげにアルを振り返る。
「……その……あんまり、思い詰めないほうがいいと思うよ。君が

誰であれ、君が君であることには変わらない、って、ベルも僕らもそう思ってるから」

その言葉に少しだけ何かが救われたのか、アルの顔色がちょっと明るくなった。

まだ俯いたままだが、コクリと頷いた時の気配が、少しだけ軽くなっている。

ケニードの前をさくさく歩いていたアディ姫が、チラッとこっちを振り返り、また前を向いて案内人さんをせかした。

「最近捕まったってのに、だいーぶ奥にされてんのねぇ」

「はぁ……厳重な警護をつけるため、ということで、一般の者とは離してあるんです」

「なるほどねぇ」

頷きながら、アディ姫はその体に力を溜めていく。

アルの頭にしがみついてるあたしには、前を行くアディ姫の姿はよく見えた。

（……なんか、モリモリ力が上がってる気がする……）

目に見える形では無いのだが、強いて言えば気配が濃くなっていくような感じだろうか。迫力が増していっている感覚に、あたしはキュッとアルの髪を掴んだ。

……なんか「いてー」とか言われた気がするが、そこは無視ってなもんですよ。

「それにしても、これだけのベッピンが歩いてるってのに、だぁれも声かけないっつーのがすげぇな」

のっそりと歩きながら、熊さんがそんなことを言う。

闇を照らす光のように、美しく輝くアディ姫の姿は、ここに閉じこめられた囚人には眩く映ったに違いない。男前を見てあたし達がキャーとか言うように、女前を見て囚人がキャーとか言うかと思ったのだが、地下牢はシンと静まりかえっていた。

「そうですね……普通、ちょっと聞き苦しい類の言葉をきかされたりするもんですが……」

ケニードもそんな風にぼやき、不思議そうに周囲を見渡した。
もちろん、これで地下牢がカラッポだとすれば、そんな疑問を思うことはない。
いるのだ。人は。
いるのに、誰も声をあげないのだ。
ただ何か怯えたような目で、歩くあたし達を見ている。
「んふふふふふふふ」
その様子に、アディ姫が不思議な笑みをこぼした。
途端、ビクッとなる牢の中の人々に、あたし達は（嗚呼）と心の中で納得する。
……怖がられてるわけだ。アディ姫。
……てゆか、何やったんだ……この姫は……
「……姫君。頼みますから、実験とかはナシですよ？」
お姫様の不気味な笑みを背中に浴びて、案内人さんが怖々と言う。
実験、の一言に牢の中から押し殺した悲鳴があがったが……まぁ、アレだ……
きっとそーゆーことだろう。
「いやですわほほほ。今はいたしませんわよ。大事な時期ですもの」
うふふふ、という笑みは囚人達の心をキューキューと締め上げてしまったらしい。
なんかどこからともなく人がバタバタと倒れる音が聞こえて、あたし達はまた（嗚呼）と天井を見上げてしまった。
……アディ姫……
囚人さんも、人間ですヨ。
とりあえず、あたしは心の中でだけそう突っ込んでおく。
「まぁ、それもこれも、人々のためを思えばこそのこと。それに、わたくしが実験の手助けをこちらにお願いしてから、犯罪が少しだけ減ったと聞きましてよ？」
「……それはまぁ、アレやソレを経験すれば、いやでも牢屋に入りたくはないと思うわけでして……」

……アレやソレってなんだろーか……

話す門番さんの顔は見えないが、気配がどんよりしているので、きっと余程アレでソレな内容に違いない。

「まぁ、それでも犯罪の激減につながらないというのが、人の世の悲しさなのでしょうね。……今回捕まった者も、誰かに命令されて行わざるをえなかったという立場のものでしょう」

暗い声で呟いてから、案内人さんは「失礼」と声を落とした。

「こういう場所にいますとね、なんとはなしに罪人の向こう側にいる方々の気配を感じてしまうようになるのですよ。……いつものことと、言ってしまえばそれまでですが。……できましたら、少しでも温情ある裁判をしていただければと思います」

その暗く寂しげな声に対し、あたし達は何も言えなかった。

実際に殺されかけたアルや、アルを庇って大怪我を負ったケニードのことがあるかぎり、あたしもウンと頷くわけにはいかない。

……けれど、人の見方や考え方というのは、立ち位置によってこれほどに違うのだ。

あたしは少しだけ昔を思い出した。

言われた言葉を。懐かしい言葉を。

一つの物事を見るときに、一つの見方だけに囚われてはいけないのだということを。

（……おじ様は……）

行いを後悔させるだけの尋問をするようなことを言っていたけれど、それはいったいどういうものなのだろうか？

彼等には、彼等にとってどうしようもない事情があったかもしれないのだ。

……もちろん、それで彼等のことを許せるはずもないのだが。

「こちらです」

考え事をしていたあたしを声が引き戻し、ハタと顔を上げると、ちょうど案内人さんが分厚い扉の前でがちゃがちゃと鍵を回しているところだった。

どうやら牢屋がいっぱいのこの大部屋とは、また別の部屋に問題の人達は捕まっているらしい。
……なるほど、だから、一般の者とは離してある、か。
納得してふんふんと頷き、ふと、あたしは動きを止めた。
「……血の臭いがする」
ぽつりと。
呟いてしまったのは、ほとんど無意識のことだった。
ギョッとアルの体が強ばり、扉の鍵が開くのももどかしげにアディ姫が飛び出す。
「姫！」
慌てたバルバロッサ卿が、なんと！　アルごとあたしを左腕に、ケニードを右腕に抱えてその後を追った。
「うぉ！？」
「もにょ！？」
「わわっ！」
それぞれがそれぞれの声をあげ、大きな扉の中へと飛び込む。
その瞬間、ハッキリと、あたしの鼻が異臭を嗅ぎ取った。
「血が濃いわ！」
「……それは血の臭いが濃いっつー意味だよな？」
なんかアルがわざわざツッコミをいれてきた。
それを無視してドンドン走っていたバルバロッサ卿が、ふいにその速度をゆるめる。
「……姫」
見れば、先に駆けだしていたアディ姫が険しい顔で立ちつくしてた。
あたしは通路の中央に立ち、牢屋の一つを睨んでいるアディ姫の姿に立ちつくす。
その姿は鬼気迫るものがあり、深い後悔と怒りに燃えていた。
「……おねーさま」
あたしの声に、けれどアディ姫はこちらを見ない。

ただ厳しい表情のまま、止まれ、と言うようにこちらに掌を向けてから、呟いた。

「……やられたわ」

19　偽りの対価

閉ざされた空間に漂う血の臭い。
佇むアディ姫の険しい表情。
それだけで、彼女の前にある光景に見当はついた。
けれど――――

（……お昼には……生きて、たのに……）
彼等がいつ捕まったのかは、詳しく知らない。
アウグスタとの話しで「捕らえられた」ことは知ったけれど、それが「いつ」「どこで捕らえられ」たのか……そして、名前は何という人であったのか……そういうことは、全く知らないままだった。
その、名前も知らない人が、そこで息絶えている。
数時間前までは、確かに生きていただろう『人』が。
「どういう……ことだよ？」
その事実を飲み込めなかったのか、アルがふらりと足を踏み出した。
引きつった顔を見れば、理解していないわけではないのだとわかる。
けれど、認められないのだ。
まさか、という気持ちがあるのだ。
誰だってそうだろう。信じたいわけがない。
――人が、そんな風に簡単に、殺されてしまうという現実なんて。
「駄目よ、アルルン」
さらに一歩を踏み出したアルをアディ姫の静かな声が押しとどめる。

「……末姫ちゃんに、見せる気？」
その一言に、アルはギクッと足を止めた。
その頭に張り付いていたあたしは、止まったアルの顔を覗き込み、ややも狼狽している相手のおでこをぺちりと叩いた。
「……血の臭いが濃いのです」
「……ちみ……っちょ……」
ちょっぴり情けない顔のアルに、あたしは唇をキュッと引き締めてた。
「あたしでも分かるのです。……もう、手遅れなのです」
どうして分かるのか。
そう問いたげなアルの目を見て、あたしはひっそりと納得した。
彼はこういった場面に遭遇したことが無いのだ。
不条理に奪われた命を目にしたことも、その場に立ち会ったことも……
「生きてる人がいるとね、そこんところだけホワッと暖かいの」
動揺しているアルの目を見つめてから、あたしは視線をアディ姫の前にある牢屋へと向ける。
あたし達の位置からでは壁と鉄格子しか見えない――その中に。
「でも……おねーさまの前の牢屋からは、何も感じないのです」
ただ、ひんやりとした冷たさと、濃い錆びた鉄のような臭いが漂うだけ。
……あたしは知っている。そこには死体があるんだということを。
場所も場面も違うけど、路地裏で、ぼろくずのように切り捨てられた人を何度と無く見てきたから。
「……牢番さん。ここの責任者、呼んできて」
あまりのことに呆然としていた案内人の牢番さんに、アディ姫は静かな声をかけた。
ぎくしゃくとアディ姫を見、強ばった顔で口をぱくぱくさせる相手に、彼女は少しだけ微笑む。

「大騒ぎするわけにはいかないの。……わかるでしょう？　上には、今、各国の賓客が来ているのよ」
その言葉に、彼はガクガクと頷いた。
「お、おっ、しゃる、とおり、です！」
「異常を他に気づかれないように、責任者を呼んできて。それから、クラウドール卿も」
「いや。レメクはいかん」
アディ姫の言葉に、バルバロッサ卿は重々しく首を横に振った。
「あいつは今、陛下のエスコートをしてる。……ロードが会場に入るまでは、あいつを動かすわけにゃあいかんだろ」
「……あぁ、そうだったわ。卿がここに来てないっていうので、だいたい察してたんだけど……まいったわね」
そう言って、アディ姫はこめかみを指でぐいぐい揉む。
……どうやら、冷静そーに見えて、内心相当動揺しているようである。
「おねーさま。おじ様に用事なら、あたしが愛の声を送信するのですよ！」
「……末姫ちゃんて、メリディス族で、アザゼル族じゃあない……よね？」
なにやら不思議そーな顔をされてしまった。
あたしは胸を張って「むふん」と息を吐く。
「あたし達の愛に不可能は無いのです！」
「そうなの？」
「そうなのです！」
なぜかどこからともなく羊皮紙とペンを取り出すアディ姫に、あたしは自信満々頷いてみせる。
なにせあたしとレメクは愛のぶっとい縄で繋がれているのだ。ええ！　闇の紋章とかいう名前はこのさい恋心で脳内変換ですよ！
『おじ様！　一大事です！！』
あたしは全力でレメクに向かって心の声を張り上げる。

『一大事なのです！！』
レメクからはウンでもなければスンでもない。
「「「「……」」」」
その場の全員の目があたしに集中。
あたしは気合いも新たにさらに心の声を張り上げた。
『あたしが一大事なのですっ！！』
……。
……。
……。
「……おじ様なんてちらないもん……」
「ちょ！　まてお前！　いきなりナニ拗ねてるんだよ!?」
ぐすぐす鼻をすするあたしに、アルがギョッとした声をあげる。
その頭に顔を埋めるあたしに、バルバロッサ卿らしき野太い呆れ声がかかる。
「……じょーちゃん……さすがのレメクでも、そうそう簡単に抜けては来れないと思うぞ?」
「愛が足りないのです！」
「というか、クラウドール卿からどんな返事がかえってきたんだい?」
「何の返事もないのです！」
「……通じてねぇんじゃねーのか?　それ……ってうぉおお！　ちょいコラおまっ！　俺の頭になにかツメタイものがぽたぽたとっ！」
汁は二種類あるのです。
「というか、アルルンは女心をもうチョイ学びなさい?」
呆れ声をあげるのはアディ姫で、アルの頭につっぷしたままぐすぐすいってるあたしの近くまで来ると、彼女はそれは優しい声で慰めてくれた。
「末姫ちゃん。ここはちょーっと会場から遠いし、魔力持ちが下手なことをしないよう呪いを施してあるから、なかなか上手くは伝わらなかったのかもしれないわよぅ?」

ああ！　おねーさまっ！！
あたしは涙でぐしゃぐしゃの目を向けて、ピョイッとアディ姫の豊かな胸に飛びついた。
「おねーしゃまーっ！」
「いい子ねぇ、末姫ちゃん」
もっちりとしたスバラシイ弾力であたしを支えてくれたアディ姫は、そう言ってからチラリとツメタイ一瞥をアルルンへ。
「……子供には優しくなさいな」
「……ハイ」
……なんか、アルルンが教育されてる。
「とはいえ、陛下にもクラウドール卿にも連絡だけはしておいたほうがいいでしょうね。すぐには抜けておいでになれなくても、情報を得ているのといないのとでは大きく違うから」
「確かに」
頷いて、バルバロッサ卿は足踏みしている牢番さんを見下ろした。
「じゃあ、責任者を呼ぶのと、レメクへの伝言を頼むわ。大広間の前にな、ローターっつー兵士がいるから、そいつに頼んで宰相閣下に取り次いでもらえ。閣下から陛下やレメクに伝言を伝えてもらうのが一番目立たねェだろ」
「かしこまりました！」
慌てて出て行く牢番さんをどこか同情含みに見送って、バルバロッサ卿はぶっといため息を吐いた。
「……しかし、なぁ、アデライーデの姫さんや」
「なぁに？」
もちもちした胸であたしを圧迫してくれていたアディ姫は、熊さんに呼ばれて顔を上げる。
バルバロッサ卿は険しい顔をしていた。
「ここまでするのが、その、レンフォードの小僧だと思うのか？」
レンフォードの小僧。
それはすなわち、偽王弟のことである。

「さぁて」
口の端をニィと歪めて、アディ姫は嗤った。
「件の馬鹿貴族が馬鹿やってる現場をあたしは見てないからね～。そこまでは断言できないわよぅ？　けどけど？　見通しの甘さ、計画のボロボロさ、どれをとってもナニかこう『足りない』って感じがして、そこのトコロはいかにもな気がするけどね～」
「……なるほどな」
いったいその言葉の何に納得したのか、バルバロッサ卿は苦笑してデッカイ肩を竦めた。
「つーことは、だ。ここであーだこーだ議論するような内容でもないっつーこったな」
「そゆこと～」
「じゃあ、ここは引き受けた」
言って、バルバロッサ卿はひょいと熊みたいな手を上げる。
「姫さん等は牢から出てな。……事が事だ。おそらく長引くだろう。が、俺がいれば事足りるだろうからな」
「……そうね。おねがいしよっかな？」
「おうよ」
野太い笑みを浮かべるバルバロッサ卿に笑ってみせてから、アディ姫は暗い顔で佇んでいる他男二人を見る。
「じゃあ、あたし達は上に行って、うちのオネーサマの所にでもお邪魔しよーかしら」
「おねーさま？」
「そ。オネーサマ」
口に手をあて、アディ姫はいたずらっ子のような顔で笑う。
「偶然か、必然か……この時期が選んだのは、どちらにとっての不幸かわからないわねェ……。せっかく来てくれてるんだもの。使える手は全部使わなきゃね。……後手にまわるのは二度とごめんだわ」
――そう告げた時のアディ姫の目の色を、あたしはちょっと、忘れられそーになかった。

※　※　※

王宮というのは、ある意味すンばらしくゴーカな迷路である。
アディ姫の先導で牢屋から出て以降、かなりの早さでズンズン廊下を歩いているのだが、目的地らしい部屋についたのはアルやケニードがゼェヒューいいはじめた頃だった。
「ここよ！」
あたしを胸にひっつけたまま、意気揚々とアディ姫が告げる。
目の前にあるのはデンとした扉。デカイ。とにかくデカイ。
両開きのその扉は、あたしがもらった『青の間』ほどではないにしても、一目ですんごく上等な部屋だとわかる逸品だった。……エエ。扉なのに美術品みたいに絵が彫られてるトコとかもネ！
「ここは……獅子王の、部屋、ですね」
肩で息をしちゃってるケニードの声に、上半身全部で息をしているアルが口パクだけで「そうなのか」と呟いた。
……アル……意外と体力ないのね……
「そう！　獅子王の部屋。そしてここは国賓である方々を泊める場所！」
ゼェゼェいってる男二人を振り返り、アディ姫はバッと両手を広げて宣言。
胸にひっついてるあたしは、弾むモッチリンにあわせて視界が上下した。
……弾みすぎだ。胸。
「つーか、おまえ、牢の所では国賓にバレないように、とか言ってなかったか？」
「あはん？　甘いわよぅ？　アルルン。国賓は国賓でも、ここにいる人は別。むしろ仲間。そして先輩」
「先輩……？　つーかいい加減にアルルンはやめろ」
首を傾げながらも文句を言うアルに、アディ姫は意味深にニヤリ。

そしてクルリと扉に向き直った。
「いいから、黙って見てらっしゃいな」
ふん、と気合いを入れる彼女の胸の上、またしてもあたしが上下にバウンド。
彼女はドアを上品にノックすると、気合いのこもった声で言った。
「たのもーっ！」
「ちょっと待てーッ！！」
国賓を訪ねるとは思えない声かけに、すぐさま叫ぶツッコミ一名。
「国賓だろ！？　国賓なんだろ！？　よくは知らねェが偉い人なんだろ！？　なんだその訓練所破りみたいな訪問の挨拶は！」
……アルルン。訓練所破りは知ってるのか……
言われたアディ姫は目をキラキラさせてアルを振り返る。
「なに言ってんのよアルルン。訓練所破りの挨拶は『たのもー』じゃないわよ」
「なんだよ！？」
「『強い奴に会いに来た！』よ！！」
「子供みたいな目ェして言うな！！」
目をキラキラさせたアディ姫に、アルは扉をビシィッ！　と指さしながら叫んだ。
「だいたいなァ！　今みたいな声でいったいどこの誰が扉開けてくれるっつーんだよ！？　フツーに怪しいだろ！？」
正直、正論にしか聞こえないアルの叫びに、アディ姫は真顔でビシッと扉を指さす。
そう。
キレーに開いちゃってる扉を。
「……」
アル、沈黙。
「……」
アディ姫、無言で扉の方向をツンツン。
「「……」」

しばし見つめ合う若い男女。
のほほんと見守るあたしの目の前で、熱視線合戦はアディ姫の圧勝で終わった。
「……なんで……開いてんだよ……」
口惜しそうに言うアルに、アディ姫は勝利の微笑み。
それを見上げたあたしは、開いちゃった扉を見て「（なるほど）」と納得した。
否、扉のところから面白そうにこちらを見ている女性を見て。
「なにやら、楽しいことのようじゃのぅ、アディや」
ナザゼル王妃がそこにいた。

「大広間の面白い見せ物が終わったからと、部屋にひっこんでおったじゃが……帰ってきておいて正解じゃったの。そなたが来るとは」
王妃とも思えない気さくさであたし達を部屋に入れ、しどけなくソファに身を沈めたその人こそ、アウグスタ級の巨胸美人、ナザゼル王妃だった。
アルティルマ王のお妃様であるナザゼル王妃の髪は、今は結われないまま背を流れている。黒い夜の川のような髪に、あたしは相対するソファに埋もれたまま「ほぅ」と嘆息をついた。
なんてゆーか、レメクの髪なみにキレーなのです！
「珍しく綺麗な格好をしておるのぅ、アディ？」
面白そうに言われて、何故かソファの横に立っているアディ姫は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「クラウドール卿から頼まれてね～、とある人の護衛とパートナーを務めてるのよぅ」
「ほほぅ……おぬしほどの者がつかねばならぬ相手、か……」
目を細め、唇を愉悦の形に引き上げた王妃様は、所在なげに立つ男二人を順に見る。
そうして、薄笑いを浮かべて言った。

「……ふむ。毛色の変わったのがおるのぅ」
彼等はどちらも金髪だ。
「しかも、先程の『見せ物』に出てきおった若造によく似ておる……」
「……」
あたし達は唇を引き結ぶ。
それが『誰』のことなのか、言われなくてもわかったのだ。
（……てことは、もう、会場に入ったってことね……）
ということは、すなわち、愛するレメクは解放されたということ。
……でも、また無視されたらちゃみちぃから、もう心の声は送らないのです……
「似ておるが、全くの別物であるの。……ふん。なかなか、面白いことになっておるようじゃ」
見てるとちょっと肌寒くなる笑みを浮かべて、ナザゼル王妃は色っぽい仕草で髪をかきあげた。
その様子に、アディ姫が獰猛な目で言う。
「面白すぎて、イラッとくるぐらいよぅ？」
「ほほぅ？」
チラとそれを見上げて、ナザゼル王妃は笑みをさらに深また。
「それはそれは……おぬしともあろう者が、してやられたか？」
「ええ。やられちゃったわよ」
どこか道化じみた動きで肩をすくめてから、アディ姫は表情を消す。
「……罪人が牢で殺されたわ」
……その顔はコワイからやめてくれないかな……
「見張りの兵も二名、殺されて同じ場所に放り込まれてた」
「なッ！？」
声をあげてしまったのは、ナザゼル王妃ではなく、あたしの後ろで話しを聞いてたアル。
「見張りも……！？　中に入ってた、俺を殺そうとした奴だけじゃ

なかったのかよ!?」
ソファの背を握りしめ、身を乗り出す彼に、アディ姫は口元に指をあてつつ言った。
「違うわよぅ？　まぁおおかた、こっそり口封じするつもりが見つかっちゃって、ついでに殺したって感じじゃないかしら？」
「そんな……！」
あまりのことに愕然として、アルは青い顔のまま後ろによろめいた。その背を慌ててケニードが支え、気遣わしげな目でアルとアディ姫を交互に見る。
今までにも危険な目にあってきたというケニードは、さすがにアルほど衝撃を受けていないようだ。
あたしはというと、ビックリしたのはビックリしたのだが、アルの声が早すぎてかえってレーセーになってしまっていたりする。
「……ふむ。それで、妾に会いに来たのじゃな」
アディ姫の簡単な説明で一体ナニが分かったのか、ナザゼル王妃が納得したように頷いた。
……てゆか……バルバロッサ卿もそーだったけど、分かる人だけで分かってないで、こっちにも情報くださいってなもんですよ。
「この場所で、そんな阿呆をやらかしそうな団体には……そうさな、心当たりがないこともない。――――が」
何かを考える顔で呟いて、王妃はアディ姫を見上げて笑った。
「まぁ、とりあえずは、最初から順をおって説明してもらおうかのぅ。適当なことを言うわけにもいかぬゆえ」
「ええ、もちろん」
その眼差しに力在る笑みを浮かべて、アディ姫は胸を張った。
「まずは、ここにいるアルルンの紹介からね。彼は――――」
そうして始まったアディ姫による一連の説明を横で聞き流しなが

ら、あたしは部屋の中をぐるぅりと見回していた。
ナザゼル王妃のいる部屋、獅子王の、とかゆーカッチョイイ名前の部屋は、確かに重厚で荘厳な、獅子王の名に相応しい部屋だった。
部屋の壁も天井も絨毯も、深い深いワインのような赤一色。
柱などは漆黒で、なにやら圧力すら感じるほど『重い』印象を受ける。
それを少しだけ軽くしているのが、部屋一面にほどこされた金色の模様だった。大きく大胆に描かれたその模様のおかげで、血の海に沈んでいるよーな部屋に華やかさと艶やかさが宿っている。
その中でしどけなくソファに寝転がっているナザゼル王妃は、まさに眠れる獅子といった風情だった。
のびやかで、しどけなくて、けれどどこか優雅で力強い。
部屋の大きさは、王宮やレメクの家でデカイ部屋を見慣れたあたしでも『大きい』と感じるサイズだ。
色が濃すぎて広がりを感じにくいが、ナスティアの王太子も過ごしてたっていう青の間にだって負けないだろう。
……それにしても、このやたらと重たい色遣いは、いったいどーゆー理由で決められたんだろーか？
「なるほどのぅ。ならば、妾が力を貸すのは当然であろう」
どうやら説明は終わったらしく、いつのまにかフツーにソファに座っていた王妃様が、深い嘆息をつきながら背もたれに体を預けた。
「それにしても……昨今の者は何を考えておるのか分からぬ。王弟という身分を簒奪するだけでなく、人を雇って殺めようとまでするとは……」
そう言ってチラと見上げてくる王妃に、アルがグッと唇を噛んだ。
あたしはそれを見て眉を下げる。
彼はこの数時間で、いったい何度唇を噛んだことだろうか。
……いったいどれぐらい、ツライ気持ちを味わったんだろうか。
「……今はまだ、ただの推理の段階よ」
俯いてしまったアルをチラと見て、アディ姫は口を開く。

「……証拠を揃えるまでは、誰が犯人であるか、というのは確定できないわ。もしかしたら、あたしの推理が間違っているかもしれないし、見落としている情報がどこかにあって、何か取り返しのつかない過ちをしているかもしれない」
「……ほほぅ？」
静かな声で言うアディ姫に、面白げな笑みを浮かべて王妃が目を細める。
「おぬしが推理を誤るのは、クラウドール卿が断罪を誤るほどに有り得ぬと思ぅておるがのぅ？」
「あたしも完璧じゃないもの」
軽く首をすくめて、アディ姫はあっさりと言った。
「間違いだってするし、そのせいで……間に合わない、っていう事態に……陥ることもあるわ」
「……？　おねーさま？」
アディ姫の声に、あたしは首を傾げた。
なにか、声の響きに、ひどく重くて悲しいものがあったような気がしたのだ。
だが、アディ姫はそのことに対し、それ以上を語る気はないようだった。
彼女は両手を腰にあてると、嘆息をつきつつ胸を張る。
「まぁ、だからこそ、より万全を期して情報を集めてるわけだけどネ？」
「そこですかさず妾を頼るあたり、アディ、そなたは聡い子じゃ」
口の端を引き上げて、ナザゼル王妃は髪をかき上げた。
「我らが女王陛下の御代を乱す者ならば、たとえ王族とて遠慮はいらぬ。よかろう、我が力、存分に発揮してしんぜよう」
「って、ちょっと待ってねネーサマ？　いきなり首謀者をサクッとヤるのはなしよ？」
なにやらゾッとするほどの覇気をまとった王妃に、アディ姫は慌てて身構える。それを見て王妃は妙につまらなさそうな顔をした。

「……いかんのかのぅ？」
「だーめだめだめ！　それじゃあ、相手と同じじゃないの～。うちは裁判を目指すのよ、裁判！」
「めんどうなことよのぅ」
本気で面倒そうに言う王妃に、あたしはとりあえず、そろそろ我慢の限界を叫んだ。
「おねーさまがたっ！　あたし達にも説明がほしいのです！」
「「お？」」
二人のオネーサマは初めてあたし達の存在を思い出したような顔でこちらを見る。
その二人にビシビシッと指をつきつけて、あたしは主張した。
「二人だけでわかられても、こっちにはちんぷんかんぷんなのです！　あたし達だって当事者なのです。セツメーが欲しいのです！」
「あややや。ごめんねェ……でもねぇ……」
アディ姫が、やや困り顔でナザゼル王妃を見る。
それを軽く見上げてから、王妃はニヤリと口元を笑ませた。
「妾なら、かまわぬぞ？　どのみち、どちらも今はナスティアの『王族』じゃ。アロック卿がちと巻き沿いになってしまうが、まぁ、どちらにせよ、卿はクラウドール侯爵が関わっておる限り、こちら側じゃから問題なかろう？」
「ありませんとも！」
……ケニード……なにもわかんない状態でその断言はどーかと思うわよ……
輝く笑顔で言いきったケニードに、王妃はコロコロと少女のように笑う。
「あぁ、卿は相変わらずの盲信ぶりじゃな。そこまで一貫して突き抜けてくれればいっそ爽快じゃ。聞けば侯爵とは仲良くなられたとか。長年の思いが報われたこと、喜ばしきこととお祝い申しわげる」
「ありがとうございます」
ああ！　ケニードが素敵な笑顔だ！

横で見てるアルはなんとも呆れ果てた顔だが。
「……あんた……ほんっっっとに兄貴のこと好きだな……」
「大好きだよ！」
嗚呼！　本当にステキなエガオ！！
しかし、あたしは説明を受けてないのを忘れてはいないのですよ！
「ふふふ。で、まぁ、おぬしらの愉快な人間模様をつっついてウヤムヤにしてやろーかとも思ぅたが。どうもそうはいかぬようじゃな」
キラリと光る目で王妃を見つめると、王妃が苦笑含みにそんなことを言う。
アディ姫が困り顔のままで嘆息をついた。
「……まぁ、一応？　ここに来た段階で、バラすことも検討はしてたけどねぇ」
「そうじゃのぅ。妾も、おぬしの話を聞くにつれ、なんとなく予感はしておったのぅ」
「まぁ、バラしても問題ない人選だとは思っているのよぅ？　本当に」
「そうであろうのぅ。でなければ、おぬしとて妾の所になど来たりせんじゃろうて。……まぁ、事が事じゃ。急がねばならぬと思ぅた気持ちもよくわかるがの」
ニヤニヤ笑ってナザゼル王妃はアディ姫を見上げた。
「まぁ、とりあえず、アディよ。牢屋の惨劇については妾が犯人を割り出そう。妾がこの地に在るというのに、これだけのことをしてくれたのじゃ。少々、妾もカチンときておるのでの」
「助かるわ！」
「ついでに、そこの小僧の護衛も引き受けてかまわんが？」
ニヤニヤ笑いのままアルに視線を向けて言うナザゼル王妃に、何故かアディ姫は沈黙した。
一瞬だけチラッとアルを見た姫は、どこかふてくされたような顔で呟く。
「……そりゃ、相手が暗殺者なら、あたしよりネーサマのほうが得

意でしょーけど」
「はっはぁ！　拗ねるでない、アディ！」
……なんか楽しそうだ。
やっぱり説明なくて置いてきぼりなあたし達は、顔を見合わせながら首を傾げる。
「あぁ、いかんいかん。このままだとまた末姫が拗ねるのぅ。これ、ちっちゃい子、こっちゃ来」
おいでおいでと手招きされて、あたしはソファからポーンッと飛んだ。
一気に王妃の膝まで跳躍したあたしに、王妃が目を丸くする。
「……よく弾む子じゃのぅ」
ああっ！　なぜあたしのほっぺたをつつくのです!?
「……つーかよ、強ェおめぇよりも、そっちの色っぽいねーさんのがさらに強いってことなのか？」
ナザゼル王妃につっつきまわせれ、あたしがビシバシ両手で指を撃退している間に、アルがアディ姫に失礼な質問をした。
アディ姫はいっそうふてくされた顔だ。
「肉弾戦なら負けないわよぅ？　魔法戦はサッパリだけど、武術だけなら誰が相手でも勝ちをとってきてみせるわ」
自信に裏打ちされた宣言に、アルも目を丸くして「そ、そうか……」と尻込みする。
それをさらにさらにふてくされた顔で見て、姫はプイッとそっぽを向いた。
「……ただ、こと暗殺に関しちゃ、手際や組織の全容を多く知ってるほうが対処しやすいのよ。だから、そーゆー情報をもらうために、ネーサマを頼ったわけ」
「……つーか、こっちのネーサマは誰なんだよ？」
アルの心底不思議な顔に、あたし達は一瞬顔を見合わせ、
「おお！　自己紹介しておらなんだの！」
「忘れてたわ！」

「そーいや、アルは初めて会うのでした！」
「……てめぇらな……」
そーだったそーだった。
あたしは前に会ってるし、王宮勤めの長いケニードも会ってるっぽいし、アディ姫は言わずもがなだったのだが、アルは王妃と会うの初めてだったんだ。
そうと知れば、とばかりに王妃が立ち上がる。
その音のないしなやかな動きに、アルが一瞬、ビクッとなった。
……誰かさんの動きと重ねたんじゃなかろーか。アのつく変態姫の動きとかと。
「名乗りをあげなんだは妾の不手際じゃ。許されよ、珍しき運命を持つ者よ。妾はナザゼル。西のイステルマ連邦筆頭、アルティルマの王妃ナザゼルじゃ」
長ったらしい名前を抜きにしたその自己紹介に、アルはぽかんと口をあけた。
なんとなくレメクのポカン顔に似ている表情である。
「王妃？」
「そぅじゃ」
「イステルマっつったら、西のでかい連合国の？」
「まぁ、そういう認識でもよかろうの。ちなみに、香辛料と香油と工芸品でたんまり儲けておる。クラウドール卿は良き取引相手じゃ」
ほぅほぅ。レメクの貿易の相手さんでもありましたか。
目をキラリンと光らせたあたしに、ナザゼル王妃はニヤリと笑った。
「今度、姫にはとっておきの薬を進呈しよう。妾秘蔵の『眠り薬』じゃ」
「……なんで眠り薬をちみっちょにやるんだよ……」
いつでも誰に対してもツッコミしちゃうアルの言葉に、ナザゼル王妃はニヤニヤニヤリ。
「なぁに。男なんぞ眠らせて押し倒して乗っかってしまえばこっち

のもんじゃ」
「ちみっちょ！　おまえ、もらうなよ！？　ンなもん盛ったら二度と兄貴に信用してもらなくなるからな！？」
「ははぁ、陛下のお身内にしては珍しく常識的であるのぅ、こっちの小僧は」
なにげにアウグスタに対して失礼な発言をかましながら、ナザゼル王妃はニィと口の端を引き上げた。
「それでのぅ、その妾をなぜアディが頼ったかと言うとじゃな……まぁ、かつて国を追われたのが妾じゃから、こと暗殺者集団に関して、妾は身をもってイロイロ体験しておるのじゃ」
ふむふむ。
「殺しを生業にしておる輩はな、意外と多くいるものじゃ。その者等とて人生の全てを殺しに捧げておるわけではない。日常は町中や、領地、王宮などでそれぞれの生活をしておる。……まぁ、大きな組織になればなるほど、そういった形になるのぅ」
ほぅほぅ。
「……近くにいるってぇのかよ……そーゆー連中が」
「おるぞ？　だいたい、我らが陛下のヒモであるロードとて、最強最悪の暗殺者みたいなもんであろぅが」
……ヒモて……
「おとーさま……けっこういろんな地位をもってるのですね……」
「……末姫ちゃん。一応言っておくけど、ヒモ、っていうのは地位じゃないからね」
なんかアディ姫から深い声でのツッコミが来た。
「でも、おとーさまは魔法使いさんであって、暗殺者じゃないですよ？」
そこに存在するだけで人の心をバタンキューさせちゃう、ココロの暗殺者かもしれないけれど。
「……あの者が本気になれば、どの国とて一夜にして死に絶えるであろうよ。我が女王陛下が使役しておるからこそ、災いが他に広が

らぬだけじゃ。古き文献の通りであれば、かの者ほど恐ろしく絶望的な者はおらぬ」

どこか薄ら寒いものを堪える顔で、王妃はそう呟いた。

あたしには「ハテナ？」だったが、アルは何かを理解したのだろう。険しい表情で頷いた。

「……ほぅ。若造でありながら、相手を見る目はもっておるようじゃの、小僧」

「……俺にもちゃんと名前があるんだがよ。おーひさんよ」

「ふん。その名前を他人に貸してやっている者なぞ、小僧で十分じゃ。まぁ、なにやら強運だけは持ち合わせておるようじゃから、その点は評価するがの」

「……なんだよ、強運て」

相手が王妃でも口調の変わらないアルに、ナザゼル王妃は面白そうに笑いながら言う。

「王宮に来て早々、アディやクラウドール侯爵と誼（よしみ）をもったじゃろぅ？　それが強運でなくてなんだと言うのじゃ。まして、末姫と出会ぅたことで文字通り人の変わったクラウドール卿と、おぬしは出会ったのじゃ。本来ならあり得ぬ行幸であろうよ」

「……」

なんかアルがしみじみと問いたげな目であたしを見る。

王妃の膝にだっこされ、頭の上にでかくて重い重量物をのっけてるあたしは、訴えるような目でアルを見上げた。

乳が重いです！　重いですよ乳！！

……なんかアルがびみょーに困り顔になりました。

「そして、アロック卿。情報戦に関してはクレマンスの小僧とて敵わぬ大御所よ。おぬしらの浅ましい計画なぞ、最初から筒抜けじゃったろうな」

「……すり替えが行われていたことは、わりと最近知りましたけどね」

素直に言うケニードに、ナザゼル王妃は笑う。

「そこは誰にとっても想定外であろうよ。思いつきこそすれ、実行するにはあまりにも愚かな内容じゃ。……そうであろう？　偽りの対価はその罪に応じて重くなる。国を背負う王族の名を騙り、王を、宮廷を、国民を騙そうと言うのじゃ……その罪、どれほどのものじゃろうな」

すーっと血の気が下がっていくアルに、ナザゼル王妃は薄く笑った。

「あまり考えなんだかえ？　それはあまりにも愚かに過ぎるぞ？　言うておくが、普通、王族を傷つけた者や、王族の名を騙った者は皆、一族郎党で死罪じゃ」

「！」

ギョッとなったアルは、今更ながらに事の重大性を思い知らされたらしい。

……てゆか、殺されそうになったっていう時点で、そーとー重大だと思うのだが。

あれだ。彼は基本、のんきさんなのかもしれない。

（……てゆか、未だに偽王弟てこと、悪く言わないもんね……）

信じてたりするんだろーか？　相手のことを……

「普通のことであろう？　我が女王陛下の御代では、公開処刑はそう多くない。よほどのことがない限り行われぬ。それゆえに時折、罪の重さをわからぬままに罪を犯す者がおる。……軽く考えておったのじゃろう？　偽りというのは、おぬしらが思うほどに軽い罪ではないぞ」

「……ねーさま」

容赦のないナザゼル王妃に、アディ姫が声をかける。

何かを目で訴えるアディ姫に、ナザゼル王妃は苦笑してソファに身を沈めた。

「……自覚のない心こそ、犯罪の温床じゃ。それを忘れぬようにせねばならぬ。そうであろ？」

「……」

「まぁ、珍しくアディが他人を庇っておるからの、いじめるのはこれぐらいにしておこう」
なんと！　王妃はアルをいじめていたのか！
あたしはクワッとなると、頭の上にのってるバインなもっちりをバシバシ叩いた。
「アルをいじめちゃイカンのです！」
「おぉう！　末姫も庇うか。これはまぁ、妾も肝に銘じておこうかのぅ」
「二度とやっちゃイカンのです！」
「ふふふ。ほんに強運じゃのぅ、小僧」
なにやら意味深に笑って、王妃はあたしを床の上に降ろした。
そうして、ゆらりと立ち上がる。
「さて。馬鹿どもを見つけ出して、懲らしめておこうか」
馬鹿ども、っていうのは……えーと……
「牢屋で殺されておったのであろう？　そこの小僧を狙った者と、牢の見張り番は」
ああ！
「その、暗殺者さんが誰か、わかるのですか？」
「ふふん？」
あたしの問いに笑みを深め、ナザゼル王妃は頷いた。
「探せば、見つかるであろうよ。人が動けば必ず痕跡は残る。連中の動きは、妾がよぅく知っておるからの」
「でも、劇とかだと、こーゆー時に差し向けられる暗殺者は、凄腕のとか、伝説の組織とか、そんなのばっかりです！」
そう、王様とか、そーゆーエライ人を殺しに来る連中というのは、それなりの腕前とか、有名な組織じゃないといけないのだ！
……いやまぁ、名前が売れてる暗殺者の集団ってのも、どーかと思うのだが。
「凄腕の暗殺者、ねぇ……」
「伝説の組織、のぅ……」

あたしの主張に、けれど王族系二名はなんともいえない微苦笑になる。
「なんて言うのかな？　そーゆー、お約束がないわけでもないんだけどネ？」
「というか、まぁ、王族御用達のそういう組織も、無いわけでは無いのだが？」
なんだろう。
その、なんともこそばゆそーな苦笑は。
きょとんとしたあたし達の前で、アディ姫に目配せをしたナザゼル王妃は、微妙な微苦笑のままでこう言った。
「このロンディヌス大陸最強の暗殺者となれば、それまぁ、人であるのならば妾であろうよ」
と。

20　死を与える者

あたし達は、前に佇むその人を揃ってポカンと見つめてしまった。
妖しく美しいナザゼル王妃が暗殺者。
この、どうあがいても迫力たっぷりのムッチリ美女が暗殺者！
「……おねーさま、その胸は暗殺者としてダメだと思うのです！」
「……ちみっちょ……まずツッコむところはそこなのか……？」
ビシッと真面目に指摘したというのに、何故かアルからはビミョーな眼差しを向けられた。
あたしは頬を膨らませてビシビシと問題のブツを指さす。
「だって、あんなにおっきくて人目を惹くよーなもの、アンサツシャという職には相応しくないのです！」
「……いや……つーか、それ以前に暗殺者ってトコにはツッコみねェのかよ……」
複雑そうな呆れ顔で見つめられ、あたしはナザゼル王妃とアルを見比べてから大まじめに言った。
「人殺しはよくないのです！」
「今更！？」
……なぜ更に呆れた顔をされるのだ？
「……まぁ、末姫の言葉も、もっともなのじゃがな……」
首を傾げるあたしを見つめて、ナザゼル王妃がほろりと苦笑する。
あたしは力一杯頷いた。
「やはりその胸はイカンのです！」
「……いや、人を殺める行為の方じゃ」
……何故、ナザゼル王妃も呆れ顔なのだろーか？
「じゃがな、姫よ。そういう風に言うことができるのは、幸せな生き方をしてきた者だけなのじゃ」
深い声でそう言われて、あたしは口をきゅっと結んだ。
ナザゼル王妃は真っ直ぐにあたしを見つめて言う。

「……何をどう言うたところで言い訳にしかならぬ。それは妾も存じておる。……したが、妾達とて、好き好んでで人を殺して来たわけでは無い。同じ最強と呼ばれるのであれば、アディのように、武術を称えられての栄誉であってほしかったぞ」

その、静かで、そして悲しい微笑みに、あたしは眉をしょんぼりと下げた。

アディ姫が少しだけ気落ちした顔で俯いている。

「……のぅ、姫。昔話をしようか。こことは違う、小さな国の話じゃ」

微笑みを残して背を向け、ナザゼル王妃はソファ前からゆっくりと窓に歩く。

――足音一つたてずに。

「……昔、イステルマの近くに小さな国があった。……もはや地図上に名前の無い、本当に小さな国じゃった」

音もなく進むナザゼル王妃をあたし達は静かに見守る。

「そこには鉄鋼の鉱脈があっての。国民も王族も製鉄術、採掘術に通じる者ばかりじゃった。剣を扱う者、剣を知るべし、というのが我が国の教えでな。鉄に関わる全ての者は、皆、幼き頃から剣術を習うという国でもあった」

大きな窓の傍らにまで歩んで、王妃は窓枠に手をかける。

「鉄と言うのはの、今でこそ金銀よりも価値が下がっておるが、西方では非常に珍しい鉱石じゃった。我が国も鉄を売って生計をたてておったぐらいじゃ。……のぅ、末姫よ。知っておるか？　人はな、己の欲のためならば、平気で他の者を蹂躙するのだということを」

あたしは頷く。

それを気配で察したのか、ナザゼル王妃は苦笑らしきものを零した。

「あっという間のことじゃった。隣国が我が国をたいらげたのは。

……わずか一夜で我が国は滅んだよ。逃れたのは、当時アリステラ殿と交流のあった妾と、妾の乳姉妹であったナフタルだけじゃ」

「……」

「……悲しむべきなのは、我が民の矜持の高さであろうか。技術職人達にはとくにその傾向が強くての……徹底的に抗い、結果、多くの者が命を落としたのじゃ。侵略者に屈せず、鉄に関わる一切を秘したまま彼等は命を散らしていった」

……前に聞いたことがある。

ナザゼル王妃も、かつてのあたしがそうであったように、声を失ったことがあるのだと。

――一族の全てを殺された時に。

「……王族はのぅ、いざという時に皆を守る盾となり剣とならねばならぬ。じゃがの、連中は真っ先に我らを捕縛しようとしてきた。民に言うことをきかせるためには、民が敬愛する我らの身柄が必要じゃったということじゃ。……父も母も兄も、叔父も叔母も皆が戦った。おめおめと身柄を拘束されるような者はおらなんだ。妾と弟は、乳兄弟や姉妹達とともに逃げた。情けなきことなれど、隣国に助けを求めねば皆が助からぬことは分かっておったからの。……結果的には、無駄であったが」

「……無駄……て？」

重く悲しい気配を纏った王妃に、あたしはそっと声をかけた。

王妃は振り向かない。ただ、みしり、と――彼女の掴んでいた窓枠が軋んだ。

まるで、彼女の心の音のように。

「……常に我らと取引をし、いざというときには助けると言うた隣国どもが、我らに牙を剥いておったのじゃ。イステルマも含めてのぅ」

「！」

ギョッとしたあたしとアルに、ケニードが少しだけ暗い目になって俯く。

「連邦の全ての国が参加しておったわけではない。じゃが、我が国のような小さな国にとっては、一国同士の戦いであれ厳しい状況となる。それが、複数じゃ。……もちこたえられるはずもなかった」

「……」

「逃げることも難しかったのぅ……がむしゃらに剣を振るって……あぁ、初めて人を殺めたのは、あの時が初めてじゃった」

「……ねーさま」

アディ姫が小さく声をかける。どこか気遣わしげなその声に、王妃は肩越しに振り返り、ホロリと悲しく微笑んだ。

「殺さねば殺される。極限の状態にあって、妾達に罪の意識などなかった。……じゃがのぅ、あまりにも多勢に無勢。傷を負いながらも逃げ延びれたのは、妾とナフタルのみ。……他は皆、連中の刃に倒れるか、捕縛されまいとして自ら命を絶った」

「……そんな……」

「……それが戦というものじゃ。まして、『侵略』……情けも、人の世の理も、あの場にありはせぬ」

人の心の存在しない世界。

ただ、血と、憎しみと、悲しみと……死が横たわるだけの場所。

それが戦なのだと、その瞳が言っていた。

「妾も瀕死の重傷を負った。ナフタルとともにアリステラ殿に保護してもらわなければ、とうに亡ぅなっていたじゃろう」

声を失っていたのも、きっとその時なのだろう。

あたしはギュッと唇を引き結ぶ。

王妃はゆらりとあたし達に向き直った。

「……保護されてからの妾は、まさに復讐の鬼であったのぅ。憎くて憎くて憎くて、気が狂いそうなほど憎くてたまらなんだ。我が国を我が民を我が家族を殺した者共の、皆を……殺めるまでは死ねぬと思ぅた！　あやつらが生きておることこそが我が憎しみよ

！　あやつらを皆殺し尽くさねば、この心は晴れぬとそう思ぅた！！」

けれど――

「けれど……アリステラ殿が泣くのじゃ。妾達を抱きしめて泣くのじゃ……！　あの方のあんな悲痛な顔は見とぅなかった……！」

あたしにはなんとなく、その姿が見える気がした。

レメクを失いかけたあの時、あたしを抱きしめてくれたように……きっと、アウグスタは彼女等をひしと抱きしめていたのだろう。

……アウグスタは、強くて優しい『お母さん』みたいな人だから。

「じゃがのぅ……いくらアリステラ殿が素晴らしき方であっても、妾等には敵が多かった。妾等が生きておるかぎり、我が国の……散り散りになりながらも生き延びた数少ない同胞達も、決して抵抗をやめぬし、なにより、ナスティアという大国に保護された妾等は、ある意味脅威であったからのぅ」

「……脅威、って？」

「戦争の口実、ということじゃ」

薄く笑って、王妃はその瞳に暗い色を宿した。

「アリステラ殿は強い。妾は、この魔性の目を持って生まれたときより、人を殺めることに関しては他の追随を許さぬほどであった。……妾達が包囲網を破り、アリステラ殿が駆けつけるまでの時間を稼げたのも、この目あってのことじゃからのぅ。じゃが、その目をしても、かの君を殺めることはできぬと思うた」

竜をも殺すと言われた魔眼を持ってしても――

「個人の強さだけでなく、ナスティアは非常に強い国であろう。最も『魔法』に近い魔術と呼ばれる紋章術。そこから派生し、現在多数の術師の存在する紋様術。身体能力に特化している一族も多いうえに、かつてこの国は『魔族』をも撃退させた国じゃ。……そんな

国に、妾達は保護された。妾達の名をつかえば、滅ぼされた我が国の領土を取り戻し、藩属国とし、そこを足がかりに周辺諸国を平らげることも可能であろう。……アリステラ殿がその気になれば、容易いことじゃ。……それだけの力が、あの方の率いるこの国にはある」

言いきった王妃をあたしはジッと見つめた。

暗い色が薄れ、力強いものが宿っているその瞳を。

「おかーさまは、他国に攻め入ったりしないと思うのです」

「……無論じゃ」

ナザゼル王妃はほろりと笑う。

どこか苦みがかった悲しい笑みを。

「アリステラ殿は戦を好まぬ。いつか必ず尽きる命を、なぜに奪い合わなければならぬのだと嘆いておられた。……妾は、あの方に何度も救われた。この命も、この心も。……じゃから、あの方が復讐に手は貸せない、他国に攻め入ることはできない、と言えば、妾も、鬼に堕ちることなく『わかった』と頷くことができた」

その心のままに、復讐に固執することなく――

アウグスタを悲しませることは――彼女には、できなかったから……

「……じゃがな、他国はそうは思わなんだ。ナスティアは強すぎる。その力はあまりにも脅威であった。……もっとも、直接この国に敵対することはできなんだでろうよ。強いからこそ脅威であり、強いからこそ真正面からナスティアに刃を向けることはできぬのじゃ。……ならば、どうするか。……簡単じゃな？　原因となる妾達を消してしまえばよいのじゃ」

言われて、あたしはようやく頭に染みこんできた言葉の意味に愕然とした。

彼女は言ったのだ。暗殺者のことについては、身をもって知っていると。

それこそ、武術の達人であるらしいアディ姫よりも、もっと、ず

っと――

それはつまり、ナスティアに保護されてからもずっと、暗殺という恐ろしい目にあい続けてきたということだ。

「何人を相手にしたのか、覚えておらぬ。……巻き沿いになった者も含め、何人が妾が原因で死んだのかも、もはや分からぬよ。……ただ、殺して、殺して、殺して、殺して……生き残るためにひたすら襲ってくる者達を葬ってきた。アリステラ殿とて万能では無いからのぅ。いろんな難題も抱えておったし、そうそう妾等のことばかりかまっていられるはずもなかった。連中はそういう時期を狙って襲ってきおったよ。……ナスティア国の中にも、妾等の排除しようとする勢力があったしのぅ」

「……あいつらは、怖かっただけでしょ？　他国のいざこざを持ち込まれるのがいやで、ろくにモノを考えずにあっさり人の命を奪おうとする……！　ゲスの極みだわ！！」

「アディ……」

ふいにたまりかねたように吐き捨てたアディ姫に、ナザゼル王妃は優しく微笑む。

「じゃが、平和を保とうとすれば、そういう手段をとらねばならぬこともある。大多数を守るための少数の犠牲。……許されることではない。許されざることのはずじゃが……それを選ぶ者は多い。そして、この王宮にはそういう者が多くいたということじゃ。……あぁ、今は半数ぐらいは粛正されておるようじゃがな」

……それって、半分はまだ王宮に残ってるってことじゃなかろーか……？

「そうしているうちにな、知らず、連中の事に長けるようになってきた。暗殺を防ぐのに一番有効なのは、暗殺のことを熟知することじゃ。妾を鍛えたのは他の誰でもない――かつて妾を殺そうとし、妾に倒された者たちじゃ」

そうして、今日のナザゼル王妃は完成されたのだろう。

暗殺者を撃退し続けた結果生まれた、最強の暗殺者として。

「……まぁ、もっとも、最強たるのは、我が夫と巡り会ったせいであるが」
……って、あれれ？
「撃退の結果、おねーさまが完成されたんじゃないの？」
あたしの問いに、王妃は一瞬きょとんとし、次いでコロコロと笑った。
「妾はまだ完成されておらぬよ！　じゃが、まぁ、今の技量に近いところまできたのは、その撃退の結果ではあるのじゃが」
てことは、最後の一段階とかを登るのが、旦那さんを得てからっつーことだろうか？
あたしの目がキラリと光ったのを見て、王妃は口元をほころばせる。
それと同時に、あたし達が知る『ナザゼル王妃』っぽい気配に戻ってきた。
「いくら技量が上がったとはいえ、それは生き延びるための技量じゃ。アリステラ殿の庇護下という箱庭の中で刃を振るう妾は、言うなれば、東の国で言うところの『井の中の蛙』というやつじゃ」
おお。ナスティア王妃も、東の国の言葉を知っているのですね！
「妾よりも強い者もおるし、技量の優れた者もおる。それを痛感したのは、今まで相対してきた暗殺者の中で、飛び抜けて強い者と出会った時じゃ。最終手段である妾の『魔眼』すら使う暇もないほど、彼の者は抜きんでて強かった」
「そんなにすンごく強かったの？」
「強い強い。おまけに恐ろしく速くてのぅ、気づいた時には首元に刃をつきつけられておった」
……ものすごい一瞬だったんだな。きっと。
「そやつは妾より少しだけ年長の男での……その男、妾を死においやる寸前、至近距離で妾を見てのぅ」
言って、王妃は目をキラリと輝かせ、勇ましく己を親指でビッ！と指し示して胸を張った。

「この妾に、惚れおった！」
……うれしそー。
「それからはもぅもぅ、何をしに来てるんだかこやつは、という感じで来ては帰り来ては帰り何をするわけでもなく遠くから眺めに来てはついでとばかりに辺り一面の暗殺者をさくっと葬って帰りとイロイロ妾のために動いてくれてのぅ！」
うれしそー。
「かといって妾を押し倒すわけでもなし！　声をかけるにしても『無事ですか』とかそんな阿呆のような言葉ぐらいでのう！　よく観察してみれば、まぁ！　これがまたなかなか良い男でのッ！」
……コイバナかー……
「あれだけの技量を持っておりながら、ほんにたわけたことをほざくほどにお人好しでのぅ！　おまけになかなか純情でのっ！　妾が湯殿で襲われた時なんぞ、真っ赤になって慌てて出て行きおった！　もちろん襲撃者なんぞ一瞬で片づけておったぞよ！」
……長そうだなぁ……
「あの男の動きを傍で見ておったら、妾の技量もさらに一段階上に上がってのぅ！　もちろん日々の鍛錬の賜物でもあるのじゃが、やはり傑物の動きを間近で見られるというのは得難い体験じゃ！　しかも良い男であるからして妾としてもあれ以上の出会いは無いと思うたぞ！」
……そろそろ終わらないかなぁ……
「で、押し倒してモノにしたら、なんと奴はイステルマの重鎮の一人だったというオチじゃ」
終わった！
「で、アリステラ殿と相談しての、いっそ敵陣の一つであるイステルマに乗り込んで平らげてしまえ、ということになってのぅ。あやつと結婚してあちら側に乗り込み、掌握してやったというわけじゃ」
最後はわりとあっさり締めくくった王妃に、あたしとアルはちょっぴり唖然。

というか、それで生まれた最強の暗殺者、ってどーなんだろう？
「……けどよ、その場合、最強の暗殺者、って言うのは、違うんじゃねェのか？」
おお。アルが早速つっこんだ！
「別に仕事を受けて何かやってるわけじゃねぇんだろ？」
「やっておるぞ？」
「……なんでやってるんだよ、王妃だっつーのに」
「アルティルマでは、暗殺がお家芸じゃからのぅ。もちろん、そこでも妾は最強を目指して驀進したわけじゃが」
「目指すなよ！　そんなもの！」
……まったくだ。
だが、呆れ顔のあたし達の前で、ナザゼル王妃はニヤリとその口元を歪めてみせた。
恐ろしいほどの覇気を目に宿して、傲然と顔を上げる。
「強い力を持たねば殺されるだけじゃ。妾は妾のために最強にならねばならなんだ。むろん、悪戯に人を死に追いやることなどせぬ。が、強くなければあの地では生きられぬ。そして、最強にならねば、あの国自体を変えることもできぬ」
「……変える？」
「人殺しを生業にするのが普通の国家など、あってよいはずもなかろう？」
ふと苦笑して、王妃は髪を軽く掻き上げた。
「したが、上に立つ者がそれを推奨していては、国など変わるはずもない。……国民の中にはな、人を殺すことに倦んでいる者も多くいたのじゃ。戦争になれば真っ先に声をかけられる武術者集団。その実体が暗殺者集団ともなれば、まぁ、どういう国であるのかは察しがつくであろう？　だがな、その国民が全員、好んで人殺しを生業にしているわけではない。あの国には、己の体を磨いて金銭を得るしか、生き延びる術がなかったのじゃ。古い古い昔から、の」
「……だから、ねーさまは国の根本から変革を行うために、重鎮の

妻から国主にまでのぼりつめたのよね。そうしないと、国は変えられないから」

「そう。力のない者に、下の者はついてはこないからのぅ」

アディ姫の声に頷いて、ナザゼル王妃は軽く腕組みをした。

「ゆえに、妾は最強の暗殺者でなければならぬ。国で一番ではなく、大陸で一番の。……まぁとはいえ、好んで暗殺を請け負うわけではないからのぅ。腕試しにくる馬鹿者を倒したり、アリステラ殿の邪魔をしそうな輩をちょいと懲らしめたりするぐらいが最近の動きなのじゃが」

……腕、なまっちゃうんじゃなかろーか……

「アリステラ殿に向けられる暗殺者の技量はなかなかのものでのぅ。我が国の者よりも秀でておるのが何人かおるから、まぁ、そちらで技量も磨けたりするのぅ」

……アウグスタ……なんか変な風に貢献してないだろーか。

いやまぁ、どっちがどっちに貢献してるのか、なんか微妙な感じだけど。

「……てことは、あんたが、その……『陛下』の所に来る、暗殺者ってのをやっつけてるのか？」

「時間が空けば、妾が出向いておるよ。出向けぬ時は、妾の腹心達がアリステラ殿の警護にあたっておる。……まぁ、アリステラ殿自身が強いうえ、今はロードが傍におるのでのぅ。我が腹心達もさほど苦労はしておらぬが」

言って不思議な微笑をする王妃に、あたしは首を傾げつつ問うた。

「もしかして、祭りの間に腹心さん達とお話ししたりしてるの？」

「おお、末姫よ。おぬしはちっちゃいのによく頭がまわるのぅ」

……ちっちゃい、は余計だ。

「おおっぴらに訪れてられるのはよいの。文よりもずっと綿密に話しができる。……まぁ、そんなわけで、末姫の言う『最強の暗殺者』だの『伝説の暗殺者集団』だのというのは、当てはまるのを探せば他にもいるやもしれぬが、ここ近隣で言うなら妾と妾の国じゃから

の。そこな小僧に手を出すことはない」
「下っ端が勝手をするってゆーこともないの？」
下街では、上の人間の言葉が徹底されてないこともままあるのだが。
「勝手をするような輩は、まぁ、おるまいよ。いちおう、他国の王族には関わるなと通達しておるし、それを破れば罰則を与えるとも言っておるからの」
「……罰、って？」
あたしは眉をひそめながら王妃に尋ねた。
罰というのは、罪におうじて重くなくっちゃいけないのだ。一番上の人の決めたことを破るよーな人の罰は、どれだけ重いのだろうか？
「通称『廊下』と呼ばれる鉄橋の上にの、水入りバケツを持って立たされる」
……どういう罰なんだ、それは……
「ちなみに不眠不休で三百六十五日」
罰、重ッ！！
「ふつーに無理じゃねぇか！？」
「てゆか完遂した人いるの！？」
「何人かおるのぅ……立ったまま寝ることができれば、まぁなんとか堪えられるであろうよ。ただ、我が国はここよりも暑くてのぅ。夏場なんぞ火の季節じゃから、なかなかに大変じゃと思うぞ」
……なにかこう、ツッコミ所の多い国だ。
唖然としているあたし達を見て、ナザゼル王妃はニヤニヤと笑った。
「国によっていろいろあるということじゃ。それらは皆、その国に溶け込まねばわからぬことであったりもする。他国から見て異様なことでも、その国の中ではごく当たり前のことというのも多くあるでの。妾達はそういうものを全部知らねばならぬ。仮にも『王族』の一員となったからには、それが妾等が負うべき責務であろうよ」

「……」

「小僧。そして、末姫。おぬしらは『王族』じゃ。誰の血を引いてるから、とか。誰の血もひいていないから、とか。そういうのは言い訳にもならぬし、むろん、何かの理由にもならぬ。誰の血を引いていようと、王族としての責務を果たせぬ者には王族たる資格はない。そして誰の血を引いていなかろうと、王族としての責務を果たそうとする者ならば、王族たる資格があると妾は思う」

あたしとアルは目を見交わせた。

互いに眉が情けなく下がってしまっているのは、自信がこれっぽっちもないからだろう。

「思い詰める必要はない。だが、心に留めておかねばならぬ。……もっとも、小僧は他人に己の身を上を貸し、のうのうと生きようとしておるのかもしれぬがな」

「誰が……！！」

反射的に反発し、アルはハッとなって口を噤んだ。

静かな目をしたナザゼル王妃は、気まずげに顔を背けたアルに少しだけ微笑む。

「……おぬしが、おぬしの意志で己の身の上を投げ捨てようとするのなら、まぁ、それはよかろうよ。アリステラ殿は寂しく思うであろうが、なぁに、妾達愛娘がついておるからの。傷心などいくらでも慰めてしんぜよう。……じゃが、成りすましだけは許されぬ」

ビリッと震えた空気に、あたし達は一斉に王妃を見る。

全身に強い力をためて、王妃はどこからともなく取り出した剣をスッとアルに向けた。

「それは、罪じゃ。それは、災いじゃ。アリステラ殿の害となる者など、妾は決して生かしてはおかぬ。おぬしにアリステラ殿を害する気持ちが無いことは、これまでの言動で分かった。……したが、他はわからぬ。故に言っておく」

満ちる力。瞳に宿る意志。

その強く激しい裂帛の気迫。あたしなど思わず身構えてしまった

ほどである。
「妾は害ある者を排除する。それの邪魔は、決してするな。したが最後、妾はそなたにも死を与えよう。誰が相手であろうとも、妾はアリステラ殿の敵を許してはおかぬ」
「……」
「心に留めておくがよい。どのみち、おぬしは『狙われし者』。これ以上の動きは、どのようなものであれ、誰も望んではおらぬであろう。全てが終わるその時まで、大人しくしておるがよい」
強い眼差しでそう言うと、王妃は身に纏っていた力を消した。
その瞬間、その手の剣もどこかへと消える。
硬直して動けないあたし達を見回して、ナザゼル王妃はアディ姫に笑いかけた。
「アディ。心配なら、おぬしが守るのがよかろうよ」
「……最初から、そのつもりよ」
ムッとした表情を作って、アディ姫が答える。なんか、いつのまにやらアルの前に立っているが、このお姫様も、いったいいつ移動したのだろーか？
「とりあえず、敵は絞れているわ。レンフォード家の公爵夫人、その私生児、そして雇われた殺し屋。背後関係はじょじょに詰める。ネーサマは暗殺者の排除を。あと、腹心さんが複数いるなら、アロック卿の方にも一人まわして。クラウドール卿の手の届かない場所にいるときに襲われると事だから。で、アロック卿、背後関係の洗い出し、頼んでもいい？」
「かまいませんよ」
アディ姫の声にニコッと微笑んで（彼は彼で、なにやらすごく胆力があるよーだ）、ケニードはアルにもニコと微笑みかけた。
「末姫ちゃんにクラウドール卿を動かす際の起動源になってもらうとして、アルルンはあたしと一緒にいること。……アルルン、いいわね？」
「……お……おぅ」

ジッとアディ姫に見つめられて、先程のやり取りで青ざめていたアルが我を取り戻したように慌てて頷く。

それをジッと見てから、アディ姫は気合いのこもった息を吐き、パンと両拳を打ち合わせた。

「相手は素人だけど、素人だからこそこっちが思いもしなかったお馬鹿なことをやりかねないわ。ネーサマを除いた他の面々は、決して一人にはならないこと。それだけは守ってね」

「あい」

「はい」

「おぅ」

三者三様の返事を受けて、アディ姫はようやく彼女らしい笑みを浮かべた。

妙に愛嬌のある、どこかうすら寒い笑みを。

「さぁ、懲らしめてあげましょう」

21　消えた姫君

「……つーか、俺ぁいったい何をすればいいんだ？」
アルがそう呟いたのは、ナザゼル王妃が退出してしばらく経った頃だった。
場所は未だに『獅子王の』と呼ばれる部屋。
派手な色彩に囲まれて、アルは早くも落ち着かないよーだ。
「アルルンは特に何もしないでほしいんだけどなぁー……下手に動くと、何が起こるかわかんないからさぁ」
「……」
ソファの上に寝そべったアディ姫は困り顔。
それを見て、アルはなにやら暗い顔で俯いた。
アディ姫はぼりぼり頭を掻きながら身を起こす。
「……ん～。それよりもね～、アルルンには聞きたいことがあるんだけどね～」
何かを考える顔で、彼女はアルに問う。
「……なんでさぁ、君、自分の名前を貸そうなんて思ったの？」
その問いに、あたしもケニードもサッとアルに視線を向けた。
気になっていたのだ。
アルはどうして……今回の事、承諾したのか。
……何を考え、何を思い、名前を貸すことにしたのか。
「……」
アルは答えない。ただ、何かを堪えるような目で顔を背けた。
アディ姫はそんなアルをジッと見つめ、わずかなため息を零してソファに背を預ける。
「……じゃあ、質問を変えるけど……アルルンて、向こうじゃどういう生活をしてたの？」
向こうの生活。
というと、レンフォード家での生活だ。

あたしは目をキラリと光らせて、弾力のあるソファでバウンドする。
「……別に、ふつーに暮らしてたぜ？」
「『普通』って言うのはさぁ……人によってそれぞれ違うんだって……アルルン、知ってるかい？」
「……」
「君が馬番のおかーさんと、前王陛下の子供だっていうのは、ここにいる全員が知ってることだから、ぶっちゃけて話してよ。馬番ってことは、馬の世話はしてたんでしょ？」
「……あぁ」
「寝泊まりする家は、おかーさんが住んでた家？」
「……そうだよ」
「おかーさん以外に家族は？」
アルは目を伏せる。暗く沈んだその表情だけで、その答えは知れた。
「……いねェよ。他には。……いやしねェんだよ」
言って、彼は深いため息をついた。そのままどこか投げやりな動きでアディ姫の前にあるソファに座る。
動きといい、座り方といい、正真正銘ゴロツキみたいな感じだった。
……おーじサマなのになぁ……
「……つまんねェ話しだぞ？」
そのガラの悪い座り方のまま、アルはジロリとアディ姫を睨む。
アディ姫はニコリと微笑んだ。
「人の生い立ちに、つまらないものなんて何一つないわ」
アルの視線がちょっと戸惑ったように揺れ、微妙にアディ姫から逸れた場所で止まる。
誰もいないその場所に視線を逃がしたまま、アルはぽつりぽつりと話し始めた。

※　※　※

アルことクリストフ・オリガ・サイフォスが生まれたのは、二十二年前の初夏。

レンフォード家の厩舎近くにある、馬番の家での誕生だった。

家族は母一人。

本来馬番の仕事をするはずの『父親』も、母の両親も傍にはおらず、アルは物心つく前から馬の世話をさせられていた。

もともと体の成長は早く、頭もしっかりしていたアルは、五歳になる頃には簡単な世話なら一通りできるようになっていた。

二人が暮らすのに必要な食料は、量・質ともに粗末ではあるもののレンフォード家から全て支給され、衣服も上等ではないもののあてがわれていた。

本来、そういった支給品は、給料と同じく仕事内容や量によって決められる。

小さなアルには大人ほどの仕事はできず、か弱い女性であった母親もそれは同じだった。

それでもきちんと他と同じような食事を与えてくれるレンフォード家に、アルはとても感謝していたという。

……その実際は、隠しているとはいえ、王の子を餓死させるわけにはいかないという、ただそれだけのことだったのだが。

だが、他の労働者にとって、それは腹立たしいことだった。

自分達よりも仕事の劣る女子供が、汗水流して働く自分達と同じように扱われるのだ。何故あいつらだけ、と、嫉む者も少なくなかった。

結果、一部の下働きの人間からは辛くあたられた。くんできた水をひっくりかえされたり、わざと穴のあいた桶で水くみをさせられたこともあった。

けれど、彼の周囲にいる人の中には、素朴で優しく、暖かい人も多かった。

大きくなったら、もっと沢山働ける。
大きくなったら、もっと母を楽にしてやれる。
その当時のアルの心は、それでいっぱいだったらしい。
「おふくろは、さ……俺が寝てる時も内職ばっかりしてたからな……」
力がなく、重いものを持てず、それゆえに仕事に差がでてしまうのを埋めるため、衣服のほつれを直したりすることで、他の人の助けをしていたお母さん。
そうやって違う面で埋め合わせをして、彼女達は暮らしていたのだ。
助けられ、助け合い……辛い思いを時々しながらも、アルはそれでも、そういう日々がいつまでも続くものだと思っていたのだという。
……体の成長とともに、少しずつ生活もよくなっていくだろうと期待しながら。
それが失われたのは、十五年前の秋。
収穫祭を前にして、誰もが心を浮き立たせていた時。
彼の母親は命を絶った。
詳しい事情は知らない。
ただ、自刃したと——それだけを伝えられた。

アル、七歳の頃だった。

「……あいつと……アルトリートと出会ったのは、その頃だ」
シンと静まりかえった部屋の中に、アルの悲しい声が響く。
あたしはゆらゆらする視界の中で、一生懸命アルを見つめていた。
アルはやっぱり、どこかあたしと似ていたのだ。
幼い頃に母親と死に別れたことも、苦しい生活の中でがむしゃらに生きていたことも。

「おふくろを亡くして……なんもかんも、虚しくて……正直、何のために生きてるんだろうって思ったな。……けどよ、喰って、仕事して、寝て……そういう、考えなくてもいい動きとかは、勝手に体がやってるんだよな」

どこか虚ろな苦笑を浮かべて、アルは言葉を続ける。

「……アルトリートと出会ったのは……」

どこか遠い場所を見る目で、虚空を見つめながら。

「……収穫祭の最中だった。埋められたおふくろの墓で突っ立ってた俺ン所に来て、収穫祭のお供えものをくれたんだ」

一年の収穫を祝う『収穫祭』。

春の大祭と同じく、人々にとって喜びの季節。

その中で、独り、悲しみに沈んでいたアルに、彼は手を差し伸べたのだ。

……その心がどんなものだったのかは、あたしにはわからないけれど。

「……悪い奴じゃないんだ。少なくとも、俺には優しい……イイ奴だった。親を亡くした俺のために、いろんなことをしてくれたんだ」

例えば、自分が使わなくなった服や、護身用のナイフ。

野を駆け、森を巡るための弓、乗馬。

書物を読むための文字や、紋章の見方。

ただの馬番であったなら知ることのない、様々な知識。様々な経験。

それらを教えてくれた。

他の誰でもない――あたし達が『偽王弟』と呼ぶ、アルトリートから。

「あいつが……どんな風に言われたって、俺は、あいつが優しかったことを知ってる。おまえ等が、あいつが、俺を殺そうとしてるって言ったって……信じられる、ワケ、ねェだろ!?」

……彼等は、きっと、一緒に時間をたくさん過ごしてきたのだろう。

十三年。

あたしからすれば、あたしの人生よりも長い年月。

身分の差や、立場の違いがあろうとも……彼等は、友として一緒の時間を育ってきたのだ。

今日という日まで。

「……あたしが知ってるのは、あたしが知りうる情報だけ」

真っ直ぐに睨みつけるアルの目を真正面でしっかりと受けて、アディ姫は静かに言った。

「王宮では、『アルトリート』の名はほとんど語られない。わずかに、女癖が悪いということと、借金をつくっているということぐらい」

「……」

「レンフォード領内の貴族からは、悪評しか聞こえなかった。女性関係においては、最悪だったようね」

「……けど、俺には『いい奴』だった」

「そぅ……君が女だったら、違う意見が出たかもしれないけどね」

「それでも！」

アディ姫の声を遮るように、アルは悲痛な顔で叫んだ。

「それでも、俺には優しい、いい奴なんだ！」

アディ姫は口を閉ざす。

ただ、真っ直ぐな目で彼を見つめた。

あたしは二人の様子に、ある日のレメクの言葉を思い出していた。

……人は、決して『独り』では生きられない。

誰かにとっては悪でも、別の誰かにとっては大切な人であったりするのだと教えてくれたレメク。

……アルにとって、偽王弟は、本当に大切な人なのだ。

今、こんな風に、皆から悪人だと言われ、自らの命を狙っていると言われてなお……庇わずにはいられないほどに、大切な人なのだ。

その人を、心から信じきるほどに――

しばし見つめ合い、アディ姫はふと、小さなため息をついた。
ほんのわずかに目を伏せて、けれどアルを真っ直ぐに見たままで言う。
「……君の過去を……否定することはしないわ」
静かで、深い声が言葉を紡ぐ。
「君が過ごした年月を、育んできたものを……否定することは、誰にもできない。それは確かにそこにあって、いつまでも在り続けるものだからよ」
「……」
アルは唇を引き結ぶ。
その姿を見つめて、けれど、とアディ姫は言葉を零した。
「人は、永遠に同じままではいられない。それもまた、間違いなく事実。……あなたと共にあった『アルトリート』という人は、確かにあなたと共にあった時間、優しくて頼りがいのある『いい人』だったのかもしれない。けれど、他の人達から見た時に、全く別の一面があったのもまた事実。……どちらも嘘じゃないわ。どちらも、本当のこと」
けれど、だからこそ――

「大事なのは、そこにある事実の全て。真実は人の数だけあり、決して一つになったりしない。けれど、起きた事実はその場その時その瞬間の唯一つだけ。例え誰かにとっての真実がいくつあったとしても、同じものは決してないからこそ、全ての事実を揃え、一つ一つを解きほぐさなくてはいけない。事情も、原因も……その人の心も」
……なぜなら、人は、その時の立場、思い、事情によって、いつだって簡単に人を裏切ったりするものだから。
「そして、罪や罰も、その事実それぞれに対してついてくる。あなたにとって、『彼』はよい人であった。それは事実。……この王宮

で、『彼』は今、大きな罪を犯している。それも事実。……そして、私達は、後者の事実に対して罪を問い、罰を与えなくてはならないの」

「……だから、俺の知ってるあいつがどーであろうが、どうでもいいってことか」

「違うわ」

スッと冷ややかなものを宿したアルに、アディ姫は微笑む。

どこか慈愛めいたものを感じさせる、暖かい瞳で。

「忘れないでほしいの。今あたし達が問題にしている『事実』が、あなたの知る『事実』を消してしまうものではないことを。あなたの過去は、あなたのもの。そこにあった事実もまた、あなたのもの。暖かいものも、優しいものも、大切なものも、確かにそこにあって、それは誰にも否定されることのない本当のこと。……忘れないで。あなたの記憶は間違いなんかじゃない。そこにあったものも、きっと間違いなんかじゃないわ」

一瞬、アルの目が大きく揺れるのをあたしは見た。

アディ姫はこう言っているのだ。

あなたにとって、優しかったアルトリートは、決して嘘じゃない、と。

自分達がどんなに相手を否定し、批判したとしても、それを庇うアル自身の思いも、それを支える記憶も……決して偽りなんかじゃない、と。

「……おねーさま……」

彼女は、全てを受け入れ、全てを肯定し、そのうえで、その一つ一つに対して真摯に向き合い、答えを出そうとしているのだ。

かつて教えてもらった。彼女の自称。

真実の探求者。

まさに、彼女はその名を名乗るに相応しい人だったのだ。

「……信じてても……いいんだよな……？」

ぽつりと、アルが声を零した。

アディ姫は頷く。
「……俺は……信じたいんだ……」
ぽつりと、零れる声と一緒に、涙が零れた。
「信じていたいんだ……！」
あたしは唇を噛んだ。
ケニードは悲しげに眼差しを伏せた。
アルも、不安だったのだ。
何もわからず、決して今までの生活とは相容れるはずもない『王都』の『王宮』なんて所に連れて来られ、不慮の事故にあいかけ、見ず知らずの人を巻き沿いに傷つけてしまい、会うことすらないだろうと思っていた異母姉と会い――――

立て続けにおこった事態に、めまぐるしく変化する現状に、きっと怖くてたまらなかったのだ。
大切にしてきたものも否定され、疑われ、友達を犯人と決めつけられて、けれど否定するだけの材料なんて自分の思いと他愛のない過去の話ぐらいしかなく……
辛かったのだ。
そうだ。なんで気づかなかったのだろう。
辛くないはずなんてなかったのだ。友達が自分を殺そうとしているだなんて話。
突然言われて、現実を見ろとばかりに状況や背景なんかを目の前で言われて、わけもわからず周りに流されて……！
自分のことだから辛かったんじゃない。
命を狙われたから辛かったんじゃない。
誰かを巻き沿いにしたから、辛かったという、ただそれだけじゃない……！
友達を、大切な人を、疑われ、犯人だと言われ続けたのが辛かったのだ。
「他の誰が何を言っても」

アディ姫は言葉を紡ぐ。
「どんな現実がつきつけられても」
静かで、けれど優しい表情で。
「その人を信じたいと思う限り、信じ続けてもいいの」
俯き、身を折るようにしてうずくまったアルに、アディ姫は音もなく立ち上がる。
「けれど、現実はいつだって残酷で、悲しいことも問答無用でつきつけてくるから」
小さな子を抱きしめるように、そっとその身を抱きしめて、アディ姫はアルの背をぽんぽんと叩いた。
「現実を否定せず、全てを見据え、冷静に受け止める覚悟だけはもってちょうだい。心が壊れてしまわないように」
アルは答えない。
ただ、押し殺した嗚咽の中で、確かに、わかった、と……そう頷いた。

※　※　※

アルトリートが落ち着くまでの間、あたしとケニードはソッと二人から離れて部屋中をぐるぐる徘徊した。
傍にいてあげたほうがいい気もしたけど、それはアディ姫がいるから大丈夫だろう。
あたしとケニードはなんだかちょっぴりお邪魔虫の気分で、コソーッと隣部屋のほうに移動する。気づいたアディ姫がチョイとこっちを見たけど、苦笑しただけで何も言わなかった。
だからこそ余計に思う。彼のことは、アディ姫に任せておけば大丈夫だと。
「この部屋って、本当に派手なのね」
五つ目の部屋をこっそり覗き見て、あたしはそう言葉を零す。
王妃ナザゼルが使っている部屋だからと、あまりうろちょろしな

いよう佇んでいたケニードは、そんなあたしを止めるために追いかけてきて、結局一緒にぐるぐる徘徊する形になっていた。
ナザゼル王妃のいる部屋も、あたしのいる部屋と同じく数多くの部屋を持っている。
廊下からすぐが応接室だったり、部屋数も五つとずっと数が少ないのだが、一つの部屋ごとの規模は似たりよったりだ。小さい小部屋がない分、ずいぶんと機能的な感じがする。
……いや、部屋の無意味なバカでかさとかは、すごく機能的じゃないと思うのだが。
「正式に言うなら『獅子王の間』かな」
その名称の由来は、三つ目の部屋で見つけた剥製で明らかだった。巨大な獅子の剥製があるのだ。
……というか、獅子なんて、お祭りの時に見せ物小屋でコッソリ見たぐらいで、間近に見たのは初めてだったが。
「三代目国王は狩猟祭の時に、かつて見せ物小屋から逃げだし、野生化した獅子の子と会ったんだって。どうやって手なずけたのかまでは知らないけれど、それを育て、常に傍においたんだそうだよ」
だから、三代目国王を指して人は『獅子王』と呼ぶ。
「この部屋は、その獅子王が好んで使っていた部屋だそうだよ。なんでも、活力が湧いてくる気がするから、って」
「他にもおっきな部屋はあるのに？」
不思議に思って、あたしはケニードに問いかけた。
あの青の間なんか、ここの倍の部屋数がある。王様なのだから、すごく広くて立派で部屋数の多い場所をとると思ったのだが。
「王は基本、後宮の全てを所有してるんだ。全部自分の部屋だから、どこの部屋で過ごすかは、王の自由。王が使ってない部屋のいくつかが、年若い王子や王女に分け与えられたり、お妃様達に与えられたりするけどね」
「ふぅん……」
部屋の中をちょろちょろしながら、あたしは気のない相槌をうっ

た。
　正直、後宮に部屋がいくつかあるのかすら、微妙にあやふやだったりするのがあたしである。
　……いや、なんとか頭の中に叩き込んでいる部分もあるんだけどね？
「ベルの使ってる『青の間』は、暁の賢者が王宮にいる時に使ってた部屋だよ」
「ほぇ！？」
　さらりと言われた言葉に、あたしは思わず飛び上がった。
「あの部屋も！？」
　そういう情報は、サッパリだ！
「そう。……というか、ベルって、そう考えると『暁の賢者』と縁があるよねぇ」
　あの、建国の立役者、女傑ナスティアの旦那さんという噂の賢者サマと！
「まぁ、クラウドール卿は『暁の賢者の再来』とまで言われてる人だから、その縁もあるんだろうけどね」
　……そーいや、レメクは暁の賢者とすごく縁がある人でした。
　過ごしてる邸宅もそうだし、断罪の紋章もそうだし。
「確か、あちこちに仕掛けがほどこされてるらしいよ。ただ、それを知っているのは王族でもごく限られた人だけなんだって。まぁ、王宮なんて、そういうもんだけど」
「隠し部屋とか、隠し通路とかがイッパイなのね！」
「そう。まぁ、貴族の屋敷でも、けっこうそういうの多いんだよね。……僕の家は、どれが隠し通路のつもりなのかサッパリな状況だけど」
　そーいや、昔遊びに行かせてもらったケニードの屋敷は、ビックリ迷路のような感じだった。
　……外見は王城のミニ版って感じで綺麗なんだけどな……
「クラウドール卿の屋敷もそういう仕掛けがいっぱいあるよ。中に

はとんでもない呪術結界が張られてる場所もあるから、下手に探検しようなんて思っちゃいけないんだけど」

……ぎくっ！

一瞬ワクワクしたあたしの気持ちを読み取ってか、ケニードが「ダメだよ？」という目でこっちを見る。

「お……おじ様一緒に探検すればいいのですよ！」

「それは、クラウドール卿が一緒ならたいていのものは大丈夫だろうけど、体調が戻ってからにしたほうがいいよ？　あとは……まぁ、時間があれば、だろうけど」

……ううっ！

言われた言葉に、あたしはグッと言葉をつまらせた。

ケニードは気遣わしげな顔で嘆息をつく。

「たぶん、今回のドタバタもあの人の肩にのしかかってくると思うんだ。あまり無理をしないといいんだけど……」

「……ううっ」

「あのさ……ベル」

ふと声を落として、ケニードは真剣な顔であたしを見た。

その瞳の強さを認めて、あたしはケニードの傍に舞い戻り、真面目な顔で見上げる。

そんなあたしを真剣に見つめて、彼は言った。

「……もし『生命の賛歌』を歌えるようになったら、僕じゃなくて、クラウドール卿のために歌ってくれないかな」

生命の賛歌。

彼が、彼の指を元に戻すために聞くべき歌を――

「あの歌は、生命の誕生や、実りへの賛美や、生きとし生ける者への愛おしさを歌ったものなんだ。荒涼とした荒れ地に、けれど光は満ちて、そこに命は宿るでしょう、と――そう祈りを込めて歌ったものなんだ。だから、きっと、疲れ果てたクラウドール卿の体も癒してくれる。あの歌は、誰が歌っても体が温かくなるような、そん

な歌だけど……その歌い手は、たぶん、メリディスであるのが本当なんだと思う」

メリディスは音声魔術の使い手。

歌により人々の力を何倍にも引き出す、呪歌使い。

「最高峰の『言霊使い』になれるメリディス族は、そう多くない。それは魔術者の血統だけだって文献にはあった。特殊な魔術血統を受け継ぐ血族には、大別していろんな血の系譜があるんだ。例えば巫女血統や、魔術者血統、戦士血統……それぞれに特化したものを継承してる。そうして、その正統な血統者は特別な装身具を持つんだって」

「装身具……？」

あたしは、ふと、胸元にある大切な宝物を握った。

レメクから贈られた、レメクのお母さんの形見。

……あたしがお母さんからもらい、奪われてどこかへと持ち去られたお母さんの形見。

もしかして……これも？

「ナスティア国内にいる血族は、たいてい似たようなものを持ってる。クラヴィス族も、メリディス族も、アザゼル族も、パルム族も……巫女なら腕輪、魔術師なら指輪、っていう感じでね」

腕輪！

あたしは息をつめた。

お母さんの形見！　あたしの腕輪！！

ケニードはあたしを見た。とても真剣な目で。

「……クラウドール卿からね、君の奪われた腕輪を探してほしいって頼まれてるんだ。特別な骨で作られたものだから、決して壊されることなく誰かの手にあるだろうから、って。これはきっと知らないと思うけど……メリディスの血統装身具はね、竜の角で出来ているんだよ」

「……竜の……角……！」

あまりのことに、あたしは口をぽかっと開いた。

なんか、お伽話でしか聞いたことのない単語ですよ!?
「そう。……だから、決して人の手で壊せるようなものじゃない。必ず、どこかで見つかるはずだから、って。……ベル、君はね、巫女の正式血統なんだよ」
憧れと敬愛をこめて、彼はあたしを見つめた。
まるで、大切な宝物を見るような眼差しで。
「だから、君の歌声は、きっと他の誰が歌うよりも強く人の心と体に左右するはずだ。メリディスの歌は、天から授かった宝物。その歌で、クラウドール卿を助けてあげてほしい。僕はその後でいい。僕には、彼がいつも無事でいてくれることのほうが大事だよ」
その言葉は、彼にとって嘘偽りのない言葉だろう。
真っ直ぐにあたしを見ている彼の目は、けれど、同時にレメクをも見ているのだ。
きっと、世界で一番大好きなレメクを。
「……あたし、ちゃんと、歌、覚える」
例えようもない強い共感に、あたしは目に力を込めて言った。
「絶対、覚えて、二人に歌うわ!」
「うん……でも本当に、僕は後でいいから」
「一緒に聞いてくれればいいの! うんとうんと心込めて歌うから!」
ケニードはお日様みたいな笑顔で頷いて、あたしに向かって手を差し伸べてくれた。
あたしはピョンッとその腕に飛び込む。
レメクの次に居心地のいいその腕の中は、アウグスタと同じような暖かさで満ちている。
「メリディスの歌って、心の歌って言われてるから、きっとそれが極意なんだろうね」
「心の歌?」
ふんふん、と意気込みも新たに気合いをいれているあたしに、ケニードは笑って頷く。

「そう、心で歌う歌。歌っていうのは本来そういうもんだって、僕の母も言ってたけどね。メリディスの歌はさらに特別。まるで歌が空から落ちてくるような、体中に染みこんでくるような、体の奥から溢れてくるような、そんな感じなんだって」

「へぇ……」

あたしは大きく息をつく。

「そういえば、お母さんも、そんなこと言ってた」

「……ベルの、母さん？」

「そう」

あたしの、大好きな大好きなお母さん。

思い出すだけで鼻あたりがツンと痛くなるほど、大好きでたまらないお母さん。

やせ細っていたけれど、いつだって美しい顔で、声で、歌ってくれた人。

「『歌は心。心は魂。声は空に、歌は風に。乗ってどこまでも広がり、どこへでも届くのがメリディスの歌』……って」

だから、本当の意味で『歌う』とき、メリディスの歌はすごく遠くまで届く。

けれどそれは、本当に特別な『歌』。

王都では決して歌えない『歌』。

「いつかきっと、歌える日が来るから、って。……そう、言われたの」

今は決して歌えないけれど、きっと……例えば、いつか森に帰った時などに。

「……そっか」

ほろりと微笑んで、ケニードはあたしの頭を撫でてくれた。

あたしはスンと鼻をならす。ちょっぴり揺れた視界に目をごしごしやってから、背中をシャンと伸ばした。

「あたし、そういう、大事なところを忘れてた気がする」

「お母さんから教わったこととか？」

「そう！　だから、それもちゃんと一生懸命思い出して、二人のために歌うわね！」
　あたしの声に、ケニードは微笑んだ。本当に優しくて暖かい笑みで。
「無理はしちゃダメだよ？」
「もちろん！　でも、あたしもね、歌うのは好きなの！　でも、歌う歌によってはおじ様にすごい慌てて止められるのよ？」
「……どういう歌を歌ってるのかな、そーゆー時って」
　ケニードの声に、あたしは早速歌ってみえた。
　宿のおねーちゃんから教わった歌を。
「……それは……クラウドール卿は……止めるだろうねぇ……」
　次の歌を歌ってみた。
　酒場のおねーちゃんから教わった歌を。
「……それは……すごい止められるだろーねぇ……」
　……よくわかるな。ケニード。レメクの反応とか。
「でも、こう、歌のリズムとか、音とかすごく綺麗なのよ？　酒場のおねーちゃん曰く、ちょっと甘ったるく歌うのがポイントなんだって！」
　しかし、その『甘ったるく』がよくわからない。
　しかたなく、握り拳で力強く歌ってみるのだが、そうすると酒場のおねえちゃん達には大ウケだった。
　……何故ウケたのかよくわからないのだが。
「まぁ、その、歌詞とかがね、ちょっと子供らしくないなーっていう歌だからね。なんだったら、その旋律に好きな歌詞つけて違う歌にして歌っちゃうといいよ。たしか酒場の歌は、教会の歌や、船乗りの歌をアレンジしたものが多いから」
「教会の歌？」
　首を傾げると、笑って頷かれる。
「そう。今度教会に聖歌を聴きに行こうか。とても綺麗だよ」
「あい！」

「そしてクラウドール卿のために歌ってね！」
「もちろん、たっぷり愛を込めて歌うのです！」
歌のお勉強は大好きだ。
ええ！　ムヅカシーお勉強よりもずっと好きですとも！
あたし達はウフフアハハと笑いあいながら、そろそろいいカナと元居た部屋に帰還する。
最初の部屋から最後の部屋まで移動しちゃってたために（もちろん、最後の部屋は寝室だ）かなり長い距離となったが、まぁ、アルが落ち着く時間をかせぐには、ちょうどいいだろう。
そう思って帰還すると、そこには思いもよらない光景が広がっていた。
「……あれ？　フェン……さん？」
険しい顔で立っているアディ姫と、驚いた顔をしているアルトリート。
そして、その前に立つ三名の美人メイド。
そのうちの一人は、いつもフェリ姫の傍らにいたフェンさんだ。
「妹姫様！」
フェンはあたしを見て、その美貌をくしゃくしゃにした。
必死に感情を抑えようとしているその瞳に、あたしは心臓が一気に冷えるのを感じた。
嫌な予感がした。すごく嫌な予感が。
「お義姉さまに、何かあったの！？」
直感は、かつて感じた嫌な予感に裏付けられている。
会場に入る前に別れたフェリ姫。
あの後ろ姿に、ひどく嫌な予感を覚えていた。
「妹姫様……姫様が、わたくし……姫様、が！」
必死に自分を落ち着かせようと努力し、けれどその努力が報われないままに彼女は叫んだ。
「姫様が……いなくなってしまわれたのです！！」

22　惨劇

「いなくなった、というのが分かったのは何時？」
愕然と硬直したあたしの前、厳しい表情のままでアディ姫はフェンに問いかけた。
美しいメイドさんは、必死の面持ちでアディ姫を見る。
「一時間ほど前です」
……あたし達が、アルを追いかけてる頃ぐらいだ。
「気づいたきっかけは？」
「姫様はいつも、この時間帯にお茶をお飲みになります。今夜の夜会には出席なさいませんから、お部屋でゆっくりなさっているはずだったのです」
「それで、お茶を用意して持っていったら、いなかった、と」
「はい」
頷くフェンに、アディ姫は静かな表情になる。
フェンは震える手を握りしめて言った。
「部屋の中は探し尽くしました。もしやと思い、ベランダや窓の外なども見回しました」
……あたし達が通った窓の外のなんちゃって通路を疑ったんだろーな……
「ですが、どこにもお姿が……」
おそらく、ここに来るまでの一時間、探しに探したのだろう。もしかすると、あたしの部屋の方も探したのかもしれない。
「……陛下や、懇意にしてくださっているナザゼル王妃様、アデライーデ殿下、妹姫様なら何かご存じではないかと思い、人手を割いてご連絡申し上げているところです」
「……ネーサマはけっこうフェリに甘いしね、ネーサマがいたらもうちょっと別の視点からいろいろ聞けたんだけど……」

小さく呟いて、アディ姫はトントンと自分のこめかみを指で叩く。

「ね～ェ、椅子は暖かかった？」

「……え？」

きょとんとしたフェリに、アディ姫は腕組みをする。

「フェリがいつも座っているだろう椅子よ」

「！」

ハッとしたメイド達を見回して、アディ姫は軽く頷いた。

「お気に入りの場所、お気に入りの椅子、そういうものがあるはずよ。いつもお茶を飲むのなら、いつもの場所に座って、読書なりなんなりをしているのが普通、ってことでしょ？」

「はい！」

「その椅子は暖かかった？　それとも、人がいた気配がないぐらい、部屋そのものもガランとした感じだった？」

「いた気配が……ないぐらい、ガランとした感じでした！」

だからこそ、フェン達は焦っているのだろう。

本来なら、そこに彼女達の主がいるはずなのに。

「……誰か、見張りとか、いなかったの？」

アディ姫の声に、フェン達はひどく悲しげな、そして口惜しげな顔になる。

「部屋の外と、窓際には、いつも護衛の者がついております。けれど、此度は……姫様は、クレマンス伯爵のことでたいそう気を落とされておられましたから、ゆっくりと考えたいから一人にしてほしい、と言われると……」

「……拒否できず、一人にしちゃったのね」

「はい……ですが、部屋の中にこそ人は配置いたしませんでしたが、扉にはわたくしどもがつめておりました。なにかあれば、すぐに駆けつけることができるように！」

フェンの必死の顔は、フェリの失踪が自分達の落ち度だから、という感じではなかった。

ありえないことが起きた。
それが信じられなくて、どうしていいかわからなくて、不安で不安でたまらないのだ。
それを感じ取って、あたしはアディ姫に視線を向けた。
あたしの熱視線に気づいて、アディ姫がチラッとこちらを見る。
「……末姫ちゃん、どう思う？」
「誰かに攫われたとかじゃ、ないと思うのです」
あたしはハッキリとそう断言した。
フェン達がどういう人なのかは、実は未だによく知らない。
けれど、ただのメイドではないことだけは分かっていた。
アディ姫とは比べるべくもないけれど、足運びや身のこなしに関しては、そこらの警備兵よりキビキビしていた。
それに、身をもって体験した強烈な力……そこから考えるに、彼女等はメイド兼護衛なのだ。……たぶん。
「……牢屋の件もあるわ。プロが動いてる可能性もある」
ちょっと面白そうな目になって言うアディ姫に、あたしはマジメな顔のまま答える。
「でも、そういうプロなら、理由とかがあると思うのです」
「……」
「牢屋の件は、理由があったのです。でも、フェリ姫はないのです」
口封じをされる理由のあった、牢屋の囚人達。
……けれど、フェリ姫には『今』『この時に』『攫われる』理由がない。
「それに、フェリ姫はアザゼル族なのです。心の声を読み取っちゃうフェリ姫に、怪しい人は近づけないのです！」
そう、フェリ姫の探索能力はずば抜けているのである。
なにせ『気配で人を察知する』ナザゼル王妃と同じ早さで、遠くから来るアウグスタ達に気づいちゃったほどである！
……あたしなんて、せいぜいおじ様を匂いで察知しちゃえる程度なのにな……

「……いい線よ、末姫ちゃん。あたしも、フェリは王宮から誘拐されたわけじゃないと思うわ」
「本当ですか！？」
パッと顔を輝かせたフェン達に、けれどアディ姫は困ったような表情で言う。
「そう。王宮から誘拐されたんじゃなく、自分から出向いて行った、と考えるのが一番簡単でしょうね」
「ご……ご自分から！？」
その時のフェンの愕然とした顔は、まるで自分の人生が一変したかのような感じだった。
「あの、姫様が……ひ、姫様は、思慮深く、また同時に、ご自分が動いてはならぬ時や場所はわきまえておいでの方なのですよ！？」
「そんなもの、一番大事なものの前には消えちゃうわよぅ？」
フェンの悲鳴じみた声にそう答えて、アディ姫は深い嘆息をついた。
「……あたしもバカだわ。情報はつかんでたのに、そっちにまで頭まわらなかったわ」
「……どういうことなのです？　おねーさま」
首を傾げるあたしに、アディ姫は頭をカシカシと掻く。
あたしをだっこしたままのケニードは、静かに皆の元へと歩いた。
「フェリが自分の命より大事にしてるものはね、お義母さまと、クレマンス伯爵なのよ」
……それはなんとなく、ピンとくるのだが。
「現状、その二人は、大変なことになってるわよね？」
「あ！」
言われて、あたしはハタとその『可能性』に気づいた。
公爵家の街屋敷を訪れてから行方がわからないシーゼル。
それを心配していたフェリ姫。
なら――

「お義姉さま……公爵家の屋敷に？」
「その可能性はあるわね」
「お、お待ちください！」
同じくその可能性に思い至ったのだろう、真っ青になったフェンに、あたし達はそろって視線を向ける。
彼女は青ざめながらもしっかりとした声で言った。
「そのためには、少なくとも姫様はご自身の足で赴かないといけません。ですが、姫様には殿下のように気配を消せるほどの技量はございません！」
つまり、自分達の守っている扉をこっそり抜け出すということは無理だ、と。
だが、言われたアディ姫は、困り顔のままで苦笑した。
「確かに、フェリは、そういう運動系の技量は、ちょっと残念な感じだけどね」
……残念な感じなのか……
「けど、根性いれれば、扉にはりついてる人達に内緒で抜け出すぐらいできるわよ？」
「……抜け道、ですね」
「そ」
小さく声を落としたケニードに、アディ姫は頷き、メイドさん達はそろって悲鳴をあげた。
そう。あたしも先程ケニードから教わっていたのだ。
王宮の部屋には、あちこち仕掛けがあったりするのだと。
「フェリの部屋は、確か『真白き花の間』だったわよね？」
優雅なお名前を口にして、アディ姫は深いため息をつく。
「……そこなら、緊急脱出用の抜け道があるわ。そのうちの一つは、厩舎前に出る。厩舎には普通、馬と、馬の世話をする者、それに待機を命じられている御者がいるわね」
「い、今は大祭中ですので、特に、上流階級の方々の御者が集まっ

ていますわ！」
「その中の一人に『位の高い貴族の娘』として命令すれば、馬車を出してくれることもあるでしょうね。……フェリってば、見た目からして『高貴な姫』だし」
そう。あの、輝く光のような姿。
目の前にいる、アディ姫にも匹敵する美貌。
「フェリは正式に夜会に出る年齢になってないから、あの子を見て即『王女』とわかる者はそう多くないのよね。まして、着飾った姫君の多い今の時期なら尚更わかりにくいでしょーねぇ……。そーゆー『高貴な』女性の声に、従僕達はあっさり従うでしょうし。向かう先も高貴な公爵家なら、怪しまれることもないしねェ……」
「それに、彼等は『高貴な方々』のことを詮索するのは、失礼なことだと教えられますからね」
アディ姫の言葉を引き継ぐように、ケニードは声を落とした。
「だから、姫君を無用に詮索する者もいないでしょう。……フェリシエーヌ姫は、クレマンス伯爵を捜しに行かれたのですね」
例え行方不明になった先が、伯爵自身の実家であっても。
「……会いたかったんでしょうね。不安な時期だから余計に」
伯爵自身が、望んでいなくなったとは思えない状況だったから……余計に。
ケニードの声に深い嘆息を零し、アディ姫はわずかに伏せていた目を上げた。
「……まず、向かうべきは厩舎ね。あの部屋からの抜け道ならあたしの頭に入ってるから、案内するわ。厩舎前に出るのは一つだけよ」
「あ……ハイッ！」
不安を目にいっぱいためていたフェン達が、アディ姫の言葉に大きく頷く。
アディ姫はアルとあたし達を見て、もう一度、深い嘆息をついてから言った。
「あたしはフェリを探しに行くわ。三人とも、来てくれる？」

「「「もちろん！」」」
あたし達の答えは、一つだった。

※　※　※

王宮の厩舎前は、驚くほど華やかだった。
数十頭の馬を収容できる厩舎。その建物の大きさも凄かったが、その前にズラリと並んだ馬つきの馬車群はさらに凄かった。
「……すげェ……圧巻だな……」
行く手に見えるその光景に、走りながらアルが感嘆の息を吐いた。
その気持ちはよくわかる。
まだ遠くに見える距離だというのに、なんだか圧倒されそうなほどの煌びやかさなのだ。
華麗な馬車、豪華な馬車、品のよい馬車、ちょと格の劣っている馬車……
様々な馬車の前には、もちろんそれを牽く馬がいて、その馬の種類だけでもかなりのもの。栗色、青色、黒、白、灰、まだら。面白いものでは、白地に黒の縦縞が入っているものもいる。
……白馬に炭でお化粧したんだーか？
「裏の厩舎でコレなんだから、表の厩舎前はもっとすごい状況でしょうね」
同じものを見据えて走り、ケニードが苦笑しつつそう零した。
……てゆか、裏と、表？
キョトンとするあたしに、アディ姫はバインバイン胸を揺らして走りながら肩をすくめる。
おお。谷間が深まった！
「王宮には東西南北に厩舎があるのよ。たいていの馬や馬車は表のほうの厩舎が受け持つの。こっちのは、国内の貴族……この辺りだと、まぁ、下級貴族の馬車ね」
下級貴族！

あたしはじょじょに近づく煌びやかな馬車群を慌てて観察し、もう一度アディ姫のほうを見て目をかっぴらいた。

あれが、下級貴族の馬車!!

「馬車持ちの貴族っていうのは、それだけで地位が高いのよ。馬や馬車の維持ってけっこうお金かかるから。御者も必要だしねぇ」

……そ、そうなのか……

「夜会に呼ばれても足がない場合は、大商会とかから馬車を借りるの。そういう馬車は煌びやかなのが多いのよ。だから、ここにある馬車のいくつかは借り物よ」

言われてもう一度馬車群を見る。

確かに。すごいキラキラが多い。

中にはすごく落ち着いた赴きの馬車もあって……って……あれれ?

「あの馬車、どっかで見たことある」

あたしはその一角にある、落ち着いた雰囲気の上品な馬車を指す。

それを見てケニードが苦笑を零した。

「僕の家の馬車だよ。ベルも乗ったことあるけど」

「ああ!」

なるほど! どーりで見たことがある馬車だと!!

納得の頷きをしてから、あたしは目をパチクリさせてケニードを見上げる。

ちなみに、あたしは走るケニードに抱っこされたままという、超! 楽な体勢である。

……なんかアルとメイドさん達が、息をはずませながら横を走ってますが。

「ケニードも、こっちなの?」

王都でも有名な宝飾技師さんで、お金持ちなのに。

疑問でイッパイなあたしの眼差しに、彼はただただ苦笑する。

「僕はまだ爵位を継いでないし、男爵家というのは、貴族の中では

下のほうだよ」
……なるほど。
そういえば、彼はまだ男爵様ではなかったのでした。
「資金面でいえば、アロック卿は伯爵以上にお金持ちなんだけどね～」
「あはははは」
アディ姫の声に、ケニードは困ったような笑み。
アルがなにやら言いたげな顔になったが、息継ぎに必死らしく今回は声を挟んではこなかった。
……アル、あんまり体力ないのだな……
「こっち側は、伯爵家よりも下の者達が集まってる場所だからね」
「下手に上の位の集まりに行くと、フェリのこと王女として知ってる人もいるだろうからね。それを考えても、ちょうどよかった、ってトコでしょーよ」
「……姫様……」
アディ姫の推理に、フェンが悲痛な声をこぼす。
アディ姫は真っ直ぐに厩舎を見据えて、そんなフェンに声をかけた。
「心配なのは分かるわ。けど、フェリだってバカじゃない。おそらく、あの場の誰かに伝言ないし手紙を預けているはずよ。フェリの部屋には誰か残してある？」
「はい。シュネーがおります」
「なら、もしそっちに何らかの伝言があったとしても、こっちに届くわね」
今、厩舎に駆けているのは、アディ姫、ケニード（と、腕の中のあたし）、アルに、フェンの五人だけ。フェンと一緒に来ていたメイド達は、それぞれ他の部下やアウグスタに連絡するために別行動をとっている。
「まず、あたし達はフェリらしい女の子が馬車で出かけたかどうかを確認する。伝言とか預かった人がいれば、その存在も確認。そし

て、フェリの向かったであろう場所を確認して、そちらへ向かうわ」
その声に、ふとケニードはあたしを見下ろした。
「……ベル。匂いで追えない？」
大まじめなその問いに、
「……いや、犬じゃねェんだからよ……」
何故かアルがぼそっとツッコミをいれる。
あたしはムンと唇を尖らせた。
「今は匂いがするけど、馬車に乗られちゃったら、匂いが零れないから難しいのです！」
「……いや、ちみっちょ……それ以前の問題じゃねェのか？」
「あたしは、アルとアディ姫の匂いを辿って、二人に追いついたですよ？」
「アレお前の先導だったのかよ！？」
「……どーりで、早く追いつかれたわけよねぇ……」
チョイ前の追跡を思い出したのか、アディ姫までが唖然とした顔でぼやく。
「……まぁ、追跡者に未姫ちゃんがいることとか、ちょい聞こえてきた会話の内容から、そーじゃないかなぁとは思ってたけど」
そしてイロイロと先に察してくれていたよーだ。
……てゆか、本当に、このヒト頭イイな……
「でもまぁ、それなら、馬車で降りた場所なら、匂いで断定できるんじゃない？」
そして常識にとらわれずに対応できちゃうヒトでもあった。
未だに「嘘だろ！？」という顔をしているアルと違い、アディ姫はあっさりとゲンジツを受け止めて言う。
あたしはしっかりと頷いてあげた。
「もちろんです！　任せなさいってなもんですよ！」
胸を張ってドンと雄々しく受けてたったというのに、アルは未だに半信半疑っぽい顔だった。
ちっけいな男である。

「じゃあ、確認は任せるとして……　……ん？」
ふと、アディ姫は眉をひそめた。
彼女が見ているのは相変わらず厩舎の方で、その様子にあたし達も彼女の視線の先を追う。
向かう場所でもあるから、厩舎自体は視界に入っている。だが、アディ姫が見ているのはちょっと違っていた。
馬。馬車。人。
とりわけ目を凝らして見ているのは『馬』だ。
「……なんだ？」
走りながら、アルも不審そうな声を零す。
「馬が、ちょっと、変だぞ、あれ」
「なにか緊張してるわね……」
「つーか、アレは、警戒してるんだ」
肩で息をしながら言い、アルは真剣な顔で馬車につながれた馬達を見る。
馬番をしていたという彼だから、馬達の異変には敏感なのだろう。
そう言えば、馬車の近くにいる御者さん達もなにか焦った顔でおろおろしている。
「変な気配も動いてるわ。……アルルン、あたしから離れないで」
「お……おぅ」
アナタヲ守ルワ宣言をされているアルが、ちょっと困ったような顔で頷く。
あたしはふと思いついて、アディ姫に問うてみた。
「おねーさま。もしかして、鬼みたいな気配とかまとったりしちゃってる？」
馬は大変オクビョーな生き物だと聞いたのだ。
そこに、こんなに強烈に強いオネーサマがやってきたら、そりゃあビックリするってなもんだろう。
「……あのね、末姫ちゃん。あたし、鬼にぐらいはなれるけど、こんな場所で気迫込めたり、鬼気まとったりはしないわよ？」

……シツレイシマシタ。
「ただ、変な気配が動いてるのは確かよ。数は二つ。……距離があるわね」
あたし達には分からない気配を感じ取って、アディ姫がスッと眼差しを細める。
鬼気とやらはまとっていないよーだが、その表情だけで十分あたしには怖かった。
馬車群の近くにまで走りこみ、あたしは周囲に満ちている喧噪に眉をひそめた。
……馬達が、神経質になっている。
その様子が肌で感じられて、否応なくあたしの神経もピリピリした。
御者さん達も必死になだめようとしているが、馬達の苛立った様子はいっこうに変わらない。
ゴーカな面々が走り込んできたというのに、こっちに注意を払う余裕もないほどだ。
（でも、なんで馬達が……？）
変な気配がしている、というから、きっとそのせいなのだろうが……
（それに、この匂い、ナンダロ？）
馬のものらしい臭いに、人の臭い、遠くからは干し草の臭い。
それらに混じって、なにやら不思議な臭いがする。
（食べ物じゃなさそーだけど……）
「これは……ちょっと、声をかけてる場合じゃない、って感じね」
嫌な予感でも感じているのか、アディ姫が警戒の眼差しで周囲を見渡す。
この、沢山いる馬車の御者さん達からお話を聞きたいのだが、馬をなだめるのに必死な彼等には声をかけるのが難しい。
だが――

「俺が声かけてくる。馬の扱いなら、得意だし」
「あっ！　ちょっと！　アルルン！」
速攻で駆け出すアルに、慌ててアディ姫が追い、それに引きずられるようにしてあたし達も再度駆け出す。
あたしは騒がしい周囲と、煌びやかな馬車、そして嘶く馬達を見渡して眉をひそめた。
（……なんで、こんなにピリピリしてるんだろう……？）
あたしには、馬達が変に興奮しているように感じられた。
緊張と、苛立ちと、興奮。混じり混ざって、なにか異様な気配になっている。
（でも……これだけ沢山の人がいて、馬が異常を感じてるような状況なら、かえってアヤシイ人も動けないんじゃないかな……？）
あたしはそんな風に思っていた。
変な気配というのが、どういう種類の人のモノなのか――それこそ劇とかで出てくるみたいな『暗殺者』サンなのか、それとも小銭で雇われたゴロツキっぽい人なのか、下働きの人なのか――そういうのは分からないが、少なくとも、アヤシイことをするのに、こんなに人がイッパイで賑やかな場所は相応しくないんじゃないかと思った。
それが間違いだと知ったのは、次の瞬間だ。
「むぉ！？」
ふいに強く感じた臭いに、あたしは鼻をひくつかせる。
「おねーさま。なんか臭うのです！」
「！？」
アディ姫が慌ててあたしを見た。
あたしはケニードの腕の中で、身を乗り出すようにして鼻をひくひくさせる。
「あっちから変な臭いがしてきたのです！」
「全員、集まって！」

アディ姫が叫び、あたし達はバッとアディ姫の周りに集まった。
一人出遅れたのは、馬の近くにいた御者に話しかけていたアルだ。
だが、その彼の襟をひっつかんで、アディ姫が一息でその体を自分の近くに引き寄せる。
喉でも絞まったのだろう、ぐぇっ！　とか声が聞こえた。
その瞬間――――

ヒィイイインッ！！

その場にいた全ての馬が、一斉に嘶きを響かせ、その蹄を振り上げた。

※　※　※

あっという間に周囲に満ちた阿鼻叫喚の光景に、あたし達は呆然と立ちつくした。
厩舎前にとまっていた馬車の馬達が、一斉に狂ったように暴れ始めたのだ。
近くにいた御者達はあっという間に馬の蹄に蹴り飛ばされ、踏みつぶされ、そこへ縄でしばっていた馬車の巨大な轍が鈍い音をたてながらのしかかる。
絶叫が周囲に満ち、土埃が舞い、ムッとするような血の臭いが他の臭いを圧した。
ガシャガシャと音をたてて、馬車同士がぶつかりあう。
もし――
あの馬車が、縄で固定していなかったら――
ふいに脳裏をよぎった光景に、あたしの体が硬直した。
この馬車が、暴れる馬の動きのままに、周囲に拡散してしまった

ら――？

「危ない！」

あまりの恐ろしさに硬直していたあたしは、耳元で聞こえた声にハッと我に返った。

ケニードの声だ。

向けられた先は――アル！？

アディ姫に引き寄せられたまま呆然と立っていたアルと、襟をひっ掴んだまま唖然としていたアディ姫の前に、後ろ立ちになった馬が――！

「ねーさま！」

あたしの声に、アディ姫は振り向くことなくアルを片手でぐるんと背後に回し、

「ハァッ！！」

裂帛の気迫と同時、繰り出した蹴りで馬を吹っ飛ばした。

馬車ごと。

「な……な……なッ！？」

アルが喉を押さえながら愕然としている。

巨体を吹っ飛ばされた馬は、そのまま自分をつないでいる馬車にぶつかり、馬車ごとさらに後ろに後退して他の馬とぶつかって止まった。

……てゆか……アディ姫……

強い、ったって――程度ってモノがないですか！？

そのアディ姫は、すぅ、と息を吸う。

バッと足を肩幅ぐらいに開き（スカートで見えないけど、足音とお尻の位置でピンときました！）、ふいに恐ろしい気配をその身にまとう。

その刹那――

ゾワッ！　と、全身の毛が逆立った！
「構えて！」
ケニードが鋭い声をあげる。
理由などわからず、思わず体に力を込めるのと同時、ブワッとアディ姫のスカートがひるがえった。
「うわっ！？」
アルが思わず声をあげる。
風のような何かがアディ姫を中心に吹き荒れた。
それは生ぬるい風のようであり、圧縮された気配の塊のようでもあった。
少しだけレメクが魔術を使っていた時の感じに似ている。
けれど、明らか違うのは、その『風』がアディ姫の気配をもっているということ。
そして、こちらの意志も動きも奪ってしまうほどの、恐ろしさを秘めているということだ！
「！」
足を高々と跳ね上げ、馬達が跳び退くようにしてアディ姫から遠ざかろうとする。
だが、それは虚しい抵抗だったのか、次の瞬間には、馬達はバタバタと倒れ始めた。
その口元からは泡がこぼれ、目は完全に白目をむいている。
「お、ね……しゃ、ま」
あたしはもつれる声で、必死に声をかけようとした。
けれど、声が出ない。
まるで空気に胸と喉を押さえつけられたように、言葉で口から出ていかなかった。
（なに……これ）
怖かった。凄まじく怖かった。
けれどそれは、体がヒヤッとするような感じではない。
ただ、強く体を締めつけられるような、押さえつけられるような

『恐怖』だった。
そう……動けば殺される。そう思わずにいられないほどの気迫。
アディ姫は力ある目のまま、口を開く。
そうして、
「下がれ！！」
一言。
ただそれだけで、残っていた他の馬達のほとんどが昏倒した。
わりと遠くにいた馬達だけはかろうじて立っているが、その体は完全にすくみあがり、暴れるどころか動くこともままならなさそうだ。
「あ……」
あたしはそちらを見て硬直する。
――馬の足下に、変な形に歪んだ人、の……姿……が……
「！」
あたしはそれを直視してしまい、思わず声にならない悲鳴をあげた。
慌てたケニードがあたしの頭を抱き抱え、その視界を奪う。
けれど、遅い。もう見てしまった。
その、あまりにも無惨な、惨劇の光景を――
「フェン！　人を呼んできて！！」
アディ姫が力強い声で叫ぶ。
あたし達同様棒立ちになっていたらしいフェンが、慌てたように動き出す気配を感じた。
そして――
「そこッ！！」
アディ姫が叫んだ。

それと同時にケニードが動き、片手でアルを引き寄せる。
視界の開けたあたしの目は、惨状の中を駆けるアディ姫の姿をとらえた。
下は怖くて直視できない。だからあたしの目は、アディ姫の姿に釘付けだった。
姫の行く手にあった馬車の影から、人がよろめき出て、瞬時に距離をつめたアディ姫にギョッとした顔になる。
その腕にはナイフのようなものが刺さっていたが、それがいつ誰がどうやって投げたものなのかは、あたしにはわからなかった。
アディ姫は、その相手を無視するかのように前を駆け抜ける。
駆け抜けるその寸前に放った拳の一撃が、負傷したアヤシイ人を吹き飛ばし、彼は派手な音をたてて馬車にぶつかり、痙攣しながらその場に崩れ落ちた。
アディ姫は止まらない。
そのまま真っ直ぐに別の馬車へと向かい、
「逃がすか！」
美脚むきだしの凄まじい一撃を放った。

ドォンッ！！

およそ人の放った一撃とは思えない轟音をたてて、馬車がまともに吹っ飛ぶ。
その影から寸前で飛び出してきたのは、先に負傷したのと似たような背格好の男だった。
アディ姫はその男の懐へと飛び込み、
「はっ！」
一撃、
「やっ！」
二撃！
「まだまだ！」

三撃！！
胴、胸部にパンチ、三撃目は蹴り上げ、それを追うようにして跳躍し、
「くらえ！」
回転蹴り！
「もう一丁！」
何もない空間を蹴っての膝打ち！！
「とどめ！！」
中空で一回転、その勢いをもっての、上空から地上へ向けた蹴り！！！
凄まじい破壊音を響かせて、男は無惨な姿で地上に叩きつけられた。
……正直、馬に蹴り飛ばされた人のほうがまだ軽傷に思える連続攻撃だ。
「お……鬼だ……」
アルがしょーじきな感想をこぼす。
アディ姫は足下に倒れ伏す、もはや顔の原型留めてなさそうな男を凄まじい目で見下ろすと、くるりとこちら側に向き直った。
「「「「ひぃっ！」」」」
思わず悲鳴をあげるあたし達四人。
……ん？　四人？
あたしは慌てて周囲を見る。
あたし、ケニード、アルで三人。
フェンは、アディ姫の攻撃を見ることなく（あれだけすごい追撃だったのに！）、自分に与えられた役目を果たすべくすでにいない。
では、四人目は誰か。
それは、馬車に叩きつけられ、その場に崩れていたアヤシイ人Ａだった。
アディ姫は人の感情など捨てきったような目でその男を睨み、ゆらりと足音一つたてずに歩み寄る。

男は悲鳴をあげ、必死に逃げようとみじろぐが、さっき受けた怪我のためにほとんど動けなくなっていた。
その哀れな男の前に立ち、アディ姫はスッと手を上げる。
その指の間に、いつのまに用意されたのか、小型のナイフが三本挟まっていた。
アディ姫はその手を躊躇なく振り下ろす！
「ぎゃぁあああッ！！」
絶叫が響き渡り、あたし達は思わず顔をそむけた。
「た、たす、たすけ……！」
けれど、男はまだ、生きている。
必死に懇願する声が聞こえ、ついで先よりも一層悲痛な絶叫が響きわたった。
思わずそちらを見ると、アディ姫が男の体に足を乗せていた。
そのまま、ぐ、と力をこめる。
「やめろ！！」
凄まじい悲鳴に、アルがたまりかねて叫んだ。
アディ姫はこちらを見ない。
ただ、絶叫が小さくなったところを見ると、力を込めるのはやめたようだ。
「やめろ……もういいだろ！？　それ以上痛めつけるなよ！」
「……もう、いい……？」
ぽつりと、アディ姫は呟いた。
白く美しい顔が、今はいっそう白く感じる。
その表情は限りなく無に近く、その瞳には人間らしさがまるで無い。
ゾッとするほど美しい――それは鬼神か、死神の顔だった。
「……この場の惨劇を前に、もう、いい、と？」
心の宿らぬ冷たい声で、アディ姫はそう問うた。
アルは声を失う。

アディ姫のとんでもない動きに、思わず周囲の惨劇を忘れてしまっていた。
だが――そう、今、この目の前にある、目を背けたくなるほどの光景は……
踏みにじられ、もはや命の無い者もいる、この場の惨劇は……！
「……こいつらが、やったのよ……？」
静かで、冷たい声が告げる。
「臭い……ね。風上から、薬香を焚いて……それで、馬を暴れさせた」
暴れた馬は、周囲を巻き沿いにし、結果、目の前の惨劇となった。
「これだけのことを……しでかしてくれた。人の命を……不条理に奪う、惨劇を生み出した」
なぜ、と――

問う言葉すらも失う――

これほどの地獄を。
「許されることじゃあ、ないわ」
言って、姫はその眼差しに冷たい色を宿す。
あきらかにそれとわかる、殺意を。
「ねぇさま、ダメ！」
あたしは叫んだ。
そして、アルも。
「だからって、おまえが人を痛めつけていいことに、ならねェだろ!?　裁判を目指すんじゃなかったのかよ!?」
その言葉に、ふとアディ姫の体が揺れる。
アルは一歩を踏み出した。
「今助ければ、助かる命がまだいっぱいある！　そいつらにかまっ

てる間なんてねェだろ！？」
そう、今もなお足下で呻き、息も絶え絶えになっている人達。
彼等の今後をどうするのか、それを考えれば――

「……っ」
呻くように息をはいて、アディ姫は男の上から足をどけた。
かわりに、恐ろしい一瞥をもって眼下の男を見下ろす。
「……命拾いしたわね」
だが、その声を受けた男は、何の反応もかえさなかった。
とうの昔に失神していたのである。
アディ姫はその様子を冷たく睨み、バッとこちら側に向き直った。
「……って言ってもねぇ、アルルン！　いくらあたしだって、これだけの負傷者をどうにかなんてできないわよ！？」
おお。いつものアディ姫に戻ってる！
「どうにかできなくても、医者の所に運ぶぐらいできるだろ！？」
「その前に医者を連れてくる方が早いわよ！」
「いや、それ以前に応急処置だと思うよ」
叫びあう若い男女を放っておいて、あたしを抱えたままケニードは一人のケガ人の前にしゃがみこむ。
あたしを降ろすと、彼は懐から大きめの布を取り出して、それをビリビリと破りはじめた。
「とりあえず、助かりそうな人が全員、助かるようにがんばろう。いざという時のために、一応眠り薬もいくつかもってるから、それを飲ませてあげて」
はい、と懐から小さな小瓶をいくつもいくつも取り出すケニードに、アディ姫とアルがそろってポカンとなった。
「「……なんでそんなもの、そんなに持ってるの……？」」
彼等の疑問はもっともだ。
ケニードは例によってお日様のような笑顔で「備えあれば憂いなしって言うからね」とよくわからないことを言って、テキパキと応

急処置にとりかかった。
あたしもケニードの破いた布の一切れを持って走る。
肩を蹴り飛ばされ、呻いている人の傍にいって、動かないようにと身振り手振りをまじえて叫んだ。
「すぐにお医者様来るから！　がんばって！」
相手はあたしを見て、苦しげに頷き、それからギョッとしたようにもう一度あたしを見る。
「みゅ？」
意味は不明だが、それよりも、他の人だ！
「がんばってね！」
叫んで、あたしは口から血を吐いている人の傍らに駆け寄った。
「が……」
んばって、と。
そう叫ぼうとした口が、その人をしっかりと見た瞬間に強ばった。
どく、と心臓が大きく跳ね上がる。
「お……」
ごぼ、と、さらに血を吐いて、その人は苦しげに息をした。
浅く、かすかな、息を。
血の臭いのする息を。
その腹は――馬に蹴られて、陥没していた。

「が、ん……ば、……って」
あたしは震える手をその痛ましい傷の前にかざす。
ごぼ、とはき出される血。
むっとする死の臭い。
「がん……ば、って……！」
涙が零れた。
がんばって、どうにかなる傷じゃないと、わかっていた。
口から血を吐くということは、体の中を怪我してるということだ。
助からない。

そういう人は、ほぼ助からない。
その人の顔はみるまに青ざめ、白くなり、どんどんどんどんホワッとした暖かさを失っていく。
「がんばっ……て……！！」
けれど、あたしに何ができるだろう。
何をすることができるだろう。
レメクのように奇跡を起こす魔術も使えず、ただ、傍らでガンバレガンバレとしか言えない、こんなあたしに……！！

（神様……！！）

無慈悲で、たった一欠片もあたし達に愛情を注いでくれない神様！！

どうしてこういうことが起きるのだろう？
なんでこんな風に、唐突に命を奪っていこうとするのだろう？
孤児院の時も、それ以前の時も、いつだって誰も助けてくれない神様。
確かに、今回は、アヤシイ人の暗躍があった。
けれど、それで巻き込まれ、人が死ぬのは違うと思う。
人の命は、その生は、もっと尊くて、大事で、一つ一つが何物にも代え難い大切なもののはずだ！！
なのになぜ、こんな風にして人はすぐに命を落としてしまうのか！
どうして……
どうして！！
（おじ様ッ！！）
あたしは叫んだ。
居もしない救いの神でなく、あたしにとって、一番大切な人に。
そう、祈る相手は、空想の神様なんかじゃなくて――

――神とは、ただ、そこに在る、強大な力の名前。

ふと、頭の中が白くなる。

――人智を超えた力、現象、それをさして、人は『神』と呼ぶ。

白い世界の中で、言葉だけが降りてくる。

――だからこそ、神は意志をもって奇跡を起こさず、人は自ら奇跡を起こすしかない。

その力を手繰り寄せるしかない。

そう――――

天をも動かす心でもって――――！

音が、

零れた。

真っ白な世界の中から降りてくる音が。

身の内に流れ込む音が。

奥底からあふれ出る音が。

そう、音が
　　音が
　音が
　音が音が音が音が音が音が音が――――!!

うみよりの　かぜ

だいちにふきて

ひとはただ

あれちのはてに

ぼうとたたずむ

唇が動いた。
体が熱で満ちた。
掌に力。
腹の底に熱。
頭に言葉が染みこんで、
喉が音を外へと押し出す。

かわきしだいち

をもとめ

そらへとてのひら

のばし　ねがう

うるおい

声は風に、
心は大気に、
魂は光を宿し、
それはどこまでも高く
どこまでも広く広がる。

ひとよ　ひとよ

ねがうのならば

そのこころひとつ

つよくもって

そらへとむけて

おもいをはなとう

ひとはみな　そのみのうちに
　　ねがいのはなと
おもいのたねと
　　きせきのかけらを
　　やどしているから

そう、空へ
空へ、
空らへ！
天（そら）へ――――！

幽き光　野辺に満ちて
　幾千の命　大地に灯す
　　万の祈り　天へと放ち
　　幾億の光　風へ乗せよう

光は闇へ　闇は光へ
　巡る螺旋のその中で
　　命はここに

心はここに
　奇跡をもって　生まれいずる

巡れ　巡れ
　世界の果てまで
届け　届け
　全ての人へ
風よ　風よ
　叶うのならば

この心の全て
その身に溶かして
命ある全ての人に
この奇跡を届かせ賜え――

――音が響いていた。

幾重にも重なり、どこまでも広がり、永遠に溢れ続ける音が。
音だけが響く世界は、白い眩(まばゆ)さに包まれている。
その白い世界に色が宿り、それはゆっくりと沢山のものをあたしの目の前に映し出した。
人。人。人。人。
沢山の顔。沢山の人。せっかくの綺麗な服なのに、血と土埃で汚れている人々。
その、呆然とした顔。

……ん？

あたしはパチクリと瞬きをする。
沢山の人がそこにいた。
近くには壊れた馬車や、倒れている馬の姿も。
（あれ？）
キョトンとするあたしの後ろに、ふと、暖かな熱が触れた。
すぐに感じる、スバラシイ匂い。
「……ベル」
深い声が降りてくる。
誰よりも何よりも大好きな声が。
「おじ、様？」
あたしは真上にあるその人の顔を見上げる。
レメクは、なにか激しくて暖かいものを堪えるような顔で、あたしに微笑みかけた。
「……よく、やってくれました」
……？
よくやった？
あたしはキョトンと瞬きをする。
いつのまにレメクが来てくれていたのか、あたしの興味はそっちにばかりいっていて、今ひとつ周りの状況がわからない。
そういえば、なんで周りの人達は、地べたに半分寝転がった姿でこっちを見ているのかな……？
「……す……げ……」
ふと震える声がそうこぼして、見ればアルが顔をくしゃくしゃにしながらこっちを見ていた。
……ハテ？
「すげぇ……すげェぞちみっちょ！　奇跡だ！！」
アルはそう叫ぶと、あたしに駆け寄り、あっという間にあたしを抱き上げて抱きしめた！
「むぎゅる！」

「すげェちみっちょ！　おまえすげェよ！！」
スゲェばかりを繰り返されても、意味がちっともわからない。
とりあえず絞まった首をなんとかしようとジタバタ暴れていると、後ろから延びてきた腕が――

アルを引き剥がさず、そのまま問答無用で力一杯あたしごとギュムッと抱きしめた。
「「むぎる！！」」
悲鳴、二つ。
「……くらうどーるきょー……？」
遠くからアディ姫らしい呆れ果てた声がする。
あたしごとアルを圧迫してくれたレメクは、咳き込みながら腕をゆるめたアルからあたしを取り返し、しれっとした顔でアルを見る。
「ベルは子供です。小さいのですから、圧迫するほど抱きしめないように」
「さっきのアレはいいのかよ！？」
アルのじつに真っ当なツッコミを、しかしレメクは綺麗に無視した。
そうして、ゼヒゼヒいってるあたしに向かって、スバラシイ微笑みを向けてくれる。
「ベル。素晴らしい『歌』でしたよ」
「？？？」
て、歌？
「メリディスの『呪歌』です。効果のほどは、目で見たほうが明らかでしょう」
言って、レメクは前を掌でさし示した。
あたしはくるりとそちらを向く。
血と土埃で汚れているが、わりと元気そうな人達を。
……いや、中にはまだ重症っぽい人もいるが。

「あの……？」
「『生命の賛歌』です。命ある者の生命力を活性化させ、傷を癒す歌」
傷を癒す歌。
あたしは目を瞠り、慌ててあたし達の足下を見た。
いたはずだ。そこに。
とても助からない重症の人が……！！
「あ……」
その人は、変わらずそこにいた。
血の気のひいた顔で。
けれど……ハッキリと命を感じさせる目で、あたしを見上げて……
「たす、か……た、の？」
その人は、力のない笑みを浮かべて、けれどたしかに頷いてくれた。
体を起こすことはできないけれど、もう、口から血を吐いたりはしていない。
「だいじょうぶ、な、の？」
相手の頷きに、涙が零れた。
助かったのだ。
助かったのだ！
助かったのだ！！
「よかっ……」
涙があふれて、こぼれて、あっという間にそれはあたしの全身を浸してしまった。
わんわん泣き出したあたしをレメクが優しく抱きしめてくれる。
その体に抱きついて、あたしはぐしゃぐしゃの顔で叫んだ。
よかった。よかった。よかった。よかった……！
助かる人がいてよかった。
消えてしまう命が、助かってよかった！
それがどんなものであってもいい。生きていてくれてよかった。

せめて……せめて、助かる人だけは……！
「……『零の間』に、全員の収容を。医師陣はすぐに治療を」
あたしの背を撫でながら、レメクが誰かへと指示をとばす。
「王女の『歌』は一定範囲の傷は癒せますが、完治させるものではありません。できるだけ早く治療を。治癒術師は揃ってますか？
……あぁ、では、神官達も呼び寄せなさい。地下牢前にバルバロッサ卿がいます。彼にも協力を要請してください」
はっ、という短い声と同時に、沢山の人が動く気配がする。
その中で近寄ってくる足音、二つ。
アルとケニード。
……なら、足音はしなくても、アディ姫もいるはずだ。
……音も気配もないけど。
「……とりあえず……お三方には、何故ここに居合わせたのかを聞きたいですね」
ホラいた！　三人目（アディ姫）！
……てゆか、日頃から足音消してるんだろーか……アディ姫……
「というか、クラウドール卿。ここも大変なんですが、同じく大変なことが！」
慌てたような声はケニード。
「てゆか、これ……あきらかに、俺のせいだよな……」
暗い声はアル。
「待ち伏せがあるとはね。一応、叩きのめしたけど、なんか手段を全く選ばない感じが、かな～り腹が立つわ。……てゆか、クラウドール卿」
静かな声で言って、アディ姫は声をすごく小さくしてから告げた。
「……フェリがいなくなったわ」
「……『どちら』で」
すぐに小声で返したレメクに、アディ姫は満足そうに口の端を笑ませる。
「たぶん、公爵家。フェリ、部屋から抜け道つかってここに来たみ

たい。公爵家に向かうつもりだったんでしょ。そうアタリをつけてここに来たら、馬を薬で暴れさせられて……」　そして、この惨事。

「……おじ様」

あたしはブルリと体を震わせ、ギュッとレメクの服を握った。

「……馬に、怪我、させられた、人……」

「……あなたが沢山、助けてくれましたよ」

「でも、でも……！」

踏みつぶされた人がいた。

それが人なのだと一瞬気づけないぐらい、歪になっている人がいた。

蹴り飛ばされ、馬車に押しつぶされた人も……

「……ベル」

震えるあたしを抱きしめて、レメクは深い声を落とす。

「……私達に、神々のような力はありません」

そう……どんな『有り得ない現象』を生み出す奇跡を起こしたとしても、それは、願いの全てを叶えるような、そんなとんでもない奇跡では無い。

「失った命は、決して、呼び戻すことはできません」

それは、つまり、

この場で命を落とした人が、やはりいるということで……

「死者の復活は、人の分を超える奇跡です。我々はただ、我々に起こすことのできるほんのわずかな力を……歌を聴きし人々自身のもつ『奇跡の力』を高めるだけです。……メリディスの『呪歌』とは、そういう力なのですから」

あたしはレメクの胸に顔を埋める。

優しくて暖かくて素晴らしい匂いに包まれても、目に焼き付いた光景が消えない。

無惨に倒れ伏していた、人々の最期の姿が消えない。

「……早めに決着をつけないと、事ですね」

「ナザゼルねーさまも動いてるわ」
低いレメクの声に、同じく低い声でアディ姫が告げる。
「……動いていて、これ、ということは……相手は複数ということですね」
「の、ようね」
言って、アディ姫は暗い顔のアルと腕組みをした。
スバラシイムッチリを腕に感じて我に返ったのか、アルがギョッとみじろぐ。
「アルルンの護衛はあたしがするとして、ちょっと、人のいない場所にこもっていたほうがいい気がするわ。……連中、周りを巻き込むことの重大さ、全く考えてないっぽいから」
「……あまりにも浅はかですね」
「万死に値するわ。そうでしょ？」
「異論はありません」
互いに底冷えのする目になって、二人は頷きあった。
「陛下から勅命を受けました」
レメクは静かな声で言う。
「此度の件、断罪の許可も得ています」
「！」
その瞬間、アディ姫の目がギラリと輝いた。
断罪の許可。
それは即ち、裁判なしにレメクの判断で処刑してもいいということ。
「……断罪対象は？」
「証拠さえ揃えば、関係者全員」
ビクリとアルの体が硬直した。
その関係者の中には、彼も含まれている。
そして……彼の友であり、あたし達が首謀者と見る『偽王弟』も。
「……けれど、王族の血統であることに配慮して、できるだけ私の断罪でなく、別の方法でお願いしたく存じます」

「……うん。侯爵の立場も大変だしね。つまり、命令もらって、あたしが好き放題暴れちゃダメってことね？」
「考慮していただければ幸いです」
薄い笑みを口の端に浮かべて、レメクは言葉を続ける。
「ただ、アデライーデ姫。実力行使が必要な時は、私は私の権限をもってそれを許可します。生かさず、殺さず。……あなたなら、できるでしょう？」
「……完璧よ」
レメクと同じ薄い笑みを浮かべて、アディ姫は獰猛な色をその瞳に宿した。
「あたしは許さない。絶対に許さない。……鬼姫アデライーデの名のもとに、全員叩きのめしてあげるわ」
「許可します」
深い声で彼女の行動に『断罪官』の許可をあたえ、レメクは周囲を見渡した。
多くの人々が負傷者と、死者を運び出し、嘆きと喧噪の満ちるこの場所を。
そして、
「王妃。あなたも、お力添えいただけますか」
その声に、何もない空間がゆらりと揺れた。
ギョッとなったあたし達の前で、その人は幽鬼のように笑う。
「……妾も、かなり怒っておるのでのぅ」
美しく、妖しく、恐ろしい黒い魔女がそこにいた。
その瞳には、アディ姫と同じ獰猛な色がある。
「ネーサマ。牢屋の『標的』は？」
「捕らえた。……ロードに引き渡してきたから、今頃、地獄を見ているであろうよ」
その言葉に、あたしはちょっと遠い目になった。
文字通り、地獄を見させられているかもしれない。
あの、虚無の世界とか。

「したが、この惨状……なるほどのぅ……アディ、おぬしの、してやられてイラッとくる気持ち……わかるぞ」

それこそイラッとしている口調で言って、王妃は恐ろしい気配を身にまとった。

先のアディ姫にも匹敵する、鬼のような気配を。

「妾も、許しておけぬ。レメクよ。いやさ、断罪官殿よ。妾にも権限も。此度はアルティルマの王妃でなく、アリステラ殿の盟友、ナザゼルとして戦いたい」

「もちろん」

鬼二人を前にして、まったく動じずにレメクは立つ。

その身に、二人にも増して恐ろしい気配を宿して。

そうして、一台の馬車に目をとめて言った。

力ある声で。

「……さぁ、反撃といきましょうか」

23　暴走

白い壁、大理石の床、赤い絨毯、金縁の絵画。
レンフォード公爵家の街屋敷は、王宮に勝るとも劣らない豪華さだった。
いやむしろ「負けてなるものか！」的な何かを感じさせる勢いで、派手派手しい花瓶やら彫像やら絵画やらが飾られている。
……正直、執念みたいなモノを感じて怖かった。
「前方！　右斜めより射撃！」
「了解！」
そんなゴーカケンランな屋敷の中を鋭い声が飛び交う。
レメクの指示に身を翻したアディ姫が、スバラシイおみ足を披露しつつ、跳んできた矢を一蹴した。
……飛び道具って、蹴りで吹っ飛ばせるもんなんだな……
「二秒後に投擲！　次に本体！　右、左！」
「はぁッ！！」
飛来してきたナイフを拳であらぬ方向へと吹っ飛ばしたアディ姫は、続いて右側の扉から飛び出してきた男を右足で一蹴、左側の男を、なんと、右の男を踏み台にして左足で一蹴した。
そして、
「後ろへ！」
指示と同時にアディ姫が飛び退るようにあたし達の背後へと舞い戻り、

【射抜け】

人差し指と中指。
その二つを前へと突きだしたレメクの前方で、凄まじい風が吹き

荒れた。
それの中心は小さな珠のような『何か』。
撃ち出されたそれが廊下を一直線上に駆け抜け、その速度で引き起こされた壁のような空気の塊が、集団で現れた黒服の男達と、放たれたナイフや短い矢を吹き飛ばす！

ドォオンッ！！

凄まじい轟音をたてて、遙か向こうにあった壁が吹き飛んだ。
男達は不思議な空気の塊になぎ倒され、数歩分を吹っ飛んでるだけだから、そこらへんに転がっているが……
果てにある壁と飾られていた絵は、ものの見事に木っ端微塵になっていた。
（……あれ……弁償とか……どーなるんだろ……）
こういう戦いに慣れてないあたしは、思わずそんなことを思ってしまう。
が――

「全員捕縛しなさい！　後で陛下の兵が来ます！」
駆けるレメクやアディ姫は、全く頓着しない様子だった。
レメクに抱えられてるあたしだけが、辺りの惨状にボーゼンとしていたりする。
あたし達がいるのは、レンフォード公爵家、その二階。
あの厩舎前の騒動でも無事だったアロック家の馬車を駆り、公爵家の街屋敷に駆けつけたのがつい十数分前。
隠密行動が大得意というナザゼル王妃に先行してもらい、三人で訪問の挨拶も何もないままに屋敷に乗り込んだのが、ついさっきのことだった。
夜会仕様のレメクとアディ姫、そしてあたしという一行に、出迎

えたレンフォード家の執事さんがビックリしたのは言うまでもない。
が、そのあたし達が問答無用でズカズカ屋敷内に入り込んだ瞬間から、辺りはパニックになった。
とはいえ、最初からこんな大騒動だったわけではない。
何事ですか、と叫ぶ使用人さんを無視して二階の廊下に走り込むまでは、ちょっとした騒ぎ程度だったのだ。
それが、階段にたどり着いた瞬間から一変した。
なんと上からいきなり人間が何人も降ってきたのである！
降ってきたのは揃いも揃って黒衣のアヤシイ男。
それがキレーに気絶した状態で、二階の廊下からポイポイと放られていた。
……姿は見えないが、犯人が誰かなど考えるまでもないだろう。
ナザゼル王妃だ。
そして、昏倒した状態でポイ捨てされたのは――

「……『暗殺請負』『リウトプランド』」
同じく上からヒラヒラと舞い降りてきた一枚の羊皮紙を空中で受け取って、鮮やかな跳躍を見せたアディ姫が静かな声で読みあげる。
「『契約書』……ふぅん？　レンフォード家ってば、暗殺者なんて雇ってたんだァ」
意地悪な口調で言う彼女の言葉通りなら、そこに転がる黒衣は『暗殺者』。
契約書とやらをヒラヒラさせる彼女に、あたし達を止めようとしていた使用人さん達は真っ青になって立ちつくした。
「そんな……！」
「なにかの間違いです！！」
……その悲鳴じみた声に、嘘は感じなかった。
同じ事を感じ取ったのか、レメクは眼差しだけでアディ姫に指示を送る。
受けたアディ姫は『契約書』をスバラシイ肉厚の胸元に仕舞い込

むと、ドレスの裾を翻して階段を駆け上がった。
「お、お待ちくださいー！」
反射的に叫んだ執事に、
「断罪の許可が出ています」
静かな声でレメクが告げる。
時が止まったかのように硬直する彼等に、慌てたように集まっていた使用人の一人一人に、静かな一瞥を向けてレメクは口を開く。
「『レンフォード家』に二心ありと判断されたくなくば、邪魔をしないでいただきましょう」
その身に冷ややかな怒りをまとって。
「私達は『王族暗殺未遂犯』を追っている最中。……邪魔だてする者は皆、同じく国家の反逆者として処罰いたします」

そして、乱闘が始まった。

※　※　※

「……ずいぶんと手勢がいるわねェ……」
魔術で吹っ飛ばされた連中を数え、駆けながらアディ姫は舌打ちした。
ナザゼル王妃も暗躍しているはずなのに、後から後から黒服のアヤシイ人がわいて出てくる。いったい何人いるのか、数えるのも馬鹿馬鹿しいほどだ。
……ええ。十を超えたあたりで数えるのやめちゃいましたよ。あたしは。
ナザゼル王妃という、彼等では手に負えない『同業者』の登場と、問答無用で表舞台に引きずり出されたという現実は、彼等を捨て鉢な気持ちにさせたのかもしれない。
せっかくの黒服が全然保護色になってないこの屋敷で、もはやなりふり構わない攻撃をしかけていた。

闇から闇に静かに消えるという、そういう『暗殺者』を劇で見慣れていたあたしには、ビックリするような現実だ。
「レンフォード家ほどの名家になれば、幾度か仕事を請け負った集団がいても不思議ではありませんが……」
走りながらレメクも眉をひそめる。
アディ姫も同じく眉をひそめていた。
「でも、この数と、質の悪さは、どーも異常よねェ……とゆーか……」
「……不手際に過ぎますね」
互いの言葉をそれぞれ継いで、二人は眉を険しくさせた。
二人が渋い顔をする意味がわからず、あたしはレメクの腕の中で縮こまったままキュッと服を握る。
気づいて、レメクが気遣わしげにあたしを見た。
「……ベル。怖いですか？」
あたしはフルフルと首を横に振った。
だがレメクは気遣わしげな顔のままだ。
「……やはり、あの二人のように王城に残っていたほうがよかったのでは？」
「……ッ」
あたしは先程よりも強く首を横に振った。
レンフォード家に突撃する前——いや、王城を発つその前あたし達はアルとケニードとは別れていた。
本来、最も危険なはずのアルと、その次に危険なはずのケニードをあの城に残すなんてありえない。
だが、それができたのは、レメクの指示でけが人が運び出された直後、その場に現れた黄金の魔女のおかげだった。
アウグスタは何も問わず、何も言わず、ただ、行け、と——目で合図してくれた。
その傍らには、常に黒い魔王様がついている。
「……この二人のことでしたら、私が一緒にいますよ」

あまりこちら側に関与する気のないそのヒトが、軽く肩をすくめるようにしてそう言った時、彼等の安全は確約された。
……レメクはその時、あたしのことも預けたかったのだと思う。
――けれど、あたしはレメクから離れられなかった。

離れたくなかったから、だけではない。
怖かったのだ。
どこを向いても、目を瞑っても、目の前にチラチラと無惨に倒れた人々の姿がよぎる。
それは何かの拍子にふいにあたしの目の前によぎるもので、その恐怖をレメクなしには耐えられそうになかった。
……邪魔になるとわかっている。
わかっていても、それでもこの温もりから離れられなかったのだ。
「……」
レメクは口をつぐみ、それ以上は何も言わずに、あの時と同じようにあたしをキュッと抱きしめてくれた。
暖かい温もりとこの匂いに包まれている時だけ、あたしはあの光景から逃れられた。
……わかってるのだ。これが甘えだということは。
……本当に、わかっているのだ。そんな風に、自分から目をそらしちゃいけない光景だったということも。
ギュッと小さく体を縮こまらせていると、レメクがポンポンと肩のあたりを叩いてくれた。
……こんな場にあたしなんて邪魔でしかたがないだろうに……彼はどこまでも、優しいのだ。
「姫君」
あたしをポンポンしながら、レメクがアディ姫に声をかける。
「左に曲がってすぐの所に三人、右側からは五名ほど駆けつけています」
「んふふふ。少ない少ない！」

「それから左手を曲がった方の天井裏に八名、三十歩ほど向こう側の部屋に十八名」
「少ない少ない！！」
「さらに下の階から向こうの階段をつかって駆けつけているのが二十四名、三階から降りてきているのが十六名です」
「……ちょっと多くない？」
やや呆れた声でアディ姫がぼやく。
レメクはあたしをポンポンしたまま嘆息をついた。
「巣になっているのです。よほど手綱を『握れていない』のでしょう。……家を半ば乗っ取られかけているというのに、よく放置できていたものだと、いっそ感心するほどですよ」
その声は一欠片の温もりもないものだったが、あたしをポンポンする手はとても温かかった。
あたしは涙目のまま顔を上げ、ちょうど気遣わしげな目でこっちを見たアディ姫とバッチリ目をあわせる。
アディ姫は一瞬びっくりした顔になってから、困り顔になって言った。
「……末姫ちゃん。あたし、ちょっと暴れてくるから、怖かったら目を瞑ってなさいね？」
「……ねーしゃまは、こわく、ないのです」
あたしの声に、アディ姫は少しだけ微笑む。
そうして素早く傍によると、あたしのこめかみにチュッとやって身を翻した。
先にも増して素晴らしい早さでアディ姫が駆ける。
レメクがあたしを抱え直し、懐から一枚の札を取り出した。
描かれている模様は『翼の螺旋』。
――『風』の紋章。その紋章符。
アディ姫は廊下の端まで駆けると、躊躇無く左の廊下に飛び込み、

「ぇゃあああああッ！」
気合いと同時に何かを繰り出した。
どぉん！　と大気が鳴動し、近くの窓ガラスが内側から外へとはじけ飛ぶ。
怪しい人がいっぱいいる方へ飛び出した姫をチラとだけ見て、レメクは右側へと身を躍らせる。
右手を前に。
その指には一枚の符。
【舞え】
言葉と同時、嵐のような突風が廊下のモノ全てを吹き飛ばした。
重い彫像も甲冑も壁の絵画も、廊下を音もなく駆けていた黒衣の男ごと問答無用で端まで吹き飛ばす。
轟音とともに壁に叩きつけられ、悲鳴と破壊音が辺りに木霊した。
あたしはただそれを見つめる。
レメクの手があたしの視界を塞ごうと目の前を覆っていたが、あたしはその隙間からその様子をジッと見つめていた。
……目を背けてはいけないのだと、思ったのだ。
どれだけ怖いと思い、どれだけ見なかったことにしようと思っても、ココロが「それではいけない」と訴えていた。
目の前で起きていることは、全て現実なのだ。
優しい人が武器を持ち、あったかい人が拳を握り、敵と見定めた相手にその力をふるっている。
見ずにいようと思えば、見ないままに全てを終えることができるだろう。
耳を塞いでいようと思えば、何も聞かないままに終われるだろう。
そうして暖かくて心地よいものだけを周囲に敷いて、箱庭のような暖かい場所で過ごしていれば心はとても楽だろう。
けれど――

それをすれば――

――『彼等』は、どうなってしまうだろうか？

巻き込まれ、何もわからないままに、殺されてしまった『彼等』。
どれだけその死に様がショックでも、
思い出すだけで震えるほど恐ろしくても、
目を瞑り、耳を塞いで、なかったことにしてはいけない現実があそこにあったのだ。
決して忘れてはいけない光景があそこにあったのだ！
怖いからレメクと離れることができない。
けれど――同じく『怖いから』と、今、ここにある光景から目を背けることはできなかった。
「……今回は、無関係な人が……死にすぎました」
端以外はすっからかんになった廊下を一瞥して、レメクが静かな声を零す。
「……それを、血で血を洗うように、復讐していいわけではありません」
そう、
復讐のために、刃を握っていいわけではない。
けれど――

「けれど……残された人々に、死んでしまった人々に、我々は、全てを明らかにさせなくてはいけません」
何が起こったのか、
誰が起こしたのか、
なぜこんなことになったのか。
うやむやにしてはならず、

闇に葬ってもならず、
その全てを彼等の墓前と、彼等を愛する人々に明かさなくてはいけないのだ。
そして、知らしめなくてはいけない――――

「『こんなことは許されない』――と」

全ての人に。
今回の首謀者に。
決して許されざる罪がここにあるのだと！

「そう――『彼等』にも」

レメクはすぅと息を吸う。
札は出さず、ただ、親指と人差し指で円をつくり、それを下に向けて手を伸ばした
満ちる力。
魔力と呼ばれるもの。
身の内からあふれ出す熱のような、
身の内に染みこむ『響き』のような、
それは世界のどこにでもあって、目に見えることのない、確かたる『力』！

【集え　我らが命の源よ】

レメクの【声】に答えて、あたし達の近くにありえざる揺らめきが出現した。
ゆったりと歪む景色。
乱反射する光。

まるで水の中にいるような光景――――そう――――

【古の血の系譜に希う（こいねが）】

現れたのは水。
手の甲に浮かぶ紋章は、舞い降り、波紋を広げる命の雫。
『水の紋章』。

【召還（いでよ）！　『荒れ狂う蛇』よ！】

その瞬間、尋常ではない轟音が響いた。
あたし達を囲み、どんどんどんどん量を増やしていた水が、周りの壁全てを抉（えぐ）って回転したのだ。
それは螺旋を描くようにぐるりとあたし達を中心に周り、天井を突き破り、壁や廊下を破壊してその姿を現す。
――蛇だった。

透明な水で出来た、巨大な蛇だった。
その鱗は水とは思えない精密さでキラキラと輝き、その一枚一枚が、まるで綺麗な硝子で出来た盾のようだった。
「ちょ、ちょっとぉ！」
なんか遠くでアディ姫が怒鳴っている。
とぐろを巻いた水の蛇に閉じこめられているせいか、音がややくぐもってきこえるのがなんとも不思議な感じだった。
「危ないでしょ！　てゆか侯爵！　なにデカブツ作ってるの！！」
……おねーさま。すごく怒ってる。
レメクがそちらを振り向くと、巨大水蛇も、ゴゴゴ、と周りをえぐりながらそちらを見た。

アディ姫の向こう側で、戦ってた相手だろう黒衣軍団が愕然とした顔で蛇を見上げている。
アディ姫は戦意を喪失しちゃってる相手を無視して、レメクに向かって怒鳴った。
「だいたい、大技使ってよかったっけ!?　ちょい前まで倒れてたんじゃなかったっけ!?」
その言葉に、ハタと気づいてあたしはレメクを見た。
アディ姫は、ケニードのケガの一件を知らない。だから、彼女が言っているのは、大祭の最中に倒れて、寝込んでたという情報のことだろう。
それだけでも「魔術使っちゃダメ」な状態だというのに、ケニードのケガを治して、レメクはポテトさんとアウグスタからキツくお叱りを受けていた。
それなのに、魔術の連続使用。
今まで気づかなかったあたしもどーかと思うのだが、自覚あるはずのレメクがガンガン魔術使ってるのはどーゆーことだろーか？
（おじ様……もしかして、怒りで我を忘れちゃってたり？）
あたしはジーッとレメクを見上げる。
アディ姫に怒られてもしれっとした顔をしていたレメクは、あたしの視線にちょっと慌てて言葉を探した。
「いえ……その……ベルの歌のおかげで、その……」
じー。
「体調はすこぶるいいわけで……」
……すこぶる、ときましたか。
あたしはレメクの胸にペタンを張り付き、そのままの体勢でジーッとレメクを見上げ続けた。
そんなあたしの視線を真正面から受けたまま、彼はちょっと困り顔で言う。
「その……『紋章』の『力の具現化』は、成功さえさせれば、以降の魔力消費や術式行使が非常に楽なんです。本当に、一回一回紋章

術を使うよりも体にも楽ですし、力もありますから」
その『逃げない眼差し』に、あたしは「よし」と心の中で安堵した。
嘘じゃない。
だったら、ちょっとは安心だ！
「アディねーさま！　おじ様は嘘言ってないのです！」
「……末姫ちゃんが言うなら、そーなんでしょーけど……」
「……私の言葉は、基本、信じられていないわけですか……」
なんか微妙にショックをうけたよーな顔でレメクが言う。
レメクの『私は元気です』ぐらい嘘くさいものは無いのだから、これは仕方がないってなもんだろう。
「けどねぇ、そのデカブツ！　動かす時は気をつけてね！？　屋敷、全壊するから！」
言ってすぐに戦闘に戻るアディ姫に、レメクは自分が作り上げた水の蛇を見てちょっぴり眉を寄せた。
「……強すぎましたかね……」
……レメク……
チョイと……どーなのソレ？
「私自身、ここまで自分が回復してたとは思いませんでした……」
……それって、状態把握ができてなかったってことじゃなかろーか……？
なにげに大ざっぱな一面を見て、あたしはベタッとくっついたまま、ギューッ、とイッパイイッパイ手を伸ばして抱きついてやった。
レメクの目がちょろりと逃げる。
だが――
「侯爵！　そっち！」
鋭いアディ姫の声と、レメクの表情が一変したのは同時だった。
ぎゅるり！　と周囲をさらに抉って水蛇が動き、レメクがひきし

まった顔で睨む方向へと突撃する。
綺麗に廊下に添って走る水蛇は、さきほどまで走ってきていた廊下を逆走し、放たれたナイフと、それを放った黒衣の一軍をはね飛ばした。
バァン！
とても水がぶつかったとは思えない音が遠くで響く。
あたしは離れちゃったデカイ水蛇のしっぽを見て、「これどうやって反転してくるんだろーか」と、ちょっとヤな予感を覚えながら思った。
なにせ、こんなのが向こうで一回転してこっちにむかったら、それこそまた天井やら壁やら床やらを壊すに決まっている。
かといって、そのままズルズルとバックしてこられてもなんかヤだし……
思わず疑問でイッパイになったあたしの目の前で、水蛇はブルブルとその身を震わせ――
あ。しっぽが頭になった。
……てゆか、どーやって!?
「……ベル、これは『水』ですから」
生き物じゃあ、ないんですよ？　という眼差しのレメクに、あたしはパカッと口を開ける。
ああ！　そーでした！
ただの水なんだから、形を変えることなんてへっちゃらだったのだ！
なんか生きてるっぽい動きしてたから、思わずイキモノだと思っちゃったよ……
その水蛇のしっぽ（さっきまで頭だった所）あたりでは、わらわらと現れたレンフォード家の使用人達が、昏倒している黒衣達をよってたかってふんじばっていた。
レンフォード家の彼等が捕縛に協力的なのは、相手が『得体の知れないアヤシイ奴等』だからだろう。

自分達の屋敷にそんな連中がいっぱいいたことはショックだろうし、どうやらその連中のせいで屋敷をあたし達に襲われているんだと思ったらしい。

こっちが指示する前に手に手にロープや布をもって、気絶した彼等をしばりあげ、死にものぐるいで「私達は無関係です！」を表現していた。

レメクが「捕縛」の指示を出した瞬間なんか、ご飯にたかる飢えた鴉のような勢いで、見ていてちょっと怖いものがあったほどである。

……てゆか、こっちは思いっきり戦闘中なのに、戦場近くでウロウロしてたら危ないと思うのだが……

「ねぇ、おじ様……」

ふと不安を覚えて、あたしはあちら側をチョイチョイと指し示した。

「あの人達、危険じゃないの……？」

あたしの声にレメクは少しだけ目を伏せ、けれどすぐに身を翻して、いまだ戦闘を続けているアディ姫の方へと向かった。

――強く厳しい眼差しで。

「保身のために自ら死地に飛び込むというのなら、私はそれを止めません」

「でも……おじ様……」

「ここで私が『やめろ』と言って、得をするのは敵側だけです」

傍らに巨大な水の蛇。

「最も被害を少なくするのは、彼等に『これ以上の抵抗は意味がない』と思わせることが大切です。彼等は金で雇われた者。……ならば」

「……お金払う人を、押さえるのね？」

「そうです」

喧嘩の時、相手側のボスを真っ先に倒さないといけないように、こういう時も、彼等の雇い主を押さえないといけない。

だけど、あたし達が向かう先はその『雇い主』――『偽王子』ではない。

あたし達の第一の目的はフェリ姫とシーゼルの保護。

『偽王子』は、その後なのだ。

「少し後手にまわるかもしれませんでしたが……どうやら、揃ってくれているようですからね」

ふいに冷ややかな目になったレメクは、足音一つたてずに疾走を開始する。

アディ姫もそうなのだが、レメクも足音を殺すのがものすごく上手かった。あたしは気配とか匂いとか溢れる愛とかでレメクを察知できるけど、他の人には難しいんじゃなかろーかというレベルである。

「姫！」

レメクが前方の戦場に声を放つ。

見事な後ろ回し蹴りを放っていたアディ姫は、すぐに気づいて壁際に避難した。

「ひッ！？」

こちらに気づいた黒衣に一人が、唸りをあげて襲い来る水蛇に硬直する。

何人かが機敏に水蛇の突撃を避け、何人かが勇敢にも間際を通過した水蛇の胴体に剣を叩きつけた。

ガィンッ！

すごい音がして、その剣が弾かれる。

その手応えは想像してなかったのだろう、反動で腕を痺れさせたらしい彼等に、音もなく忍び寄ったアディ姫の拳が決まる！

「ごふッ！？」

吹き飛ばされ、近くの同じく水蛇を避けていた仲間にぶつかった相手に、さらにアディ姫が追撃する。

「ッァアッ！」
気合いとともに放たれた蹴りが、男二人をかなり遠くへと吹き飛ばした。アディ姫はそのままの勢いで床にしゃがみこみ、バッと足を広げて蛇の胴体の下を一瞬でくぐりぬけた。
次の瞬間には反対側の男達の前に立っていたアディ姫に、黒衣の男も剣を振るう。
だが、アディ姫の動きのほうが遙かに早かった。
「フッ！」
顎、胴、下腹に連撃をたたき込み、軽く蹴り上げ、中空に浮いた男の体に右の肩側を使った体当たりを喰らわす！
バンッ！！
かなり痛そうな音がして、その瞬間に気絶した男が吹き飛ばされ、昏倒する。
どうやら吹っ飛ばすのが好きらしいアディ姫は、そのまま蛇により添うようにしてさらなる獲物を求めて前進し、
ピタリ、と、動きを止めた。
「……どうやら、少しは位が高いのが出てきたようですね」
水蛇を挟んでアディ姫の反対側に到着したレメクが、静かな口調でそう呟く。
アディ姫は嗤った。
それはそれは爛々とした目で。
「……ええ。やっと、弱い者虐めから解放されそうよ」
その瞳は、まるで獲物を見つけた猛獣のようだった。

「……とんでもない御貴族様もいたもんだ」
廊下の向こうから聞こえてきた声に、あたしはゾッとしてレメクにしがみついた。
声の内側にどす黒いものをためこんだような、おぞましく恐ろしい声だった。

どす黒いものは声だけじゃなく、辺りにも臭いの形で放出されている。

それはあたしだけが感じている臭いなのかもしれなかったが、なんだか、嗅いでいるだけで胸が悪くなるような悪臭だった。

「無茶苦茶だ……てめぇら、ここが、エライ公爵様の屋敷だって、わかってんのか……？」

そうして現れたのは、アヤシイ全身黒衣ではなく　　上等の式服を着た男。

年の頃は四十後半だろうか。赤黒い茶髪をした、どこかは虫類のような目の男だった。

「……着慣れない服を着て、ずいぶんと大変そうねェ」

その男をジロリと睨めつけて、アディ姫が口の端を歪める。

男は自分の真向かいに立つ美少女に無感動な目を向けた。

「……てめェも、そんな印象を受けるぜぇ？　どっかのお姫様よぉ」

「どこかのお姫様じゃあ、ないわ」

ニィとさらに口の端を歪めて、アディ姫はゆっくりと身を沈め始める。

それは猫が獲物に飛びかかる前の動作によく似ていて、相手の男もじわり、と身を沈めて構えをとった。

「そうかよ、猛獣みてぇな別嬪さんよ。……言っておくが、こんな暴挙をして、てめーら無事でいられると思ってんのかよ？」

「無事ですまないのは、お互い様でしょう」

身構え、一触即発の二人を淡々と見つめて、レメクは冷ややかに言う。

「……いっそ何も存ぜぬという顔でここから逃げれば、その姿です、一人だけは助かったかもしれないのに、わざわざ出てきたその度胸は褒めてさしあげましょう」

「……てめぇがボスか。色っぽい男前さんよ」

……む！？　レメクを色っぽいとか言う！？

あたしは危険信号を察知し、こちらを見た男にギラリと目を光ら

せた。
「子連れで乱闘とは恐れいるぜ。おまけにそいつぁ、メリディス族じゃねェか。捕まえて売れば高く売れる、ってこったなァ？」
……子連れ！？
違う意味で危険ゾーンを踏んでくれた相手に、あたしの怒りは『ほどほど』から『ぶっちぎり』にまでカッ飛んだ。
だが！
「……ベルを……商品扱い……ですか」
なんか、さらなる危険なゾーンがドコカに存在していたらしく、あたしを抱っこしてくれているヤサシイヒトが、ちょっと振り向けないぐらいコワイヒトに変身した。
あたしはギラリと礼服男（そーいや名前も未だ知らない）を睨んだまま、カチンコチンに硬直する。
振り向けない。
否。
振り向いてはイケナイ。
なんか、今、振り向いてはイケナイという気分がイッパイだ！！
その予感を裏付けるように、あたし達とアディ姫達の間に横たわる水蛇が、ブルブルブルブルと物凄い勢いで振動しはじめた。
鱗状だったその表面も、ザワザワザワザワと波打ちはじめる。
さすがにヤバイと思ったのか、礼服男が顔をひきつらせて蛇――というよりレメク側から遠ざかりはじめた。
そんな隙を逃すアディ姫ではない！
――のだが、ふと見ると、アディ姫はいつのまにやらえらい勢いでトンズラしていた。
身を乗り出して背後を見ると、遙か後方で「無理。無理無理無理！」という顔のまま必死に首を横に振ってる。
あたしは愕然とした。
あんまりだ！！
あたしは今、そのムリムリな人とピッタリくっついてる状態

ですよ！？
あたしは必死に瞳で訴えた。
お願い！　ちょっと戻ってあたしも連れてって！！
アディ姫は真剣な顔で、首を横に振った。
「ごめん。無理！！」と瞳が返事する。――無理！？
――最強の称号、返せ！！
クワッと目をカッぴらいたあたしの前、まるでそれに合わせたように、超振動しまくっていた水蛇が爆発した。
「「「「「うぉ！？」」」」」
黒衣と礼服男達がギョッと後退し、あたしはギュッとコワイケドスキナヒトにしがみつく。
周囲に四散した水は、けれどその勢いで何かを破壊するのではなく、ほぼ一瞬で寄り集まり、数十を超える大小様々な水の剣へと変化した。
……そう、剣に！
……剣に……
……って……？
「お……お……おい、マテ……」
さすがにその形状の意味と恐ろしさを察したのか、先程にも増して礼服男と黒衣達が青ざめ後退する。
レメクが一歩を踏み出した。
中空に浮いた数十の剣が、凄まじい勢いでレメクの傍にズラララッと勢揃いする。
うぉぉ、と思わず身震いしたあたしの頭をレメクがことさらゆっくりと撫でた。
そうして、声だけはいつも通りに優しく言う。
「……ベル」

「……ぁい」
「アディ姫の所へ」
言われて、あたしはパッとしがみついていた手を離した。
ストンと床に落下したあたしは、ドレスを裾をガバリとひっつかみ、脇目もふらずにアディ姫の元に駆けだす！
「末姫ちゃん！」
ゴメンネゴメンネデモムリダッタノという眼差しのアディ姫に、あたしは涙目で突撃した。
超全速力のあたしを肉厚バインで受け止めて、アディ姫はあたしをガッシと抱きしめる。
そして二人してブルブル震えながらレメクを見た。
あたしという重荷の無くなったレメクは、反対側の壁に半ばへばりついちゃってる男に向き直る。
そして笑った。
それは美しく、
それは恐ろしく、
いろんな意味で夢に見ちゃいそうなぐらいの壮絶さで――――
「滅べ」
――――一言と同時に、全ての剣が神速のダンスを踊った。

24　魂の宝冠

静まりかえった廊下に、あたしとアディ姫はポツンと佇んでいた。
「……全部、持ってかれちゃったわね……」
ひゅるり、と風が吹く廊下で、アディ姫が虚ろに呟く。
レメクがコワイヒトになって数十秒。
たったそれだけしか経っていないのに、周りは散々な状態になっていた。
ただでさえレメクの水蛇に壁などを壊されていた廊下は、今や完全に破壊されている。
右手側の外壁はそのほとんどが吹っ飛び、廊下はレメク達がいたあたりから数十歩分にわたって消滅していた。
かろうじて柱や、壁にひっついてる欠片程度の廊下が残っているが、あれを足場に進むのには、かなりの勇気が必要だろう。
もちろん、敵なんて影も形も無くなっている。
……ついでにレメクも追撃していなくなっちゃってたりするのだが……
「……キレてたね……侯爵……」
「……ぅん……」
コックリと頷いて、あたしはフンフンと風の匂いを嗅いだ。
どこまで遠くに行っているのか、レメクの匂いはかなり薄い。
なんか遠くでスゴイ破壊音が聞こえてきてるから、きっとあのあたりにいるんだろう。
「……侯爵。深追いして敷地の外に行かなきゃいいけど……」
アディ姫の声は心底不安そーだ。
……いやまぁ、あの勢いでは、不安に思うのも仕方ないのだが……
「あのまま行ったら、下手すりゃ大惨事よ？」
「い、いや、おじ様のことだから、きっと周りに配慮して……」
「キレてたわよね？」

チョイチョイと半壊している廊下を指さすアディ姫に、あたしは即座にお祈りポーズになった。
『おじ様ッ！　お屋敷の外に行っちゃダメなのです！』
レメクからはウンでもなければスンでもない
……そーいや、前のココロノコエも無視されちゃったんだっけな……
「ちょっ……なんでしょんぼりしてるの末姫ちゃん!?　まさかもう手遅れだった!?」
むしろあたしのココロが手遅れです。
「おじ様……お返事返してくれないにょ……」
「うっ！」
先の一幕を思い出したのか、それともそれほどキレてるレメクに怯えたのか、アディ姫が顔をひきつらせる。
「ほ、ほらっ、侯爵もアレな感じになっちゃったし！　あたし達は頑張ってフェリ達を探さないとネッ！」
えぐえぐ。
「末姫ちゃんが頑張ったら、侯爵もきっと褒めてくれるわよぅ!?」
ずぴずぴ。
「もしかしたら『よくやりました！』とかっておでこにチューしてくれるかもヨ!?」
燃えました。
「おねぇしゃま！　標的の匂いはあっちなのです！」
闘志を燃やして半壊してる廊下をビシィッ！　と指さすあたしに、アディ姫がミョーな間をおいてポツリと呟いた。
「……末姫ちゃん……アレをあたしに渡れとゆーのね？」
なんだか途方に暮れたよーな声だった。

※　※　※

アディ姫の体術は素晴らしかった。

なにが一番素晴らしいって、十歩分ぐらい離れた柱の残骸を足場に、ポンポンとあたしを抱えて跳躍しちゃえるところがスバラシかった。

彼女の足には、そう！　魔法がかかっているのである！！

「あーもう！　侯爵ってばどーしてこー無茶苦茶な攻撃してるのよッ！」

その魔法の足で一際高い跳躍をしながら、彼女は「キーッ」と罵声を放った。

普通、声をあげれば体が多少ブレるはずなのに、彼女の足はわずかのズレもなく目指した『壁際にかろうじて残ってる廊下の残骸』に着地する。

次の足場はと探す目に映るのは、遙か向こうにある『崩れかけた柱』だ。

「「……」」

沈黙。

壁を失った右隣の空間から、ぴゅぅ、と風が吹いてアディ姫のドレスをヒラヒラさせた。

「……ねぇ、末姫ちゃん。侯爵って……」

「お、おじ様はきっとわざと壊してるのですよ！」

静かなアディ姫の声に、あたしは慌ててレメクを擁護する。

「アレです、スゴイ騒ぎを起こせば、こっちに気をとられてフェリ姫達を保護しやすくなるとゆー、コートーセンジュツなのです！」

「……いや、ふつーに、ただの破壊魔になってる気がするんだけど……」

「そ、そんなことないのですよ！？」

……正直に言えば、ちょっぴりあたしも「そーかも」とか思うのだが。

「おじ様は頭がヨイのです！　きっと何かの意味があるのです！」

あたしはレメクを庇わなければならないのだ。

「……ないと思うけど……」

なぜなら、
「いらんことしぃの公爵家をぷちってしてやろーという、センリャクとかあるのですよ！」
そう、ツマだからッ！！
「……末姫ちゃん……無理しないほーがいいわよ……？」
……。
……ごめんなちゃいレメク……
あたしはここにいないダンナサマに詫びを入れる。
……あちしは……ツマ失格なのです……
「ま、まぁ、どーせこれだけ悪者の巣窟になってたんだから、ちょっとぐらい壊れたってザマーってなもんだけどネッ！」
なんかアディ姫が焦りながらフォローしてくれた。
あたしはそれにピスピス鼻をならしてから、チョイチョイと遙か向こうの廊下を指し示す。
「でも、先に行くための足場があんなトコなのです」
「……うふふふふ。あたしの限界にチャレンジって感じかしら」
「おねーしゃまは壁とか走ったりできないですか」
唯一無事に残ってる左側の壁を指さすあたしに、アディ姫は沈黙。
……いやまぁ、さすがに壁なんぞ走る人はいないと思うけど。
……いや、あたしはかつて、走ったことあるよーな気がするけど……
さすがに長いこと沈黙してしまっているアディ姫に、あたしはそろりと視線を向ける。
やっぱ引き返して別の道を探そうと提案する前、彼女は「あちゃー」と言いそうな顔でこう言った。
「そーいや、壁走れば速かったんだったわー」
……アディ姫は、頭イイけど、どこかヌケてる人だった。
「そっち右！」

「おっけい！」
「あ！　階段の上！」
「おぉぅ！」
あたしの指示のもと、アディ姫は凄まじい勢いで廊下を疾走する。
あたしを抱えたレメクも早かったが、彼女の早さはちょっとケタが違う。なにせ指示をする前に目的地を通り過ぎちゃうぐらいである。
……そして風圧であたしがもっちりバインに圧迫されちゃうぐらいである。
「そろそろ近いと思うのです！　そして次は左なのです！」
「……ははぁ、さすがにここまでくると、あたしでも気配でわかるわぁ」
たどり着いた三階の廊下で、アディ姫はニヤリと笑った。
通り抜けてきた一階や二階よりも、遙かに上等な彫像が飾られている三階。
おそらく、この辺りが『高貴な方々』の生活圏なのだろう。床の絨毯からして上物っぽくて、ここが破壊されたらさぞかし巨額の請求をされるんだろーなぁと思わずにいられなかった。
……いやまぁ、レメクがやって来たら滅茶苦茶にされそーな気はするが。
そのレメクはというと、未だにどっか遠くでガンガン戦っているらしかった。
匂いがほとんどしないことからして、たぶん、外にいるのだろう。
窓が開いてればそれなりに位置を把握できるのだが、三階の窓は開いてないらしく、ちょっと居場所を探し当てるのは難しかった。
……てゆか、あの状態のレメクと渡り合ってるのか、あの礼服男……
「……ねーしゃま」
「ん？　なにかな～？　末姫ちゃん」
なにやら身の内に力を溜めつつあるアディ姫に、あたしは素朴な

疑問をぶつけてみる。
「あの、おじ様を怒らせた礼服男、どれぐらい強そうだったのです？」
それを聞いたアディ姫は、唇をちょっと尖らせて言った。
「もー、そりゃ、このあたしが『ちょっと戦ってみたいなー』って思うぐらい強そうな奴だったわよー？」
……てゆことは、そーとー強いんだな……
「大会でも滅多に見ないレベルっぽかったのよねぇ。……まぁ、でなきゃ、侯爵のあの攻撃を避けたりできないってゆーか……」
水の剣で散々な状態にされた屋敷の一角を思い出し、あたし達はそろってブルッと身を震わせた。
おおぅ！　胸でビンタされる！
「ま、侯爵もあえて避けにくい場所は攻撃してないし、それもあって避けれてるんでしょーけどねぇ」
？？？
意味不明だぞ？
「避けにくい場所？」
「あぁ、胴体とかね」
細い腰に手をあてて言ったアディ姫に、あたしはさらに「？」を飛ばして首を傾げた。
アディ姫は足音を殺しながら歩きはじめる。
ナザゼル王妃同様、気配を察知しちゃえる彼女には、もうあたしの指示は必要ないだろう。
彼女の向かっている先は、知っている『匂い』のする方向だった。
「ん～……手足とか、頭とかだと、体を動かせばけっこう攻撃を避けれるもんでしょう？」
例えば、頭を低くしたり、手足を動かしたり、体をさばいたり……
「けど、軸となる胴体や腰とかは、けっこう避けにくいの。喰らえば致命傷だしね」
ふむふむ。

「だからなのかなぁ……クラウドール卿の攻撃って、そのあたり全部外してるのよ。たぶん、身動きとれなくして捕縛、ってとこじゃないかしら。殺すだけなら、最初の一、二撃で勝負ついてるでしょーし」

「……あの、超イッパイな剣を使って？」

「……ギリギリで、殺さないようにがんばってる、って感じがしたわね……ひしひしと」

……そうか。

レメクは、イッパイイッパイな気持ちでガンバッてるのか。

「じゃあ、早くお義姉様達を確保して、おじ様を呼び戻さないといけないのです！」

「うん。そうなんだけど……」

言って、アディ姫は「しーっ」と唇の人差し指をあててあたしを見た。

あたしは目をパチクリさせながら、同じく「しー？」と唇に人差し指をあててみる。

頷いて、アディ姫は足音を殺したまま速度をあげた。

「……なんか、フェリ達と一緒に、誰かもう一人いるみたい」

アディ姫の言葉に、あたしはキョトンと瞬きした。

「？　それが、『偽王弟』なのです」

「……え？」

「『アルトリート』って名前の」

お？　あたし、ちゃんと名前言えたぞ！？

今まで全然言えなかったのに、なぜかスルリと口からでた名前に、あたしは目をキラッと光らせた。

だが、あたしを見つめるアディ姫の目はまん丸だ。

「エ？　この気配が？　ええ！？」

何故かちょっと目を剥いて言う。

……って、アディ姫ってば直に『偽王弟』と会っていなかったっけ？

「そーなのです。おじ様も『揃ってる』って言ってたのです」
……今まで忘れてたけど、レメクも確かそんなことを言ってたはずだ。
それは、あたし達にとってすごくラッキーなことだとあたしは思ったのだが、
「や、やばっ！　それでこの気配って、やばいわ！」
何を感じ取っているのか、アディ姫はいきなり猛ダッシュをかけた。
その反動でムッチリした谷間に顔が埋もれ、あたしは慌ててモガモガと脱出する。
「ぷぁっ！　お、おねーしゃま！？」
「争ってる気配がするのよ！」
なんと！？
「ただの見張りと口論してるだけなら、大事には至らないだろうって思ったけど……！　そいつが『偽王弟』なら、あの二人の身が危ないわ！」
あの二人が！
あたしはギョッとして息をつめた。
「な、なんで争って……？」
「そりゃ、普通、穏やかな対応なんて無理でしょ！？　フェリも伯爵も、好きでここに留まってるわけじゃないなら、『偽王弟』とは対立するでしょうし！」
ああ！　そーだった！！
そもそも、ぷち監禁されてる可能性があるからこそ、あたし達はここに来たのだった。
なら、たぶんその犯人だろう『偽王弟』とは喧嘩になるはずだ。
「アルルンと同じ体つきなら、『偽王弟』は伯爵よりずっと体格がいいはずよ。大人と子供の違いだってある。達人ってわけでもない伯爵は、『偽王弟』には勝てないでしょう！？」
そして、フェリ姫にいたっては、そもそも戦うこと自体が出来な

い。
だが、それはきっと普通のことなのだ。
アディ姫やナザゼル王妃のように、突出した戦闘能力をもつ『王女』の方が、普通はありえない存在なのだから。
「あぁもぅ！　ドアまで行くの面倒だから、壁ぶちやぶってやろうかしら！」
あたしを抱えたアディ姫は、凄まじい勢いで廊下を駆けつつ物騒なことを言う。
あたしは（それはいいかも！）と目を光らせ、ついでギョッと体を硬直させた。
その瞬間、行く手に唐突に現れる黒い影！
「エァアッ！」
アディ姫はわずかの躊躇もなく、その影に跳び蹴りをかました！
景気よく吹っ飛んだのは、レメクの鬼モードと同時に現れなくなっていた黒衣の連中だ。
「さすがに本陣には粒が揃ってるわね！」
続いて眼前に現れた黒衣の男を殴り飛ばし、横合いからふいに現れた同じく黒衣の男に肘打ちをくらわせてアディ姫は叫んだ。
その顔が異様に嬉々としているよーなのだが……
もしや、アディ姫、強い敵に燃えるタイプだったのだろーか？
……そーいや、訓練所破りの話しの時なんか目ぇキラキラさせてたな……
「はぁッ！」
あたしを胸に貼り付けたまま、アディ姫は現れた敵を次々に殴り飛ばし、蹴り飛ばす。
今までの連中と違い、気配どころか匂いもあやふやで察知が難しいというのに、アディ姫には全く危ないところがなかった。
現れれば拳を撃ち、現れれば蹴りを放つ。
正確無比なその攻撃に、敵が一人また一人と減っていく。
黒衣の男は次から次と出てくるのだが、そのほとんどが一瞬で昏

倒させられていた。
……てゆか、アディ姫……
「う……うぇぷ……」
……あたしがひっついてるの、絶対忘れてると思うのだが……
ものすごい速度で動く体にあって、あたしの張り付いている胸はさらによく動く。
上に下に右に左にたまにちょっと斜め上に跳ね上がるソレに、あたしはあっというまに気持ち悪くなっていた。
「す、末姫ちゃん!?」
さすがにマズイと思ったらしく、アディ姫の動きが一瞬止まる。
その瞬間、鈍い煌めきがあたし達に向かって放たれた。
「くっ!」
アディ姫が体をさばいてその刃を避ける!
が――――
「末姫ちゃん!」
その反動で、あたしはポーンと飛んでしまった。
うぇっぷな気分になっていたあたしは、反動に耐えられるほど強くへばりつけなかったのだ。
床に吹っ飛び、とりあえず着地だけは無事にすませ、しかし勢いを殺せずにそのままコロコロと転がるあたしに、慌てたアディ姫が駆け寄ってくる。
あたしは目が回っちゃいそうな回転を経てからムクリと起きあがった。
どこまで勢いよく転がったのやら、そこは階段のすぐ傍だ。
そしてそのまま前を見据え――
「ねーさま!」
駆けつけてきたアディ姫の後ろに、躍りかかる黒衣の男を見た。

――間に合わない。

瞬時に頭の中に答えが出る。

――あの攻撃は、避けられない。

けれど、間に合わないとわかっていても、あたしはアディ姫に飛びつこうとした。

突き飛ばして、せめて傷が少ないようにと思ったからだ。

だが、同じくあたしを守ろうとするアディ姫のほうが遙かに早く、強い。

あたしは彼女の胸に抱き留められ、抱きしめられる形で宙に浮いた。

動く景色。

振り下ろされる刃。

一瞬にも満たない時間の中で、アディ姫越しに目のあった黒衣の男が、狂ったような笑みを浮かべているのをあたしは見た。

――ヤダ。

全てのものが止まって見える。

そのまま止まってしまえばいいと思った。

あの刃が振り下ろされる瞬間を見るぐらいなら。

目の前で大事な人達が血にまみれるぐらいなら！

だが、絶対に動いて欲しくない『時』は残酷にも動き――

「！」

――横合いから走り込んできた青年に、勢いよく吹き飛ばされた。

「ぐぁッ！？」

全く予想外の方向から攻撃を受けて、襲いかかっていた黒衣の男はまともに吹き飛ばされた。

あたしを抱きしめたまま床に転がったアディ姫は、転がった勢いのままヒョコンッと立ち上がる。

そして――

「アルルン！？」

自分の前に立つ青年に、愕然とした顔で立ちつくした。

そう――突然横合いから出現し、黒衣の男に体当たりをしてあたし達を救ったのは、王宮に居残ったはずのアルだった。

「なんでここに！？」

上半身全部で息をしちゃってるアルは、驚愕の声をあげるあたし達をチラと見て、荒い呼吸の下で口をパクパクさせた。

ぱくぱく。

ぱく……ぱく！

……息があがっちゃって、声出せないんだな……

相変わらず体力の無い相手に、あたしはとても残念な眼差しを向けてあげた。

だが、アルの息があがってるのは、階段を上りきった勢いで体当

たりをかましたせいだろう。
きっとここに来るまでずっと、駆け通しに駆けてきたに違いない。
その心を思って、あたしはギュッと唇を牽き結んだ。
そしてアディ姫は、わずか数秒で驚愕から立ち直る。
「とにかく、質問は後！　ちょっと末姫ちゃん預かって！」
おぉう！
あたしってばアルに押しつけられちゃいましたよ！
……いやまぁ、完璧足手まといになってたから、しょーがないんだけど……
ちょっとしょんぼりな現実に、スンスン鼻をならしつつ、あたしは戦場に戻るアディ姫の後ろ姿を見送る。
ゼヒゼヒいいながらあたしを抱き留めてくれたアルは、なにか狂おしげな目でアディ姫とあたしを交互に見、すぐによろよろと廊下を歩き出した。
その方向は、アディ姫が本気モードで突っ込んでいった先と同じ。
――そして、あたし達が最初に向かおうとしていた場所だった。

「アル！　お義姉さまもシーゼルも嘘つきさんも、みんな一緒の場所にいるですよ！」
どうしてアルがその場所を知っているのかは疑問だったが、問う時間がもったいないと思い、あたしはアルの知らないだろう情報を言ってあげた。
……が、アルの答えは苦しげな笑みだ。
「……だろうな」
……『だろうな』？
キョトンとしたあたしに悲しげな目を向けてから、アルは前方の廊下で戦っているアディ姫を見る。
あたしという足手まといのなくなったアディ姫は、まさに鬼姫と呼ばれるに相応しい強さで数人まとめて叩きのめしていた。
「アディ！」

その背中に向かって、アルが叫ぶ。
近くの敵を殴り飛ばしていたアディ姫が、その声にバッと身を翻してこちらに駆け込んできた。
その姿がこちらに到着する前に、アルは近くの壁をグッと押す！
「おおっ！？」
その瞬間、ぐるんと壁が回転した。
寸前に走り込んできたアディ姫も含めて、あたし達三人は頑丈な壁の内側へと入る。
……なんと、回転する壁とは！
ビックリな仕掛けに目を丸くしていると、アルは素早く回転した先の壁にあるレバーを引いた。
ゴゴンッ、と鈍い音がして、直後に壁がわずかに揺れる。
どん！　というどこか苛立った音が直後に響いたのは、あの黒衣の男達が壁を回転させようと体当たりか何かしたせいだろう。
……では、それを止めたあのレバーは……
「……この屋敷の仕掛けは、だいたい習った」
もはや壁には何の注意も払わず、アルは険しい顔で走り出す。
その横に寄り添うようにして駆けながら、アディ姫は視線だけで話を促した。
「……あいつが教えてくれたからな……」
それが誰であるかは、問うまでもない。
「……なんで、来たの」
小さめの部屋から大きい部屋へと飛び出し、さらに駆けながらアディ姫が問う。
「王宮で守られていれば、嫌な思いをせずにすむのに！」
その、どこか痛みを堪えるような声に、アルは隣を駆けるアディ姫を見た。
――とても静かで、けれどどこか狂おしい色を宿した目で。
「……俺は、目を逸らしちゃ、いけねェだろーが」

「！」
その強い眼差しと声に、アディ姫が息を呑む。
「俺が、全部の始まりなんだ。俺がいなけりゃ、起きなかったことなんだ」
「……アル……」
「あいつが、もし、本当に今回の首謀者だったとしても……俺っていう存在が原因だったのには違いないんだ」
……誰の目にも触れていなかった、隠された『前の王様の息子』。
王族という、誰もが夢見る位を約束された、輝かしいその血統。
……もし、罪を誘う要因がどこにあったのかと問われれば、確かに、今回の場合、アルの存在そのものに違いない。
「あいつが、もし、間違いを犯したのなら……間違いを犯す原因になった俺が、安全な場所で……のうのうとしてていいはずがないんだ！」
偽王弟（アルトリート）を『信じたい』と言ったアル。
きっとギリギリまで悩み、思いつめていただろう彼。
レンフォード家に向かうあたし達を見送る時も、どこか必死な顔をしていた。
悩んで悩んで悩んで、そして、選んだ答えがこの行動だったのだ。
逃げず、
目を背けず、
耳を塞がず、
全てに立ち会おうとする——強い意志。
それはきっと、今回の騒動に巻き込まれた人々に対する、彼の真摯な気持ちでもあるのだろう。
「……アル……」
アディ姫が小さく名を呼んだ。
さきほどと同じように。

アルルン、じゃなく、アル、と。
「……あなた、やっぱり、ちゃんとした『王族』なのね」
なんだかちょっとおかしそうに、
「……ちゃんと立派な、王の血筋だわ」
けれどちょっとだけ、悲しそうに。
その相手に、アルはそっけなく答えた。
「……顔も知らない『父親』ってやつの血が、『そう』なだけだろ」
あたし達は二つ目の部屋を通り過ぎ、三つ目の部屋に飛び込む。
走りながらアディ姫は微笑(わら)った。
とても貴重な花の蕾が、ほろりと花開くような笑みで。
「違うわ。その心が、よ」
瞬間、アルの足がもつれた。
アディ姫の微笑みに目を奪われたのか、思いもしなかった言葉にビックリしたのか……そのどちらなのかは、あたしにはわからない。
ただ、足をもつらせながらもアルは転ばずに駆け、アディ姫もまた走り続けながら言葉を続けた。
「王族としての教育を受けてなくても、誰からも何も教わっていなくても……あなたにはもう、王族としての気構えができてる」
……それはきっと、上に立つ者としての資質。
「あなたの魂には、宝冠がのっているのよ」
アディ姫のその声に、アルは慌てて顔を背けた。
その頬はわずかに紅潮していたが、それ以上に厳しく引き締まっていた。
「……ンなもん、俺にはどーでもいいよ」
ただ、と呟いて彼はその瞳に力を込める。
「あいつが何かをしているなら……俺が止める」
……例え、自分の命を狙っているであろう相手であっても。
「もう……全部、終わらせるんだ」
そうして、彼は次の部屋の扉を力強く押し開けた。

25　妄執の果て

「ボクがもらって、何が悪いって言うんだ！！」
扉を開いたの同時、耳に飛び込んできた大声に、あたし達はハッとそちらに視線を向けた。
アルの先導で壁から侵入した部屋の、四番目。
そこは今までの部屋よりさらに一回りほど大きな部屋だった。
壁の色は深い蒼。柱の色は美しい白。
どこか『青の間』を応接室を模したような造りだが、部屋から感じる印象は全く違っていた。
『青の間』の精錬された美しさは、その品格の高い調和にある。
けれどこちらの部屋は、ひどくゴチャゴチャとしていた。同じような色の部屋に、高そうな家具や調度品をめいっぱい並べたような感じだろうか。それはある意味宝の山であり、そしてある意味ゴミの山だった。
その部屋に、三人の男女がいた。
壁際で蒼白な顔色をしているフェリ姫。
そして、その前で床に転がされ、上に乗った青年に首を絞められている少年――！
（シーゼル！）
アディ姫が瞬時に駆けた。
だがそれよりも早く、真っ青で震えていたフェリ姫が壁にかけられていた短剣をとる！
（お義姉様！！）
あたしは何をしようとしているのかを察して青ざめた。
白くなったフェリ姫の顔の中で、その瞳が異様な輝きをたたえている。
（ダメ！）
「シーゼルを離しなさいッ！！」

悲鳴のような声をあげて、フェリ姫は走った。
手に刃。
おぼつかない手つきのそれを精一杯突きだして！
「！」
顔をあげた青年――『アルトリート』と、苦しげな顔でそれでもフェリ姫に何かを目で訴えようとしていたシーゼルが、驚愕の表情で固まる。
そして、
「ほっ！」
アディ姫の一蹴。
それこそそこに転がる樽でも蹴り飛ばすように、彼女は青年の横っ腹をけっ飛ばした。
どがっ！　と痛そうな音がして吹っ飛ぶ青年。
そうして、駆けだした勢いのまま刃物ごと突っ込んできたフェリ姫を、アディ姫は苦笑めいた笑みを浮かべてヒョイと横抱きした。
「あっ！」
「はーいはいはーい、フェリ、そこまでよ～」
片腕で抱き上げられたフェリ姫は、驚いた顔でアディ姫を見つめ、その美しい顔をくしゃくしゃにする。
「あ、でぃ……ねぇ、さま！」
「そーですよぅ、あなたのネーサマのアディですよ～。……んん。怖かったわね、フェリ。遅くなってごめんなさいね」
「……ねぇさま！　ねぇさま！！　ねぇさまッ！！」
フェリ姫はボロボロ涙を零しながらアディ姫に抱きついた。
その手にあった短剣は、床にゴロンと転がっている。
……おそらく、アディ姫に抱きかかえられた時には、もう落としていたのだろう。
心底『お姫様』なフェリ姫には、刃なんて似合わない。
そのフェリ姫は、優しく頭を撫でてくれたアディ姫をギュッとやったあと、すぐに手を離し、パッと床に降りた。

そうして、咳き込みながらよろよろと身を起こしたシーゼルに抱きつく。
「シーゼル！」
「フェリ！」
シーゼルはしっかとフェリ姫を抱き留めた。
その顔は、よく見れば何カ所か赤く腫れている。
……殴られたのだろう。おそらく、『アルトリート』――えぇい！　なんかアルとこんがらがるから、『偽王弟』でいいや！　――から大切な人を守ろうとして。
「くそ……おまえ、たち……よくも……」
その偽王弟が、蹴られた腹を押さえながらふらりと身を起こした。
アディ姫と二人の少年少女は身構える。
そして、そこにあたしを抱えたアルが歩み寄った。
「……アルトリート」
「！」
アルの声に、もう一人の『アル』でもある偽王弟はギョッとした顔になった。
自分達の喧嘩（なのかな？）に夢中で、あたし達が隣の部屋からやって来たのに、まったく気づいていなかったようだ。
「なんで……どうやって、ここに来た！？」
かつて王宮であたし達に披露した『腰の低い青年』っぷりなどどこへやら、目を剥いて怒鳴る偽王弟に、アルは悲しげな目になる。
偽王弟を信じたいと言っていた彼。
……けれど、現実は、いつだって冷たくて残酷なのだ。
「……ここの隠し通路や仕掛けを教えてくれたのは……お前だろ？」
「！！」
その時の偽王弟の愕然とした顔に、あたしは（あぁ、そうか）と悲しく納得した。
……彼は、そんな過去なんてもはや忘れ果ててしまっているのだ。
かつて自分が過ごしてきた時間の中で、共にあった自分によく似

た従兄弟との間に、確かに築いてきたであろう暖かいものを。
「……なにやってんだよ……」
感情を抑えようとする静かな声で、アルは言った。
「なにやってんだよ……！　おまえは！！」
その掌が抱き合う少年少女を示す。
「おまえの弟だろ！？　おまえの義理の妹になる奴だろ！？　なんでこんな所で、あんな風に！　怯えておまえを見てるんだよ！？」
「うるさい！」
アルの悲鳴にも似た声を鋭く塞いで、偽王弟は甲高い声で怒鳴った。
「おまえがボクに何を言う気だ！？　本来なら、馬番だったおまえにボクと話す権利なんて無いんだ！」
「アルトリート！」
「呼ぶな！！」
アルの叫びに痛みの混じる声で叫び返し、偽王弟はひきつった顔でアルを睨み据えた。
「おまえが……どうして……ッ」
よろめくように半歩後ろに下がり、ぐ、と踏みとどまって相対する。
瞳の中に、悲痛な狂気が揺れる。
「どうして、おまえだけが……！？」
その目はこの場の全てを無視し、ただアルだけに注がれていた。
「なんでおまえだけが、王族と認められるんだ！　何の教育も受けてこなかったおまえだけが！」
「……アルト……」
「呼ぶなッ！！」
呼びかけを激しく拒絶して、偽王弟は叫んだ。
「どうしてだ！？　おまえとボクの間に、いったいどれだけの違いがある！？　同じく片親が王族で、同じく王族外の人間として育てられた！　ボクのほうが恵まれていたはずだ！　少なくとも、屋敷

の中で育てられたのは、ボクの方だった！」
あたしは目を見開く。
……この人は……
「王族としての教養も、武術も、習うべき礼儀作法も！　全部教えられたのはボクの方だった！　おまえはずっと、ただの馬番としてこきつかわれてきただけだった！　ずっと……根っこは同じ立場だったのに！　ずっとだ！！」
悲痛な色が混じる声で叫んで、ただ彼はアルだけを見る。
何年も何年も、同じ境遇だと思ってきた相手を。
「だから、ボクはお前に力を貸してやったんだ！」
……けれど、その根っこのところでは、所詮は馬番の血と見下げていた相手を。
「それなのに、そのおまえが、ボクよりも高い位にある、だって？」
そして、決して『同じ境遇』などではなかった相手を。
「ボクがアイツと比べられながら必死で勉強してる間、ただ馬の世話だけしてたおまえが！？」
「……」
アルは答えない。
ただ、驚きと悲しみに目を瞠り――ゆっくりと、細い息を吐いた。
まるで何かに……静かに別れを告げるように。
「そんなの、許されるはずがない！　こんなこと、許されていいはずが無いんだ！！　同じ、王族の血を引いているっていうのにッ！！」
……その声と、言葉だけで……彼が、何を思って今回のことを引き起こしたのか、わかるような気がした。
嫉妬だ。
決して他に『認められない』自分と違い、突然、何よりも欲した『王家の一員』として認められたアルに……彼は嫉妬したのだ。
「……そう、あなた……ただ、それが許せなかった、って……それ

だけだったの」
美しい顔から表情を消して、アディ姫は冷たい眼差しを偽王弟へ向ける。
あたしを抱えているアルは、苦しげな顔で唇を引きむすんだ。けれど俯くことも、目を背けることもしない。
彼は宣言通りに、きちんと真正面から全てを見据えているのだ。
「ただそれだけのために……こんな馬鹿げたことをしたの」
アディ姫は、右手側にフェリ姫達を、左手側にあたし達を庇うようにして、一歩、力強く踏み出した。
偽王弟は弾かれたように彼女を見る。
「馬鹿げたこと、だって!?」
「あら、そーでしょぅ?」
冷ややかに嗤って、アディ姫は相手を睥睨（へいげい）する。
「自分が認められないのが悔しくて、自分以外が認められるのが妬ましくて……おまけにそれが、自分と同等以下だと思ってたトモダチだったから、腹が立ってしかたがなかった、って……ただ、それだけだったんでしょう?」
「!?　おまえ……アデライーデ姫……!?」
そこで初めて相手が誰かに思い至ったらしく、偽王弟に動揺が走る。
（……気づいて、なかったんだ……）
目の前にある光景すら、まともに把握できないほど……彼は、正気を失っているということだろうか?
アディ姫はそんな相手をことさらわざとらしく見下し、傲然と胸をはった。
「えぇ……ナスティア王国第十王女、アデライーデ・ギゼラ・エーレンベルク・アルヴァストゥアル。あなたが認めてもらいたがってる『王家』に、ずっと前から認めてもらっている娘よ」
アディ姫の言葉に、偽王弟の顔がさらに歪んだ。
王家の血を引いていながら王家に認められない彼にとって、その

言葉はどれほど憎らしい言葉だったろうか。
だが、アディ姫はそんな相手の気持ちなどくんだりしない。
冷然と、激しい怒りすらその目にこめ、ふんぞりかえって見下した。
「ずいぶんと雰囲気違ってるわねェ、偽王弟さん？　気配からして違うもんだから、さすがのあたしも、ちょーっとビックリしちゃったわよぅ？」
？
気配が違うのか……？
あたしはアルの腕の中でキョトンと首を傾げる。
……そーいや、なんか、受ける印象が前と全く違ってるな。
「……貴様……」
そんな『気配すら違っちゃってる』偽王弟は、腹を押さえたままどす黒い目でアディ姫を睨んだ。
アディ姫はことさら冷ややかに嘲笑する。
「あら、貴様呼ばわりなわけ？　たかだか前王女の私生児風情が。あたしとあなた、現在の身分は、圧倒的にあたしの方が高いんだけど？」
「黙れ！　この、下賤民が！」
叫んで、偽王弟も一歩を踏み出した。
「王家の血もひかぬ者の分際で、王族の名を使うなど、許されると思っているのか！？」
「……」
「魔物の群を退けた英雄ナスティアの血は、ボクの中にも入ってるんだ！　貴様らのような、ただ守られ、ナスティアの情けで平和を与えられた連中の血とは違う、気高いの血が！」
「……」
「王族を名乗ってもいいのはボクの方だ！　ボク達こそが王の血を引く者なんだ！」
血走った目でアディ姫を見る偽王弟に、あたしはわずかに眉をひ

そめた。
彼の妙にイッちゃってる言葉は、しょーじき、マジメに聞くにも値しないような内容だった。
だが、その言葉も、そしてアディ姫を睨み据える目も……なにか、ここにはいない誰かに向かっているような……そんな感じがした。
（……『誰に』……？）
そのことをアディ姫も感じたのだろう。
彼女は心底軽蔑しきった目を偽王弟に向けながら、ほんのわずか、眉をひそめていた。
「……あなた、誰に、何を言われたの」
「……」
ふいに偽王弟が口をつぐむ。
「……誰に、そそのかされたの」
「そそのかされてないんていないさ！」
しかしすぐにその口は甲高い声をあげた。
「アッハ！　このボクが、他の連中の言うことを聞くと思ってるのか！？　王の血筋であるボクが！？」
「……知らないのね、あなた」
どこか疲れた口調で、アディ姫は呟く。
「矜持の高すぎる人間は、それを上手に利用されてしまうんだってこと」
「利用するのはボクの方だ！」
完全にイッちゃってる目で、偽王弟はアディ姫を睨み、その斜め後ろのアルを見る。
「クリス！　おまえ、言ったよな！？　協力してくれるって！　ボクのために、力を貸してくれるって！！」
アルは答えない。
ただ、痛みを堪える目で唇を引き結ぶ。
「王族とかには興味ないって！　自分はそんなもんじゃない、って！　そんな気概のない、母様達の希望にも答えられないおまえにか

わって、ボクが立ってやってるんじゃないか！！」
フェリ姫とシーゼルがアルを見る。
アルはそれでも、何も言わなかった。
ただ、悲しみを堪えて偽王弟を見る。
「おまえもそれを承諾しただろうが！！」
偽王弟の言葉に、けれど、アディ姫は振り向かなかった。
ただアルの斜め前に立ち、その背であたし達を庇い、ただひたすら偽王弟と対峙する。
振り向かないのは、振り向く必要が無いからなのか。
……それとも、最初から、投げつけられる言葉を予想していたのか。
「ボクが利用するんだ！　ボクが利用して、手に入れるんだ！」
どこか正気を失っているように聞こえる声に、あたしは眼差しを細める。
「地位も！　権力も！　名誉も！」
……そんなものに、いったい、何の意味があるのだろうか。
今まで築いてきた絆のようなものすら捨て、信じてくれている人を陥れてなお、手に入れないといけないものだったのだろうか？
人と人との絆というものは、決して疎かにしてはならない、死して尚持ち続けることのできる宝物だというのに。
……何故、彼は……そんなことすら、見失ってしまったのだろうか？
妄執の果てに、破滅しか無い未来を手繰り寄せて――

「無理よ」
ひどく遠い場所にいるように見える相手に、アディ姫は嘆息混じりに言った。
「……あなたには、無理だわ」
アルがたまりかねたように顔を歪める。
そう……無理なのだ。

そもそも、最初から無理のある話だったのだ。
「最初から……王弟を名乗るなんて、無理な話だったのよ」
「そんなことはない！！」
「……いや、無理だったんだ……」
弾かれたように叫ぶ偽王弟に、アルは深い悲しみを堪えた声で言った。
「……初めから、成功なんてするはずがなかったんだ」
偽王弟はアルを見る。
その瞳に、いっそうの狂気が沸き上がった。
「……おまえが、裏切ったからか」
「違う！」
「じゃあなんでそこにいる！？」
指を突きつけられ、アルは唇を噛む。
偽王弟は叫んだ。
「なんでそいつらと一緒にいる！？　なんで名前だけの王女や、あの断罪官が一緒にいたりした！？　おまえが裏切ったんだろう！？　やっぱり王族の名が惜しくなって、のこのこと名乗り出てみせたんだろう！」
「違う！！」
アルは叫んだ。
「最初から、嘘なんて通じるはずがなかったんだ！　陛下は、全てを見通す紋章を持っているんだから！！」
「真実の紋章は、虚無の紋章で相殺できる！　おまえが持ってる虚無の紋章と、おまえがボクに与えた虚無の紋様で、ボク達の間にある嘘は見抜けなくなるはずだったんだ！！」
「光と闇の紋章があってもか！？」
偽王子の声に、アルは痛みを堪える顔で叫んだ。
「精神の光と、肉体の闇の紋章が揃ってるなら、真実の紋章を打ち消しても意味は無いんだ！　心をのぞける光の前には、どんな嘘だって通用しない！　全ての血肉を司る闇の紋章の前には、血統の虚

偽なんて意味をなさないんだ！！」

「……そんな……」

「最初から、成功なんてするはずがないんだよ！　嘘なんて、通用する相手じゃないんだ！！　だって、そうだろう！？」

ふらりと一歩を踏み出したアルの腕の中から、あたしはストンと地面に落下する。

アルは両腕をわずかに折り、偽王弟へともう一歩を踏み出した。

「……あの人達こそが、女傑ナスティアの正統な継承者だ。暁の賢者の後継者だ！　全ての重責も、全ての苦痛も、悲しみも！　なにもかもを背負って立ってる人達なんだ！」

「クリス！」

「王族の名を背負えるのは、俺達なんかじゃない！」

『王族』という、例えようもなく煌びやかで、

例えようもなく重く虚しいその王冠を――

「背負って立てるほど、俺もおまえも、強くないじゃないか！！」

誰よりも美しく気高く力強い『女王』が、どれほどの努力をしてこの国を背負っているのか、アルはもう知っている。

例え全てを知ってはいなくても、垣間見たその姿に、その力に、彼はすでに膝を屈し、認めていたのだ。

間違っていた自分に。

そして、王族の血や名前を……軽々しく考えてはいけなかったということを。

「俺達は、軽く考えすぎてたんだ。王族の名っていうのがどういうものなのか、王族っていうのがどんなものなのか……！　誰かに渡せるものでも、誰かから譲られれるようなものでもなかったんだ！

それができるのは、唯一、この世で陛下唯一人だったのに！」

「じゃあ、なんで王族の血をひかない王女が山ほどいる！？」

偽王弟をあたし達を睨み、鋭く指で指し示す。

「なんでそいつらがいるんだ！　何人も、何人も！」

「陛下が望まれたからだ！　陛下だけがそれを決められるんだ！　それ以外の者が、どうにかしていいもんじゃないんだ！！」
「ふざけるな！！」
叫び、大きな身振りで何もない空間をなぎ払って偽王弟は叫んだ。
「今更言うか！？　今更ッ！！　もうボク達は動いたんだ！　勝たなきゃ終わりなんだよ！！」
「勝たなくていいんだよ！！」
アルはさらに一歩を踏み出して叫ぶ。
「……もう、終わりなんだ。終わりにしなきゃいけないんだ、アルトリート」
「……おまえ……」
偽王弟が驚きと、それを遙かに超えた憎しみでアルを睨み――

「それは……」
もう一歩を踏み出したアルの、その手が懐から取り出したものに、愕然と立ちつくした。
小瓶だった。
掌に隠れるほどの小ささの、中に透明な液体の入った瓶だった。
「！　アル！？」
嫌な予感を感じたのか、アディ姫が思わず振り返る。
「終わらせるんだ」
「アル！」
見たこともないほど切羽詰まった顔でアディ姫が手を伸ばす。
だが、その手よりも早く、アルは小瓶の中身を口にあて、ぐいと仰向いた。
「アル！！」
アディ姫の悲鳴が部屋に響いた。
空になった小瓶が床に落ちる。
その両肩を掴んで、アディ姫が大きく揺さぶる。
「吐いて！　吐きなさいよバカ！！」

首を振り、叫ぶその激しい動きに、アディ姫の瞳から涙が飛んだ。
それはどこか美しい宝石に似て、硬直していたあたし達の呪縛を解き放つ。
「アル！」
あたしは走った。わずか数歩の距離を。
そして、
「……ぁ……？」
アルが、愕然とした顔で口を開いた。
その顔色は先程とまるで変わらず、その目の前にいるアディ姫も、涙に濡れた目を大きく見開く。
その二人の間に――――小さな水の珠が浮いていた。
アルの口からぽろっと出てきた、小さな小さな水の珠が。
「……皆様方には、決して動かれませんように」
ふいに静かな声が、時が止まったようなその場に流れた。
感じるこの上なく馨しい匂い。
胸が熱くなるほど、強く深い気配。
「女王アリステラ陛下の名の下に、この場全ての権限を担わせていただきます」
あたしは声の聞こえたほうをパッと振り返った。
あたし達の左側。
夜空が広がる窓の方。
そこに、いくつもの水の塊を従えたレメクが立っていた。
「おじ様……！」
動くなと言われたというのに、あたしは反射的にレメクに飛びついていた。

レメクは小揺るぎ一つせずにそれを受け止める。
今まで外にいたせいでかちょっぴり冷たい服に張り付くと、目眩がするほど素晴らしい匂いがした。
「……少し、傍を離れてしまいましたね」
ええもぅ！
イロイロと心配したってなもんですよ！！
あたしはギューとレメクに張りつき、ピスピス鼻を鳴らしながらレメクを見上げた。
「おじ様、あの腹の立つ礼服のおっちゃんは？」
レメクは答えない。
ただ、あの時と同じウツクシクテコワイ壮絶な笑みを浮かべた。
……いやもう、それだけで答えがわかっちゃうってもんですよ。
「……さて」
その笑みを消し、けれど迫力だけはそのままに、レメクは悠然と硬直する人々に歩み寄る。
その周りにある水は、いくつかは未だに鋭い剣のまま、けれどその大多数は大小様々な水玉に変わっていた。
なんだかそれに囲まれているレメクは、ちょっと人じゃないっぽいぐらい、綺麗でカッコ良かった。
「……殿下。早まった真似はなさいませんように」
レメクは軽く手を伸ばし、アルに向かってそう声をかける。
アルとアディ姫の間でふよふよ浮いていた小さな水の塊は、レメクの伸ばした掌の上に飛んできた。
まわりに浮いている水と同じように見える、小さな水の塊。
……けれどそれは、ゾッとするほど嫌な気配をもっている。
「……自らの死をもってしても、他人の罪は償えません」
「！」
アルは激しく動揺する。
反射的に逸らした瞳が、ちょうど愕然と佇む偽王弟をとらえた。
「「……」」

二人は互いに見つめ合う。
けれど……その瞳にある色は、もう、互いを理解しあえないほどに、違っていた。
「……アルトリート・ジュダ・フォルスト・レンフォード」
レメクが感情の無い静かな声で偽王弟の本名を呼ぶ。
ハッとなって顔を上げる相手に、彼は抑揚のない声で告げた。
「……私が来たことの意味は、お分かりですね？」
断罪官。
この国の全ての人を裁く権限を持つ、唯一の人。
国王ですら裁ける彼に、裁けない相手はいない。
よろめくようにして後ろに下がった偽王弟に、レメクはもう視線を向けない。
軽く振り返り、アルとともにいるアディ姫に目配せした。
「捕縛を。……全ては、陛下の御前にて」
「……御意」
恭しく一礼し、アディ姫は姿を消す。
次の瞬間、そのしなやかな体は偽王弟のすぐ後ろに現れ、気づくこともできない相手の首筋に鋭い手刀を叩き込んだ。
「アルトリート！」
ぐらりと前のめりに倒れる偽王弟に、クリストフが弾かれたように駆け寄る。
だが、偽王弟の傍に寄ることはできなかった。
厳しい表情をしたアディ姫に、その前に立ち塞がれたからだ。
「アディ……」
「……ダメよ」
静かな声でアディ姫は言う。
その目には、まだ涙の欠片が浮いていた。
「……」
アルはその目に「どけ」とは言えず、ただ、苦しげな顔で倒れ伏す偽王弟を見る。

「……俺が、歪めたんだ……」
ゆっくりと集まる人々の視線を受けたまま、彼は悔しげに声を絞り出した。
「俺が、全部の始まりじゃないか……！」
あたしはその悲しい背中に唇を噛む。
ジッとその背中を見つめていると、ふいに頬になま暖かいものを感じた。
「の！？」
微妙に湿った暖かさ。
何事かと振り向くと、小さくて愛らしい鼻がそこにあった。
（……鼻！？）
黒い鼻。
黒い毛。
青い瞳。
完璧以上に整った愛くるしい顔に、素晴らしく美しい毛並み、しなやかかつ愛らしい体躯。
生まれて一ヶ月未満ぐらいの小さな子猫が、レメクの肩から身を乗り出すようにしてあたしのすぐ傍にいいた。
「……猫？」
あたしの声に思わずこちらを見たアディ姫が、何故かものすごく訝しげな顔で子猫を見る。
腕で乱暴に自分の顔を拭ったアルはというと、悲しみを湛えた瞳でこちらを振り向き、
「……あぁ」
なんだ、あんたか、と言いたげな顔で子猫を見た。
子猫はどこか満足そうにニュッとヒゲを前に向ける。
そのそこはかとなく意地悪な表情に、あたしその子猫の正体に思いいたった。
「ポテトさん！？」
「「ええッ！？」」

アルとレメク以外の三人から驚愕の声が放たれる。
美しい子猫はご満悦な顔でヒゲをそよがせると、つんと顎をあげて口を開いた。
「さすがはお嬢さんです」
……喋った!?
「この私の完璧な人外分身を見て、即座に私と気づくとは」
「……つーか、何一つ変わってねぇじゃねーか……」
なんかアルトリートが不思議そうな顔で言う。
その目が赤いことに気づいたが、あたしは何も言わなかった。
猫ポテトさんは形の良い耳をピコッと後ろに向けると、アルにむかってこれみよがしなため息をついてみせた。
「『龍眼』のあなたには全部『私』に見えるでしょうけど、他の人には愛くるしい子猫に見えるんですよ。そもそも、ぬいぐるみに魂移してるんですから、私が人型で見えるほうがおかしいんです」
……猫もため息つくんだな……
……いや、猫じゃないけど。
「……てことは、アル……あなたの目には、あれ、まさか、侯爵の肩にロードが乗ってるよーに見える……わけ?」
「……つーか、ふつーに、横に立って肩に腕のっけて、ヤな笑み浮かべてるっつー姿だけどよ」
「あ、あぁ! そーなの。なーんだぁ……そーなのー……」
「……まて。なんだおまえ、その途方もなくガッカリな顔は」
ちなみに、シーゼルの腕の中にいたフェリ姫も、ものすごーくガッカリした顔をしている。
……彼女等はいったい、レメクとポテトさんにどんな姿を希望していたのだろーか……
「……まぁ、面倒みるって言ってたのにアルルンがこっち来ちゃってるから、ロードもどっかから何かしてるんだろーなーとか思ったけど……」
「ふふふふ。さすがの賢者姫も、私がこんな手段で来てるとは思

わなかったでしょう！」
「……というか、そういう、お伽話でお約束な姿になるとは思わなかったわ……」
ピン、としっぽを立ててご機嫌顔のポテトさんに、アディ姫は呆れたような感心したような顔で言う。
ポテトさんはしっぽピーンの姿のまま、ヒゲをそよそよとそよがせて見せた。
……なんか誇らしそうだな……
「てゆか、危険なのに、なんでアルを自由にしちゃったの？」
あたしの問いに、しっぽピーンのままでポテトさんは答える。
「あのまま王宮に龍眼くんを監禁してもよかったんですけどね。ちょっと精神的に危険な状態でしたので、まぁ、荒療治みたいな気分で『心のままに動きなさい』と言ってあげたわけですよ」
「……お義父さん……」
「で、そのまま放置だと、そこらへんでしつこく狙ってるお馬鹿さんにサクッと殺されちゃいますからね。私の一部をこうして人形に移して護衛させてもらったということです。まぁ、目くらまし程度の術しか使ってませんが、そのおかげでここまで誰にも邪魔されずに走ってこれたというわけです」
「……なるほどねぇ」
アディ姫はアルとポテトさんを見比べて頷く。
あたしにはちょっとイマイチわからない所が色々あるのだが、アディ姫はあれだけで全部納得しちゃったよーだ。
……あとで説明してもらおう。
「おやおや、簡単ですよ、お嬢さん。なんで自分達の所にワラワラ出てたアヤシイ男達に、龍眼くんが見咎められなかったのかなー、というのに納得したってだけです」
……おとーさま……人の心を読んじゃダメなのです……
「読んでませんって。あなたの考えることは分かりやすいんですよ。今も。ホラ、今も。……で、まぁ、屋敷の途中までご一緒したので

すが、どーもレンさんが面白いことを……いや、なにか大変なお怒りモードになってるようですから、ちょっと熱を冷ましに行こうと別行動をとらせていただきまして」
「……いきなり顔に猫が張り付いてきた時には、ベルが変身でもしたのかと思いましたが」
……ひどッ！？
「残念！　変身したのは私でした！！」
「……頼みますから、ベルみたいな真似はしないでください。誰にでも飛びつかれていいというわけではないんですから」
「おやおやおやおやおやおやおや」
ニヤニヤ笑いを浮かべて、ポテトさんはレメクとあたしを見る。
あたしは猫のニヤニヤ笑いという珍しい笑みに、しげしげとポテトさんを見つめてしまった。
「……おじょーさんは、もう少し、言われた言葉の意味を深く深く考えるようにしましょうね？」
ん？　なんか今、窘められちゃった？
キョトンと首を傾げるあたしにアディ姫が苦笑し、そうして少しだけ気が抜けたような嘆息をついた。
「……とりあえず、ひとまずは一件落着？」
「まさか」
ややも気が抜けているあたし達に、けれどレメクは静かに「否」を出す。
「これからが本番ですよ」
「……裁判は、侯爵や裁判官達の仕事でしょ？」
「もちろん、裁判のこともありますが」
言って、レメクは倒れたままの偽王弟を見た。
「面倒な人が控えていますからね。そちらにちょっと話しをつけてこないといけません」
「面倒な人……？」
ポテトさんの素敵なおヒゲにジッと視線を注いでいたあたしは、

レメクの声に顔を上げる。
彼は薄い笑みを浮かべて言った。
「……少なくとも、公爵夫人は色々と騒ぎ立てるでしょうからね」
……あ！
偽王弟のお母さん！！
「賓客の多い王宮でやられてはかないません。私はそちらに行ってきますから、アデライーデ姫、それから、ナザゼル王妃。年少組の保護をお願いいたします」
「あいさー」
「承知した」
アディ姫の返事とほぼ同じタイミングで、色っぽい声も「応」を返す。
声と同時に何もない空間から現れた美女に、フェリ姫とシーゼルがビックリして目を瞠った。
「アルティルマの王妃！？」
「ナザゼルお義姉さまままでいらっしゃってたの！？」
「うむ。おったのじゃ。……したが、ちとやっかいなのと対峙しておったから、あまり役にたてなんだのぅ」
「……アレを押さえていてくれただけで、かなり助かりましたが」
「んふふふふ」
どうやらあたし達の知らない所で知らない戦いがあったらしく、労うレメクの声にナザゼル王妃は嬉しそうに微笑んだ。
「自分だけが突出して強い、というわけではないのは、困るようでもあり、嬉しいことでもあるのぅ。久方ぶりに妾の血が騒いだぞ」
「……また動きがあるようでしたら、お願いするかもしれません」
「ふっふっふっふっふ。任せるがよい。そこそこの報酬で引き受けてしんぜよう」
無料でいい、とは言わないあたり、さすがは暗殺が金儲け手段であった国の王妃だった。
そんな面々を軽く眺め、レメクは「さて」と呟いてあたしを見る。

「？」

反射的にキュッとレメクに抱きついたあたしに、彼は少しだけ優しい顔で笑った。

「ベル。私は公爵夫人と話をつけに行ってきますから、あなたは皆と一緒に先に帰りなさい」

「……おじ様は、大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

彼は柔らかく微笑む。

それは鬼モードの時とは全く違う、本当に暖かくて優しい笑みだった。

「……お屋敷、こんなにしちゃったけど、怒られない？」

「……彼等がしてきたことを考えれば、お家断絶のうえ、当主クラス全員の首を城壁に並べてもかまわないぐらいなのですよ」

それを考えれば、家屋敷の一つや二つ、と言うレメクに、あたしは思わずシーゼルを方を見てしまった。

シーゼルは、強ばった顔ながら、強い決意を秘めた目でしっかりと頷く。

「……今度のこと、重く受け止めています」

「……よい覚悟です」

それに優しい目で頷きを返してやってから、レメクはあたしをソッと床に降ろした。

あたしは一瞬レメクに飛びつきかけ——けれど我慢して、かわりにレメクの肩に乗ったままのポテトさんを見上げる。

「おとーさま！」

「……わかってますよ」

眼差しを柔らかく細めて、猫ポテトさんはしっぽでピタンとレメクの肩を叩いた。

「レンさんの監視は承りました」

「……私の監視なんですか……」

「お願いするのです！」

「……お願いされるんですか……」
なんかレメクがちょっとしょんぼりな顔になったのだが、その理由は果てしなく不明だ。
あたしは苦笑しながら近づいてきたアディ姫に抱えられ、そうして未だ暗い色を瞳に宿しているアルにムギュッと押しつけられた。
「ほら、アルルン。末姫ちゃんだっこして。……そっちのロクデナシはふんじばって、他の人達に見られないうちに王宮に連れて行きましょう」
パンパンと肩を叩かれて、数歩たたらを踏んだアルが腕の中のあたしを見る。
あたしはそれを真面目な顔で見上げて、うん、と頷いてみせた。
「帰ろう、アルルン」
王宮に。
未だに全く馴染めてはいないけど、それでも『家族』と言える人達がいる場所に。
……もう一つの『家族』のいる場所には、もう、なかなか帰ることはできないだろうけれど。
アルは空虚な色の目を何度かしばたかせ、そうして、悲しい微笑みを浮かべて頷いた。
ほんのちょっと苦笑じみた声で言う。
「……アルルンって言うな」
雄叫びでも喝采でもなく、その苦笑混じりの一言が、レンフォード家での戦いの終わり告げる声だった。

25　妄執の果て（後書き）

※ポテトの分身について、誤解しか与えない書き方がありましたので、修正いたしました。
修正箇所「変化分身」→「人外分身」

26　死をもって償うもの

気絶した偽王弟（アルトリート）を縛って衣装籠に詰め、未だ騒がしいレンフォード家を後にして小一時間。

後宮の一室に顔を揃えたあたし達は、手みやげのごとき衣装籠を厳しい表情で囲んでいた。

集まっている面々は、総勢八名。

時計回りに名前を挙げていくと、アウグスタ、ヴェルナー閣下、見知らぬおっちゃん、どっかで見たおっちゃん、どっかで見たにーちゃん、フェリ姫、シーゼル、そしてあたし。

それぞれがキビシー表情を崩すことなく、中央にデンと置かれた衣装籠を睨んでいる。

衣装籠の上には、何枚かの羊皮紙。

そこにはキタナイ文字がのたくっているが、断じてあたしが書いたものでは無い。

なぜならあたしが書いた文字なら、必ず斜め上に歪んでいくからである！

……ごほん……

それはともかく！

そのキチャナイ羊皮紙の下には、一カ所だけ綺麗な文字の場所があった。

そこに書かれている文字こそ『アルトリート・ジュダ・フォルスト・レンフォード』。

『アルトリート』が暗殺集団を雇っていたという、確かたる証拠だった。

（……てゆか、ナザゼル王妃……どこにいたのかと思ったら、こんなのも探してたんだな……）

あの大騒ぎの中で。

……まぁ、おかげで突入のイイ口実になったりと、いろいろお役

立ちだったのだが……

（……その途中にスゴイ強い人とバッタリ出会うってことは、そーゆー、お役立ちアイテムの所には、ドラゴンみたいな番人がいるってゆーことなのかな……）

そのナザゼル王妃は、これはナスティアの問題だろうから、と城に着く寸前に姿を消した。

実はコッソリ部屋の隅っこにいたりしないかナ？　とか思ったのだが、匂いすらしないところをみると、本当に姿を消したようだ。

……大人というのは、いろいろムズカシイものである。

（……一緒にいたって、いいと思うのに……）

あたしはぼんやりしてきた視界をゴシゴシ擦って、一生懸命目をカッぴらいた。

白さが眩しいお部屋の中で、皆はキビチー顔で緊張感を漲らせている。

そんな中、一人コックリコックリするわけにはいかないだろう。

少々オネムなのを堪えて、あたしは一生懸命にマジメな顔を作り続けていた。

下手するとフッと意識が途切れそうになるが、そこをグッと我慢するのがオトナのオンナである！

「……いやはや……」

……こっくりこっくり……

「……これほど愚かな反逆者は、いったい何十年ぶりでしょうな」

深い深い嘆息をついて、見知らぬおっちゃんが重低音を響かせる。

どっしりと腹に響くその声は、どことなくバルバロッサ卿に似ていた。

年の頃は六十かそこらだろう。真っ白な髪はフサフサで、その体は厳のように大きく立派だ。

おっちゃんは立派な顎ヒゲをごりごり撫でながら、盛大なため息をついた。

「……しかも、マルグレーテ殿下のご子息であられる、と……」

「さて……これを知った叔母上はどうされるかな？」
ニヤリと口の端に笑みを浮かべて、アウグスタは籠を冷ややかに見下ろした。
「文句だけは盛大に言ってきそうだが、まぁ、レメクが相手では舌戦で勝つことも難しかろうよ」
そのレメクはというと、まだ王宮に帰ってきていない。
おっかないオバチャンがギャンギャン言ってて帰れないのだろーか？
（そゆときは猫ポテトさんががにくきゅーぱんちするのがヨイのですよ……）
あたしは前後に揺れる視界を必死に固定しながら、（アルはどうなるんだろー？）とぼんやり思った。
城に到着した時、死にそうな顔色になっていたアル。
アディ姫に引きずられるようにして別室に連れて行かれたが、ちゃんと休んでいるんだろうか？
……無理をして、ここに来ようとしていないだろうか？
「そういえば、レンフォード公爵はいかがいたしましたかな。こちらの方の、義理の父親殿は」
どっかで見たことがある渋いおっちゃんが籠を顎でしゃくり、ヴェルナー閣下が皮肉な笑みを浮かべる。
「領地から一歩も出ておいでではありませんが……先程急使を走らせましたので、まぁ、何日かすれば到着するでしょう」
「……ふん。全てが終わってから来る腹づもりやもしれませんな」
野太い声でそう言って、白髪のおっちゃんはフンと鼻息を吐いた。
あたしはネムネムなままその人をジーと見上げる。
目があって、おっちゃんはぶっとい片眉をひょいと上げた。
「……末の姫君は、就寝時間でいらっしゃるのではないかな」
おー……なんか表情がバルバロッサ卿そっくりだ。
「……そうだな。ベル、おまえはもう休むがいい」
横にいるアウグスタに言われて、あたしはジーとアウグスタを見

上げた。
「……おまえ、立ったまま寝たりしてないか？」
起きてますとも。
アウグスタが三人に見えたりしていやしませんとも！
「……寝ろ。ちゃんと」
アウグスタのしなやかな手が伸びてきて、あたしをひょいと掴み上げる。
「誰か！　ベルを……」
「だめらのれす！　ポイはだめなのれす！」
そのままどこかに運ばれそうになって、あたしは必死に暴れた。
「おじしゃまがくりゅまで、まってるのですぉ」
掴み上げるアウグスタに向かってぱたぱたと手を振り、あたしは必死に居残り希望をアピールした。
本当はぺちぺち叩きたかったのだが、残念！　手が届きません！！
「ちゃんとまって、おかえりなさぃを、ゆーのですよ！」
アウグスタは呆れ顔だ。
「……おまえな……んなネムネムな状態で無理してたら、レメクが怒るだろーが……？」
「まつのがちゅまのやくめなのれす！」
「……いやもう、カワイイから許すがな……」
あたしをムッチリに閉じこめて、アウグスタはあたしの背中をポムポム叩いた。
おお！　素晴らしい心地よさ！
ポムポムの振動すら眠気を引き上げる！！
しかも偽乳が生乳っぽい弾力になってるぞ！？
「……さて、話しを元に戻すが」
頭を切り換えて皆に語りかけるアウグスタの腕の中、あまりの心地よさに危険を感じて、あたしはモゴモゴ動いてアウグスタの胸に後頭部を預けた。
……ああっ！　こっちでも心地よいッ！！

「……この若造に関しては、証拠が揃っておる。言い逃れが出来ぬほどの、な」

ホワンホワンしているあたしをさておき、他の人々の視線はもう一度籠へと集中した。

渋い顔の一同を代表して、ヴェルナー閣下が深いため息をつく。

「王家の血を引いていらっしゃるとはいえ……」

「……これは、あきらかに重罪ですな」

「左様」

ヴェルナー閣下、渋いおっちゃん、白髪のおっちゃんの順に声を発して、最後にどっかで見たにーちゃんが嘆息をつく。

「契約書は全部で二つ。リウトプランド、アーグゼレン。……いずれも、近隣では有名な暗殺集団です」

「二つも揃えるとは……いやはや、ずいぶんと手の込んでいらっしゃることですなァ？」

「……資金はどこで得ていらっしゃったのやら。なにやらきな臭いことです」

淡々と書類らしきものを読みあげるにーちゃんに、嫌味な笑みを浮かべる白髪のおっちゃんと渋いおっちゃん。

あたしは頭の後ろに感じるモチモチモッチーに沈みながら、そんな三人をぼんやり眺めた。

……てゆか、あの三人、名前なんてゆーんだろ？

「ラウロ、バルバロッサ侯爵、バルダッサーレ公爵。揃えられた物騒な集団に関して、貴殿等の意見は？」

ラウロと呼ばれたにーちゃんは、アウグスタに一礼してから言った。

「……マルグレーテ様のご子息が、レンフォード公爵に多額の借金を作っていらっしゃる、という話は聞いたことがあります」

「……まぁ、悪所にたびたび姿を見せていた、ということも聞いておりますな」

白いヒゲをごりごり撫でながら、バルバロッサ侯爵と呼ばれた白

髪のおっちゃんもどっしりと呟いた。
……そーか。似てると思ったら、バルバロッサ卿の家族だったのか……
「レンフォード家も監督不届きで処罰されるべきでしょうな。現当主どのには、そのあたりをきつく申し上げなくてはなるますまい」
四十ほどの渋いハンサムおじさんはそう言い、「……もっとも」と、同席しているシーゼルに静かな眼差しを向けて言葉を続けた。
「……伯爵は、王女殿下をお救いくださったうえ、ご家族を諫めようとしてくださった。その件を考慮し、伯爵に関しては処罰は軽くしても良いかと」
「……いいえ、バルダッサーレ公爵……」
フェリ姫の隣で、シーゼルは白い顔色のままゆっくりと首を横に振った。
「不穏な動きを察しながらも、これほどの惨事を引き起こしたのは私の力不足によるものです」
「しかし……」
「……他家のご随従の方々には、亡くなられた方もいたと聞きます」
言いかける渋いバルダッサーレ公爵の声を遮って、シーゼルは真っ直ぐな眼差しで相手を見据える。
「……処罰は、どうぞ、均等に。後に禍根を残さぬよう、お願いいたします」
そう言って静かに頭を下げる少年をどこか痛ましげに見つめ、バルダッサーレ公爵は小さく嘆息をついた。
「その覚悟はお見事だが、均等にはできまいよ」
「左様」
バルダッサーレ公爵の言葉に頷いて、バルバロッサ侯爵は野太い声で言った。
「伯爵は王女殿下のご婚約者である、ご自身のお立場を考えられた方がよろしいかと。王女殿下の夫君となるのには、傷は少ないほうがよろしいでしょうな」

その言葉の後半はアウグスタに向けられたものだった。
アウグスタは頷く。
「クレマンス伯爵には、レンフォード公爵家の領地において一ヶ月の謹慎を命じる。しばらく登城は認められぬと思え」
「陛下……」
「どうせしばらくゴタゴタする。公爵家の中もイロイロあるだろう。おまえが押さえよ」
アウグスタの声に、シーゼルは一瞬大きく目を瞠り、すぐに顔を引き締めて頷いた。
「……温情あるご裁可に報いれるよう、励ませていただきます」
「うむ。……だが、ほどほどにしておくがいいぞ。おまえの父親は、あれで、おまえ以上に情報に通じる男だからな」
「……」
アウグスタの声にギュッと唇を引き結び、シーゼルは頷いた。
……その顔は、父親を思い出す表情ではない。
厳しく、敵を見据えようとする男の顔だった。
「……レンフォード家にも処罰がいるだろうな。さて、どうするか」
「降格するには、マルグレーテ殿の存在がいささか問題となりますか」
「いっそ領地を没収してしまいたいところですがなぁ……」
「身内の不始末です。厳しい裁可を下してもよろしいかと」
「……が、それをすると今度はクレマンス伯爵や、我が新しき弟にも累が及ぶ」
即座に声を上げた三人の男は、アウグスタの言葉に口を閉ざした。
苦笑をこぼして、アウグスタはあたしをギュッと胸で絞める。
「この機会にコテンパンにしてやりたいのは山々なのだがなぁ。下手をするとこっちもイロイロ締め上げられるから、面倒だ」
今はあたしが絞まってます！
「……公爵と公爵夫人には、街屋敷での蟄居を命じられてはいかがですかな」

左右から圧迫するモッチーと戦いながら、あたしはヴェルナー閣下の声に耳をすませた。

「お二方は、ご領地でたいへん好き放題していらっしゃるとか。いっそこの機会にクレマンス伯爵にご領地をきりもりしていただき、お身内から反逆者を出した当主夫妻には王都の街屋敷にてしばらく頭を冷やしていただいたほうがよろしいでしょう。王都にいながら登城を許されぬというのは、高貴な方々には大変な屈辱であられるようですし……」

そこで言葉を句切って、ヴェルナー閣下は人の悪い笑みを浮かべる。

「……此度の騒動で、お屋敷もたいへん涼しい環境になっていると聞きましたし」

「くっ……それはよい！」

閣下の声に吹き出して、バルダッサーレ公爵は顔をほころばせた。

「聞けば、断罪官であるクラウドール卿が珍しく積極的に破壊されたとか！　そんな屋敷に、王都随一の公爵家当主が蟄居させられたとくれば……これはしばらく夜会のネタに困りませんな！」

「あまりネタにされても困るのだがな？　バルダッサーレ公爵よ」

その声に苦笑して、アウグスタはあたしの頭を圧迫から解放した。

ああ！　お花畑が遠ざかっていく……！

「おお、これは陛下！　失礼いたしました」

大げさに唸ってみせ、バルダッサーレ公爵は口の端に渋い笑みを浮かべた。

「……けれど、噂というのは存外早く巡るもの。すでに下々には真実に近い情報が漏れていると聞きます。早めに処罰を下し、公に事実を明らかにする必要がありましょう。なに、お家騒動などどこの国でも大なり小なりあるものです。隣国など、兄弟で未だ争っていると聞きますし」

「……早めにしなくてはいけないのは、わかっているのだがな」

嘆息をついて、アウグスタはその瞳に一瞬厳しい光を宿した。

「とりあえず、処罰をくだすのは大祭終了後とする。それは皆、異論ないな？」
「「「「「御意」」」」」
全員がいっせいに頷き、あたしも慌てて頷こうとした。
……ああっ！　頭がモッチリサンドから抜け出せません！！
「他国の連中が帰れば、その場で会議を開く。なんとも血なまぐさい御前会議となるが、厩舎で被害があったのは地方貴族の従者だ。参加させるのが筋だろう」
またもや全員が頷き、あたしはモッチリから必死に頭を抜こうと頑張った。
「そこで全員の意見を聞き、正式に処罰を下すことになるだろう」
ぬぉぉ。
「我々を先に集められたのは、会議の先導役を考えてのことですかな？　陛下」
ふんぐぐ。
「その通りだ、バルバロッサ侯。人が増えれば、その分意見も割れるだろう。それほど時間はかけられん。先に道を作っておく」
んぬぐぉ。
「ですが、人が多いということは、別の意見に押し切られる可能性もあるということです」
ふぬーっ！
「それも一応、予想の範囲内だ。……私が一番畏れているのはな、意見が完璧に割れた挙げ句、結論を下せない状況が生まれることだ」
……きゅーけい。
「レンフォード家は、クラウドール家同様、王家に次ぐ大貴族だ。おそらく、アルヴァストゥアル家が滅びれば、レンフォード家が次の王家となるだろう」
「……ありえませんな」
厳しい表情で閣下が言い、他の大人達も一斉に頷く。
フェリ姫とシーゼルは、互いの手を握って表情を引き締めていた。

「そのレンフォードを罰するとなれば、反発は必定。連中におもねっていた輩は、恩を売り自らを守るために庇うか、それとも巻き込まれてはならじと逃げるか……」
「さもなくば、日和見をするか……ですね」
ラウロの声に、アウグスタはニッと笑った。
「そう……そうやって意見が割れては、処罰を命じるのにも時間がかかる。いっそ王命でサクッと決めてしまうのが一番いいのだが……」
「意見を聞く場を設けなければ、それはそれで後々文句を言われますからな」
「……それがあるからな」
バルダッサーレ公に頷いて、アウグスタは嘆息をついた。
あたしは脱出を再開する。
「時間がかかれば、それに乗じて暗躍する輩も出てくるだろう。……隙を見せるわけにはいかないからな。大祭後の会議ですぐに処罰を命じたい。……まずは、おぬし等の意見を聞こう」
ふぬぉ。
「……王弟クリストフの暗殺を目論んだこの男、アルトリートの刑はなんとする？」
ののの。
アウグスタの声に年少二人は押し黙り、四人の大人は声を揃えた。
「公開処刑を」
あたしの体が、アウグスタの胸から飛び出した。

「ふのっ！」
気合いと同時に吹っ飛んだ体に、アウグスタが後ろで「あ」と呟いたのを耳にした。
しかし、飛び出したあたしの体は止まらず、勢いよく籠の上に着地する。

ピタリと決まる着地。十点ゼロ！
しかしその余韻に浸る余裕はなく、あたしは唖然としている一同の視線を浴びながら、アウグスタを振り返って叫んだ。
「処刑はダメなのです！」
「……ベル」
「ダメったらダメなのです！」
あたしの前に立つアウグスタは、どこか悲しげな目であたしを見た。
「……そやつを罰さなければ、他の者は納得せぬ」
「納得のために処刑するのです！？　命は一つしか無いのですよ！？」
「その一つしか無い命を、そやつは奪おうとしたのだぞ」
あたしの足下にある籠を見やって、アウグスタは厳しい声で言った。
「私とて、むやみに処刑などしたくはない。……だが、ベルよ。命の大切さを説くのであれば、まず考えるがよい。己の欲得のために、他者の命を狙うことの重さを。……その者が犯した過ちのために、死んでしまった者達の命を」
ふいに頭に浮かんだ光景に、あたしはギュッと唇を噛みしめた。
……わかってる。
……忘れてない。
あの光景を、あの惨劇を……！
――でも！

「……人は、死んだら、終わりなのです」
「……」
「皆そうなのです。死んじゃったら、おしまいなのです！」
「……だから」
「でも、生きていれば、過ちを正すことも、償うこともできるので

す！」

人を助けてくれる神様のいないこの世界には、きっと天国なんてありはしない。

人は死んだらそれまでで、きっと、それ以降には何も存在しないのだ。

……生きていたって、苦しいこともあるし、悲しいこともある。けれど、生きてさえいれば、日々の生活のその中で、少しずつ変わったり得たりすることもあるだろう。

……人はきっと、生きていく過程で、大なり小なり何かの罪を犯している。

完璧な聖人なんて存在せず、悲しい嘘も、情けない過ちも、歩いてきた人生の傍らに、いつだって散らばっているのだ。

何も思わずに歩き続ければ、きっといつまでたっても気づかない。自分だけの視界と、自分だけの考えと、自分だけの思いだけで生きていれば気づけない。

けれど世界はいつだって誰かと繋がっていて、それは自分の何かを確実に変えていってくれるのだ。

絶望の淵で小さな犯罪を犯しながら、犯した罪すら生きる糧にして、償うことすら考えることなく、荒んだ目でただ日々を生き抜いてきたあたしが、今、こうしてここにあるように！

――だけど、死んでしまえば、それもない！！

「いけないことをしたのは、確かなのです！　許したいとは……あたしも思わないのです！」

あたしは小さな体全部を声にして、必死にアウグスタに訴えた。

「それでも、奪っていい命なんて、一つだってありはしないのです！」

アウグスタはただジッとあたしを見つめていた。

その瞳はあまりにも静かで――

（……アウグスタ……）
——あまりにも悲しげだった。
先までの彼女の言葉。彼女の態度。——その、仕草。
（……そうか……だから……）
その瞳に直感した。
だけど、
「……ベル。お前の気持ちはよくわかる」
アウグスタは言った。
悲しい瞳のままで。
その表情だけは依然として厳しく作ったまま——
「……だが、王族を殺めようとした者を死罪にせねば、後に災いを残すだろう」
「！　アウグスタ！」
「……王女は疲れている。ポテト」
呼び声に、アウグスタの後ろから一人の男性が姿を現した。
世界を塗り替えてしまうほどの気配、圧倒的な美貌、一瞬でその場の全てを支配するそのヒトに、アウグスタは静かな声で命じる。
「……レメクが戻るまで、ゆっくり休ませてやってくれ」
「アウグスタ！！」
あたしは叫んだ。
止めなきゃいけないと思った。感情がそう叫んでいるからではない、それだけじゃなく、彼女自身のためにも……！
「おとーさま！」
籠から飛び降り、駆け寄ろうとした体をひょいと抱えられて、あたしはポテトさんの腕の中で暴れた。

「アウグスタ！　ダメなのです！　殺しちゃいけないのです！！」
そのまま部屋を出て行くポテトさんの腕から身を乗り出して、あたしは大きく体をひねった。
肩越しに見える悲しい女王に声を振り絞る。
「心を殺しちゃダメなのです！！」
アウグスタは答えない。
ただ、あたしの目の前で、大きな扉が音をたてて閉ざされた。

※　※　※

王宮の廊下は静かだった。
どこかで人が動いている気配はするが、少なくとも、あたし達がいる付近には人の姿は無い。
ポテトさんは無言だった。
相変わらず壮絶な美貌に静かな表情をたたえて、大人しくなったあたしを抱えて進む。
どちらもしばらく声を発さず、その沈黙が破られたのは、廊下の角を曲がった後だった。
「……人というのは、目に見えるものでしか判断しません」
ぽつりと呟かれた言葉に、あたしは小さく頷く。
「……自分の耳で聞いた言葉ですら、時に無かったこととして消してしまうのが人という生き物です。だからこそ、誰もの目に見え、誰もが納得するだけの決着をつけなくてはいけない。……それが、人の世の刑罰なのでしょう」
あたしは答えない。
……答えられるはずが無かった。
「お嬢さん。あなたもそれは、理解しているのでしょう？」
そう。理解していないわけじゃないのだ。
罪と罰については、何度もレメクに教えてもらった。
罪に対しては相応の罰を与えなければならないことも……そうし

なければならない理由も。
だけど――だけれども！

「……あのままじゃ……可哀想なのです」
「……同情ですか」
静かなポテトさんの声に、あたしはその肩に顔を埋めて言葉を続けた。
「……アウグスタが、可哀想なのです」
その瞬間、確かに一瞬、ポテトさんの足が止まった。
こちらを見る気配に、あたしはギュッと目を瞑る。
……思い出すのは、アウグスタの悲しい瞳だ。
目の前にある、たぶん彼女にとってはすぐに思いついてしまうほど簡単な、誰の目にも明らかな『刑罰』を前に、違う人々に意見を求めて彼女。
その答えは――一つだ。

「アウグスタだって、人を殺したくないのです。誰もが納得するぐらいハッキリしてて、それをするのが当たり前なぐらいの刑罰なら、最初からアウグスタはそれを口にすればよかったのです」
けれど出来なかった。
誰かに意見を求める時、彼女は少しだけ、期待していたのだ。
……それ以外の刑罰が、どこかにありはしないかと。
「……自分の心を殺さなくちゃできない刑罰なら、しないほうがいいのです。探せばあるかもしれない他の可能性を探す前に、簡単に決めていい方法じゃないのです」
あのアルトリートに同情はしない。
彼は自分のためだけに、今までトモダチだった『アル』を殺そうとしたのだ。

その巻きぞいになった人々を思えば、きっと誰もが死罪をと声を張り上げるだろう。

「けど、人の命って、何かの報復や、何かの罰のために、簡単に奪っていいものじゃないのです」

そして、

「……アウグスタも、それをわかってるのです。わかってるけど、王様として……ただ、王様としてだけのために、必死にそれを押し殺してるのです」

アルは慟哭のような声で言った。

王族の名を背負って立てるほど、自分達は強くはないと。

それができるのは、アウグスタ達なのだと。

……だけど本当は、違うのだ。

アウグスタ達だって、背負って立てるほど強くは無いのだ。

立たなくてはいけないから、無理やりに立っているだけなのだ。

「……アウグスタが可哀想なのです……」

「……」

「……みんな、可哀想なのです……」

最初のきっかけは何だったのだろうか？

道を踏み外してしまったアルトリート。

罪の重さに気づけず、荷担してしまった『アル』ことクリストフ。

裁かなくてはいけない罪の前に、苦しみを堪えているアウグスタ。

何も関係ないのに、命を奪われてしまった見知らぬ人達。

彼等がこんな風になってしまった、最初の原因は何だったのだろうか？

例えアルトリートが嫉妬で『アル』を憎々しく思ったとしても、その嫉妬を覚えるきっかけは別の誰かが作らないとできないと思うのだ。

そう……『アル』が王族の血を引いていることは、彼は最初から知っていた。

それでも最初は何もなかったのだ。そこにどのような形であれ、

友情みたいなのが育まれるほどに。
どこかに偽りがあったとしても、平和で穏やかな日々があったはずだ。
何もなければ、永遠に続いたかもしれず、きっと『アル』からすれば、永遠に続くはずだと思っていた日々が――

――それを……

「……誰が、アルトリートとアルの間を、壊したの……？」
思わず呟いたあたしの言葉に、ふと、ポテトさんが薄く笑った。
気配でそれを察して、あたしは顔を上げる。
美しいそのヒトは、冷たい笑みを浮かべてあたしを見る。
「……今、レンさんが言ってた言葉を理解しました」
「ポテトさん……？」
ポテトさんは笑う。冷たい笑みの中、その瞳に冷厳たる光をたたえて。
「あなたが時折見せる、閃きにも似た洞察力が、少し恐ろしいと……」
……失敬な！？
「褒めているのですよ。あなたは年のわりには頭が回る」
褒めてるように聞こえませんよ！？
「……少し、回りすぎるぐらいに回ることもある」
頬をぷくっとふくらせているあたしを見下ろし、ほんのちょっとだけいつもの目に戻ってポテトさんは言った。
「……だから、気をつけなさい、お嬢さん。あなたのその閃きは、時に隠された真実を浮き彫りにする。それは諸刃の剣です。現状を覆す武器にもなれば、身を危険にさらす罠にもなる」
「……」

ふくらませた頬をさらに大きくすると、ポテトさんは指でソレをぶしゅっと押した。
「稚い姿をしながら、やはりあなたも魔女。真実を読み解き、人心を変える力を持つ」
ぷにぷにとそのまま頬を押されて、あたしはぺちっとその指を叩く。
「アウグスタはもっと強いのです」
「……ええ。ご主人様は、あなたよりも強く、そして完成されつつある魔女でしょう」
「なら、『アウグスタが』変えることができるはずなのです」
「おや。何を変えるというのです？　人心をですか？」
そう！
「処刑じゃないといけないっていう、人の心をです！」
言ったあたしに、ポテトさんは笑った。
さきほどよりちょっぴり暖かい、可笑しそうな笑みで。
「あの方の成長をあなたが後押しするんですか」
「？」
言われた言葉にあたしは首を傾げる。
あれ以上、胸は大きくなる必要無いと思うのだが。
「……心の意味で、です」
あぁっ！　なんか呆れた目を向けられた！
「ご主人様はねぇ、あぁ見えて頭がカチンコチンなんですよ」
普段通りのユルい口調になったポテトさんに、あたしは目をキラリと光らせる。
「なるほど！　柔らかいのは体だけなのですね！」
「……なぜ台詞がオヤジ臭いのでしょうね……お嬢さんは……」
失敬な。
「まぁ、そんなご主人様ですから、今のままでは『公開処刑』になってしまうでしょうね。もしくは、王族の血に配慮しての服毒か……いずれにしても、死罪は免れないでしょう」

「そんな……！」
「くつがえす手段を探すのならば、覚悟を決めておくことです」
ゆっくりと歩みを再開して、ポテトさんは言う。
「今のままであれば、あなたは『幸運なメリディスの少女』というだけの存在で終われるでしょう。一年もすれば人々の好奇の目も薄れ、平穏で暖かい日々を送れることでしょう」
けれど、と呟いて、ポテトさんは笑う。
「これ以上踏み込み、その存在を人々に印象づければ、あなたは否応なく王国の舞台に上がることになる。姫君方が普段属している王宮という舞台ではなく、この国そのものの舞台に」
あたしはポテトさんを見た。
ポテトさんはあたしを見る。
神々を凌ぐ美貌に、人ならざる笑みを浮かべて。
「政に関わるということは、そういうことです。平穏を望むならば、心を殺し、思考を止めて過ごしなさい」
人気のない廊下に声と足音を響かせて、彼はとある扉の前に立った。
両開きの豪華な扉。
手も触れていないのに、その扉がゆっくりと開かれる。
「……それを良しとせず、心のままに動くのならば、覚悟を決めて進みなさい。全ての結末を己の肩に背負う覚悟を」
開かれた扉の向こうにもう一枚の扉。
自動で開かれるそこへと足を踏み入れて、ポテトさんは言葉を紡いだ。
「かつて、私のご主人様がそう決めたように」
――と。

※　※　※

部屋に入ったあたし達を迎えてくれたのは、まず驚きに目を瞠ったアルだった。
「ちみっちょ！」
相変わらず顔色の悪い彼は、ソファにぐったりと身を沈めていた。
そこからほとんど跳ね起きるようにして立ち上がった彼に、対面するソファに座っていたアディ姫も立ち上がる。
振り返った彼女もまた、わずかに生色を欠いた顔をしていた。
「ロードも……」
「お邪魔しますよ」
素晴らしい笑みを浮かべて入ってきたポテトさんに、二人はそろって息をつめた。
「あんたが戻った、ってことは……兄貴も戻ってるのか？」
「てゆか、猫ちゃんじゃなくなってるんだ……」
アディ姫はなんだか残念そうだ。
「残念ながら、この『私』は本体ですよ。『人形』でしたら、まだレンさんと一緒に外にいます」
なんかアルが「……分裂したままかよ……」とかぼやいてる。
「分裂ではなく、分身です。わりと簡単な魔法ですよ。なんならあなたの魂の一部を別のものに入れ込んで作ってさしあげましょうか？　ん？」
「うわっ！　わ、悪かった！　とりあえず悪かったッ！！」
真顔で超間際まで詰め寄られ、慌てたアルが悲鳴じみた声をあげた。
キスしちゃうんじゃなかろーかという近さから飛び退いた彼は、すぐ後ろにあったソファにあたってものの見事にひっくり返る。
……まぁ、ソファの上だから、たいして痛くはなかっただろーが。
それよりもココロが痛みかけたんじゃなかろーか？　あの超美貌の超ドアップ（キス寸前）は。
「実はさっきまでご主人様の護衛をしてたんですけどねぇ、お嬢さ

んがご主人様にかみついちゃったから、大人しくさせるためにここへ連れて来たんですよ」

「「陛下にかみついた！？」」

二人がギョッとした声をあげ、あたしは慌てて両手を振った。

「違うのです！　噛んだわけじゃないのです！　周りの人がアルトリートは処刑したほうがいいって言うから、しちゃだめだって……あ！」

そこまで言って、アルの顔色に（しまった！）と口を押さえる。

けれど言ってしまった言葉は取り消せない。

いっそう顔色を無くしたアルが、震える唇で呟いた。

「……それしか……無いのかよ……？」

普段の彼からは想像もつかないか細い声だった。

その前に立つポテトさんは、ただ静かな顔でそんなアルを見下ろしている。

「本当に……それっきゃ無いのかよ！？」

悲鳴のようだと……そう思った。

心がキリキリと悲鳴をあげていて、それが声となって外に出ている。

「……アル」

アディ姫が気遣わしげに声を落とし、何かを言いかけ、わずかに迷って唇を噛んだ。

……彼女にも言えない言葉があったのだ。

例えばこんな時にかけるべき嘘の慰めや、ありえない可能性の示唆など。

「……あなたは、自分が殺されかけたという自覚が乏しいんですかね……」

痛ましい静けさの中で、ポテトさんが感情のない声で呟く。

「あなたには、彼を気遣う理由が無いでしょう？」

「無いわけ、ないだろ！？」

「いいえ、ありませんよ」

反射的にくってかかったアルに、けれどポテトさんは静かな顔のままで言う。

「裏切られ、命を狙われ、その理由はただの嫉妬。殺されるためだけに王宮にまでつきあわされ、悲惨な光景を見せられ、心に大きな傷を負った。……その加害者を気遣う理由なんて、もう、どこにもないでしょう。あなたは、とうの昔に失っていたんですから」

「……」

「あなたの思う『アルトリート』という若者は、もうどこにもいませんよ。いるのはただ、あなたに嫉妬し、あなたに成り代わるためにあなたを殺そうとした犯罪者だけです」

淡々と事実を告げて、ポテトさんはふと顔をどこか違う場所へと向けた。

「……あぁ、結論が出たようですね」

「「「！」」」

弾かれたように息を呑むあたし達に、ポテトさんは抑揚のない声で告げる。

「どうやら西の塔に移されるようですね。バルバロッサ公が運んでいるということは、一応、今は事実を公にしないつもりですか」

「西の塔!?」

思わず声をあげたのはアディ姫で、その塔が何なのか知らないあたしは首を傾げる。

同じく知らないらしいアルも眉をひそめ、必死の眼差しでアディ姫を見た。

アディ姫はアルの眼差しを顔を歪める。

言いよどみ、顔を背けるその仕草で、あたしは答えを読み取った。

「……アディ」

答えないアディ姫にじれて、アルが一歩を踏み出す。

だがその足と止めたのは、ポテトさんでもアディ姫でも、そしてあたしでもなかった。

「……西の塔は、死刑囚の塔だよ」

カラコロと軽い音を響かせながら、その声の人物は奥の部屋から現れる。
「日の出を拝むことのできない彼等に、落日とともに己の犯した罪を感じさせる……そのために作られた塔だ」
「ケニード！」
どこかポテトさんと似た静かな表情の彼は、ついてきた銀色のワゴンをソファ近くで止める。
凝視するアルに視線をあわせ、彼は躊躇なく言った。
「……王族を狙った、という事実は、決して軽視することはできない。それは、どこの国でも変わらないことなんだ」
「……ケニードの兄貴……」
「例え君に自覚は無くても、君を通して人々は王の一族を見る。その一族に対して振り上げられた刃は、その者自身を切り裂く刃だ。……そうでなければ、人々は王族を軽視するようになる。自国だけじゃなく、他国の人々もね」
そうして、ほんの少しだけぎこちない手つきで紅茶の用意をしはじめた。
まるで、その話しはそこまでだ、と言わんばかりに。
「……軽視されたくねェから、殺すのかよ……？」
「そうだよ」
アルの問いに、ケニードは淀みなく答える。
「軽視されちゃいけないんだ。王族とは、国の象徴。国そのものを現す人達だ。わかるかい？　それを軽視するということは、国を軽視するということなんだ。王族を殺めようとする人を許すということは、国を滅ぼそうとする人を許すということなんだよ。これは君だけの問題じゃない。陛下や、この国そのものの問題でもあるんだ」
「俺はどうなる！？」
立ち上がり、嫌な空気を打ち払うように手を振って、アルはケニードに叫んだ。
「俺だって手を貸した！　俺が承諾して、そこから全てが始まった

んだ！　俺がきかっけだろ！？」
「……そうだね」
丁寧な手つきで紅茶を淹れ、ケニードは頷く。
――アルに背を向けたまま。

「君もまた罰せられるだろうね。……けれどそれは、死をもって償うものではない」
「どうして！？」
「罪の種類が違うからだよ」
全員分の紅茶を淹れ終え、ケニードはようやくアルを振り向いた。
その表情を見てアルは息を呑む。
彼を振り返ったケニードの顔は、決して揺れることのない厳しさを秘めていた。
「君の行動は罪だった。軽挙であり、浅はかだった。王族の名を騙る者を許し、あまつさえ協力的な態度をとった。その罪は必ず償わなければならないだろうね」
「……」
「けれど君は、王族を殺そうとしたわけじゃない」
差があるのは、そこ。
「……そして、一番の被害にあったのは、他ならぬ君だった」
名を渡し、騙され、命を狙われた。
「……人々は君に同情を寄せるだろう。レンフォード家で不遇の目にあっていた隠された王弟殿下が、騙され、命を狙われたのだと思うだろう」
そして、それは間違っていない。
「けれど、『彼』は違う。『彼』はただの犯罪者だ。全ての首謀者として陛下の御前にひきたてられ、その裁可をもって処罰されるべき重罪人だ。人々は『彼』の死を望み、『彼』の死をもってはじめて事件に終止符を打つだろう。……王に刃を向ける者は、死をもっ

て償うべきという不文律を胸に刻んで」
「そんなの……」
アルは苦しげな声を零す。
間違ってると、そう言いたいのだとわかった。
けれど、アルはその一言を言わなかった。
……いや、言えなかった。
彼も心のどこかで、そうだと思っていたのだろう。
……彼は納得していたのだ。死をもって償うことに。
けれどそれは、自分の死という形で。
「……君が毒をあおったって、帰ってきた君達から聞いた時……『それ』を選んだ君に、僕は敬意を覚えたよ」
「……敬意？」
思わず呟いたあたしに、そう、と頷いてケニードは嘆息をつく。
「身分ある者は、間違えてもやり直すことはできない。なぜなら、そのことによって引き起こされる事態は、下々の僕らのそれと違って、大きな混乱と悲劇を周りにもたらすからだ」
あたし達は言葉につまった。
その言葉の重さは、それが引き起こされた今ならよくわかる。
「だからこそ、やり直すことはできない。起こったことに対する償いをしなくちゃいけないからだ」
「……それが、死、なのかよ……？」
「そうだよ」
あっさりと頷いて、彼は言う。
「位が高ければ高いほど、それは死と密接する形になる。死をもってしか償えないような事態になるからだ。……だからこそ、身分の高い者は過ちを犯しちゃいけない。過ちを犯せば死に至るのだと覚えておかなくてはいけないんだ」
そして、とアルを見つめたまま呟いて、ケニードは深い嘆息をついた。
「……動き出したものを止めるために、時に自ら命を絶たなくては

いけなくなる。君がしたのは、それだろう。その覚悟をもっているのなら、君には間違いなく『王族』としての覚悟ができている。決して死を恐れず、自らの命でもって場を収める覚悟が」

「そんなんじゃねェ！」

あくまでも静かな口調のケニードに、反発するようにアルは声を荒げた。

「そんなんじゃねェんだ！　……俺が全部の原因だったんだ！　なら、俺が消えればいいんじゃねェか！！　そう思ったんだよ！」

「だから、死んでしまおう、と？」

「そ……そうだよ！　俺が消えればそれですむだろ！？　あいつがバカげたことを考えることも、なくなるじゃねェか！」

ケニードの後ろで紅茶の香気が昇っている。

誰にも手にとってもらえず、ただ冷めていくだけの紅茶が。

「俺がいなけりゃ起こらなかったんだ！　全部の元凶が俺なら、全部の罪も俺にあるはずじゃねェか！　そうだろ！？　俺が生まれてきたことが、そもそもの過ちじゃねェか！！」

パン、と。

唐突に乾いた音がした。

あたし達はビックリして口をぽかんと開ける。

「……ケニ……ード？」

思わず名前を呼んでしまった。

ケニードがアルをひっぱたいたのだ。

それは無茶な力ではなかったけれど、決して軽い力でもなかった。

「無理やり言い訳を作っちゃ、ダメだよ？」

叩かれ、ポカンとしているアルに、彼は真面目な顔で言う。

「自分を卑下しても、いけないんだよ？」

叩かれたアルの頬が、少しだけ赤くなっている。

「自分が消えれば終わりだから、と、ただそれだけで死のうとするのなら、わざわざ『彼』の前に行く必要なんて、なかったんだ。強い人達が揃っていて、もしかすると邪魔されてしまうかもしれない

場所に行く必要なんてなかったんだよ。……だってそうだろう？」

もし、ただ、ヤケになって死を選ぶだけなら……

「逃げるために死ぬのなら、誰もいない所でひっそり毒をあおればそれでよかったんだ。君の思いは、彼の元に駆けつけた時に証明されている」

本当は、死にたかったわけじゃない。

逃げたかったわけじゃない。

「君はただ、自分の目で事実を確認したかったんだ」

……他の誰かが言う事実じゃなく、己の目で信じている世界が嘘なのか本当なのかを確かめたかったのだ。

「そして、事実が悲しむべきことだったのなら……『彼』を止めたかったんだ」

他の誰でもなく、唯一人、彼を信じていた友達として。

「もう、罪を犯さなくてもいいように。これ以上、罪を重ねなくてもいいように」

そう……己の命すらも投げ出して……

「……『彼』を……助けたかったんだね？」

自分の存在が歪めてしまった大切な友達。

動き出した出来事の中で、誰からも敵視されてしまった大切な人。

行き着く先を察したからこそ、彼は自らも死ぬ覚悟を固めたのだ。

「……それができないなら、せめて、自分も一緒に死のうと思ったんだね？」

王弟であり、高位者に保護された自分は、同じ罪を背負わされることなく生きながらえるだろうと察したから。

「それぐらい……大事な友達だったんだね……」

アルは答えなかった。

答える必要すら、なかったのだ。

くしゃくしゃになった顔が、零れた涙が、全部物語っていた。

彼の行動も、理由も、その気持ちも。

「……アロック卿。よく、理解できるわね？」

アディ姫が重く悲しげなため息をついて、そうケニードに声をかける。
必死に嗚咽を噛み殺してるアルを気遣わしげに見ていたケニードは、ほろりと笑って答えた。
「……僕にも覚えがありますからね」
それは、大切な誰かのために、命を捨てる覚悟をしたということだろうか？
あたしはジッとケニードを見つめる。
彼が命をかけるほどの相手だなんて、あたしには一人しか思い浮かばなかった。
何があったのだろうか？　あたしよりも遙かに長い年月を生きている彼等には。
ケニードはあたしの視線に淡く微笑んで、その話しはまた今度ね、と目で告げる。
あたしは嘆息をついた。
……人には、たくさんの思いがあり、たくさんの出来事をその身に抱えているのだ。
それはきっと、あたしでは思いもつかない冒険譚であり、あたしでは未だ理解できない、熱く激しい感情であるのだろう。
深いため息をつくあたしをそっと床に降ろして、ポテトさんが冷めていく紅茶のワゴンに向かう。
そうして、優雅な手つきで一人一人に紅茶を手渡して微笑んだ。
「少し、休みなさい。……夜会が終わるまで、一部の者以外はこの事件を知らずに過ごすでしょう。全ての結論が出されるのは、おそらく明日の晩。各国の賓客が帰国し、なおかつ地方貴族が揃っているわずかな時間帯となるはずです」
それまでは、最終的な決断も下されない。
……『彼』も、西の塔で、生きている。
アルが瞳に小さな光をたたえて、受け取った紅茶を見つめた。
嫌な予感を覚えつつもただ顔を見合わせるだけで押し黙ったあた

しとアディ姫に、ケニードが小さく頷く。
……アルは、まだ、諦めてない。
きっと、まだ、諦めてないのだ。
「あなたがたにはイロイロありすぎました。もう夜も遅いのですから、ゆっくり眠りなさい」
あたし達は小さく頷き、それぞれカップに口をつける。
かちょん。
ぱたむ。
くーくーくー。
「「「……」」」
……なにか、連続した音がした。
妙な予感を覚えつつそちらを見ると……
「……盛ったわね？」
わずか一口で爆睡しちゃってるアルが、ポテトさんの足下に転がっていた。
手から落ちただろうカップは、キレーにポテトさんの手に受け取られている。
……てゆか、なんでアルの体の方を受け取ってあげないのだ……
「言っておきますけど、盛ったのは私じゃありませんよ？」
アディ姫のジト目にしれっと答え、そのまま視線をケニードに送るポテトさん。
しかしケニードも唖然とした顔だ。
「……僕はこれほど効果の出る眠り薬は盛ってませんけど……？」
……盛ったのは事実なのか……
「ちょっと魔法で威力を高めてみました」
ポテトさんはイイ笑顔だ。
「てゆか、なんでそんなことするの？」
カップをがじがじと噛みながら言うあたしに、手にもった紅茶を一口飲んでポテトさんは肩をすくめてみせる。
「放っておけば、夜中にこっそり塔に侵入しようとするでしょう？

いくらなんでも、そんな怪しい真似はさせれませんからね」
……てゆか、今飲んだの、アルが飲んだ眠り薬入りの紅茶じゃなかろーか？
「目が覚めたら伝えてやってください。西の塔に入りたいのなら、明日の昼前、一時間だけ時間をとってあげます、と。私が陛下の許可をとって連れて行く分なら、問題は無いでしょう」
……飲んでもビクともしないんだな……ポテトさん……
「同席したいのなら、皆さんも一緒に行きますか？」
飲み干してもケロッとしているポテトさんをジッと見つめ、アディ姫はゆっくりと首を横に振った。
「……あたしは遠慮するわ」
「おや。真実の探求者さんともあろう人が、珍しい」
「邪魔にしかならないもの」
さらりと言って、彼女はほろりと微笑む。
「……間に入っていい問題じゃないわ。だから、あたしは残る」
それは、静かで、とても美しい表情だった。
ポテトさんは頷く。……彼は、どこか満足そうだった。
「僕も遠慮しておきます」
自分が飲み干した紅茶を不思議そうに見てから、ケニードも苦笑して言った。
「姫の言葉じゃないですけど、立ち会っていい話では無いでしょうからね」
「おやおや」
苦笑に苦笑を返して、ポテトさんは最後にあたしを見た。
「お嬢さんはどうします？」
あたしは答えた。
決めていた答えを。
「一緒には行かない」
それは、きっと、彼等の会話を邪魔することになるから。
「あたしは、あたしのやり方で、見つけなきゃいけないことがある

から」
ポテトさんは微笑(わら)った。
答えに満足したような、どこか嬉しそうな顔で。
「楽しみにしていますよ、お嬢さん」
レメクの帰還を告げられたのは、その少し後のことだった。

27　存在のない世界

――昔、朝というものは、問答無用でやってくる絶望だった。

目を覚ました時、そこにあるのは、いつだって薄暗い部屋と、無理やり仕事を押しつけてくる大人の姿だった。

生きていくための食料もほとんど無く、残飯や草木を噛りながら生き、罵られ石を投げられながら過ごしていた。

毎日、誰かがどこかで倒れ、誰かが裏口から捨てられてゆく。

そんな日々の朝というのは、ただただ、絶望だけが待っている『時』の『始まり』だったのだ。

だけど、レメクに助けられた日から、あたしにとっての『朝』は変化した。

疲れと悲しみに満ちたものから、清々しくてキラキラしたものに。

――けれど、今、改めて思う。

本当の意味では、朝というものは何も変わっていないのだと。

それは常に『始まり』を告げる、希望と絶望の瞬間なのだと。

※　※　※

王都、西区、大神殿。

右を見ても左を見ても美術品が並ぶ通路を渡り、あたし達が通さ

れたそこは、驚くほど贅を凝らした部屋だった。
部屋の壁は、淡い象牙色と若草の色。
豪華な刺繍で埋め尽くされたその壁を、白い柱が額縁のようにまとめている。
部屋のサイズは、おそらく『青の間』の一番大きな部屋より一回り以上大きい。
外に面した窓は驚くほど透明度の高い硝子。扉は三つあり、廊下側に二つと、部屋の奥に一つ。
その奥の扉から悠然と出てきた人を見て、あたしとレメクはシャキッと背筋を伸ばして一礼した。
「……楽にするがいい」
ゆっくりと豪奢な椅子に回り込みながら、その人はわずかに掠れた声で言う。
「どうせ、長い話であろう。……遠慮なく椅子に座るといい」
ヒョコンッと顔を上げたあたしは、レメクの方を見上げる。
あたしの隣に立っていたレメクは、眼差しだけで「座りなさい」と告げた。動く様子がないところを見ると、彼自身は座る気が無さそうだ。
（疲れないのかな……立ったままで）
横に立たれたまま一人で座るのは、なんとなく居心地が悪い。とはいえ、座れと言われたのに二人して立ってるのもイカン気がして、あたしは「よいしょ」と椅子の上によじ登った。
……ええ。体がちっちゃくてまともに座りもできませんとも。
しかし、ちっちゃい体には利点がある！
なにせ椅子によじよじするだけで、すかさずレメクがあたしを抱っこしてくれるのだ！
……まぁ、直後に椅子に丁寧に設置されたりするわけだが。
『スカートがめくれないようにしなさい』
『あい！』
心の声で会話しつつ、ヨレヨレになっていた裾を綺麗に直して、

レメクは自分が立っていた場所に戻っていく。
対面の椅子にどっかと腰掛けたまま、そんな様子をしげしげと眺めていたおじーちゃまは、ヒゲを撫でながら「……ふむ」と呟いた。
「……末の姫に、いつでも尋ねてこいと言ったのは覚えておるが……おまえまで来るとは、思わなかったな。……クラウドールの名を継ぎし子よ」
その声に、レメクは静かな目をわずかに伏せた。
けれど、口は開かない。
レメクをして、許可を得るまでは口を開くことができない相手――

その人の名こそ、……ぇーと……『アルカンシェル・オルトヴァーン・エネク・アーノルド・ベザリウス・ファウスト・シエル・アルヴァストゥアル』。
大陸西中央、エラス教の教皇サマである。
「しかも、この時期、このような時間に、か……」
名前を書いたメモを懐に仕舞うあたしには目もくれず、アルルじーちゃんはレメクへと向けた眼差しを細めた。
その姿を朝陽が淡く照らしだしている。
時刻は八時。
世の貴族サマ達なら、まだぬくぬくベッドで眠っている時刻である。
（……。もしかして……アルルじーちゃんも、いつもなら寝てる時刻だったり……？）
今更ながらそのことに思い至って、あたしは背中にジワッと汗を浮かせた。
たとえ日の出から人々が出入りする教会とはいえ、相手は教皇サマ。
これぐらいエライ人になると、起き出すのは貴族なみに遅い時刻なのかもしれない。
――まして、アルルじーちゃんは王族の直系である。

（……って、あたし、ムチャクチャ非常識だったんじゃ……）
ジワジワと浮いてくる汗に負け、思わず横目でレメクを見上げる。
レメクのほうは全く変わらない静かな表情で、悠然と腰掛けているおじーちゃまを見つめていた。
その様子に勇気をもらって、あたしもシャンと背筋を伸ばす。
例え訪問時刻が非常識であろうとも、このまま回れ右して帰れない理由があたしにはあるのだ。
（……アルトリートを……助けなきゃ）
「……ふむ」
汗イッパイのあたしと、隣で平然と立っているレメクを見比べ、アルルじーちゃんはわずかな嘆息をつく。
そうして、周りに控えていた高位神官達に向かい、皺だらけの手を軽く振った。
「……おまえ達、席を外すがよい」
「……かしこまりました」
アルルじーちゃんの近くで控えていた、かなり位の高そうな神官が声を落とし、扉の前で警備をしていた他の神官達とともに退出する。
その様子を目ではなく気配で感じながら、あたしは汗だくの状態でアルルじーちゃんを見つめていた。
パタンと扉が閉まったのを確認してから、アルルじーちゃんはもう一度あたし達を眺める。
いや――正確には、レメクを。

「……よーやく来おったか、コンのノロ助が」
……。
（……ノロ助？）
唐突な言葉に、出ていた汗もヒョイと引っ込む。

思わずレメクを見上げると、レメクは静かな表情のまま、わずかに目を細めていた。
「まったく。手間を、かけさせてくれる……」
そんなレメクに対し、教皇サマはめんどくさそーにため息をついた。
「そもそも、おまえがもっと早く儂の所を訪ねて来ていれば、こんな馬鹿げた事態は起こらなかったはずだろうが」
ゆっくりと息継ぎをしながら言うおじーちゃまに、あたしは目をパチパチさせた。
そうして唇をとがせる。
……最近の大人は、子供にセツメーもせず、自分達だけで会話をするのです！
「違うか、レンドリア。おまえが王宮にいれば、こんな馬鹿げた真似をしてまで、王族の中に入ろうなどと思いはしなかっただろうに」
レメクは答えない。
ただ、少しだけ影の入った表情で俯いた。
「……もっと早くに、儂の元を訪ねて来るべきだったのだ」
どっぷりとした重たい嘆息を吐き、教皇サマはレメクと同じく影の入った表情になる。
その瞳にあるのは、諦めにも似た後悔だ。
「……もっとも、今更言ったところで、せんなきことだがな……」
レメクはその言葉にも、ただ目を伏せるだけだった。
あたしはそっくりな表情をする二人を見比べる。
アルルじーちゃんの言葉の意味は、清々しいほど説明が無いのでサッパリわからない。
だが、何か不吉な感じがした。
まるで、全てが終わってしまったかのような、そんな感じが。
……アルトリートの裁判は、まだ始まってすらいないのに。
「……だが、よく戻ってきた、と言うべきだろうな。後手にまわったが、おまえが帰って来たなら、これ以降は愚かな真似をする者も

いなくなろう」
「……？」
アルルじーちゃんの声に、あたしだけでなくレメクも首を傾げた。
「猊下。それはどういう意味でしょうか……？」
問うレメクに、アルルじーちゃんは眉をひそめる。
「どういう意味も何も、おまえの訪問が……」
不審そうに言いかけ、ふと沈黙し、おじーちゃまはあたしを見た。
「……娘」
みょ？
「こやつに、伝言は……」
……伝言？
あたしは首を傾げ、ややあって「あっ」と飛び上がった。
思いっきり忘れていたが、あたしはレメクへの伝言を託されていたのである！
そう、それこそ、早めに訪ねてこいとかゆー伝言を！！
「……ま……まだなのです……！」
「……」
ああっ！　おじーちゃまの目が冷たくなりました！！
汗イッパイなあたしとしばし見つめ合い、ややあっておじーちゃまは深い嘆息をついた。
「……まぁ、あれから、時間もさほど経っておらぬ……おまけに、色々と騒がしかったからな……」
嗚呼！　おじーちゃま！
頭イイうえに優しい！！
「ならば、娘よ……」
でも名前は相変わらず言ってくれない！！
「こやつが、こやつの事情で儂を訪ねていないのだとすれば、此度の訪問は、おまえの事情ということだな？」
「そ、そうなのです！」
シャコッと背を反らせたあたしに、アルルじーちゃんはヒゲを撫

でながら渋い顔になる。
そのまま憂鬱そうに椅子に深く背を預けるのを見て、あたしはギュッと拳を握った。
「おじーちゃまっ、あのですねっ」
「……まぁ、待て。そして『おじーちゃま』は、よすがよい」
意気込んで言うあたしの声を遮って、アルルじーちゃんは何故か驚いた顔をしているレメクを見た。
あたしとアルルじーちゃんを見比べているレメクに、威厳ある教皇サマは深い眼差しで問いかける。
「……おまえは、止めんのか」
「ベルが、猊下をそのようにお呼びしているのは、今、初めて知りましたが」
「そっちではないっ」
大真面目なレメクにちょっと怒り目で言ってから、アルルじーちゃんは「ゴホン」と咳払いをした。
「……昨夜、おまえ達が捕らえたという、『賊』のことだ」
昨夜、と、賊、という言葉に、レメクがわずかに身じろぐ。
「おまえが『賊』の屋敷で暴れたということも、知っている。おまえにしては珍しく、ずいぶんと派手にやったそうだな？」
アルルじーちゃんに言われて、レメクはどこか気まずげに視線を逸らせた。
その様子をじっくりと眺めやってから、おじーちゃまは「フン」と鼻で息を吐く。
「あの派手な騒ぎは、わざとであろう？　『王族を殺めようとした賊が、公爵家の街屋敷に潜伏していた』……か。それを捕らえるためであるのなら、あれぐらい派手にやってもかまうまい。事実であるがゆえに、あの連中も今度ばかりは血筋や爵位を盾に騒ぎ立てれぬ。それを見越しての実力行使なのだろう？」
言われて、レメクはさらに気まずげに視線を泳がせる。
「詳しい事情を知らぬ者にも、かの一族が何らかの悪事を企んでい

たのではないのかと、真相に近い疑惑を植え付けることができる。
それを見越しての騒ぎであろう？」
「……いえ……」
「今更、謙虚になることもあるまい。抜け目のないおまえのことだ、ついでに奴等を失脚してやろうと思ったのだろうが」
「……その……」
感心したようなじーちゃんの声に、レメクは何やら物言いたげな顔で沈黙した。
微妙にいたたまれない空気が漂ってきて、あたしは首を傾げる。
（ナゼそんな気まずそーな顔をしているのだろーか？）
むしろ当然です的な顔をしているのが、いつものレメクだと思うのだが。
（……てゆか、おじ様、ブチキレた風を装ってそこまで考えてたのですね……！）
さすがはレメクである！
意外と演技派なオジサマに、あたしは目を煌めかせて熱い視線を送った。
……何故かレメクからは、ますますイタタマレナイ空気が漂ってきたが。
「……だが、だからこそ、解せん」
深い息を吐いて、アルルじーちゃんは憂鬱げにレメクを見る。
声の変化に気づき、ようやく視線をあわせたレメクに片眉を上げてみせ、おじーちゃまは言った。
「そこまでして、奴等の失脚を目指していながら、何故、おまえはこの娘や王を止めんのだ？」
「……ベルと……『陛下』？」
やや不思議そうなレメクの声に、アルルじーちゃんは不審げに眉をひそめる。
「連携しているわけでは、無いのか？　この娘がここに来たのは、後手にまわって誰も救えなんだ、末の子のことか……もしくは、上

手く利用されて、それと気づかずに自分で処刑台に登った、哀れな道化のことであろう？」

「……はい」

頷くレメクに、アルルじーちゃんはいっそう憂鬱げな顔で嘆息をつく。

あたしはその様子を見守りつつ、前者が誰で、後者が誰であるのかを考えた。

ぇーと……末の子、ってゆーのは……王弟であるアルのことかな？

「……何故、止めぬ。おまえなら、分かっているはずだ。これがどれほどの好機であるかは」

（……好機？）

アルルじーちゃんの声に、あたしは首を傾げ、レメクは一瞬だけ表情を揺らせた。

「……まさか」

その表情の中、かすかに浮かんでいた「迷い」の色に、アルルじーちゃんは今度こそ驚いたように目を見開く。

信じられないものを見た、という顔で、ぐっと椅子から身を乗り出した。

「……まさか、おまえともあろう者が、迷ったのか。王族の血なんぞを盾に、これまでさんざん横暴を働いてきたあの連中を、処罰する機会だというのに？」

食い入るように見つめられて、レメクは息を吐いた。

一度俯き、顔を上げた時には、その顔からは完全に表情が消えている。

「……これが、未だかつて無い、そしてこれから先あるかどうかもわからないほど、絶好の機会であることは……存じています」

「ならば、何故迷う？」

「迷ってはいません。私自身は『彼』――アルトリートを処刑することに対し、何の躊躇もありません」

「えっ！？」

言われた言葉に、アルルじーちゃんの言葉を一生懸命考えていたあたしはギョッとなった。

「おじ様、そんな……！」

思わず椅子から飛び降り、長い足に飛びつくと、レメクは静かな表情のままであたしを見下ろす。

その、人としての感情を排除した瞳に、あたしは心臓が冷えるのを感じた。

けど……だけど、どうして!?

「おじ様、偽王弟を捕らえたのは、裁判するためよね!?　アウグスタから、断罪しちゃってもいいって言われてたのに、あえて捕まえたってことは、裁判できちんと裁くためよね？　アルのこともあるんだもん！　なんかオカシナこともあるし……！」

あたしの声に、けれど表情一つ揺らさずレメクは首を振る。

……横に。

「……ベル。あなたも落ち着いて聞きなさい。私は断罪官として、彼を裁く権限を持っています。けれどそれを行使していないのは、あくまでも『王族』に仇なす者を個人の権限で裁いてはならないという、私個人の考えであって、罪人や、その周囲に対する憐情や配慮では無いのです」

あまりにも静かなレメクの声に、あたしはギュッと足にしがみついた。

まるで出会った最初の頃のようなレメクの無表情に、どうしようもなく胸が騒ぐ。

「でも……！」

「王弟殿下のことは、同情に値するでしょう。彼等の間にあったわずかな溝を上手く利用されました。……実際、ここで『彼』を処罰して、果たして断罪の手を『元凶』にまで伸ばせれるかどうかは疑問です。……ですが『彼』を足がかりにして、彼等のもつ力を大幅に減らすことはできます。そのためにも『彼』には最も厳しい罰を与えなければなりません。王は――ひいては王国は、この事態に対

し、誰であろうと決して赦さないと、内外に知らしめるためにも」
あたしは愕然とレメクを見上げた。
その言葉は、今ではない時、ここではない場所で聞かされていた。
わかっていたはずだ。レメクがそういう思いでもって『断罪官』として働いていることは。
けれど……
けれど、それなら、今西の塔にいるアルトリートは――

『彼』を止めるために、命すらかけたアルは――！

「命って……そんな風に、扱っていいものなの……？」
「……ベル」
「そんな風に、道具にしていいものなの……！？」
必死に背伸びして、あたしはレメクに向かって叫んだ。
「おじ様、言ってたじゃない！　命ってすごく大事なもんなんだって！　あたしに教えてくれたじゃない！！　ゴミみたいに扱われてた、あたし達のことだって助けてくれたのに！」
なのに、どうして！
「どうして、アルトリートは助けてくれないの！？」
「……助ける理由がありません」
「あるわよ！」
欠片ほども情を宿さない瞳に焦れて、あたしはペチンとレメクの足を叩いた。
「あるわよ！　いっぱいあるわよ！　だって、アルトリートは『生きて』るんだもん！」
「……」
静かに見下ろしてくる視線に耐えかねて、あたしはレメクの足から離れる。
そうして、しっかりと彼と向かいあって叫んだ。
「生きてるのに、命を奪うの！？　人は死んじゃったら終わりなの

に!?　アルは、命を狙われたけど、まだ生きてて、アルトリートが処刑されるのが嫌で、嫌で嫌でたまらなくて命まで投げ出したのよ?　どうしても止まらないなら、自分も一緒に死のうとまで思い詰めたのよ!?」

「……愚かなことです」

「愚かなんかじゃ、無いわ!」

レメクの言葉とも思えないヒドイ言葉に、あたしは信じられない思いで叫んだ。

「誰だって、大事な人が悪い道に進んで、そのせいで処罰されそうで、その原因が自分で、おまけに自分だけは罰を軽くされそうだっていう状態なら、たまらない気持ちになっちゃうわよ!　だって、そうでしょ!?　二人は、本当は友達だったんだもん!　あたしが生きてきた時間よりもずっと、長く一緒にいて、大事な時間を過ごしてきたのよ!?」

「付き合いの長さが、そのまま深い絆になるわけではありません。それは、実際に裏切りの果てに事件が起こった今回で、よくわかったでしょう」

「そーゆー間違いだって、ジンセイには起こったりするのっ!」

全身で叫んで、あたしは息継ぎをしながらレメクを睨みあげた。

レメクの表情は、全く変わらない。

人形とすり替わっちゃったんじゃなかろうかと思うほど、完璧な無表情だ。

「アルは、アルトリートが大好きだったんだよ!?　そのアルトリートが処罰されちゃったら、アルはどうすればいいの!?　絶対辛くて辛くてたまらないのよ!?　後を追っちゃったらどうするの!?」

「追わせません」

少しだけ強い声で言って――けれど表情は決して変えずに――レメクは言葉を続けた。

「王族として、そんな真似は許されません。どのような絶望、どの

ような悲哀があろうとも、生き続けなくてはならないのが『王族』です」

「そんなの……おかしいわよ！」

「おかしくても、それが王族の務めです」

言いきり、レメクは瞳に強い色を閃かせてあたしを見た。

「王族とは、他者から決して軽んじられてはいけない存在です。……なぜなら、その身には必ず、国が背負われているからです」

それは――前にも聞かされた。

今のレメクと同じような強い目と、強い信念を秘めた声で。

誰よりもお人好しそうな人から――

「国を背負う者だからこそ、王族は敬われる。王族とは、すなわち国民の盾であり、剣です。彼等を守るために立つ者であり、存在する者です。だからこそ、誰からも特別に扱われなくてはならない。そしてその身が不当に扱われたとすれば、それを国でなく個人の権限で裁可してはいけません。私が与えられた特権で処罰をしないものも、そのためです」

それは、個人の独断で『国』を自由にする行為に他ならないから。例えそれが国王に許されたことであろうとも、決してしてはいけないと思っているから。

「王族が自らの手で命を絶つということは、国そのものが自ら滅びるのと同じです。国を傾け、滅ぼしかねない行為を許すことはできません。そこにどのような思いがあり、どのような願いがあろうとも、許されないのはそのためです。……王族が誰かに危害を加えられた場合、その行為を許すことができないのも、同じ理由です」

その言葉の意味は、わかる。

ケニードが強い口調で言っていたから、その言葉の意味を一晩中ぐるぐる考えたりもしていたから、だからこそわかる。

それが本当に、とてもとても重要で、大切なことなんだってことは。

けれど……それでも！！

「アルは……狙われたけど、生きてるわ！」

「結果だけが全てではありません。命を狙われたという、その事態そのものが問題なのです」

ピシャリと言って、レメクは口調を強める。

「全てが極秘裏に進められていたのなら……そして、その被害が王弟殿下だけに留まっていたのなら、もしかすると陛下の権限をもって『彼』を生かす案も採用されたかもしれません。そういった望みも、もしかしたら可能だったのかもしれないのです。……けれど、最初から可能性は断たれていました。最初の花瓶の時から、事件は人目にさらされ続けていたのですから」

言われて、あたしは息を呑んだ。

そうだ。

最初から、最後まで、全ては人の目に晒され続けていた。

「人目の集まる時期、人目の集まる場所で事は行われました。花瓶の時だけなら、ごまかしもきいたかもしれません。けれど、牢屋では下手人だけでなく牢番まで殺されました。厩舎前の従者達に関しては、もはやご遺族にどのような言葉で事情を説明していいのかすらわかりません。……猊下が仰ったように、彼は、自らの手で、足で、処刑台に登ったのです」

あたしは何か反論しようと必死に考えた。

小さな頭の中の、さらに小さなノーミソをギューギューと振り絞った。

そんなあたしに、レメクは無情にも結論を告げる。

決して揺るぎない信念をもった声で。

「王族の命を奪えるのは、他の誰でもない、己の行いだけです。そしてそれは、他の者であっても同じでしょう。自らの手で引き起こした事態は、自らの手で収めなくてはなりません。王弟殿下の存在

が今回の事件を引き起こしたのであれば、彼は自らの心に深手を負うことでその罰を受けなくてはいけません。そして、実行犯であるアルトリートは、その命をもって償わなくてはならないのです。国と、民と、裏切った友に」

凛と立つレメクと、愕然と突っ立っているあたしに、ヒゲを撫でた姿のまま静止していたアルルじーちゃんが、深い深い嘆息をつく。

「……レンドリア」

ヴェルナー閣下やポテトさんと同じく、レメクでなくレンドリアの名前の方で呼ぶ教皇サマの声に、レメクは眼差しを向ける。

アルルじーちゃんの顔は、ちょっぴり非難めいていた。

「……ならば、なぜ、この娘が儂の前に来るのを止めなかった」

「……」

「結論は、出ているのだろう。ならば、諭せばいいだけのことだ。儂の前で、あえて行う必要は無かろうが」

「いいえ」

どこか正論っぽいことを言う教皇サマに、しかしレメクは真顔できっぱりと言った。

「止まらないから、ダメです」

……。

「……なんだと？」

さすがにビミョーな顔になったアルルじーちゃんに、レメクはやはり真顔のまままきっちりと向き直る。

思わずキョトンとしてしまったあたしが見守る前で、レメクは強い眼差しのままで言った。

「猊下には申し訳なく思っております。私のこれは、私自身の考えであり、果たすべき責務です。ですが、ベルにはベルの思いがあり、考えがあります」

「……」

「人には、人の数だけ、強い思いや行動理念があるのだと、教わりました。私にはそれを止められません。止められないからこそ、彼

女が打てるだろう全ての手を見守ることにしました。少なくとも、この王国で、陛下や宮廷の決定に異を唱えられるのは猊下だけですから」

あっさりと言われた言葉に、偉大なる教皇サマはあんぐりと口を開けた。

あたしもあんぐりと口を開ける。

それは……つまり……

「それは、つまり、おまえ……儂に、丸投げしようとしておるということだな!?」

「否定はしません」

「少しは、せんか!!」

ものすごく目を怒らせて、おじーちゃまは椅子から身を乗り出した。

「おまえが、そこの娘に言い負かされるとは思えん。よもや泣かれるのがイヤで、儂に押しつけようとしておるのでは無いだろうな?」

その額にくっきりと青筋が浮き上がっているのを見て、あたしはこんな時だというのに思わず声をかけてしまった。

「……おじーちゃま。興奮すると体に悪いのですよ」

「娘。おぬしは、黙っておれ」

言われて、あたしは口を両手で押さえる。

そんなあたしには一瞥もくれず、アルルじーちゃんはひたすらレメクを睨み上げた。

「どうだ。レンドリア。違うか?」

「……猊下。憶測で決めつけるのはおやめください」

エラス教で一番偉い教皇サマに睨みつけられても、レメクは相変わらずレメクである。

「そして私の名前は『レメク』です」

「……あの、腹立たしい悪魔の名前で、呼べと言うか?」

「かねてよりお願いしていたはずですが。……それと……私は別に、ベルに泣かれるのが嫌で、猊下を尋ねて来たわけではありません」

「嘘を、つけ」
「昨晩、すでに泣かれています」
……あー……
さらにあんぐりしたアルルじーちゃんを見ながら、あたしは遠い目で数時間前を回想した。
……そーいや、あたし、レメクが帰ってきた時、ネムネムな状態で泣きながら必死に訴えたっけな……
とはいえ、眠すぎて返事待たずにコテッと寝ちゃったのだが。
「〜〜〜ッ」
見守るあたしの前で、おじーちゃまは筆舌し難い顔で沈黙する。
そしてチラッとあたしを見た。
「……負けたのか」
今度はレメクが沈黙した。
見上げれば、何故か微妙に視線が泳いでいるオジサマが一人。
「別に……負けたわけでは……」
「嘘つけ」
一言で切り捨てて、おじーちゃまはレメクを白い目で睨んだ。
「本当は、勝てなかったから儂の所に来たわけだろうが。……は……王国最強と呼ばれた、おまえがな……」
「最強だなどと、思ったことはありません」
フフン、とどこかアウグスタっぽい表情を浮かべたおじーちゃまに、レメクは視線を戻しながら言葉を続ける。
「それに……『彼』の処罰に関して、特定の証言と引き替えに厳罰を示唆することはできるかもしれません。違いますか？」
「……ふん……」
さっきまでとは真逆のことを言い、真っ直ぐに見つめてくるレメクに、おじーちゃまはちょっぴりつまらなさそーな顔になった。
そうして、ゆったりとした動きで、乗り出していた体を椅子に預け直す。
「……『王族の命を狙った者は、死罪』……これは、曲げられん」

じっくりと噛みしめるようにして言ったおじーちゃまに、レメクは眼差しを強くする。
「……過去、王族を殺めようとし、処刑されなかった者もいたはずです」
「……おらん」
嘆息混じりに答えて、アルルじーちゃんはレメクを睨んだ。
「……それは、おまえとは知っていよう」
「ええ。公式には存在しませんでした。……ですが、非公式には存在したはずです」
レメクの言葉に何か思い当たることでもあったのか、アルルじーちゃんは沈黙した。
だが、すぐに首を緩く横に振る。
「……おらん」
「猊下」
「……もし、おったのなら……それは、現国王陛下が第一位王位継承者であった時代、その命を狙ったレティシア王妃であろうよ」
その一言に、レメクが凍りついた。
大きく見開いた目には、ハッキリと怒りが滲んでいる。
「……あの、方は……」
「自ら命を絶った。……であればこそ、悪しき前例を作らずにすんだ」
淡々と言って、アルルじーちゃんは疲れたように嘆息をつく。
「……実際のところ、あの女が本当に、自ら命を絶ったのかどうかは、わからんがな」
「……」
「だが、どちらにせよ、王族の命を狙って、公開処刑されなんだのは……あの女だけだ」
深い深いため息をついたアルルじーちゃんに、あたしはジッと眼差しをそそいだ。
前に会った時、アルルじーちゃんはレティシア王妃サマを良く言

わなかった。
　第一王妃サマ（名前忘れた）が辛い思いをしたり、アウグスタを殺そうとした人だから、家族としては好きになれない相手だったんだろう。
　その感情が、言葉の端々に滲んでいる。
「生きていれば、おそらく愚王が庇っただろうな。……後の世の災いも考えず、ただ、己の気持ちのためだけに……あの重罪人を生かそうとしただろう」
　大きく息をついで、おじーちゃまはあたしの方を見る。
　深い深い眼差しで。
「……娘よ。おまえがしようとしていることは、それと同じだ」
　あたしはギュッと唇を引き結んだ。
「前例は、作ってはならぬ」
　重い声で言いきったアルルじーちゃんに、あたしはグッと目に力を入れた。
　けれど、反論はできなかった。
　それをするには、あたしにはあまりにも知識が足りなさすぎる。
　だが、アルルじーちゃんの言葉に対する反論は、思いもよらなかったところからきた。
「前例は、すでにあります」
「……おじ様……？」
　あたしは驚いてレメクを見る。
　相変わらず強い目をしたレメクは、ただ真っ直ぐにアルルじーちゃんを見ていた。
　アルルじーちゃんは大きく目を瞠って腰を浮かせている。
「なんだと……？」
「すでに前例はあるのですよ、猊下……。あなたがご存じなかっただけで」
「まさか……。だが……！」
　何かを言いかけ、途中で何に気づいたのか、アルルじーちゃんは

愕然とした顔になる。
「まさか……おまえ……！」
「……かの人は裁かれることなく、天命を全うされました。盛られた毒ならばもはや数えきれません。仕組まれた事故にしても、同じ事。……けれど、彼女が裁かれることはありませんでした。守られなければならない鉄則といえど、こうした例外が実際に存在する。それは事実です」
「なぜ言わなかった！！」
ひどく激昂した声で、アルルじーちゃんは叫んだ。
「ベラでも、あの悪魔にでも、儂にでもいい！　一言言ってくれさえすれば、手を打ったというのに！」
「猊下ご自身の過去にも、同じような事例はあったはずです」
「……ッ！　あっては、ならん事例だ！」
一瞬怯み、けれどすぐに否定したアルルじーちゃんに、レメクは眼差しを鋭くした。
「ですが、現実にはあった。世に『完全』というものは存在しません。それは、完全でなければならない王家であっても同じことです」
「えぇい……おまえは、いったい、本当にはどうしたいのだ！」
たまりかねたように叫んで、アルルじーちゃんはレメクを睨みつけた。
「そこの娘に正論を突きつけたかと思えば、儂に減罰を仄めかせるようなことを言う！　曲げてはならぬ鉄則ならば、なぜわざと揺さぶりをかける！？　その理由はなんだ！」
「全ての可能性と、その前に立ちはだかる現実を」
厳しい声に静かに答えて、レメクはあたしを見下ろした。
さっきまでの強い眼差しでも、感情の無い眼差しでもない――深い深い眼差しで。
「……ベルに知ってほしいのです」
あたしは驚きを込めてレメクを見つめた。
会話の間も昇っていた朝陽が、窓の向こうからレメクの背を照ら

す。

高い位置にある教皇サマの部屋だから、窓も高い位置になっている。おまけにあたしは背が低いものだから、普通ならとっくに眩しくなくなっているお日様も、絶妙なタイミングで逆光になっていた。

その見えにくくなる表情の中で、深い眼差しだけがハッキリとあたしの目に焼きつく。

「ベルはまだ幼い。そして、王族としての心構えも、特殊な常識も教えられることなく、宮廷とはまた違う『厳しい現実の中』で育ってきました。王族の地位を与えられた者の中で、最も国民に近いのも彼女でしょう」

それは……そうだ。

だって、あたしはただの孤児だった。

最下層の暮らしをしてきた、王族とは何の縁もないただの子供なのだ。

「そして、此度迎えられる王弟殿下もまた、王族の血をひく者の中で、最も国民に近い人物です」

言って、レメクはほんの少しだけ微笑んだ。

実際のところ、逆光になってしまって、表情そのものはハッキリわからない。

けれど、雰囲気でわかった。

ちょっと困ったような目で、微笑んでいるのが。

「子供だから、もしくは、できないからという理由だけで、何もさせず、結論だけを押しつけることはできません。駄目であれ、何であれ、実際に行動することに意味はあるのでしょう。――例えそれが、全て無駄に終わっても」

その静かで深い声に、アルルじーちゃんは胡乱な目になってレメクを見る。

「……おまえ……それは、かえって酷くはないか？　駄目だとわかっている現実を前に、無駄に抗わせるだけであろう」

「例え結果がそうなったとしても……何もしないうちから終われるほど、ベルは達観してはいません。厳しい現実も、事情も、すでに言いました。それでもなお思いを口にするのであれば、傷つくことは承知のうえだと判断します」

それに、と呟いて、レメクはけぶるように眼差しを細めてあたしを見た。

「……ベルは、自分が傷つくことを恐れて、己の心を曲げたりはできない人ですから」

「……おじ様……！！」

あたしは熱い思いをこめてレメクを見上げる。

冷たいコトを言ったり、顔から表情を消してこっちをヒヤッとさせたり、いったい何事かと思ったら……！

思い一つで立ち向かうあたしのために、あえてニクイ役なんかをやってくれたのですね!?

「待て……というか、この場合、儂に対して酷くないか？」

キラキラした目でレメクを見つめるあたしと、静かにそれを受けるレメクを見比べながら、アルルじーちゃんがボソッと呟く。

レメクはしれっとした顔で言った。

「ですから、猊下には申し訳なく思っております」

「そういう台詞は、もっと申し訳なさそうな顔で言え！」

「申し訳ありません。地顔です」

「やかましい！」

手近にあったクッションを投げつけて——クッションはレメクに丁寧に受け止められた——アルルじーちゃんは忌々しげにレメクを睨んだ。

「なるほど、しばらく見ぬうちに、別人のようになりおった……！あの悪魔が、帰国早々、満面笑顔で儂の所に来て言った言葉は、本当のようだな……！！」

「……義父がどのようなことを言ったのかは存じ上げませんが、確かに、わずかなりとも意識が変わった、という自覚はあります」

「……どこがわずかだ……変わりすぎだ……！」
何故かあたしとレメクをジロジロ見比べて、アルルじーちゃんは不機嫌そうにぼやいた。
変わっちゃったという新レメクしか見たことのないあたしには、彼等の会話は理解できない。ついでに、この手の話題の時、必ず他の人があたしをジロジロ見るのも、未だに意味不明である。
（てゆか、誰も旧レメクがどんなだったか、教えてくれないし……）
無表情と熱血漢をわりと頻繁に切り替えてくれちゃうレメクだが、旧レメクならさらなる別バージョンが存在するのかもしれないのだ。
どんなんだったんだろうか？　もしかするとムッフンなレメクが存在してたんだろーかと、想像するだけであたしはムラムラでハラハラなのだが！
「……ベル。とりあえず、あなたの妄想するような『私』は存在しませんから」
……心読まれた！！
ガーンッとショックで固まるあたしを横目に、ゴホン、と咳払いをして、レメクはアルルじーちゃんに向き直る。
「では、猊下。後のことはよろしくお願いいたします」
丁寧に一礼されて、アルルじーちゃんは凄まじい渋面になった。
「ちょっと待て！　おまえ、やはり儂に押しつけて逃げる気だな……？」
「後で回収に参りますが」
「そういう話では無い！　だいたい、後で寄るのなら、最初からここにおればよかろう！」
「動き出している者がおりますので」
静かに言われた一言に、アルルじーちゃんは表情を改めた。
一瞬だけ目を光らせ、いかにも渋々といった感じで深く椅子に座り直す。
「……そっちを……別の者に任せれんのか？」
「……ナザゼル王妃だけでは、荷が重いかと」

「……ナザゼルか……」
なるほど、と低い声で呟いて、アルルじーちゃんは深い深いため息をついた。
「……それで任せきれんということは……かなりの大物だな」
「昨夜、一瞬だけ拝見いたしましたが、一対一で王妃と互角、といった技量の持ち主です」
「……化け物か」
ムッチリ王妃に大変失礼な台詞をぼやき、おじーちゃまは嫌そうな顔で長いお髭を撫でる。
「他の者が動いていなければ、王妃に任せたままでいられるのですが……」
「……アデライーデはどうした？」
「王弟殿下を護ってくださっています」
もう一人の『サイキョー』っぽい人の現状に、何故かアルルじーちゃんは硬直した。
「……王弟の方は、大丈夫なのか？」
「そのための護衛ですから」
「……いや……まぁ……いいが……」
なにか言いたいことがイロイロありそーな顔だ。
どういう理由でかあたしをチラッと見て、アルルじーちゃんはしみじみとした顔になった。
「……儂の方が、まだマシだな……」
……どーゆー意味だろーか……？
首を傾げるあたしにかまわず、おじーちゃまはレメクに視線を戻す。
「……儂が任されてやれるのは、この一場面だけだ。後のことは知らんぞ」
「感謝します」

「ふん」
面白く無さそうに鼻で息を吐いて、アルルじーちゃんは今度こそちゃんとあたしを見た。
お？　とそちらに顔を向けるあたしに、レメクが苦笑する。
「……ベル。猊下は、誰よりも長くこの国を見守り続けてきた御方です」
言われて視線をレメクに戻すと、レメクは真摯な眼差しであたしを見つめていた。
「政も、王族としての在り方も、この方から学ぶのが一番確かです。それは時に、あなたの思いや願いとは違うものになるかもしれませんが」
その言葉に、あたしは口をキュッと引き結ぶ。
それでも――――

「それでも、もし……王族として生きることを選ぶのでしたら、学んだことを心に刻まなくてはなりません。何をしてよくて、何をしてはいけないのか。何ができて、何ができないのか」
そして、と言葉を続けて、レメクはあたしの頭をそっと撫でた。
深い深い色の瞳を微笑ませながら。
「探し続けなさい。そういった柵（しがらみ）の中で、どんなことがあろうとも、自分の心に嘘をつくことなく歩み続けられる道を。それはひどく困難なものでしょうし、力及ばず挫折することもあるでしょうが、いつの日かきっと、望みを叶えてくれる力になるでしょう」
「……あい！」
頷いて、あたしは背筋をピンと伸ばした。
それに微笑ってもう一度頭を撫で、レメクが身を離す。
アルルじーちゃんの方に一礼して去っていくレメクを見送って、あたしは意気込みも新たに偉大なる教皇サマに向き直った。
呆気にとられた顔で、ポカンと口を開けている教皇サマを。

「……おじーちゃま？」
あたしの呼び声に、教皇サマは三秒経ってからハッとこちらを見る。
そうして、なぜか天井を見上げて盛大な嘆息をついた。
「いやはや……」
……いやはや？
「なんとな……」
……なんとな？
意味不明な呟きを零すのに、あたしはただただ首を傾げた。
なんだか妙にしみじみとした呟きなのだが、お偉い教皇サマが何に対してシミジミしているのかサッパリわからない。
教皇サマは椅子に深く沈み込んだ状態で、はぁ～、と感慨深げなため息をついた。
「……長生き……するもんだな……」
……それはいったい何に対する感想だろーか？
お髭をナデナデしてるおじーちゃまに焦れ、あたしはおじーちゃまの真正面に回り込んで、未だに天井を見上げているキンキラキンの膝の上によじ登った。
「お？　おお……なんだ……あぁ、忘れるところであったな」
何故か一瞬ビクッとなったおじーちゃまは、膝の上に乗ったあたしを見下ろし、微妙な及び腰で言う。熱い視線でジッと見上げ続けると、「まぁ、待て」と渋い顔で片手を上げられた。
「おまえの言いたいことは、分かっておる。あの、哀れな道化師のことであろう」
十秒考えてピンときて、あたしは目を丸くした。
「……アルトリートは、道化師だったですか」
「そうだ」
頷いて、アルルじーちゃんは少しばかり疲れたようなため息をついた。
「そもそも、アルトリートという小僧には何の力もない。それなの

に、これだけのことをしでかせた……その時点で、オカシイと気づくべきであろうよ。母親が王族であろうとも、あの者の公爵家での立場は低いのだからな」

言われて、あたしは首を傾げた。

「でも、王族の血って、それだけですごく大切じゃないのですか？」

いくらおかーさんの連れ子とはいえ、そのおかーさんがスゴイ血筋なのだから、普通の貴族では太刀打ちできないぐらい身分は高いのだと思っていた。

少なくとも、あたしみたいな孤児よりはずっとずっと大事にしてもらえる立場だろう。

血にウルサイお貴族様の世界でだって、きっとチヤホヤされるに違いない。

だが、れっきとした王族であるアルルじーちゃんは、あたしの問いに苦い顔になった。

「王族の血、か……それは確かに、大事であろうよ。『王族』と呼べるほど血の濃い者は、老いた我が身を入れてもわずか数人……その希少性を考えれば、傍系、または正嫡以外の子といえど疎かにはできぬ。その身に秘めたる魔力や魔術特性を考えても、貴重であろうよ」

ムズカシー言葉で語るおじーちゃまに、あたしは真面目な顔でフンフンと頷いた。

分かりにくい言葉は、後でレメクに尋ねよう。

「だがな、娘よ。最も優先されるべき血統というのは、教会にて正式に結婚の儀を執り行った者の血だ。これは貴族のみならず、この近隣諸国ならばほとんどがそうだ。マルグレーテの第一子は教会の祝福を得ることなく産み落とされた。あれの籍はこの世の何処にもない」

「……え？」

言われた言葉に、あたしは首を傾げた。

「籍が無い……って？」

意味がよくわからなかった。
アルトリートは、レンフォード家の人間のはずだ。
家を継ぐ継がないとか云々の問題はともかく、一応、名乗りを許されてるぐらいには、ちゃんと認められている人の……はず……
「……娘よ。これは、人の世の闇だ」
ジッと見上げるあたしを静かな目で見下ろして、アルルじーちゃんは言った。
「きちんと手続きをとっていれば、片親しかおらぬ子であろうとも、このようなことにはならぬ。……娘よ。おまえは知っているか？新たな命が生まれれば、本来、親の血統を元に、教会の戸籍禄に記録されるのだということを」
「……あい」
宿のおねーちゃんに聞いた話を思い出し、あたしはコックリと頷いた。
「あたしみたいに親がいなかったり、認められてない子は、孤児院が親代わりになってくれるから、それで戸籍があるんだって！」
「……そうだ」
頷いて、アルルじーちゃんは深い嘆息をついた。
「国が民を管理するために作った『所属の最小単位』……それが今日、戸籍と呼ばれるものだ。親の血統……簡単に言えば『家族』だな……その『家族』がいるのならば、家族が。いないのならば、収容されている孤児院や救貧院が『所属場所』となる。……これを最終的に管理しているのは教会なのだが、アルトリートという子供は、どの『戸』にも籍が無かった。それどころか、出生記録もない」
「なんで……！？」
あまりにもあんまりな内容に、あたしは思わずアルルじーちゃんの膝で伸び上がった。
「アルトリートは、エライ貴族の子供でしょ？　おかーさんは王族でもあるのに！」
「……それがかえって弊害になっておるな」

アルルじーちゃんはもう一度嘆息をついて、伸び上がっているあたしの頭の上に手を置いた。

そのまま軽く押されて、しおしおと体を縮める。

「アレが名乗っておったのは、レンフォードの名であろう。……だが、あの者はレンフォードの血をひいておらぬ。ゆえに、レンフォードの家系図に名が載ることもない。養子の手続きをとっていないから、レンフォード家の籍にも入っておらぬ」

「じゃあ、おかーさんの方の……！」

籍で、と言いかけて、あたしは『そのこと』に気づいた。

愕然とした顔でかたまるあたしに、アルルじーちゃんは憂いを帯びた目で「そうだ」と告げる。

「……マルグレーテは、王族だ。降嫁した王女の産んだ子は、王族とは認められん。まして、産んだ子の父親とは結婚せず、別の者の家に降嫁しておるという状態なら、尚更であろう」

つまり、おかーさんの籍には入れず……結婚した相手の家の子としても……認められていない。

「正式な婚姻をもって成された子でないが故に、アルトリートにはきちんとした籍が無い。せめて本当の父親が己の家系図に入れておれば、こんな事態にならずにすんだであろうが……」

ぼやくように呟くアルルじーちゃんを見つめながら、あたしは暗然たる思いでそれを聞いていた。

本物の王弟よりも、貴族らしい立ち振る舞いをしていたアルトリート。

彼が受けた『教育』とかは、きっと本式のスバラシイものだったに違いない。

モヤモヤッとしてたり、ドロッとしてたりで、あんまりイイ印象は無いけれど、彼の動作は貴族らしくとても洗練されたものだった。

けれど、それを与えてくれた『家』も、本当の意味では彼の家では無い。

……どこにも無かったのだ。『彼』の居場所は。

下手をすれば、孤児だったあたしよりもずっとひどい状態だろう。
『きちんとした繋がりが何処にも無い存在』
あたしは知っている。それがどういう風に表現されるのか。
アルトリートは、『幽霊』だったのだ。

28　抗う者

そこに存在しているのに、決して人からは認められない『存在』。
それを指して、あたし達は『幽霊』と呼ぶ。
人というのは、命を終えた後は魂だけの存在になり、その姿を生きている人は見ることができないのだという。
その状態を『幽霊』と呼ぶため、同じように「そこにいるのに認められない人」をそう呼ぶのだ。
この状態になるのは、大抵かつてのあたしのような孤児や、他国からこっそりやってきた後、この国に居着いちゃった人々だった。
アルルじーちゃんが言ったように、人は子供が生まれると、すぐに出生届を教会に出す。
この出生届けには、生まれた子が『誰の血をひいているか』が書かれている。
教会の神官は、提出された書類の『血筋』をもつ人の戸に、その子供の籍を新たに記載するのだという。
両親を亡くして孤児になった場合でも、血筋の誰かが生きていればそこの戸に入れてもらえる。
だが、その戸の主（家長とかそーゆー人だ）が拒否すれば、どこかの施設に登録されることになる。
子供の場合は孤児院。大人の場合は救貧院だ。
だからこそ、孤児院の院長は院内の孤児に絶大な力をもつのである。
けど、それも登録の申請・受理があってこそのこと。
他国から来た入国者の場合、普通は戸籍を得ることはない。
このへんは船乗りのにーちゃんの受け売りだが、身元を証明するものがない場合、どれだけ希望しても受け入れてはくれないのだそ

ーだ。
　とはいえ、誰かエライ人が後見についてたりすると、サクッと許可が出たりするらしい。上流貴族の伝手でナスティア国民になった人もいれば、お金にモノをいわせて戸籍を買い取る人もいるのだそうだ。
　なんと言うか……結局、世の中お金なのである！
　まぁ、それはともかく。
　あたし自身、孤児院事件の最中には、一度死亡扱いされて『幽霊』になっていた。
　アウグスタがイロイロいじってなんとかしてくれたようだが（そーいや、未だにどーやったのか教えてもらってないな……）、あのまま放っておかれていたら、たぶん、今も『幽霊』のままだっただろう。
　この『幽霊』の状態だと、ちゃんとした仕事がもらえない。そのうえ、結婚とかも難しくなるので、戸籍のあるなしは大変な問題だった。
　なによりも、ちゃんと生きてるここにいるのに存在を認めてもらえていない、というのは、ものすごく寂しくて心細い。
　誰とも繋がっていないような気がして、ひどく不安になる。
　……その『幽霊』だというのだ。あのアルトリートは。
「……名乗るぐらいは、許してやっていたのだろうな。家名を名乗るだけならば、公的な内容でない限り実害はさほど無いからな。……レンフォード家は昔から体裁にこだわる。……連れ子とはいえ、王族の血をひくあの子供に、家名を名乗らせぬほど狭量だとみなされたくなかったのであろうよ」
　沈黙しているあたしを膝にのせたまま、アルルじーちゃんはしみじみと語った。
「もっとも、正式には一族として認められておらぬのだから、どのみち狭量であろうよ。レンフォードの血統をひいておらねばならぬ、といったところであろうな」

「……そんな……」
呆然と呟いたあたしに、アルルじーちゃんは椅子に深く身を沈ませた。
「貴族とは、そういうものだ」
「……でも、そーゆー貴族の中でも、すごい爵位をもってたクラウドール家は、おじ様を養子にもらってくれた……ですよ？」
一時デスマスを失念していたことに気づいて、あたしは言葉遣いを改めてみた。
アルルじーちゃんは、どこか微妙な表情で長い顎髭（あごひげ）を撫でる。
「……アレはまた、別の事情があるからな」
そうして、膝の上でちんまりしているあたしの頭に手を置き、ぎこちない手つきでナデナデしてくれた。
「そのあたりのことは、いずれ、レンドリア自身の口から語られるであろうよ。……どうやら、秘密にしたままでいられるほど、おまえとの絆も浅いものでは無いらしい」
その言葉は大変ステキだったが、今のあたしの心には響かなかった。
アルトリートが『幽霊』。
今はただ、そのことで頭がイッパイだ。
「……おじーちゃま」
「……その呼び方は、よすがよい」
「じゃあ、アルルじーちゃん」
アルルじーちゃんの顎が落っこちた。
「アルルじーちゃんは、アルトリートがそういう境遇だって、いつから知ってたの？　……です？」
あたしの問いに、アルルじーちゃんは愕然とした顔のまま押し黙る。
次に言葉が出てきたのは、軽く十秒は経った後だった。
「……詳しく……知ったのは、まぁ……最近のことだ」
ゴホンゴホン。

「……だが、そうだな……」
変な咳払いをしつつ、アルルじーちゃんは何かを思い出す顔で言った。
「マルグレーテが私生児を産んだ時から……そうなるだろうことは、見当がついておったな」
――生まれた時から……

なら、どうして――

「……どうしてその時に、アルトリートを助けてあげなかったのです？」
あたしの問いに、アルルじーちゃんは何かを考える顔で目を閉じた。
そうして、どこか疲れたような苦笑を浮かべて言う。
「……『助ける』……か」
自嘲含みの苦笑は、すぐにため息に溶けた。
「……正直に言おう。儂は、あの当時、王女が産んだ私生児に対して、さして興味をもたなかった。……産んだと聞いて、ただ、『そうか』と思った程度だ」
ただ、『そうか』と。
――現実を受け入れただけ。

「あの当時、あやつらのすることに、いちいち口を挟んだところで意味は無かった。さすがに風聞が悪いことは、ベラやヴェルナーがフォローしておったがな。……他を押さえるので手一杯だったこともある。……だが……今となっては、ただの言い訳だな」
認めよう、と、アルルじーちゃんは呟いた。

「あの愚かな子が、哀れな道化師となった背景には、儂等の代の過ちもあることを。……だが、娘よ。生まれ育った環境に、同情を寄せるべき何かがあったとして……果たしてそれは、他者の命を奪おうとすることの、免罪になるだろうか？」

あたしは沈黙する。

小さなあたしでも分かる。

それに対する答えは――否、なのだ。

「己の命に差し迫った脅威があり、抵抗してやむなく……というのならば、深く協議せねばならんだろう。……だが、あれの事情はそうではあるまい」

「……」

「この国に、頼るべき身内のおらぬ者や、繋がりを断たれ道に迷う者は他にもおる。……だが、その全てが、己のために誰かを殺めようとしておるわけではない。――それは、何故か。……考えるまでもなかろう」

俯いたあたしの頭を軽く撫でて、アルルじーちゃんは言葉を結んだ。

「皆、己を律して生きておるのだ。生きるということは、『自由』であるということではない。生きている者同士が集まって、この世界は構成されておる。ならば、生きている者同士が触れあう場所では、必ず己の生き様と他者のそれがぶつかりあう。ぶつかりあったままであるのなら、いずれ戦は必定であろう。だからこそ、それを回避するために人は己を律する。一族で定められる掟や、国で定められる法律などは、そのためのものがほとんどだ。それを歪めて己の意志を貫こうとしてはならぬ」

……アルトリートがしたのは、まさに、それ。

だからこそ、罰しなくてはならない、と言うのだ。

――その命を。

「命は……罰したら、生きていられないのですよ？」
あたしの声に、アルルじーちゃんはただ黙って頭を撫でてくれる。
ぎこちない手が十往復ほどしたところで、深い声が降りてきた。
「……あの愚かな子供は、レンフォードの家に育てられた」
「……？」
「マルグレーテも……一応は、母親だ。王家の血をひく者としての心得などを教えておったであろう」
あたしは大きく瞬きした。
王族の血にこだわっていたアルトリート。
……その血に、本当にこだわっていたのは誰だろうか？
「娘よ。……おまえに、傷ついてでも何かを見届ける気持ちがあるのならば、あの愚かな子の思いを聞いてやるがよい」
思わず顔を上げたあたしに、アルルじーちゃんは深い眼差しで、一つ、頷く。
そして、胸に下げていた飾りを外すと、大切なものを扱う手つきで、慎重にあたしの首にかけた。
体格が違いすぎて足下あたりで揺れるそれを、あたしは両手で持ってみる。
金色の鷲を象った飾りは、見た目以上にどっしりと重かった。
「これを貸してやろう。……ルドゥインがおまえを案内してくれる。あの者とともに塔に赴き、全てをその目と耳で確かめてくるとよい。……それが良いものであれ、悪いものであれ……確かに、レンドリアの傍らにあるであろうおまえは、全てを見て、聞いておくべきなのだろうからな」
「……アルルじーちゃん」
レメクと似た色の瞳に、奥深い色をたたえてアルルじーちゃんはあたしを見る。
どこか苦笑が勝ったような笑みをほろりと零すと、偉大なる教皇サマは最後にこう言った。

「……そして、儂のことは、せめて『おじーちゃま』にしておいてくれ」

※　※　※

バルバロッサ卿がやって来たのは、おじーちゃまことアルルじーちゃんと別れてしばらく経った頃だった。

場所はアルバストロ神殿、太陽の間。

あの、疑問でイッパイな彫像のあるデカイ通路である。

「お待たせいたしました。殿下」

ジーと彫像を見上げるあたしの後ろから、ヌッとデカイ影がさしかかった。

野太い声で恭しく挨拶してきたバルバロッサ卿は、相変わらず人間としての限界にチャレンジしてるよーに大きい。いつもより格段に豪華な神官服に、特注だろうデカイ錫杖。頭の上には特徴的な形の帽子が乗っていて、いつもより神官っぽい出で立ちだった。

……いや、別に、いつもは服を着た熊サンだとか思ってませんよ？　エエ本当に。

目をキランとさせるあたしに、バルバロッサ卿はなんとも言えない微苦笑を浮かべて言った。

「猊下よりお言葉を賜っておりますが、先にお伝えしてもかまいませんでしょうか？」

バルバロッサ卿がこんな丁寧な物言いをするのは、あたしの傍に位の高そうな神官がいるせいだろう。

アルルじーちゃんと別れて以降、案内と世話を兼ねたその人が付き添ってくれているのだが、何故かその神官サンは、あたしと像を見比べてビクビクしていた。

……石像は囓っても美味しくないから、別に飛びかかったりはしないのだが……

あたしはバルバロッサ卿に向かって両手を差し出しながら、うん、

と先の問いに対する答えを返した。
バルバロッサ卿は軽く笑って、あたしをぶっとい腕に抱え上げる。
「『泣くのはレメクの前でやってくれ』とのことでございます」
……何故、泣くのが前提なのか。
その丸太のような腕に横座りして、あたしは唇を尖らせた。
「何言われたって泣かないもん」
「……だとよいのですがなぁ」
苦笑を深める熊男を見下ろして、さらにムッと唇を尖らせる。
そんなあたしの頭を大きな手でワシワシと撫でて、バルバロッサ卿は付き添いの神官さんに向かい合った。
「では、キリク殿。後のことはお願いいたします」
キリクと呼ばれた神官は、どこかホッとしたように笑みを浮かべて頷いた。
「式典のことは任されよ。……殿下のこと、よろしくお願い申し上げる」
「承知」
軽く頭を下げる相手を見下ろして、あたしは（おや？）と目をパチクリさせる。
――もしかして、この人、フェリ姫と一緒に来たとき、置いてきぼりくらった案内人さんだろーか……？
なんとなく見覚えのあるその人を見送って、あたしはバルバロッサ卿に視線を戻した。
相変わらずデカイ熊男は、ひょいと男らしい片眉を上げてみせる。
「式典、って？」
あたしの問いに、あぁ、と呟いてバルバロッサ卿は苦笑った。そうして、くだけたいつもの口調で教えてくれる。
「祭りも今日で終わりだからな。昼から式典があるんだよ」
「『終わり』！？」
あたしはギョッと目を見開いた。
なんかついこの前始まったばかりな気がしていたのだが……もう

終わり！？

「……いや……嬢ちゃんは、初日の後、三日も眠りっぱなしだったし、正直、祭りどころじゃなかったからな……」

……そーいやそーでした……

「おまけに、まだやっかい事に首つっこんでんだろ？　つーか、本気で付き添う気か？　俺ぁあんまりオススメできねぇんだがな……」

呆れ半分心配半分なその声に、あたしは大きく胸を張ってみせた。

「付き添うも何も、アルルじーちゃ……でなく、おじーちゃまに『行っておいで』って言われてるもん！」

「……ダレをどー呼んでるのかは、あえてツッこまずにおくけどな……」

妙に遠い目になりつつ、バルバロッサ卿は盛大なため息。

「……まぁ、嬢ちゃんのことだからな……どう言ったところで、やると決めたらどんな手を使ってでもやろうとするんだろーしな……」

よくお分かりで。

「どーせレメクもそれで諦めたんだろ？　でなきゃおまえさんにだけは過保護なあいつが、こんなコト許可するわけねェからな」

……おや？

「おじ様はわりと最初から好きにさせてくれてるわよ？」

過去を振り返りつつ言ったあたしに、バルバロッサ卿は「ナイナイ」と真顔で首を横に振った。

「いンや。駄目っつっておまえさんが引くよーなら、最初から駄目出ししてたはずだ。絶対引かないと分かってるから、あえて許可することにしたんだろ。押さえつけて無理やり気持ち殺させるって手もあるんだが、おまえさんにソレができるほど、あいつも鬼にゃなれねェみてぇだからな」

他の奴相手なら違うがな、とぼやいて、バルバロッサ卿はあたしが座っている左腕を揺すった。

おっと！　体が宙を浮くのですよ。

「俺も告解を聞く役目があるからな。塔には赴くんだけどよ……ま

ぁ、猊下が嬢ちゃんに聞かせたいのもソレなんだろーが……」
複雑な表情をしたバルバロッサ卿は、あたしを心配そうな目で見る。
「……嫌な思いをするぞ」
その言葉は、ひどく深い色を帯びていた。
「……俺もな、後から知らされたことが色々あってよ、正直、今、えらく気が重いんだわ。ぶっちゃけ、他の誰かに変わってほしいぐれぇなんだがよ……」
重苦しいため息をついて、彼は大きな背を丸める。
「だけどな、俺ぁこれが仕事だ。おまけに、少なからず関わっちまってる。どれだけきつかろうと、最後まで見届けるのが筋ってもんだろう。だがな……嬢ちゃん。嬢ちゃんはまだちっこい。あえて、立ち会うことはねェと思うんだ。……こんなキツイ話は、大人でも消化しにくいもんなんだからな」
心底心配そうなバルバロッサ卿の声に、あたしはお腹に力を込めた。
立派な大人である彼がそう言うほど、これから目にしようとすることはキツくてツライものなのかもしれない。
けれど――目を背けないと自分に誓ったのだ。
どれだけ現実が厳しくても、何もせず、見ることも聞くことも放棄して、ぬくぬくとした場所で微睡んだりしないと決めたのだ。
「……おじ様にも、色々きびしーこと言われたわ」
現実という名の、厳しい壁を教わった。
けれど――！
「それでも、自分の気持ちが『駄目だ』って思うのなら、傷ついてでも、もっともっと現実を見て、いっぱいいっぱい自分ができることとか、できないこととか、知らなきゃいけないんだもの」

そして、その中で探し続けないといけないのだ。
あたしがあたしであるために、進むべき道を。
「……それはな、嬢ちゃん。もうちょっとおっきくなってからでも、かまわねぇと思うんだがよ？」
うー、と唸る熊男に、あたしはキッパリと言いきった。
「今、そこに問題があるのに、そこから目を逸らしてでも、時間を待たなきゃいけない理由って無いと思うの」
「……」
「自分が傷つくのが怖くて、目を背けたり耳を塞いだりしてたら、きっと、これから先あうだろう大事なことにも、ちゃんと対応できなくなると思うの。あたしに何ができるのかは分からないし、出来ないことのほうが多いんだろうけど……それでも、後で無駄だったって言われてもいいから、全部を全部、ちゃんと知っておきたいの。知らないうちから、諦めたくないの」
レメクは言ってくれたのだ。
あたしは、何もしないうちから諦められるような子では無いから、と。
全然大きくならない体で、届かない木の枝の実をとろうと必死になっていた孤児時代の時のように、無駄だからと諦めることなく、いつだってどんな風にでもチャレンジするのがあたしだ。
そんな過去（むかし）のことなんか知らないだろうに、レメクは、あたしという人間をちゃんと分かってくれていた。
傷ついてでもチャレンジする姿勢を認め、見守ってくれているのだ。
それが『あたしらしいあたし』だと思ってくれているから。
「……そうか……」
ふと、バルバロッサ卿が声を零した。
どこか深い眼差しであたしを見つめる。
「……レメクは……おまえさんが成長するのを……」
小さな声でそこまで呟き、バルバロッサ卿はしばし瞑目した。

やがて、「やれやれ」と言いたげな顔で首を横に振る。
「……俺ぁ、それでも……まだ、ちぃーっと早いと思うんだがなぁ……」
……むむ。
「けどまぁ……おまえさんらが二人して、そういう考えなら……な」
どこか暗い目でそうぼやいて、バルバロッサ卿は大きな嘆息をついた。
「賛成はできんが……確かに、あいつと一緒にいるって言うなら、キツイ現実は真正面から見ておく必要があるからな」
「……バルバロッサ卿」
バルバロッサ卿はあたしの声にホロリと苦笑する。あたしの頭を丸ごと包んじゃえる大きな手が、ワッシ、とあたしの頭を撫でた。
「だがな……いや、だからこそ、国を治めるにゃあ、気持ちだけじゃどうにもならんことがあるのを……決して忘れるんじゃねェぞ？」
その重い言葉に、けれどあたしは頷くことができなかった。
押し黙ったあたしに、バルバロッサ卿は困り顔になって言う。
「おまえさんが来る前に……陛下もな……猊下に『処刑以外の道は無いか』と尋ねていらっしゃったらしい。つっても『光の紋章を使って』だから、姿を見せたわけじゃねェんだけどな」
「アウグスタが……？」
ふとアルルじーちゃんとレメクの会話を思い出し、あたしはこのことかと納得する。
光の紋章を使って、ということは、頭の中で声がする、アノ会話だろう。
「陛下もなぁ……国を治めるにゃあ、ちっと優しすぎるお方だからな。私心を殺して政にあたっておいでだが、時折、どうしようもなく抗いたくなるんだろうよ」
そう言うバルバロッサ卿は、今回のことに対しては、最初から抗う気は無さそうだった。
彼も他の大人達と同じく、アルトリートの処刑に賛成なのだ。

「……王様がやりたくないのに、処刑ってしなきゃいけないの……？」

あたしの問いに、バルバロッサ卿は肩を竦めた。

「他に何の影響も無いのなら、陛下がどんなことをしてても俺達ぁ文句言わねェよ」

あっさりとした言い方だった。

けれど、その裏には深くて重いものがある。

「けどな、王の血筋に手を出すっていうのは、たぶん、おまえさんが考えているよりもずっと大変な事なんだ。実際に殺されかけ、惨事が起きてるっていうのに緩い処罰を下せば、周り中になめられる。なめられる、っつーのは、第二第三の『刺客』を生むってことだからな。ただでさえ王族が少ないのに、周りの連中にせっせと刺客を送られたら、万が一があるかもしれねェ」

言われて、あたしはグッと詰まった。

（……刺客……）

思い出すのは、レンフォード家で見た黒ずくめ達だ。実際に、刃を手に襲いかかってきた彼等。

――そうだ。

下街育ちのあたしが受け取る『なめられる』と、王様クラスの『なめられる』には、明らかな違いがある。

矜持（プライド）とかじゃない。

権力とかじゃない。

そういうのでなく、王様のソレは命がけなのだ。

――なめられれば、殺される。

殺されないために、相手を殺す。

それはあまりにも簡単な図式だ。

（……アウグスタは、毒をもられたりしてるって……アディ姫も言ってた……）

もしアルトリートを処刑しなければ、そういう悪いことをする人がもっと増えるということだろう。

そういう人がいっぱいになったら、いくら強いアウグスタだって、危険だってことなんだろう。

（だから……レメク達は……）

ソレを防ぎたくて、アウグスタを護りたくて――

だから……！

（……でも……！！）

あたしは唇を噛む。

ツキンと、唇ではなく頭に痛みが走った。

（でも……！　だからって）

――今、生きている人が死ぬのを黙って見ていられるだろうか？

（……だけど……）

――だからといって、アウグスタが危ない目にあうのも……あたしは嫌なのだ。

あたしは痛みだした頭を抱え、必死に考えた。

何度も同じ事を言われ、何度も同じ事を考え、けれどこうして、何度も何度もグルグルと迷い迷って答えを出せない。

（……どうすればいいんだろう……？）

本当にどうしたらいいのだろうか？

どちらも死んでほしくない。

どちらも生きていてほしい。

そう思うのは欲張りだろうか？

でも生きていてほしいのだ。

大事にしたいのだ。命というものを。

（……どうしたら……）

――レメク。

思わず答えを求めて姿を探し、（駄目だ）と慌てて目を瞑る。
レメクは答えを出している。
国を、アウグスタの方を――レメクは選んでいた。

国を支える人にとって、たぶん、それは自然なことなのだ。
では、アルトリートは……
そして――

（……アルは……）
あたしは昨夜のアルを思い出した。
アルトリートの友であったアルは、きっとアルトリートを救おうとするだろう。
けれど――それは、もしかしたら――ナスティアの国民として、国と国王に対する裏切りになるのかもしれない。
国を護るために立つ人々と対立する意見を選ぶのなら、それはそういうことなのだ。
今、アルトリートの処刑を反対している、このあたしも含めて。
「……バルバロッサ卿……」
「ん？」
無言でのっしのっしと歩き出していたバルバロッサ卿は、あたしの呼び声に顔を向けた。
その瞳をジッと見つめ、締めつけるような頭の痛みを堪えて、あたしは一生懸命言葉を紡ぐ。
「……難しいの」

頭が痛かった。
「……生きてる人には、生きていてほしいの」
本当に……痛かった。
「でも、アウグスタが危険な目にあるのも……嫌なの……」
バルバロッサ卿は答えない。
わずかに痛ましげな目になるその人に、あたしは何故ともなく沸き上がってきた涙を堪えて言う。
「どっちも選べないの。好きな人だけ選ぶなら、アウグスタの方なの。……けど、命って、そんな風にして決めていいものじゃないと思うの」
だから、難しい。
大切なものだからこそ難しい。
「……難しいの……」
「……そうだな……」
答えが出せないのがくやしくて、情けなくて、俯くあたしに、バルバロッサ卿は労うような声を落とした。
「……俺のオヤジがな、昔、俺に向かって言ったことがある。『人生っていうのは、答えのでない問いを抱えて歩く、先の見えない夜道のようなものだ』と」
脳裏にバルバロッサ卿によく似た白髪のおっちゃんが浮かんだ。
どっしりとした厳のような偉丈夫だった。
揺るぎなくそこに立つ大木のような、決して動かぬ大岩のような

「俺達はいつだって、疑問がいっぱいなまま、それに対する答えをもたずに、ただ必死に生きていくしかない。時間とともに分かる答えもあるだろうが、きっと全部は無理だろう。……けどな、嬢ちゃん。答えの出ない問いを前に、悩み苦しんだとしても、そのことに……無駄なモンは一つも無ぇんだ」
夜の王宮を駆けた時、語ってくれた言葉と同じ響きをもって、その声はあたしの中に入ってくる。

「無様でもいい。情けなくてもいい。……例え答えが出ないままになったとしても、その悩んだことがそのまま自分の中で確固たる何かを作りだしていくだろうよ。……例えば、思いとか、信念とか、そういうのをな……」

あたしは頷いた。

ギュッと閉じた瞼の奥に、レメクの深い眼差しが浮かぶ。

……バルバロッサ卿も、レメクと同じことを言ってくれている。

あたしよりもずっとずっと大人だから、幼いあたしの我が儘に、その身勝手な意見に、真正面から向き合って、そうして、自分達が持つ何かしらの『答え』のようなものを……惜しげもなくあたしに与えてくれるのだ。

動けずにいるあたしに手を差し伸べるように。

――夜の道を照らす灯りとなるように。

（……あたしは、恵まれてる……）

あたしの大好きな人達は、あたしに対してこんなにも優しい。

こんなにも暖かい。

……だから、せつない。

……少しだけ、申し訳ない。

アルトリートには、もしかしたら、そういう人すらいなかったかもしれないのだ。

「……俺に答えられるようなことなら、いくらでも俺に聞きな。大人っていうのは、そのためにいるよーなモンだからな」

大きな手に頭を撫でられて、あたしはズピと鼻を鳴らした。

きっと、問えばいろんな答えをくれるだろう。

あたし一人では出せない色々な答えを。

けれど、アルトリートのことは、あたしが自分で答えを出すしかない。それはきっと、他の誰かに問うてはいけない問いなのだ。

大人達はすでに答えを出していて、あたしはその答えとは違う『答え』を探そうとしているのだから。

あたしは目元をグイと拭って、真っ直ぐに背を伸ばした。
のっしりと進むバルバロッサ卿の視界は、高く、広い。
いつか大きくなった時、これと同じような視界をあたしは手に入れているだろうか？
アルルじーちゃんや、アウグスタや――
レメクのような視界を。

※　※　※

王都、王宮、西の塔。
名の通り王城の西の端にあるその塔は、死刑囚の塔という忌まわしい名前が似つかわしくないほど、真新しく綺麗な塔だった。
凹凸のない外壁は白。
屋根は地上から遙か遠く、ちっこいあたしの目には、今にも尖塔に白い雲が引っかかりそうに見える。
塔の前にいるのは、番人らしい三人の兵士。二人が青いマントで、一人だけ藍色のマントを羽織っていた。
このマントの色は階級等によって決められており、小隊（ケントゥリア）の隊長は青、中隊（マニプルス）の隊長は藍、大隊（コホルス）の隊長は濃紺となっていた。
小隊は百人、中隊は千人、大隊は万人の兵士を束ねるため、青マントは百人隊長、藍色のマントは千人隊長ということになる。
バルバロッサ卿が何やら説明しているのは、藍色マントの千人隊長だった。おそらく、その人が塔の責任者なのだろう。
その間することのないあたしは、とりあえず初めて見る『西の塔』を観察していた。
足下にわずかに苔が生え、這い登ろうとする蔦がわずかにからまっているものの、塔の壁はツルツルとした白さに輝いていた。これだけ綺麗に磨かれていれば、壁を登って塔に侵入するとかいうのは無理だろう。

そもそも登ったとしても、入れそうな入り口がどこにも……
（……ん？）
ジッと見上げ続け、あることに気づいてあたしは首を傾げた。
（窓が無い……？）
角度のせいかもしれないが、あたしのいる場所から見上げると、塔の表面はどこまでも真っ白い壁に見えるのだ。
兵士達が護っている入り口以外には、塔の中に入れそうな場所がまるで無い。
そう、窓すらも見えないのである。
（……夕日は見えるんじゃなかったっけ……？）
夕日が見えるのなら、西側に窓があるはずなのだが……
（んんん？）
あたしは大きな塔を見上げたまま、ぐるりと一周を回ってみた。
途中で気づいたバルバロッサ卿が「あ」とか言ってたけど、とりあえず無視して回ってくる。
（てゆか……けっこう……大きいわよ！？）
一周するだけで軽く息がきれた。
ヒハヒハいいながら元の位置に戻ったあたしに、呆れ顔の巨熊がワシッと手を伸ばしてくる。
「殿下。突然遊びに行かないでいただけませんかな」
失敬な！！
「バルバロッサ卿！　窓が無いのです！」
「……あぁ……」
摘み上げたあたしを腕に座らせながら、バルバロッサ卿は「なんだそのことか」と言いたげな顔になった。
千人隊長がチラチラとあたしを見上げ、何やら手元の書類に書き込んでいる。
それを無視して、バルバロッサ卿はあたしに言った。
「殿下は初めてなので驚かれたでしょうが、西の塔には、窓と言えるような窓は無いのですよ。……まぁ、百聞は一見にしかず、と言

いますからな。実際に入ってご覧になるのが早いでしょう」
周りに他人がいるせいで、彼の言葉遣いは丁寧だった。
……そのわりに、やってるコトはけっこういつも通りだったりするのだが。
あたしを腕に、そのままノッシと塔の中に乗り込もうとするのを見て、隊長が慌てて立ちふさがった。
「お、お待ちください！　バルバロッサ殿っ」
あわや激突という寸前で立ち止まり、バルバロッサ卿は胸より低い位置にある相手の頭を覗き込む。
「なんだ？　許可証は見せたはずだが？」
千人の部下をもつ隊長さんは、その迫力に半歩後退った。
「い、いえ、大神官殿の方はかまわないのですが、そちらの……」
ほとんどのけぞるようにしてバルバロッサ卿を見上げ、次いであたしに視線を向けた隊長さんは、困り顔で言った。
「……そちらの、メリディス族の方の登録がまだなのですが」
登録？
首を傾げるあたしをチラと見てから、バルバロッサ卿はあたしの足あたりで揺れてる黄金鷲の飾りを摘む。
そうして、どこか厳かにこう告げる。
「……このお方は、ベル・ステラ・アルヴァストゥアル殿下であらせられる。先だって女王陛下の第十二王女となられた方で、猊下から特別に『真実の翼』を託されておられる」
その言葉を聞いた瞬間、三人の兵士がビシッと敬礼した。
「失礼いたしました！」
それはほとんど反射的な動きだったのだろう。
食い入るように目の前で揺れる黄金鷲を見ながら、彼等は錆びた絡繰り人形のような動きで飛び退く。
「通らせていただく」
「はは ッ！！」
そのまま平服しそうな勢いの三人をそのままに、「？」を飛ばし

ているあたしを腕に乗せたまま、バルバロッサ卿は塔の中に乗り込んだ。
　重い音をたてて閉じる扉を振り返りつつ、あたしはノシノシ歩く巨熊に問うてみる。
「バルバロッサ卿……登録って？」
　バルバロッサ卿は、どこか悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「……この塔に入るには、本当なら特別な許可が必要なんだよ。で、それを書類で提出して、塔の記録簿に登録しなきゃならねェ決まりがあるんだ」
　……って……
　思いっきり無視してなかっただろーか？　あたし。
「嬢ちゃんの場合は別格でな。……それより、見てみろや、前」
　説明の途中で話を変えられ、あたしは眉をひそめた。
　きちんと説明をしないとは、どーゆーことだろーか。だいたい、前を見ろと言われても、どーせ階段しか無いのに……
　……いー……
　いい？
「……うぇぁ……」
　そちらを見た瞬間、あたしはポカンと口を開けてしまった。
　真正面に、巨大な彫刻が佇んでいた。
　白い塔の中の、白い彫刻。
　大きなバルバロッサ卿よりも更に大きなそれは、天秤と錫杖を持つ、真っ白な女神だった。
　不思議なことに、その女神は神殿で見た数多くの女神よりも、より人間っぽい顔をしている。
　それはおそらく、その目が憂いを秘めているからだろう。
　顔そのものは神殿の神像と同じく無表情なのに、その瞳だけがわずかな翳りをおびていた。
　まるで、そこに悲しむべきものがあるかのように――

（……綺麗な……女神さま……）

流れるような白く長い髪に、たおやかでありながら豊かな肢体。

下から見下ろすあたし達をわずかに伏せた目で見下ろして、左手の天秤で何かを量っている。

その右手が持つ錫杖は、握る者の手すら傷つけるように、鋭い棘をもつ蔦がからまっていた。

「――魂の審判者。全ての裁判を司る女神だ」

ポカンと見上げるあたしに、バルバロッサ卿が説明してくれる。

口を半開きにしたままそちらを見ると、厳かな表情で彫像を見上げたまま、バルバロッサ卿は言葉を紡いだ。

「別名を『真実の女神』と言ってな、黄金の鷲に化身すると伝えられている。おまえさんが猊下に借りてる胸飾りがソレだ。……名を『真実の翼』という」

指で示されたそれを見下ろし、あたしは金色の鎖を手繰り寄せた。

両手で持ち上げると、バルバロッサ卿は恭しい表情で眼差しを細める。

「数あるナスティアの秘宝の一つでな、『国宝』とされている品だ」

国宝!?

「……コレ!?」

「そうだ。そして、『月の錫杖』『暁の盾』と共に、エラス教の至宝とも言われている。……陛下がお持ちの『太陽の錫杖』『光の宝冠』『宵闇の剣』が王位継承権の証であるのと同じように、『月の錫杖』『真実の翼』『暁の盾』は教皇の象徴だからな」

あたしはアワアワと手の中の重いブツを左右に宙に浮かせた。

ぶら下がる位置が位置なもんだから、あたし、何度か蹴っちゃいましたよ!?

「それを持つ者の前にあっては、必ず真実を述べねばならず、その言葉に偽りがある時は、その罪に応じた罰が下される。……そう言われている宝だ。また、そいつを下賜された者は、猊下の名代とし

て扱われる」
――それは、つまり……
「今のおまえさんは、教皇アルカンシエル猊下のご威光を背負っているわけだ」
……ぅぉー……そんなのを蹴っちゃったー……
「さっきの兵の態度をみただろ？　本当なら、西の塔に入るには細けぇ登録が必要なんだが、今のおまえさんは猊下の代理だからな。そこらへんは免除される。今のおまえさんの言葉は、猊下の言葉だ。……我が儘し放題だぞ」
ニヤリと意味深に笑われて、あたしはブルブルと体を震わせた。
蹴っちゃった事実も怖いが、宝の持つ意味はさらに怖い。
周辺諸国にまで影響力を持つ教皇の力。
そんなものを与えられても、正直ヒジョーに困るのである。
強い力を持つということは、それに対する責任も持つということだ。
自分がした行いの結果は、自分で対処しなくてはいけない。借り物の力で何かをしたとして、果たして、結果を自分だけで受け止められるものだろうか？
（無理！！）
考える前にそう直感した。
自分がやったことの後始末すらロクにできないあたしが、もっと強い人の力を借りて何かをして、その後始末なんてできっこない。
それはしてはいけないことなのだ。
（……でも……じゃあ……）
――ふと、あたしは顔を俯かせる。
（……じゃあ、アルトリートを助ける、っていうことは……？）

それは、自分が願って、もし叶えられたとして……後々のことを自分で対処できるものだろうか？
アウグスタや、国や、他の人達に影響の出ることなのに……？
（……）
あたしは唇を噛んだ。
……頭がまた痛くなった。
「……猊下も、嬢ちゃんなら預けても大丈夫だと思ったから、貸してくれたんだろうな」
俯いてしまったあたしの頭をポンと撫でて、バルバロッサ卿はゆっくりと歩き出す。
その振動にも痛みを感じて、あたしはギュッと目を瞑った。
――あたしには、何の力もない。

アウグスタやアルのために、アルトリートを助けようと動いていても、それは結局、誰かの力を借りてのことだ。自分の力で出来ることじゃない。
そして、その後の結果をきちんと受け止められる力すら――あたしには無いのだった。

※　※　※

西の塔の中は、簡単に言えば西側に作られた部屋と、その中を抉りながら上の階に向かう螺旋階段で出来ていた。
階段は意外と広く、大きなバルバロッサ卿でも悠然と通ることができる。とはいえ隣に誰か並んで一緒に登るのは無理だろう。
なにせバルバロッサ卿は、普通の人の三倍ぐらい大きいのだから。
「囚人達には、一人一部屋与えられる。これはどの階級の人間であろうと同じだ」
階段を踏みしめながら、バルバロッサ卿は塔のことについて説明

してくれた。
「食事は日に二回。朝と晩。パンとスープだけの質素なもんだ。これも身分にかかわらず同じ献立でな。……豪勢なのが出てきたら、処刑の前日か、当日っつーことだ」
ズキズキする頭を押さえて、あたしは首を傾げた。
「豪華なのが出たら……なの？」
「あぁ」
頷き、バルバロッサ卿は暗い目で言った。
「……だいたいが夜に出される。……最後の晩餐ってやつだな。料理長が特別に腕をふるうこともある。――聞いた話、べらぼうに美味いモンらしい」
喰いたいとは思わないがな、と言われて、あたしは自分のお腹を見下ろした。
そういえば、あたしは朝ご飯を食べずに来ていた。
そのことでレメクが心配そうにしていたのを覚えている。
けれど、お腹は空いていない。――どうしてかは、分からないけれど。
「美味いモンを喰って、未練なく去れってことなんだろうな。間違っても残った人間を恨むな、と。……罪を犯した人間に対する最後の施しでもあるが……まぁ、賛否両論でな。罪人にそこまで情けをかけるな、という意見もあれば、最後ぐらいは施してやれという意見もある。……難しいもんだ。こういう問題はな」
バルバロッサ卿は一歩一歩踏みしめながら歩いていく。
ぐるぐると。ぐるぐると。
永遠に続くかのような螺旋階段を。
「人の命は何物にも代え難い。神様の教えでもそうなっている。……だがな、それを無下にする連中が罪を犯した時、その命までをも庇うことはできねぇ」
一歩。
「……人は弱いもんだ。弱いからこそ、害ある者を傍に置いておく

ことはできねぇ。自分達の世界から退場してもらわなきゃならねぇ、と思う。……それが、たぶん、処刑の根元にあるものだろうよ」

一歩。

「罪には罰を。命を奪おうとする者には、相応の対価を。自ら刃を振るう者は、その刃で自分が倒れることを覚悟してなきゃならねぇ。……って、これは俺の言葉じゃねぇけどな」

死を待つ人のいる場所へ――

「……おじ様の言葉？」

「……まぁな」

最後の階段を登りきって、バルバロッサ卿は止まった。

高い塔の果て。最上階。

アルトリートの牢だった。

「……なぁーんか……ヤ～な予感すんなぁ……」

階段を登りきった場所に立ったまま、バルバロッサ卿は胡乱な表情でそうぼやいた。

嫌な予感。

それはあたしにも感じられた。

――なにせ、牢の前に数人の兵士が転がっているのだから。ビンビンってなもんだろう。

……ただでさえ、頭が痛いってゆーのに……

「あ～あぁ……全員、百人隊長クラスだってぇのに、ぐっすり寝ちまってまぁ……」

青色のマントを羽織った兵士達を見下ろしながら、バルバロッサ卿はさして緊張してない足取りで牢へと踏み出した。

牢は巨大な石の壁と、頑丈な鉄格子で出来ている。

仕切りが鉄格子なのは、中の様子がよく見えるように、という理

由からだ。
塔の西側に部屋をあてがっているため、東側は通路と階段が主。
そしてその西側の壁にも、窓と呼べるような窓はない。
そう――　本当の意味では、西の塔に窓は無いのだ。

かろうじて煉瓦一つ分ぐらいの穴がいくつか空いているだけで。
「……まぁ、『魔法使い』殿が相手なら、それもしょうがないってなモンだろーなぁ」
その牢の前に立って、バルバロッサ卿は嘆息混じりにそう言った。
牢屋の中には三人の男。
どこか緊張した顔の一人と、達観したよーな顔の一人と、何を考えているのかサッパリ分からない顔のヒト。
「……おとーさま」
あたしの声に、例えようもなく麗しいそのヒトは、にっこりと微笑んだ。
「ふふふ。バルバロッサ卿が来るのは予想の範囲内でしたが、お嬢さんは予想外でしたねぇ」
……むむ。
「あたしだって来るのです！」
ビシッとバルバロッサ卿の腕の上で伸び上がり、即座に走った頭痛にあたしは小さくなった。
ポテトさんは軽く目を瞠ってから、なぜだかしみじみとした目であたしを見る。
そうして、あたしの持つ『黄金鷲』に気づくや否や、なんとも言えない顔で苦笑した。
「……あのシエルを動かしましたか。一国の国王ですら、難しいことですよ」
……アルルじーちゃん……カワイイ呼び方されてるのだな……
そーいやそんな名前がどっかにあったな、と思いつつ、あたしは頭痛を堪えて牢の中を観察した。

最上階のせいだろう。その部屋は、他の牢よりも少しだけ広く作られている。

簡素なベッドに、質素な椅子とテーブル。

端っこの方には、大きな木箱がドンと置かれている。そこはかとなく漂ってくる臭いから察するに、たぶんおトイレだ。

窓と呼べるような窓が無いわりに、牢の中はかなり明るかった。

その光源は、牢の両端にある『光の紋様珠』だ。

火を使う類の灯りは無く、そのせいで空気もほとんど濁ってはいない。蝋燭や松明といった消耗品を使わないのは、火災注意というよりも経費削減だろう。

……アウグスタ。とことんお金ケチってるんだな……

そんな牢の中、ポテトさん達と対峙するアルトリートは、捕まえた時と同じ服を着ていた。

ただし上着（ジェストコール）は無く、靴も無い。

捕まえた時にはどちらもあったのだから、これは牢に入れられる前に取られたということだろう。

――アルトリートは、静かな表情で立っていた。

昨日見た時の切羽詰まった色も、いつも感じていたドロッとした印象も、その表情からは感じられない。

ただ、風のない湖にも似た静けさでそこに立っている。

――むしろ、彼と対峙しているアルの方が、よほどヒドイ表情をしていた。

「……ちみっちょ……」

あたしを見て、ポテトさんの横にいたアルは呟いた。

その苦しげな表情に、あたしも同じ顔になる。

上着を脱いだ彼は、ヤな予感を覚えるほど、前に立つアルトリートとよく似ていた。

そう……こうして見比べてみても、姿形だけなら見間違いそうになるほどに。

（……アル？）

嫌な予感がした。

その予感を裏付けるように、バルバロッサ卿も眼差しを鋭くする。

そうして、声を低めて問いかけた。

「……入れ替わるおつもりですかな、殿下」

「また！？」

ギョッとなったあたしに、「また、って言うな！」とツッコむアル。そのくせギクッとした顔なのだから、彼のツッコミは条件反射みたいなもんなんだろう。

アルトリートの方は、相変わらず一ピクリもない静かな表情だが。

「そんなことをして、いったいなんの解決になるというのですかな？　殿下」

あたしを腕から降ろしながら、バルバロッサ卿は牢へとさらに詰め寄った。

動揺し、気まずげに顔を俯かせるアルの表情に、あたしは眉を下げる。

――解決がどうとか、そんなこと……彼は考えていないのだ。

考える余裕なんて、そもそもないのだろう。

無理やり眠らされた後、いつ起きて、どのようにしてここに来たのかは分からない。

けれど、この場の様子から察せられるものはあった。――直前まで眠らされたままだったんだろうな、ということとか。

――なぜなら、アルの表情は、昨日と全く変わっていなかったから。

「……なるほど、お二方は、こうして見ても判別がつきにくいほどよく似ていらっしゃる」

深い嘆息を吐きながら、バルバロッサ卿は軽く俯くようにして両腰に手をあてた。

「王宮に人外魔境が揃っていなければ、すり替わりも最初から上手

くいっていたでしょうな」
そして、どっしりと牢を挟んで対峙する。
その威圧感に、アルが気圧されたように身じろいだ。
「ですが、もはや不可能であることはご存じのはず。無駄なことはおやめいただきたい。……陛下や、レメクの気持ちも考えていただければ幸いですが」
「……ッ！」
あえてその二人を挙げたバルバロッサ卿に、アルは目に見えて狼狽した。
アルトリートの方は相変わらず静かな表情で、その対比が妙に印象的だ。
「……アル」
あたしは鉄格子に手をかけ、背伸びしながらアルに声をかける。
先程からつきまとう頭痛が、さらに痛みを増した気がした。
「アルはやっぱり……アルトリートがいなくなるぐらいなら、自分が死んじゃいたいの？」
アルは唇を噛み、逃げるように足下へと視線を逸らした。
「自分が原因だから、自分を消しちゃいたいの？」
あたしは、その表情をジッと見上げ続ける。
アルは答えない。
だが――その表情だけで、彼の答えは明らかだった。

「……短慮ですな」
遠慮無く断じて、バルバロッサ卿は深い嘆息をつく。厳しい表情には、幾分呆れが含まれていた。
「……ロード。あなたも、こういう面倒なコトに首をつっこまないでいただきたい」
「おや。おやおやおや」
バルバロッサ卿に苦言を向けられて、ポテトさんは面白そうに笑った。

「私はただの付き添いですよ？　陛下の許可をとって、彼をここに連れて来ただけです」
「……見張りが眠ってるのは、どーゆー理由ですかねぇ」
「そこはほら。いつものごとく」
言ってニコリとスバラシイ美貌を微笑ませる相手に、はぁ～、とバルバロッサ卿は深いため息をついた。
「……分かっていて武器にされる理由は何ですか、と、問うているんですがねぇ？」
「ふふふふふ」
バルバロッサ卿のチクチクした揶揄も、ポテトさんには何処吹く風だ。
むしろウレシソーに笑うところを見ると、バルバロッサ卿の追求がすこぶる嬉しいらしい。
前々から思ってたが、やはりポテトさんはイロイロと変態さんだった。
「……なにかお嬢さんが失礼なコト考えてますね」
そして勝手に心を読みやがるシツレーさんだった。
目をキラリと光らせるあたしに、ポテトさんは軽く肩を竦める。
そうして、アル達とあたし達をそれぞれ見比べ、彼は口元に笑みを浮かべ直した。
「……まぁ、私としてはねぇ……。所詮、人の世の政よりも、自分の興味のほうが重要でして」
……今、本気で言ったな……ポテトさん……
「……大法官として、いかがなもんですかな。それは」
さすがのバルバロッサ卿も、これには苦虫を噛みつぶしたような顔。
こめかみを揉みながらの台詞に、ポテトさんは薄い亀裂のような笑みを浮かべた。
「人の子の地位に興味はありませんよ。ご主人様がそうしろと仰っているから、あえて黙って受け取っているだけです。そんなものを

失っても、私は全く困りません」
……目がタノシソーに輝いてる。
「困るとすれば、それこそ周囲の方々でしょう？　無職であった当時、頼むからこれを持って大人しく『王宮に』閉じこもっていてくれと、さんざん拝み倒されましたし」
……たぶん、拝み倒したのはヴェルナー閣下とかだろう。
なんとなくそう予想して、あたしはしみじみと閣下に同情した。
王宮の面倒そうな物事は、だいたいあの人に集まってる気がする。前の王様や妹姫サマのこととといい、当時の閣下達はそれはそれは大変だったに違いない。
今のあたしも頭痛もちだが、きっとかつてのヴェルナー閣下もそーだったんだろーな……
「……確かに、あなた様はどの地にあっても波乱の芽となりそうですからな」
「ふふふふふ」
バルバロッサ卿の厳しい眼差しに、ポテトさんは嬉しそうな超笑顔だ。
「そんなに褒められても、何もしてあげられませんよ？」
……別に誰も褒めてはいないと思うのだが。
「それで、『魔法使い』殿はこの二人に大変興味があるということですかな？」
あえてポテトさんの発言を無視したバルバロッサ卿に、ポテトさんはあっさり頷いた。
「そうですね。人がどこまで自分の『我』を押しつけあえるのか、興味があります。その結果、どのような事態が起こるのか……そこまで考えて成しているわけではない場合、特に」
意味深なその声と眼差しに、アルが拳を握りしめた。
誰のことを言っているのか……彼自身にも分かっているのだ。
――ただ、それでも己の願いを曲げられないだけで。

「……アル」
あたしはアルに声をかける。
けれど、それ以上、かけられる言葉などあるはずもなかった。
バルバロッサ卿もアルへと視線を戻し――けれど何も言わずに、ただ見守る。
彼が次に何を言うのか。……それを見定めるかのように。
アルは顔を上げた。
何かを必死に祈っているようなその表情は、ひどく嫌な予感のするものだった。
けれど彼が何かを言うよりも早く、アルがただひたすら真っ直ぐに見つめる相手は口を開いた。
相変わらず微動だにしない、静かな表情で。
一言。
「帰れ」
――と。

29　永遠の繋がり

何を言われたのか、一瞬、分からなかった。
ポカンとしたあたし達の前、愕然とした顔で突っ立っていたアルは、凍りついたようにアルトリートを見つめる。
――アルトリートの表情は、依然として静かだった。

昨夜の狂態が嘘のように、ひどく泰然とそこに立っている。
「なに……言ってんだよ……アルトリート」
カラカラに乾いた声で、アルは声を絞り出した。
衝撃の深さを物語る声音に、あたしもギュッと唇を引き結ぶ。
「なぁ……今、どういう状況か……分かってんだろ……？」
後ろによろめきかけた足が、危ない足取りで前へと踏み出された。
硬い石の床が乾いた音をたて、それは牢の中で奇妙に大きく響く。
（……アル……）
あたし達は、思わず息をつめて二人を見守った。
けれど、何かに縋ろうとするアルの悲痛な目に対し、呼びかけられたアルトリートの目は、どこか作り物めいた冷たい色をしている。
「……ボクは、帰れ、って言ったんだ」
「……ッ」
「……聞こえなかったのか？」
静かな拒絶に、アルの顔が歪んだ。
それは、誰にとっても意外な言葉だった。
凍りついているアルのやや後ろで、ポテトさんだけが面白そうに目を細めている。
「……これは意外ですね。そちらから拒否がきますか」
アルトリートは一瞬だけポテトさんを見たが、すぐアルに視線を戻した。そこにいる超絶美形も、今の彼にはどうでもいいことらし

い。
アルトリートの目は、最初から、ずっとアルにだけ注がれていた。
「……言っておくが、クリス、ボクはおまえのことが嫌いだ」
ただし、その瞳にあるのは、ハッキリとした拒絶だけ。
「ボクに似てるくせに馬鹿すぎる、その顔を見るのもうんざりだ。どれだけ躾ても下街くさいし、要領も悪いし、微妙にトロくさいうえ、押しも弱い。小さなことにこだわりすぎて周りを見ることもできないし、自分の行動の先に何が待ってるのかを想像することもできやしないし、今の自分に何ができて何ができないのかも分かっちゃいない」
思い当たる節が多々あるのか、アルの表情(かお)が情けないモノになる。
アルトリートはたたみ掛けるようにして言った。
「結果が出ている状態で、今更、ノコノコとここにやって来るか？処刑の身代わりなんか申し出て、それをボクが受けるとでも思っていたのなら、こんな侮辱はないぞ」
静かな表情の中、そこにだけ激しい怒りを込めて、アルトリートは自分によく似たもう一人の『アル』を睨みつけた。
「王族の血を狙えば死罪。そんなこと、最初から分かっていた。おまえが邪魔だと言われ、話を進められた時から、ボクは生きるか死ぬかの二択を受け入れていた。おまえを殺せなかった時は、ボクが死ぬんだと覚悟を決めていた！」
ふいに歩み寄り、無造作に伸ばされた手がアルの胸ぐらを掴む。
一瞬バルバロッサ卿が動きかけ――すぐに構えを解いた。
分身のような相手を睨み据えて、アルトリートはハッキリと感情を露わにする。
どこか悲しげに歪んだ、怒りの表情に。
「そうでなくて、命のやり取りなんかできるわけがないだろう！」
（……ぁ……）
あたしは、その声に思わず息を呑んだ。

その激しさは――　思いの裏返しだった。

だからこそ、あたしは自分の思い違いを悟らずにはいられなかった。

アルトリートは――アルとの思い出を失っていたわけじゃなかったのだ。

むしろ、覚えていたからこそ、あれほど追いつめられた表情をしていたのだ。

大切だと――　本当には、大切だと思っていたからこそ。

「全部、終わったんだ。――いいか？　三度は言わない。全部、終わったんだ！　もうおまえがどうこうできる問題じゃない。おまえにはそこまでの力はない。だから……帰れ！」

キッパリとした言葉に、あたしはよろめくようにして牢から離れた。

――あたしは間違っていた。

根本的なところで、アルトリートという一人の人間を見間違っていた。

わずかな情報だけを鵜呑みにし、本当のことに気づくこともできず、駆け足で全てを明らかにしようと間違った道を突き進んで――

（……あたし……達は……）

取り返しのつかない間違いを……したのだ。

（……大事なことに……気づいてなかったんだ……）

アルは言っていた。

幼なじみである彼を信じたいのだと。

アディ姫は言っていた。

アルとアルトリートにあった暖かな時間は、間違いでは無いのだと。

状況は揃っていた。

偽りの名前。入れ替わっている事実。命を脅かされた現実。罪を犯す理由になりそうな事情。

けれど――　抜け落ちていたのだ。最も大事な部分が。

アルトリートが、アルに、明確な殺意を抱いていたかどうか、という部分が。

（本当に……殺したいって思っていたなら……）

そして自分が成り代わって、生き続けたいと思っていたのなら――

―

最後まで悪あがきをするはずだ。

チャンスがあるならそれにすがるはずだ。

自分が生き残って、相手を殺す道を選ぶはずだ。

そもそも、最初に自分の命を天秤にかけるような、そんな覚悟を決めたりはしないはずだ！

そう、かつて、エットーレが断罪の間際にレメクにすがりつこうとしたように……往生際悪く命に固執するはずなのだ！！

（殺したくてたまらなかったんじゃ、ないんだ……）

憎しみで刃を握ったわけではない。

そういう、『殺意』によって起こした罪ではない。

でも、それなら――どうして、もっと別の形で終わらそうと思わなかったのだろうか？

邪魔でいなくなって欲しいのなら、こっそり家を出るとか、旅に出るとか、してもらうっていう手もあったんじゃないだろうか？

アルもアルトリートも、もともと大勢の人の前に顔を出しているわけじゃない。

シーゼルやフェリ姫みたいに、すごく沢山の人に『知られている』っていうわけでも無いはずだ。

なら、わざわざ殺そうとしなくてもよかったはずだ。
そう……わざわざ……
（……わざわざ？）
――そこまで考えて、あたしは愕然とした。
（……待って……今、さっき、アルトリート、変なコト言ってた……）
「……『邪魔だと言われ』……『話を進められた』……？」
ぽつりと呟いた声が、牢の中に響いた。
呟いたあたしに、牢の向こう側の人達がこちらを見る。
その視線を感じながら、あたしは呆然とアルトリートを見上げた。
――アルルじーちゃんの声が、あたしの頭の中でグルグル回った。
上手く利用され、自ら処刑台に登ってしまった、哀れな道化師。
嗚呼、そうだ。
昨日、狂態を晒したアルトリートに、アディ姫は言っていた。
――誰に、何を、言われたの？　と。
「……誰……なの……？」
呟くあたしに、アルトリートは一瞬だけ眉をしかめた。
「……誰が、アルが邪魔だって、殺さないといけないって言ったの……？」
誰が、彼をこの最悪な状況へ向かうよう、最初に仕向けたの……？
あたしの声に、アルは大きく目を見開いた。
アルトリートは視線を逸らす。
ポテトさんは困ったような顔で小首を傾げ、そして――
「……レンフォード公爵だ」
バルバロッサ卿が、その人物の名をあたしに告げた。

振り仰いだあたしに、バルバロッサ卿は険しい顔で唇を引き結んだ。
その瞳には、ひどく苦い色と……わずかな憐憫がある。
「……レンフォード公爵だって……？」
思わずバルバロッサ卿を振り返ったアルは、呆然と呟いた。
その前にいるアルトリートも驚いた顔でバルバロッサ卿を見ている。だが、おそらく彼の驚きは、アルのソレとは違う種類のものだろう。
「……どういうことだよ……？」
のろのろと、アルは黙って立つアルトリートに視線を戻した。
アルトリートは答えない。
かわりに、顔をしかめて俯いた。
「……なんで黙ってんだよ……なぁ！　公爵がどうして……だいたい、あの人は、今回、俺達が王都に行くのに反対してた人だろ！？　どういうことだよ！？」
「……うるさいな」
「アルトリート！」
必死なアルに、アルトリートは面倒そうなため息をついた。
アルではなくバルバロッサ卿に視線を向け、どうしてくれるんだと言いたげな目になる。
バルバロッサ卿は軽く肩を竦めた。
「今更、庇うような間柄でもねェんだろ？　どうせすぐに公になる」
口調がいつもの熊さんだ。
「……それ以前に、どうして知ってるんだ？」
「何かオカシイ、ってんで、姫さんが調べてな」
「『姫さん』……？」
思わず口を挟んでしまったあたしに、バルバロッサ卿は苦みを堪えるような顔で微笑んだ。
「アデライーデ姫だ。……状況が揃いすぎてるのが気になって、そ

こら中走り回って調べたらしい」
「アディねーさまが……？」
あたしの声に、バルバロッサ卿は頷く。
あたしは首を傾げてしまった。
「でも、アディねーさま、アルのこと護ってたんじゃ……？」
少なくとも、レメクはそう言っていたのだが。
「私に代わりを頼んだのですよ、彼女は」
あたしの疑問に、牢の向こう側でポテトさんが苦笑しながら言う。
「取引をもちかけられましてね。……彼女はずいぶんと頭がいい。この私をどうすれば動かせるか、そして、どういう風にすれば有効に利用できるのか……この場にいる誰よりも理解しています」
意味深な笑みを浮かべながらも、どこか感心した風にポテトさんは言った。
あのレメクですら協力要請を躊躇する相手に、アディ姫はあっさり取引をもちかけたらしい。それはポテトさんからしても、感嘆するようなことだったのだろう。
剛胆と言うべきか、アディ姫ならやりかねない、と言うべきか……いずれにしても、普通の人には決してできないことだった。
「それで起きた時、あいつ、いなかったのか……」
それなのに、ようやくそのことに気づいた、といった顔で、アルは呆然と呟いた。
なにやらポテトさんが気の毒そうな顔で、明後日の方角に視線を馳せた。
「……もうちょっと気にしてあげてほしい気がしますね……どーも……」
アディ姫を苦手にしている彼だが、別に嫌いだとかいうわけではないらしい。声は多分に同情含みだ。
「と言うか、アデライーデ姫はいったいどういう取引をもちかけたんですかね？」
「秘密です」

胡乱げなバルバロッサ卿に、ポテトさんは同情顔から一転、唇に人差し指を当ててニッコリ。
実に嘘くさい笑顔の相手に、熊男さんはあっさりと追求を諦めた。
「まぁ……あの姫さんなら、心配するよーな事ぁ無いと思うが……」
「それよりも、あいつ、どうしてそんなこと……だいたい、レンフォード公爵がどうとか、いつ気づいたって言うんだよ？」
不安と困惑を混ぜ合わせたような顔でアルが言い、ポテトさんが微妙な同情顔で遠い目になる。
無言の彼のかわりに答えたのは、やっぱりどこか同情顔なバルバロッサ卿だ。
「事が終わっちまった後……だな」
「終わった後……じゃあ、あの後か」
あの、と言うのは、たぶん、彼が眠らされた後ってことだろう。
「そう……だよな。それまで、そんな素振りなかったんだもんな……」
呟く彼に重い表情で頷き、バルバロッサ卿はぶっといため息をついた。
「……つーかな……俺等全員、じつに上手いぐあいに動かされたからな……」
「そうですねぇ……実に上手い具合に動きましたよねぇ……とはいえ、あれだけきちんと『終わった』後に、『違和感を覚えれた』のはさすがだと思いますよ」
軽く肩を竦めて、ポテトさんはあたしの方にチラと視線を向ける。
「お嬢さんも、なんとなく気づいていたようですし」
（あたし……？）
「ご主人様に噛みついた後、言ってたでしょう？　誰が、二人の間を壊したの、とかなんとか」
あたしは（あぁ）と納得した。一眠りしちゃったせいで記憶が薄ボンヤリになっていたが、確かにそんな話をしていたのだった。
「ちみっちょが……？」

アルに目を向けられて、あたしは痛む頭を堪えてしょんぼりと身を縮こまらせる。

「……アルトリートとアルが、最初から自分たちの境遇を知ってて、それでも友達だったのに……どうして途中でこんな風に悪い方向に行っちゃったのか、不思議だったの」

「……それは……」

言葉に詰まったアルに、あたしは一生懸命考えながら口を開く。

「どこかにきっかけがあるんだとしたら、それはどこだったんだろう、って思ったの。普通にしてたら、きっといつまでも同じ日常だったと思うの。なら、誰かが、間で何か言ったんじゃないかな、って」

アルだけでなくアルトリートも驚いた目でこちらを見て、あたしはその瞳を見つめて言った。

「人と人の間を壊すのは、何かの行動や、誰かの言葉なんだと思うの。互いの言動や、思いのすれ違いだってそうだろうけど……でも、もしそうなら、どうして『今』それが表立っているのかが分からなかったの。だって、アルは最初から最後までアルトリートを信じてて、大好きだったんだもん。長い間ずっとすれ違って不仲になってたのなら、あんな風にはならないでしょ？」

真実を見抜く『瞳』をもつアル。

その彼の前で、偽りを演じるのは並大抵では無いだろう。

そうして、アルトリートにはそこまでの演技力は無いと思うのだ。

アルは盲目的なまでにアルトリートを信じていたけれど、それでも、彼には真実と向き合う強さがあった。

だから、偽りがもっと前から発生していたのなら、あの時、ああまで無心に信じることはせず、辛くてもそこにある真実を探そうとしただろう。

なら、彼等の間に一方的な溝が出来、アルトリートが偽りの仮面でアルに接したのは、ごくごく最近ということになる。

人が一瞬でそんな風に変わってしまう何かがあったとして、それ

をもう片方が知らないということは有り得ない。
なれば、どうしてなのか。
答えは簡単だ。
誰かが間に入って、片方にだけ何かを囁いた、ということなのだ。
例えば悪意や、害意や……心の隙間に忍び込む毒のような言葉を。
「……でも、誰かは分からないし、そもそも、そういう人がどこにどういう風にいるのか、あたしには分からなかったけど……」
アルトリート達の人間関係なんて、あたしが知ろうはずがない。
けれど、あらゆる情報を知ることに躍起になっているアディ姫は、何かを知っていたのかもしれない。
けれど――それは、大事な局面には役に立たなかったのだ。

「まぁ、今回は相手が悪かった、というところですね」
今ソコにある現実を、ポテトさんはそう評した。
ハッとなって見るあたしに、彼は困ったような顔で言う。
「情報というものは『完全に』『ありとあらゆる全てを』把握するのが難しいものです。そもそも、人の手に集められる情報というのは限られています。全知全能とか言う、人が創り出した希望と妄想と願望が入り交じった『神様』ならどうか知りませんが、全ての出来事を全部知りうるだなんてことは、人ならざる者にだって無理な話です」
それは、例えば、ポテトさんですら、全てを把握できていなかったということだろうか。
ジッと見つめるあたしからわずかに視線を逸らせ、ポテトさんは目を閉じる。
その唇が小さく歪んで、皮肉げな笑みになった。
「賢い姫君も、情報通な宝石商さんも、健気な伯爵さんも、なかなかいい情報網を持ってますし、それぞれに賢明ですが……まぁ、年の功というやつですかね。今回の相手には及ばなかった、ということです。それに……今回のことに関しては、いろいろと複雑に入り

組んでいるようですし」
　す、と薄く目を開いたポテトさんの瞳は、どこかゾッとする色を帯びている。
「頭が良かったから、かえって上手いぐあいに動かされたという感じですね。本当なら、もっと緩慢に物事は進んでいくはずだったのでしょう」
「もっと緩慢に……？」
「えぇ。そうですね……」
　そこで少し考える顔になって、ポテトさんは意味深な笑みを浮かべた。
「例えば、そう……公爵は、今頃は驚いているでしょうね。大祭の真っ最中に事が起こるまでは予想の範囲内でも、大祭が終わる前に全部終わってしまうだなんて、彼にとっても不測の事態でしょうから。……それでも、唯一人の生き証人以外に証拠を残していないあたりは、やはり年の功と言ったところでしょうが」
「証拠を残してない……って？」
　肌に感じる温度が二度は下がったような気がして、あたしはポテトさんを見つつブルリと身を震わす。
　やはり意味深な笑みを浮かべたままの相手は「言葉通りですよ」と言った。
「王族を殺めようとした証拠である『暗殺者を雇ったという契約書』も、こちらの人の名前で書かれていました。交渉も、彼の名前で行われたことでしょう。……実際に、面識があったかどうかはともかく」
　チラと視線を向けられたアルトリートは、苦虫を噛み潰したような顔で吐き捨てた。
「……ボクは、彼等とは実際に会っていない」
「「え！？」」
「でしょうね」
　驚くあたしとアルに、あっさりと納得するポテトさん。

バルバロッサ卿が深い深いため息をついた。
「……全部、公爵のお膳立て、ってやつだな」
「……さてはて」
少しばかり遠い目で、ポテトさんは軽く首を傾げるようにして口元に手をあてる。
「……まぁ、とはいえ、その証拠を掴ませるほど可愛らしい相手ではありませんよ。自分の所に手が伸びないよう、綺麗に布陣を敷いています。そもそも、こちらの人を使うところからして悪質というか……」
こちらの人、と示されたアルトリートは、微妙に嫌そうな顔で視線を逸らす。
「でもっ、おとーさまっ！　王族を狙ったりしたら、一族連座で処刑とか、そーゆーのもフツーだって言ってたですよ!?」
あたしは頭痛すら吹っ飛ばして、ポテトさんに大事なことを告げた。
けれどポテトさんはただ困り顔で笑うだけ。
「……そこの人は、レンフォードの一族では無いでしょう？」
言われて、あたしは棒立ちになった。
――そうだ。
アルトリートは、レンフォード家の血筋では無い。
「彼が犯人として捕まっても、レンフォードの一族が同じ罪を背負わされることは無いと、公爵はふんだわけです。一族の者がしでかしたことなら、お家断絶もあるでしょうが、残念ながら連座させれるほどの『縁』が彼等の間にはありません。少なくとも、公式には」
その言葉に、アルトリートが唇を噛んだ。
憎々しげなその瞳は、けれどそこにいる誰かに向けられたものでは無かった。
「だからこそ、罪を犯すよう唆せれたのでしょう。あの公爵は人の

心の闇をそれなりに上手く利用します。それに、どういう風に情報を『整えれば』人を誘導できるのか、よく知っています。若いあなた方が翻弄されたとしても、それは仕方がありません」

けれど、それによって引き起こされた事の結果が、コレ。

奪われるべき命と、奪ってしまった命が存在する、『今』という現実。

「……おじ様が言ってた……『元凶』って……」

あたしの呟きに、ポテトさんは困ったような笑みを浮かべて肩を竦める。

「どのタイミングでその言葉を使われていたのか分かりませんが……」

「アルトリートを裁いても、元凶にまでは手を伸ばせるかどうか分からない、って」

ポテトさんはさらに困ったような微苦笑を浮かべた。

「……まぁ、難しいでしょうね」

「でも……」

その微苦笑に、あたしは鉄格子をギュッと握りしめた。

「そんなの……おかしいのです！」

見つめる先にいたポテトさんが、困ったように首を傾げる。

あたしはそのヒトをジッと見上げて言った。

「一番悪いのはその人なんでしょ!?　どうしてその人を一番に裁けないの!?」

めぎょっ、と手の中で変な音がした。

「そんなのってない！　そんなのオカシイわよ！　だってそうでしょ!?」

お膳立てをしたという公爵。

暗殺者達とは面識すら無かったというアルトリート。

アルを殺そうと手はずを整えたのが公爵だというのなら、どうして、その人でなくアルトリートの方が、今こうしてここにいるのだろうか!!

「本当に処罰されないといけないのは、公爵なんじゃない！！」
「……そうだよ……」
あたしの声に、アルも必死に声を振り絞った。
「そうだよ、なぁ……アルトリート！　おまえじゃないだろ……！？　おまえじゃなかったじゃないか！　俺を殺そうってしたのも、結局はおまえじゃなくて……」
「ボクだろう。……少なくとも、ボクはおまえを王宮へと誘ったんだ」
「だから、それだって……！」
「間違えるな」
縋るように伸ばされた手をアルトリートは厳しい顔で振り払う。
「事実は、事実だ。ボクはおまえが危険だと知っていた。知っていて誘った。おまえを罠にかけたんだ。そこに罪が無いとおまえは言う気か？　用意したのがボクじゃなくても、この場へとおまえを動かしたのはボクだ！」
「だけど、アルトリート……！」
「状況は変わらないんだ！！」
激しい声でそう叫んで、アルトリートは自分によく似た相手を見つめ、顔を歪めた。
「公爵が最初に話をもちかけてきた。それをおまえが今知ったからって、今ここにある状況が変わるわけじゃないんだ！　ちゃんと話を聞いてたのか？　ボクという証人以外に証拠は無いと、そこのヤツも言っただろう！」
そこのヤツと言われたポテトさんは、こんな場面だと言うのになにやら意味深な微苦笑を浮かべている。
「そのボクには、戸籍が無い。戸籍の無い人間の証言など、ほとんど塵芥と同じだ。まして公爵が大罪を犯した証拠の無い状態では、現状を覆すことなんて不可能なんだ。さらに言えば、たとえクラウドール卿の断罪をもちいたとしても、ボクの罪が消えるわけじゃない！　……おまえはボクに、三度目を言わせる気か？」

あたしはアルトリートを見上げる。
――もう、全て終わったのだ、と。

彼はその言葉をどれほどの絶望と達観をもって言ったのだろうか。
……何があっても、全ては終わってしまった後なのだと。覆すことは不可能なのだと。分かっていての言葉だったとしたら……
「……なんでだよ……」
アルは顔をくしゃくしゃにする。
――現実を否定するように。

「……なんでなんだよ……！？」
何かに必死にすがるように。
「このままでいれば……死ぬんだぞ？　なぁ……アルトリート！　おまえ、死にたいわけじゃねェんだろ！？　じゃなきゃ、昨日、あんなに必死になってたりしないよな！？」
「うるさい！」
アルトリートは食い下がるアルをハッキリと拒絶した。
「三度は言わないと言った！　いい加減、その馬鹿頭をなんとかしろ！」
「馬鹿馬鹿言うな！　おまえだって馬鹿だろ！？　なんだって乗せられたりしたんだよ！　なにもしなきゃ、いつまでだって、今まで通りにやっていけたのに！」
「だからおまえは馬鹿なんだ！！」
怒鳴り合う二人の声は、目を瞑っていればどちらがどちらなのか分からないぐらいソックリだった。
けれど――

「いつまでも!?　今まで通りだって!?　ありえるはずがないだろう!　王族として迎えられるおまえと、戸籍の無いボクでは根本から存在が違うんだ!　おまえにはちゃんとした『繋がり』があった!　けど、ボクには何もなかった!」

それこそ血を吐くような声で、背を向けたままアルトリートは叫んだ。

「唯一同じだったおまえですら、そうじゃなかったじゃないか!!」

その絶望の名を――　きっと人は『孤独』と言うのだろう。

血の繋がった人は確かに存在しているのに、決して認めてもらえないアルトリート。

同じく認めてもらえていなかったアルの存在は、彼にとっては……あたしでは想像できないぐらい、とても特別な存在だったのかもしれない。

同情、共感、連帯感……たぶん、二人にしか分からない、深い深い絆のような何か。

それが断たれたと思った時から、歯車は狂ってしまったのだ。

……きっと本当には、断たれてなんかいなかったのに。

「……俺は、どこに行っても、俺でしかない……」

震える声で言いながら、アルは唇を噛みしめた。

「おまえだって、どこにいたって、おまえでしかなかっただろ……!?」

アルトリートと違って、何の覚悟もしていなかったアルにとっては、何もかもが信じられない事態だったに違いない。

身分のことも、境遇のことも……彼にとってはきっとどうでもいいことだったのだ。

大切だったのは、傍にいてくれた人の存在。

書類とかに書かれる繋がりでなく、傍らにあった温もり。

証しのようなものは何一つ無くても、けれど確かに存在する――形のない『繋がり』だったから。

「王族の血が何だよ！　今までソレが俺に何をしてくれた！？」
もう決して自分の手をとってはくれない相手に、アルは必死に叫んだ。
「今更、望んでもないのに与えられて！　そんなもののせいで、おまえまで失うのなら！　俺はそんなものいらない！！」
それがどれだけ本気の思いなのか、傍で聞いているだけのあたし達にもよく分かった。
アルトリートにだって分かっただろう。
けれど、彼は何も言わなかった。
何も言わないことが――彼の答えなのだ。
落ちた沈黙の中、二人の様子を観察していたポテトさんが静かな表情で呟く。
「……あなたの負けですよ、龍眼くん」
それは、あたかも最終宣告のような響きを宿していた。
「ッ！！」
弾かれたようにそちらを見るアルに、ポテトさんは軽く肩を竦める。
「彼の意志はあなたでは変えられません。残念ですが、契約の履行は不可能です」
「契約！？」
あたしが思わず声をあげると、ポテトさんはニコと笑って頷いた。
「ええ。昨今では大変珍しいことですが、私と取引をしたのはあの賢明なる姫君だけじゃなかったんですねぇ。……彼もまた取引を望んだのですよ。……その命と引き替えに、人一人の運命を変える力を」
「！」
さすがにそれには驚いたのか、アルトリートも愕然とした顔になった。
……今まで、自分のことではそこまで顔色を変えなかったのに。
「対等の代償さえ用意していただければ、私に叶えられない願いは

ほとんどありません。奇しくも大神官殿のおっしゃった通り、私も『魔法使い』の端くれですので」

「……魔法使いってゆーより、昔話の魔女とか悪魔サンだと思うけど……」

「ふふふふふ」

あたしの素直な一言に、ポテトさんは嬉しそうに笑う。

「そのように褒められても、何もしてあげられませんよ？」

……だから……褒めてはいないんだけどな……

「けれど、世に伝わるそこらへんの『悪魔』のように、叶えられない願いですら、契約を盾に代償をとっていくほど、私は愚かではありません」

胡乱な目で眺めるあたし達の前で、ポテトさんは朗らかに言う。

「契約には細かな制約がつきます。……今回は、お二人が合意しない限りは叶えられない願い。それが破綻した以上、契約そのものも無効です。結果、支払っていただく代償もありません」

言って、ポテトさんはアルに深い声で告げた。

「あなたの『負け』なのですよ、龍眼くん」

――それは『何』に対する負けなのか。

あたしにはよく分からなかった。

互いの『意志』のぶつかりあいに関してなのか。

――それとも、アルトリートを助けられない『現実』に対してなのか。

「負け、って……なんだよ……」

無惨にも望みを絶たれたアルは、今にも泣きそうな顔でポテトさんを見つめ、声を絞り出す。

「あんたなら、叶えられるだろ！？　魔法だとか、そういうんじゃなくても……！」

「いいぇ～。無理です」

必死なアルをにこやかに見守って、ポテトさんは自分の胸を掌で

軽く押さえた。
「この『私』という存在は、こういう場合には何の役にも立ちません。あなた方は人の子の営みの中で罪を犯し、その罪によって裁かれようとしています。それをどうにかできるのは、やはり人の子の法であって『私』のような『存在』の『力』では無いのです。これが人の子の営みから外れたもの……そうですね、例えば天災などであれば、また話は別ですけど」
……？
ポテトさんの説明に、あたしは首を傾げた。
正直、どーゆー意味なのかサッパリ分からない。
だがアルには理解できたらしく、ひどく口惜しそうな顔で押し黙っている。
「『現象』が支配できるのは『現象』でしかないということです。人の子の営みは『現象』ではなく『行為』。同じ『行為』でそれを覆すのであれば、『政治』『権力』などの力を使うしかありません。ただしこれらは多方向に対し影響が出ます。『魔法』であれば多少の誤魔化しが効きますが、私の場合、代償なしには他者の願いを叶えられないという制約があります。……まぁ、一つだけ何の代償もなしに使える手がありますけど、あまりオススメはできませんね」
「それって何だ!?」
「……てゆか、なんか激烈にヤな予感するけど……」
瞬間的に反応したアルと、突然感じた壮絶な悪寒に身を震わせるあたし。
ポテトさんはそんなあたし達を交互に見て、それはそれはスバラシイ笑顔で言った。
「王都中に疫病を流行らせるんです。おそらく半数以上が死に絶えるでしょう。一人や二人、人がいなくなっていたところで誰も気にしませんよ？」
「ふざけるな！」
激昂するアルを見ながら、あたしはポカンと口を開けてしまった。

……てゆか、ポテトさん、どーゆー力の持ち主なんだか……
突っ立ってるバルバロッサ卿やアルトリートなど、愕然とした顔になっていた。
「……大真面目な話なんですけどねぇ……」
ポテトさんは言葉通り至極真面目な顔だ。
「できるわけねェだろ！？」
「だからオススメできないって言ったじゃないですか～。ご主人様にも怒られてしまいますから、私としても極力それはしたくないんですよ」
「ソコん所だけ困った顔すんじゃねェ！」
子供のように地団駄を踏みかけ、アルはポテトさんを睨みつけた。
「ンなことして生き残ったって、どうやって他の命に償えばいいんだよ！？　誰かを助けるっていうのは、そういうことじゃねェだろ！？」
「……そうですねぇ」
何やら含みありげな笑みを浮かべて、ポテトさんはウンウンと頷く。揶揄を含んだその瞳は、真っ直ぐにアルを見つめていた。
「他に無いのかよ！？　あんたの力なら……！　記憶を……そうだ、記憶を無くすとかもできるんじゃないのか！？」
「記憶、ですか」
首をコテッと傾げたポテトさんに、アルは名案を思いついたかのように顔を輝かせた。
「そうだよ！　公爵のことが駄目なら……そっちはいいから……！　俺が王族の血筋じゃなきゃ、アルトリートは死なずにすむんだろ！？　だったら、俺が王族の血筋だっていう皆の記憶を消せば……！」
「他人を幾人も巻き沿いに殺しておいて、ですか？」
むしろ朗らかに笑って、ポテトさんはそう問うた。
アルは凍りつく。
気づいてはいけない部分に――けれど、決して無視してはいけな

いはずの部分に――彼は気づいてしまったのだ。
決して忘れてはいけない『現実』の、その最たる部分に。
「認識の変更は可能でしょう。……けれど、私の力をもってしても、実際に起こってしまった現実を『無かったこと』にはできないのですよ。……主人である地方貴族の方々につきあわされ、遠路はるばる王都にやって来て、故郷では誉れと憧れの目で送り出された彼等は、馬蹄に命を踏みにじられ物言わぬ骸と成り果てました。それはもちろん、あなたのせいではありません。そこの彼が自ら犯した罪でもありません。けれど、他ならぬあなた方によって引き起こされた騒ぎで、彼等は命を失ったのです。……ねぇ、龍眼くん。先程、あなたは仰いましたね？　そんなことをして生き残って、他の命にどう償えばいいのか、と」
他者の命を奪っておいて、おめおめと生き残っていいのか、と。
「罪を償う機会というのは、どこで与えられるものでしょうか。あなた方が神と呼ぶ者からですか？　それとも、人の子の手で作り上げられた法や掟によってでしょうか？　償うべき時に償わずに生きることと、償う道を選ぶことは、どちらが『人として』正しいのでしょうか？」
「……ぁ……」
よろりと、アルの足が後ろに下がった。
ポテトさんはただ微笑む。
慈悲深い、暖かな笑顔で。
「嗚呼、けれど、死したる彼等の命は、その人生は、あなたにとってどうでもいいことでしょう。名も知らず、言葉を交わすことすらしていない、ただの他人なのですから」
「……ッ！」
「えぇ。よいのですよ？　人とは所詮、己の世界にのみ固執する生き物です。自分と関わりのない他人がどうなろうとかまわないと言い切れるのなら、望んでみますか？　世界の記憶を書き換えるだけの魔法を。……もっとも、その対価となれば、あなたの命一つでは

とうてい足りませんが」
青ざめ、後退るアルに、ポテトさんはただ穏やかな笑顔を向ける。
状況を知らなければ、神々しいほど慈悲深く見える微笑みを。
けれど『それ』は違うのだと、あたし達は知っていた。
優しさに満ちた笑顔は嘘では無い。
けれど、きっと、悪魔とはこういう顔で微笑(わら)うのだ。
こういう顔で誘うのだ。
人として犯してはいけない禁忌を。
そして――

「……くだらなこと考えるなよ、クリス。おまえには所詮、その程度の力しかないんだから」
「アルトリート！」
偽りの世界をはぎ取るように、そっけない一言が悪魔の誘いを切り捨てた。
弾かれたように見るアルに、アルトリートは厳しい眼差しを向ける。
「言っただろう、覚悟はできていると。おまえの感情一つで、いちいち引っかき回されるのは迷惑なんだ。いい加減、もう納得しろ。……おまえの情けない願いごときで、無様に生かされるなんて、ボクだって冗談じゃないんだ！」
「アルトリート……！」
思わず叫んだアルに、アルトリートは堪りかねたように首から提げていたらしい何かを千切った。
――ブチリと、嫌に大きな音がした。
あたかも何かの絆が切れたかのような音が――
「おまえは帰れ！」

投げつけられたそれが、アルにあたる。
硬い音をたてて石の床に転がったソレは、ポテトさんの足下でくるりと一回転した。
――あたしの目に、ソレは古びたコインに見えた。

真ん中あたりで二つに割れた、ひどく古めかしいコインの一欠片に。
「おまえに生かされるなんて、まっぴらだ！」
投げつけられたことにショックを受けたように、アルがよろめき下がった。
それを鋭く睨みつけたまま、アルトリートは怒鳴る。
「そこまでこのボクを落ちぶれさせる気か！？」
「アルト……」
「おまえが死んだってボクは泣かない！　だけどどうせ泣き虫なおまえは、ボクが死ねば情けなく泣くんだろうよ！　図体だけはデカくなったくせに、年下だからっていつまでも甘えるな！！」
激しい口調で吐き捨ててから、アルトリートはいっそ見事なほど人の悪い笑みを浮かべて言った。
「おまえの手なんかもう引いてやらない」
真っ直ぐな目で――

「おまえは一人で立って歩け」
真っ直ぐな声で――

「そして、せいぜい、情けない自分を思って嘆くんだな！」
その瞳の奥に、確かに涙を湛えて。
だから、憎まれ口でしかない台詞なのに、あたしにはソレは別の言葉に聞こえた。

――生きろ、と。

自分の分も生きろ、と。

――自分を思って生きろ、と。

……そういう風に。

※　※　※

わずか煉瓦一つ分の隙間から、滑り込むようにして風が入ってきた。

やや肌寒く感じるそれが、あたし達の間をゆっくりと旋回する。

最上階の牢には、重苦しい沈黙だけが横たわっていた。

その沈黙に耐えかねたように、バルバロッサ卿がため息を零す。

だが、その大きなため息ですら、沈黙を壊すことはできなかった。

あたしは唇を引き結んで牢の中を見る。

牢の中には、アルトリートだけがいた。

アルは――あの後も、なおアルトリートに必死に食い下がっていたアルは――ポテトさんに担がれて無理やり牢から連れ出されていた。

西の塔中に響くような声でアルトリートを呼んでいたが、その声が変なタイミングで途切れたところをみると、おそらく途中でポテトさんに昏倒されるか謎空間に放り込まれるかされたのだろう。

その時から、牢には沈黙が漂っている。

――声を零すことも憚(はばか)れるような、重い沈黙が。

「……例え、現状を覆せなくても……」
ぽつりと、その中でバルバロッサ卿が呟いた。
なにかを深く考え、言葉を紡いでいる表情で。
「おまえさんの言葉は、おまえさんの名前とともに教会の記録に残される。それがどのような内容であれ、誰のどんな思惑がどういう風に絡んでこようと、必ずおまえさんの言葉通りに記すと誓おう」
硬い顔で俯いていたアルトリートは、その声にバルバロッサ卿を見た。
牢に来た時に見たのと同じ、ひどく静かな表情の彼は、ジッと誓いをたてる裁判官を見つめる。
「俺は、おまえさんから告解を受けることになっている。……そして、告解に先立ち、おまえさんを聖ラグナール院の末席に加え、洗礼を行う。略式だが、それによっておまえさんの言葉は公式なものとして扱われる。……『秘跡』を得ることは難しいかもしれんが……おまえさんは、完全に、ナスティア王国の国民として認められ……エラス教の庇護下におかれる」
「……」
「……それがおまえさんに、どれほどのものを与えてくれるかは分からねェがな……」
バルバロッサ卿の声は、あまりにも苦かった。
あたしはジッと二人を見る。
……見ることしか、あたしには出来なかった。
（……アルルじーちゃん……）
全てを見てこいと、言ってくれた教皇サマ。
けれど、『全て』なんて、どうやって見ればいいんだろうか？
ただ見るだけしかできないのに、カミサマみたいな目も、それこそアルが持つ龍眼のような目もないあたしには、見ていても『見えない』ものがあまりにも多すぎる。
こんな場所に立っていても、本当に何一つできやしないのに。
（……あたしは……）

そんなのおかしいと、言ってしまうのは簡単だけれど――

だからといって、『オカシイこと』をなんとかするために、あたしに出来ることは――

――何一つ……無いのだ。

（……どうしたらいいの……？）

出来もしないことをただ口にして、それでいったい誰が救われるというのだろう？

（どうすればいいの……？）

自分の気持ちだけ叫んで、それでいったい、誰が助かるというのだろうか？

（あたし……ここにいたって、何もできやしないままなの……？）

それならあたしは、一体、何のためにこうしてここにいるのだろうか？

蘇ってきた頭痛を堪えて、あたしはひたすらアルトリートを見つめ続けた。

その視線に気づいたのか、アルトリートがあたしを見る。

彼の瞳には、もう、一番最初に会った時から感じていた、あの『ドロッとしたもの』は無かった。

――だから思う。

あれは、彼の心だったのだろう、と。

今のあたしでは理解することができない、深く深く複雑に混じり合った様々な気持ちが、あんな風にドロッとなっちゃうほど苦しい状態だったから……だから、そういう風に感じたのだろうと。

何故、あたしは――その時に気づけなかったのだろうか。

何故、もっと早くに察することができなかったのだろうか。
もっと沢山のことを知っていれば、こんな現実は無かったのかもしれないのに。
そう、もっと早く。もっと沢山。もっともっともっともっと――！

「……なんで、おまえまで、そんな顔なんだろうな……」
あたしを見つめて、アルトリートはぽつりとそんな言葉を零した。
あたしは唇を引き結ぶ。
頭の痛みと、ぐちゃぐちゃな思いとで、自然に涙が零れた。
「泣くようなことじゃないだろ。……少なくとも、他人のおまえが、ボクのために泣く理由が無いだろ」
あたしはただただ唇を引き結ぶ。
何かを言いたかった。
けれど、言えなかった。
あたしの気持ちを叫んだところで、そんなことに意味は無いのだ。
あたしには何の力もない。
ただ泣いて、叫んで、駄々をこねるだけしかできなかった。
何の役にも立たなかった。
誰かを助けるだなんて、そんなことはできなかったのだ。
誰も彼も可哀想で、なんとかしたいのに――気持ちだけでは、何もできないのだ。
「……ボクは可哀想なのか」
嗚咽を堪えて泣くあたしに、アルトリートはただ静かに呟く。
「他人のおまえがそんな風に泣くほど、ボクは可哀想なのか」
それは静かで……ほんの少しだけ、苦笑が混じったような、そんな声だった。
「様は無いな……。……けど……悪いもんじゃないんだな、そういうのも」
苦笑の中に混じる、自嘲めいた何か。
遅くに気づいてしまった『何か』をそっと暖めるような、そんな

何か。
「……なぁ……ボクが知るだろう……最後の、王女」
そんな風にあたしを呼んで、彼は少しだけ皮肉げに唇を笑ませた。
「そこまで泣かれるほど、ボクは可哀想では無いと思うぞ」
――何故、と。

そう問いたかった。
今ここにある現実の、どこが可哀想では無いというのだろうか。
誰もが絶望と無力だけを感じずにいられない現実の、どこが……？
「少なくとも、ボクはもう、生きることに執着してない」
あたしを見下ろしたまま、彼は言う。
昨夜とは別人のような顔で。
さっきまでともまた違う表情で。
まるで、全てに納得のいく決着がついて、満足しているような顔で――
「ボクが欲しかったのは……地位や権力を持って生きることじゃ無かった……」
諦めにも似て、けれど諦めとは明らかに違う充足感をその瞳に宿して、全てを奪われてしまうその人は言った。
「不思議なもんだよな……ここに至って、そんなことにようやく気づくなんてな……」
その笑みはどこか透明で――

本当に、満足しているのだと分かったから、あたしはただ必死に声を殺して唇を噛んでいた。
納得ができなかった。
彼がそんな顔をしている理由も分からなかった。
けれど――

「ボクは何とも繋がっていなかった。例えどこかで死んでも、誰も気にとめたりしないし、それは例え生きていても同じだろうと思った。……たとえ少しばかり泣くヤツがいたとしても、ボクという存在は、それだけのちっぽけなもので、それは変わらないだろうと」

そんな風に、語るから――

「どこにも記録に残らないまま、ボクは消えていくんだろう……独りで……そう思っていた……」

だから―

「けれど……あいつは、ボクのために死ぬんだな……。弱虫のくせに、毒なんてこっそり持ったりして……」

分からずには、いられなかった――

「あいつは、きっと、ボクを忘れないだろう。……永遠に、今日という日を忘れないだろう。今回の全てを……ボクという存在の全てを忘れないだろう」

彼が得た、

彼が得たいと思った、それを――

「……だったら、もう……それだけでいい」

――彼は、この時、誰にも壊されることのないものを手に入れた

のだ。

人が一生のうちで、必ず得られるどうかも分からないものを。

――唯一人との、永遠の繋がりを。

30　虚飾の玉座

人の生きる意味というのは、いったい何なのだろうか。
生き続ける意味というのは、何なのだろうか。
生きていれば暖かいものや、優しいものや、美味しいものや、いい匂いのするものや、スバラシイいろんなものと出会うことができるのに。
それよりも満足のできる『終わり』なんて、いったいどこにあるというのだろうか。
そんなものに、いったいどんな意味があるというのだろうか。
そんなものが、いったいどれほどのものだというのだろうか。

生きて、いれば、
手に入れられるものはもっと沢山あって、

生きてさえいれば、
今まで知らなかったもっとスバラシイものにだって出会えるかもしれなくて、

生きていることによって、
得ることのできるものも沢山沢山増えていくかもしれないのに。

それなのに、なぜ、
選ぶことができるのだろうか。
死というの名の終焉を。
もう声を聞くことも触れることもできなくなるその残酷な現実を。
どうして――――！

（……どうして……！！）

ひぐ、と喉の奥が大きく鳴って、あたしはギュッと体を小さく丸めた。

のしのしと、あたしを腕に抱えたバルバロッサ卿が歩く。

ゆっくりとした足取りで、階段を降りて行く。

どちらも何も言わなかった。

言える言葉など何も無かった。

どのような処罰も受け入れるというアルトリートに、あたしもバルバロッサ卿も、言うことのできる言葉を持たなかったのだ。

告解という名の最後の言葉をとり、牢を後にするあたし達に、アルトリートはただ静かな目を向けていた。

全ての現実を受け入れた、胸を打つような静かな瞳を。

……あたしは、アルトリートという人をよく知らない。

知る時間はあまりに短く、交わした言葉はもっと少なく、場所も状況もあまりに特殊すぎて、彼という一人の人間を知るにはあまりにも時間が無かった。

けれど、少しだけ、彼の本質を垣間見た気がする。

それは本当に、一瞬にも似た短さであったけれど。

――そうして、それが、最後になってしまうのだ。

「……あいつは……もしかしたら、いい神官になったのかもしれないな」

ずいぶんと歩いた後で、バルバロッサ卿がぽつりと呟いた。

あたしはグシュと鼻をならす。

大きな体でゆっくりと階段を下りて、バルバロッサ卿はため息のような声で呟いた。

「……孤独や、寂しさを知らないヤツは、他人のそれには、気づけないからな……」

――寂しくて、悲しくて――助けを求めてくる人と相対するなら、そういう人がいい。
同じ寂しさを、悲しみを、理解できる人がいい。
けれど――
けれどそれは――なんて悲しくて、残酷な現実なのだろうか。

そんな『もしも』は有り得ないのだ。
……もしかしたら、あり得たかもしれない未来であっても。
「こんなことは……本当には、間違ってるんだ」
ぽつりと……本当に、ぽつりと声を零して、バルバロッサ卿はまたため息をついた。
「……だけど、間違っていても……やらなきゃならねぇ世界なんだ。……そうじゃなきゃ守れない、弱い世界なんだよな……」
この国は、
そして、この国をとりまく周りは――

「もし、これをなんとかしようと思うなら……それこそ、世界を変えちまわなきゃならねぇんだろうな」
その全てを変えてしまうほどの力を得てはじめて――

間違いを間違いだとはね飛ばすことができるのだ。
「陛下は、必死にそれをしようとしている。……けど、まだ、力が足りないんだ。陛下も、国も、俺達も、みんな……な」
――深い深い、声だった。

その声に背中を押されるような気持ちで、目元を強く拭い、あたしは顔を上げる。

頭の痛みはもはや止まらず、目を開けるのもツライほど。
けれど顔を上げ無理にでも前を向けば、外へと続く扉から、明るい光が差し込んでいるのが見えた。
――その光に照らされた、憂いを帯びた女神の像も。

「……力が欲しいよな。間違ってるものを間違ってるんだと言って、正してしまえるぐらいの力が。……けどそういうのはきっと、あらゆる力の中で、もっとも難しい力なんだろうよ」
バルバロッサ卿は歩く。
外の方へ。
光の方へ。
あたしは眩しいそちらに目を細める。
――そこに、レメクが立っていた。

あたし達を入り口から数歩外に出た所で迎えて、けれどレメクは何も言わなかった。
ただ、深い眼差しで、あたし達を見つめる。
「……終わったよ」
そのレメクにバルバロッサ卿は告げた。
ゆっくりと歩み寄る振動にあわせて、ズキンズキンと頭が痛む。
「……やっこさんは、処罰を受け入れるそうだ」
――例えそれが、どんなものであっても――
声に出さずに示された言葉に、レメクはわずかに目を伏せた。
そうして、深い声で「……そうですか」と頷いた。
「……ほらよ。嬢ちゃんは、おまえさんが抱っこしてやんな」
いつもより憂い顔なレメクに、バルバロッサ卿は小さくなってい

るあたしを抱え、差し出す。
レメクの暖かい腕が、あたしをやんわりと抱きしめてくれた。
その腕の中で、あたしはギュッとレメクの服を握りしめる。やさしい匂いと温もりに包まれて、頭を針で突き刺しているような痛みが少しだけ和らいだ気がした。
暖かい手が、労うように背中を撫でてくれる。
「……彼の声は、聞きましたか」
低く深い声で、彼はあたしに囁く。
「……その姿は、見ましたか」
あたしの頭痛がわかっているかのような、耳に障りのない、柔らかな声で。
「見なくてはいけなかった、その全てを……」
手が髪を撫で、また背中を撫でる。
「……忘れてはいけませんよ。彼のことを。……その全てを」
それはきっと、『彼(アルトリート)』にとっては何よりも大切なこと。
それが分かっていたから、あたしは腕の中でさらに小さくなった。
そうして問う。
「……おじさまは、さいしょから……わかって……たの？」
この結末を。
その全てを。
あたしの嗄(しゃが)れた声に、レメクは少しだけ押し黙る。
そして、ため息と同時に頷いた。
「……分かっていました」
さわり、と、風があたしの髪を撫でていく。
「彼の答えも。……あなたが、こうなるだろうことも」
「……」
「……分かっていました」
静かな声が、あたしの耳を撫でる。
「……それでも、知るべきだと思いました」
塔の前に立つあたし達を暖かい日差しが照らしていた。

紋様で作った偽りの光では無い、陽光（ひかり）。
閉ざされた塔の中にあるものとは違う、あまりにも暖かなもの――

――

「決して目を背けてはいけないものがあるというのなら……それは、最後の結末までを含むのでしょう。……関わった限りは、見続けないといけないのです。その半ばで目を背けることは、許されません」
「……レメク」
バルバロッサ卿が窘めるような声をあげる。
けれど、レメクは深い声であたしに言った。
とても大切な一言を。

「……それが、人の命に『関わる』ということです」

あたしはしがみつく力を強くした。
人の命に関わる、ということは――

その人の命を――わずかなりとも――背負う、ということなのだ。

それを理解し、覚悟し、はじめて真正面から負うことのできるもの――

……なのに、あたしにはそれが無かった。
ただ気持ちに正直に動いただけで、覚悟どころか、理解すらも出来ていなかった。
「誰もが互いに関わり合い、支え合って生きています。……誰とも繋がっていない人というのは……おそらく……いえ、きっと……この世に一人も存在しないでしょう」
少しだけ沈んだ声で、レメクは「けれど」と小さく呟く。
「……それでも、繋がっていないのだと、思ってしまう瞬間はあります。そこにいるのに、いないかのように扱われる時……自分とい

う一人の人間を見てはもらえない時……」
レメクの言葉に、あたしは小さく頷いた。
かつて孤児院にいた時、沢山の大人達に無視され続けていた孤児達という『存在』。
生きているのに、心とか気持ちとかあるのに、そんなものを全て無視されていた時が、確かにあった。
――だからこそ分かった。

それがどれだけ苦しくて、せつなくて、悲しいモノなのかが。
「一人の人間として、見てはもらえない場所というのは、あまりにも多いのです……」
その言葉に、あたしはかつてレメクから言われた言葉を思い出した。
そう……あれは、孤児院の不正を裁く前のこと。
裁判のことを説明されていた時のこと。
――なぜなら、今の世界には未だ道徳というものが浸透していないから――
（……嗚呼……）
だから、人はこれほどまでに罪を犯すのだろうか。
悲しくてやるせなくて、たまらない気持ちになるような結末になるというのだろうか。
「例え誰かと何かしらの繋がりがあったとしても、その人にとって自分は大多数の中の一人……『誰よりも一番に繋がっている』人というのは……出会える確率すら稀です」
けれど、きっと、人はそれを求めてしまうもの。
手を伸ばした時に、この手をとってくれる『誰か』。
傍にいて欲しいと思った時に、傍らにあってくれる『誰か』。
他の誰よりも自分のことを思ってくれて、他の誰よりも自分が思っている『誰か』。

誰よりも大切な『唯一人』……

「本当は……彼は最初から……それを持っていたのです」

同じ孤独を共感しあい、長い年月を共にしていた幼なじみ。

「……けれど、それに、気づくことが出来なかった」

そこにある確かな絆を。

誰にも壊されることのない繋がりを。

「……『王弟殿下』は、彼の前で、彼を止めるために毒をあおりました。……その行動で、彼は自分が欲した本当のものを、とっくに手に入れていたのだと……知ったのですよ」

それが結果として、アルトリートの狂態を止めることになったのだ。

断たれたと誤解し、手に入らないものと見誤り、それならいっそ他の全てを手に入れようとした彼を……止めたのだ。

「……私達は、『アルトリート』という人の命を救うことはできません。……けれど、殿下は、その覚悟一つで彼を救ったのです」

そう……アルトリートの、心を。

静かに語るレメクの声を聞きながら、あたしはギュッと目を瞑った。

レメクが言おうとしていることの意味は……なんとなく分かる。

分けるけれど、納得できなかった。

「……あたし、昔……宿のおねーちゃんに読んでもらった話を聞いて……少しだけ、思ってたことがあるの……」

掠れた声をあげるあたしに、レメクが「なにをですか？」と柔らかく問う。

「……探してたものが……ずっとずっと探してたものが……本当は自分のすぐ近くにあった、っていうお話で……」

幸せというものを探して、あてもなく彷徨う少年の話。

探して探して探して探して、そうして彼は旅の終わりにそれに気づくのだ。

――そう――探してた幸せが、本当は自分のすぐ傍らにあったの

だということに。
「それって……すごく、あったかくて……いいなって……そういうお話って、『いいな』って……そう思ってたの」
けれど――
「けど……本当は、すごく……切ないことなんだ……！」
そこにあった幸せ。
気づかなかった大切なもの。
もっと早く、いっそ最初から知っていれば、そこには別の物語があったのかもしれないのだ。
幸せをもっともっと深められるような物語や――
新しい幸せを見つけられる物語が――！
「……ベル。物事を一つの局面だけで判断しては、いけませんよ」
嗚咽を堪えるあたしに、優しくて、少しだけ悲しい声で、抱きしめる力を強くしながらレメクは囁く。
「今ここにある現実は、確かに、あなたの言うとおりです。……けれど、その物語には、別の解釈があるのですよ」
髪に頬をあてて、彼はそっと声を零した。
「……物語の主人公は、見失っていた『幸せ』に、最後には気づくことができたという解釈が」
……たぶん、
いや、きっと……
そっちの解釈のほうが一般的なのだろう。
けれど、今ここにある現実を見るに、どうしても切なさを感じずにはいられなかった。
最後にならなければ気づけなかった幸せの……悲しさを。
――わかっている。

この悲しさを……レメクは、本当には、あたしに味あわせたくなかったのだということは。
――けれど、知っている。

こうなることが分かっていてもなお、あたしならそれを乗り越えれるのだと信じて、自由にしてくれていたことが。
知っている。
けれど、辛い。
悲しい。やるせない。くやしい。口惜しい！
だから――

「いつか……」
あたしは、暖かいの腕の中で思いを零した。
変な風に跳ね上がる、嗄れた声ではあったけれど。
「いつか……壊すわ」
誓った。
他の誰でもない、この自分自身に。
誰もが傷つくような結末なら、その結末そのものを。
正しくないものがまかり通るのなら、その世界全てを。
壊して――新しくしてしまえばいい。

「こんなこと、絶対、許さないんだから……！」
力が無い。力が無い。力が無い。力が無い。
変える力も直す力も切り開く力もあたしには無い。
なら手に入れればいい。
自分自身を変えてしまえばいい。

できないことができるようになればいい。
こんな思いをするぐらいなら、こんな間違いを許すぐらいなら！
それならいっそ、無茶でも力を手に入れるほうがよほどマシではないか！！
そこにどれほどの苦痛が待っていようとも！！
「絶対……こんなの、防いでみせるんだから……！」
レメクは何も言わない。
無茶だとか、無理だとか、駄目だとか、出来るはずがないとか――

そういう、否定の言葉を口にしない。
ちっぽけなあたしの言葉に対して、否定することも、子供のたわごとと失笑することもなく、ただ、全身をむしばむ痛みと戦うあたしをしっかりと抱きしめて――
こつん、と、あたしの頭に綺麗な顎を乗せて……頷いた。

※　※　※

……ふと、名前を呼ばれたような気がして顔を上げた。
部屋の全てが青みがかって見える部屋の中で、あたしは一人、立っていた。
どこだろう？　と首を傾げ、その間取りに（あぁ）と納得する。
青の間だ。
あたしはぼんやりと周囲を見渡し、誰もいない部屋にしょんぼりとして部屋を出た。
広い廊下は、何故か『青の間』と同じく青い色に沈んでいた。
夜なのだろうか？　そう思って、時間の感覚がまるでないことに気づく。
……それ以前に、あたしはいつ、城に帰って来たんだっけ……？
無人の廊下をふわふわと歩き、いくつかの部屋を通過した所で、

あたしはピタリと足を止めた。
綺麗な扉があった。
深みのあるその色は、やはりうっすらと青に染められていて、元の色がよく分からない。
誰の部屋なのかも知らなかったが、あたしはその部屋の扉をすり抜け、そっと中に侵入した。
（……本がいっぱい……）
一瞬、レメクの部屋に入ったのかと思った。
大きな部屋に並べられた重厚な本棚。沢山のそれの中に、何十倍もの本が収められている。
背表紙の装丁からして、かなり高い立派な本だった。どうあがいても青色がかってみえるそれらの中心で、金とも銀ともつかない色の文字が躍っている。
魔術理論、術式法定学、経済学理論、力学、地質学、薬草大百科、錬金術……
題名は読めても、薬草ウンタラ以外の意味がサッパリわからなかった。
ただ、その中に『格闘奥義大全集』なるものを見つけて（なんだアディ姫の部屋か）と納得した。
声が聞こえたのは、その瞬間だ。
「……あの義父を動かすことができたのは、紛れもなくあなたの功績ですよ。アデライーデ姫」
レメクだ。
思った瞬間、景色が変わった。
目の前にレメクと、カウチに力無く座ったアディ姫がいる。
レメクはこちらに背を向けていて、アディ姫はその対面側にいた。
俯いたアディ姫は、どこか仄暗い炎をまとっている。
暗い鬼火のような、恐ろしい色を。
「けど、結局『アルトリート』は消えてしまうのよ。アルはもう二度と……『アルトリート』には会えないわ」

仄暗い色をそのまま声に変えて、アディ姫は呟いた。
対峙するレメクは、わずかなため息を零しながら首を横に振る。
「……それは、あなたの責任ではありません」
「どうして？　だって、あたしが突っ走っちゃったんじゃないの。花瓶の事件だけならもみ消しができたわ。でも、馬車の所ではそんなことできない……あまりにも人が死にすぎたんだもの……」
「……」
「あそこにアル達を引っ張って行ったのはあたしなのよ。もっと慎重になればよかったのに……せめてアルだけでも部屋に残しておけば、あいつらだって香を焚いたりしなかっただろうし、アルも……あの事件を『自分の責任』みたいに感じなくてすんだのよ……」
暗い色を深めるアディ姫に、あたしは（それは違う）と首を振った。
けれどあたしに気づいていない二人には、あたしの思いは伝わらない。
一瞬だけレメクが身じろいだ気がしたが、（ん？）と思う前にアディ姫が言葉を紡いだ。
「『アルトリート』を処刑に導いたのは、あたしだわ」
思わず意識がそちらへと向かう。
「あいつらの流した言葉を鵜呑みにして、引き返せない場所に追いやった……でも、その責任を誰も追及しないのよ。人一人を死に追いやったっていうのに……」
その言葉に、あたしは（アルみたいだ）と思った。
自分の責任だと言っていた彼。
アルもまた、重い罰から外された己に苦しんでいた。
……今のアディ姫は、アルと同じだ。
自分たちがやったことに対して、自ら罰を望んでいる。
彼女等自身が、罪を犯したわけではないのに……
「……あなたは、ご自分ができる精一杯をされました」
暗く沈んでいるアディ姫に向かって、レメクは声をかける。

「人の世で起こせれる以上の奇跡すら、その手で引き寄せたのです。……もうそれ以上、自分を責めるのはやめたほうがいいでしょう」
「……意味がないから？」
「ええ」
自嘲を浮かべるアディ姫に、レメクはあっさりと頷く。
少しだけ苦笑が勝ったような声で彼は言った。
「自らの行動と、それによって引き起こされた事態を客観的に判断できるのは良いことです。……けれど、自分の罪だと言って引きこもれるほど、あなたは『自分を』哀れんではいないでしょう？」
「……ええ」
苦笑に苦笑を返して、アディ姫は顔を上げた。
暗い色と激しい色を内包する瞳が、ギラギラとそこで輝いている。
「あたしの罪はハッキリしてるわ。……けど、自分の罪に浸れはしない。誰も罰を与えないのなら、自分で償う道を探すわ。あたしはきっと、これからも何度だって間違える。でも、立ち止まってなんかいられないのよ」
その言葉と目の色に、あたしはちょっと微笑（わら）ってしまった。
あぁ、アディ姫だ。
なんとなくそう思った。
うじうじと悩むより、自分を追いつめるより、心を奮い立たせるのが彼女には似合う。
「……それはあなたもですよ、ベル」
唐突にレメクがそう言って、あたしの方を振り返った。
きょとんとしたあたしの前で、同じくキョトンとしたアディ姫が目をパチパチさせる。
「末姫ちゃん？　え？　どこに？」
アディ姫の目はレメクの視線の先――あたしの方を――見つめていた。だが、まるで何も見えないかのように、ギュッと訝しげに細められる。
「……気配はするんだけど……」

「『精神転移（ジャンプ）』で来たのですね……。いけませんよ、ベル。あなたは今、高熱を出して眠っているのです。早く体に戻りなさい」

（高熱？）

あたしは首を傾げた。

熱なんていつ出したっけ？

「ベル……」

レメクが心配そうな顔であたしに歩み寄る。

あたしは咄嗟にレメクに向かって両手を伸ばし――

――ポカンと、そのままの体勢で固まってしまった。

（……え。どこココ……？）

突然、景色が一変したのだ。

さっきまでレメクとアディ姫がそこにいたのに、今は青い闇の中に一人でポツンと突っ立っている。

足下ではさわさわと草が揺れていて、伸ばした両手だけが、真実、先程まで目の前にレメクがいたことを示していた。

（……え～……）

抱っこしてもらなかったことに少なからずしょんぼりして、あたしはダラリと両手を下げた。足下の小石をコンと蹴ると、それは綺麗に飛んで近くの石柱に跳ね返る。

（……石柱？）

見回せば、満天の空の下、大きな石柱と石像がズラリと等間隔に並んでいた。

（……『神々の間』？）

あたしは唖然と周囲を見渡した。

どうしてこんな所に来たのかよくわからなかった。

だいたい、さっきまでレメク達と一緒にいたのに、なんでこんな

所に来ているのだろう。
（おまけに……なんか変な気配がするし……）
以前、フェリ姫と来た時には、レメクの屋敷にも似た不思議な気配を感じていた。
けれど今は違う。
気がつけば、思わず自分の体を抱きしめていた。
シンと静まりかえった闇の中、空から圧倒的な力が押し寄せてきている。
日中に訪れた時とは明らかに違う、どこか異質な気配――

あたしは怖くなって石柱の影に逃げ込んだ。
（どこから帰ったらいいんだろう……？）
どっちに太陽の神殿があるのだろうかと周囲を見渡し、石柱の影からこそこそと反対側に顔を出す。
そうして、目をパチクリさせた。
白い石柱と石像の合間に、黒い人影が立っていた。
すらりとした長身。
遠目にもハッキリと白い美貌。
こちらに気づくことなくただ空を見上げているそのヒト――

ポテトさん。

怖い場所で見知ったヒトを見つければ、それはもう心強いってなもんだろう。
なんでこんな所にいるんだろう、とかいう疑問もどこへやら、真っ直ぐにポテトさんの方にすっ飛んでいったあたしは、相変わらず星空を見上げているポテトさんの傍まで駆け寄ると、その尻にエイヤと飛びついた。
「！？」

――なにやら、ビクッと跳ねられた。

おや？　と思って尻に張り付いたまま顔を上げると、空を見上げた格好のまま、ポテトさんが妙に疲れた声でボソリ。

「……お嬢さん……『精神転移（ジャンプ）』でここに来ていることについてはどーとも言いませんけど……私の尻に張り付くのはどーかと思うんですが……」

その体がビミョーに震えてる気がするのは気のせいだろーか？

だいたいにして、そんなことを言われても飛びかかりやすい場所にあるのだから仕方がない。

おまけにポテトさんはレメクと体格が似てるから、いい予行練習になるのである。

「……いえ……もう、どーとも言いませんが……」

なにか、諦めの入った声で言われてしまった。

そのまましばらく存在を無視されたので、よじよじと背中側をよじ登り、高い肩まで（よいしょ）と登りきる。

そうして、相変わらず空ばかり見上げているポテトさんの顔を覗き込んだ。

（おとーさま。何か見えるですか？）

「……とりあえず、今はあなたのアップが見えますね……」

そんなことはどーでもいいのだが。

困り顔で眉を寄せたポテトさんに、あたしも困り顔で眉を寄せてみせる。

ポテトさんは軽く苦笑して言った。

「空を見上げてごらんなさい。……あなたは『巫女』です。おそらく『視る』ことができるでしょう」

（星を？）

「……そうですね」

どこか困ったような顔で頷く相手に、あたしは言われた通り空を見上げる。

恐ろしいほど澄みきった夜空だった。
青い海に光の粒をばらまいたような、気を抜けば空に向かって落ちていきそうなほどの光景である。
（……どっちが天地なのか分かんない……）
「……気をつけなさい。そのまま『天』に引き込まれてしまえば、戻れなくなりますよ」
恐ろしいことをサラッと言われて、あたしはギュッとポテトさんの髪を鷲づかみにした。
（一蓮托生なのです！）
「……そうきますか……」
ビミョーにぐったりした声を体の下で聞きつつ、引き込めるものならやってみろ、とばかりに空に向かってちょいと背伸び。
その瞬間、ふいに世界が一変した。

赤。
黒。

弾けたそれが、ゴウゴウと音をたてて天地をなめつくす。
倒れている人、人、人――

壊れた家の破片が大通りすらも塞ぎ、その中で赤に染まった鋼を持つ者たちが、武器を大きく掲げている。
それがただの剣であったら、それほど驚きはしなかっただろう。
物語で聞く、戦争とやらの光景なんだと（どうしてそんなのが見えるのかはともかく）思って納得しただろう。
けれどそれは、剣ではなかった。
鍬であり、鋤であり、鉈であり、料理人が使うような包丁であった。
血に染まっているのは鋼だけではない。

箒の握り、杖、棍棒、それに似た鈍器のような棒……それらを手に徘徊する亡者のような人の影。
崩れた路地の端には身動き一つしない人が倒れ伏し、もはや動くことのないその体に向かって、まだ棒を振り下ろす者がいる。
水路の水も地上の炎と煙を映し、赤く、黒く、染まっている。
見つめている中で、人の形をしたものが、背中と後頭部だけを水面に出して流れていった。
そこにいる誰もが……普通の人、だった。
異国の民でもなく、兵隊でもない……紛れもなく、ナスティアの国民だった。

何が、
そこであったのか――

何が、
そこで行われているのか――

麻痺した頭では考えが追いつかず、ただ光景だけが勢いよく通りすぎていく。
その中に、
よく見知った二人の姿が見えた。
対峙している。
片腕を失い、血に染まった黄金。
顔の半分を血に染め、立っている闇の黒。

アウグスタと、レメク――

（――――!!）

瞬間的に悲鳴をあげ、ギュッと手に力を込めた。

「お嬢さんお嬢さんお嬢さん。抜けます！　私の限りある資源が！！」

妙に切羽詰まった声が下から聞こえた。

あたしはハタと我に返り、慌てて下を見る。

情けない表情（かお）の超絶美貌が、あたしをジッと見上げていた。

「……視ましたね？」

断定での確認。

それに頷いて、あたしはいつの間にか止めていた息を吐いた。

（……アレ……何？）

「……さて」

少しだけ困った顔で首を傾げ、ポテトさんはまた星空へと視線を馳せる。

「呼び方は様々あって、どう言うのが一番正しいのか、私にもよくわかりません。……天啓、予知……そう呼ぶのが一番近い気がしますが……」

その瞳が暗い色を帯び、底なしの闇のようなものに変わる。

「星から読み取っているのか、天（そら）から受け取っているのか、それとも空気を読んでいるのか……判別がつきませんしね。ただ……ほら、あの星のあたり……星の名や配置がどうとかいう、そういう細かいことはわからなくても、嫌な感じがしませんか？」

白く美しい指が示す方向を視れば、確かになんとも言えずヤな感じの星々が。

（気持ち悪くて重い感じがするのです）

「『星見』と呼ばれる人々が書いた書物によれば、アレが示すのが、血と破壊……戦乱、暴動などと呼ばれるものなのだそうです」

戦乱。

その言葉と同時に先程『視た』ものが浮かんで、思わず総毛立った。

もしかして――

（……さっき視たのが……？）

「……えぇ。あれもまた、ある意味『戦』と呼ばれるものでしょう」

虚無を宿す瞳で空を見続け、ポテトさんは頷く。

あたしも怖々と空を見上げ、ギュッと唇を引き結んだ。

（どうして……アウグスタと、おじ様が……？）

その中で、あんな風に対峙していたのか。

どうして、あんなに血まみれになっていたのか。

「……同じ形で『視た』のかどうかは、わかりませんよ。あれは、受け取った私達が自分で組み立てた映像（イメージ）です。実際に、『視た』ものと全く同じ現実が現れるというわけではありません。……恐ろしく不吉な『予兆』を感じ取った時、どういう風にそれが自分の身に関わってくるのか、自分にとって大切な人はどういう風になってしまうのか……そういったことを『読み取った内容』から『導き出し』、それを『映像化した』のが、私達が『視る』予知の光景なのでしょう」

……よく分からない。

「つまり……怖い何かがある、という大きな『予感』を最初に読み取るわけです。そして、そこから自分の知りたい事柄にその『予感』の内容がどんな風に関わってくるかを改めて『細かく感じ取り』、その内容をまるであたかもそこにある現実のように頭の中で想像する。……といった感じです」

（じゃあ……実際には、全く違うこともあるの……？）

例えば、想像じたいが間違っていたり、感じ取り方が違っていたり。

（本当には、違う未来が待ってたりするの？）

そうであってほしい。

心底そう思って問うと、ポテトさんは虚無の瞳のままで言った。

「わかりません。今私が言ったのは、受け取る『予知』が同じでも、『視る』内容が違うのはそういう意味だ、ということへの説明でしかありませんから。私自身は『未来を司る者』ではありませんから、こういったことを判別するのは不得意なのです」

よく分からんが、このヒトにも不得意なモノってあったんだな……

「私は、今、最も強く感じ取っている『いずれ訪れる未来』で、対峙するご主人様とあの子を視ています。……ひどい怪我をして、周り中が壊れていて……」

あたしは大きく目を瞠った。

それは、あたしが視たものと同じだと思った。

（アウグスタ……片腕が無かったのです……）

あたしの言葉に、ポテトさんはわずかに顔を曇らせる。

「……それは、実際に腕を失うか……それとも、それに近い誰かを喪っているのかの……どちらかなのでしょうね……」

虚無の色を深めて、ポテトさんはボソリと呟いた。

「……それでも……今受け取っている『予知』は、まだマシになったほうなのですよ」

未だ暗い目で空を見上げたまま、ポテトさんは痛みを堪えるように目を細めた。

青黒い夜空の下で、その黒髪がわずかに風に揺れる。

「初めて『視た』時、二人とも、ハッキリと死の予兆が出ていました。いつも、いつも……どれだけ祈って空を見上げても、『視える光景』にもさしたる違いはありませんでした……」

（……さしたる違い？）

あたしは首を傾げる。

ポテトさんは虚無の瞳のままで笑った。
「未来とは、決められた一本の道ではありませんから。道のようにみえるのは、その時々の変化、事情、縁、関わり……そういったものが複雑に影響をしあった末に『一番辿る確率の高い』もの。その『可能性の結果』です。だから、いくらでも変化するし、いくつでも道はある」
だから、今『視て』いるものが必ず訪れる未来かというと、そうではない。
「けれど……『一番訪れる可能性の高い』未来では、あるのです」
瞳が揺れて、いつもの綺麗な蒼に戻る。
そうして、あたしをハッキリと見上げ、少しだけ微笑った。
「あなたの存在を知った時、私は、あなたこそがアレを具現化する魔女なのかと思いました。ご主人様と対峙する……『敵対する』黄金の魔女なのかと……」
けれど、とその唇が言葉を紡ぐ。
「……あなたが現れてから、視えるものが少しずつ変化しているのです。今はもう、最初に『視た』未来はどこにもありません。けれど……まだ、あのような形のままです。どちらも傷つき、けれど対峙し、その傍らに、私の姿は無い……」
言われて、あたしはあの光景にポテトさんの姿が無かったことを思い出した。
いつもアウグスタに傍らにあって、おそらく、彼女を傷つける者を決して許さないであろうこのヒトの姿が――
「いなかったのは、駆けつけれなかったということなのか、存在しないためなのか……それすら、今はわかりません。……あなたの姿も見えない……それでもああして、あの二人が対峙する……」
ポテトさんの目がもう一度空へと向かい、暗い色を宿す。
「あの未来を変えるためなら、私はどんな犠牲も厭いません。誰が

傷つき、誰が嘆き、誰が死のうとかまいません。そのことであの方やあの子が悲しもうと、躊躇(ちゅうちょ)することすらしないのです」

まるですでに行ってきたことを語るように、ポテトさんは言葉を紡ぐ。

その瞳はただひたすらに空へと向けられ、決して他を見ようとしない。

少なくとも、同じものを視るあたし以外は。

「あなたがもう一人の黄金の魔女になる未来は、変わりません。敵対する可能性も消えていません。……けれど、あなただけでは無い……」

空を見つめたまま、ふいにポテトさんは薄ら寒くなるような声で呟く。

顔からは感情が消え、瞳には虚無が宿り、その声は今まで聞いたことがないようなどす黒い何かを含んだ。

「……動いてる者がいるのです。影で。今もまだ動いている……」

その口が亀裂のような笑みを浮かべ、クツクツと心が冷えるような笑い声が零れた。

「嗚呼……そうですね、『私』という『存在』がこうして『ここに』在るのだから……こういうことだって起こりうるでしょう。先代や先々代のように、特殊な城に閉じこめられているわけでもないのですから……」

（？？？）

意味不明な言葉に、あたしは首を傾げた。

相変わらず、ポテトさんは不思議の国の住人さんだった。

しかし、いつまでも不思議の国にいられてはかなわない。

（お義父さま……あの光景にならないために、あたしに出来ることって何？）

掴んでいる髪をギュッとすると、ポテトさんがいつもの顔に戻ってあたしを見た。

まるで今いる現実を確認するかのように、しばらくジッとあたし

を見つめてから、
「……レンさんの傍にいてください」
そっと、言葉を零した。
「今まで、あの子には居場所が無かった。ここにしか無かったのです。ここにいても本当の意味では生きていると言えない状態でしたが……それでも、ここでしか生きることができなかった。……けれど、あなたがいてくれさえすれば、きっと、あの子はどこにでも行けるし、どこででも生きていくことができる」
（？）
意味がよくわからず、あたしは首を傾げる。
それにホロリと笑みを零して、ポテトさんは眼差しを柔らかくした。
「あなたが現れたことで、動き出すものもあり、変わりだすものがある。……そして、あなたがいてくれるからこそ、打てる手も……あるのです」
やっぱり意味不明なその言葉に、けれど少しだけ胸がザワザワした。
嫌な予感がした。
それは、悪い予感にも似て、ひどく胸をざわめかせる。
（お義父さま……）
「きっと、あなた達は怒るでしょうね。……全てが終わった後に、今日みたいに、あなたに知恵熱を出されてしまうかもしれません」
口を開きかけたあたしの言葉を遮って、ポテトさんは笑って言う。
その、どこか悲しげに見える、切ない笑顔。
「それでも、私は行うでしょう。あの光景を実現させないためなら……世界だって、壊してしまいたいのだから」
（世界を……）
思わず呟き、そして、あれ？　と目をパチクリさせた。

また景色が一変していた。
今度目の前に広がっている光景は、大きな部屋の内部だった。
広間、と言ったほうがいいだろう。
沢山の人が集まっても大丈夫なぐらい、広い部屋。
天井は高く、そこからぶら下がっている綺麗なシャンデリアが、青い光を周りにそっと撒いている。
天井を支えるのはいくつもの巨大な円柱。
淡い青に染められたそれが、とても美しく、同時になにか寂しいもののように見える。
（……どこ？）
さっきまで肩車してくれていたポテトさんも、やはりここにはいなかった。
あたしは先程までポテトさんの髪を掴んでいた手をワキワキと動かし、ちょっとしょんぼりして頭上を見る。
天井で空を隠されたそこからは、あの不思議な光景は見えそうにない。
とはいえ、二度と見たくない類の光景だったから、それはそれでかまわなかった。
けれど、いったい、ここはどこだろうか？
天井には何かの絵が描かれているのだが、どういうわけかぼんやりとしか見えない。
よくよく見れば、うすぼんやりとしているのは天井だけではなく、部屋にあるもの全部がぼんやりとしていた。
まるで水を通して見る景色のように、青い薄闇に滲み、ぼんやりとぼやけている。
目を凝らして見れば、広い広い部屋の奥には豪華な椅子。
椅子の背後には、磨き上げられた沢山の硝子で出来た壁。
（……玉座の間……）
ふいに浮かんだ言葉に、あぁそうか、と納得した。
ここは玉座の間だ。

アルルじーちゃんと初めて会った後、フェリ姫と一緒にアウグスタに会いに来た場所だ。
あの時にはまだアルとも仲良くなっておらず、アディ姫やアルトリートとは会ってすらいなかった。
まだ一日ほどしか経っていないはずなのに、なんと昔に思えることだろうか。
あたしはぼんやりと周囲を眺め、ふと、玉座に沈んでいる人影に気づいた。
今まで気づけなかったのが不思議だった。
その人は椅子に深く腰掛け、項垂れるように俯いている。
……疲れた姿だと思った。
そして、悲しい姿だと。
あたしは何を思うより早くその人の元へと歩く。
あたし達以外には誰もいないその部屋で、ただ独りきり――
――アウグスタが、そこにいた。

ぐったりとした姿で、アウグスタは俯いていた。
いつも爛々と目を輝かせ、凛と顔を上げて立つ姿ばかりが印象に残っていたから、そんな姿を見ると、どうしようもなく胸が騒いだ。
青い世界にともに沈むように、その人の輝くばかりの黄金も、今は青く淡く沈んでいる。
一瞬、先程見た恐ろしい光景が蘇って、あたしは慌ててアウグスタに駆け寄った。
けれど飛びつくことはできず、おずおずと、力無く投げ出された手を握る。
ぴくりと、アウグスタが反応した。

緩慢な動きで重い頭をわずかに上げ、疲れた顔のアウグスタがあたしを見る。
「……　ベル」
その呼び声に、先程見た光景が霧散するのを感じた。
まるで夢から覚めるように、現実に引き戻されるように、怖い光景が色褪せていく。
そんな風になるほど、アウグスタの声は、あまりにも弱かった。
あまりにも悲しげで、あまりにも力がなかった。
あたしが傍にいて、ちゃんと支えてあげなきゃ、と思うほどに。
「……おまえ、今は、ちゃんと寝ていたほうがいいんじゃないか……？」
アウグスタはそんなことを言って、少しだけ口元に笑みを浮かべた。
細い手が伸びてきて、あたしの頬を優しく撫でる。
暖かな熱が上下するような、そんな不思議な感触がした。
あたしはその手に自分の手を添えて、アウグスタをジッと見つめる。
……アウグスタは、泣いているように見えた。
実際には目に涙は無かったし、頬に涙の跡があるわけでもなかったけれど。
それでも、泣いているように思えた。
「……辛い思いをさせたな……」
美しい唇から、ほろりと言葉が零れる。
「……まだ小さいおまえに、キツイ場面ばかり……見せたな……」
その言葉にあたしは首を横に振った。
アルトリートのことだと分かった。
だから首を横に振ったのだ。
辛かった。
きつかった。
けれど、それは自分で望んだもの。

――決して、目を背けてはいけないものだったから。

（見なくちゃ、いけなかったの）

きちんと。

（知らなくちゃ、いけなかったの）

そこにある現実を。

そこにいる人を。

（……でも、何も、できないの……）

助けたかった。

生きていてほしかった。

何かしたかった。

何かができるんじゃないかと思っていた。

奇跡なんか起きなくても、精一杯やれば『やれる』何かがあるんじゃないかと思っていた。

――そんなものは、ただの願望でしか無かったのだけれども。

（……どうして、何も、できないんだろう……？）

しなくちゃいけないことがあるのに。

したいと思うことがそこにあるのに。

してはいけないことがここにあるのに。

どうして、何もできないのだろう。

悪い方に動く動きを変えることも、

動いてしまうコトそのものを止めることも、

どうしてできないのだろうか？

国で一番エライ王様だって、それを望んでいるのに。

「……なぁ、ベル。私は、なんのためにここにいるのだろうな」

アウグスタは苦い笑みを零す。

泣くような顔で。

迷子のような目で。

「ここにいたって、見えないものはあまりにも多くて、知らないこ

とも、聞けない言葉もあまりにも多くて……私はいつだって……本当にいつだって『足りない』んだ」

王という強大な権力を持っているはずなのに、

あまりにも足りないのだ。

それを行使するための……地場が。

「……国を……その立場を……守ろうとするのなら、切り捨てなければならない命があることは知っている……」

それはきっと、アルトリートの命。

「だが、その命だって……賢明に生きているんだ」

たとえ、間違いを犯したとしても、

そのせいで歪んでしまった沢山のものがあったとしても、

「正しいことを正しく行うことも、正しくないことを正しくないと切り捨てることも、こんなにも難しい……」

あたしに触れていない方の手が、ギシリと玉座の肘掛けを握りしめる。

まるで、そのまま握りつぶすかのように力をこめて――

「けれど……なら、私は、いったい、なんのために王になったのだろうか」

なんのために。

――なにをするために。

「権力など、欲しくはなかった。地位も、財宝も、欲しくはなかった。私は――」

アウグスタは――

「ただ、守りたかった。助けたかった。誰かが担わなければならないのなら、私が担わなくてはならないだろうと思った。私が逃げれ

ば、あやつが生け贄にされる。哀れなあやつが、心を失ったままで、こんな重荷まで背負わされるのは……我慢ならなかった。私が助けるのだ。助けるのだと思い続けていた……！」

ギシリと、玉座が軋む。

その美しく、華やかな王の椅子が。

「だが……なんだ……私は、結局のところ、本当の意味であやつを救ってやることもできず、もう一人の弟すら守れないではないか！　あれらが望むものすら、叶えてやれないではないか！　助けてやれないではないか！！」

声を振り絞って、アウグスタは叫んだ。

「なんのために、私はこの椅子に座ったのだ！！」

まるで血を吐くような声だと思った。

言葉の全てに魂がこもっていて、だからこそ、こんなに強く胸を締めつける。

（アウグスタ……）

あたしは触れている手に、そっと力を込めた。

何も出来ないことを悔しがっているのは、あたしだけでは無い。

あたしは自分に力が『無い』ことを嘆き、

アウグスタは、『ある』力を使えないことに嘆いている。

なれば、力の『ある』『なし』は関係ないということなのだろうか？

個人で持っている力ではなくて――

（世界を……）

あたし達が生きている、この世界そのものを――

（世界を動かせるだけの力を……）

得て、それを使って――

（世界を変えてこそ、初めて、あたし達の思いは果たされる……の？）

あたしの声に、アウグスタは一瞬、大きく目を瞠ってあたしを見つめた。

綺麗な色の瞳が、涙に濡れている。

……嗚呼、『力』があっても使うことができないのなら、それはなんて苦しくて悲しいことだろうか。

ただ、己の無力を嘆くだけよりも、よほど……

「……変えようか……」

ぽつりと、アウグスタは呟いた。

あたしはその声に頷く。

そうだ。

変えればいい。

あたしは誓った。

自分にそう誓ったのだ。

そしてまた、ポテトさんも――

（変えよう……アウグスタ）

そのための努力なら、あたしはいくらだってする。

アウグスタがそれを成し遂げるのなら、あたしはいくらだって力になる。……なれるよう、全力を尽くす。

（もう、こんな風に泣かなくてもいいように）

だって、分かっている。

アウグスタは、どんなに苦しんでも、傷ついても、決してその椅子から降りないのだということが。

例え美しく飾り付けられた、茨の椅子のようなものであっても――

彼女は座り続けるのだ。

——守りたいと願った、己の守るべき者達のために。

その虚飾の玉座に。

エピローグ

ふいに強く体を引っ張られ、ストンとどこかに落っこちるのを感じた。

（ふぐぉ！？）

途端に凄まじい頭痛が走り、思わず重い手を上げて頭を抱えた。

――のは気持ちだけ。

実際には腕は動かず、体もほとんど動かなかった。

ナゼ！？

「ベル。……起きたのですか？」

すぐ傍らで、心配そうな声がそっと囁く。

重すぎて開かない瞼の向こうに、こちらを見守るレメクの気配。

きっと両手を差し伸べれば、すかさず抱きしめてくれることだろう。

けれど体は思うように動かず、手を伸ばすこともできなかった。

「ベル……？」

名を呼んでくれるレメクの声に、あたしはただ体を戦慄（わなな）かせた。

頭が割れるように痛い。

体がカッカカッカしていて、喉がカラカラに乾いている。

一瞬、初めてレメクに助けられた、あの悪夢の数日間を思い出した。まるであの時に戻ったように、体が重くて頭が痛い。

違う点があるとすれば、咳が出ないのと……ぇー……喉がガラガラしないのと……ぅー……

あぁ駄目だ……頭が痛すぎて、上手く思い出すこともできやしない。

「……ベル」

レメクの声が心配そうな色を深める。

けれどそれに返事をする間もなく――あたしの意識は、ストンと

さらに下へ落ちたのだった。

声に呼ばれたような気がして目を覚まし、
無人の城を徘徊しては体を引っ張られ、
ストンと落ちては頭痛に苦しんで、
更にストンと闇に落ちてから、
やがてどこかでポカッと目を覚ます。
何度かそれを繰り返し、気づくとひどく殺風景な場所に出ていた。
寒そうな石畳に、石の壁。すぐ近くに階段があり、廊下と部屋を隔てるのは鉄格子。
……西の塔。
ぼんやりとそれを確認して、あたしは顔を上げた。
なんとなく予感していたが、やはりそこにはアルトリートがいた。
ベッドに腰掛け、どこか思い詰めた顔で握りしめた拳を睨んでいる彼――
ふとその顔が何かに気づいたように上向き、真正面からあたしを見つめた。
あの時と同じく、鉄格子越しに。
「……なんだ、今度はおまえか」
力のない苦笑を浮かべて、アルトリートはそう言った。
なんだかそれは、しょうがないな、と言わんばかりの顔だった。
「……次から次に……」
苦笑を深めて、アルトリートはそんなことを呟く。
あたし以外にも、誰かが来ていたのだろうか？
見渡してもかつて見た光景と何一つ変わっておらず、誰かが来ていた気配はしない。
だが、誰かが来ていたのかもしれない。
けれど――なんのために？

「……決めろと……そう言いたいのか？」
意味が分からずぼんやりしていたあたしに、アルトリートは自問するように問いかけてくる。
あたしは目をパチクリさせた。
彼の言っている意味はやはり分からず、けれど何かを言わないといけない気がして口を開く。
（――――）

声は出なかった。
あたしは自分の喉を押さえる。
（――――）

かつてレメクを喪いかけた時と同じように……あたしの『声』は、音にならなかった。
アルトリートは声を出そうと必死になってるあたしを見つめ、やや あってほんのりと苦笑を零した。
「……何も言わなくても、いいさ」
その声にあたしは口を閉ざし、鉄格子を掴んだ。
――うぉ！？　なんか一カ所、めきょっと歪んでますよ！？

「『ボク』は今日死ぬ。……それは、もう受け入れた」
すぐ目の前にある歪んだ鉄格子にギョッとなっていると、アルトリートが苦笑を深めながらそんなことを言う。
慌ててバシバシ鉄格子を叩くあたしに、彼はもっと苦笑を深めて言った。
「……わかっているさ。ボクも決めたよ……」
何を決めたのか。

意味がわからず、けれど一生懸命鉄格子をバシバシ叩くあたしに、彼はゆっくりと近寄って来て目の前でかがんだ。
小さなあたしの視線にあわせて、真正面に座る。
「なぁ、王女。クリスに伝えてくれないか。……あのコインの片割れは、『ボク』の墓に……たぶん、あの人がああ言うからには、どこかに作られるんだろうと思うが……そこに入れてくれと。あれは『ボク』だけのものだからな」
（???）
意味がわからないまま、真剣な目の色に気圧されてあたしは頷いた。
アルトリートはちょっと微笑う。
「それから……女王達はたぶん、かなりムチャクチャやって公爵をぶちのめしたんだろうから……だからってわけじゃないが……まぁ、そういうのをちゃんと見ておいて、ボクのことで女王達を恨むな、と……。あいつは根が単純だから、感情に引きずられてどう転ぶかわからないからな」
（……）
あたしはしっかりと相手を見つめ、コックリと頷いた。
こんな瞬間にでも、たった一人のことしか考えれない、本当には純粋だった彼を。
「……なぁ、泣くなよ。別に全部が終わりじゃない。『ボク』が終わっても、ボクは続いていく。……用意されたシナリオに動かされるのは業腹だが……代わりのものはもらったからな」
手が伸びてきて、あたしの頭をわしゃっと撫でた。
――撫でられたような気がしたのだ。

本当には、ただ素通りしただけだったのだろうけれど。
「ボクは、本当は、おまえ達のことは嫌いだったんだけどな。何の苦労もしてないのに王女になんてなったおまえ達が」
認められなかった自分と比べて、嫌いだったのだとそう告げなが

ら、

「けど、おまえ達はおまえ達で、いろいろあるんだな。相手を知らずにいるっていうのがどれだけ怖いことなのか、よく分かったよ」

苦笑する彼の、その目にはなんだか暖かい色があった。

「……ボクのために泣いてくれたおまえを、ボクは忘れない。クリスのため、っていうのもあるんだろうけどな……少なくとも、おまえは、ボクの命を惜しんでくれた」

惜しむとも。

惜しむとも！

「だけど、もう十分だ」

あったかい手が離れて、アルトリートが遠ざかる。

立ち上がった彼は、あたしを見下ろして軽く笑った。

家族を見送るような、そんな優しい眼差しで。

「おまえはおまえの人生を歩め」

その笑顔をあたしは一生、忘れないだろう。

そして、それが『アルトリート』の姿を見た――最後になった。

※　※　※

青い空を一羽の鳥が横切っていった。

華々しい大祭が終わり、人々はまたいつもの日常へと戻っていく。

他国の賓客はすでにあらかた国へと帰り、王都の隅々にまで施された飾りや紋様珠は撤去された。

沢山の仕事があったから、貧困層の人々も今頃はいつもより美味

しい物を食べているかもしれない。
春になる前に再建された新しい孤児院でも、きっとちょっとは贅沢なごはんが出たことだろう。昔と違い、今はちゃんとした人が世話をしてくれているのだから。
「……」
あたしは眼下にある王都を見つめ、そうして遠くへと視線を馳せた。
無理を言って連れてきてもらった教会の一番てっぺん――
王都で最も高い位置にある塔の最上階には、あたし以外誰もいない。
連れてきてくれたレメクにも、無理を言って席を外して貰った。
我が儘を聞いてくれたレメクの、こちらを案じる目が少しだけ悲しげだったのを覚えている。
「……」
あたしはジッと遠くを見つめていた。
あたしの背後にあるのは、下へと続く階段と、金色に輝く大鐘。
王都中にその音色を響かせる鐘を背に、あたしは口を開いた。
あの時、出なかった声のかわりに、今、あたしは歌を贈る。
もうこの世にはいない人へと。
――届くかどうかは、わからないが。
（聞こえているだろうか……？）
あたしがベッドから起きれたのは、大祭の最終日から三日も経った後だった。
ひどい高熱を出したらしいが、熱を出した時の記憶はほとんど無い。
けれど、違うものは覚えていた。
（……アルトリート）
沢山の夢を見た。

……覚えている。
その全てを。
――分かっている。

きっと、あれらは、本当には夢ではないことも。
（……何も……できなかった……）
裁判も、刑も、もうすでに終わっていた。
何もできないままに、全ては終わったのだ。
そう……全ては、昨日のうちに。

四月九日。
王族殺害未遂の罪で、アルトリート・ジュダ・フォルスト・レンフォード、処刑。

享年、二十六歳だった。

エピローグ（後書き）

このラストにも臆することなく、こんなすみっちょまで読んでくださるあなたを本気で愛してしまったようです。

虚飾の玉座、終幕です。

幕間にまだ物語が残っておりますが、ベル視点で見ることのできる物語はここまでとなっております。

「主人公だから何でも出来る」という物語には出来ませんでしたことをお詫び申し上げるとともに、後にアップされる「お約束」に「あぁ、やっぱりな」と半笑いしていただければと思います。

さてさて。

物語を最後までお読みくださった方々に、ぜひこちらの曲達を聴いていただければと思い、アップさせていただきました。ニコ動で削除されてなければどちらも視聴できるかと思います。
とても美しい歌です。
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｓｅｋｉｎｅｍａｋｉｋｏ／ｅｎｔｒｙ－１０７５５２９０９６５．ｈｔｍｌ
ただ、原曲と原作を愛していらっしゃる方、こんな小説のラストで紹介してしまい、申し訳ありません；
とても心に残る歌なので、沢山の方に聞いていただければと思い紹介させていただきます。

？　ルドゥイン・バルバロッサ（前書き）

この物語はベルが主人公ではありません。
また、本編『陰謀の章』の後日談であり、別物語と絡むエピソードのため、このエピソードを読む前に本編をお読みいただければ幸いです。
※なお、このエピソードは？から始まる数話をまとめて、ある一つの物語へ続く話になっております。

？　ルドゥイン・バルバロッサ

ふいに遠くから聞こえてきた歌に、部屋の中にいた男は顔を上げた。

王都、西区、大神殿。

神王レゼウス神殿の一室である。

五つの神殿からなるクレマリス大神殿において、レゼウス神殿は最も高い建物であり、また、最も壮麗な建物だった。

ヒビ一つない白い壁には全面に彫刻が施され、太く頑強な円柱はそのほとんどが彫刻で出来ている。

信仰の砦としては申し分ない美しさであり、荘厳さであった。

例え中にいる者の何割かは神の教えとかけ離れていようとも、少なくとも外から見る神の家の神々しさは建国当時と変わらない。

そんなレゼウス神殿は、遠くから全体を見ると三角形に近い形をしていた。

中央の最も突起した場所には黄金の鐘があり、年に数回、祭事や祝事にのみその音色を響かせている。軽い一突きですら王都中に鳴り響くとされる鐘の音は、時を告げる大聖堂の鐘とはまた違った荘厳さであるという。

――その鐘の元に、今、一人の少女がいた。

遠く離れたこの場所にすら、歌声を響かせる少女が。

（……メリディスの……『呪歌』……か）

二人掛けのソファに深く腰をかけ、男は背もたれに体を預けた。

大きな男だった。

厚みなら常人の三倍ちかく、縦はさすがにそこまでではないが、この男相手に仰向かずにいられる者は稀だろう。のけぞるようにして見上げる者がほとんどで、もちろん目線が合うことなど無いに等

しい。
男の名はルドゥイン。家名はバルバロッサ。
武の名門バルバロッサ侯爵家の三男にして、裁判官たる大神官だった。
（何年ぶりかな……これを聞くってぇのは……）
メリディス族は、数ある一族の中で最も世に出るのが『稀』だと言われる一族だ。
もともと少数民族であった彼等にとって、その類い希なる美貌と特殊な体質は災いにしかならなかったのだろう。人目を惹き、隠れ住まなくてはならない状況に追い込まれ、今はひっそりと深い森の中で暮らしている。
かつて彼等が祭事の主役であった時代、その血統魔術『呪歌』こそが祭りの要となっていた。だが、公式の記録で呪歌が記録されているのは、前王の時代を除けばおよそ三百年以上も昔の話である。
それほど前から、彼等は避難を余儀なくされたということだろう。
――かつて共に敵と戦った仲間だというのに。

（平穏な時代にこそ、魔物は出る……か）
昔、教皇から言われた言葉を思いだし、ルドゥインは嘆息をついた。
――その魔物の名を『人間』という。
共通の敵が在った時代には助け合って生きていたというのに、平穏が続けば敵意を剥くというのはどういうことだろうか。メリディス族には、隠れ住まなくてはいけない理由など、本当にはなかったというのに。
（……それでも……上手く隠れれば、なんとかなるんだろうけどな……）
人の『戸籍』を預かる教会という立場上、人知れず生きるメリディス族と出会うこともある。
少なくともルドゥインは、今までに七人のメリディス族と知り合

っていた。
人が一生のうちで一人会うかどうかわからない、とまで言われる現代では、おそらく驚くべき遭遇率だろう。
けれど、その中で世に『メリディス族である』と知られているのは、たったの二人だ。
（……王妃も、よく歌ってたっけな……）
そのうちの一人、かつて王国において最も有名だったメリディス族の女性を思い出し、ルドゥインはやるせないため息をついた。
後宮の奥深くに半ば幽閉されるようにして存在していた彼女を、本当の意味で見知っている者はほとんどいない。
彼女を盲愛した前王が、人目に触れさせるのを嫌ったため、第二王妃という地位にありながら、彼女の一生は虜囚のそれと同じだったのだ。
おそらく、彼女には唯の一つも自由など無かっただろう。
……その心すら一族の掟に戒められ、自由になることは無かったのだから。
（……メリディスっていうのは、悲しい一族だな……なぁ、レメク）
今、歌声を響かせている少女の傍らにあって、誰よりもその身を案じているだろう友人に心の中で語りかける。
同じ掟に縛られた少女を、なんとか自由にしようと画策していた友。
正直、掟があろうとなかろうと、結末は一緒なんじゃなかろうかと思うのだが、頭の固いあの友人のことだから、やると決めたからには何が何でもやり抜くだろう。――意味があるかどうかはともかくとして。
ルドゥインは軽く目を瞑り、聞こえてくる歌声に身をゆだねた。
不思議な歌声（こえ）だった。
歌い手は一人のはずなのに、まるで何人もの人が一斉に歌っているように聞こえる。

一つの歌が二つになり、二つの歌が四つになり、四つの歌が八つになり、八つの歌が十六になる。

高い音も低い音も同時に発せられ、あたかも数人での唱歌を聞いているようだ。

それは歌というよりも音の波のようだった。

（王妃の時には、民族歌が多かったが……）

今、少女が歌っているのは歌劇の歌だ。

一族と離れて生まれ育ち、幼い頃に母親とも死に別れた彼女だから、知っている歌と言えばそういった『歌』に限られるのだろう。むしろ、ここで酒場の歌などが出てこなかっただけでも良しとするべきだ。

かつて彼女が知っている歌を披露するたび、慌てて「歌ってはいけません」と諭していた友人の姿を思い出し、ルドゥインは知らず笑みを零した。

あの少女が現れてから、いったいどれだけの奇跡を目にしてきただろうか。

何の感情も目に宿さなかった友が、笑い、嘆き、怒り、案じ、一生懸命生きはじめている。いつだって、目を離した隙にどこかに消えてしまいそうだったのに、今では生きることに対しそこはかとなく意欲的だ。

それはきっと、彼女が起こした最大の奇跡だろう。

王や、教皇や、あの人智を超えた力を持つ魔法使いですら叶えられなかったというのに。

（……あいつらも……もっと早く会っていれば……何かが変わったのかもしれねぇな）

思うのは、この歌を捧げられた青年のことだ。

利用され、その命を散らすことになった『彼』のことを……いったい何人の人が『知って』いるだろうか。

最初から彼に注意を払う者はおらず、最後までほとんどの人から認知されないままに生涯を終えた青年――アルトリート。

彼の一生は、いったい、どんな意味があったというのだろうか。
（……なぁ……もっと早く、会ってればよかったんだよな）
良い形の出会いであった、などということは無いだろう。
レンフォードのあの家で育てられたのなら、きっと自尊心や虚栄心を盛大に植えつけられてきただろうから。
けれどどんな出会いであったとしても、時の流れとともに、きっと、様々なことを知り合えれたことだろう。
生きていれば、そういうことがいくらだってあるのだ。
知るということは、認めること。
認めるということは、その人を愛するということ。
それは特別な意味である必要はない。
ただ、そこにあって、そこにあることをあるがままに認めることが、その人の命を大切に思うということなのだ。
人と人との関わりとは、きっとそういう形であるべきなのだろう。
――けれどいつだって、それは現実には叶えがたい、理想のようなものになってしまう。
本当には、とても簡単なことだというのに。
（あいつが変わったように……おまえさんだって、変わったかもしれねぇのにな……）
生きることにひたむきなあの少女は、いつだってその姿で自分たちの意識を変えていった。
何の力も無い小さな子供なのに、その身に宿る生きる力は、常に夜空で方角を示す強い星のようだ。
月や太陽のような大きな存在では無くても、いつだって変わらない形で旅人を導いてくれる。
（――そういや、昔話ってぇのは皆そうだな）
どんな物語でも、最後に人々の力になってくれるのは、太陽でも

月でもなく、星なのだ。
それ自体には強い力は無いけれど、その力を借りる人に大いなる恵みを与えてくれるのが、星の力。
それはいつだって困難を打ち破り、最後に幸福を授けてくれるのだ。
――例えそれが、どんな物語であろうとも。

ルドゥインは硬く目を瞑る。
ややあって、深い嘆息とともに目を開いた。
――時は戻らない。

すでに処刑は執行された。
彼が王族の縁として毒杯を飲むところを、自分は見守ったのだ。
王族の自害用としても用いられる毒は、苦しみを与えることなく命を奪う。眠るようにして逝った青年の骸を、正規の手続きで埋葬した。
神官として、裁判官として……そして、彼に関わった人間として。
その命が確実に尽きたこともまた、場に集った人々とともに確認したのだ。
今更、その相手に向かって何を言ったところで意味は無い。それはただ、自分が何もできなかった息苦しさから逃れたいだけの戯れ言で、相手へと届くことは無いのだ。
それが『人の死』というものだ。
生者と死者を隔てる、超えることの出来ない壁なのだから。
（……）
大きな体を丸めるようにして俯いた後、ルドゥインは勢いよく立ち上がった。
――生きている者には、生きるために負わなければならないものがある。

……生き続けるために。

（まずは、王弟殿下……か）

最も気がかりであり、一つ間違えば火種になるだろう相手のことを考えて、ルドゥインは顔を引き締めた。

アルトリートを唆した公爵については、すでにあらかた決着がついている。

降格こそ無かったものの、現当主は王都の街屋敷に蟄居後、その公爵位を剥奪。

かわって公爵位を拝命したのは、若干十三歳のクレマンス伯爵だった。

実子であり、もともと後継者でもあったシーゼルが公爵位を賜ることに異論は無いだろう。実母であるマルグレーテが夫の処罰に対して何も言わなかったのも、おそらくそのためだろうと思われた。

（……いや）

ルドゥインは頭を振る。

もしかすると……少しは、実子アルトリートを奪われたことに対する何らかの思いがあったのかもしれない。

アルトリートの処刑に対し、マルグレーテは公の場では何も言わなかった。

夫の処罰に対しても、それこそ表情一つ動かさなかったという。

ただ淡々と人々を眺め、己自身も蟄居を命じられた街屋敷へと帰った彼女の胸中を知る者はいない。

だが、実子や夫を庇わなかったことで、ある意味、彼女は王族に対する反逆がどれほどの罪かを身をもって示した。

――気がかりと言えば、それをレメクと『魔法使い』が注意深く見ていたことだろうか。

（……あいつもなぁ……気になることがあるなら、こっちにも言やぁいいもんを……）

『魔法使い』が無言なのはともかく、レメクが何も言わないのは、何らかの疑惑があったとしてもそれを証明するものが無いからだろ

う。

ただの直感や疑問で、他人にまで疑惑や先入観を抱かせることはできない――というのが彼の持論だ。

もっとも、今回はそれが強烈に裏目に出てしまったわけだが。

（……つーか、そりゃ、あれだけ皆が急ぎ足で動かなけりゃ、それでもなんとかなったんだろーが……）

それを気にして一人コッソリ落ち込んでいた友人に、ルドゥインは頭を掻く。せめて一言なりこちらに言っておけば、ああやって自分の責任として落ち込まずにすむものを……

（……あっちでもこっちでも『自分のせいだ』っつって落ち込んでたら、それこそ敵の思うツボだろーが）

ルドゥインとしてはそう思う。

もっとも、彼にしてみたところで、救えたはずの相手を救えなかったという思いは、やはり己の責任として心の中にあるのだが。

（ぇいクソ！　今考えなきゃならねェのは王弟殿下のことなんだよ！）

思わず落ち込みそうになる己を叱咤して、ルドゥインはぶっとい息を吐く。

――そして、情けなく眉を垂れさせた。

（……しかし……ありゃあ、本気なのか……？）

今朝方教皇から聞かされた命令には、剛胆をして知られるルドゥインですら、思わずそうならざるをえなかったのだ。

（……前例が無いわけじゃあ、ねェが……）

そう。前例がないわけではない。

ある意味『彼』のその後の身の振り方としては上等だろう。

下手に王宮に留まって、落ち着く間もなく、お互いの中に禍根を残すよりはよほど良い。

だが――

（……アデライーデ姫は、どうするんだろうかな……）
今回の事件で、最も精力的に動いていた姫君を思い出し、ルドゥインは重いため息をまた一つついた。
――部屋の扉をノックされたのは、その時だ。

「……？」
ルドゥインは思わず体ごと扉の方を向いた。
彼がいるのは、教皇の私室の一つだった。
教皇を交えての会談後、王女と友人は鐘楼へ、教皇は公務のために席を外し、結果的に一人で留守番となったのである。
各国の王をして最大限の敬意を向ける教皇の私室となれば、入室を許可される者など限られている。まして、教皇から人払いが命じられている今、この部屋に入ってくる者はいないだろう。
そう――

「おや。『頑強なる裁判官』殿だけですか」
意味深な笑みを浮かべた、美しい悪魔以外は。

「それはまた。丁度良い」

？　クリストフ・サイフォス

誰かに呼ばれたような気がして、クリストフは薄く目を開けた。
薄暗い視界の中、白いものが目の前でゆっくりと上下に動いている。
頬の下まで続くそれは、柔らかく、暖かく、しっとりとしていながらも、滑(すべ)るような肌触りをしていた。
丁寧に仕立てられた絹なら、こんな手触りなのだろうか？
美しく装った人々をふと思い浮かべ、ふいに胸を穿った痛みに両目を固く閉ざした。

――■■■■■■もそうだった。

浮かんだその名前に、世界の全てが重く軋む。
白い服。縫い取りの美しい上着。趣向を凝らしたボタン。宝石をあしらったカフス。
そのどれもが上等で、最初に触れた時には、汚しはしないかとただただ恐ろしかった。
――あぁ、あれはいつの頃だったろうか？

あまりにも姿が似ていた自分達。同じ服を着ていれば、屋敷の使用人ですら、時折どちらがどちらなのか分からなくなっていた。
――時々、交代しようか。

そう言って笑っていたのは、いつの頃だったのだろうか。

――勉強から逃げたいんだろ。

そう言って逃げたのは――　あぁ、本当に、いつだったんだろう？

逃げる自分を追いかけて、■■■■■トは笑っていた。

笑ってはいたけれど……何故だろう？　今思い返せば、いつだって、その顔はどこか泣き顔に似ていた気がする。

逃げたかったのだろうか？

思った瞬間に、その答えが浮かんだ。

――嗚呼、逃げたかったに違いない。

八才年下の異父弟。シーゼルの同父兄でもある少年と、彼はいつも比べられていた。

■■■■ートが不出来だったわけではない。

けれど、自分の目から見ても、■■■リートと異父弟の差は明らかだった。

――だが、それはいったい誰の罪なのだろうか？

■■トリートの罪では無いだろう。

異父弟の罪でも無いはずだ。

彼等はただ生まれ、生きていただけなのだ。

人は皆、誰もが生まれながらに『己』という唯一無二の器を持つ。

そこからどんな風に育つのかは育て方次第なのだろうけれど、鳶が鷹にならないように、驢馬が馬にならないように、決して『己』という枠組みを超えた『何か』になれるわけではない。

それはきっととても当たり前のことで、嘆くべきことでも、他人から見下されるようなことでもないはずだ。

なのになぜ、■ルトリートは時折、とても辛そうな目で屋敷を見なければいけなかったのだろうか？

――なぁ……

今なら訊きたい。いつも目を背けていたその問いの答えを。
いつだって訊きたくて……けれど、それを聞いても自分には何もできないからと、ただ黙って見ないフリをしていたあの日々を覆して――

――アルトリート。

アルトリート。
なぁ、あの家から『出たい』と思ってたか？
どこに行けるか分からなくても、どこかに行きたいと思ってたか？
なぁ、それならなんでいっそのこと、俺に言ってくれなかったんだ？
頭のいいお前なら、きっとどこでだって上手くやっていけただろう。
独りで行くのが嫌だってんなら、どこにだって一緒について行ったんだ。
俺は頭が悪いから、言われたことも満足に出来やしないけど、荷物の一つや二つ持って歩くぐらいは出来たんだ。
なぁ、アルトリート。
俺は馬鹿だから、言ってくれなきゃ分からねェよ。
いつも嫌になるぐらい勝ち気なくせに、なんでたまにどん底みてェな顔で落ち込んだりしてたんだよ。

言ってくれよ。
頼むから声を聞かせてくれよ。
いなくならないでくれよ。
おいて逝くなんて、約束が違うじゃないか。
なぁそうだろ？　誓ったじゃないか。
あの二つに割れたコインがそうであるように、俺達は二人でようやく一人前だから、互いに補い合って生きていこうって。
おまえが俺に言ったんじゃないか！

「……家を出るのはいいとして……」

ふと柔らかく染みこんできた声が、揺れる世界に波紋を広げる。

「どうやって暮らしていくつもりだったの？」

――どうやって暮らしていくつもりだったのか。

そんなこと、問われても答えようがない。
難しいことはいつだってアルトリートが考えて、自分はただ言われた通りに動いていただけだ。

「でも、本当なら、考えなきゃいけなかったのよね？」

……分かってる。
だから馬鹿にされるのを覚悟で、俺なりにいろいろ考えてみたんだ。
屋敷に来る連中に外の話を聞いてみたり、下街で会った知り合いに、それとなく尋ねてみたこともある。
『どうやれば、日銭を稼いで生きれるのか』
行商人ならいけるだろう。――連中からはそう言われた。

馬の扱いと、地図を見るのは俺でもできる。簡単な計算や読み書きも大丈夫だ。
話術と腹の探りあいは、きっとアルトリートが上手いだろう。
相手が嘘つきかどうかは、俺が常に見抜いてみせる。
物を売りながら村から町へ、町から街へ。二人でならもしかして、どこまでだって行けたかもしれないのに……

「……そうね。それは少し……楽しそうね」

笑った声がすぐ近くで聞こえて、クリストフは閉じていた目を開いた。
柔らかい弾力を右のこめかみに感じる。
白いそれはわずかに上下していて、目の前には布袋を二つ重ねて潰したような、深い谷間が境界線のように横たわっていた。
何だろう。この線は。
密着してるそれから、なんとも言えないいい匂いがする。花のような、果物のような、ほんのりと甘い優しい匂いだ。
「どこまでだって行けたかもしれない。きっと楽しかったに違いない。……そう思う相手は、あたしにもいたわ」
触れているそこから直に声が響いてきて、目線を上げると綺麗な赤銅色が流れていた。
「どうして人は、いつだって……後になってから、大切なことに気づくのかしらね」
白い貌に、整った鼻梁。長い睫に彩られた青い瞳。
静かな表情が女神のように美しい、アデライーデがそこにいた。

「……あ……ディ？」
なんとなく意外で、クリストフは思わず声に出して呼んでいた。

嗄れたその声にほろりと苦笑(わら)って、アデライーデは小さく頷く。
「……ええ。そうよ」
手がそっと髪を撫で、あやすように背中を叩いてくれる。
まるで小さな子供に対するように、その手は暖かく優しかった。
思い返せば、ふと我に返った時に、必ずその手が傍らにあった気がする。
（……それは）
……いつのこと……だったんだろうか？
ひどく重く感じる頭の奥で、『考えるな』ともう一人の自分が言う。
けれど――

（……嗚呼……）
――考えずに……いられるはずが……ないのだ。

向けられた瞳。
告げられた言葉。
よく見知っていたはずの相手なのに、今まで一度も見たことがなかった表情(かお)。
（……アルトリート）
遠かった。あまりにも……その存在が、その心が。
何故と、問う言葉すら相手には届かなくて、結局最後まで答えを聞くことはできなかった。
最後まで。
そう――最期まで。

「……ッ！！」
突然襲ってきた衝動に、クリストフは息を詰まらせた。

一瞬で歪んだ視界が、音をたてて砕け散る。世界が壊れる音だと思った。理不尽な暴力のように、凶悪な嵐のように、全てを砕き、壊し、奪い、吹き飛ばし、この手にあったはずのものすらも力ずくで奪い取っていく暴虐なる音。軋み、ひび割れ、砕け散るその全てが、今まで自分が大切にしてきた世界(もの)なのだ。

（アルトリート……！）

どうしてこんなことになったのか。

何度考えても答えがでない。誰が悪かったとか、誰が企んだとか、そんなこと以前にもっともっと大切なものの答えが出ない。

アルトリート、俺が邪魔だったのか？　アルトリート、俺はいなかったほうがよかったのか？　アルトリート、俺はおまえを苦しめたのか？　アルトリート、俺はおまえに何かしてやれたのか？　アルトリート、俺達は出会わなかったほうがよかったのか？

最初に出会ったあの場所でやり直せるのなら、あの時差し伸べられた手をとらず、独りあの薄暗い小屋の中で朽ちてしまったほうがよかったのだろうか。

そうすればアルトリートは今も生きていて、もしかしたら立派な貴族になっていたかもしれないのだろうか？

（アルトリート）

年齢も生い立ちも育ち方も考え方も、何もかもが少しずつ違っていたけれど、背中合わせに立って世界を見るように、互いの見えない場所を互いで確認しあって生きてきた。

けれどアルトリート、本当には俺達は、見えないものの方が多すぎて、きっとそれにすら気づかずに生きてきたんだ。

だけどアルトリート、例えそうだったとしても……俺達には、それで十分だったんだよな？

足りないものは沢山あったけど、違う意味では足りないものは何一つなかったよな？

多くを望まなくても楽しくて、欲張らなくても満たされていて、必死にならなくてもそれなりに生きていられて、嬉しいこともそう

でないことも沢山沢山あったよな？
なぁ、アルトリート。
どんなに問いかけても、もう答えはどこからも返ってこないんだ。
どれだけ答えが欲しいと思っても、もうそれを得ることはできないんだ。
どうしてこんなことになったんだろうか？
繰り返し繰り返し嫌になるぐらい、延々と考えても答えが出ないんだ。
事実が知りたいわけじゃない。そんなものにはもう意味がない。
起きてしまった事を細かく分析したいわけじゃない。そんなこと、もうどうだっていいんだ。
アルトリート。おまえがあの時、あの瞬間に、何を思い何を願い何を絶望し何を望んだのかが知りたいんだ。
俺は邪魔だったんだろうか？　いなかったほうがよかったんだろうか？　出会わなければよかったんだろうか？
ずっとそればかりが頭から離れないんだ。邪魔だったのなら、いなければよかったのなら、俺の持てる全ての力で、全部を全部消して壊して滅ぼして、何もかもなかったことにしてしまいたいんだ。
きっと俺にはその力がある。
ただ壊すだけならば、ただ消し去るだけならば。

この身に宿した、虚無の紋章の力が――

ゾワリと、体の奥底から何かが世界に滲み出るのを感じた。
布に落とした水が染みとなって広がるように、音もなく色もなく、ただジワジワと溢れ出し広がっていこうとする気配が。
世界を浸食する気配が――

「……ッ」
すぐ近くにあった熱が、痛みを堪えるように息を詰まらせた。
自分を包み込んでいる熱。柔らかく優しい匂い。
それが何だったのか、何故か頭に思い浮かばない。
ただ暗く昏(くら)い闇のようなものが視界の全てを覆い尽くし、耳に聞こえるはずの音すらも塞いでいく。
（……アルトリート）
――最初からやり直そうか？
戻せるものならば、あの時から。
そうすれば何もかも無かったことにできるだろうか？
今という結末も、そこに至るまでの過程も……
（……一緒に在った日々の……全ても……？）
ふと、強く胸を押された気がして目を見開いた。
一緒に在った日々の……全ても？
最初から、全て……？
（アルトリート……）
その、全てを……？
（俺は……）
何かが違う。違っている。
今、決してしてはいけないことを願おうとしている。そう思った。
――音が聞こえたのは、その瞬間だった。
『　覚えていますか？　最初に会った日のことを　』

声だった。
歌だった。
祈りだった。
願いだった。
空から降り注ぐような、世界を包み込むような、歌う人の姿など
見えないのに、まるですぐ近くで歌われているような――

（……メリディスの……）
圧倒的な力をもった――

（ちみっちょ……！）

触れていいのかも分からず　手を伸ばすこともできなかった
声を掛けていいのかも分からず　口ごもって立っていた
どう触れあえばいいのか　分からずに待っていた
世界が動いて　今を変えてくれるのを

覚えていますか？　最初に言葉をかわした日のことを

何度も口ごもって　言葉を探しあって
最後には笑って　互いの不器用さに涙した
他愛のない会話　できるようになったのは
いくつもの時　過ぎて　互いに距離を測りあってから

今という時間を　互いの手で作りあって
今という世界を　私達は作った

覚えていますか？　変わり続ける日々のことを

昨日より今日　今日より明日
少しずつ深まり　少しずつ離れ
少しずつ広がり　少しずつ狭まり
いつだって同じ形ではいない　不確かな世界
けれどいつだって　私達は
私達という　不変の生き物

覚えていますか？　変わらないものの形を

それはきっと目には見えず
色すらもないものだけれど
きっと私達のすぐ近くに　永遠にあり続けるものでしょう

覚えていますか？　最初に会った日のことを

全てはそこから始まった
あの最初の日のことを
もしあなたが忘れているのなら
どうか　今　思い出して
人はいつだって弱く　悲しく
思いはいつだって　儚く　不確かだけれど
どうか　今　思い出して
そこにあった本当のもの
嘘ではなかった　大切な日々を
見失ってしまうこともあるけれど

忘れてしまうこともあるけれど
無くしてしまうことはない
あの日々をどうか　思い出して

共にあった　懐かしく愛おしい日々を――

「……『永遠の始まり』」
呟かれた声は、近く、耳のすぐ横で。
「……ルドヴィカの歌劇『サウダード』の一曲……」
「……さう……だーど」
サウダード。
それは愛おしく懐かしく、切なく柔らかく狂おしいもの。
誰もがもう一度手にしたいと願う、あらゆる全ての『源』であるもの。
それを言葉で言い表すのはあまりにも難しく、それを一つの定義にあてはめるのも困難なもの。
だからこそ、それを表現しようと思えば口にするしかない言葉――『サウダード』。
それ故に、偉大と呼ばれた劇作家すら、その言葉でもってしかタイトルとできなかった言葉。
――誰もがかつて持ち、今は失い、心から切望する愛おしく懐かしいもの。
「……なんで……」
声と同時に、何かが目から零れた。
今まで流れていたものと同じであり、けれど何かが違う熱いものが。

「……なんで、この……歌……？」
「……末姫ちゃん、賛美歌とかあんまり知らないし……」
思わず呟いた言葉に、嘆息まじりの答えが返る。
「知ってる歌で『捧げられるもの』を選んだら、こうなったってことじゃないのかしら。『共にありて』『君を思う』『楽園の扉』『永遠の始まり』……全部、サウダードなのよね……そこに確かにあるけれど、決して手は届かない永遠の懐かしさ……」
声と共に柔らかな温もりを感じ、ふと自分を包む優しい体に気づいた。
幼い子供を抱きしめる母のように、アデライーデが自分を抱きしめている。
ボロボロになったベッドの上で。
「歌われる理由は、そこに込められた意味が同じだからじゃないかしら。……『この思いを忘れない』……『あなたを忘れない』、って」
柔らかな腕の中で聞こえたその声に、クリストフは大きく目を見開いた。

あなたを忘れない。

忘れない。
（……忘れない……）
忘れてはならないの……なら……！
（だったら……！！）
無かったことになんか、できるはずがない。
失えるはずがない！
例えもうこの手には戻らないものだとしても、触れることも声を聞くこともえきないのだとしても、だからといってあの日々を失えるはずがない！！
（……俺は……！）

だってそれは、アルトリートという人間を完全に消し去ってしまうことだ。
かわした会話も、過ごした日々も、思いも記憶も何もかもを捨ててしまうということだ。
（……できない……ッ！！）
例え今がどんなに苦しくても、悲しくても、そんなことできるはずがない。
だってこんなにも苦しいほどに、あの日々を愛していた。共に在った日々の全てをこれほどに愛していた。
無くしたくないものの全てが、今もまだこの胸の中にあるのだ。
忘れない。失えない。無くせない。消し去れない。
誰に何を奪われようとも、これだけはもう奪わせられない。
例えそのことでいっそう孤独と絶望を感じたとしても、喪ったものへの慟哭を癒せないままになったとしても、それでもずっと持ち続けていたいのだ。
この胸の奥にある、ただ一つの永遠だけは。
「……ねーぇ、アルルン」
声と同時、脳天に何か重いものが押しつけられた。
それに押されるようにして動いた顔が、目の前にある柔らかな肉に埋没する。
「むごぶ！？」
胸だ。
「ちょーっと落ち着いたっぽいから聞いていいかなー？」
ものすごく立派な胸だ。
「ももまめみもめっ！」
顎で頭を押さえつけられ、顔を胸で圧迫され、クリストフは死にものぐるいで両手をふんばった。
前と言わず横と言わず顔の全てがスバラシイ柔らかさに密着している。肌に吸いつくような滑らかな皮膚。涙の跡すらも温もりに溶かしてしまう暖かさ。

けれどそんな柔肉の温もりや感触を味わうどころではない。豊満な胸は密度が高すぎて隙間がなく、あまりの柔らかさに顔はその場で完全密封。息も絶え絶えに胸から顔を引き抜いた時には、正直、このオンナは自分を窒息死させたんじゃなかろーかと本気で思ったほどである。

（つ、つーか！　よく考えたら、なんでこいつが、てゆかなんで俺がここに!?　ってここって何処なんだよ!?）

今まで全く気にならなかったあらゆる疑問が爆発して、クリストフは息をするのも忘れて必死に頭を回転させた。

（俺、確か、部屋の一つに閉じこめられて、あいつの傍に行けなくて、あぁ、そういやこいつが俺を押さえ込んでたんだったっけかっつーかあの時と部屋変わってるよーな気がするんだがてゆかなんでベッドだよ?　つかベッドボロボロなのはどーゆーことだっつーか目の前のこいつが服……!?　!?　!?　!?）

圧迫凶器を押しつけられぬよう、体を力一杯離していたのが悪かった。グルグルする頭で見た目の前の光景に、クリストフは愕然となった。

息が止まり、思考が止まる。

比喩でなく心臓も止まった。

「アルルンって」

その視界の中、珊瑚色の唇が動く。

「もしかし……」

「なんッで……裸ァー!?」

その言葉を遮って、クリストフは絶叫した。

目の前にアデライーデがいる。

それはいい。本当はちょっとイロイロな意味でヨクナイのだが、そこらへんは男の事情というやつだからとりあえず置いておく。

転がっているのがベッドの上なのもひとまず置いておくとして、そのベッドがどういうわけかボロボロなのも後で理由を考えるとし

て、とにかく今一番問題なのは、目の前にいる女が素っ裸でいることだ！！
「なんでってねぇ……アルルンが」
「俺じゃねェーッ！！」
「いやだって、アルルンの紋章が」
「俺はなんもしてねェ！！　おふくろの名に誓って！！」
「……いや……おかーさんに誓われてもね……」
目の前のアデライーデはなんとも言えない困り顔で頭を掻いている。腕という隠しアイテムが動いたせいでいっそう豊満な胸が露わになり、クリストフは本気で死にそうな顔で叫んだ。
「動くな！　隠せ！！　頼むから隠せよ！！」
「……てゆか、見なきゃいいじゃん。そこまで見たくないってゆーんなら」
「見たくないとかじゃねェから見せるなっつーかう・ご・く・なァ！！」
なぜこの女は喋りながら身を乗り出してくるのかというか胸が大きいというか肌が白いというか首筋が綺麗というかすごい曲線美というか……
「……なんだかねぇー……アルルンの紋章がちまちま暴走するからあっちこっちがボロボロになってるってゆーのにねぇ……『魔法使い』の加護が無かったら、あたしだって今頃肉片なんだけどなぁ……」
いろんな意味でグルグルしているクリストフの前で、アデライーデがぼやきながら身を起こす。そのまま服を着に行けばいいものを、なぜか「うーん」などと背伸びをしはじめた。
大きな胸が揺れている。
「アディ！！」
「なぁに？」
「服着ろよ！　服……～～ッ　こっち真正面向くな！」
「……意外と純情よねぇ……アルルン……」

熟れた果実のような胸を反らし、腰に向かって流れる引き締まったラインを強調させてから、アデライーデはひらりと身を翻した。
白い二つの丘をこちらを向けて。
「尻を隠せッ！！」
「……見なきゃいいのに……」
ぼそっと呟かれるが、そんなことが出来るぐらいなら最初からそうしているとクリストフは内心で叫んだ。もちろん声に出しては決して言えないが。
「でもねぇ、アルルン。他のことを気にして叫べるってことは……もう、お話しても大丈夫、って考えてもいいのよね～ェ？」
カウチの上にある服を物色しつつ、こちらを見ずにアデライーデがそう問いかけてくる。
できるだけ視線を外しながら――完全には外しきれず――視界の半分ぐらいで揺れてる白いものに向かって、クリストフは口を開きかけ――

言葉の意味を理解して、動きを止めた。
アデライーデは、「大丈夫？」と聞いているのだ。
もう大丈夫？　と。
ずっとずっと傍にいて、もうそう問うても大丈夫かどうか、ずっと計っていたかのように。
「……」
言葉がとっさに出なかった。
思わず向いた先にある肢体は、白く、細く、あまりにも美しく……そのあちこちに、沢山の傷跡を残していた。
（……あれ……は）
白い肌にある青紫は、力一杯叩いたり、突き飛ばそうとした時の痕だろう。
腕に走っているミミズ腫れは、力任せに引っ掻いた時のものだろう。

……覚えている。

何故今まで気づかなかったのだろう。

彼女は自分を押しとどめていたのだ。アルトリートの傍に行こうと、渾身の力で暴れ続けた自分を。

いっそ自分の動きを奪ってしまえば楽だったろうに。縄ででも括ってしまえば話は簡単だったはずなのに。

けれど彼女は、ただその体で、一見して華奢にしか見えないその細い体一つで、ずっと自分を抱きしめ、暴れ続ける間も抱き留めていたのだ。

――どうして。

「……アディ」

どうして――泣いて叫んで暴れる自分を、彼女はずっと優しく抱きしめていてくれたのだろう？

どれだけ強かろうと、力任せに押しのけられたり、叩かれたりすれば痛かろう。

どれほど体が鍛えられていようとも、無いもののように扱われる瞬間に、心が痛まぬはずがないのだ。

（……俺は……）

押しとどめようとする彼女を一体何度叩いただろう？

腹立たしくて、悔しくて、獣がするようにその体に噛みついた覚えがある。そのまま肉の一つでも食いちぎってやろうかと、本気で思った瞬間もあったのだ。

なのにどうして、彼女はあんな優しい表情で、傍にいてくれたのだろうか？

痛かっただろうに。……腹立たしかっただろうに。

なぜ、叩き返すこともキツイ言葉をかけることもなく、ただ抱きしめてくれていたのだろうか？

「……なんで……」

服を着ていないアデライーデ。ボロボロになっているベッド。
紋章の暴走と、先程彼女はぼやいていた。
自分が宿している紋章は、公爵家が管理を命じられていた＜全てを無に帰す＞『虚無の紋章』だけだ。
どことも知れぬ場所から世界を浸食する虚ろなる闇。それに触れるものは全て塵と化し、消滅する。
……思い起こせば、最初の頃の彼女はちゃんと服を着ていた。
なら、その身の衣服を消し去ったのは――

「――　ッ」

恐ろしい予感にクリストフは戦いた。
虚無の紋章は形のない破壊の手だ。全てを塵芥に変えてしまうその力が向かえば、どんなに強い人間ですら跡形もなく消滅してしまう。かつてまだ子供だった自分が、制御の仕方が分からずに結界内のあらゆる家具を消し去ってしまったように――！

「無事……なのか」
その力の暴走を受けて、
「アディ、おまえ……本当に……」
魔法なんて一つも使えず、魔力すら欠片も持っていないその身で。
「どうして……！」
思わず身を乗り出したところで、簡単に上着を羽織ったアデライーデが振り返った。
――どこか呆れたような表情で。

「アルルンってさぁ……尋ねてばっかりなんだよね～ぇ？」
少しだけ苦笑含みの声で。

「まぁ、分かんないコトばっかりだから、そーなるのも分かるんだけどね？　ちょっとは考えなきゃ駄目よぅ？　考えて考えて考えた先にある答えってのもあるんだから」

「かん……が……」

「ま。今問われてるのはまた別のコトだからそれは答えるけどネ。てゆか、マホーツカイって言った時点で気づくと思うんだけど。ほら、あたしってば魔力すっからかんの魔法サッパリンなわけじゃない。いくら力があってもねぇ……あんな凶悪な紋章の力に対抗なんて出来ないのよね～」

ひらひらと手を振って、白い下着を「よいしょ」と履きはじめる。

……なぜ下着（ドロワーズ）を最初に身につけないのかと脳みその端っこで疑問に思った。

「侯爵も陛下もいろいろあって身動きがとれないし、猊下はお年だから無理できないし、かといってアルルンを放っておいたら暴走した紋章に呑まれちゃうし、腐れ外道が未だに狙ってたから全部に決着つくまで一人になんてできないし」

薄いペチコートを何枚も重ね、綺麗なバッスルをお尻のあたりに設置し、細い腰にレースの紐で固定する。

「だからねぇ、魔法使いサンにお願いしたわけ。虚無を無効にする魔法をかけてくださいなって」

白くしなやかな指で自分を指さして、アデライーデは笑った。

「そうしたら、ほら、あとは身一つでなんとかできるでしょ？　あの『魔法使い』は代償さえ用意すれば魔法が使えるんだもの。それに、対象が『虚無』なら、それこそあのヒトの力そのものじゃない。なんとかしてくれるんじゃないかって思ったのよね」

そう言ってなんでもないことのように笑う相手をクリストフは呆然と見つめた。

（……そんなに……簡単な話じゃ……無いはずだろ？）

クリストフは知っている。彼女の言う『魔法使い』がどういう『存在』なのか。

「分かってるのか……アレは」
だからこそ言わずにはいわれなかった。
「アレは、『魔法使い』なんていう可愛らしいもんじゃないんだぞ！？」
その姿をこの『龍眼』で見てしまった身としては。
最初に見た瞬間に、この世の絶望の全てをそこに見た身としては――！

「『名前のない悪魔』」

必死の形相で見つめるクリストフに、ひどくあっさりとした口調でアデライーデはその言葉を放った。
硬直しているクリストフに軽く肩を竦めてみせてから、そんなところでしょ？　と悪戯っぽく笑う。
「曰く、原初にありし名も姿も無き神。全ての絶望、全ての慟哭、全ての災厄、全ての終焉。死に結びつくありとあらゆるものを司りながらもそれに留まらず、死神や災厄の神としてだけで終わることのない異常なる存在。誰もが恐れ、名前をつけてそれを呼ぶことすら恐ろしくてできなかった……故に今でも『名前のない』もの。恐ろしくおぞましいがゆえに『悪魔』の呼びで口にされることもあるけれど、あれは原初の神の力。その結晶。……まぁ、カミサマって感じ全然しないけど、そんなとこでしょ？」
「……おまえ……」
「悪魔との契約を果たせば、魔女になって魔法が使えるんじゃないかナーなんて考えたことがあってねぇ。文献を徹底的に調べた時期もあったのよね～。だからわりと早くあのヒトのことは知ってたの。まさか今の世に実在してるとは思わなかったけど。あ。ちなみに三代目なんですって！　だから『現象』として『力』と、その身を形成する『魔女の血統』としての『力』の両方をもってるから、出来ることと出来ないことがいっぱいあるんですって」

「……いやマテ、そんなのまで本に載ってるのかよ」
さらさらと驚愕の事実を話してくれる相手に、クリストフは唖然とした顔で問うた。
例え真実を見抜く目を持っていても、それはあくまで『見える』ということだけでしかない。視界から得た情報を感覚で理解する『真実』だから、知識で裏打ちされた『全き真実』には程遠い。
だからこそ、知識を持つアデライーデの『真実』には遠く及ばないのだ。ただ視覚から得るだけの真実など。
「尋ねたのよぅ。載ってないわよそんなコト。だって、ナマの生きた実物がそこにいるのよ？　質問して質問して質問し倒してマッパにひんむくぐらいに解剖、じゃなかった解体、でもなくて分解しなきゃもったいないじゃない！」
……なにか、相手がだんだん気の毒に思えてきた。
目をキラキラさせて語るアデライーデは、握り拳にくっきりと青筋までたてている。どれだけの熱意で相手をひんむくつもりなのだろうかと、ヒトゴトながら背筋が凍る思いだ。
「現象の物質化……個体化？　三代目ってことは初代と二代目がいたってことで、てことはその母体となった『産みだした者』が存在するってこと！　魔女の血統ってことはその母体は『魔女』！　あれだけの強大な『力の存在』を産みだすことができるのなら、それは『真なる魔女』の血統に違いない……！！　てことは！　神をも滅ぼすとされた真なる魔女が原初の神と交わって次代を産んだってことで！　てことはその魔法は真なる魔女のそれであると考えるわけで！！　さらに言えば真なる魔女は原初の魔女から末代まで続く呪いをかけられているから、そのために他者の願いは叶えられないという制約がかけられていてッ！！　つまりあのヒトが代償が無ければ叶えられない云々はそこからきていると推測できるわけよッッッ！！」
「近いっ！　近いッ！！　なんで俺にむかって突撃してくるんだよおまえはッ！！」

フンフンと鼻息も荒くブルンブルン胸を揺らせて迫ってきた巨乳美少女に、クリストフは慌てて身をのけぞらせた。離れていたはずなのに、一瞬で間合いをつめられたのが恐ろしい。

「分からないの！？　再三言われてたじゃない！　他者の願いは叶えられない、自分が真に望むものでしか叶えられない。それが原初の魔女が真なる魔女の全てにかけた呪いなのよ！　かつての大陸制覇者、宵闇の魔女エリュエステーラですらその呪いを覆すことができなかったとされる凶悪かつ強大なる呪い！！　それが神の力の具現者であるあのヒトすらも縛ってる！　てことは無敵ではないということ！」

「いや、それ以前の問題で……」

「だから！　あのヒトがあなたの願いを叶えられなかったのは！　その身を縛る呪いのせいだって言ってるの！！」

言われた言葉の意味が理解できず、クリストフは一瞬ポカンと相手を見つめた。

目の前にいる美しい少女は、爛々と輝く瞳でこちらを見ている。

「全能じゃないの。万能でもないの。神であろうと魔であろうと、限界はあるの。できることとできないことがあるの。叶えられるものと叶えられないものがあるの。なんでも出来るだなんて、有り得ないの。そんなの夢物語か妄想でしかないの。だって世界は、不完全で歪なものなんだもの」

「……」

「意地悪じゃないの。嫌がらせでもないの。誰も、出来ることを出来る範囲でやってたの。出来ることしか出来なかったの。それを超える奇跡は起こせなかったの。陛下も、侯爵も、猊下も……あの魔法使いも、みんな」

「――――」

白い貌が俯いて、コツンと自分の胸を小さく突く。

すぐ真下にある形の良い頭。流れる綺麗な赤銅色の髪。

「あたしはあの塔には行かなかったから、交わされた会話は知らないわ。どういうやりとりがあったのかも知らない。……それはあたしが関わっていいことじゃないと思ってる。……けどね、アルルン。どうして、って……あなたは何度も何度も叫んでたけど……無自覚なままに呪ってたけど……たぶん、その答えを口にできる人は……いないのよ」

どうして助けてくれないのか。

どうして奇跡を起こしてくれないのか。

どうしてこうなってしまったのか。

……『どうして』と問う言葉の、その答えを――

「理由なんていくらでもある。現実なんていくらでも語れる。……けれど、あなたが口にする『どうして』は、そういうのが聞きたいわけじゃないでしょ。あたしでさえ分かったんだもの……あの人達にはもっとよく分かってると思うわ。だからね……誰も答えられないの。答えることができない問いだから」

それは、心を問う言葉だから。

そこにある現実を知るための言葉ではなく、そこにいる人々の気持ちを問う言葉だから。

「助けて欲しい。助けたい。救ってほしい。救いたい。……誰だって、命っていうものの大切さは知っている。けれど許してはいけないもの、曲げてはいけないもの、歪めてはいけないものがこの世には沢山あって、間違ってはいけない判断と、覆してもいい内容の狭間で必死に調整をつけているの」

けれど――

「けどね……どうしても……できないことっていうのは、あるのよ。例え『今』を救うために何かを歪めて誰かを救ったとしても、その

結果によって引き起こされる災いで、どうしようもないほどの被害が出ると分かっていたとしたら……それを……することはできないの。王は、国の全てに責任を持たなくちゃいけないから、一人の願いのために、多数の国民が犠牲になる決断をしてはいけないの」

そして、

「……そしてね、魔法使いサンは、奇跡を起こしてくれる都合のいいカミサマじゃないの。ちゃんと大切なものがあって、そのためだけにこの地に在るヒトなの。だから、自分の命を代償にしてまで、誰かを救うことはできないの。……魔女の呪いは、神すらも滅ぼすもの。等価である代償のない他者の願いを叶えれば、あのヒトは滅んでしまうんですって」

だからこそ、叶えられなかった。

諦めなさいと、言うしかなかった。

「どんな言い方で言ったって、あなたは納得しないでしょう。怒ってくれれば、いっそ元気になるんじゃないかしら。恨んでくれれば、いっそそれを糧に生きてくれるんじゃないかしら。そういう話をね……してたの」

少しだけ笑った声でそう言って、アデライーデは面を上げた。

柔らかな表情の中にある、青い湖のような美しい瞳。揺れる水面のような波をたたえて、その瞳が自分へと向けられている。

「あたしはね、アルルン。あなたみたいな目を持ってないし、陛下みたいな紋章も持ってない。フェリみたいに心の声を聞く耳もないし、嗅覚で察知できる末姫ちゃんみたいな鼻も持ってない。猊下みたいに感覚が優れてるわけでもないし、侯爵ほどには世の中のことを読み解けない。……けどね、考えることはできるの。自分で見たもの、聞いた言葉、肌で感じた空気、そこにあるヒトの熱。そういったものを一つ一つ分析して、考えて答えを出すことはできるの」

ねぇ、と微笑って、少女は目元を和らげた。

「あのヒト、あなたのこと、けっこう好きみたいよ。だからね、あなたを助けるための力をあたしに貸してくれたの。腐れ公爵を糾弾

する資料を渡すかわりに、一つ二つ力を貸すかわりに……虚無に浸食されない魔法をあたしにかけてくれたのよ。いつだってあなたの傍にいられるように」

笑ったその瞳の中に映っている自分が、ひどく情けない顔をしていることにクリストフは気づいた。

自分が己の殻に閉じこもり、ひたすら絶望し、嘆き、もてあました感情のはけ口を求めるようにして世界を呪っている間に、自分を取り巻く人々はずっと動いてくれていたのだろうか。

自分からアルトリートを奪っていった人々も……処刑を命じた王も、手を貸してくれなかったあの悪魔ですらも……

「ねぇ、アルルン。今という現実を無くしてしまいたいと……そう思うことはこれから先もいくらだってあるけれど……だけど、ねぇ、一つだけ大切なことを考えて？　本当に大切なことだから、自分で考えに考えて……その答えを聞かせてほしいの」

白い手が伸びてきて、自分の頬を優しく撫でる。

労るようなその掌は、しなやかな美しさに反して、ひどく硬かった。

「ねぇ……あなたは、出会わなければよかったって、本当にそう思う？」

アルトリートと。

口には出さず、唇の動きだけでその名を告げられて、クリストフは息をつめた。

彼女には、どれだけ理解できているのだろうか。

その名を他者の口から聞きたくないほどに、今の自分が狂おしいほどに大切だと思っているその名前のことや――ずっとずっと心の中で叫び、嘆き、考え続けてきたことまで。

……いや、もしかしたら、ずっと口に出して叫んでいたのかもしれない。

紋章の力を制御できなかったように、心だってきっと制御できていなかっただろうから。

だから、近くにいた彼女は知っているのかもしれない。いくら考えても答えを出せずに、全てを無かったことにしてしまいたいとすら思った自分の弱さを。

けれど――

「会ったことは……間違いだった？」

そう問う彼女の顔は、

「過ごした日々は、無くしてしまっていいもの？」

あまりにも優しくて、暖かいものだったから。だから、無様な弱さも何もかも、受け入れて前に進むための答えを出していいのだとそう思った。

だって、そうだろう？

「……俺は……」

最初の時に戻れたら、あの瞬間に戻ったなら、

「会えて……嬉しかった」

自分は、もう一度だって、あの手をとって、共に在る道を選ぶだろう。

「一緒にいられて……幸せだった」

どんな結末、どんな過程を経てもなお――

「一緒に……生きれて……幸せだったんだ……！！」

愛している、この気持ちだけが全ての答えだから。

友として、幼なじみとして、いつだって誰よりも近くにいた唯一人。

どんな思いを味わったとしても、その思いを捨てるためだけに手放してしまえるような、そんな簡単な気持ちではなかったのだ。

アルトリートがどう思っていたのかなんて、分からない。その答えは永遠に得られない。

けれど自分の心だけは分かる。それだけは見失わない。

大切だった。本当に大切だった。

だってそうだろう？　それが家族というものだ。

誰とも繋がっていなかったけれど、彼とだけは繋がっていた。他者に簡単に壊されてしまうぐらい弱く儚いものだったのかもしれないけれど、それでもこれほどの思いをもって、相手のことをずっとずっと愛していた。

共に生きていられたことが、自分の誇り。

彼と繋がっていられたことが、自分の幸せ。

もう二度と誰にも壊されない、この世で唯一自分が持つ、永遠の繋がり。

「……忘れないでね、その言葉。……その思い。その全て」

蘇った慟哭に蹲る体を柔らかい温もりが包んでくれる。

今までずっとそうしてくれたように。

……いつまでもそうしてくれていたように。

「もう二度と、手放そうなんて思わないでね」

手が頭を撫で、背中を撫でる。

暖かくて優しいその形。……覚えていようと思った。彼のことと同じく、彼女のことも。

それはきっと、とても大切なことだから。

「……落ち着いたら、猊下の所に行きましょう。あなたが落ち着く

まで、ご自身の部屋を貸してくれたのは猊下なの。……王宮だと、きっと、落ち着けはしないだろうから」

ここは教会なのよ、と言われて、クリストフは大きく息を吸った。

教会。——神への信仰の砦。

そして、神の名をその背に背負うことのできる場所。

「……アルルン？」

のろのろと顔を上げた自分に、アデライーデが少しだけ不思議そうな声を上げる。

白く美しいその顔を見つめて、クリストフは唇を動かした。

「……その名前はやめろ」

「……まだこだわるー……」

「……俺はクリフトフだ」

呆れ顔でぼやいた相手が、一瞬で口を閉ざした。

……彼女は本当に頭がいい。その反応で、改めてそう思った。

「俺は、クリストフにしか、ならない」

与えられた王族名。差し伸べられたもう一つの手。

けれど——それをとることだけは、決してないだろう。

「俺は、王族にはならない」

だから王族名はいらない。その名前で呼ばれることは拒否する。

そう告げた自分に、アデライーデは静かな眼差しを向ける。

柔らかな表情のままのその瞳には、動揺も困惑も無かった。

まるで最初から、その言葉を予想していたように。

ただ、軽く頷いてこう言ったのだ。

「……わかったわ」

——と。

？　ケニード・アロック

クレマリス大神殿に初めて足を踏み入れた時、最初に思ったのは『巨大な宝箱のようだ』という罰当たりな感想だった。

大陸西中央において最も人々に信仰されている宗教――その総本山とも言える大神殿で思うにしては、いささか俗物的な感想だったなと今では思う。

だが、そう思わずにいられなかった理由もよく分かっていた。

本来、エラス教はその教えの中で『日々慎ましく生きよ』と謳っている。

華美よりも質素を尊ぶ記述は多く、そのせいもあって、特に辺境の教会などは非情に慎ましい生活をしていると伝え聞く。

だが、神の家とも呼ばれる大神殿は、天井から床に到るまで贅を凝らした造りをしていた。

それこそ、神々の宝物庫と人々に揶揄されるほどに、である。

（……元々は、芸術家とその作品の保護に力を注いでいたわけなんだけどね……）

戴冠式を描いた絵画の前に立って、ケニードは口元に微苦笑を浮かべた。

世に『芸術家』と呼ばれる人々の中には、ただそれだけのために生き続ける人がいる。

彼等は食べることよりも寝ることよりも美しく着飾るよりも、ただただ自分の手が生み出す作品にひたすら没頭し続ける。

時にはそのために命を落とす者もいるが、彼等に「なぜそこまでして」と問うても答えは返ってこないだろう。

ただ作りたくて作りたくて作りたくてたまらない人々の、その言葉にならない本能にも似た心など、どれほどの言葉を尽くしたとこ

ろで語れるものではないのだ。
（一途、って言えばいいのかな……それとも、生きるのが下手だって言えばいいのかな……）
ケニードは若葉の色に似た瞳を伏せる。
――師であるオーディルクが、まさにその典型だった。

突出した技能を持ってはいたが、その方面のこと以外では恐ろしく生産性に乏しい、そして著しく生活力に欠けた人だった。
どれほど体が壊れようとも、ひとたび作品に向き合えば、ただそれだけしか見えない人であり、そのために命が尽きても本望と言いきるような人だった。
結局、最期まで作品を作り続け、作業場の片隅でひっそりと息を引き取った。その時作られた宝冠は、今も式典の度に女王の頭上で輝いている。
（……あれが、最後の作品だったな……）
芸術家として最高の誉れだと人々は言う。
彼女を羨む同業者はいても、彼女を哀れむ同業者はいなかった。
彼等にとっては、それが常識なのだ。
だけどケニードは思う。
もしオーディルクがずっと昔から、父のような人の保護を受けていたら、もっともっと長生きができたのではないか、と。
女性を心から愛し、ふわりふわりと風に舞う綿毛のように軽くて落ち着きが無くていつどこに飛んでいくか分からないような父ではあるが、その財力と商売の才能だけは他の貴族よりも図抜けていた。
オーディルクがもっと早く父と出会っていたなら、彼女は貧困で病み衰えることなく作品を作り続けることができただろう。そうすれば、きっともっと長く生きることができたはずだ。
（……教会が芸術家を保護するのは……彼等が、あまりにも生きるのが下手だからだろうな……）
家賃を滞納し、食費を削って絵の具を買いあさり、ただひたすら

画布に描き続ける画家。
作品を作りたいばかりに、飲まず食わずで山に籠もって岩をひたすら削っている彫刻家。
芸術家と呼ばれる人の全てがそうであるというわけではないが、余人には理解しがたいほどに作品に没頭し、そのせいで生活が苦しい人が少なくないのもまた事実である。
良い作品を作ろうと思えば、やはり素材にこだわる必要が出てくるし、そうすると原材料は非常に高くなる。
また、優れた作品を長く保存するためには、それなりの技術と作品を保護し続けれるだけの財力がいる。
結果、後援者（パトロヌス）の支援が必要となるのだ。
教会は、彼等に作品を作らせることで仕事を与え、その身と作品そのものを保護してきた。
教会の権威を高めるためにも優れた芸術は必要であったし、そういう意味では互いに良い関係が出来ていたと言えるだろう。
だからこそ力ある教会の、力ある人物の元には優れた芸術が集まる。
それこそ、人類の至宝、神々の寵愛の証、とまで言われるほどの芸術が。
（いつか――）

ケニードは目を細め――ふいに浮かびかけた言葉を形になる前に打ち消した。
考えても意味のないことは考えない。
思ってもどうしようもないことは思い浮かべない。
現実はいつだって弱者には辛く、厳しい。己が強者ではないことを知っているケニードは、幼い頃から心が潰れる前にその原因をやんわりと靄の中にくるんでしまう方法を覚えていた。
力があれば無理やりにでも己の望むように進もうとするだろう。

だが自分にはそんな力はない。
それを知ってるからこそ、力に頼る前に心の中で曖昧なものにしてしまうのだ。
――そしてそれは、きっと悪いことではないだろう。

「……もう何年になるかな。その式を終えてから」
ふいに背後から聞こえてきた声に、ケニードはハッとなってそちらを振り返った。
窓から差し込む光を背に、女神と見紛う美女がそこに立っていた。
周囲に光を撒くような黄金の髪。
聖女の清純さと魔女の妖艶さと王者の覇気を同時にそなえた絶世の美貌。
長い睫に縁取られた紫紺の瞳は、王家たるアルヴァストゥアル家のみに現れる稀有な色だ。
直系の王族のほとんどが高齢となっている王家において、この瞳を持つ女性は二人しかいない。
一人は降嫁した前国王の妹、マルグレーテ。
そしてもう一人が、目の前にいる女神の如き美女。
このロンディヌス大陸において、中央随一の美貌と称えられる女王。ナスティア王国が誇る黄金の薔薇――

ナスティア国王、アリステラ・レディウス・ルナ・ベアトリーチェ・フォン・アルヴァストゥアルその人である。
「……陛下」
名だたる絵画すらも霞む美貌に、ケニードは嘆息混じりの声で相手を呼んだ。
その声にわずかばかり非難めいたものが含まれているのは、相手が本来、今この時、この場にいてはいけない人だからである。
「……今、会議の真っ最中じゃありませんでしたっけ？」

「こうるさいことは言うなよ？　アロック卿」
さすがに声をひそめて言うケニードに、その美貌をニヤリと歪めて女王が返す。
何故か一瞬、チラリとケニードの頭の上に視線をやってから、すぐに視線を戻して笑みを深める。
何かあるのかとケニードも目線を上げてみたが、典雅な天井絵が見えるだけだった。
「今は息抜きの時間だ。さっきまでうちのジジイどもにうるさく言われていたからな。おまえ達にまで何か言われてはかなわん」
心底うんざりした声に慌てて視線を戻せば、目の笑っていない笑顔がそこにあった。よほど絞られてきたのだろう。イヤイヤ小言を聞いている様が容易に浮かんで、ケニードは少しだけ微笑(わら)った。
いろんな意味で型破りな女王だが、彼女は己に課せられた義務や責任の重さを理解している。
ならば、彼女がこうしてこんな所に来ているのは、難題が一段落したか、もしくは何か大事な理由があってのことなのだ。
「……猊下の所にはお寄りにならないのですか？」
大神殿にあって最も重要な人物と言えば、言わずと知れたエラス教の最高指導者、教皇アルカンシエルだろう。
だがケニードの言葉を聞いたアリステラは、なんとも言えない嫌そうな顔をして嘆息をついた。
「私に、大陸最高の……いや『最硬』の頑固ジジイの小言を聞いてこいと？」
どうやら小言をくらうのが前提のようだ。
「断言するが、今行けば絶対に『王族たる者の心得』とやらを数時間にわたって語られるぞ。……やつめ、自分だって若い頃は王家だの王族だのの面倒事をぶち放って暴れ回っておったくせに、年をとったからといって私にはやれ『王族らしくしろ』だの『規律は守れ』だのやかましくていかん！　ラザストでカストラーゼの王侯貴族や大神官を相手に暗躍しておったのは一体誰だ！」

「……何か、一介の下級貴族が聞いちゃいけないよーな、そこはかとなく面白そうな話が出ちゃってるんですけど……」

アリステラの憤然とした声に、ケニードはなんとなくへにゃりと笑った。

ラザストと言えば、ずいぶんと昔に滅んだ都の名前である。

不吉な預言を『読んだ』ため、この世のありとあらゆる滅びを司る者を呼び込んでしまった、と伝えられているが、その真偽の程は定かではない。

もともとラザストのあったカストラーゼ王国は、かつてのナスティアよりも貧富の差が激しい国であったと聞く。

滅ぶ前から治安も悪化しており、それ故の滅亡だという噂もあるが、それらを立証するべき文献は残っていない。

いや――それどころか、あの国に関する文献は、何一つと言っていいほど残っていないのだ。

かの王国は、ほぼ一夜にして滅んでしまったのだから。

「猊下はラザストにいらっしゃったことがあるんですか……？」

「あやつがうんと若かった頃のことだそうだがな」

ダメもとで呟くように問うたケニードに、実にあっさりとアリステラは頷く。

滅んだカストラーゼ王国、なおかつラザストとの関わりは、今の大陸ではどの国でも『禁忌』とされていた。

その謎に満ちた滅亡の経緯も、引き金になったとされる『予言』も、あまりにも不吉であるため、関わりにあえばそれだけで自分たちの国も同じ轍を踏みかねないという考えがあるからだ。

そう――万が一名前などつけて、その名を呼んだために『呼び寄せて』しまうことを恐れて、かの強大なる『存在』に、誰も名前をつけられなかったように。

「……とはいえ、その時のことを奴にどれだけ聞いても語らんときているからな。何か知りたいからと問うたとしても、答えてはくれんだろうよ」

そんな中、一説では『大陸一の美女』とも呼ばれる麗しい女王だけが、平然とこの話題を口にする。

「前にステファンがポロッと零したのを聞いておったから、だいたいのところは推測できるがな。……あのジジイも昔はイノシシのような男だったのだそうだ。頭の固い者達と衝突することも多かったと聞く。……それが今やアアだからな。まったく……！」

じつに忌々しげに言ってから、アリステラはフンと鼻で息を吐いた。だが、

「まぁ、今現在その国が困難にあっているのならばともかく、もはや滅んでしまってどうしようもない国や都のことなど、容易く口にしたくない気持ちも分からんではない。それは己の無力を思い知るための言葉だからな」

そう言った声だけは誰よりも深く潔く、無意識に深く頭を垂れてしまいそうなほどの強さと優しさに満ちていた。

ケニードは、ともすれば膝を折ってしまいそうになるのを堪え、教皇への不満をぶつぶつ呟く相手に微笑みを返す。

「陛下。せっかくの麗しいお顔が歪んでしまっていますよ。――斜め右上に」

女王はにゅにゅっと狼の微笑を閃かせ、次いで子供のように破顔した。

「まぁ、いいさ。あやつのやんちゃに比べれば、私の所行など児戯に等しいらしいからな。うるさいご老体が目こぼしをくれる材料になってるんだ。あやつが自ら語るまで、無理に聞き出すこともあるまい」

「そうですね」

ケニードはその笑顔につられるように微笑みを深める。

女王アリステラは好奇心の強い王だった。

個人的な好奇心だけでなく、王として滅んだ他国への興味もあるだろう。

それを押さえて待つことができるのは、ある意味『優しさ』とい

うよりも『強さ』なのかもしれない。
（……陛下）
だが――今回の場合、それが正しいのかどうかは、ケニードには分からなかった。
なにせ、こう言うのはかなり気が引けるのだが……教皇はたいへん高齢なのだ。
齢百を超える人というのは、国単位で見てもそれほど多くない。
現在、西中央諸国での平均寿命は五十から六十ほどだと言われている。
魔力の強い者、もともと長寿な家系の者、特殊な魔術で延命している者などは例外的に百を超えて生き続けているが、それらは一般的ではない例だ。
短命な者ならば産まれてすぐに。そこまで極端ではなくても、環境によっては十に満たぬ間に命を落とす者は多い。
その原因の大半は飢えであり、それ以外の理由のほとんども貧困が元だった。
教皇であり王族でもある教皇が飢えることはまず無い。
また、身に持った強大な魔力を鑑みれば、どれほど高齢であろうとも「もしも」を考えるのは難しいのかもしれない。
だが――人は死ぬのだ。いつか必ず。

一分一秒を惜しむように生きても尚、生きている間に語れなかった言葉や思いは山と残り強い後悔となる。
かつての自分のように――そして、新しい王弟のように。

ケニードは一瞬アリステラの方をジッと見つめ――目があった相手の瞳に言葉を呑みこんだ。
（――陛下は、わかっていらっしゃる……）

待つことで守られるものと、失うかもしれないものの両方を。

……ならば、あえて自分が口にすることはないだろう。
この王が覚悟をもって決めたことなら、受けて従うのが臣下たるケニードの役割だ。
（……他のところから情報を集めればいいわけだし）
――もちろん、補佐するのも臣下の役割であるからして。

自らの中で結論を出したケニードは、改めてアリステラを見た。
こちらの考えなどお見通しなのか、女王はニヤリと覇気のある笑みを浮かべている。
「おまえが宮廷の重鎮になれば、こちらもずいぶんと助かるのだがな」
前後の繋がりのない言葉に、けれどケニードは驚きもせずただニコリと笑った。
「僕には務まりませんよ」
「ほぅ？」
「……それに、身動きがとれなくなりますから」
「なるほどな」
にゅにゅっとまた狼の微笑を閃かせて、女王は壁にかけられた絵画へと視線を向けた。
壁一面を埋めるほど巨大な絵は、今は亡き巨匠フィオラが描いたものだ。
絵画であれ宝飾細工であれ、女性の職人というのは、この大陸ではさほど珍しくない。
むしろ大陸制覇を成し遂げたのが全て女性であることもあってか、国や地方によっては女性のほうが優遇される場所もある。
ナスティアには、今のところ男女のどちらかだからといって冷遇されたり、逆に優遇されたりといったことはなかった。
人の性は誰かが無条件に上下をつけるべきものではない――

そう言って、かつて男女のどちらかに傾きかけた時期を乗り切り、

頭上に宝冠を頂いた女王の治世が続く限り、今後もそれが揺らぐことはないだろう。

そう――今目の前にある、この美しい絵画が描かれたその時代――かつて王女にして第一王位継承者だったアリステラが、不当に王位継承権を下げられかけたあの時代を繰り返そうとする愚者が現れない限りは――

（……あの当時、僕はまだ子供だったけど……）

ケニードは眩しさを堪えるように目を細める。

――今から二十年以上も前。

まだアリステラが王ではなく、自分が生まれて初めて美しい人に恋をしたあの時代――

憧憬にも似た恋心に浮き立っていた自分が、その人の死に絶望するまでのわずかな間に、実に様々なことが王都では起こった。

幼かった自分が、あの時、王都に満ちていた空気を理解できるはずもない。

全ては何もわからないままに始まり――そして何もわからないままに終わっていた。

――自分だけではない。

あの当時、王都にいた民のほとんどがそうだっただろう。

（……あの時……陛下は……）

――今だからこそ分かる。

目に映る全てのものがふわふわしていた幼い自分でも、ふとした拍子にゾワリと寒気がするように感じた――あの時の王都中に漂っ

ていた、ひどく嫌な気配が何だったのか。
美しい女性がいれば必ず口説いている父が、あの当時だけは大人しくしていたのは何故だったのか。
王宮で何が行われていたのか――

（……その渦中にいた）
幼い自分が感じ取っていたものが、王宮を起点とする汚濁と水面下の闘争であるのなら、今、隣にいる美しい女王は、その真っ只中にいたことになる。
なぜならその時の騒動を経て――彼女はその頭上に王冠を頂いたのだから。
「……ずいぶんと、皮肉った絵だと思わんか？」
目の前に広がる美しい絵画に視線を注いだまま、アリステラは口元に皮肉げな笑みを浮かべた。
荘厳な夢の一欠片だと、見る人はそう呟き、感嘆の吐息を零すだろう。
教皇アルカンシエルの手で宝冠を被せられている新王はあまりにも美しく、その気高く凛とした表情に、見る者の全てが思わず目を奪われる。
集まった人々は皆麗しく着飾り、色とりどりの衣装は百花の如く華やかで、それを表す絵画の色彩もまさに『色とりどり』と言うべきもの。それを巧みにまとめあげ、一枚の絵に仕上げた画家の腕前たるや、職は異なるものの同じく芸術の道に足を踏み入れていたケニードにとっても、思わず敬意を表さずにいられない素晴らしさだった。
絢爛たる新王朝の幕開けに相応しい見事な絵と言えるだろう。
だがそれでもなお、アリステラの言葉を理解して頷いてしまう。
そう――この絵は、あまりにも皮肉な絵なのだ。

列席しているナスティアの重鎮。集まった数多の諸侯。
新王アリステラの向こう側には、それを祝福する二人の王妃。
群衆として描かれているため、その美貌をハッキリと見ることはできない。だが、陰影だけで表現されたその顔は、晴れやかに笑っているように見える。
輝く金と、淡い紫銀。
二人の王妃を区別するには、その髪の色で判断するしかない。もしくは、藤の花に似た王妃の傍らに、同じ髪の子供がいるのを見るべきだろうか。
母親のドレスを小さな手で握っている少年が誰なのか、その当時王宮にあった者に分からぬはずがない。
当時の王宮を二つに割りかねなかった危険な存在である彼は、やはり嬉しげに笑って異母姉を見つめているようだった。
教皇アルカンシエルの傍らには、王位を譲った前王レーブレヒト。
その顔もまた、祝福するように笑んでいる。
――そんなはずはないのに。

「虚構の戴冠式。偽りの列席者。……あり得るはずもない夢の残滓だ」
その絵をそう評さねばならない、この王の胸中はどれほどの悲しみで満ちているのだろうか。
ケニードはいたましさを堪え、静かな眼差しで絵を見つめる女王を見る。
そうして、あえて彼女の眼差しと同じ静かな声で問いかけた。
「……レティシア王妃の没日時を過去に遡らせたのは……妃殿下と王弟殿下のため、ですね？」
アリステラは絵を見つめたまま、その口元にほんのわずかな笑みを浮かべた。
この絵は戴冠式を描いたものだ。

だが、その戴冠式に、前王と前王の二人の王妃、そして異母弟は列席していない。

前王はアリステラに無理やり王位を奪われ、王宮を追放された。

二人の王妃は、そもそもどちらも死去している。

列席している重鎮や諸侯の姿も虚像だ。

描かれているのはいずれもかつての王宮を担っていた者だが、彼女の戴冠式にはその半数以上が列席していなかった。

王宮を我が物顔で闊歩していた彼等のほとんどは、国を傾けかけた罪でそのほとんどが処罰されていたのだから。

この絵に描かれているそのほとんどが嘘だった。決して有り得ない現実だ。

――けれど、だからこそ、この絵は美しい。

まさにあり得るはずもない……幸せな夢だったから。

「……そうだ」

アリステラはケニードの問いに答えながら、視線を絵の中、王妃の傍らにある少年へと向ける。

藤色の髪の少年は、嬉しげに笑っているように見えた。少なくとも、絵の中では皆が笑っているように見える。

顔の細部は分からず、濃淡と色彩によって笑んでいるように見えるだけの絵だが、見る者にそう感じさせるように描かれているのだ。

当時の不穏の全てを覆い隠すために。

「……レティシア様は……私にとって、とても大切な方だった」

ぽつりと、長い沈黙をはさんでからアリステラはその名を語った。

王宮で禁忌とされ、重罪人として名前の抹消さえ検討されたその人の名を。

「亡くなられたのだと言われても……信じたくはなかったな」

ケニードは唇を引き締める。

当時幼すぎて王宮のことなどほとんど分からず、同じく幼すぎるが故に情報にも疎かった彼にとって、全てを知っているのだろうア

リステラの言葉はどんなものでも万金に値する。
問いたい事は山のようにあり、問いたい気持ちは激しい熱のように溢れている。
だが、口を開くことはできなかった。
当時の真実はそれほどに禁忌であり、同時に女王の傷はあまりにも深い。
「……この絵を依頼した時、この絵を見た者全てを騙すつもりで描けと命令した。後世、この絵を見た者が、当時の状況を誤解してしまうほどに力を尽くせ、とな」
王宮の真実など、国民のほとんどが知らないことだ。
王都に生まれ育った者であっても、噂ばかりで真実を知らない。
まして後に生まれる者たちならば、真実は遙か彼方にあって、決して知ることの出来ないものだろう。
ならば騙してやろう、偽ってやろう、誤解させてやろう、夢を見させてやろう。
そんな風に思って描かせたのだろう……ケニードはそう思った。
きっと、当時王宮にあった真実とは、それほどにおぞましく悲惨なものだったのだろうから。
「あの方が亡くなったとされる日……それは、あってはならない日だ。あの方の名誉のためにも、あの子のためにも、あってはならない日だ」
「……」
「隠さなくてはいけなかった。けれど、すでに在ってしまった日を無かったことにはできない。だから……あの後、すぐ……あの方が亡くなったのだと言われた時……その日を……消滅させることにした」
現実は変えられない。
それだけは、例え誰であっても曲げられない。
だが、人の認識を、その記憶を、変えることはできる。
魔法や魔術などではなく、絶対的な王の権力をもって――

「王妃の没日を実際より早めた。……死したる者は、それ以後の世界で罪など犯せない。……私を殺そうとなど……出来はしないんだ」

「……ッ！」

ケニードは息を呑んだ。

レティシア王妃が当時の第一王位継承者であるアリステラを殺そうとした。その事実をアリステラが認めたのだ。決して公になっていない、誰もが口を噤み目を背けた過去の真実を。

思わず周囲を確認するケニードに、アリステラはようやく視線を向ける。その顔は、どこか困ったような悲しい笑みを浮かべていた。

「誰もおらん。そうでなくて、私がこんな話をするはずもなかろう」

「そ……れは……えぇ……」

動揺するケニードに軽く笑ってみせてから、アリステラは小さく息を吐いた。

その視線は、また虚構の戴冠式へと向かう。

「ああ……だが、こうして事実を口に出すのは……はは……いつぶりだろうな。意外と気持ちは凪いでいるものなのだな……。もっとざわめくかと思っていたが」

「……陛下……」

なんと言っていいかわからず、ケニードは視線を彷徨わせた。

この言葉を聞くのが自分でいいのか。思わずそんなことを思ってしまった。

この気高く強い女王の弱い言葉を聞くべきなのは自分ではない。もっと相応しいヒトがいるのだと知っているからこそ、思わず探してしまう。

その瞬間、ポンと肩に何かの温もりが触れた気がした。

そこ見ても、大きく振り返ってすらも、誰の姿も見えはしなかったが。

「なぁ、ケニード」

呼ばれて、ケニードは慌てて女王に視線を戻した。
女王は飽きることなく絵を見つめながら、どこか遠い目で呟く。
「嘘を嘘で固め、それを本当とするために何度も何度も繰り返し嘘をつき続け、もはや何が本当で何が嘘なのかすら分からなくなるほどに重ね続けてもなお……真実というものはどこかから暴かれるものだと思わないか？」
絵画を通して遠い日を見つめる女王に、ケニードも絵の中にのみ存在するその人へと視線を向ける。
女王と同じく、遠い日を見る眼差しで。
「……陛下。僕はかつて、王宮の庭園を行くあの方を見たことがあります」
「……」
「……けれどそれも……無かったこと、ですね」
ケニードがその人を見たのは、王妃が没したとされている日よりも後のことだ。
もちろん、本当にはその日その時、彼女は生きてそこにいた。
――だがそれは、あってはならない日の中に含まれるのだ。

「……すまない」
「……いいえ」
ゆっくりと首を横に振って、ケニードはほろりと笑った。
「あの方が、本当にはそこにいたことを僕は知っています。……けれどそれは、いくつもの偶然が重なった奇跡のような一瞬でした。……陛下、きっとそういうのは『夢』と言うんだと思います」
「……」
「いい夢を見たんです。僕ごときの身では見るはずもない、とても綺麗な一瞬の夢を。……それに、夢の続きは、今も見ていますから」
「……『夢の続き』か。いいな、それは」
「ええ」
苦笑めいた笑みを浮かべた女王に、ケニードは心から微笑んだ。

「あの方はいなくなってしまったけど、あの人がいます。それに、ベルも。……陛下。僕はすごく幸運な人間で、すごく幸せな人間だと思うんですよ」

アリステラは何故か唖然とした顔になった後、がっくりと肩を落とした。

「……おまえはそれを、心底本気で言いきるんだからな……」

「？」

ケニードからすれば、なぜそんな反応が返ってくるのかがわからない。

不思議に思って首を傾げると、相手はさらに脱力した顔になった。

「……おまえには、謝らなければならないことが多くあるんだが……」

「……ありましたっけ？」

「……それも本気で問うてるからな……まぁ、だからこそ、あの大馬鹿助が理を曲げる魔法を行使できたんだろうが……」

「？？？」

「……指は、どうだ」

脱力した顔のまま指さされて、「あぁ」とようやくそのことに気づいた。

「指は……まぁ……えーと……予想通りに、と言いますか……」

「満足に動かんのだろう。……おまえは、それなのに……」

ぼやき、言いよどみ、ややってどっぷりと重いため息をついて、アリステラは顔を上げた。

「レメクは……おまえの作品が好きだと言っていたぞ」

「……え」

「美しいものを美しいと感じる感性だけは、幼い頃から鍛えてやってあるからな。……だがな、千の品の中からただ一つを選ぶ時、あやつはいつだって、おまえが作った作品を……それも、おまえが初期に作った作品を選ぶんだ」

心に受けた衝撃が強すぎて、ケニードは数秒、息をすることすら

忘れていた。
　呆然と立っている青年に、アリステラは微笑(わら)う。
「おまえの作品は、とても美しい。けれどそれは、優れた感性や、卓越した技巧や、凝った意匠だけの評価では無い。……おまえの作品には、いつだって、身につけた人を一生懸命に思う気持ちが込められていた。私が作ってもらった首飾りも、髪飾りも、腕輪や耳飾りも同じく、な」
「……」
「おまえが最初に作った作品があったろう？　まだ宝飾技師ですらなかったお前が、あいつに渡した最初の作品だ」
　言われて、脳裏に拙くあか抜けない作品が思い浮かんだ。
　当時では精一杯の作品だったが、今思えば赤面を通り越して全身が赤く染まりそうなほどみっともない作品だった。
　同時にかつてベルとした会話も思い出す。
　そう――あの最初の作品を、その後つけている姿を見たことがないのだ。
　いくつもの作品を贈っているため、たいして気にしていなかった。あまりにも拙い作品だから、もしかしたらどこかに仕舞われたのかもしれない。また、他の家の家具達のように、不要だからと救貧院などに寄付されたのかもと思っていた。
　それでよかったし、ケニード自身、彼に渡す時にいつもそう言っているのだ。だからそうだろうと思っていた。
「あのマントの留め具、今、どこにあると思う？」
　だけど、女王がそんな風に言うということは、もしかして今もどこかでは使ってくれているのだろうか？
　赤くなったり青くなったりしているケニードに、女王はにゅにゅっと狼の笑みを浮かべる。
　そうして、ややも混乱しているケニードに向かって、それはそれは嬉しそうに言った。
「あれな、式典の時にいつもつけてるぞ」

「げぇっ！？」
思わずとんでもない声を上げたケニードに、珍しい声が聞けたとアリステラは大笑いした。
「はっはっはっは！　すごいことだぞ、ケニード・アロック！　おまえの最初の作品は、式典とか儀式とか特別な行事の時に毎回つけられてるんだぞ！！」
「ちょ……ッ！」
「他の連中がおまえを真似てあちこちから上等な物を贈っても知らん顔なのにな！　特別な時にしかつけないんだぞ、アレ！　理由がまたふるっていてな……！　無くすと困るからだとさ！！」
言って爆笑するアリステラに、愕然と固まったままケニードは顎をガクガク震わせた。
何か言いたいのだが、声が出ない。
言葉を探すのだが、どういうわけか頭がカラッポだ。
アリステラが『式典』と表現するからには、それは年に数回開かれる特別な式典だろう。
春の大祭の最初の式典しかり、初夏の水神祭しかり、夏の大祭しかり、秋の収穫祭しかり、冬の新年の祝いしかり……
ケニードのような階級の低い者は、そういった式典の時、王の間近に侍ることはできない。常に王の近くに在るレメクとは、あまりにも隔たりがあって、その人の姿を遠目に見るだけで小さな装飾品にまでは目を通しきれていなかった。
（だ、だけど……だけど嗚呼！　確かに、そういえば、いつも……紫の宝石……ッ！！）
思い返せばいつだって、マントの留め具はどこか古びた銀と、紫の宝石で出来ていたような気がする。銀がくすんでいたから、もしかしてステファン老の遺品だろうかとそんな風に思っていたのだ。
……なのに！！
「ぅぁあああ……」
思わず頭を抱えてうずくまってしまったケニードに、アリステラ

は遠慮無く大笑いする。
「あっはっは！　いいじゃないか！　すごく大事にされてて！」
「で……ですがッ！！」
「ハハハ！　……あぁ、はは、なぁ、ケニード。……あいつはな、あれで意外と……人からの贈り物に弱いんだ」
笑いの中に何か少しばかり湿っぽいものを混ぜて、アリステラは穏やかな目でうずくまったまま見上げるケニードを見下ろした。
「それも純粋な思いが込められた作品ほど、どうしようもないほど大切にする。おまえの作品はどれも美しい。どれも美しいが……美しさを追求した作品は特に華やかに美しいが……レメクは、たぶん、おまえの手がかつてより拙くなっても、それでもおまえの作品を選ぶと思うぞ」
ケニードは答えない。
ただ、泣きそうな顔で唇を噛みしめた。
「もう、作ってはもらえないのだろうかと……今更、作ってはもらえないかと頼むのは、おかしいのだろうかと、ぼやいていたよ」
「……」
「いつも貰ってばかりで、何も返せないままで、頼む前に持って来るから依頼したことも一度もなくて、今更こんな状態の時になって依頼してもいいものだろうか、とな。……柄にもなく悩んでいた。うちの男共は存外、意気地がないからな。ぐじぐじとくだらんことで悩みすぎる」
ぼやけた視界の向こう側で美しい女王が腕組みをしてふんぞりかえる。子供のようであり、慈母のようであるその笑みは、やはり水の中に溶けたままで――
「欲しいのなら欲しいと言えばいい。頼みたいのなら頼みたいと言えばいい。なにかをする前にうだうだと頭で考えて何もできないまま終わるのなら、何も考えずにいっそ行動してしまえばいい。今まで一度だって欲しいものを欲しいと言ったことがないあいつだからな、待っていたらジジイになっても言い出せやしないだろう」

瞬きと同時に一瞬だけハッキリと見えた。
「だからな、ケニード。私からの頼みだ。もしおまえが嫌でないのなら……少しずつでいい、ゆっくりでいい、慌てなくていいから……あいつのための作品だけは、作ってやってくれないか。……昔、私が頼んでいた例のやつも、おまえにこそ仕上げてほしい」
その美しい紫紺の瞳が、
「あれはきっと、おまえにしか出来ないもので、おまえだけにしか頼めないものだからな」
その美しい金の髪が、
「おまえは知らなかったかもしれないが、私も、あいつも、おまえの作品のファンだからな」
そのあまりにも美しい、黄金の如き魂が。
（……僕、は……）
いつか――
いつか――作りたいと、そう思っていた。
大神殿におさめられているような、神々の秘宝の如き美しい作品。
それを身につけたあの人は、どれほど本来の姿に近くなるだろうかと。
（僕は……）
女王から頼まれ、教皇の許可を得て、少しずつ作っていたただ一つの宝物。
いつ仕上がるのか、自分でも予想がつかないほど丁寧に丁寧に作り続け……今、諦めなくてはいけないのだろうかと、心の奥底に鎮めようとしていたその思いを……持ったままでいいのだろうか？
いつ完成するのかどうかも分からないのに？
きっと、本当なら早く仕上がって欲しいだろうに……？
「……僕で……いいんですか？」

――それはきっと問いではなく、

「おまえ以外の誰が作れる？」

――それはきっと、答えですらなく、

「いつになるか……分かりませんよ……？」

どちらもきっと、確認という名の言葉のやりとり。

「いつになってもいいさ。どうせ、どんなに早くても十年は待たねばならんだろうしな」

契約という名の約束。

「十年ですか……それって、早いのかな、短いのかな……」

「気長にやればいいさ。あの頑固者が首を縦に振るまでには、もっと長い時間かかるかもしれないんだからな」

しゃがんだままのケニードの頭の上に、綺麗な掌が優しく乗る。

そのままぐしゃりと頭を撫でられて、ケニードはくしゃくしゃの笑顔を俯かせた。

偉大な女王に頭を撫でられた貴族が、いったい何人いるだろうか？

偉大な女王に、我が子にも似た大切な人物を頼むと言われた人物が、いったい何人いるだろうか？

一人もいないということは無いだろう。けれど、それほど沢山でも無いはずだ。

（……僕は、本当に幸せだと思うんです……）

声にならない思いを心の奥底で言葉にする。

（なんて幸せなんだろうと、本当にそう思うんです）

ぐしゃぐしゃと綺麗な指がいっそう頭を撫でる。

光の紋章を持つ女王には、こちらの思いは嫌でも伝わっているのだろう。どこかぶっきらぼうな動きは照れと苦笑が半々な感じで、いっそう胸の奥が熱くなった。

「おまえはいつだって、おまえのままでいればいい。おまえがいて

くれることで、救われる者は多いからな」
「……はい」
頷いたケニードを見下ろして、アリステラは頭の上から手を退ける。
顔をぬぐい、立ち上がる相手を今度は見上げて、深い色の目で言った。
「……頼んだぞ」
何を、なのか。
誰を、なのか。
そんなことは問うまでもない。
だから返した。
ただ一つの思いを込めて。
「はい」

？　マルグレーテ・レンフォード

――静かだ、と思った。

壊れた天井から差し込む日差しが、荒れ果てた部屋を照らし出している。

かつては贅を凝らした豪奢な部屋だったのに、今では見る影も無い。

抉り取るようにして崩された天井は、そこにあったはずのシャンデリアごと瓦礫の山と化していた。廊下と部屋を隔てる壁はほとんど残っておらず、巨人がハンマーを振るったかのように破砕されている。

窓のある外側の壁は、鋭利な刃物で切り落とされていた。恐ろしく切れ味のいい刃だったのか、断面は職人が磨き上げた大理石よりも滑らかだ。

毛の長い絨毯の上には塵（ちり）と瓦礫の欠片が散らばり、動くたびに足の下でジャリジャリと嫌な音をたてる。

キィキィと響く軋んだ音は、蝶番の外れた扉だろう。今にも崩れ落ちそうな風情で、部屋の片隅で揺れていた。

風が運んでくる街の喧騒は遠く、けれど周囲には壊れた音が満ちている。

それでも――静かだと思った。

半壊した屋敷の中には、ほとんど人の姿がない。

後難を恐れて暇乞いをする者は多く、傅く人であふれていた屋敷は、今はほんの数名が残っているだけだ。

マルグレーテは緩慢な動きで周囲を見渡し、難を逃れていた古め

かしい揺り椅子に深く腰を掛けた。
感情がこそげ落ちたような目が見つめるのは、壁の残骸にひっかかった王都の絵画だ。
（……）
ふと、何かが頭の中で言葉を紡いだような気がした。
描かれた白く美しい王城を虚ろに見つめてから、マルグレーテは視線を下げる。
絵画の下には白く大きな暖炉があった。その暖炉も、左下あたりが見事に吹き飛ばされている。衝撃で割れたらしいレンガの欠片が、白い粉となって周囲に散っていた。
暖炉の上には、小さな銀細工が一つ。無造作に転がったそれが、鈍い光を反射している。
マルグレーテの眉が、一瞬、痙攣するように震えた。
暖炉の上には、金細工の燭台や宝石が填め込まれた美しい花瓶などが置かれていたはずだった。それらの姿は、今はどこにも無い。
おそらくかつての使用人に持ち去られたのだろう。……あれだけの騒動の中だ。見咎める者もいなかったに違いない。
（……）
また何かが頭の中で言葉を紡ぐ。
だが、それをきちんとした『言葉』として理解することはできなかった。
マルグレーテは立ち上がり、どこか緩慢な動きで暖炉の前へと歩く。
転がっているのは、別の場所に置いていた腕輪だった。
それなりに美しいが、たいして目を惹くような品では無い。蔓草の意匠はありふれているし、銀の質もそれほど良いものでは無かった。だいたいにして、華やかさに欠けていてマルグレーテの好みではない。
装飾品ならば、銀よりも金の方がいい。
さらに宝石がついていればもっといい。

意匠は美しく洗練されているものが自分には相応しく、また高価なものでなければ身に着ける価値もない。
そう思っている彼女だから、その腕輪をつけたことなどほとんど無かった。
同様に、その程度の品だからこそ、こんな所に放置されたのだろう。
別の場所にあったこの腕輪を盗んだ者も、この部屋にあった品を見て、より高価なそちらを盗んでいったに違いない。。
沢山の使用人が逃げるように去った後だから、誰が何を盗っていったのかは分からない。
追求して後悔させてやろう、と思う。
思うが、どういうわけか行動する気にはならなかった。
（……）
三度、頭の中に何かの言葉が浮かんで消える。
何だろうか？
思うが、それすらも靄がかかったようにぼんやりとしている。
（……）
緩慢な動きで何かを探すように部屋を見渡し、マルグレーテはもう一度暖炉の上へと視線を投じた。
何度見ても、つくづく素朴でつまらない腕輪だった。なんでこんなものが残ったのだろう。
いっそ『これ』が消えて、お気に入りの髪飾りでも残っていれば、まだ少しは晴れやかな気持ちでいられただろうに。
（……）
頭の中で言葉が舞う。
それが何かは分からない。
分からないのに、気にかかる。
ぼんやりとした頭の中、それだけがいやに気になって気持ちが悪い。
なのに、それすらもどうでもいいような気がする。

マルグレーテは腕輪を見続ける。
価値のない腕輪だった。好きで手元に置いてあったわけでもない。けれど、どうしてか捨てようという気の起きなかった品だった。
「……」
唇がかすかに動く。
けれど言葉は紡がれない。
マルグレーテは腕輪を手にとり、好きでもなんでもないそれを左腕にはめてみた。細く美しい手首には不似合いな、どこかやぼったい腕輪が鈍く光る。
なんでこんなものが残っているのかと思う。
そして……なんでこんなものを――あの子は作ったのだろうか、と思った。
頭の中に浮かぶのは、在りし日の少年の顔だ。
後で生まれた子には遠く及ばないものの、それなりに利発な子だった。造作も悪くなかった。教育係達も、下の子が生まれるまではあの子に満足していただろう。
だが、役にたたない子だった。
最初から最後まで、役にたたない子だった。
いてもいなくても変わりない、どうでもいいような子だった。
何を思ったのか、遊びで細工物などを作ったりして、王族の血を引いているのに何をしているのかと嫌悪したこともあった。
いつだったか神官になりたいなどと言われたこともあった。その時には幻滅を通りこして絶望した。
なのに、何故、自分はあんな子の作った腕輪を捨てずに持っていたのだろうか？
（……）
視線が下がる。
腕輪が光る。
捨てよう、と思った。
処刑された子だ。その子に関するものなど、何一つ持っておくべ

きではないだろう。
関係するようなものは何もかも捨ててしまって、自分とは関わりが無いという風にしないといけない。
自分には末の子がいるし、あの子がいる限りはレンフォード家も安泰だ。誇り高い王家の血もきちんと継いでいる。問題はない。
（……）
マルグレーテは唇を開いた。
使用人を呼ぼうと思った。
この腕輪を渡して、どこかに捨てさせようと思った。
いっそ使用人にやってしまってもいい。処分してくれるならなんでもいいだろう。
ほとぼりが冷めた頃にでも新しい装飾品を技師達に作らせて、あれがいいかこれがいいかと選ぶのも楽しそうだ。
いっそこの機会に昔のものは全部捨ててしまって、何もかも新しくしてしまおうか。
そうしよう。
そう思った。
（……）
マルグレーテは腕輪に手を添える。
人を呼ぼうと唇を開く。
けれどその手は腕輪を外すことはなく、唇は言葉を紡ぐことはなかった。
マルグレーテはただそこに立つ。
――ずっと、ただそこに、立っていた。

？　フェリシエーヌ・アルヴァストゥアル

声が止んだ。
フェリシエーヌは顔を上げ、ゆっくりと体を起こした。
明るい色調でまとめられた部屋には、フェリシエーヌ以外誰もいない。
耳に届くのは窓を撫でる風の音や鳥の囀り（さえずり）ばかりで、人の声など一つもなかった。
けれど――

（……声が……止みましたわ）
青ざめた顔で虚空を見渡す彼女には、耳には聞こえない『声』が届いていた。
それこそ耳を塞ぎ、壁の厚い小部屋に逃げ込んでもなお、逃げる自分をあざ笑うかのように届く、人々の偽らざる本心の『声』が。
（あの……声は……）
フェリシエーヌは一度だけ、痛みに耐えるようにギュッと目を瞑った。
誰よりも他人の心の『声』を感知してしまう彼女のために、女王が施してくれた精神の封印。それすらも無視し――それどころか他のあらゆる『声』すらもかき消してしまうほど強い力で――その『声』は必死に叫び続けていた。
恐ろしくも悲しい――絶望に染まった慟哭（こえ）で。

「……あの……『声』は……」

よろよろと力無い動きでカウチから降り、フェリシエーヌは近くのテーブルに置かれていたカップを手に取った。

カチカチと耳障りな音をたてるのを聞きながら、震える手でゆっくりと冷めた紅茶を一口だけ口にふくむ。

飲むというより口を湿らせるだけの一口は、今まで味わったことがないほど苦かった。

その苦みが、脳裏に一人の青年を思い浮かばせる。

（クリストフ……王弟殿下……）

敬愛する女王と同じ金髪と紫紺の瞳をもつその青年は、それまでフェリシエーヌが知る誰とも違う人だった。

黙って立っていれば王宮にも稀な美青年だというのに、口を開けば物語に登場する『傭兵』や『ゴロツキ』のような物言いばかり。態度も実に粗野で、嘘の名前を名乗っていた時には、これがシーゼルをいじめていた異父兄かと怒りを新たにしたこともあった。

――それが嘘なのだと知ったのは、件のいじめをベルが叱った時だ。

本人の意図に拘わらず、強い心の声は肉声と同様にフェリシエーヌに届く。ベルに叱られてとっさにあげた彼の心の声が、フェリシエーヌに『王弟の入れ替え』という事実を知らせたのだ。

そう――彼等の『偽り』を最初に暴いたのは、光の紋章でも闇の紋章でもなく、アザゼル族の血統能力だったのである。

フェリシエーヌは即座に『光の紋様』を通じてアリステラにその報告を行った。時期が時期だったため、騒動にならぬようまずは様子を窺うという方針を伝えられなければ、フェリシエーヌはその場であの青年を弾劾していただろう。

だが――

（むしろ……そのほうがよかったのかもしれませんわ……）

思わずにはいられない。

もしあの時、すでに企みはバレているのだと知らせていれば、その後に起きる悲劇も惨劇も、止められたのではないだろうか、と。

もちろん、あんな風に事態が進み、あんな結果を出すなど、あの時点では誰も予想していなかった。だからこそ『今』に至るまでにあった分岐点に、なぜあの時にこうしなかったのか、と悔やまずにいられないのだ。

――例えそれが、今となっては意味のない悔恨であったとしても。

「フェリシエーヌ姫」

深い思考に落ちかけた瞬間、控えめな声が部屋の向こう側からかけられた。

フェリシエーヌはハッとして顔を上げる。

可憐な内装で統一した部屋の扉には、可愛らしいリースが飾られていた。声はその向こう側からだ。

（シーゼル！）

フェリシエーヌは慌てた。

目覚めたばかりのため、着ているのは薄手の夜着だけ。おまけに髪はくしゃくしゃになっているし、洗顔すらしていない。

（嗚呼！　なんてこと！！）

時計を見れば、針は昼をわずかに過ぎた時刻を指している。フェリシエーヌは頭を抱えた。

今日は大切な日だったのに。昼も夜もなく襲いかかる魂の慟哭に打ちのめされているうちに、こんな絶望的な時刻になっていたとは！

（完璧な姿になるつもりだったのに！　声を失うぐらい完璧に装うつもりだったのにッ！！）

大慌てで手に持っていた紅茶を一息に飲み干し、近くに置いてあったヘアブラシで髪を必死に梳く。

（もう！　どうしてこんなにからまってるの！？）

長く細い髪が互いにからまっていて、なかなかうまく梳けなかった。半ば八つ当たり気味にブラシを動かしていると、扉の向こうか

ら不安そうな『声』が聞こえてきた。
（……まだ寝てるのかな……）
「起きてますわよ！？」
聞こえてきた心の声にクワッと返事を返して、（しまった！）とさらに高速で髪を梳きはじめる。起きていると返事をしたからには、顔を出さないといけないはずだ。嗚呼！　早く、早く！
「え、えぇと……姫、入っても」
「よくなくってよ！？」
こんな姿見せれるかとの思いを込めて叫ぶと、扉の向こうで後退る気配がした。
フェリシエーヌはさらに速度をあげてブラシを動かす。
からまった髪にブラシもからまった。
（ああっ！　ブラシがひっかかったわ！？）
こうなるとどうやっても解きほぐせない。自身の自慢でもある繊細な髪を憎々しげに睨んでから、フェリシエーヌは視線を忙しく彷徨わせた。
（切るもの！　いっそ切るものは無いかしら！？）
しかし、目に映るのは白と淡い桃色の家具達ばかり。洗顔道具や着替えの類も侍女達に任せていたため、ベッドサイドにも小物類がまるで置いてなかった。
（ああもう！　フェンがいればこんなことは無かったのに！）
物心つく前から傍にいた側近の一人、黒髪の侍女は、今頃故郷への帰路についているはずだった。大祭の最中、最も悲惨な現場を見てしまった彼女だから、しばらくは故郷で心を癒す必要があるだろう。
フェリシエーヌもそう思ったからこそ、寂しく思いながらも暇乞いを許した。だが、彼女がいなくなった穴はとても大きい。
（フェンがいれば、一人でこんなところに蹲っていなかったし、そうしたら、最低限の用意だって出来たはずですのにっ！）
侍女は他にも沢山いるが、フェンはその誰にも代えられない、特

別な能力を持っていた。
それは彼女のすぐ間近では、魔術のほとんどが無効、もしくは著しく威力を下げられるという能力だった。
フェン自身もどうしてそんな風になるのかよく分かっていない様子だったが、フェリシエーヌにとっては能力の理由などどうでもよかった。彼女にとって、それは何よりも素晴らしい能力だったのだ。
その彼女が傍にいない。それは、今まであった安らぎの場が無くなってしまったことを指してる。
（でも！　仕方ありませんわッ！！　フェンはあの辛い現場を見て、なおかつ必死に自分の使命を果たしてくれたんですものっ！）
フェリシエーヌがレンフォード家の街屋敷に半ば軟禁されていた頃、それに気づいたフェンが自分を心配して探してくれていたのを知っている。城の一角で起きた惨劇は、その時に遭遇したものだということも。
（わたくしのせいだわ……）
フェンという侍女は、心の強い女性だった。だが、あの時に見た光景は、その女性をしても直視しがたく、恐ろしいものだったに違いない。
「あの……フェリ……？」
扉の向こうから、おそるおそる声がかけられた。
その存在を思い出し、フェリシエーヌは慌ててカウチにかけられていたガウンをひっ掴むと、素足のまま扉に走る。
「シーゼルっ？　開けてはいけませんことよッ？」
扉の前でガウンを羽織りながら、フェリシエーヌはもう一度ヘアブラシを握った。だが、何度引っ張ってもからまった髪から離れてはくれない。
（もういいですわ！）
「今日、王都を発ちますので……その、見送りのことなのですが」
「ええ！　行きたいのですわよ！？」
『出立』と『見送り』の単語に、フェリは反射的に答えた。

「行きたいのですけれど、用意が……どうしてこういう時に用意が整っておりませんの!?　あぁでも、シーゼル、正午過ぎには発つはずで……どうしてこんな時間なんですの!!」
「……えぇと……」
扉の向こうから心底困った声がする。シーゼルだって、こんなことを言われても困るだろう。そう思うが、焦った頭では上手く思考がまとまらない。
「一刻……いえ！　半刻でかまいませんわ！　お待ちになれませんこと!?」
無茶を承知で思わず叫ぶと、さらに困った声で「それが」と答えられる。
シーゼルが王都を発つのは王命だ。レンフォード家の新当主として、女王アリステラの命を果たすために発つのだ。当然、フェリシエーヌの我が儘で出立を遅らせれるはずがない。
（わたくしは……わたくしは……!!）
それでもなお我が儘を言いたいのは、そうしなくてはと強く思うほどに、相手が特別だからだ。
「姫。……出立の見送りはいいんです。本来、僕はあなたに見送ってもらえるような立場ではありません」
泣きそうな顔で頭を抱えたフェリシエーヌに、扉越しにシーゼルが言う。
少しだけ微笑んだような、やわらかい声で。
「わざわざ見送りにおいでにならなくてもいい……それを伝えに来ました」
「な……」
（なんですって!?）
思いもよらなかったその言葉に、フェリシエーヌは絶句した。
シーゼルが自分の見送りを拒否する。
そんなことは今までなかったし、これからだってありえないと思っていた。互いに物心つく前から知っている相手だ。考え方も動き

方も誰よりも理解している。
そのシーゼルが――

「わたくしの……見送りはいらない、と……おっしゃるの……？」
「……はい。『姫』」
姫、と。
あえて強く強調されたその言葉に、フェリシエーヌはあることに思い至って唇を噛んだ。
「それは……レンフォード家が、此度のことで処罰を受けたから……ですの？」
「……はい」
静かな答えに、ますます唇を強く噛む。
扉越しに聞こえる相手の声は、いつもより少しだけ遠く感じる。
「わたくしが……陛下の養女だから……ですの？」
「……はい」
「今は距離を置けと……そう……おっしゃるのね？」
「はい」
先程よりもハッキリとした答えに、フェリシエーヌはキリキリと胸が痛むのを感じた。唇をかみ切ったらしく、口の中にパッと血の味が滲む。
（ああ）
悔しい、と思った。
誰かを『憎い』ではなく。ただ、悔しいと。
それは『今』という現状であり、ここに至るまでの経緯であり、そしてこれからを正しく予想してしまった己自身に対してだった。
（どうしてわたくしは、こんなことにすぐに気づいてしまうの……！）
気づかないフリをしていれば、無邪気を装って見送りに立つことができる。なのに、そんな手段さえも自分で消し去ってしまうのだ。

馬鹿であればよかった、と思う。
もっと馬鹿であるか――もしくは、全てを見通すほどに賢ければよかった、と。
「陛下は……わたくしが婚約者を見送ることに異を唱えるほど、狭量な方ではありませんわっ。……だ、第一！　あなたは此度のことで陛下より直々に『レンフォード家の全てを治めよ』と命じられていますわ！　たしかにお家は処罰されましたけれど、むしろあなたは……」
「父がいます」
見送りに立つ正当性を見いだそうと、必死に訴えるフェリシエーヌの言葉を遮って、シーゼルは短くそう告げた。
あの父がいるのだと。
「姫。姫が僕の見送りに立てば、父はそこに光明を見いだそうとすると思います。少なくとも、婚約者であるあなたは、僕の味方なんだと」
「味方ですわ！」
「……ひいてはレンフォード家の味方だと。王家の味方ではないのだと曲解する可能性もあります」
「……」
言われて、そんな馬鹿なと言い返せず、フェリシエーヌは俯いた。
確かに、そういう解釈はあり得るのだ。
「陛下はレンフォード家にも、僕にも、過分なる配慮をしてくださった。本当なら、レンフォード家はお取り潰しになってもおかしくないのに。……それなのに、陛下は立ち直る機会を与えてくださったんです」
「……」
「まだ成人もしていない、未熟な僕が後を継ぐことで、どれだけの波乱があるのか……今はまだ分かりません。けど、ヴェルナー閣下が後見としてついてくださったし、有能な家人の何割かは僕のこともよく知ってくれているから……苦労はするだろうけど、何一つ上

手くできない、なんてことにはならないと思うんです」
「……」
「それもこれも、陛下がレンフォード家をほとんど無傷で僕に継がせてくれたからです。そして、王命という強い力が僕の統治を後押ししてくれる。……僕は、陛下や、あなたにこれ以上の迷惑をかけたくない」
フェリシエーヌは何も言わなかった。
シーゼルは確かに女王に許されはしたが、公的な場で処罰を与えられている。公的には彼もまた罪人なのだ。
王が裁いた家の罪人を王女が惜しむようにして見送れば、心ない人々はなんと囁き、噂するだろうか。
（ただでさえ、この大事な大祭の時期に、偽王弟の騒動があったばかり……！）
噂というのは、強固な鉄剣に入った小さなヒビのようなものだ。最初は目立たなくても、やがて強く鋭い刃すらも折ってしまう。
だから分かる。
現状を鑑みて、どう動くべきなのか。誰の言葉が正しいのか。
「……見送りに立たなければ、いらぬ波風をたてない、ということですわね……」
「そうです。姫」
「だから、見送るな、ということなのですわね……」
「いえ……」
悔しさを堪えて言ったフェリシエーヌに、扉の向こうにいるシーゼルがやや言葉を濁す。
次いで、ぼそぼそと弱ったような声で言った。
「その……なんていうか……今……見送っていただければ、と思って……」
今？
フェリシエーヌの頭が真っ白になった。
今？

よりにもよって、今！？
（嗚呼ッ！！）
思わず盛大に頭を抱えて天井を振り仰ぎ、次いで据わった目で扉を激しく睨みつける。
（ままよっ！！）
「……シーゼル」
「はいっ！？」
覚悟を決めて発した呼び声に、何故か扉の向こうから悲鳴じみた声が返る。
「……扉に背を向けてくださいませ。決して……けっっっして！振り返ってはいけませんことよ？」
「は……はひッ……！」
こちらの覚悟が伝わったのか、相手も死を覚悟したかのような返答になった。
フェリシエーヌは（よし！）と気合いを入れる。
数秒待機し、おそるおそる扉を開くと、シーゼルはきちんと背中を向けていた。わずかでも振り向く素振りを見せたなら即座に部屋に帰れるよう、フェリシエーヌはそろそろと彼の後ろに近寄る。
未だかつて無いほど緊張している相手の背中に、それ以上の緊張をもって、そっと手を伸ばした。
『……シーゼル』
まだ肉の薄い相手の背に触れ、おずおずとその背中に頬をよせる。
呼びかけは心の声で行った。
肉声を出せば、きっと震えを感じ取られてしまうだろう。
『……あなたの行く先に、いつも光がありますように』
古来より、旅に出る者には親しい者が祝福を贈る習わしになっている。
それは最古の呪い（まじな）の一つであり、原初の魔法の一つであるとも伝えられていた。
その通りなのだろうとフェリシエーヌも思う。だが、祈りや呪い

もまた、冷酷なる運命の前にあっては何の意味も成さない。

（……あなたに、加護を）

シーゼルは未だ成人していない若輩者だ。

そのシーゼルが公爵家を率いることがどれほど困難なことなのか、フェリシエーヌにも分かっていた。

シーゼルは年の割には秀でているし、自分の目から見てもなかなかの資質を備えていると思う。

好意の深さ故に、やや盲目的であることは否めないが、実際、貴族の子弟の中では抜きんでた存在だったのだ。

けれど、それは同じ年頃の『子供の中』に限ったことだ。

年月によって培われた経験は、時に天賦の才すらも上回る。

まして『レンフォード公爵家』。そこに待ち受ける人々は、正嫡の子であり女王の勅命を受けたシーゼルにとっても、恐ろしく強く、難しい敵だろう。

――それでも勝たなくてはならないのだ。

（……どうか、無事で……！）

貴族の出であるのならば、身の回りの危険については様々に教えられている。もし食事に毒を盛られたら？　寝室に刃を持つ者が忍び込んで来たら？　そう考えると恐ろしくてたまらなくなる。

そんなことはありえないだなんて、思えるほど幸せな人生は送っていないからこそ余計にだった。

「……フェリ」

思わずすがりつくように背中に伏せるフェリシエーヌに、シーゼルはわずかに目を瞠り、背中に感じる温もりを心に刻みながらそっと声を落とした。

今はもう、二人きりの時でもめったに呼ぶことはない――懐かしい呼び方で。

「今回のことは、全部、レンフォード家の闇が招いたものだと思う。王女であったことに固執する母に、そんな母や王家の血に鬱屈を抱

えている父。代々続いてきた名門であると、血を誇るしかできない親族達」

「……」

「こんな状況を想像してたわけじゃないけど……いつか、こんな風に、いろんなものが壊れて、破綻してしまうんだろうなって……そう思ってた」

フェリシエーヌは相手の背に体を預け、目を伏せる。

「僕には……母の考え方はよく分からないけど……父が何を考えたのかは……分かる気がするんだ」

「……え？」

思いもよらない言葉に顔を上げると、さほど身長差のない相手の後ろ髪が目の前で小さく震えた。

「……父は……壊してしまいたかったんだと思う。自分の目の前にある、心を波立たせる『存在』を」

「……心を……波立たせる存在……？」

フェリシエーヌは思わず鸚鵡返しにその言葉を呟いた。

途端、するりと心の中に言葉が染みこんでくる。

（父は、王家の血ばかり強調する母を忌避していた）（憎んでいたといってもいい）（思い通りにはならなくて、自分より立場も上）

（異父兄は、その象徴みたいなものだった）（自分以外の男と、王女の間に生まれた子）（王弟殿下も……）

「父が全てを企んだのだとしたら……たぶん、王宮をどうにかしたい、とか。国の威信を揺るがしたい、とか……そんな大層なことじゃなくて……」

（もしかしたら、意趣返しみたいな軽い気持ちで、そういうのを望んだりもしたかもしれないけど）

「異父兄か、新しい王弟殿下か……そのどちらかが王宮で罪を犯して、処罰されてしまえればいい……そんな感じで企んだんじゃない

かな、って思う」

（どう考えても、計画性とか、全然ないから）

心の声と肉声の両方で語られて、フェリシエーヌは瞠った目をさらに大きく見開いた。

「……ただ……それだけのために……？」

言葉が零れたのは、無意識だ。

「たったそれだけのために……あんなことを！？」

あまりにもひどい、と思った。そんなことのために、沢山の人が悲しみ、苦しみ、命すら失うはめになったとは……！

「あなたのお父様は、いったい、何を考えていらっしゃるの！」

「何も考えてないんだ」

激昂したフェリシエーヌの声に静かに答え、シーゼルは低い声で呟いた。

「……そういうことは、何一つ考えてないんだ。誰かが傷つくとか、死んでしまうとか、王家や国が大変なことになるかもしれないとか、そういうのは。……自分と、自分の家と、利益と……それさえ守られていればそれでいい、って。そう、考えてるんだ」

「そんな……！」

「僕も、そういう風に教えられた。……フェリと出会ってなかったら、きっと、父の複製みたいな考え方になってたと思う」

（何度も何度も、何かの呪文のように聞かされたんだ）（大事なのは、レンフォードの家だ。他のことは考えなくてもいいんだ、って）

（でも、僕は家よりも大事なものがある）

声に出す言葉よりも雄弁に語る心の声に、フェリシエーヌは痛みを堪えるような顔になった。

大貴族の血と、誇りと、選民意識に凝り固まったレンフォード家。その嫡子として育てられたシーゼルが、いったいどんな風に育てられようとしていたのか。実際に目にしていなくても、どんなものなのかは想像に難くない。

おそらく、アルトリートがそうであったように、血統に対する異

様な執着と異常な誇りを植えつけられ続けていただろう。
昔、婚約者として赴いたことのあるレンフォードの家は、まさにそんな雰囲気のある家だった。
あの家でかろうじてまともだったのは、シーゼルと、シーゼルの同父兄。そして、ごくわずかな従僕だけだ。
「きっかけは、クラウドール卿の婚約で、母がいつものごとく『王家の血筋』云々で騒ぎ出したことだと思う。父にとって、母のあの言動はすごく癇に障るものなんだ」
「……じゃあ、公爵は、公爵夫人が王都に行くのを知って……例えば、あなたの異父兄さまや、公爵夫人を……唆したの？」
「……そうだと思う。最初、母は一人で王都に来るつもりだったみたいだから」
シーゼルが語るところによると、こうだった。
孤児院に収容されていたメリディス族の少女が王族に迎え入れられ、クラウドール侯爵と婚約したと報じられた後、公爵夫人が癇癪を起こして王都行きを計画。その直後に公爵はシーゼルの異父兄であるアルトリートを部屋に呼ぶ。アルトリートはその数時間後に、王都行きの用意を調えている公爵夫人の部屋を訪問。その後、馬小屋の近くで起居するクリストフの所に向かった。
そして、ほとんど間を置かずして、三人で王都に発った。
「母の企みなのか、父の企みなのか、それとも異父兄の企みなのか……実際に王都に来たあの人達に会うまでは分からなかった。けど……すくなくとも、異父兄は違ってた」
「……そう……ですわね」
フェリシエーヌはふとレンフォード家の街屋敷でのことを思い出し、沈鬱な表情で俯いた。
フェリシエーヌの思った通り、シーゼルは実家の街屋敷に監禁されていた。だが、屋敷に乗り込んだフェリシエーヌは彼を見つけることはできなかった。
彼女の生家もそうだが、上級貴族の屋敷には幾つもの隠し部屋と、

隠し通路が存在する。
シーゼルが閉じこめられていたのもそのうちの一つであり、そういった部屋や通路は余人には決して教えてはならない決まりになっているのだ。
おそらく、手助けがなければシーゼルとは会えなかっただろう。
彼女をシーゼルに引き合わせてくれたのは――アルトリートだった。
「……わたくし、今だからこそ思うのですわ……」
驚く自分を淡々と見つめ、決して明かしてはならない通路を教えてまで案内してくれたアルトリート。
相手の企みを知るために、その心の中を読み取ったからこそようやく知った。
「……あの方は、最初から……企みが成功することを、望んでいらっしゃらなかったんじゃないかしら、って」
――全てを手に入れるか、なくすかすればいい。
ただそれだけを望む、狂気と呼ぶにはあまりにも切ない相手の悲しみ。そして、どこか投げやりな気持ちしか伝わってこなかった『心』。
「……わたくしがどれほど『心話』の能力を高めても、あの方がついていた『嘘』は読み解くことができませんでしたわ。深い霧に妨げられているように」
おそらくそれはなんらかの魔術が関わっているのだろう。光の紋章を持つ女王の心が一切読み取れないように、強大な紋章を持つ者や、その加護を与えられた者、そして自身に複雑な魔術を施している者の心は読む解くことができない。
「でも、あの心だけは『聞く』ことができましたわ……」
迷子のような、だだっ子のような、それでいて深い諦念と、それに相反する執着をもつ、今まで感じたことがないような複雑な『心』を。

それを伝えると、目の前にあるシーゼルの背中が少しだけ落ち、ため息と同時にこう呟かれた。

「……フェリってば、それをまともに異父兄に言うんだもんね……」

「あっ、あれは……！」

あわや殴り合いの喧嘩になりかけた一幕を示唆されて、フェリシエーヌは真っ赤になった。

「だって、仕方ないじゃありませんの！」

婚約者ともども隠し部屋に半ば閉じこめられた状況で、敵を挑発するような言動がどれほど危ういか、フェリシエーヌにだって分かっていた。

だが、それでも思わず言ってしまったのだ。

――無か全しか選べないだなんて、あまりにも馬鹿げているのではありませんの？

と。

「最初から、全部、なにもかも無くすつもりという、そんな気持ちしか伝わってこなかったんですもの……！！」

胸を締め付けられるような『声』に負けて、思ったことをそのまま言葉にした。売り言葉に買い言葉をして、おそらくギリギリの線で狂気を押さえていた相手を揺さぶってしまったのだ。

結果、掴みかかられかけ、立ちふさがったシーゼルがかわりに殴られ――初めて見る殺気だった男の人の恐怖に、シーゼルが殺されてしまうのではないかと焦って――

何かを考える前に刃物を持って走ったところで、アデライーデ姫に凶行を止められたのだ。

「……馬鹿だったと、思いますのよ……わたくし自身。あんなに深い絶望を感じ取ったというのに、あんなに追いつめられていらっしゃることには……全く気づけなかったんですもの」

もっと深く理解しようと思って『読んで』いれば、いくらだって読み取れたし、どんな状態であるのかを察することだってできただろう。

けれど、それをフェリシエーヌはしなかったのだ。
なんのことはない。フェリシエーヌにとって『アルトリート』という存在は、王家に大罪を働いた不届き者という以前に、シーゼルをいじめた大嫌いな人だったのである。
「フェリ……異父兄は、僕にはイヤな人だったけど……でも、僕だって、異父兄にとってはイヤやヤツだったと思う。……人って不思議だよね。どれだけ沢山のことを知っていても、相手に向ける感情一つで、見えているものも見えなくなってしまうんだから」
「……そうですわね」
頷きながら、もし、これがベルだったならどうだったろうか、とフェリシエーヌは考えた。
あのどこまでも真っ直ぐな少女だったなら、瞳を曇らせることなく、相手をちゃんと見ることができただろうか。
――あの青年を……ほんの少しでも、救えただろうか。

「……あの方のことを考えると、今も――どうしてもっと、と……自分の至らなさを情けなく思ってしまいますわ。わたくしは、今もあなたをいじめたあの方を許すことができませんの。……けど、あの時のあの方は、少なくとも……あなたを引き合わせてくれたりと、少しだけ親切でしたし……あまりにも……可哀想でしたわ」
「……」
わたくしは、と小さく呟いて、フェリシエーヌは瞳を閉じた。
「……あの方達のことを……未だによく知りません。そして、おそらくこれからも知る機会はないでしょう。……接点は小さく、時間は短く、そしてわずかな時間で相手を理解できるほど、わたくしも優れてはいないのですもの」
「……」
「自分にできないことを誰かに望むのは、もしかするととても浅ましいことなのかもしれませんわ。けれど、わたくしはあの方達を理解できませんでしたし、あの時あの場に居合わせても、何一つ成せ

たことはありませんでしたけれど……祈り、願わずにはいられませんの。あの方達を救ってくれる存在が、あの時、どこかにいてくださることを」

それは都合の良い願望なのだろうけれど。

「……あの方達に、少しでも……暖かいものが……与えられれば……」

こみあげてきたものを堪えて、フェリシエーヌは言葉を紡いだ。

捕らえられたアルトリートが、どのような経緯を経て処刑されたのか。

保護されたクリストフ王弟殿下が、その間どのような心境でいたのか。

それをフェリシエーヌは知らない。

それは彼女の与り知らぬことであり、関わることを許されなかった事柄だ。

だが、少なくとも新しい王弟が絶望を感じ、慟哭にも似た声で泣き叫んでいることだけは分かった。彼の心の声が、後宮にいる自分の所にまで届いていたからだ。

「……僕も、あの二人があの後どうなったのか……全てが終わる直前まで、知らされなかった。もし、それを知っているとすれば……クラウドール卿や、君の妹姫だと思う。高熱を出して寝込んでしまったようだけど」

騒動の翌日、高熱で倒れて寝込んでしまったベルの痛ましい姿を思い出し、フェリシエーヌはギュッと強く目を瞑った。

愛らしく、小さな新しい義妹。まっすぐでひたむきで素直な彼女は、あの騒動で何を感じ取り、何を思ったのだろうか。

小さな体で受け止めるには、あまりにも辛い現実だった。熱を出したとしても、不思議ではない。

心が許容量を超えて強く揺さぶられた時、人の体は様々な症状を引き起こす。

意図せず流れてしまう涙や、頭が壊れてしまいそうなほどの激し

い頭痛。そして、他に何の原因も無いのに、突然心身を襲う高熱。
それらは全て、心に起因する病だった。目に見えない悪魔が体に忍び込んだわけでも、生まれ持った病への抵抗力が消えてしまったわけでも、怪我や病気で引き起こされたわけでもない、人の持つ『心』が引き起こす体調異常。
（……ベルは、また、辛い現実に遭ってしまったのですのね……）
長い間、辛い現実の中を必死で生きてきたというのに。ようやく暖かい場所に保護されて、穏やかに幸せに生きるのだろうと思っていたのに。あの少女はまた、辛い現実を間近に見ることになったのだ。
あの二人の青年のことを思うと同時、あの愛おしい妹のことも思う。
少しでも、暖かく、優しいものを得られていればいいのに、と。
「……シーゼル」
しばらく無言で立った後、フェリシエーヌはそっと相手に声をかけた。
シーゼルが一瞬振り向きかけ、慌てて真正面に向き直る。
「わたくしは、強くなりますわ」
「……フェリ？」
「自分の感情にふりまわされて、見るべきものを見ずにいただなんて、こんな情けないことはありませんわ。これからも、わたくし達は沢山の事にあい、沢山の人と出会うでしょう。そんな時、同じ事を繰り返すわけにはいきませんもの」
「……フェリ……」
「強くなりますわ、わたくし」
フェリシエーヌの言葉に、シーゼルが小さく息を詰まらせた。
（……君が、そう言うのなら）
心の声が、口に出される言葉よりも前に伝わってくる。
「僕も、強くなるよ……」
（君のために）

フェリシエーヌは唇をほころばせる。決して読もうとしなくても、シーゼルの心はいつだってこんな風に自分の元に強く届く。込められた思いが強ければ強いほど、心の声は強く大きくなるのだから。

（……でも、これ以上強くなられたら、僕、生きていられるかな……）

「……どーゆー意味ですの。シーゼル」

これまた先と同じぐらいハッキリ伝わってきた相手の心の声に、フェリシエーヌは即座に目を険しくした。

シーゼルの背中が一瞬で強ばる。

「フェ、フェリ……姫、ぼ、僕は別に何も……」

「わたくしが強くなるのが、どうしてあなたの生き死にに関わってくるというのです？」

「読んだの！？」

「勝手に伝わってきたのですわ！」

慌てて弁明のために振り返るシーゼルに、フェリシエーヌはクワッと目を見開く。

シーゼルは青ざめた顔であたふたと言葉を探し――

ふいにキョトンとした顔になって首を傾げた。

「あの……フェリシエーヌ姫？」

「なんですの！？」

「……御髪に、ブラシがくっついているのですが……」

言われて、フェリシエーヌは真っ赤になった。別のことに気を取られて忘れてしまったが、自分は今、とても人様には見せられない格好をしていたのだ！

「ふ……振り向くなと言ったでしょー！？」

「わぁっ！？」

真っ赤な顔のまま、フェリシエーヌは相手に投げつけるべく髪にくっついたままのブラシを握る。しかし、とれない。

仕方なく近くにあった大きなカウチへと走り、設置されていたクッションを投げつけると、すでにシーゼルは扉の近くにまで逃げて

いた。
「シーゼル！！」
「フェ、フェリシエーヌ姫！　しゅ、出立の時間が過ぎてますのでっ！」
「お待ちなさいッ！！」
「ごきげんよう！！」
最期に精一杯手を振って飛び出ていく相手に、フェリシエーヌは思う様地団駄踏んだ。
「もう……！　お馬鹿さんッ！！」
かけるべき言葉も、与えるべき祝福も、結局中途半端になってしまった。
フェリシエーヌは憤然と息を吐き、（まぁいいですわ）と腰に手をあてて胸を張った。
（どうせこちらが一段落ついたら、わたくしもレンフォードに行くのですもの）
今はまだ心配事があるから動けないが、それが片づけばいつでも動ける。すでに王の許可もとってあるし、なによりシーゼルには渡さなくてはならないものがあるのだ。
（……もし領地で女の子と遊んでいたりしたら、承知しないんだから）
相手の日々の生活を思って、フェリシエーヌはこめかみに青筋をたてながら寝室に戻った。
おそらく隣部屋からこちらを窺っているだろう侍女達を呼ぶべく、ベッド近くの台に置かれた呼び鈴を手に取る。
これからの目標も、行くべき先も決まった彼女がまず最初にとるべき行動は――自分の髪にからまった、強情なブラシを取り除くことだった。

？　レメク・クラウドール

歌が響いていた。

螺旋階段の中程に立って、レメクは歌声に耳を傾ける。

おそらく西区の全域に響いているだろう歌は、レメクには馴染みのない『歌』だった。

彼にとって『歌』と言えば教会の賛美歌か、魔術契約のための術契唱、発動のための詠唱歌、あるいは記憶の奥底に沈めてしまった種族歌に限定される。

世に溢れるその他の歌は『一般の娯楽』として一括りにされており、知識として知ってはいても、それを歌として認識することはなかった。

そんな歌をよりにもよってメリディスの『呪歌』として耳にする。

どんな皮肉だろうかと思った。――だが、種族歌でなかっただけマシだと言えるだろう。

（……これも……メリディスの呪歌……か）

ひどく透明感のある歌声が、最後の『音』を高く高く空へと放つ。

その余韻にも似た響きを追いかけるように、ふと意識が遠くへと離れるのを感じた。違和感や不快感はない。ほんの一瞬、ぼんやりとするような心地だ。

実際、薄く開いた瞳には、目の前にある階段も壁も映してはいなかった。

――だがそのかわりに、白く感じる世界の中に誰かの姿が見えた気がした。

（あれは……）

誰よりも近い存在であるはずなのに、誰よりも遠い存在だった人。

強大な存在に守護されていた自分を、唯一瀕死に追い込んだ人間でありながら、決して自分を見ることのなかった人――

（……何故）

これほどに違うのだろうか、と。

白くけぶる世界の中で、泡沫にも似た疑問が浮かんで消える。

他者の心をいともかんたんに奪ってしまうメリディスの歌。その声の美しさは彼の人もベルも変わらない。

いや、むしろ技巧だけで言うなら、遙かに彼の人のほうが勝っていただろう。

比べる方がおかしいのかもしれない。一族の中にあって最高峰の教育を受けてきた『魔術師』の血統継承者と、母親以外の一族と会ったことのなかった幼い子供では、最初から受け継いだものが違う。

（けれど――）

けれど、それならばなぜ、これほどに――この歌声の方を美しいと思うのだろうか。

あの時、あれほどに称えられていた彼の人の歌声を聞いても、心を揺すぶられることはなかった。音の質、その強弱のつけかた、どこまでも伸びる伸びやかさ、ゆらぎすらも計算しつくされたその『歌』という名の技術は、確かに自分でも「美しい」と思えたのに、心に響くものがなにもなかった。

ただ聞き難かった。

時に醜悪だとすら思った。

抱く思いは嫌悪がほとんどで、聞き惚れることができた瞬間など、ただ一度きりだ。

だからだろう。

『メリディスの呪歌』という言葉を聞いて、まず感じるのは嫌悪であり、次に感じるのは虚無だった。誰もが聞きたいと望むその歌をけれど自分だけは二度と聞きたくないと思っていた。

それなのに――

レメクは天を仰いで目を閉じる。
風に溶け込むように新しい歌が紡がれていた。
やはり聞き慣れない歌だった。歌、と認識してすらもいなかった、言の葉を旋律に乗せて発する『歌』だった。
それなのに、美しいと思った。
暖かいと思った。
優しいと思った。
切ないと思った。
呪歌の発動は、『魂』を『言葉』に乗せることにある。魂の宿った言葉は言霊となって、それを聞くあらゆる者を縛り、操る。
魂とは心だ。
心とは思いだ。
込められる身の内の狂おしいほどの思いが、歌となって大気を震わし奇跡を起こすのだ。
だから、これほどに彼女の歌は美しい。
ひたむきなほど真っ直ぐに、思いの全てを歌に変えるからこそ、技術や発声法を習わずしてこれほどの『呪歌』を発動させてみせるのだ。

（……あの人は、ただ、自分のためだけに歌っていた）

華やかな牢獄の中で、他の誰かを顧みることなく、ただ己のためだけに歌を歌っていた人。

（……ベルは、ただ、誰かのためだけに歌っている……）

分かっている。だからこそ、こんなにも違いがでるのだというこ

とは。

二度と会うことはなく、遇いたくもないと思っていたメリディス族だというのに、いつのまにか常に傍にあって当たり前の存在になってしまったのは、彼女（ベル）が他の誰でもない『彼女（ベル）』だったからだろう。

醜いものも苦しいものもおぞましいものも恐ろしいものも、彼女が傍にいるだけで穏やかに消えていく。

今まで自分の中にあったあらゆるものが、彼女を通して全く違うものに変わっていく。

嫌悪や憎悪すらいとも簡単に昇華してしまうのだから、彼女が傍にいる限り、自分が自分以外の何かになることはないだろう。

――例え、いつか『断罪』の狂気に呑まれる日がきたとしても。

レメクは閉じていた瞳を薄く開いた。

光を有効に利用するため、内側を白い素材で統一されている尖塔の天井は、綺羅星をまぶしたような小さな輝きに満ちている。

なんとなくその様に小さく微笑してから、歌を捧げられた青年を思い、黙祷した。

結末を予想していたから、直視することのできなかった相手だった。

救える者と救えない者がいて、救うべき者を選んだ時から、レメクは彼を見殺しにすることを決めていた。一度心を揺るがせてしまえば、何もかもを失うことになるのだと分かっていたから、誰に何と言われても救いの手を出すことはしなかった。

花瓶を落とされた中庭の事件を見た瞬間に、もう、戻ることのできない場所に立っているのだと気づいてしまったから――あの瞬間に、彼を殺すことを決めたのだ。

（なのに、あなたは――恨むことすら、しなかったのですね）

手を差し出すことすらしない自分を。見殺しにすることを決めて

いた自分を。嘘をつき一人だけ安穏とした場所にいる自分を。その嘘がきっかけで命を奪われてしまうというのに、全てを知った後も――彼はただ静かに死を受け入れた。

憎しみを刃と変える術を教えていたのに、それを使うことすらしかなった人――

（だから――）

ギリ、といつのまにか噛みしめていた歯が強く軋んだ。

後悔や懺悔を己に許してはいけないと思った。

自分にはその資格などありはしない。

だからこそ、

（いつか――）

誓ったのだ。

いつか、別な形で『彼』の力となれる日がきたなら、他を裏切ることになっても『彼』の望みのために力を貸すと。

そこにはもう『彼』は存在しないけれど、『彼』の残した願いや思いは確かに別の形で続いていく。

ならば、そこにある願いが変わらない限り、どんな苦境であっても必ず力を尽くし、『彼』の願いを叶えてみせよう。

義父が魔法を使ったように。ベルが歌で奇跡を起こしたように。

アルゼウスが命を賭してその魂を救済したように。

――今度こそ、『彼』のために。

レメクは閉じていた目をゆっくりと開けた。
やや翳って見える世界の端で、淡い紫銀の色が小さく揺れる。
つん、と上着を引っ張る力に気づいて、レメクはそちらを向いた。
いつの間に傍に来ていたのか、小さな少女が傍らで自分を見上げていた。
歌が終わっていることにも気づかなかったし、少女の足音にも気づかなかった。こんなに近くに来るまで何の反応もなかった自分を少女も訝しく思っただろう。けれどベルは、真っ直ぐな目でこちらを見上げるだけで何も言わなかった。
綺麗な金色の目がジッと自分を見上げている。
その魂にも似た、美しい黄金の瞳が。
「……ベル」
名を呼んでみた。
少女の顔が花開くように笑った。
苦しみも悲しみも力に変えて強く立つような、そんな鮮やかな笑顔だった。
「おじ様。おじーちゃまの所に行くのですよ」
王宮に行くことが決まってから出るようになったおかしな言葉遣いで、一生懸命背伸びしながらベルが言う。
その小さな体を抱き上げて、レメクは「えぇ」と答えた。

「……いきましょうか」

おそらくこの先、安穏とした人生は過ごせないだろう。
けれどそれでも、生きているのだから、ただひたすらに、これから先も生きていくべきなのだ。
時はただ過ぎ去っていくだけのものではなく、命はただそこにあるだけのものでもなく、一分一秒を惜しむように大切に生きなくてはならない。
――一度でも、生きたいと思ってしまったことがあるのならば。

そのために他を切り捨てたのならば――なおさらに。

「あいっ」

元気よく返事をして、ベルがグッと鳩のように胸をそらす。

そのやや赤くなっている目元を少しだけ見やって、レメクはゆっくりと歩き出した。

何かの終わりを告げるかのように、鐘の音が背後で鳴らされていた。

？　アルカンシエル・アルヴァストゥアル

部屋に戻ると、悪魔がデロンと転がっていた。
西区、レゼウス神殿、月光の間。
神殿の数多ある室の中で、最重要とされる場所だった。
その重要性故に周辺の部屋全てを『教皇の私室』とし、一般はおろか神官達の入室をも制限しているのは、クラヴィス族最大の秘術を行う場所だからである。
もっとも、秘術を執り行うからといって、そこに仰々しい祭壇や祭具が置かれているわけではない。
それどころか家具の類もほとんど置かれておらず、ダンスホールのように広々とした空間が広がっていた。
部屋の形は円。
天井は高く、最大の特徴でもある真円の天窓からは、眩いほどの光が降り注いでいる。
床にはいくつもの輝石が填め込まれ、陽光を受けて部屋中に光を乱反射させていた。
そんな部屋の中に、ゴロンと打ち上げられた鮪（トゥンヌス）のように黒い物体が横たわっている。
白一色に統一された部屋の中、そこだけくっきりと黒い相手を見やって、アルカンシエルは冷ややかに眼差しを細めた。
クラヴィスの血に宿るとされる数多の『紋章』は、『紋章』を宿らせうる器である限り、人から人、もしくは物への移行が可能となる。
だが、『紋章』とはそもそも人智を超えた強大な『力の結晶』である。
その結晶を『何か』に封じた時、『結晶を封じた証』として浮き出るものが紋章であり、その形は対応する紋章の本質を表している

と言われていた。
紋章は『ほとんど無害』なものから『甚大な災厄を招く』ものまで様々であり、力の強さも個々によって異なる。
そのため、移動させるという行為自体も、紋章を『宿せられる』器同士ならば近くにいるだけで簡単に移行できるものから、命がけになるもの、器を変える際に周囲一体を壊滅させるものなど様々だった。
クラヴィス族の伝承によれば、器を変える際の儀式によって村一つが消し飛んだこともあったという。
そのせいもあったのだろう。『月光の間』は、王国の始祖、ナスティアの時代に強大な紋章に対応すべく作られた。
光や闇の紋章など、甚大な力をもつ紋章は、月の魔力を極限まで高めることのできるこの場所でだけ、周囲に被害をもたらさずに器を変えることができる。
それは他国には決して知られてはならない秘術であり、故にこの部屋にはどれほど高位な神官といえども、教皇の許可無く足を踏み入れることはできなかった。むろん、それは王であっても同じである。
だがそういった人の世の常識は、目の前に転がっている人外生物には通用しないようだ。
「……」
アルカンシエルは床に伸びたソレをただひたすら感情を排した目でジットリと睨む。
美しい男だった。
美しい、という言葉では表現しきれないほどの美貌だった。
この男と相対して、正気を保っていられる者はほとんどいないだろう。かろうじて失神を免れても、その顔を三秒以上見続けられる者は極稀だ。あまりの美しさに、見続けることすらできないのだ。
現に一緒に部屋に入った大神官が、背後で声もなく崩れ落ちていた。チラとそちらに視線を送れば、大変イイ笑顔で気絶しているの

が見えた。
「……はぁ」
思わず盛大なため息が落ちる。
生半可なことでは感情を揺らさない側近ですらこの有様である。
その途轍もない美しさ故に、嫌でもそこに転がっているのが人ならざる者なのだと思い知らされる。だがアルカンシエルからしてみれば、その顔の美しさがどうとかよりも、むしろ脳みその吹っ飛び具合で『人ならざる』と思わざるをえなかった。
なにしろ、『今まで』があまりにも今までであったものだからして。
（……最初に会った時から、『コレ』はろくなものでは無かったな）
なにやら走馬燈のように色んな過去が浮かんでは消える。それがやたらと多く感じるのは、付き合いが深いからではなく、たんに人一人の人生分ぐらい昔に出会ってしまったせいだ。
そう――もはや当時の知人など誰一人として生きてはいないほど昔に、何の運命の悪戯か、自分はこの男と出会ってしまったのである。
他の追随を許さぬほど凶悪で、人智を絶するほどに絶望的なこのロクデナシと。
（嗚呼……本当にろくでもない……）
心の底からそう思う。
今では昔と違う意味でろくでもないモノになった気もするが。
（……とはいえ、こやつ、なにやら最初の頃よりも格段に阿呆になっている気がするのは気のせいであろうか？）
アルカンシエルは胡乱な目を眇めて、そこに横たわったままの物体を眺めた。
とりあえず、床の上でキラキラしながらデロンと伸びているのはやめてほしかった。
（……だいたいにして、なぜこんなモノがこの部屋に転がっているのだ？）

アルカンシエルにはそこがまず疑問だった。
『コレ』の出没場所と言えば、現国王の周辺か、名付け子周辺に限定される。
自身の興味が向いた時には分裂までしてあちこち赴くが、基本的には穴蔵に籠もる穴熊のように、ごくわずかな範囲でじっとしているイキモノなのだ。
そんな巣に籠もる習性的な生き物が、どうしてこんな所で転がっているのか。
第一、この部屋の前の室には、腹心であるバルバロッサ大神官を残していたはずだ。
だが、前室はおろか、この部屋の中にもその姿は見あたらなかった。
実直なあの男が、留守を預かっていながら席を外すなど考えられない。また、あの人間の限界に挑戦しているかのような巨体が、ちょっとやそっとの家具で隠れるはずもなかった。
おそらく、そこに転がっているただの得体の知れない化け物が、自分の都合で何かやらかしたのだろう。
部屋に居残ってもらったばかりに、と、アルカンシエルは再度深い嘆息をついた。
それにしても、この、顔が大変残念な感じに良すぎる大馬鹿者は、いったいなんでまた床に直接転がっているのだろうか？
いくら清潔に保たれた部屋とはいえ、床は床。
どれだけ丁寧に掃除をしようと、トイレに行った後の靴が横行するような場所である。
部屋の端には長椅子もあるというのに、わざわざ床に転がっている意味がわからない。それとも、これはナニカのメッセージなのだろうか？
（……）
偉大なる教皇は、重い服をひきずってゆっくりとソレの近くへと歩み寄った。

「……」
転がっている黒いソレを足下に見下ろし、無言でしばらく眺める。
「……」
踏んづけた。
「「……。」」
沈黙と悪魔だけが横たわる部屋に、しばらくしてからぎゅむぎゅむと布と靴が擦れる音が響く。
悲鳴も怒声も罵声すらも飛んでこないのを確かめて、アルカンシエルは目をカッと見開いた。
（――くのっ！　くのっ！　くのっ！）
「ちょっと！　シエル！！　普通そこでグリグリしますか！？」
さすがにそれには黙っていられなくなったのか、途端に黒い人外のナニカがガバッと上半身を起こした。
アルカンシエルは力一杯舌打ちする。
「……ちっ……！　反応がある……！　死体では無いのか……！！」
「ナニ教皇にあるまじきコト言ってるんです！？」
足下から恨みがましげに睨まれて、アルカンシエルは苦虫を噛みつぶしたような顔で踏みつけていた足をどけた。
完全に足が退いてから身を起こした相手は、そんなアルカンシエルを憤然と見上げる。
「まったく……なんですこの無体は！　自分も年寄りでありながら、年長者に対する敬意を持たないとは何事です！」
「その姿形で何が年長者か！　皺の一つでも作ってから言うがいい！」
「皺は別段関係ないでしょう！　自分がしわくちゃになったからといって、ヒトにまで強要するだなんて狭量にすぎます！」
「狭量とかいう問題ではない！　年を経れば肉体の老化にあわせて

皺が出来るのは当たり前のことだ！」
「私は心も体もいつまでも若いものですから！」
「……単にイロイロ成長せんだけだろう、貴様は！」
心底本気で言ったアルカンシエルだったが、相手は全くこたえていないようだった。謎の煌めく超笑顔で、気持ちいいほどビシッとしたサムズアップまでしている。
「……とりあえず、何しに来て転がっていたのかは知らんが……帰れ！」
「理由も聞かずに追いはらいます！？　なんてひどい子でしょう！　なんでこんな子が教皇になっているのか、私には不思議で仕方がありません。王国七不思議の一つです！」
「ぶっちぎり一位の七不思議男は貴様だ！　この悪魔っ！」
「悪魔悪魔って何です！　私にだって一応ちゃんとした呼び名はつけられてるんです！」
「ああ最初がポで最後がトのじゃがいもか？」
「私の呼び名に、何か文句が？」
ジト目で言ってやったら、なにやらものすごい不満そうな目で睨まれた。
むしろその呼び名に何のこだわりがあるのかとそう問いたい。
「信じられません。まったくもって信じられません。教皇ともあろう者が他者の呼び名に難癖をつけるとは！」
「いや、つけておらんぞまだ」
「教皇なんてものになったのだから少しは分別がついたかと思ったら、昔より悪い子になっているだなんて！　私はそんな子に育てた覚えはありませんよ！？」
「貴様に育てられた覚えはないぞっ！　このッ！　悪魔がっ！！」
「あーあーあーたったそれだけで息きらせちゃったりして体力なくなりましたねーシエル。コーフンスルトカラダニワルインデスヨ？」
「何故棒読みだ貴様」
誠実さの欠片もない悪魔を見下ろして、アルカンシエルは憤然と

息を吐いた。
「……だいたい、なんだ、貴様は。なにやら視界の外でコソコソしてるかと思ったら、あちこちに分身をバラまきおって。そのくせ、よりにもよって『本体』がここで転がっているとはどういうことだ？」
「……あれれ。『私』が本体だってよくわかりましたねぇ」
床の上に座ったままの姿で、ポテトは感心したようにそう言った。
アルカンシエルは心底嫌そうに顔をしかめる。
「いったいどれだけの長さの付き合いだと思っておる。……好きで知り合ったわけではないが、年数だけならベラよりも遙かに長いわ」
言われて、ポテトは昔を思い出すような表情（かお）で虚空を見上げ、頷いた。
「……長いですよねぇ……ざっと千年近い付き合いですもんねぇ……」
「そんなにも生きておらんわ！　なぜ十倍に跳ね上がっておる！？」
「百年来の付き合いってのも、たぶん人間的には驚愕だと思うんですけどね……」
大真面目に反発してくれる相手を呆れ顔で見守って、絶世を超える美貌の主はふいにクスクスと笑いだした。
少しだけ懐かしむように相手を見つめる。
まるで、過ぎ去った百年の月日を思い返すように――
「あぁ……考えてみれば、ラザストであなたと会ってから百年以上経っているんですよねぇ……なんだか感慨深いものがあります」
「……儂は感慨深い以前に後悔が深い……」
妙に懐かしげにしている相手から視線を逸らせて、アルカンシエルはどっぷりと深いため息をついた。
「……なぜにこのような阿呆な悪魔と知り合わねばならぬのか……」
「ちょっ……シエル！？　言うに事欠いて阿呆ってなんです！」
相手の魂の奥底からの嘆きに、さすがのポテトも悲鳴を上げた。

しかし、そんな反論すらもジト目で見やって、アルカンシエルはさらに深いため息をついてみせる。
「阿呆に理由などあるものか。馬鹿者の名付け親は大馬鹿者と決まっておるが、その上に阿呆とド阿呆の称号も与えねばならんほどの大阿呆だろうが、貴様は」
「そこまで言います！？」
「言う。前々から頭のおかしなヤツだとは思っていたが、十三年ぶりに遭ってみればさらに阿呆度が上がっておる。貴様の特性を考えれば、ごく最近会った幼子の影響なのであろうが……少しぐらい揺るがぬ個性はないのか？　じゃがいも卿」
「あなたも、十三年ぶりに会ってみればずいぶんとお茶目度が増しているよーな気がするんですけどねぇ、わんぱく暴君」
一瞬の空白後、二人は互いにニッコリと、見る者がいれば肝を冷やしかねない笑みを浮かべて見つめ合った。
「……ほほぅ……死んだ魚のよーな目をして現れた挙げ句、国一つぶっつぶしたヤツがよくもまぁそんなことを言うようになったもんだなぁこンのクサレ悪魔ぁ……」
「ふふふふふ……先のことも考えずにイノシシのように他国に喧嘩売ってた人が言うようになったもんですねェ～このお馬鹿さ～ん……」
互いに目の笑ってない笑顔でニコニコとガンつけ。
いつのまにか床から浮き上がって至近距離で睨みつけてきている美貌の主に、アルカンシエルは壮絶な笑顔で歯をむき出しにした。
「だいだいだな！　貴様はなんでまたこの国に舞い戻って来たのだ十三年も行方不明になった挙げ句に！」
「ご主人様とレンさんが気になったからに決まってるでしょうが！　でなければなんでまた面倒くさいこの国になんか戻って来ますか！」
「気になっておるのなら最初から居ればよかったであろうがこンの自己中心的ドグサレ魔王！　ベラが死んだのがそれほどショックか

!?　あれの寿命がいつか尽きることぐらいは最初から承知しておったただろうがコノ軟弱者！」

「うっ、うるさいですよ！？　私にだって人並みにショックを受けることだってあるんですよ我ながらちょっとビックリしましたけど！！　だいたい、あなたはショックじゃなかったんですか！？　『王家』の中で、ベラだけがあなたと同じ血を引く王族だったのに！」

「アレの死は儂とて辛かったわ！　だが、同じ血統かどうかなどどうでもよい！」

　真っ直ぐに睨みつけてくる深海の瞳を睨み返して、アルカンシエルは口を笑みの形に歪めたまま、腹に力を込めて言いきった。

「『王家』の血筋は絶えておらん。世に混乱が生じるような事態にもなっておらん。血云々で重要なことなど、所詮はその程度だ。儂がベラの死を悼んだのは、血が誰よりも濃く繋がっているからではない。貴様とてそうだろうが、半端者。血よりも濃いものがこの世にはあるからであろうが」

　ポテトは答えず、ただその唇に薄い笑みを浮かべた。

　その様子にアルカンシエルは深いため息をつく。

　未だに至近距離にいる相手を嫌そうに見やってから、豪奢な服につつまれた肩をげっそりと下げた。

「……いい加減、貴様の挑発じみた問答にも飽きておるのだがな、儂は……」

「ふふふふふ。それでもムキになって乗ってくるあなたが実は大好きですよ、シエル」

「迷惑だ」

　キッパリと言い捨てて、アルカンシエルは部屋の片隅にある椅子へと向かった。

　ゆっくりと歩く相手のにあわせて、ポテトもふよふよと浮いた状態でついてくる。

「……ところで悪魔」

「なんです教皇」

こちらの呼び方に反発してるのかしてないのかよく分からない返しをする相手に、アルカンシエルはやや呆れた顔になって振り返る。
「……貴様が、もはや絶えたと言っても過言ではない『前王家』の血を今更気にするのは、そこになにか気にあることがあるからか？」
「……」
「血族内で婚姻を繰り返していた前王家の血は、儂を最後に絶えるであろう。アリステラにも同じ血が流れておるが、他家と交わって血を薄めておったレーブレヒトの血統との間に生まれた子だ。儂やステファンのような欠陥も、9代目の世代にあったような異常も持たぬであろうよ」
静かな教皇の声に、ポテトは中空に浮いたまま椅子に腰掛けるような姿勢になって腕組みをした。
その口元には、どこか困ったような微苦笑が浮かんでいる。
「それとも、これは儂の杞憂か？　貴様は必要のない問答はせぬ男だ。ならばわざわざ儂の考えを聞き出したのは、そこに何らかの意味があるからだろう。違うか？」
ポテトはそれに答えず、かわりに困ったような笑みを浮かべてこう言った。
「……ねぇ、シエル。私はたぶん、あなたは私が知りうる人の中で、一番最初の『私』を知っている唯一人だと思うのですよ」
「……？」
意味がわからず、アルカンシエルは眉をひそめる。
ややあって、苦虫を噛みつぶしたような顔になった。
「……契約者を見つける前の、昔の貴様のことか」
「ええ。人と深く関わることの意味を知る前の、今よりも遙かに『現象』としての存在であった頃の私です」
「……」
アルカンシエルは口を引き結ぶ。
当時の相手を今目の前にいる当人に重ねようとして——失敗した。

それほどに、相手の印象は違っていたのである。
「そう……あなたと出会った、百年以上前……占都ラザストに降り立った時の私は……どんな存在でしたか？」
アルカンシエルは表情を消す。
かつて、滅びの予言の後に終焉を迎えた国があった。
一夜にして滅んだ王都は、今なお人々の恐怖の対象となっている。
その滅びが人智を超えたものであったから尚更に、人はその都の事を口にすることすら恐ろしくてできないのだ。炎に呑まれたとか、砂に埋もれたとか、病で死滅したとか、そんな人が理解できる範囲の『滅び』ではなく――まるで虚無に呑まれたがごとく、その全てが完全に消滅してしまっているのだから。
「……死んだ魚のような目をした男だったな、貴様は」
「……そうですね」
「突然現れて、意味不明なことばかり言うおかしなヤツだった。貴様の言葉の意味を思い知ったのは、命からがら逃げてきた者とともに、ラザストを離れたあの時だ」
「……」
困ったような顔のまま軽く首を傾げる相手に、アルカンシエルは息を吐く。
ふいに思い出したのは、当時見た、この世のものとも思えぬほど神々しく、同時に恐ろしくてたまらなかった相手の姿だ。
「……あぁ、そうだな」
それは確かに、今目の前にいるこの男だった。
「貴様は、未来を読み、行く末を示唆するだけで、こちらが知りたいと願うものは何一つ答えないイヤなヤツであった。他者の理解などに興味はなく、ただ己の知りうる現実を淡々と口にし、定められた運命を無造作に歩む者であった」
そして同時に、今目の前にいる男とは――あまりにも違う『存在』だった。
「……そこのところはまるで変わらないわけか？　嘆かわしいこと

だぞ、それは」
「……私は本当のことしか口にできませんから」
嫌そうに顔を歪めて吐き捨てる相手に、ポテトはただ穏やかに笑う。
ほんのわずか、寂しそうな瞳で。
「口にしてしまえば、その全てが叶ってしまうかもしれない。……逆に、願いを口にしようとして、どうしても口にできなければ……それは叶わないものなのだと思い知ることになるんです」
アルカンシエルは目を見開いた。
思わず見つめた相手は、困ったような顔で微笑んでいる。
「かつての私は、それをなんとも思っていませんでした。できないものはできないのだから仕方がない。そう思っていたのですよ……あの当時の私はね」
自嘲めいたものを口の端に浮かべるポテトに、アルカンシエルは唖然とし、言葉を失って相手を見つめ続けた。
百を超える年月の彼方で出会った相手だった。
出会い方は最悪で、自分ほどこの男を警戒し、嫌悪した人間はいないだろうと思っていた。
それなのに、何故、今——自分はこの男の真実を知る立場に立っているのだろうか。
「すでに確定してしまった未来や、変えることの出来ない予定事項を口にしていただけなのです。それを知らないあなたが意味を理解できるかどうかなど、私にはどうでもよかった。……けれど、今は……確定してしまうことが恐ろしくて、口にできないことが増えました」
「……恐ろしい、と……言うのか。貴様が」
「ええ」
「……人を『知った』からか」
「ええ」
微笑(わら)って、ポテトは何かを懐かしむように目を細めた。

「ご主人様に出会って、あの方と契約して……遙か昔、先代達に言われた言葉を理解しました。人を知れば知るほどに、私達は自らを戒めてゆく。それは『現象』としては致命的なことでしょう。……けれど、この身に流れるいくばくかの人の子の血や、人を愛した魔女の血からすれば、ごく当たり前のことなのだと思います」

そんな言葉を少しだけ嬉しそうに、どこか面はゆそうに呟いて、ポテトは「だって」と言葉を続けた。

「魔女も、人も、『人』を愛さずにはいられない生き物なのです。真なる魔女が呪われるに至ったのも、原初の魔女のひとりが人を愛し、道を踏み外してしまったのが原因でした。愛さずにはいられず、けれど愛すれば容易に世界を破滅させてしまう。だから、力を制限するためにも、同じ過ちを繰り返さないためにも、そして……自らが辿った運命を呪って、原初の魔女は後の世に残る全ての真なる魔女の血統に呪いをかけました」

「……『魔女は魔女と共にあり、魔女のためだけに在る』……か」

「ええ。魔女の魔法は魔女のためだけにしか使えず、魔女以外の者のために使えば、その力は刃となって魔女の身を砕く。……そういう呪いです」

だからこそ、魔女は他者の願いを叶えられない。

それは、どの魔女の血を引く者であっても変わらない。その血が『真なる魔女』と呼ばれる正真正銘の魔女の血筋であれば、男であれ女であれ、人であれ人以外のものであれ、全てが等しく呪縛されるのだ。

代償とは、その制限を緩和させるための応急処置だ。

自分は自分が欲しいと思ったものを得たいがために魔法を使うのだと、この魔法は自分のためなのだと世界を誤魔化すためのものだ。

「相手が『真なる魔女の血統』でさえあれば、どんな魔法だって使えます。あなたがたが使う魔術ではなく、世界すらも上書きする魔法を使えるようになるのです」

もちろん、魔法もまた全能ではなく、万能でもない。

その最たるものは、死者を蘇生することは魔女にもできない、という事実だろう。

だが、世界の理の中でちまちまと術式を行使する魔術と比べれば、『魔法』と呼ばれるものはいずれも強大な力をもつ。

もっとも、それは先に述べたように、『魔女が魔女のために魔法を行使する時』に限定されてしまうが。

「……けれど今の世では、それはとても難しい。本当の意味で『魔女』と呼べる血を持つ者は、もう、ほとんど存在しないのですから」

かつて大陸を統一した『宵闇の魔女』。

次に大陸を制した『深紅の騎士』。

そして三番目に大陸を纏めあげた『蒼月の魔女』。

彼女達はいずれも真なる魔女の血統だった。

けれど同じく『魔女』と呼ばれながらも、真なる魔女の血統ではない者も多くいる。

――そう、黄金の魔女と預言された、あの愛しい魔女のように。

「それでも、今の世にも残る血統というのはあります。……そして、血というのは一つではありません。……シエル。あなたと血統を同じくする王族は、血の薄まったご主人様以外、誰もいなくなってしまったけれど……別の系統でナスティアの血を受け継いだ人達はいますよね？」

「……王弟達か」

「そうです」

空気を椅子にして座っている相手は、軽く首を傾げるようにして微笑む。

「あなたはそのことに対して、悪い意味でこだわることはない。……ベラもそうでした。血にこだわるということは、過去にこだわるということです。愛した人への思い故に、その血を引く者を愛おしく思うのとは違う意味で、ただ『血』のみに意味を見いだそうとしたとき、ヒトは簡単に道を踏み外します。その血を引く者が持つ『

特別な力』を得ようと思えば尚更に」
「……」
「……そしてそれは、人の世の権力に対して人が行う愚行、ではないのでしょう」
「……？」
アルカンシエルは眉をひそめた。
ポテトは微笑む。やはりどこか困ったような、悲しげな顔で。
そして言った。
「私の……同族のように」
――と。

「……同族……だと？」
アルカンシエルは呆気にとられた顔で言われた言葉を繰り返した。
正直、意味がイマイチ分からなかった。
目の前にいるこの男には、『同族』という言葉がどうしても上手く繋がらない。
いっそ「分裂して増えるんです」と言われたほうがまだピンとくる。
「……言っておきますけど、そのままの言葉の意味ですよ。私も木の股から生まれたわけではありませんから」
どこかふてくされたような顔で言う相手は、もしかしたら拗ねているのかもしれなかった。
「『母』は有名な魔女でしたが、その『母の父』は人の子でした。私の『父』は、私の『先代』ですが、その『父の母』もまた人の子でした。……私の中には魔女と人の血が流れています。そして、私はあの両親の、最後の子供だったのですよ」
「最後の……」

アルカンシエルが呟き、ポテトが自嘲めいた笑みを浮かべて頷く。
「ええ。私が生まれるよりも前に家を出てしまった人達ばかりですが、兄も姉もいました。会ったことのない人がほとんどですけどね」
「それは、つまり……」
言われた言葉をじっくりと噛みしめて、アルカンシエルは表情を引き締めた。
「……貴様のようなロクデナシが、他にも多数存在するということか？　分裂した貴様自身でなく、別個体で」
「……気分悪くしていいですか？」
ジト目になった相手に、アルカンシエルは思わず視線を逸らし、ゴホンと嘘くさい咳払いをした。
「ま、まぁ、なんだ。儂が気にしたのは、貴様と全く同じような『存在』が、他にもいるのかということだ。貴様の兄弟ということは、そういうことだろう？」
「そう思われるんじゃないかなーとは思ってましたけどね」
どこか情けなく眉を下げて、ポテトは深いため息をつく。
「この『私』と同じ『存在』はありませんよ。一番わかりやすく例えれば……そうですね、あなたの一族の『龍眼』とほぼ同じです。新しい王弟くんは、ベラが死ぬまでは普通の人でした。そして、ベラの死後、同族である彼の目は『龍眼』になった」
「……それと同じということは……」
「ええ。つまり、私も最初は人間だったということです。少なくとも、母から産まれたその時は。……そして、『先代』である父の死後、私はその全てを引き継ぎました。かつて私の父が、『初代』からその全てを引き継いでしまったのと同じように」
「……」
アルカンシエルは、中空に座っている男を見つめる。
かつて人であったと言われても、にわかには信じられない。やはり『産まれた時からこうでした』と言われたほうが納得できる。
だが、長い年月で、知りたくもないが知ってしまったことがある。

第一、彼自身が言っていたではないか。本当のことしか口にできないのだと。

アルカンシエルはほんのわずか、眼差しを細める。そうして、どっぷりと深いため息をついた。

「……なんでそれを打ち明ける相手が儂なんだ」

「……なんでそんなに嫌そうなんですかあなた」

「いーやーだーかーらーだー」

心の奥底から声を出して、アルカンシエルは盛大に肩を落として嘆いた。

「この年になって、なんで悪魔の身の上相談をされねばならんのだ。ベラが生きている間にしておけ、そういうのは」

「ひ、ひどっ！　ヒトが勇気を出して弱点とも言えるような素性を明かしてるって言うのに！　ひどくないですかそれ！？」

「むしろ貴様のほうが非道だろう。儂の年齢を考えろ。重すぎるわ馬鹿たれ。だいたい、アリステラには言ったのか？　むしろあの娘に言えばよいものをっ」

「ご主人様に言ったら絶対面白がってむしろ探しに行っちゃいますよ！　あの方、ああ見えて意外と牧歌的というかおおらかというかスレてないと言うかちょっと他人を信じすぎてるというか……」

なにを心配しているのか思い詰めた顔で怖々言う相手に、アルカンシエルは胡散臭そうな顔になった。

「……貴様の身内は、近寄ってはならんくらいアレな存在なのか？　そんな風に心配するところをみると」

「私の身内、と言えるかどうかは分かりませんよ。おそらく、かなり血が薄くなってるはずですから。……それ以前に、ちょっと考えてみてください。魔女の血統というのがそもそもどういうものなのかを。……言っておきますが、血を誇る気はありませんけど、これでも真なる魔女の血筋なんですから」

言われて、アルカンシエルはキッパリと言いきった。

「自分の願いしか叶えられん、他人にとってはクソの役にもたたん

自己完結型天災だろうが」
「……あなた、他の魔女にそれを言ったら命はありませんよ」
呆れ半分感心半分の顔で告げて、ポテトは「はぁ」とため息をつく。
「まぁ、あなたがそういう人だというのは私も理解していますし、そういうあなただから言ってもいいかな、と思ったんですが」
「言われた儂は迷惑なのだがな」
「それぐらい軽く受け流してくれる相手でないと、こういうのは言えないんですよ」
アルカンシエルにとっては非常に迷惑なことを言って、ポテトは小さく微笑んだ。
「それに、あなたは『教皇』です。血肉や国ではなく、思想で繋がった世界の『王』であるあなたの力は、軽視できません」
「……なんだ。まさか、力を貸せと言うのか」
他者の力など全く必要でない、この世で最も強大だろうと思われる相手の台詞に、アルカンシエルは皮肉な笑みを浮かべてそう言った。
ポテトは真顔で頷いてみせる。
「ええ。そのまさかです」
アルカンシエルは絶句した。
「ご主人様が言っていました。人の世は、人の理の中で治めなくてはならないのだと。……私もそう思います。そして、魔女の力も、私の『現象』としての力も、人の理から外れたものです」
「……」
「そんなもので世の中をかき混ぜたり、破壊しようとするのは……あの方の思いを踏みにじることになるのでしょう。だから、私も出来うる限りはその方針に従おうと思うんです。人の世を変えるのも、動かすのも、確かに人の子そのものなのでしょうから」
しみじみと言う相手を見守って、アルカンシエルは「なるほど」と呟いた。

「それで、儂の力、か」
「ええ。……そして、あなた方の力ではどうにもならない、人の理から外れた力が行使される時、私も同様に私の私たる力を行使します。『郷に入りては郷に従え』と『目には目を』ですね」
「……一つ言っておくがな、悪魔よ。『目には目を』の言葉は、本来、『汝がふるう暴力と同じものを汝にも与えるから、相手を害するようなことはするな』という戒めなのだぞ」
「知っていますとも」
ニコニコと笑う相手を懐疑的な目で見つめて、アルカンシエルはもう何度目かわからないため息をまた一つ落とした。
「……つまり、貴様の話をまとめれば……貴様の同族が、この国でなにやらコソコソしているということなのだな？」
「少し違います。コソコソしていた、のです」
過去形で言われて、アルカンシエルは訝しげに眉をひそめた。
「……していた、ということは……今はいないということか？」
「おそらくは。……というのも、どういうわけか上手く感知できなくなったんですよ。気づいた時には逃げられてしまった、といった感じですかね。もっと早く気づいて対処していれば……」
ふと、言いかけた言葉を不自然に句切って、ポテトは何かを振りはらうように首を横に振った。
その様子にアルカンシエルは眉をひそめる。
「……？　気づいて対処していれば、どうした？」
いえ、とそれに答えて、凄絶な美貌の主は少しだけ暗い笑みを浮かべた。
「……もう終わってしまったことですし、どうしようもないことですから、気にしないでください。……落とし前はいつか必ず、相手につけさせますから」
そう言って、ポテトは音もなく床に降り立つ。
浮くのをやめたその足下に、一拍置いてからじわりと影ができた。
「いずれにしても、これから先のことについて、あなたとはじっく

り話さなくてはいけません。『頑強なる裁判官』殿には先にちょっと説明させてもらったんですけど、教皇であるあなたの力が借りれれば安泰ですから」

「……ルドゥインの姿が見えなかったのは、やはり貴様の仕業か」

光の降り注ぐ中央部へと歩きだす悪魔の背に言葉放つと、クスリと小さく笑われた。

「本当はね、最初にあなたに話をもっていこうと思っていたんです。きっと、新しい王弟くんはあなたに会いに来るでしょうから。でも、あなたは忙しいから、それを補佐する人が必要だなと思っていました。そうしたら、ちょうど裁判官殿がいたわけです」

「……なにを企んでおるのかは知らんが、あまり人の世をかき混ぜるなよ」

「かき混ぜようとしているのは、私ではなかったんですけどね」

どこか苦笑めいた声でそう嘯いて、美しい悪魔は光射す場所で振り返った。

「けれど、私は見つけてしまいました。気づいてしまいました。手に入れてしまいました。……昔からずっと探していた、大切なひとのための未来への鍵を」

その言葉の本当の意味は、アルカンシエルには分からなかった。

もしここに小さな王女が居たなら、人ならざる者の言葉の意味に気づけただろう。

だが、アルカンシエルはポテトの望みを知らない。だからこそ、気づけなかった。

「私は、先にも言ったとおり、人の理から外れた力でもってこの国をかき混ぜたりはしません。誰かがそれを成そうとすれば、それを排除するために力も尽くしましょう。いずこかへと逃れた、私の同族がまたこの国に手を伸ばしてきたら、その国を滅ぼしもしましょう」

だから、とポテトは言葉を続けた。

差し込む光の中で、深まった影が亀裂のように笑う。

「だから、あなたの力をあなたの愛する家族のために貸してください。来るべき時、来るべき未来で、あの方とあの子の両方を生かすために」

膝の上に抱いていた猫が、ほんのわずか身じろぎした。

上品なアイボリーでまとめられた室内は、箱形の馬車とはいえ、王族専用ということもあって驚くほど広い。

布張りの室は前と後ろに椅子があり、大人が三人ずつ乗ってもまだゆとりがある。天井は高く、座ったまま上に手を伸ばしてもかろうじて指先が触れるかどうかといったところ。椅子は弾力と厚みがあり、悪路でさえなければ快適な乗り心地を約束してくれていた。

長距離を動くことを考えてか、室内にはくつろげるように大きなクッションが設置されている。柔らかなそれの中に香草を仕込んでいるのだろう。室内にはほのかに優しい匂いが漂っていた。

大きめにとられた窓には、美しい模様のレースカーテン。降り注ぐ日差しをやんわりとくるみ、室内を柔らかく照らしていた。

乗客は三人。

典雅な衣装を纏った青年が一人と、従僕らしき服を着た男女が一組。

カーテン越しに窓の外を眺めていた青年は、ふと視線を上げ、何かを探すように虚空を見つめた。

そうして、自分の向かい側でひっそりと息を殺すようにして俯いている一組に視線を向ける。

「今、何か、頭の上を撫でていったような感じがしなかったかな？」

視線を向けられた者のうち、メイド服の女は俯いたままピクリとも動かなかった。かわりに、その膝の上の猫がペタンと一度だけ尻尾を動かす。

返事をしないメイドの代わりに、その横に座っていた初老の男が顔を上げた。灰色がかった白髪に、目にかぶさってしまうような同色の眉毛。ヒゲはなく、深い皺のある口元が動いて、穏やかな声が

青年の問いに答えた。
「……おそらく、探索の魔法でしょう。殿下がもっていらっしゃる『生命の加護』が、その探索を妨げたのでございます」
青年は「ふぅん」と気のない相槌を打つ。
興味が無いというよりも、よく分かっていないといった感じの声だった。
「私にはよく分からないけれど、今の『探索』というのは……例えば、私の情報を持って行かれてしまうような感じなのかな？」
「……殿下に『生命の加護』がなければ、そのような形になったものと思われます。魔法の範囲内であれば、どこに誰がいて、その人物がどのような姿形をしているのか、瞬時に把握してしまうのが『探索』の魔法でございますれば」
穏やかな声は老執事にありがちな声色で、その容貌もまた、特徴的であるように見えてどこかで見たことがあるような凡庸なものだった。
そのせいもあってか、目の前でこうして会話をしていながらも、青年には初老の男の印象がよくわからなかった。ひどくぼんやりとしていて、記憶の中に残らないのだ。
横に座っている俯いたままのメイドのほうが、そういう意味ではずっと印象的だろう。だが、こちらは馬車に入った直後から一度も身動き一つしていない。まるで人形のように椅子に座ったままだ。
「その魔法というのは、いったいどれだけ離れていれば大丈夫なのかな……？」
初老の男は軽く顔を上げ、虚空に漂う何かを見極めるような間をおいてから青年を見た。
「……おそらく、今の規模程度でしたら、王都からかなり離れた場所に行けば相手の魔法範囲内からは脱出できるでしょう」
「……その言い方だと、相手は全力では無い、ということなのかな。今の規模程度、ということは」
「左様でございます」

頷いて、男は古の伝承を語る長老のように厳かに言った。
「ひとたびその力を解放すれば、国一つを完全に消滅させることのできる『相手』です。この数日間で行使された魔法の力たるや、知覚さえできれば列国の魔術機関は騒然となることでしょう。……けれど、周辺諸国は何も気づいていないに違いありません。わたくしも、この地に在って件の『探索対象』とされていなければ、かの強大なる力に気づくことはできなかったことでしょう。それほどまでに、卓越した技量を持って魔法の痕跡を隠しきっているのです。……この『魔法』の使い手というのは、そういう相手です」
言われて、青年は「ふぅん」とまた呟く。
今度は何かを考えるような色を含んだ声だった。
「それは、あの男だね？　麗しい女王陛下の傍にいた、恐ろしく美しい男」
「……はい」
どこか畏怖に震えるように、けれど歓喜を押し隠すように、初老の男は口元に亀裂のような笑みを浮かべて頷いた。
「かの者こそ、わたくしが長年探し求めていた相手……我らが血統において、唯一完全なる『神』の力を継承した者でございます」
「……」
「十三年ちかく前……ようやくこの国にいると探り当て、貴族の中に密かに潜り込んでみれば、件の者は入れ違いのように国を出てしまっておりました。あれから十二年と少し……やっと、彼の者の姿を見ることができました。あれが……あれこそが、人々より最大の畏怖をもって名前すらつけられることなく目を背けられ続けていた『恐怖』の具現者……」
己の震える掌を見つめ恍惚とした表情で語る男を見やって、青年はコツコツと御者台に合図を送った。
「速度を上げてくれ。早くこの場から離れるように」
「（……かしこまりました）」
分厚い壁の向こう側から、馬車を駆る御者の答えが返る。

それに薄く笑って、初老の男は静かな表情をしている優美な青年を見上げた。
「殿下。恐れられることはありません。殿下には、生命の樹と水の加護がおありです。彼の者がいかに強大であろうとも、対極の力に守護された殿下には届きにくい。……であればこそ、わたくしも殿下の加護のおこぼれに預かって、かの者の探索から逃れることができているのです」
その言葉に、青年は少しばかり苦笑じみた笑みを零した。
「私が馬車を急かしたのは、別にあの男が恐ろしいと思ったからではないよ。ただね、私もやはり男だから、同じ会話をする相手なら、今の君の姿よりもそちらの美しい女性の方がいいのだよ。君が未だにその人形の姿で私と話をするのは、あの男の魔法とやらが強いからだろう？　見つかってしまわないように、そんな風にしているのだろう？」
「左様でございます」
くすくすと笑って、人形と呼ばれた初老の男は横に座る女性を見た。
「こちらの姿では、いくら加護をもつ殿下のお側にあっても、かの者の魔法につかまってしまうことでしょう。わたくしも、彼の者を初めてこの目で見るまで、あそこまでの存在であるとは思いもよりませんでした。あれは、確かに人の力でどうこうできるものではありません」
「『魔女』である君でも、ダメなのかな？」
「真正面からぶつかって勝てるような相手ではないのですよ、殿下」
意味深な笑みを浮かべて言う男に、なるほど、と青年は頷いた。
「だから君は逃げることにしたわけだ。十二年以上この国に潜んでいたのに」
その言いように、けれど男は不快に思うどころかにこやかに笑って頷いた。
「仕方がございません。力量で負けている者が、相手の力場（フィールド）で戦っ

て勝てるはずがありませんから。勝利とは、負ける可能性を全て排除した先にあるべきもの。……ならば、まずは相手の力を見極めることからはじめるべきでしょう」

「……先の長い話だね」

呆れたように言う相手に、初老の男は笑みを深める。

「そうでもありません。此度のことで、あの男の力はだいぶ絞れました。何が出来て、何が出来ないのか。どれが出来て、どれが出来ないのか。それを知っているのと知らないのとでは、まるで違います。……あの男は、確かに単体では最強でしょう。ですが、あの男には弱点が多い……」

「……弱点？」

青年は興味を惹かれたように目を輝かせた。

男は笑みをさらに深めて頷く。

「あの者は、人に執着しているのです。人に執着した時、魔女は死に至ります。かの者は確かに『現象』であり『神』であり『悪魔』でありますが、同時に万物の頂点に立っていた『魔女』の血統でもあります。……その血が、いつかあの者を害するでしょう」

「……よく分からないが……」

正直にそう言って、青年は首を傾げた。

「すくなくとも、伝承にあるような完全無欠な存在では無いんだね？」

「ええ。わたくしは運がいい……あれだけの弱点をもつかの存在と相対するとは……。これならば、わたくしの力が遠くかの存在に及ばなくても、わたくしはあの者を殺めることができるかもしれない。……人の子達を使って」

笑みを浮かべ続ける男を見やって、優美な青年は少しだけ困ったような顔で言った。

「けれど、それならなおのこと、君はこの国に残って策を巡らすべきではないのかな？　他国に行ってしまえば、難しいと思うけれど」

「策ならば何通りでも」

さらりと言って、男は小さく笑った。

「あの国にあった間に、仕込んでおりますれば。それに、今はわたくしが『私』であることに気づいていないでしょうけれど、あの者の力をもってすれば、いずれ遠からず『私』にたどり着くはずです。なら、束縛されぬうちに逃げてしまうほうが得策でありましょう。……それに、十二年以上あの国に潜んでいた甲斐はありました」

「今回のドタバタのことかな？」

嬉しそうな男を不思議そうに見やって、青年はどこか不満げに首を傾げた。

「あの程度の騒動、どうということもないだろう？　お家騒動など、どこの王家でもあることだ。未然に防ぎきったのだから、むしろ他国からの評価も高いだろう」

「けれど人の心に、深い傷が残りました」

嬉しげに言う相手に、青年は沈黙する。

「王に近しい人の心に、深い傷が残ったのです。それに、あの騒動によって人々の心に小さな野心がいくつも芽生えています。さらに、あの騒動の中で、彼の者は魔法を使いました。人のために使ってはならない魔法をあの男は使ったのです。それがどれだけ稀少で、どれだけ危うい行為なのか……それが理解できるのは、あの者と同じ『魔女』たるわたくしぐらいなものでしょう」

男は沈黙している青年に、喜びを持って告げた。

「ほんの数人の心を言葉で煽っただけで、あれだけの結果が出たのです。それに、騒動というものは、後の世にいくつもの連鎖を引き起こします。これからが楽しみではありませんか。あの国はいずれ、人の心によって荒れ、争乱を引き起こすことでしょう」

「……そうしたら、麗しい女王陛下は悲しむんだろうな」

優美な青年は俯きながらそう呟く。

その口元には、なぜか恍惚とした笑みが浮かんでいた。

「……それは素敵だね。あの方の打ちひしがれた姿を見れるなら、私は馬車数台分の黄金だって用意するよ」

「ふふふふふ。さすがです、殿下。あなたがそういう方でなければ、わたくしもあなたを選びはしなかった」

嬉しそうに言った男の頭が、その時、カクンと落ちた。

人形のように動きを止めた男のかわりに、メイドの膝に座っていた猫がゆっくりと体を起こす。黒い艶やかな毛に鮮やかな蒼い瞳の猫は、ピンとヒゲを前に向けて口を開いた。

「あなたはいつだって純粋なんですもの。純粋に好意を向け、純粋に相手の美しさを称え、純粋に相手の悲哀を喜ぶ。子供のように、とても残酷で純粋な人」

初老の男であった時とはまるで違う、どこか婉然とした美しい声。猫の声帯に近いのか、少しばかり丸まった舌足らずな口調だが、それは明らかに女性の声だった。

「あなたが用意してくれたものも、とても役にたちましたわ。あんなものが凶器になるだなんて、うふふ……この世は、魔法なんてなくても、いくらだって危険なものなのですわ」

「今度は猫が話し相手なんだね。私はいつになったら、そちらの女性と話せるのかな？」

「今よりもう少し、魔法の届かない場所まで行かなくては駄目ね」

笑い含みに言われて、青年はコンコンコンと御者台の方を叩いた。すぐさま速度を上げた馬車の音を聞きながら、悪戯っぽい目をしている猫を見下ろして肩をすくめる。

「君が言っているのは、中庭で起きたという騒ぎのことだろう？私は魔法なんてわからないし、粗暴な連中が何を武器にしようとするのかなんていうのも想像つかなかったけどね。話を聞いて、あまり美しいやり方ではないと思ったよ。相手はなかなか麗しい青年だという話なのに、あんな方法では顔が潰れてしまうじゃないか」

「あらあらあら」

非難を込めて言う青年に、黒猫は面白そうに目を細める。

「それなら、由緒正しい剣での決闘がお好みかしら？　けれどそれは、舞台を整えるのがとても難しいわ。己を隠すのなら、いくつも

の偶然を作り上げなくては」
「例えば配置を指示したり、相手を言葉で導いたり？」
「そうそう」
よくできました、と言わんばかりに頷いて、黒猫はくるりと尻尾を自分の足下にまわした。
「けれど、ついやりすぎてしまうのよね。焦ってはダメだわ。あんなに早く動いてしまうだなんて……頭が良すぎるのも考えものね」
「……？」
その言葉の意味は分からず、青年は首を傾げた。
黒猫は「うふふ」と笑うばかりで、それについては答えない。
「けれど、ねぇ？　王子様。しばらくは何もしなくても、勝手に人が動いてくれるでしょう。わたくし達は、黙って様子を窺っていればよいの。下手に関与しようとして、相手に気づかれてはダメよ？」
「……近くにいないと、あの人の悲しい顔は見れないな」
「いけない子。でもねぇ、考えてもみて？　あの者がいなくなれば、きっとあの女王は悲しむわ。今だって悲しみを堪えてがんばっているのかも。なんだか我慢強そうな感じがしたもの、彼女。いつかきっと壊れてしまうわ。そうしたら、あなたの好きなようにできるわよ？」
「それは素敵だね」
魅惑的な言葉に、青年は爽やかに笑った。
「できればその時には、クラウドール卿にも昔みたいな人に戻ってほしいな。久しぶりに会った彼は、なんだか暖かくなっていてちょっとガッカリしたんだ。彼には、憂い顔が一番似合うと思うのに」
「ひどい子ね。人の幸せがそんなにいけないのかしら？」
「幸せになってくれるといいと思うよ。誰もが幸せだといい。けれど……人には一番美しく見える表情というのがあるはずだよ。それが、あの二人の場合は悲しげな顔だというだけのことだよ」
嬉しそうに語る相手の歪んだ視界に、黒猫はただ亀裂のような笑みを浮かべた。

「それでこそ、わたくしの同盟者だわ」
「ふふ？　魔女である君にそんな風に言われると、少し自分が強くなったような気がするね。あぁでも……彼を元に戻すのは簡単なのかな。新しいあの小さな王女。彼女を消してしまえば、戻りそうな気がするよ」
「あぁ、あの小さな、可愛らしい妹姫様」
何を思いだしたのか、ふいに楽しげにクスクス笑って、黒猫は尻尾でペチンとメイドの太腿を打った。
「確かに、あの妹姫様がいなくなれば、クラウドール卿は壊れてしまうでしょうね」
「だろう？　どうだろうか？　君の力で、彼女を消してしまえないかな？」
「あらあら。あんなに優しく紳士的に対応してあげていたのに、目的のためには手段を選ばないのね？」
クスクスと互いに笑いながら、一人と一匹は楽しげに目を煌めかせる。
だが――

「けど、ダメよ？　あの子はダメ。わたくし、あの子のことを気に入ったのですもの。あの子は、いずれわたくしの『従者（サーヴァント）』にするの。だって、とてもカワイイのだもの」
あっさりと拒否されて、青年は残念そうにため息をついた。
「『従者』というのは、その人形のことだろう？」
彼が示したのは、俯いたまま動かなくなってしまった初老の男だった。
言葉通り、人形のようにただそこに座っている。
「ええ。わたくしの従者。わたくしの力を分け与えた、わたくしの下僕（しもべ）。わたくしの人形。……あらあら。そんなガッカリな顔をするものではなくてよ？　自我を完全に無くさせてしまえば、消してし

まうのと同じことではなくて？」
「そうだね……。うん。それに、生きているのに生きてないみたいな状態は、きっととても辛くて悲しいに違いないね」
何を想像したのか、とても嬉しそうに顔をほころばせる相手に、黒猫は一瞬だけ苦笑を零し、すぐに満面の笑みを作って頷いた。
「そう。悲劇を生み出すのは、いつだって人の心なの。愛おしく思えばなおのこと、愛した気持ちの分だけ人は絶望と慟哭を覚えるの。……楽しみではなくて？　その時が」
「楽しみだね。早くそうなればいいのに」
爽やかに笑ってそう言う相手に、黒猫は膝の上に丸くなりなおしながらピコッと片耳を動かす。
「そのためにも、今はのんびりと傍観しておきましょう。一年、二年……周りの国を巻き込んで、ゆっくりと策を進めていけばいいわ。楽しみは長いほうがいいもの。そのためには、あなたの国は近くていいの。だって、バルディアはナスティアのお隣さんなんですもの」
その言葉に、バルディアの王太子は華やかに笑った。
「それに、年数が経てば私も王位を継いでいるだろうしね。そうしたら、今よりも出来ることが増える」
「楽しみね」
「あぁ、とても楽しみだよ」
彼は笑い、そうして、ふと思い出したように丸まってしまった黒猫を見下ろした。
「ところで、私は君をなんて呼べばいいんだろう？　魔女？　それとも、君が今まで使っていた名前かな？」
黒猫は答えない。
深く俯くようにして座っているメイドの黒髪が、馬車の動きにあわせてサラサラと揺れていた。
「……そうね」
その唇から、その時初めて静かな声が零れた。
白い面が上がり、美しい貌が露わになる。

鴉の濡れ羽のような艶やかな黒髪と、美しい蒼の瞳の美女だった。
お仕着せのメイド服なのが、実にもったいない。
「せっかくですもの。今までどおりの役を演じたいと思いますわ、殿下。私を侍女としてお雇いくださいな。そうすれば、いくらでもナスティアと繋ぎがとれますし、つじつま合わせも用意ですから」
「じゃあ、そうしようか」
嬉しそうに笑って、王太子は相手の美貌に目を細める。
愛する女王陛下が十一人目の姫君を養女にした時、その傍らにあった美しい女性。初めて見たあの時から、全く年をとっていないように見えるその麗しい魔女に、彼は心から満足して言った。
「じゃあ、これからもよろしく頼むよ、フェン。……私達の、大切な望みのために」

？　■■■■■■■・■■ナディ

時は遡る。
現在は未来となり、過去は現在となる。
――それは一人とヒトリしか知らない物語。

※　※

※　※　※　※

どこか無機質な光が灯る部屋で、彼は簡素なベッドに寝転がっていた。
両手を胸の上で組み、目を瞑っている姿は、すでに永遠の眠りについた後のようでもある。
ゆっくりと闇が世界を覆う中、密やかに部屋に忍び込んだ影は、その姿に一時だけ静止した。
ほんの少し躊躇したような、少しだけ何かを待ったような、わずか一瞬だけの動作。
その刹那、静かな室内に声が流れた。
「……また、か？」

唐突にかけられた短い言葉に、けれど侵入者は驚かなかった。
相手の放つ力無い声は、無関心さの表れだ。言葉を省略されているので分かりにくいが、こう言いたいのだろう。『また来たのか』と。
もしくは――『またお前か』と。

「また、と言われましても。まだたったの……八度目ですよね？」
「……それのどこが『たったの』なんだ……」
ベッドに転がっていた青年――アルトリートは、ぼやくように呟き、ゆっくりと体を起こした。
そのままぼんやりと部屋を見渡し、何かを確認する。
部屋の中は、彼が目を閉じた時よりも紋章珠（あかり）による明暗がハッキリとしていた。
――夜が来たのだ。

数秒だけその様子を眺めていたアルトリートは、音もなく現れた侵入者に視線を向ける。
どうでもよさそうな顔で言った。
「……ボクに、まだ何か用なのか？」
その声に、影――ポテトはゆっくりと床に降り立った。

実際に降りた瞬間よりも後に、コトリ、と思い出したかのように音が主を追う。珍しく、『無（し）』に呑まれなかった音があったようだ。
（……影響力に、乱れが生じていますね……）
その音に、常なら均一に制御している力が、ここにきて不安定になっているのを感じた。それはすなわち、強大な力をコントロールしきれていない、ということだ。
（少し、魔法を使いすぎましたか……）

ここ最近を思い出し、ポテトはほんのわずか、自嘲した。
強すぎる力は災いを呼び寄せる。
魔法というものがお伽話にしか存在しなくなって久しい今、一つの魔法を使うには、三つの『目隠し』魔法も同時に使わなくてはならなかった。
だが、ポテトにとって魔法とは諸刃の剣だ。
自分の気分や感情だけで行使するものならばともかく、そうでないものは臓腑を灼き、血肉を食い破る。それを押して使い続けた結果が、今の状況だ。
（……ですが、これで最後です）
ポテトは前に座る青年を見下ろした。
死刑囚を閉じこめるための『西の塔』。牢の中で最も厳しい警備のここに、ポテトは何度も足を運んでいた。
正規の手続きをとった訪問で無いことは、アルトリートにも分かっているのだろう。
それどころか、常識的な手段ですらない。
そのことに慣れつつある己を自覚してか、アルトリートはなんとも言えない嫌そうな顔をした。
「……あんたは、よほど暇なんだな」
そうかもしれないと、ポテトは思った。
あちこちに分身をばらまいたり、気になる気配を魔法で探ったりとなかなかに忙しいのだが、その一方で間を見つけてはここに来てしまうのだから、自分はきっと暇なのだろう。
（暇……暇つぶし、ですか……暇つぶし……ダメですね。これでも発動の条件にはならない……）
魔法を構築する様を一瞬だけ想像し――倒れる自分を予知して嘆息をついた。
自分のためだと心底思えなければ、全ての魔法は破壊の刃を生む。
――まだ死ねない。その思いがあるうちは、危険を冒すことはできなかった。

「それなりに期待してたんですけどね……」
「……いい加減、人の話を聞く気がないのなら、来るのをやめてくれないか」
思わずぼやいたポテトに、少しだけうんざりしたようにアルトリートもぼやく。
ため息は、何故か同じタイミングだった。
「なんというか、どうしてこう……諦めのいい人はとことん諦めがよくて、諦めが悪い人はとことっとん諦めが悪いんでしょうねぇ……」
「せめて最後に何しに来てるのか説明しないか？　……正直うんざりしているんだが」
「いえもう、なんていうかね……ああでも、時間がもうあまりないですから、どうやっても最終手段なんでしょうね」
「……いい、もう……帰れ」
とことんかみ合わない会話に、アルトリートは脱力して手を振った。
今は夜。
朝になれば、最初で最後の朝陽を拝むことになる。
――明日が、処刑日なのだ。

「バルバロッサ大神官から処刑の日時については聞いている。おそらく、おまえ達が警戒していただろう暗殺者も、もう来ないだろう。……最後の夜ぐらい、一人で過ごさせてくれ」
「……あやや。あなたはちゃんと気づいてるんですねぇ」
「暗殺者のことか？」
ポテトの言葉を鼻で笑って、アルトリートは秀麗な顔立ちを歪めた。
「あの公爵のことだ。消しに来るのが当然だろう。屋敷の中に隠れてた奴等のうち、何人がボクを消すための者だったのか……もしか

すると、全員なのかもしれないな」
よく理解しているな、とポテトはやや皮肉な思いで苦笑した。
アルトリートは決して馬鹿ではない。
ある意味においては愚かだったが、頭が悪いわけではないのだ。
けれどいつだって、人は同じものに気づき、同じものを見ているわけではない。
視点の違い、考え方の違い、思いの違い、過去の違い。数多くの相違によって、まったく違うものを見、別のものに囚われ、視野を狭めたり広げたりする。
アルトリートの視界は、貴族として正しく、王族としても申し分ない。
けれどたった一つ、彼の半身とも言える人に関することだけが、彼の視る世界を極端に狭めてしまったのだ。
「……あなたの大親友くんは、ちっとも気づいてないんですけど」
「……。――あの馬鹿と一緒にするな」

一瞬だけ思考を止め、けれどすぐに力無く吐き捨てた相手に、ポテトはふと苦笑を浮かべ――次いで小さく嘆息した。

（……『足りる』でしょうか……）
そんなことを思った。
（……微妙なところですね）
答えはすぐに出た。
（けれどもう、方法があまり無い）
ポテトの思考は、ポテトにしか分からない。
見ている場所が違い、分かっていることが違いすぎるため、誰も彼の思考を理解できない。
ポテトはそれでいいと思っていた。『意味のある言葉』を口にすれば、世界に新たな変化が起きる。それは必ずしも良いものだけで

はない。
ポテトは頭の中にイメージを浮かべる。
組むべき術式。付加すべき事柄。それらを念頭において口を開く。
「『私は――』」

強い意志を乗せた声で。

「『――魔法を使えます』」

――言えた。

ポテトは思わず大きく目を瞠った。
それが意味するところは――即ち、実行の『可能』と『成功』の確立。
（……けれど）
その瞬間、わずかに胸が痛んだような気がした。
（それでは……）
望みの一つが叶うと分かっても、心が浮き立つことはなかった。
それは『術式』が正しく発動して成功を収めるというだけのこと。
『奇跡』を起こせるという事実を掴んだわけではない。
思わずジッと見つめてしまった相手は、なにやら気味の悪そうな顔で言った。
「……それがどうしたんだ？」
端正な顔立ちに、柔らかいがゆえにクルリと丸くなってピンピンあちこちに跳ねている癖毛。その髪を見て小さな『子魔女』が『クリンクリンさん』と呼んでいたのを思い出す。

（……この子が助かれば、あの子も喜ぶでしょう）

菫色の小さな幼子。すぐにそれは別の人の顔になる。非常に整った顔立ちの、いつもどこか憂い顔でいた愛しい名付け子。ずっと見守り続けていた愛し子の顔は、また違った人の顔になる。

……誰よりも愛しい、自分にとっての黄金の魔女。

まるで泉から水が溢れるように、次々に人々の顔が浮かんだ。

愛しい魔女と同じ血を持つ一番若い王弟。その王弟を守ろうとしている赤毛の勇猛な姫。愛し子といつの間にか友誼を結んでいたらしい、人間にしておくには惜しい巨躯の大神官。自分の父にどことなく似た、ちょっと間が抜けているぐらいお人好しの宝飾技師。

喜ぶ人は沢山いる。喜ぶ姿を見るのは楽しいことだろう。だからそれを思って口を開いた。

けれど――

「『あなたは――』」

――助かるでしょう、と。

口に出して、言えなかった。

誰かを操るための言葉遊びでなく、真っ直ぐに『＜起こりうる事実＞を語ろうとして口にできなかった言葉』は――絶対に『現実にはならない』。

本当のことしか口にできない、ということが、どれほど残酷なことなのか……分かる『人』はいないだろう。

――唯一人、もう一人の自分とも言うべき愛し子以外には。

（……嗚呼。だから嫌なんです）

この力が。

この在り方が。

自らを誤魔化すことも、騙すこともできない。希望を持つことなど決してできないこの特性に、どれだけ嫌な思いをしてきただろうか。

「……ボクが、なんだって？」

こちらの事情を知らないアルトリートは、ただ不審そうな目でポテト見ている。

ポテトは笑った。口の端を上げて。

あらゆる言葉を瞬時に頭の中に組み立てて、口にしようと意志をこめて、愛おしく思う人々が願うだろう沢山の『希望』を片端から試す。試す。試す。

唇が動いた。

いくつもの試算を繰り返して。

声が紡がれる。

「『あなたは』『明日』『死ぬでしょう』」

それは決して変えられない、世界が認めた『現実』だった。

※　※　※

※　※　※

「……そんな、最初からわかっていることを言いにわざわざ来ていたのか？」

不審そうな目から無関心な目に戻って、アルトリートは嘆息をついた。

ポテトはそんな相手をジッと見る。
アルトリートは知らない。今も、世界に対し、『可能な現実』を試していることなど。
「『けれど』『あなたの肉体は残ります』」
試して試して試して試して。残った結果を口にしながら、ポテトは（やはり）と内心でため息をついた。
最後にコレが残った。それしか残らなかった。
あとはただ、人の子が起こす奇跡にかけるだけ。
「契約をしませんか？　アルトリート・ジュダ・フォルスト・レンフォード。『あなたの死によって残るその肉体を使わせていただくかわりに、あなたの願いを一つだけ叶えましょう』」

※　※　※　※　※

しん、と牢の中に静寂が落ちた。
しみじみとこちらを見てくるアルトリートの目は、どういうわけか少しだけ呆れが含まれていた。
「……あんたは、よほど契約とやらを結びたいんだな」
「……別にそういうわけではないんですけどね」
なんだかそういう風に言われると、ちょっと今自分が頑張ってるのが悔しくなる。
「けれど、ちゃんとしておこうと思いまして。あなたの名前も、あなたの魂も、あなたの肉体も、他の誰でもないあなただけのものです。それを勝手に使うことはできないでしょう。だから、あなたの遺骸を使わせていただくのなら、あなた自身の承諾が必要なのです」
「……変な筋の通し方をするんだな」
「大事なことだと思いますけどね」

相変わらず呆れ顔の相手に、ポテトは少しだけ複雑な顔で言った。
「死んだ母が言っていました。人の死には最大の敬意を払いなさい、と。命ある者は、生まれた瞬間から死に向かって進んでいきます。決して踏みとどまることのできない道を、その先に死という断崖絶壁が待つのを知りながら、歩むのが定めなのです」
「……」
「生と死は、全ての存在にセットでついているもの。決して切り離すことができないものです。生を理解するということは、死を理解するということ。死を尊ぶということは、生を尊ぶということ。そして、最も生を理解しているのは、最も死を理解している者です」
その言葉に、今度はアルトリートの方が複雑そうな顔をした。
昔の記憶を引っ張り出してでもいるのか、眉間に皺を寄せてポテトをマジマジと見ている。
探していた記憶は見つかったのか。奇妙な顔になってしみじみと呟いた。
「……コレを夫に望んでるのか……」
「……なんです。その、どことなく哀れみの入った眼差しは」
「……単純そうに見える関係のほうが、実は複雑だったりするのかもな……」
「なに分かったような顔で言っちゃってるんですか。って、しかもそのまま眠ろうとします！？　そこ！」
「……あんたの相手は疲れるんだ……」
ごろりと力無くベッドに転がり、こちらに背をむけた相手に、ポテトは「はぁ～」と力一杯ため息をついた。
「あぁもう。どうしてこう最近の『人の子』は諦めが早いのと悪いのとが両極端になってるんでしょうかね！」
「……最初から希望なんて無いだろうが」
あっさりと言う相手のある意味揺るがない姿勢に、ポテトは半ば感心し、半ば呆れた。
背を向けたままでアルトリートは言う。

「最初から自分は死ぬと決めている。余計なことを言って惑わすな。……希望を与えるほうが残酷なこともあるんだ」

死を覚悟し、受け入れた瞬間に、人の心は不思議と凪ぐ。

だが、助かるかもしれないと思った瞬間に、その心は荒れ、他から見れば見苦しいほどに希望に縋りつくようになる。

だから惑わすな、とアルトリートは言っているのだ。

「……惑わそうと思って言っているのでは無いのですけどね」

なんとなく嘆息して、ポテトはふわりと浮き上がる。

実のところ、無の力を制限して地上に降りているよりも、中空に浮いているほうが彼には楽だった。

「魔法使いの『従者（サーヴァント）』というものをご存じですか？」

「……お伽話の世界だな」

「まぁ……今の時代ではそうですね」

頷き、ポテトは浮いている自分の真下を見る。およそ人の影とは思えない真円の影がそこにあった。ちょいちょいと指で招くと、影からぴょんと白い手が飛び出してくる。

手だけが。

「かつて古の『真なる魔女』が行った魔法の一つに、他者を己の従者に変えるものがありました」

手首のあたりで切断されたようなソレが、ちょこちょこと指で歩き出す。

「その者が本来持ち得ない強大な力を与え、己の魔法行使権の一部をも貸し与え、全ての基礎能力を飛躍的に上昇させる魔法……その魔法で作られた存在を、魔女の『従者（サーヴァント）』と呼びます」

「……魔女のためにある召使い、というやつか」

「ええ」

頷いて、ポテトは軽く笑った。

「無敵に近い力と、永遠に近い寿命を得ることばかりが伝わって、その本当のおぞましさが伝わることの無かった魔法です。……知っていますか？　人の記憶とは、その血肉にも宿るのだということを」

器用に指で歩いていった手首は、簡素なベッドによじ登る。
「人の血肉に宿った記憶は、その血肉が変化することによって千々に千切れ、変化し、時に消滅します。人の魂は肉の器に宿るもの。その者が本来持ってはいない強大な力を与え、肉体を変化させれば、それに引きずられるようにして魂はあっという間に別のものへと変化します」
アルトリートは口を挟まない。
ベッドに登りきった手首は、じわじわと獲物を狙う狩人のように用心深く、その背中へとにじり寄って行った。
「血肉に宿る記憶すらも失い、魂の形すらも変わってしまったそれを……変化が起きる前の人物と『同じ』としてとらえることなどできません。血肉は闇の領域。私はその領域を支配する者です。人によっては、原初の神の力と呼ぶ者もいます。ですが、そういった『現象の力』を行使しても、それを防ぐことはできません。――人の魂とは、脆く儚いもの。器を変えれば、必ずその魂は変化する。……転生と呼ばれるものの原理です」
ポテトは言葉をそこで区切り、アルトリートの背に近づく手首を見つめながら、ゆっくりとした口調で告げた。
「『従者（サーヴァント）』となった者は、それまでの者とは別人になります。その記憶も思いもなにもかもを失って、ただ魔女の命令に従う召使いになる。――それが、魔女の従者と呼ばれる者の本当の姿です」
それを知らずにこの魔法を受けた者は、魔女の意のままに動く人形と化すだろう。
魔女は魔女のためにしか魔法を使えない。
魔女の分身ともいえる従者は、その身そのものが魔女のためのもの。そのため、魔女はこの従者のためには魔法を使えるし、従者は『真なる魔女の呪い』を受けることなく、己の主である魔女から貸し与えられた魔法を使うことができる。
魔女にとっては、これ以上ないほど優良な道具。
だが、従者となった者は――ただ、消滅し、操られるだけの哀れ

な奴隷だった。
「あなたは明日、死を迎えることを承諾した」
相手が言葉を理解するのを待ってから、ポテトは言うべき言葉を続ける。
「その死の後にこの世に残される肉体を私に貸し与えてくださるのでしたら、私はあなたに誓いましょう。来るべき時、来るべき場所で私の願いのために働く『従者』となる代わりに、『従者』に与える命令の第一項にあなたの願いをもりこむことを」
手首は「ぐっ」という感じに指に力を入れた。跳躍するタイミングを狙っている。
アルトリートの身体がわずかにこちらを向いた。
「……それは、つまり、死んだボクの体が亡者(ネクロ)となって、あんたの手下になるということか」
「ええ。そのかわりに、その体はあなたの願いを叶えるでしょう」
ポテトの言葉に、アルトリートは皮肉げな笑みを浮かべた。
「願いと言っても……」
その瞬間、手首が跳ねた。
「うわ!?　ああ!?」
ピョンッと飛び上がった手首は、そのままアルトリートの視界を横断し、向こう側にペタンと落ちる。
すぐさま指で方向転換するソレに、仰天したアルトリートが跳ねるようにして逃げた。
「なんだコレどわッ!?」
「……まぁ、狭いベッドで逃げようと跳ねれば、普通、床に落ちますよねぇ……」
見事に肩から床に落ちたアルトリートに、空中に浮いたままポテトはしみじみと嘆息する。
手首はベッドの端ににじり寄り、そこから床に落ちたアルトリートを狙っていた。
「なんだソレは!」

「『手（ハンズ）』です」
「見ればわかる！」
痛む肩を堪え、じりじりとベッドから距離をとるアルトリートに、ポテトはやや面白そうな顔になって言った。
「ですけどねぇ、本当に『手（ハンズ）』と呼ばれる生命体なんですよ。ちなみに、彼女達は通称『魔導人形』と呼ばれています。生きた血肉ではなく、人形に人の魂を宿らせたもののため、『従者（サーヴァント）』とは定義が異なりますが、どちらも等しく『魔女』に仕える者です」
「彼女『達』！？」
その言葉に不吉なものを感じ取ったのか、アルトリートはバッとポテトの方を振り返った。
宙に浮いてるポテトの下、なぜか真円の影から、わらわらと白い指が出ている。
――と思ったら引っ込んだ。
「……おや。見つめられて恥ずかしかったようですね」
「！！！」
総毛立って影を指さす相手に、ポテトはクスクス笑った。
「彼女達もまた、己の過去をほとんど知りません。取り出された魂が新しい器に入るとき、器が魂の形に引きずられて変化しないよう、忘却の魔法をかけられているからです。『従者』の魔法とは逆ですね」
声もない相手を見つめながら、（ならば）とポテトは思う。
もし、処刑された後の肉体を『時間を止め』『従者化』する時、魂に忘却の魔法をかければどうなるのだろうか、と。
真っ新（さら）になった魂は、最初から形を持っていない。変化した器によって引き起こされる魂の異形化は、忘却の魔法で防ぐことができる。
では忘却の魔法で失ったはず記憶が、後に蘇ることがあるのか、

と自問すれば、ある、という答えを口にすることができるだろう。
無論、確実ではない。千人に試しても一人いるかいないかの確率だろう。だが、それでも「ある」と口に出して言うことができる。
なぜなら、現に一体、実例がいるのだ。
そう――目の前に。
「彼女達の力は、一体一体では微々たるものです。もともと魔女の世話役として創られた生命体ですので、他者を害したり何かを守ったりといった行為は不得意です」
ベッドの上、かつての己を取り戻した唯一の『手（ハンズ）』は、うなずくようにグッと握り拳を作る。
「ですが、意識の共有化により一人が知った情報を全員が所得したり、小柄である身体を生かしてどこにでも忍び込んだりできます」
アルトリートが愕然とした顔で「小柄……」と呟く。
小柄だろう。なにせ手首から先しか無いのだから。
「彼女達も『従者』の配下となります。その力を用いれば、できることも増えるでしょう。……あなたの望みを叶えるのには、好都合かと思いますが」
ポテトの言葉の後、『手』がピョンッと飛び上がり、アルトリートの身体が反射的に逃げた。『手』はそのまま真円の影までチョコチョコと指で歩いて行く。
「……」
しばらくそれをジッと眺めていたアルトリートは、『手』が影に飛び込んで消えるまでを見守ってから、深い深いため息をついた。
そうして、のそのそとベッドに戻る。
「……おや」
先ほどまでのやりとりなどなかったように、ゴロンと寝転がる相手に、ポテトは軽く小首を傾げた。
「心が動きませんでしたか」
「……今のでどうやったら心が動くんだ……」
「死後の世界に望みを託せれる、というのは、それなりにいいこと

だと思うのですが」
「……そもそも、願いが無い」
「……ほほぅ……」
ゴロンと背中を向けた相手に、ポテトはふわふわと近くまで漂う。
真上からのぞき込むと、イヤそうな声を上げられた。
「……なにより、あんたに何かを願っても、あんまりいいことにならない気がするからな」
「そうハッキリ言われると、私でもちょっぴり傷つくんですが……」
ポテトは横向きに転がっている相手をしばらく見つめ、やがて荷物に乗っかるかのように相手の頭の上に座った。
足を組んで何かを考えているかのようなポーズ。
「……おい」
尻の下から抗議の声がかかったが、もちろんキッパリと無視した。
「あなたは何かを残したくてイロイロやってたんじゃないんですかね？　女性関係が派手というか節操なかったのだって、正直、家族が欲しいなとか温もりが欲しいなとかつながりが欲しいなとかそんなんでしょうに」
「……尻をどけろ」
「それを考えたら、死を迎えた先にあるものを確実に手に入れられるというのは、それなりに悪いことじゃないと思うんですよね。魔法まで使えるということは、望みは一気に叶えられやすくなります。まぁ、世界を滅ぼせとかだったら叶えられませんけど」
「……尻をどけろ」
「あると思うんですよ、あなたには。叶ってほしいと思う望みが。ちょっぴり過保護すぎというか執着すぎというか家族愛もそこまでいくとどーなんだろうな、って他人様からは思われてしまうぐらいアレな感じはしますけれども」
「……尻をどけろと言っているっ」
「しょうがないですよねぇ家族ですもの。一番繋がりの強い家族で親友で幼なじみっていったら、相当な思い入れでしょうに。おまけ

に年下でちょっと残念なぐらいお人好しで勉強不足な子だったら、オニーサンは一生懸命にならざるをえないんでしょうねぇ。私、末っ子なんでその辺りサッパリですけど」

全然人の話をきかない男に焦れて、アルトリートは叫んだ。

「尻をどけるのが望みだと言っている！」

「誰かさんが死んだあと、幼なじみ君はどうなるんでしょーねぇ？」

声に声を重ねるようにして言われた言葉に、一瞬、アルトリートの呼吸が止まった。

その瞬間に聞こえた心の声に、ポテトはくしゃりと笑む。

（願いましたね）

心の声は、嘘をつかない。

だから届く。あまりにも真っ直ぐな、強い思いであるが故に。

（これならば『足りる』でしょう）

奇跡を起こすのは、いつだって『人』だ。

強い思いだけが天を動かす。

だから――

「……では、それを叶えましょう」

声と同時に、ふわりと浮き上がった。

慌ててアルトリートが身を起こし、空中で足を組んでいる男を見上げる。

「なんだ、『それ』と言うのは！　……いや、尻をどけたから、それが『それ』か？」

「……いやー……お尻をのっけたのはただの嫌がらせといいますか、お茶目といいますか、魔力接触による術式の感応力試験のついでといいますか……」

「……要するに嫌がらせだろうが」

げっそりとした相手をにこやかに見守って、ポテトは大気に魔力を少しずつ溶かした。

大きな魔法を使うのならば、準備もまた念入りにしなくてはならない。

（さすがにこの魔法を使えば、いらぬ騒動を招きかねませんからね……）

常ならば三つ程度で済むだろう隠蔽の魔法も、今回は十倍に。その内側で空間そのものを遮断すれば、過剰な魔力が世界を浸食するのも防げるだろう。

（問題は、この塔を世界から切り離してしまうと、他国の魔術師達に「何かある」と感づかれることですか）

まして時は大祭の直後。常以上に他国の要人や魔術師達が国に入り込んでいる。

今なんの対処もせずに魔法を使えば、それは暗闇に打ち上げる閃光のように周囲の目を惹くだろう。

人の力では行使できない魔法を――『実際に』使う者がいる、という認識の下に。

（……おそらくその場合、最悪の未来を招くでしょうね）

魔法を使わないままであれば、警戒はされても脅威とまで見なされない。下手に騒いでやぶ蛇になるよりは、と、静観している国が多いからだ。

だが、実際に強大な魔法を使えば、列国は一斉に自分を――ひいては、自分を従えているこの国を脅威とみなすだろう。少なくとも百を超える試算では、強大な魔法の実行はいずれも『戦』の未来を引き寄せていた。

（……いずれ、避けることのできない戦が、この国にも起きるでしょう……）

少しずつきな臭くなっている他国。現れだした異形。

悪い方向へと進み続ける世界の中、平和に見えるこの国にも火種がある。

アルトリートという存在は、今現在、最も危うい火種だった。

どのような形であれ、生かせば必ず戦を呼び寄せる。内部の争い

は別の争いを呼び、周囲を巻き込んで大きく広がるだろう。アルトリートの意志には関係なく。

（……ですが、今はまだ……その時ではない……）

世界に溶けたわずかな魔力に反応して、かつてこの城に張り巡らせておいた結界の一部が呼応した。

幾重にも重ねておいた結界のうち、塔の一部を少しだけ変化させ、ポテトは世界に『認識』を錯覚させる。

塔の近くにいる者ですら、魔法の気配を感じ取ることはできないだろう。距離が遠くなれば尚更に、誰にも知られぬまま全てを終わらせることができるかもしれない。

もっとも――あの『魔女』には感知されるだろうが。

（一度、『探索』も打ち切らないといけませんね……）

別の用事に奔走している間に、あっさりと姿を消してしまった『同族』。

かなり広範囲に探索の手を伸ばしているが、未だに情報を掴むことができなかった。

転移の魔法が使われた形跡も飛行魔法の痕跡も無いのに、どうやってこの地から姿を消してみせたのか。

（……馬や馬車であれば、人目につくはずですが……）

だが今のところ、そういった情報も入っていない。

単独ではなく協力者がいたのなら、人の目から身を隠すことは可能だろう。自分の探索が届かない理由は不明だが、相手が複数であるのならおのずと答えは出てくる。

（この魔法に成功して、余力があれば……もう一度探してみましょうか）

わずかに目を伏せ、広範囲に展開していた『探索』の魔法を打ち切る。

同時に、閉じた結界内に魔力を浸透させ、ポテトは頭の中にいくつもの複雑な術式を組み立てた。組み立てた術式が魔力に後押しさ

れ、閉ざされた世界に出現しようとする。それをギリギリまで押さえて、ポテトは口を開いた。

「『魔法が最終的に発動し、あなたが『従者』化するのはあなたの死後。ですが、死に至るまでにあなたの意志で『契約』を承諾しなければ、魔法は体内で眠ったまま消滅し、あなたはごく普通に人としての一生を終えます』」

身構えている相手に向かって、ポテトは言葉を紡いた。

魔法の『条件付け』は、細かければ細かいほど、その威力が強くなり、精度も上がる。

無期限よりも期間を制限されたもののほうが綻びが少なく、無条件よりも条件をつけられたもののほうが威力が強い。

これは、例えば打撃の攻撃で、面の破壊と点の破壊のように、広範囲の破壊よりも一点集中のほうが一カ所への威力が高いのと同じだった。どの魔法、どの魔術においても、この法則が崩れることはない。

覆ることがあるとすれば、それは術者の能力差だ。

「『承諾の条件は、あなたの願いを『従者』の遵守命令の第一に入れること』」

「……だから、その、ボクの願いってのは、いったいなんだ」

満ち始めた魔力に気づいているのだろう。アルトリートの顔にはハッキリと警戒の色が出ている。

もともと魔法との親和性の高いクラヴィス族だ。魔力が全く無いアデライーデ姫と違い、魔法の気配には敏感なはず。

だが、そのアルトリートにしても、まさか自分に向けられた魔法が、すでにすぐ近くで発動しかかっているとは思ってもいないだろう。

数十からなるなる魔法陣は全て、薄皮一枚隔てた向こう側にあるのだから。

「まだ自覚なしですか？」

相手の様子に少しだけ笑って、ポテトは一秒だけ間を置いた。

肉体に施す魔法の場合、いかに相手の隙をつくかが重要になってくる。警戒の強い相手には魔法が効きにくいためだ。
そしてそういう意味において、問いの答えは非常に都合が良かった。

「『クリストフ・オリガ・サイフォスを守ること』」

その瞬間、相手の目が大きく開かれるのを見た。
（――今――）

ポテトは静かにその瞬間を突く。
文字通り、その手で。

――ポテトの白い手が、アルトリートの胸を貫いた。

※　※　※　※　※

「……え？」

絶句した相手の瞳には、狼狽よりも唖然とした色が強かった。
その瞳にポテトはニコリと朗らかに笑う。
「契約の種を植えさせていただきます。言うなればこれが契約書です。『承諾の印は特別な方法でなくてかまいません』。そうですね……『契約を受理する、と心の中で唱えるか、もしくは口にしたならば、それが契約を承諾した証しとなります』」
アルトリートの視線がポテトの顔から自分の胸元へと動く。

その胸には、文字通りの意味でポテトの手が潜り込んでいた。
だが、本来なら胸板を貫き、背中へ貫通しているはずの指先は、アルトリートの背から出てはいない。体内に潜りこむのと同時に、それは純粋な力と化して相手と同化していた。
「『魔法は永久的に持続するものではなく、解除の条件がつきます。もし誰かが『従者』となった『かつてあなたであった者』の正体に気づき、それを『かつてあなたであった者』に告げた時、私の魔法は効力を失い、本当の死が訪れることでしょう』」
驚きのあまり目を見開いている相手には、この言葉が本当に聞こえているのか、微妙なところだった。
だが、契約の内容は血肉と魂に刻まれる。今、衝撃のあまり言葉を聞き流してしまっていても、必ずその言葉は頭の中に残るのだ。
「『けれどそれまでの間、あなたは『あなたであってあなたではない者』となって、私の手足となり、有事の時以外はあなたの友を守ります。――契約のままに』」
ポテトが言葉を句切った瞬間、世界の向こう側に隠していた魔法陣が一斉に具現化した。
「な……！？」
突如自分の周りに出現した幾重もの魔法陣に、驚いたアルトリートが身じろぐ。
その胸にはやはりポテトの手が生えているのだが、一瞬、それすらも忘れてしまったのだろう。もともと胸を貫いた一撃は相手を傷つけてはいないのだから、意識が別なところに奪われても当然だった。痛みや違和感といったものもないのだから。
（いい感じに隙だらけになりましたねぇ……）
ポテトは嬉しげに笑う。
傍から見れば罠にかかった獲物を見る悪魔そのものの笑顔なのだが、本人は純粋に嬉しさを表した笑顔だった。
【この思いは　我が思い】

ポテトの唇から、世界を騙すための呪文が紡がれる。
自分の欲得だけでしか魔法を使えない『魔女』が、それでも他のために魔法を使う時に唱えられる呪文。

【この願いは　我が願い】

脳裏に閃くのは、ただただ愛おしい二人の姿。
（守らなくては）
自らの命を投げ出すほどの強い思いで、生まれてくる新しい命を守ろうとした『主』。
その『主』に守られた、自分の名を分け与えた愛しい子供。
どちらも守りたいと思ったのだ。人であったことなどとうの昔に忘れてしまっていた自分が。……心から。
（――そう――）

【綿々と紡がれし『魔女』の血の系譜にかけて】

（――誰を犠牲にしようとも――）

【我は我が願いのままに其を叶えん】

「ちょ……っと待て！　おまえ、ボクは……！」
尋常ならざる魔力に、アルトリートが我に返って叫んだ。
――だが、遅い。

すでに種は植えられた。
薄い笑みを口元に貼りつけて、ポテトは心臓と同化させた手とは別の手を相手の額にあてる。
――臓腑の焼け付くような痛みを押し殺して。

【汝に魔女の祝福を】

――それが呪いであることなど、承知のうえで。

※　※　※　※　※

夜の神殿は静まりかえっていた。
塔に入った時とには東の空でゆらめいていた月が、今は中天に近い場所で輝いている。
鮮やかなその光に照らされて、夜の城もまた静寂の中で眠っていた。
大祭の直後とはいえ、夜は夜。連日の夜会疲れも手伝って、早めに床につく者も多いのだろう。
警備の兵もどことなく眠そうで、そのことが今のポテトには有り難かった。
空間を飛び越え、よろめくようにして入った神殿の一室は、どこか深い海の底のような色をしていた。
人影はない。
もともと特別な時にしか人が入ってこない場所だ。ホッと息をつ

いて、ポテトは力のない足取りで歩いた。
ほとんど家具らしいものが置かれていない円形の部屋。
中央の天井には巨大な天窓。
驚くほどの透明度を誇るそこから、夜の光が部屋に投げかけられている。
「……」
ポテトは部屋の中央、月の光を真っ向から浴びる窓の下へと歩くと、音をたててそこに崩れた。
（さすがに……疲れました……）
重い体をようよう転がし、天井のほうを仰向く。
天窓の端から月の欠片が覗いていた。
淡く輝く月は、いつか見た誰かの髪のように、美しい青銀色をしている。
「……　……」
こふ、と――一瞬、咳き込みかけてそれを堪えた。

なぜか笑いが込み上げてきたのだ。
なにが可笑しいのかは自分でも分からない。ただ、笑いたいと思った。
（嗚呼……結局……私は、貴女のようにはできないのですよ）
空高くから自分を覗き込む蒼い月。
記憶の中に住む永遠の魔女。
（……お母さん）
真なる魔女の血統でありながら、自分以外の誰かのために白き魔法を使い続けていた人。どれほど魔法を使っても、呪いで傷つくことのなかった魔女だった。
（……私は、このザマですけどね……）
契約の承諾と、相手の死によって起きる『正式な発動』すらまだなのに、すでにかなりのダメージを受けている。気を抜けば言葉以外の何かを吐きそうだ。全力で自己修復をしているが、ゴッソリと

失った魔力はなかなか回復しないだろう。
（けれど……種を植えることは、成功しました……）
部屋に施された術式にそって、月光の魔力が高められる。
それを貪欲に貪りながら、ポテトは口元に笑みを浮かべた。
懐かしい色の月を見ていると、当時のことが思い出される。
かつて、いくつもの奇跡をこの目で見てきた。

遙かな昔、まだ人であった頃には、魔法とは素晴らしいものなのだと……そう思っていたのだ。
母が紡ぐ魔法はいつだってそうだったから、だから先代（ちち）も母に永遠を捧げたのだろうと理解した。
己のもつ、永遠の命すら手放すほどに――

（……いつか）
いつか、自分もそうなるだろう。
その予感は昔からあった。いつかああなるだろう、と。
人を愛した時に、自分たちは永遠を失うのだから。

「『いつか』」

閉じた瞼の裏側に、金色の輝きが見える。

「『私は』」

真なる魔女の系譜ではないけれど、確かに魔女と呼ばれる力を有してしまった人。
その美しい黄金の髪ではなく、輝ける美貌ではなく、その魂の美しさ故に「黄金の」と呼ばれる人。
そう、黄金の魔女とは、その身のもつ色を指して言うのではない。

「『愛する人のために』」

黄金の魔女とは、黄金のごとき魂の輝きをもつ魔女。
血ではなく、その魂の力で悪魔をも魅了し従える魔女。
故に呼ばれるのだ。
黄金の魔女、と。
だから――

「『死ぬでしょう』」

思いをこめて、力をこめて、願いをこめて、祈りをこめて、全ての試算を終えたのちにそう言葉を口にした。
決して変わることのない、自分だけが知る未来の結末を。
――ポテトは微笑(わら)う。

その顔は、どこか安堵したかのように――穏やかだった。

？　アルトリート・アステール

（……ひどい目にあった……）

静寂の戻った牢の中、ようやく一人になれたアルトリートが思ったことといえば、先のような独白だった。

数時間後には死を迎えるというのに、思う言葉がこれでいいのだろうかと自分でも思う。

だが偽らざる気持ちで心を語れば、およそ『残る人生あとわずか』という立場にあるまじき言葉が零れるし、まして現在、胸中を占めるのは悔恨でも絶望でも慟哭でもない。

脱力だ。

（……こんな風に……終わりの日を迎えるとはな……）

なんだか、そんな感想すら力が抜ける。

在りし日に思った『最期』は、人々の失笑をかいながら断頭台の露と消えるか、虚無を抱えたまま腐った泥のような王宮で過ごし、自分がしたように誰かに貶められて謀殺されるかのどちらかだった。

誰が想像しただろう。

企みが成功しようと失敗しようと、その後の結末にたいした違いはなかったのだ。

――すくなくとも、自分にとっては。

（……馬鹿だよな）

幸せになんてなれない。それは最初から分かっていたのに。どうして自分は行動を起こしたのだろうか？

座っていた粗末な硬いベッドに転がり、アルトリートは天井を見上げた。

頑強な石造りの天井。紋章珠（ひかり）を鈍く吸収するようなその天井を、今まで、いったい何人の人が見上げたのだろう。

ふと真横の壁へと視線を向ければ、不自然にへこんだ箇所がいくつもある。

……誰かが、ここから出たいと願って引っ掻いた跡なのだろうか？

決して人の手でどうにかできるはずのない石の壁を、爪で必死に掻いたのだろうか？

（……生きたい、っていう……気持ち、か……）

執念のようなその跡に、アルトリートは痛みを感じて目を閉じた。

けれどそれは自身の痛みではない。

――この壁に傷をつけた相手の慟哭が、ただ痛かった。

（……そんなにも……生きたかったのか……）

この場所に連れてこられた者がどういう末路をたどるのか。貴族でそれを知らないものはいないだろう。

だが、連れてこられる者がどういう立場の者なのか、どういう思いをもった者だったのかは意外と知られてはいなかった。

人は原因と結果だけを求め、その中のものには見向きもしない。

享楽の糧に処刑を見物し、それを見せ物としてただ楽しむだけなのだ。

誰だって「死にたい」などと思って日々を生きているわけではないだろう。

生きたいと思って生き続けているのだろう。

なら、この牢に入れられた者の大半は、生きたいと必死に思いながら、迫り来る『時』に怯え、苦しみ、無理やりに処刑台に引き立てられていったのだろう。

――どれほどの苦しみだったのだろうか。

どれほどの悲しみだったのだろうか。

「……」

アルトリートは目を瞑ったまま、ふいに深く息を吸い込み、ゆっくりと吐いた。

脳裏に何故ともなく幼なじみの姿が浮かぶ。
いつだって振り返ればそこにいた、実の家族よりも近い存在。
あまりにも自分と似ていて、あまりにも自分と違っていた弟分。
あの愚かで虚しい日々の中で、救いがあったとすればただひとつ、彼と出会い、共にあったことだろう。
――独りであったなら耐えられなかった。

二人でいたから、生きていられた。

――あの春の日までは。

※　※　※

「……クリスを……王宮へ？」
レンフォード家の一室で、アルトリートは呆然と呟いた。
四月二日。昼をやや過ぎた頃だった。
公爵の私室には主である公爵の他、家令と老執事が控えていた。
家令が傍にいるのは何かの報告のためだったのだろう。公爵が書類と共に一瞥を送ると、丁寧な一礼を残して部屋を出て行った。
それを見送ってから、公爵はゆったりと腕組みをする。アルトリートを見る目には、冷ややかさに加えてどこか仄暗い影がちらついていた。
「そうだ」
短く、首肯と同時に公爵はそれだけを告げる。
説明など必要としない、命令することだけに慣れた独特の声だった。

「……何故」
アルトリートは呆然としたまま、半ば無意識に呟いた。
――何故――
だが、その後の言葉が続かない。
何故、今まで存在すら無視してきた自分を自室に呼び出したのか。
何故、今まで放っておいた『王弟（クリストフ）』にかまいをつけるのか。
何故、春の大祭の真っ只中に、そんな話を持ち出してきているのか。
「何故なのか」を考えはじめると、次から次へと新しい疑問が沸いてくる。だが、目の前の男がこちらの問いに一つ一つ答えてくれるとは思えなかった。
アルトリートは無理やり先の三つだけを頭の中に残し、こちらを冷ややかに見据える男を見返した。
目鼻立ちの整った男だった。
六十を過ぎているはずなのに、肌にはまだ四十代で通るほど張りがある。たるみのない秀麗な顔も、十分にその年代で通るだろう。
綺麗に撫でつけた髪は銀に近く、その瞳は茶褐色に近い濃い琥珀色をしていた。おそらく母方の血が強く出たのだろう。もし父方の血が強く出ていれば、アルトリートのような金髪と紫紺の瞳をしていたはずだ。彼の父親は、自分の母と同じく、王族だったのだから。
「……あんた達にとって、クリスは『汚点』じゃなかったのか？」
ともすれば沸き上がってくる憎しみを堪えて、アルトリートは重厚な机の向こうにいる男を睨みつけた。
男は口の端を歪めて笑う。
「事情が変わったのだよ。……どうやら、陛下はまだしばらく、独り身のままでいらっしゃるおつもりのようだ」
「……？」
公爵の言葉に、アルトリートは眉をひそめた。

現女王アリステラが独身であることは、上流階級の者なら誰でも知っていることだ。かつて列国から身分も血筋も申し分のない人々が求婚に訪れたが、そのことごとくを振ったという話は有名だった。

女王の身近には側近中の側近としてクラウドール侯爵がおり、彼の人こそが女王の情人であろうと言われている。それならばいつか慶事も聞けるのではと思われたが、だとすれば公爵の言葉が不可解だ。

「……陛下は確かにあの侯爵を寵愛しておいでのようだ。だが、もとはコーンフォード大法官がどこかから拾ってきて、ステファン老に預けたという、どこの馬の骨とも分からぬ身の上だ。愛人ならともかく、女王の夫としては相応しくあるまい」

「……それが、クリスと何の関係が？」

こちらの指摘にただ暗く笑って、国の筆頭貴族でもある男は目を鈍く光らせた。

「王族の血だよ」

「……」

「現在において存在する、『他家に降りた』のではない、『直系の王の血筋』だ。妃の位も得ていない、およそ高貴な『血』を産むには相応しくない腹から産まれた子だが、それでも継いだ血と名は正統なものだ。私の父や、おまえの母のように、『降りた』者ではないのだから、王族として名乗りをあげることもできる」

「……ッ」

一瞬、本気で沸き上がった殺意に、アルトリートは必死で己を押さえ込んだ。もしここに刃物の一つでもあったなら、衝動的に相手に向けていたかもしれない。

「女帝ナスティアの血を継ぐ者は、探せば他にも沢山いるだろう。おまえのような者も、実のところ少なくはなかったのだからな。だが、王位継承権を与えられる『直系』となると恐ろしく少ない。……王家は血統の保持のために、間違った選択をしたからな」

アルトリートは歯を食いしばったまま、暗い目をしている男を睨

む。疑問を投げかけないこちらに気づいて、公爵は唇の端を歪めた。
「……どこぞで聞くか、調べるかしたか？」
「……血族婚を繰り返した、という話だろう」
「そうだ」
歪んだ笑みを深め、公爵は奇妙に光る目をして言った。
「女帝ナスティアの御子は四人。いずれもアルヴァストゥアル家に留まっておられたが、その後からが問題だった。王の座についたのは長子の血筋だが、血の濃さを保つために次子の血筋から花嫁や花婿を選んだのだ。血族婚どころではない。近親婚だ。繰り返されるうち、産まれながら疾患をもつ方や、幼いうちに亡くなる方々が増えた。正嫡であればあるほどその傾向は強まったな。戯れに手をつけた女が産んだ子女ですら、何人かは影響を受けた。……猊下や、ステファン老のように」
「……」
「アントワール様の兄、エルヴィン王は、ある意味においては長子の一族最後の王だろう。今おられる女王陛下も長子の末裔と言えるが、あくまでも次子の一族である先王陛下の娘として即位されているからな。……エルヴィン王が狂死されていなければ、同じ血のアントワール様に王冠が渡り、女王陛下（アリステラさま）も長子の一族として即位されていただろうが」
その話は母であるマルグレーテから聞かされていた。
九代目国王であったエルヴィン王が狂死した時、同じ父母から生まれたアントワールを次の王にすることはできない、と重臣達が揃って反対したという。
エルヴィン王が生前行っていた事を聞けば、そうならざるをえないとアルトリートでも思った。貴族の子女を攫って無理やり紋章の器にし、何人も死傷させたという話だけでも相当なものだろう。
それもあって、かつてアントワールが先王に嫁する時、『狂死した王の血筋』を問題視する声も多かったという。その時『長子の末裔』であることの方を重視され、最終的に反対派を抑えて王妃に迎

えられたのは、当時の重臣がすでに代替わりしてしまっていたからだ。

「王が狂死された当時、ステファン老を次の王にという声も高かったという。だが、ステファン老はクラウドール家に養子入りした。高齢ではあるものの、次子の血統であり長子の血の流れもくむコンラート様を王に推してな。まぁ、おかげで血族図はいよいよややこしいことになったが、過去に遡っても例のないことではない。過去に遡れば遡るほど、改竄された記述も多いだろうからな」

そこまで言ってから、公爵はアルトリートをひたと見つめた。

「女王には実子がいない。あの方の『子』は全てどこぞから集めてきた養女ばかりだ。なかには他国の王女もいる。ほとんどの者は周辺諸国に嫁したが、正式に『王女』という地位を得てからの結婚だ。もし、女王に実子のないまま、さらに行方不明の王弟殿下が見つからないままで女王がお亡くなりになったら……どうなると思う?」

「……別の血族が……継ぐんじゃないのか。長子と次子の血統でなくても、アルヴァストゥアル家の血筋は他にもいるんだろう」

アルトリートの答えに、公爵はいっそう唇を歪めて笑った。どこか狂気を孕んだ笑みだった。

「……いると思うか?」

「……」

「女王ナスティアの子は四人。アルヴァストゥアル家は、その四人の血筋の直系、他家に入らず家の中に留まっておる者ならば全て『アルヴァストゥアル家』としてきた。だが、表舞台に出てきたのは長子と次子の一族がほとんどだ。……何故だと思う?」

「……何故って……」

公爵の笑みに、アルトリートは愕然とした。

もし、アルヴァストゥアル家の中で本家・分家の扱いがあるとすれば、長子の一族は本家、他の一族は分家という形になるだろう。

その後、濃すぎる血の呪いのせいで次子の一族に王冠は移り、それによって次子の一族が本家という形となった。おそらく、四人の

子がアルヴァストゥアル家に残ったのは、そういった『血統のスペア』を用意しておくための措置だったのだろう。同じアルヴァストゥアル家の一員であれば、他家となってしまった場合よりは、王冠の移譲も容易かろう、と。

（そのための血筋じゃ……ないのか……？）

一般には王家は王家として一つであり、中で四つに分かれているなどということは伝わっていない。だから長子から次子の血筋に王冠が移ったとしても、民は『移った』ということすらほとんど知らないのだ。

貴族ですら、知らない者は多いだろう。

知らなければ、三子や四子の血筋がどうなっているのかなど、気にするはずがない。どれだけいるのか、ということも――絶えているのか、ということも。

「まさか……いないのか……？　一人も……！？」

「さてな。……探せば一人か二人はいるだろう。三番目の血筋には、次子の血筋に嫁した者もいる。四番目の血筋についても、シュヴァルツブルクに嫁している。だが、他家に降りた者は王族では無い。アルヴァストゥアル家に残った者で、今の王の血筋以外の者がどれほどいるか、わかるか？」

「……」

沈黙するアルトリートに、公爵は笑みを深くして言った。

「ほとんどいないのだよ。三子の一族も、四子の一族も、すでに正統な血筋と呼べる者、次代の王となれる者はいないのだ。少なくとも、現女王の跡を継げるだろう者はな」

――もし、そんな状態で女王に何かあったならば。

正式な王位継承権を持つ王弟が、見つからないままだったとしたならば。

「……他国に嫁いだ『王女』のことを持ち出し、王位をよこせと言ってくる輩が出てこないとも限らん。無論、そんな者はナスティア

の王族ではないし、王位継承権など本来ありえん。だが、国を盗るための口実にはなる。……それを防ぐためには、分かるな？　誰もが納得する『王族』を用意しておかなくてはならない」

「……それで、クリスか」

そうだ、と、公爵の目が頷いた。その口元には相変わらず、どこか狂ったような気味の悪い笑みが浮かんでいる。

「ナスティアの国宝の中には、ナスティアの血筋にしか使えない物がある。誰の血を引いていようとも、真実ナスティアの血筋であるのならば、それらを使って血の正統性を証明することができる。血を疑う者はそれで黙らせることができるだろう。だが、そのためには『王の直系ではない』と認知されていない者が必要なのだ。……馬番の息子の生まれから逆算して、先王陛下がこちらに留まり、娘に手をつけた時期は一致する。それを証明する者も領内に多数いる。マルグレーテがあの者の出生届を故意に握りつぶした経緯も含め、先王の遺児とする根拠はいくらでもあるのだ。正式に認めさせるのは容易くはあるまいが、難しいことでもあるまい。なにより……『王族』の不足は、王家にとって死活問題だからな。王位継承権だけではなく……紋章の器としてもな」

くつくつと笑う男に、アルトリートは「どういうことだ」と問わなかった。

ただ、ある嫌な予感を覚えてゾッとした。

「……まさか……王家の直系が少ないのは……」

「ああ……おまえは思いの外、頭が回るな。そう、アルヴァストゥアル家の残りの血筋が何故いなくなってしまったのか。……クラヴィスが残した呪われた遺産を守るための、生け贄にされたからだ」

くぐもった笑みを漏らしながら、公爵はむしろ楽しげに言った。

「始祖クラヴィスは、確かに偉人だったのだろう。天変地異すらその卓越した魔術で封じ込めた。だが、封じ込めた先は己の体だ！　紋章術というのは、紋章という烙印を己の身に刻んだ、自己犠牲の魔術なのだよ。その威力が強ければ強いほど、術者の心身を蝕む猛

毒となる。使えば使うほど、己の命と魔力を削り取られる」
アルトリートは小さく吐き捨てた。
「……貴様はそれから逃げただろうが」
一般にはあまり知らされていないが、強大な力を持つ紋章は必ず何かに宿しておかなければならない決まりになっていた。
紋章の誕生がどのようなものであるのかを知れば、その理由もおのずと分かる。
強大な災いを己の力に変えた始祖クラヴィスは、なるほど、確かに天才であり偉大なる魔術師であったのだろう。
だがその血と術を引き継いだ後の一族は、彼が成した奇跡を維持するために多大な犠牲を払わされ続けていた。
例えば『光の紋章』は、周囲全ての者の意識を絶え間なく読み取り続け、宿した者の精神を破壊して死においやった。
例えば『闇の紋章』は、所持者に仮初めの不死を与えたり、逆に誰かを永らえさせるための人柱として扱われたりと、絶えず『不完全な不死』を巡った争いに人々を巻き込み、争いと悲劇を生み出し続けていた。
『罪の紋章』は、人の罪を暴きそれを所持者に追体験させることで器となった者の精神を破壊し――『虚無の紋章』は、その絶望的な『無』の力ゆえに周囲を幾度と無く消滅させ、所持者そのものも無へと導いてきた。
闇の紋章に代表されるように、紋章の全てが紋章自身のために悲劇を起こしてきたわけではない。
だが、そもそも紋章術がこの世になければ、こうした悲劇は起こらなかったのだ。
（くそ……気持ちが悪いな……）
アルトリートは胃のあたりに不快感を感じた。
クラヴィス族が紋章を手放すことなく保持し続けたのは、二つの理由からだと言われている。
一つは、その力があまりにも『力』として有効であった、という

こと。

そしてもう一つは、その力があまりにも強大すぎたため、世界に解き放つことが恐ろしくてできなかった、ということだった。

世界に起きた『現象』を『力の結晶』として体内に封じた術だから、それを解放するのは簡単だ。誰もその『力』を紋章として宿さなければいい。ただそれだけで、自由になった力は元の『現象』となって世界に還る。

――周囲に絶望と破壊をまき散らしながら。

それを恐れたクラヴィス族代々の長は、力の強い家系に強大な紋章術の管理を命じた。

後にナスティア王国の一員となった後もそれは続き、巨大な紋章の犠牲になる代償として、管理する一族は貴族の位と領地を授けられたのだ。

そう――『虚無の紋章』を保持するが故に、レンフォード家が王族の娘と公爵位を与えられたように。

「虚無の紋章か……。それがどうした。やがて己も虚無に呑まれると伝わる『虚無の紋章』を一族を率いる立場の私が宿せるはずもなかろう。ちょうどいい器としておまえ達がいたのだ。……まぁ、マルグレーテが怒るから、おまえでなくあの馬番の息子に宿すことになったがな」

平然と言う男に、アルトリートはきつく拳を握りしめた。ともすれば素手で殴りかかりそうになるのを必死の思いで押しとどめる。

「王家、つまり、女王ナスティアが所持していた紋章ともなれば、とてつもなく強大なものだ。暁の賢者が所持していた『罪』と『罰』の紋章に至っては、宿しているだけで狂気に蝕まれる禁断の紋章だ。あれだけ強い紋章では、『物』に宿しておくなど不可能。奇跡的に宿せたとしても、数日と保たず器は破壊され、力は解放されるだろう。解放された力は国を滅ぼしかねないものだ。だから、アルヴァストゥアル家は己の身内にその紋章を宿させ続けた。王となる長子

の血筋よりも、むしろそれ以外の者の方に犠牲は多かったと聞く。
……当然だな。王を死なせるわけにはいかないのだから」
だが、その結果として長子と次子の血筋以外はほとんど絶えてしまった。
現在残っている人々も、それほど長くは生きられないだろう。
「もし下々の者に、アルヴァストゥアル家の血を引く誰かの遺児がいたとしても……連中のことだ、我が子可愛さに隠すかもしれんな。差し出されれば、神官どもは喜んで紋章をその者に移すだろう。人体に宿った紋章は、その者が死ぬまで何十年とそこに留まっている。だが、物に宿せば数年、もしくは数ヶ月、早いものなら数日で器内の魔力を消費し尽くし、それを破壊するからな」
アルトリートは愕然と立ちつくした。
王家の血の保持だなどと、とんでもない。事実は想像よりもおぞましく、非道だ。
（なら……王宮に向かわされれば……クリスは……）
「私はな、行方不明だという王弟殿下のことも、怪しいと思っている」
青ざめたアルトリートを見やって、公爵はニヤニヤと笑う。
「先王の第二妃がお隠れになる前に、神殿に移ったとされる王弟殿下だ。元々公式の場に出ることはほとんどなかったが、あの髪は目立つからな……確かに一時期、神殿の中にいらっしゃったのは見ている。お会いすることは叶わなかったが、あの紫銀の髪は間違いなく殿下だろう。……だが、第二妃がお隠れになった時から、殿下の姿も見えなくなった。体調を崩され、気候の穏やかな所で過ごされているということだが、誰もその場所を知らん。……人によっては、すでに誰かの手によって弑されているのではと言われているが、浅はかなことだ。同じ王族であるのなら、使い道はあるだろうに」
アルトリートは慄然とした。
つまり、公爵は「紋章の器にされたのだろう」と言っているのだ。
それも、公式の場に出てこれないほどの状態で、と。

ならば、同じ立場のクリストフがどうなるのか。推して知るべしだ。

「とはいえ、第二妃の実子である王弟殿下と、我が家にいるあの者とはあまりにも立場が違う。王弟殿下は、かつて女王の最大の障害となった存在だ。だが、おまえと同じ姿をしたあの者は、女王にとってはとるに足らない存在だろう。排除せずとも、放置しておけるはずだ」

まるでこちらの危惧を見透かしたように、公爵は言葉を紡ぐ。

「おそらく、残っている王女の誰かと娶せ、手元に置こうとする。その際にいくつかの紋章は渡されるだろうが、政敵になるかも知れん相手に強い紋章は渡さないだろう。かくして王宮に新しい王弟殿下が誕生し、後継者不足に悩んでいた重臣共も安心するということだ」

アルトリートは公爵の言葉に、ただ黙って歯を噛みしめた。

そう上手くいくだろうか。そう思う裏側で、黒いなにかがじわじわと自身を染めていく。

危惧が取り除かれると、クリストフが王宮へ行くという言葉が嫌に胸に染みた。

いつも共にいた、半身のような弟分。同じ場所に唯一立っていた、たった一人の親友。

「……おまえとあの者は、ずいぶんと親しかったようだな」

こちらの内心を察しでもしたのか、公爵は深い笑みのままで言う。

「居場所のないあの者のために、ずいぶんと手を尽くしてやったそうではないか。異母弟（シーゼル）などよりもよほど大切に扱っていたようだな」

ギリ、と噛みしめた歯が鳴った。

あれだけ存在を無視していたくせに、それでも監視だけはしていたらしい。

「おかげで、あの者も文字を読み、馬に乗ることができる。一から教え込む労力を思えば、お手柄だ。――だが、もう必要ない」

「……王宮へ送るからか」
「そうだな」
笑みをさらに深めて、公爵は意味深に老執事に目配せした。
今までひっそりと佇んでいた老執事は、公爵の目配せに深々と一礼して席を外す。
「だが、育ちが育ちだ。おまけに、馬番の血が混じった者だ。王家の末席に加えることについて反対する者も多かろう。おまえの母、我が妻であるマルグレーテなどその典型とも言える」
「……」
「なんなら、おまえが変わるか？」
その言葉に、アルトリートは反射的に顔を上げてしまった。
真っ直ぐに見た公爵の目は、やはりどこか異様な色を宿している。
「同じ王家の血筋。さらに、双子と言っても通じるほど酷似した姿。偶然にしてはあまりにもできすぎている。まるで入れ替われと言わんばかりの采配だ。神々も憎いことをしてくれるではないか」
「……どう……いう……？」
思わず呆然と問うと、公爵は口の端を歪める。
返答はせず、言葉を紡いだ。
「虚無の紋章は、他の紋章の力を無に帰す。全ての真実を見抜くと言われる真実の紋章も、虚無の紋章の前にあっては力を発揮できん。真実の紋章にとっては、唯一の天敵とも言うべき紋章だ。陛下は真実の紋章を持っておいでだが、虚無の紋章を宿したあの者の真実を見抜くことはできん。同じく、その紋章の加護を与えられたおまえの真実も見抜くことはできん」
「……まさか」
「事実だ。あの女王に嘘をつくことなど、本来なら誰にもできん。例外となるのが、おまえ達だ。おまえ達の共通の嘘は、あの女王には見抜けん」
アルトリートは息を呑んだ。

公爵は、自分とクリストフの入れ替えを示唆しているのだ。普通の者ならば、考えることもしないだろう大罪を。

「マルグレーテも、おまえが王宮に入るのであれば文句は言わないだろう」

薄ら寒くなるような笑みを浮かべて、公爵はゆっくりと席を立ち、アルトリートの傍らで囁いた。

「王宮に行けば、あの者はもう二度とこちらには帰って来ないだろう。王族として覚えねばならぬことも多くある。おまえのことを思い出す暇もあるまい」

「……」

「洗礼も受けていないおまえには、領地を任せることもできん。私とて不憫に思ってはいるのだよ、アルトリート。いっそマルグレーテがおまえを手放す気になれば、神殿なりなんなりに世話をしてやることもできただろう。だが、王族の血にこだわるおまえの母がいる限り、おまえはここから出ることができん。事業を継ぐことも、爵位を得ることもできず、ただここで朽ちていくしかない」

「……」

「だが、あの者は違う。いずれ王族として正式に名乗りを上げ、陛下の養女となった王女を娶るか、有力貴族の姫をもらうか、どこかの国の王女をもらうかして、王統を継ぐことのできる一族を作るだろう。アルヴァストゥア家の血を後世に繋ぐための、大切な王族として丁重に扱われ、血族図と歴史に名を残すだろう。……おまえとは違って、な」

ぎり、と歯が軋む音を聞いた。

公爵は笑む。

歪んだ笑みは、どこか狂った愉悦を思わせた。

「春の大祭の間であれば、列国の目がある。そこで行われたことは、女王と言えど『無かったこと』になどできん。奴等の目を利用して、新しい王弟としての地位を獲得してしまえばいい。口の上手いおまえなら、上手くやれるだろう」

「……」

「おまえは独りだ、アルトリート。おまえの手が得ることのできるものなど、この世には何もない。ここでただ朽ちていくだけの存在でしかない。おまえが手を引いてやっていたあの者は栄光を掴むというのに、ずいぶんとひどい話ではないか？」

こちらの目を覗き込んで、男は低く笑った。

「あの者はおまえから離れ、おまえは独りここで朽ちるのだ。それが嫌だと思うのなら、行動を起こすしかあるまい。……なに、王宮へ行くのであれば、私の手の者が手はずを整えよう。すでにあの者の存在は、噂として流しておいてある。マルグレーテが王宮に行こうとしているから、それに乗せてもらうといい」

歪んだ笑みを浮かべる顔の中、その瞳が異様な色を宿している。

「『虚無の紋章』の力を高めるためにも、あの者も一緒に連れていくべきだろう。だが……あの者はやがて邪魔になる。そうだろう？」

アルトリートはただその瞳の色を見る。

相手の目にある、狂気じみた感情の色を。

「己の邪魔となるものは取り除かなくてはならない。そうだろう？」

――憎悪の色だと思った。

※　※　※

――ふと優しい匂いを感じた。

アルトリートは薄く目を開ける。

ぼんやりとけぶる視界で、石の壁に映った人影がゆらゆらと揺れていた。

右耳の下には硬い質素なベッドの感触があり、わずかに湿気を含

んだ布の匂いがしている。だがそれとは別に、まるで上から覆い被さるように穏やかないい匂いがした。

不思議だと思った。牢の中に、香水や香炉などあるはずがないのに。

「……　……？」

アルトリートは呆としたままで視線を動かし、ふと、体にかけられている黒い布に気づいた。備え付けの古びた毛布ではない。極上の天鵞絨だ。

（……？）

何故牢の中にこんなものがあるのか。理由がわからず、アルトリートは困惑した。

おまけに、匂いはどうやらこの布からしているらしい。

香水にしては匂いが柔らかいが、香を焚きしめた布など、よほどの洒落者でなければ持っていない。焚きしめるのに使う南国の香は、香辛料に次いで高価なのだ。

アルトリートは眉を顰め、体にかけられているそれを目の前に引き寄せた。布には、独特の形をした金糸の飾りがついている。

どうやらマントらしい、と悟った瞬間、アルトリートは跳ね起きた。

「起きられましたか」

「！？」

まるで見計らったかのように声がかけられ、慌てて振り返ると、薄闇の中でいくつもの火が踊っていた。

「……な」

その火に照らされて、背の高い男が一人、立っていた。

身長のわりに細身だが、均整のとれた体躯をしている。艶のある黒髪に、完璧に整った美貌。深い知性を感じさせる瞳の色は、夜明けとも黄昏ともつかない赤紫だ。

「……クラウ……ドール卿……」

唖然としたまま呟くと、相手は小さく頷いた。何故か手に鶏肉を

乗せた皿を持っている。
「……なんだ……それ……？」
「鶏の香草焼きです」
見ればわかる。
「義父の結界で阻まれていたため、こんな時間となってしまいました。食事をするのに適当な時間ではありませんが、召し上がっていただければ幸いです」
「……食事……」
言われて、アルトリート呆然と目の前の光景を見渡した。
冷たい光を放つ紋章珠はどこに行ったのか、火の灯されたいくつもの蜜蝋が、暖かい光を放っていた。
簡素なテーブルには白い布。
その上には、文字通り所狭しと並べられた沢山の料理。
公爵家でも滅多に見れない豪華な料理だった。料理の見事さも驚きだが、軽く五人前はありそうなその量は一体どうしたことだろうか。
「葡萄酒はエーヴェルト領のものを用意させていただきました。また、あなたが好んで召されていたものも揃えてありますので、お声がけください」
掌で指し示されたワゴンの下には、見知った銘柄がずらりと並んでいた。葡萄酒以外は、ご丁寧に氷を入れた真鍮の箱に入っている。貯蔵された氷は恐ろしく高価だというのに、大きな塊が大量に入れられていた。
（最後の晩餐ったって……これは、いきすぎだろう……）
テーブルの前にあった椅子を軽く引かれ、促されるままにふらふらとそちらに座りながら、アルトリートはやはり呆然としたままで料理を眺め、男を見上げて問うた。
「……あんたが……給仕なのか……？」
「はい」
侯爵はあっさりと頷く。

アルトリートはテーブルの上をもう一度眺めてさらに問うた。
「……ナイフとフォークが揃ってるんだが」
「召し上がるのに必要でしょう？」
逆に問われて、がっくりと項垂れた。
普通は虜囚にナイフ等を渡さない。それは容易に武器となるからだ。
こちらが抵抗しても取り押さえられる自信があるのか。それとも、抵抗する気が無いのを察しているのか。男の無表情からは思考が読めず、アルトリートは早々と疑問を放棄した。
「まぁ……いいけどな。最後の食事だ……いろいろ味わって食べるさ」
手にとったナイフは、美しい光沢の銀だった。
磨かれた刃は鏡のようで、少しだけ窶れた男を映している。状況のわりに落ち着いた目だなと他人事のように思って、アルトリートは目の前にあった厚切り肉にナイフを通した。
肉は恐ろしいほど柔らかく、美味かった。
なんの肉なのかは知らないが、羊と違って臭みがない。口の中に広がる旨味は、今まで経験したことがない強烈な刺激だった。
（……！！）
食欲などなかったのに、一口食べると止まらなくなった。何もかもが素晴らしく美味い。喉を湿らせ、飲み下すための葡萄酒も一級品だった。
貴族としての立ち振る舞いは幼い頃から叩き込まれている。侯爵の手前、せめてもの意地で見苦しくがっつくことはしなかったが、それでも食べる速度が早くなるのはどうしようもない。
忙しく手と口を動かしながら、アルトリートはひっそりと給仕をしている男を盗み見た。
美しい男だった。
男に対して「美しい」という感想を覚えるのはおかしいと思うのだが、そうとしか言い表せない。母が好む華やかな美とは別種の美

しさだが、ひどく人目を惹く容貌だった。
　怜悧な顔立ちは甘いところがまるでなく、見ていると、研ぎ澄まされた刃を見るような一種不思議な戦慄を覚える。触れてはならないものを見るような畏怖と、なにか貴重なものに出会ったような高揚感。相対した時に感じたそれらの印象は、今も薄れてはいない。
　艶のある黒髪は夜の闇を切り取ったように深く、切れ長の瞳は赤みがかった紫で、その瞳孔は深い紫色をしている。
　珍しい色の取り合わせだった。特にその瞳は特筆に値する。
　アルトリートが知る限り、その瞳を持つ者は一人だけだった。
　王宮の中枢にいるか、王族に縁のある者でなければ知らないだろう。それは遙か昔、王国の生まれた時代に在りし人だ。
（……だからこそ、この人はクラウドール家に入ることができた）
　ステファン老の強い要望があり、得体は知れないが強大な力を有する大法官の後見があり、女王と教皇の承諾もあった。だが主要な貴族達が奇妙な養子縁組を受け入れた背景には、その稀有な瞳の色があったことも確かだ。
（……そんな人が、わざわざ給仕に立つ……か）
　アルトリートは少しだけ皮肉な笑みを浮かべた。
　最期の晩餐には、料理長が腕を振るうことがあるという。だが、その料理を女王の腹心とも言うべき侯爵が給仕するなど、前代未聞のことだろう。
（……なにかあるな）
　彼等のような人種は、無駄なことをしない。
　何か珍しい行動があるときは、そうしなければならない理由がどこかにあるのだ。
　ひとしきり食べ物を胃におさめ、それでもあまり減ってないように見える料理を呆れ顔で眺めてから、アルトリートはナイフとフォークを置いた。
　絶妙なタイミングで出された食後酒を受け取り、飲み干してわずかに笑う。

「……で、あんたは、なんのために給仕役なんて買って出たんだ？」
王宮で会ったときには、演技もあってへりくだった物言いをした。だが、もう必要ないだろう。
「女王の腹心であるあんたがわざわざ来るんだ。何かあるんだろう？」
この質問を先に来ていた悪魔にぶつけなかったのは、背景が違いすぎるからだった。
長年女王の最も忠実な部下として傍近くに仕え、数多の実績ある侯爵と、肩書きだけは立派だが長い間行方知れずだった大法官では、同じ女王に仕える者であっても、その行動の裏にあるものが違って見える。
正直、あの悪魔の場合、興味本位でちょろちょろしているようにしか見えなかったのである。
「……あなたに直に会って、話さなければならないことがありましたので」
「……命令を受けたのではなく……？」
差し出された酒を断って、アルトリートは訝しげに問うた。
男は怜悧な美貌にわずかな逡巡を浮かべ、小さく首を横に振る。
「陛下はご存じないことです。……義父には、おそらく気づかれているとは思いますが」
義父？　とアルトリートは首を傾げ、ややあって該当者に気づいて顔をしかめた。
そういえば、この侯爵はあの悪魔の名付け子だったのだ。
「……あの奇妙な悪魔は、まさかあんたの差し金か……？」
「私ではありません。義父に命令できるのは陛下だけですし、力を借りることができるのは契約を交わした者だけです」
アルトリートはハッとなって男を見上げた。
そういえば、最初に『結界で阻まれていて』と口にしていた。
まさか、知られているのだろうか。――あの悪魔が持ちかけてきた話の内容を。

だが、目の前の男はそれ以上そのことには触れず、別の話題を口にする。
「公爵の処置が決まりました」
「！」
一瞬目を剥き、次いでアルトリートは皮肉な笑みを浮かべた。
「どうぜ、死刑にはならないだろう？」
「ええ。今は」
「……『今は』？」
アルトリートは眉を顰める。
男は視線を残った料理の山へと移した。
「公爵は現在、王都の街屋敷に蟄居を命じられています。爵位も領地もご子息であるクレマンス伯爵に譲っていただきました」
驚いて目を瞠ったアルトリートは、相手の冷ややかな眼差しに息を呑んだ。自分に向けられたわけではないその目は、静かな怒りを湛えている。
「……よく、他の貴族どもが騒がなかったな。首謀者がヤツだっていうことは、公開できやしないんだろう？」
アルトリートの声に、相手は険しい表情で頷いた。
「少なくとも、今は公開できません。筆頭貴族であるレンフォード公爵が実質的な暗殺の指示者であった以上、事は公爵一人の問題ではすみません。公爵家そのものが罰せられるのであれば、その影響は王国全土に及ぶでしょう。現状において、それは避けなくてはならないのです」
「……他国の耳目もあるし、か？」
わずかに痛みを堪えるような目で、男は小さく頷く。
「陛下が王となった時、当時王宮に巣くっていた『先王の寵臣』の大半を処罰しました。あれから二十年以上が経っていますが、当時処罰された人達が代替わりするほどの年数ではありません。……あの時も諸外国に不穏な動きがありました。今は国力こそ二十年前とは比べものにならないほど上がっていますが、内部の不穏さは変わ

らないままです。先王の時代には表に出ていたものが、地下に潜ってしまったような感じに」

内と外。両方に不穏な気配がある現在の状況下で、筆頭公爵家を潰してしまえばどうなるのか。

少なくとも、何の波乱もないということは有り得ないだろう。最近では、昔からある民族間の争いも少しずつ表面化しつつある。下手を打てばどこかで内乱があるかもしれず、そうなれば必ず外からも関与しようという動きがでるだろう。

綱渡りなのだ。

必死にバランスをとり、慎重に足を運ばなければ、すぐに足を踏み外してしまいかねないほどに。

「――けれど、公爵を生かしておくつもりはありません」

「!?」

「必ず滅ぼすと、陛下は仰いました。内部の混乱を抑えるため、しばしの猶予を与えているにすぎません」

「……」

ジッと見つめていると、男はこちらに視線を戻した。

何かを言いかけ、すぐに言葉を噛み殺す。

アルトリートは苦笑した。

「……あんたも、大神官と同じで『すまなく思っている』って？」

男は頷かなかった。表情を改め、懐から何かを取り出す。

差し出されたそれは、黒い小さな宝石だった。表面にチラチラと模様が浮かんでいる。

「……紋章石？」

「『断罪の種』です」

ならば、それは『罪』と『罰』の複合紋章術を封じ込めたものだ。

数ある紋章珠、紋章石の中で、最も稀有といえるだろう。

「紋章と同様、相手の罪に応じて罰を与えます。使い手がもつ魔力と、対象者の魔術防御によって効果は相殺され、紋章ほど強い力を

発揮するわけでもありません。軽微な罪であればかすり傷程度でしょう」

「……これを……どうしろって……？」

差し出されたそれを右の掌に落とされる。

石を見つめる自分に、男は静かな声で言った。

「他者に対してであれば、一時的な呪いにしかなりません。ですが、唯一、その種であれば、私を容易に殺すことができるでしょう」

アルトリートは目を見開いた。

「レメクという名は、義父が私につけてくださった守護のための名です。『終焉』という名の永遠を司るあのヒトは、同時に唯一の不死性をもっています。その名を与えることで、生まれる前から死を願われていた私の命を救ってくれたのです」

「……生まれる前から……だって？」

「誰も私が生まれてくることを望んではいませんでした。産みの母ですら、懐妊が分かると密かに堕胎のための毒を飲んでいました。それを知った父が服毒を止めたのは、母の身を案じたためで、私のためではありませんでした。生まれてきてから殺せばいいと、そう言ったのだそうです」

生まれてくることを母に望まれず、生まれてから殺せばいいと父に言われた子供。

アルトリートは愕然とした。自分ですら、そこまであからさまな排除を受けたことはなかった。

生まれが不幸な人間は少なくない。口減らしにそういったことが日常的に行われる場所もある。

だがまさか、目の前のこの男が――？

「ただ一人、陛下だけが、私の誕生を望み、生きることを願い、存在することを喜んでくれました」

それがどれほどの喜びなのか、アルトリートには分かった。分からないわけがなかった。

それは、アルトリートがかつて一人の女性に対して感じたものだ。
彼女の死後、その息子に感じたものだ。
「そして、義父を召還したのです」
奇妙な共感を覚えていたアルトリートは、思わず息を呑む。
召還。悪魔。
その言葉に脳裏に『それ』が閃いたのだ。
「『悪魔の書』か！」
ナスティアの国宝。ナスティアの血族だけが使える御物の一つ、強大な力を有する『悪魔』と呼ばれる異形を呼び出すための品。
本そのものが触媒となり、一度だけ召還を可能とすると言われているが、他の国宝と同様に、長い年月の中でそれを確かめた者はいなかった。必要なかったからだ。
かつての大戦のように魔族が相手というわけでもないのに、神宝とも秘宝とも言うべきものを使ってみる必要はないと判断されていたからだ。
「当時王女殿下であられたあの方に、御物を使用する資格はありませんでした。罰を覚悟であの方はそれを行ったのです。実際に呼び出されたのは違う者だったらしいのですが……その時の行動がきっかけで義父は陛下の存在に気づき、書物を喰らって代わりに陛下の元に降り立ったのだそうです」
（……確かに、アレが書物なんかに束縛されるとは思えない……）
書物を喰らう、の意味がよくわからないが、察するに、おそらく本来呼び出されるべき相手を殺して成り代わったということなのだろう。
実際に召還されるはずだったものが、本当に『悪魔』と呼ばれる生物なのかどうかは分からないが（書物で呼び出すのは『魔族を裏切った者（まぞく）』という説もある）、それを確認することはもはや不可能だ。
そして――

「女王とアレが契約を結んだのが……あんたを産まれさせるため、か」

男は頷いた。

アルトリートはゆるく息を吐く。

そうまでして命を望まれるのなら、それは特別な血筋だ。下々の命であったのなら、当時の王女でも王族の命としていくらでも救うことができただろう。

それができないのは、相手が王女の立場であっても頭ごなしに命じるのが難しい相手だ。

「義父が名を贈ったと知って、対抗したのか、実の父も同じように贈ってきました」

例えば、侯爵家。公爵家。独自の権力を持つ神殿の上層部。

もしくは――

「名を『レンドリア』と申します」

（ああ）

そうか、と思った。

なにが『そうか』なのか、その瞬間には頭に染みこんでいなかった。

ただ頭の中に残る。

レンドリア。

その名前。

顔立ち。

背景。

環境。

その意味。

「――――ッ！」

その瞬間走った衝撃は、あろうことか爆発的な笑いの発作だった。

レンドリア。

その名前！

「は……はは……あははははは！　アハハハハハハハハ！！」

突然笑い出したアルトリートに、相手が驚いて手を伸ばす。

「ハハハハハ！　なんてことだ！！　それでか！」

アルトリートはひたすら笑い続けていた。

笑いすぎて椅子から落ちるところを、伸ばされた手に抱き留められた。それでも心の底から笑い続けていた。

笑わずにはいられなかったのだ。

けれどそれが本当に『笑い』だったのかどうか、自分自身にも分からない。

「あんたが『レンドリア』か！」

その名前の意味するところがなんなのか。知りうるほどに彼は『王族』に近かった。

奇しくもその身に流れる血のままに――例え他の誰に認められていなくても――彼は確かに『王族』だったのだ。

「だからか……！　『暁の賢者』……！！」

名前が伴う意味を。理由を。その姿を。

王族にのみ伝えられる真実に照らし合わせれば、全てを理解せざるをえない。

（だから、クリスは『無理だ』と言ったのか……！）

知ってしまえば、なんてことはない。

自分たちの企みは、真実、最初から『無理』だったのだ。

始まる前から『負け』は決まっていたのだ。

少ない王族の直系という『現在の状況』も、実際に存在する『知られざる王弟』も、『彼（レンドリア）』という存在がある限りたいした意味は無

い。
もっとも、今にしてみれば――成功しようと失敗しようと、どうでもいいことではあったが。
「はは……」
アルトリートは笑う。力無い空虚な笑みだったが、その顔は穏やかだった。
少しだけ、安堵しているようでもあった。
「……」
レンドリアはその表情に対し疑問を投げかけない。
ただ、どこか悲しげに目を細めた。
「……あいつがあの時言った言葉の意味を……やっと知れたんだな……」
穏やかとさえ言える笑顔のままで、アルトリートは空虚に笑った。
「ははは……なぁ、あんた……」
抱きかかえられた格好のまま、相手へとアルトリートは瞳を向ける。
そうして、言った。
「ありがとう」
レンドリアは返事を返さない。ただ大きく目を瞠った。
「正直、何しに来たんだ、としか思ってなかったけどな。さっきの情報には感謝する。やっと分かった……あいつが、行動する前に諦めた理由が……」
稀有な色の瞳。
その暁の空の色。
「そうか……あんたが存在するのなら……全部、最初から……前提からして、間違ってたんだな……」
絶対に無理だと分かってしまったから、手を引かざるを得なかった。たぶん、クリストフのことだ、自分を止めようと思っただろう。すでにどうしようもないところまできていてもなお、あんな馬鹿な手段にでるほどだ。思い詰めてもいただろう。

自分が、別の意味で思い詰めていたように。
「……あいつは……最初から最後まで、ボクを裏切ったりしなかったんだ……」
自分は裏切ったのに。それを知っても尚、真っ直ぐに自分を思ってくれていたのだ。
自分が向けるのと同じように――大切な家族（ひと）として。

アルトリートは右の掌を開ける。受け取った黒い石をいつの間にか握り込んでいた。
掌の上で転がるそれにそっと息を吹きかけた。
石は一瞬だけ抵抗するように揺れ、そうして跡形もなく消え去った。
「……何故」
どこか呆然とした声を聞いて上向くと、こちらを支えてくれていた相手が心底驚いた顔をしていた。
笑いがこみあげてきたが、それは先程とは違うものだった。
「あんた、自殺願望あるだろう」
「……」
「ボクにもあった。でも、自分で死ぬのはできないんだ。そういう風に教え込まれていた。……恐かったのもあるけどな」
けれど、死を間近にした今、それは恐ろしいものではなくなった。
何故を問う必要はない。
他人（ひと）がその答えを聞けば、おそらく目を剥くだろう。ありえないと叫ぶだろう。だけど、この境地に立ったのなら、分かるはずだ。
――生きてきたことに、満足したのだから。

「虚無の加護を使えば、この塔から抜けることだってできる。よっぽど強い魔術結界が張られていれば別だけどな。……だけど、もういいんだ」
全てを無に帰す虚無の紋章の加護。

クリストフが持つ紋章ほど凶悪な力ではないが、その紋様を宿す自分にも、小さな範囲であれば対象物を無に帰す力を使える。
使わないのは、使う気がないからだ。
その必要もないと、心から思っているからだ。
「ボクは刑を受ける。それがボクの務めだ。ボクがそう決めたことを誰にも覆させたりはしない。……けど、そうだな……心残りは少しだけあるな」
「……それは、なんです？」
真摯な声に少しだけ笑って、アルトリートは言った。
「クリスが馬鹿なことをやってたら、助けてやってほしい」
「……」
「あいつは、馬鹿だから。いつだって馬鹿なことしかしないから、放っておくと危ないんだ。……ボクは、あいつを守らなくちゃいけなかったんだ。あの人の墓でそう誓ったのに……今まで忘れてた」
一瞬、暗い気持ちが沸き上がる。
脳裏に浮かんだのは、狂ったようなどす黒い憎悪を目に宿した男だった。それと同時に、見窄らしくも美しかった女性の姿が浮かぶ。
（――エネメア）

胸に痛みが走った。
（……ボクは、あなたの子を殺そうとしたんだ……）
あれだけ強く誓ったのに。目の前の暗闇に気をとられて、今の今まで忘れていたのだ。
――大切な記憶だったのに。

「あいつの母親の名は、エネメアという。……あいつと一緒で、ちょっと馬鹿な女だった」
屋敷の中でも下層に位置する馬番の娘。

クリストフの母。
優しいエネメア。
あの屋敷にいた時に、一番最初に優しくしてくれたのは彼女だった。下民のくせにと反発し、蔑む自分をいつだって暖かく迎え入れてくれた。
最初は軽く見られているのかと思った。洗礼を受けることもできず、確かな身分もない自分を――他の使用人と同じように見下しているのかと。

次に哀れまれているのかと思った。
幼い自分が想像できる限りを尽くして（とはいえ、幼すぎてほとんど思いつかなかったが）相手を推し量り、やがてその全てを放棄した。エネメアには何の含みなかったのだ。
呆れた。
ある意味『頭が弱い』と言わざるを得ないほど、脳天気な娘だったのだ。
晴れていれば太陽の恵みに喜び、雨が降れば食物が育つと喜び、風が吹けば洗濯物が乾きやすいと喜び、雷が鳴れば綺麗だと喜ぶ。
土埃に汚れた顔も手も、いつだってドロドロで近寄られるたびに逃げ回っていた。
そのくせなんとはなしに様子を見に行ってしまったのは、他に行く所がどこにもなかったからだと、当時はそう思っていた。それは事実でもあった。
小さな体で屋敷から馬小屋へ。毎日のように通っていた。
――彼女が笑って手を振るのを見るのが楽しみだった。

――覚えたての知識をひけらかすと、無邪気に喜んで『すごいね』と言ってくれた。
幼い自分には、それがとても嬉しかった。
――たぶん、初恋だったのだ。

「馬鹿で脳天気で、いつだって笑ってるような女だった。ガサツに見えそうなほどあけっぴろげで、強くて、優しい人だった」

食べられる木の実とそうでないもの。

毒のある草と薬草の見分け方。

兎の捌き方まで見せられて、さすがにあの時ばかりはギョッとなった。今思えば、幼い子供に何を見せているのかと呆れてしまう。

あまりにも小さすぎて、記憶のほとんどは朧気だ。ちゃんとした言葉として、彼女との会話を覚えているわけでもない。

だが、あまりにも懐かしく、美しい思い出だった。

「エネメアを殺したのは、公爵だ」

それを奪ったのが、公爵だった。

エネメアは美しかった。母のような洗練された美しさではない。貴族の娘と比べれば、あか抜けない存在だっただろう。

けれど美しかった。いつも土埃でドロドロだったから目立たなかっただけだ。笑い顔など、宝石のようだった。

王が来たとき、屋敷中の連中が頭の先から足の指先までピカピカに磨かれた。王の目に映るものが汚くてはいけないという理由だった。だからエネメアは王の目に留まってしまったのだ。身綺麗にした彼女は、とても美しかったのだから。

「王の手がついた彼女を他の連中は遠巻きにした。知っているだろ？　あの当時の王は、ほとんど狂っているようなものだった。だから、美しいと分かっても、彼女に近寄ろうとする男はいなかった」

だからこそ、彼女が産んだ子は王の子以外にありえなかったのだ。誰もが注目していた娘だったから、誰もが抜け駆けをしなかったことを全員が知っていた。

彼女は王の子を産んだあとも、彼女のままだった。

苦しみも全て自身の中で力に代えて、背を伸ばして力強く立っていた。王の子だと言いふらすこともなく、それを盾に何かを要求す

ることもなく、いつもの通りに生きていた。
産まれてきた赤子は自分にどこか似ていて、兄弟のようだと言われた。
胸が痛かったけれど、少しだけ、嬉しかった。
けれど自分が馬小屋に行くのを知った母に屋敷に閉じこめられ、何年か会えないままとなった。
そしてそのまま――あの祭りの日に、彼女を喪ったのだ。

「公爵が殺したという証拠は無い。彼女は自殺だった。自分で、自分の胸を突いて死んだんだ。……だけど、馬番の娘が、短剣なんて持ってると思うか？　刃こぼれのした包丁じゃない、古びたナイフでもない、装飾のついた短剣だぞ？」
「……まさか……公爵は……」
そのことに思い至ったのだろう。息を呑んだ相手に、アルトリートは頷いた。
「エネメアを襲ったんだ。あいつならやりかねない。祭りの日に、馬をとりに小屋に行ったという公爵を使用人も見ている。領民の様子を見に行くんだと言っていたのに、それほど時間が経ってないのに帰ってきて、別の所にある馬車で知り合いの貴族の所に行った」
そして、エネメアは遺体で発見された。
誰もが何かを察し、けれど口に出しはしなかった。
エネメアの遺体はすぐさま埋められて、幼かったクリストフは母の死だけを告げられた。そこにどんな事情があったのかを知らされることはなかった。
「……証拠は何も無いんだ。エネメアの命を奪った短剣だって、人の記憶に少しだけ残っていただけだ。口裏を合わせてしまえば、べつの物にすり替えられるだろう。……あいつには言えなかった。おまえの母親は、乱暴されかかって自殺したんだって……そんなこと……言えやしなかった」
エネメアが死んだと聞いた時、祭りで浮き立つ人々の隙をついて

小屋へ走った。
エネメアのいない空間は、あまりにも虚しく、悲しかった。
質素な墓の前で独り残されたクリストフと会った時、アルトリートは誓ったのだ。これからは自分がクリストフの手を引くのだと。
エネメアが自分にいろんなことを教えてくれたように、自分が知った沢山のことを教えていくのだと。
「……ボクが守らなきゃいけなかったんだ」
彼女が持っていた割れていてお金としては使えない古いコインを二人で分けて、いつでも胸から下げていた。確かにあった日々の証しであり、心の拠り所だった。
母に見つかって汚いと取り上げられそうな時は、魔女の魔法がかかった曰く付きの護符なのだと、嘘を並べてごまかしたりした。
とても沢山の思い出は、同時に、大切な宝物だったのだ。
「けど……あいつがボクを守ろうとするとは、思わなかったな。いつだってボクが守ってたんだ。……あいつ、トロくさいからな」
恐がりのクリストフ。鈍くさいクリストフ。けれどエネメアに似て、底抜けにお人好しな奴だった。
「あれを見た時、もういい、って思った。もう、充分だ。欲しかったものは、ずっとボクの手にあった。ボクがボク以外のものになったとしても、あれはボクだけのものだ」
「……」
「もう何もいらない。公爵を道連れにしてやりたくないわけじゃないけど……しまったな、さきのやつ、公爵（あいつ）に使えばよかったな」
思わずぼやくと、意外と大きな手にくしゃりと頭を撫でられた。
ビックリした。この人でも、そんなことするのか。
「……なぁ、ボクが死んだら、墓は作ってもらえるのか？」
問うたのは、ほとんど無意識だった。
「作ります」
「骸がなくても？」
問いに、相手は驚くことなく、しっかりと頷いた。

「必ず」
「……そうか」
もしかすると、この男には全てが分かっているのかもしれない。
あの悪魔が自分にどういう契約を持ち込んできたのか。
「できるなら……エネメアの墓も、もっといいものにしてほしいな。庭の隅に小さな石が乗っているだけなんだ……」
聞き入れられないだろうと思いながら言うと、相手はあっさりと頷いた。
「承りました」
ちょっと驚いた。
「……ボクの墓の名は、アルトリート、だけでいいさ。レンフォードの名なんて、どうでもいい」
「刻んでおきます。アルトリート・アステート、と」
どこからとってきた名前だ、と呆れた途端、思いもよらなかったことを言われた。
「猊下からいただいて参りました。……あなたの名前です」
教皇からの、名前。
「それは……」
「王族の名前は全て猊下が管理しています。……あなたの名も、そこに」
在るのだと、目で言われてくしゃりと笑った。
よくもまぁ、そんな無茶なことができたなと思った。
だが、この男と、教皇と、女王が揃えば出来ただろう。
「はは……エネメアに、土産話ができたな……」
死んだ後どうなるのか、本当のところは分からない。
魔法を受け入れれば自分は別の者になると言われた。ならば、その死は、普通の死とどう違うのだろうか。
普通の死を迎えれば、先に逝ったエネメアに会えるだろうか。契約を承諾すれば、会えなくなるのだろうか。
(だけど……たぶん……どちらにしても、同じなんだ)

死に意味を見いだそうとするのは、生きている者だけだ。
自分がそうだと思えば、それが本当であろうがなかろうが、魂は永遠であったり、幻想であったりするのだろう。
なら、死したその後には、彼女に会いに行けるのだと思えばいい。
心はこの世界に残って、クリスを守れるのだと思えばいい。
願えばいいのだ。心の底から。
その手段もまた、自分は与えられている。
「……ボクは、クリスを守るよ」
幼い日に、あの人の墓に誓ったのと同じ言葉で呟く。
「ボクがボクでなくなっても、ボクは必ずあいつを守るよ」
ありがとう、と。もう届けることはできない相手に向かって、声に出さずに言葉を送る。
出会ってくれたことに。
共に在ってくれたことに。
沢山の思い出をくれたことに。
長くもなく、短くもない人生を『生かして』くれたことに。
ありがとう、と。
「あんたがもしなにかしかの罪を感じているのなら、何かあった時には力になってくれよな。……あんた、贖罪とか、自分で考えるの下手そうだから」
言うと、なんだか情けない顔で苦笑された。
「そのためにも、あんたはそっち側にいないといけないんだ」
アルトリートは笑った。
久しぶりに、心から笑えたと思った。
「だから、さよならだ」

※　※　※

2006

人がいなくなった牢屋は静かだった。
ベッドに腰掛けて、アルトリートは自分の右手を見る。
掌に、ふと、あの小さな石の感触を思い出した。
（……使わなくて……よかったな）
掌を握って、嘆息をつく。
あの人は、たぶん、こちらが裁くつもりでいるのなら、そのまま裁かれる気でいたのだろう。
自分に執着をしない人間は、他に必要とされているということ自体も理解しない。ある意味恐ろしいほど自分勝手であり、同時に、そのことに罪を覚えれないほどに、他者から必要とされている自分を知らずにいるのだ。
（……あの小さな王女は、どうするんだろうな）
指摘してやればよかっただろうか。あの人の婚約者となった王女の存在を。
どういう反応をしたのか、今となっては分からない。もしかすると小揺るぎもしなかったかもしれない。逆に、その存在に思い至って慌てたかもしれない。
その答えはもう知ることは出来ないが、想像すると少し楽しかった。
自ら命を手放すことは、愚かなことなのだ。
生きられるうちは、どこまで生きればいいのだ。死ぬ理由が無いのなら、生きていればいいだけの話だ。
死を受け入れた側からすればそう思う。同時に、死を望みながら、今もそれを与えられないままでいる相手を少しだけ不憫に思う。
いつか、生きていたことを喜べるほどに、大切な誰かと会えればいい。
生きてきてよかったと、そう思えるようになればいい。
もしかすると、あの小さな王女がそうなるかもしれない。違う人がなるかもしれない。

だがそれは、自分が与り知らない物語だ。
（……ボクも……次の物語を決めなくてはな）
そのとき、ふと、何かに呼ばれたような気がした。
顔を上げる。自分以外には誰もいない牢の、その向こうを見る。
小さな王女が、そこに立っていた。

「……なんだ、今度はおまえか」
思わず苦笑がこぼれたのは、つい先程この相手のことを考えていたからだ。
どうやってここに来たのか、とかは尋ねなかった。
王女の体はほとんど透けていた。幻のような姿の向こう側に、石畳と壁が見える。
「……次から次に……」
噂に聞く『メリディスの幽霊』というのは、きっとこれのことだろう。一族の特徴として語られる中に、精神を飛ばす術というのがあったはずだ。森で迷った時にいつの間にか傍らにあって、外への道を指し示してくれる。その様を指して『聖霊』と昔の人は呼んだらしい。
アルトリートはぼんやりと立っている王女の幽霊（？）をしみじみと見やった。
まるでなにかを促すようにタイミングよく現れた少女。
迷いの森で立ち止まった時、先を促（うなが）しに来る妖精のようだと、ふと思った。
「……決めろと……そう言いたいのか？」
きっと相手にはわからないだろうことを口にしてみた。
少女は目をパチクリさせている。大きな目が印象的だった。
そうして口を開きかけ、慌てて喉を抑える。
「　　」
口は動いているのに、声は聞こえなかった。相手もそれを自覚し

ているのだろう、焦ったように一生懸命声を出そうとしている相手に、アルトリートはほろりと苦笑った。

「……何も言わなくても、いいさ」

少女は素直に口を閉ざす。小さな手で鉄格子を掴んで、ギョッとなった。

彼女のすぐ近くの鉄格子が、一部分、握りつぶしたように歪んでいるのだ。

――彼女自身が、かつて歪めた鉄格子なのだが。

「『ボク』は今日死ぬ。……それは、もう受け入れた」

ギョッとなっている様子が可笑しくて、つい苦笑が深まった。

すぐさま鉄格子を叩き始めるのに、さらに苦笑が深くなる。

なんて真っ直ぐで、一生懸命なのだろうか。

「……わかっているさ。ボクも決めたよ……」

焦った顔でなおも鉄格子を叩いている相手に、アルトリートは立ち上がった。

そのまま傍まで歩いて行くと、手を止めて真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

目の高さを合わせようとすると、ずいぶんと低く屈まなくてはいけなかった。

「なぁ、王女。クリスに伝えてくれないか」

言うと、驚くほど強い目になった。

「……あのコインの片割れは、『ボク』の墓に……」

作ると言ってくれた人を思い出して少しだけ笑む。

「たぶん、あの人がああ言うからには、どこかに作られるんだろうと思うが……そこに入れてくれと」

例え、そこに自分の骸は入っていなくても。

「あれは『ボク』だけのものだからな」

少女は不思議そうに瞬きをした後、コックリと頷いた。

アルトリートは少しだけ微笑う。

「それから……」
それから――声に出そうとして、少しだけ息がつまった。
自分を利用した公爵を決して生かしておかないと言ってくれた人。
それを命じた女王。たぶんこれからもきっと無理をして、必死の綱渡りをしながら国を導いていくのだろう。
だから――
「女王達はたぶん、かなりムチャクチャやって公爵をぶちのめしたんだろうから」
普通ならありえない、公爵の蟄居と身分の剥奪。実子に継がれたからそうとらない者も多いだろうが、それは実質的な剥奪なのだ。
「だからってわけじゃないが……まぁ、そういうのをちゃんと見ておいて、ボクのことで女王達を恨むな、と」
これから先、手をとりあって生きていかなくてはならないのだから、尚更に。
「あいつは根が単純だから、感情に引きずられてどう転ぶかわからないからな」
少女はどういうわけか、かなり力強く頷いてくれた。
ぼろぼろと、大きな目から大粒の涙を零しながら。
「……なぁ、泣くなよ」
不思議なものだった。こんな風に、真っ直ぐに自分を見てくれる人間は、クリス以外にはいないと思っていたのに。
ここには、沢山の人がいた。もっと早く知り合っていれば、もしかすると何かが違っていたのかもしれない。
けれどそんな『もしも』に意味は無い。
それに、自分はもう、満たされている。
「別に全部が終わりじゃない」
指し示された別の道。

終わりの先にあるもう一つの始まり。
「『ボク』が終わっても、ボクは続いていく。……用意されたシナリオに動かされるのは業腹だが……代わりのものはもらったからな」
大切なものも。贈られた名前も。
自分だけのものとしてこの胸に在る。
だから泣くなと、思いを込めて手を伸ばした。
半透明の頭は何の感触も無かったが、少しだけ、暖かい気がした。
「ボクは、本当は、おまえ達のことは嫌いだったんだけどな。何の苦労もしてないのに王女になんてなったおまえ達が」
自分と比べて、なんて不公平なんだろうかと、そう思っていたのに。
「けど、おまえ達はおまえ達で、いろいろあるんだな。相手を知らずにいるっていうのがどれだけ怖いことなのか、よく分かったよ」
あの人の過去も、目の前の少女の過去も、本人や大神官から告げられるまでは想像もしなかったものだ。
人には、その人だけしか知らない過去があるのだ。
知らないままに、確認もせずに、ただ自分の見た範囲だけで決めつけることがどれだけ愚かなことなのか、よく分かった。
「……ボクのために泣いてくれたおまえを、ボクは忘れない」
後から後から零れる涙をそのままに、少女はただジッとこちらを見つめている。
唇を引き結び。
しっかと小さな両手で自分のスカートを握りしめて。
「クリスのため、っていうのもあるんだろうけどな……少なくとも、おまえは、ボクの命を惜しんでくれた」
少女の目から、一際大きな涙が零れた。
その涙を拭ってやることはしなかった。
それはきっと、自分の役割ではない。
「だけど、もう十分だ」
もう一度、頭の部分を撫でるように手を動かしてから、アルトリ

ートは立ち上がった。
それだけで、一歩分の距離ができる。
真っ直ぐな目でこちらを見る小さな少女を自分は忘れないだろうと思った。
幼かったクリスの姿をふと思い出す。
（……嗚呼……似てるんだな、おまえ達は）
真っ直ぐな瞳。まっすぐな心。
何よりも大切に思った、人々の在り方。
アルトリートは暖かい気持ちを噛みしめて笑った。
出来る限りの祈りを込めて。

「おまえはおまえの人生を歩め」

※　※　※

処刑の日の空は高かった。
風は穏やかで、雲はゆったりと流れに身を任せている。
新しい服に着替えさせられ、手に枷を嵌められた姿で、けれどアルトリートは晴れ晴れとした気持ちで歩いていた。
いい洗濯日和だと、彼女（エネメア）なら笑うだろう。
いい乗馬日和だぞと、彼（クリス）なら笑うだろう。
アルトリートは空を見上げる。
本当に、いい天気だった。
処刑を室内でなく、庭の一角でしてくれたのは、ある意味ありがたい。
空の下で死ねるのだ。
全ての証言をし終えて、毒杯を手にする。
言葉に出さずに、心の中で呪文を唱える。

飲み干した毒は、何の味もしなかった。
ただ、眠りに落ちるように意識が急速に遠ざかる。
最後に見た空は、どこまでも澄みきって青く、高く、美しい。

エネメアの瞳の色だと思った。

2013

エピローグ

白い翼をもつ鳥達が、自由を楽しむように城の上を舞っていた。
響いていた歌声は消え、かわりに定刻よりも遅くなった鐘がカロンカロンと音を響かせている。
西の空から渡ってきた鳥は、最後の鐘の音と同時に白い建物の屋根に留まった。
小さな建物だった。
中も外も真っ白に塗られ、壁は異様に厚く、窓らしきものは天井間際の小さな換気用小窓のみ。
そこから差し込んだ光が内壁に反射して、うっすらとした光を下へと放っていた。
建物の中には台座が六つ。
そのうちの一つに木の棺が安置されている。
厚みのある蓋には手彫りで装飾が施されており、よほどの職人が丁寧に彫ったのだろう、ひどく複雑かつ精緻な模様をしていた。
そこは城内にある死体安置所だった。
身分ある人が亡くなった時、遺族の元に返されるまで安置される場所であり、そのために熱が内部に入らないよう壁も厚く造られ、窓も極力排されている。
部屋の中は外と比べてひんやりと冷たく、冷気の元になっている巨大な氷柱が、壁の内側を取り囲むようにして配置されていた。
本来、ここに遺体が安置されている時は常時三名の見張りがつく。
だが、何故かこのとき、見張りの姿はどこにも無かった。
羽根を休めていた鳥は小刻みに周囲を見渡し、ふと何かに驚いたように勢いよく羽ばたいた。

2014

力強い羽ばたきの音に混じるように、建物からくぐもった重い音が響く。

誰もいない安置所で、それはゆっくりと床に落ちた。

頑強な造りの蓋は、床に落ちた瞬間たわむように震え、大きな音をたてて仰向けに転がった。その晒された裏側にも、不思議な配列の円と文字が描かれている。

蓋を失った棺が軋み、中から伸ばされた白い手が、棺の縁を掴んだ。

指の長い男の手だった。

棺の中から出てきたということは死体であろう。だが、動きこそ緩慢だが、その肌の色は生者のそれと何ら変わらなかった。

棺に入っていた男はゆっくりとした動きで身を起こし、項垂れるように俯く。動きにあわせて、癖のない黒髪がわずかに揺れた。

ひどく生気の無い顔の男だった。

造作は整っているのに、空虚な印象を人に与える。薄く開かれた黒い瞳は焦点があっておらず、目の前の光景を映しているかどうかも怪しかった。

男は身じろぐようにして、一度、体を起こそうとしてみる。左手が掴む縁の部分が軋んだが、上手く体を起こすことはできなかった。

そのとき、コトンと、小さな音がした。

体を支えていた男の右手に何かが触れる。

体の上に置かれていたものが、身を起こす際、横に転がり落ちたらしい。男はぼんやりとそちらを見る。

一瞬だけ、男の瞳の焦点があった。

古びた小さなコインだった。

どういうわけか半分しかない。

わざわざ穴を開けて紐を通してあるところをみると、首飾りなのだろう。

男は長い間それを見つめていたが、やがてゆっくりと動き出した。

まるで『体の動かし方』を練習するように、今度は慎重に、重く

軋む体をゆっくりと動かして棺から出る。
カラと背後で鳴るコインの音にも、もう反応しなかった。
男はゆっくりと歩き出す。
健常な大人が三人がかりでようやく開けれるという厚い扉を軽々と開け、まるで白い闇のような光の中に躊躇なく踏み出す。
――後にはただ、開け放たれた棺と、小さなコインだけが残された。

※　※　※

中の住人を失ってからしばらく。
棺の裏側から、黒い染みが世界に広がった。
円と文字の配列で成っていた模様は消え、かわりに人型の闇がゆっくりと身を起こす。
『それ』は項垂れるように棺の中を見つめ、どこか悲しげにため息をついた。
誰の手も借りないまま、開かれたままの建物の扉が閉まる。
人型の闇はゆっくりと手らしきものを棺に伸ばした。割れたコインの片割れを拾う寸前、ソレは白く美しい手に変わる。
拾い上げるのと同時、床に落ちていた蓋がふわりと浮き上がり、『それ』の後ろで浮遊した。
『それ』はコインを丁寧に棺の中央に納める。
敬うように右手を胸に当てた。
――あなたのものですよ、□□□□□□。

2016

静寂の中に、その声は染みいるように響いた。
宙に浮いていた蓋が棺の上にゆっくりと被さり、黒い人型という異物以外、数刻前と変わらない光景が出来あがった。
例え欠けているものがいくつかあったとしても、それに気づける者は稀だろう。
少しだけ落下の衝撃で痛んだ蓋を撫で、『それ』は額らしい部分を棺にコツンと当てた。
情とした声が囁く。

――さぁ、始めましょう。

いないはずの誰かに、涙を零すような声で。
ほんの少しの祈りを込めて。

――嘘と虚構に彩られた、煉獄の喜劇（ルストシュピール）を。

2017

番外編　【禁断の問いの答えは……？】

王都西区、大神殿。

そのうちの一つ、レゼウス神殿の中をあたし達は歩いていた。

一般公開されていないせいで、神殿の中は人気（ひとけ）が無い。鐘楼へと続く上層階は特にそれが顕著（けんちょ）で、神官の姿すらほとんど見なかった。たまに見かけるのは、重要な部屋らしき場所に立つ神殿騎士。それも片手の指で数えれる人数しかいない。

ほぼ無人の通路を歩みながら、レメクは終始、無言だった。

あたしも沈黙につきあって、黙ったまま流れていく神殿の様子を眺めていた。

『神々の王』の神殿というだけあって、レゼウス神殿は他の神殿よりもさらに豪奢でキラキラしていた。

壁も床も天井も柱も全てが装飾で彩られ、今まで『豪華だ』と思っていた王宮の廊下が、ずいぶんと地味に思えるほど。何もかもが『お宝』で、神殿がまるごと大きな宝箱のような感じだ。

……正直、この神殿を全部壊して売り払えば、王都中の人間は飢えずにいるんじゃなかろーかと心から思うのだが。

（……神様なんて……どれだけ必要なときにも、何もしてくれないのに……）

痛む目をシパシパさせながら、あたしはそんなことを考えていた。

お母さんを喪った時も、プリムを喪うことになった時も、アルが大事な親友を喪った時も、神様はなんにもしてくれなかった。奇跡なんか起こしてはくれなかった。

なのに、なんでこんなにキラキラに飾らないといけないのだろうか？

どれだけ宝物で飾り立てたって、なにもしてくれやしないのに。

「……ベル」

黒くてドロドロした気持ちでいると、あたしを抱っこしてくれて

いるレメクがそっと声をかけてきた。
振り仰いだレメクの瞳は、どこか悲しげな色をしている。
（……おじ様……）
レメクはそれ以上何も言わず、ただわずかに目を伏せた。
あたしもしおしおと顔を伏せる。
……闇の紋章で繋がってるレメクには、あたしの気持ちは筒抜けなのだろう。
間違ったことを考えたとは思わない。思わないのだけど……悲しそうな目を見ると、胸のあたりがチクッとした。
あたしはレメクの肩に頭を擦りつけ、そのままコトンと体重を預ける。大きな手が伸びてきて、優しく髪を撫でてくれた。
嬉しかった。
けれど、せつなかった。
わずかな間にいろんなことがあって、今も頭の中がこんがらがっている。それを上手く整理できなくて、ふいに無性に叫びたくなったり、暴れたくなったりした。
けれど、こんな状態のあたしを置き去りに、時間は刻一刻と過ぎていく。寝込んでいる間に全てが終わってしまったように、時は決して待ってはくれないのだ。
（……あたしはこれから、何をすればいいのかな……）
いろんなことを見て、いろんなことを聞いて、いろんなことを知って、わずかに信じかけていたものを失った。
無力でも頑張れば頑張っただけ、未来には何か希望のようなものがあるんじゃないかと……そう思い始めていたのに、そんなものは幻想なのだと思い知らされたのだ。
力がなければ、何もできない。
全てを覆してしまえるほどの、圧倒的な力が無ければ――
（……でも、そんなの……どーやって手に入れればいいんだろ……）
あたしは途方に暮れた。

気持ちだけで「こんなの間違ってる！」と叫ぶのは簡単だったけど、その間違いをなんとかするために何をどうすればいいのかが分からない。

あたしは思わずレメクを見上げた。分からないことがあると、すぐレメクに答えを求めてしまう。

「……おじ様」

「……なんです？」

ゆっくり歩くレメクの歩調にあわせて、神殿の絵画から美女達が移ろいながら微笑みかけてくる。それは優しい笑みのはずなのに、あたしには嘲笑に見えた。

「何を勉強すれば……もっともっと、沢山のことができるようになるの……？」

レメクはあたしの問いに一瞬だけ表情を暗くし、すぐにそれを消して微笑んだ。

「ベル。……勉強は、『何を学ぶか』の前に、大切なことがあります」

「……？」

「何のために学ぶか、です」

首を傾げるあたしに、「全てにおいて当てはまるわけではありませんが」と前置きしてレメクは語った。

「どのようなものであれ、目的をもって学ぶものは、何の目的もなく他から押しつけられたものよりは、頭の中に残るものですから」

「……がんばって覚えようとしても、覚えられないものもあったのに？　……です？」

忘れかけるデスマスをくっつけると、レメクは柔らかい微苦笑を浮かべた。

「苦手なものは誰にでもあります。……学びたいと思う気持ちに、理解がおいつかないことも。焦っていっそう時間を無駄にしてしまうことだってあるでしょう。……いつだって学ぶべきことは多すぎて、時間はあまりにも少なすぎて、出来ることよりも出来ないこと

のほうが多いのです。『これ』と目的を決めたのなら、それは尚更でしょう」

レメクの言葉に、あたしは眉をしょんぼりと垂れさせた。

やる前から前途多難な気持ちになってきたのは何故だろう？

「ですが……ベル、時間をかけてでも、少しずつでも、身につけていくことはできます。……焦ってはいけないのです。もしあなたが何かを学びたいと思ったのなら、その何かを詳しく教えてください。目的にあわせて、じっくりと学んでいきましょう」

深い色の瞳を見上げながら、あたしはゆっくりと瞬きをした。

学びたいことを『目的をもって』学ぶ。

そのためには、まず何が学びたいかを自分で把握しないといけないのだろう。

あたしはうんうん唸って、頭の中に浮かんだことを口に出してみた。

「……誰かを助けるために……国で決められたことを壊さないといけない時、どうすればいいかは……？」

もしそんな方法があるのならば、と思って口にすると、レメクはするすると答えを返してくれた。

「三十余りある民族全ての掟と、王国が始まってからこれまでに定められた法の全てを覚え、宮廷内の権力図と領地における力関係、列国の状況を把握することが最初の一歩となります。その後、突破口を探すのです」

……。

「……悪い人を懲らしめてやりたい時……は？」

「刑罰に関する法を覚え、現状を把握するための情報収集能力と同時に、交渉術と煽動能力を身につけることでしょう。あと、武術」

……。

あたしはガックリと肩を落とす。

ナゼか具体例を聞くほどに目の前が暗くなっていくよーな気がす

るのだが、気のせいだろうか……？
（……最初の一歩が……キビシー気がするんだけど……）
あたしは涙目でレメクを見上げた。
レメクは物静かなウツクシーお顔。
「……神様の足についてるものは？」
「？　なんの話です？」
レメクが不思議そうな顔になった。
だがあたしがソレの詳しい話をする前に、進行方向から突然伸びてきた手がひょいとあたしをレメクの腕から盗み出す。
「はいほー。ちょっとお邪魔虫しますわよ、お二人様」
あっ！
「アディ姫！！」
ビョッと体を硬直させたあたしに、相変わらず存在感のある巨乳姫は艶やかに笑う。
「んっふふー。末姫ちゃんおひさしぶりー！　やぁやっぱりこのちっこい抱き心地がたまらないわ！」
失敬な！！
「もっもいまももももいまももむっ！（ちっこいのはよけいだもんっ！）」
豊かなムッチーに圧迫されながら、あたしは憤然と抗議。
救い主となるはずのダンナサマは観戦モードにでも入っているのか、さっきから全くの無反応だ。
「三日間寝込んだって聞いた時は心配したわよぅ。熱高いし、下がらないし。思わず病原菌採取しに観察セット持って走り込んじゃいそうになったのよ～」
……そんなことしそうになってたのか……このオネーサマは……
「ちょっと違うことしてたから行けなかったけど、熱があんまりにも高いから、このまま死んじゃうんじゃないかって、侯爵ってば真っ青になってたのよね～ェ。ね？　コ・ウ・シャ・ク・サ・マ？」
あたしをムッチリに挟み込んだアディ姫は、嬉しそうな声でモチ

モチ動く。
今！　まさに！！　あたしが窒息しそうで真っ青になっているのですが気づけ乳姫。頼むから！
そんな極限状態のあたしをレメクが静かに指摘した。
「……アデライーデ姫……ベルがそろそろ限界です」
遅いよ！
「りゃっ。まだ百二十三秒しか経ってないんだけど」
時間計んな！！
「前はもうちょっと長くいけたはずだから、やっぱり体力落ちてるのねぇ……」
地面に下ろされたあたしは、大きく息を吸いながら涙目で二人を睨み、逆方向へダッシュする。
ぐれてやる！！
「うわっ！」
「むぎょ！」
しかし走ったその先には、邪魔な物体がデンと直立していた。
ぶつかって吹っ飛び欠けて慌ててソレにしがみついたあたしは、既知の感触に相手の正体に気づいた。
「アル！！」
唖然とした顔であたしを見下ろすのは、元アルトリートこと現クリンクリンじゃないクリストフ。確か王族名がアルなんとかの、面倒くさいので呼び名『アル』だった。
あたし達は揃ってビックリ顔で互いを見つめ合う。
あたしはアルを見つめたまま足にガシッとしがみつき、そのままシャカシャカと登った。
「ちょっ……うわっちょまっこらどーゆー登り方してやがんだテメェは！」
そのままシャカシャカと定位置である肩まで登りきって、あたしは肩車の位置に体を落ち着ける。
そのままガッシとアルの頭を抱えて髪に顔を埋めた。

「おいこらまた何か冷たいもんがポタポタと！」
ええ。ポタポタと。
「コラちみっちょ！　……ちみ……っちょ……　……？」
焦ったような怒ったような声は、すぐに戸惑った声にかわった。
あたしは頭にしがみついたまま鼻をすすりあげる。
レメクがしばらく無反応だったのは、きっとアルを見たからなのだろう。レメクと違って常に匂いがしないから気づかなかったけど、たぶんアディ姫と一緒にいたのだ。
あたしはアルの頭をギュッとする。
顔を見た瞬間、涙が溢れて止まらなくなった。
三日ぶりに見たアルの顔は、前とは比べものにならないほど窶(やつ)れていた。顔色だってひどいし、目も目の縁も赤くなっている。
どれだけ泣いたんだろう。
どれだけ悲しんだんだろう。
あたしが悲しいって思った気持ちの何倍も、きっと悲しくて辛かったに違いない。
なのにその顔を見た途端、最後に見たアルトリートの顔が浮かんで涙がブワッときた。一番悲しんでいるのはアルなのに、自分の気持ちを抑えられなかった。
「～～～～ッ」
せめて泣き声だけはあげるもんかと口を固く結んで、あたしはアルの頭の後ろで自分自身と戦った。ふいに匂ってきたアルの匂いは、悲しいのと苦しいのとがいっぱいで、胸がギューギューと締めつけられる。
声を押し殺してしゃくりあげるあたしの頭を大きな手がくしゃりと撫でた。
レメクのよりちょっだけと小さくて、レメクのより硬くない手だ。
「……ありがとな……ちみっちょ」
あたしはグッと息を殺して衝動を堪えた。
一瞬、大声をあげて泣きそうになった。

――だけどそれは、我慢しなきゃいけないのだ。

「あいつのために歌ってくれて……あいつのこと……思ってくれて」

ありがとうと、言われた言葉にまた涙が出た。

あたしは、アルとアルトリートの間にある沢山の思い出も、気持ちも知らない。

だけど言葉に込められた思いに、匂いで感じる気持ちに、こんなにも胸が痛くなる。

（アルにとって、アルトリートって……）

あたしにとってのお母さんのように、『世界のほとんど』と言えるような、大きな存在だったんじゃないだろうか。

（なら……）

――なら、それを喪った彼はこれからどうするんだろうか？

あの時のあたしには、プリムがいてくれた。力一杯体当たりで、あたしを引っ張り出してくれた。

アルは誰が引っ張り出してくれるのだろう？　誰が助けてくれるのだろう？

くしゃくしゃと頭を撫でてくれるアルの手にまた泣いて、あたしはしゃくりあげながら顔を上げた。

ふと、こちらを見ている二人と目があう。

（……ああ……）

ストンと、グルグルしはじめた気持ちが落ち着くのを感じた。

（……アルは、一人じゃない……）

大丈夫だ、とは思わない。それはあたしが断言できることじゃない。

けれど、傍にいて、ちゃんと見てくれている人がいる。

――独りじゃないのだ。

「……クリンクリンちゃん」
「……まて、アディ。それ、俺のことか……？」
ぐしゅぐしゅ言ってるあたしの前で、アディ姫が腕組みで胸を強調させながらニンマリと笑った。
その視線に捉えられたアルが、微妙に逃げ腰になっていく。
「だーって、アルルンって呼べないんじゃ、クリンクリンちゃんって呼ぶしかないじゃない」
「なんでそうなる！？　つーかそれ、ちみっちょと同レベルの呼び名の付け方じゃねェか！？」
……どーゆー意味だ？
アルの髪の毛をギュッとすると「いてー」と抗議の声をあげられた。
抗議をあげたいのはあたしの方だ！
「だ、だいたいなぁ、アディ！　『ちゃん』付けって何だよ！？俺の方が年上だろ！？」
「……だってねぇ……クリちゃんってば年はあたしより上のはずなんだけど……ちっとも年上って感じしないっていうか同年代っていうかむしろ年下っていうか……」
「うっせぇ！　つか、そこは普通に『クリス』だろ！？」
なんかアルの耳が赤くなってる。
……てゆか、年下っぽいって言われて反論できないんだな……アルってば。
あたしとレメクはなんとも言えない表情で目を見交わした。
この二人、ウマが合うんだか合わないんだか、ビミョーに分からないんだけど、どういうことだ？
「まぁ、それは横に置いておくとして」
「置くな！」
「猊下にお目通りしたいって連絡、先に回しておいたのに、ここで喋って時間潰してちゃダメなんじゃないかな～って思うのよ、あたし」

「うっ」
あたしを頭に装着しているアルが、ビクッと大きく震えた。
アディ姫は心配そうな演技顔で小首を傾げる。
「猊下もお忙しいから、そんなに時間とれないでしょうし。さくっと行ってきたほうがいいんじゃないかしら？　末姫ちゃんもつきあってくれるだろうし」
アルがあたしを仰ぎ見た。
頭上から覗き込んだあたしと目を見交わしてから、アディ姫の方をチラと見る。
「お……」
『お』？
「……いや……そうだな」
ムッチリ姫に何かを言いかけ、けれど彼はすぐ気まずげに視線を外した。
何を言いたかったのか分からないが、視線が向いていなかったから『おっぱい』では無さそうだ。
（……なんか……レメクがすごいジト目であたしを見てりゅ……）
ジト目レメクに「なんでせぉ？」の視線を向けていると、アルがもう一度あたしを見上げた。
おっと！　肩から落っこちそうになりましたよ。
「つーか、ちみっちょ、そこにくっついてたら、教皇の所に一緒に行くことになっちまうぞ」
「むぉ？」
言われて、あたしは目をパチクリさせた。
アルルじーちゃんに会いに行くのは別にいいのだが、むしろあたしがくっついていっていいのだろーか？　――あと、レメク。
そのレメクに視線を向けると、横っちょにいたアディ姫がニッコリと微笑んだ。

「装着したまま行くといいわよぅ。あたし達はちょっと大人の話し合いしないといけないし。……面倒な話だから、末姫ちゃん、一人話に置いてきぼりになっちゃうでしょ？」
「む！？」
『大人の話し合い』！？
その言葉に、あたしはビカッと目を光らせた。
「さてはオネーサマ！　おじ様を誘惑する気ですな！？」
「しないわよぅ。というより、できないわよぅ、こんなに気持ちが枯れてる人～」
……どーゆー意味だ？
「だからねぇ、そっちにくっついてってる方が、末姫ちゃんも寂しい思いしなくてもいいんじゃないかなーって思ったの。それともそれとも？　あたしがついて行ったほうがいいのかな？　ん？」
「い、いらねぇよ！」
ナゼか慌ててアルが数歩分後ろに下がった。
宛然と微笑むアディ姫を見やった後、あたしはレメクの方を見る。
レメクは何も言わず、ただ静かに頷いた。
あたしも頷く。そして胸をドンと叩いて請け負った。
「アルはあたしに任せておくのです！　ちゃんと監視するのですよ！」
「なんでおまえが俺の監視だよ！？」
「お願いね～末姫ちゃん～」
「お願いされるのかよ！？」
もちろんだとも。
あたしはしっかりと頷いてから、何故か同情気味な顔になったレメクに向き直り、アルの肩の上で背伸びした。
「おじ様！　さっきの答えは帰りがけにまた尋ねるのです！」
「……『さっきの』？」
不思議そうな表情を一瞬だけ顔に浮かべ、彼はすぐに頷いた。
「神様の足の、という問いですか」

「そうなのです！」
「！？」
なぜかアディ姫がギョッとなって五歩分の距離を一気飛び。
それを不思議そうに見やってから、レメクは首を傾げつつ頷いた。
「何のことなのか、後であらためて聞かせてもらいます。……私達は『太陽の間』の方にいますが、こちらの話が終わってから迎えに行きますので、猊下の部屋で待っていてください」
「待ってるのです！」
ビョッと伸び上がって、あたしは全身でマッテルワをアピールした。
それを見て、ようやくレメクが作り物めいていない笑みを零す。
少し肩の力が抜けたようなその表情に、あたしもちょっとだけホッとした。
「さー、アル。行くですよ」
定位置の肩車に戻って、あたしは今までレメクが向かっていた方向をビシッと指さした。
アルは一瞬だけレメクの方を見かけ――慌てたように視線を逸らす。
そして、やるせないため息と同時に歩き出した。

人の肩に乗っていると、体がゆっさゆっさと大きく揺れる。
あたしは小さな体の利点を生かして、アルの頭にしがみつくことで大揺れするのを防いでいた。抱っこしてくれている時と違い、この体勢は揺れ幅が大きくてイカンのだ。
かわりに視界はすこぶるイイのだが。
「……なぁ」
しばらく無言で歩いていたアルが、肩に乗ってるあたしに声をかけてきた。
「なに？」

「……その、よ……」
何度か言いよどみ、言うべきか言わざるべきか迷ってから、アルは魂が抜けたようなため息をつく。
「いや……なんでもねぇ……」
あたしはアルの髪の毛をギュッと掴む。
問いたかったのはアルトリートのことなのだと……直感で分かった。
というより、彼が今、問いたそうなことなんて……他に思いつかない。
「……アル」
「……ん？」
あたしから声をかけると、やっぱり魂が半分以上どっかに行ってそうな声で返答される。
さらにギュッを強くして、あたしは声を落とした。
「あたしね……アルルじーちゃんに尋ねたいことがあるの。……ですよ」
「……そのじーちゃんが誰なのか、ちょっと怖い想像になるんだけどよ……」
「アルルじーちゃんって言ったら、教皇サマなのですよ」
「……ソレが怖いっつーんだが……てか、おまえ、その珍妙な話し方ってどうにかならねぇのか？」
珍妙とは失敬な。
「言葉の後ろには、ちゃんとデスマスをつけないとイカンのです！だから頑張ってつけてるのよです」
「……いや、明らかにソレ以前の問題が」
どんな問題だ。
「……まぁ、どうせ、他の連中がよってたかって直させるだろうけどな……おまえ、王宮にずっと残るんなら、ちゃんと言葉遣いもきちんと直しておけよ。……こういう……肩車とかもよ、しないようにしとけよな」

「？　アルはもっと大変なんじゃないの？　王族になるんだから。です」

「……そこは『です』いらねぇ」

力無く笑いながら、アルはその点について返答してくれなかった。

それっきり黙ってしまったので、あたしも口を噤む。

静かだった。

ただ足音だけが人気のない廊下に虚ろに響いていく。

心が空になりかかっている人の足音は、どこか乾ききった土の音に似ていた。

体重がどこにかかっているのか分からない音。軽い音なのに、重く感じる『何か』。

あたしは顎をアルの頭に乗せた。

アルの心は……此処に無いのだ。

少なくとも半分以上は、『此処』ではなく、『何処』ですらもない場所に飛んでいってしまっているのだろう。誰かが繋ぎ止めておかなければ、残っているもう半分もそちらに飛んで行ってしまうかもしれない。

（……家族が欠ける、っていうことは……）

たぶん、自分の心の大切なものが、大きく欠けてしまうということなのだ。

失ったそこに何かを入れて、代わりにしようとしても出来はしない。

欠けた形はきっと喪った人と同じ姿（かたち）をしていて、誰もそれを代わりに埋めることはできないのだ。

日常のちょっとした会話に――景色に――匂いに――足音に――生きてこの目で見る全てのものの中に、いつだってその人は住んでいる。

全てのものに、思い出がある。

――それはひどい痛みであり、耐え難い悲しみでもあるけれど……

けれどその中に――どうしようもないほどの、「大好き」と「ありがとう」があるのだ。

――その人と共にあることができた世界と、大切なその人への思いが。

（……アル……）

アルもいつか決着をつけるのだろうか。他に教わることはできない、自分で気づいて納得して決着をつけなくてはいけない、切なくて悲しい現実に。

（……アルトリート）

あたしは心の中で、もういなくなってしまったその人に語りかける。

アルのことを最後まで気にかけていた、アルにとって大切な家族……

（……アルを守ってね……）

零れた涙を拳で拭って、あたしはしっかりと前を見据えた。

ほぼ無人だった廊下に、人の姿がチラホラと見えはじめる。

何故か唖然とした顔であたしの方を見る彼等に、小さく手を振ってみた。

と、アルが不意に立ち止まる。

「？」

あたしは進行方向に視線を向け――すぐに破顔した。

「バルバロッサ卿！」

デカイ熊男が、そこにデンと立っていた。

「おぅ。嬢ちゃん。熱下がってよかったなぁ――っと」

相変わらずどっしりと太く重い声で言ってから、バルバロッサ卿

は慌てて自分の口を塞ぐ。
　それから、とってつけたような恭しい態度であたし達に一礼した。
「失礼いたしました。殿下のお加減が悪いと聞き心配しておりましたが、熱も下がられたようで何よりです。猊下へのお目通りについては伺っておりますので、どうぞこちらへ」
　あたしは目をパチクリさせたが、アルは何も言わずにバルバロッサ卿が開けてくれた扉の中に入った。
　すれ違う一瞬、あたしはチラッとバルバロッサ卿を見る。
　バルバロッサ卿はどこか沈んだ感じの微苦笑を浮かべ、あたしに向かって小さく頷いてみせた。
　あたしも反射的に頷き、視線を部屋の中へと移す。
　異様に広い部屋の中、上品なカウチに座って、いかにも厳格そうなおじーちゃんがこちらを見ていた。アルルじーちゃんだ。
「おじーちゃま！」
　声をかけると、なぜかホロリと半笑い。
「……許可した以上、慣れんといかんのだろうが……少々、早まった真似をしたと思わんでもないな……」
「……つーか、ちみっちょ。おまえ、その位置にずっと居続ける気か？」
　肩車してくれているアルに言われて、あたしは「おっと」と慌ててアルの肩から飛び降りた。
「うわっ」
　何故か驚くアルを尻目に、綺麗に背後に着地する。途端、ぐらっと大きく傾いだ体をすぐ傍で控えていたバルバロッサ卿がどっしりと支えてくれた。
「殿下。あまり無茶はされませんように」
　アルルじーちゃんの前だからか、バルバロッサ卿は恭しい口調のままだ。
　あたしは周囲を素早くチェックし、部屋の中にアルルじーちゃんとあたし達以外いないのを確認してからアルの横に並んだ。

えーと……えーと……
「おじーちゃま。ごきげんうるわしぅ」
足をちょいと引いてチョコリと挨拶。アルルじーちゃんの顔が少しだけほころんだ。
「……なるほど」
……なにが『なるほど』なんだろーか？
「女王が笑いながら言っておったのは、ソレか。……あの馬鹿助がメロメロだとか言っておったな。……実際に馬鹿助がどういう趣味になったのかは知らんが、子もおらんうちに親心が育ってしまった感はあるな……」
ぶくっ、という変な音が聞こえて、見るとバルバロッサ卿が口を手で押さえて笑いを噛み殺そうとしていた。
それを無視して、アルルじーちゃんは自分の前の椅子を指し示す。
「まぁ、立ち話もなんだ。……座るがいい。見上げながら喋るというのも、堪える」
言われて、あたしとアルは慌ててアルルじーちゃんの前に座った。
椅子に座る前、アルが一瞬、どういう風にして座ればいいのか、という顔をしていたのが妙に印象的だった。
「さて……話がある、ということだったな」
居心地悪そうにフカフカ椅子に沈んでいたアルは、アルルじーちゃんの声にハッと顔を上げる。
その顔が一瞬で引き締まった。
「ああ。……言っておきたいことがあって、来た」
偉大な教皇サマに向けるには、あまりにもひどい言葉遣いだった。
とはいえ、アルルじーちゃんの傍らに立ったバルバロッサ卿はといえば、目を瞑ってそ知らぬ風を装っている。
アルルじーちゃんも、言葉遣いを咎めるわけでもなく、眼差しだけで先を促した。
アルは相手の瞳をひたと見つめ、ハッキリと言葉を口にする。
「俺は王族にはならない。……王弟だなんて、まっぴらごめんだ」

「……ふむ」
目をまん丸にしたあたしは、アルルじーちゃんの声にハッとなってそちらを向いた。
どういうわけか、アルルじーちゃんは静かな表情のままだった。全く驚いていない様子に、あたしは傍らに立っているバルバロッサ卿の方を見る。
バルバロッサ卿も一切表情を変えず、彫像のようにそこに佇んでいた。
「王位継承権の放棄、ということか」
「……そうだ」
アルルじーちゃんの声に、アルはキッパリと頷く。
意志の固そうなその顔に、アルルじーちゃんはため息をついた。
「……他国では、実例もあるな。それを見れば、王位継承権は己の意志で破棄できるものだと――とらえるのが普通であろう。だが……ことナスティアにおいて、それは当てはまらん。王家の血をひく王族(もの)は、認められた後は、死ぬまで王族だ。それをやめることはできん」
「な……！」
その言葉に、アルは目を剥いた。
「なんでだよ……いらねぇっつってんだろ！？」
「ならば、なぜ最初に受けた、という話をせねばならん。……それはおまえにとって苦痛であろうが」
「受けたのは俺じゃねぇ！」
思わず立ち上がったアルに、おじーちゃまは静かな表情のまま首を横に振った。
「いいや。おまえだ」
「俺は……！」
「儂は、クリストフという名の男に王族の名を与え、王家の一員と

認めた。女王もこれを認め、そのことはすでに大祭の間に公然のものとして広まっておる。……他国の目があったからな。今更無かったことにはできん。国の内外に正式な文書を発信していないというだけのことだ。この事実は消せん」

「……」

「それが出来るのであれば、今の結果は最初から無かった。……儂から言わせてもらえば、何故この時期を選んだのか、と……そういうことになる。……王族というのはな、他の者が考えるよりもおぞましく、そして不幸なものだ。王家の血をひく者は、大なり小なりそのことを知っておる。知らぬのは、王家の直系として育ちながら、責務を放棄した前王とその妹ぐらいなものだろう。栄光と富だけしか目にせず、国を維持することの労苦を全て他の者に肩代わりさせた……他の愚かな貴族も同じだな。国の財産を個人の財産と勘違いし、それを使うことができるのが王だと誤解しておる」

言って、アルルじーちゃんは深いため息をついた。

「王族とは、国に繋がれた奴隷だ。どれほど忌避しようとも、血からは逃れられん。女王にしたところで、本当なら王座など捨ててしまいたいというのが本音だろう。だが、それは許されておらん」

「……誰が許さないって言うんだよ」

「ナスティアだ」

その言葉に、あたしとアルは揃って目を丸くした。

「「ナスティア？」」

「そうだ」

頷き、アルルじーちゃんは椅子に背を預けてもう一度ため息をついた。

「この国を作ったナスティアは、王族に掟を課した。血族の掟、というものだ。曰く、我が血を引く者、王族としての責務として、この国の維持と繁栄に尽くせ……という感じのな」

「そんなのは……」

「国を作った者なら誰でも言うような、どこの国にでもある創始者

の言葉……そう言って終わらせられるのは、他国の者だけだ。この掟は遵守せねばならん。これは義務だけで言っておるのではない」

厳しい声で言われて、アルは開きかけた口を閉ざした。

睨むようにして見つめるアルに、威厳を正した教皇サマは厳かに言う。

「この国にもし王族(わしら)がおらぬようになれば、紋章の器となる者もおらず、儀式すら執り行えぬようになるだろう。そうなれば、地底から招かれぬ客が這い寄って来る。ナスティアが暁の賢者等と共に封じた魔物達がな」

「……どこのお伽話だよ……そりゃ」

「史実だ。……かつてこの国を維持しようとし、強い力を求めて直系の子等が間違った婚姻を繰り返したのも、なんとしても力を維持し、封印し続けねばならんと思ったからだ。結果としてかえって王族の出生率低下を招いたがな……。ただでさえ魔力の強い子供は、同じく魔力の強い母体からでしかほとんど産まれん。……おまえの父親が、下劣な行為を繰り返しておったのに、それを強く咎められんかった背景も、そこにある」

「……あわよくば、子供が生まれるように……ってか？」

「そうだ」

吐き捨てるように言ったアルに、おじーちゃんは疲れたため息をつく。

「儂に子を成す能力があれば、儂も夜毎寝所に女性を呼ばねばならんかったろう。女性と違って、男は一年に何人でも子を成せるからな」

「……」

「王族が少なくなった時、王族の男子にはその義務が課せられたことがある。先代以前の代の話だがな。だが、儂にはそれを課せられなんだ。……近親婚を繰り返した一族の呪いのようなものでな。生まれつき子を成すことはできんと定められておったようだ」

さすがに絶句してじーちゃんを見るアルに、苦笑めいたものを浮

かべてアルルじーちゃんは嘆息をついた。
「外見的には他の者と同じだ。だが、闇の紋章でそう判断されたのだ。間違いはなかろう。……儂が子供の頃、王宮を出て他国に留学したのも、ベラがかつて王位を蹴ったのも、それが理由だ。……あの者もまた、儂と同じ定めを負っておったからな」
「……ベラおじーちゃんが？」
レメクの義父でもあるその人のことは、レメクが語ってくれた内容でしか想像できない。
どこか豪快でおおらかでちょっと茶目っ気のある、そんなおじーちゃんを想像していた。
「あやつも、儂も、人には言わなんだが何年も悩んだ。……だが、今はその話ではないな。……それに、今の王は、王族だからといって無理やり子作りをしろと言わん。無論、おまえが望むのなら、いくらでも女をあてがおう。王族を増やしてくれるのは、有り難いことだからな」
言われて、アルはわずかに赤面しながら叫んだ。
「誰が……！」
「と、反発するだろうということは、おまえを知る者達から聞いておる。まぁ、最低でも一人は娶ってもらわねばならんだろうが……それもまた、後の話であろう。……だが、現状、王族をやめることはできんと明言しておく。……おまえの意志は関係ない。それができるのであれば、王族の誰もが同じ事をしておる」
「……」
アルは口を引き結び、怒りをこめた目でアルルじーちゃんを睨みつけた。
アルルじーちゃんはその目を真正面から受け、一言一言力を込めるようにして言った。
「だがな、儂もおまえに、王宮に残って王族としての責務を果たせ、とは言わん」
「……？」

「おまえも、王族をやめるというからには、他に何かしようというものがあったのではないか？　――例えば、神官とか」

「……！」

ギョッとなったところを見ると、どうやらアルルじーちゃんの指摘は正しかったらしい。

目に見えて狼狽えるアルに、おじーちゃんは苦笑した。

「クリストフ、という男を王族でなくすことはできん。だが、おまえが別人になりすまし、別の生活を送ることは許容しよう。……これは、女王からの嘆願でもあるからな」

「……女王……」

口の中で呟いて、アルは少しだけ顔を歪めた。

あたしは黙ってその様子を眺める。

アルの表情（かお）は、なんだか泣きそうな子供の顔に見えた。

「王宮のおぞましさも、玉座の苦痛も、あの女王は誰より知っておる。……おまえ達には、それを押しつけたくないのだ。故に、本来なら許されぬ自由がおまえには与えられている。……だが、野放しにはできん。監視役をつけ、その者と共に行動してもらうことになるだろう」

「……それって、自由って言うのかよ？」

「ほとんど王宮から出ることを許されず、玉座と執務室に半ば縛られて生きることに比べれば、余程自由だと思うがな」

「……」

アルは長い間押し黙り、ややあってから「……わかった」と小さく頷いた。

その答えを受けてから、アルルじーちゃんは口を開く。

「本来なら、身分は王族として大神官以上の扱いを受けるのだが……」

「いらねぇ」
「……だろうな。だが、そうなれば、それなりに過酷な日々となるかもしれぬぞ。儂が言うのもなんだが、今の神殿はほとんどが腐っておるからな。何の後ろ盾もない状態で新参者が突然神官として入れば、必ず波風がたつであろう」
「上等だ」
「……その無知な勇ましさはともかく、下手に厄介事に巻き込まれて死なれても困るのでな、ここにいるルドゥインにおまえの後見をしてもらう。同じ神官職だ。力になれるだろう。……後見が儂では、正体を疑ってくれと言っているようなものだからな」
「……」
アルは何かを言いかけたが、結局何も言わずに口を閉ざした。
その様子に、アルルじーちゃんはわずかに眼差しを細める。
「言いたいことは山とあろう。恨みも憎しみも、口に出して楽になれるのなら言うがよい。責は全て儂等の代にある。女王やレンドリアは、己の責だと言っておったがな……全ての過ちの元は、あやつらの代ではない。それ以前の代である、儂が負うべきものだ」
「……」
「憎しみを晴らす手段が欲しいのなら、がむしゃらに上を目指すのがよかろう。いつか儂から教皇の位を奪い、その権力を有するがよい。その権力（ちから）をもってすれば、出来ることも多くなろう。……老いた儂には使えなんだ力も、若いおまえならば使えるだろう」
アルはしばらくおじーちゃんをジッと見つめていたが、ややあって、何かを憚るような声で問うた。
「……第二妃が生んだ王子が行方不明だっていうのは……俺と同じように、王族として生きることを拒んだからか？」
「いいや……」
アルルじーちゃんは静かに首を横に振る。
その顔には疲れた色が滲んでいた。
「アレは……命の危険なあったからだ。当時、王宮は荒れておった。

実際、あの者は幾度も生死の境を彷徨った。何度も誘拐されたし、殺されかけた。樽に詰められ、荒れた海に放り込まれたこともあれば、血の半分以上を失う重症を負ったこともある。……忌々しいことだが、あのド阿呆の悪魔がおらねば、アレの命などとうの昔に尽きておったろう」

……ド阿呆の悪魔ってのは、もしかしてポテトおとーさまのことだろーか？

（おとーさまってば、レメクのことだけじゃなくて、王子サマも守ってたりしたんだろーか？）

首を傾げたが、アウグスタが望めばやってくれそうな気はするから、きっとそういうことだったんだろう。契約とかそーゆーので。

……って、ん？

（……あれ？　でも、願い事は三回までで……おじ様が前に倒れちゃった時、アウグスタは『二回目』がどうとか言ってなかったっけ？）

あたしは首を傾げた。

だが、名推理を働かせる前に、アルの声に思考を中断してしまう。

「そんなことが……あったのか……？」

「一般には知られておらぬがな。……先王は己の子に一切の関心を持たなかった。名を与えただけでも驚きだ。……女王には、名すら与えなんだ父親だからな」

「……」

「だが、それが周囲の反感を買った。第一王妃（アントワール）にとっては、屈辱以外のなにものでも無かったろうが、むしろ取り巻きの反応の方が問題でな。権力図の入れ替えを狙って王宮が二つに割れる事態にまで発展した。その結果、原因を取り除けばいいと、アレの命を狙う者も増えてな……このままでは危ういということで、重症を負ったのを機に療養をかねて別地に移したのだ。……もっとも、重症を負わせたのは、第二王妃（ははおや）だがな」

「！？」

アルトリートは息を呑み、なぜかあたしを見下ろした。
あたしもビックリして息を呑んでいたのだが、何故あたしが見下ろされるのかが分からずにアルに向かって首を傾げてみせる。
……アルが慌ててあたしから視線を外しやがりました。
「王宮に、安全な場所はほとんど無かった。あの当時は、王位継承の問題もあってな……危険だったから身を隠すように指示したのは女王だ。……あの娘は、あやつを心から愛しておった。息子のようなものだ。アレと命のやり取りをせねばならんぐらいなら、全ての泥も毒も自分が浴びると言って、密かに王宮から出し、信頼する者に預けて『行方不明』としたのだ。……そのせいで、一部には色々と誤解を与えたがな」
ふむふむ。
「ということは、メリディスの王子様は、いまも元気なのですな？」
唐突に口を挟んだあたしに、アルルじーちゃんは真剣な目であたしを見つめてから、
「……王子……まぁ……そうだな」
などと妙に言いにくそうな感じに答えを返してくれた。
……なんか、オトーサマの反応にちょっと似てる気がするのは何故だろーか。
「ゴホン……まぁ、そんな感じで、おまえとは事情が違うが、おまえと同じように別地にて過ごしておる。……アレも王族の血からは逃れられんかった男だ。何があっても生きなければならんかった。……生きる意味も理由も持たなくてもな」
アルは一瞬だけ痛みを堪えるような顔になったが、すぐに俯いて表情を隠した。
けれど、斜め下にいるあたしには彼の表情はよく見える。
――迷子になって泣きそうな顔だと思った。
あたしは黙ってしまったアルを見上げ、一生懸命頭の中で言うべき言葉を整頓した。

預かっていた言葉があるのだ。
それはきっと、今、言うべき言葉だろう。
「アル。あのね……あたし、アルに伝言を預かってるの」
「……？」
わずかに目を瞠って、アルはあたしを見つめた。
その姿に、あたしはかつて見たその人の姿を重ねてしまう。
あたしに伝言を託した、今はいない人の姿を。
「『あのコインの片割れは、ボクの墓に入れてくれ』って」
「！」
その言葉で、誰からの伝言なのか分かったのだろう。
大きく息を吸ったアルの顔は、驚愕と悲哀に染まっていた。
「『あれはボクだけのものだから』って」
「……　……　……」
アルの唇が戦慄く。
けれど、言葉は紡がれなかった。
だから、かわりにあたしは言葉を続けた。
「それからね、『女王達は無茶をして公爵をぶちのめしたのだろうから、ちゃんとそういうところも見ておけ』って。……アル。あの人は言ってたよ。『自分のことで女王達を恨むな』って。……アルのこと心配してた。アルは単純だから、感情に引きずられてどう転んじゃうか分からないから、心配なんだって」
アルの顔がくしゃくしゃに歪む。
その瞳から何の前触れもなくぼろぼろと零れた涙に、あたしは自分が泣きそうになるのを必死に堪えて言った。
「あたしにも、言ってくれたの。『おまえはおまえの人生を歩め』って。……でもね、たぶん、アルに向けても言ってたんだと思うのよ」
アルトリートはきっと、アルが誰かを憎むことを望んでいないだろう。
接することができたのはわずかな間だけだったけど、その間に伝

わってきたのは、ただただ、暖かくて優しいものばかりだった。
あたしには、何故彼があんなに穏やかな表情をしていたのかが分からない。自分は処刑されてしまうのに、本当に優しく笑っていた……その理由が分からない。
それでも、最後の時までずっとアルのことを思っていただろうから、そのアルが自分のことで誰かを恨んで生きるのは、喜ばないんじゃないだろうかと思った。
……そう思わずにいられないほどに、彼は、満ち足りた笑顔をしていたのだ。
「……あの者の墓は、レンフォードの敷地に建ててもらうことになった」
堪えきれずに涙を零したあたしの耳に、アルルじーちゃんの声がそっと響く。
「レンドリアが次の公爵に頼み、引き受けてもらっておる。件のコインも、中に収められた。だが……もう、棺は蓋を打ちつけておる。……悪いが、神職にある者として、棺を開けることは許せぬ」
「……俺には……最後の挨拶もさせてくれねぇってことかよ……」
「棺の前までは案内できよう。……だが、開けることは許されぬ。閉ざした棺を開けることは、死者に対する冒涜だと言うのが一般的な理由だが……王族の自害用の毒は、死後数日間、遺体から毒素が出る。もともと、自害せねばならぬほどに追い込まれた時、敵を一人でも多く道連れにするために作られた毒だったからな。……解毒薬は無く、遺体から出る毒の濃度も濃い。……それに、レンフォードは遠方だからな。遺体を損なうことなく、眠りにつく地に運んでやりたいと思うのなら、早くレンフォード家の土地に連れて行ってやらねばならん。……出発はもうすぐだ」
聞くや否や飛び出しかけたアルは、いつのまにかドアの前に立っていたバルバロッサ卿に目を剥いた。
「どけよ！」
「ご案内つかまつります」

「……ッ」
恭しく一礼し、すぐさまドアを開け、こちらに対しても一礼して出て行くバルバロッサ卿に、アルは唇を噛みしめながら後に続いた。
残されたあたしとアルルじーちゃんは、半開きになったドアを見つめてからそっとため息を落とす。
「……心の拠り所を失ったのだ……時間がかかろうな……」
ぽつりと呟かれた声に、あたしはアルルじーちゃんを見た。
おじーちゃんはどこか遠くを見るような目で、アルがいた場所を眺めている。
「恨みでも、憎しみでも、生きる糧となってくれるのならばよかろう。……だが、憎悪で生きる者はそれを無くした時、生きながら死人となる。……残るのは空虚な残骸だけだ」
アルルじーちゃんの声には、それを体験した者だけが持つ深さと重みがあった。
あたしはアルルじーちゃんを見つめる。
アルルじーちゃんにも、あたしの知らない沢山の人生（ものがたり）があるのだ。
「……そういえば、娘よ。おまえは、あの者の付き添いとして来たのか？」
……あいっかわらず、名前では呼んでくれないんだな……おじーちゃま。
「おじーちゃまにコインのことを尋ねたかったのですよ」
「……ふむ」
「でも、解決したのです。あとはおじ様に聞きたいことがあるから、おじ様が迎えに来てくれるのを待つのですよ」
言ってから、あたしは「あっ」と声を上げた。
「おじーちゃまが教えてくれてもいいのですよ」
「？　何か分からんことがあるのか？」
「あい！　神様の足についてるものが何なのか、誰も教えてくれないのです」
「……足？」

アルルじーちゃんは怪訝そうな顔になった。
神様に一番近い人なのに、ピンとこなかったらしい。
「神様の足には見慣れないものがついてたのです。それでアレが何なのか神官さんやお義姉様に聞いてみたのです」
「……それで、答えてもらえなんだ、ということか」
「そうなのです！　みんなすぐに目を背けてしまうのです。何でも知ってるおじ様に聞くしか方法が無いのですよ」
「あの馬鹿助は、べつに何でも知っているわけではないが……しかし、問われて答えぬというのもけしからんな」
「けしからんのです」
「ふむ……」
白い髭を撫でながら、おじーちゃまは黙考した。
「だが、神々の足についているもの、と言われても、何を指しているのか分からんな。翼のついたサンダルを履いておる神もおれば、束縛の革紐を足に括りつけた女神もおったはずだが……」
「なんにも身につけてない神様なのですよ」
「……なに？」
「太陽の神様の像なのです」
その瞬間――

アルルじーちゃんの顔が激変した。
威厳も何も吹っ飛ばし、驚愕と狼狽と後悔を足して三で割らなかったよーな奇妙な顔。ある意味今までで一番反応が劇的なのだが、やはりその理由は不明である。
……というか、問う度に周りの人が変顔になるのはどうゆうことだ？
あたしはしばらくその珍妙な顔を見上げていたが、いつまでたっても動かないので座っていた椅子から飛び降りた。硬直したままのおじーちゃまの傍まで行って、指先で膝をツンツンツン。

「……そ、の」
お。動いた。
「像、をっ……見て、か！？」
……なんだろう。その、後悔ここに極まれり、みたいな顔は。
しかし、その表情の謎はともかく、とりあえずアルルじーちゃんは答えを知っているらしい。
あたしはワクワクしながらおじーちゃんの答えを待った。
とりあえず待った。
ひたすら待った。
……だいぶ待ったと思うのですよ？
「「……」」
ジッと見上げ続ける姿のまま、あたしはもう一度膝を指でツンツンつつく。アルルじーちゃんは、固まったままの姿でギクシャクと口を開いた。
「……娘よ」
「もい」
「……それは、だな……」
「あい」
「……レンドリアに……問え」
――けしからん！

「問うて答えないのはどーとか言ってなかったですかおじーちゃま！」
「問われても答えれん問いも中にはあるのだこの馬鹿娘！」
「ひどいのです！　あたしのワクワクを返してほしいのです！」
「ワクワクするな！　だいたい、なぜまた唐突にそんな問いを思うに至った！？」
「フェリお義姉様が素晴らしい像だからって見せてくれたのです！」
「～～～ッ」

なんかおじーちゃんの口から教皇にあるまじき呪詛っぽい言葉が漏れた気がするが、たぶん気のせいだろう。
「おのれいくら素晴らしい神像といえど、わざわざ小娘もとい幼子もとい成長停止半赤子幼児に見せるべきものでは無いと何故分からなんだ……！！」
……気のせいじゃないかもしれない。
というか、ひっそりと人の心を抉る単語が含まれていた気がするのだが教皇サマあとでちょっとオボエテロ。
「く……どこから……むしろ何故儂が……！！」
何気にヒドイおじーちゃまは、苦悶の表情で頭を抱え、俯いた姿でブツブツ呪文みたいに呟き出す。なにやらオシベとメシベがどーとか言っているのだが、何の呪文を唱えているんだろーか。
「――いいか、娘」

あ。復活した。
「その問いは……なんだ……その……あまり口にしてよい類の問いでは無いのだ」
「分からないものは尋ねないと分からないままなのですよ」
「相手を選べ！！　そんなものはだな、おまえの義母（ははおや）になった女王か、いっそ年頃になってからレンドリアに全部教えてもらえ！」
――神様の足のモノは年齢制限があるらしい。

あたしは諦めの入った目でおじーちゃまを見つめながら、しみじみと嘆息をついた。
「……じゃあ、今おじ様に尋ねても、答えてはもらえないのです？」
「んっ？　いや、なんだ、それはまた違うかもしれんというか、問うならばここであやつに問うておくがいい。うむ。そうするがいい」
……なんか、いきなり教皇サマがソワソワしはじめた。
「そういえば、あやつが迎えに来るとか言っておったな。いつ頃来

る予定だ？　いっそこちらから呼びにやってもよいが、何の用事で行っておるのか、娘よ、おまえは知らんのか？」

突然目をキラキラさせたアルルじーちゃんに、あたしは頭の中に「？」を飛ばしながら答えた。

「アディねーさまとオトナノハナシをしに行ったのですよ。太陽の間とかゆートコだったと思うのです」

「……太陽の間……結界がある場所に、か……」

ふいに真面目な顔に戻って、アルルじーちゃんは呟いた。

「……確かに、あそこなら密談をするにはうってつけだが……今の時間帯なら、あの天井知らずの大馬鹿助悪魔が転がっているのではないか……？」

「？」

あたしは首を傾げた。説明が無いから意味がサッパリ分からない。

「おじーちゃま。太陽の間、って何なのです？」

「ふむ……」

一瞬考える顔になってから、アルルじーちゃんは髭を一撫でして答えた。

「レゼウス神殿にある、儀式場の一つだ。起動させれば光の魔力を強制的に『太陽の目』と呼ばれる核に集め続ける。今は使っておらぬが……大戦のおりには、魔術の発動と同時に敵を一瞬で消滅させたそうだ。『光の紋章』の奥義でもある『神々の鉄槌』と同様の魔術だな」

……『神々の鉄槌』っていうと……

「聖書に載ってた、すごい大昔に、おっきな街を一瞬で消したっていう光のこと？」

「……そうだ」

少しだけ意外そうな顔で、アルルじーちゃんはあたしを見た。

「聖書をずいぶんと学んでおるな……ならば話が早い。あれに載っておる『奇跡』や『悪魔』の何割かは紋章のことだ。この国が出来るよりも昔、実際に起きたことが元だと伝えられている」

……あれって作り話じゃなくて、本当にあった事だったのか……

あたしは驚くやら呆れるやら、なんとも言えない気持ちで口を半開きにした。正直、お伽話と同じ感覚で習っていたのである。

（……にしても、魔術にも奥義とかってあるんだな……）

どこかにアディ姫が持っていた格闘奥義大全集の紋章版とかあったりしないだろーか？

「太陽の間は、『神々の鉄槌』の疑似魔術を発動させることができるほど、強い『光』の力を集める。純粋に魔力を集めるのならば『月光の間』のほうがよいが、あれは月が出ていることが前提だからな……」

「ふむふむ」

あたしは精一杯真面目な顔をして頷いた。

どうやら神殿は、あたしが知らないビックリ箱のようなものであるらしい。

……こそっと探検させてくれないかな……

「どちらの部屋も、魔力を激しく消耗した時などに重宝するな。強い魔力が満ちた場所にいれば、自然と回復は早くなる。効果は落ちるが、王宮にある『聖女の木陰』も同じだ」

……どっかで聞いた名前が出てきたぞ？

「『太陽の間』は『月光の間』と同じく、建国時に作られたものだ。元々は別の地に本来の儀式場があり、そこを模して作られた。核となる秘宝と、術を発動させるための鍵や符号を揃えれば、完璧では無いが『ほとんど同じもの』を作ることができるからな。……ナスティアは、いずれ後の世にコレを使う日が来るだろうからと、作らせたらしい。……儂は、それは今の世の事だろうと……確信しておる」

「……」

アルルじーちゃんの声を「フムフム」とマジメ顔で聞き続けていたあたしは、三秒経ってから「？」と首を傾げた。

「今の世？」

「……まぁな」
何故かおじーちゃまがこめかみを指でグリグリ揉んでいる。
「永遠に続くものなど何もない。全てのものはいつか必ず死に至る。……人であれ、国であれ、世界であれ、それは変わらないのだろう。……だが、愛する者がいる限り、一日でも長くその日が来ぬ事を祈るのが、人という生き物だ。賢者とナスティアはそれを祈り、願いを後の世の我らに託して逝ったのだと、儂は解釈しておる。……紋章の悲劇にずいぶんと苦しめられはしたが、それは後の世の者が間違っただけのことだ。ナスティアもまた、クラヴィスの血統として紋章に苦しめられてきた。それでもその力をもってしか人々を守れぬのだと悟り、できる限り術師の負担を少なくするための儀式場を多く作ったのだろう。……己の命すらその対価に捧げてな」
「……」
あたしは口を挟まず、ジッとアルルじーちゃんを見つめた。
アルルじーちゃんは深い思慮を瞳に浮かべ、感嘆にも似たため息を零す。
「王族の命は国のためにあり、己のためにあるものではない。……生も死も、全て国のためにあらなくてはならない。……それを定めたナスティアは、自らその言葉通りの死を選んだ。強大な力を与えてくれる神器と己の命を引き替えにしたのだ。暁の賢者はそれよりも前に、国のために力を尽くして逝った。始祖が『其れ』を身を以て成したのであれば、子孫は『其れ』に倣わなくてはならない。血の掟は絶対だ。……だが、掟で心を縛ることはできぬ」
「……」
「事情は分かる。現状は理解できる。効率を考え、状況を把握し、最も被害を少ない方法を選べば行き着く答えは一つしかない。……だが、それを心が納得できるかどうかはまた別の問題なのだ。……此度のようにな」
あたしは唇を引き結んだ。
そのあたしへと視線を向けて、アルルじーちゃんは静かな眼差し

で言う。
「ラザストで滅びの予言が読まれたとき、儂はナスティアが後の世に託したものは、そのためにあるのではないかと思った。あの予言は、我が国に封じられた魔物の復活を指しているのだろう、と……では闇から生まれてくる魔女とは誰のことであろうか。闇とは今の世のことではないだろうか。幾千と積み重ねられた人の心の闇を裂き、闇の王を従えて立つ者とはどんな者なのであろうかと。……そして、『闇の王』が現れた」
「！」
あたしの息を呑む音が、自分でもビックリするぐらい大きく部屋に響いた。
脳裏にそのヒトの姿が浮かぶ。舞踏会の日に、あたしにその予言を語ってくれたこの
世のものとは思えないほど美しいヒト――
「アレは心ある者を儂に先導させて都から出し、腐敗の都を灰にしていずこかへと姿を消した。アレが真に悪魔なのか神なのかは儂には分からなんだ。あの当時のアレは、人である儂では計り知れぬ相手であったのだ。……儂はこの国に戻り、教会の頂点に立った。国の闇はますます濃くなり、もはや国そのものの行く末が危ぶまれた時に、あの娘が生まれた」
……アウグスタのことだ。
「深い闇の中から産声を上げたような娘だった。狂死した王の妹を母にもち、頭が腐敗した王を父にもつ。だが、それでもあの娘が予言の魔女だとは思わなかった。哀れな娘だとは思ったがな……」
アルルじーちゃんは嘆息をつき、暗い声で呟いた。
「……そうしたら、レティシアが現れた。他が何と言おうと、国を傾け、荒廃の度合いを濃くしたのは、紛れもなくあの女だ。あの女は王の子を身籠もり、そして……再び、儂は闇の王と会うこととなった。あの娘が勝手に持ち出した秘宝を使って呼び出したのだと…

…」

「……」

「愚かなことだ……アレが、例え秘宝であろうとも、人の子の魔術道具で封じられるようなものでは無いことなど、あの娘とて分かっておろうに……！　どのような詐術を用いたかは知らぬが、アレはあの娘と契約を交わした……！！　あの瞬間に、あの娘は予言の魔女となったのだ！」

あたしはただ黙ってアルルじーちゃんを見る。

……もう一人予言の魔女候補がいることは……たぶん、口にしないほうがいいだろう。

「ならば必ず、魔物の群が現れる時が来るだろう。……そんな未曾有の危機が迫っておるというのに……まったく……王族の縁者が己の欲得だけで動くとは……！！　果てはアレと同族の魔女だと……！？　厄介にも程がある……ッ！！」

憤懣（ふんまん）やるかたない、といった顔のアルルじーちゃんに、あたしは目をパチクリさせた。

アルルじーちゃんの話は、ポテトさんと同じく謎がイッパイだ。

「……おじーちゃま。同族の魔女って？」

「……。いや……うむ」

何故かアルルじーちゃんは明後日の方向を向き、ゴホンオホンと限りなく嘘くさい咳払い。

「……まぁ、なんだ。世界情勢は刻一刻と深刻化しておるというのに、阿呆なことをやらかす連中が多くてな。得体の知れぬ輩も裏で動いておる、ということだ」

微妙にごまかされてるけど……なるほど……それが『同族の魔女』とかいう人らしい。

（誰の同族なのかな……）

アウグスタと一緒なら王家の一族だろうけど、アルルじーちゃんの言い方ではなんか違うようだ。とはいえ、御貴族サマの一族名なんてほとんど覚えていないので、どの一族とか言われてもよく分か

らないのだが。
（それとも、そーゆー『魔女の一族』とかいうのがどっかにいるんだろーか？）
なんだかおじ様に訊かないといけないことがますます増えてるな……
あたしが「うーん」と唸った時、控えめに部屋の扉がノックされた。
揃って顔を向けると、扉を守っている神殿騎士さんが顔を出し、あたし達に向かって綺麗な一礼をした。
「陛下、ならびにアロック卿がお越しです」
うぉ？　アウグスタとケニードですと？
あたしはピョンッと飛び上がり、扉に向かってちょこまか走った。
「アウグスタ！　ケニード！」
恭しく一礼する騎士と入れ替わるようにして入って来たのは、輝くほどに美しい黄金の女王と、何故か黒いちっこいものを頭に乗っけたケニードだった。
「ベル！　熱、下がったんだね！」
ケニードはあたしを見るなり顔を輝かせ、すぐさま場所と偉い人の存在に思い至ったらしく、やや慌てて一礼した。
「失礼しました。猊下におかれましてはご機嫌麗しく、私のようなものをこの場にお招きくださり、ありがとうございます」
丁寧な礼をされたアルルじーちゃんは、なにやら珍妙な表情をしている。その視線は、あたしと同じくケニードの頭の上に注がれていた。
……てゆか……なんだあのちっこいのは……
「？　……あの？　猊下？　……王女殿下？」
頭上を注目されていることに困惑したケニードが、問うような視線をあたし達に向け、困り顔で頭上を見上げ、不思議そうもう一度こちらを見た。
どうやら問題のブツが小さすぎるせいで、ケニードはソレに気づ

いていないらしい。
あたしはケニードの傍まで行くと、彼の頭上を見上げて問うた。
「……おとーさま……どうしてちっちゃくなってるの？」
「え！？」
ケニードがびっくりした顔でもう一度頭上を見る。
もちろん、それで見えるわけがない。
一緒に来ていたアウグスタが、なんとも言えない奇妙な顔で、そんなケニードの頭の上からちっこいポテトさんを摘み上げた。
そう――生後一週間かそれぐらいの、大人の握り拳ぐらいしかない、ちっちゃな黒い赤ちゃん猫を。
「……コレに今まで気づいてなかったというのが、ある意味おまえらしいな。アロック卿」
「……え……。なんで猫の赤ん坊が僕の頭に？」
「……ケニード……ほんっとーに気づいてなかったの……？」
呆れたあたしの声に、ケニードは摘み上げられているミニ猫ポテトさんをおろおろと見つめる。
「い、いや、重さとかも全然無かったし……というか……『おとーさん』って……まさかロードですか！？」
アウグスタは摘んでいるポテトさんをプラプラ揺らしながら、深い深いため息をついた。
「あやつが魔術で作った分身だ。重さに関しては形と無関係だから、死角になっていたおまえが気づかなくても不思議ではない。……しかし、ずいぶん可愛らしくなったもんだな。いつもの猫型も可愛らしいが……」
ポテトさんはダラリとした姿のまま、アウグスタにプラプラ揺らされている。ちっちゃい手足も胴体も可愛らしいのだが、その力無い姿はどうしたことだろうか。
「……アリステラよ。ソレは、アロック卿の頭に戻しておくがいい」
その時、ぷらんぷらんされている赤ちゃん猫を見つめたまま、厳しい表情でアルルじーちゃんが口を挟んだ。

全員の視線を受け、おじーちゃんは深い声で告げる。
「そやつは意味なくアロック卿の頭の上に乗っていたわけではない。乗せておけ。邪魔になった時に、叩き落とせばよいだけのことだ」
「……相変わらず、なんでそんなに私に遠慮ないんですかシエル……」
「自分の胸に聞け。貴様に遠慮するぐらいならネズミにチーズを与えてやるわ」
疲れた顔でぽそぽそと呟く赤ちゃん猫に、アルルじーちゃんはザマーミロと言わんばかりのツメタイ顔。
アウグスタがちょっぴり目を丸くしていた。
「さて……アリステラよ。末の弟はおまえの予想通り、神職に就くことになったぞ」
ほとんど無意識に赤ちゃん猫をケニードの頭に乗せていたアウグスタは、おじーちゃんの声に軽く目を瞠り、力のない苦笑を零した。
「……なるほど」
「しばらく王宮から遠ざけておくほうが、本人にとっても、そしておまえ達にとっても、良いだろう。……教育係兼護衛としてアデライーデをつける。しばらく王女不在となるが、構わんな？」
「アディが『良し』としたのなら、私がどうこう言うべきではないな。もともと公式の場にはあまり出ぬ娘だ。そちらで預かっていただきたい」
「……あまり預かりたくない娘なのだがな……」
なにやら本音っぽい言葉を零して、アルルじーちゃんは嘆息をついた。
「そこの大馬鹿助がつける護衛も、一緒に放り込む。三人が三人とも常人とは違う輩であろうが、互いを補い合えば良い結果を生むやもしれん。……もっとも、教会を安全な場所と言えぬのが、痛いところだが……」
「安全な場所など、どこにも存在するまい」
やや暗い顔になったアルルじーちゃんに、アウグスタはあっさり

と言いきった。どこか苦笑が勝ったような笑みでおじーちゃんに笑いかける。

「新しい場所で、新しい知識を得るのに死にものぐるいになっているほうが良いこともある。その間に時は流れていくものだからな……。少しぐらい逆境の方が、苦痛を紛らわせやすい……」

その言葉に、あたしは黙ってアウグスタを見上げた。

……彼女の言葉は、たぶん、実体験からくるものなのだ。

声の端々に痛みと悲しみがあって、突き放したような言葉のはずなのに、どこか泣いているようなせつない気持ちが伝わってくる。

……何かを忘れるためにがむしゃらに前を向いて突き進んでいた時が、彼女にもあったのだろう。

「……後見にはルドゥインが立つ。細かい事はまたおってつめるとしよう。……そして、レンドリアはまだ来ぬのか？」

「……おじーちゃま。なんでそんなにおじ様を心待ちにしてるのですか」

あたしのジト目に、アルルじーちゃんは嘘くさい咳払い。

アウグスタとケニードがキョトンとしていた。

「レメクなら、すぐ近くまで来ているが……？」

「ほぉ！　ならばすぐだな」

光の紋章でレメクの心でも察知したのか、アウグスタが扉をクイッと親指で指し示す。

アルルじーちゃんがそれはそれは嬉しそうな顔であたしを見た。

「ほら、娘。準備をしてすぐに問うのだ」

「……おじーちゃま……なにか不穏なのですよ……」

「なに、儂とて好奇心というものはある。ちゃんと尋ねるのだぞ？　いいな？」

……いいな、って念を押されても……

なにやら気味の悪い感じがするものの、答えを聞けるのならそれでもいいかと嘆息をついた。いろんな人にはぐらかされているので、ここらでビシッとした答えが聞きたいものである。

「……おまえ達は、いったい何をあやつに尋ねるつもりなんだ？」
「尋ねるのは儂ではない。この娘だ」
首を傾げているアウグスタにビシッと断りを入れて、アルルじーちゃんはそそくさと扉側がよく見える椅子の方に移動した。
そこへ響くノックの音。
「猊下。クラウドール卿と……」
「よし！　入れ！！」
皆まで言わさず、アルルじーちゃんが嬉々として招き入れる。さすがに唖然としているアウグスタ達の前で扉は開き、いつもながらに麗しいおじ様が少しだけ不思議そうな顔をしながら入ってきた。
「失礼いたします、猊下」
おじーちゃまが威厳をただしながら鷹揚に頷いた。
「よく来た、レンドリア。待ちかねたぞ。――娘が」

……あたしかい！
思わずちっこい手でぺちっとやりたくなったが、そこは我慢！
イイ女はおじーちゃんを大事にしないといけないのだ！！
「おじ様！」
あたしはアルルじーちゃんにつきあって、そりゃっ！　と勢いよくレメクに飛びかかった。
行動を予測でもしていたのか、レメクは全く慌てず、あたしを綺麗に抱き留める。
「お待たせしてしまいましたか……？」
「ううん！　それほどでもないの！　……です！」
「？　そうですか……」
レメクはなにやら釈然としない表情（かお）だ。
あたしとアルルじーちゃんを見比べ、意見を求めるようにアウグスタ達の方を見る。もちろん、事情を知らないアウグスタ達が理解できるはずがない。
「……ベルがなにやらおまえに問いたいことがあるそうなのだが…

…」

「あぁ……」

言われて、別れ際にあたしが言った言葉を思い出したのだろう。

レメクが心持ち首を傾げながらあたしに視線を戻した。

「足がどうとかいう、問いでしたね」

「そうなのです！」

あたしは笑顔で頷きながら、レメクが逃げたりしないよう、豪華な服を力一杯鷲づかみにした。

やや困惑顔になったレメクの向こう、開けっ放しの扉には、いつやって来たのか、アディ姫と人間版のポテトさんがいる。どういう理由でか、端っこでこそっとこちらを覗き見ていた。

「おじ様。誰も答えてくれないから、もう、おじ様が答えてくれなきゃどーにもならないのです」

「……はぁ」

珍しい返答をしながら、レメクが困惑を深めていく。

あたしはその目をしっかと見つめて問うた。

「裸の神様の足についてる、見慣れないものが何なのか、教えてほしいのです！」

シン、と部屋が静まりかえった。

何故か恐れ戦くように震えながらこちらを見ている他一同の視線の中、あたし達は互いを熱く見つめ合う。

レメクは今までの人と違って、表情を一切変えなかった。

驚愕も狼狽も無く、全く変わらないままの顔で、ジッとあたしを見ている。

あたしは目を煌めかせた。

これは答えを期待してもいいということだ！

（さすがおじ様！）

あたしはキラキラと目を輝かせる。

（答えは！？）

レメクは時が止まったかのように静かだ。

「……？　おじ様？」

あたしは首を傾げ、レメクの前でパタパタと手を振ってみた。

反応が無い。

というか……なにやら体が傾いでいっているような……気が……

「おじ様……？　おじ様……おじ様ッ！？」

何の予兆も無く、レメクはあたしを抱えた姿のまま、後ろ向きにバタンと倒れた。

後頭部からいったレメクに、流石のあたしも仰天して飛び上がる。

「お、お……おじさまーっ！？」

レメクはその後、三日、寝込んだ。

番外編　【過去と未来】

王都北区の東端に、その屋敷はあった。

整備された路地と屋敷の境には、歴史を感じさせる大きな焼き煉瓦の壁が聳(そび)えている。人の背丈よりも高いその壁の向こうでは、軽く三百年は経ているであろう巨木が風に濃い緑を揺らしていた。

正門には頑丈な鉄格子の扉。その中央には名のある彫金師が作り上げたであろう家紋が優雅に翼を広げている。

王家とも関わりが深いその家の紋章は、鷲。

王都で著名な大貴族、クラウドール家の街屋敷である。

先代から当代に代替わりした時、称号が『公』から『侯』に変わったものの、その財力と政治における影響力は先代に勝るとも劣らない。『英明にして大陸で最も美しい王』と呼ばれる現女王の懐刀としても知られ、同位である『侯爵』はおろか、公爵家の血筋ですらその人の前にあっては一歩退くと言われていた。

貴族社会における優劣は、およそ五つの要素によって決まる。

『血筋』『領地』『財産』『王の寵愛』、そして『職』である。

血筋と領地に関しては他の貴族に及ばないが、他三つにおいてクラウドール侯爵を上回る貴族は少ない。

一部とはいえ港に個人所有の桟橋を持ち、大商会とほぼ同等の貿易権すら有するとあっては、商業および交易に関しても多大な影響力を持つと言えるだろう。

貴族が商会と深い関わりを持つのはそれほど珍しいことではなく、羊毛と彫金で世界的に有名な『エウリディケ商会』や、香辛料で財を成した『アマーリエ商会』などがある。前者は北国の王家直属の商会であり、後者は南大陸の大貴族が有する商会だ。

ナスティア王国においても貴族と関わりのある商会は少なくない。だが、規模が大きいものとなれば十にも満たなかった。その十にも

満たない大商会と、商会ですらない個人の貿易が貿易量・純利益ともに匹敵するのだから、商会にとってクラウドール侯爵が嫌な商売敵なのは間違いなかった。

それでも相手への妨害等が無いのは、現クラウドール侯爵の持つ権力が巨大すぎることと、貿易に関し、侯爵側から便宜を図ってもらえることが度々あるからである。

商会にとっては、

「まぁ、貴族にしては話しのわかる御仁である」

というのが一般的な見解であり、もっと突っ込んで言えば、

「反発したところで、勝てるような相手じゃあ無ぇ。おまけに美味い儲け話をくれる相手だ。敵に回すより味方でいるほうがずっと旨味があらぁ」

というところだった。

街の人々の侯爵に対する印象は様々で、

「恐ろしいほど冷淡な方だが、筋は通してくれる」

「身分にかかわらず、きちんと話しをしてくれる」

という意見から、

「面白みのない相手だが、信用できる」

「店で遊んでくれない人だが、巡回してくれると治安が良くなっていい」

という商売を通して見た意見。

または、

「お偉い人だかしらないが、いつも澄ました顔で何を考えているのか分からない」

という意見まで様々だった。

「無表情すぎて怖い」

一方的に忌避する意見も少なくないが、その場合は以前街で暴れていて裁判所送りになった者が多く、全ての意見を合わせてかみ砕くと『貴族のわりに偉ぶらないが、考えの読めない恐ろしい人』という形に落ち着く。

信用はできるが親しみは持てない、というのが一般的な侯爵の印象なのだ。

――もっとも、その印象はとある事情で粉砕されることになったが。

※　※　※

「侯爵が……倒れなすったですと！？」

王都港区の一角、大きな肉の塊を裁いていた男は、店に走り込んできた顔見知りに目をまん丸にして叫んだ。

「しーっ！　大声で言うなって！　親父さん。まだ噂の段階なんだからよッ！！」

店主より五・六歳ほど若いその男は、慌てたように身振り手振りで店主を落ち着かせ、口の前に人差し指を立てて「静かに！」を示した。

神殿の門兵をしているその男は、勤務時間が終わるや否やここに飛んで着たらしい。急ぎすぎて段違いになっている上着のボタンが、見ている側に居心地悪かった。

「いやもう、突然奥の方の神殿からバルバロッサ卿の声が聞こえて、すわ何事かと思ったら、しばらくしてアロック卿――ほら、宝飾店もやってる、いかにも貴婦人にウケそうな優男の――あの人の馬車がえらい勢いで飛び出して来てな、突然すぎて通行証の確認に手間取ってた時に、チラッと見えたわけだ！　倒れてる侯爵と、涙ながらに侯爵を呼んでいる小さなメリディス族の女の子が！」

（ベルと侯爵が！！）

店主は咄嗟に叫びかけ、慌てて口を押さえてそれを堪えた。

「そ、そ……それで、なんで、また、侯爵が！？」

「そんなの知るわけねぇだろ！？　確認終わったら、それこそ矢のようにすっ飛んで行っちまったんだからよ！　教会から真っ直ぐ東に行って……中央で右に曲がらなかったから、おそらく屋敷の方に

直接行ったんだろうな」

もし王宮に行くのであれば、必ず中央で右に曲がる。それが一番の近道だからだ。

「乗ってたのは、アロック卿と侯爵と、そのメリディスの子だけだ。てゆか、俺ぁ前のときもチラッと見たけど、本当に生きたメリディス族の子が動いてるんだな！　ありゃあ、ちょっと感動ものだったぜ」

長く王都にいても、件の『メリディス族』に会うことはほとんど無い。

その美貌と稀有な髪の色で一族名が分かるメリディスは、不心得者が多いせいで辺境の森から出てこれない状態なのだ。ここ最近、五歳にも満たないような小さな幼女があちこちで目撃されているが、その幼女が現れるまでは『生まれてから一度もメリディス族を見たことがない』という者がほとんどだった。

動く生きたメリディス族、などというおかしな言い方も、書物の中や噂話でしか存在を知らなかった者であれば仕方がない。珍しい、という次元を超えて、長らく絵の中にしか存在しない『幻の一族』だったのである。

「フェリシエーヌ王女殿下と一緒においでになった時は、直視したらその瞬間に消えちまうんじゃねぇかと、ヒヤヒヤしたもんだよ！」

「……隊長……悪戯妖精じゃないんですから、べ……お嬢さんは、消えたりせんと思いますがねぇ」

「店主！　いかん。そこは『ベル王女殿下』とお呼びしなくてはならん。唐突な話ではあるが、その子は女王陛下が養女に迎えられた方だ！」

はぁ、と珍妙な顔で頷いて、店主は恐る恐る百人隊長である顔見知りの男に問うた。

「……本当に……王女殿下になっちまっ……ご、ごほんっ……なられたん、ですか、ねぇ？」

「なっちまったんだ！」

せっかく頑張って言い直したのに、隊長はあっさりとそう言って頷いた。
「まぁ、陛下の『突然養女宣言』は前からあったからなぁ、それほど大きな話にはならなかったんだが……なんてったって相手が『メリディス族』だろ？　先王の第二妃以来じゃねぇか！　おまけに、クラウドール侯爵の婚約者！」
「「「「「『婚約者』！？」」」」」
その瞬間に上がった周囲一体からの見事な大合唱に、話に夢中になっていた二人は飛び上がった。
いつのまにか店の周囲に人垣ができている。
「うわーっ！　ちょっと待った広めるな！　広めるなよまだ！！」
「広めるなったって無理だあきらかに無理だ絶対に無理だあの侯爵に婚約者だぞ！？」
「しかも、メリディス族の子！？」
「あのクラウドール侯爵が！」
にわかに騒がしくなった人垣の向こうにも、騒ぎを聞きつけた街の人々が半ば駆け足でこちらに向かってきている。大事になったと隊長は青い顔だが、そもそも『王女』と『婚約』の話は確定された事実のため、すぐに胸を張って足の震えを止めた。
「隊長！　その話は本当なのかい！？」
「本当だ！　すでに街の掲示板にも張り紙がされたはずだ！」
「字が読めんからそんなもんは知らん！」
きっぱり言われて、しまったそうだった、と隊長は苦い顔になった。張り紙をした直後は告知のための人員が配置されるが、その時口上を聞かなかった者は張り紙で情報を知るしかない。しかし文字が読めなければ、張り紙はただの紙切れだ。
その肩を興奮した街の女性にむんずと掴まれる。
「ねぇ！　メリディスの子って、一月前ぐらいから侯爵の周りをちょろちょろしてた子のことでしょ！？」
「ああ！　あのちっこい子！」

という声は、人垣の向こうから。
「買い物中に走り回らないよう、胴体に縄かけられてたあのちっこい子だな！？」
「時々走り出して縄ピーンッてなって空中浮いてた子だよな！？」
「……そんな覚えられ方なのか……あの子……」
肩をガクガク揺らされながら、隊長は唖然とした顔でぼやいた。
メリディス族といえば神秘的な一族のはずなのに。何故だ。どうしてそうなった。
「馬鹿！　それなら巡回中の侯爵の後頭部に問答無用で飛びついた件のほうがよっぽどインパクトあるだろうが！」
「なに言ってるの！　御菓子くれた侯爵の手ごとバックリ食べた時のほうがビックリしたわよ！」
「アホか！　それなら巡回してる侯爵の後ろを延々ちょこちょこくっついて回って最後には追いかけっこになってた時のほうがよっぽど面白みがあったわい！」
「ああ！　最後の最後に足に飛びつかれて侯爵が顔から倒れたやつか！」
「ひでぇ！！」
続々と出てくる神秘の一族ぶち壊しのガッカリ感より、被害にあった侯爵の哀れ様のほうに意識がいってしまう。驚くやら笑いを堪えるやら、感情の落とし所を迷って隊長は奇妙な歪み顔で腹を押さえた。痛い痛い。
「最近、あの二人の動向を見るのが楽しみでねぇ……」
「最初は恐ろしくて戦(おのの)いたけど、慣れてくると可笑しくて可笑しくて……」
「侯爵がこれまた大真面目に相手してるもんだから、余計に可笑しいんだよな、アレ」
「見事な振り回されっぷりだったなぁ……時々ぐったりしてたら、縄で繋がってるもんだから相手に引っ張られて椅子から落ちかけたり」

「あのちっこい子がこれまたビックリするぐらい力強いらしくてねー。侯爵と全力で綱引きしてたのよね」
「綱、ブッ千切れたよなぁ」
「その瞬間、あの子が逃げて侯爵が追い回してたよな」
「名前呼んだら飛んで戻ってくるだろーになぁ」
人々は屈託なく笑い転げている。隊長も想像したその光景に腹筋が痛くなるほど笑いを堪えてから、涙目で馴染みの店主を見上げた。
「お、王都じゃ、いつのまに、そんな寸劇が行われるようになったんだ？」
店主は笑いを噛み殺しながら、出来る限りしかめ面を作って答えた。
「一月半ぐらい前ですかねぇ。孤児院の騒動の後ぐらいですよ。ほら、前にも言ったでしょう？　うちにも侯爵と一緒に来たことがあるって」
「あン時は話半分に聞いてたんだが……いや、それよりも、その……侯爵がえらく笑いのネタになってるというか」
あの侯爵が、という含みの入った言葉に、店主はいっそうしかめ面を意識して作る。
「ええ。まぁ、うちは店があるんで街中の珍プレイ、いや、エー……騒動、は、直接見る機会が少ないんですがねぇ」
「かわりに客が話題を持ってくるんだよなー、おやっさん」
「そうそう」
その話題を持ってくる客の一人につっこまれて、店主は噛み殺し損なった笑いを含みながら言った。
「客が持ってくる話題が、日毎に増えましてねぇ。なんなら、日付順に語ってさしあげましょうか？　私の方は肉を捌きながらになりますが、まぁ、そちらはうちの料理を摘みながら聞かれるといいでしょう。お酒のほうはこの時間ですから、ま、ほどほどで」
興味を惹かれた隊長は、ニヤニヤ笑いながら頷いた。
「それで値段は、ま、そこそこってとこなんだろう？　店主」

店主はニコニコと人好きする笑顔で答える。
「料理の値段は正価ですよ、隊長。講演料は、酒一杯ってとこですかね」

※　※　※

「――という話を街でしておりましたので、ご報告がてらお土産でございます」
そう言って手渡された肉の塊に、受け取ったケニードは奇妙な顔で苦笑した。
王都、クラウドール邸、玄関ホール。
倒れて動けない屋敷の主に代わり、来客と思しき来訪者を迎えたものの、それが自分の従僕だったものだからケニードとしては苦笑するしかない。クラウドール邸に行くという連絡を入れていないのだから、おそらくここに来たのも街の噂を集めた結果というところだろう。
「……爺や……なんで密偵みたいなことをしているのかな？」
「若君が王宮にお行きになって以降、なかなか家に帰ってこられませんから胃が痛くなるほど心配していたわけではありません。ええ、断じて」
大きくはないが強い声で言う老執事に、大祭の翌日から数日間、一度も家に帰っていないケニードは顔を引きつらせた。
「い、いや、ほら、大祭中はさ、一応、王宮に部屋とか用意してもらえるし」
「せめて一言、ご連絡なりいただけましたら、大変ありがたく思ったものですが」
「あー……その、いろいろあったから、ね？」
「その『いろいろ』について、出来ましたら詳しく詳しく教えていただきたいのですが、若君にはそのお時間もございませんでしょうか？」

しどろもどろな主に、しかしリットは追及の手を緩めない。
怪我をしたという噂まであったのに一言も無かったのだ。屋敷の皆がどれほど心配したか。暢気な主にはしっかりと覚えていてもらわなくてはならない。
静かに怒っている老執事に、引け目のあるケニードはひょろ長い体を精一杯小さくして言葉を探した。
「えー、いやー……ほら……その、うー、看病とかいろいろあるし……」
「……では、侯爵がお倒れになったというのは、真でございましたか」
ふいに顔を曇らせ、アロック家執事のリットは深い嘆息をついた。主の恩人でもある侯爵のことであれば、一時、追求の手を止めるのも致し方ない。
「市井に出回る噂は尾ひれがつくのが常でございますから、此度の噂も体調不良になられたのを大げさに触れ回られているのかとも疑いましたが……若君が『看病』と言わねばならないほど、侯爵はお加減が悪うございますか」
「う……うん。主に、精神面なところで」
原因に心当たりがあるらしいケニードは、遠い眼差しでそう答える。
精神面、と呟いた後、老執事はしたり顔で何度も頷いた。
「それは確かに心労もございましょう。晴れて女王陛下のお墨付きをいただいたとはいえ、相手は稚い幼子。おまけに何やら王宮を揺るがす陰謀もあったとのこと。出仕しておられる方々とは違い、私共は伝え聞く言葉で状況を判断するしか術がございませんでしたが、多くの方々が傷つき、なかには亡くなった方もおられたとか。王家縁の方が関わっておいでとあっては、侯爵ほどの方でなくては対応にあたれなかったことでしょう。とある公爵のお屋敷が、侯爵の手によって半壊に追い込まれたというお話も聞いております。よほどのことがあったのでございましょうな」

「……う、うん」
なにやら「ん？」となる言葉が前の方にあったような気がするが、スルスルと流れるように言葉を紡がれてケニードは首を傾げつつ頷いた。
「沢山、いろんなことがあったんだ」
「騒動には、若君も関わられておいでだったとか」
「関わって、というか……」
「怪我はその騒動の最中に負われた、という噂も耳に挟みましたが」
言葉と同時に左手を見つめられて、ケニードは全身にヒヤリとしたものを感じた。
バレている。どこまで詳しい話しが噂となって広がったのかは知らないが、バレている。
「……その、だいぶ治してもらったんだよ？　これでも。日常生活には支障ないぐらいにしてもらったし」
「技師としてはいかがですかな」
追求され、ケニードは言葉につまった。
幼い頃からずっと自分を見守ってくれていた『爺や』には、こちらのことはほとんどお見通しなのだろう。ジッと見つめてくる瞳は痛いほど強く、ケニードは用意しておいた誤魔化しを放棄した。
「……技師としては、長い訓練が必要だろうね。細かい動作が出来ない。……時々強ばるんだ」
「……」
「……誰のせいでもないんだ。僕が『こうしなくちゃ』って思ったことをした結果が、これだった、っていうだけだから」
「……」
「宝飾で新しい依頼は断らないといけないね。けど、あまり大げさに触れ回らないで欲しいんだ。機能回復訓練は長くかかりそうだ、っていうのは言っておいてほしいけど」
「……かしこまりました」
長い沈黙を挟んでから、リットは深々と一礼する。

沢山の言葉を飲み込んだであろうその人に、ケニードは困ったような顔で微笑った。

「……爺やには、いつも迷惑かけるね」

「迷惑ではございません。……ですが、一言だけ言わせていただければ、もう少し早めに情報をお渡しくださいますように、と。そうお願いしたいところでございます」

「……うん。ちょっと抜かってた。ダメだね、僕は」

くしゃりと笑う主に同じ笑みを返して、リットは「仕方ございません」と嘯く。

「それも若君の若君らしいところでございますからな」

「……それ、褒めてないよね？」

「さて。どうでございましょうか」

大変人の良い笑みを浮かべてみせる教育係に、ケニードは口を尖らせつつも笑う。

この爺やがいる限り、アロック家は大丈夫だと思った。実の父よりも身近な老執事は、ケニードにとっては祖父にも等しい。

「とりあえず、店の方は先程仰っていたような形で進めていくとして……屋敷内の説明はいかがいたしましょうか」

改めてそう言われて、ケニードは一瞬ギクリと身を強ばらせた。

「……う、うん。店と同じように……その、怪我してるっていうぐらいは伝えておいたほうがいいよね？」

「若君がよいと思われる言葉でお伝えするのがよろしいかと」

誰に、と言わずに口にするあたり、この爺やもなかなか性格が良い。

「うん。まぁ、でも、外出先で怪我をするのは、珍しい事じゃないし」

「若いメイドの中には、休憩時間中に街中を奔走して情報をかき集めてきた猛者もおりましたが」

「どうして外出禁止にしてくれなかったんだよ！」

途端に顔色を変えた主に、リットはしれっとした顔で言う。

「勤務時間外をどのように過ごそうと、それは個人の自由である、というのが我が家の方針であったはずですが」
「けど！　彼女はまだ小さいんだし！　教育時間だってあるんだから、どんな風にでも理由はつけれるはずだろ！？」
「その場合、手下の子供達が彼女のかわりに奔走して噂を集めてくることでしょう。なかなか見事な指揮系統ぶりに、私は密かに感心いたしました」
「ナナリーは西区のボスの一人だったんだよ！？　当たり前じゃないか！　細かい話は伝わってないだろうけど、大怪我したっていう噂だけは広まりが早かったから……あー！　帰ったら絶対怒られる……！！」
大真面目に頭を抱える主に、リットはしみじみとした口調で呟く。
「……よくナナリー嬢だとお分かりになりましたな」
一瞬の空白を置いて、ビクッとケニードの体が硬直した。
リットはさらにしみじみと呟く。
「嬢やの並々ならぬ熱意に負けて行動時間の拡張を許可しましたが、実に見事な連携で街中の噂を集めてきまして。身分ある方を庇って大怪我をされた、とのこと。左側の腕を痛められた、とのこと。現場を見た者は命も危ないのではないかと話していた、とのこと。けれど舞踏会に出席された若君は大きな怪我を負ったような感じではなかった、とのこと。怪我を負ったとき、侯爵が若君を手当していたらしい、ということ。その後立て続けに起きた騒動も、細かな事情は分かりませんが、若君が怪我を負った事件と繋がりがあるのではないか、とのこと。……王宮に出入りしている下働きや騎士達が零したであろう情報は、誇張のあるものから推測まで様々ではございましたが、重なった情報を吟味すればおのずと形は見えて参ります。……子供とはいえ、なかなか侮れないものでございますな」
「……」
ふいに真剣な目になってこちらを伺っている相手に、老執事は好々爺の顔で笑って言った。

「誰が、何を企んで、何を行ったか、というのは、残念ながら市井には伝わってきておりません。憶測の域を出ない噂であれば、レンフォード公爵が何かをしたらしい、といものぐらいですかな。公爵の街屋敷が『断罪官』殿の手で半壊しておりますので、そういった噂が流れたのでございます。何人もの悪人が処刑された、という話も伝わっておりますが、それもまた関連があるのかどうか、というのは伝わってきておりません。時期が時期ですので関連あるのではないか、とする者も多くいますが、確かめる術がございませんからな」

「……」

「同時に、先王の第二王子である方が、王宮においでになった、ということも伝え聞きました。長くレンフォード家で隠されていた、ということですので、公爵への処分はそのためではないか、という噂もございます。……どちらにせよ、全て噂の域を出ないことでございますが」

ケニードは無言のまま、ただリットを見続ける。

そうして、少しだけ肩の力を抜くように息を吐いた。

「……『噂』なんだね？　全部」

「はい」

「……なら、噂のまま、おいておいたほうがいい。人の口を通せば、必ず事実はねじ曲がる。……そして、本当には何が起こったのか、は、知らない方がいいんだ」

「……」

沈黙した老執事に、ケニードは穏やかに笑って言った。

「僕の怪我は、事故だよ。王宮で騒ぎはあったけど、一部を除いて決着はついている。……リット。一つだけ僕が言えるのは、王宮の闇には近寄らないほうがいい、ということだ」

「……闇でございますか」

「うん。人の心の中にある闇だよ」

その言葉に何を察したのか、リットは深く頷いて頭を垂れた。

「では、若君のお怪我は事故ということで、皆には話しておきます」
「うん。心配かけてごめんね、って言っておいて」
「……それだけでよろしゅうございますか？」
キラリと光る目で見つめられて、ケニードは妙に焦る気持ちを自覚しながらしどろもどろに呟いた。
「いや、その……で、できるだけ早く戻るから、って。あとはその……ちゃんと僕から言うようにするから」
「かしこまりました」
得たり、とばかりに深く頷く執事に、ケニードは恨めしげな眼差しを送った。
リットはすまし顔で言う。
「若君はまだしばらくご帰宅ができないということですので、後で着替えをお持ち致します。――ところで、先程から気になっていたのですが、若君、その頭の上の小さな生き物はいかがいたしましたか」
なにやら前半に嫌な予感を覚える言葉を聞いていたケニードは、その指摘に自分の頭の上にそっと手を当て、柔らかく暖かい小さな手触りに笑って言った。
「うん。……お守りみたいなものかな？」

※　※　※

「……『お守り』と言われたのは、生まれて初めてかもしれません……」
眩い光の中、打ち上げられた鮪のように転がっていた男の言葉に、腹の上に腰掛けていた女王は大きく瞬きした。
「なんだ、唐突に。……どこかに向かわせた分身がお守り扱いされたのか？」
「はぁ……宝飾技師さんに」
「ははぁ……あやつなら言いそうだな」

破顔して頷いた相手に、下敷きにされているポテトは薄目を開ける。
丁寧に爪の手入れをしている美しい女性を見上げて、遠い眼差しで問うた。
「……ところでご主人様」
「なんだ？」
「なんで私の上に乗っかってるんです？」
「おまえ、人の体重など感じないだろう？」
答えになってない返答を返して、女王は手入れの終わった片手を光に翳した。綺麗に磨かれた指先は美しかったが、女神の如き美貌の女性は、心楽しまぬように暗い顔をしていた。
「これが他の連中なら、私はそもそもここにはおらん。レメクはともかく、他の連中はおまえ達みたいに阿呆ではないからな。具合が悪い時はちゃんと大人しくしている」
「……」
「具合が悪くても知らん顔で動くのはおまえとレメクぐらいなもんだ。特におまえはすぐにふらふらと出歩くからな。……珍しく弱っているんだから、少しはここで養生しておけ」
「……弱ってる相手の腹の上に座るんですか、ご主人様」
「おまえ、人の体重など感じないだろう？」
先と全く同じ声で同じ言葉を紡がれ、ポテトはぐったりとため息をついた。……体重は感じないが、柔らかさは十分に感じるというのを少しは意識してほしい。
「それよりも、ポテト。レメクの様子はどうだ？」
「レンさんですか……」
その柔らかさをできる限り意識の外に追いやり、周囲に満ちている光の魔力を吸収しながら、ポテトはなんとも言えない表情で答えた。
「今は私の分身がくっついてますから、単に眠ってるだけみたいになってます。……ただ、時々うなされてますね……。お嬢さんの気

配を感じると特に」
「……ベルが傷つきそうだな……」
「さすがに自分の問いが原因だって分かってますからねぇ。どうしてだろう、っていう疑問と、どうしよう、っていう焦燥でしょんぼりしてますよ。今はまだアロック卿がフォローしてくれてますから、なんとかどん底まで落ちこんでない感じですが」
「あやつには本当に迷惑をかけるな……」
「……本人、大変男前なイイ笑顔で、お嬢さんごとレンさんを運んで行きましたけどね……」
倒れたレメクを胸に張りついたベルごと抱えて持っていったケニードを思い出し、美しき女王は「ふーむ」と考える顔になった。
「あやつも、いつのまにか強者になっていたな……」
「……宝飾技師さんが、ですか」
「ああ」
頷いて、相手は爪の手入れを再開した。
「昔、レメクがあやつを助けたことがあっただろう。おまえが失踪する二・三年前ぐらいに。あの騒動の後、騎士団にこれでもかと鍛えられたらしいのだが……」
中盤の耳に痛い言葉はあえて流して、ポテトは苦笑含みに後半に答えた。
「今もずっと鍛錬を続けてきたのでしょうね。もともと素質は悪くありませんし、頑張れば頑張っただけ力になったことでしょう」
「ほぅ……おまえが『素質あり』と認めるのなら、かなりのものだな？」
揶揄を含んで言う主に、今度はハッキリと苦笑した。
「レンさんや勇猛な赤毛姫、頑強な大神官殿や、妖艶な王妃殿に比べればかなり落ちますけどね」
「……比べる対象が悪いだろうが。連中は化け物クラスだぞ」
呆れ顔で言われて、ポテトは少しばかり遠い眼差しになる。
腹の上に乗っかられているので口に出せないが、女王もしっかり

と同じクラスだ。
（……でも口に出すと怒るんですよねぇ……）
「……何かいらんことを思ったな？」
（……口に出さなくても怒るんですけどねぇ……）
むぎゅっと指で薄い腹の皮を摘まれるが、痛いというよりくすぐったい。
「しかし、あれもルドゥイン同様、年々頼もしくなるな。いずれ政治の中枢に関わってもらいたいものだが」
ただの独白というには、少しばかり声に力が入っていた。
降り注ぐ陽光を浴びて、黄金色の髪がきらきらと輝いている。
ポテトはその様子にわずかに目を細めた後、あえて返答はせず別の話題を口にした。
「レンさんの方はもうしばらく養生が必要のようです。ショックで高熱を出してますから、落ち着くまで少しかかるでしょう」
言われて、女王は素直に心配を顔に出した。
「大丈夫なのか、奴は……男が長く高熱を出すと、深刻な事態になるんだが……」
「私の分身を一匹、額に貼りつけてますから大丈夫ですよ。……レンさんもあそこまで真剣に悩まなくてもいいと思うんですが……良くも悪くもお嬢さんに対して真剣ですからねぇ……」
「男親が女児の親として直面する難問の一つだしな……」
「……親じゃないのに親心が育ってるとか言われてましたしね……」
二人でしみじみと嘆息し、力の抜けた笑みを浮かべた。
「……しかし、まさか倒れるとはなぁ……」
「実に見事に倒れましたよねぇ……バッタリと」
空気が抜けるような笑みは、次第に小刻みな震えを伴うクツクツ笑いになった。
ポテトは笑いながらこっそり苦悶する。
アウグスタの尻が乗っている下腹部が、絶妙にくすぐったい。
「さすがに教皇も仰天していたな。慌てるとか、絶句するとか、そ

ういう反応を期待しての悪戯だったのだろうが――まさかの『昏倒』だからな！」

「あぁ……！　シエルのあの愕然とした顔が忘れられません！　……と言いましても、あの時、全員同じ顔になってましたけど」

「ならいでか！」

変な強調を力一杯叫んで、アウグスタは笑いながらこめかみに青筋を立てるという、一風変わった抗議の仕方を披露した。

「いきなり後頭部からゴンッ！　だぞ！？　なんだあの人形みたいな倒れ方は！　あいつはそこらに飾られてる甲冑の置物か！？　倒れるにしてももうちょっとこう、風情とかいろいろあるだろう！？　倒れ方の！」

言われたポテトは胡乱な目。

「……倒れるのに風情とかいるんですか……？」

「おまえとて劇中で女優が倒れる時に『バターンッゴンッ』だったら、もうちょっとこう……色っぽくたおやかに倒れろよ！　とか思うだろう！？」

「……劇と一緒にされても困ると言う以前に男の昏倒にそんなものを求められても激しく困ります」

とりあえず男の代表もどきとして抗議し返した後、ポテトは寝転がった姿のままで器用に肩をすくめた。

「まぁ、レンさんにとってお嬢さんの『教育』は人生最大の難題ですからね。バターンッゴンッでも仕方ありません。……ちなみにご主人様。あの瞬間のレンさんの思考、読み取れちゃいましたか？」

「……私はあれほど人間の限界を超えた思考速度の混乱を感じたことは未だかつて無い」

非常に沈鬱な表情で笑いを堪えながら言う主に、ですよねぇ、と同じく読み取ってしまった人外魔境はしみじみとイイ笑顔。

「いやぁ、私の長いジンセイにおいても、あれほど愉快な超混乱は初めてですよ」

「惜しむらくは細かい言葉とかがあまりに早すぎて読み取れなかっ

たことだ！　あぁアレはベルがちゃんと大人になった後なら、一生からかえるネタになるものを……！！」
「……レンさんには大変な難問でしょうに……」
「自分事でなければ面白いネタだ。どうせあやつはベルのことでしか悩まんのだから、心の底から悩めばいい」
　あっさりと言う女王に苦笑して、ポテトは倒れてしまった名付け子のために一つ提案をしてみた。
「いっそご主人様が大人の女としてお嬢さんに教えてあげればいいんじゃありませんか？　そうしたら、レンさんは難問から解放されますよ」
「……おまえな……一度、そのテの話をするためにベルの真正面に立ってあのつぶらな瞳を見つめてみろ。ものすごーくいたたまれない気持ちになるから」
「何故ですか？」
「知らん。何故か、だ」
　どうやら経験済みらしい。
　言われて自分ならばどうだろうかと想像し、ポテトは微妙な顔になる。
　何故だろう。主とは別の意味で教えるのをやめそうな気がする。
（……九つになるまで誰にもちゃんと教えてもらっていないというのが、ある意味驚愕ですがね）
　貴族の子女ならごく当たり前に幼少時に教えられる知識であり、街ではたいてい母親や年配の女性達から教えられる常識なのだが、どういうわけかベルには伝わっていなかった。
　倫理や道徳が浸透しにくい下街で生まれ暮らしながら、どうしてあんなにジュンシンムクなのだろうかと不思議に思う。
　……いささかならず一般的な『純真無垢』とはかけ離れたジュンシンムクだが。
「……まぁ、あの謎思考と謎知識に関しては、孤児院時代に孤児達の面倒をみてくれてたという『宿のおねーさん』方のせいですけど

ねぇ。面白半分に中途半端な知識与えて楽しんでたみたいですから、変な思いこみといらない知識だけが備わって、肝心なところがゴッソリ抜けてます」

「……レメクが知ったら激怒のあまり下街に乗り込みそうな話だな……」

「もっふもふの羊がギランギランの雌狼の群に突進するようなもんですよ、ソレ」

冷静に突っ込まれて、アウグスタは変な顔でポテトを見下ろした。

「……なんだその、もっふもふの羊、というのは」

「え。だって秋波送られても朴念仁（モフモフ）すぎて本体に全く伝わってなさそうな感じが、いかにもそれっぽいでしょう？」

ますます変な顔になったのは、おそらく笑いを堪えたためだろう。いっそ普通に笑ってくれればいいものを、と、また小刻みに震える相手の振動に苦悶しながらポテトは色々なものを我慢した。

とりあえず、笑いを堪えるのをやめるか腹の上からどくかしてほしいが、言ったところで絶対無理だ。むしろいっそうブルブル震えられるに決まっている。

「けれど、ご主人様が『いたたまれない』と思うのでしたら、レンさんはもっといたたまれない気持ちではありませんかね？」

「昔の奴なら表情一つ変えずにサラッと言っただろうがな。……しかし、もう何度思ったかわからんが……よくぞここまで変わってくれたものだな。あの二人、出会ってからたった二ヶ月かそこらだぞ？　影響があるにも程があるだろう」

「仕方ありませんよ。お嬢さんがちょっと尋常じゃありませんから。なんといっても『メリディス族』であの性格ですからね。レンさんには衝撃が強すぎですって。たぶん最初の一撃で一番硬いココロが木っ端微塵にされたんじゃないですかね」

ポテトの言葉に、女王は「まったくな」と苦笑した。

レメクの中にあったそのココロを何と言い表していいのか、女王もポテトも分からない。

凝り固まった思いこみと言えばいいのか、凝(こご)った過去の亡霊と言えばいいのか、それとも、凍りついた記憶の産物とでも言うべきなのか。

――だが、考えてももう意味はない。すでにソレは無いのだから。

「ん～……まぁ、確かに衝撃だろうな。今は私達のほうが日々衝撃を受けている気がするが」

「……ベラにも見せてあげたかったですねぇ……」

何気ない口調でそう零したポテトに、女王は自分が下敷きにしている男を改めて見下ろした。

優しい笑みだと、その顔を見た者はそう判断するだろう。

けれど女王は悲しげに眉を下げた。そうして、相手の頭に手を伸ばす。

「……。なんで頭撫でるんです？」

ワシワシと髪をかき乱す勢いで撫でると、しばらくしてから胡乱な声をあげられた。

女王はフンと鼻を鳴らす。

「……大馬鹿助が」

綺麗すぎてぐしゃぐしゃにならない髪をひとしきりこねくりまわしてやってから、女王は視線を自分の正面へと向け直した。

自然、横顔を見上げる形になったポテトは、その眉が微妙に下がっているのに眉を顰(ひそ)める。

「ご主人様？」

女王はしばらく無言でいたあと、ぽつりと呟くような声で言った。

「おまえは、もう少し、泣きたいときに泣けるようになったほうがいいぞ」

「……」

「まだ『自分の感情』とやらが把握できずにいるのかもしれないがな。悲しいとか、寂しいとか、嬉しいとか、そういうのはちょっと分かってきたんじゃないのか？　例えおまえの特性が『鏡』であっ

ても、その中核にあるのはおまえ自身の心だ。……少しは認めてやれ。おまえの中にちゃんとある、おまえ自身の感情を」

ポテトは答えない。

ただ、手を伸ばして、頭の上に乗せられたままの手に触れた。

その細い手に少しだけ目を細め、柔らかく握ってみる。

自分よりも小さなその手は、ひどく温かく感じられた。

「レメクも変わったが、もうヒトリの本家『レメク』もずいぶんと変わったと思うぞ。今のおまえは、私が最初に見たあの時のおまえとは別の生き物のようだ。……なぁ、ポテト。おまえが昔言っていた願いの一つは、まだ叶っていないのか？」

言われた言葉に、ポテトはふと過ぎ去りし日々を思い出して目を細めた。

主である彼女だけが知る、他の誰も知らない『自分』の話。

預けられた小さな生まれたての命を抱きしめた時に、ふいに口にしてしまった昔からもつ『願い』の一つ。

「あの頑固ジジイも言っていたぞ。最近のおまえは特に、昔のおまえとは別モノのようだ、と。……なぁ、ポテト」

頭の上にある手は、体勢が体勢なので少しばかり握りにくい。

けれど、その手を離したくなかった。

唯一絶対の主は、こちらを見つめたまま慈母のような優しい笑みで言う。

とある日に、自分が愛する名づけ子に告げたのと同じ声で。

「……私には、おまえはちゃんと、『人間らしく』なってきたと思うのだがな？」

※　※　※

「……まさか倒れるとはな……」

豪奢な部屋の中、嵐のような一連の騒動が収まって後で、教皇はそう独り言ちた。

レゼウス神殿における教皇の私室の一つ、『月光の間』へと続く前室（へや）には、今は教皇その人と腹心の部下だけが残っていた。
先程まで居た人々は、とうの昔にそれぞれが行くべき場所に引きあげている。
倒れた人物と入れ替わるように入室した大男は、苦笑混じりの嘆息をついた。
「『別れ』を終えられた王弟殿下をお連れしたら、ちょうどレメクが運び出される所でしたな」
その時の情景でも思い浮かべているのか、呟く彼はなにやら遠い目だ。
最後の離別に立ち会っていたルドゥインは、レメクが倒れた瞬間を見ていない。おかげで部屋から運び出される某人を見た瞬間に、腹の底から驚愕の声をあげてしまった。後で聞いた話、声は隣の神殿まで響いたという。
「……おまえの馬鹿でかい声にもたいがい慣れたと思っていたが、あれは別格にでかかったな……」
教皇の指摘に、ルドゥインは赤面して頭を下げた。
「申し訳ありませんっ。しかし、私としてはあのレメクが突然意識不明で運び出されるなど……その……非常に驚いたものですから」
「儂の心臓も非常に驚いた。あやうくこの老人を殺す気か貴様らはと怒鳴りそうになったほどだ」
ふー、とため息をついて、教皇はなにやらしみじみとした口調になる。
「……末の王弟も驚いておったな……」
「思わず駆け寄っておりましたな。……ある意味、良い傾向かと」
「ふむ……」
教皇は小さく呟き、暗い目でため息をついた。
親友を喪ったことで、王弟の心に蟠り（わだかま）が出来ていることを周囲の人々は察していた。
どのような理由があれ、彼等はアルトリートを『殺す』判断をし、

実行したのだ。その事実は消せるものではない。
　王弟にとっては、アルトリートに罪を犯すよう唆した者同様、彼等もまた『仇』と呼ぶべき相手だ。
「……掟や法で心を殺せるはずがない。分かれ、と言われて分かれるようなことでもない。人を『裁く』のは人であってはならぬ故、神の名を負って裁判官は人を裁く。だが、人を『処刑』するのは為政者だ」
「人である王が神の領域に足を踏み入れる瞬間、教会は異を唱えるか否かを選択することができる。王が神の領域に足を踏み入れることを許可するか否か、だ。……そして教会は王を支持した。家族を奪われた者にとっては、どちらも憎むべき敵であろう」
「……反逆者になる可能性はありますか？」
「なくもない」
　呟くように答えて、教皇は瞳を閉じた。
「なればこそ、そうなって欲しくはないと願い、何人もが様々な手を打っておる。……あの悪魔ですら、禁忌の魔法を使った。だが、どの道を行くのかは、かの者自身が決めることだ」
「アデライーデ姫がついている以上、下手なことにはならんと思いたいですが……」
「……儂は逆に、あの姫がついておるということで、王弟は大丈夫なのかと別の意味で心配だ」
　皺を深くする教皇に、ルドゥインは件の二人を思い出して苦笑する。
「あー……ですがまぁ、王弟殿下もまんざらでもなさそうというか……むしろあれぐらい引っ張り回してくれる相手でないと、あの王弟殿下には向かないんじゃありませんかね」
「……なんでそういう所が似ておるんだ、あの馬鹿助どもは……」
　誰と誰を指しているのかを察して、ルドゥインは乾いた笑いを零した。

（――確かに、あの二人、振り回されっぷりが似てるんだよなぁ……）

双方、とんでもない相手と巡り会ってしまった、というべきか。

もしくは――

「善きにつけ悪しきにつけ、男を変えるのは女であると言いますから、あれぐらいの方々で丁度良いのかもしれませんな」

「まぁ、そこは否定せんが」

あっさりと頷いてから、教皇はふと苦笑を零した。

「しかし……なんだな。そう考えると、此度のことが気がかりになるな。言うべきか言わざるべきかであそこまで悩むとは……レンドリアはよほどあの娘にそういった知識を与えるのが怖いとみえる」

「……あー……まぁ……確かに、怖いといえばかなり怖いですな……」

思わず視線を虚空へと彷徨わせ、ルドゥインは（さてどう答えるべきか）と悩んだ。

街の娼婦達に世話になることも多かったという孤児院時代、ベルという名の少女は彼女達の会話でいらんことばかり学んだらしい。

曰く、心底相手が好きな者は、相手の下着をほしがるもの、とか。

曰く、相手に自分の存在を示す時は、時々噛みついてやるのが正しい方法、とか。

ある意味において『間違っていないかもしれない』台詞なのだが、それはあくまでも娼婦である彼女等が見てきた『客』や情人の行動、または彼等への娼婦達の対応であって、一般的なものではない。

――ないのだが、彼女達『夜の徒花』を母とも姉とも慕っているベルは、教えてもらったことを『正しいこと』だと誤解して日夜実践しているらしい。

そこで本当の正しい知識を教えてやれば、その時点で彼女を軌道修正できたのだろうが――

「本当のところを教えればいいのでしょうが……どーもあの、言動はあからさまに怪しいくせに、どこをどう見ても無邪気な小動物、失礼、子供にしか見えないつぶらな瞳に見上げられると、教えていいものかどーか……こう……キツイというか、いたたまれないというか、教える自分が邪悪なんじゃないかと思ってしまうというか……」

だからルドゥインからは教えられなかった。

ケニードや他の人々も教えられなかった。

相手があまりにも小さな体をしているから、年齢的にはそろそろ学ぶ時期のはずなのに、こんな子供にこんなことを教えていいのかという気持ちになってしまうのだ。

「レメクなら大丈夫じゃないかとか思った時もありましたが……明らかに大丈夫じゃありませんでしたな」

「……というか、あやつが一番、深刻だったと思うのだがな」

なにせいきなり昏倒である。

どこまで思い詰めたらああなるのか、むしろその精神状況を説明してほしいとアルカンシエルは思う。

（……変なところばかり大真面目な男だから、今頃うなされているのではなかろうか？）

ありえる話だった。

むしろ今はあの小さな王女を遠ざけておいたほうがいいだろう。

元凶が近くにいては、たぶん延々思い詰めて悩むばかりだ。

「ふむ。……誰か適当な教育係をつけてはどうだ？　いくらなんでも、男のレンドリアにその方面の教育を全て任せるというのは酷だろう」

「教育係、ですか」

ルドゥインは眉を軽く上げた。

当初は反応を楽しみにしていた教皇ではあったが、苦手とか狼狽を通り越した相手の状態に、さすがにこれはいけないと思ったのだろう。

だが、ルドゥインはすぐに沈痛な顔で首を横に振る。
「……おそらくではございますが、十中八九、教育係も王女殿下の瞳の前に封殺されると思われます。かつて女王陛下も、似たような話の時に王女殿下に何も言えずに逃げておりました」
「……なんと。あの女王ですらもか」
「恐ろしい話、あの手合いの話を王女殿下にできる人と言えば……アデライーデ王女殿下ぐらいなものかと」
「……うぅっ！」
何を思ったのか、アルカンシエルが壮絶な顔で呻いた。
それに問いを挟まず（むしろ思い当たることが多すぎて問う必要が無い）、ルドゥインはできるだけ冷静な声で言葉を続けた。
「おそらく完全図解つきの本を用意し、解説を細かく細かくお教えくださることでしょう。王女殿下は一日で完璧な知識を得てしまうかもしれません」
「……くぅっ！」
アルカンシエルはさらに呻く。
完璧な知識を得ることが即ち解決ではないと、偉大なる教皇には分かっているのだ。
だからこそ、ルドゥインは淡々と指摘した。
「けれどおそらく、通常の右斜め上三段落ちぐらいに歪みます」
「確かに！」
「そしてレメクの被害は現状の七十三倍ぐらいになります」
「まさしく！」
アデライーデにその手合いの『教育』を任せる、ということは、つまりそういうことだ。
彼女の豊富な知識に価値を見いだし、名ばかりとはいえ『王女』の称号を得ている彼女との繋ぎをとろうと、自分の娘達を紹介し『どうぞうちの娘を導いてやってください』と頼んだ貴族達は、わずか一日で激変した娘に驚愕と絶望の涙を流したという。
どういう風に変わったかは恐ろしすぎて口にできないが、あれ以

降、娘を利用して彼女と繋ぎをとろうとする貴族は激減した。
　ちなみにその時の貴族の娘達は、全員が上流階級の正妻の座を勝ち取ったという。
「……あの娘は、確かに……確かに優秀なのだが……！！」
「なんというか……恐ろしいほどに『ネイファム族』らしい方ですなぁ」
　今は一人しかいない一族の名を出すと、教皇はうーうー唸った。
「歩く神代の図書館とまで言われた、あの尋常ではない物覚えの良さと知識量は認めるが……！　独自の理念と自由すぎる精神まで備えんでもよかったと思わぬか！？」
「とはいえ、それが『ネイファム族』の特徴ですからなぁ。……物を覚えるのは神がかって凄まじいのに新しい何かを閃くのは苦手、という一族にしては、アデライーデ姫はずいぶんと研究熱心な発明家でいらっしゃると思いますが」
「……その発明が誰一人として幸せにしない類のものだというのはどういうわけだ？」
「……『苦手』だからじゃありませんかね」
「苦手ですむ次元なのかアレが！」
　作る物のほとんどが凶悪な武器となるのはある種の才能かもしれないが、一つの薬を作るために百近い毒を作成してしまうのはかなり危険だとアルカンシエルは思った。そして天井のすす払いを作ろうとして暗殺武器を作ってしまうのは絶対に『才能』で済ませれるレベルではない。
「……あやつが本気で研究にうちこんだら、我が国は内側から崩壊するのではなかろうか……」
「使うつもりのない武器が大量生産されますな。時々レメクが出来上がった武器を譲ってもらいに行ってましたが」
「どうしてあの馬鹿助は暗器なんぞに造詣を深くしてしまうのだ！？　そこは剣とか槍とかを極めるのが普通だろうが！」
「そう思われるのでしたら、どうしてレメクに護身術だと言ってあ

りとあらゆる暗殺術を仕込んだんですか。未だにあれを護身術だと真顔で言っておるんですが」

「暗殺を防ぐのに一番効果的だったからだ！　だいたい、ちゃんと剣も習わせておったはずだぞ！　師事した者も筋が良すぎるぐらいに良いと褒めておったのに……！！」

「老公とロードの教えでもあるようですな。曰く、男たるもの全ての武器の精通するべし、とかなんとか」

「あンの大馬鹿助共め……！！」

本気の憎悪を込めたその罵声に、ルドゥインは苦笑した。教皇の言葉は感情がハッキリしているわりに、濁ったものが感じられないので心地よい。

「仕方がありませんな。今更、剣を持たせようとしても、レメクはきっと断るでしょう。『陛下がいらっしゃる限り、一目でそれと分かる武器を所有しない』という姿をずっと貫いておりますから」

「……そのわりに服の内側に武器がゴッソリあるのはどういうことだ」

「私が聞いたところによると、『他者から見た時の判断』を優先している、という話でしたな。『武器の携帯を許される職にありながら、王がいる限り一切の武器を携帯しない』というのは、王その人と王の治世に対する絶対の信頼でもあります。……剣をぶら下げた者しかいない王宮なんぞ、恐ろしくてかなわんでしょう」

「……王がいる限りここの治安は良いものである、と示したいわけか」

「そういう点では、猊下方がレメクに暗殺術を仕込んだのは素晴らしい判断であったと思われます。……まぁ、素手で熊を吹っ飛ばせる相手に、そもそも武器が必要なのかどうかは疑問ですが」

「……おまえに言われては、レンドリアも不満であろうな」

熊を素手で吹っ飛ばした伝説の持ち主その一は、軽く肩をすくめて言った。

「私は武闘神官の端くれですので。それぐらいはできませんと、い

ざという時に猊下の盾にはなりますまい」
「……普通の武闘神官は、そもそも素手で熊に戦いなど挑まぬ」
むしろ何故この男とレンドリアはわざわざ素手で熊を吹っ飛ばしたのか。未だにそこが激しく疑問なのだが、問うて返ってくる答えはきっと恐ろしく馬鹿馬鹿しいものだろう。
（……こやつらに常識を期待してはいかんからな……）
それは若い頃の教皇自身がさんざん周囲から思われてきた言葉でもある。
「ちなみにアデライーデ姫も修行中に熊を相手に格闘していらっしゃったとか」
「……あやつには、一度、貴婦人としての心構えを一から覚え直させたほうがよいと思うのだが」
「猊下。たぶん、レメクならこう言うと思われます。『なまじの貴婦人よりも遙かに貴婦人としての作法に詳しい方に何をどう一からお教えするのですか』とか」
「……おまえは時々無駄にあの馬鹿助に似ているな」
「長い付き合いですからな」
僅かに苦笑を浮かべた大男に、アルカンシエルは顔をしかめ――ややあって苦笑した。
「おまえ達の存在は、レンドリアにとっても大きな助けであろう。……女王にもそういう相手を国内に多く残しておいてほしかったものだが」
「陛下のお味方は多くいらっしゃると思いますが」
「味方、か……」
呟いて、アルカンシエルは顔を曇らせた。
「どこまでが味方なのか、今ひとつ分からぬがな。女王は己の腹心をほとんど外国へと向かわせた。周辺の国からこの国を守るための手段だったが……そのせいで、国の内側に真の味方と言うべき者をあまり残しておらんのだ」
「……」

「逆に、レンドリアにはおぬしがいた。距離を置いていたと思しきアロック卿も今は傍におる。力量ある腹心が傍にいることに関しては、女王よりもレンドリアの方が勝っておろう」

例え二人とはいえ、その二人は王国でも抜きんでた力量をもつ。また、『腹心ではないが協力者となる者』も多くいる。その数は、女王が持つそれとおそらく同数だろう。

「……レメクこそ、女王の腹心でありましょう」

「今はな。……だが、必ず何らかのきっかけで対立せねばならん時が来るだろう。あれも、女王も、互いに互いを大切に思っておる。だが、それだけではどうしようもない事態というのはあるのだ。あやつらはお互いに持っている力が強すぎる。女王の場合、本来なら奥にいる女官共の中に腹心を作っておくべきなのだが……」

「……陛下の場合は、同盟者となった腹心は他国に嫁がせておりますからなぁ……。それに、他の貴族達が寄越す密偵まがいの連中を引き受けておかなければなりませんし……」

「そういったものを閉め出しておくのも手なのだが……あれも剛毅な娘だからな」

嘆息をついて、教皇は指を組んだ。

「下手に閉め出せば、別の所で暗躍するかもしれん。ならば手元で監視するほうがいい、ときたものだ。……此度の騒動の中、密かに暗躍しておった女官もおったらしいが」

「『新しい王女』の情報が漏れるのが早かったですからな。影で悪し様にこき下ろし、噂を広めようとしていた女官もいたとか」

「ああ。……レンドリアに懸想しておったという女官であろう？」

苦笑とも失笑ともつかない笑みを零して、偉大な教皇はフンと鼻で息を吐いた。

「つまらん真似をする者もいたものだ。嫉妬で己の地位を失うほどの愚かな行為に出るとはな」

「男女を問わず、そういう者は少なくありません。自分には無いもの、自分では得られなかったものを目の前にして、相手を認めるの

ではなく『認めてもらっていない自分』を可哀想がり、こんなことは間違っていると自分勝手な論理を作りだし、相手を貶めることで己が正しく世界が間違っていると周囲一体に広めようとするのでしょう。そのような行為をした所で、己の愚かさを浮き彫りにさせるだけだというのに……」

「……なにやら痛烈だな」

「己の未熟を認めるのでなく、他者に嫉妬するというあたりが、昔の愚かな自分を見ているようで気持ちが悪いのですよ。言うなれば、同族嫌悪というやつです」

「……おまえの事情と、他の連中のソレはかなり違うと思うのだがな……」

武闘派で知られるバルバロッサ侯爵家に生まれた時、その病弱さから教会に預けられたという身の上のルドゥインは、自分を教会に押し込めた家族への慟哭を胸に、運命に復讐するように己を鍛え続けた。家族の願いや悲痛な決断に思い至ることは、当時幼かったルドゥインには出来なかったのだ。

（……無理もあるまい……）

教皇は内心で独り言つ。

その当時、彼（ルドゥイン）はたったの六つだったのだ。

「現状を憎み、己を嘆いても、おまえは家族を貶めたり家族のことを悪言雑言（あっこうぞうごん）したりはせんかった。無論、何も確かめないままに相手の状況や心情を決めつけてかかることもせんかったはずだ。……何故、と嘆くことはあってもな。……おまえを教えておった神官達からはそう聞いておる」

「そんなことを考える暇がなかっただけかもしれませんが」

「人間性の問題であろう」

キッパリと言いきって、教皇は話題を少しだけ変更した。

「……件の女官共は、差し向けていた貴族の元に返されたらしいな」

「当然の処罰でしょうな」

ルドゥインの声はあからさまなほどに冷たい。

「……おぬし、仮面会議も嫌いであろう」
「ええ。心底。監視に行かされるたび、ぶっ壊したくて仕方がありませんなァ。頼みますから別の者を向かわせていただきたい」
凄みのある笑顔を浮かべる巨熊に、教皇は苦笑した。
「おまえのような者でなければ、アレの監視はできぬ。他者の言葉に簡単に流されるような者では、あの場所の毒に染められてしまうからな」
「その仮面会議で、此度の騒動の件、だいぶ話題にのぼっておりましたが……」
「なにか目新しい情報でも入ったか？」
言葉を濁したルドゥインに、教皇はスッと目を細める。
ルドゥインは周囲の気配を探ってから口を開いた。
「二、三、気になる情報が入ってきました。一つは遠方であるレンフォード公爵家に連絡をとったのは誰であろうか、という話なのですが……」
「例の女王付きだった女官であろう？」
「公爵夫人に連絡をとったのは、その女官であろうと思われます。ですが、分からないのは『公爵が』どの時期に情報を手に入れ、此度のことを画策したか、なのです」
「……」
「公爵夫人が王都へ行くことになった。……その便乗にしては、いささか腑に落ちない点がありまして。出席者の中には公爵をよく知っている人物も幾人かおりましたので、そういった『方々』の……現状、我々が最も警戒している方々の会議で話されていたのは、誰か他に誘導者がいたのではないか、といった内容です」
「……あやつの裏にさらに誰かがいた、という話か」
「あくまでも方々の憶測ではありますが。……というのも、昔から公爵には『相談役』がいたという話なのです。公爵自身もそれを仄めかせていたらしいですな。不自然なほどの成功を収めたときに、どんな手妻で成したのかを問うとこう答えるのだそうです。『良き

相談役がいてな』と」

「……」

「ですが、それがどこの誰であるか、といったことは伝わっておりません。どこの家にもそういった相談役はおりますからな。探りを入れつつもそれほど不審には思わなかったことでしょう」

ふいに底冷えする光を目に宿した大男に、教皇は鷹揚に頷く。

上流階級になればなるほど、優秀な相談役の存在は不可欠となる。家の規模が大きくなるごとにその必要性は高まり、王にとっての宰相のような存在が各貴族の家に生まれるのだ。

そういった需要を見越し、専門的に『仕事』として請け負う者も昨今では増えていた。

だが――レンフォード公爵の言う『相談役』が、通常の相談役と同じとは思えなかった。

「王弟殿下を亡き者としようとした中庭の件でも不審な点があります。王弟殿下は『公爵夫人』から手紙を受け取り、中庭に呼び出されました。その手蹟は確かに公爵夫人の手蹟とよく似ていたそうです」

「……公爵夫人は、手紙を出してはおらぬのだな？」

「本人や身の回りの世話をしていた侍女に聞きましたが、そのようなものを出した覚えは無い、とのことです。そもそも、公爵夫人は急ぎの馬車旅がたたって、到着後は街屋敷で休んでおられたようですな。疲れているのに、なぜにそんな真似をしなくてはならないのか、そもそも直接会う気などない相手を呼び出す意味が分からない、と言われました」

「……ある意味、あの娘らしい言い様だな」

兄王の子とはいえ、馬番の血を引く現王弟（アルゼウス）を忌々しく思っていたマルグレーテだ。その言葉に偽りは無いだろう。

「わざわざ手蹟を似せた、ということは、あの娘に罪を被せようとした、ということか？」

「王弟殿下達と直接王宮に出向いておられたのは公爵夫人ですから、

呼び出しを行うのに適当な人物であった、ということかもしれません。『アルトリート』のことで呼び出されれば、王弟殿下は赴いたことでしょう」

「アルトリート自身がその場に赴いたのは、不穏な動きを感じたからか」

「邪魔者は排除しなくてはいけない。そう言われても、実感としては無かったのかもしれませんな。どこで何を聞きつけて来たのか、危険があると察し思わず駆けつけてしまったようです」

そして、公爵の言葉の意味を思い知った。

もう、後戻りできないことを悟った。

あとはただ、絶望へと向かって歩むことしかできなかったのだ。

「……動き出した時を止めることはできぬ。排除を促した公爵の言葉に、もはや頷くしかなかったということか」

「全てが公爵の思惑だったとしても、何やらお膳立てがされすぎている気がいたします。情報戦に関して、確かに公爵は抜きんでた才能をお持ちですが、上手く動きすぎている感があるのです。違和感と言いますか……」

「……」

「相談役がいたのであれば、此度の騒動、少しばかり様相が変わってくるのではありませんか。公爵家の闇を利用して、何かを成そうとした者がいるのではないかと……そう思うのです」

だが、公爵以外が裏にいたとして、この騒動で何を得ることができたのか、そもそも何を目的にしたものなのか、それが分からなかった。

公爵には動機があった。入れ替えに関しては、公爵夫人にも動機はあっただろう。

アルトリートにもあった。

だが、この三者以外でこの騒動に深く関わり、騒動によって利益を得た者となると首を傾げざるを得ない。

「嫌な言い方ですが……一番得をしたのは、王弟殿下ということに

なるでしょう。過去を消し去り、王族に迎えられたのですから」
だが、その可能性はあまりにも低い。もし、今まで見てきた彼の姿が全て演技だとすれば、それはそら恐ろしいほどの役者ということになるだろう。
「クレマンス伯爵はレンフォード公爵位を得ましたが、家に大きな傷をつけてまで公爵位を望むとは思えません。彼自身、己が未だ未熟であることを知っています。その状態で、いきなり公爵になることがどれほど辛いことか……分からないはずがありません」
次に得をした者は誰か。そう考えて次々に名を挙げていっても、なにかひどくかみ合わないものがでてくる。
「レンフォード家の権勢を削ぎたい者の暗躍であれば、話は早いのですが……」
「前公爵がそれを許すとは思えぬな」
「左様。性根や性格の点はともかく、才覚に関しては他の貴族と比べ者にならぬ御仁です。経験も豊富ですし、そう簡単に他者に出し抜かれるとは思えません」
「……それで『相談役』か」
教皇は髭に手をやり、ゆっくりと撫でながらルドゥインを見上げた。
「……その話は、どこまで回っておる？」
「……まだ、会議の中ぐらいでしか」
「ならば、捨ておくがよい」
驚いて目を瞠るルドゥインに、教皇は眼差しだけで「聞くな」を伝えた。
「……その『相談役』については、今はまだ語れぬ。無闇に語れば、何を招くか分からぬ故な。……で、他に気になる情報というのは、何だ？」
ルドゥインはしばし教皇を見つめていたが、一息ついてから口を開いた。
「実は、レンフォード公爵領の貧民街で……」

報告の途中から顔をしかめた教皇は、聞き終えると同時、心の底からの嫌悪を込めてこう呟いた。
「……痴れ者が」

※　※　※

神殿にはいくつもの無人空間が存在する。
もともと巨大な建物だ。中に入るのは難しいが、一度中に入ってしまえば一部の区域を除き比較的自由に動ける。神殿騎士や神官達の目は重要な部屋や価値ある美術品に向けられているため、それらが配置されていない外側への関心は薄い。
そんな外側の窓枠に腰掛けて、クリストフは眼下の景色を眺めるともなく眺めた。
すぐ近くに見えるのは、巨大な神々の像が並ぶ広場だ。その向こうには大きな神殿があり、街はそれらを隔てた向こう側に広がっている。
淡いオレンジ色の屋根瓦。やや白茶がかった家々の壁。高い場所から見下ろす街の様子は、今まで見てきた景色とはまるで違っていた。
どこか遠く、朧気な印象の街。
ひどく現実味のない、岸の向こう側を眺めるような奇妙な感覚。
（……）
何かが頭の中で言葉を紡いだ気がした。
クリストフはあえてそれに気づかないふりで街を眺める。
陽光に照らされた街は遠目には美しく、人々の喧噪は遠く、空を渡る鳥の軌跡だけが止まった景色の中を流れていた。
クリストフは此処ではない別の所を見る眼差しで眺める。瞳に宿る虚無は深く、その顔には表情が無かった。
恨むな。

言われた言葉が脳裏をかすめる。
恨むな。恨むな。恨むな。恨むな。
けれど、それが最も不条理な結末を押しつけられた相手の最後の言葉とはいえ、無条件で頷くことなどできるはずがない。
最後の言葉は全て人伝で、語り合うことなどできなかった。直接交わした会話は、噛み合わずすれ違ったままのもので、だからこそこれほどに胸の奥にしこりができている。
何を考えていたのか。
何を思っていたのか。
それを知ることはもうできない。
（……アルトリート……）
「はいほー」
「ぎゃ――――――ッ！！」

突然パーンッと勢いよく背中を叩かれ、クリストフは反動で窓の外に吹っ飛んだ。
咄嗟に絶叫をあげ手を伸ばすと、華奢な手にワシッと掴まれる。
「あっちゃー、ビックリした。いきなり吹っ飛ばないでよ、そのまま落ちて死んじゃうじゃない」
「吹っ飛ばしたのはお前だオマエ――――――ッ！」

窓から身を乗り出した犯人（アデライーデ）にしがみついた格好で、クリストフは総毛立つ。中空に浮いた足が風を感じる。それがひどく恐ろしかった。
「俺を殺す気か！？　おまえ本当は俺を殺す気なんだろ！？」
「やぁねぇ。殺す気ならもっと手際よくやるわよぅ。パキョッと」
「怖い音口にすんな！　骨か！？　骨折るのか！？」
「首やっちゃえば一瞬よ。心臓を一撃で刺すのと同じぐらい一瞬」

「だから怖いこと言うなーッ！！」
　わっさわっさと必死に足を動かして足場を得ようとするのだが、建物の構造上、窓の下の壁はやや遠い。ぷらんぷらん揺れる体に、アデライーデが困り顔になった。
「ねーェ、アルルン。あんまり揺れられると引き上げれないんだけど？　ちょっと大人しくしてくれないかな」
　途端にピタッと動きを止めたクリストフにニッコリ笑って、アデライーデは一息で自分より背の高い相手を窓枠まで引き上げる。そのまま内側に引っ張られて、クリストフは半ばアデライーデにすがりつく形で廊下に戻った。
「し……死ぬかと思った……！！　絶対死んだと思った！！」
「やーねぇ。あたしがいる限り、勝手に死なせやしないわよ」
「おまえが殺しそうなんだ俺を！」
「あらー」
　可愛らしく小首を傾げて、アデライーデは不思議そうな顔を作ってみせた。瞳の輝きで偽顔なのがバレバレだが、その姿は本性を知っているクリストフでも見惚れるほどに美しい。
「それよりも、お腹空かない？　もうお昼回っちゃってるし。アルルンってばしばらくご飯食べてないでしょ。ちゃんと食べてお勉強に備えなくちゃね」
「別に腹なんか減って……」
　言うや否や若い胃袋が不満の声を張り上げたのは、ほとんど「ご飯」という言葉への条件反射だろう。長く尾を引く音にしばし耳を傾けてから、アデライーデはウンウンと頷いてアルトリートの手を引っ張った。
「さ。勉強部屋に行きましょーか。ご飯もちゃんとそこに用意してもらってるからねー」
「……ッ」
「あと、お腹空いてないっていうぐらいなら、お勉強にも丁度いいかも～。教材を一ページ音読しないと一口食べれないからね～」

「どんな拷問だよ!?　飯なら飯で普通に食わせろ!」
「なに言ってんの。神官になるんでしょう？　早い子なら五つか六つの時分から少しずつ仕事や勉強を習うっていうのに、アルルンってば二十歳超えちゃってからの挑戦じゃない？　のんびりご飯食べる時間なんて無いわよぅ？　睡眠時間もガンガン削っちゃうから、覚悟しといてね？」
「……ッ!!」
クリストフは一瞬顔を引きつらせ――すぐに表情を引き締めた。
その様子を密かに盗み見て、アデライーデは相手に見えぬよう、少しだけ悲しげに笑う。
そうして、敢えて明るい声で言った。
「道のりは険しいのよ。でも、やるって決めたんでしょう？　だったら、一分一秒も惜しいわ！　今日からあなたはあたしの生徒！　ビシバシ鍛えるからね!」
覚悟するのよぅ？　と悪戯っぽく後ろを振り返ると、驚くほど真剣な目がそこにあった。
アデライーデは一瞬、息を呑む。
「……アディ」
「……な、なに？」
「俺は、神官になれると思うか？」
真っ直ぐに見つめられて、アデライーデは瞬き一回分の沈黙を落とす。そうして、底冷えするほどの覇気をたたえて笑った。
「なるわ」
なれる、ではなく『なる』と。
敢えて口にした理由を――彼はきっと理解するだろう。
「あなたは選んだ。あなたの生きる道を。なら、必ずあなたは神官になるわ」
アルトリートは唇を引き結ぶ。

その眼差しを一瞬たりとも逸らさずに受け止めて、アデライーデは笑った。

かつて自分が通った道を今通ろうとしている、自分が守るべき人に。

「死者への祈りも、生者としての贖罪も、魂とこの血肉に刻まれる。……法を統べなさい、クリストフ・オリガ・サイフォス。あなたは今日、死に、今日、生まれ変わる。本来の立場であれば決して得られない偽りの自由の中で、あなたがなりたいと思ったものになりなさい」

「……」

「あたしがかつて、家族を失い、この地で生まれ直したように」

「……！？」

告げられた言葉に大きく目を瞠り、クリストフは反射的に何かを叫ぼうと口を開いた。

だが、言葉は出ない。

愕然とした顔の中で、声を失ったその口の動きが、ひどくアデライーデの印象に残った。

「ナザゼルねーさまのとは、事情が違うけどね」

ニコリと笑って、アデライーデは語った。

「あたしはね、末姫ちゃんと同じで、最初は貴族でもなんでもないの。ネイファム族っていってね、物覚えのすごくいい、学者肌な一族の出なのよ。王立図書館の生き字引とか、そんな感じの人が多くてね。外見的な特徴とかは持ってないから、髪や目の色や、顔立ちなんかで一族を判断することもできないのよ」

ナスティアに存在する三十余りの一族のうち、現在、確認できる個体数が少ないのは、メリディス族ではなくネイファム族だった。

自由な気質の一族だったため、どこかに定住することもなく、各地に散っていった血族達は、どこに混じったのか今では探すこともできないほど。わずかに王都近くの一地区に数家族程度の一族がいたが、それも今はもういない。

前王の時代の飢饉で数を減らし、その数年後に起きた事件でアデライーデを除いて全て死に絶えてしまったのだ。

「……かあさん達はねぇ、新しい王様になってるから、少しずつ生活もよくなるはずだよ、って、今までの歴史を暗唱しながらあたしに語ってくれたのよね。もう、畑には何も植わってなかったけど、ほら、あたし達って物覚えいいから？　食べられるものがどこにどういう風にあるのか全部知ってたから、貧しくてもなんとか生き延びられたのよね」

けれど、世の中が良くなるよりも早く、彼等は倒れてしまった。飢えで衰えた体は、内側に入れられた悪魔に勝てなかったのだ。

「ある日ね、村の皆がお腹壊しちゃったの。いったい何喰ったのよって感じよねぇ？　そのうち熱も出て変な痣みたいなのも体に浮いてきて、どんどん体が衰弱していったわ。似たような流行病の文献を思い出して、出来る限りの治療をした。でも、既存の薬草や医学ではどうしようもなかったわ。だから、あたしは王都に来たの。新しい知識を得るために。でもねぇ、あたしってば頭はいいんだけど、当時はまだちっちゃかったし、ボロボロだったから、まぁ図書館にも入れてやもらえなくってね。それでも頑張ってたら、どういうわけか陛下が来たの」

「……」

「驚くよりも前に、チャンスだと思ったわね。王の権力っていったら、そこらの木っ端役人とは比べものにならないのよ。これを利用しない手は無いって思ったのよね」

「……おまえ……その発想は子供の頃からかよ……」

「そうよ？　いけない？」

むしろ胸を張って言われて、クリストフは微妙な顔で口を噤んだ。何故だろう。衝撃的な話をされているはずなのに、相手がこの女だというだけで、同情や驚愕よりも先に戦きが体に走ってしまう。

「あたしが陛下の役に立つ兵隊になるから、勉強させて欲しいって頼んだのよね。そうしたら、陛下はあたしを養女にしてくれたの。

言ったあたしもビックリしたわよ。うわこうくるかこの人、って思ったわね」

「……おまえ……相手……王様……」

「なによぅ。不遜さじゃ負けてないくせにー」

拗ねたように唇を尖らせてから、アデライーデは繋いでない方の手で軽く頭を掻いた。

「でもねぇ、結果的には、間に合わなかったのよね。……当時、陛下はあたしにいろんな便宜を図ってくれたわ。生き残ってた人達も王都に運んでくれて、手当してくれた。国で一番のお医者様に師事させてくれたし、沢山の本を見せてくれた。珍しい薬草もいっぱい使わせてくれた。――けれど、駄目だったの」

何を試しても駄目で、一人、また一人と知り合いが息を引き取る中、アデライーデはレメク・クラウドールと会った。出会う時期が大きく遅れたのは、当時、彼が王宮にいなかったからだ。

前クラウドール公爵の死をきっかけに、長い間自分の屋敷に引きこもっていた彼は、女王の頼みを受けてアデライーデの元を訪れた。そうして、病人に接して後、厳しい表情で彼女達の一族に広がった『病』の名を告げたのだ。

おそらく、知ってはならなかっただろう、残酷な現実の名を。

「……うちの一族がかかって『病』ってねぇ……バシレウス・プトマなのよねぇ」

「……ばしれうす？」

「『死毒の王』」

言って、アデライーデは笑った。

けれど、我ながら上手く笑えたとは思えなかった。きっと、ひどく歪んだ奇怪な笑みになったことだろう。

なぜなら――

「『死毒の王（バシレウス・プトマ）』はナスティアに昔から存在する、ある毒によって死んだ生き物から作られる『毒から生まれた毒』。遅効性で、病に似た症状が出るから流行病と間違われやすいんだけどね」

「おい……それって……！」

血相を変えた相手に、アデライーデは出来る限り明るく笑ってみせた。

昔話の一つを披露する程度の話のようなフリで。

「そうよ。うちの一族は、毒を盛られたの。そして、みんな死んだわ。バシレウス・プトマはね、効果はゆっくりなんだけど、致死率が百パーセントなの。最初は、ただお腹壊したのかなっていう程度だったのにね」

絶対に助からない毒。

末期症状の家族。

医術も、薬草学も、詰め込んだありとあらゆる知識も、もう何も意味を成さなかった。

窶れ死に行く家族を前に、絶望に世界を塞がれ、泣き叫ぶことすらできなかった。

「うちの一族って、好奇心が強いのよ。そのうえ、物覚えがすこぶるいいでしょ？　どうもそれでねぇ、知っちゃいけないこととかもいっぱい知っちゃってたらしくてねぇ。すごく邪魔だったらしいのよね～」

国が歪んでいた時代、それでも生きようと必死だった人々。新王の即位で、ようやく未来に希望を見出した彼らに、その毒は盛られた。

遅効性の毒はゆっくりと人々を死に向かわせ、一つの村を死滅させたのだ。

――アデライーデ一人を残して。

「だからね、ナザゼルねーさまは、あたしに優しいの。同じじゃな

いけど、同じような境遇だから。おかーさまがあたしの研究とかを大目に見てくれるのも、あたしの昔を知っているから」

「……」

「バシレウス・プトマの症状は、あたしの知識の中には無かった。あれは王族に近い貴族の間で使われていた暗殺用の毒だから、あたしが知れるような範囲の文献や口伝には無かったのよね」

もし女王が直接『病人』と接していたら、その身に宿す『真実の紋章』で毒を感知できたかもしれない。

だが、当時、女王にはその時間がなく、流行病の可能性の高い病人に彼女を近づけさすまいとする動きもあった。女王と直接会ったのは、毒の影響を受けなかったアデライーデ一人で、そこから原因を読み取ることは女王にもできなかったのだ。

「……あたしは悔しかったわ。知っていれば、可能性の一つとして検討できたかもしれない。そうしたら、打てた手があったのかもしれない。少なくとも、クラウドール侯爵は原因を言い当ててすぐに手当してくれたわ。特別な紋章を持つあの人じゃなきゃできない手当だけど……でも、もし、あたしがあの毒のこと知っていて、陛下にそれを言っていたら……もっと早くに、同じ処置をお願いできたかもしれない。そうしたら、一人でも救えたかもしれない。……でも、間に合わなかった。致死率百パーセントは誇張じゃないわ。……服毒すれば最後、誰一人、助けられないんだから」

「……アディ……」

呼びかけ、けれど続けるべき言葉が見つからずに戸惑っている相手を見て、アデライーデはニッコリと笑った。今度は上手く笑えたと思った。

「一人残されちゃってねぇ、まぁ、ちょっといろいろあってから、この世のありとあらゆることを知ってやろうって思ったのよね。ほら、あたしってば物覚え凄くいいから？　謎とか、知らないこととかあるのは許せないのよ。だってまた同じ事を繰り返すかもしれないじゃない？」

「……」

「なんでも習ったわ。実践したり実験したりした。王立図書の全ての本を読み尽くしても、侯爵が手に入れてくれる珍しい本を読破しても、まだ足りない。まだ沢山『何故』『どうして』が世の中にあるの。だから今もずっと探して求めて取り込んでるところ。いつかあたしが死ぬまで、あたしが知ることのできる全てを知り尽くしてやるわ」

でもね、とそこで首を傾げて、アデライーデは浮かべていた笑みを悪戯っぽいものに変えた。

「困ったことに、どんなに本を読んでも、知識を増やしても、学べないものも沢山あって、それらはどうやってもあたしに『回答』をくれないの。沢山の情報を並べて、このパターンはこれ、あのパターンはこう、っていうのは把握してるんだけどね」

「……？　何かの、実験とかか？」

「人の心」

トン、と指で相手の胸をつくと、クリストフは目を丸くした。

呆気にとられたらしいその顔に、ふいに本心からの笑みが零れる。

「あは！　意外だった？　でも、人の心って、本には載ってないのよ。それでも、いろんな人の行動パターンで『パターン』だけは把握できるの。……でもね、それじゃあ、駄目なの。今回だって、全く駄目だった……」

「……」

「人の心を把握しようだなんて、思うほうがおかしいのかもしれないけどね。でも、それを把握しないと外交や、内政の交渉に役に立てない。けど、そういう場で有効な『他人の心の動き』を把握したところで、もっと奥にある大事なものは理解できない。……上辺だけの、薄っぺらい知識なのよ。あたしが持ってるのって。どこまでいっても、本に書かれた文字だけの範囲なの。だから、大事な所ではあんまり役に立たないんだけどね、あたしって」

「どこがだよ！？」

突然叫ばれて、アデライーデは驚いてクリストフを見上げた。
目の前にいる青年は、怒ったような顔でこちらを睨んでいる。
「ちゃんと役立ってただろ!?　馬が暴走してた時、鎮めてくれたの誰だよ!?」
「や。ほら、それ、知識関係ない……」
「キツイチビ姫がいなくなった時、居場所突き止めたのは!?」
「いやほら、でもあれ、役に立っては……」
「行くのが遅れたら、チビ姫、剣であいつに何してたか分かんねぇだろ!?　止めたの誰だよ!」
「ぇぅ」
「あの色っぽいネーさん引っ張り込んだのだって、おまえだろ!?　色々やってただろうがおまえは!　ソレが一つも役に立たなかったって言うのかよ!?」
「い、言うか言わないかっていう話じゃなくてね!?　というか、別にそんな、ただの結果を言ってるだけでしょ!?　なんであなたが怒るのよ!?　怒りどころがどこにあったのよ!?」
「だったら泣きそうなツラで言ってんじゃねェよ!」
「泣……ッ!」
言われた言葉に、アデライーデは愕然とした。
(泣きそう?　泣きそうな顔って!?　あたしが!?)
した覚えはない。断じて無い!
「して、ないわよ!?」
「だったら何だよアノ面!」
「し、してない、し、知らないわよそんなの!」
「知らねェとか言ってないで自覚しろ!　頭イイくせに実は馬鹿だろ!?」
「失礼ね!　アルルンに馬鹿って言われたくないわよ!?」
「アルルン言うな!　拒否するって言っただろ馬鹿!　あんな名前いらねぇ!」
「ざーんねーんでした!　クリストフの名も使えないのよ!　別人

になんなきゃだから！　だから猊下や大神官が作った新しい名前の戸籍でいくしかないの！！」
「ぐ……ッ！」
ビシッと繋いでない方の手で指をつきつけられ、クリストフは苦々しく顔を歪めた。
「て、てめぇ……ちょっとヨワった顔したかと思ったら、根っこはコレか……！」
「ぅ……そーよ！？　あれよ、お涙頂戴話しとけば相手を弱らせるっていう戦法よ！」
「……明らかに今考えた理由だろソレ。てゆか口に出して言うな。本当は本気で馬鹿だろおまえ……」
「アルルンに言われたくないって言ってるでしょ！？」
「アルルン言うなって言ってるだろ俺も！」
カッ！　と噛みついてきた相手に、カッ！　と噛みつきかえして、クリストフは繋いでない方の手で相手と同じように相手の顔に向かって指を突きつけた。
「だいたい、勝手に人の名前作るなよ！　てゆかいつ作ったんだよ！？　俺が要望伝えたのはさっきだろ！？」
「アルルンの行動なんて予想されまくってるのよ！　王族名蹴るのも王族入り蹴るのも全部予想の範囲内！　絶対嫌がるんだから逃げないうちに王都内に封じ込めるためにあんたが言い出しそうなことを予測して手ぇ打ったのよ！　『あの人』のことを思うなら神官！　『なにもなかったことにする』なら馬番！　『自分のことだけ考える』なら遠い場所に行く！　その中でたぶん神官だろうからって、新しい戸籍先に用意して準備して手はず整えてあなたがいつ言い出しても大丈夫なようにしてたのよ！　……三日前に」
「直後かよ！？」
「だってアルルン素直すぎて予想しやすいんだもの～」
むしろ可哀想な子を見る顔で言われて、クリストフはガクガク顎を震わせた後、嫌な予感に恐る恐る尋ねた。

「……ちょっと待て。その流れでいくと、俺が名乗ることになる名前って……」
「クリスト『ス』」
「ほとんど変わらねェ！」
「アルトマイヤー」
「わざわざアル入れんな！！」
「いいじゃないの～。面倒な親戚がいなくてそこそこの階級で目立たず騒がれずにいられる姓を探すのって大変なのよ？　いきなり二十歳過ぎたでっかい息子を迎えても大丈夫な家っていうのもなかなか無いんだから」
「って実在の人間の家かよ！？」
「当たり前でしょ～？　いきなり何もない所に戸籍作っちゃったら、調べられた時に即バレじゃない。つじつまあわせるのって難しいのよ？　だから徹底的に調べて調べてしないとバレないぐらいの所にアルルンを突っ込んだわけ」
「……突っ込むな……」
「だから、君は『クリストス・テオドリヒ・アンゼルム・ハイゼ・アルトマイヤー』よ」
「長ーッ！？　長ぇぞ名前！！」
「がんばって覚えてねー」
「嫌がらせだ！　絶対嫌がらせだ！！」
すごい形相で叫ぶクリストフに、アデライーデはまるで村娘のようにニカッと笑って言った。
「よろしくね！　アルルン！！」

※　※　※

ベッド横のテーブルに水差しとタオル、洗顔用の銀の器を置いて、ケニードは「ふぅ」と一息ついた。
すぐ傍らの大きな寝台には、額に小さな赤ちゃん猫を貼りつけた

青年が昏々と眠っている。つい一月ほど前に以前の寝台と入れ替えたという天蓋付きのそれに視線を向け、ケニードは明かりが眠りを邪魔しないよう、引き上げていた寝台の布を垂らす。

カーテンも一応引いておこうかと部屋を見渡した時に、ふいに小さな声が聞こえた。

「……新しい王弟君は、神官になることにしたようですよ」

ケニードは反射的に寝台の方を見る。

今は人の姿をしていないヒトの声に、けれどケニードは軽く笑って頷いた。

「……たぶん、そうなるんじゃないかな、って思ってました」

「予想通りということですねぇ」

「配属先は、大神殿の方ですか？」

「さて？　大聖堂の方が大神官殿がいる分安全ですから、まずはそちらに回る可能性が高いですけどねぇ。けど、そんなに長い間はいないと思いますよ」

「内部の抗争ですか？」

「えぇ。派閥って面倒ですよねぇ。大神官殿は有名な血筋ですから、わりと周りの方が腰引けちゃうんですけど、あの子はねぇ……身分隠す分、色々危険だと思いますよ？　おまけにその大神官殿が後見人でしょう？　『繋ぎ』に丁度いいとして寄ってくるでしょうねぇ」

「……あんまり、そういう連中を上手く捌けそうにないんですけど……彼」

「無理でしょうね。変な所で反感覚えられて、どっか遠くの朽ちかけな教会に派遣されちゃうでしょうね」

「……」

「そのほうがいいんですよ」

思わず沈黙したケニードに、寝台の中にいるそのヒトはあっさりと言う。

「今、この王都にいても、彼は役に立ちません。彼が必要になってくるのは、もっと別の場所、後の時代です。むしろしばらくは辺境

にいてくれたほうが、この国にとってはいいでしょう」
「……それは『予知』ですか？」
ケニードの声に、声は小さく笑う。
「そうですね……いずれ来るだろう、ごく身近な未来の予測ではあります。けれど、その先になると揺らぎが大きくてよく見えません」
「……」
「……心配ですか？」
ケニードの沈黙に、声はそう問いかけてきた。
ケニードは少しだけ困り顔で笑う。
「……あの子は、これからどうなるのかな、って思って。悪い方に転べば、陛下やクラウドール卿にとってとんでもなく辛い敵になるでしょうし……でも、あの子自身がどういう風になるかは、彼自身の心の問題だし……」
「誘導する手段はありますけどね」
言われて、ケニードは少し前にレメクから預かった書簡を懐から取り出した。
それは舞踏会の休憩所でレメクが女王から預かった書簡だった。内容の事実を確認するため、情報を集めやすいケニードに託されたのだが、結果を報告するのはケニードにとっても気が重いものだった。
「……これを知れば、王弟殿下はまた傷つくでしょうね……」
「私は人間ほどおぞましい生き物はないとつくづく思いましたよ。よくもこれほどまでに愚かな行為におよべたものです」
「……ひどいですよね……」
書簡の封を撫でて、ケニードは重いため息をついた。
書簡に書かれていたのは、レンフォード家が所有する公爵領の一角で起きた事件についてだった。
「孤児院を含む貧民街の全焼、ですか。……なにもかも燃やして、彼等が関わった人達を消してしまったわけですねぇ……入れ替わりが成功した時に、彼等の入れ替わりがわかる人を残しておかないた

めに」
「……公爵家の下働きの中に、何人かの行方不明者や事故による死者が出ているのも、同じ理由からでしょうね」
「用意周到ですよ、あの公爵は。馬小屋まで燃やしてますからね。……ただし、急ぎすぎてかえって今墓穴掘ってますけど」
ケニードは頷いた。
レメクが女王から預かり、ケニードへと託したその書簡の真実をもってすれば、公爵は自分の領民の命を奪った極悪人ということになる。すでにケニードは、貧民街を焼いた犯人とその指示者の名前をつきとめていた。
「公爵はいろいろ動いていたようですからね。探せばあちこちからネタは見つかると思いますよ。それをもって、憎しみの対象を公爵に集中させることは可能でしょう。……けれど、恨みや憎しみは後に傷跡しか残しません」
「……」
「あなた方が誘導を躊躇う理由は、それでしょう？　それに……今、あの子にこれ以上辛い現実をつきつけるのは、どうかなと思いますしね」
小さな呟きに、ケニードは声の方を向き、今も大切な人の額に張り付いているだろう小さな猫を頭に思い浮かべて微笑(わら)った。
「気遣ってくれてます？」
「まぁ、あの子はレンさんにとってもご主人様にとっても大事ですし。あなた方もなにやら大切にしてますしね」
素直ではない相手の言葉に笑って、ケニードは書簡を懐に仕舞った。
「……きっと、後で知っても彼は傷つくでしょう。せっかく癒えたはずの傷が、また開いてしまうかもしれません」
「……」
「どうするのが一番いいのか……僕にもわかりません。どの方法が正しいのかも……けど、家族みたいな人を喪って、その上、親しか

った人や、今まで生活していた場所を奪われて、なにもかもを無くしてしまっただなんて……それを今教えていいのかどうか……判断がつかないんです」

「……」

「それを決めるのは僕達じゃないし、勝手に情報を隠すのはどうかと思うんです。けど……せめて、せめてもう少し……彼が彼として、新しく生きていく道を自分で決めて進めるまでは、これ以上、辛い思いをしないでほしいと思うんです」

せめてもう少し、辛い現実をもう一度受け止めれるようになるまでは。

「……これが正しいことだとは、思えませんけど……」

ケニードの言葉に、相手はしばらくの間沈黙してから、ややあって微笑みを溶かしたような言葉を零す。

「誰かの思いを、向けられた人がどうとらえるかは、その人次第でしょう。善いことか悪いことかどうかを判断するのも、また、人それぞれです。状況を鑑みて意見することはできても、決めつけることはできません。……あなた方は、あなた方が相手を思う気持ちで、どう動くべきかを決めた。後はただ、彼がそれを知った時に判断してもらえばいい。……何故もっと早く知らせてくれなかったのかと、恨まれる覚悟もすでに出来ているのでしょう？」

ケニードは頷いた。

それは、これを知る人々が全て覚悟していることだった。

「……身勝手ですよね、僕達は」

「……それを決めれるのも、『彼』だけですよ」

声はどこまでも穏やかで、優しい。

ケニードはふと不思議に思う。

そういえば、自分はこの相手とそれほど親しい間柄ではない。なのに、思い返せばいつだって、このヒトは自分に優しかったような気がする。

「ロードは、どうして僕に親切にしてくれたんです？」

ふと気になって尋ねると、突然変わった話題に驚くことなく、相手は笑いを堪えるような声でこう返した。

「それはね、逆なんですよ。あなたが『親切な人』だったから、私もそうみえるというだけです」

なぜなら、と声は言葉を続ける。

少しだけ悪戯を思いついたような、どこか子供のような声で。

「私は、人の『鏡』ですから」

番外編　【魔女の呪いと希望の種】

神々の王たるレゼウス神殿には、王族が滞在するための豪華な部屋がいくつもある。

なぜそんな部屋が神殿内にあるのかといえば、教会内での会議（エクレシア）や各国の代表との会談はアルティア神殿で行われるが、国の重要な会議などはレゼウス神殿で行われるためらしい。

そのため、領地を持つ王族が王都に集結した時などに泊まってもらえるよう、神殿内に宿泊用の部屋を作ったのだそうだ。

建国当時は今よりもずっと王族が多くて、中には神殿に留まってずっと仕事を手伝っていた人もいたそうだから、レゼウス神殿というのは王族専用の宿泊施設みたいな所だったのだろう。

（……いいのかなぁ……神殿がそんなんで）

羽根ペンの羽根部分をガジガジ噛みながら、あたしは力無く眉を垂らした。

あたしがいるのは、王都西区クレマリス大神殿、神王レゼウス神殿の一室。

他の部屋に比べればものすごく質素な部屋で、周りには調度品の類がほとんどない。

あるのは大きくて立派な本棚に、びっしりと収められた沢山の本。やたらと立派な机と、机の大きさに反して三つしかない立派な椅子。そして文字を書けるように加工された壁である。

その加工された壁に向かい合う形で、あたし達は椅子に座っていた。

あたしの横には、半ば本の山に埋もれている金髪の美青年。紫紺の目の下にはくっきりとクマができていて、その顔は前に見たときよりも格段に窶れていた。

なにやら生気搾り取られたミイラみたいな顔なのだが、本を読ん

でいる目にはちょっと怖いぐらい強い光がある。
なんというか、こう――ギラギラッ、という感じに。

その横にいるあたしはといえば、用意された羊皮紙にミミズがのたくったような汚い字を書きながら、壁の前に立っている美巨乳おねーちゃんの講義を受けていた。

正直、今のあたしはお勉強ができるような心境ではないのだが、かといって他に何かができるわけでもなく、しょんぼりと受けている。

今習っているのは、あたし達がいるレゼウス神殿についてのことだった。

神殿というのは神様のお家なのだと思っていたのだが、実際にはそうではないらしい。

教皇であるアルルじーちゃんの私室もレゼウス神殿にあることからして、レゼウス神殿とは『神殿』とは名ばかりの『ナスティア王族のお家』なのだろう。

よくエラス教を信仰してる他の国から文句が出ないもんである。

「他国からの賓客も、時と場合によってはレゼウス神殿に泊まることがあるのよ。昔の例で言えば、三百二十七年前にあった『魔族封印会議』における出席者は全員レゼウス神殿で起居していたわ」

敏腕教師ことナスティア王国第十王女アデライーデ姫は、黒縁眼鏡をクイッと指で押し上げながらあたしの疑問にスラスラと答えてくれた。

「元々クレマリス大神殿は、大聖堂と違って神事祭事が少ないの。特にこのレゼウス神殿は余程のことがないかぎりそういった用途では使われないわ。ナスティアの建国について考えてもらえれば分かりやすいと思うんだけど、ここは、ぶっちゃければ豪華な軍事基地なの。本部がレゼウス神殿、小会議をしつつ戦勝祈願して兵の気を高めるのがアルティア神殿、非戦闘民を保護したりするのがヘラティイア神殿、人々が自分の信じる神に祈ったり託宣を受けたり集会

を開いたりするのが神々の間、そして兵士が詰めるのがアルバストロ神殿、って考えるといいのよ」

「……なんか色々ぶっちゃけてねーか？　それ……」

山積みの本に埋もれながら、アルが疲れた声でそうぼやく。

知識の乏しいあたし達のため、連日教師役を務めてくれているアディ姫は、アルに不敵な笑みを浮かべてみせた。

「一般の人には教えちゃいけないことなんだけど、アルルンと末姫ちゃんは、むしろ逆に知っておかなきゃいけないのよ」

「……」

「ナスティアにおける『宗教』は、魔族と戦い抜くために生まれたものよ。元々は三十余の民族が各自で信仰していた宗教を、民族の団結と同時に一つにまとめあげたのが『エラス教』。強大な敵と対抗するために集った人々の、命をかけた『意志』や『思想』の集大成でもあるの。『エラス教』となった時に名前が変わった神々もいれば、新たに生み出された神もいる。……その代表が、神々の王レゼウスでしょうね」

「『王様』なのに、後から生まれたの？」

あたしの問いに、アディ姫は頷いた。

「色んな解釈があって、その当時の人がどのような思いでその神を作りだしたのか、本当のところは分からないわ。大昔の、第三帝国が生まれたきっかけである宗教戦争の時とはまた事情が違うし……。けど、『人々が望んで作り上げた』こと、『それまでは各民族で信仰している神がバラバラだった』こと、『バラバラの神々をまとめて一つの宗教にした』こと、『三十余の民族が一つにまとまろうとした』ことを踏まえて考えれば、エラス教を作り上げた時、人々の思想をまとめる『形』の一つとして、『まとめ役』を神々の中にも作ろうとしたんじゃないか、っていう説で一応の納得ができるのよ。そのせいで、一番有力な説なのよね。民族をまとめるのにナスティアがいたように、思想をまとめるのに『レゼウス』という存在を欲したんじゃないか、って」

「ふみゅ……」
アディ姫の説明に、あたしは曖昧に相槌をうった。
意味はぼんやりと把握できるのだが……なんというか、そんなことをして当時の人達は全員納得して受け入れたんだろーかな？　と思うのだ。
「……それって、反発とかなかったの？」
疑問に思ったことはちゃんと訊いてね、と言われていたので、あたしはアディ姫に問うてみた。
赤毛のオネーサマはあっさりと頷く。
「あったでしょうね」
……あったんかい。
「でもね、結局、レゼウスは生まれ、こうして後の世にも受け継がれてる。たぶん、それが答えなんだと思うの。レゼウスにはね、他の神様みたいな、炎を司ったり雷を司ったりするような『神様らしい力』なんてないの。そういう意味では、なんの力もない、形もない、ただ名前だけの王様って言えるかもしれないわね。……でもね、それでも必要とされたの」
「名前だけの存在なのに？」
「そう。名前だけの存在なのに」
言って、アディ姫は苦笑した。
「信仰の問題なのかもしれないわね。いくら『エラス教』として沢山の神様を一つの場所に集めたとしても、人々が真に信じているのは自分たちの信仰してきた神様だけ。祈るときも、その神様だけに祈る。……それじゃあ、いくら集めたところで『一つ』にはならない。でもね、もしそこに、新しい神様がいたら？　みんなの神様をまとめて、みんなの神様のためだけにある、エラス教だけの神様がいたらどうかしら？　信じて祈る神様の向こう側に、大きな神様がもう一神（ひとり）がいたら？」
「……」
「その神様は他の部族の神様も全部まとめて抱きしめてしまえるぐ

らい大きな神様。祈りの向こう側に、広大な意識の空間が広がっているような感じよ。最初は意識していなくても、少しずつ人々の心の中にその存在が溶け込んでいったら、人々は自分の信じる神に祈るのと同時に、その向こう側にいる『レゼウス』にも祈りを捧げるようになる。過程がどうであったのかは、歴史書を見て判断するしかないから、本当のところはわからないけど……結果として、エラス教はレゼウスという神を要することで一つにまとまったわ。そして、沢山の犠牲を出しながらも、魔族は封印された」

「……」

「結局のところ、今という現実を見て、過去を解釈しているだけだから、もしかすると当時の戦略として無理やりみんなに祈らせた結果だったのかもしれないし、洗脳めいた手段がもちいられたのかもしれない。『もしかすると』を考え出すと色んな考えが出てきちゃうから、実際に当時その地にいなかった私達が、本当のことを理解するのは難しいの。世の中には偶然や必然によって思いもよらない方向に歴史が動くこともあるし。その時のその場にいないあたし達には、その流れの中にいた人々の真理は分からない。常識を逸した流れが生まれるときもあるから、尚更に、ね。……でも、それでも、思うことはできる、考えることはできる、慮ることはできる」

「……」

「大切なのは、想像する、ということ」

アディ姫の声に、あたしはいっそう耳をかたむけた。

「それは時に妄想や決めつけを生み出すことになるかもしれない。けれど、様々な視野から想像するのは、とても大切なことなのよ。一つの考えに囚われてはいけない。一つの思いに縛られてはいけない。それは視野を狭めるだけだから。……大きく、広く、深みのある思考をもつよう、努力しないといけないの。そうして、沢山のことを考えて、想像して、その中でいちばん可能性の高いものを『仮定』として選ぶ。さっき説明したレゼウスのことも、この『仮定』ね。真実がどうであったのかは、当時の人にしか分からない。だか

ら、沢山の人がうんと想像して……沢山生まれた想像の中からこの『仮定』を選んだの」

そして、生まれた『仮定』を今分かる一番確かなものとして、公に発表した……

「そうやって、人々は書物にない時代の歴史書を一枚一枚、作りあげ、積みあげてきた。いずれ口伝で全く別のことが伝わってくるかもしれない。……でも、それがない限り、今はそれが精一杯」

「……じゃあ、間違った内容を学ばされる可能性もある、ってことか」

どこか据わった目でアディ姫を見つめ、アルが低い声で呟いた。

「習ったものが全てデタラメだった、っていうことも、ありえるわけか」

「そうね。そういうこともあるかもしれないわ」

その言葉に頷いて、アディ姫は腰に手をあてた。

「過ちが見つかれば、それはすぐに正しいものに上書きされる。けれど、上書きされた内容が偽物であることもある。伝承も口伝も歴史書も、実際のところ全部が全部、正しいという保証は無いの。ただ、沢山の人が知っていて、沢山の人がそれが本当のことだと思っている。それだけ」

「……じゃあ、勉強なんて無意味じゃないのか？　間違ってるかもしれねェんだろ？」

「無意味かしら？」

アディ姫はどこかキョトンとした顔で首を傾げた。

「学ぶことで、知識を得て、知識を得ることで、想像の範囲を広げる。勉強って、そういうものでしょう？　大切なのは『答え』だけじゃないわ。その『答え』に至るまでの過程に、学ぶ意味があるものじゃないかしら」

「その『答え』が間違ってたら、過程そのものが無駄な時間じゃねぇか。意味ねぇもんになるだろ？」

「そう？」

アルの反論に、アディ姫は柔らかく微笑む。
「私なら、もし間違っていた『答え』が歴史に関わることなら、何故間違った内容が『答え』として確立されたのか、それを考えるわ。そして新しく流布される『正しい答え』が本当に正しいのか、何故本当に正しいとされるのか、どうして今まで沈黙されていたのか、そういったことも考える。……その考えるときの材料に、『間違っていた答え』が必要になる。その答えが出てきた背景を考えるためにも、比べる対象としても、その知識は必要になる。だから無駄にはならないわよ？」
「そんなモンに興味ねぇ連中にとっては、『間違い』を教えられたっていうことじたいが、すげぇ無駄なモンになるじゃねぇか。学者連中はそれでいいかもしれねぇけどよ」
「なるほどねぇ。そういう考え方だと、そういう答えになるわねぇ」
むしろ感心しながらそう言って、アディ姫は「ふむふむ」と頷いた。
「ということは、そういう考え方の場合、答えを導きだす時の『過程』には意味がなく、答えだけがあればいい、っていう形かしら？　でもそうなると、大切な『想像すること』をどれだけしているのか、っていうのがすごく不安にならないかしら？　簡単な問題だけじゃなく、深刻な問題が起きたときも、考えることや想像することをすっ飛ばして誰かが出した『答え』に左右されてしまいそうな気がしない？」
「……そこまで考えるか……？」
「あら、だって、歴史を紐解けば、それが原因で戦乱や暴動が起きたケースがものすごい数あるんだもの。善悪の判断、行動の理由、それらは個人が決めるべきものなのに、集団心理で『右の人が右向けば右』みたいに、他者の言動につられて自分で判断せずに他を弾劾したり暴行を加えたりというのが多いわ。感情っていうのは煽動されやすいものだから、なおさらにね。昨日の友を、今日殺すこともある。実際に、そういうことが起きている。過去だけの話じゃな

く、今もそういった事例は多くあるわ」
「だから『想像する』ってことが、大事なの？」
あたしの声に、アディ姫は視線をアルからあたしへと向け、頷いた。
そうして思いを噛みしめるような声で言う。
「……そう。物事に対してだけじゃなく、自分が接する人のことに対しても、想像することは大切なの」
その言葉は、どこか深い痛みとともに。
「……何を思っているのか、何を考えているのか……それを忘れた時、取り返しのつかない間違いを起こすんだわ……」
「……」
沈鬱なアディ姫の声に、アルも俯き、あたしも項垂れた。
想像する、ということ。
想像を助けるための知識を得るということ。
それはきっと、本当に大切なことなのだ。
アルトリートのことも……
……そして、レメクのことも。
（……あたしも、何も考えずに尋ねちゃった……）
ふと倒れてしまったレメクを思い出して、あたしはいっそう俯きを深くした。
あたしが誰にも答えてもらえていなかった問いをぶつけた結果、レメクは昏倒してしまった。丸二日経った今も、彼は目覚めていない。
ひどい高熱が出て、ポテトさんが分身を貼りつけることで熱を下げさせているけれど、意識が戻らないのでこのまま長引くと危険だと言われた。
（……あたし、もうちょっと考えて問えばよかった……）
フェリ姫も、アルルじーちゃんも、問うた時にすごい変な反応をした。
もしかすると、あの問いはものすごい禁断の問いだったのかもし

れない。あのレメクがあんな風になっちゃうほどなのだ。きっととんでもない禁忌な問いだったのだろう。

想像すればよかったのだ。問いの向こう側にある答えを。

今もそれが何なのかは分からないけれど、皆が皆オカシナ反応をすることを判断材料にして、どういう答えがあるのかを想像し、考えればよかったのだ。

問うてもいいかどうか、を。

（どうしよう……）

レメクは今も眠っている。

今更「答えなくていい」と伝えたところで、果たして意識のないレメクにそれが通じるだろうか？　……届くだろうか？

（どうしたらいいんだろう……？）

いつだって、あたしが色んなことに興味を覚えて問うと、レメクは少しだけ嬉しそうな目をしていた。

何も知らないあたしに根気よく沢山のことを教えてくれる彼は、いつだったか、とても真剣な目であたしに言ってくれた。

『知らないことがあることは、「悪」ではありません』

と。

無知を恥じるあたしにそう言って微笑みかけてくれたのだ。

『知らないことをそのまま放置せず、知っていこうとする姿勢がある限り、私はそれに答えましょう。……ですから、大切なことは、必ず私に訊いてください』

レメクはいつだって真面目で真剣で真摯な人だが、あの時の真剣ぶりはちょっと尋常じゃなかった。

それぐらい熱心に言ってくれた彼だから、あたしの問いに答えようと一生懸命になっているのかもしれない。

それが答えられない禁忌の問いだったから、きっとああなってしまったのだ。

（……レメク……）

あたしはどっぷりと落ち込んだまま、深いため息をついた。

気持ちが重くなると、体もものすごく重くなる。
おまけに後頭部から小さな生き物が頭の上によじ登っていくような奇妙な感覚まで覚えだして、人間、落ち込むとここまで変な幻覚ならぬ幻感覚を覚えるんだなと……感覚……よじよじ……

……どゆこと!?
「おじょーさん」
「おとーさま!?」
頭のてっぺんから聞こえてきた声に、あたしは反射的にビョッと飛び上がった。
その瞬間、それぞれ暗い顔で俯いていたアディ姫とアルが、ギョッとした顔であたしを見る。
「ロード!?」
「――ッ!」

「にょあーッ!?」
いきなりアルの手が飛んできた!
勢いよく頭上をなぎ払おうとしたソレに、あたしは手が届くよりも早く椅子から飛び出す!
「とぅ!」
間一髪で足下を掠めていった一撃に、珍しく出遅れたアディ姫が一瞬でアルに張り付いた。
「はいストーップ!」
「うぉ!?」
「アルルンってば、意外と手が早くてビックリだわー。……末姫ちゃんが飛んでなきゃ、ちっちゃいロードは吹っ飛ばされてたかもねぇ～」
「……!　……!!　……ッ!!」
華麗に着地したあたしの目の前で、アディ姫にムッチリと押さえ

込まれたアルルンが唯一自由になる左手を必死に動かしている。どうやら苦痛と解放のアピールをしまくっているようなのだが、アディ姫は素敵な笑顔をあたしに向けるばかりだった。

……てゆか……なんかすごい技を展開されているよーな……？

「……アルが変な軟体動物みたいな格好になってる……」

体術の知識がないため技名は不明だが、がっちりと体を固定されているところを見ると、所謂(いわゆる)極技なのだろう。昔、船乗りのおっちゃんがゴロツキ相手にキメてたヤツを見たことがあるのだが、それとよく似ていた。

「……あれ……放っておいたら、王弟くん、死んじゃうんじゃないでしょーかね……」

唖然と見上げるあたしの頭上で、相変わらずちっこい状態の猫ポテトさんがボソッと呟いた。

「え。あれ、そこまでヒドイ技なのっ！？」

「いや、猛攻姫と違って王弟くんはほとんど鍛えられてませんから……素人にアレはキツイですよ。私もよくご主人様にくらわされてるのでよくわかりますが」

……くらわされてるのか……

てゆか、なんでくらわされてるんだポテトさん……

「肉体へのダメージがほとんどない私でも色んな意味で大変ですからねぇ……フツーの肉しかもってない王弟くんに耐えられるかどーか……」

その言葉に、あたしは慌ててアディ姫に声をかけた。

「おおおおねーさまアルがギブギブギブ！」

「んっ！　残念！　すでに落ちちゃってるわ！」

だらんと伸びてしまっているアルを抱えて、素敵な笑顔でグッと親指を押っ立てるアディ姫。

あたしは全力で顎を落っことした。

「なにやってんの！？　ねーさま！」

「えー？　いやーまぁ、今のアルルンにロード会わせるのはちょっ

と駄目だなーと思うし……ね？　ロードも、分かってたでしょーに、なんでここに来てるの～」

……てゆか、最初っから落とすの前提で技かけてたのか……

「まぁ、王弟くんの心情を慮れば、しばらく会わない方がいいんでしょうけどね……」

唖然としたあたしの頭上、ミニマムポテトさんはよちよちとおぼつかない足取りで歩く。というか、這う。

あたしの額の方に移動した彼は、小さなため息をついてから言葉を続けた。

「どのみち時間をおいたところで、会えば激情にかられると思いますよ。王弟くんだって、ハッキリと怒りをぶつけられる対象の一つや二つは欲しいでしょうし。私なんか、血も繋がってないし、もともと好感度もないですから、一番感情ぶつけやすい相手でしょう」

「……お父さま……」

「それが事実なんですよ、お嬢さん。そしてね、そうやって人は壊れそうな心のバランスを必死にとったりしてるんです。……もちろん、褒められた行為ではありませんよ？　それでも……そういうものなのだと、理解する必要も、あるんじゃないですかね？　それに、少々のことでは私は壊れませんし、消滅もしませんから、王弟くんにとっては都合がいい相手なんです。……彼は『虚無の紋章』を所持してますから、私ぐらい丈夫な相手じゃないと、怒りをぶつけられないでしょうし」

ポテトさんの声に、あたしは目を大きく見開いた。

「虚無……の、紋章……」

「ええ。王弟くんの持つ紋章は、レンさんやご主人様が持つ紋章と同じく、世に出すのが危ぶまれるほど危険な紋章です。感情の高ぶりに紋章が呼応すれば、この建物の半分ぐらいは軽く消滅させてしまえるでしょう」

「ちょ……！？」

言われた言葉に、あたしはギョッとなってポテトさんのちっちゃ

い体を鷲づかみにした。
「うぉふ！？」
なんか変な声をあげられたが――無視だ！
「そんな危ない紋章……！　どして……てゆか、アルの今の状況って、相当アブナイんじゃないの！？」
感情の高ぶりうんぬんで言えば、今のアルなんて軽く頂点ぶっちぎれてる気がする。
「だから猛攻姫が傍にいるんですっ。そこのお姫様には私が魔法かけてますから王弟くんの虚無の紋章は全く効かないうえ接触によって紋章の力もそぎ落とせるので周囲への影響も最小に留めることができるんですっ！」
「なんと！？」
バッと振り仰いだアディ姫は、なにやら困り顔で微笑んだ後、あたしにひらひらと手を振ってみせた。
「魔力ゼロで魔術なんて欠片も使えないってのに、魔法の加護は得られるんだから不思議よね～」
「魔力ゼロというのは、ある意味究極の特殊体質なんです」
驚いているあたしに、ポテトさんが小さな体をよじりながら言った。
「普通の人は、大なり小なり魔力をもっています。魔力には属性があり、そのせいで魔術に得意不得意が出たりします。俗に『火の属性』や『水の属性』と称される魔術の固体属性は、実は魔力が属性をもつことに由来しているんです」
ほ……ほぅ……？
「治癒魔法も体内の魔力によって活性化するものがほとんどですから、魔力が無いということは、そういった力を引き出せないということに繋がります。……けれど、逆に、属性のある魔力は他属性の魔術や魔法に対しある種の抵抗力をもちます。魔術耐性、魔法耐性は身に持つ魔力属性と同属が最も高く、それ以外の属性の魔術に対

してはそれぞれに強弱が違います」
ふ……ふむふむ……？
「具体的には？」
いつのまにかアルを椅子に設置したアディ姫が、アルの膝の上に腰掛けて羊皮紙に文字を書きまくっている。
「影響を与えやすいのは、火に対する水、水に対する雷、雷に対する土、土に対する風、風に対する氷、氷に対する火。これらは円を描くようにして互いに作用しあっています」
……。
「土は風を封じ込めない？」
「封じ込みますね。この関係は『強い影響を及ぼす』という意味の方が強く、どちらがどちらを封殺するか、という意味ではないのです。ぶっちゃけて言えば、火は水によって消えますが、水もまた火によって霧散します。ただし霧散した水は水蒸気の形で残ります。しかし火の温度が強ければ水蒸気すら残りません」
……む……むきゅ……
「つまり、そもそも行使された魔術の力が強ければ、『強い影響を及ぼす』属性のものであっても絶対的な強さを持ち合わせない、ということね？」
絶望的な表情でしょんぼりしているあたしの前、アディ姫の手がものすごい勢いで文字を書く。物知りのアディ姫にとっても、ポテトさんの話は珍しいのかもしれない。
「火の属性の者に火の魔法をぶつけても、身に持った属性耐性で威力をかなり殺されてしまいます。逆に水の魔法をぶつければ、肉体と魔力の両方にダメージを与えられます。白兵戦で、体力と同時に精神力を削るのを重要視するのと似ていますね。魔術戦でも、敵の属性に対し強い影響を与える魔術を使うのが基本となります。……ただ、生物対生物の場合、肉体の属性もかなり影響してきますから、もっと戦略を練る必要がありますが」
フムフムと頷きながらペンを走らせるアディ姫を眺めながら、あ

たしはがっくりと肩を落とした。
お勉強モードに入ってる二人には悪いが、正直、ゾクセイがどーとか詳しく説明されても、よく分からないうえに興味がなさすぎてどーでもいい。
属性（ソレ）がアディ姫にかけられた魔法とどう関わってくるんだろーか、と半泣きの目を握ったままの赤ちゃん猫に向けると、ポテトさんはほんの少しだけ苦笑した。
「魔力が無いということは、魔法や魔術に対する属性を一切もたない、ということです。すなわち、ほとんどの魔法や魔術に弱い、ということですね」
思わず視線を向けると、アディ姫が苦笑して肩をすくめる。
「こればっかりは鍛えようがないから、しょうがないのよねぇ。かわりに体を必死に鍛えるはめになっちゃったけど」
……鍛えすぎじゃなかろーか……
「対魔法戦になると、魔力ゼロはきついですからねぇ。魔術使われる前に倒さないと命にかかわりますし」
「無動作・無詠唱の術は特に困るのよね。本能と瞬発力で逃げなきゃ、一撃でヤられちゃうし。相手が一動作起こす前に叩きのめすのがコツよね」
「……それができるのはごく一部の人だと思いますけどね……。はいっ、話を戻しますからお嬢さんはこっちの世界に帰ってらっしゃいっ」
（うっ……！）
あたしの意識が遠い場所に避難しかけた途端、ポテトさんの小さな猫しっぽがピッタンピッタンあたしの掌を叩き出す。
てゆか、あたしじゃ理解できないマホーセンの話なんて間に挟まないで欲しいのですよ。
「後々のためにもちゃんと理解していたほうがいいと思うのですが……まぁ、いいでしょう」
あっ。なんかポテトさんから窘めの一瞥が！

「今更ではありますが、以降、細かい部分は略します。結論から言いますと、魔法や魔術は人体に施す類の場合、相手の精神状態や魔術耐性でかなり効果が違ってくるんです。繊細な術を施す場合は特にその点に気を付けないといけないのですが、猛攻姫の場合、魔力がないために耐性もなく、本人も受け入れ全開オッケーでいてくれたため、非常にかかりがよかったんですね」

……まぁ、なんだ。

つまり、アディ姫の魔力ゼロが、ポテトさんの魔法には都合が良かった、っていう話なんだろう。うん。

「――で、アディ姫にかかってる魔法って、アルの紋章限定で効果が現れるものなの？」

ようやく納得して、とりあえず気になったことを尋ねると、ポテトさんは天井を見上げながら言った。

「猛攻姫にかけた魔法の効果は単純です。一つは、あらゆる魔術、魔法を吸収すること。こちらは姫君の任意によって発動します。吸収された魔法の類は私に与えられますので、私にとってはタイヘン都合がいいわけです。……しっかり吸収してくださいよ、姫君」

「なんかちょっと切実な声だったわねぇ……ロード……」

「分身が小さくなるぐらいには疲れてますからね。こちらのお嬢さんで例えれば、疲れてお腹空いてたまらない状態なわけです」

「それは切ないのです！」

おおいに理解を深くしたあたしに、ポテトさんも小さな頭を大きく頷かせる。

「たいへん切ないです。とはいえ、姫君が所望された能力は、吸収の能力ではありません。本来副産物のような形でうまれる能力『虚無の無効化』。つまり、王弟くんの虚無の紋章を完全に相殺してしまう能力です。といっても、効果が現れるのは本人の体限定なんで、紋章使われたら服とかボロボロになっちゃうんですけどね」

「肌が触れてさえいれば、外部に漏れる紋章の力も半径一メートル内に押さえ込めるんだけどねぇ……さすがにあたしの服とかは消さ

れちゃうのよね。至近距離だから」
「……ということは、アルは自動的にすけべぇさんになってしまうのですな」
「紋章発動したらあたしがすっぽんぽんになるわよー、って言ったらものすごい勢いで自制してたけどね。……しっつれいしちゃうわよねー」
……いや……それは……アルが地味に紳士だってことじゃなかろーか……？
なんだか不思議な関係を垣間見てしまって、あたしとポテトさんは遠い眼差しを椅子に転がって（そしてアディ姫の尻に文字通り敷かれている）アルに向けた。
「……王弟くんも微妙に報われてませんね……」
現在も人間椅子にされているあたりからして、だいぶヒドイ扱いな気もする。
「……てゆか、ねーさまはアルに裸見られちゃうの、気にならないの？」
とあるレメクとの過去を思い出しつつ、あたしはアディ姫に問いかけた。
普通、男の人の前ですっぽんぽんにされたらビンタの一往復ぐらいは当たり前だと思う。
だが、アディ姫はきょとんとした顔で首を傾げた。
「べつに？」
……。
……そうか。
べつに、なのか。
「……フクザツなカンケーなのですな……」
「……お嬢さんとレンさんみたいな、奇天烈な関係でないぶん、分かりやすいですけどね……」
……奇天烈な関係、って何だ？
「ま、まぁ、それはともかく。王弟くんの抑止力になれる人といっ

たら、ご主人様やレンさんクラスの術者です。けれど、あの二人は今、王弟くんに会わせるのは『難』な人物です。だから、王弟くんの傍にいても、わりと普通に接してもらえて、なおかつ王弟くんを押さえ込めて、主導権を握れる人に彼を見てもらわないといけなかったんです」

「なるほど」

それは確かに、アディ姫が適役だろう。

「なんだかんだいって、アルルンって紳士だからね～。あたしが相手でも、女だからって無意識にいろんなことセーブしてるっぽいし」

「……あなたも色んなコトをセーブしたほうがいいと思いますよ、肉弾姫」

……ポテトさんに言われたらお終いな気がする……

「今！　一番言われたくない相手に言われたくない言葉を心の中で呟かれました！！」

「どーゆー意味！？」

クワッと叫んだ赤ちゃん猫に、あたしも叫ぶ。

しかし、掌の中の猫はにゅるりとあたしの手から脱出すると、すぽんと小さな体を中空に飛ばした。

「あっ！」

――そしてべちゃっと床に落っこちる。

「……そこまでして逃げなくてもいいような……」

「……ふ。力が戻ってなくて着地できなかったなんてことではないはずだと思うんですよ」

……なんでそんなに断定を避ける言い回しなんだろうか……

「ねーぇ？　それよりも、ロードは何か用事があってここに来たんじゃないのかしら？　末姫ちゃんに、あたしにかけた魔法の解説をしに来たわけじゃあないでしょ？」

書き上げた羊皮紙を豊かな胸の間に仕舞い込みながら、アディ姫は改めてポテトさんを見つめた。

床に伸びた格好のままで、ポテトさんは視線だけをアディ姫に向ける。
「ま、イロイロありまして。王弟くんの今の状況をちょっと確認したかったのもあるんですが……お嬢さんと猛攻姫に、レンさんのことでちょっと頼みたいなー、と思いまして」
「「頼み？」」
あたしとアディ姫は顔を見合わせる。
ひっそりと歩み寄ったアディ姫に摘み上げられながら、ポテトさんは少しだけ困った声でこう言った。
「レンさんを見張っていてほしいのです。……『魔法』を使ったりしないように」

※　※　※

「魔法？」
ポテトさんの言葉に、あたしは目を丸くした。
「おじ様が使ってるのって、紋章術じゃなかった？」
「紋章術ですよ。普段はね。……ただ、あの子は、ちょっと他の人とは事情が違っていて、本来なら魔女でしか使えない『真なる魔女の魔法』が使えるんです。それが少々、問題でして」
「？？？」
あたしは首を傾げ――ふと気づいてアディ姫を見上げた。

アディ姫はなにやらお偉い神官様のようなすまし顔で立っている。
あたし的には驚きの新事実なのに、新モノに目がないアディ姫が無反応とはどういうことだろう？
「ねーさまは、不思議じゃないのです？」
「ん？　……あぁ……というか、あたしの場合、だいたいのことは先に聞いてるから」
――なんですと！？

「お義父さまひどいのです！　おじ様のことなのにあたしは後回しなのですか！？」
「猛攻姫は先にレンさんから聞いてるんです！　私が話すより前に知ってましたよ！」
「ひどいおじ様！　あたしには教えてくれなかったのにっ！！」
「お嬢さんはそもそも魔術とか魔法とかと縁が遠い生活をしてたじゃないですか。きっと、関わりのないことだから話すきっかけが無かったんですよ。あまり言いふらしていいような話でもないですし。仕方ないことですよ？」
「おじ様のことだったら何でも知りたいのがあたしなのです！　昨日見た夢の内容だって知りたいのがあたしなのですよ！」
　目をキラリと輝かせたあたしに、ポテトさんとアディ姫がそれぞれ呟く。
「……どっぷり妄想暴走系乙女ですねぇ……」
「……まぁ、今侯爵が見てる夢は、末姫ちゃんに『殿方の股間にあるモノってなーに？』って尋ねられてる夢だと思うけど……」
　あたしのキラリは三秒で撃沈した。
　そう……あの質問は……熱出して寝込むほどイカン質問だったのです……
（でも、何でイカンのか、誰も教えてくれないし……）
「ま、まぁ、その話はともかく！」
　何故か突然慌てた声をあげ、アディ姫に摘まれているポテトさんがぷらんぷらん揺れた。
「レンさんの一番身近にいるお嬢さんと、いざというときレンさんの間合いに入って詠唱を阻止できる猛攻姫には、レンさんが魔法を使わないよう警戒しておいてほしいんです！」
　ぷらんぷらん。
「魔女の魔法なんてものは、おおよそ人の世の理から外れたもので

す。まして魔女の呪いがあります。決して使うなとは伝えてあるのですが、あの子はいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも自分を大事にしない子ですから」

ぷらんぷらん。

「何度か死にかけてるのに何かあると突発的に使おうとするんです。人の手にあるまじきものだということは、身に染みてよく分かっているはずなのに……」

なにか多分に苦労がしのばれる愚痴を零してから、ポテトさんはどっぷりと深いため息をついた。

「のべつ幕無しに使おうとするわけじゃない分、禁忌だっていうことはちゃんと理解しているのですが……身近な人の生死に関わってくるとどうにもこう、自制が緩いというか耐性が無いというか……」

……なんか……

……とことん苦労したんだな……ポテト『おとーさん』は……

「『魔術』と『魔女の魔法』の見分け方は簡単なんです。とある呪文を唱えだしたら、それは『魔女の魔法』を使おうとしている、もしくは重ねがけしようとしていることに他なりません。だから、その呪文を耳にしたら即座にあの子を止めてほしいんです。体当たりでもかぶりつきでも顔面飛びつきでもかまいませんから」

……なんか、一部あたし限定で言ってこなかったか？　今。

「……とある呪文って、アレよね？　魔女が呪い回避のために口にするお決まりの文句」

「そうです」

何かを考える顔で呟いたアディ姫に、ポテトさんは小さな頭を頷かせる。

「『真なる魔女』の血をもつ者が、己以外の者のために魔法を使おうとする時には必ず唱えられる呪文。それが、この呪文です」

そこまで言ってから、ポテトさんは一度口を閉ざし、深く息を吸い込んで後、ゆっくりと唱えた。

この思いは我が思い

（……あれ？）

この願いは我が願い

（これって……）

綿々と紡がれし魔女の血の系譜にかけて
我は我が願いのままに其を叶えん

「――ケニードの……怪我を治した時の！」

咄嗟に声をあげたあたしに、ポテトさんは頷く。

「そうです。……万全の状態ならばともかく、未だボロボロの状態だったレンさんでは、あの時の宝飾技師さんの怪我は治せませんでした。だから、紋章の力だけでは復元が不可能な傷を治すため、『魔法』を紋章術に組み込んだのです」

「……」

「『魔法』だけで奇跡を起こそうとしなかった分、体への負担は少なかったでしょう。それでも……使われた『魔法』は、確実にレンさんの体を蝕みました」

「……だからあの時、おじ様を止めたの？」

あたしの声に、ポテトさんは「ちょっと遅かったですけどね」と苦笑した。

「あの子も、いずれ止められるだろうことは分かっていたはずです。あの子が『魔法』を使えば、私には必ず分かります。あの子が『魔法』を使えるのは……私の血が、あの子の中にあるからですから」

※　※　※

あたしはキョトンと首を傾げた。
なにか今、オカシナことを聞いた気がするのだが……気のせいだろうか？
「おじ様とお義父さまは、血が繋がってるの？」
……確か、繋がってないって聞いたと思うのだが……
「血族的なことなのでしたら、否、ですよ」
「……？」
意味が分からず首を傾げると、ポテトさんは少し影の入った声で言った。
「昔、あの子は命にかかわるような大怪我を負いました。……血の大半を失う重症と言えば、その怪我の重さを理解していただけますでしょうか？」
「……ぁ」
……それは、もしかして……
「人から人に血を移す医術は、未だきちんと確立されていません。成功例のある術式を試そうにも、器具を取り寄せている間に命が尽きるだろう状態でした」
……アルルじーちゃんが言っていた……
「今から思えば、ずいぶんと……軽率でした。……後に何が起こるのか考える間もなく、ほとんど反射的に、私は自分の血をあの子を与えていました。……原初の魔女に呪われた、真なる魔女の血を、です」
「……」
「結果、あの子は命をとりとめました。そして、私の血が入ったがために、私の『魔女』としての力の一部を得て、『魔法』が使えるようになってしまったのです。……魔女の呪いのついた『魔法』を……ね」
（……お義父さま……）
暗い気配を背負って言うポテトさんをあたしは真っ直ぐに見上げ

ていた。
　悲しいとか苦しいとか、そう言った言葉では表現しきれない感情がそこにあった。
「……お義父さまは、おじ様が死んじゃうのが、イヤだったんでしょ？」
「……そうですね」
「助けたいって思って、確実に助けられることをしたんだよね？」
「……ええ」
「だったら、『悪いことしたな』みたいなこと、思わないでほしいのです」
　アディ姫に摘み上げられた格好のまま、ミニ猫ポテトさんが目を丸くした。口が微妙に半開きになって、ただでさえ力の抜けていた体がいっそうダランとなる。
「今助けられる命を助けたことが、悪いことだとは思いたくないのです。それは、もちろん、エットーレみたいなヤツが相手だったら、見捨テテオイテクレレバーッとかうっかり思っちゃうかもしれないけど！　でも……死にそうな人がいて、自分なら助けられるんだって時に、見捨てるのは……間違ってると思うのです。だって、命って、一つしかないのです。失ったらそれっきりなんだから、助けようって思うのが普通なのです」
「……」
「それは、悪いことじゃないのです。……そりゃ、いつだって、どんなときだって、そうだってわけじゃないかもしれないけど……」
　時には、生きることが苦しいことであったりもするけど――
「癒したい、助けたい、救いたいって気持ちは、悪いことじゃないはずなのです」
　まして、そこに確かな相手への愛情があったのなら、尚更だろう。
「……お義父さまが思いつめてたら、おじ様だって悲しいと思うのですよ……？」

ポテトさんはダラリとした姿のままこちらを見ていたが、ややあってからヒゲをニュッと向けてきた。
「……そう、思います？」
「うん。だって、あたしもおじ様に対して時々思うもの。助けてもらって嬉しかったのに、危険だから自分と関わっちゃいけないんだ、とか、自分の事情に巻き込んでしまって申し訳ありません、とか、そういうの言われると、少し悲しいの。一番最初に巻き込んだのは、死にかけてたあたしなのに、どうしてそんなに色々と謝られちゃうんだろうって……悲しくなるの」
「……」
「助けてもらった後のことは、ちゃんと自分で責任もつよう、がんばるの。助けてくれた人に『助けてもらった』事実を押しつけたりしないの。だから……思いつめたりなんか、しないでほしいのよ……？」
未だ幼く未熟なあたしの言葉では、きっと、長い時を生きてきたポテトさん達ほどの重みをもてないだろう。
人はその言葉の内に、今までの体験や思いを織り込んでいく。
九年しか生きていないあたしでは、ポテトさんやレメクのような視界も経験も持ち合わせていない。だから分からないことも、知らなくことも沢山ある。
そんなあたしが、色んなことを知っているポテトに意見するのは、少しおこがましいんじゃないかなと思ったりもする。
けれど……少しでも、気持ちが軽くなってくれればいいと思うのだ。
助けようと手を差し伸べてくれたことを罪だと思いこまないで欲しいのだ。
手を伸ばしてくれたことが、ただ嬉しかった。
生きることができたのが、ただひたすらに嬉しかった。
その気持ちをどうか分かってほしい。責任なんて感じないでほしい。

（生きる責任は、いつか、自分自身でちゃんと背負うから……）

あたしは思いをこめてポテトさんのつぶらな瞳を見つめる。

（だから、ありがとうって気持ちだけ、受け取ってほしいのよ……？）

ジッとこちらを見つめていた青い瞳が、ふと、微睡むように和らいだ。

「……体験者の言葉は重いですね……」

思わず目をパチクリさせたあたしに、猫ポテトさんは小さな体を震わせる。途端、頭の上に影が振ってきて、あたしは慌てて後ろに飛び退いた。

「ひゃっ！？」

同じく驚いて後ろに飛び退いたアディ姫が、目をまん丸にして自分の手と目の前に立つヒトを見比べる。

そう――人型に戻ったポテトさんを。

「……どうやら、時がきたようです」

「ほぇ？」

唐突にそう呟いたポテトさんに、あたしは目をパチパチさせる。

今まで摘んでいた猫が突然人型になったのが衝撃だったのか、アディ姫は自分の手とポテトさんを見比べたままだ。

「お嬢さん。……お礼を申し上げますよ」

凄絶な美貌を柔らかく微笑ませて、ポテトさんは何故かあたしにそう言った。

あたしはもう一度目をパチクリさせた後で「あい？」と答える。

……錯覚かもしれないが、少しだけポテトさんの印象が明るくなっているような気がする。

けれどそれは、あたしが言った言葉の影響だとか、そういうのではないだろう。

同じ『助けられた立場』であっても、レメクとあたしでは、そもそもの立ち位置が違うし、場面も状況もきっとすごく違っていたは

ずだ。
レメクを見ていればわかる。
あたしみたいに単純に、生きてるってことを喜んだり感謝したりはできない人だった。
あの人が生きてきた時間は、きっとあたしでは想像もつかないような時間なのだろう。ポテトさんが思いつめちゃうぐらい、生きることが苦しかった、っていうのも、もしかしたらあるのかもしれない。
――それでも、これだけは断言できる。
例えその時間が苦しくても、レメクはそれをポテトさんのせいだとは言わないだろう。助けられたせいだとは言わないだろう。
もしかしたら心の隅っこでちょろっと思っちゃうこともあるカモだけど！　それでも、全部の責任をポテトさんに押しつけたりはしないだろう。
理由なんて簡単だ。
レメクはポテトさんが好きなのだ。
ベラおじーちゃんやアウグスタと同じように、『大事なヒト』だって気持ちでいるのだ。
それが答えでなくてなんだろう。
だから、きっと今ポテトさんがちょっと明るい目をしているのも、そういう記憶を思い出したからに違いない。
「おじ様は、お義父さまが大好きなのですよ」
にこっと笑って『答え』の後押しをしてあげると、何故かポテトさんが軽く目を瞠った。そしてすぐに苦笑する。
――何故？
「……お嬢さんは、きっと、そうやってあの子を変えていったのでしょうね」

「???」
またニューレメクのお話ですか？
首を傾げたあたしにもう一度苦笑して、ポテトさんは優雅な一礼をした。
……ほんの少し、いつもより長めの一礼を。
「……さて、刻限がきてしまいましたね。……猛攻姫。王弟くんを安全な所に移動させたら、シエルの所に合流してくださいますか？
……準備が揃いましたから」
「え？　あぁ……うん」
「では、また後でお会いしましょう」
何かに気を取られていたらしいアディ姫にも綺麗な一礼をして、ポテトさんは一瞬で姿を消した。何の音も気配もない退出に、慣れているとはいえあたしは嘆息をつく。
「……お義父さま、分身さんも神出鬼没なのですな」
「……それを平然と受け止められる末姫ちゃんが、ちょっとスゴイと思っちゃうんだけどね」
あたしよりもイロイロ剛胆そうなアディ姫に言われると、なんだか複雑な気分である。
「だって、お義父さまは魔法使いで神様で悪魔さんなんだもの」
「……それを普通に受け止めて平然としていられるのが、すごいんだけどね～……」
苦笑と微笑を合わせたような笑みを浮かべて、アディ姫はあたしの前にかがみ込み、小さなあたしをひょいと抱き上げた。
「授業が中途半端になっちゃったけど、今日はここまでにしておきましょうか」
「アルルじーちゃんのところに行くのですか？」
「アルル……ぇー……うん。アルルンのことでアルルじ……じゃなく、教皇様や担当神官と話をつめておかなくちゃいけないから」
「……」
アルルじーちゃんとの会話を思い出して、あたしは俯いた。

「……アルはやっぱり、神官になるの……？」
「ええ。……本人がそう望んだから」
「……」
「楽な生き方なんて、たぶん、望んでないでしょうね。愚王であった前王やマルグレーテ様ならともかく、王族として迎え入れられてもナスティアの場合は色々大変だけど……アルルンって、ちょっと真面目すぎるから、今、王族として迎え入れられて王宮に入れられたとしても、いい風にはならないと思うのよ。……なにより、今の王宮には……あんまり居たくないでしょうしね」
「……」
「……アルルンもね、分かってると思うの。全部の恨みをぶつける相手は、陛下でも、ロードでも無いんだってことは。……でもね、目に見えるものを憎むしかない時っていうのも、あるのよ……」
敵を撃つには華奢に見える美しい手が、あたしの頭をゆっくりと撫でてくれる。
その手はひどく優しくて……同時に、少しだけ切なかった。
「もちろん、それは『善いこと』ではないわ。褒められた行為じゃない。……でも、人の気持ちは、スイッチ一つで切り替えられるような仕掛（ギミック）じゃないから、そんなに簡単に『分かった』とか頷けない」
あたしは小さく頷いた。
アディ姫の言葉の全てを理解できたわけじゃない。けれど、少しだけ分かる。
傷ついた時に傷を癒す時間が必要なように、千々に乱れかきたてられた憎悪（きもち）を落ち着かせるためには、落ち着ける場所と時間が必要なんだってことは。
「……蟠（わだかま）りが全て無くなるなんて日は、もしかしたら来ないかもしれないけれど……未来には希望を持ちたいじゃない？　あたしは、アルルンも陛下も、好きだから」
「……」
「生きていれば、生きているからこそ、何かが変わることもある。

過去は決して戻らないし、失ったものは取り戻せないけど……新しいものを別の形で作り上げていくことは出来るって……信じたいわ」

語るアディ姫の視線は、自分の足下ではなく前を向いている。目の前にあるのは殺風景な壁で、そこになにか特別なものがあるわけではない。

けれどその姿勢で、知れるものがあった。

「……ねーさま。あたしもね、信じたいの」

過去を忘れることはできない。

ずっと心の奥深くにそれはある。

「いつか見たように、アルとおじ様と、アディねーさまと……出来たらアウグスタとお義父さまと、アルルじーちゃんと……」

けれど、それに囚われることなく、前を向いていければいいと思う。

「ケニードやバルバロッサ卿や、ヴェルナー閣下や、いろんな人と一緒に、笑って、ご飯食べられるような、そんな未来が来たらいいなって」

願えば何でも叶うような、そんな世界では無いけれど、希望をもって願いを持ち続けることだけは、これからもやめたくはないと思う。

「出来たら、アルトリートの形見とかも……一緒にそこに加えてほしいな、って……」

「……うん」

コツンとあたしの額に頭を当てて、アディ姫は珊瑚色の唇を柔らかく笑ました。

「……末姫ちゃん……いつか……いつか、叶うわ。……きっと……叶うわ……」

「……ねーさま……？」

「……いつか……叶えようね……」

あたしは顔を上げ――すぐに伏せる。

アディ姫の唇は、震えていた。
何が彼女の琴線に触れたのかは分からない。あたしの知らない何かを彼女は知っているのかもしれない。
あたしはアディ姫の頬に頬ずりをして、その一見して華奢な体にギュッと抱きついた。
この国には、沢山の問題がある。
王宮の中ですら、深い闇が横たわっている。
けれどそれをなんとかしようと動いてる人達がいる。傷つきながらも立とうとしている人がいる。支援しようとしている人がいる。
なら、きっと、最悪の事態は変えられるだろう。
変えようと願い動く人がいる限り、あの怖い未来は回避できるだろう。
頬ずりを返してくれたアディ姫に頭を擦りつけながら、ふとあたしは顔を上げた。
あたしとアディ姫と、気絶してるアルルン以外にこの部屋に人はいない。
けれど今、感じた。

あたしの背を――確かに暖かいものが、ゆっくりと押してくれたのを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7006f/

対オジサマ攻略法！＜闇の王と黄金の魔女＞

2011年11月13日20時16分発行